鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（163）

川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅴ）

下鶴（しもづる）遺跡

（伊佐市）

2011年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（163）

下鶴遺跡

二〇一一年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県



遺跡遠景（西から東方向）



土坑墓群







①弥生土坑49号　②・③弥生土坑37号



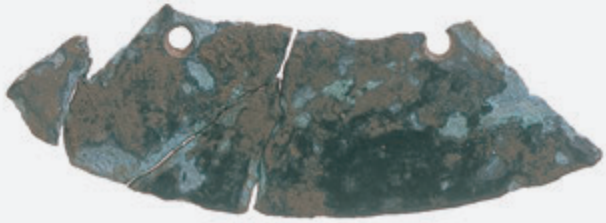
弥生時代の遺物



114



14



115

弥生時代の遺物

序　　文

この報告書は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴って，平成21年度及び平成22年度に実施した伊佐市大口下殿（旧大口市）に所在する下鶴遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡は，縄文時代から近世に至る複合遺跡であり，多量の遺構・遺物が発見されました。

縄文時代では，４軒の竪穴住居跡や石器製作跡と考えられる黒曜石が集中して出土したことなどから，この地で一定期間，定住生活を営んでいたことがわかりました。

弥生時代では，調査区北側で検出された土坑から武器形青銅器の一種である銅戈が出土しました。これは，本県初の出土事例であると共に，本土最南端の出土事例となり注目を集めています。

古墳時代では，93軒の竪穴住居跡など多数の遺構が検出され，この地に大規模な集落が長期間営まれていたことがわかりました。

古代では，緑釉陶器や越州窯系青磁が出土しています。

中世から近世では，国内外産の様々な陶磁器がまとまって出土しています。特に，遺物組成から単なる村落とは異なる様相が浮かび上がってきています。

これらの注目される遺構・遺物の発見の背景には，河川との深い結びつきを感じずにはいられません。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたりご協力をいただいた国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所，伊佐市教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成２３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　山　下　吉　美

報　告　書　抄　録

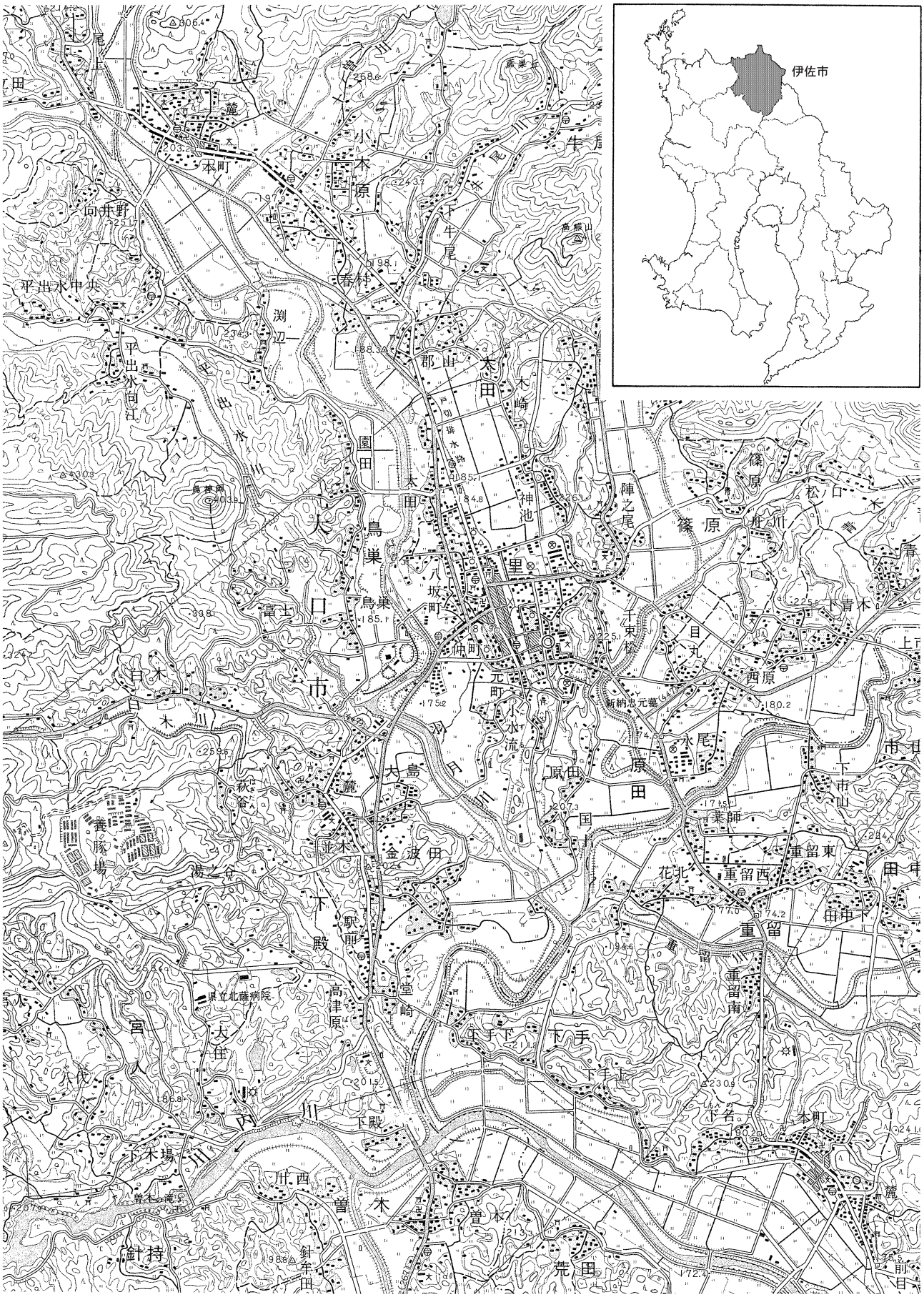
ふりがな	しもづる　いせき
書名	下鶴遺跡
副書名	川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅴ）
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第163集
編著者名	黒川忠広・吉岡康弘・有馬孝一・新中なるみ・福原誠也・益山郁恵
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　ＴＥＬ　0995－48－5811 ＦＡＸ　0995－48－5821
発行年月日	西暦2011年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	日本測地系経緯度 北緯	日本測地系経緯度 東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	調査起因
下鶴遺跡 （しもづるいせき）	伊佐市 （いさし） 大口下殿 （おおくちしもとの） 字下鶴 （あざしもづる）	46224	9－140	31° 01′ 00″	130° 36′ 00″	2009.5.8～ 2010.3.25 2010.6.1～ 2010.7.27	40,400㎡	川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下鶴遺跡	集落跡	縄文時代早期 中期 後期 晩期 後～晩期 弥生時代早期 前期 中期 後期 前～後期 古墳時代 古代 中・近世	 竪穴住居跡４軒 土坑34基 土坑52基 壺棺１基 竪穴住居跡93軒 土坑28基 掘立柱建物跡１棟・土坑３基 掘立柱建物跡14棟・竪穴建物跡13軒 建物状遺構３軒 土坑29基 大型土坑８基 炉状遺構19基 溝状遺構３条	押型文・変形撚糸文 並木式・阿高系 松山式・市来式・丸尾式・納曽式・鐘崎式・北久根山式・辛川式・西平式・三万田式・台付皿 入佐式・黒川式 石鏃・石匙・スクレイパー・石錐・楔形石器・打製石斧・磨製石斧・石錘・石皿 刻目突帯文 高橋式 入来式・黒髪式・ボテ甕・銅戈 免田式 抉入柱状片刃石斧・銅鏡 東原式・辻堂原式・笹貫式・須恵器・磨製石鏃・石庖丁・砥石・石皿・鉄製品 土師器・黒色土器Ａ類・黒色土器Ｂ類・須恵器・緑釉陶器・越州窯系青磁・土錘・焼成粘土塊 土師器・青磁・白磁・青花・輸入陶器・備前焼・肥前系陶磁器・在地系陶磁器・薩摩焼・瓦質土器・土師質土器・鉄製品・滑石製品・軽石製品・銭貨など	

要約

縄文時代から近世に至るまでの複合遺跡。弥生時代の土坑群は，その形状などから墓の可能性が高く，この内の１基から武器形青銅器の一種である銅戈先端部が出土している。これは，本県初であると共に現段階における日本最南端の出土事例である。古墳時代においては，竪穴住居跡93軒をはじめとする遺構群が検出された。特に，羽月川と白木川とが合流する部分での密集度が高く，隣接する梅木遺跡と一連のものである可能性も考えられる。加えて，同一河岸段丘上には地下式板石積石室墓が検出された焼山遺跡もあり，河川と集落・墓地といった当時の集落景観を復元する上で重要なものとなった。古代においては，緑釉陶器や越州窯系青磁など一般集落ではあまり見られない資料が出土するなどその背景が注目される。中世から近世にかけては，竪穴建物跡や掘立柱建物跡，炉状遺構や溝状遺構など多種多様な遺構が検出されている。これらに伴う陶磁器の組成は，食膳具が少ないという特徴が浮かび上がっており，生活の場としての集落以外の用途も想定される。



遺跡位置図（１／50,000）

例　　言

1　本書は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に伴う下鶴遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県伊佐市大口下殿字下鶴（旧大口市下殿字下鶴）に所在する。
3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，国土交通省から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4　発掘調査は，平成21年５月８日～平成22年３月25日，平成22年６月１日～平成22年７月27日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成21年度・平成22年度に実施した。
5　遺物番号は，時代ごとの通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
6　挿図の縮尺は，各図面に示した。
7　本書で用いたレベル数値は，国土交通省が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。
8　発掘調査における図面作成の一部は新和技術コンサルタント，株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
9　発掘調査における写真の撮影は，各年度の調査担当者が行い，空中写真撮影は，有限会社ふじたに委託した。
10　遺構実測図のトレースの一部は，有限会社ジパング・サーベイに委託し，有馬孝一・黒川忠広が監修した。
11　土器の実測・トレースの一部は，株式会社パスコに委託し，黒川が監修した。
12　陶磁器の実測・トレースの一部は，大成エンジニアリングに委託し，新中なるみが監修した。
13　石器の実測・トレースの一部は，株式会社九州文化財研究所，株式会社パスコに委託し，監修は有馬・黒川・益山郁恵が行った。
14　自然科学分析は，株式会社パリノ・サーヴェイ，株式会社パレオ・ラボ，（株）加速器分析研究所に委託した。
15　遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。
16　本書の編集は黒川が担当し，執筆分担は次の通りである。

第１章　黒川・福原誠也
第２章　黒川・福原
第３章　第１節　黒川
第２節　黒川
第３節　１　（１）有馬・益山
（２）有馬
（３）有馬・益山
２　（１）有馬
（２）有馬
（３）益山
３　黒川
４　福原
５　新中・吉岡
第４章　第１節　益山
第２節　パリノ・サーヴェイ株式会社
第３節　パレオ・ラボＡＭＳ年代測定グループ
第４節　（株）加速器分析研究所
第５節　内山伸明
第６節　中村幸一郎
第７節　内山
第８節　中村
第９節　中村
第５章　第１節　有馬・益山（遺構及び土器：有馬，石器：益山）
第２節　有馬・益山（遺構：有馬，土器及び石器：益山）
第３節　黒川
第４節　福原
第５節　新中
第６節　黒川

17　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。なお，下鶴遺跡の遺物注記の略号は「ＳＺ」である。

本　文　目　次

序文
報告書抄録
例言
第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯……001
　第２節　事前調査……001
　第３節　本調査……003
　第４節　調査の経過……003
　第５節　整理作業の経緯……004
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……005
　第２節　歴史的環境……005
第３章　発掘調査の方法と成果
　第１節　調査の方法……010
　第２節　層序……013
　第３節　調査の成果……021
　　１　縄文時代の調査
　　⑴　調査の概要……021
　　⑵　遺構……030
　　⑶　遺物……052
　　２　弥生時代の調査
　　⑴　調査の概要……139
　　⑵　遺構……139
　　⑶　遺物……170
　　３　古墳時代の調査
　　⑴　調査の概要……181
　　⑵　遺構……181
　　⑶　遺物……381
　　４　古代の調査
　　⑴　調査の概要……391
　　⑵　遺構……391
　　⑶　遺物……398
　　５　中世・近世の調査
　　⑴　調査の概要……407
　　⑵　遺構……417
　　⑶　包含層出土遺物……479
　　６　近・現代の調査……500
観察表……501
第４章　自然科学分析……545
第５章　総括……564
写真図版……573

挿　図　目　次

第１図　トレンチ配置図……002
第２図　周辺地形の移り変わり……006
第３図　周辺遺跡地図……008
第４図　下鶴遺跡周辺図……011
第５図　グリッド配置図……012
第６図　基本土層図……013
第７図　土層断面図①……017
第８図　土層断面図②……018
第９図　土層断面図③……019
第10図　土層断面図④……020
第11図　出土遺物割合図……021
第12図　遺構配置図①……022
第13図　遺構配置図②……023
第14図　遺構配置図③……024
第15図　遺構配置図④……025
第16図　遺構配置図⑤……026
第17図　遺構配置図⑥……027
第18図　遺構配置図⑦……028
第19図　遺構配置図⑧……029
第20図　竪穴住居跡１号……030
第21図　竪穴住居跡１号・
　出土遺物……031
第22図　竪穴住居跡２号……032
第23図　竪穴住居跡３号・
　遺物出土状況……033
第24図　竪穴住居跡３号・
　出土遺物……034
第25図　竪穴住居跡４号・
　遺物出土状況……035
第26図　竪穴住居跡４号・
　出土遺物……035
第27図　竪穴住居跡４号・
　出土遺物……036
第28図　集石・集石内出土遺物……037
第29図　土坑３～６，11，17号・
　６号，17号
　遺物出土状況……038
第30図　土坑20～23，26号……040
第31図　土坑28～32号，
　29～31号遺物出土状況……041
第32図　土坑８，12～15号・
　15，33号遺物出土状況……042
第33図　土坑16，18，19，24，25，
　27号・18，19号
　遺物出土状況……043
第34図　土坑１，２，７，34号・
　１，２，34号
　遺物出土状況……044
第35図　土坑９，10号……045
第36図　土坑１，３，６号
　出土遺物……046
第37図　土坑13～15，17，
　18号出土遺物……047
第38図　土坑19～23号出土遺物……049
第39図　土坑26～32号出土遺物……050
第40図　土坑33，34号出土遺物……051
第41図　包含層遺物出土状況①……053
第42図　包含層遺物出土状況②……054
第43図　包含層出土遺物①……055
第44図　包含層出土遺物②……056
第45図　包含層出土遺物③……057
第46図　包含層出土遺物④……058
第47図　包含層出土遺物⑤……060
第48図　包含層出土遺物⑥……061
第49図　包含層出土遺物⑦……062
第50図　包含層出土遺物⑧……063
第51図　包含層出土遺物⑨……064
第52図　包含層出土遺物⑩……065
第53図　包含層出土遺物⑪……066
第54図　包含層出土遺物⑫……067
第55図　包含層出土遺物⑬……068
第56図　包含層出土遺物⑭……069
第57図　包含層出土遺物⑮……070
第58図　包含層出土遺物⑯……071
第59図　包含層出土遺物⑰……072
第60図　包含層出土遺物⑱……073
第61図　包含層出土遺物⑲……074
第62図　包含層出土遺物⑳……075
第63図　包含層出土遺物㉑……076
第64図　包含層出土遺物㉒……077
第65図　包含層出土遺物㉓……078

第66図　包含層出土遺物㉔……079
第67図　包含層出土遺物㉕……081
第68図　包含層出土遺物㉖……082
第69図　包含層出土遺物㉗……083
第70図　包含層出土遺物㉘……084
第71図　包含層出土遺物㉙……085
第72図　包含層出土遺物㉚……086
第73図　包含層出土遺物㉛……087
第74図　包含層出土遺物㉜……088
第75図　包含層出土遺物㉝……089
第76図　包含層出土遺物㉞……090
第77図　包含層出土遺物㉟……091
第78図　包含層出土遺物㊱……092
第79図　包含層出土遺物㊲……093
第80図　包含層出土遺物㊳……094
第81図　包含層出土状況①……096
第82図　包含層出土状況②……097
第83図　包含層出土状況③……098
第84図　包含層出土状況④……099
第85図　包含層出土状況⑤……100
第86図　包含層出土状況⑥……101
第87図　包含層出土遺物①……102
第88図　包含層出土遺物②……103
第89図　包含層出土遺物③……104
第90図　包含層出土遺物④……105
第91図　包含層出土遺物⑤……106
第92図　包含層出土遺物⑥……107
第93図　包含層出土遺物⑦……108
第94図　包含層出土遺物⑧……109
第95図　包含層出土遺物⑨……110
第96図　包含層出土遺物⑩……111
第97図　包含層出土遺物⑪……112
第98図　包含層出土遺物⑫……113
第99図　包含層出土遺物⑬……114
第100図　包含層出土遺物⑭……115
第101図　包含層出土遺物⑮……116
第102図　包含層出土遺物⑯……117
第103図　包含層出土遺物⑰……118
第104図　包含層出土遺物⑱……119
第105図　包含層出土遺物⑲……120
第106図　包含層出土遺物⑳……121
第107図　包含層出土遺物㉑……122
第108図　包含層出土遺物㉒……123
第109図　包含層出土遺物㉓……124
第110図　包含層出土遺物㉔……125
第111図　包含層出土遺物㉕……126
第112図　包含層出土遺物㉖……127
第113図　包含層出土遺物㉗……128
第114図　包含層出土遺物㉘……129
第115図　包含層出土遺物㉙……130
第116図　包含層出土遺物㉚……131
第117図　包含層出土遺物㉛……132
第118図　包含層出土遺物㉜……133
第119図　包含層出土遺物㉝……134
第120図　包含層出土遺物㉞……135
第121図　包含層出土遺物㉟……136
第122図　包含層出土遺物㊱……137
第123図　包含層出土遺物㊲……138
第124図　遺構配置図①……140
第125図　遺構配置図②……141
第126図　遺構配置図③……142
第127図　遺構配置図④……143
第128図　遺構配置図⑤……144
第129図　遺構配置図⑥……145
第130図　土坑６，７号……146
第131図　土坑８，９，17号……147
第132図　土坑27，34号・
34号遺物出土状況……148
第133図　土坑37，48号・48号
遺物出土状況……149
第134図　土坑49，51号……151
第135図　土坑33，39号……152
第136図　土坑13，35，41，42号……153
第137図　土坑１，３号……155
第138図　土坑10，11号……156
第139図　土坑12，19号・19号
遺物出土状況……157
第140図　土坑21，22号……158
第141図　土坑24～26号……159
第142図　土坑30，31，38，40号……160
第143図　土坑44，45号……161
第144図　土坑46，47号・47号
遺物出土状況……162
第145図　土坑18，50，52号
遺物出土状況……163
第146図　土坑23，28号……165
第147図　土坑２，５，15号……166
第148図　土坑４，20，32，36号……167
第149図　土坑14，29，43号・43号
遺物出土状況……168
第150図　壺棺（土坑16号）・
出土遺物……170
第151図　土坑９，19号出土遺物……171
第152図　土坑26，34，43，47，48，
52号出土遺物……172
第153図　遺物出土状況……174
第154図　包含層出土遺物①……175
第155図　包含層出土遺物②……176
第156図　包含層出土遺物③……177
第157図　包含層出土遺物④……178
第158図　包含層出土遺物⑤……179
第159図　包含層出土遺物⑥……180
第160図　遺構配置図①……182
第161図　遺構配置図②……183
第162図　遺構配置図③……184
第163図　遺構配置図④……185
第164図　遺構配置図⑤……186
第165図　遺構配置図⑥……187
第166図　遺構配置図⑦……188
第167図　遺構配置図⑧……189
第168図　遺構配置図⑨……190
第169図　遺構配置図⑩……191
第170図　遺構配置図⑪……192
第171図　遺構配置図⑫……193
第172図　遺構配置図⑬……194
第173図　遺構配置図⑭……195
第174図　遺構配置図⑮……196
第175図　遺構配置図⑯……197
第176図　遺構配置図⑰……198
第177図　遺構配置図⑱……199
第178図　遺構配置図⑲……200
第179図　遺構配置図⑳……201
第180図　遺構配置図㉑……202
第181図　遺構配置図㉒……203
第182図　遺構配置図㉓……204
第183図　遺構配置図㉔……205
第184図　遺構配置図㉕……206
第185図　遺構配置図㉖……207
第186図　遺構配置図㉗……208
第187図　遺構配置図㉘……209
第188図　遺構配置図㉙……210
第189図　遺構配置図㉚……211
第190図　遺構配置図㉛……212
第191図　遺構配置図㉜……213
第192図　遺構配置図㉝……214
第193図　遺構配置図㉞……215
第194図　遺構配置図㉟……216
第195図　竪穴住居跡１号・
出土遺物①……217
第196図　竪穴住居跡１号
出土遺物②……218
第197図　竪穴住居跡２号・
出土遺物……219
第198図　竪穴住居跡３号，４号……220
第199図　竪穴住居跡３号，４号
出土遺物①……221
第200図　竪穴住居跡３号，４号
出土遺物②……222
第201図　竪穴住居跡５～９号……223
第202図　竪穴住居跡５～９号・竪穴
住居跡５号出土遺物……224
第203図　竪穴住居跡５～９号……225
第204図　竪穴住居跡６号
出土遺物……226
第205図　竪穴住居跡７号，８号
出土遺物……227
第206図　竪穴住居跡８号，９号
出土遺物……228
第207図　竪穴住居跡９号
出土遺物……229
第208図　竪穴住居跡10号，11号……230
第209図　竪穴住居跡10号，11号
出土遺物……231
第210図　竪穴住居跡12号・
出土遺物……232

第211図 竪穴住居跡13号・出土遺物……233
第212図 竪穴住居跡14号・出土遺物……234
第213図 竪穴住居跡15号・出土遺物①……235
第214図 竪穴住居跡15号出土遺物②……236
第215図 竪穴住居跡16号……236
第216図 竪穴住居跡16号出土遺物……237
第217図 竪穴住居跡17号……239
第218図 竪穴住居跡17号遺物出土状況……240
第219図 竪穴住居跡17号出土遺物①……241
第220図 竪穴住居跡17号出土遺物②……242
第221図 竪穴住居跡17号出土遺物③……243
第222図 竪穴住居跡17号出土遺物④……244
第223図 竪穴住居跡17号出土遺物⑤……245
第224図 竪穴住居跡17号出土遺物⑥……246
第225図 竪穴住居跡17号出土遺物⑦……247
第226図 竪穴住居跡17号出土遺物⑧……248
第227図 竪穴住居跡18号遺物出土状況……249
第228図 竪穴住居跡18号・出土遺物①……250
第229図 竪穴住居跡18号出土遺物②……251
第230図 竪穴住居跡19号……251
第231図 竪穴住居跡19号出土遺物……252
第232図 竪穴住居跡20号……252
第233図 竪穴住居跡20号出土遺物……253
第234図 竪穴住居跡21号遺物出土状況……253
第235図 竪穴住居跡21号・出土遺物①……254
第236図 竪穴住居跡21号出土遺物②……255
第237図 竪穴住居跡22号・出土遺物……256
第238図 竪穴住居跡23号……257
第239図 竪穴住居跡23号出土遺物……258
第240図 竪穴住居跡24号……258
第241図 竪穴住居跡24号出土遺物……259
第242図 竪穴住居跡25号……260
第243図 竪穴住居跡25号出土遺物……261
第244図 竪穴住居跡26号……262
第245図 竪穴住居跡26号出土遺物……263
第246図 竪穴住居跡27号遺物出土状況……263
第247図 竪穴住居跡27号・出土遺物……264
第248図 竪穴住居跡28号……265
第249図 竪穴住居跡29号……266
第250図 竪穴住居跡28号，29号出土遺物……267
第251図 竪穴住居跡30号……268
第252図 竪穴住居跡30号出土遺物……269
第253図 竪穴住居跡31号遺物出土状況……269
第254図 竪穴住居跡31号・出土遺物……270
第255図 竪穴住居跡32号・出土遺物……271
第256図 竪穴住居跡33号出土遺物……271
第257図 竪穴住居跡33号……272
第258図 竪穴住居跡34号……273
第259図 竪穴住居跡34号出土遺物……274
第260図 竪穴住居跡35号遺物出土状況……274
第261図 竪穴住居跡35号・出土遺物……275
第262図 竪穴住居跡36号・出土遺物……276
第263図 竪穴住居跡37号・出土遺物……277
第264図 竪穴住居跡38号・出土遺物……278
第265図 竪穴住居跡39号……279
第266図 竪穴住居跡39号出土遺物①……280
第267図 竪穴住居跡39号出土遺物②……281
第268図 竪穴住居跡40号・出土遺物……282
第269図 竪穴住居跡41号出土遺物……283
第270図 竪穴住居跡41号……284
第271図 竪穴住居跡42号……285
第272図 竪穴住居跡42号出土遺物……286
第273図 竪穴住居跡43号遺物出土状況……286
第274図 竪穴住居跡43号・出土遺物……287
第275図 竪穴住居跡44号・出土遺物……288
第276図 竪穴住居跡45号遺物出土状況……289
第277図 竪穴住居跡45号……290
第278図 竪穴住居跡45号出土遺物……291
第279図 竪穴住居跡46号……292
第280図 竪穴住居跡46号出土遺物……293
第281図 竪穴住居跡47号遺物出土状況……293
第282図 竪穴住居跡47号・出土遺物……294
第283図 竪穴住居跡48号・出土遺物……295
第284図 竪穴住居跡49号・出土遺物……296
第285図 竪穴住居跡50号……297
第286図 竪穴住居跡50号出土遺物……298
第287図 竪穴住居跡51号・出土遺物……299
第288図 竪穴住居跡52号・出土遺物……300
第289図 竪穴住居跡53号・出土遺物……301
第290図 竪穴住居跡54号……302
第291図 竪穴住居跡54号出土遺物……303
第292図 竪穴住居跡54号出土遺物……304
第293図 竪穴住居跡55号・出土遺物……304
第294図 竪穴住居跡56号遺物出土状況……305
第295図 竪穴住居跡56号・出土遺物①……306
第296図 竪穴住居跡56号出土遺物②，57・58号出土遺物……307
第297図 竪穴住居跡57号・58号……308
第298図 竪穴住居跡59号遺物出土状況……309
第299図 竪穴住居跡59号……310
第300図 竪穴住居跡59号出土遺物……311
第301図 竪穴住居跡60号……312
第302図 竪穴住居跡60号・遺物出土状況……313
第303図 竪穴住居跡61号遺物出土状況……313
第304図 竪穴住居跡61号・出土遺物……314

第305図 竪穴住居跡62号・出土遺物……315
第306図 竪穴住居跡62号出土遺物……316
第307図 竪穴住居跡62号……317
第308図 竪穴住居跡間接合状況図……318
第309図 竪穴住居跡63号遺物出土状況……318
第310図 竪穴住居跡63号出土遺物……319
第311図 竪穴住居跡63号……320
第312図 竪穴住居跡64号遺物出土状況……321
第313図 竪穴住居跡64号出土遺物……322
第314図 竪穴住居跡64号……323
第315図 竪穴住居跡65号……324
第316図 竪穴住居跡65号出土遺物……325
第317図 竪穴住居跡66号……326
第318図 竪穴住居跡66号出土遺物……327
第319図 竪穴住居跡67号・出土遺物……327
第320図 竪穴住居跡68号……328
第321図 竪穴住居跡68号出土遺物……329
第322図 竪穴住居跡69号・出土遺物……330
第323図 竪穴住居跡70号……331
第324図 竪穴住居跡70号出土遺物……332
第325図 竪穴住居跡71号・出土遺物……333
第326図 竪穴住居跡71号……334
第327図 竪穴住居跡72号，73号・出土遺物……335
第328図 竪穴住居跡73号……336
第329図 竪穴住居跡74号遺物出土状況……337
第330図 竪穴住居跡74号……338
第331図 竪穴住居跡74号出土遺物①……339
第332図 竪穴住居跡74号出土遺物②……340
第333図 竪穴住居跡75号・出土遺物①……341
第334図 竪穴住居跡75号出土遺物②……342
第335図 竪穴住居跡76号……342
第336図 竪穴住居跡77号……343
第337図 竪穴住居跡77号出土遺物……344
第338図 竪穴住居跡78号遺物出土状況……344
第339図 竪穴住居跡78号・出土遺物……345
第340図 竪穴住居跡79号遺物出土状況……346
第341図 竪穴住居跡79号……347
第342図 竪穴住居跡79号出土遺物……348
第343図 竪穴住居跡80号・出土遺物①……349
第344図 竪穴住居跡80号・出土遺物②……350
第345図 竪穴住居跡81号・出土遺物……351
第346図 竪穴住居跡82号……352
第347図 竪穴住居跡82号出土遺物……353
第348図 竪穴住居跡83号遺物出土状況……353
第349図 竪穴住居跡83号・出土遺物……354
第350図 竪穴住居跡84号出土遺物……354
第351図 竪穴住居跡84号……355
第352図 竪穴住居跡85号・出土遺物①……356
第353図 竪穴住居跡85号出土遺物②……357
第354図 竪穴住居跡85号出土遺物③……358
第355図 竪穴住居跡85号・出土遺物④……359
第356図 竪穴住居跡86号・出土遺物①……360
第357図 竪穴住居跡86号・出土遺物②……361
第358図 竪穴住居跡86号出土遺物③……362
第359図 竪穴住居跡87号遺物出土状況……362
第360図 竪穴住居跡87号・出土遺物……363
第361図 竪穴住居跡88号・出土遺物……364
第362図 竪穴住居跡88号……365
第363図 竪穴住居跡89号・出土遺物……366
第364図 竪穴住居跡90号……367
第365図 竪穴住居跡90号出土遺物……368
第366図 竪穴住居跡91号・出土遺物……369
第367図 竪穴住居跡92号，93号……370
第368図 埋設土器出土状況・出土遺物……371
第369図 土坑11号……372
第370図 土坑12号，1号，3号……373
第371図 土坑4号，9号，5号，14号，15号，23号……374
第372図 土坑24号，6号，7号，13号，20号，22号……375
第373図 土坑19号，16号，28号，21号，26号……376
第374図 土坑25号，27号……377
第375図 土坑8号，17号，18号，2号……378
第376図 土坑10号・土坑出土遺物①……379
第377図 土坑出土遺物②……380
第378図 包含層遺物出土状況①……382
第379図 包含層遺物出土状況②……383
第380図 包含層出土遺物①……384
第381図 包含層出土遺物②……385
第382図 包含層出土遺物③……386
第383図 包含層出土遺物④……387
第384図 包含層出土遺物⑤……388
第385図 包含層出土遺物⑥……389
第386図 包含層出土遺物⑦……390
第387図 遺構配置図①……392
第388図 遺構配置図②……393
第389図 掘立柱建物跡・出土遺物，土坑1～3号……394
第390図 土坑1，2号出土遺物……395
第391図 土坑3号出土遺物……396
第392図 包含層遺物出土状況①……397
第393図 包含層遺物出土状況②……398
第394図 移動式竈の復元図……399
第395図 包含層出土遺物①……400
第396図 包含層出土遺物②……401
第397図 包含層出土遺物③……402
第398図 包含層出土遺物④……404
第399図 包含層出土遺物⑤……405
第400図 包含層出土遺物⑥……406
第401図 中世・近世遺構配置図⑴……408
第402図 中世・近世遺構配置図⑵……409
第403図 中世・近世遺構配置図⑶……410
第404図 中世・近世遺構配置図⑷……411
第405図 中世・近世遺構配置図⑸……412
第406図 中世・近世遺構配置図⑹……413
第407図 中世・近世遺構配置図⑺……414
第408図 中世・近世遺構配置図⑻……415
第409図 中世・近世

遺構配置図⑼……416
第410図 掘立柱建物跡１号……417
第411図 掘立柱建物跡２号……418
第412図 掘立柱建物跡
３号・４号……419
第413図 掘立柱建物跡
５号・６号……420
第414図 掘立柱建物跡
７号・８号……421
第415図 掘立柱建物跡
９号・10号……422
第416図 掘立柱建物跡
11号・12号……423
第417図 掘立柱建物跡13号……424
第418図 掘立柱建物跡14号……426
第419図 竪穴建物跡１号・２号..427
第420図 竪穴建物跡３号
出土遺物……428
第421図 竪穴建物跡４号
出土遺物・５号……429
第422図 竪穴建物跡６号
出土遺物……430
第423図 竪穴建物跡７号
出土遺物……431
第424図 竪穴建物跡８号・９号
出土遺物……432
第425図 竪穴建物跡10号
出土遺物①……433
第426図 竪穴建物跡10号
出土遺物②……434
第427図 竪穴建物跡11号出土遺物・
12号出土遺物……435
第428図 竪穴建物跡13号……436
第429図 建物状遺構１号
出土遺物……437
第430図 建物状遺構２号出土遺物・
３号　出土遺物……438
第431図 土坑１号・２号
出土遺物……439
第432図 土坑３号・４号・５号・
６号……440
第433図 土坑７号・８号・９号・
10号……441
第434図 土坑11号・12号・13号..442
第435図 土坑14号・15号・16号・
17号・18号　出土遺物..443
第436図 土坑19号　出土遺物・20号
出土遺物・21号……444
第437図 土坑22号・23号……445
第438図 土坑24号・25号・26号・
27号・28号・29号……446
第439図 大型土坑１号……447
第440図 大型土坑１号出土遺物・
２号……448
第441図 大型土坑２号出土遺物..449
第442図 大型土坑３号
出土遺物……450
第443図 大型土坑４号
出土遺物……451
第444図 大型土坑５号
出土遺物①……452
第445図 大型土坑５号
出土遺物②……453
第446図 大型土坑５号
出土遺物③……454
第447図 大型土坑５号
出土遺物④……455
第448図 大型土坑５号
出土遺物⑤……456
第449図 大型土坑５号
出土遺物⑥……457
第450図 大型土坑５号
出土遺物⑦……458
第451図 大型土坑６号
出土遺物……459
第452図 大型土坑７号
出土遺物・８号……460
第453図 大型土坑８号
出土遺物……461
第454図 炉状遺構１号・
２号・３号・４号……462
第455図 炉状遺構４号出土遺物・
５号・６号・７号……463
第456図 炉状遺構８号　出土遺物
９号・10号・11号……464
第457図 炉状遺構12号・13号・
14号・15号・16号・17号・
18号・19号……465
第458図 溝内出土遺物①……466
第459図 溝状遺構１号・２号・
３号……467・468
第460図 溝内出土遺物②……469
第461図 溝内出土遺物③……470
第462図 溝内出土遺物④……471
第463図 溝内出土遺物⑤……472
第464図 溝内出土遺物⑥……473
第465図 溝内出土遺物⑦……474
第466図 ピット内遺物①……475
第467図 ピット内遺物②……476
第468図 ピット内遺物③……477
第469図 ピット内遺物④……478
第470図 中世遺物⑴土師器……479
第471図 中世遺物⑵青磁・白磁..480
第472図 中世遺物⑶青花①……481
第473図 中世遺物⑷青花②……482
第474図 中世・近世遺物⑸
青花③・染付①……483
第475図 中世・近世遺物⑹
染付②……484
第476図 中世・近世遺物⑺
染付③……485
第477図 中世・近世遺物⑻
染付④……486
第478図 中世・近世遺物⑼
陶器①……487
第479図 中世・近世遺物⑽
陶器②……488
第480図 中世・近世遺物⑾
陶器③……489
第481図 中世・近世遺物⑿
陶器④……490
第482図 中世・近世遺物⒀
陶器⑤……491
第483図 中世・近世遺物⒁
陶器⑥……492
第484図 中世・近世遺物⒂
陶器⑦……493
第485図 中世遺物⒃瓦質土器・
土師質土器……494
第486図 中世・近世遺物⒄
鞴の羽口・鉄滓・
鉄製品……495
第487図 中世・近世遺物⒅
滑石製品……496
第488図 中世・近世遺物⒆
金床石……497
第489図 中世・近世遺物⒇砥石..498
第490図 中世・近世遺物(21)
軽石製品・櫛・古銭……499
第491図 近代・現代　古道……500
第492図 腐植含量とリン酸含量の
相関……547
第493図 植物珪酸体含量の
層位的変化……547
第494図 各試料の暦年較正図……551
第495図 暦年較正①……551
第496図 暦年較正②……552
第497図 暦年較正③……553
第498図 暦年較正年代グラフ……555
第499図 下鶴遺跡出土銅戈表面の
蛍光Ｘ線分析結果……557
第500図 下鶴遺跡出土
銅戈切っ先破片の蛍光Ｘ線
分析結果……557
第501図 スペクトルチャート①..559
第502図 スペクトルチャート②..559
第503図 スペクトルチャート③..559
第504図 蛍光Ｘ線分析結果……560
第505図 蛍光Ｘ線分析結果①……562
第506図 蛍光Ｘ線分析結果②……563
第507図 土坑長軸方向及びＡ・Ｂ群
分布状況……565
第508図 古い様相と新しい様相の
竪穴住居跡……566
第509図 16世紀後半～17世紀の

肥前産陶磁器出土状況..568
第510図 下鶴遺跡陶磁器編年図..569
第511図 時代別出土点数..571

表　目　次

表 1　遺跡一覧表..009
表 2　石器分類表..014
表 3　石材分類表..015
表 4　組成表..101
表 5　縄文時代遺物観察表(1)..501
表 6　縄文時代遺物観察表(2)..502
表 7　縄文時代遺物観察表(3)..503
表 8　縄文時代遺物観察表(4)..504
表 9　縄文時代遺物観察表(5)..505
表10　縄文時代遺物観察表(6)..506
表11　縄文時代遺物観察表(7)..507
表12　縄文時代遺物観察表(8)..508
表13　縄文時代遺物観察表(9)..509
表14　縄文時代遺物観察表(10)..510
表15　縄文時代遺物観察表(11)..511
表16　縄文時代遺物観察表(12)..512
表17　縄文時代遺物観察表(13)..513
表18　縄文時代遺物観察表(14)..514
表19　縄文時代遺物観察表(15)..515
表20　縄文時代遺物観察表(16)..515
表21　縄文時代遺物観察表(17)..515
表22　縄文時代遺物観察表(18)..516
表23　縄文時代遺物観察表(19)..517
表24　縄文時代遺物観察表(20)..518
表25　縄文時代遺物観察表(21)..519
表26　縄文時代遺物観察表(22)..520
表27　弥生時代遺物観察表(1)..520
表28　弥生時代遺物観察表(2)..520
表29　弥生時代遺物観察表(3)..521
表30　弥生時代遺物観察表(4)..522
表31　弥生時代遺物観察表(5)..522
表32　弥生時代遺物観察表(6)..522
表33　弥生時代遺物観察表(7)..522
表34　古墳時代遺物観察表(1)..522
表35　古墳時代遺物観察表(2)..523
表36　古墳時代遺物観察表(3)..524
表37　古墳時代遺物観察表(4)..525
表38　古墳時代遺物観察表(5)..526
表39　古墳時代遺物観察表(6)..527
表40　古墳時代遺物観察表(7)..528
表41　古墳時代遺物観察表(8)..529
表42　古墳時代遺物観察表(9)..530
表43　古墳時代遺物観察表(10)..531
表44　古墳時代遺物観察表(11)..532
表45　古墳時代遺物観察表(12)..532
表46　古墳時代遺物観察表(13)..532
表47　古墳時代遺物観察表(14)..532
表48　古墳時代遺物観察表(15)..533
表49　古墳時代遺物観察表(16)..534
表50　古墳時代遺物観察表(17)..534
表51　古代遺物観察表(1)..534
表52　古代遺物観察表(2)..535
表53　古代遺物観察表(3)..536
表54　古代遺物観察表(4)..536
表55　中世・近世遺構内
遺物観察表(1)..536
表56　中世・近世遺構内
遺物観察表(2)..536
表57　中世・近世遺構内
遺物観察表(3)..537
表58　中世・近世遺構内
遺物観察表(4)..537
表59　中世・近世遺構内
遺物観察表(5)..537
表60　中世・近世遺構内
遺物観察表(6)..537
表61　中世・近世遺構内
遺物観察表(7)..537
表62　中世・近世遺構内
遺物観察表(8)..537
表63　中世・近世遺構内
遺物観察表(9)..537
表64　中世・近世遺構内
遺物観察表(10)..537
表65　中世・近世遺構内
遺物観察表(11)..538
表66　中世・近世遺構内
遺物観察表(12)..538
表67　中世・近世遺構内
遺物観察表(13)..538
表68　中世・近世遺構内
遺物観察表(14)..538
表69　中世・近世遺構内
遺物観察表(15)..538
表70　中世・近世遺構内
遺物観察表(16)..538
表71　中世・近世遺構内
遺物観察表(17)..538
表72　中世・近世遺構内
遺物観察表(18)..539
表73　中世・近世遺構内
遺物観察表(19)..539
表74　中世・近世遺構内
遺物観察表(20)..539
表75　中世・近世遺構内
遺物観察表(21)..539
表76　中世・近世遺構内
遺物観察表(22)..539
表77　中世・近世遺構内
遺物観察表(23)..539
表78　中世・近世遺構内
遺物観察表(24)..539
表79　中世・近世遺構内
遺物観察表(25)..539
表80　中世・近世遺構内
遺物観察表(26)..539
表81　中世・近世遺構内
遺物観察表(27)..539
表82　中世・近世遺構内
遺物観察表(28)..540
表83　中世・近世遺構内
遺物観察表(29)..540
表84　中世・近世遺構内
遺物観察表(30)..540
表85　中世・近世遺構内
遺物観察表(31)..540
表86　中世・近世遺構内
遺物観察表(32)..540
表87　中世・近世遺構内
遺物観察表(33)..540
表88　中世・近世遺構内
遺物観察表(34)..540
表89　中世・近世遺構内
遺物観察表(35)..541
表90　中世・近世遺構内
遺物観察表(36)..541
表91　中世・近世包含層遺物
観察表(1)..541
表92　中世・近世包含層遺物
観察表(2)..541
表93　中世・近世包含層遺物
観察表(3)..541
表94　中世・近世包含層遺物
観察表(4)..542
表95　中世・近世包含層遺物
観察表(5)..543
表96　中世・近世包含層遺物
観察表(6)..543
表97　中世・近世包含層遺物
観察表(7)..544
表98　中世・近世包含層遺物
観察表(8)..544
表99　中世・近世包含層遺物
観察表(9)..544
表100　中世・近世包含層遺物
観察表(10)..544
表101　土壌理化学分析結果..546
表102　花粉分析結果..547
表103　植物珪酸体含量..548
表104　測定試料及び処理..550

表105 放射性炭素年代測定及び
暦年較正の結果……550
表106 ……554
表107 ……554
表108 中世・近世遺物分類……570
表109 肥前磁器器種別……570
表110 肥前陶器器種別……570

図 版 目 次

図版１ 下鶴遺跡近景……573
図版２ 土層断面 ①Ｋ・Ｌ－15区
②③Ｅ－24区
④Ｆ－16区…574
図版３ ①Ｋ～Ｍ－22・23区
②Ｊ－Ｌ－６～９区……575
図版４ ①遺物出土状況
②調査区近景……576
図版５ 作業風景等……577
図版６ 縄文竪穴住居１号……578
図版７ 縄文竪穴住居２号……579
図版８ 縄文竪穴住居３号……580
図版９ 縄文竪穴住居４号……581
図版10 ①縄文土坑17号
②～④縄文土坑21号
⑤・⑥縄文土坑22号……582
図版11 ①～③縄文土坑23号
④～⑥縄文土坑24号……583
図版12 ①～③縄文土坑25号
④・⑤縄文土坑31号
⑥縄文土坑34号……584
図版13 ①縄文土坑１号
②～④弥生土坑19号……585
図版14 ①弥生土坑４・５号
②・③弥生土坑６号
④～⑥弥生土坑
７・８・９・11号
⑦弥生土坑10号……586
図版15 ①弥生土坑12号
②弥生土坑13号
③弥生土坑14号
④弥生土坑15号
⑤～⑧弥生土坑16号……587
図版16 ①～③弥生土坑17号
④～⑦弥生土坑18号
⑧弥生土坑19号……588
図版17 ①・②弥生土坑19号
③弥生土坑20号
④～⑦弥生土坑21号……589
図版18 ①～③弥生土坑22号
④・⑤弥生土坑23号……590
図版19 ①弥生土坑24・25・27号
②弥生土坑26号
③・④弥生土坑24号
⑤弥生土坑25号
⑥弥生土坑27号
⑦弥生土坑29号……591
図版20 ①・②弥生土坑32号
③・④弥生土坑34号……592
図版21 ①・②弥生土坑35号
③弥生土坑36号
④弥生土坑37号
⑤・⑥弥生土坑38号……593
図版22 ①～③弥生土坑39号
④～⑥弥生土坑40号……594
図版23 ①・②弥生土坑42号
③・④弥生土坑43号
⑤弥生土坑44号
⑥弥生土坑46号
⑦弥生土坑44・45・46号
⑧弥生土坑47号……595
図版24 ①・②弥生土坑47号内遺物
③～⑥弥生土坑48号……596
図版25 ①～④弥生土坑49号
⑤～⑦弥生土坑50号……597
図版26 ①～③古墳住居１号
④～⑥古墳住居２号……598
図版27 ①～③古墳住居３号
④古墳住居３・４号
⑤～⑦古墳住居４号……599
図版28 ①古墳住居
５・６・７・９号検出
②古墳住居５・６・
７・９号切り合い
③古墳住居５号検出
④古墳住居６・８号
切り合い
⑤古墳住居
８・９号切り合い断面
⑥古墳住居８号内
遺物出土状況
⑦古墳住居10・11号
⑧古墳住居12号……600
図版29 ①～④古墳住居13号
⑤古墳住居14号
⑥古墳住居
15・16・17号……601
図版30 ①～④古墳住居17号……602
図版31 ①・②古墳住居18号
③～⑤古墳住居19号……603
図版32 ①～④古墳住居20号
⑤古墳住居21号
⑥古墳住居22号
⑦・⑧古墳住居23号……604
図版33 ①・②古墳住居23号
③～⑥古墳住居24号
⑦・⑧古墳住居25号……605
図版34 ①・②古墳住居25号
③～⑤古墳住居26号
⑥・⑦古墳住居27号……606
図版35 ①～④古墳住居28号
⑤～⑧古墳住居29号……607
図版36 ①～③古墳住居30号
④古墳住居31号
⑤～⑦古墳住居33号……608
図版37 ①・②古墳住居34号
③～⑦古墳住居35号……609
図版38 ①～③古墳住居36号
④～⑦古墳住居37号……610
図版39 ①～③古墳住居38号
④・⑤古墳住居39号……611
図版40 ①古墳住居41号
②～④古墳住居42号
⑤古墳住居43号
⑥古墳住居44号
⑦・⑧古墳住居45号……612
図版41 ①～④古墳住居46号
⑤古墳住居47号
⑥古墳住居48号
⑦・⑧古墳住居49号……613
図版42 ①・②古墳住居49号
③・④古墳住居50号
⑤古墳住居52号
⑥古墳住居53号
⑦・⑧古墳住居54号……614
図版43 ①古墳住居54号
②古墳住居55号
③・④古墳住居56号
⑤・⑥古墳住居57・58号
⑦古墳住居59号
⑧古墳住居59号内炉……615
図版44 ①古墳住居60号
②古墳住居60号内炉
③古墳住居61・62号
④古墳住居62号
⑤古墳住居61号
⑥～⑧古墳住居62号……616
図版45 ①古墳住居63号
②古墳住居63号内炉
③・④古墳住居64号
⑤古墳住居65号……617
図版46 ①～④古墳住居66号
⑤古墳住居67号
⑥古墳住居68号
⑦・⑧古墳住居70号……618
図版47 ①～③古墳住居74号
④古墳住居78号

⑤・⑥古墳住居79号
⑦古墳住居79号遺物
出土状況……619
図版48 ①～④古墳住居79号
⑤～⑦古墳住居80号
⑧古墳住居82号……620
図版49 ①古墳住居83号
②古墳住居84号
③・④・⑥古墳住居85号
⑤古墳住居85号を切る
大型土坑５号内の
古銭……621
図版50 ①～③古墳住居86号
④・⑤古墳住居87号
⑥古墳住居88号……622
図版51 ①～③古墳住居89号
④～⑥古墳住居90号
⑦・⑧古墳住居91号……623
図版52 ①古墳住居91号
②古墳住居92号
③～⑤古墳住居93号……624
図版53 ①～④古墳土坑11号
⑤古墳土坑12号……625
図版54 ①古墳土坑23・24号
②～④埋設土器……626
図版55 ①古代土坑１号
②～④古代土坑２号
⑤～⑦古代土坑３号……627
図版56 ①掘立柱建物14号
②竪穴建物跡１号
③～⑤竪穴建物跡２号..628
図版57 ①・②竪穴建物跡２号
③～⑥竪穴建物跡３号
⑦竪穴建物跡４号
⑧竪穴建物跡５号……629
図版58 ①～④竪穴建物跡６号
⑤竪穴建物跡７号
⑥～⑧竪穴建物跡８号..630
図版59 ①～④竪穴建物跡９号
⑤竪穴建物跡10号
⑥・⑦竪穴建物跡11号..631
図版60 ①・②竪穴建物跡12号
③竪穴建物跡13号
④建物状遺構１
⑤・⑥土坑25号
⑦・⑧土坑26号……632
図版61 ①・②土坑27号
③・④大型土坑２号
⑤大型土坑４号
⑥大型土坑６号
⑦・⑧大型土坑７号……633
図版62 ①・②大型土坑８号
③炉１号
④炉３・４号
⑤炉５号
⑥炉10号
⑦炉７号……634
図版63 ①・②炉７号
③炉８号
④・⑤炉11号
⑥炉12号……635
図版64 ①炉13号
②炉14号
③～⑥溝状遺構……636
図版65 溝状遺構……637
図版66 縄文時代の遺物⑴……638
図版67 縄文時代の遺物⑵……639
図版68 縄文時代の遺物⑶……640
図版69 縄文時代の遺物⑷……641
図版70 縄文時代の遺物⑸……642
図版71 縄文時代の遺物⑹……643
図版72 縄文時代の遺物⑺……644
図版73 縄文時代の遺物⑻……645
図版74 縄文時代の遺物⑼……646
図版75 縄文時代の遺物⑽……647
図版76 縄文時代の遺物⑾……648
図版77 縄文時代の遺物⑿……649
図版78 弥生時代の遺物⑴……650
図版79 弥生時代の遺物⑵……651
図版80 弥生時代の遺物⑶……652
図版81 弥生時代の遺物⑷……653
図版82 古墳時代の遺物⑴……654
図版83 古墳時代の遺物⑵……655
図版84 古墳時代の遺物⑶……656
図版85 古墳時代の遺物⑷……657
図版86 古墳時代の遺物⑸……658
図版87 古墳時代の遺物⑹……659
図版88 古墳時代の遺物⑺……660
図版89 古墳時代の遺物⑻……661
図版90 古代の遺物⑴……662
図版91 古代の遺物⑵……663
図版92 中世・近世の遺物⑴……664
図版93 中世・近世の遺物⑵……665
図版94 中世・近世の遺物⑶……666
図版95 中世・近世の遺物⑷……667
図版96 中世・近世の遺物⑸……668

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

平成18年７月，薩摩地方北部を記録的な豪雨が襲った。特に川内川流域は県境を越えたえびの地区から河口の川内地区まで多大な被害を受ける災害となった。同年10月には，川内川激甚災害対策特別緊急事業（平成18～22年度の５か年）が採択され，復興へのスタートを切ることとなった。

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，同年11月，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所（以下，川内川河川事務所）は，川内川激甚災害対策特別緊急事業に先立って，事業対象地（41か所）内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は，平成18年12月に川内川流域の湧水町・菱刈町・大口市・さつま町・薩摩川内市内の埋蔵文化財分布調査を実施し，18か所について埋蔵文化財調査が必要であることが明らかとなった。

この結果をもとに，平成19年２月には国土交通省川内川河川事務所から県文化財課へ埋蔵文化財調査対象地の試掘調査実施が依頼され，同月の下ノ原Ｂ遺跡（旧大口市）の調査を皮切りに，調査着手の条件が揃ったところから試掘調査を進めることとなった。

下鶴遺跡の試掘調査は，県文化財課が県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）及び大口市教育委員会（現伊佐市教育委員会）の協力を得て，平成20年10月９日と10日の２日間実施した。その結果，36,600㎡について遺跡の存在が明らかとなった。このことを受けて，再度３者で協議を行った結果，設計変更等が不可能なことなどから本調査を実施することとなった。

本調査は，埋文センターが担当し，平成21年度に実施することとした。まず調査は，調査対象地内の築堤部分を優先的に調査することとし，また，平成20年度に試掘調査が実施出来なかった部分についても補充の試掘調査を実施することとした。その結果，最終的な本調査対象面積は40,400㎡となり，平成20年度調査予定箇所の一部は平成21年度に実施することとなった。

平成21年度の調査は平成21年５月８日から平成22年３月25日にかけて実施し，平成22年度の調査は，平成22年６月１日から７月27日まで実施した。これらの調査の結果，縄文時代早期から近世に至るまでの遺構・遺物等が発見された。

報告書作成作業は，平成21年度中に一部の水洗い・注記等の基礎整理を行い，平成22年度に本格的に実施した。

第２節　事前調査

１　分布調査

分布調査は，平成18年12月19日に大口市・菱刈町・湧水町の１市２町を対象に実施した。

調査体制

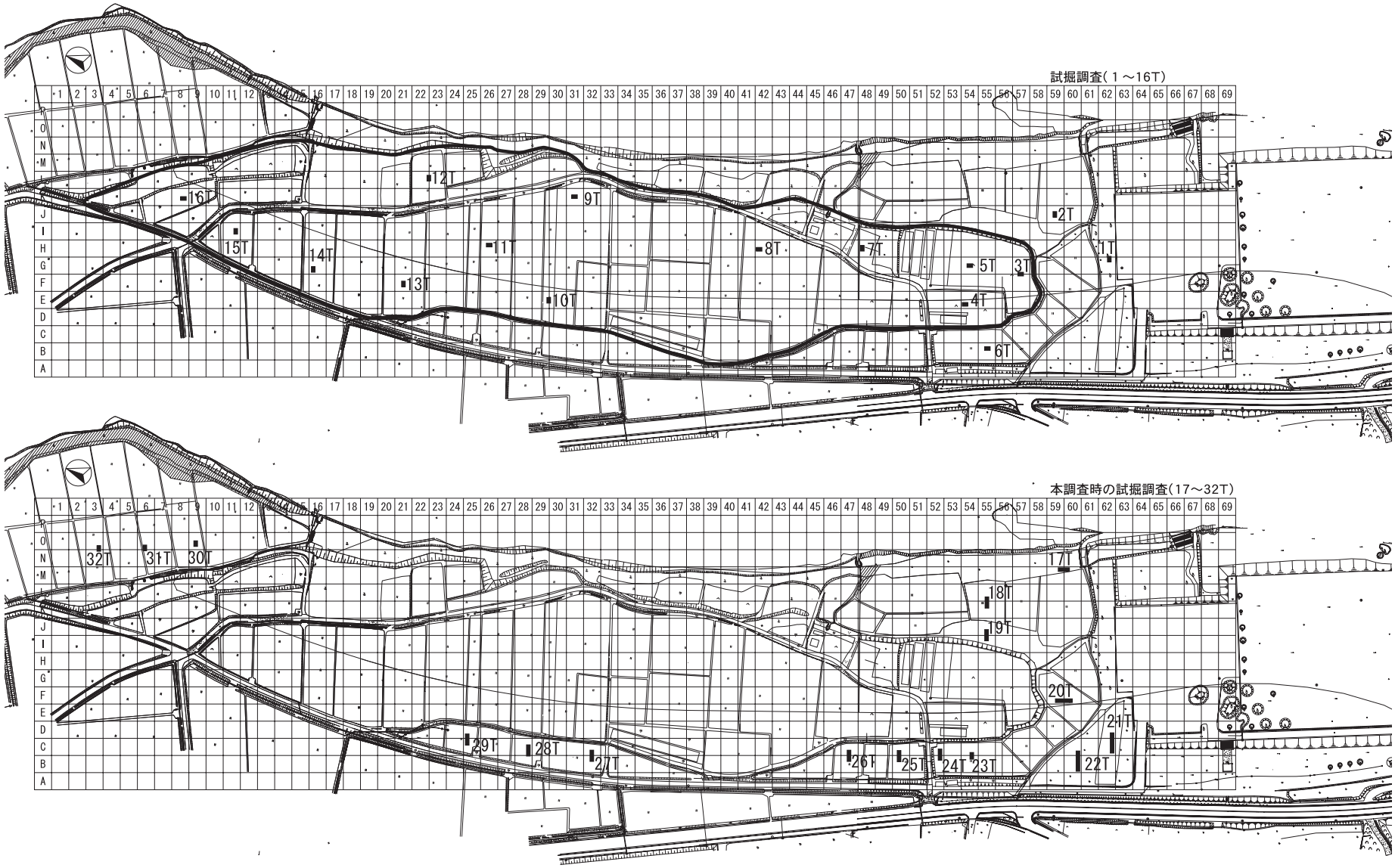
事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長	中尾　理
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長補佐	前原　浩一
	主任文化財主事兼	
	埋蔵文化財係長	青﨑　和憲
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	前迫　亮一
調査協力	大口市教育委員会	主査　中村　守男
	〃	主査　柿川　幸司

２　試掘調査

試掘調査は，平成20年10月９日と10月10日の２日間実施した。調査は，対象地に16箇所のトレンチを設定し，小型バックホーと人力で掘り下げを進めていった。その結果，12箇所のトレンチで遺構・遺物が確認され，本調査対象面積は約36,600㎡（第１図上の太線の範囲）となった。

調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	川内川河川事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長	有川　昭人
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	
	課長補佐	福山　徳治
	文化財主事兼	
	埋蔵文化財係長	堂込　秀人
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	前迫　亮一
調査協力	県立埋蔵文化財センター	
	調査第一課長	青﨑　和憲
	主任文化財主事兼	
	調査第一課第一調査係長	井ノ上秀文
	大口市教育委員会	主査　中村　守男
	〃	主査　柿川　幸司
立会者	川内川河川事務所　菱刈出張所	
	技術係長	仁田原公亮


試掘調査（１～16T）
本調査時の試掘調査（17～32T）
16T
15T
14T
13T
12T
11T
10T
9T
8T
7T
6T
5T
4T
3T
2T
1T
32T
31T
30T
29T
28T
27T
26T
25T
24T
23T
22T
21T
20T
19T
18T
17T

第１図　トレンチ配置図

第３節　本調査

１　平成21年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　県立埋蔵文化財センター

	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	齋藤　守重
	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	調査第一課長	中村　耕治
	主任文化財主事兼	
	調査第一課第二調査係長	宮田　栄二
調査担当	文化財主事	木之下悦朗（９月～）
	〃	久保田昭二（９月～）
	〃	廣　栄次（11月～）
	〃	有馬　孝一（11月～）
	〃	羽嶋　敦洋（11月～）
	〃	新中なるみ
	〃	黒川　忠広
	〃	福薗　慶明（９月～）
	〃	福原　誠也
調査事務	総務係長	紙屋　伸一
調査指導	九州大学総合研究博物館	
	副館長	岩永　省三
	鹿児島大学法文学部	
	教授	森脇　広

２　平成22年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　県立埋蔵文化財センター

	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	中村　耕治
	調査第一課長	長野　眞一
	文化財主事兼	
	調査第一課第二調査係長	八木澤一郎
調査担当	文化財主事	有馬　孝一
	〃	福原　誠也
調査事務	総務係長	大園　祥子

３　平成22年度　報告書作成

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　県立埋蔵文化財センター

	所長	山下　吉美
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	中村　耕治
	調査第一課長	長野　眞一
	文化財主事兼	
	調査第一課第二調査係長	八木澤一郎
調査担当	文化財主事	吉岡　康弘
	〃	有馬　孝一
	〃	新中なるみ
	〃	黒川　忠広
	〃	福原　誠也
	文化財研究員	益山　郁恵
調査事務	総務係長	大園　祥子
調査指導	鹿児島大学	
	准教授	本田　道輝
	教授	渡辺　芳郎
	肥後考古学会	
	副会長	富田　紘一
	佐賀県立九州陶磁文化館	
	特別学芸顧問	大橋　康二

第４節　調査の経過

調査の経過については，日誌抄を年度ごと及び月ごとに集約して記載する。

平成21年度

５月

８日調査開始。表土剥ぎ，プレハブ設置，重機，ベルコン搬入　調査開始に伴う作業員オリエンテーション，１Ｔ～４Ｔ設置，掘り下げ。主な調査区Ｂ－40～45区，Ｃ～Ｄ－40～53区，Ｅ～Ｆ－42～52区。遺物取り上げ（１～1460）

６月

主な調査区Ｂ－39～44区，Ｃ－33～37区，39～46区，Ｄ－33～37区，39～46区，52～55区，Ｅ－33～37区，43～45区，52～55区，Ｆ－33～37区，Ｇ－41～44区。遺物取り上げ（1461～3865）

７月

主な調査区Ｂ－37～39区，42～44区，Ｃ～Ｆ－27～31区，37～39区，42～51区，Ｇ～Ｉ－28～35区，41～46区，Ｊ－41～46区。遺物取り上げ（3866～4128）

８月

４日霧島市文化財少年団発掘体験37名。主な調査区Ｂ～Ｄ－34～51区，Ｅ－17～20区，34～51区，Ｆ～Ｇ－17～20区，37～51区，Ｈ－17～20区，30～31区，Ｉ～Ｊ－あ30～31区，44～46区。遺物取り上げ（4129～4472）
羽月小６年生３名遺跡見学。

9月

主な調査区C－45～46区，50～52区，D～G－25～28区，43～57区，H～I－43～57区，遺物取り上げ（4473～6850）。

10月

主な調査区D～H－12～31区，I～J－6～15区，K～L－6～15区，21～31区，K～M－16～21区。6日調査区の一部引き渡し（築堤部分の38～55区4,300㎡）。22日銅戈出土。30日羽月小5年生発掘体験。遺物取り上げ（6851～12969）

11月

主な調査区E～F－15～29区，G～H－15～25区。10～11日岩永省三氏現地指導。12日本田道輝氏現地指導。12日大口南中3年生発掘体験実施(50名)。19日記者発表。28日現地説明会実施（360名来跡）。遺物取り上げ（12970～16300）

12月

主な調査区C～D－31～33区，E～H－15～26区，40～58区，I－40～45区，J～M－16～23区。2日大口南中2年生発掘体験実施（54名）。16日大口南中1年生発掘体験実施（53名）。遺物取り上げ（16301～19100）

1月

主な調査区E－33～37区，49～58区，F～H－10～27区，49～58区，I～J－10～27区，33～40区，K～L－16～21区，36～27区。5日調査区の一部引き渡し（築堤部分の24～37区3,200㎡）20日空中写真撮影。遺物取り上げ（19101～21878）

2月

主な調査区E～F－50～58区，G～H－22～32区，50～58区，I～L－15～35区，M－20～21区。18日調査区の一部引き渡し（築堤部分の12～23区3,700㎡）遺物取り上げ（21879～25802）

3月

主な調査区E－50～57区，F－48～57区，G－47～57区，H－44～57区，I－19～22区，36区，44～50区，J～L－15～24区。9日森脇広氏現地指導。17日空中写真撮影（2回目）。遺物取り上げ（25803～26153）。25日調査終了。調査終了38,800㎡の引き渡し（この内11,200㎡は引き渡し済み）。

平成22年度

6月

1日作業開始。主な調査区I～J－4～21区，H～I－45～49区。遺物取り上げ（26154－26177）

7月

遺構検出・実測作業。土層断面写真撮影および実測。13日下流側調査区引き渡し協議。26日上流側調査区引き渡し協議。27日調査終了。

第5節　整理作業の経緯

整理作業は，平成21・22年度に実施した。大まかな整理作業及び報告書作成作業の経緯は次の通りである。

平成21年度・・水洗い・注記

平成22年度・・水洗い・注記・接合・復元・実測・編集

1月報告書作成指導委員会　中村次長他3名

1月報告書作成検討委員会　山下所長他8名



現地指導の様子



記者発表の様子



現地説明会の様子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

下鶴遺跡は，伊佐市大口下殿字下鶴に所在し，羽月川右岸の標高約171ｍの河岸段丘に立地する。遺跡のすぐ横を流れる羽月川は川内川の支流の１つで，遺跡の南300ｍの地点で川内川に合流する。この合流地点は，明治年間に発行された地図によると現在よりも北側にあり，戦後大規模な河川改修が行われて現在に至っていることがわかる。

遺跡の所在する伊佐市は，鹿児島市から北へ約75㎞の本県北部に位置する市で，2008年（平成20年）11月１日に大口市と伊佐郡菱刈町が合併して発足した。伊佐米の名で知られる県内屈指の米どころであり，金の産出で世界でも有数の高品位を誇る菱刈鉱山がある市でもある。市の北側は，熊本県水俣市と人吉市，東側は宮崎県えびの市に接する県境の市で，大口盆地に位置している。

この大口盆地は，伊佐盆地あるいは伊佐平野とも呼ばれ，西部，北部，東部を肥薩火山群，南部を北薩火山群に囲まれ，盆地面積は140㎢で鹿児島県で最も広い盆地である。大口盆地は，内陸の盆地であるため冬場は最低気温が氷点下になることも多く，「鹿児島県の北海道」とも言われている。

盆地北部から南部へ羽月川が縦断し，盆地南部を東から西へ横断する川内川に合流する。盆地周囲には河岸段丘が分布しており，本遺跡もこの河岸段丘上に位置している。南部にはシラス台地がみられる。

地質は，基盤となる四万十層群の上に肥薩火山群や北薩火山群の噴出物が重なり，更に約33万年前に噴出した加久藤カルデラの溶結凝灰岩や，約25,000年前に姶良カルデラから噴出した入戸火砕流によるシラスが積み重なっている。

伊佐市及び周辺の特徴としては，黒曜石の原産地が複数確認されている点であろう。日東や上青木といった地域が著名であるが，各河川においても転石の採集が可能であり，当遺跡に接する羽月川も例外ではない。

第２節　歴史的環境

伊佐市の考古学研究の第一歩は，早稲田大学文学部史学科を卒業後旧制大口中学に赴任した木村幹夫氏と，九州大学医学部を卒業し旧大口市で開業していた寺師見國氏によって開始された。両氏の活動により，早くから伊佐市では，旧石器時代から歴史時代に至るまでの様々な時代の遺跡が発見されている。以下に，時代ごとの概要を述べる。

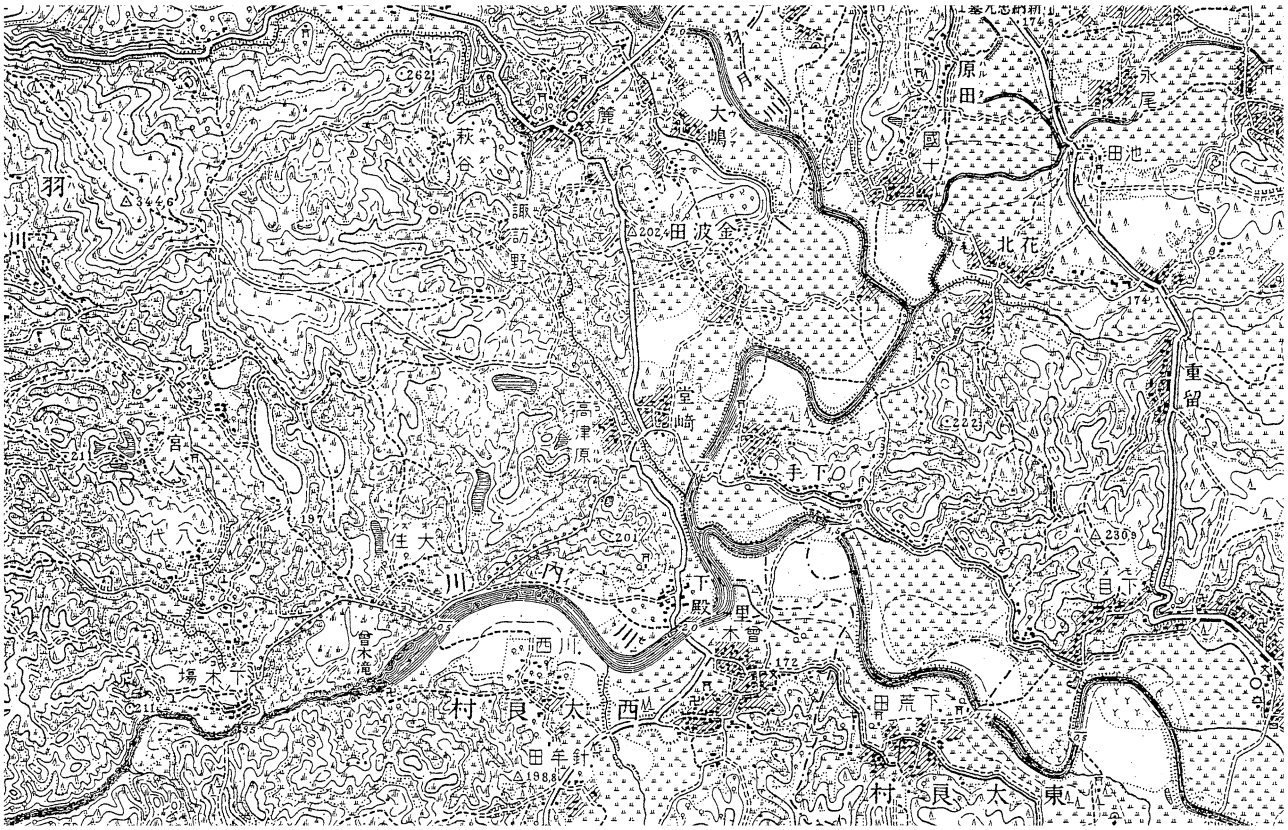
旧石器時代では，小野原遺跡・日東遺跡・郡山遺跡・戸切谷遺跡からナイフ形石器が，松尾山遺跡・新開原遺跡から細石器が発見されている。

縄文時代草創期の遺跡は，市内ではまだ発見されていない。縄文時代早期の遺跡には，手向山式土器の標式遺跡である手向山遺跡や，ラッパ状に開く口縁部と円筒状の胴部に撚糸文系の文様（Ａ式）や貝殻文系の文様（Ｂ式）を施文する塞ノ神式土器の標式遺跡である塞ノ神遺跡がある。前期の遺跡として，以前日勝山式土器と呼ばれていた曽畑式土器第三類が出土した日勝山遺跡がある。中期の遺跡には，並木式土器の標式遺跡である並木遺跡がある。並木式土器は，九州東部をのぞくほぼ九州全域に分布しており，胎土に滑石粉末を含むものが多い。松美堂遺跡では，春日式土器や阿高式土器，船元系土器などの土器とともに，独鈷状石器が出土している。後期の遺跡では，下殿瀬ノ上遺跡がある。大牟田遺跡は下殿瀬ノ上遺跡の山手に隣接する遺跡で，土器だまりから多数の西平式土器が出土するとともに，サメ歯状の石製垂飾品や注口土器が出土している。晩期の遺跡では，下殿瀬ノ上遺跡では埋設土器が検出されている。

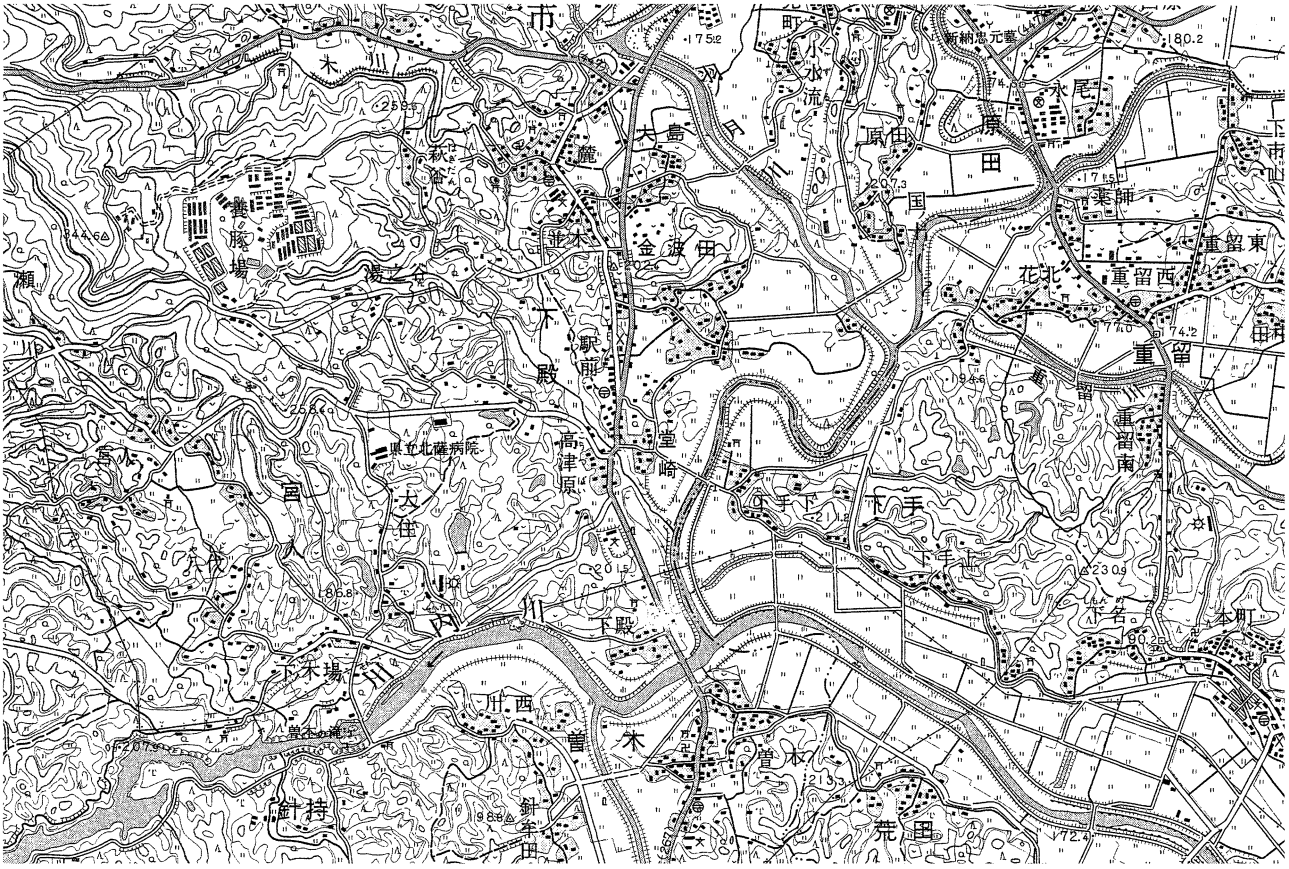
弥生時代の遺跡には，竪穴住居跡３軒と土坑墓が23基検出された前畑遺跡がある。土坑墓は，その形態などから，箱式木棺墓・組合箱式木棺墓・組合箱式石棺墓・土坑墓の４形態が考えられている。他にも里町遺跡・大住遺跡・焼山遺跡があり，重弧文と呼ばれる半円文で飾られた免田式土器が出土している。また，石庖丁や磨製石鏃，抉入石斧などが市内から見つかっている。

古墳時代の遺跡には，平田遺跡や瀬ノ上遺跡，地下式板石積石室墓が34基確認されて市の史跡公園となっている大住遺跡，90基以上の地下式板石積石室墓が現地保存されている焼山遺跡，３体の人骨が発見された諏訪野地下式横穴墓などがある。また，島巡遺跡・米置遺跡・山下遺跡からは，竪穴住居跡が１軒ずつ検出されている。

古代に伊佐・大口という地名は見られないが，『続日本紀』天平勝宝７年（755年）５月の条に「大隅国菱刈村浮浪九百卅余人言す。郡家を建てんことを欲すと。詔して之を許す。」とあり，奈良時代に菱刈郡は成立したことが分かっている。10世紀前半につくられた『倭名類聚抄』には，平安時代の菱刈郡は「比志加里」と記され，羽野・亡野・大水・菱刈の４郷からなるとある。この頃の遺跡として，島巡遺跡や永峰遺跡，山下遺跡があり，土師器の甕・椀・坏や黒色土器，須恵器などが出土している。津栗野遺跡・岡野遺跡・大迫遺跡では，人形・馬形の形代を須恵器など入れて埋納しており祭祀遺跡として考えられている。この地域は県内でも多くの蔵骨器が



明治37年



第２図　周辺地形の移り変わり（１／50,000）

平成４年

発見されており，仏教文化が比較的浸透していたことが推察される。また，北薩地域に集中する傾向が窺える土師器の高台に体部と異なる赤色粘土を用いた土師器が，多数出土している大峰遺跡がある。さらに，岡野古窯跡群では須恵器窯跡が４基確認されている。

中世前半になると，菱刈郡は太良院（本城・馬越・湯之尾・曽木）と牛屎院（牛山・入山・羽月・平泉・山野）の両院となった。ほぼ旧大口市にあたる地域は牛屎氏により支配される牛屎院に，ほぼ旧菱刈町にあたる地域は菱刈氏により支配される太良院になる。ほぼ全域が島津荘となった薩摩国にあって，牛屎院・太良院両院とも島津荘「寄郡」となっている。

中世前半の遺跡には，新平田遺跡・馬場Ａ遺跡・年ノ宮遺跡がある。新平田遺跡では，30棟の掘立柱建物跡・７軒の方形竪穴建物跡・柱列などが発見されている。遺物として12世紀後半から14世紀代の輸入陶磁器と，須恵器，常滑焼，樺万丈窯産の須恵器に類似した甕・壺，滑石製石鍋，硯，馬具・釘等の鉄製品が出土している。馬場Ａ遺跡からは，掘立柱建物跡や土坑等など発見されている。出土遺物として，土師器，須恵器，青磁・青花などの12世紀から16世紀代の輸入磁器，東播磨系の中世須恵器，擂鉢，石臼，滑石製石鍋などが出土している。この二つの遺跡は，平泉城跡と時期が一部重なることから，平泉城を中心に形成された集落跡ではないかとも推測されている。中世後半になると，牛屎院を永く支配していた牛屎氏は，菱刈氏･相良氏に追われ飯野（現えびの市）に移り，牛山城（大口城）は菱刈氏・相良氏の根拠地となり，島津氏と勢力を争っていた。しかし，文禄12(1569)年牛山城を攻撃した島津氏に対し，菱刈氏・相良氏は降伏した。降伏した菱刈氏は，島津氏により旧領地のうち太良城周辺と曽木のみを与えられが，その後伊集院神殿に移された。牛屎院では，地頭職に新納忠元が任命され，以後島津氏による統治が江戸末期まで行われた。新納忠元が地頭職に就いた頃から，大口という地名が文献等に表れるようになった。中世後半の遺跡で代表的なものには城館跡が挙げられるが，発掘された城館跡としては，平泉城跡が知られる。標高240ｍの３か所の曲輪を中心に，標高230～235ｍの６か所の曲輪からなり，西側から北側と東側に空堀が配され，南側は崖という多郭式中世山城の形態である。また，井戸や曲輪頂上部の平坦面からは９棟の掘立柱建物跡や13基以上の炉跡などが検出されている。出土遺物として，青花や白磁の碗・皿など14世紀から16世紀にかけての輸入陶磁器が多く出土している。また，城館跡として，牛山（大口）城・山野城・羽月城・大平城・高殿城・曽木城・太良城・馬越城・湯之尾城・入山（市山）城などがある。中世末～近世の遺跡として，関白陣跡がある。関白陣・天堂ケ尾を取り囲むように全長３㎞を超える土塁・石塁・溝が発見されている。土塁・石塁は，高さ1.2ｍ・幅２ｍほどあり，平行して深さ50～60㎝の溝がある。この関白陣跡は，豊臣秀吉が島津平定のあと，川内泰平寺から引き揚げる途中に野営し，当時の大口地頭新納忠元と会見した陣営跡と伝えられる場所である。この頃，牛屎院・祁答院地方を合わせた地域として伊佐という地名が見られる。近世においては，広徳寺跡古墓と王城古墓がある。ともに18世紀頃の墓から人骨と古銭（寛永通宝）が出土している。外城制度（天明４［1784］年，郷へ改称）に関連するものとして，地頭仮屋，境目番所・辺路番所・麑役所・馬改所などがあった。また，野町と呼ばれる商人の居住区も存在した。交通網に目を向けると，陸上交通では，主要街道の一つである大口筋（加治木町・霧島市横川町・伊佐市を経て水俣に至る)が通っていた。伊佐市は熊本(肥後)・宮崎（日向）と接しているため，他国境目番所・辺路番所が多く設けられていた。河川交通では，川内川を利用した舟運がある。特に，藩に納める上納米を運ぶために，羽月下木場（曽木の滝下流）から宮之城河原までの舟路がある。この舟路は，陸路で宮之城まで上納米を運ぶ農民たちの苦労を軽減しようと，西原八幡宮宮司であった堀之内良眼坊が藩の許可と資金を得て，天保13（1842）年，肥後の石工14人をはじめ，藩内の石工・人夫を採用し川内川の川浚え等の工事に着手したものである。大小の岩石を崩して取り除き，約４里の川筋を浚え，下木場から宮之城河原までの６里を自由に川舟が往来できるようにした。また，市内の川内川各所には，湯之尾渡し・本城渡し・森山渡し・下手の水天渡し・鈴之瀬の渡し・下殿の渡しなど渡し舟があった。

近代の遺構として，曽木発電所遺構がある。この発電所は，明治42（1900）年，日窒コンツェルン創始者で我が国の代表的な経済人である野口遵により建設されたものである。発電所の建物は，幅43m・奥行20m・高さ19m・総面積2207.7㎡の２階建一部３階建であり，明治時代建造のレンガ造りとしては鹿児島県で唯一現存する建造物である。当時は，熊本県水俣のカーバイト工場（現チッソ㈱水俣製造所）に電力を供給していた。

以上のほかにも近世・近代の遺跡があるが，この時期の調査事例は全般的に少なく，明らかでない部分が多い。

大口市郷土史編さん委員会　1999 『大口市郷土誌』（上巻）二刷
大口市郷土史編さん委員会　2006 『大口市の埋蔵文化財』
鹿児島県土木部河川課　1992 『鹿児島の河川・海岸』
菱刈町郷土誌編纂委員会　2007 『菱刈町郷土誌』（改訂版）



第３図　周辺遺跡地図（34が下鶴遺跡）

表１　遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	備考
1	手向山遺跡	伊佐市大口鳥巣手向山	手向山式土器の標式遺跡
2	殿後遺跡	伊佐市大口白木殿後	平成９年度分布調査
3	萩谷遺跡	伊佐市大口羽月萩谷	平成９年度分布調査
4	羽月城跡	伊佐市大口下殿野頸	別称「藤尾城」「高山城」
5	徳ケ島遺跡	伊佐市大口大島字長徳ケ島	平成元年度分布調査
6	長ミトイ遺跡	伊佐市大口大島字長ミトイ	平成元年度分布調査
7	後牟田遺跡	伊佐市大口大島字後牟田	平成元年度分布調査
8	堤原遺跡	伊佐市大口下殿堤原	
9	湯ノ谷遺跡	伊佐市大口羽月湯ノ谷	平成９年度分布調査
10	鯰崎遺跡	伊佐市大口下殿字鯰崎	
11	引田遺跡	伊佐市大口金波田字引田	
12	池ノ山遺跡	伊佐市大口羽月池ノ山	平成９年度分布調査
13	椿城跡	伊佐市大口宮人	中世城館
14	上尾下遺跡	伊佐市大口宮人上尾下シ	大口市埋文報（23）
15	中牟田遺跡	伊佐市大口宮人中牟田	平成10年度分布調査
16	下尾下遺跡	伊佐市大口宮人下尾下シ	平成９年度分布調査，大口市埋文報（23）
17	長迫遺跡	伊佐市大口宮人長迫	平成10年度分布調査
18	矢楯川遺跡	伊佐市大口宮人矢楯川	平成10年度分布調査
19	タツタ下遺跡	伊佐市大口大住タツタ下	
20	大住Ｂ遺跡	伊佐市大口宮人大住	平成７年度分布調査
21	並木遺跡	伊佐市大口羽月下木場並木	並木式土器の標式遺跡
22	大住遺跡	伊佐市大口宮人大住	平成７年度分布調査
23	大牟田遺跡	伊佐市大口下殿大牟田	大口市埋文報（24）
24	下殿瀬ノ上遺跡	伊佐市大口下殿瀬ノ上	伊佐市埋文報（１）
25	高津原遺跡	伊佐市大口下殿字高津原	
26	高田遺跡	伊佐市大口下殿字高田	大口市埋文報（19）
27	梅木遺跡	伊佐市大口下殿字梅木	大口市埋文報（19）
28	浜場遺跡	伊佐市大口羽月高津原浜場	
29	焼山遺跡	伊佐市大口下殿焼山	県文化財調査報告書（６）
30	山下遺跡	伊佐市大口下殿山下	
31	高殿城跡	伊佐市大口下殿山下	別称「小鷹城」
32	権現原遺跡	伊佐市大口下殿権現原	
33	下ノ原Ｂ遺跡	伊佐市大口下殿下ノ原	県埋文セ報（137）
34	下鶴遺跡	伊佐市大口下殿下鶴	平成18年度分布調査，本報告
35	下ノ原Ａ遺跡	伊佐市大口下殿下ノ原	平成10年度分布調査で範囲拡大
36	鶴園遺跡	伊佐市大口曽木鶴園・竹下	平成10年度分布調査
37	曽木城跡	伊佐市大口曽木城添	別称「諏訪城」
38	荒瀬遺跡	伊佐市大口曽木荒瀬	平成10年度分布調査
39	富塚遺跡	伊佐市大口曽木富塚	平成３年度分布調査
40	原遺跡	伊佐市大口曽木原	平成３・10年度分布調査
41	米置遺跡	伊佐市大口曽木米置	大口市埋文報（17）
42	弓場ケ迫遺跡	伊佐市大口曽木弓場ケ迫	平成３年度分布調査
43	大脇山遺跡	伊佐市大口曽木大脇山	平成３・10年度分布調査
44	上岡遺跡	伊佐市大口曽木上岡	平成３年度分布調査
45	宮田原遺跡	伊佐市大口曽木宮田原	平成３年度分布調査
46	上部当遺跡	伊佐市大口針持上部当	平成３年度分布調査
47	並木口遺跡	伊佐市大口針牟田	平成２年度分布調査，大口市埋文報（18）

第３章　発掘調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

下鶴遺跡は，羽月川右岸の標高約171ｍの河岸段丘上に位置する。遺跡の東側を流れる羽月川は，川内川の支流の一つである。本遺跡の周辺遺跡には，焼山遺跡や梅木遺跡等があり，下流側に700ｍ程度の所には，同起因事業で発掘調査を実施した下ノ原Ｂ遺跡も所在する。

調査範囲は，国道に並行する農道（第17号支線道路）から河川にかけての東側一帯の40,400㎡である。調査区の設定は，工事計画図に示されているＲ－11とＲ－12とを直線で結びこれを南北軸とし，この交点に直行する軸を東西軸とした。これを基準に，10ｍ間隔に西から東へＡ，Ｂ，Ｃ，北から南へ１，２，３との調査区割りを設定した。

平成21年度の調査は，築堤部分で且つ下流側を優先的に実施し，築堤部分に関しては，調査終了部分を調査期間中３回に分けて引き渡した。調査期間は，５月８日から平成22年３月25日までの作業員実働165日間で，延べの作業員数は12,096名である。調査対象面積は40,400㎡で，この内38,800㎡を21年度に実施した。

平成22年度の調査は，６月１日から７月27日までの作業員実働31日間で，延べの作業員数は890名である。調査対象面積は1,600㎡である。

調査の方法は，各年共通で重機（バックホー）によって表土を除去した後に人力による発掘を進めた。遺物包含層は，遺跡西側では良好に認められたが，東側へ行くにしたがい残存状況は悪い。このため，各時期ごとの地形測量は難しいと判断し，Ⅵ層上面（Ah）で一括して測量することとした。

遺物包含層が残存している場合は，小破片は先に設定した調査区ごとに一括し，それ以外の遺物に関しては必要に応じて写真撮影等を実施した後にトータルステーションにより取上げた。その後，Ⅵ層上面において遺構精査を実施した。

２　遺構の認定と検出方法

精査作業を経て検出された遺構については，概ね２ｍ四方以上のものを竪穴状遺構と認定し，検出された順にＳＨの略記号を用いた。２ｍに満たないものは土坑として取り扱い，検出された順にＳＫの略記号を用いた。柱穴は，調査区全面に検出され，この取り扱いに関しては，３つの埋土パターンに分け，周辺に堆積している土壌の特徴などから，茶褐色粘質土がマダラ状に堆積しているものを近世，灰褐色土が堆積しやや砂質があるものを中世～近世，黒褐色土が堆積しているものを古墳～古代と時期を認定した。しかし，２つの異なる埋土パターンの柱穴で掘立柱建物跡が検出されるなどの矛盾もあり，時期判断に関しては再検討すべき点も残されている。

これらの遺構は，検出状況の写真撮影や図面作成を実施したあと掘り下げを行い，出土遺物の取上げや調査状況の撮影，土層断面実測等を遺構の残存状況に応じて行った。遺構の認定については，埋土の状況や床面の状態，遺構内遺物の出土状況などから判断していった。

なお，平成21年度及び平成22年度の調査において，地形測量及び遺構の図面や遺物出土状況図作成の一部について実測業務委託を実施している。

３　整理作業の方法

水洗いは平成21年度中に一部実施したが，大半は本年度中に実施した。水洗作業の方法は，土器や陶磁器類に関してはブラシを用いたが，黒曜石や石器類は超音波洗浄器を用いて進めていった。

注記は，注記記号「ＳＺ」を頭に，包含層資料は続けて「区」,「層」,「遺物番号」の順番で記入した。遺構は，「ＳＺ」に続いて「ＳＨ」や「ＳＫ」などの遺構記号を用いている。なお，爪先状の小破片に関しては注記を省略している。

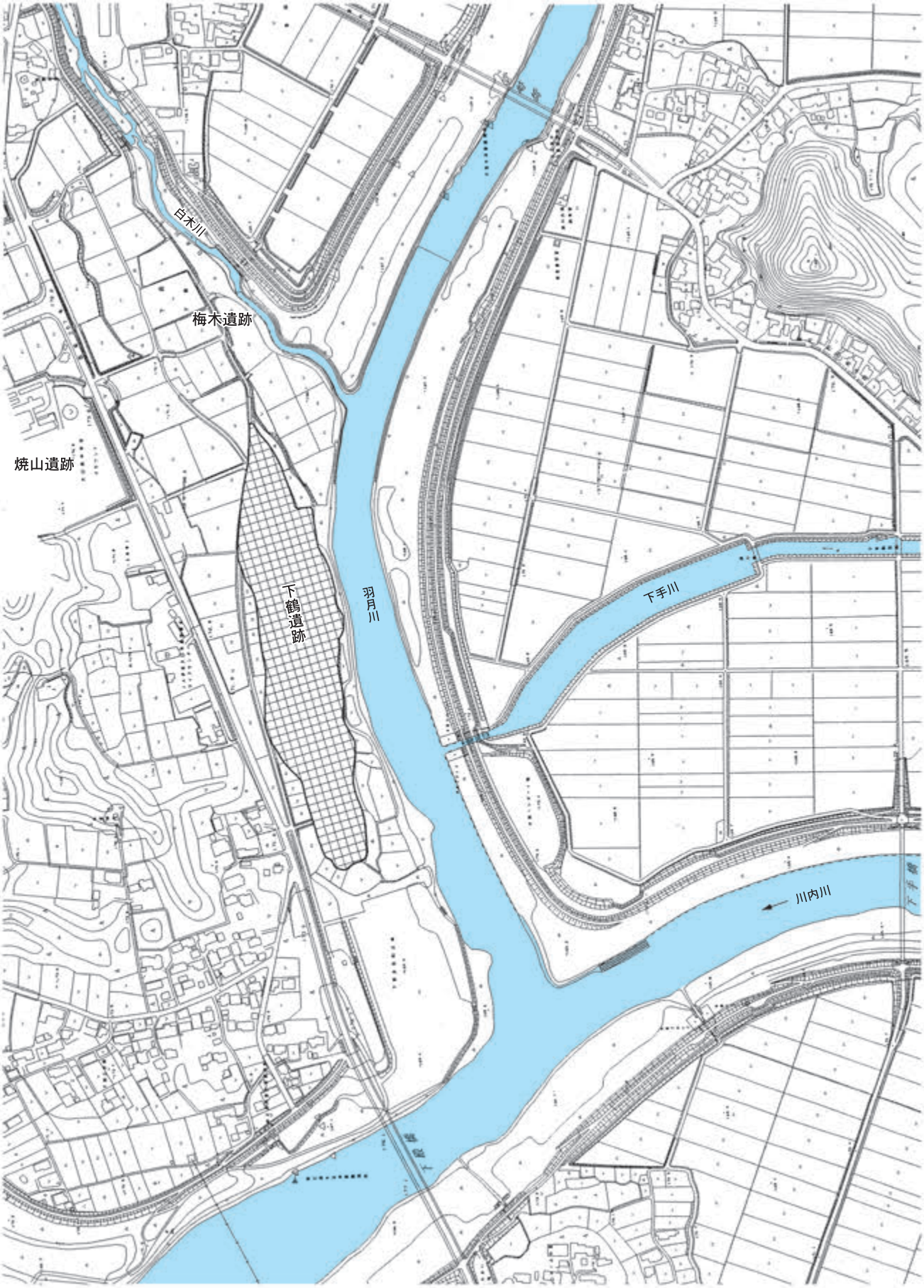
遺物の接合は，石器や剥片類は時間的な制約等から断念し，土器類，陶磁器・須恵器類に関してのみ行った。まず陶磁器や須恵器など比較的抽出が容易なものについて抜き出し，土器類と区別した。次に，それぞれ同一区内で接合作業を行い，徐々に接合範囲を広げていった。その間に，特徴的な遺物で抽出できるものに関しては適宜抜き出して接合を進めていった。

４　出土遺物の分類について

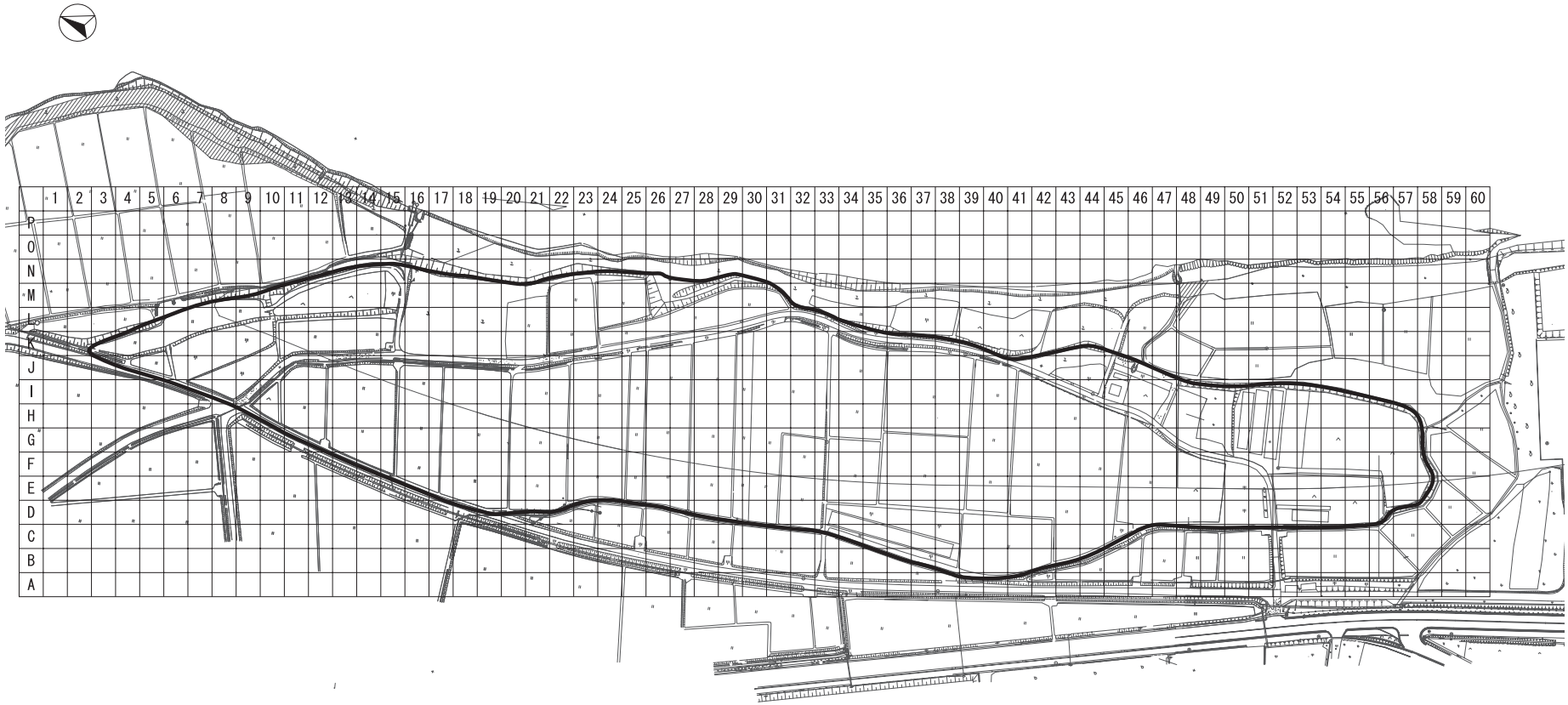
⑴土器類

層位において詳細は記すが，調査区は南北に長く層の堆積状況も南側と北側とでは大きく異なっている。また，遺物包含層の残存状況から，一部のエリアでⅡ層とⅣ層の区別が困難な場所があった。このため，土器に限らず多くの遺物は，整理作業の段階で形状等の特徴から時期を判断して分類を行った。分類は，各時代ごとに遺物を振り分けた後に実施し，細分可能な資料についてはこれを行い，詳細は各時代ごとに掲載した。時代間の混乱を避けるために，縄文時代の土器を第１群，弥生時代を第２群，弥生時代終末から古墳時代を第３群，古代を第４群，中世から近世を第５群と便宜上呼びわけ，時代ごとに細分類を実施している。

なお，細分類の視点は各時代ごとに異なっている。



第４図　下鶴遺跡周辺図



（1グリッド10m×10m）

第５図　グリッド配置図

⑵石器類

ア石器

石器の分類は，器種ごとに細分が可能なものについては細分を行い，剥片・チップ類は石材分類は行ったが細分は行っていない。これらの概要は表３に示した。二次加工剥片に関しては，器種不明の資料もここに分類されている。石器組成は表４に示している。

イ石材

石器の石材は，石材産地を推定できる黒曜石や質感などで分類できる安山岩については細分化を試みた。それ以外の石材に関しては，特徴のあるものについてそれぞれの石器の中で述べている。これらの石材ごとの出土点数及び出土率は表４に示した。伊佐市周辺には，黒曜石の原産地が複数確認されており，また，周辺の河川からも転礫を容易に採取することが出来る。遺跡内出土の黒曜石を見てみると，やはり日東系や桑ノ木津留系が多数を占めており，地理的特徴を色濃く反映している。

第２節　層序

下鶴遺跡の基本土層・遺物包含層は，以下のように整理した。遺跡中心部分はⅥ層上面ないしはⅧ層まで削平を受け，各時代の遺構配置図にアカホヤ消失ラインとして破線で示した。また，遺跡北側に行くに従って，Ⅱ層からⅧ層は薄くなり，多くの層は見られなくなる。アカホヤ火山灰層についても，南側では遺構内において埋土や貼床など何らかの形で堆積していたが，遺跡北側の各時代の遺構内には，ほとんど混在していない。また，Ⅷ層以下に関しても変化が見られる。北側では砂礫を多く含むが，南側では粘質で砂礫は含まれない。

Ⅰa層	現耕作土	
Ⅰb層	灰茶褐色土	
Ⅱ層	黒色土	
Ⅲ層	茶褐色土	谷部に堆積
Ⅳ層	黒褐色土	
Ⅴ層	黄茶褐色土	
Ⅵ層	黄橙色火山灰	北側堆積なし
Ⅶ層	黒褐色粘質土	北側堆積なし
Ⅷ層	黄茶褐色土	北側は砂質で砂礫を含み，南側では粘質
Ⅸ層	河床砂礫層	

第６図　基本土層図



Ｈ・Ｉ－49区



Ｅ－24区



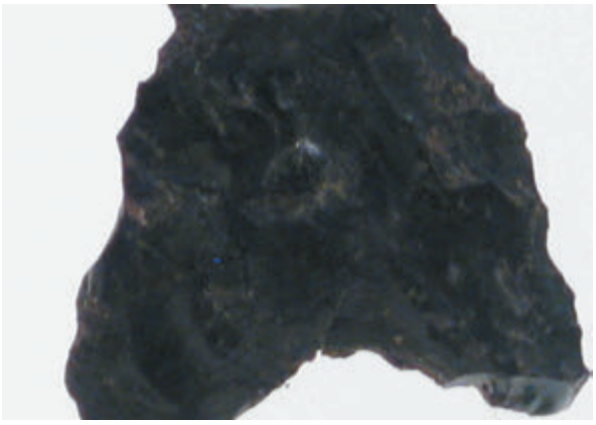
Ｋ・Ｌ－15区

表２　石器分類表

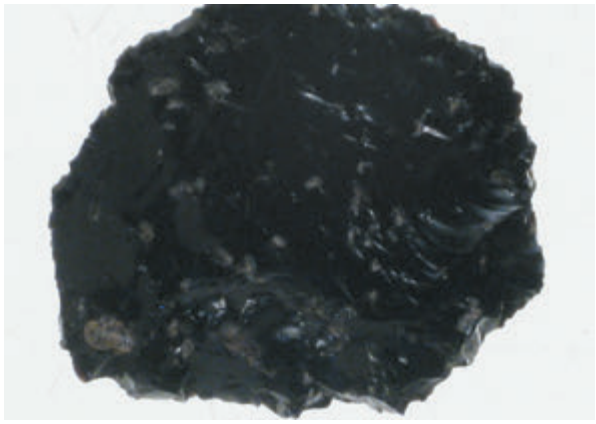
器種	分類		概要
剥片石器	石鏃		剥片を素材として両側縁部に両面から押圧剥離を施してある小型から中型の三角形状の石器群を石鏃とした。
		Ⅰ	全体の形状がほぼ三角形
		Ⅱ	全体の形状がほぼ五角形
		Ⅲ	全体の形状がほぼ丸形
		a	全体の形状が正三角形を呈するもの
		b	全体の形状が二等辺三角形を呈するもの
		c	全体の形状が二等辺三角形で，縦が幅の２倍以上の長さを呈するもの
			抉りの状況により
			１：平坦，２：浅い，３：深い，４：U字
	石匙		剥片を素材とし刃部及びつまみ部を作出し，つまみ部に着紐して携帯する石器群を石匙とした。
	スクレイパー		剥片の縁辺部などに二次調整を行い，刃部整形を施してあるものをスクレイパーとした。
	二次加工剥片		剥片の縁辺部などに二次調整を行い，刃部整形が認められないものを二次加工剥片とし，刃部整形が認められるもので一定の大きさを有する資料は礫器類に含めた。
		A	縦長の剥片の側辺部に加工があるもの。
		B	不定形の剥片の縁辺部に加工があるもの。
		C	剥片の下端部に調整がみられるもの。
		D	加工が複数の場所にみられるもの。
		E	鋭い先端をもった剥片で，先端をつくるような調整がみられるもの。
	サイドブレイド		縦長剥片を素材とし，剥片の長軸あるいは短軸の両端または一端を調整剥離や切断によって加工を施し，刃部に使用痕が見られる小型の石器をサイドブレイドとして分類した。
	微細剥離痕剥片		使用によって刃縁部に生じた微小剥離痕や線状痕などの痕跡があるものを微細剥離痕剥片とした。
	石錐		穿孔あるいは穿穴に使用された加工道具。つまみ部と棒状の錐部を有し，主要剥離面や礫皮面をつまみ部とするものや，欠損を有するものなどを包括した。
	楔形石器		ピエス・エスキーユとも称される。表面観は方形で，上縁端部及び下縁端部は直線的で平行に位置する。刃部断面観が凸レンズ状に鋭角をなし，基部には敲打面を有する。本石器を木の実や骨などにあて，敲石等で敲いて割るために使用したと想定される。
	擦切状石器		砂岩質の礫素材を使用する。刃縁部の片面側もしくは両面側に削痕を有する。磨製石斧等の素材を抽出するために，礫素材を擦り切り，分割するための道具と考えられる。
	異形石器		二次調整により整形された石器ではありながら，機能・用途が不明なものを異形石器と分類した。
石核			石器製品作出のため，剥片を採取した残存石材を本類に分類した。なお，剥離痕に顕著な使用痕等確認できる資料については，礫器に含めた。
		Ⅰ	自然面を有するもの。
		Ⅱ	自然面を有しないもの。
		a	周辺から中心に向かって剥ぐもの。
		b	分割により平坦な打面を形成した後，同一打面から剥いだもの。
		c	剥離方向に法則性が見いだせないもの。
		Ⅲ	原石の形状を残すもの。
礫石器	磨製石斧	Ⅰ	器厚が厚く，重量感がある。刃部は蛤の形態を有し，器形は長方形状を呈する。
		Ⅱ	Ⅰより小型で，刃部は蛤の形態を有する。基部が細く，刃部との境に肩を有し，器形がラケット状を呈する。
		Ⅲ	比較的小型で細長く加工されたものである。ノミ形石器と呼称されるタイプである。
	打製石斧	Ⅰ	明瞭な抉りを持たず，短冊形（長方形）の器形を呈する。器厚は比較的厚い。短冊形石斧と呼称。
		Ⅱ	明瞭な抉りを持たず，短冊形（長方形）の器形を呈する。Ⅰ類に類似するが，器厚が極薄く，より鋤に近似する。扁平石斧と呼称。
		Ⅲ	基部と刃部を境界作る抉り部を持ち，ラケット状を呈する。有肩石斧と呼称。
	礫器類	Ⅰ	素材剥片の両側縁部に刃部調整が施され，柳葉状の器形を呈する。
		Ⅱ	素材剥片の下縁部に刃部調整が施され，横長長楕円（長方形）状の器形を呈する。
		Ⅲ	素材剥片の一辺に刃部調整が施され，器形は三角形状を呈する。刃部整形は直線的である。
		Ⅳ	長方形状の素材剥片の接しない２側縁部に刃部調整が施される。
		Ⅴ	上面観が円形を呈しており，周縁部に調整を施し，基部及び刃部を作出する。ラウンドスクレイパーとも呼称される。
	磨石 敲石 磨敲石	Ⅰa	比較的小礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し，敲打痕は不明瞭である。
		Ⅰb	比較的小礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面を有し，平坦面や側縁に明瞭な敲打痕が見られる。
		Ⅱa	大きめな礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面のみを有し，敲打痕は不明瞭である。
		Ⅱb	大きめな礫を素材とする。全面的もしくは部分的に磨面を有し，平坦面や側縁に明瞭な敲打痕が見られる。
		Ⅲ	上記Ⅰ及びⅡ類以外の資料である。上面観が長楕円形状もしくは不定形状を呈し，用途が敲石と考えられる資料群である。
	石皿・台石		石皿は大礫を利用し，磨面・凹面を有する。磨石とセット関係にあり，木の実を磨り潰したりするためと考えられる。台石も大礫を利用し，敲打痕を有する。敲石とセット関係にあり，石器製作時に石材を据え付けるためと考えられる。
	砥石		砂岩質の礫素材を利用し，主として長軸方向に削痕が縦走し，深い凹面を有することが多い。
	軽石製品		軽石を素材とする。穿孔や凹み等加工痕が残される。
	石錘		左右１対の抉り部を有する。抉り部以外の側面に敲打痕等は確認できない。
装飾品			管玉・勾玉・水晶玉やガラスの小玉など。
石製品			上記石器に該当せず，利器としての用途が不明なもの。

表３　石材分類表

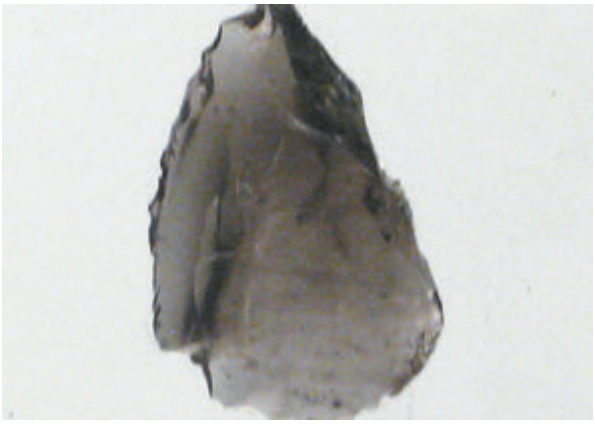
器種	分類	概要
黒曜石	Ⅰ	不純物を多く含み，漆黒で光を通さないものを包括した。薩摩川内市樋脇町上牛鼻，いちき串木野市平木場，いちき串木野市宇都等の原産地資料に類似する。
	Ⅱ	光を通し，不純物を大量に含むものを総括した。鹿児島市の三船，伊佐市大口平出水の日東，小川内五女木，錦江町の長谷等の原産地資料に類似する。
	Ⅲ	飴色～黒色を基調とし，不純物をほとんど含まない良質のものを包括した。えびの市の桑ノ木津留，伊佐市大口の上青木の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類似するが細分を行うことはできなかった。
	Ⅳ	黒色で不純物を全く含まない良質のものを包括した。佐賀県伊万里市腰岳産の資料に類似するが，一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系のものも含まれる。
	Ⅴ	青灰色で不純物の少ないものを包括した。針尾中町や長崎県佐世保市東浜，淀姫等西北九州の原産地資料に類似するが，原産地不明の一群も含まれる。
	Ⅵ	不純物をあまり含まないオリーブ灰色ものを包括した。霧島系の資料に類似するが原産地不明の一群も含まれる。
安山岩	Ⅰ	不純物が少なく，基質はやや滑らかでガラス質に富む質感を呈するものと，ざらついた質感を呈するもので黒灰色を呈するものを包括した。サヌカイトに類似する。
	Ⅱ	輝石や石英，角閃石を多く含み，基質はややざらついた質感を呈するもの。一般的な安山岩。
蛇紋岩等		蛇紋岩はぬめっとした肌触りを有し，光沢がある。石材不明資料中，蛇紋岩に類似した資料も含めた。
頁岩		泥や粘土の固結した岩石で，平行な平面で割れる傾向がある。黒色のものが多いが，褐色系の色のものもある。非常に細粒で，肉眼では粒子の識別が出来ないものが多い。粒度均質。さびが付着するのも特徴である。
砂岩		砂粒・石英粒が集合して固まった堆積岩の一種。触ると粉粒感が強いものを含めた。
粘板岩		極微小な砂粒（泥粒）が集合して固まった堆積岩の一種。頁岩に似て層状を成すが，薄茶色～茶黄色を呈し，指で触ると粉が指頭に残るものを本類に含めた。
ホルンフェルス		硬質化が著しく，鉱物が相累なって帯状もしくは斑状を成すもの。ただし硬質化（もしくは珪質化）した頁岩は本類に含めず，頁岩に分類した。
無斑晶流紋岩		貫入した流紋岩が熱水作用を受けたもの。岩石中の鉄分が酸化して木目の模様が見えるため木目石と呼ばれる。天草砥石が有名。
軽石		黄白色で気泡を多く含む。軽石製品に利用されている。
めのう系		めのう・玉髄・石英・蛋白石・鉄石英・水晶・石英斑岩などを総称して本類に含めた。
チャート		珪酸を含み光沢感を有する。灰白色を呈する。



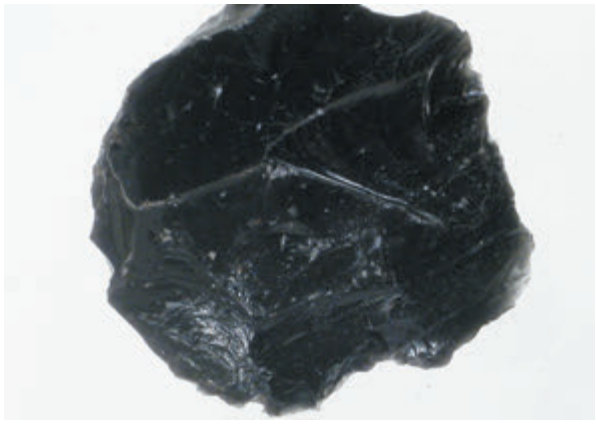
黒曜石Ⅰ



黒曜石Ⅱ



黒曜石Ⅲ



黒曜石Ⅳ



黒曜石Ⅴ



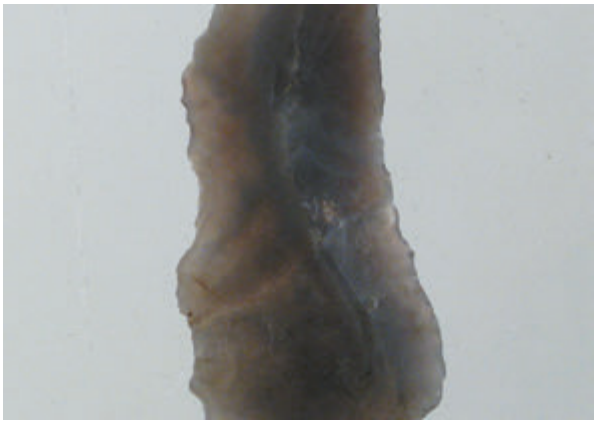
黒曜石Ⅵ



安山岩Ⅰ



安山岩Ⅱ



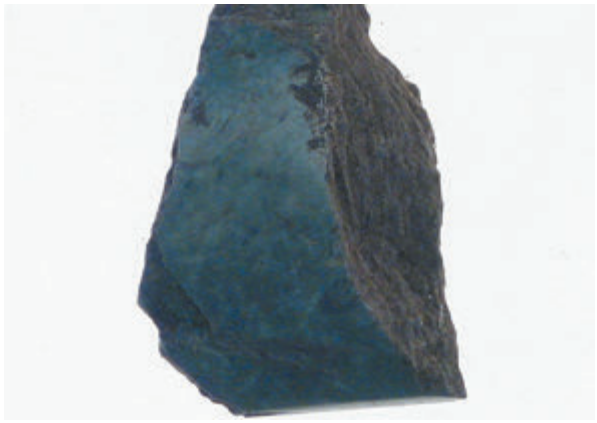
チャート



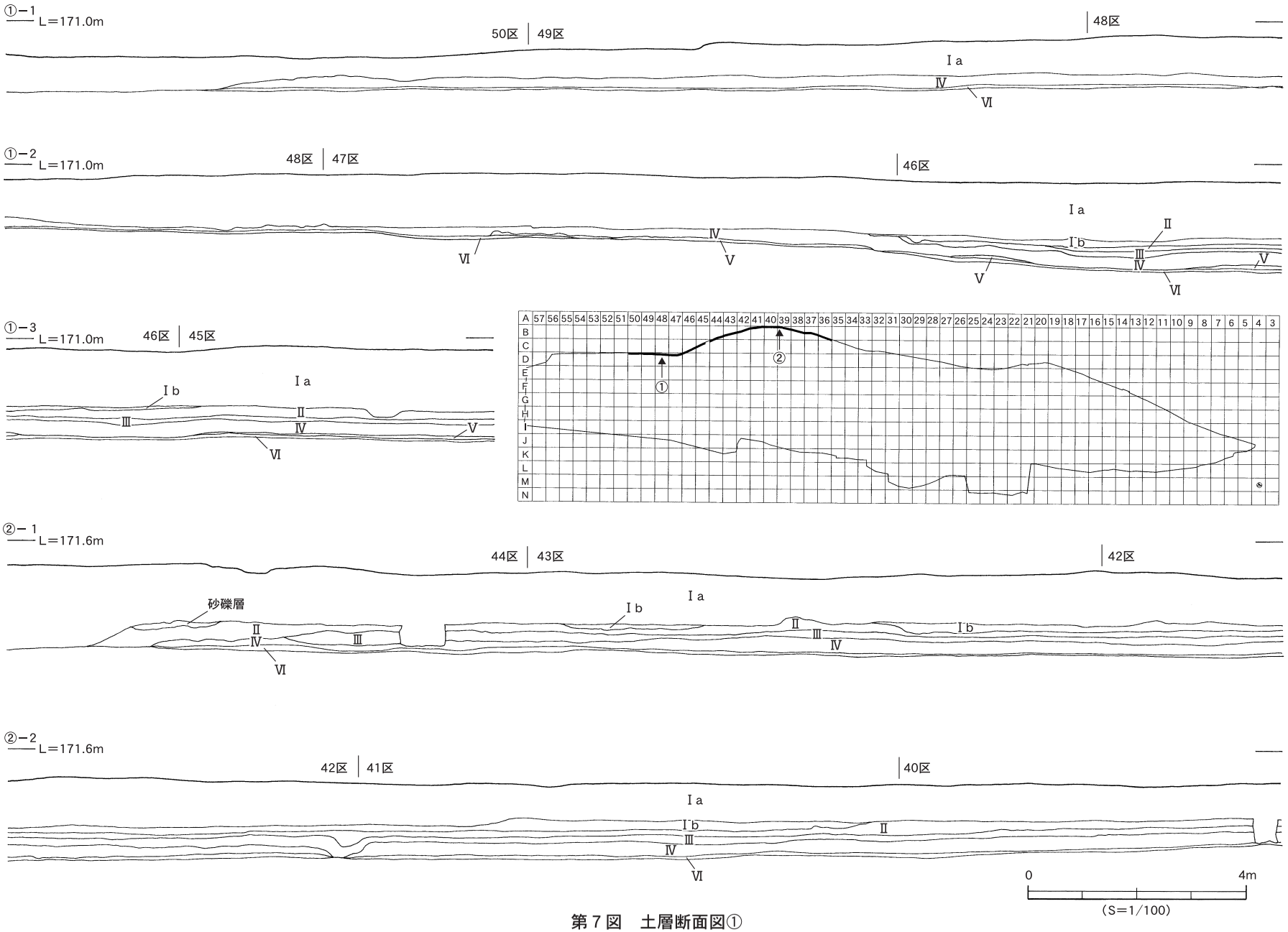
砂岩



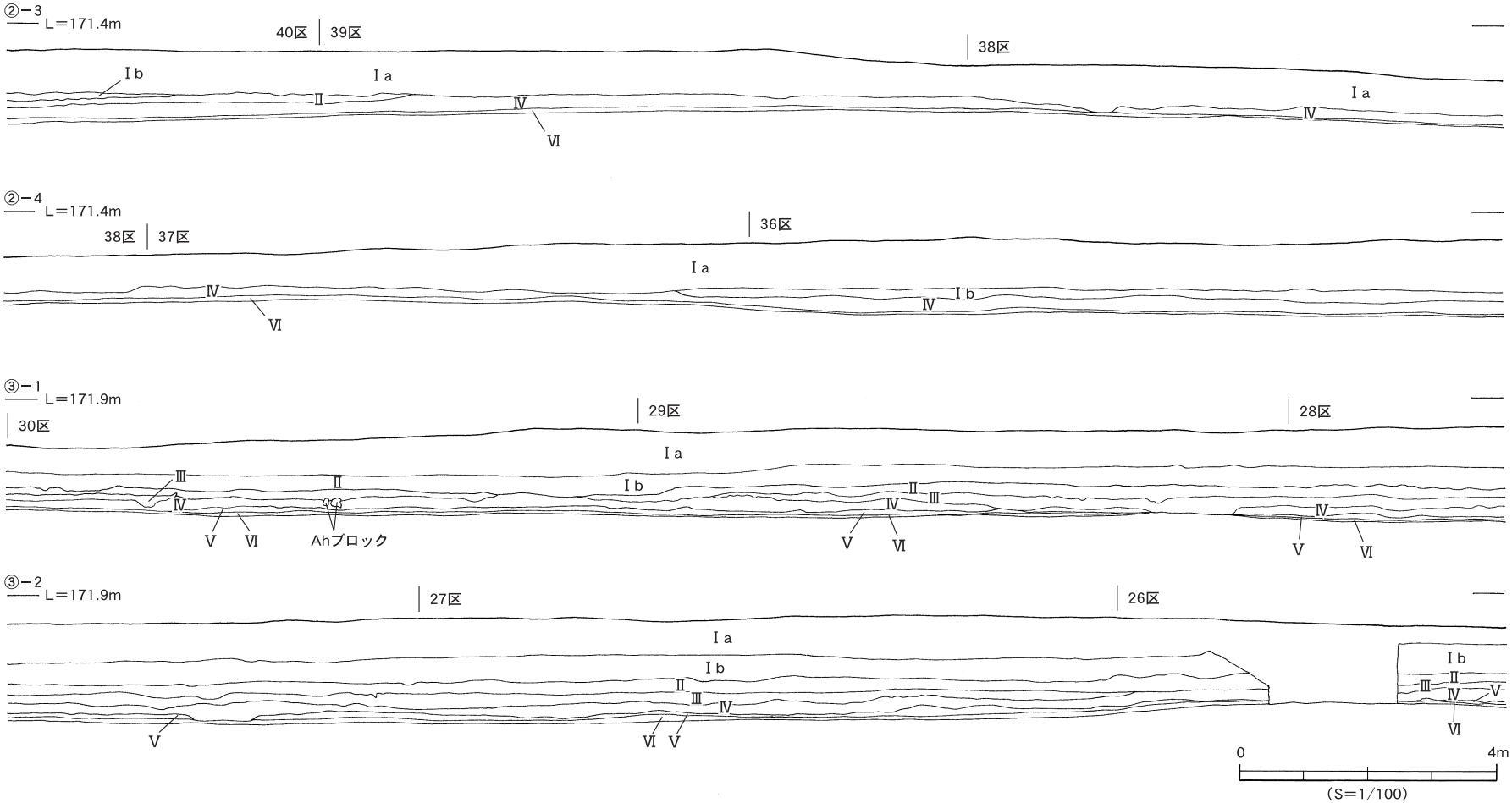
頁岩

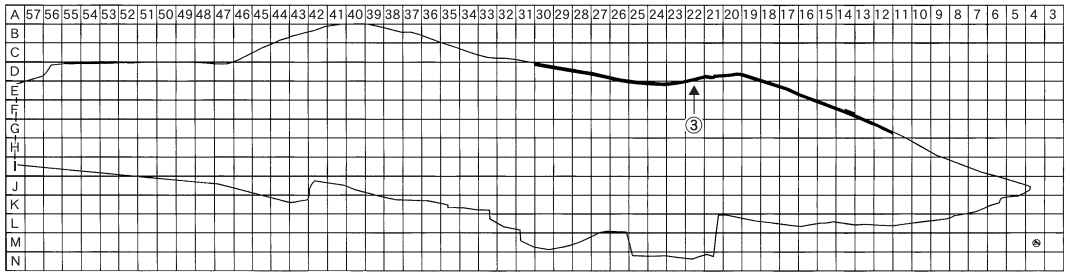


蛇蚊岩

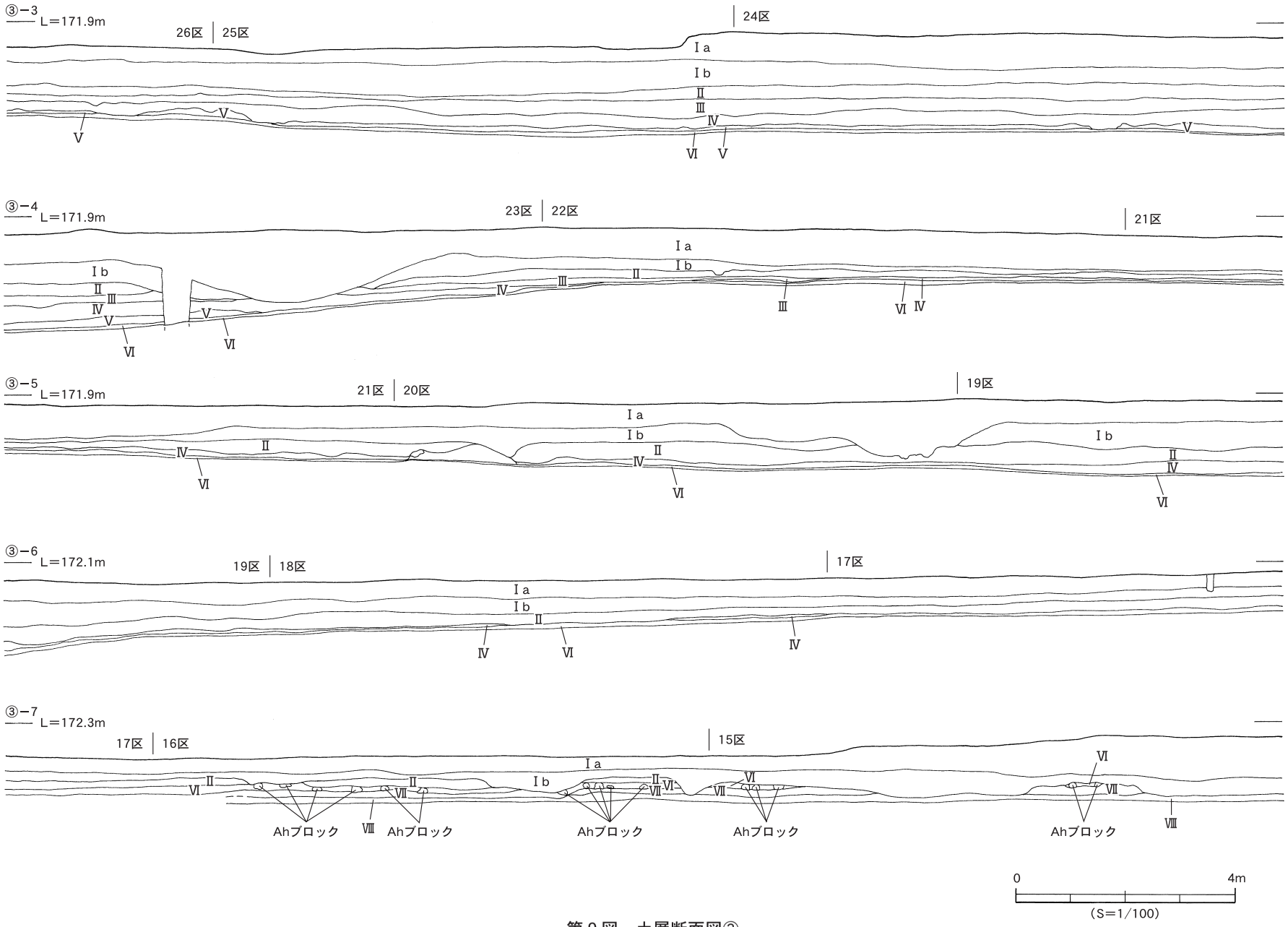

①−1
L=171.0m
50区
49区
48区
Ⅰa
Ⅳ
Ⅵ
①−2
L=171.0m
48区
47区
46区
Ⅰa
Ⅱ
Ⅰb
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
①−3
L=171.0m
46区
45区
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
A 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
①
②
②−1
L=171.6m
44区
43区
42区
砂礫層
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅵ
②−2
L=171.6m
42区
41区
40区
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅵ
0
4m
(S=1/100)

第７図　土層断面図①

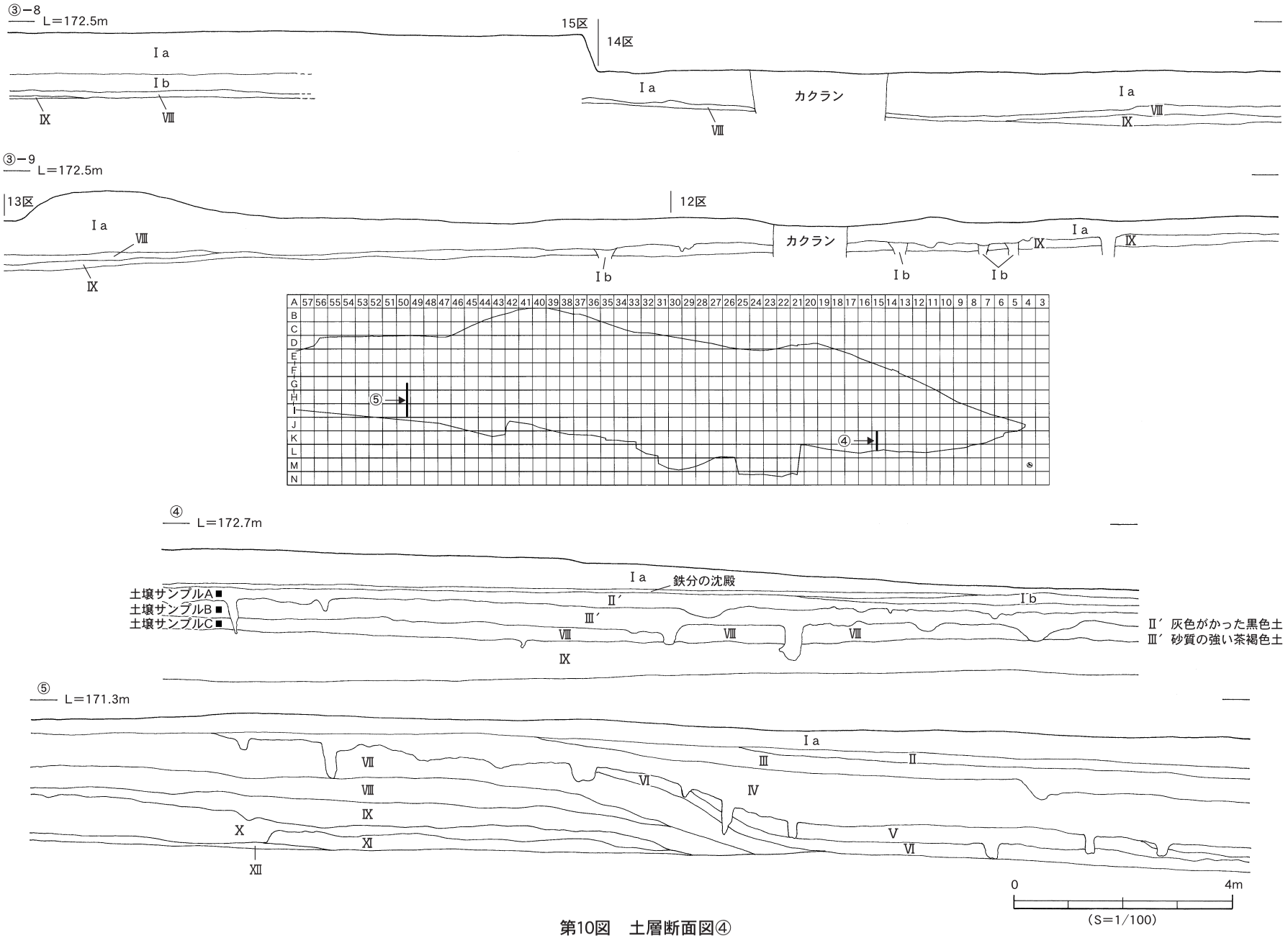

②−3
L=171.4m
40区
39区
38区
Ib
Ia
Ia
Ⅱ
Ⅳ
Ⅳ
Ⅵ
②−4
L=171.4m
38区
37区
36区
Ia
Ⅳ
Ⅵ
Ⅳ
Ib
③−1
L=171.9m
30区
29区
28区
Ia
Ⅲ
Ⅱ
Ⅳ
Ib
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ahブロック
Ⅴ
Ⅵ
Ⅴ
Ⅵ
③−2
L=171.9m
27区
26区
Ia
Ib
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ib
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅵ
Ⅴ
Ⅵ
0
4m
(S=1/100)


A 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
③

第８図　土層断面図②


③−3
L=171.9m
26区
25区
24区
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
③−4
L=171.9m
23区
22区
21区
③−5
L=171.9m
21区
20区
19区
③−6
L=172.1m
19区
18区
17区
③−7
L=172.3m
17区
16区
15区
Ⅶ
Ⅷ
Ahブロック
0
4m
(S=1/100)

第９図　土層断面図③


③−8
L=172.5m
15区
14区
Ⅰa
Ⅰb
Ⅸ
Ⅷ
カクラン
③−9
L=172.5m
13区
12区
④
L=172.7m
鉄分の沈殿
土壌サンプルA■
土壌サンプルB■
土壌サンプルC■
Ⅱ′ 灰色がかった黒色土
Ⅲ′ 砂質の強い茶褐色土
⑤
L=171.3m
0
4m
(S=1/100)

第10図　土層断面図④

第３節　調査の成果

１　縄文時代の調査

⑴調査の概要

縄文時代の調査は，主にⅣ層で行った。しかし，層位の節にて述べたとおり，遺跡北側と南側とでは層の堆積等が異なっている点や，Ⅱ層とⅣ層との区別が困難な箇所が多く，遺構検出面は北側では黄褐色砂礫層（Ⅷ層）上面，南側ではアカホヤ火山灰層（Ⅵ層）上面で行った。このため，遺物包含層すなわち生活面から下層で遺構を捉えていることとなる。

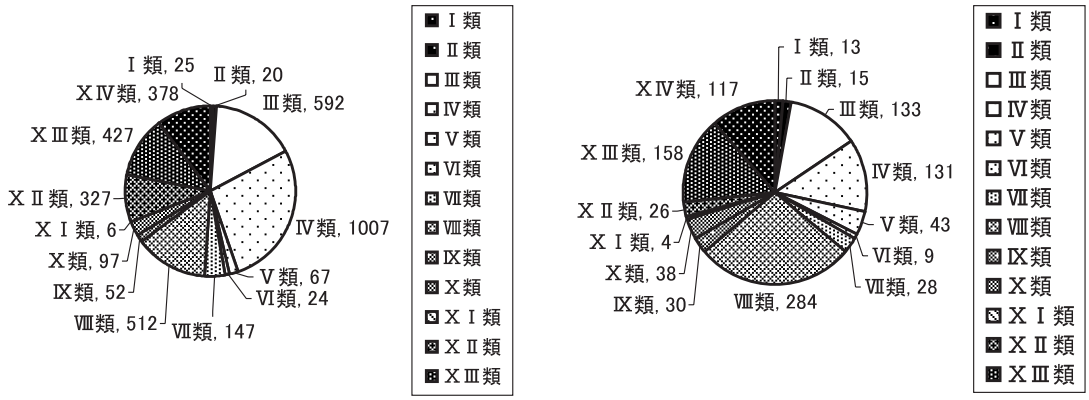
まず，遺構の調査は，各時代ほぼ共通であるが，検出状況の記録写真を撮影した後，ベルト設定ないし半裁するなどして埋土状況を確認しながら掘り下げを実施していった。竪穴住居跡や土坑における床面の判断は，埋土堆積状況の変化や硬化面等の把握に依った。遺構検出を弥生時代や古墳時代等と同一面で行ったために，検出当初から縄文時代の遺構として認識できたものは少ない。このため，時期認定は遺構内遺物の検討や埋土状況，周辺での遺物出土状況等を勘案して進めていった。その結果，第12～19図に示した遺構配置となった。調査対象地内中央からやや北側に遺構は多く検出されている。竪穴住居跡は４軒検出され，いずれも円形プランを基調とする。集石は１基が川側に近いＭ－22区で検出された。土坑は34基が検出された。その中でも，円形プランのもの（28号・29号・30号・31号・32号）がＪ－19区を中心に弧状を呈するようにも見える。また，土坑31号内からは完形品の鉢形土器が，土坑34号内からはＸ類がまとまって出土している。石皿片を含むものもある。なお，これらの個々の遺構の詳細については各遺構の中で述べている。

次に，包含層の調査は，層の堆積が明確な部分に関して，大型の破片等はトータルステーションによって出土地点の記録を行った。遺物包含層が削平あるいは不明瞭な地点に関しては，グリッド毎に一括取り上げを行っている。また，包含層が残存していても，小破片に関してはグリッド毎に一括取り上げを実施している。

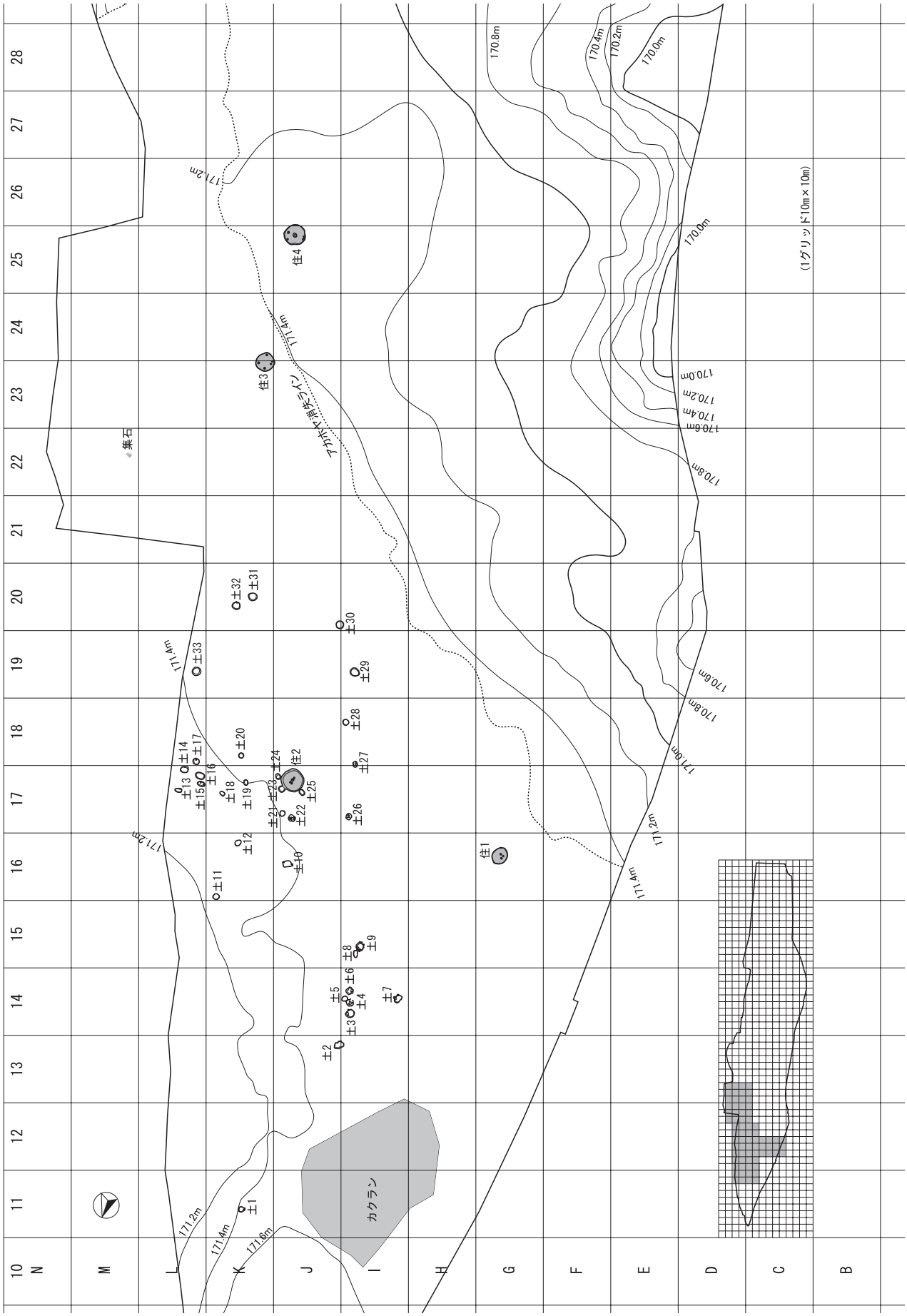
土器は，調査対象区のほぼ全域で出土しているが，16～23区に１つの集中が見られ，これはＥ～Ｇ区とＫ～Ｌ区にさらに分かれて見える。しかし，Ｈ～Ｊ区はアカホヤ火山灰層上面まで削平を受けており，両者は本来１つの集中箇所であったと思われる。また，Ⅰ類とした早期資料は川側に多く出土する傾向が見られる。なお，Ⅱ類とした滑石を多く混入する凹線文土器は，並木式土器に該当する。なお，並木式土器の標式遺跡である並木遺跡と下鶴遺跡は近い距離にある。

石器類では，多量の黒曜石製の製品，フレイク，チップが出土している。これは，伊佐市周辺に黒曜石の産地が複数見られ，また，下鶴遺跡前の羽月川や川内川などでも黒曜石の転礫を容易に採集できるという地理的な要因が現れたものであろう。分布は，土器類と類似しているが，特徴的な箇所として50～55区の黒曜石の集中が挙げられる。ここからは石器や石核，剥片類が多量に出土している。これは，石器製作を示すものであろう。土器類とほぼ同様の出土状況を呈していることから，これらの石器類は後期から晩期にかけてのものであると考えた。

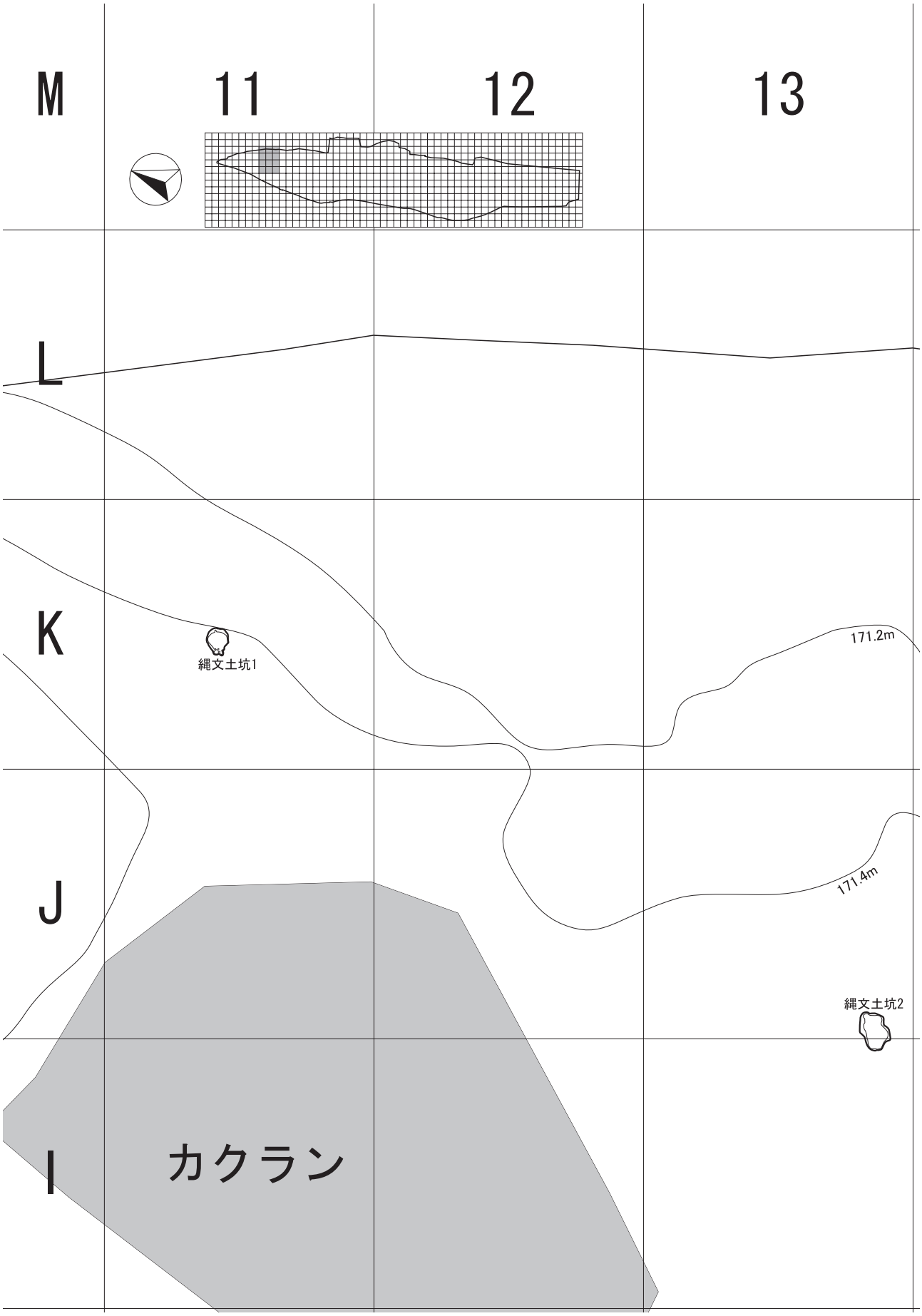
包含層における詳細な出土状況は，土器が第41・42図，石器類を第81～83図，石材ごとの出土状況は第84～86図に示した。



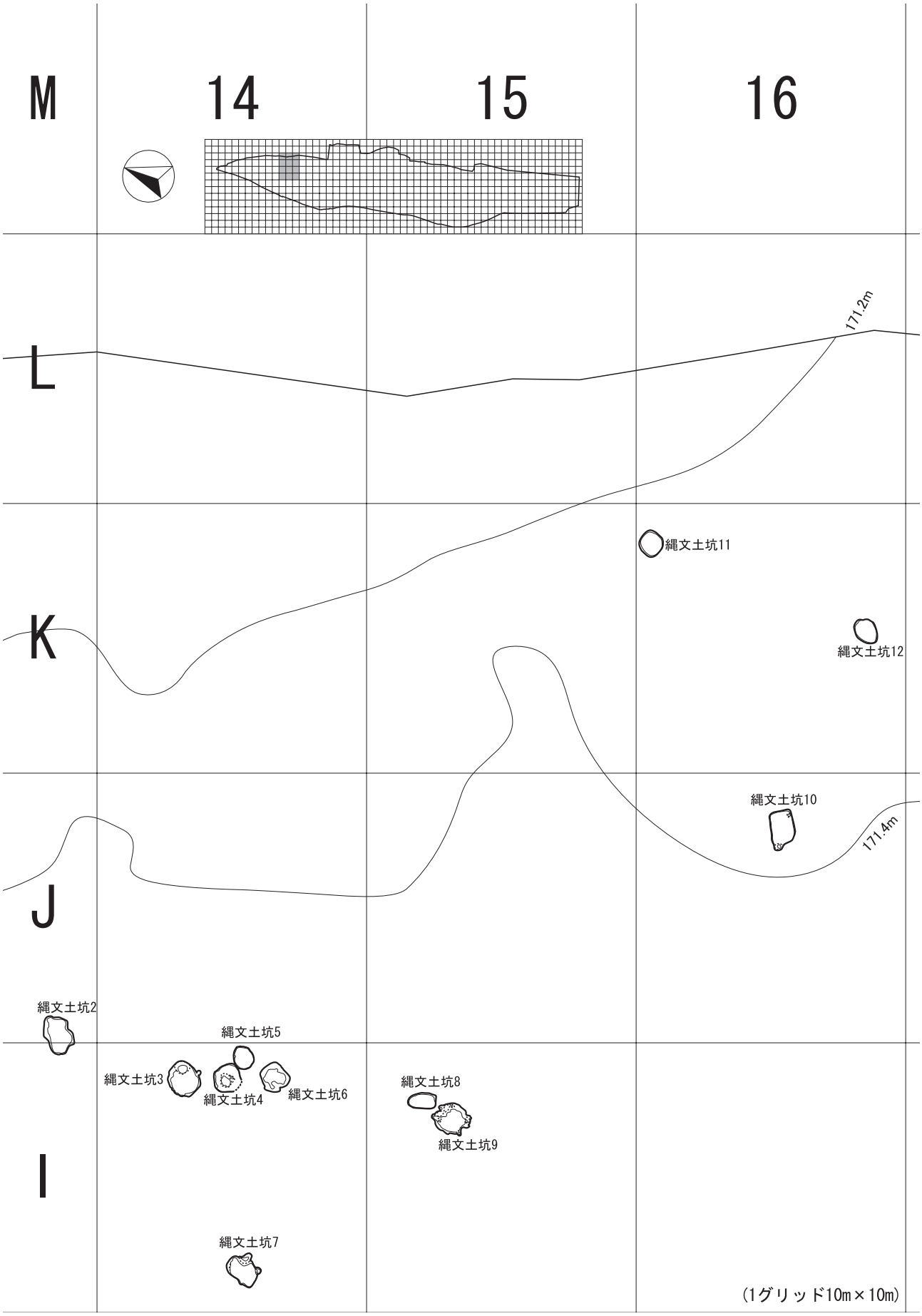
第11図　出土遺物割合図



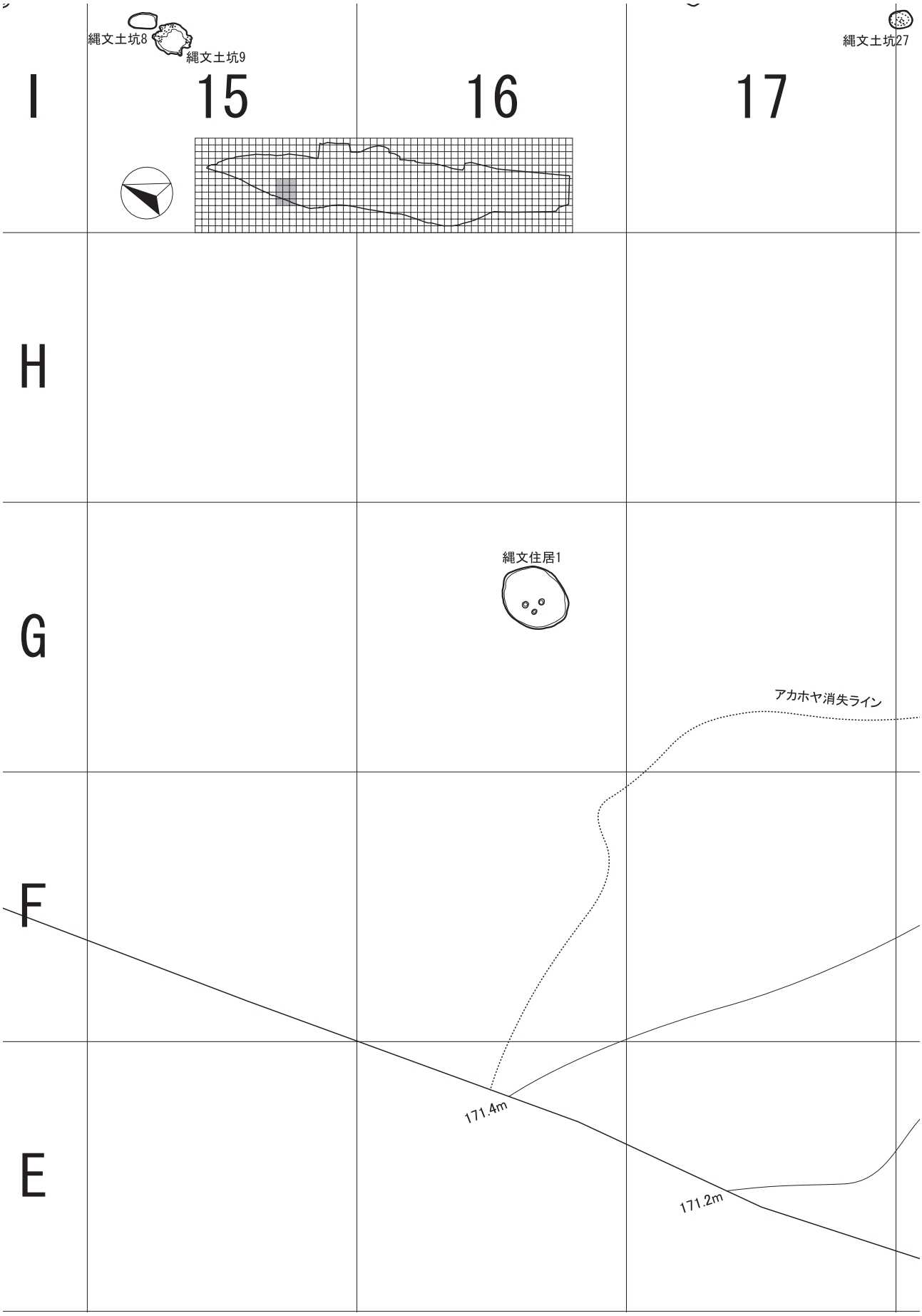
第12図　遺構配置図①



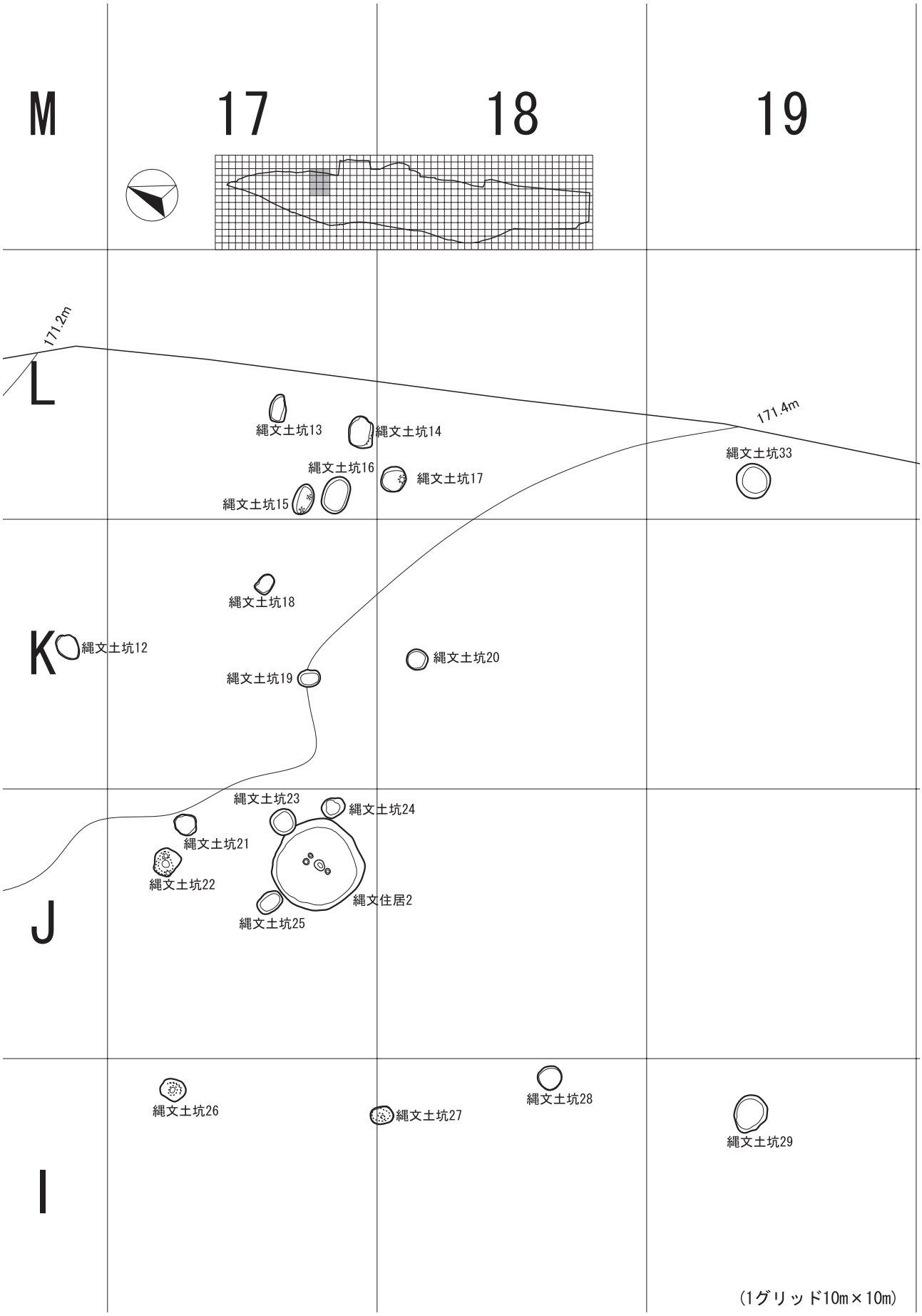
第13図　遺構配置図②


M
14
15
16
L
K
J
I
171.2m
171.4m
縄文土坑11
縄文土坑12
縄文土坑10
縄文土坑2
縄文土坑5
縄文土坑3
縄文土坑4
縄文土坑6
縄文土坑8
縄文土坑9
縄文土坑7
(1グリッド10m×10m)

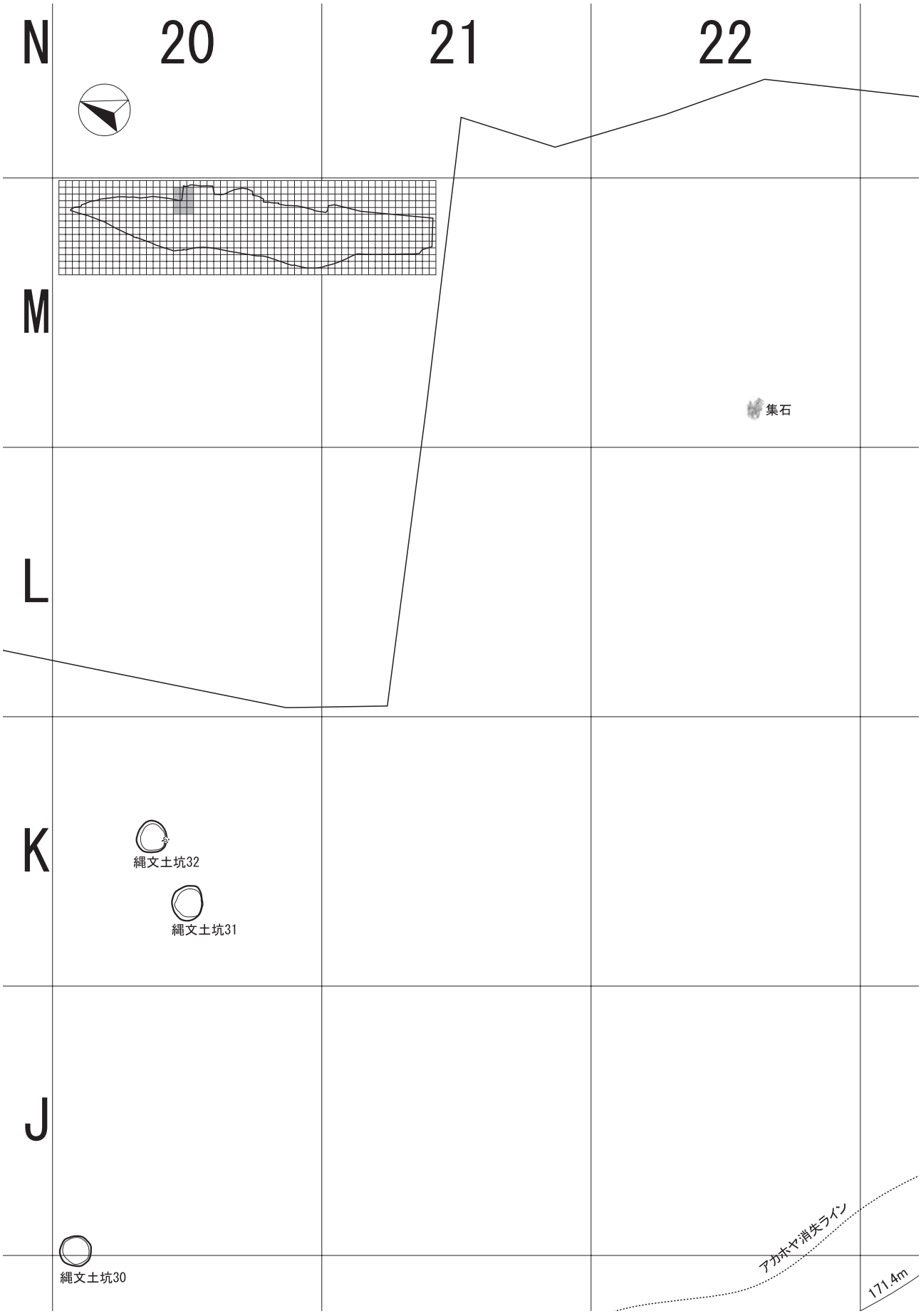
第14図　遺構配置図③


縄文土坑8
縄文土坑9
縄文土坑27
I
15
16
17
H
G
縄文住居1
アカホヤ消失ライン
F
171.4m
171.2m
E

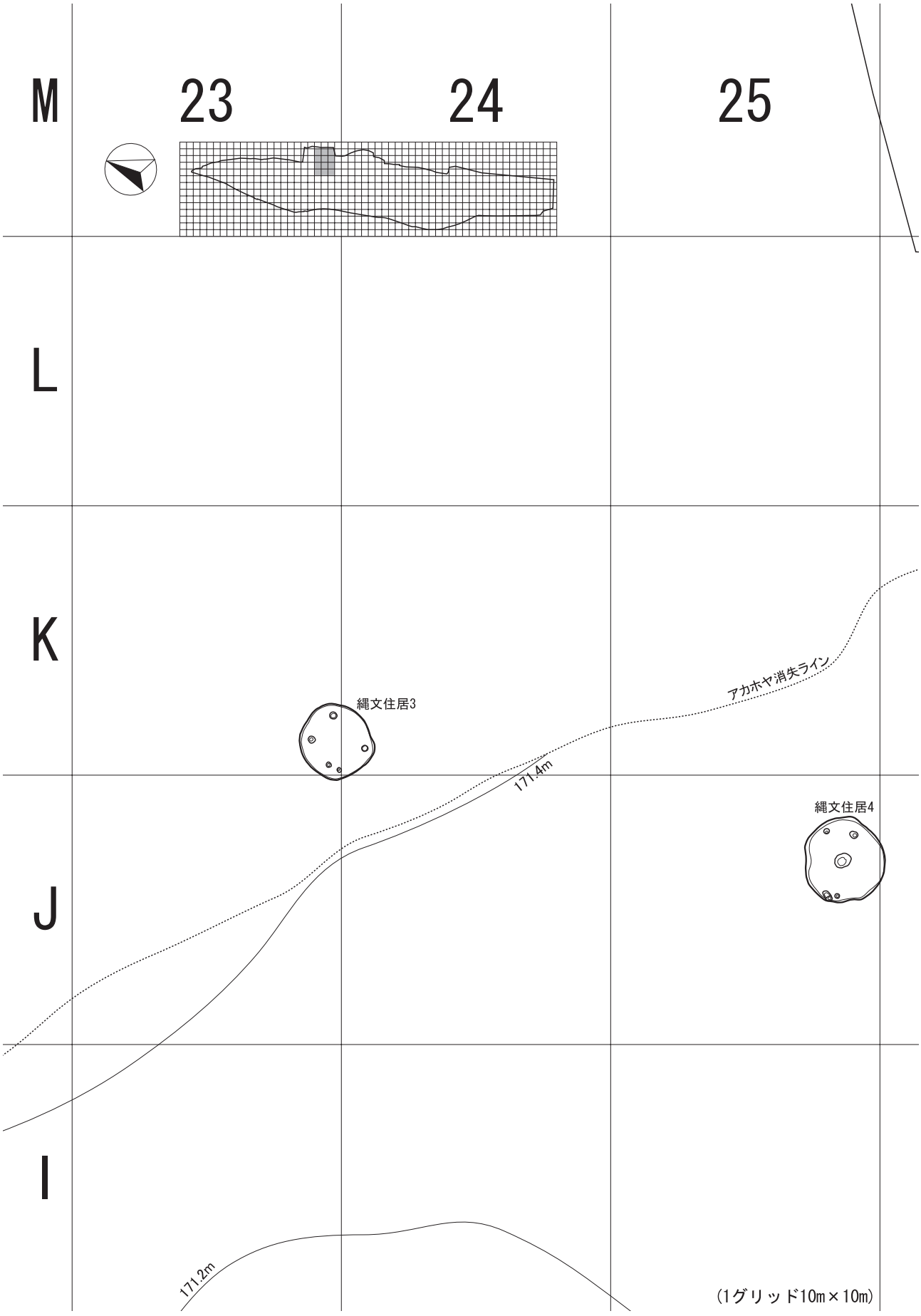
第15図　遺構配置図④


M
17
18
19
171.2m
L
縄文土坑13
縄文土坑14
縄文土坑16
縄文土坑17
縄文土坑15
171.4m
縄文土坑33
縄文土坑18
K
縄文土坑12
縄文土坑20
縄文土坑19
縄文土坑23
縄文土坑24
縄文土坑21
縄文土坑22
縄文住居2
縄文土坑25
J
縄文土坑26
縄文土坑27
縄文土坑28
縄文土坑29
I
(1グリッド10m×10m)

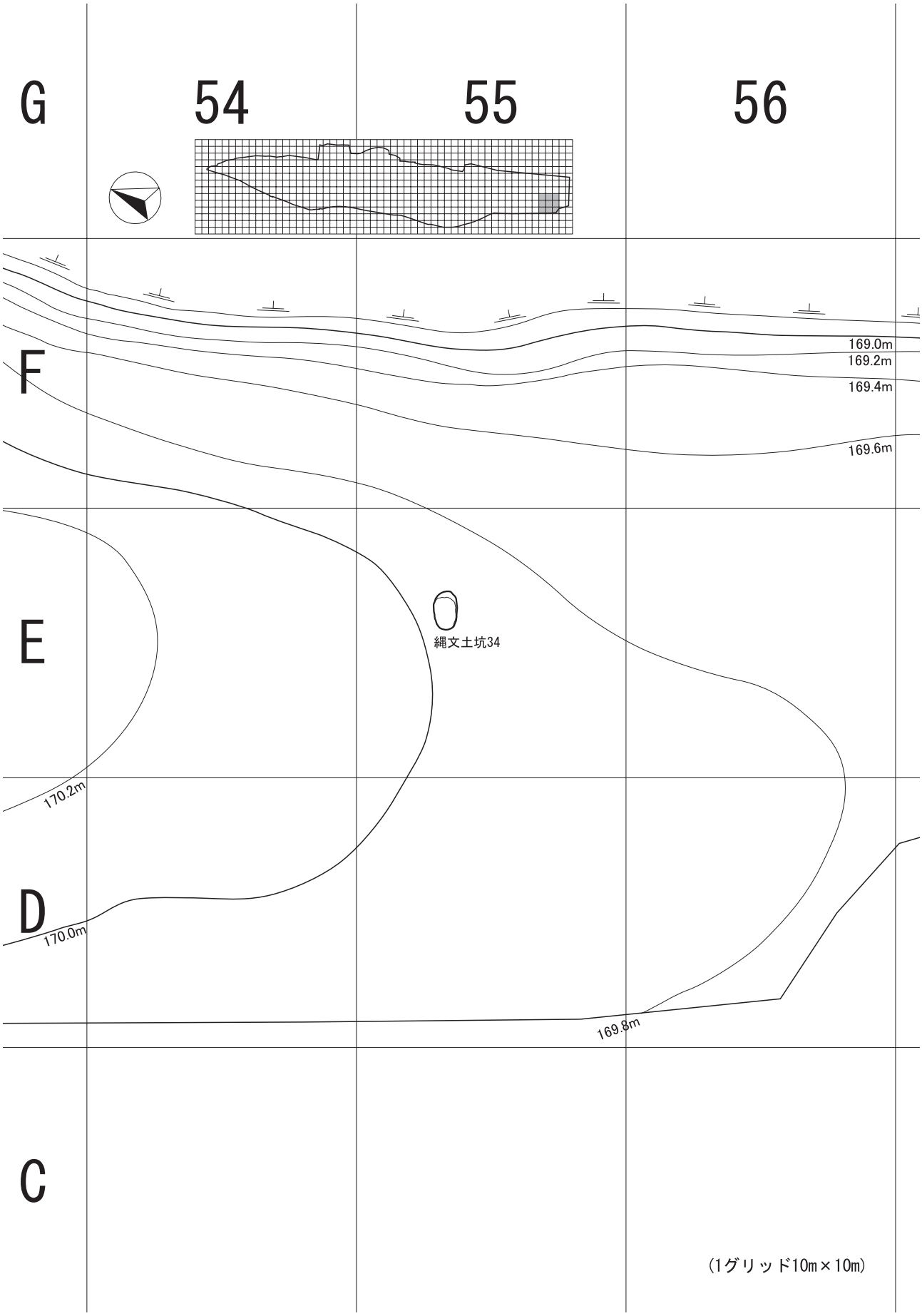
第16図　遺構配置図⑤



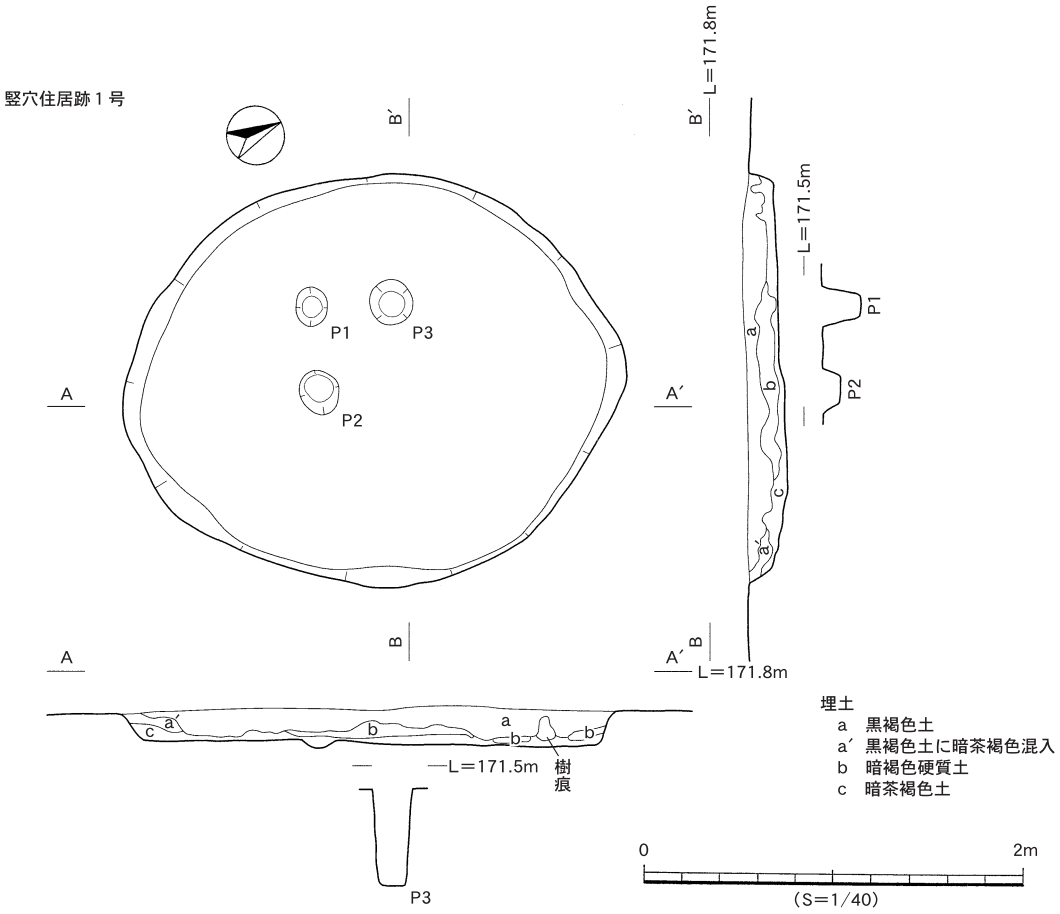
第17図　遺構配置図⑥


M
23
24
25
L
K
J
I
縄文住居3
縄文住居4
アカホヤ消失ライン
171.4m
171.2m
(1グリッド10m×10m)

第18図　遺構配置図⑦


G
54
55
56
F
E
D
C
169.0m
169.2m
169.4m
169.6m
縄文土坑34
170.2m
170.0m
169.8m
(1グリッド10m×10m)

第19図　遺構配置図⑧



第20図　竪穴住居跡１号

⑵遺構

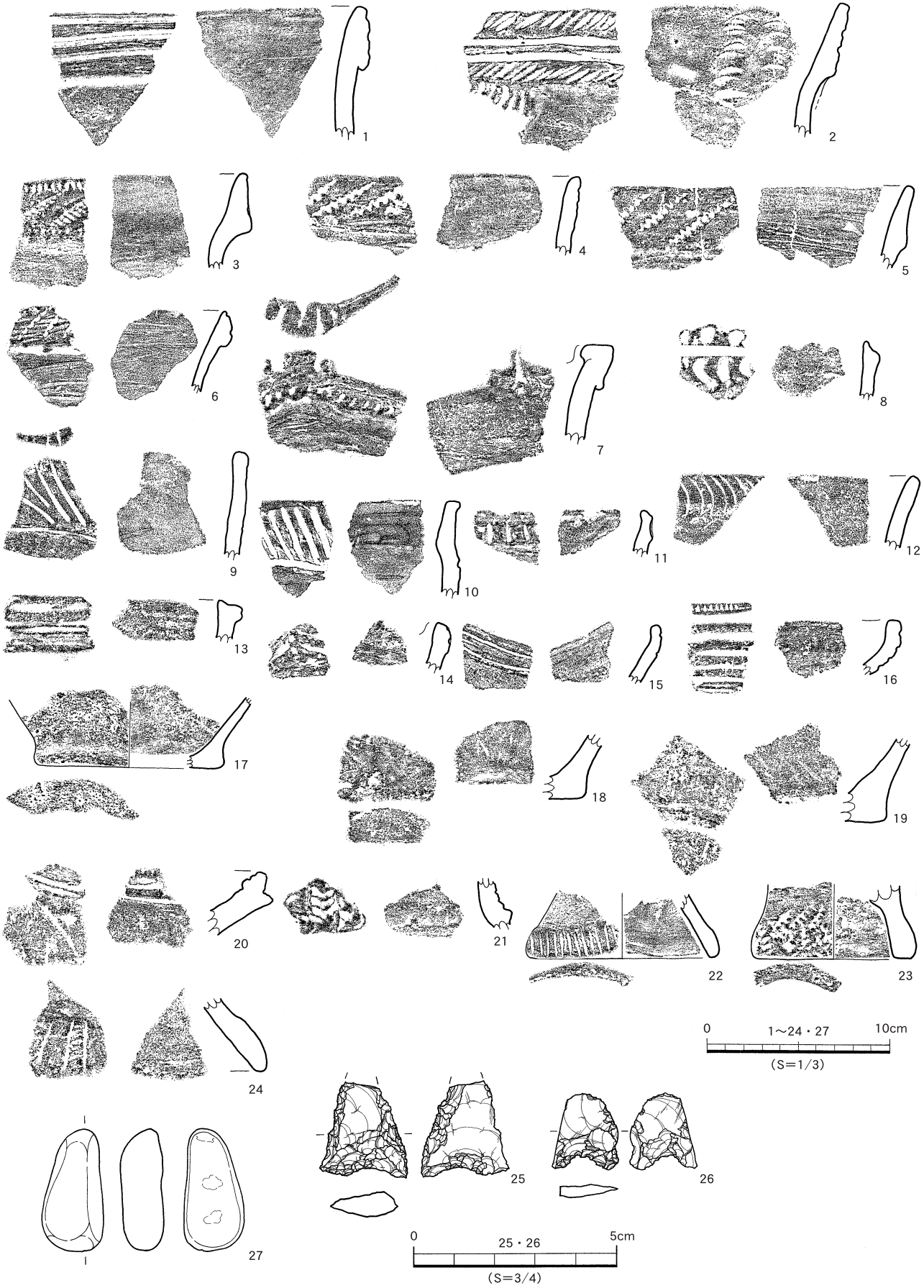
竪穴住居跡１号（第20図）

G－16区においてⅦ層上面で検出された。この周辺は，アカホヤ火山灰層まで削平を受けている部分が多く，検出時には時期判断は難しかった。検出時のプランは，長辺2.7m，短辺2.2mの略円形を呈す。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げていった。硬化面が部分的に見られるが，面としてのまとまりははっきりとしない。柱穴などの付帯施設は，床面検出と同時に３基の柱穴が確認された。これらの記録を行った後に，再度床面を掘り下げて付帯施設等の検出に努めたが，これ以外には見られなかった。

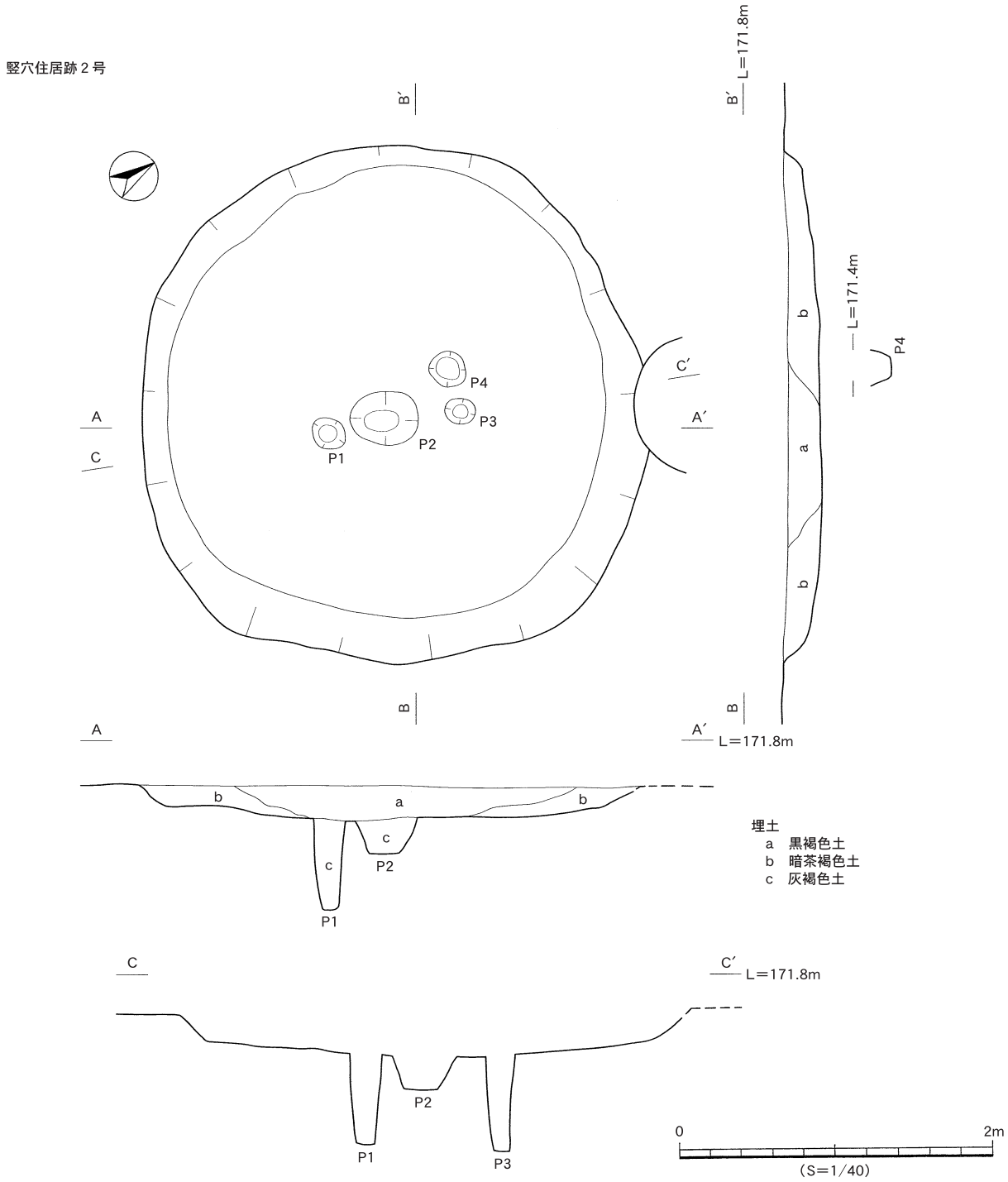
埋土中から出土した炭化物の放射性炭素年代測定をしたところ，1,845±20yrBPと結果が示されている。この結果は，調査における時期判断とは異なるが，遺構内遺物の時期判断からここに掲載した。

遺物は，埋土中から土器の小破片が多く出土している。完形品あるいは，埋設等の人為的な行為は確認できなかった。これらは，接合作業を経て，244点が出土し，この内27点を図化した。

１は，口縁部がわずかに外反して断面三角形状に肥厚する。肥厚した口縁部には，横位に沈線が施されている。沈線内には，微細な筋状の痕跡が見られ，棒状工具の端部の様相がうかがえる。２は肥厚した口縁部にキザミと沈線が施され，口縁部内面にも横位のキザミが縦に連続する。これは，波頂部に見られる特徴である。３～６は肥厚した口縁部に斜位の貝殻刺突文が施されるものである。３はさらにその上下に刺突文が見られる。７は口縁部がわずかに外反し，波頂部にはM字状の粘土紐貼付文が施される。その下位には粘土紐貼付文が横位に１条めぐらされ，キザミが施されている。８は太めの凹線文が施され，口唇部のキザミも凹点に近い。９～12は口縁部に細沈線が施されるものである。13～16はいわゆる磨消縄文土器の系統かと思われるが，小破片のためにはっきりとしない。17～19は底部片である。外面にはケズリ痕が残されている。20～24は台付皿形土器である。25・26は石鏃片である。両者共に剥片の形状を残しており，側辺部の加工が一部施されていない点から，未製品である可能性が考えられる。



第21図　竪穴住居跡１号・出土遺物



第22図　竪穴住居跡２号

竪穴住居跡２号（第22図）

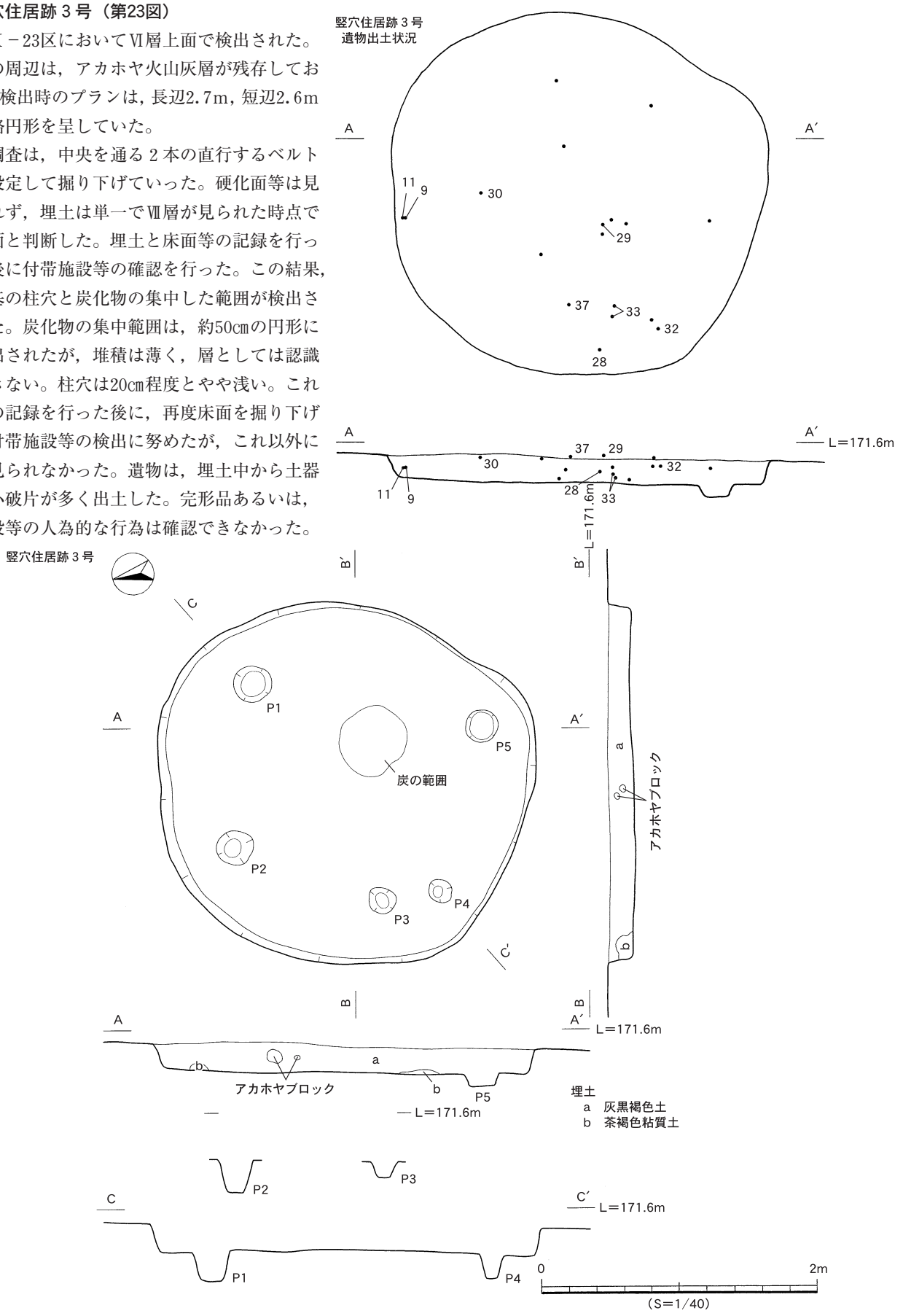
Ｊ－17区においてⅦ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.4m，短辺3.4mの円形で，東側は土坑23号に切られている。北側では土坑25号に隣接するが切り合ってはいなかった。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。壁は緩やかに立ち上がり，貼床や硬化面等は確認できなかった。柱穴などの付帯施設は，床面を除去した段階で確認され，中央に４基の柱穴が確認された。中央にやや大きめの柱穴がありその左右に小さめの深さ約60㎝の柱穴が規則的に見られる。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしない。埋土中から遺物は出土していないが，埋土の状況や周辺での遺物出土状況などから縄文時代に分類した。

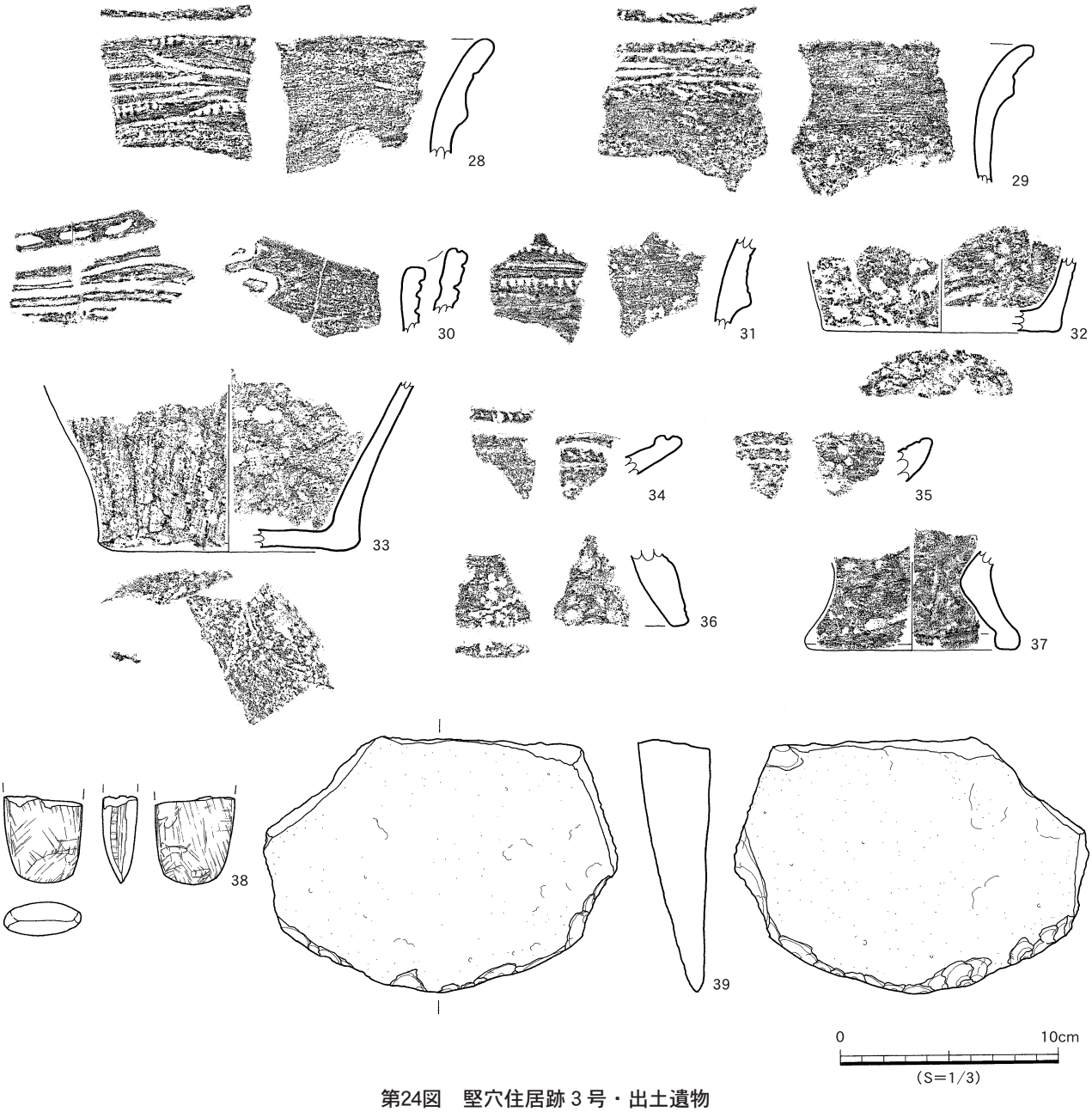
竪穴住居跡３号（第23図）

Ｋ－23区においてⅥ層上面で検出された。この周辺は，アカホヤ火山灰層が残存しており，検出時のプランは，長辺2.7m，短辺2.6mの略円形を呈していた。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げていった。硬化面等は見られず，埋土は単一でⅦ層が見られた時点で床面と判断した。埋土と床面等の記録を行った後に付帯施設等の確認を行った。この結果，５基の柱穴と炭化物の集中した範囲が検出された。炭化物の集中範囲は，約50㎝の円形に検出されたが，堆積は薄く，層としては認識できない。柱穴は20㎝程度とやや浅い。これらの記録を行った後に，再度床面を掘り下げて付帯施設等の検出に努めたが，これ以外には見られなかった。遺物は，埋土中から土器の小破片が多く出土した。完形品あるいは，埋設等の人為的な行為は確認できなかった。



第23図　竪穴住居跡３号・遺物出土状況



第24図　竪穴住居跡３号・出土遺物

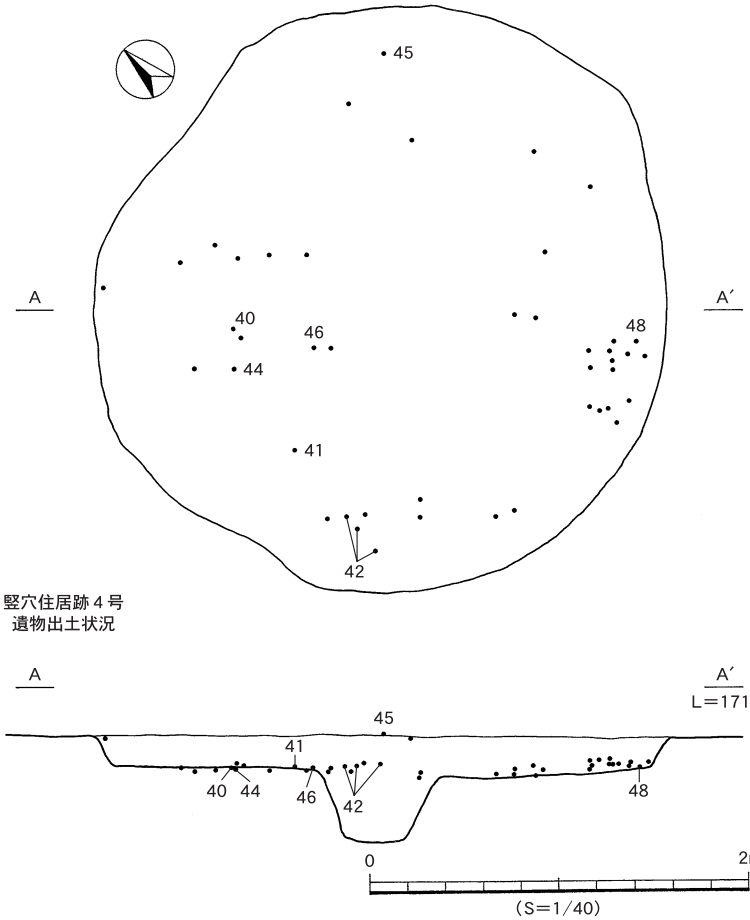
接合作業を経て，118点が出土し，この内12点を図化した。28は，口縁部が外反して肥厚する。これを文様帯として，横位の貝殻刺突文と沈線文とが施文されている。29は口縁部文様帯の幅がやや狭い。横位の沈線文とキザミが施されている。30は波頂部をわずかに含む。口唇部に短い沈線を断続的に施す。口縁部の沈線文は，外面では直線的に，内面では曲線的に施文されている。31は口縁上端を欠損するが，断面三角形状に肥厚する。32と33は底部片である。33の外面にはケズリの痕跡が明瞭に残されている。34～37は台付皿形土器である。34・35は皿部片である。34は上端部が肥厚して施文が施され，35は内面に沈線文が施されている。36は脚部である。外面でわずかに屈曲している。37は脚端部が内側へ肥厚する。38は小型の磨製石斧である。基部を欠損する。39は多孔質な安山岩の板状の素材を用い，素材の薄い１辺に表裏両面から粗い剥離を施して刃部を形成している。

竪穴住居跡４号（第27図）

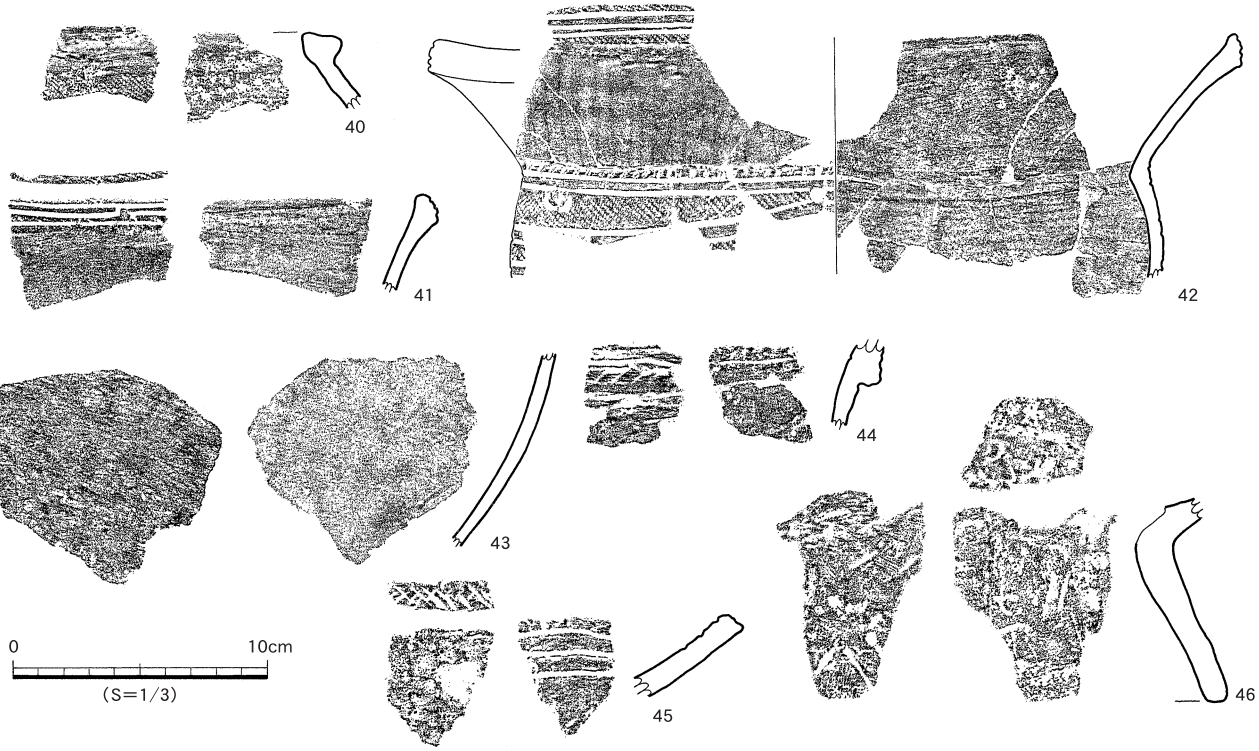
Ｊ－25区においてⅥ層上面で検出された。この周辺は，アカホヤ火山灰層が残存しており，検出時のプランは，長辺3.1m，短辺3.0mの略円形を呈していた。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げていった。硬化面等は見られず，埋土は単一でⅦ層が見られた時点で床面と判断した。埋土と床面等の記録を行った後に付帯施設等の確認を行った。その結果，４基の柱穴と床面中央に土坑が１基検出された。柱穴の

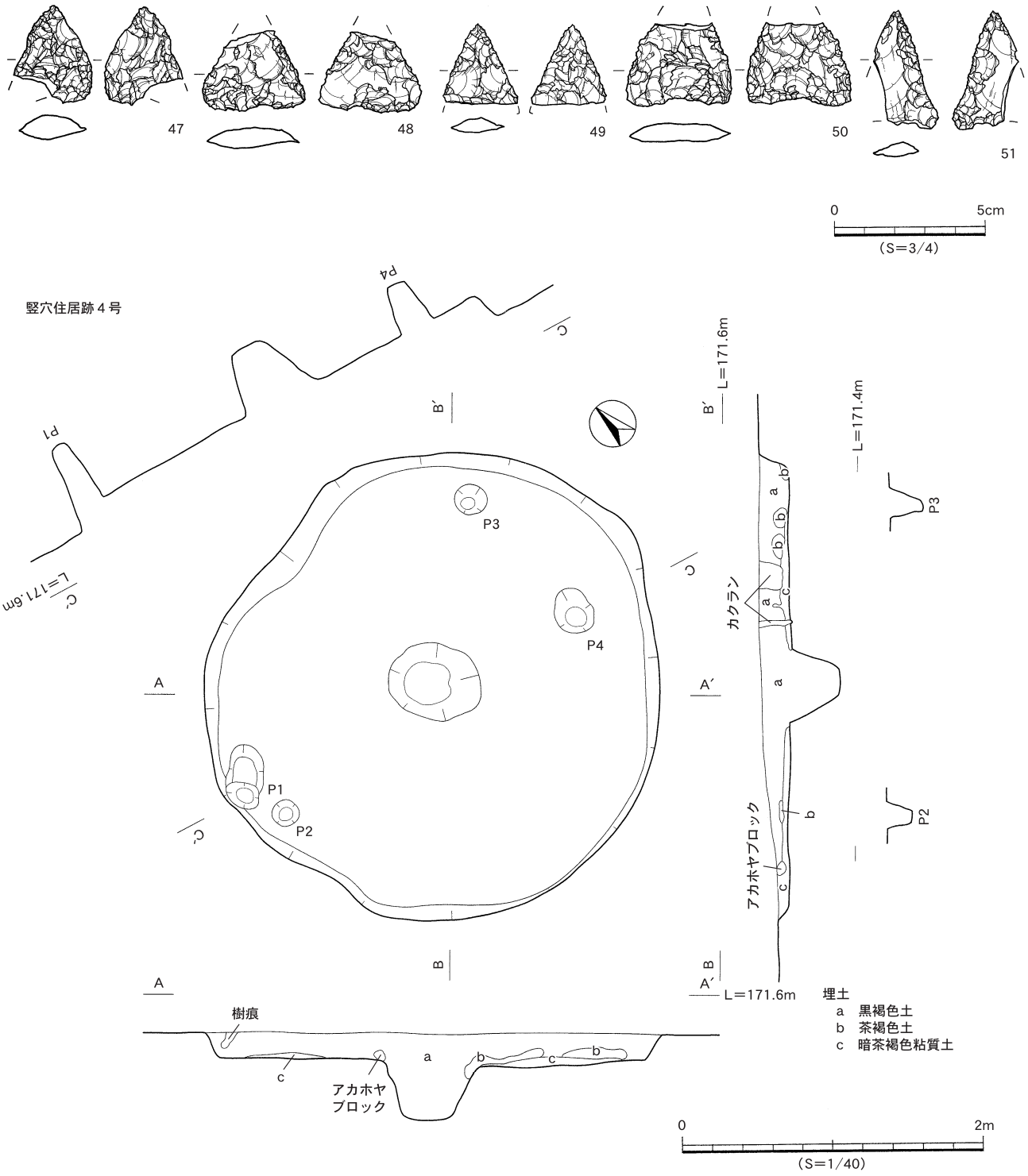
深さはＰ２とＰ３は20㎝程度であるが，Ｐ１とＰ４は深い。中央に検出された土坑の埋土は，変化することなく単一で，焼土や炭化物等は含まれていない。なお，これらの記録を行った後に，再度床面を掘り下げて付帯施設等の検出に努めたが，これ以外には見られなかった。遺物は，埋土中から土器の小破片が多く出土した。完形品あるいは，埋設等の人為的な行為は確認できなかった。接合作業を経て，73点が出土し，この内12点を図化した。41・42は包含層分類ではＸ類に該当する。口縁部が断面三角形状に肥厚して波状口縁をなす。直線的な頸部から強く屈曲し，胴部は球状に膨らむ。文様は，縄文施文の後に沈線文等が施される。43は，41・42の胴部片と思われる。内外面共に入念なミガキが施され器壁は薄い。45は台付皿形土器の皿部片で，口唇部と口縁部内面とに施文が施される。46は台付皿形土器の脚部と思われる。47～51は石鏃である。48以外は埋土中一括して取り上げたが，比較的床面近くで出土している。周辺からは剥片類も出土しており，ややまとまっている感がある。



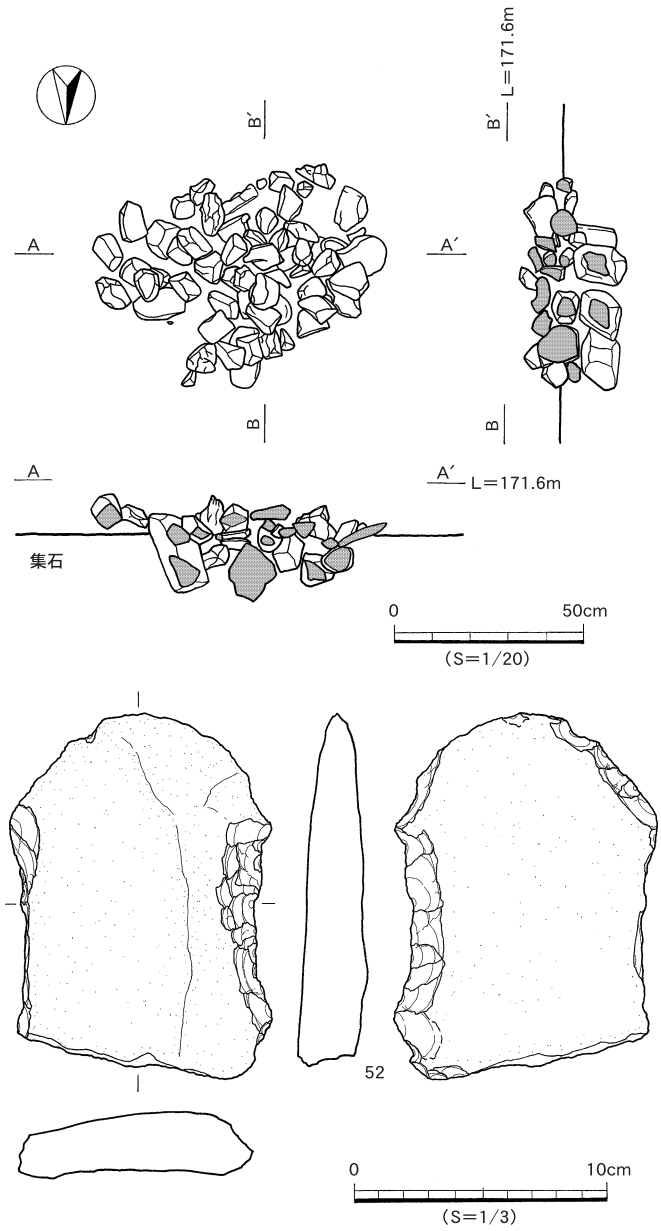
第25図　竪穴住居跡４号・遺物出土状況



第26図　竪穴住居跡４号・出土遺物



第27図　竪穴住居跡４号・出土遺物



第28図　集石・集石内出土遺物

集石（第28図）

集石はM－22区，Ⅶ層上面で検出された１基のみであった。集石の規模は長軸80㎝，短軸60㎝程度で略楕円形に礫が集中する。礫堆積の厚さは25㎝程度であるが，掘り込みの確認はできなかった。石材はほぼ安山岩で，５㎝～20㎝大の摩滅した礫を使用している。焼成を受け赤茶褐色に変色した礫も多く確認できる。礫の中には打製石斧基部片１点と石皿の破損品と思われるもの３点が含まれ，黒曜石チップ２点が出土した。

52は安山岩製の打製石斧先端を欠損した基部片である。右側縁からの剥離は表裏ともに入念に行われている。左側縁の剥離は裏面のみわずかに認められる。

土坑

縄文に該当すると思われる土坑については，平面形態を基に円形・略円形（３～６，11，17，20～23，26，28～33），楕円形・略楕円形（８，12～16，18・19，24・25，27，34），不定形（１・２，７，９），略長方形（10）の４類に分類した。

なお土坑内出土遺物の詳細については，後述する。

土坑３号（第29図）

Ⅰ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸122㎝×短軸113㎝の円形を呈している。暗褐色土の埋土で検出面からの深さ14㎝である。遺物は８点を出土し，内１点を図化した。

土坑４号（第29図）

Ⅰ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸109㎝×短軸102㎝の円形を呈している。埋土は暗褐色砂壌土を主体とすると思われるが，中央付近に樹痕と思われる黒褐色砂壌土の落ち込みが見られる。検出面からの深さ17㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑５号（第29図）

Ⅰ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸83㎝×短軸76㎝の円形を呈している。埋土は暗褐色砂壌土で，検出面からの深さは８㎝である。土坑４号に隣接する。遺物は出土しなかった。

土坑６号（第29図）

Ⅰ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸121㎝×短軸90㎝の略円形を呈している。埋土は褐色砂壌土と黒褐色砂壌土を主体とし，検出面からの深さ30㎝である。床面中央付近に鉄分の付着が認められた。遺物は80点を出土し，内７点を図化した。

土坑11号（第29図）

K－16区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸100㎝×短軸90㎝の円形を呈する。土坑埋土は黒褐色土で，検出面からの深さ14㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑17号（第29図）

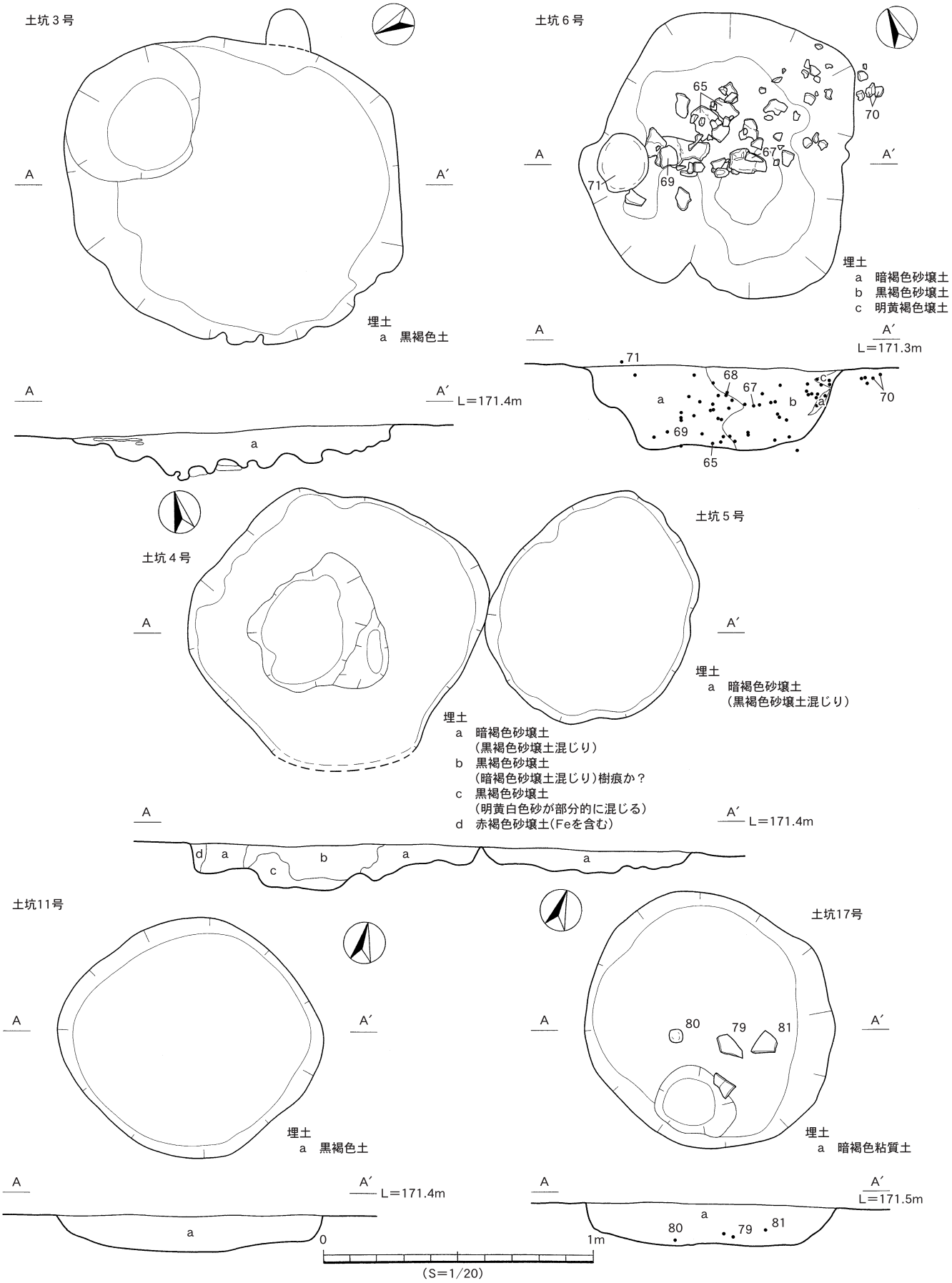
L－18区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸95㎝×短軸92㎝の円形を呈する。埋土は暗褐色粘質土である。検出面からの深さ15㎝で，床面はフラットである。また，南側壁面近くに径25～30㎝ほどの掘り込みが見られる。遺物は38点を出土し，内５点を図化した。

土坑20号（第30図）

K－18区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸78㎝×短軸75㎝の円形を呈する。埋土は暗黒褐色土である。検出面からの深さ22～28㎝である。遺物は13点を出土し，内３点を図化した。

土坑21号（第30図）

J－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸79㎝×短軸79㎝の円形を呈する。埋土はアカホヤブロックと炭化物が少し混じる茶褐色土である。検出面からの



第29図　土坑３～６，11，17号・６，17号遺物出土状況

深さ10㎝で床面はフラットである。遺物は60点を出土し，内６点を図化した。

土坑22号（第30図）

Ｊ－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸102㎝×短軸90㎝の略円形を呈する。埋土は暗茶褐色土である。土坑形状はすり鉢状を呈しており，検出面からの深さ45㎝である。また，斜面をなす土坑壁面の東側と西側に径20～30㎝程度のピットが15～20㎝の深さ堀り込まれている。遺物は27点出土，内４点を図化した。

土坑23号（第30図）

Ｊ－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸95㎝×短軸81㎝の円形を呈する。埋土は暗茶褐色土である。検出面からの深さ20㎝で，床面はほぼフラットである。遺物は36点を出土したが，内６点を図化した。

土坑26号（第30図）

Ｉ－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸93㎝×短軸64㎝の円形を呈する。埋土は茶褐色土を主体とする。中央部が細く深く落ち込み，ピット状を呈する。検出面からの深さ71㎝である。遺物は23点を出土し，内３点を図化した。

土坑28号（第31図）

Ｉ／Ｊ－20区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸90㎝×短軸90㎝の円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ10㎝である。底面は皿状を呈するが，壁面の立ち上がりはしっかりしている。遺物は28点を出土し，内２点を図化した。

土坑29号（第31図）

Ｉ－19区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸145㎝×短軸121㎝の略円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ12㎝である。床面はほぼフラットで，壁面の立ち上がりは緩やかである。遺物は６点を出土し，内５点を図化した。

土坑30号（第31図）

Ｉ－18区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は，長軸116㎝×短軸112㎝の円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ10㎝で，床面はほぼフラットである。遺物は49点を出土し，内１点を図化した。

土坑31号（第31図）

Ｋ－20区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸131㎝×短軸116㎝の円形を呈する。埋土は暗黒色土である。検出面からの深さ11㎝で，床面はほぼフラットである。土坑内から遺物が多量に出土し，遺物の出土状況から判断すると土坑の深さは21㎝以上あったものと推定できる。遺物は92点を出土し，内７点を図化した。

土坑32号（第31図）

Ｋ－20区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸117㎝×短軸117㎝の円形を呈する。埋土は，黄褐色土ブロックが若干混ざる黒色土である。検出面からの深さ14㎝である。土坑堀り込み南側きわは，後世のピットで切られている。遺物は37点を出土し，内４点を図化した。

土坑33号（第32図）

Ｌ－19区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸125㎝×短軸125㎝の円形を呈する。埋土は黄褐色土ブロックが混ざる黒色土である。検出面からの深さは，31㎝である。遺物は95点出土し，内13点を図化した。

土坑８号（第32図）

Ｉ－15区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸103㎝×短軸60㎝の楕円形を呈している。埋土は黒色砂壌土で，検出面からの深さ６㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑12号（第32図）

Ｋ－16区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸106㎝×短軸80㎝の楕円形を呈する。埋土は，アカホヤブロックを含む黒褐色砂質土から暗褐色土を主体とする。検出面からの深さ23㎝で壁面の立ち上がりはしっかりしている。遺物は出土しなかった。

土坑13号（第32図）

Ｌ－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸103㎝×短軸60㎝の楕円形を呈する。埋土は暗褐色粘質土で，検出面からの深さ16㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑14号（第32図）

Ｌ－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸116㎝×短軸90㎝の楕円形を呈する。埋土はアカホヤブロックが少し混じる暗褐色粘質土で，検出面からの深さ18㎝である。床面はフラットで，壁面の立ち上がりもはっきりしている。遺物は６点を出土し，内２点を図化した。

土坑15号（第32図）

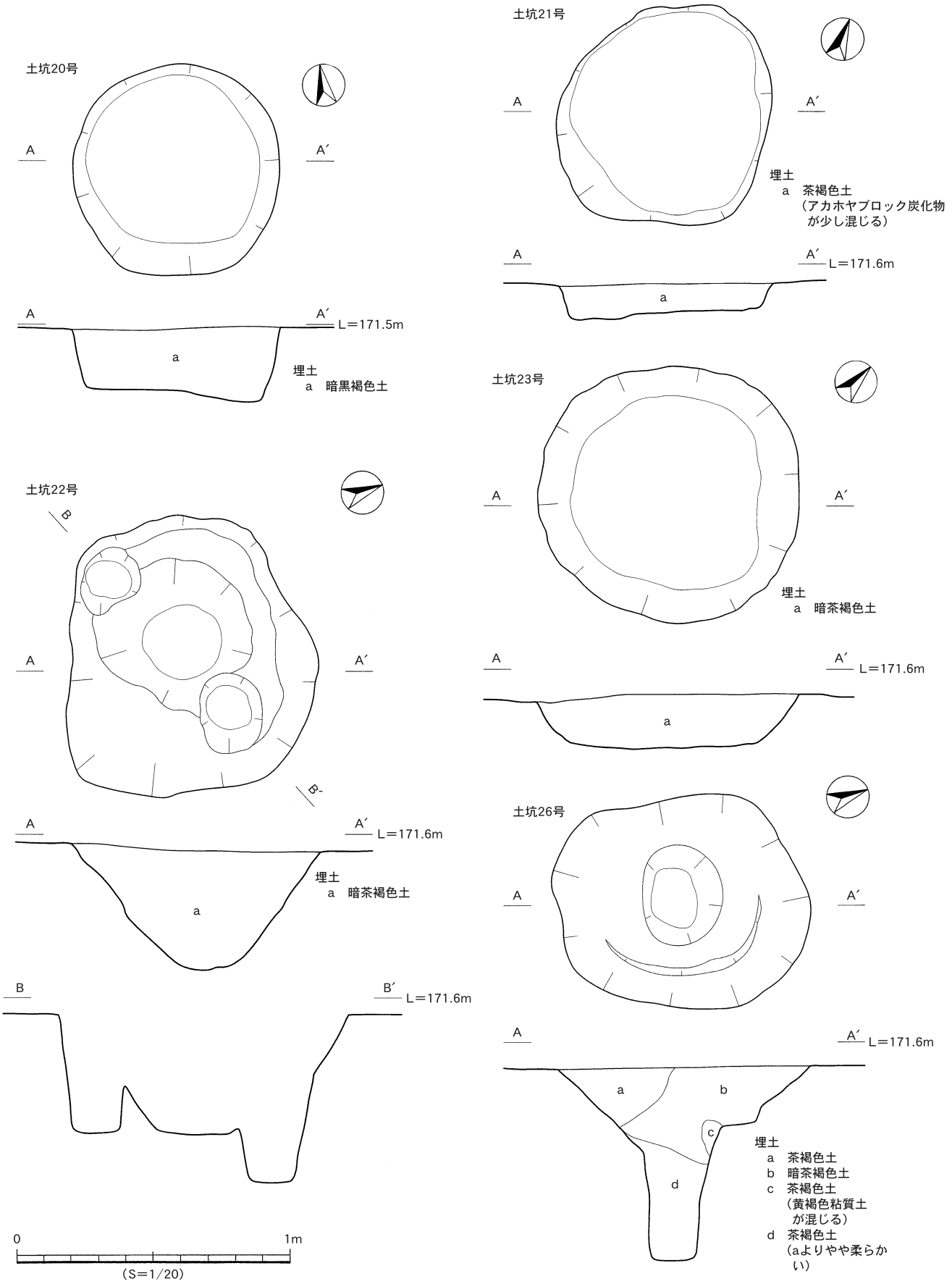
Ｌ－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸115㎝×短軸71㎝の楕円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ13～20㎝である。土坑底面に，深さ18～25㎝のピット状の掘り込みが２カ所見られる。遺物では石皿片が出土した。

土坑16号（第33図）

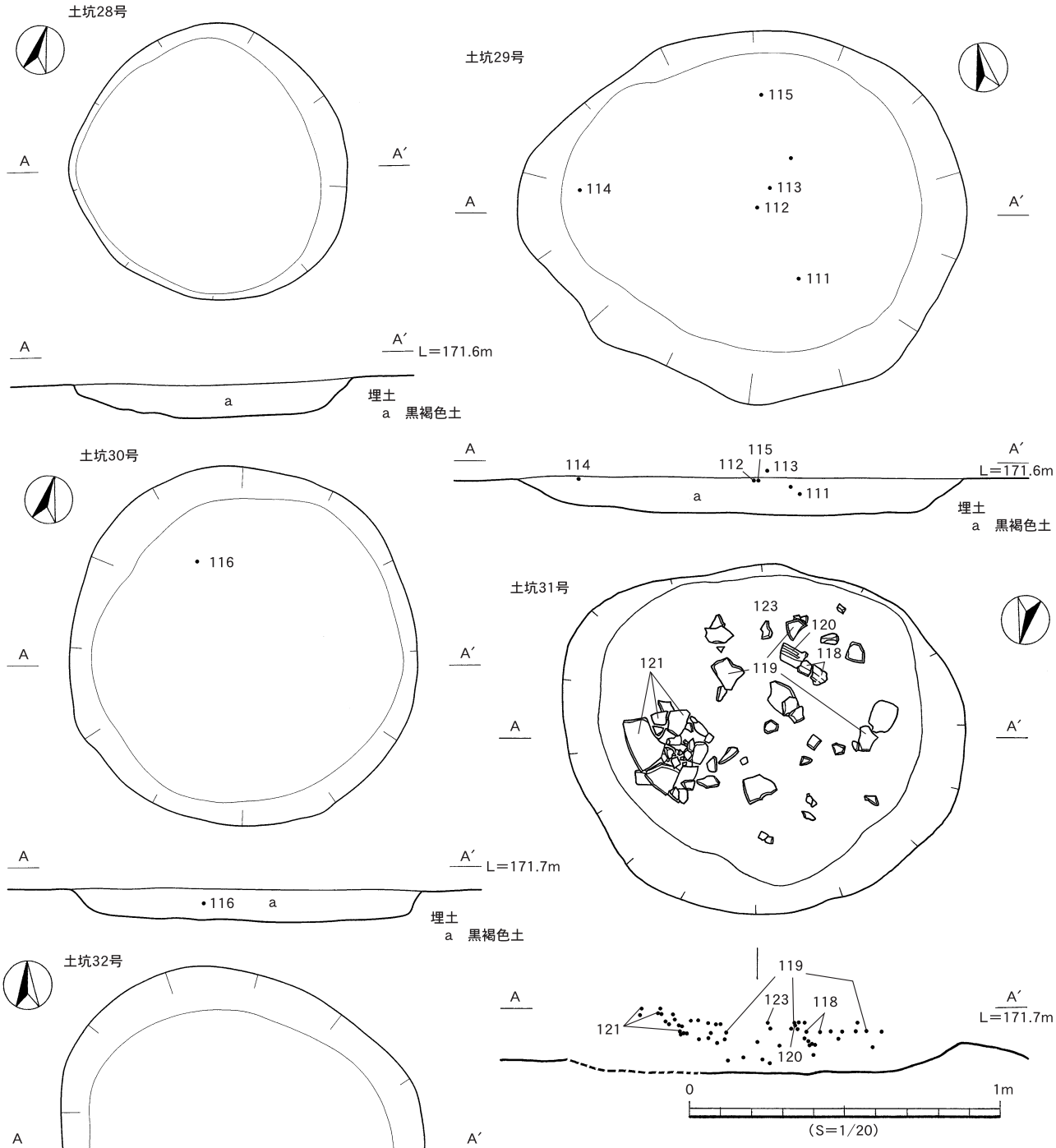
Ｌ－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸138㎝×短軸95㎝の楕円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ15㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑18号（第33図）

Ｌ－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸77㎝×短軸57㎝の略楕円形を呈する。埋土は暗黒褐色土である。検出面からの深さ19㎝である。遺物は80点を出土した。内，石皿１点を図化した。



第30図　土坑20～23，26号



土坑19号（第33図）

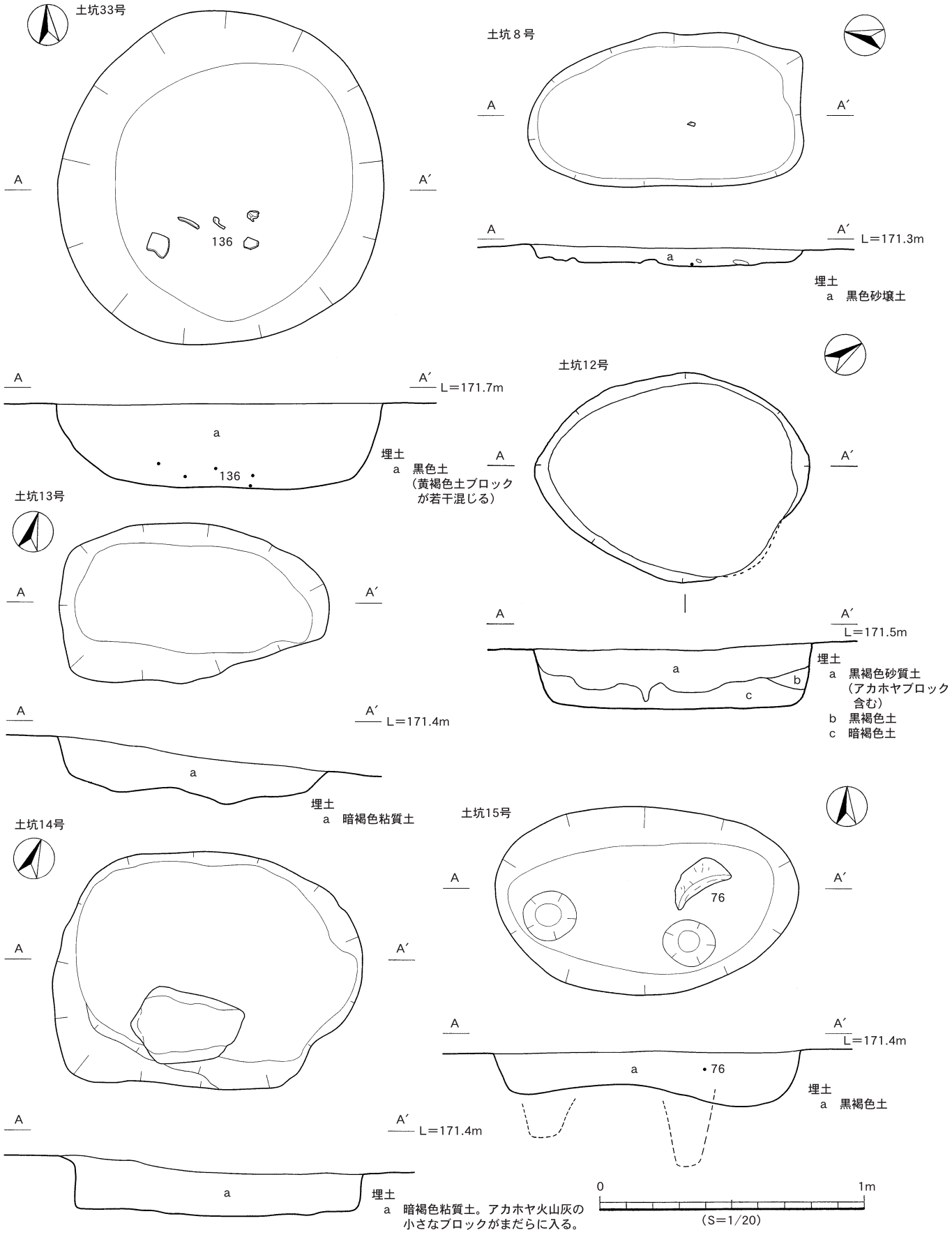
K－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸83㎝×短軸65㎝の楕円形を呈する。

埋土は暗黒褐色土で，検出面からの深さは20㎝である。遺物は10点を出土し，内１点を図化した。

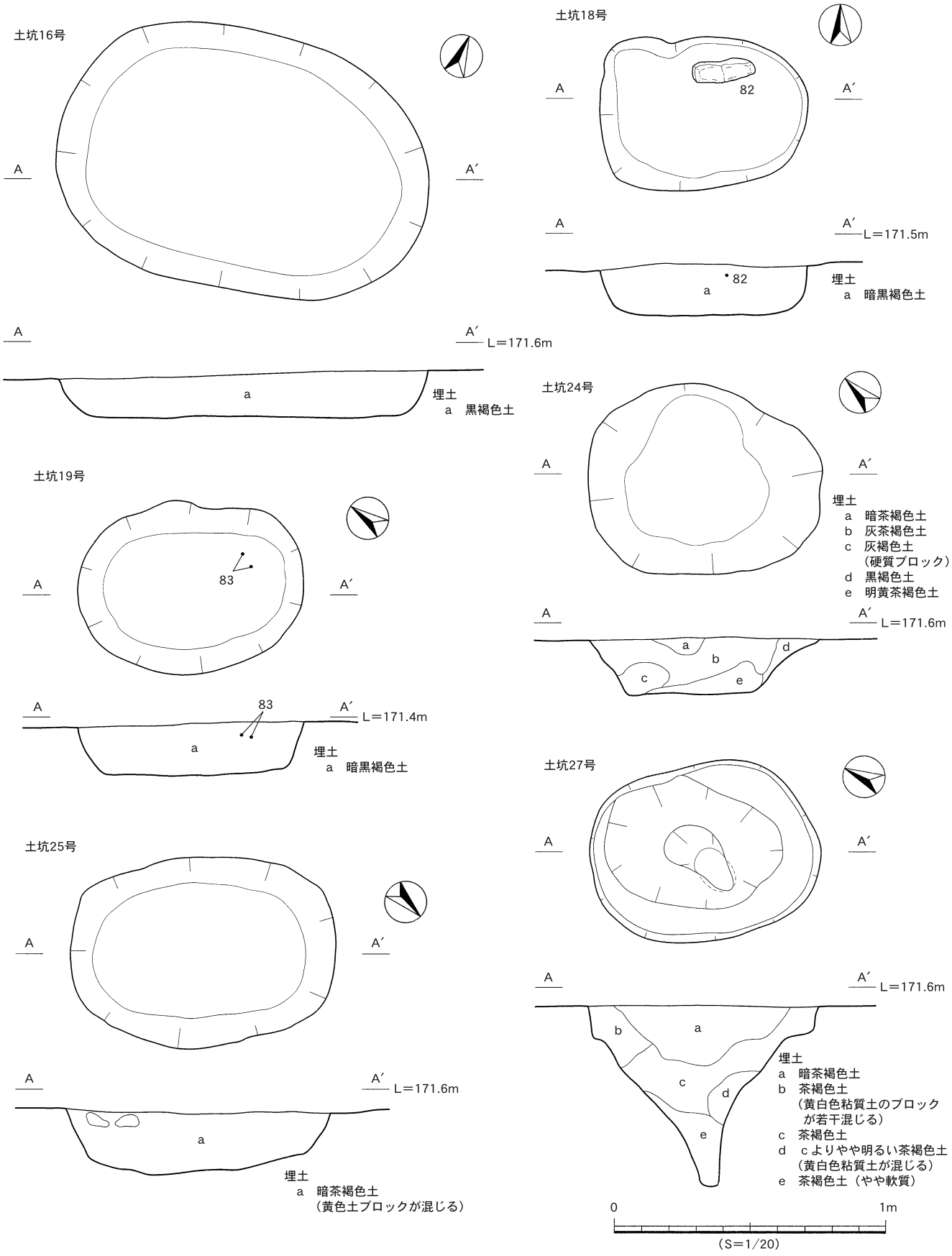
土坑24号（第33図）

J－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸86㎝×短軸71㎝の楕円形を呈する。埋土は灰茶褐色土を主体とする。検出面からの深さ20㎝である。遺物は出土しなかった。

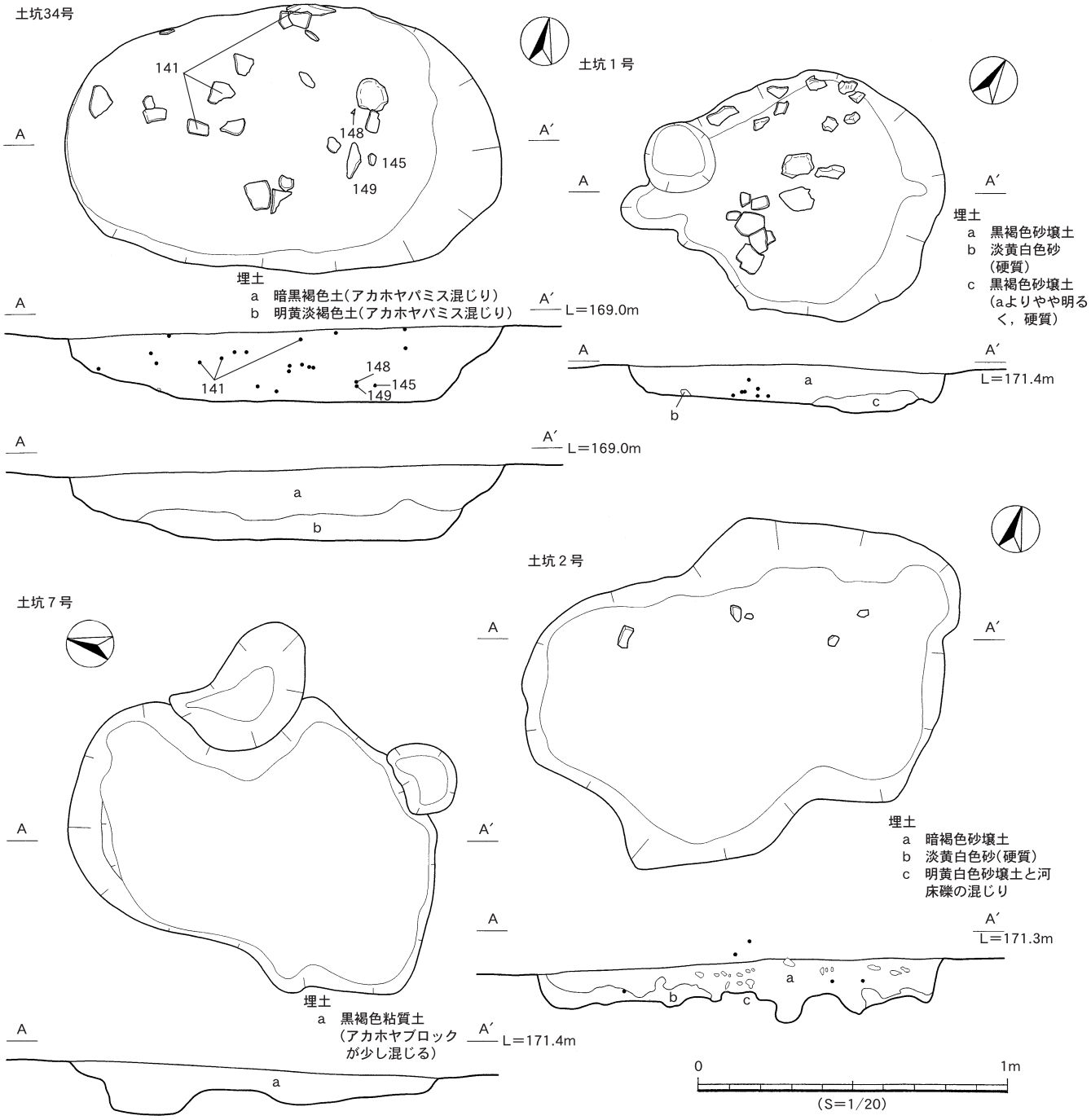
第31図　土坑28～32号，29～31号遺物出土状況



第32図　土坑８，12～15・15，33号遺物出土状況



第33図　土坑16，18，19，24，25，27号・18，19号遺物出土状況



第34図　土坑１，２，７，34号・１，２，34号遺物出土状況

土坑25号（第33図）

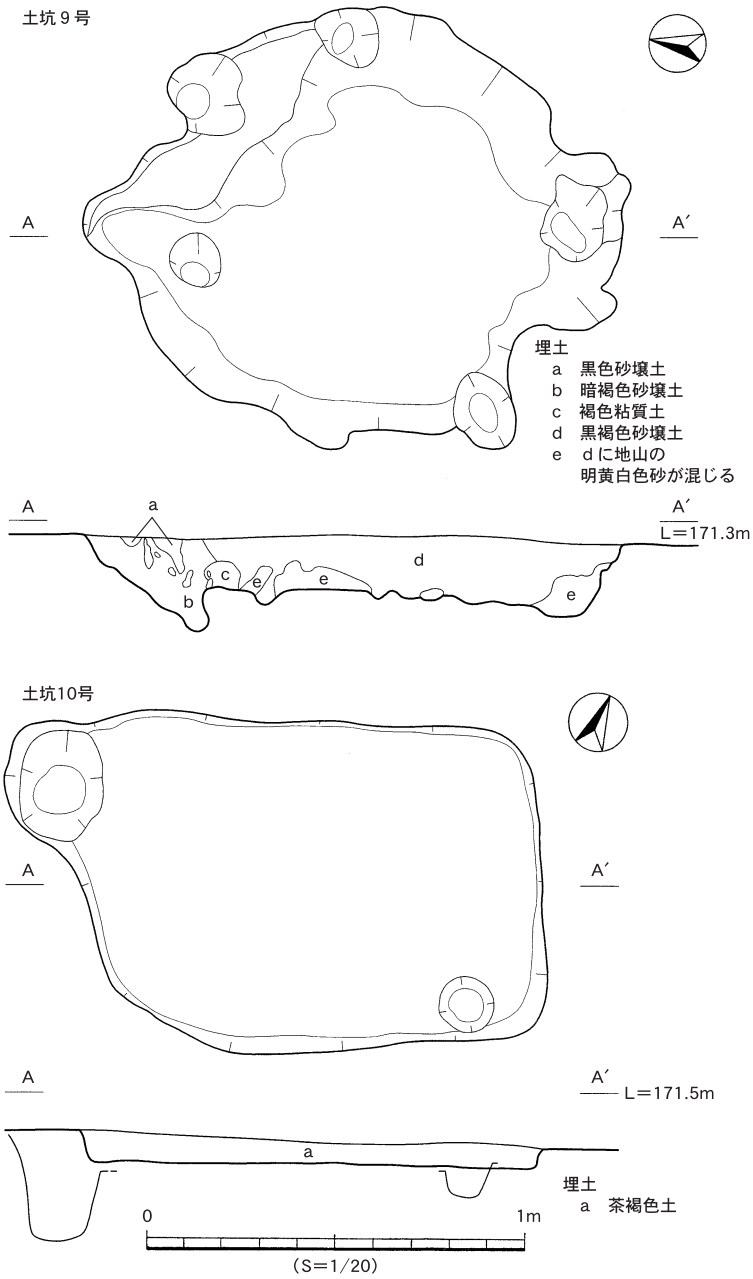
Ｊ－17区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸98㎝×短軸70㎝の楕円形を呈する。埋土は黄色土ブロックが混ざる暗茶褐色土である。検出面からの深さ20㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑27号（第33図）

Ⅰ－17／18区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸86㎝×短軸66㎝の楕円形を呈する。埋土は茶褐色土を主体とする。中央部が細く深く落ち込みピット状を呈する。検出面からの深さ67㎝である。遺物は26点を出土し，内３点を図化した。

土坑34号（第34図）

Ｅ－55区，Ⅵ層上面で検出された。平面形態は長軸141㎝×短軸87㎝の楕円形を呈する。埋土はアカホヤパミスが混じる暗黒褐色土が主体である。埋土は検出面から15㎝程で分層でき，境界面付近に炭化物が多く見られた。検出面からの深さ24㎝である。遺物は48点を出土し，内９点を図化した。



第35図　土坑９，10号

土坑１号（第34図）

Ｋ－11区でⅧ層上面で検出された。平面形態は長軸105㎝×短軸80㎝の略円形から不定形を呈している。黒褐色砂壌土を主体とする埋土で検出面からの深さ14㎝である。遺物は96点を出土し，内11点を図化した。

土坑２号（第34図）

Ｊ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸138㎝×短軸90㎝の略楕円から不定形を呈している。暗褐色砂壌土を主体とする埋土で検出面からの深さ10㎝である。遺物は５点出土したが，図化には至らなかった。

土坑７号（第34図）

Ｉ－14区，Ⅷ層上面で検出され，平面形態は長軸120㎝×短軸70㎝の略楕円形を呈している。北側長軸の立ち上がり部分は，樹痕のため破壊されている。埋土はアカホヤブロックが少し混じる黒褐色粘質土で，検出面からの深さは10㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑９号（第35図）

Ｉ－15区，Ⅷ層上面で検出され，平面形態は長軸143㎝×短軸111㎝の略円形から不定形を呈している。また，土坑内には径15㎝程深さ10～15㎝ほどの落ち込みが５カ所確認された。土坑埋土は黒褐色砂壌土を主体とし，検出面からの深さ17㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑10号（第35図）

Ｊ－16区，Ⅷ層上面で検出され，平面形態は長軸125㎝×短軸88㎝の略長方形を呈する。土坑床面には深さ８～20㎝のピット状の掘り込みが２カ所確認された。土坑埋土は茶褐色土で，検出面からの深さ５㎝で壁面の立ち上がりはしっかりしている。遺物は出土しなかった。

土坑内出土遺物

１号土坑内出土遺物（第36図53～63）

53は口縁部がわずかに肥厚し，波状を呈する土器の波頂部である。４～５条の横走する細沈線が施され，波頂部の口唇部に棒状工具で刺突を行い，そこから縦方向の沈線を施す。56～58は同類の土器と考えられる。56は口縁部に三条の沈線を巡らせその間に縄文を施し，口縁端部内面を指頭でなで凹ませる。57・58は胴部片で沈線が横走し，57は頸部屈曲部に刺突を施す。62は透かし穴をもつ台付皿の脚部である。63は鋸歯状二等辺三角形で抉りの深い石鏃で，淀姫産の石材を利用している。

３号土坑内出土遺物（第36図64）

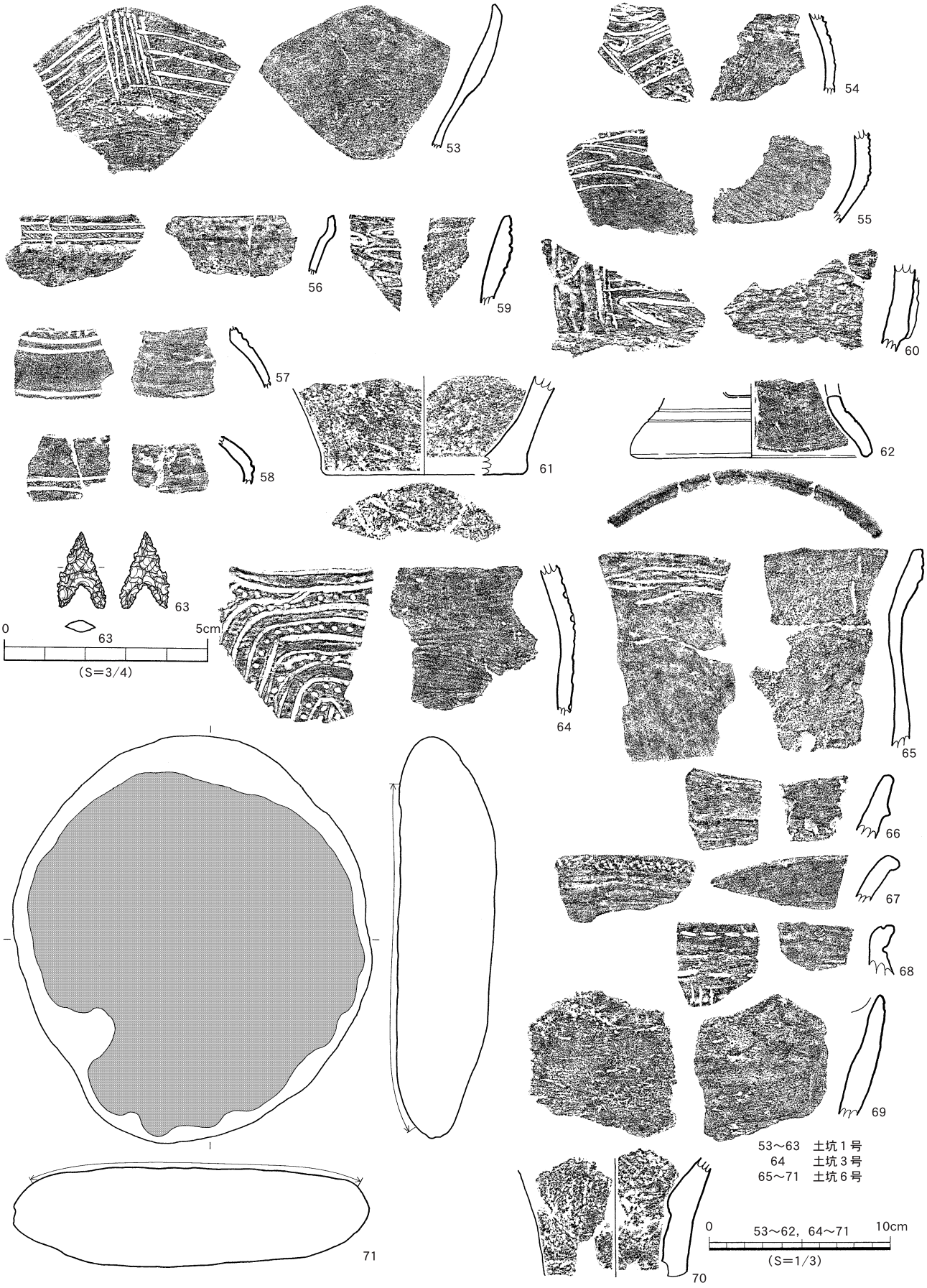
64は２条の沈線を基本に，その間に竹管状の工具で連点を施す。

６号土坑内出土遺物（第36図65～71）

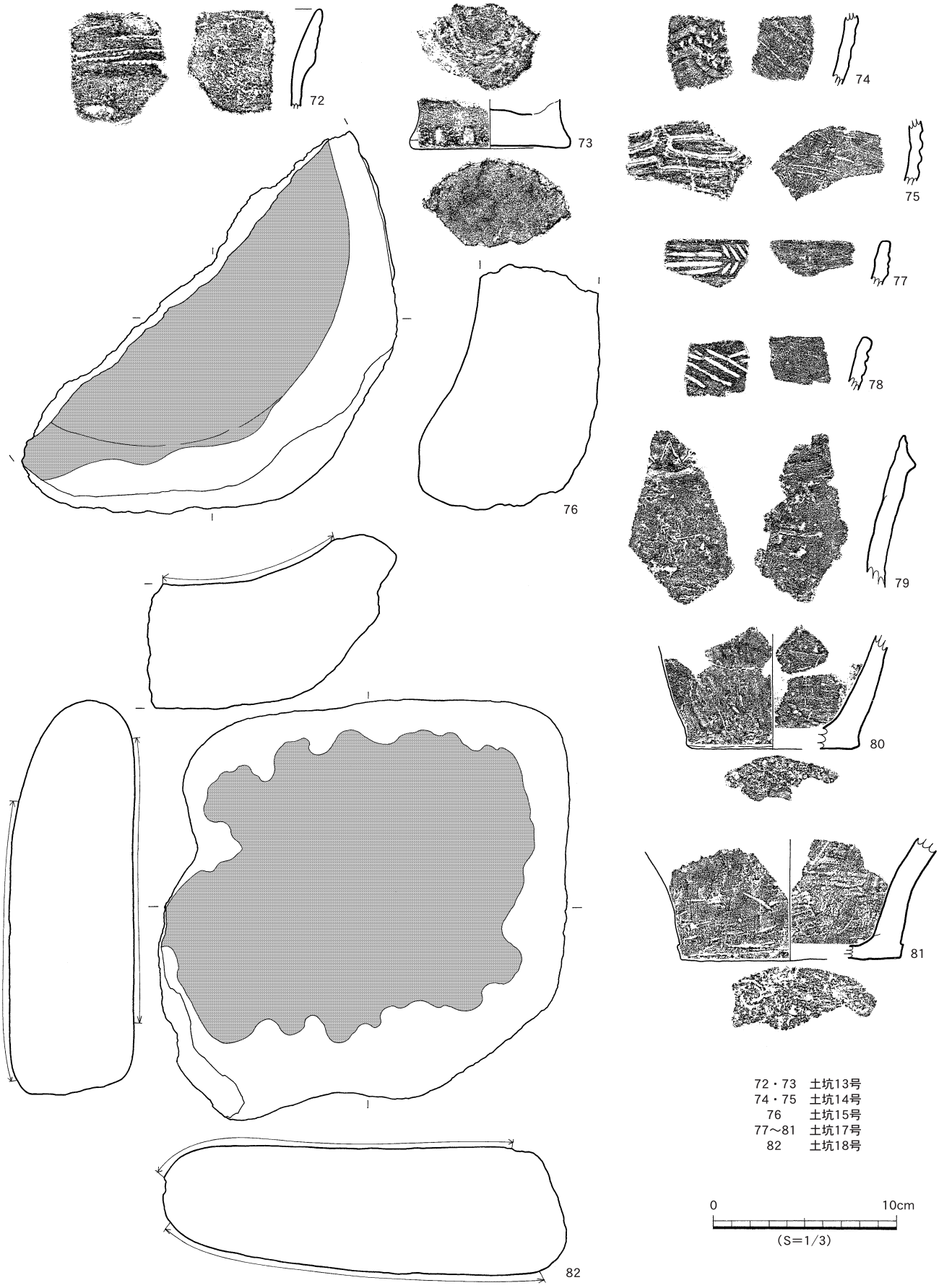
65～67は同類の土器と考えられる。65の口縁部は蛇頭状を呈し，口縁部外面に横位の沈線を施す。66は口縁下部に三角突帯が廻る。67は口唇部に縄文を施し，外面には横位のミガキが見られる。68は口唇部に横方向から刺突した短沈線が施され，口縁屈曲部にも同様のものがみられる。69は波状口縁を呈する無文の口縁部である。

13号土坑内出土遺物（第37図72・73）

72は口縁部断面形状が三角形を呈し，口縁部外面に横位の貝殻刺突を施す。73は底部片で指頭による押圧で端部外面を波状にする。



第36図　土坑１，３，６号出土遺物



第37図　土坑13～15，17，18号出土遺物

14号土坑内出土遺物（第37図74・75）

74・75ともに胴部片で，74は凹線間に二叉状工具で連続刺突を施す。75は棒状工具で沈線を施す。

15号土坑内出土遺物（第37図76）

76は安山岩製の石皿片で，使用により中央部が大きく凹む。

17号土坑内出土遺物（第37図77～81）

77は口縁部がやや肥厚し，外面に横位の沈線と羽状の沈線が施される。78は外面に斜位の短沈線を連続して施す。79は口縁部が断面三角形を呈し，口縁上部に鋸歯状の沈線を施す。80・81は平底を呈する底部片で後期に該当すると思われる。

18号土坑内出土遺物（第37図82）

82は砂岩製の石皿で表裏両面に使用痕が認められる。

19号土坑内出土遺物（第38図83）

83は屈曲した短い頸部をもち，口縁部外面，頸部下位に縄文を施し，頸部下位の縄文の下には沈線が施される。口縁部から曲線的に伸びる橋状把手は二股に分かれ胴部へつながる。

20号土坑内出土遺物（第38図84～86）

84は台付皿の皿部である。内面に数条の沈線が廻り，口唇部にも１条の沈線が廻る。85は口縁部に横位の２条の沈線が施される。

21号土坑内出土遺物（第38図87～92）

87は口縁部外面にやや太めの斜位の沈線を施す。88は沈線間に縦位の貝殻腹縁刺突を連続して施す胴部片である。89は飾り突起部で突起上端を凹ませる。90は口縁部がやや肥厚する無文の口縁部片である。91・92は，底径ともに6.6㎝の底部片で同一個体の可能性がある。

22号土坑内出土遺物（第38図93～96）

93は口縁部がＬ字状に折れ，口唇部を平坦にし，口縁外面に斜位の連続刻みを施す。94は口唇部に斜位の連続刻みを施し，内面下部を削りで仕上げる。95は口縁部が緩やかに内弯し，キャリパー状を呈し波状を呈する。96は器壁が薄く，外面を横位のミガキで仕上げる。

23号土坑内出土遺物（第38図97～102）

97は断面三角形の口縁部で，口唇部に棒状工具による連続刺突を２条施す。98・99は口唇部に斜位の連続刺突，外面に横位の沈線を施す。100は口縁部が外反し，屈曲部外面に断面三角形の突帯を廻らす。口唇部と突帯上に斜位の刻み目を施す。101は沈線間に縄文を施す台付皿の脚部である。102は胴部屈曲から上位に横位及び斜位の沈線を施し，一部に縄文を施す。

26号土坑内出土遺物（第39図103～105）

103は口唇部が平坦で，外面にやや太めの深い沈線を施す。104は平底の底部片で，内外面ともに丁寧ななで調整である。105は円盤形土製加工品である。

27号土坑内出土遺物（第39図106～108）

106は飾り上面に刻みを施し，口縁外面には横走沈線の痕跡も見える。107・108は台付皿で108は一部の沈線間に縄文が施され，内側には斜位の刻みも施される。

28号土坑内出土遺物（第39図109・110）

109は口縁外面にやや太めの斜位の沈線を施す。

29号土坑内出土遺物（第39図111～115）

111は口唇部を平坦に仕上げた上で，粘土紐を波形に貼り付ける。口縁外面に凹線を施す。112は口縁部に斜位の細沈線を施す。113は断面三角形の口縁の一部で，斜位の貝殻刺突と横走する沈線が確認できる。114は断面三角形を呈する口縁部，外面に斜位の貝殻腹縁刺突を施す。115は横位の沈線間に縄文を施す胴部片である。

30号土坑内出土遺物（第39図116）

116は口唇部を波状にし，突起部をもつ。

31号土坑内出土遺物（第39図117～123）

117は平坦な口唇で，口縁部には斜位の沈線を施す。118・119は断面三角形を呈する口縁で，横位の沈線が２条廻り，沈線下に斜位の貝殻刺突を施す。120は突起部をもち，縦位横位の沈縁を施す。121は沈線間に縄文を施し，さらに朱が塗られる。122は外面を丁寧にミガキで仕上げる鉢である。

32号土坑内出土遺物（第39図124～127）

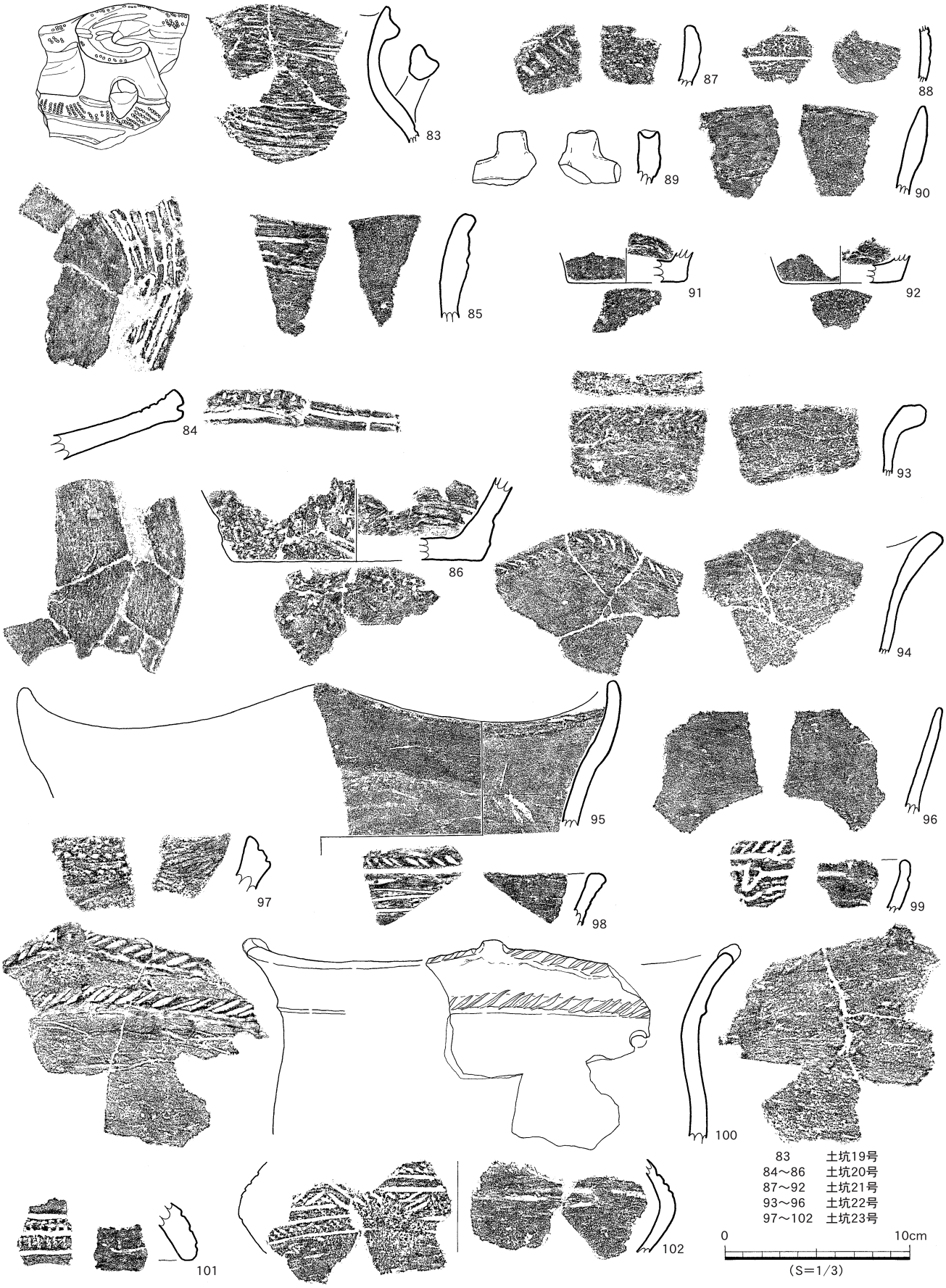
124・125ともに口唇部を波状にし，124は口唇部にねじり紐状の突起が付き，125は外面に太めの沈線が廻る。126は断面三角形を呈する口縁部で，ヘラ状工具での横からの刺突による縦位の短沈線が施される。

33号土坑内出土遺物（第40図128～140）

128～130は口唇部を波状にする。128は外面に指頭による連点を施す。129は指頭により左右対称の曲線を施す。130は外面に逆Ｓ字状の凹線を施す。133は口唇部外面に斜位の刻みを施し，下位に横位の沈線を施す。134・135は断面三角形で，横走する２条の沈線間に横位の貝殻刺突を施す。135は沈線の端部に凹点を施し，斜位の貝殻刺突もみられる。138～140は円盤形土製加工品である。

34号土坑内出土遺物（第40図141～149）

141は無文の深鉢で丁寧ななで仕上げである。142～146は同類の土器である。142は口縁部に三条の沈線を巡らせ，その間に縄文を施す。口縁端部内面を指頭でなで凹ませる。143は横走する沈線間に縄文を施し，縄文は沈線下位にあふれている。144～146は底径が小さく，若干上げ底になる。147・148は二等辺三角形で基部の抉りが浅い石鏃で，147・148ともに日東産の黒曜石を利用している。149は蛇紋岩製の磨製石斧の基部である。

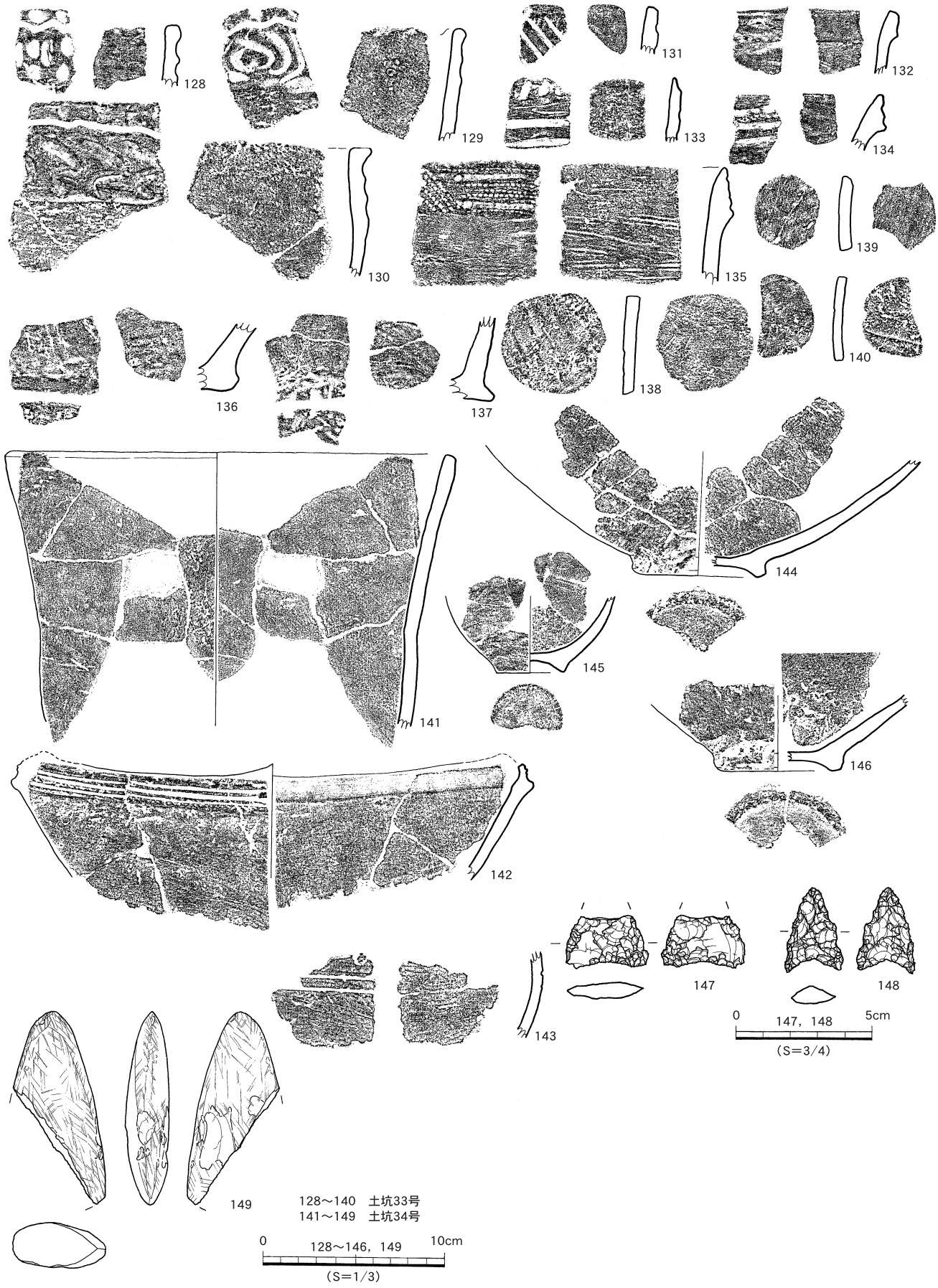


第38図　土坑19～23号出土遺物



103～105　土坑26号
106～108　土坑27号
109～110　土坑28号
111～115　土坑29号
116　土坑30号
117～123　土坑31号
124～127　土坑32号

第39図　土坑26～32号出土遺物



第40図　土坑33，34号出土遺物

⑶遺物

土器

下鶴遺跡は，縄文時代中期後半から後期の土器を中心に，早期，晩期の遺物が出土している。土器は調査対象区のほぼ全域で出土しているが，16～23区にひとつの集中が見られる。後世の攪乱，削平等により遺物は小破片化しており，分類作業は労力を要した。さらに時間的制約もあり，接合作業に時間を割くことがほとんど出来なかったため，器形を確認できる資料が少なくなったことは課題である。

出土遺物の分類概要を行った後，それぞれの詳細について記述する。

Ⅰ類土器（第43図150～162）

出土点数が少なかったため，早期の土器は一括した。

Ⅱ類土器（第43図163～176）

二列単位の施文具による押引文や刺突文に加えて，凹線文が施されるもので，胎土中に滑石片を混入し，器面にぬめり感のあるものが多い，並木式土器と呼ばれる土器の一群である。

Ⅲ類土器（第43～47図177～290）

太めの凹線文で曲線的な文様が施されるものや，直線的な文様が施されるもの，凹点が施されるものがみられる。また口縁部がやや肥厚し，文様が凹線文からするとやや細めの篦描きの縦位の短線や斜線，S字状文，逆S字状文を組合わせた文様モチーフをもつもの，さらに細い沈線で斜線文や縦位の短線を施すもの。阿高式土器に帰属するもので，南福寺式土器及び後出する出水式土器を含め，そこからつながる土器の一群，阿高系の土器を一括した。

Ⅳ類土器（第47～52図291～403）

口縁部を断面三角形や，くの字状に肥厚させ，そこに斜位の連続刺突文や爪形の連続刺突文，貝殻刺突文を施すもの，沈線により横線文，凹線文を施すもの，さらにそれらを組合わせたものがみられ，口縁部は平口縁，4カ所の波頂部をもった波状口縁がみられる。市来式土器と呼ばれる土器の一群である。

Ⅴ類土器（第52・53図404～446）

口縁部の断面形態がやや断面三角形状を示すものや，くの字状に折れ曲がるもの，口縁形態が平縁，波状をなすものがみられる。文様は，口縁部下に連続した斜位の貝殻刺突文がみられる。丸尾式土器と考えられる一群である。

Ⅵ類土器（第54図447～453）

口縁部がやや内弯し，口縁部や胴部に沈線を施し，沈線間に貝殻腹縁波頂部で文様を施す。南九州で納曽式土器と呼ばれる一群である。

Ⅶ類土器（第54～59図454～580）

磨消縄文系の土器群でやや太めの沈線で口縁部に沈線文，渦巻文が施され，沈線間に磨消縄文が施される。また沈線のみのものもみられる。器形は口縁部が屈曲しないもの，口縁部で屈曲し外反気味にすっと立ち上がるもの，L字に屈曲し口唇部が平坦になり，波頂部もしくは橋状把手を中心に口唇部上面に刺突文や沈線を施すものがみられる一群である。小池原上層式土器から鐘崎式土器と考えられる土器の一群である。

Ⅷ類土器（第60～67図581～754）

深鉢土器では口縁部をやや肥厚させ，そこにヘラ状工具等で斜位の羽状の刺突を施す。口唇部に逆W字状，M字状の貼り付け文を施す。口縁部断面形が緩い三角形状（蛇頭状）を呈し外面に沈線が施されるもの口縁部のやや下位に断面三角形状の突帯を廻らし，その突帯上に連続刺突，刻目を施す。鉢形土器はⅦ類土器と比較して口唇部から口縁部にかけてやや間延びした器形を呈するもの，口縁部が長く伸び胴部へとつながるものがみられ，胴部が張る。口唇部に縄文が施され，胴部には沈線により曲線文，直線文が描かれ，沈線文間には縄文が施される。従来，北久根山式土器と呼ばれる土器の一群である。

Ⅸ類土器（第67・68図755～781）

口縁部はやや内弯し，胴部の立ちあがりが緩やかなカーブを描くものや，ほぼ直線的に立ち上がるものがみられる鉢形の土器で，口縁部，胴部外面に沈線文及び縄文が施文される。辛川式土器と呼ばれる土器の一群である。

Ⅹ類土器（第68～69図782～807）

口縁部，胴部の屈曲がⅨ類土器と比較して，シャープになり，胴部屈曲部の内面には明瞭な稜線が確認できるようになる。また口縁端部内面を指頭でなで凹ませるものが多くみられる。文様は口縁部に2～3条の沈線と縄文，胴部には頸部との境に連点文を施しその下位には沈線文と縄文，文様のポイントとなるところに凹点や，対向弧文が施文される，従来西平式土器と呼ばれる土器の一群である。

ⅩⅠ類土器（第69図808～811）

口縁部は直口し横走する凹線が施される。ごくわずかではあるが出土している。三万田式土器と思われるものである。

ⅩⅡ類土器（第69～71図812～835）

晩期の土器を一括した。深鉢は粗製で口縁部が若干内弯しながら外開きに立ちあがり，外面に沈線が数条施されるもの，口縁部が若干肥厚し，無文で外面に条痕が残るものがみられる。浅鉢は精製で口縁部が頸部から口縁部にかけて大きく弧状に外反し，さらに口唇で立ち上がるもの。曲線的な胴部に，短く外反する口縁部がつき，口縁部内面に沈線が施され口縁部断面形が丸くなる，一部突起をもつものもみられる。その他，口縁部を若干肥厚させ，器面内外ともに条痕が残るものなどがみられる土器の一群である。従来の入佐式土器，黒川式土器に該当すると思われる。

ⅩⅢ類土器（第71～75図836～946）

その他，分類できなかったものを一括してその他の土器として扱った。後・晩期の土器のものと思われる底部片，円盤形土製加工品も一緒に掲載している。

ⅩⅣ類土器（第76～80図947～1046）

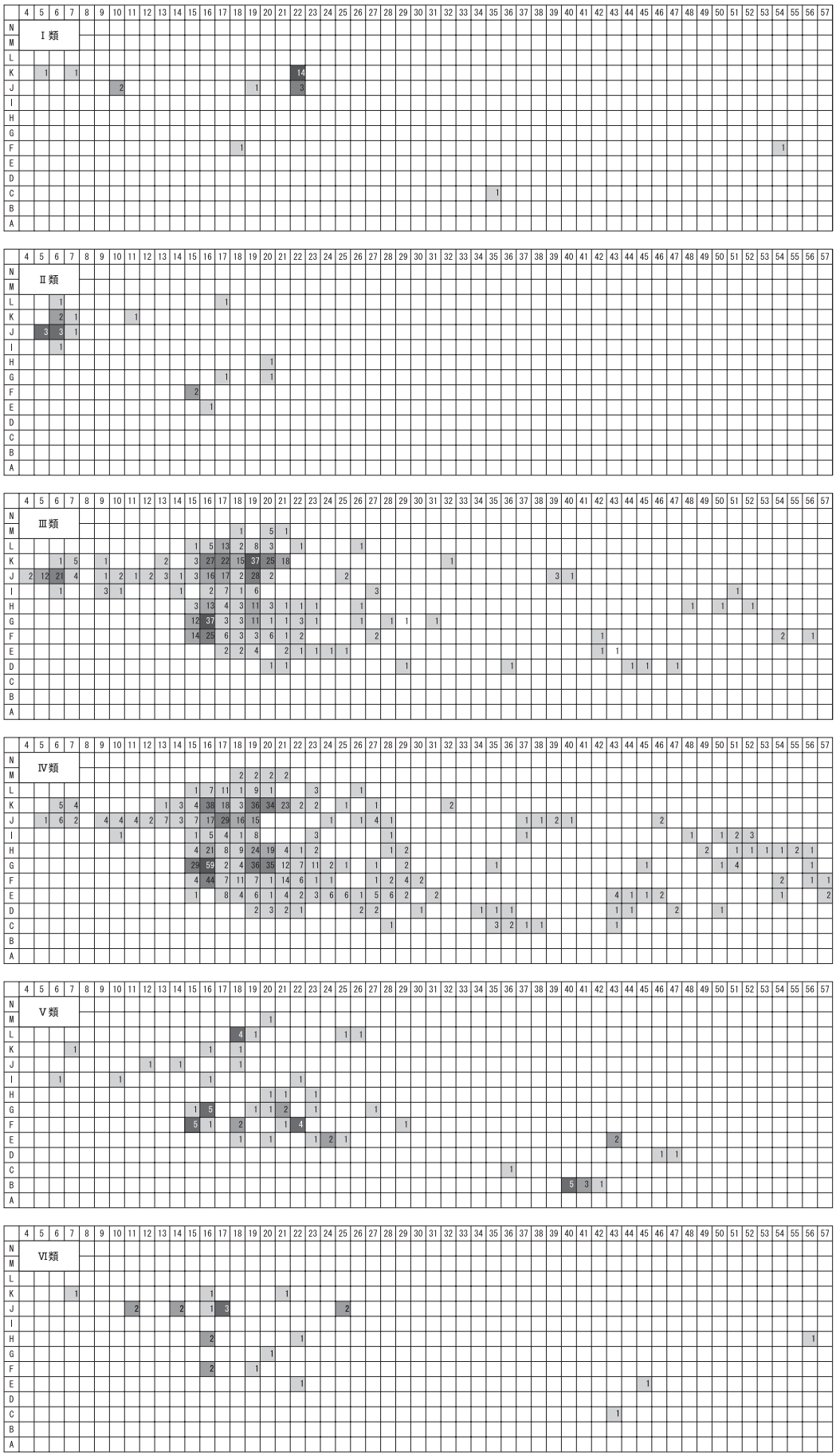
いわゆる台付Ⅲを一括した。Ⅲ部が四角形を呈するもの，円形を呈するもの，飾り部ほかに沈線文を多用するもの，飾り部がW字状もしくは，それに類似した貼付文であるもの，Ⅲ部内面の文様に沈線と縄文を併用するものがみられる。脚部は透かし穴がみられるものが多い，文様は沈線文，連点文，貝殻刺突文，沈線と縄文の併用，無文のものがみられる。

以下，それぞれについて記す。

Ⅰ類，150，151は押型文土器で150は山形，151は格子目である。152～161は変形撚糸文を器面に施す。162は器面に縄文原体を押圧している。

Ⅱ類，163～176は，胴部に曲線的な凹線間に二列単位の施文具で連続刺突，押引文が施されるが163，169，170は口唇部に二列単位の施文具で連続刺突が施される。169は胴部に凹線が施されずヘラ状工具で鋭い直線的な押引文が施される。176は凹線間に沈線文が施される。163，166～168，172，176には滑石を混入している。

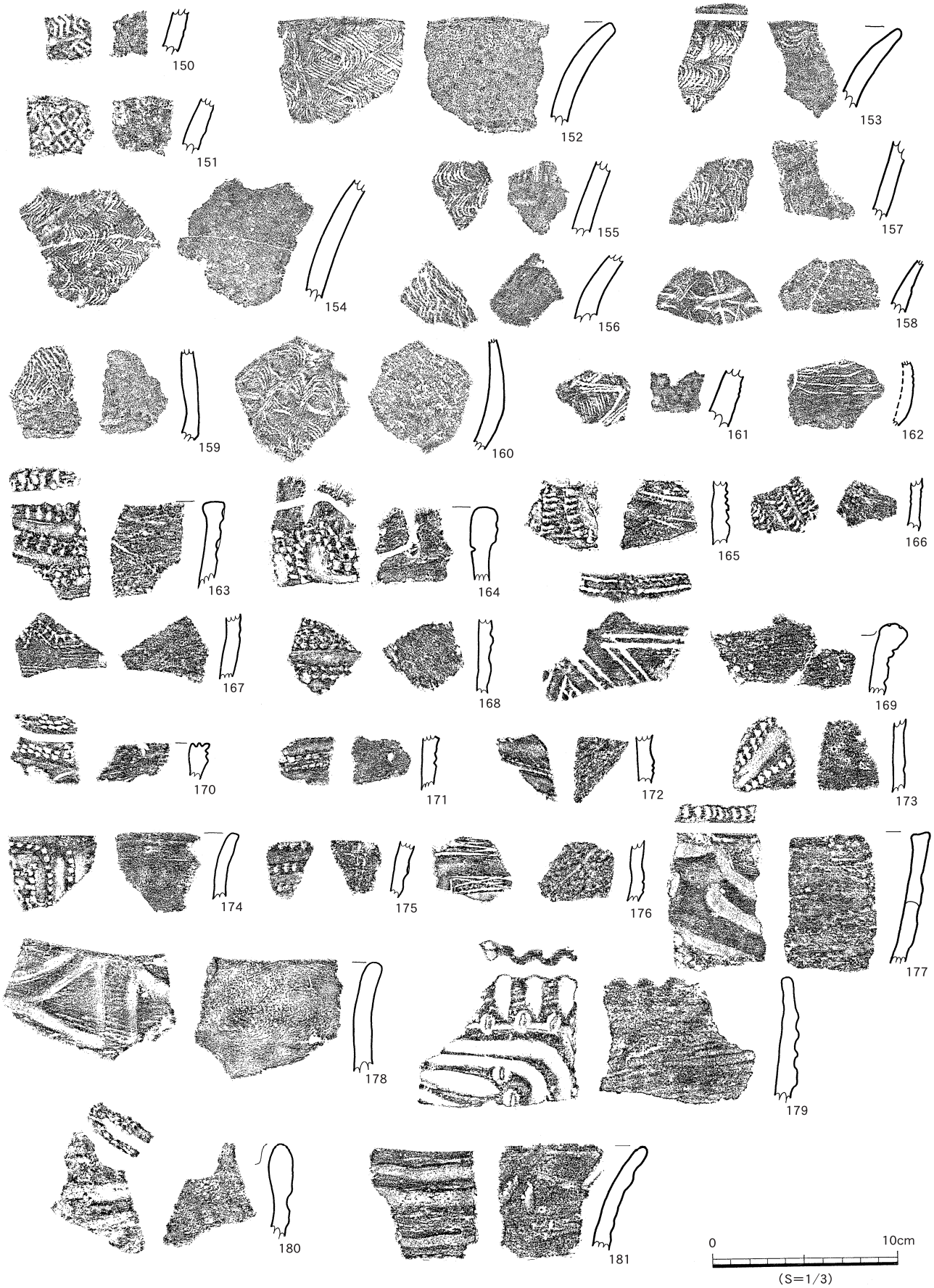
Ⅲ類，177～290は阿高式土器，そこからつながる土器の一群を一括している。177～181は特に太形の凹線が施されるもので177は平坦な口縁部に刻みが施され，179は口縁部上位に表から縦位の凹線，裏から刻みを交互に施し口唇部が波形の形状となる。180は滑石を混入し，口縁部に突起をもち，口唇部に沈線が施される。182～193は口唇部に連続した凹点を施し波状にする，胴部文様はやや直線的な文様や凹点を施す。188～190，194は滑石を混入する。194は平底の底部片である。195～208は口唇部を指頭や棒状工具で押さえ波状にするもので，204



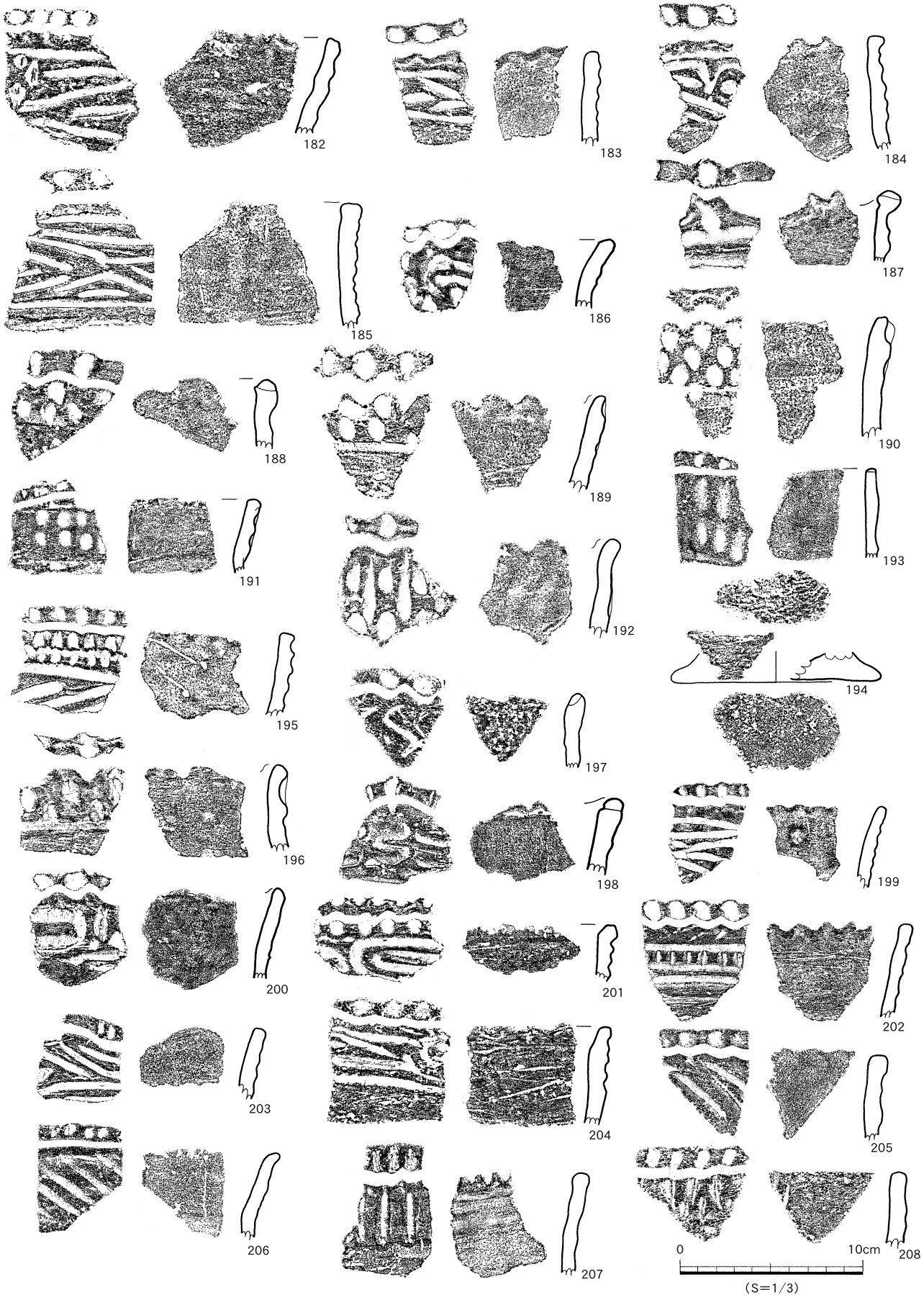
第41図　包含層遺物出土状況①



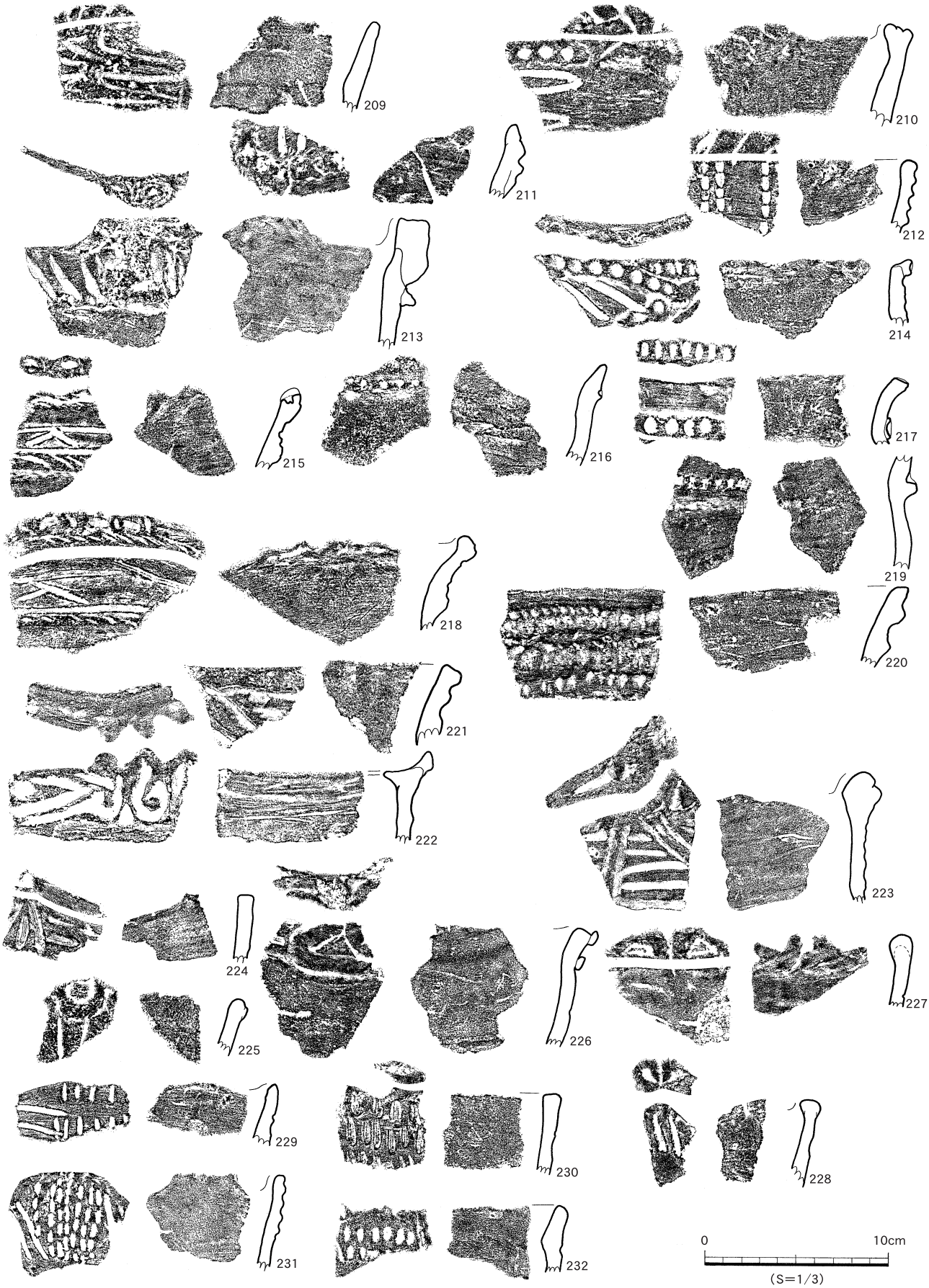
第42図　包含層遺物出土状況②



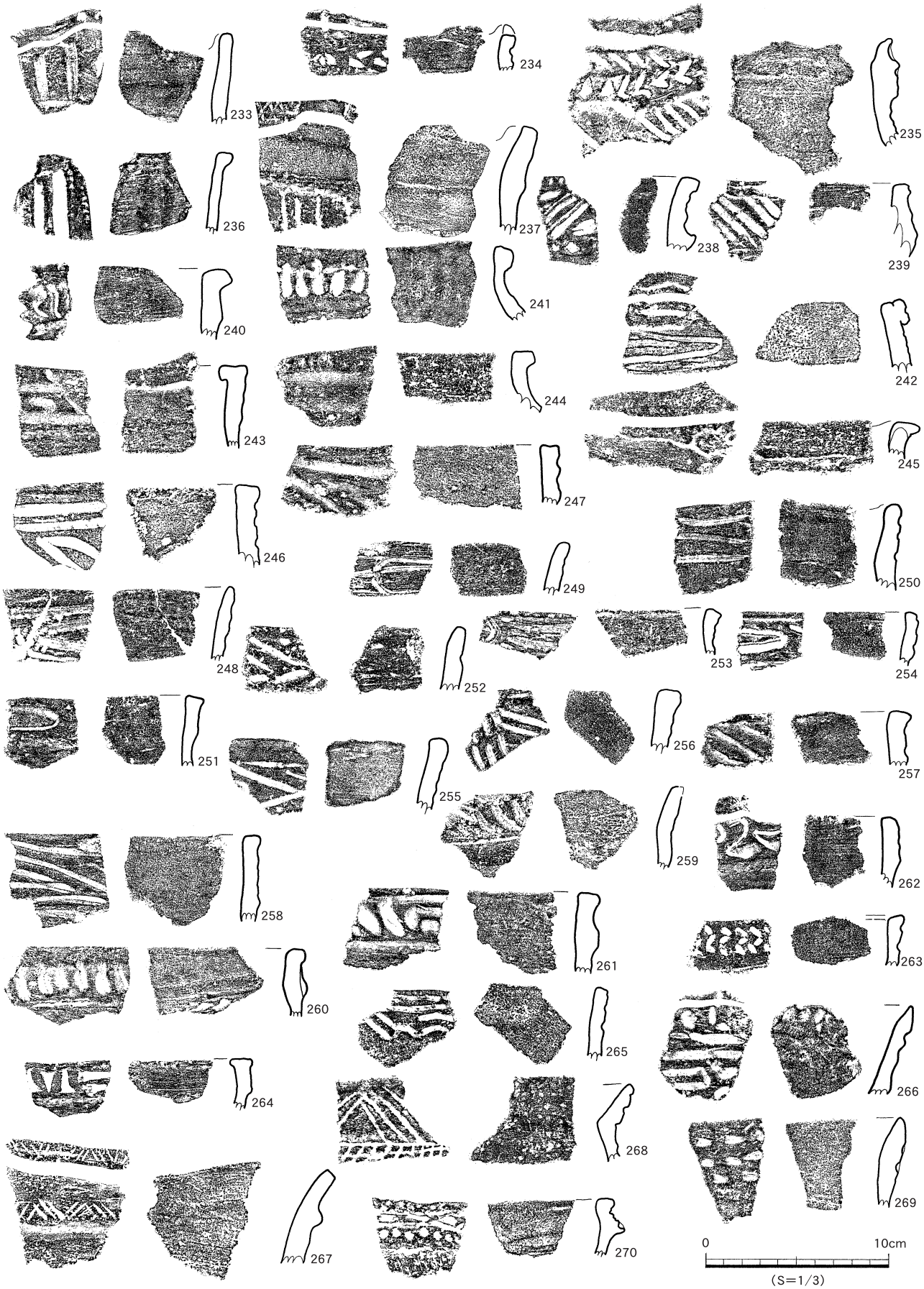
第43図　包含層出土遺物①



第44図　包含層出土遺物②



第45図　包含層出土遺物③



第46図　包含層出土遺物④

は口縁部を肥厚させ，そこに指頭による連点を施す。198・199は外面にＳ字状の凹線を施す。201は口唇部を表裏両面から互い違いになるようにつまみ，口唇部を波状に仕上げる。205～208は口縁部外面に縦位，斜位の沈線を施す。209はねじり紐状，210は編み込み状の突起を口唇部にもつ，212は突起にはならないが口唇部に斜めの刻みを施しねじり紐状にしている。211，213～220は口縁部に突帯を廻らすもので，突帯上に連点や刻みを施す。220は突帯に文様を施さず，突帯貼り付けの際の指押さえ痕が顕著に残る。221は口縁部内面のみ強い屈曲がみえ波頂部をもつのかもしれない。222は口唇部内面側に粘土を貼り付け断面Ｌ字状にし口唇部に広い平坦面を形成する。口唇部から外側に張り出すような鶏冠状の突起をもつ。223～237までは口唇部に突起を設けたり，飾り突起をもつもので223，224～228までは紐状の粘土紐で飾る。229～232は口縁外面に短沈線を密に施した部分をやや突起状にする。235は口縁部外側に粘土貼り付けを行い，そこに羽状の沈線を施し飾り突起とする。238～245は口縁上端外面もしくは内面に粘土紐を貼り付け，平坦で広めの口唇部を形成する。246～258は口唇部等に特筆する特徴がなく口縁部外面に曲線文や斜線文，横線文を施す。259～264は口縁部をやや肥厚させそこに施文する。264は丁寧ななで調整を施した後，削り込んだような，くさび形の文様を施す。267・270は口縁下位に突帯を廻らせる。267は口唇部と突帯上位に斜線文を施す。270は突帯に棒状工具で連点文を施し突帯下位は削りが行われる。鉢形を呈すると思われる。271は口縁下位に幅広の突帯を廻らせ，そこに横沈線，密な刺突文を施す，その上位は斜線文が入り乱れる。268は口縁部で外開きに屈曲し，屈曲下位に横沈線と斜沈線により格子目を施し，その上位に斜線文を施す。277～290は口縁部外面に縦位，斜位の細い沈線を施す。

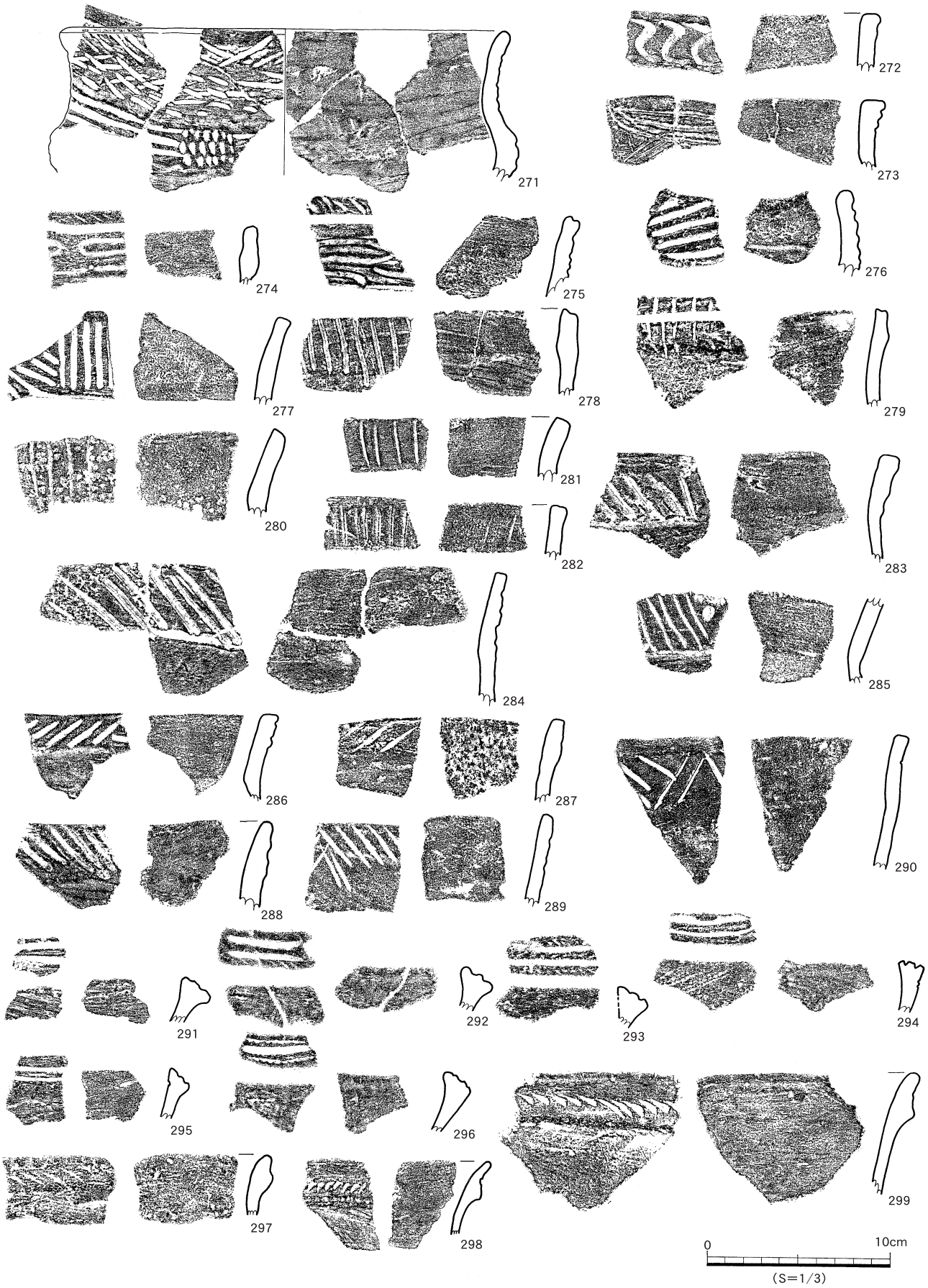
Ⅳ類，291～403は口縁部断面三角形を特徴とする一群である。291～296は口唇部を平坦にすることにより断面三角形状を作出している。口唇部に沈線が廻り細かい刻みが施される。297～352は口縁肥厚部に斜位の刻みや沈線，貝殻腹縁刺突，横走沈線などを単独で施す。297～317が斜位の刻み，沈線を施すもの，318～338が貝殻腹縁刺突を施すもの，339～350は横走する沈線を施すものである。351・352は口唇部と突帯部上位に刻みを施す。353～403は複数の施文を行うものである。353～355は口唇部に刻み目を施し，口縁部に沈線を廻らせる。355は波頂部の口縁外面にポイントとなる凹点を付け，さらに内面に波形の沈線を施す。356～379は口縁端部外面と突帯部に刻みを施し，その間に沈線もしくは太めの凹線を廻らせるもので，359には波頂部に橋状把手が付く。362・363・368・379は凹線端部にポイントとして刺突を施す。366・367・369・370は凹線端部にポイントとして凹点を施す。380～385は沈線が曲線的なものである。383・384は波状の凹線を施す。386～395は口縁端部外面，突帯部もしくはその両方に刻みを施し，その間に貝殻腹縁により刺突を施すもので，沈線を伴うものもある。396～403は断面三角の肥厚帯幅が短いものである。396～400は沈線が施され沈線間に貝殻腹縁刺突が施される。402は貝殻腹縁刺突により横位の沈線状の文様を施す。403は斜位の貝殻腹縁刺突を行い，その中ほどに深い連点文を施す。

Ⅴ類，404～446は断面くの字状を呈し，器面に条痕を残し，貝殻腹縁刺突により文様を施す。404は口縁部に刺突と沈線を伴う。407は波頂部であり，くの字屈曲の度合いが高く，上面観が四角形を呈すると思われる。414～416，418・419，424，432・433，443は胎土に白色粒，金雲母を多く含んでいる。445は貝殻刺突を羽状に施す。439，446は貝殻刺突の下位に棒状工具で連点を施す。

Ⅵ類，447～453は口縁部がやや内弯した形状を呈し沈線間に貝殻腹縁刺突を施す。448は沈線間に連点文も施す。452は胴部にボタン状のポッチをもち，そこに刺突を施す。453は沈線間に間延びした縄文状の施文が見える。

Ⅶ類，454～580は磨消縄文を施す一群で，小池原上層式土器と鐘崎式土器を一括している。454・455は口縁部が真っ直ぐ上に伸び，太めの沈線間に縄文を施す。456・457は頸部で屈曲し口縁が斜め上方にすっと伸びる。458～461，463は口縁端部がＲをえがき口唇端部が小さく上方へ立ち上がる。462～581は口縁部がＬ字に屈曲して，口唇部が平坦となり，そこに沈線文と刺突文を施し，口縁下位に沈線文，渦巻文，磨消縄文を施す。462，463～483はＬ字に折れ曲がった口縁外面に沈線が廻る。464～467は口唇部に外側に突起が付く。481は口唇部文様が羽状の沈線となる。484～497は胴部沈線間に磨消縄文を施す。496は橋状把手部である。498～534は胴部沈線間に縄文を施さない。511は口唇部にビーズ状の突起をもち，そこに穿孔を施す。512は口縁部が内傾し外面に渦巻文と刺突文から伸びる緩い弧状の沈線，さらに棒状工具での押引による沈線を施す。513～517は橋状把手部である。518～525は口唇突起部で518～523は突起部に穿孔や刺突を施す。535～548は浅鉢の形状を呈する。538は口唇に突起部をもち，外面の縄文，口唇部の沈線，細かで密な刺突を施し丁寧な作りである。549は肩部に穿孔こそないものの注口状の突起をもつ，剥落しているがその右側にも同様な突起が付くものと思われる。胴部には渦巻文，磨消縄文も確認できる。胎土には白色粒を多く含む。550～580は胴部片で，550～566は縄文を施す。567～580は縄文を施さない。

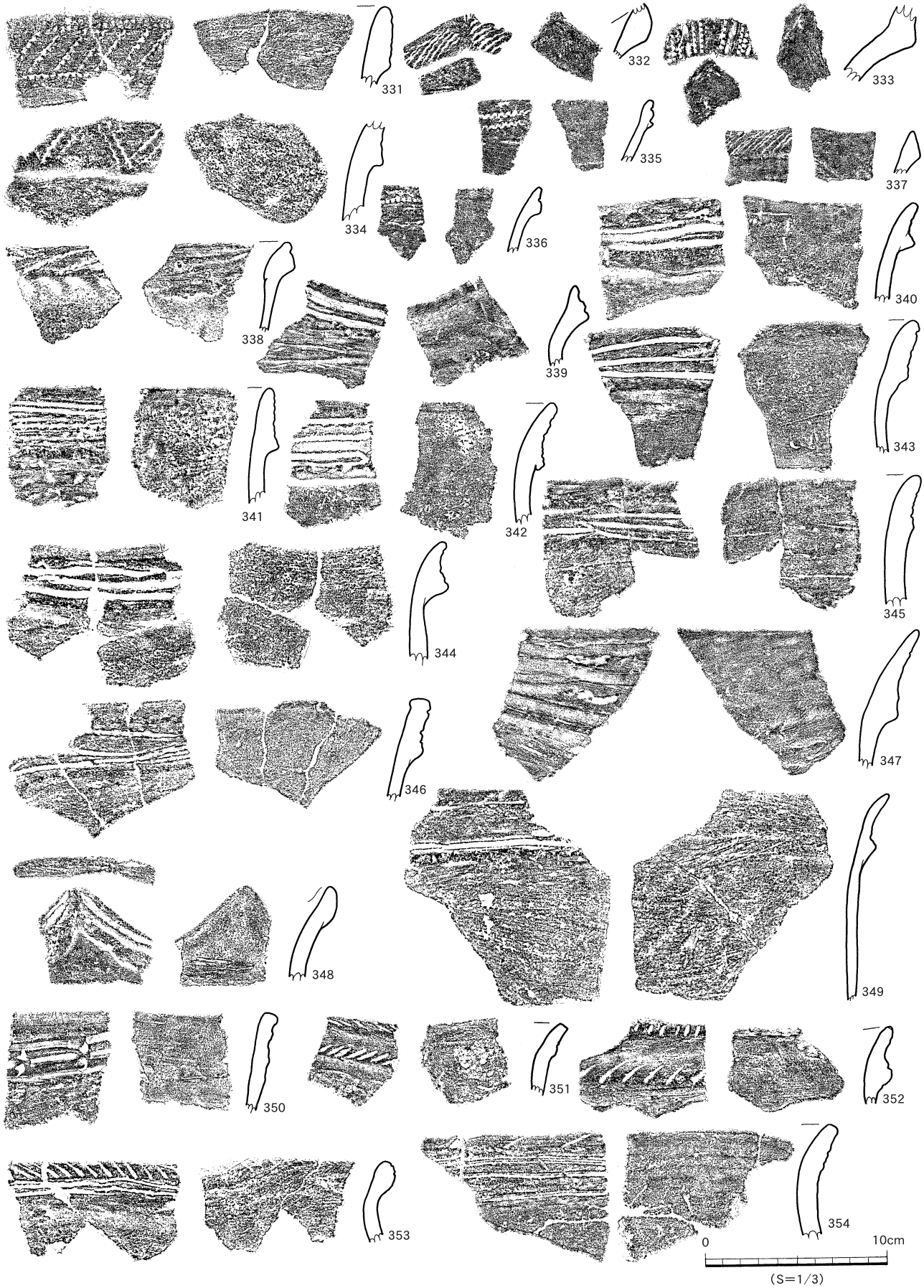
Ⅷ類，従来，北久根山式土器と呼ばれてきた土器である581～598は緩くカーブする短い頸部をもち，口縁部上端から口唇にかけて縄文を施す。口唇部平坦面は狭くそこに細い沈線を廻らすものもある。585は内外両面に縄文を施し器面に穿孔を施し，そこから垂下する沈線を内面に施す。586～589は口唇部にビーズ状の突起をもちそこに穿孔を施し，内面に沈線を施す。589・608は口唇部に鐘崎式土器に類似した刻みが施される。590は口唇部に細い沈線がかすかに見える。胴部に沈線を施し，沈線間に縄文押圧による施文を施す。591～593は橋状把手部及びその近辺と思われるもので，橋状把手の付く内面には左右対称の刺突から始まる曲線状の沈線を施す。594～598は頸部がやや伸びるもので，口唇部に縄文を施す。599～607，609は頸部が長く伸びるもので口唇部に縄文が施される。頸部外面はミガキにより丁寧に仕上げる。607は内面に刺突，沈線が施され，沈線間に縄文を施す。610～650は胴部片で沈線間に縄文を施す。620，622，624，627・628，634，637の縄文施文部，沈線内の一部には赤色顔料がわずかに残る。651～746は深鉢の口縁部片である。651～663は口唇部から口縁部上位にかけて斜位の沈線を施す。651・652は口唇部にＷ字状の貼り付けを施す。665・666は羽状の沈線を施す。668～675は口縁上位に２条の沈線を廻らす。668～670は口唇部に細かい斜位の刻みを施す。674・675は沈線間に縄文を施す。678は胴部片である。679～730は口縁部下位に断面三角形の突帯を貼り付け，突帯上に斜位の刻みを施す。679～714はヘラ状工具で刻みを施す。679～688は口唇部にＷ字状の貼り付けを施す。688～693は口唇部から突帯にかけて縦方向の飾りを施す。692はＳ字状の貼り付けを施す。703～705は口唇突帯間に波状の沈線を施す。715～726は突帯上に貝殻腹縁による刻みを施す。721，725・726はボタン状のポッチが付きそこに刺突を施す。727～734は口縁部に沈線を廻らすもので，732は器形が異なり口縁部が内弯する。735～745は外面が無文のもので，735，737～740は口唇部にＷ字状の貼り付けを施す。741は貼り付けを行わず，Ｗ字を意識した沈線が施される。746は口縁部が内弯し器面に縄文を施し，



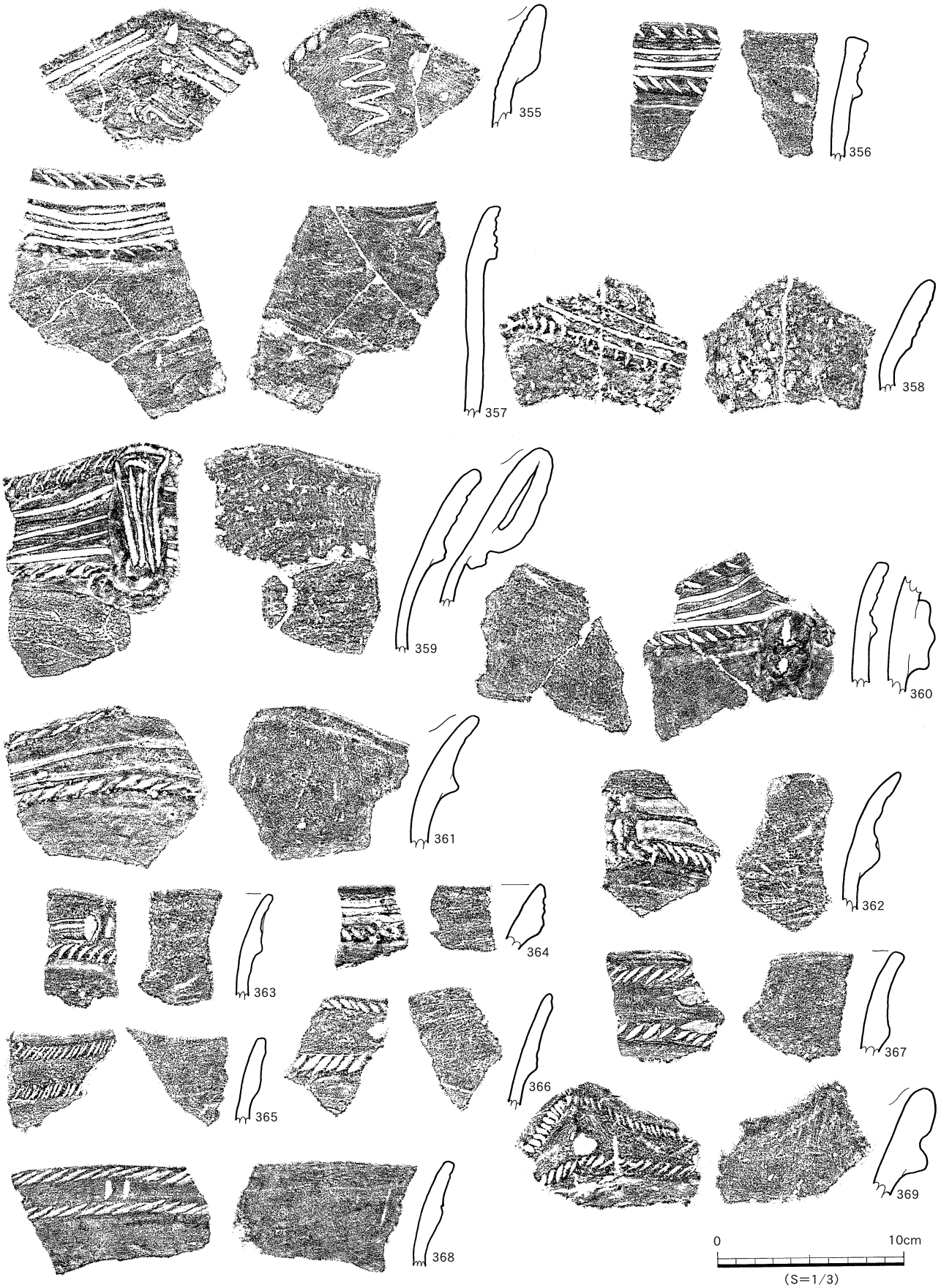
第47図　包含層出土遺物⑤



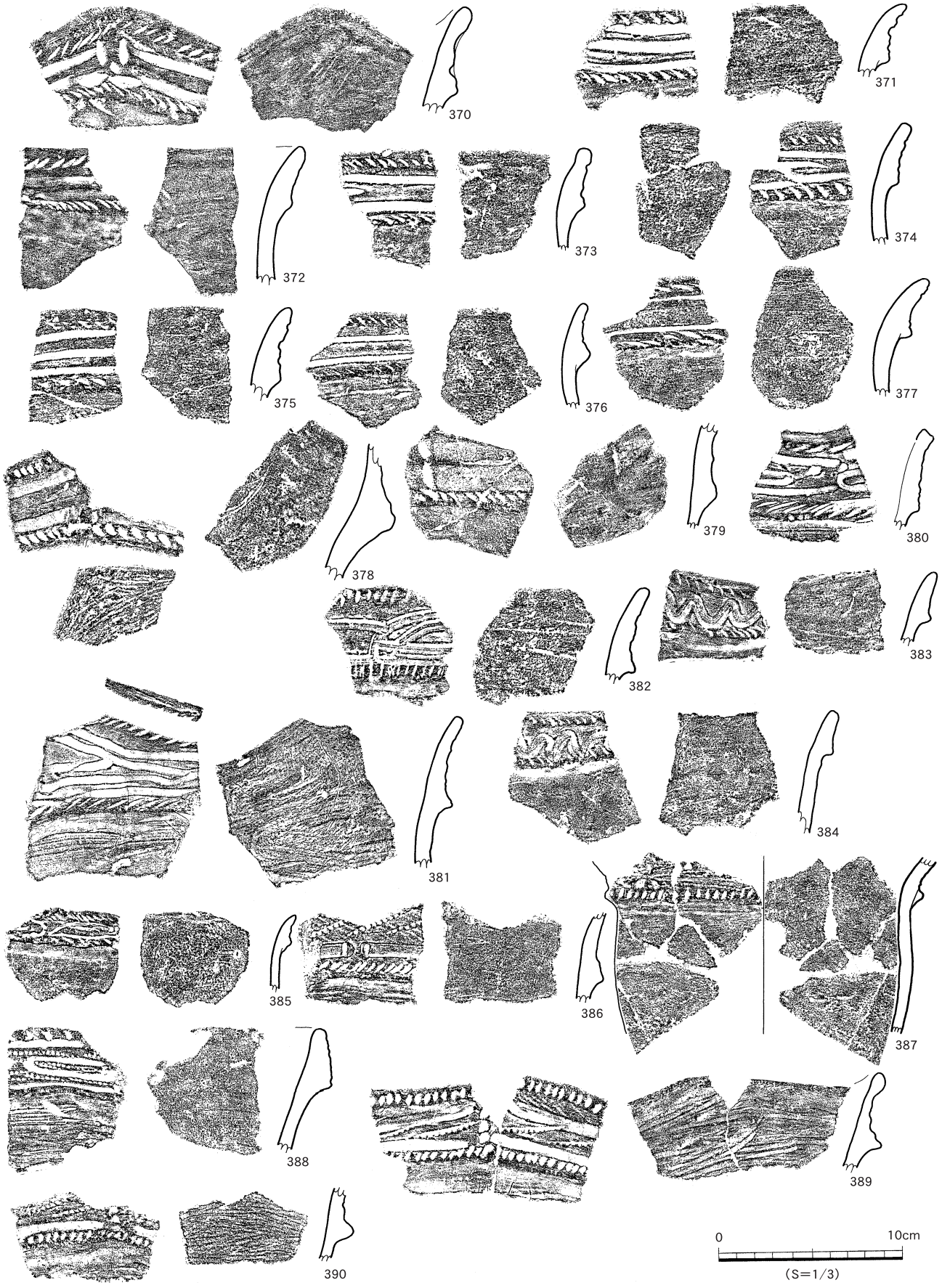
第48図　包含層出土遺物⑥



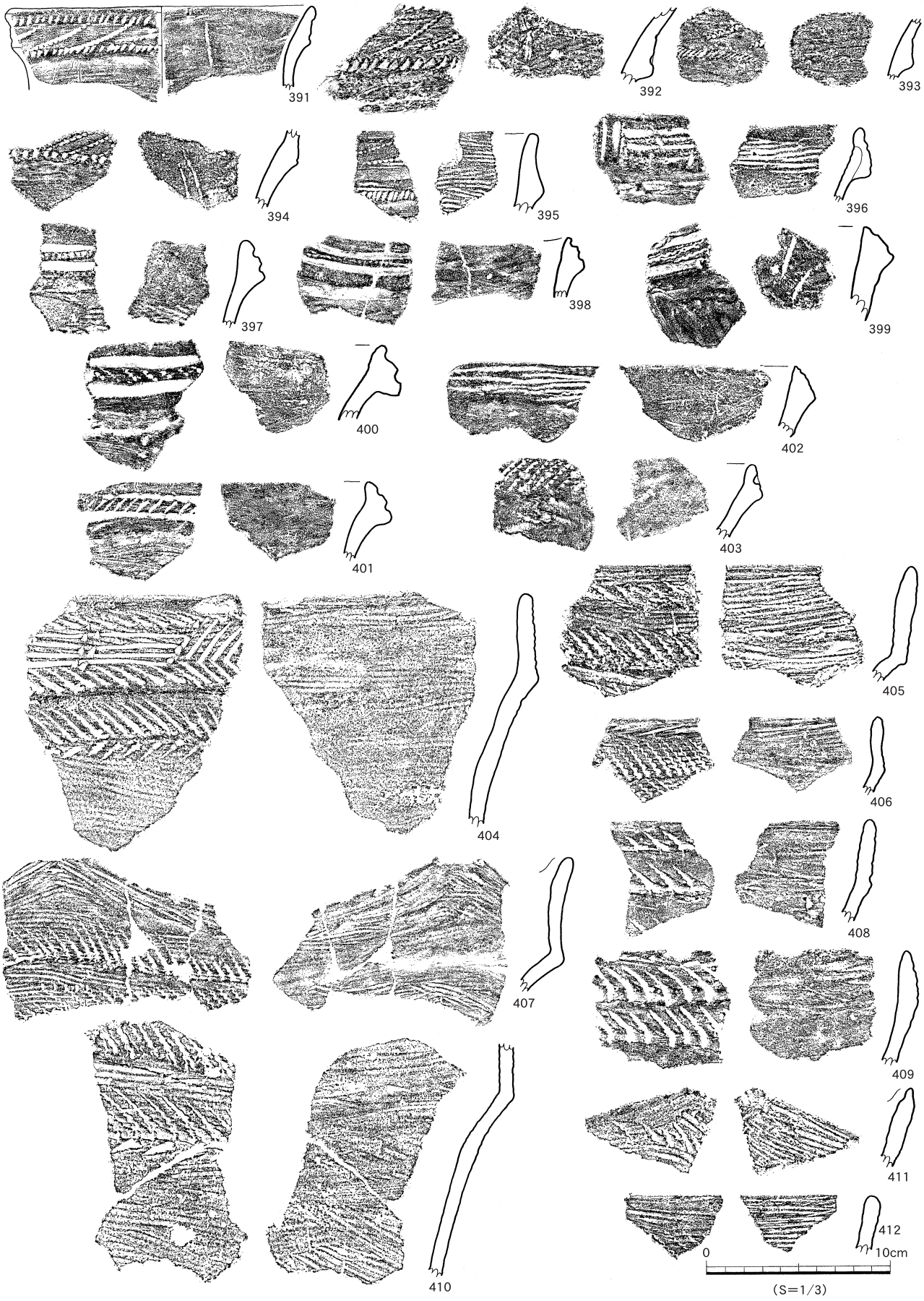
第49図　包含層出土遺物⑦



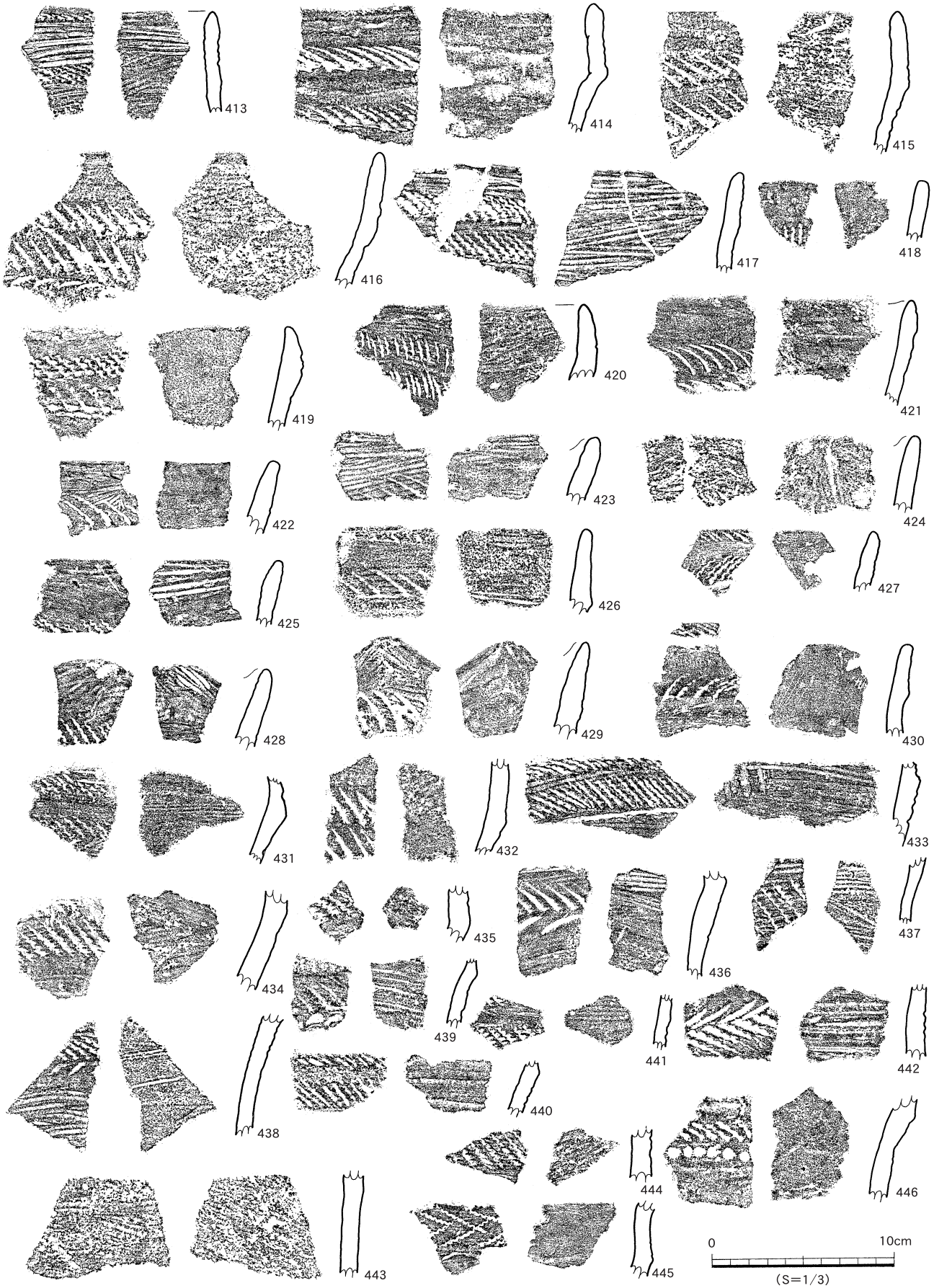
第50図　包含層出土遺物⑧



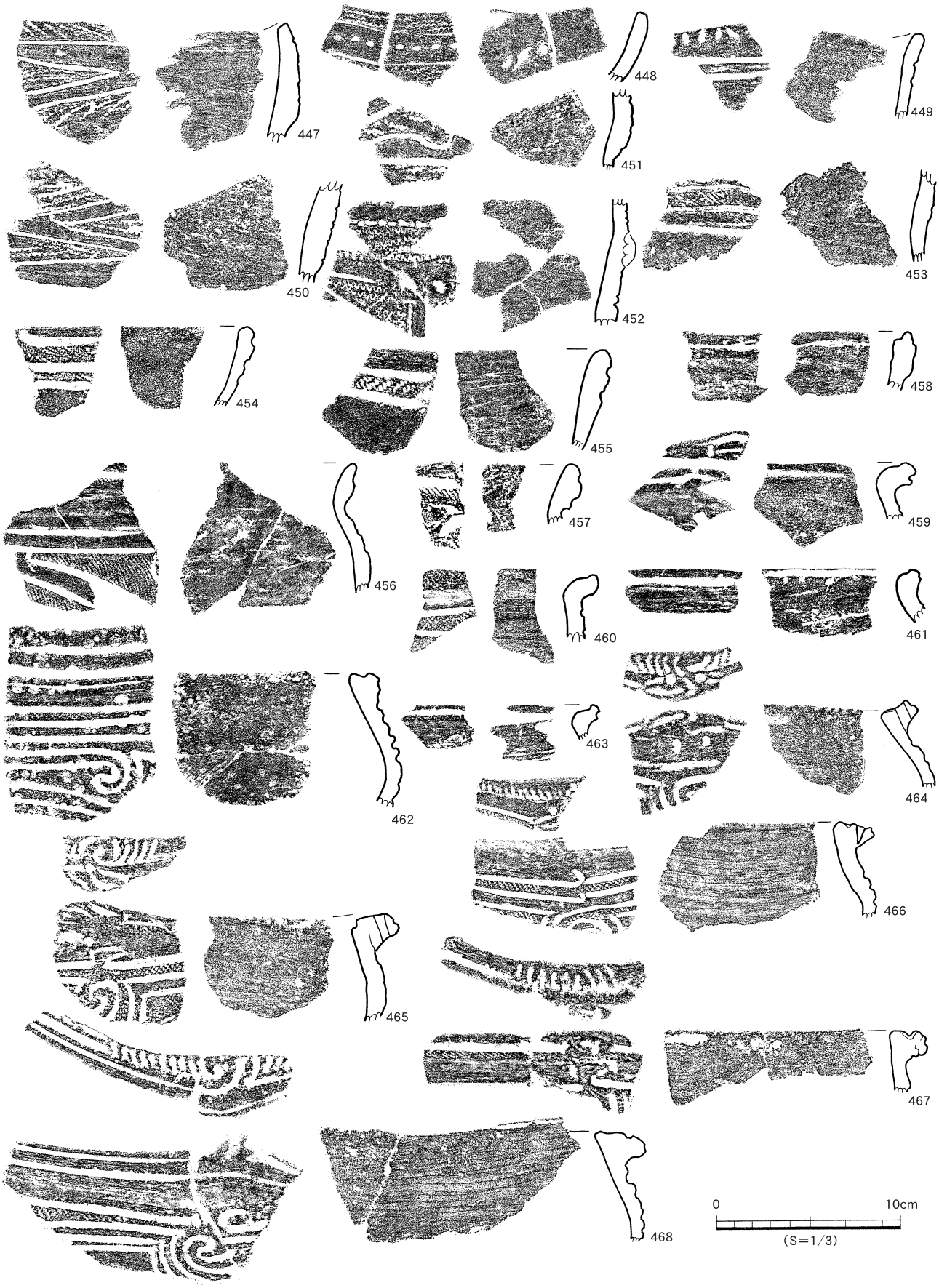
第51図　包含層出土遺物⑨



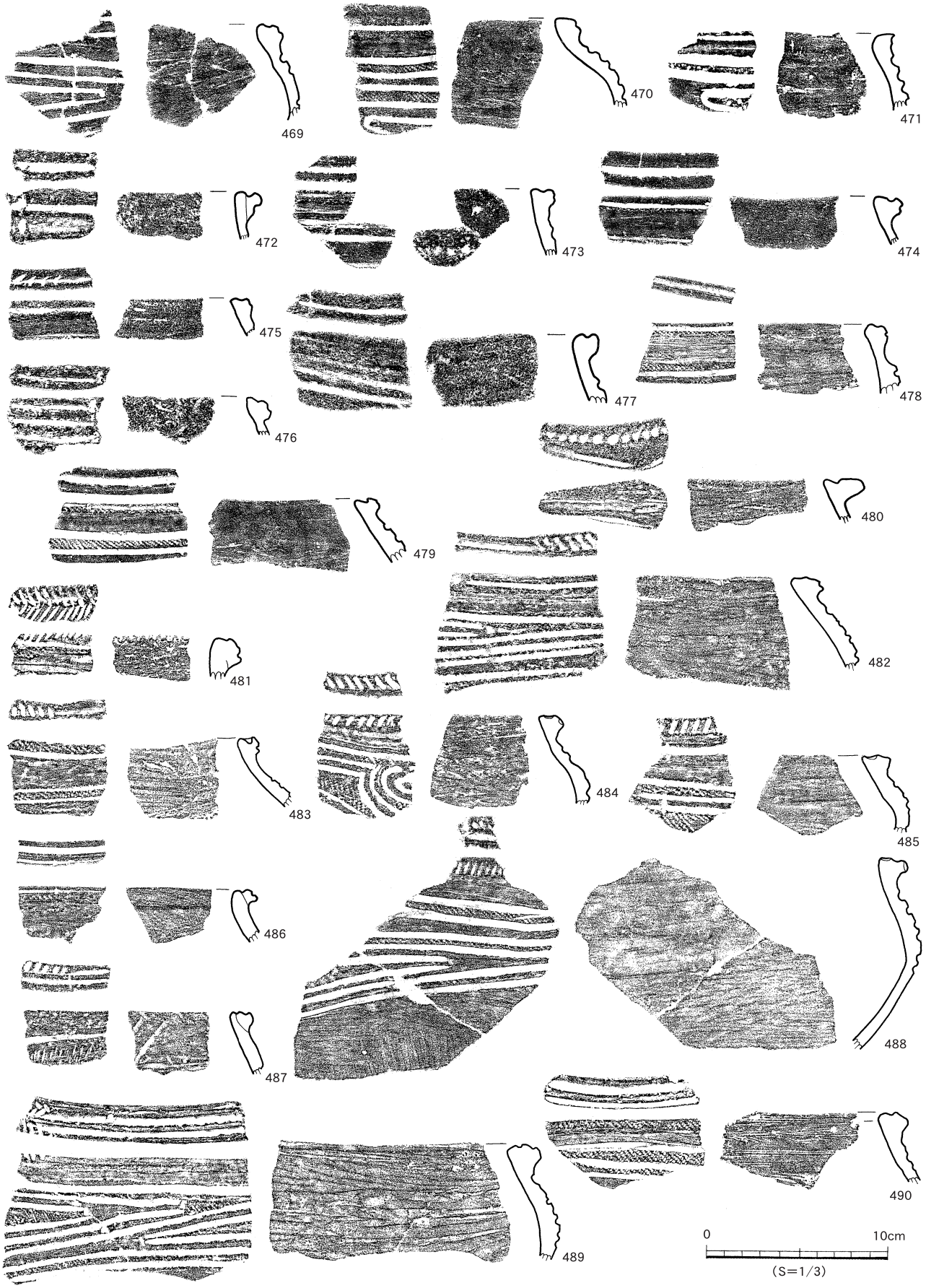
第52図　包含層出土遺物⑩



第53図　包含層出土遺物⑪



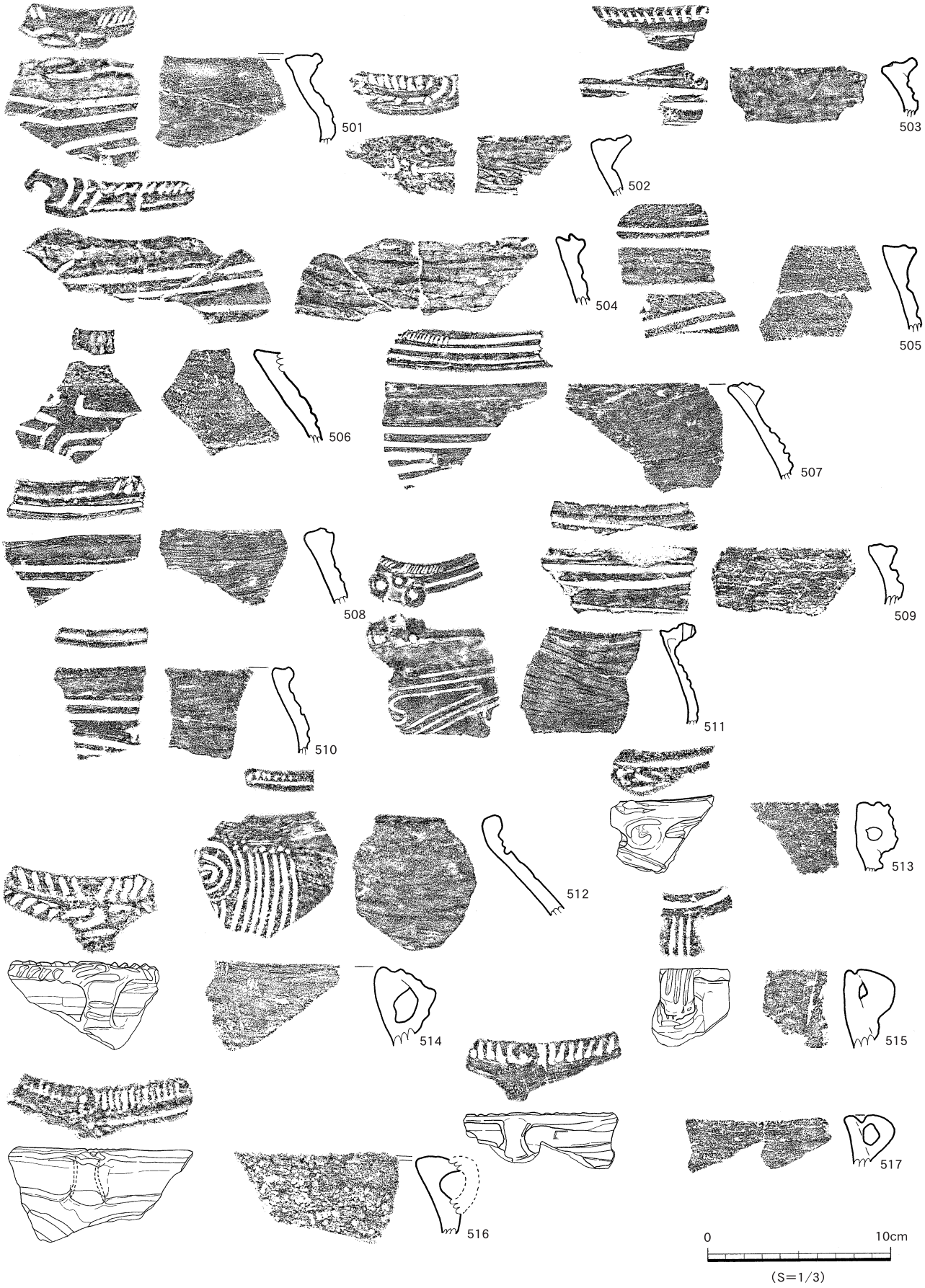
第54図　包含層出土遺物⑫



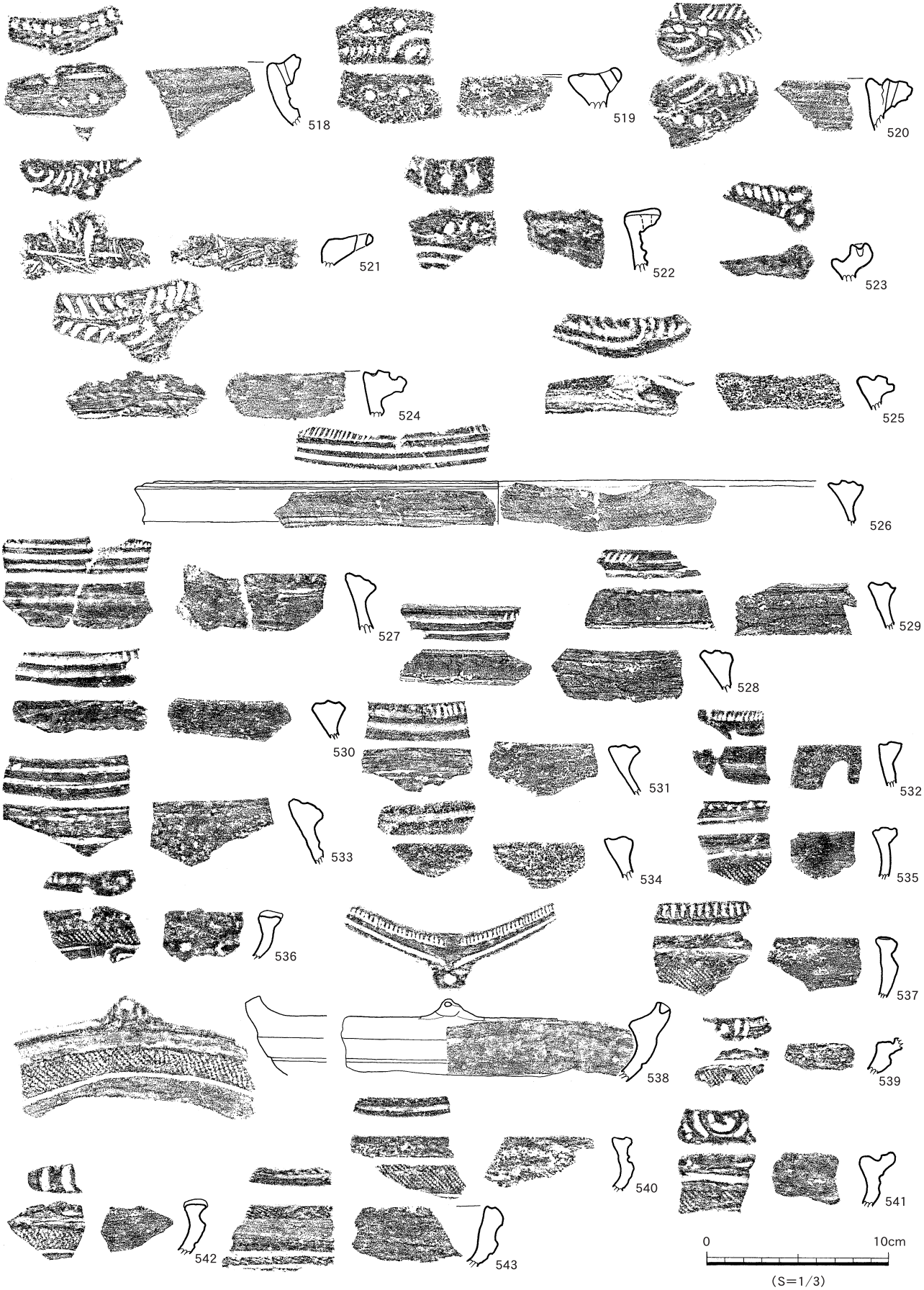
第55図　包含層出土遺物⑬



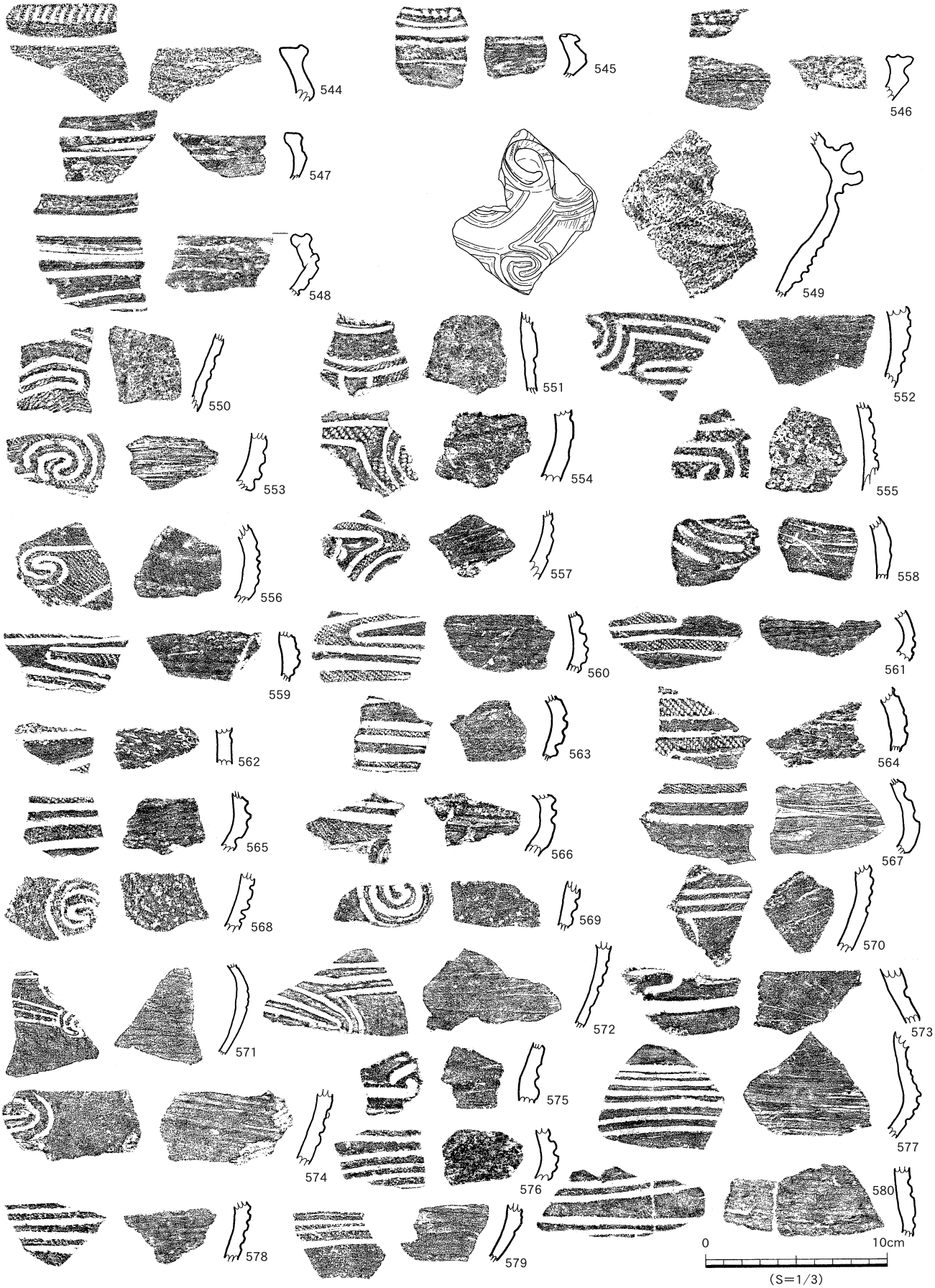
第56図　包含層出土遺物⑭



第57図　包含層出土遺物⑮



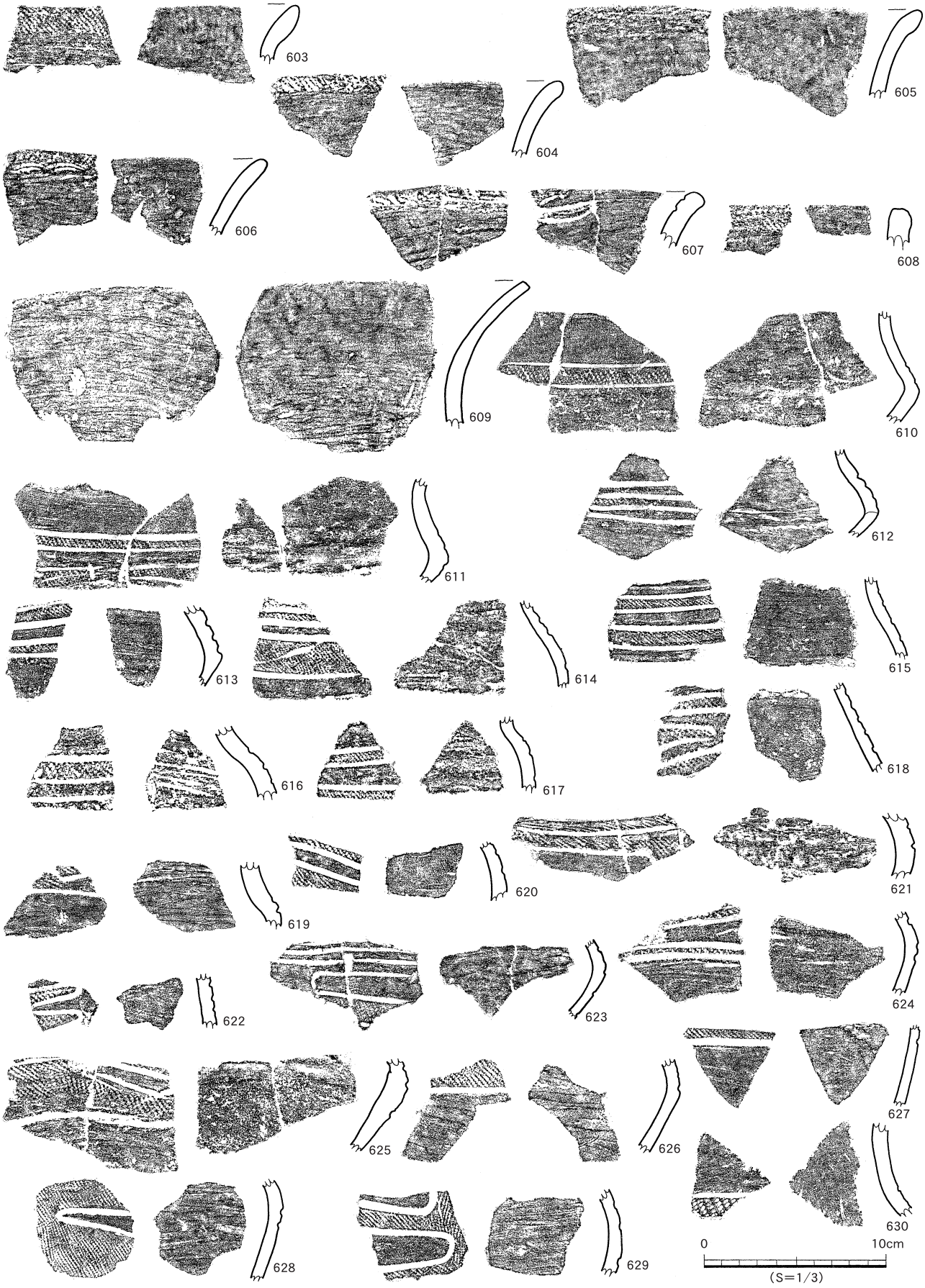
第58図　包含層出土遺物⑯



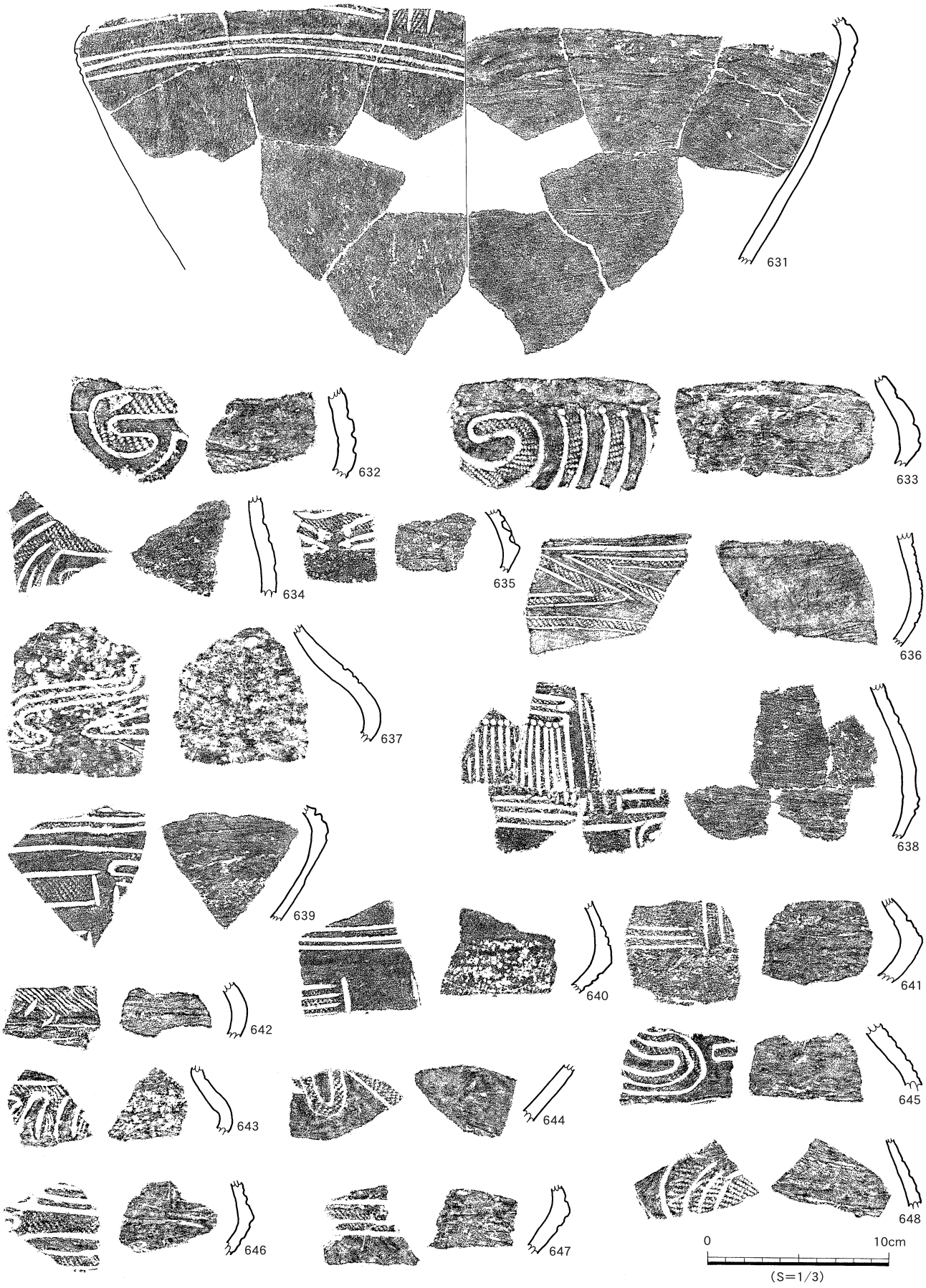
第59図　包含層出土遺物⑰



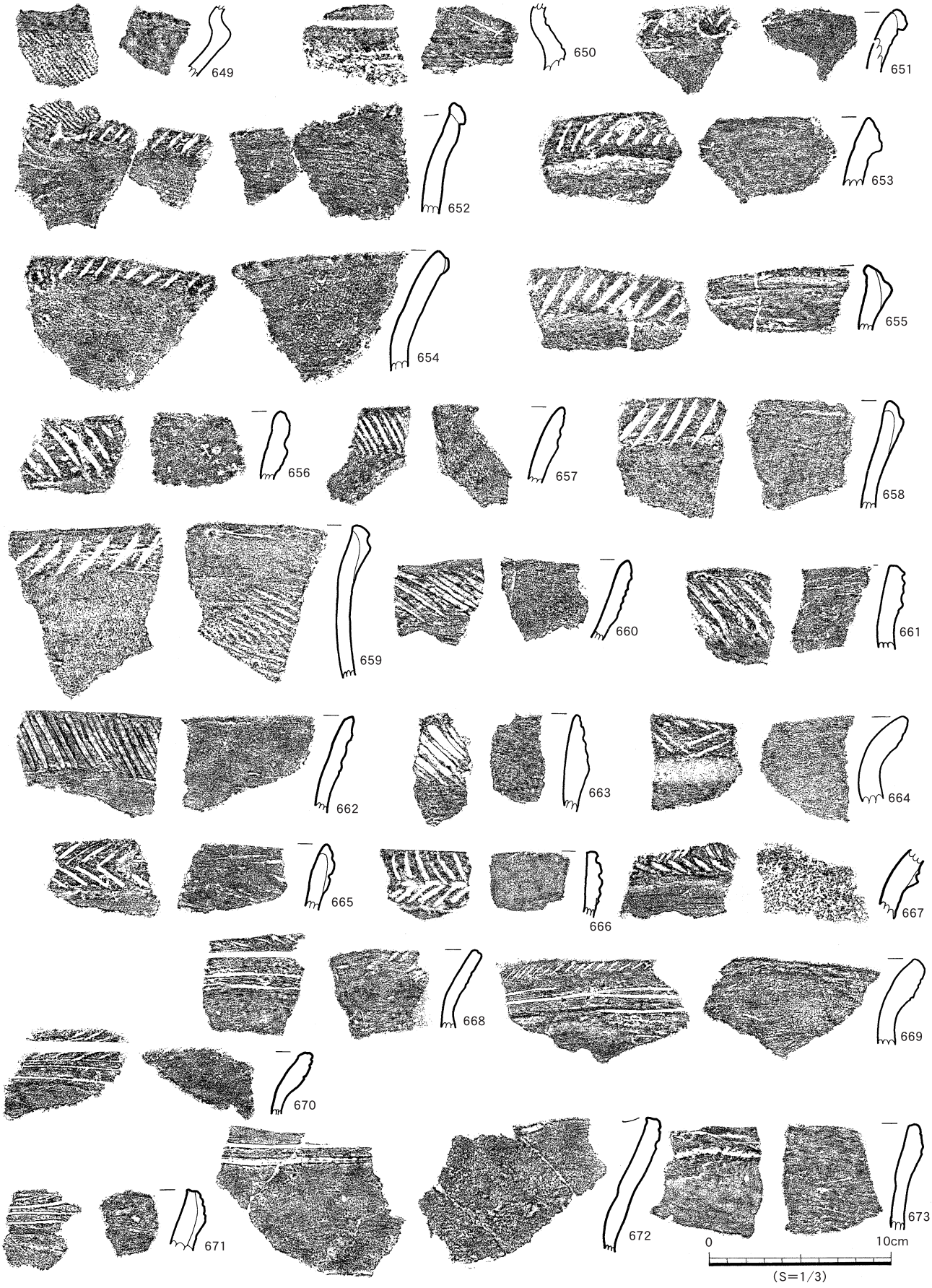
第60図　包含層出土遺物⑱



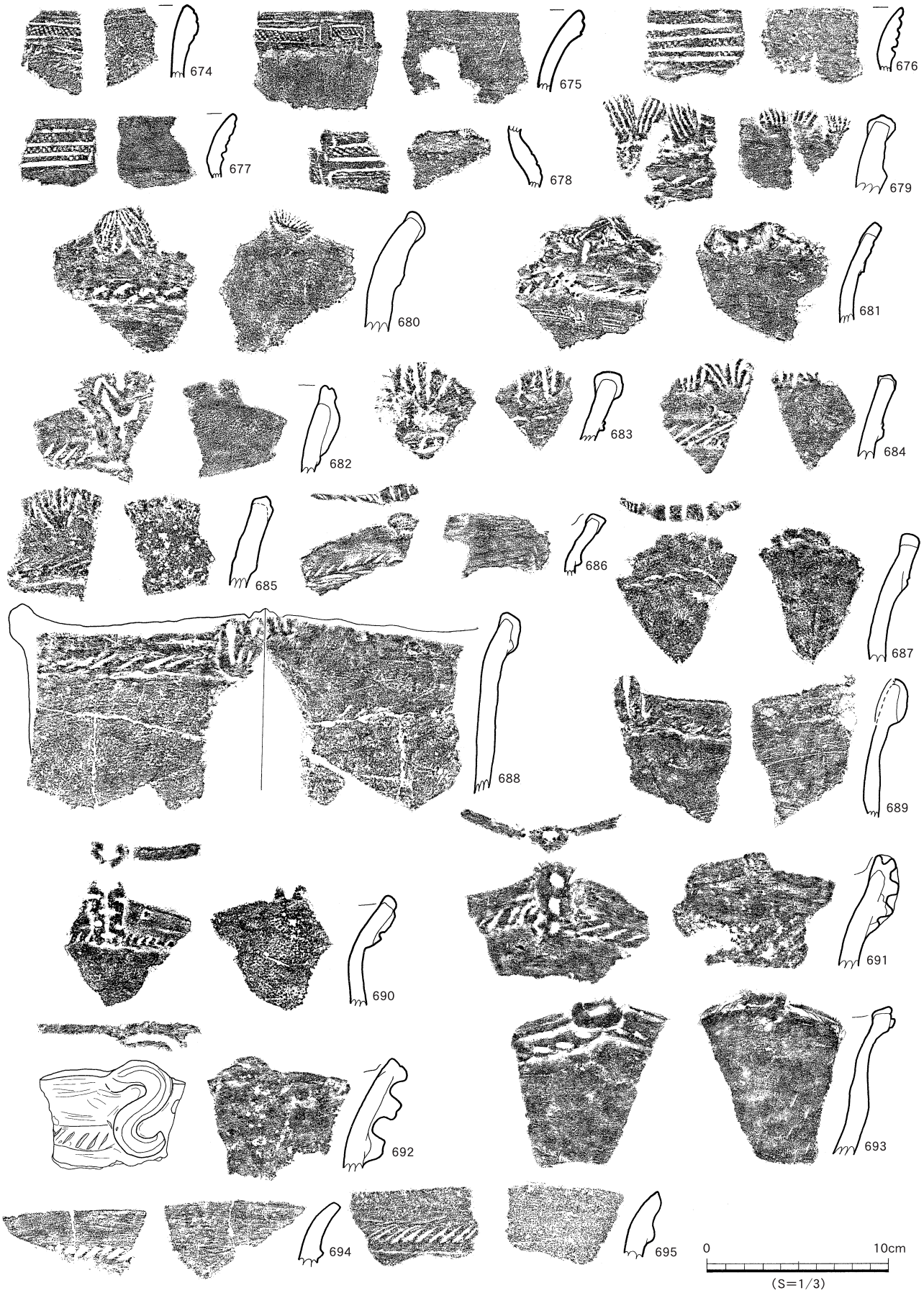
第61図　包含層出土遺物⑲



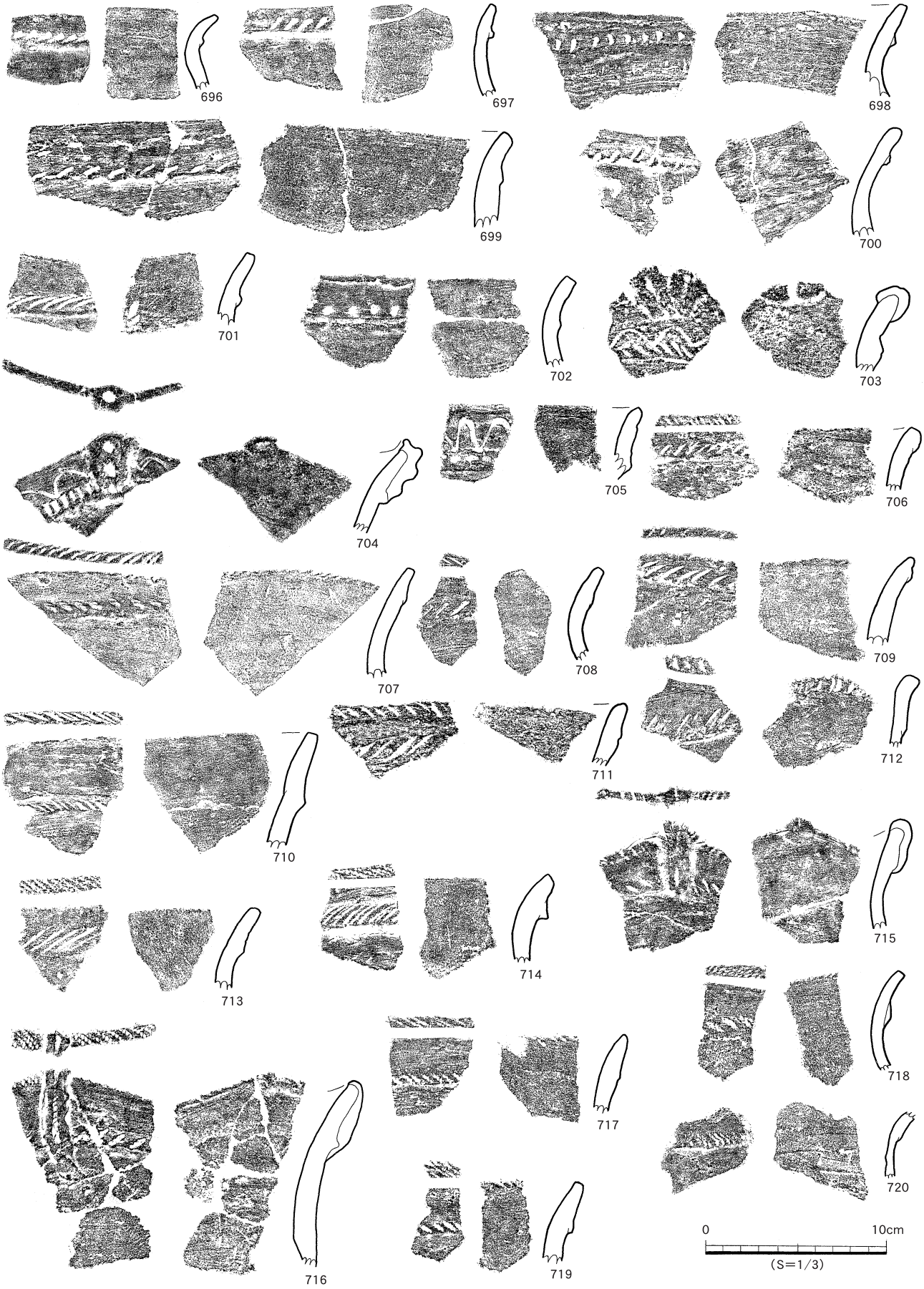
第62図　包含層出土遺物⑳



第63図　包含層出土遺物㉑



第64図　包含層出土遺物㉒



第65図　包含層出土遺物㉓



第66図　包含層出土遺物㉔

口唇部から垂下する沈線と縄文を施した貼り付けを行う。747・748は浅鉢形を呈すると思われる。749・750は皿形と思われる。751は口唇部に1カ所刺突を施す，ミニチュア土器と思われる。752～753は脚部片で底部が抜けている。754は貼付け底が脚部から抜け落ちたものと思われる。

Ⅸ類，755～781はやや内弯する口縁部と，緩やかなカーブをえがく胴部をもち，口縁部と胴部に沈線，沈線間に縄文を施す。従来，辛川式土器と呼ばれている。755～776まで口縁部片でいずれも緩やかに内弯する形態である。755・756・761・762・764は波状口縁を呈する。755・756は波頂部に刻みを施し，その下位，文様帯中央に弧状沈線を施す。757～760，763，765～776は平縁口縁を呈し，757は沈線間の縄文がやや太めである。766，770は沈線間外に縄文を施す。769，771は条痕状の沈線である。774は口縁部の内弯が強くキャリパー状を呈する。777～781は胴部片である。778は胴部屈曲部に連続刺突を廻らし，779～781は同部位の沈線間に連続した沈線を施す。780は沈線間外に鋸歯状の沈線を施し，781では細い横走沈線に雑に縦位の短沈線を施す。

Ⅹ類，782～807は口縁部，頸部の屈曲がシャープで頸部屈曲部内面には稜がみられ，器面には沈線，縄文刺突などの施文が施される。783～792は口縁部片で，783～789は波状口縁を呈し，783・785・787は波頂部にV字の刻みを施す。790～792は無文である。口縁端部内面に指押さえによる凹線状のくぼみがはっきりし頸部の屈曲が強くなるものと判断した。793～801は胴部片である。794・795・799～801は施文パターンの変化点で，沈線間に凹点や対向弧文が施される。802～807は当該土器の底部と考えられるもので，いずれも底径が小さい。

ⅩⅠ類，808～811は三万田式土器である。外反する口縁部に太めの凹線が多数廻る。811は胴部片でそろばん玉状の器形を呈し，屈曲部外面に細かな刻みを施す。

ⅩⅡ類，812～814はやや内弯しながら外開きする深鉢の口縁部で外面に数条の沈線が廻る。815は口縁が大きく外開きし口唇端部が小さく立ち上がる，浅鉢の口縁部である。816～819は丸い胴部に短い口縁部が立ちあがり，口唇部が丸くなる。820は深鉢と思われる。口唇直下外面に沈線が廻り，口唇部にリボン状突起が付く。一部に赤色顔料が残存する。822は口縁部が内弯し，口縁と胴部の境で段をもつ。823は胴部外面に三叉文が描かれる。その沈線中には赤色顔料がわずかに残る。824～831は器面に比較的条痕を残すもので，825・826は口縁部がやや肥厚する。828は口縁が内弯する。829～831は口縁端部を肥厚させ突帯状とする粗製の深鉢である。832～835は底面に組織痕の残る底部片で，832は布目，833～835はアンギン編みの圧痕が残る。

ⅩⅢ類，その他不明な土器，底部片，土製品を一括した。836～839は口唇部にねじり紐状の突起が付く，840・841は口唇部に斜位の刻みを施す。841は口縁部に棒状工具の押引による沈線を施す。842～844は口縁部に曲線的な沈線を施す。842は沈線間と口唇部外側に貝殻腹縁の押圧を施す。843はS字状の沈線を連続して施していると思われる。845は口縁部が屈曲し，外開きし，外面に対向する斜位の沈線を施す。846は口縁部が内面方向へ断面三角形を呈し，口縁外面上下に縦位の短沈線，その間に斜位の沈線を施し，施文部位以下は削りが施される。847はわずかに内弯し，口唇部が平坦，外面に，非常に浅い沈縁が縦，横に施される。848は口縁がやや外反する口縁部がわずかに肥厚し，外面に貝殻腹縁刺突と，粘土紐貼り付けの飾りを施す。849は胴部片で幅広の突帯を作り，中央をやや太めの沈線で区画し2条の突帯の様に仕上げ，突帯上に貝殻腹縁の押圧を施す。850～853は口縁部に沈線を施す。850は沈線で長方形の区画を作り，その中に横位の沈線を施す。851は沈線間に竹管状の工具で連続刺突を施す。852は3条の沈線間にヘラ状工具で2段の連続刺突を施す。853は沈線間の幅が広く，その中に縦位の沈線を連続して施す。854は口縁が外反し，口唇部が外を向く，そこに2条の沈線を廻らし，その両側に刻みを施す。口唇部下位にも数条の沈線が廻る。855は口縁部が外反し，口唇部が平坦で，口唇部に沈線を廻らし，その両側に刻みを施す。856は口縁部が肥厚し，口唇部と肥厚した口縁に沈線を廻らし外面沈線の上下に連続刺突を施す。857は口唇直下で外反し，口唇部に沈線を廻らせ，その両側に羽状に刺突を施す。口縁内外両面に沈線を施し，内面にはヘラ状工具で刺突を行い，外面には不規則な刺突を施す。858は口唇部に羽状の刻みを施し，外面に沈線が廻る。859は口縁上端にわずかに貝殻刺突が確認できる。860は口縁部がわずかに外反し外面に貝殻腹縁刺突が施され，その下でわずかに段を有する。861は頸部で外反し口縁部がわずかに肥厚する。口唇直下に沈線を廻らせ，その下に左右対称に弧状の沈線が施され，その横にはさらに沈線が廻ると思われる。862は橋状把手部の一部と思われる。口唇付近に波状の沈線を施す。863・864は波状口縁の波頂部である。863は口縁部は突帯貼り付けによりわずかに肥厚し，斜方向の条痕を残す。864は口縁部が小さな断面三角形状を呈し，波頂口唇部とその下位に棒状工具による刺突を施し，口縁部外面の刺突部から2条の沈線が廻る，口唇部には斜位の刻みも施される。865～867は口縁部がわずかに外反し，肥厚するもので外面に貝殻腹縁による斜位の刺突，羽状の刺突を施す。868は口縁部が外反，肥厚し外面に3条の沈線を廻らし，その間に大きめな貝殻腹縁刺突を施す。869～871は口縁部がやや内弯し，869は口縁部が波状を呈するものと思われ，口唇部に縄文，外面に貝殻腹縁刺突を施す。870は口縁部が肥厚し，縦位の粘土紐貼り付けを行い，そこにヘラ状工具で刺突を施す。さらに口縁には縦位の沈線，横位の沈線が施され，沈線間に貝殻腹縁刺突も施す。871は口縁部がやや肥厚し，粘土紐貼り付けを行う，そこを沈線で縦位に2分割し，さらに横位の刻みを施す。口縁部文様は貝殻腹縁刺突が主でわずかに沈線も確認できる。872・873は小破片で傾き等はっきりしないが口縁部がL字に折れ，そこに沈線と縄文を廻らせるものと思われる。沈線内には赤色顔料が残存する。874は口縁部がわずかに外反し，外面に刺突から始まる沈線が施される。875・876は口縁部が外傾し，口唇部が小さな断面三角形になり，そこに棒状工具で連続刺突を施す。877～879は口縁部がわずかに外反する器形を呈し，877・878は口唇部に刻みを施す。879は全くの無文である。880は波状口縁，口縁はわずかに肥厚し，無文である。881～887は無文の口縁部で，881は波状口縁となる。882・883，885は小さな突帯を廻らせ，口縁断面三角形を呈する。884，886・887は口唇部のみが断面三角形を呈すると解した。888～890は器面にヘナタリの観察できるものである。891は器壁が薄く，縦位の凹線を施す。892・893は胴部片で892は沈線を斜方向に雑に施す。893は非常に細い沈線で菱形格子が施される。894～910は平底から若干上げ底になった底部片である。911～921は圧痕のついた底部片である。911～915，917・918，921はスダレ状圧痕，916はモジリ編みによるカゴ類の圧痕，919は平編みによる圧痕，920は綾編みによる圧痕と思われる。922～946は円盤状土製加工品で922は阿高式土器の突起部，923～927は市来式土器，928・929・931は磨消縄文系の土器，930は阿高系の土器を利用している。944～946は中央に穿孔を施す。

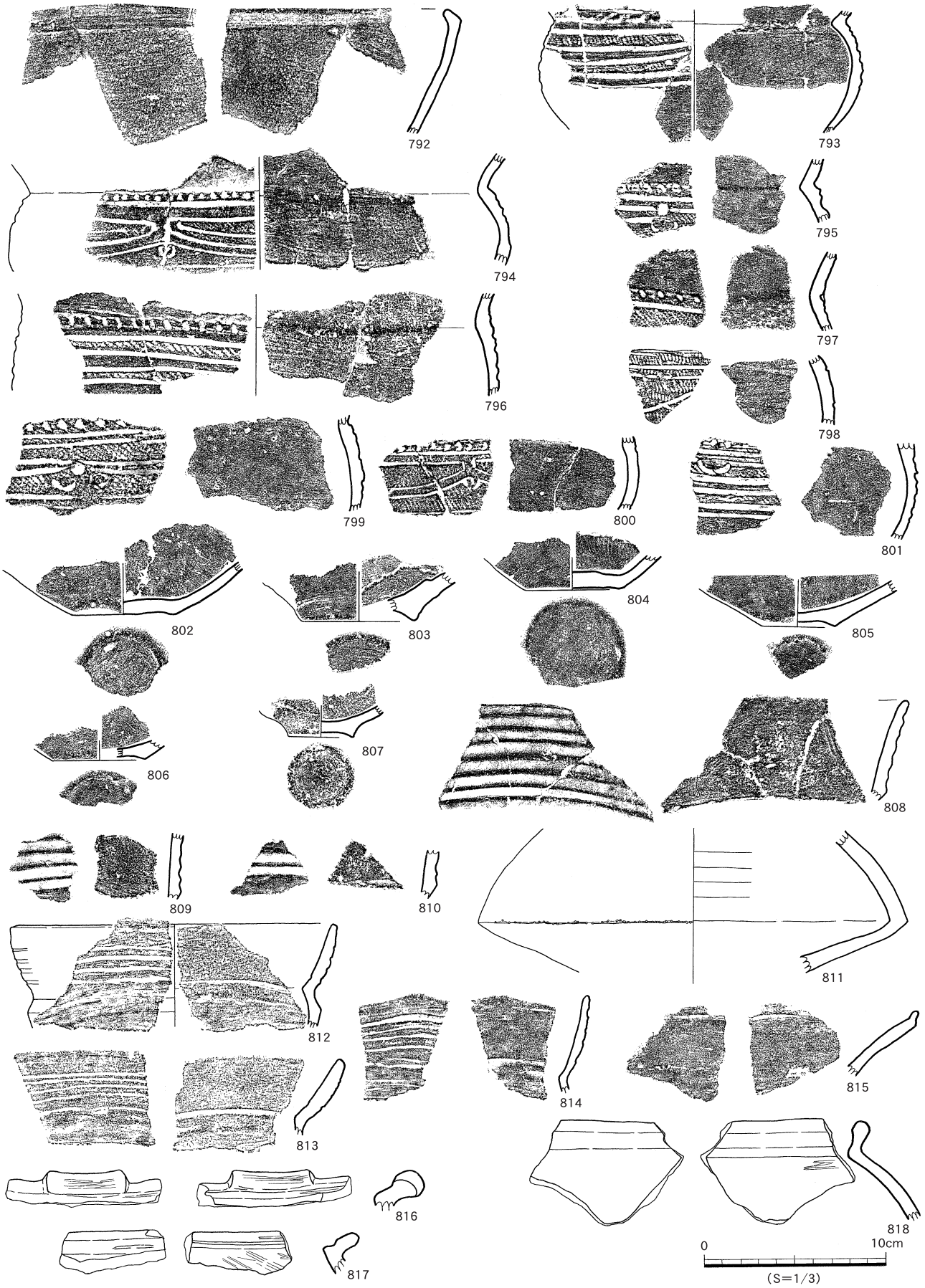
ⅩⅣ類，947～953，955～993は皿部片で947～953，955～960は上面観が4角形を呈すると思われ，961～993は平面観が円形を呈すると思われる。971～974はW字状を意識したような粘土紐貼り付けがみられる。954，994～1046は脚部片である。994～1034は沈線，刺突，貝殻刺突を文様の主体とする。1041～1046は沈線と縄文を文様として施す。



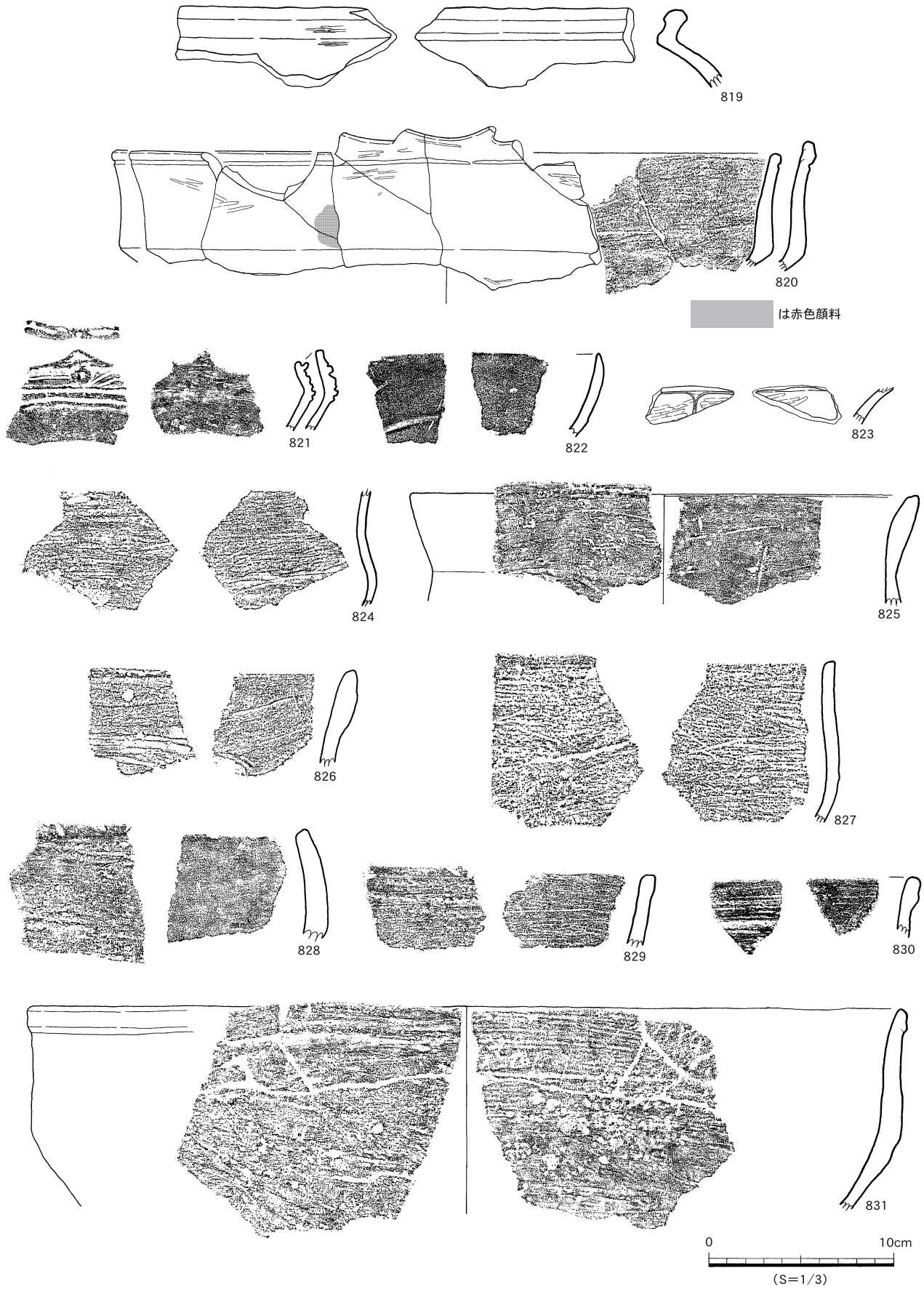
第67図　包含層出土遺物㉕



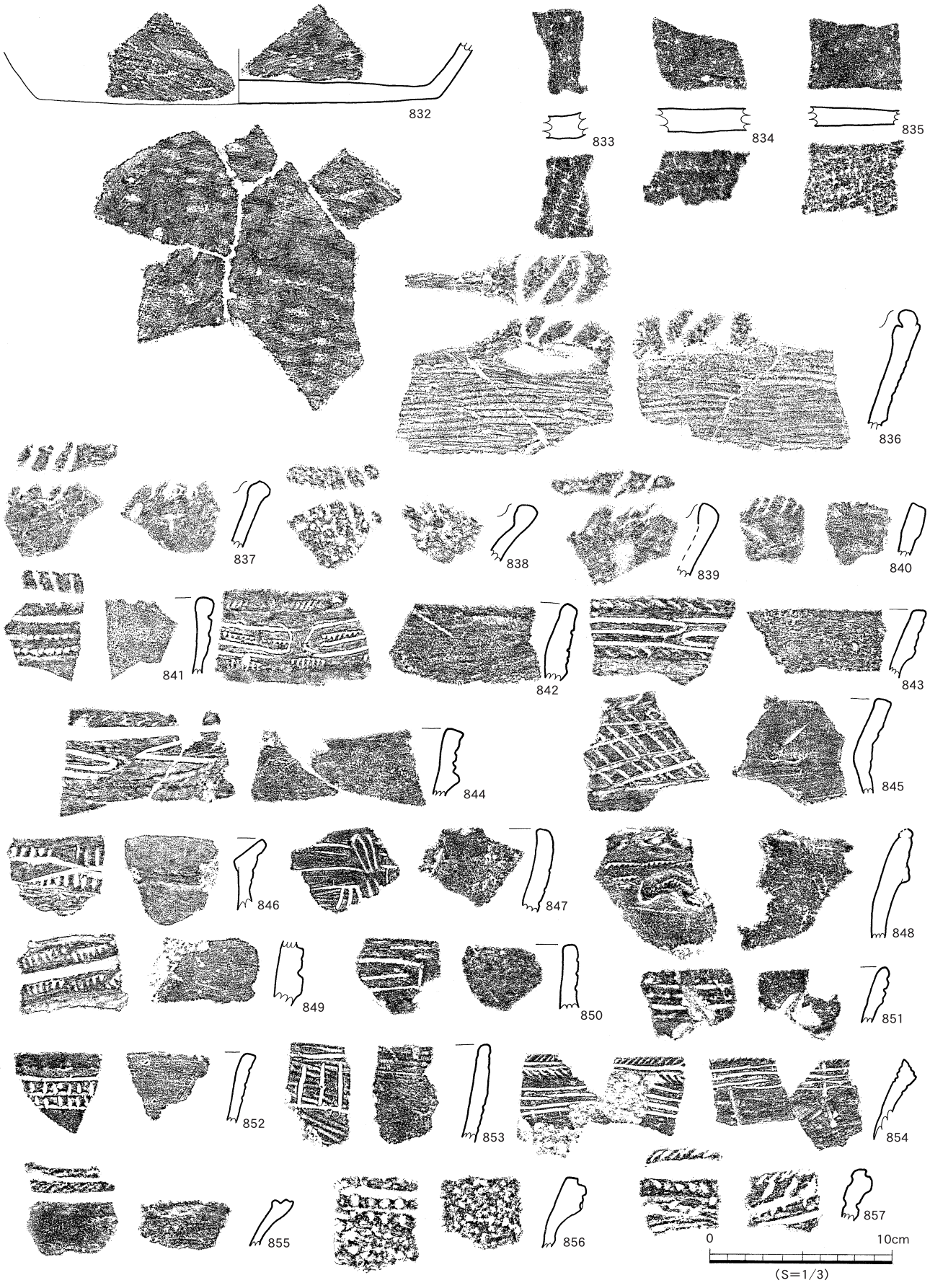
第68図　包含層出土遺物㉖



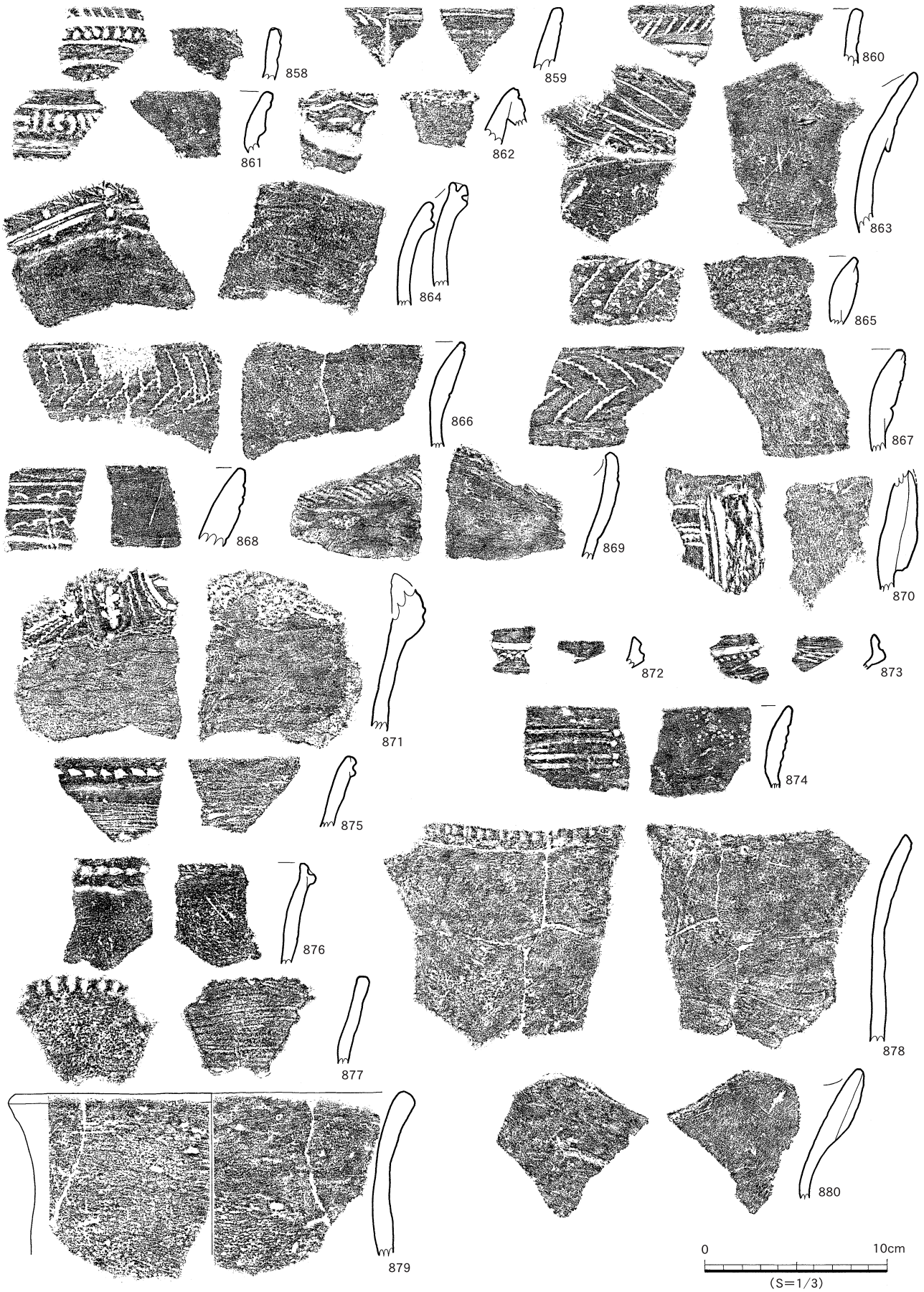
第69図　包含層出土遺物㉗



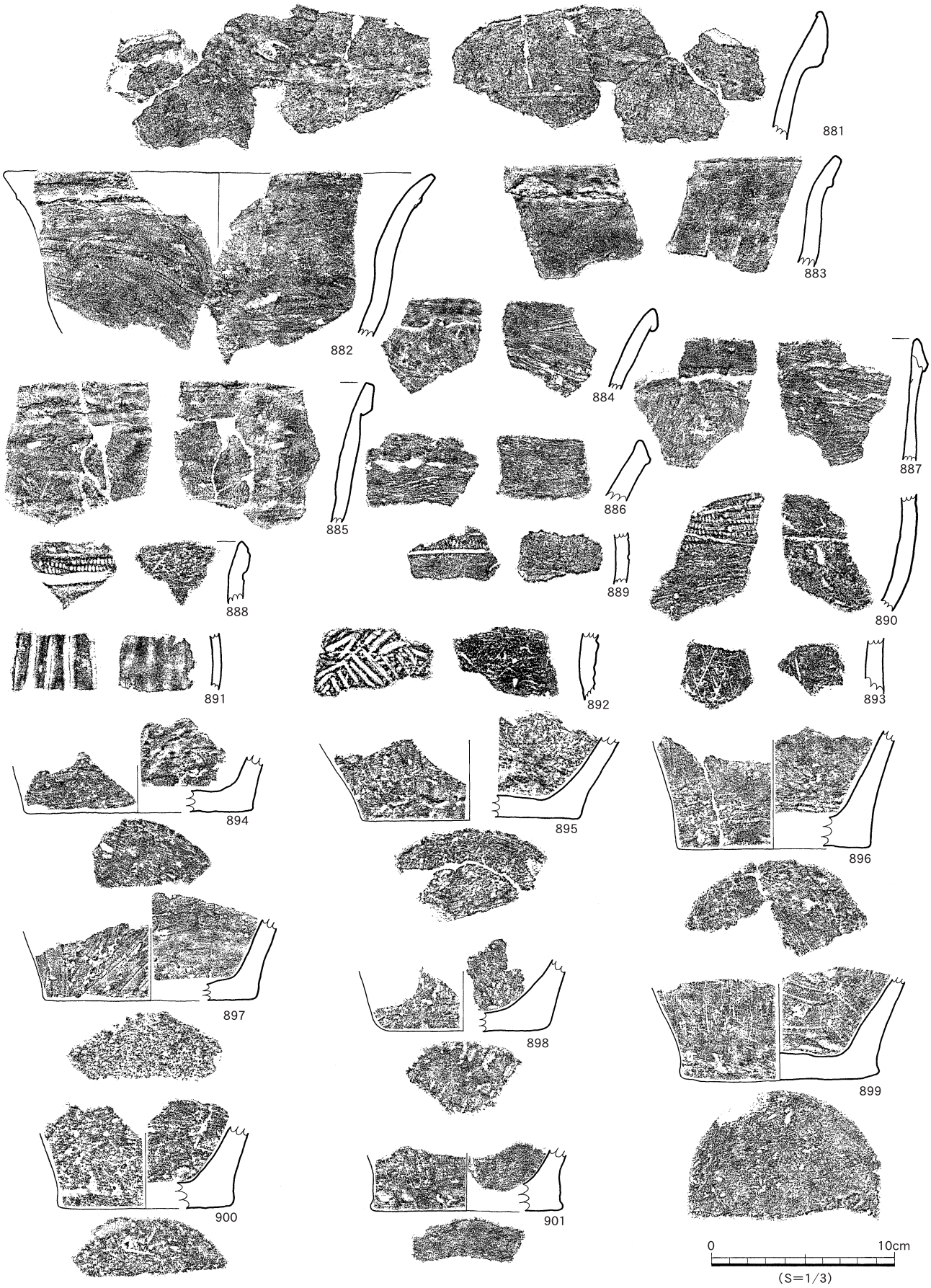
第70図　包含層出土遺物㉘



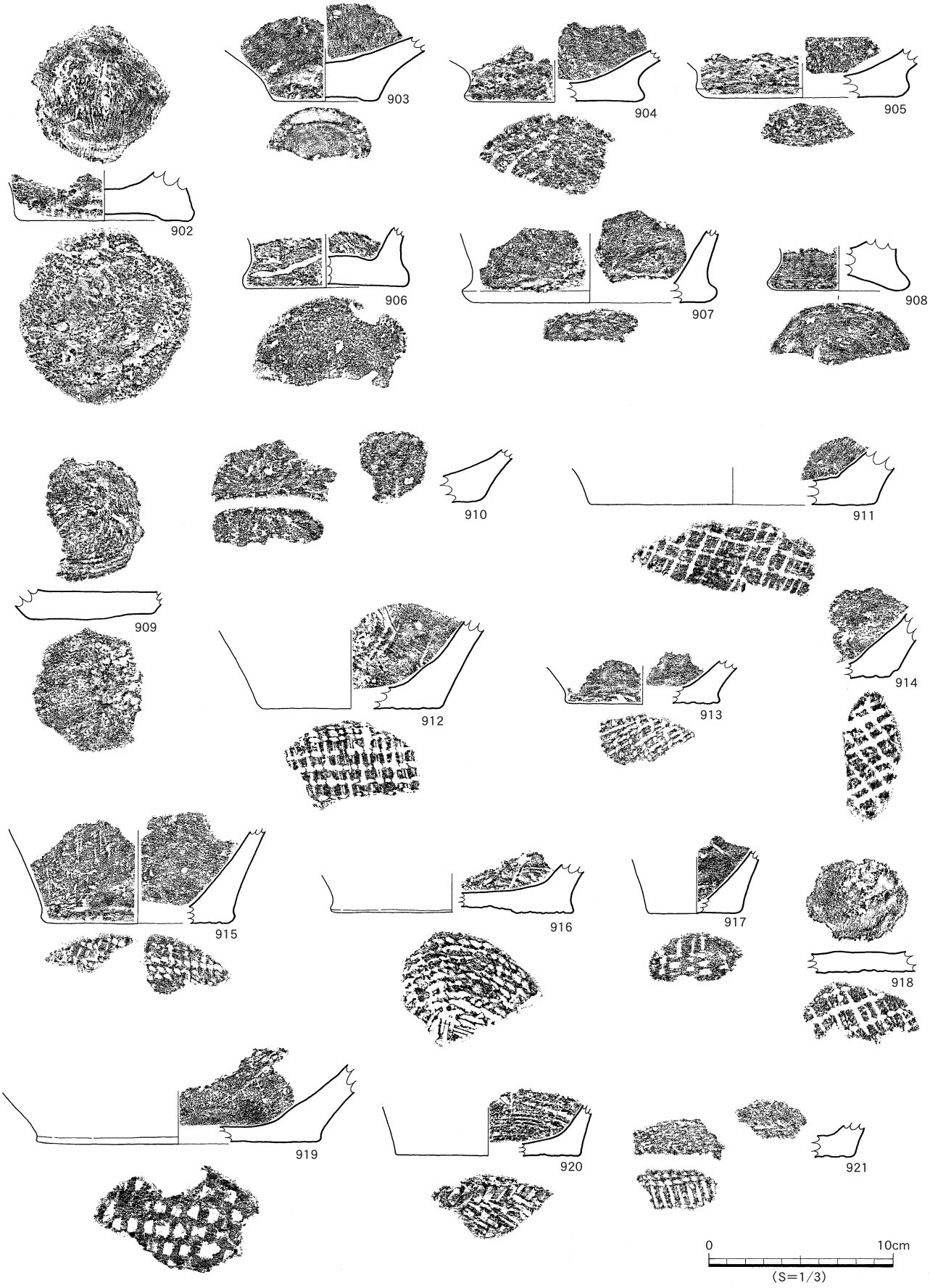
第71図　包含層出土遺物㉙



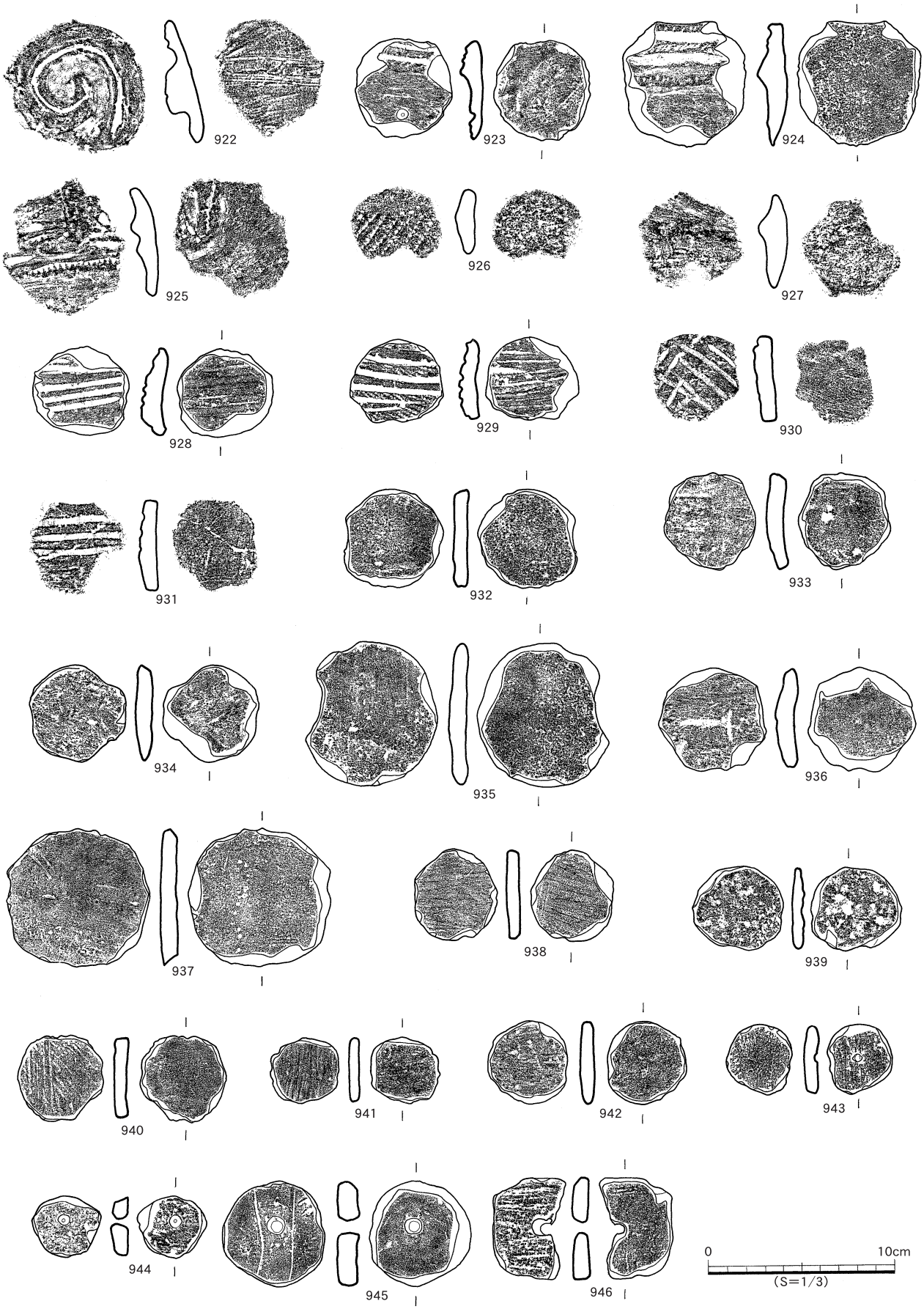
第72図　包含層出土遺物㉚



第73図　包含層出土遺物㉛



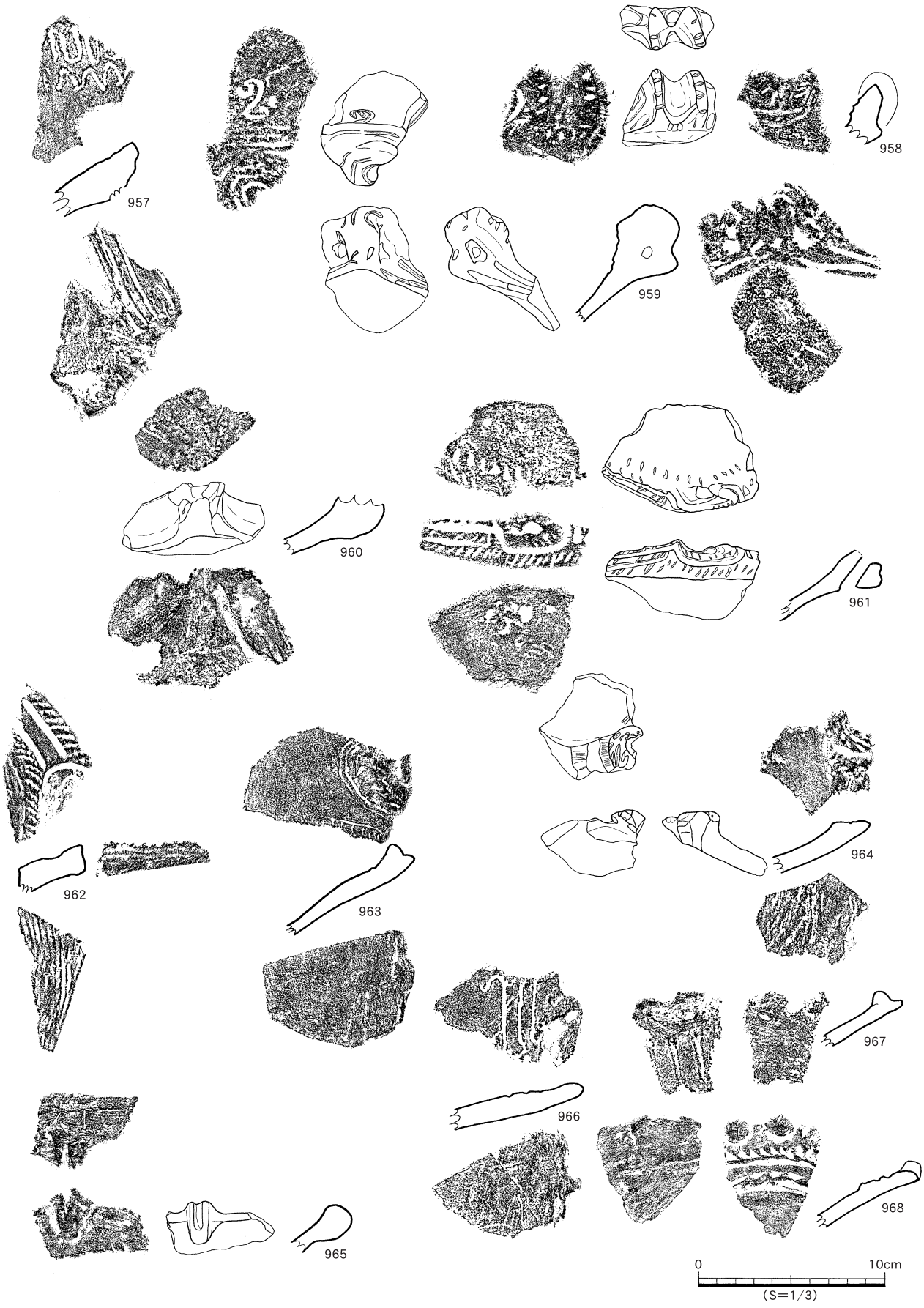
第74図　包含層出土遺物㉜



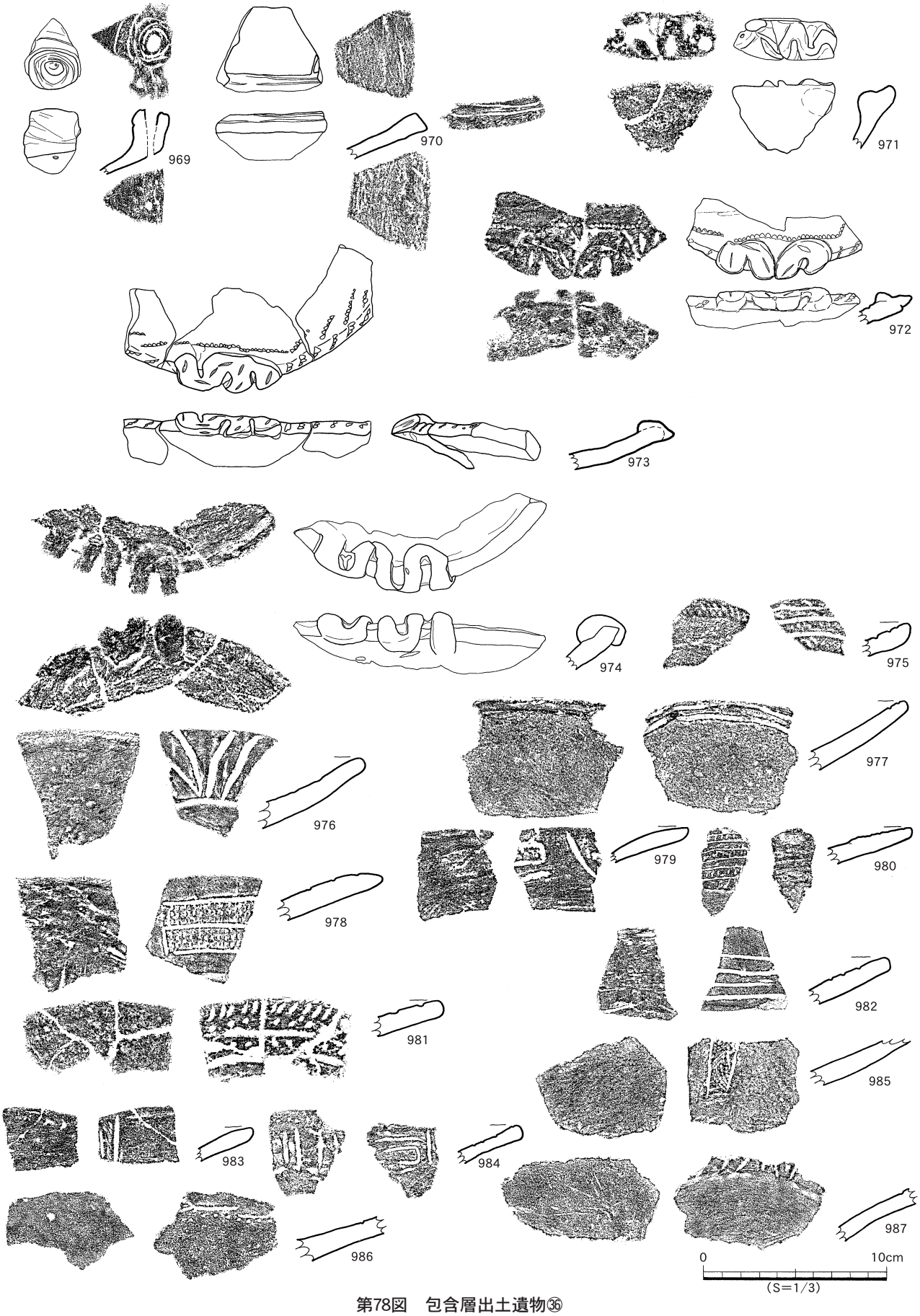
第75図　包含層出土遺物㉝



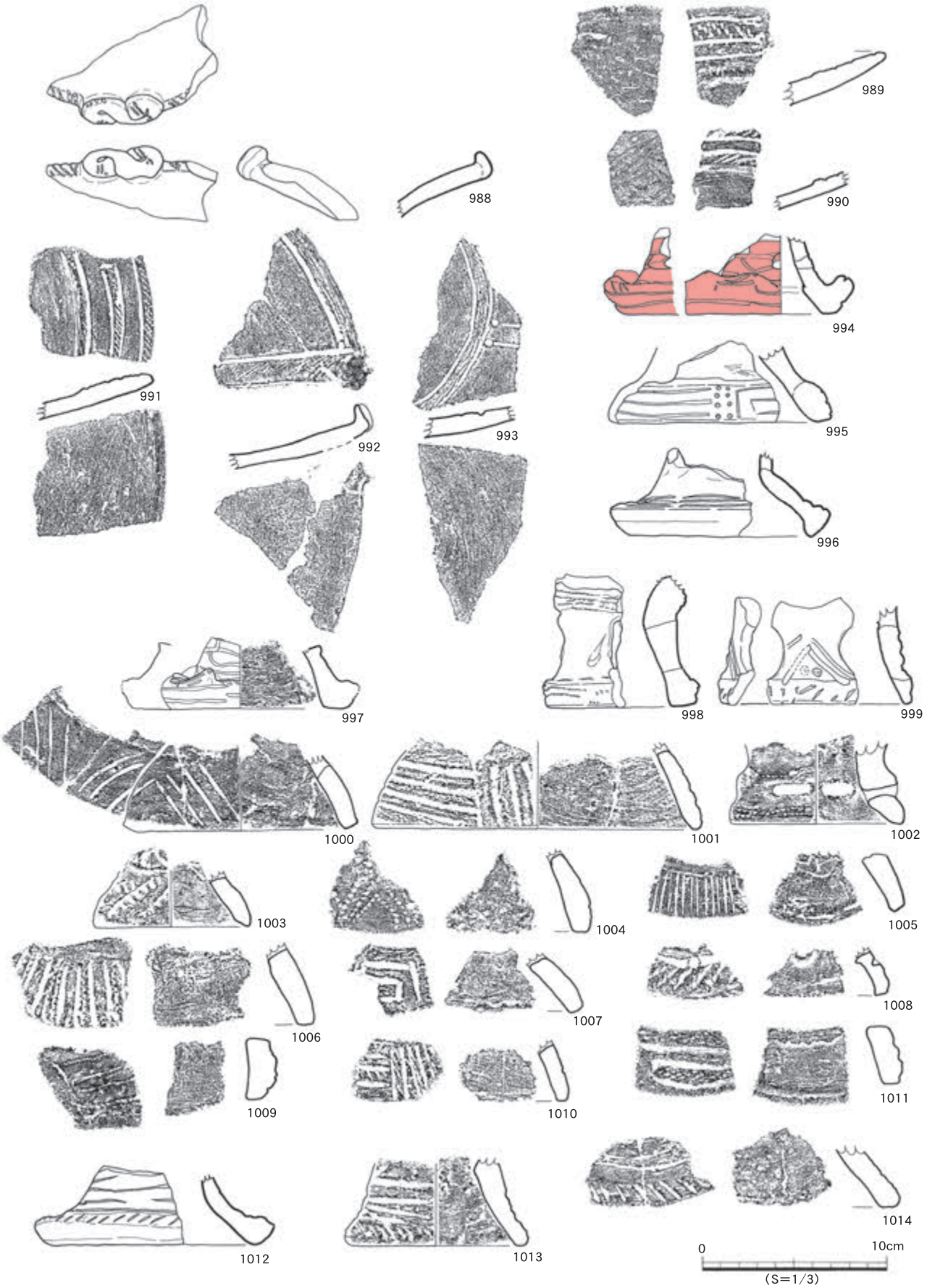
第76図　包含層出土遺物㉞



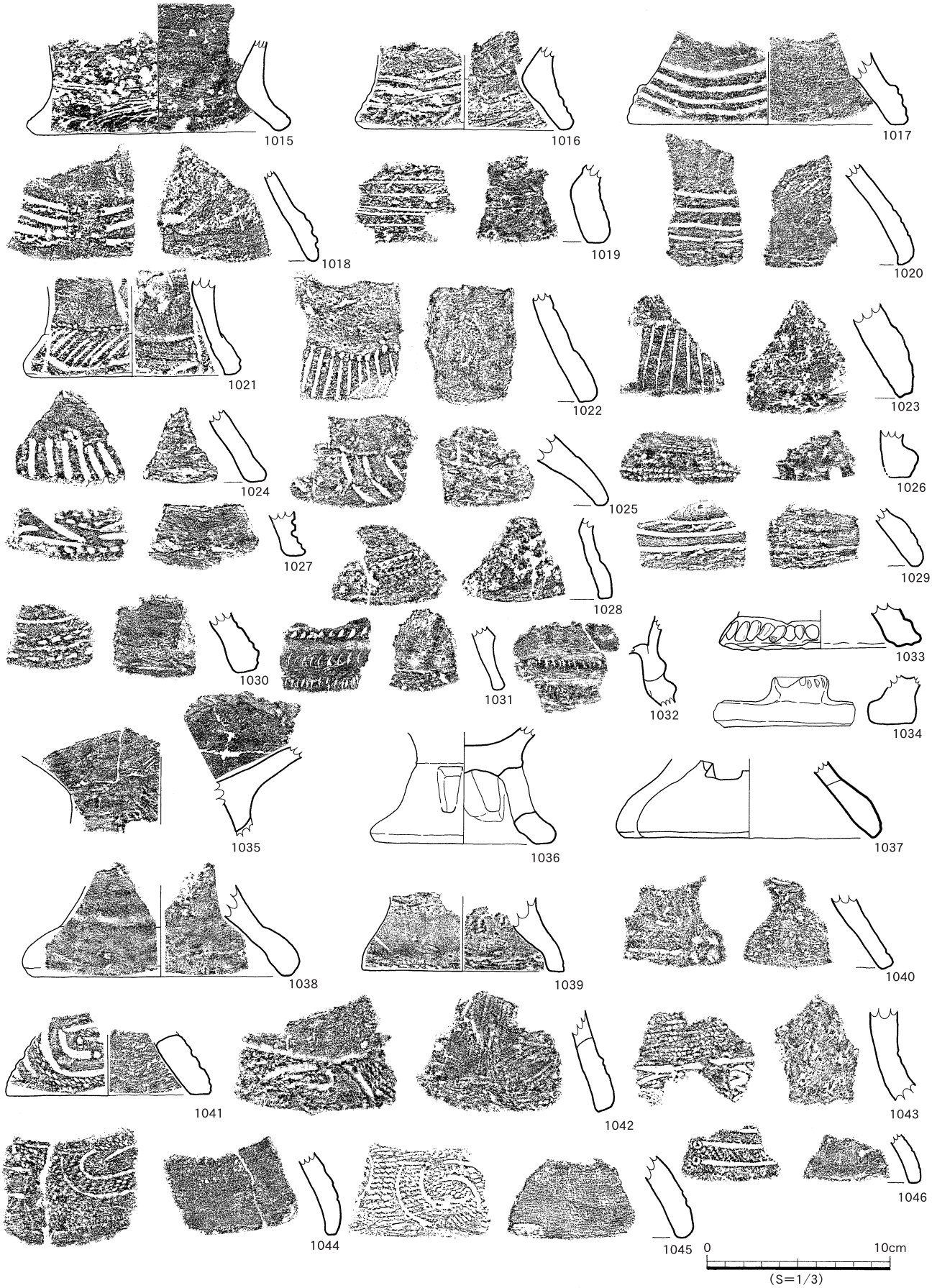
第77図　包含層出土遺物㉟



第78図　包含層出土遺物㊱



第79図　包含層出土遺物㊲



第80図　包含層出土遺物㊳

概要

縄文時代の石器はⅡ層・Ⅳ層を中心に出土している。出土した石器類は，打製石鏃，両面加工尖頭器，石匙，スクレイパー，石錐，楔形石器，異形石器，二次加工剥片，サイドブレイド，微細剥離痕剥片，石核，磨製石斧，打製石斧，礫器，擦切状石器，石錐，磨石，敲石，石皿類が確認できた。石材の分布を見てみると，黒曜石Ⅱ（日東産）は調査区全体に広がりをもつものの，黒曜石Ⅲ（桑ノ木津留産に類似），Ⅳ（腰岳産に類似），Ⅵ（霧島系と思われるものに類似），安山岩Ⅰ，チャート，めのう系などはF－54，55区などに剥片の集中が見られる。このことから，これらの範囲は石器製作場であった可能性が強いと思われる。

包含層からは,総点数で19570点の石器が出土している。ツールに関しては2429点で全体の約12.4%を占めている。

打製石鏃（第87図～第93図　1047～1225）

打製石鏃は形状・長さ・幅の比率（長幅比）・基部の形態において分類を行った。

形状は三角形（Ⅰ）・五角形（Ⅱ）・円形（Ⅲ），長幅比は１～1.5（ほぼ正三角形ａ）・1.5～２未満（ほぼ二等辺三角形ｂ）・２以上（縦長ｃ），基部は平坦（１）・浅い（２）・深くＶ字形（３）・深くＵ字形（４）と分類した。

使用されている石材としては黒曜石が多くを占めるが，安山岩・チャート・頁岩・玉髄なども用いられている。他の石器が，在地産である日東の黒曜石を多く用いているのに対して，打製石鏃は桑ノ木津留産，腰岳産の資料に類似する石材を用いて作られたものの割合が比較的高い。

石鏃と石鏃未製品と考えられるものは遺跡全体から449点出土し，そのうち179点を図示した。

Ⅰ－ａ－１類（34点）

1047～1080が該当する。形状がほぼ正三角形を呈し，平坦な基部を持つ。石材は日東産と思われる黒曜石が多くを占めるが，1059と1066は玉髄である。

Ⅰ－ａ－２類（44点）

1081～1124が該当する。形状がほぼ正三角形で，基部に浅い抉りが施されているものを分類した。石材は桑ノ木津留産（９点），腰岳産（８点）に類似する黒曜石が多く使われている。そのうち1124は鋸歯縁鏃である。

Ⅰ－ａ－３類（16点）

1125～1140が該当する。形状がほぼ正三角形で，基部に深い抉りが施されている。1125・1132・1134は脚部が全長の約半分をしめる。1136～1140は鋸歯縁鏃である。1140は基部を大きく破損しているため，抉りの状況は不明である。石材はチャートの割合が高い（５点）。

Ⅰ－ｂ－１類（13点）

1141～1153が該当する。形状がほぼ二等辺三角形を呈し，平坦な基部である。破損しているものが多い。

Ⅰ－ｂ－２類（31点）

1154～1184が該当する。形状がほぼ二等辺三角形で，基部に浅い抉りが施されている。1172や1176は側縁中央が狭くなっているため，左右に張り出した脚部を持つ。そのうち1184は鋸歯縁鏃である。

Ⅰ－ｂ－３類（15点）

1185～1199が該当する。形状がほぼ二等辺三角形で，基部に深い抉りが施されている。そのうち1194～1199は鋸歯縁鏃である。石材は腰岳産に類似するもの（４点），チャート（３点），玉髄（３点）などである。

Ⅰ－ｂ－４類（９点）

1200～1208が該当する。形状がほぼ二等辺三角形で，基部に深い抉りが施されU字形を呈している。そのうち1202～1208は鋸歯縁鏃である。

Ⅰ－ｂ破損（３点）

Ⅰ－ｂのうち，基部が破損しているものを分類した。1209～1211が該当する。抉りが施されていたと思われるが，程度は不明である。

Ⅰ－ｃ－２類（３点）

1212～1214が該当する。全体の形状が二等辺三角形で縦が幅の２倍以上の長さを呈し，基部に浅い抉りが施されている。

Ⅰ－ｃ－３類（１点）

1215が該当する。全体の形状が二等辺三角形で縦が幅の２倍以上の長さを呈している。基部は破損しているが，深い抉りが施されていたと思われる。

Ⅱ類（３点）

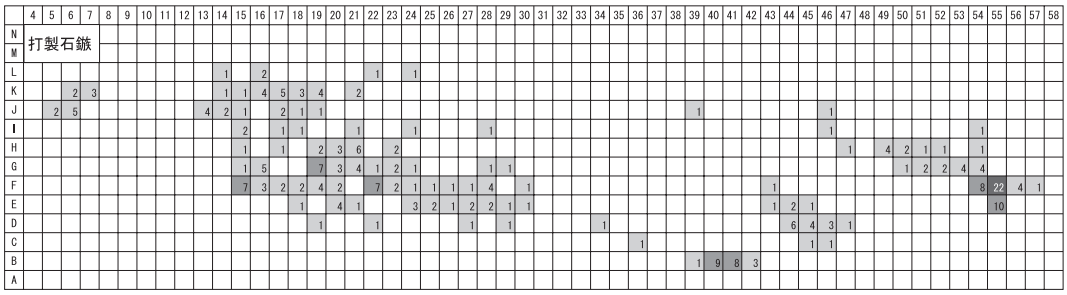
Ⅱ類は五角形をなすものを分類した。1216～1218が該当し，1216は基部がW字を呈する。1217・1218は抉りが浅い。石材は腰岳産に類似するものとチャートである。

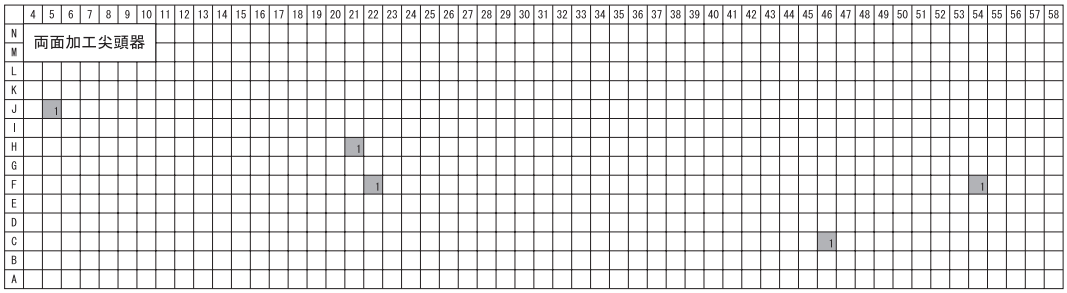
Ⅲ類（６点）

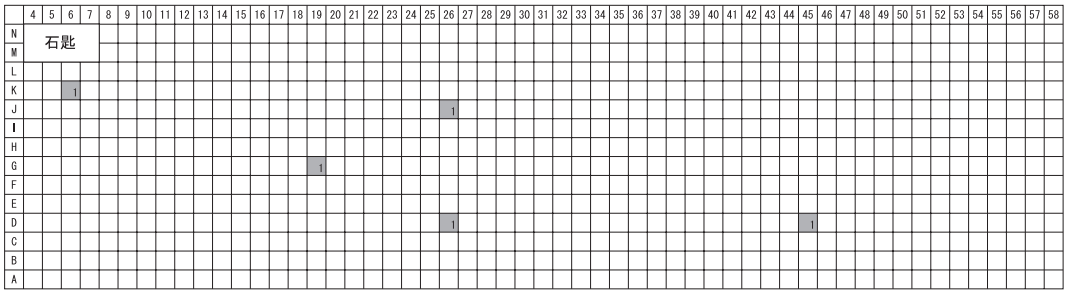
Ⅲ類は丸形をなすものであり，1219～1224が該当する。1224は縦長の形状である。

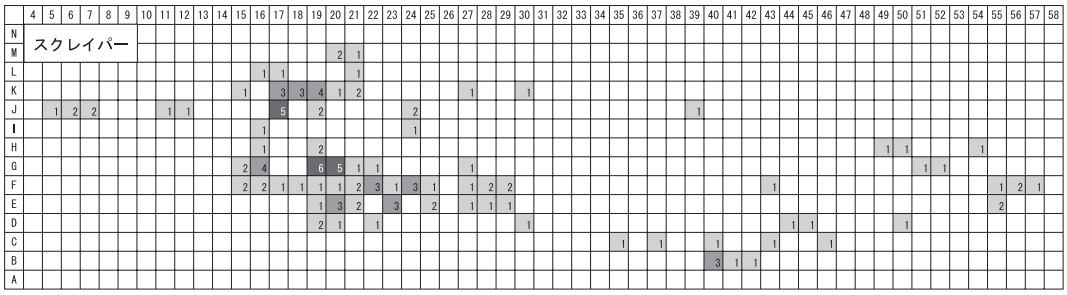
石鏃未製品

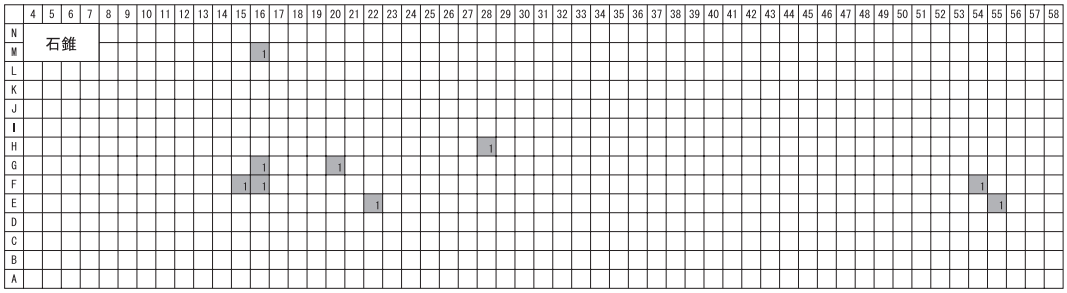
1225が該当する。左側縁部の剥離をあまりおこなっておらず，主要剥離面を残している。

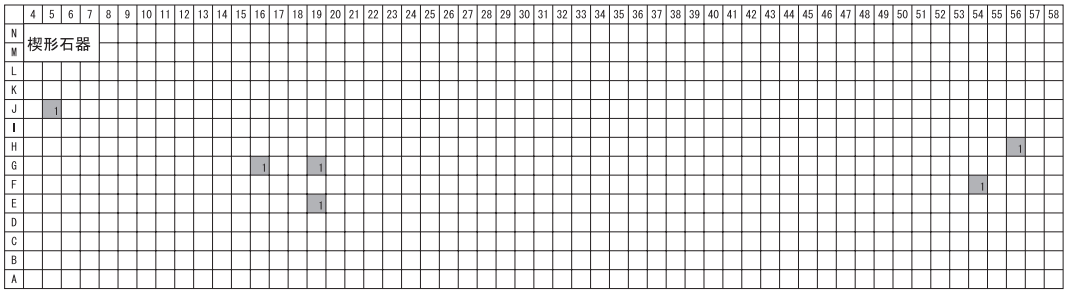




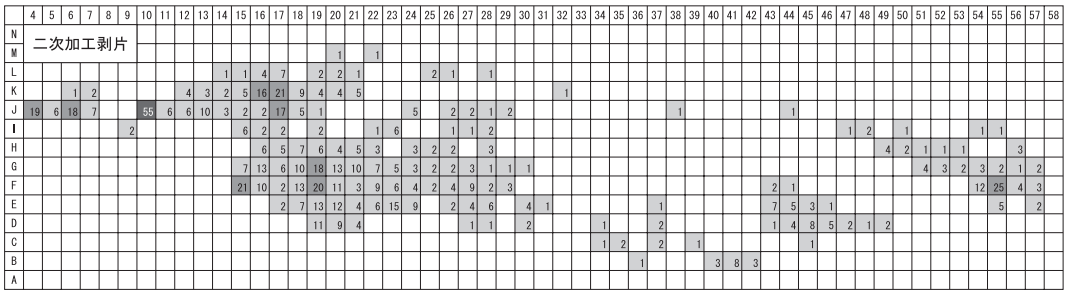


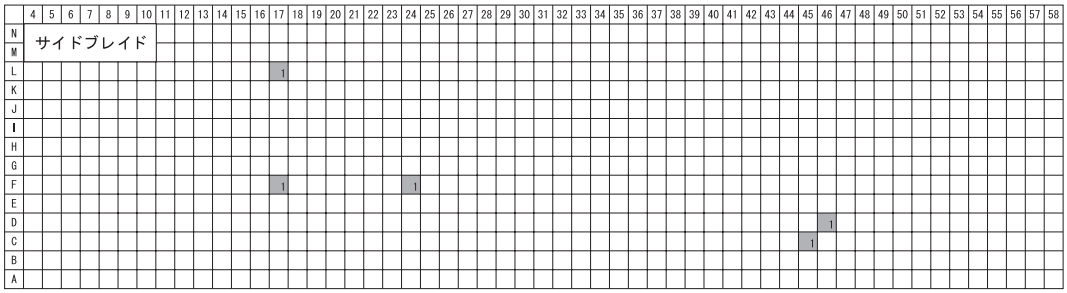


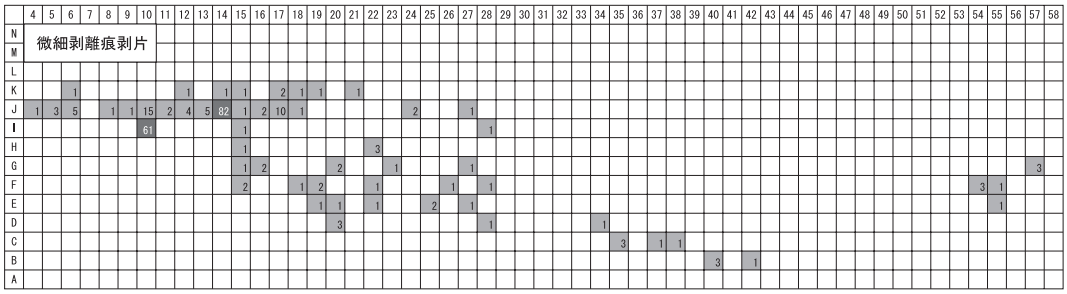


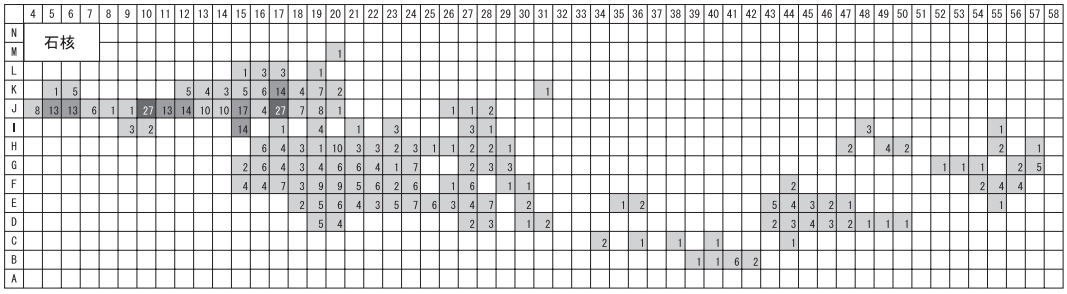


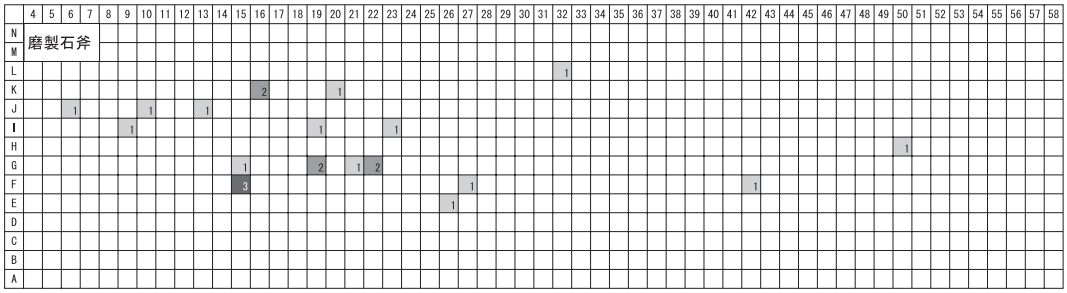
第81図　包含層出土状況①

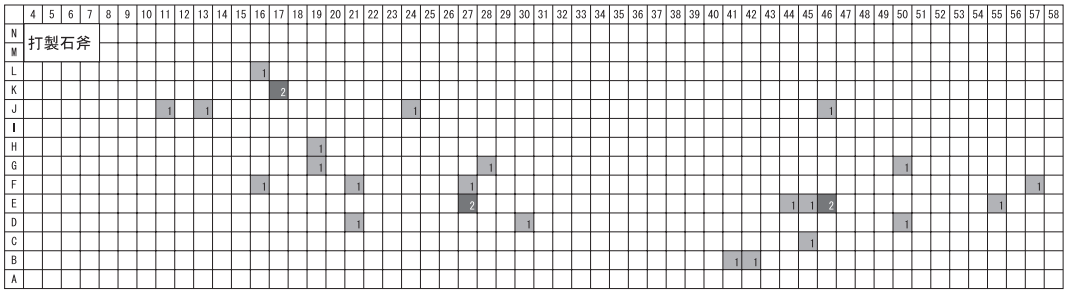




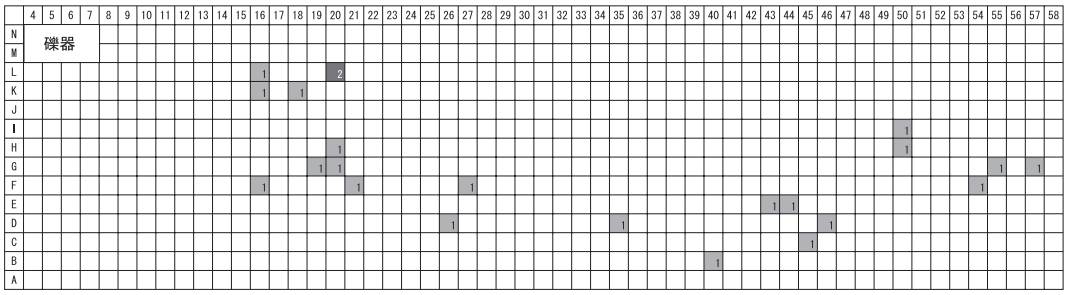


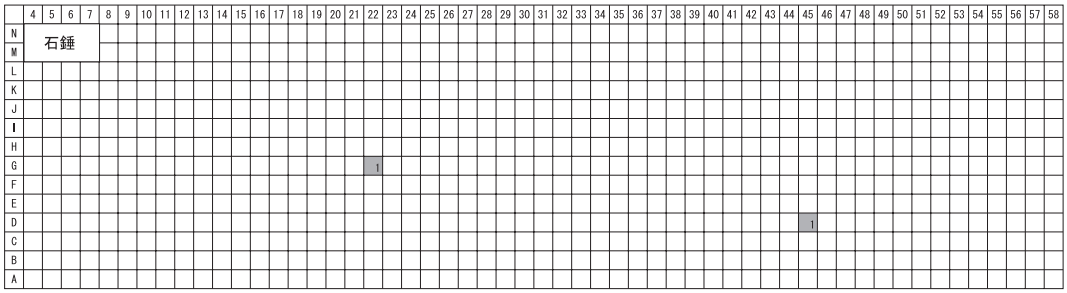


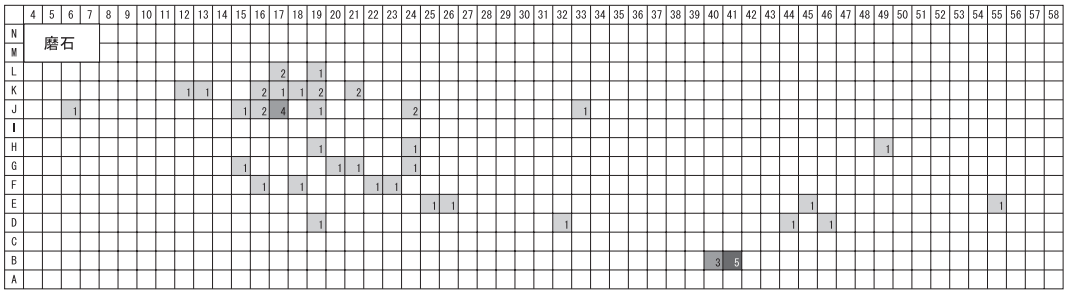


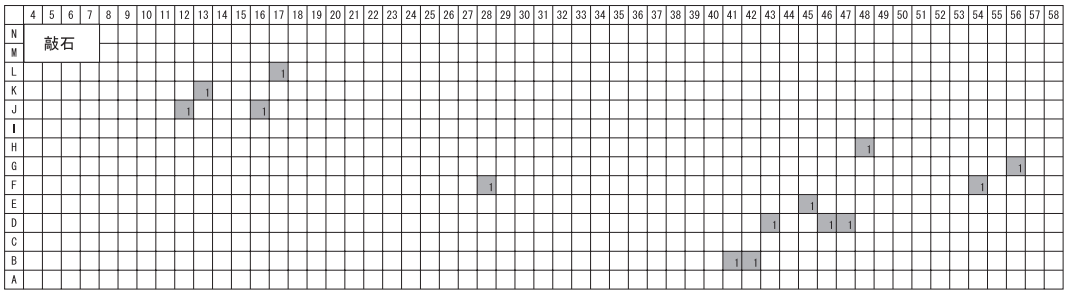


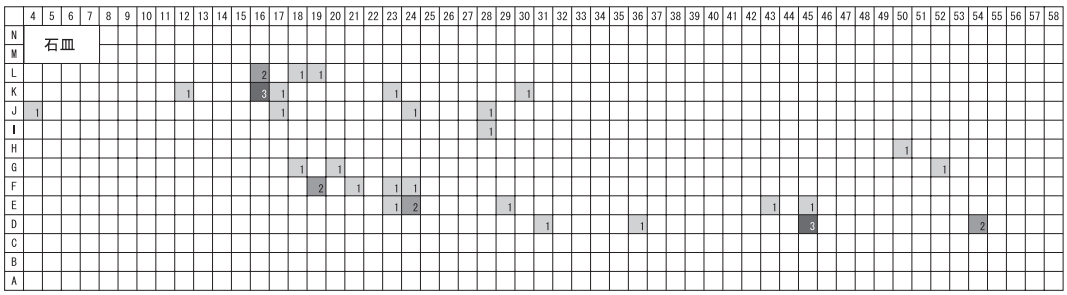
第82図　包含層出土状況②

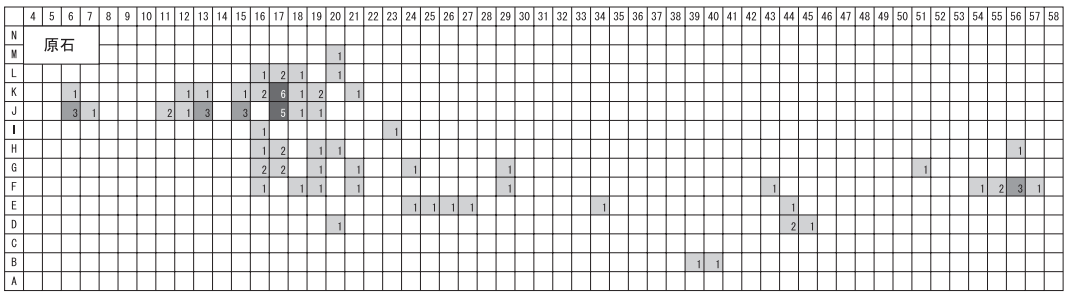




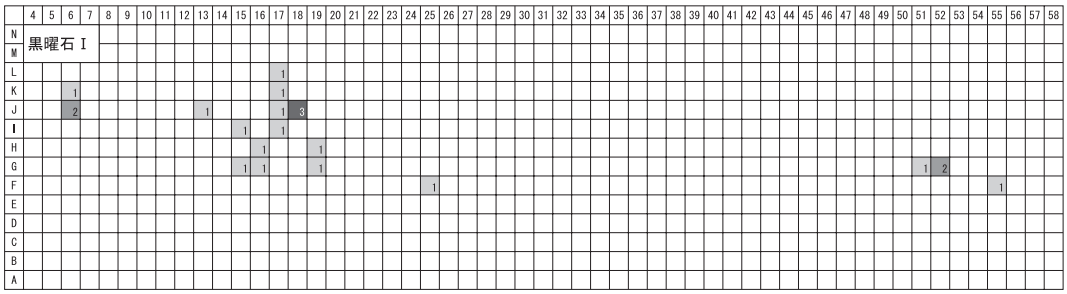


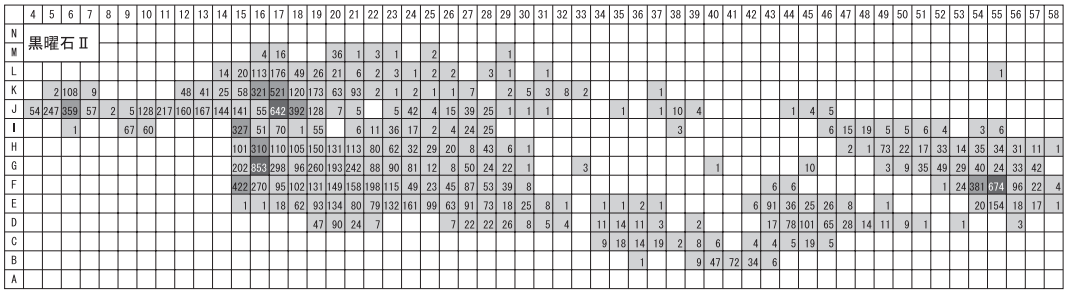


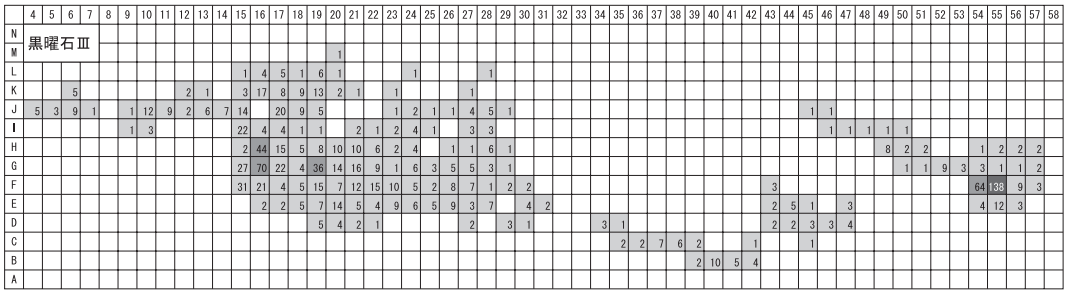


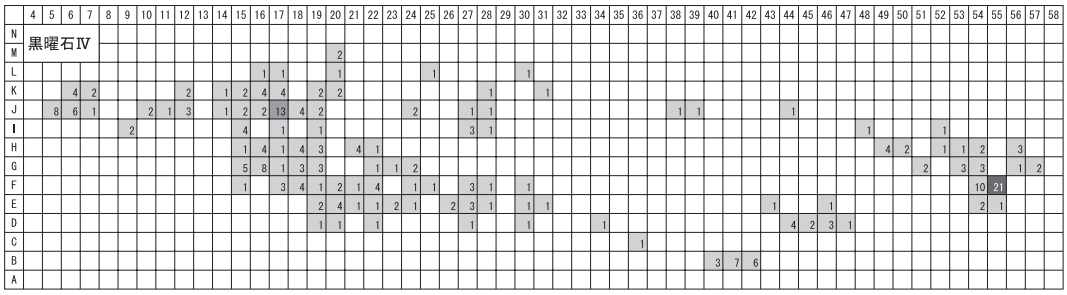


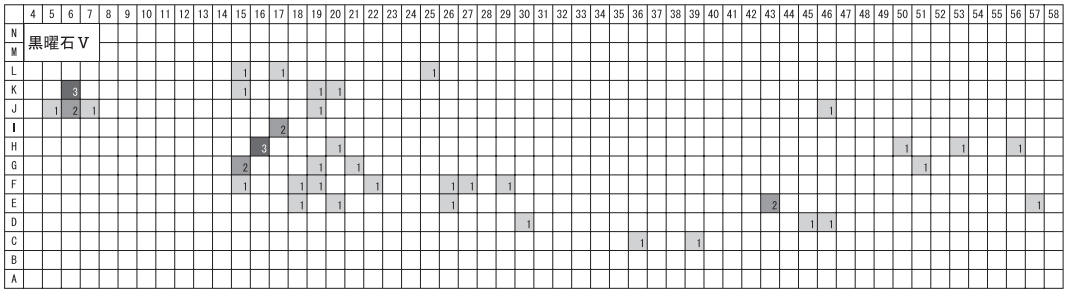
第83図　包含層出土状況③

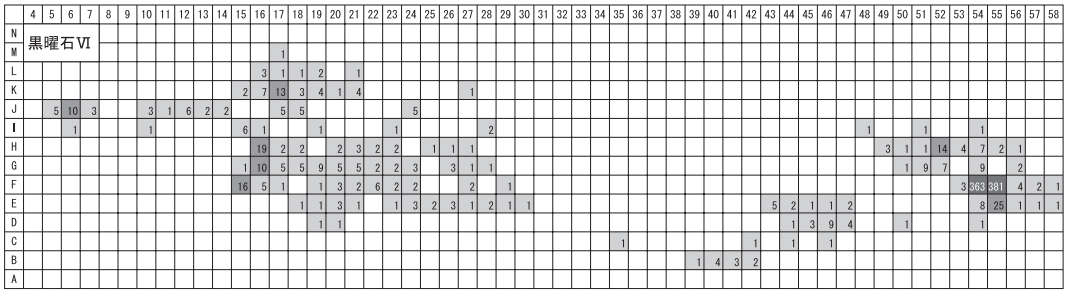




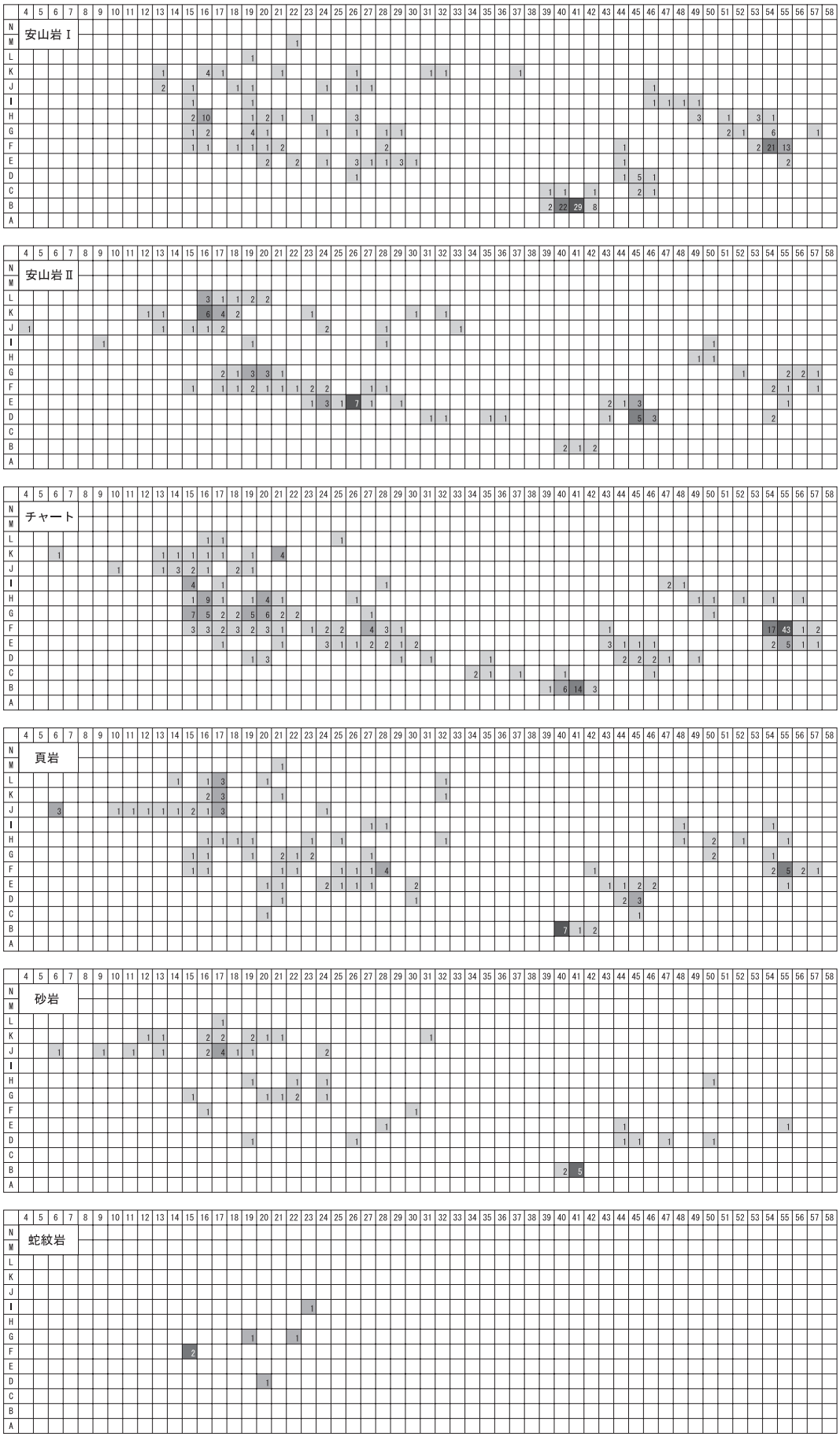




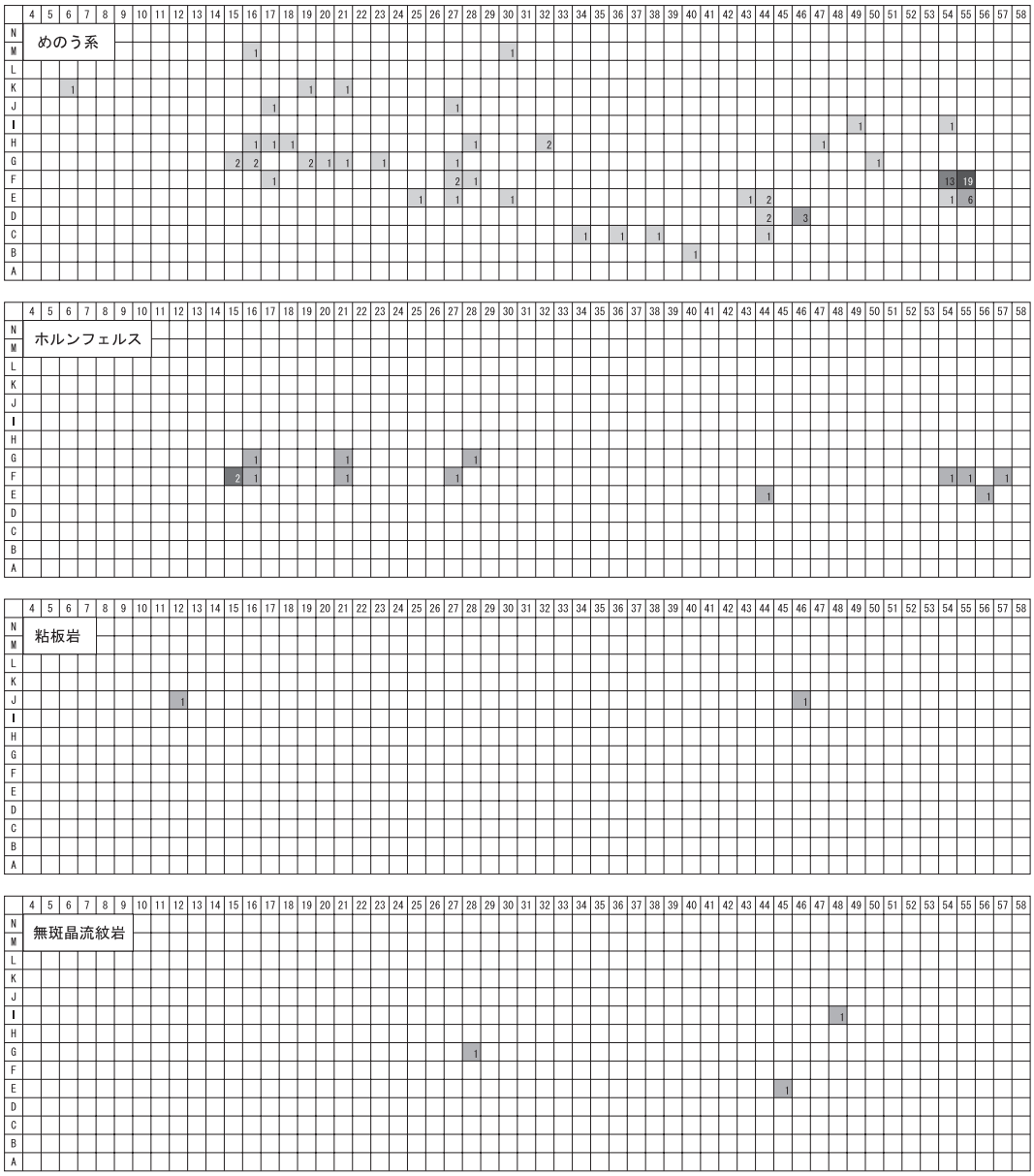




第84図　包含層出土状況④



第85図　包含層出土遺物⑤

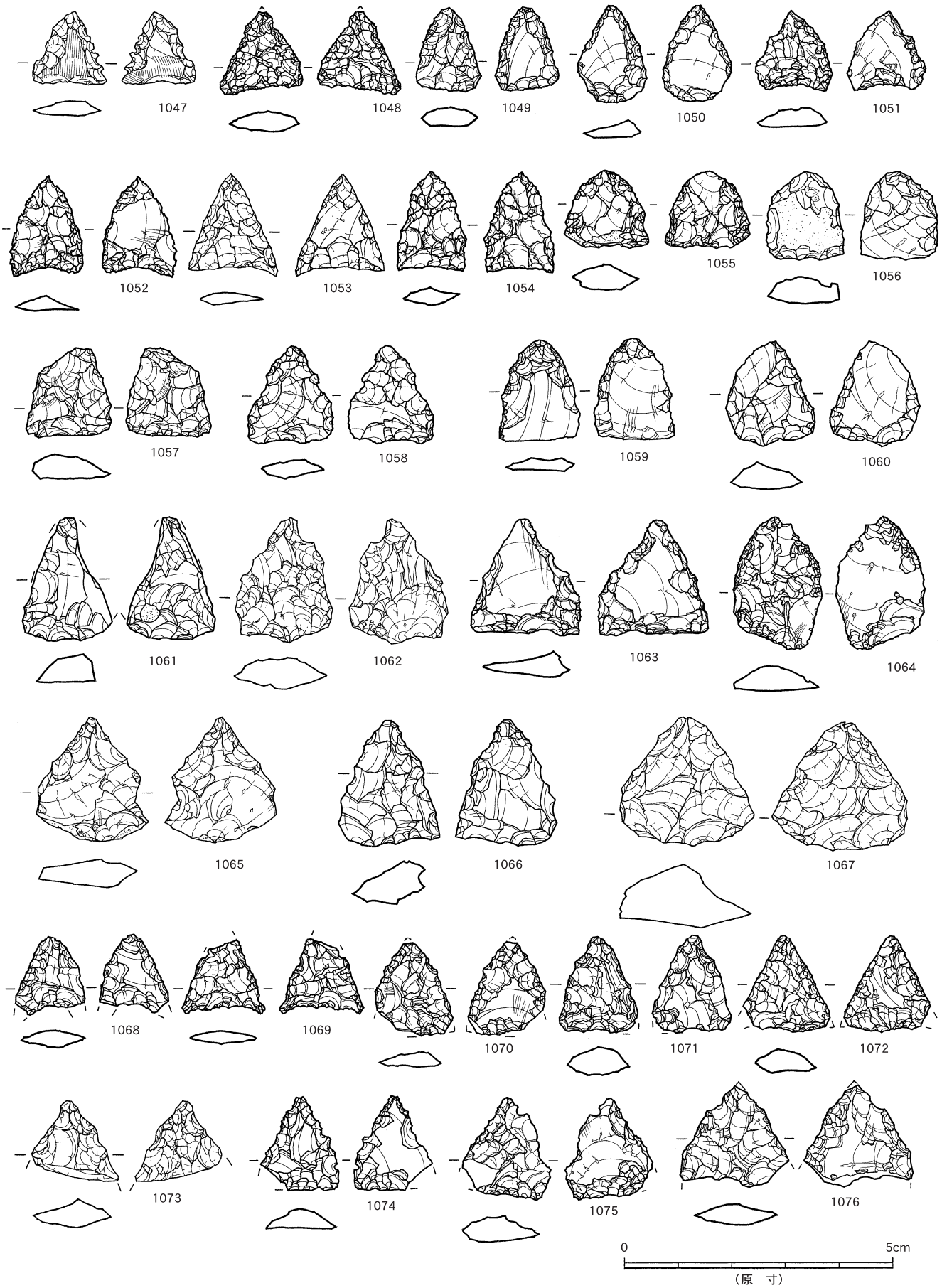


第86図　包含層出土状況⑥

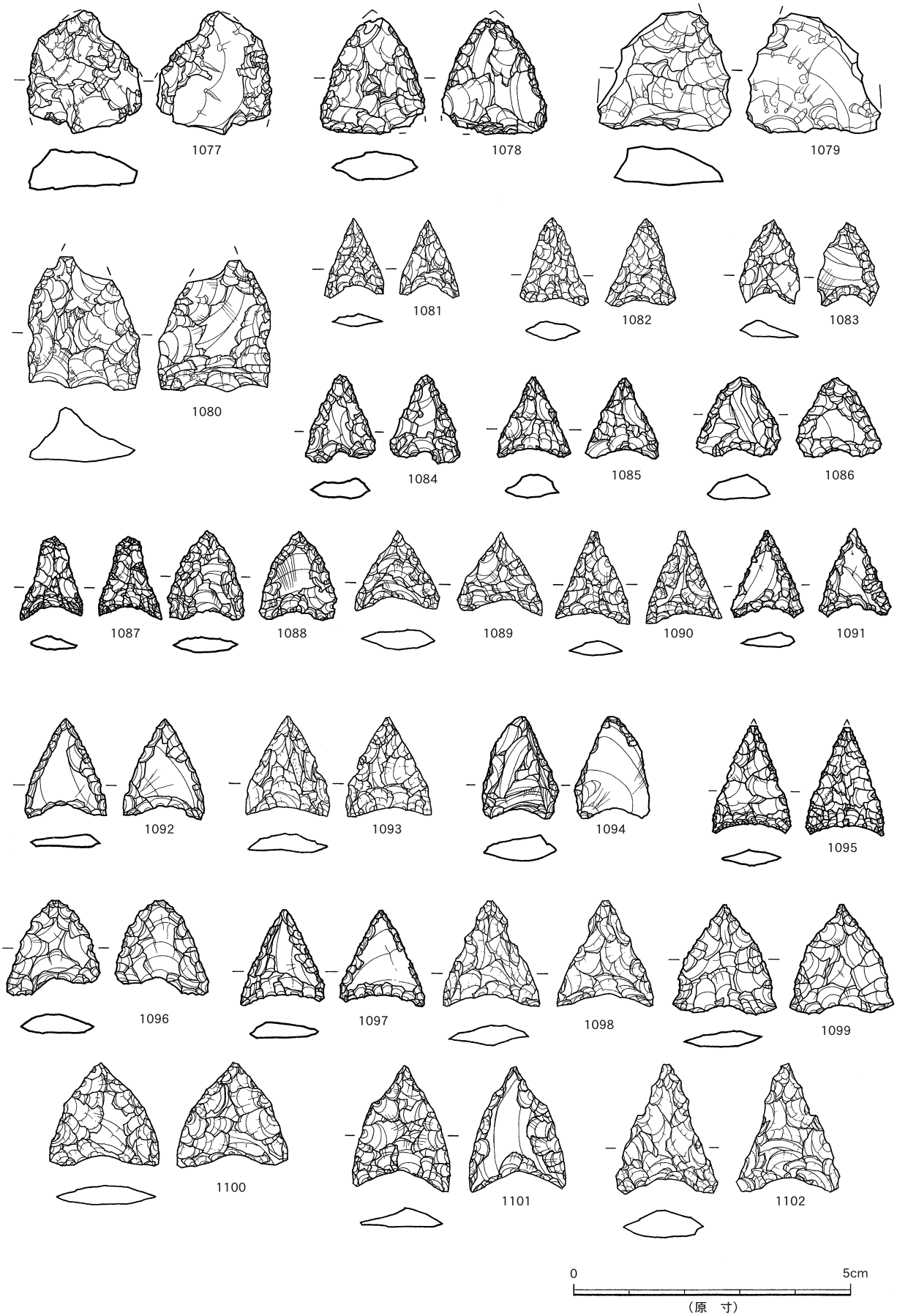
器種	剥片二次加工	石核	打製石鏃	微細剥離痕剥片	パスクレイ	原石	磨石	石皿	打製石斧	礫器	磨製石斧	敲石	石錐	楔形石器	石匙	サイドブレイド	両面加工尖頭器	石錘	その他	計
出土数	831	599	270	255	131	83	52	38	28	23	22	14	9	6	5	5	4	2	48	2425
出土率	34.3	24.7	11.1	10.5	5.4	3.4	2.1	1.6	1.2	0.9	0.9	0.6	0.4	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	2.0	100

石材	黒曜石Ⅱ	黒曜石Ⅲ	黒曜石Ⅵ	黒曜石Ⅳ	チャート	安山岩Ⅰ	安山岩Ⅱ	頁岩	めのう系	砂岩	黒曜石Ⅴ	黒曜石Ⅰ	ホルンフェルス	蛇紋岩	粘板岩	無斑晶流紋岩	計
出土数	16010	1195	1152	272	258	216	117	114	86	54	47	22	13	6	2	2	19566
出土率	81.8	6.1	5.9	1.4	1.3	1.1	0.6	0.6	0.4	0.3	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	100

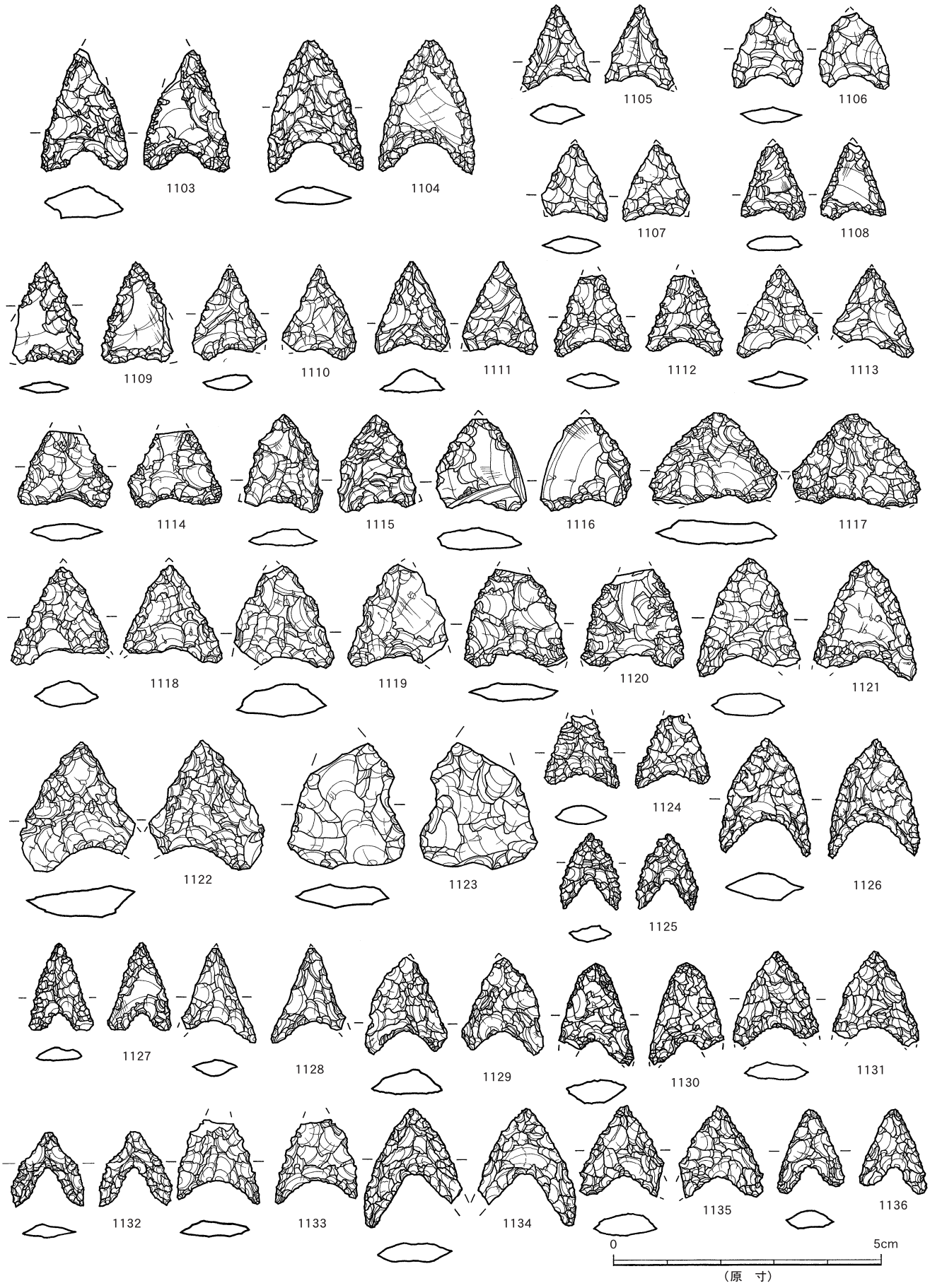
表４　組成表



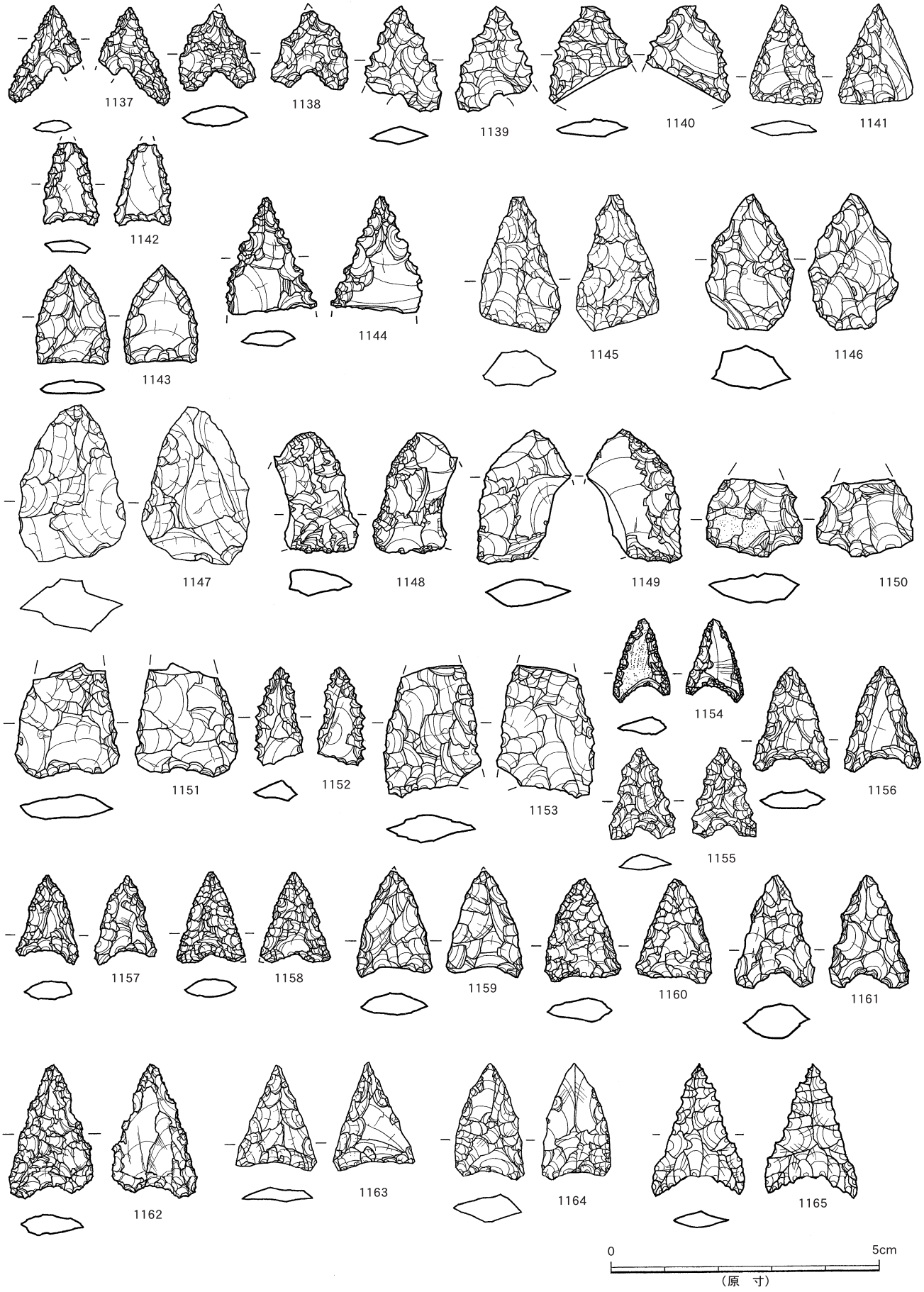
第87図　包含層出土遺物①



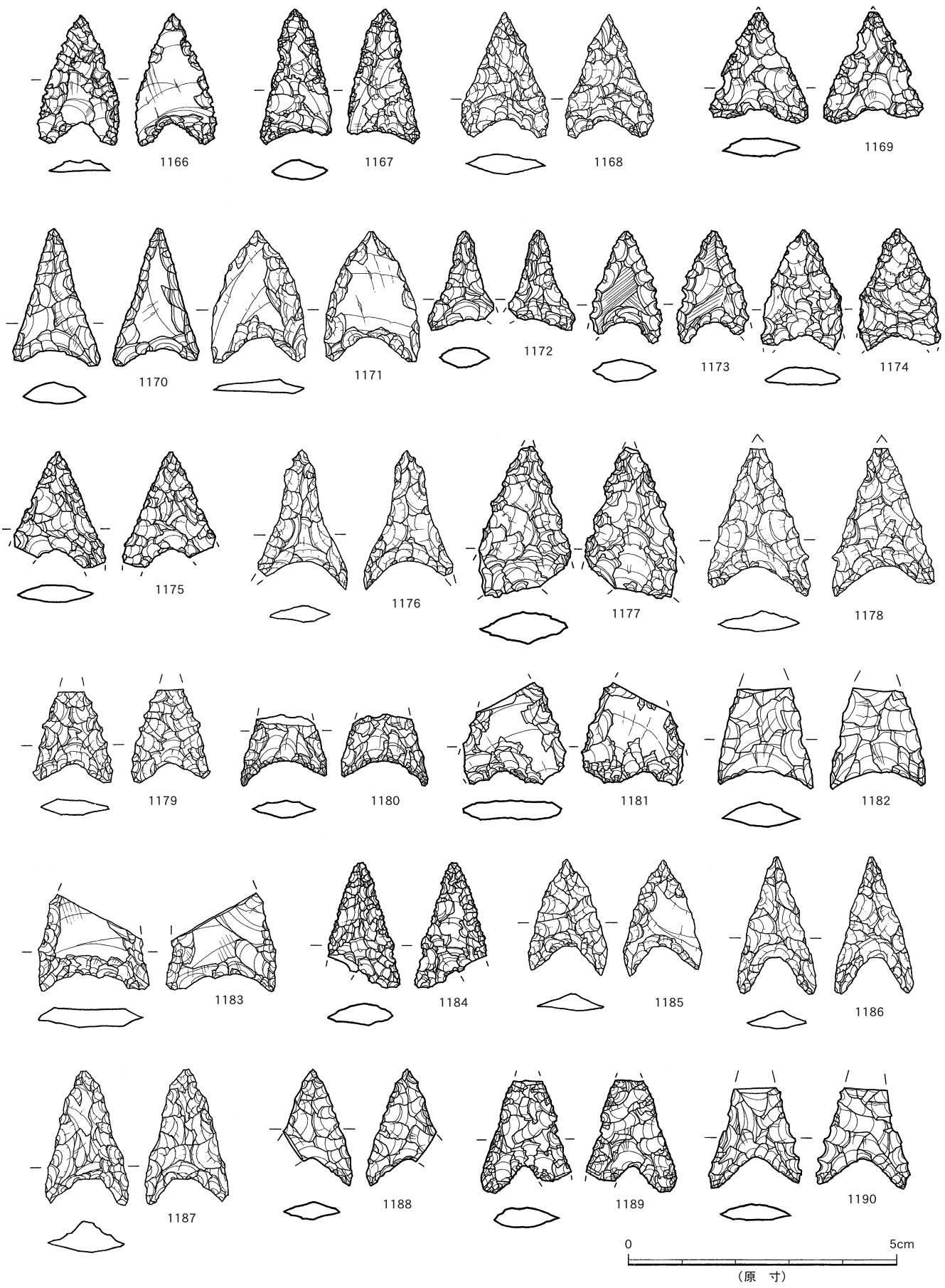
第88図　包含層出土遺物②



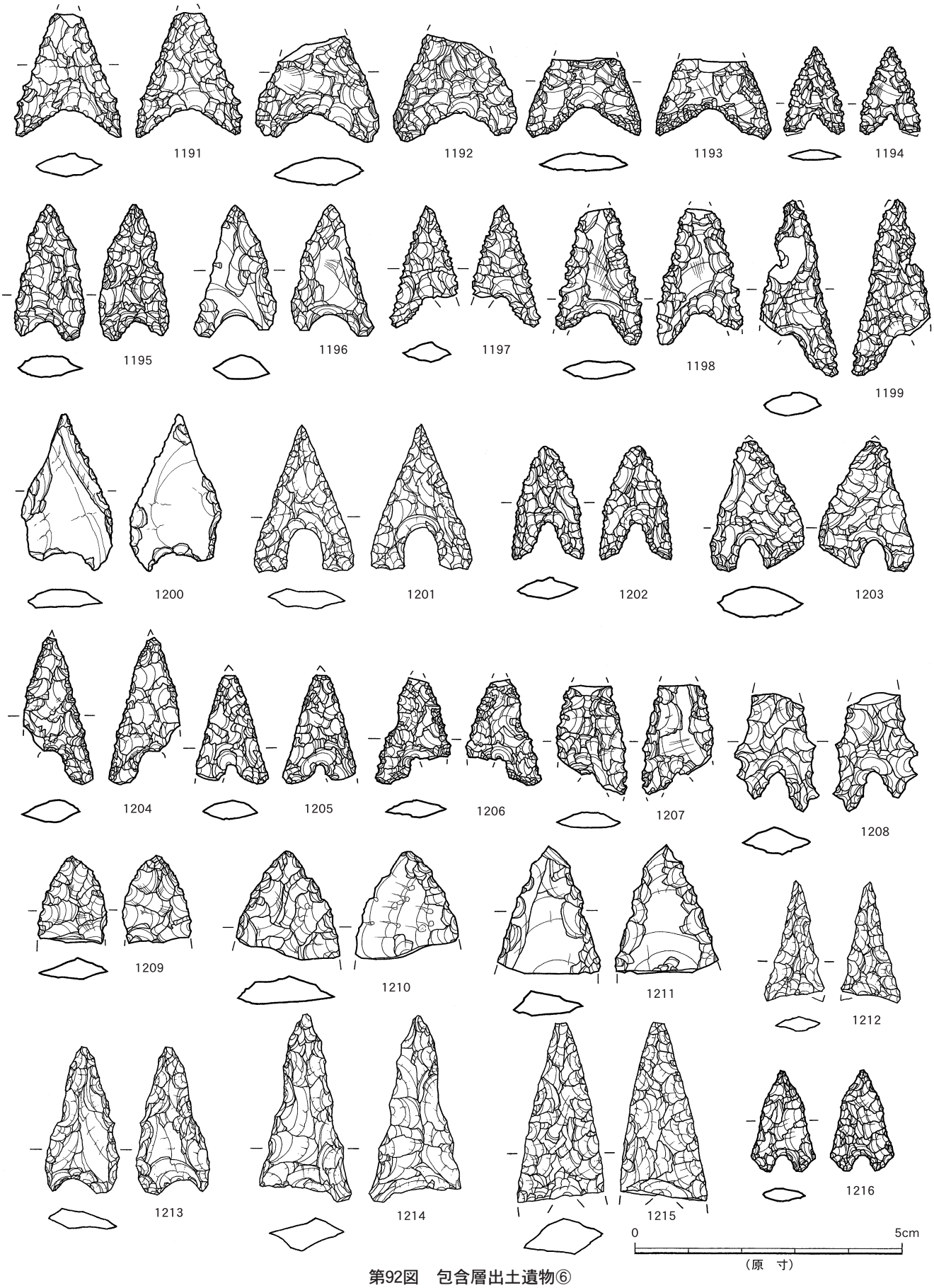
第89図　包含層出土遺物③



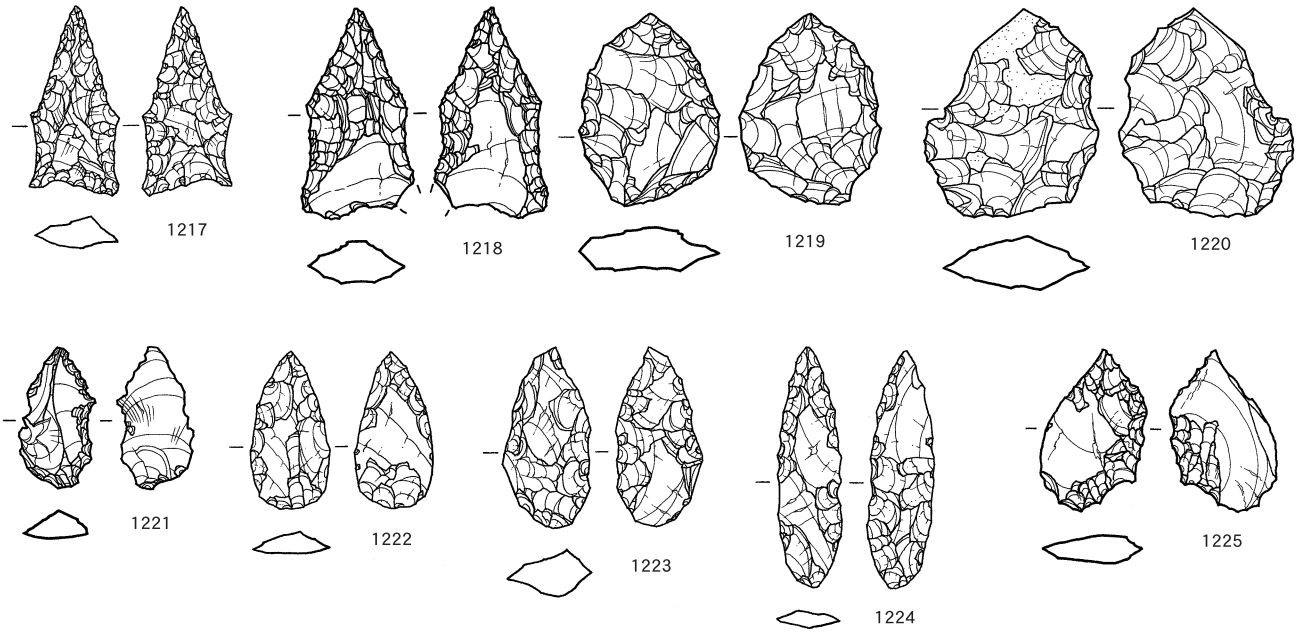
第90図　包含層出土遺物④



第91図　包含層出土遺物⑤



第92図　包含層出土遺物⑥



第93図　包含層出土遺物⑦

両面加工尖頭器（第94図1226～1229）

計５点出土し，4点を図化した。図化したものの石材はいずれも日東産の黒曜石である。尖頭部を作り出そうとしているが，1226と1229は先端部が欠損している。

石匙（第94・95図1230～1234）

計８点出土し，そのうち５点を図化した。1230と1231はやや斜刃になるものである。1232・1233・1234は比較的大型の剥片を素材として利用したもので，1232は横方向の刃部で全体を丁寧な二次加工で整形しており，1234は縦方向の刃部である。石材はチャート，安山岩，日東産の黒曜石が使用されている。

スクレイパー（第96図～第100図1235～1263）

計197点出土し，29点を図化した。1235・1236は刃部が丸みを帯びたラウンドスクレイパーと思われ，石材は腰岳産に類似する黒曜石が用いられている。1237・1238は側辺部に丁寧な加工が見られ，桑ノ木津留産に類似する黒曜石が使用されている。1239～1243は縦長の剥片を素材とし，日東産の黒曜石を用いている。1243と1246は刃部がＶ字状を呈する。1247～1250は比較的厚みのある日東産の黒曜石を素材とし，周辺部に調整を施している。1251～1258は直線的な刃部を持つものが多く，両面からの調整が加えられている。1259～1263は日東産の黒曜石を素材としている。1259・1260・1261・1263は片側から細かい剥離を施しているが，1262は両面から調整を施し，直線的な刃部を形作っている。

石錐（第101図1264～1271）

計13点出土し，8点を図化した。1265には錐部が上下に２つみられる。1267は棒状に細かく調整したものである。1268～1271は逆三角形を呈したもので，つまみ部を有するものである。1270・1271は錐部近くを丁寧に加工している。

楔形石器（第101図1272～1276）

計６点出土し，そのうち５点を図化した。上下両端からの両極の剥離痕が表裏両面に認められる特徴を有する。1275は腰岳産の黒曜石に類似し，残りは日東産の黒曜石である。

異形石器（第101図1277）

特異な形態をした石器を異形石器として１点分類した。細かい押圧剥離を施したもので，腰岳産の黒曜石でつくられたものである。

二次加工剥片（第102図～第106図1278～1351）

1391点出土し，そのうち74点を図化した。加工されている部分や形によって，5つの分類を行った。

Ａ類（17点　1278～1294）

縦長の剥片の側辺部に加工があるものを分類した。

Ｂ類（35点　1295～1329）

不定形の剥片の縁辺部に加工があるものを分類した。

Ｃ類（９点　1330～1338）

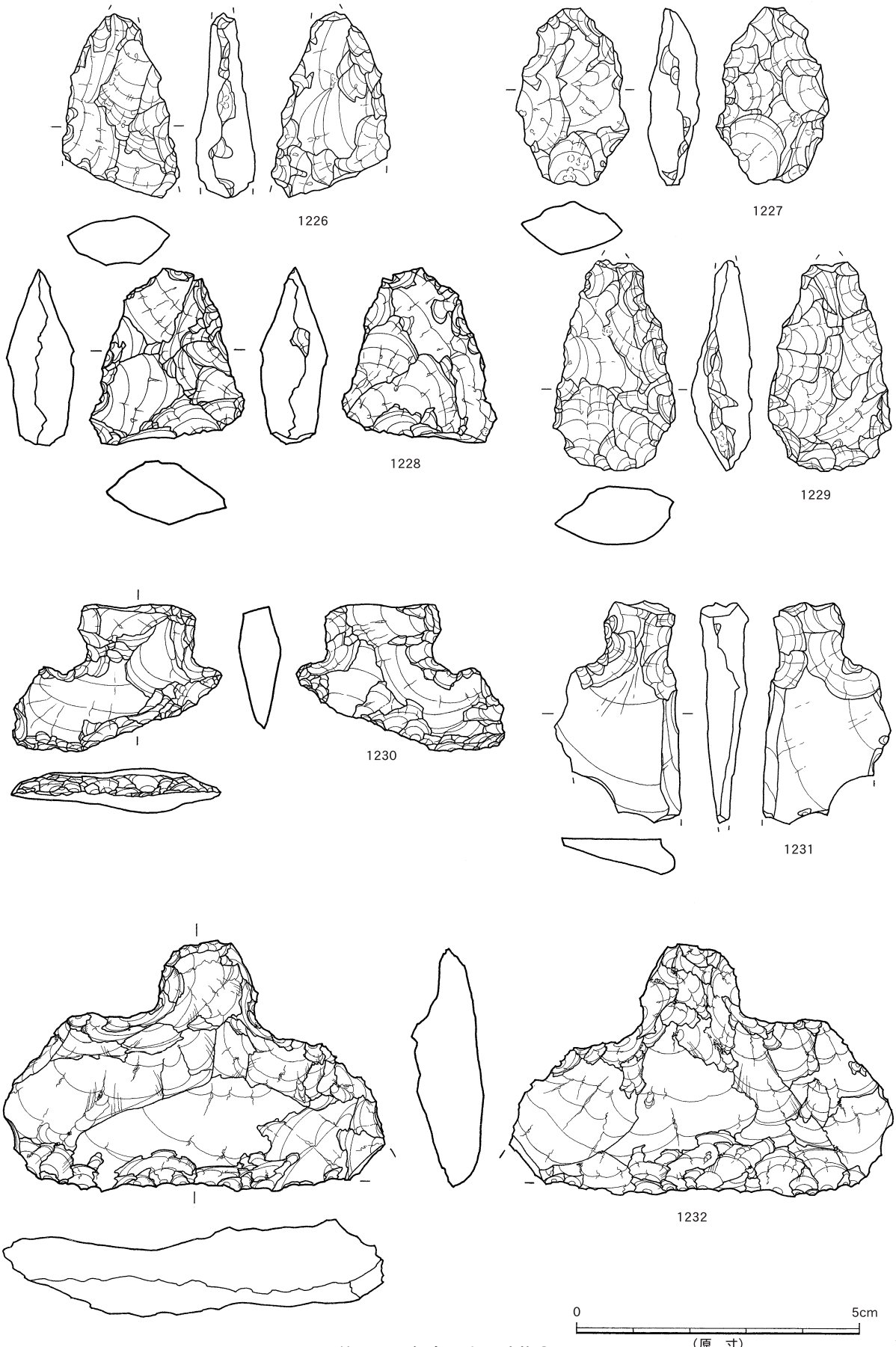
剥片の下端部に調整がみられるものを分類した。

Ｄ類（８点　1339～1346）

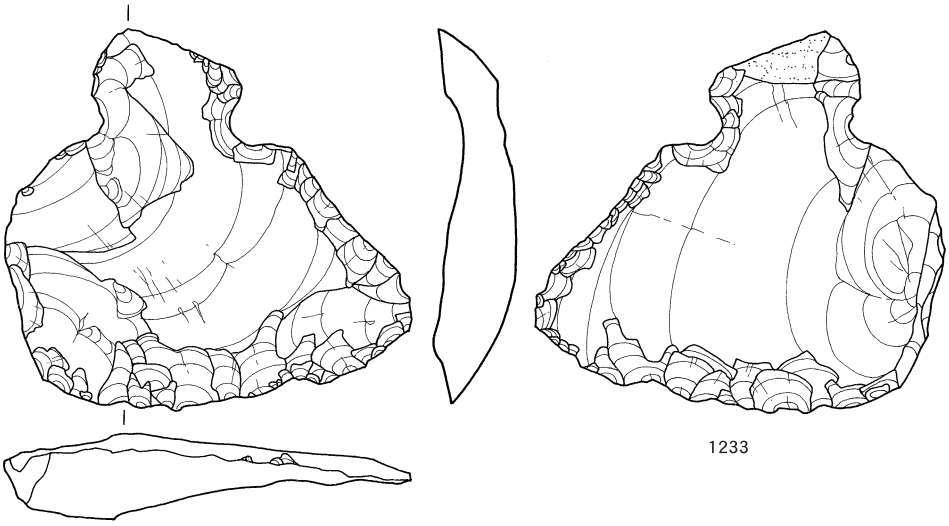
加工が複数の場所にみられるものを分類した。

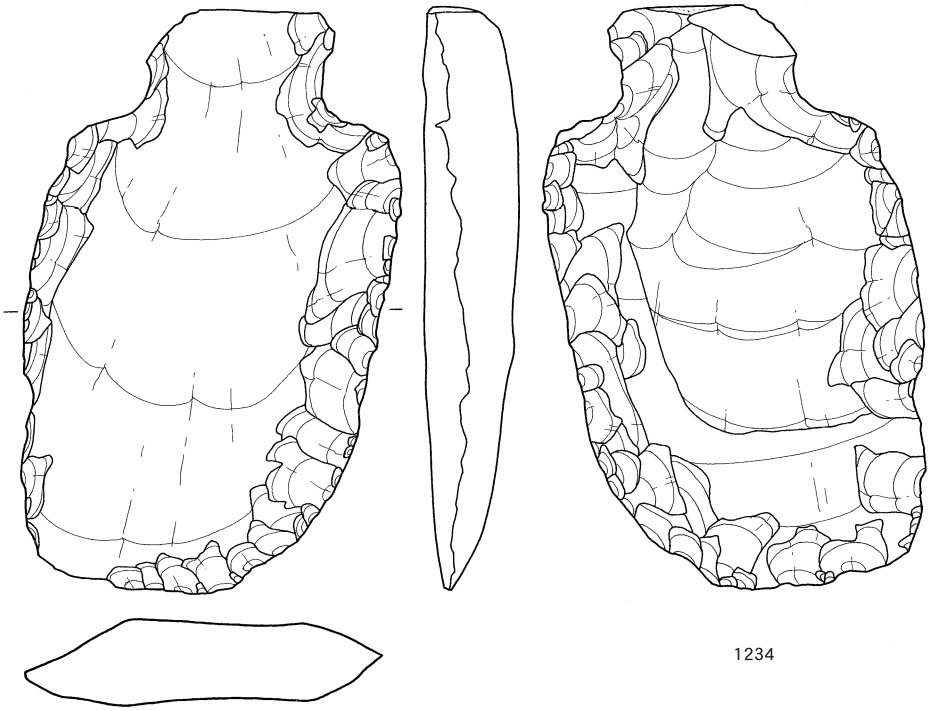
Ｅ類（５点　1347～1351）

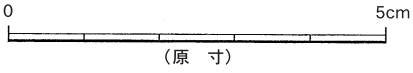
鋭い先端をもった剥片で，先端をつくるような調整がみられるものを分類した。



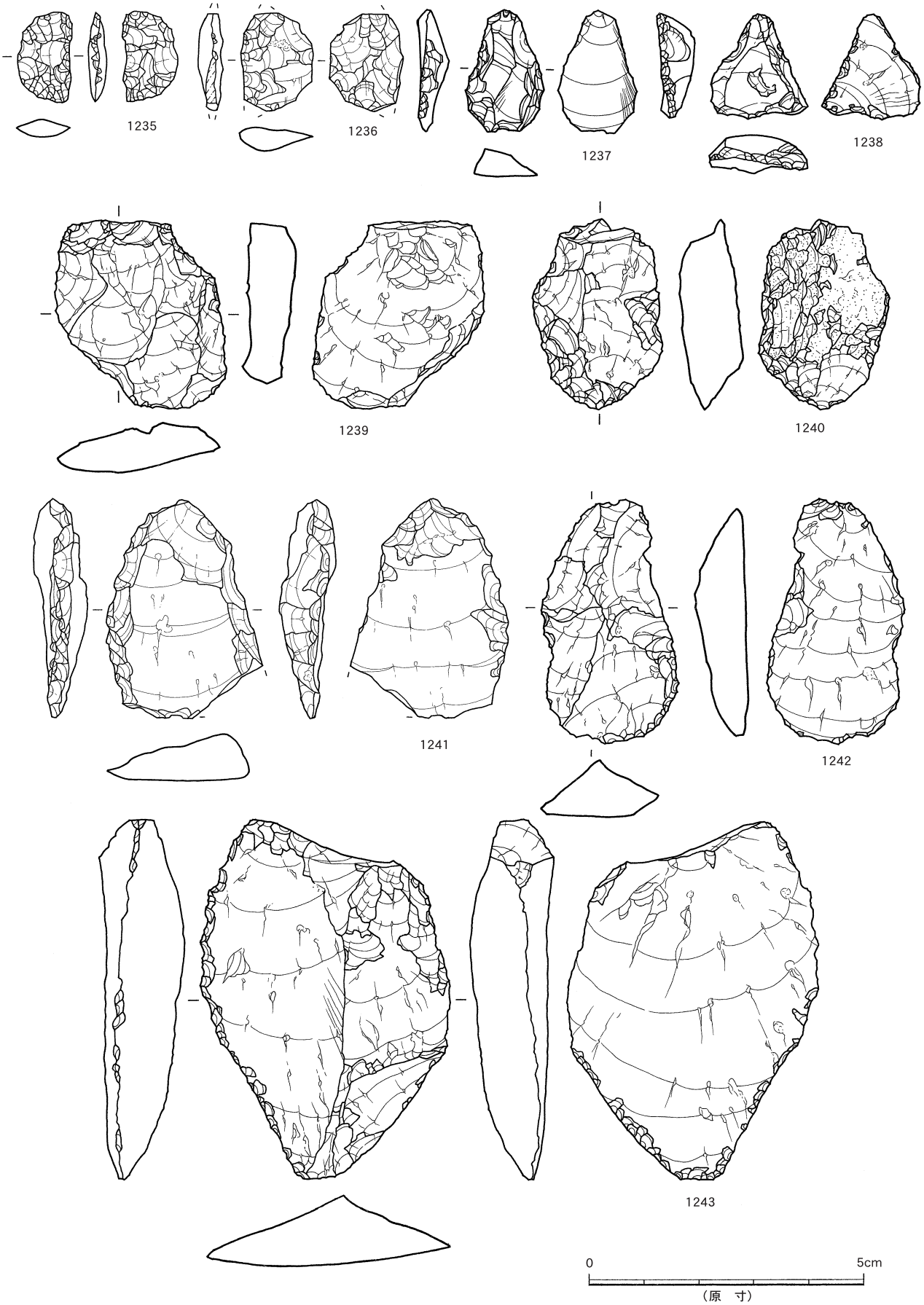
第94図　包含層出土遺物⑧



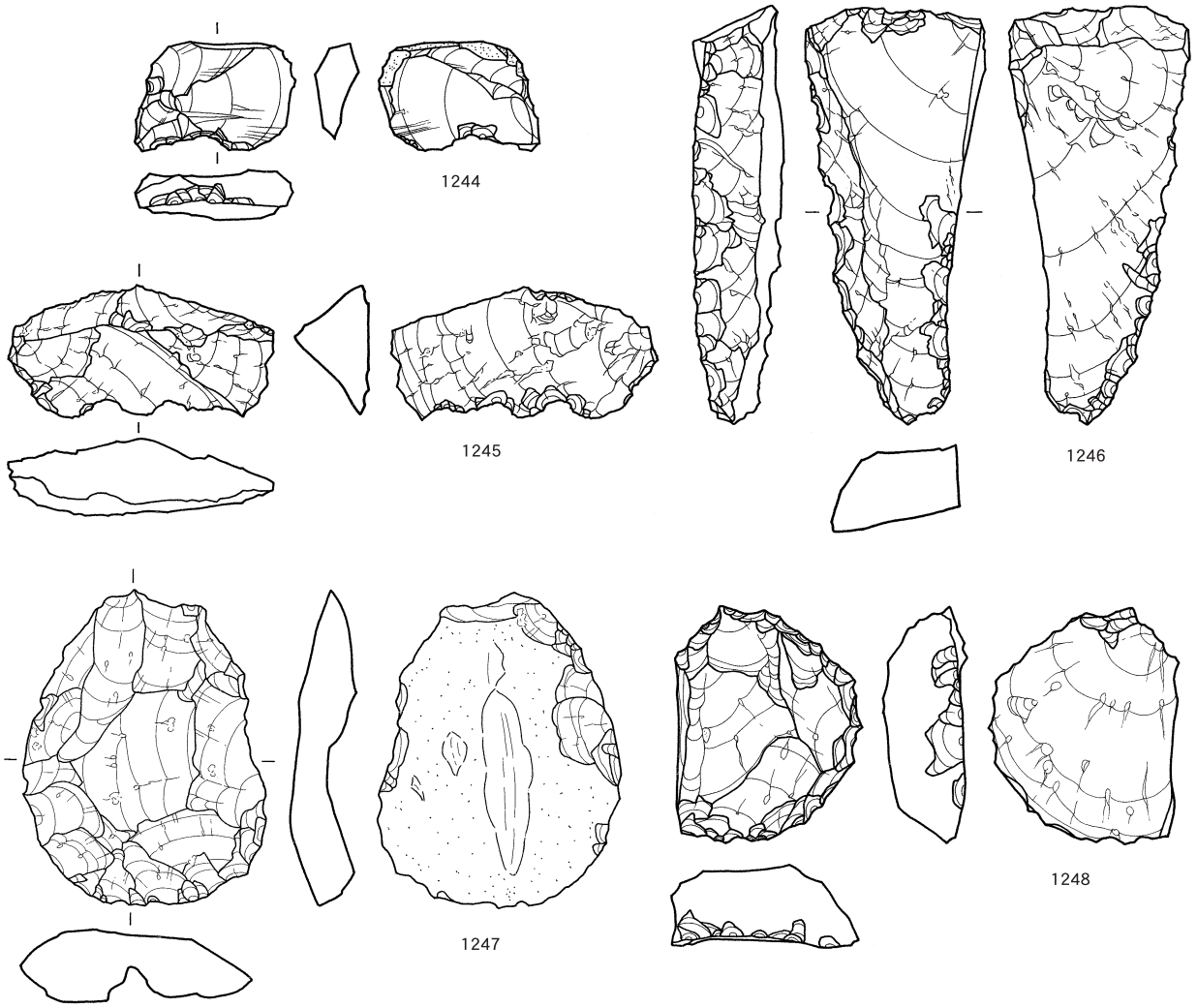


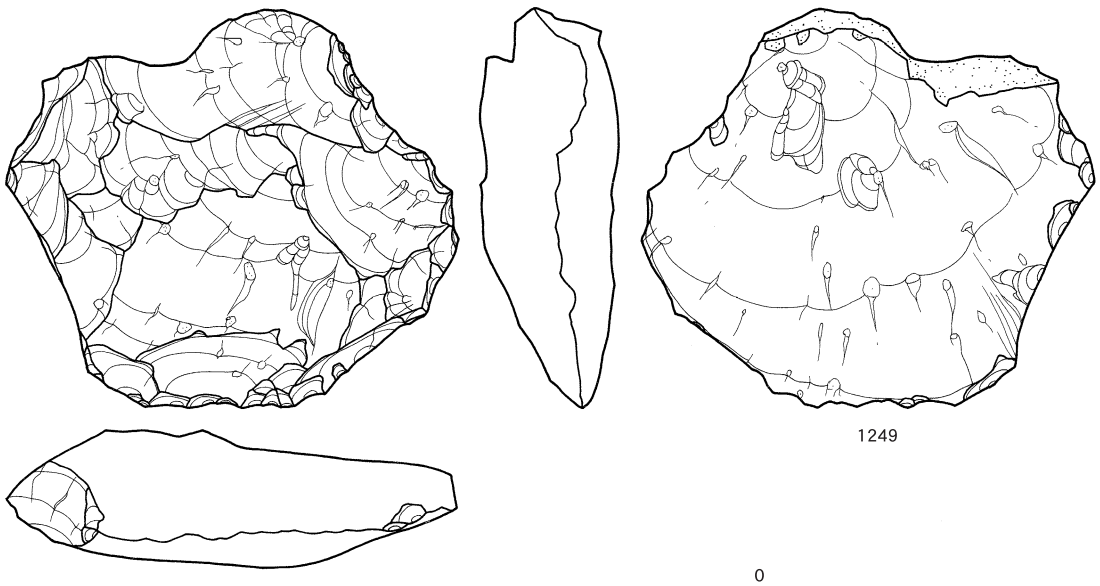


第95図　包含層出土遺物⑨



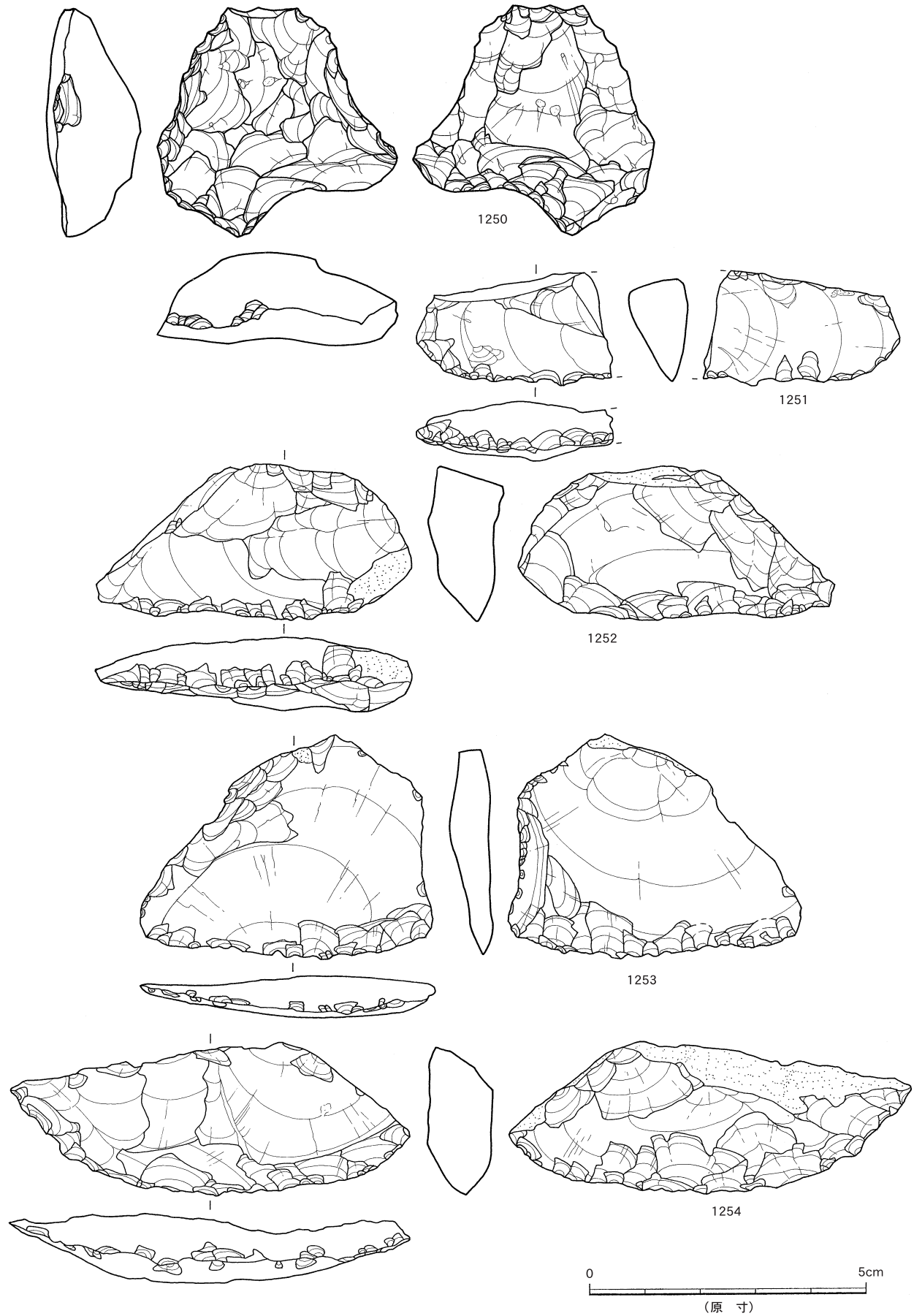
第96図　包含層出土遺物⑩



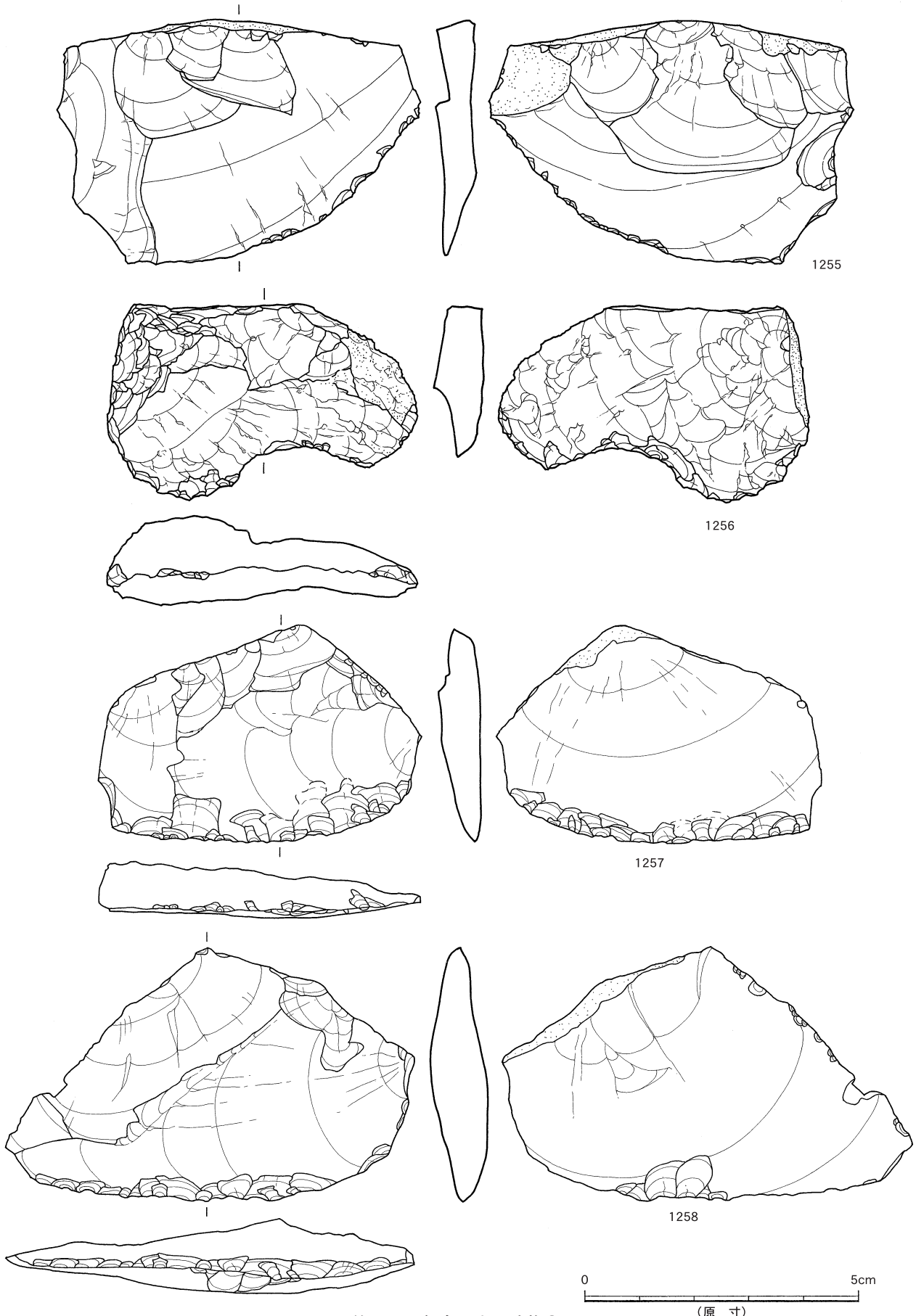


0 5cm
（原　寸）

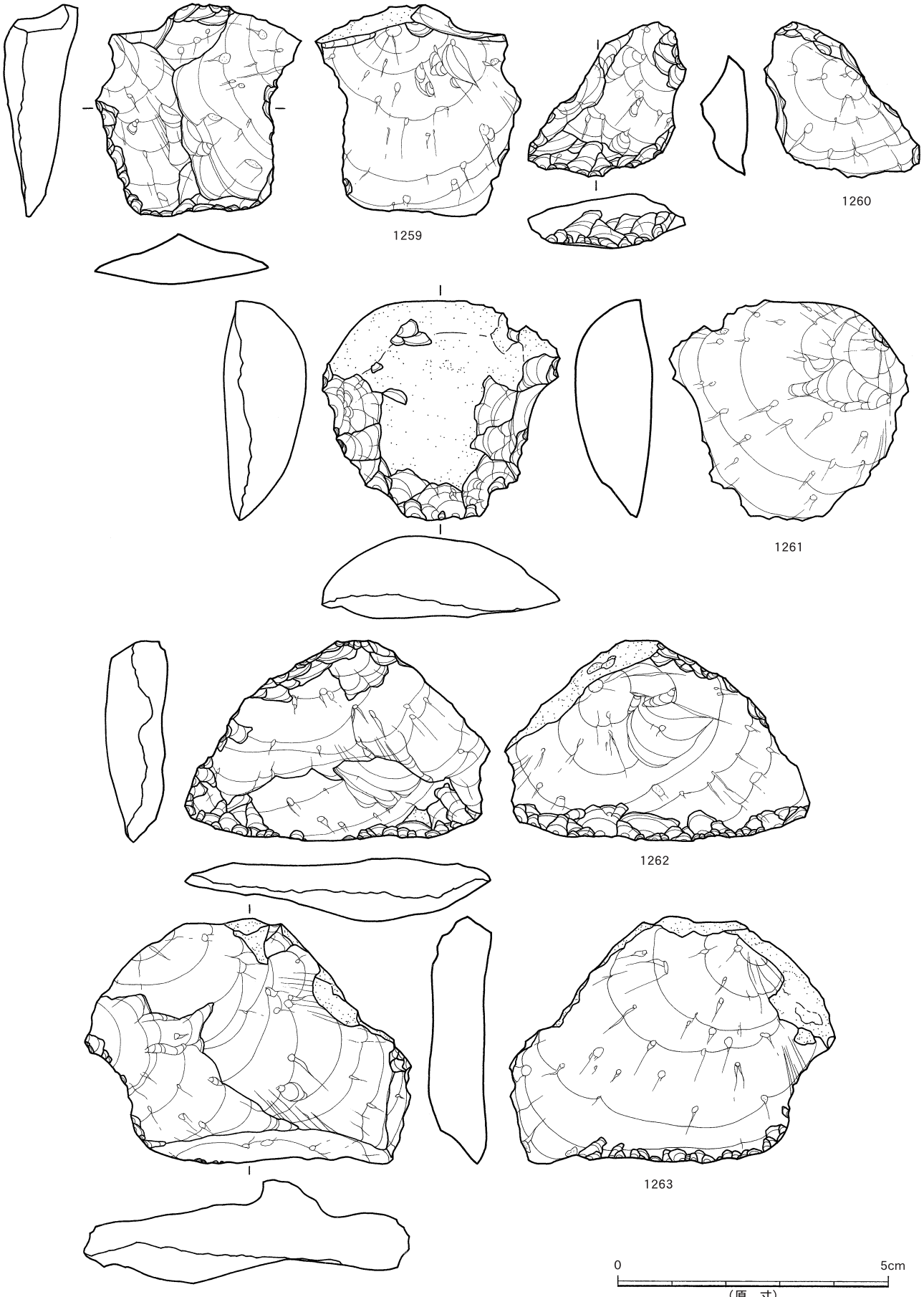
第97図　包含層出土遺物⑪



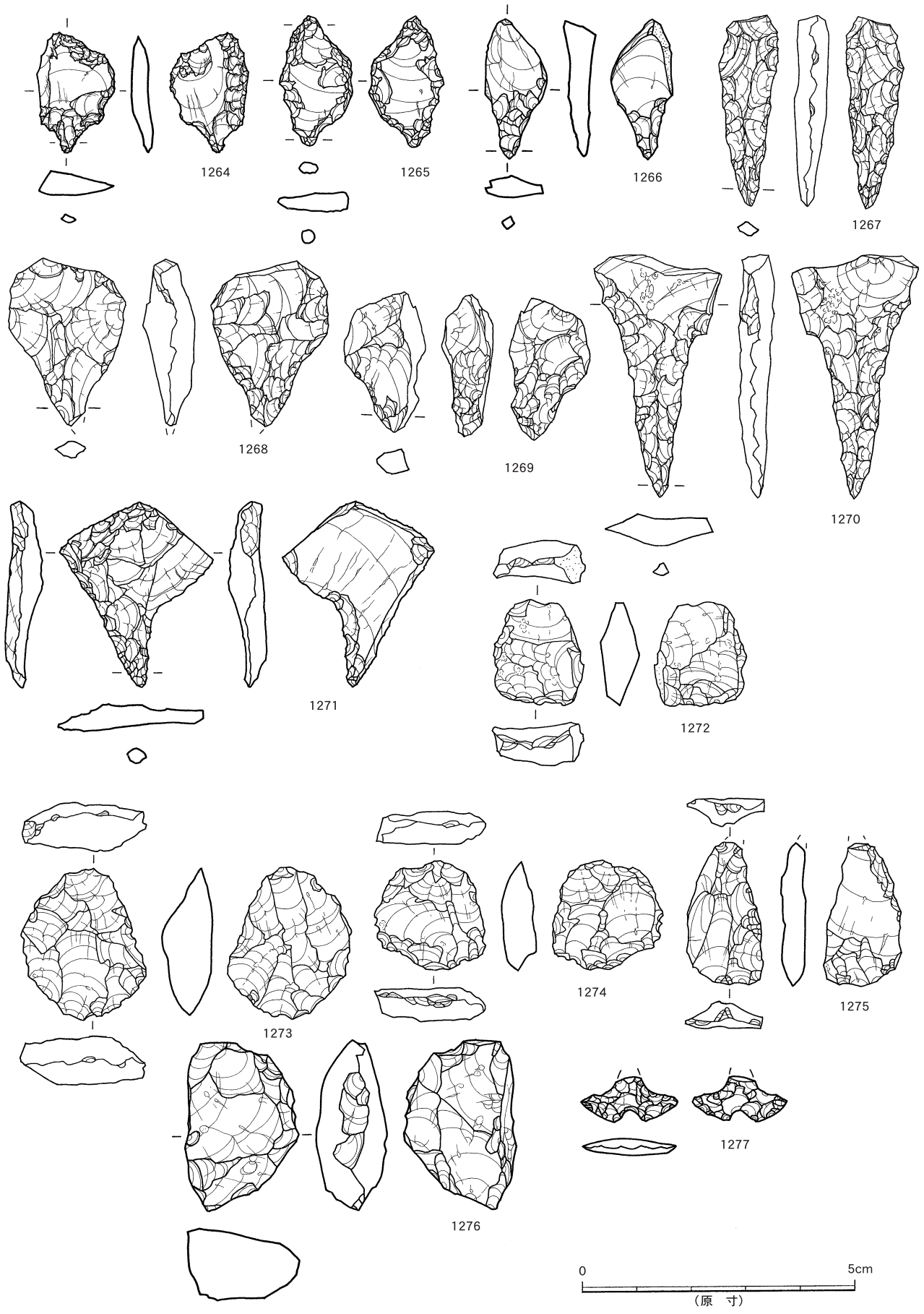
第98図　包含層出土遺物⑫



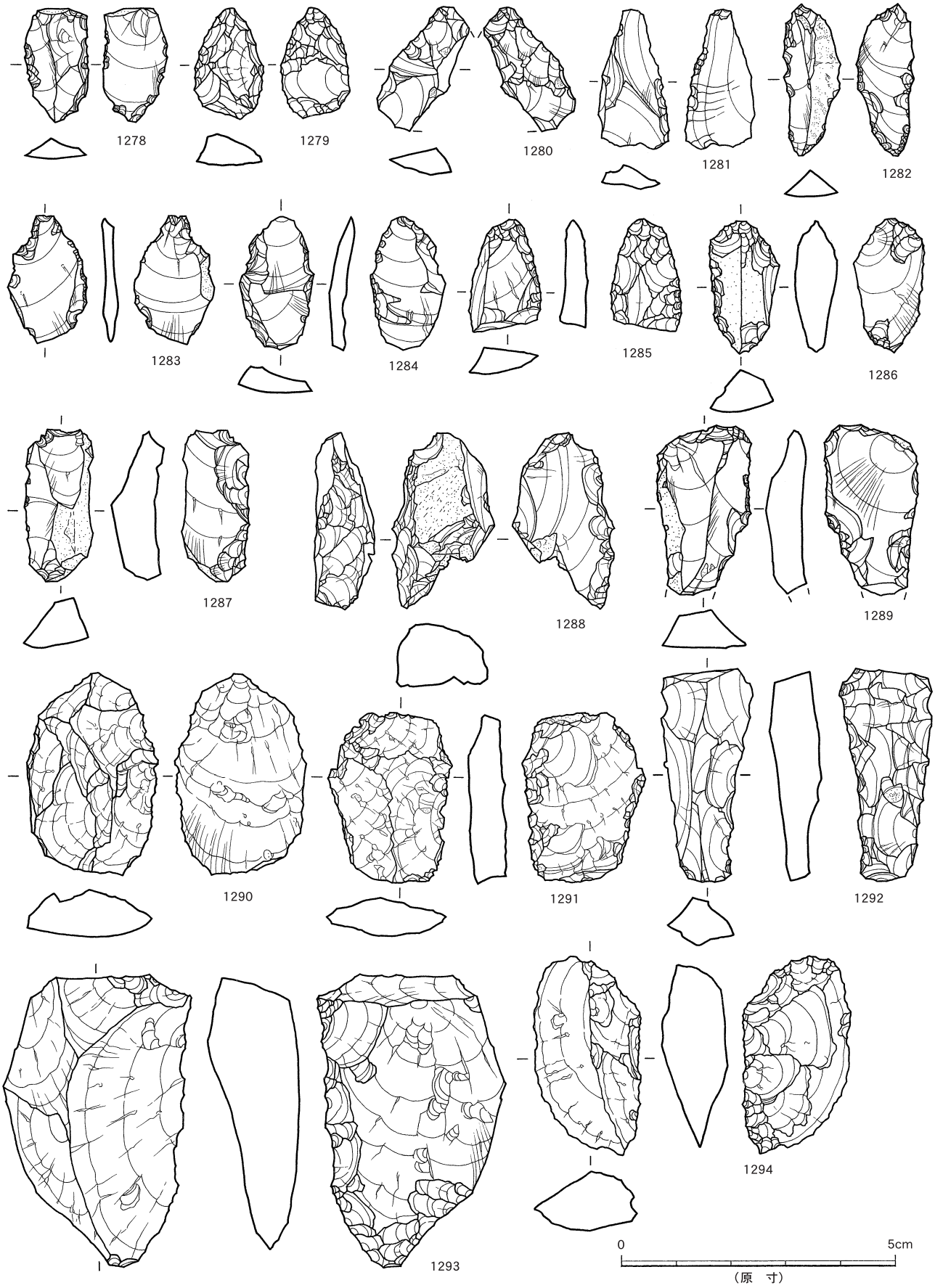
第99図　包含層出土遺物⑬



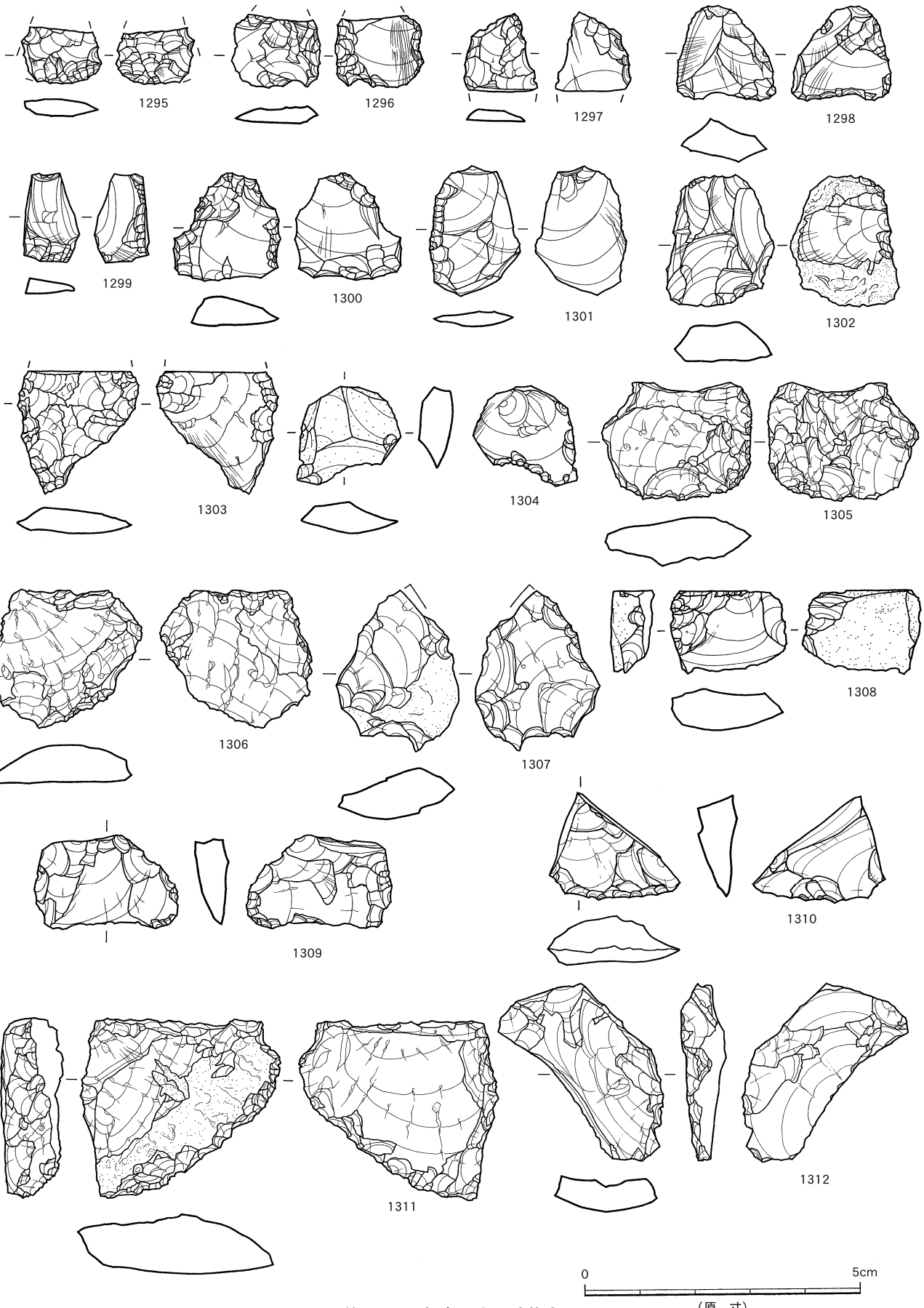
第100図　包含層出土遺物⑭



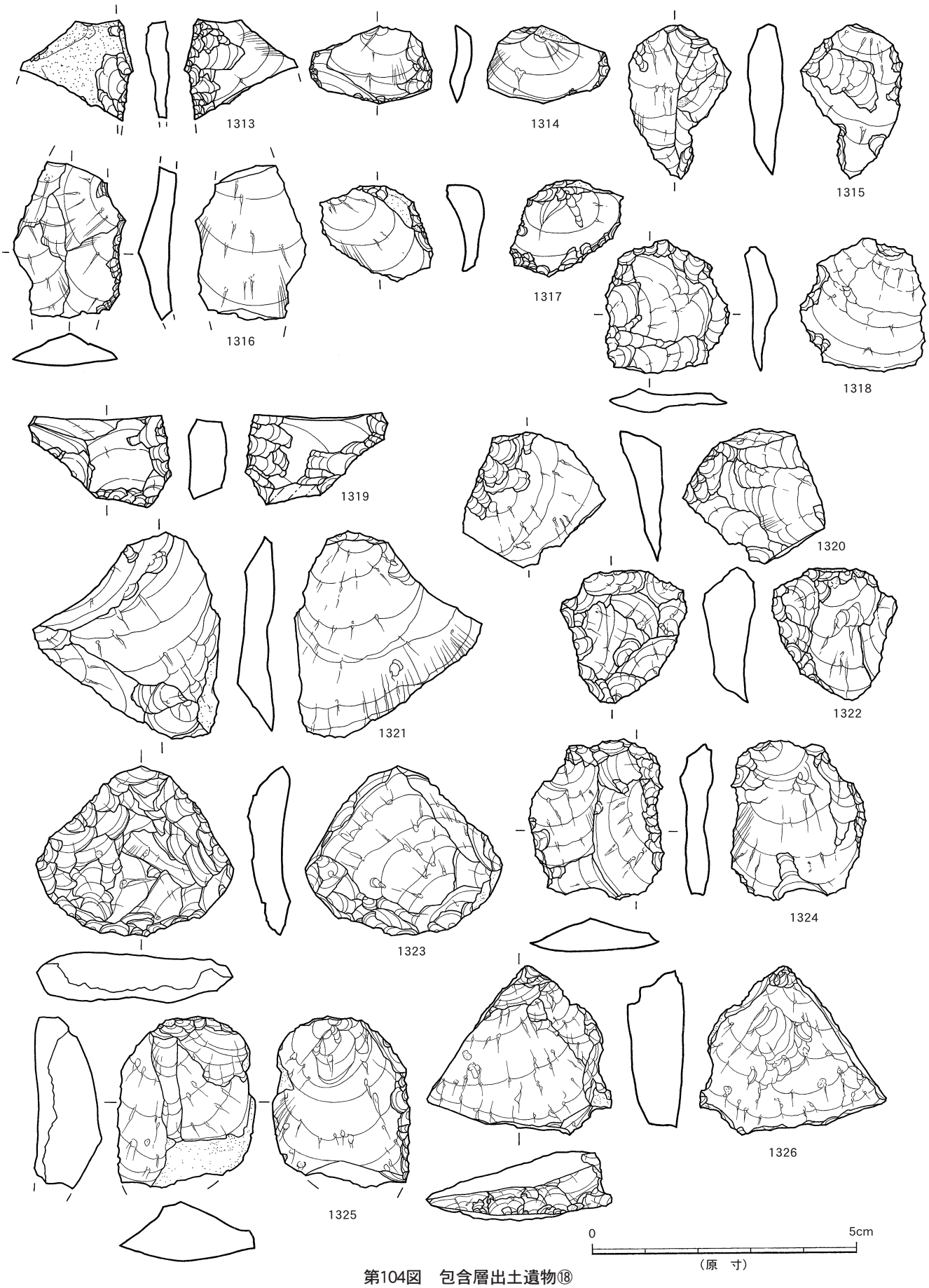
第101図　包含層出土遺物⑮



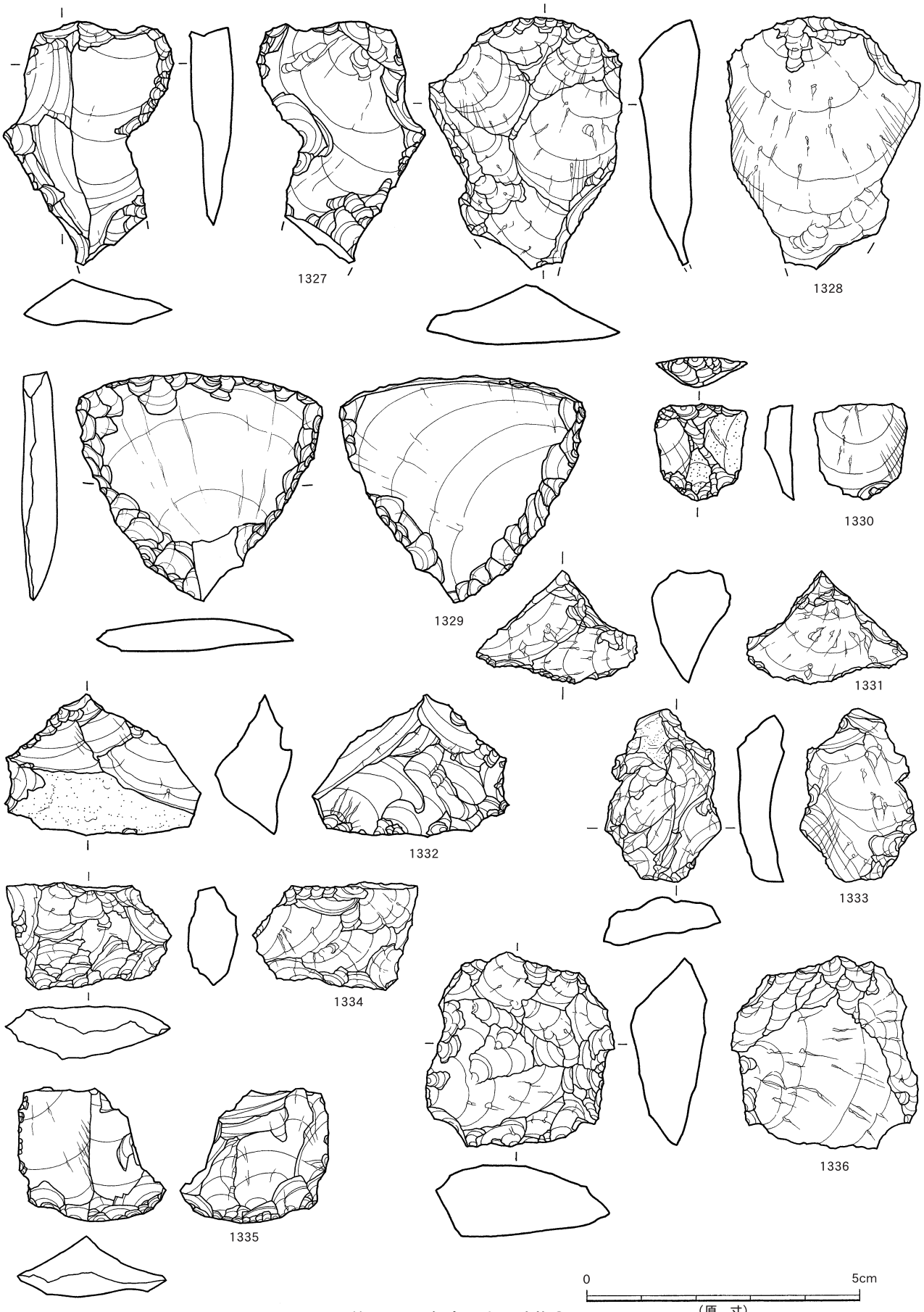
第102図　包含層出土遺物⑯



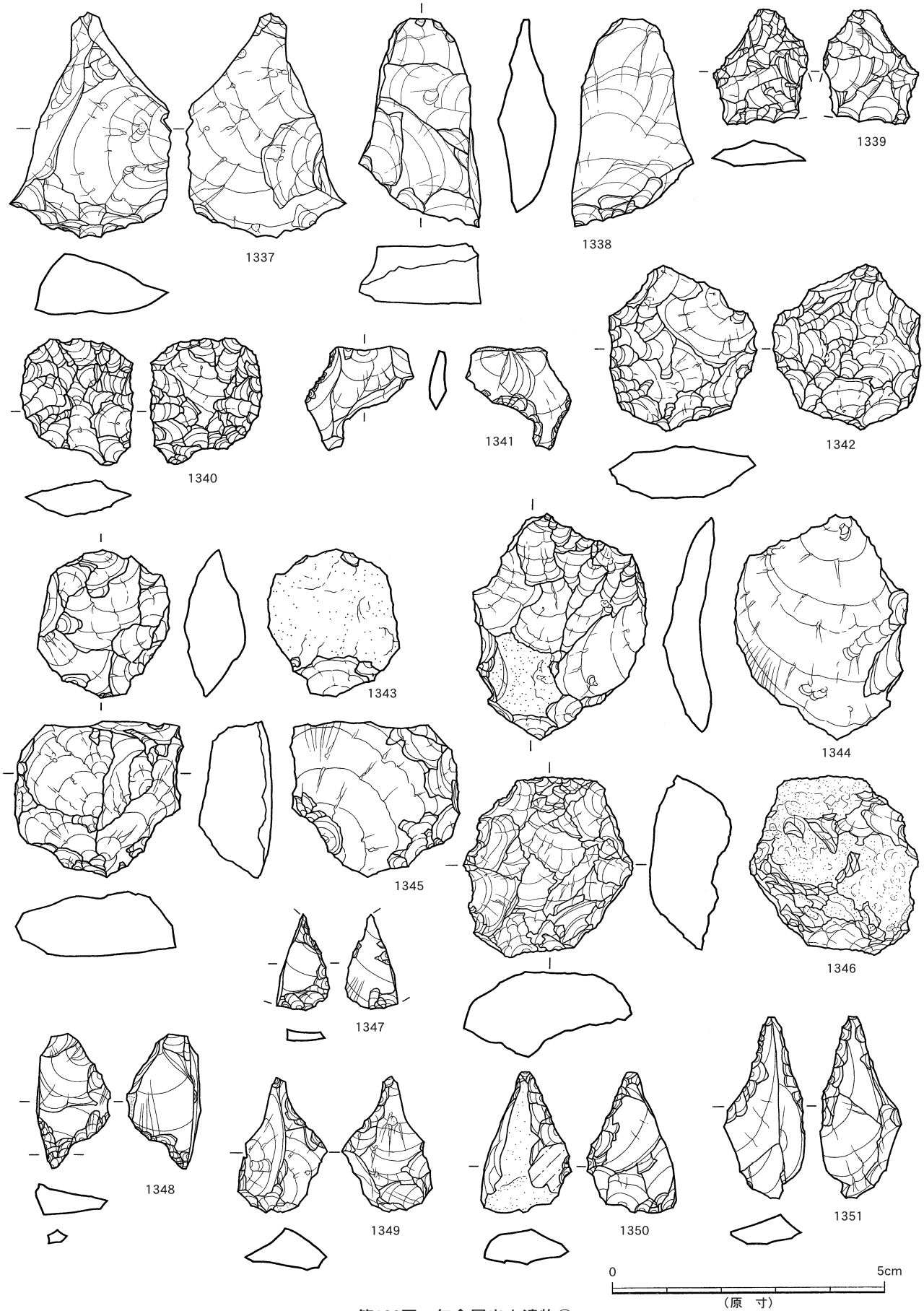
第103図　包含層出土遺物⑰



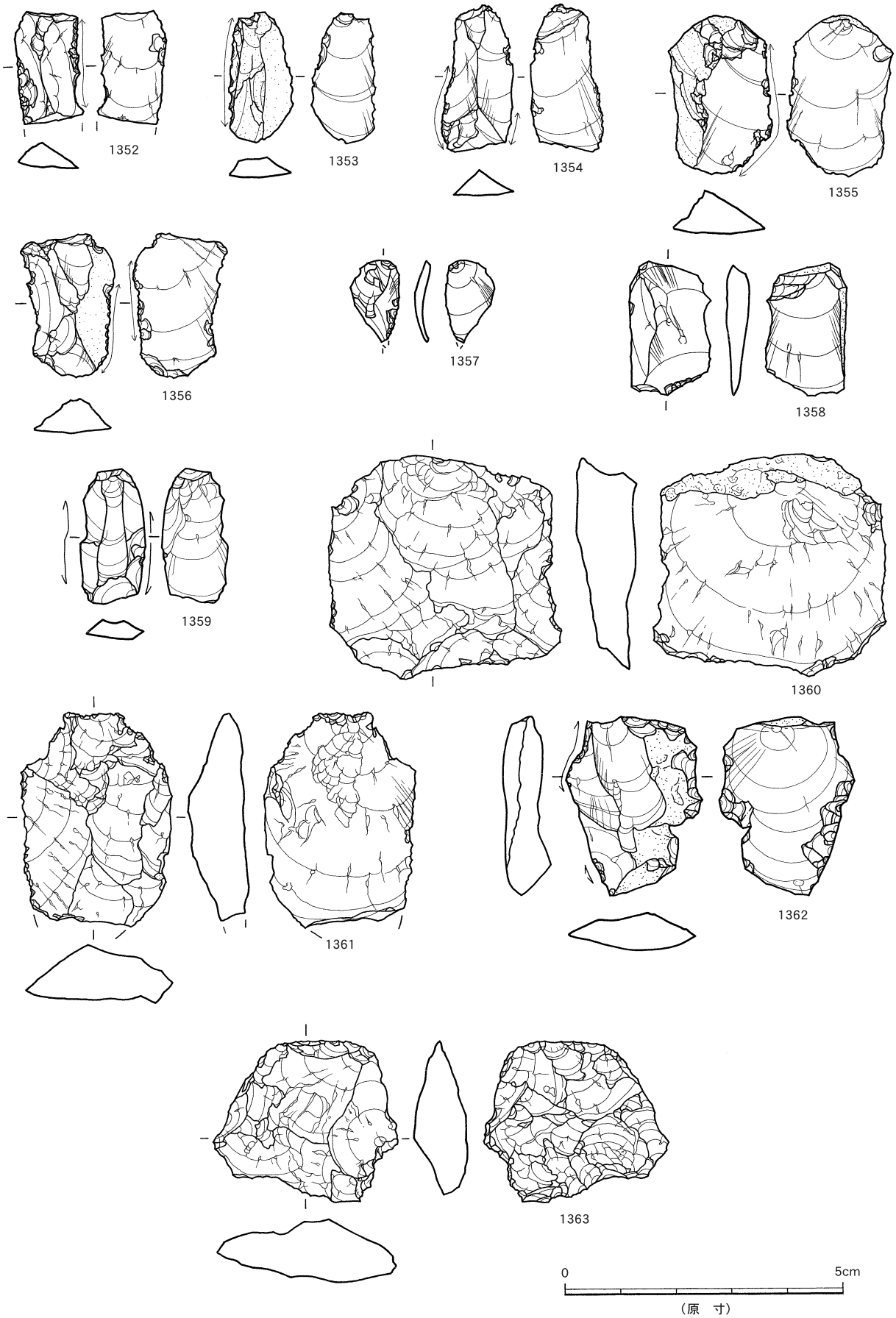
第104図　包含層出土遺物⑱



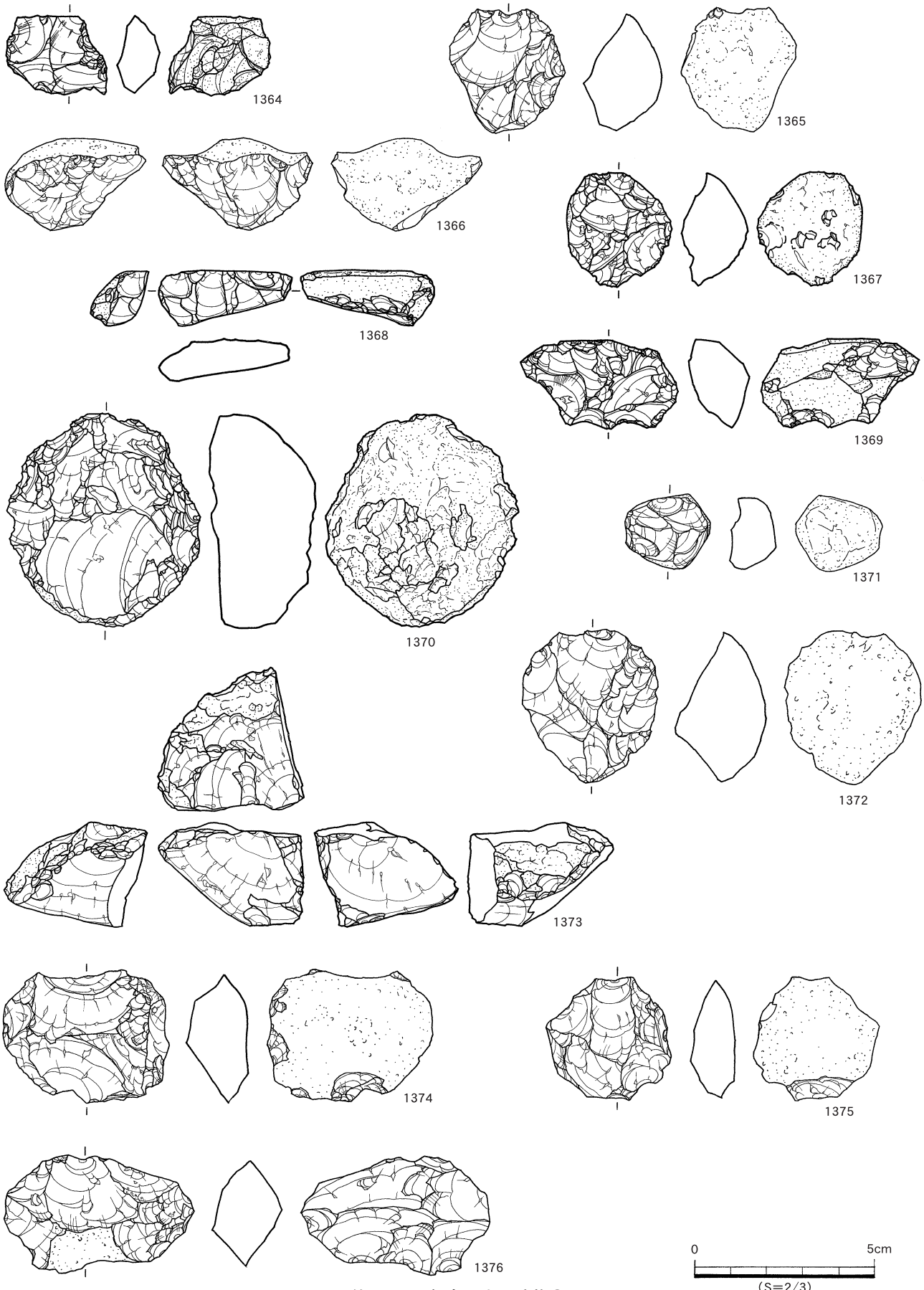
第105図　包含層出土遺物⑲



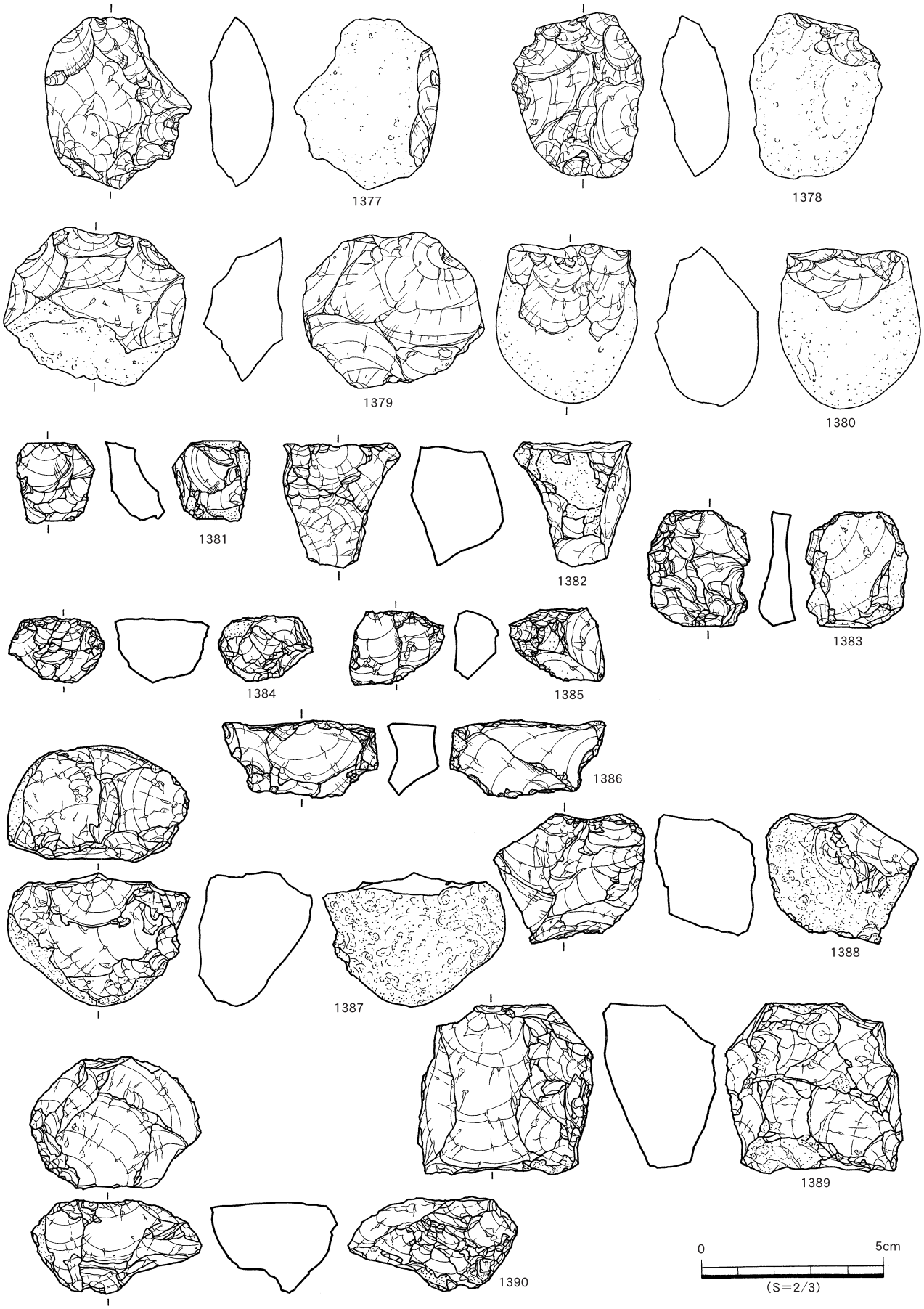
第106図　包含層出土遺物⑳



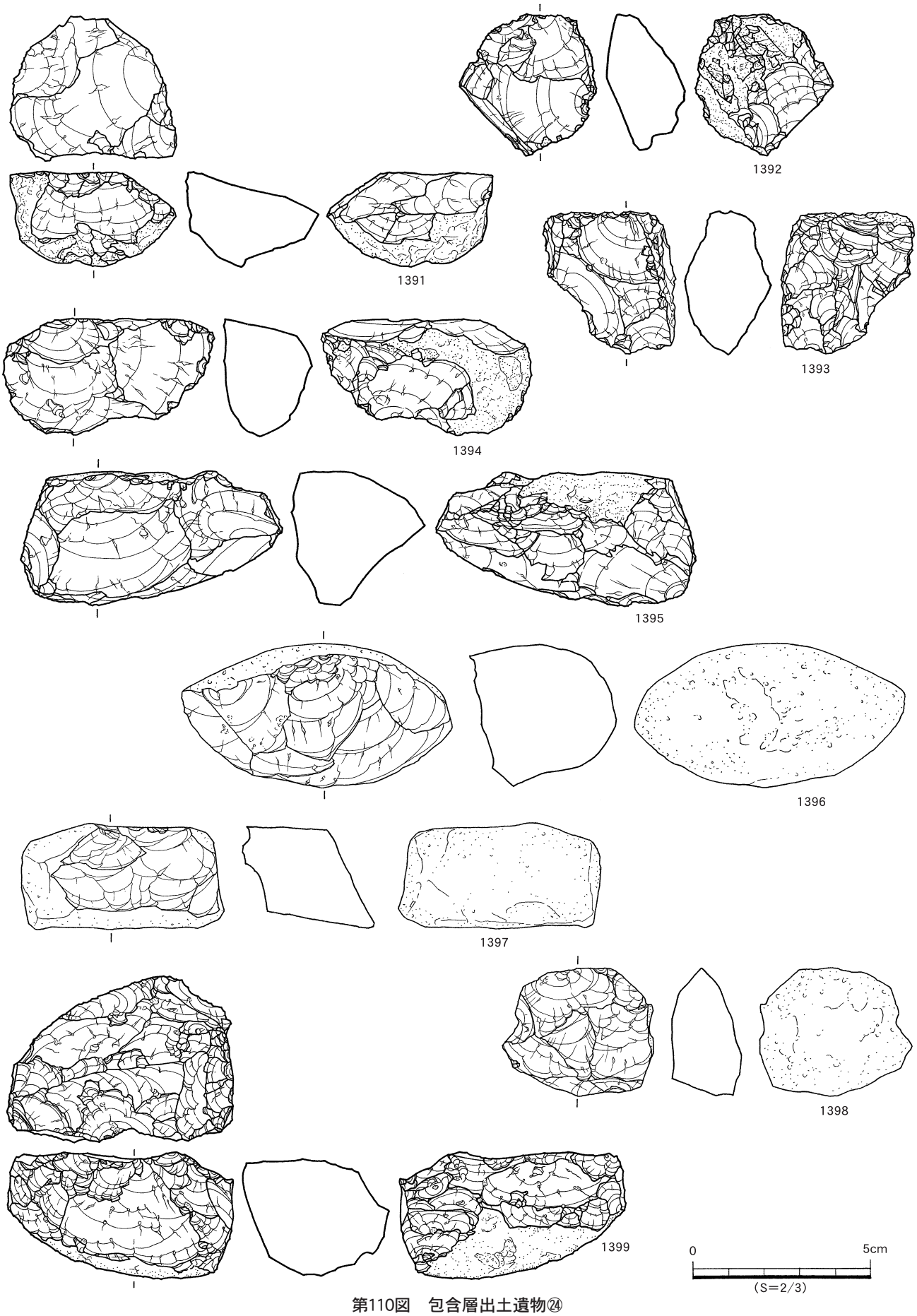
第107図　包含層出土遺物㉑



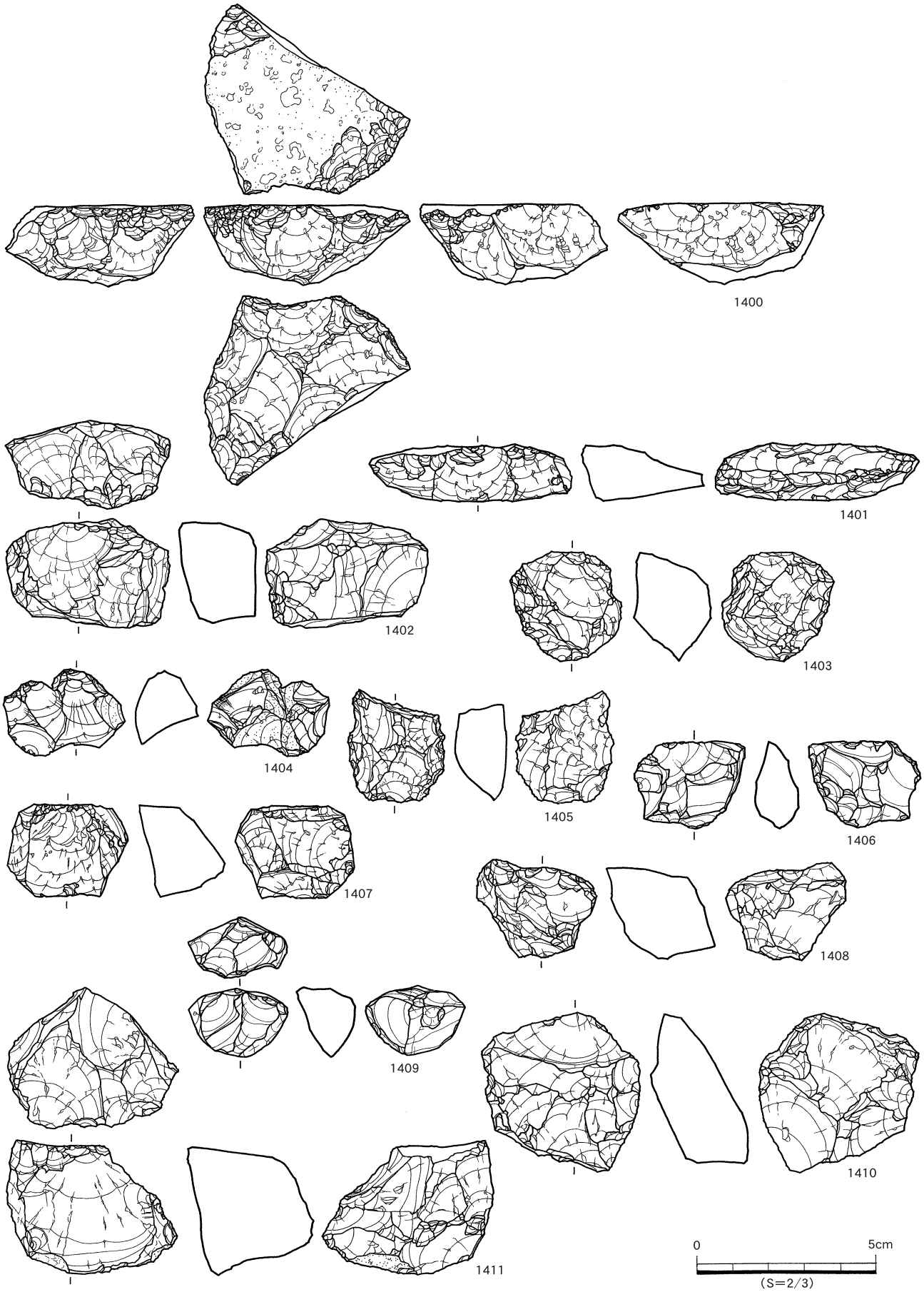
第108図　包含層出土遺物㉒



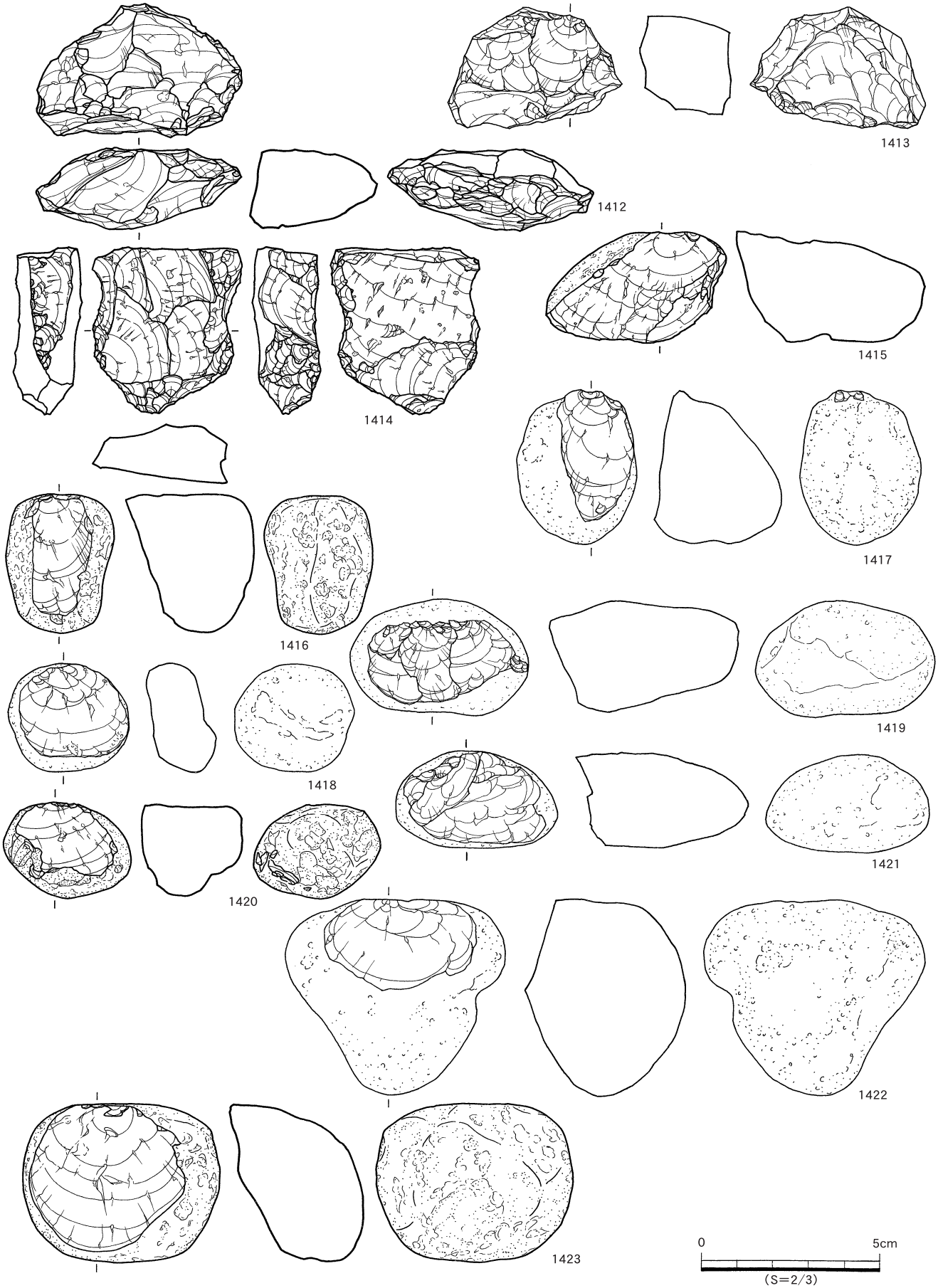
第109図　包含層出土遺物㉓



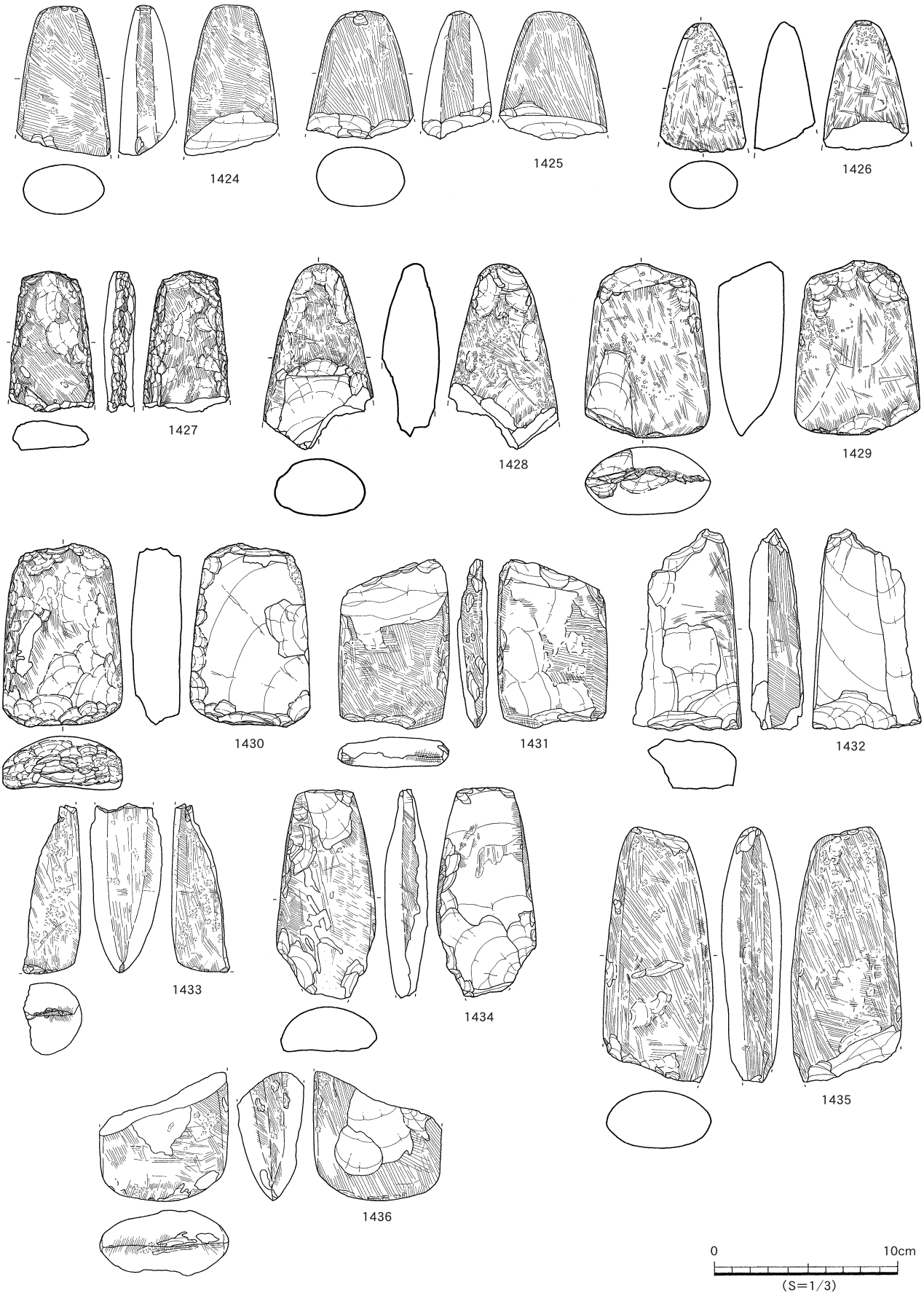
第110図　包含層出土遺物㉔



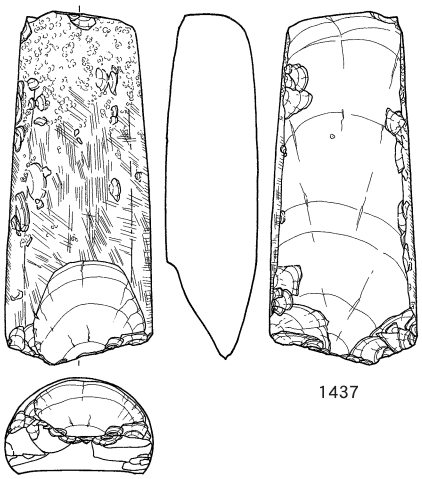
第111図　包含層出土遺物㉕

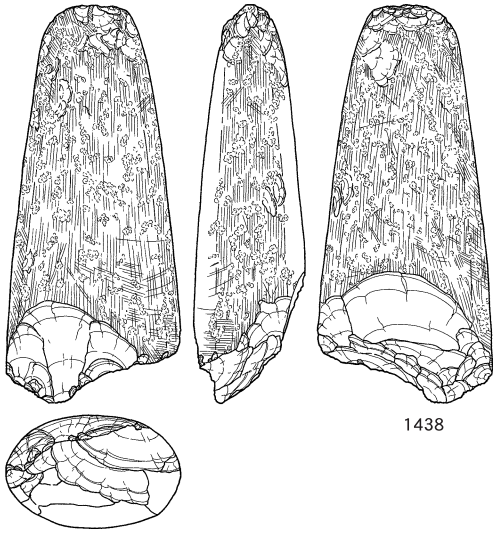


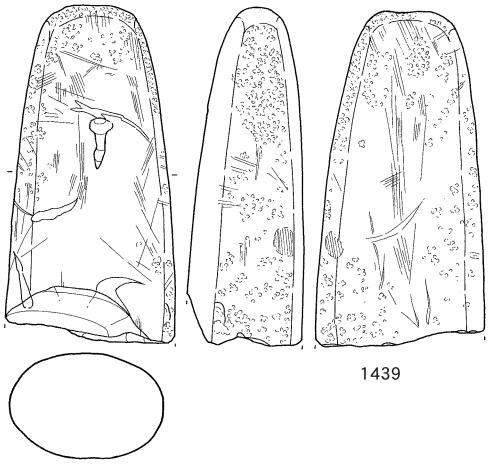
第112図　包含層出土遺物㉖

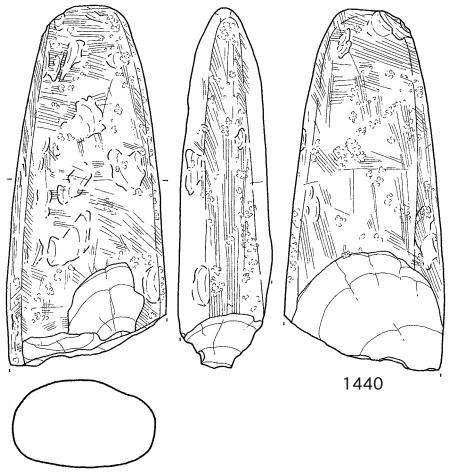


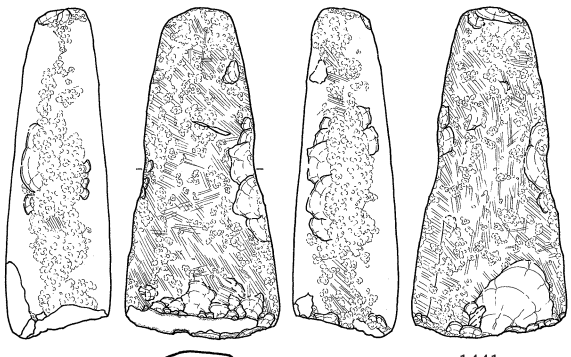
第113図　包含層出土遺物㉗

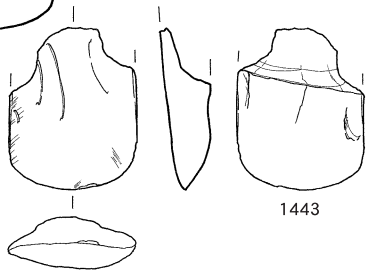


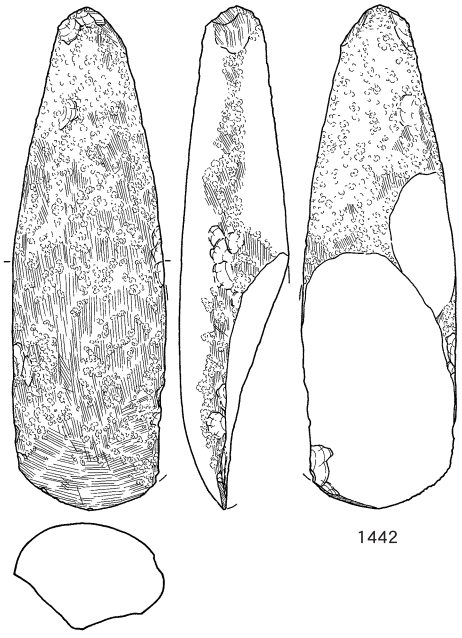


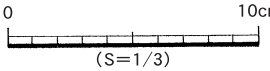








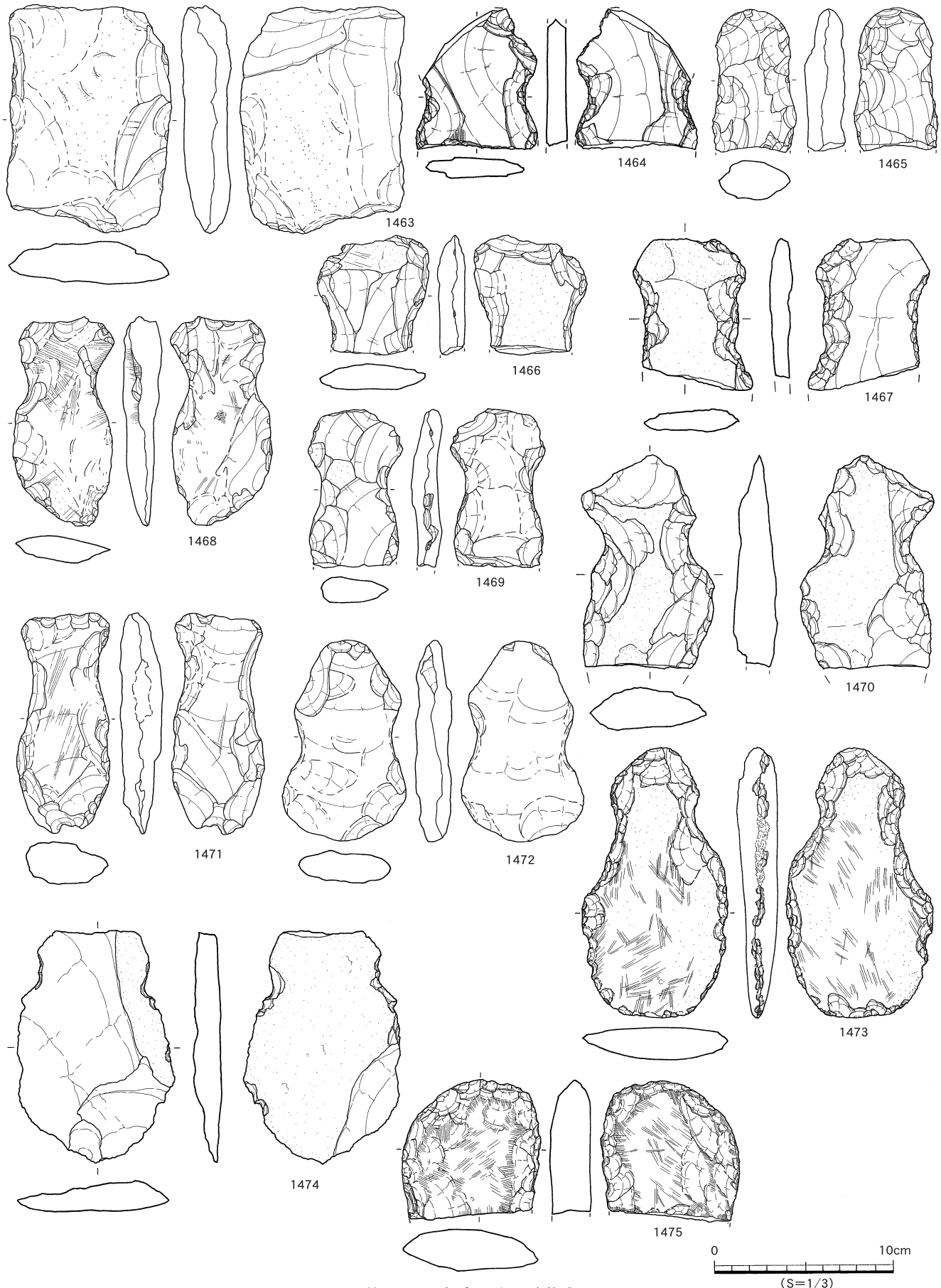




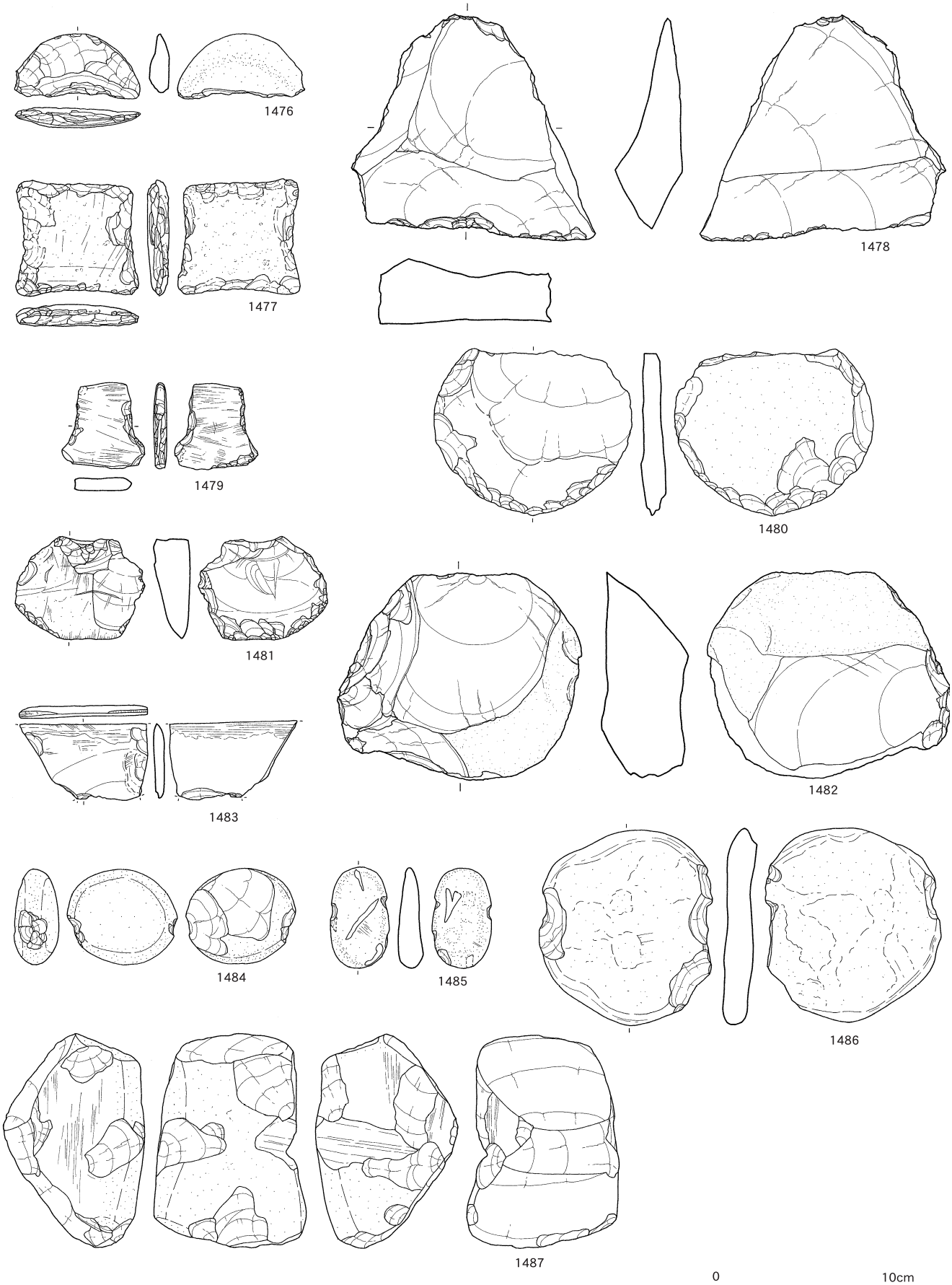
第114図　包含層出土遺物㉘



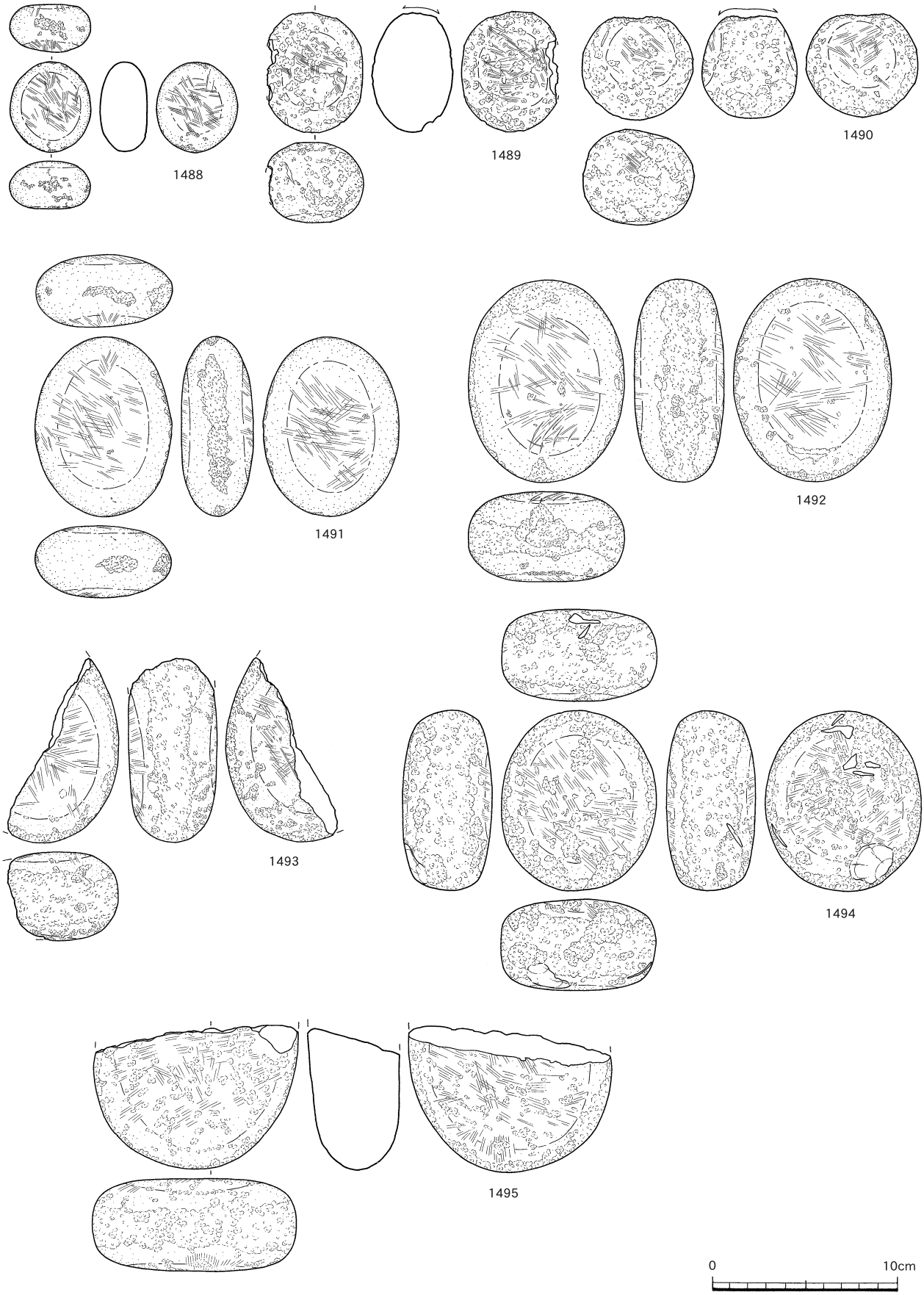
第115図　包含層出土遺物㉙



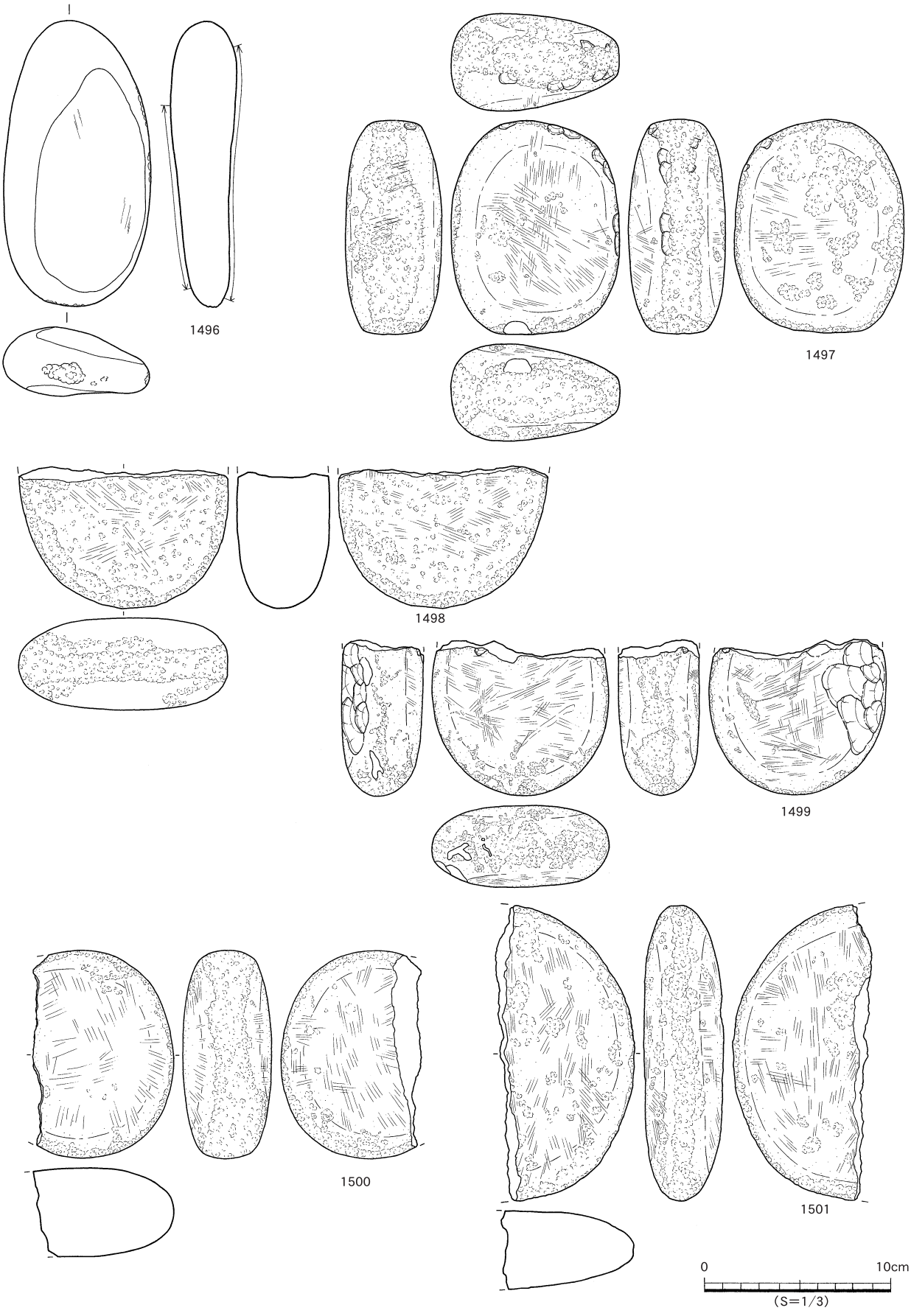
第116図　包含層出土遺物㉚



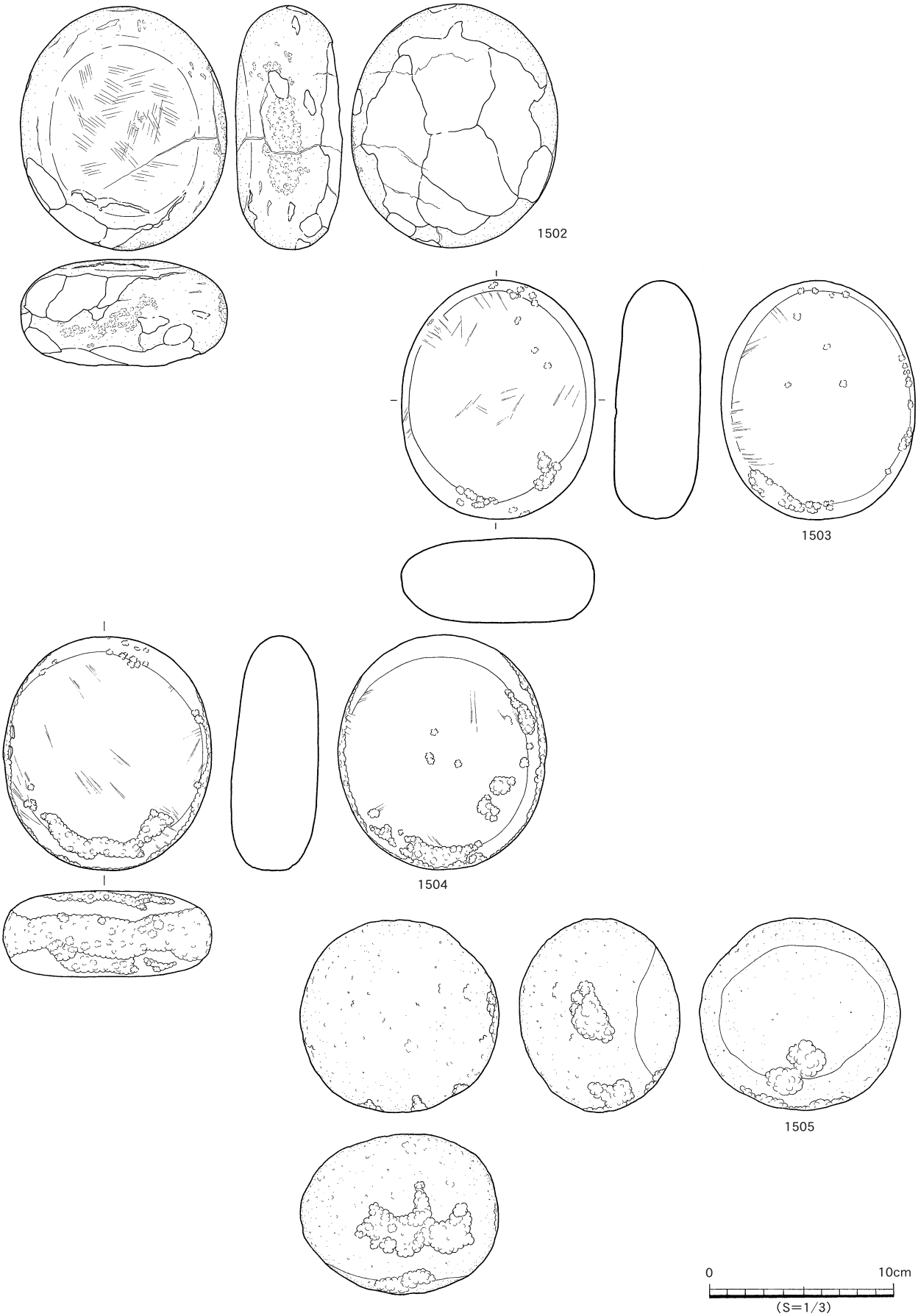
第117図　包含層出土遺物㉛



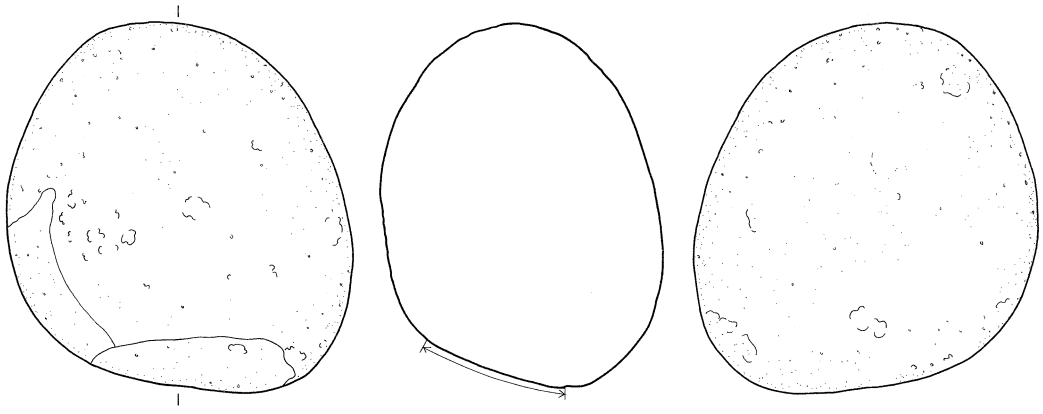
第118図　包含層出土遺物㉜

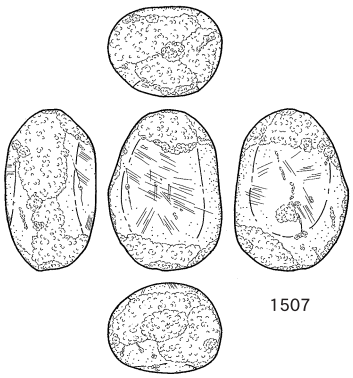


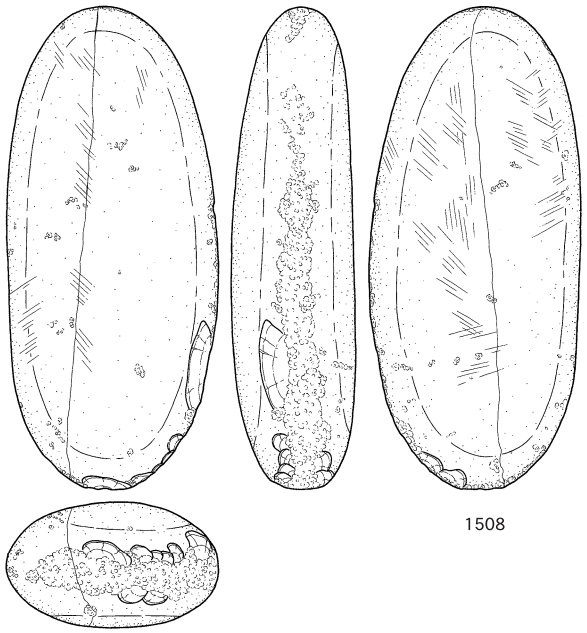
第119図　包含層出土遺物㉝



第120図　包含層出土遺物㉞







サイドブレイド（第107図1352～1356）

5点出土し，図化した。鈴桶技法のように縦長剥片を作りだしており，それぞれ使用痕と思われる微細剥離痕がある。石材としては，腰岳産，桑ノ木津留産，霧島系と思われる黒曜石が使用されている。

微細剥離痕剥片（第107図1357～1363）

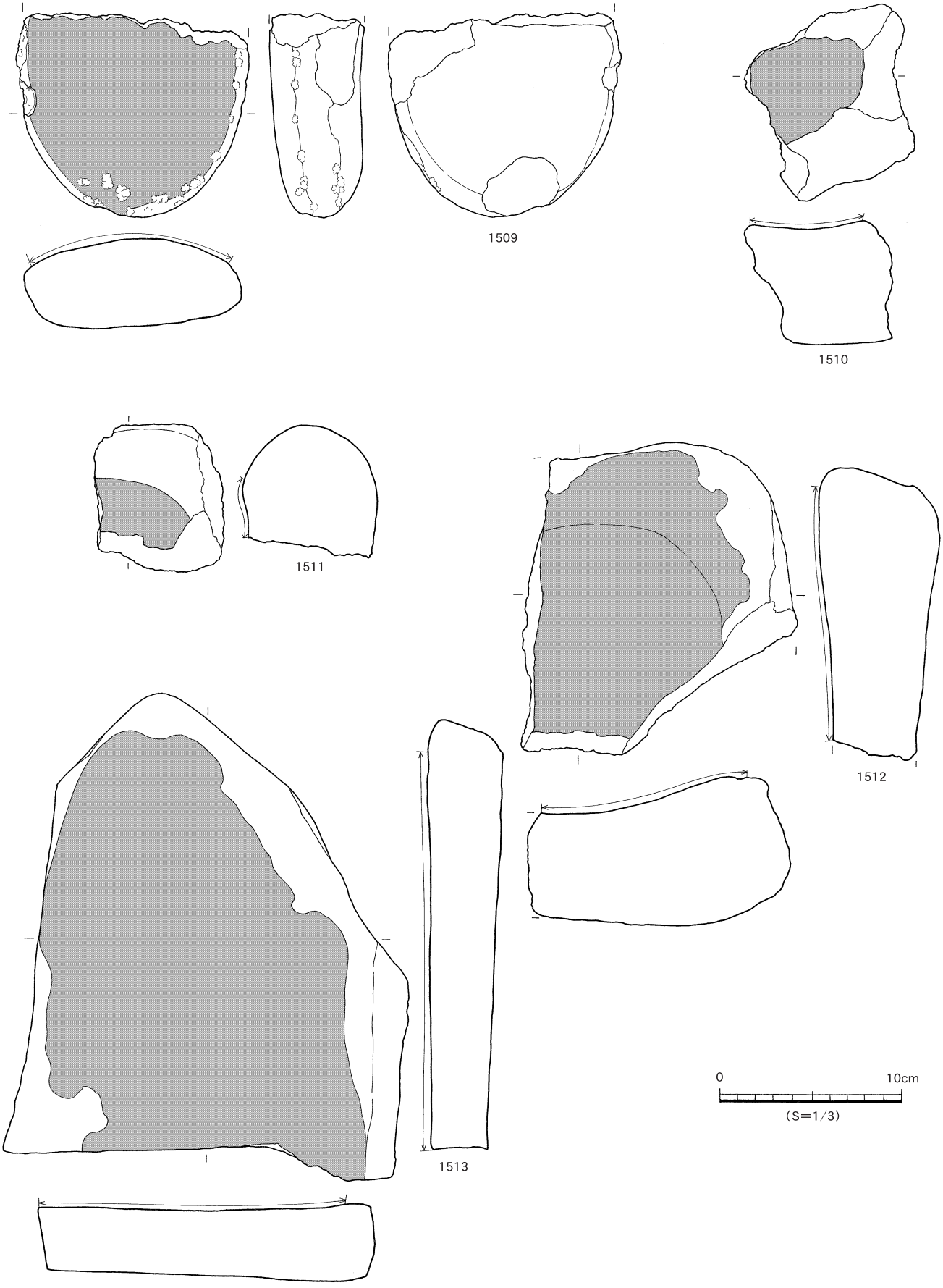
365点出土し，7点図化した。剥片の鋭利な縁辺に使用痕と考えられる微細剥離が認められるものを分類した。1358・1359・1362は先述のサイドブレイドと類似しており，石材も腰岳産や桑ノ木津留産に類似する黒曜石である。

石核（第108図～第112図1364～1423）

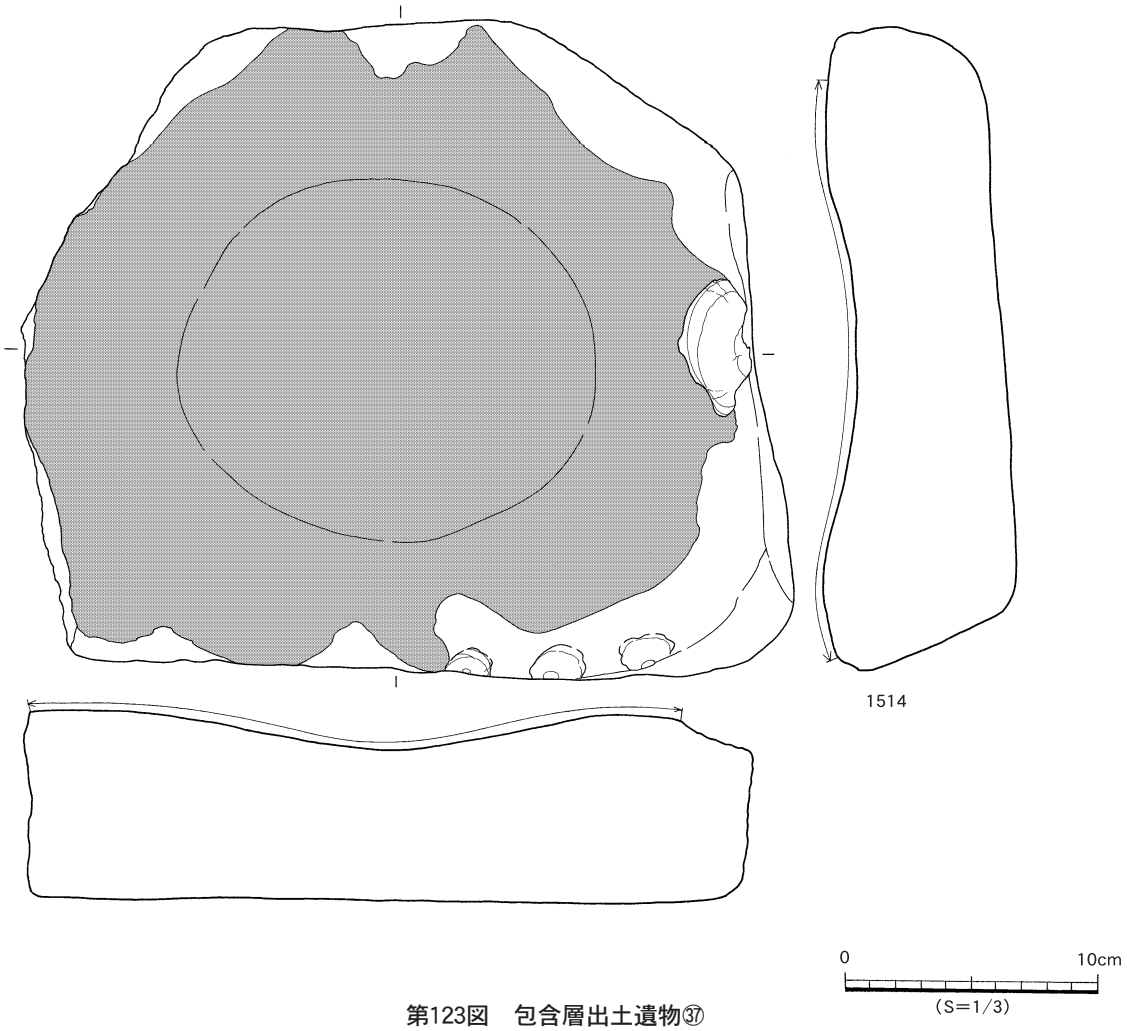
計1108点出土し，60点を図化した。ほとんどが黒曜石で，そのうち日東産のものが大半をしめる。Ⅰ類は自然面を有するもの，Ⅱ類は自然面を有しないもの，Ⅲ類は原石の形状を残すものとし分類した。また剥離の状態をもとに，周辺から中心にむかって剥ぐもの（a），分割により平坦な打面を形成した後，同一打面から剥いだもの（b），剥離方向に法則性が見いだせないもの（c）とし分類した。

Ⅰa類（7点　1364～1370）　Ⅰb類（1点　1373）
Ⅰc類（29点　1371，1372，1374～1400）
Ⅱb類（2点　1401，1402）　Ⅱc類（12点　1403～1414）
Ⅲ類（9点　1415～1423）

第121図　包含層出土遺物㉟



第122図　包含層出土遺物㊱



第123図　包含層出土遺物㊲

磨製石斧（第113図～第115図1424～1450）

38点出土し，そのうち27点を図化した。1424～1443は器厚が厚く，重量感があるものである。刃部は蛤の形態を有し，器形は長方形状を呈するものを分類した。1444は基部がやや細くなっており，刃部との境に肩を有している。1445～1450は比較的小型で細長く加工されたものである。

打製石斧（第115・116図1451～1475）

50点出土し，そのうち25点を図化した。1451～1454は器厚が比較的厚い。1455～1464は明瞭な抉りを持たず長方形の器形を呈するものを分類した。1465～1474は基部と刃部を境界作る抉り部を持ち，ラケット状を呈している。1475は欠損のため，形は不明である。

礫器（第117図1476～1482）

32点出土し，そのうち7点を図化した。1476は下縁部に刃部調整が施され，横長長楕円状の器形を呈する。1477は正方形状で，四辺を両面から打ち欠いている。1478は一辺に刃部調整が施され，器形は三角形状を呈しており，刃部整形は直線的である。1480～1482は円形を呈しており，周縁部に調整を施している。

擦切状石器（第117図1483）

2点出土し，1点を図化した。

石錘（第117図1484～1487）

4点出土し，図化した。1484～1486は扁平な小型円礫を素材とし，簡単な抉り部を作出している。1487は厚みのある自然礫を素材とし，上下側面に抉り部がある。

磨石類（第118図～第121図1488～1506）

磨石とみられるものは計108点出土し，19点を図化した。1488～1490は比較的小礫を素材とし，全面的に磨面を有するとともに，側縁部には敲打痕も見られる。

敲石（第121図1507，1508）

敲石とみられるものは32点出土し，そのうち2点を図化した。1507は多くの面を磨面・敲面として用いている。1508は棒状の円礫を用いており，下端部に敲打痕が見られる。

石皿（第122・123図1509～1514）

66点出土し，そのうち6点を図化した。

2　弥生時代の調査

⑴調査の概要

弥生時代の調査は，北側調査区を中心に進めていった。包含層の調査は，他の時代時期と同様Ⅱ層ないしⅣ層で行っているが，層位が良好に堆積残存している部分では，Ⅲ層から遺物は出土している。

遺構検出は，アカホヤ火山灰層（Ⅵ層）で検出を行った。ただし，遺跡北側と南側とでは層の堆積等が異なっており，北側では黄褐色砂礫層（Ⅷ層）上面で遺構を捉えている。

遺構の調査は，北側調査区の土坑群を中心に進めていった。これらの遺構は，検出段階での時期判断は行えず，農道境で断面上に検出された土坑19号と共に出土した中期の壺（６）を手がかりに，同一色の埋土のものを弥生時代と想定して遺構の調査を進めていった。その過程で，土坑34号から武器形青銅器が出土するなど，遺構のプランや埋土の状況が類似する密接した土坑群の大半が当該期に位置づけられることが判明した。このため，これらの土坑群は集団墓の可能性を視野に入れ，埋土中に木棺の痕跡等が残されていないか留意していった。床面に溝状のプランが見られたものについては，遺構を断ち割るなどして記録作業を進め，また，掘り上げられた埋土は土嚢袋に入れ，調査期間中及び整理作業の段階ですべてふるいがけを行い，微細遺物の検出に努めていった。しかし，人骨や微細遺物の出土は確認できなかった。なお，２基の土坑（19号・37号）では，リン・カルシウム分析を実施した。

包含層の調査は，大型の破片等はトータルステーションで出土地点の記録を行い，小破片はグリッド毎に一括取り上げを行った。甕や壺等細分ごとの出土状況は，第153図の通りである。包含層中から破砕鏡が出土した点や，抉入柱状片刃石斧が古墳時代の竪穴住居跡内から出土した点など，多くの部分で後世の攪乱あるいは削平を受けていることがわかる。その中でも，甕Ⅳ類はこの地方ならではのもので，口縁部から胴部まで残存している資料等もあり貴重なものとなった。

⑵遺構

土坑

弥生に該当すると思われる土坑については，平面形態と床面への溝状の掘り込みの有無を基に，長方形溝あり（６～9，17，27，34，37，48，49，51），・方形，略方形溝あり（33，39），楕円，略楕円形溝あり（13，35，41・42），長方形（１，3，10～12，19，21・22，24～26，30・31，38，40，44～47，50，52），方形，略方形（18，23，28），楕円，略楕円形（２，５，15，20，32，36），不定形（４，14，29，43），円形（16）の８類に分類した。

土坑６号（第130図）

Ｌ－12区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸131㎝×短軸100㎝の長方形を呈する。床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は，にぶい暗黄褐色砂壌土が主体である。検出面からの深さは35㎝で床面はほぼフラットで，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。短軸側壁面下部に沿って溝状の浅い掘り込みが見られる。長軸方向は西に88.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑７号（第130図）

Ｌ－12／13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸150㎝×短軸70㎝の長方形を呈する。床面での長軸は145㎝，短軸は57㎝を測る。埋土は暗茶褐色土の単一である。検出面からの深さは25～30㎝で壁面の立ち上がりははっきりしている。床面中央には長軸方向に，短軸には側壁下部に沿って浅い溝状の掘り込みが見られる。長軸方向は東に24度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑８号（第131図）

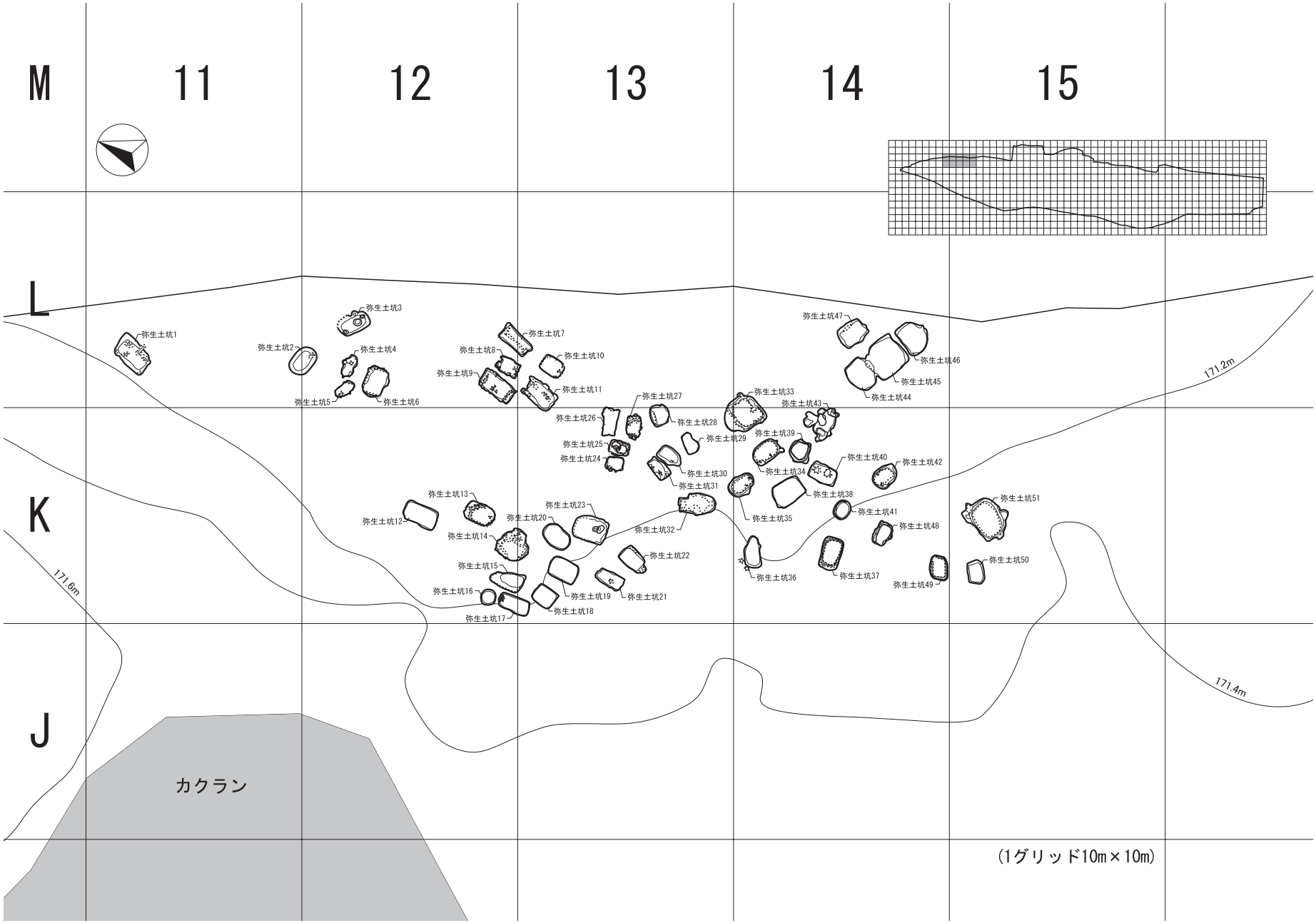
Ｌ－12区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸107㎝×短軸75㎝の略長方形を呈する。床面での長軸は83㎝，短軸は63㎝を測る。埋土は暗黄褐色砂壌土を主体とする。検出面からの深さは15㎝で壁面の立ち上がりははっきりしている。南側短軸側壁下部には浅い溝状の掘り込みが見られ，西側長軸側壁付近には２カ所のピット状の落ち込みが見られる。長軸方向は東に12度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑９号（第131図）

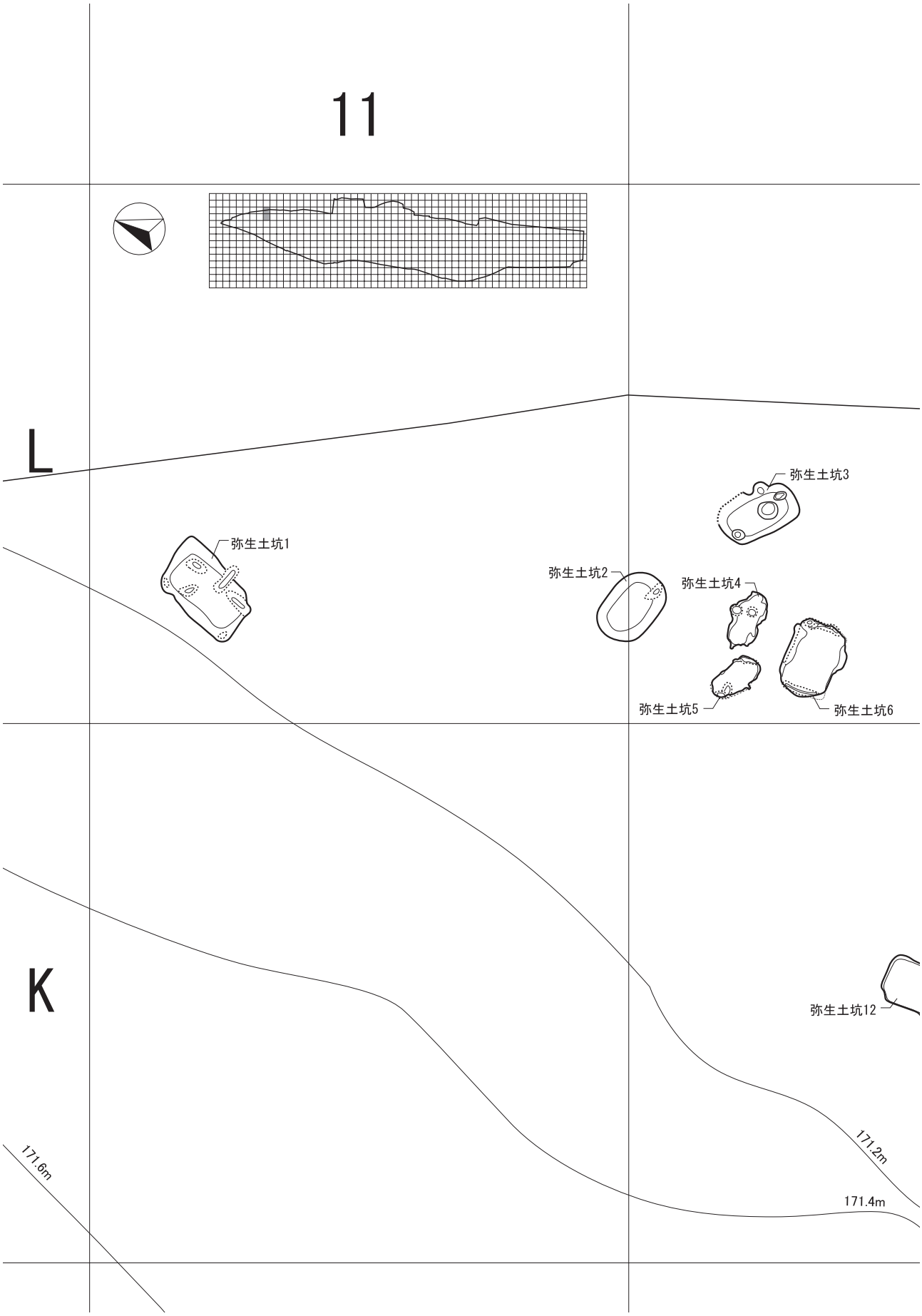
Ｌ－12区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸172㎝×短軸87㎝の長方形を呈する。床面での長軸は160㎝，短軸は72㎝を測る。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土を主体とし，側壁よりに黒灰色砂壌土が堆積する。検出面からの深さは20㎝で立ち上がりははっきりしている。両短軸側壁近くには壁に平行して浅い溝状の掘り込みが見られる。また，床面中央やや西寄りに２カ所のピット状の掘り込みも確認できる。長軸方向は東に16度振れる。遺物が２点出土した。

土坑17号（第131図）

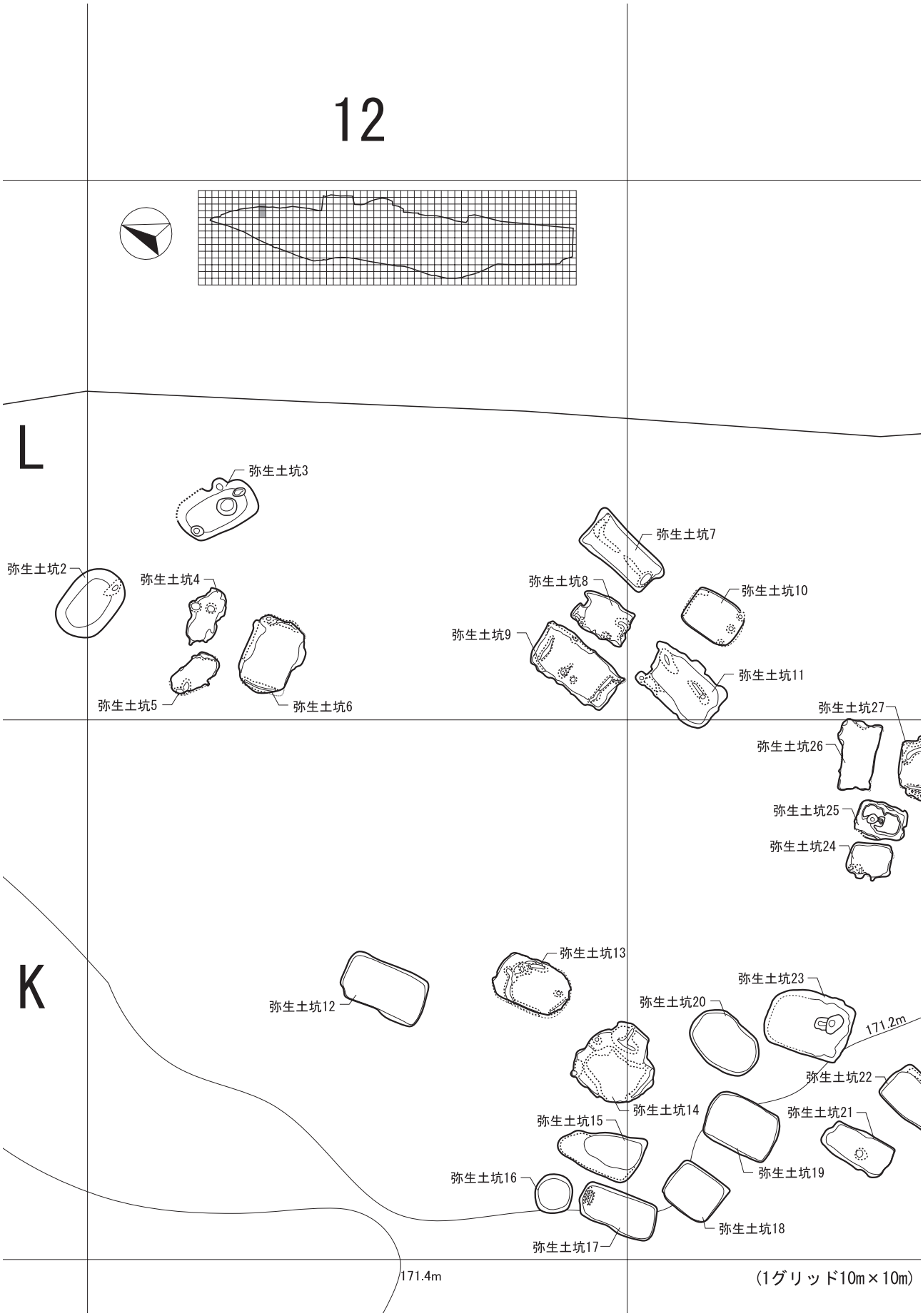
Ｋ－12／13区，Ⅷ層上面で検出された。遺構中央上面に近現代の溝跡が見られる。平面形態は長軸148㎝×短軸68㎝の長方形を呈する。床面は長軸で143㎝，短軸で59㎝を測り，フラットである。検出面からの深さ23㎝で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。北側短軸側壁下部に沿って幅８㎝，深さ６㎝のしっかりした溝状の掘り込みが見られる。また数センチ離れた部分にそれに平行して同様の掘



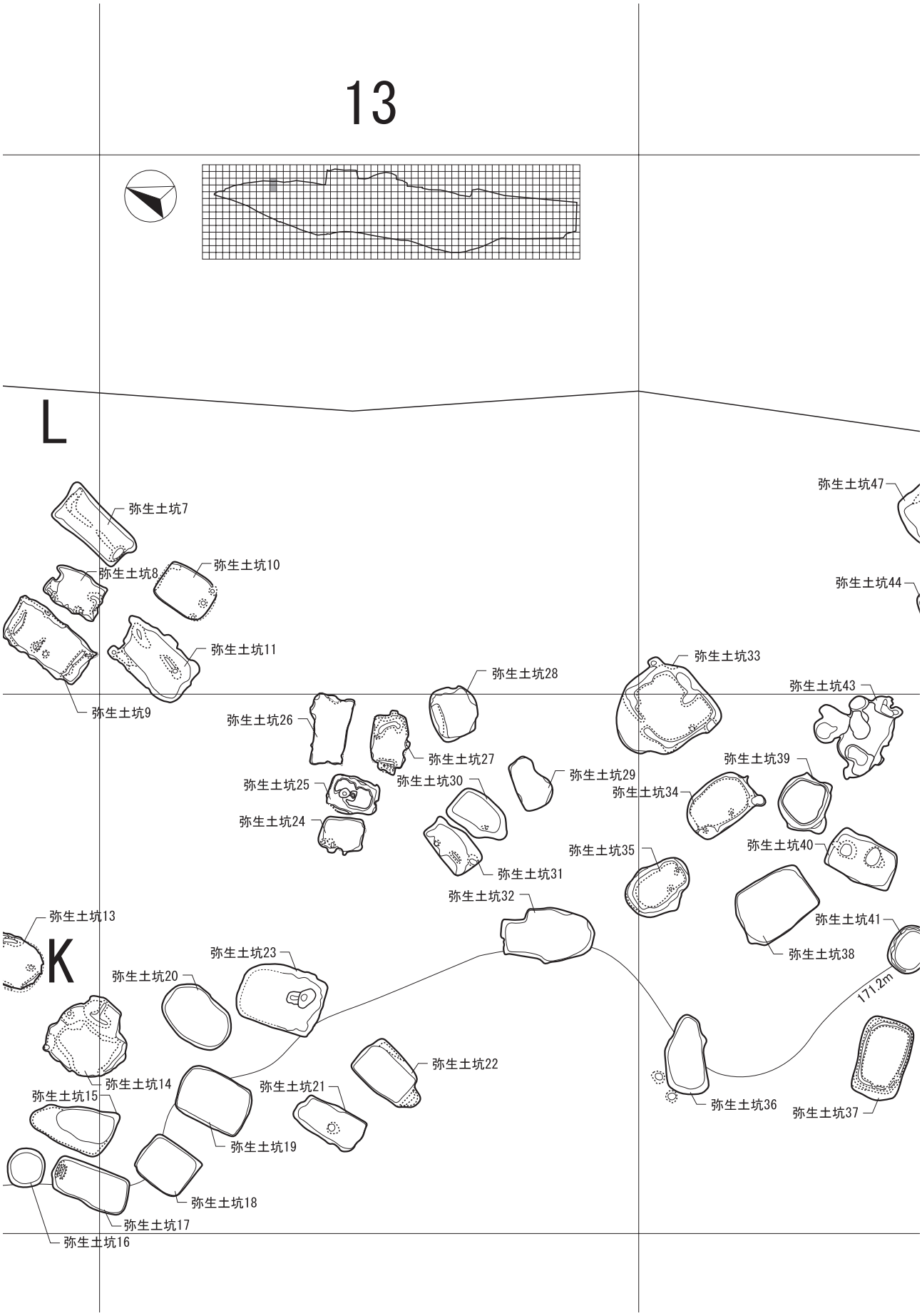
第124図　遺構配置図①



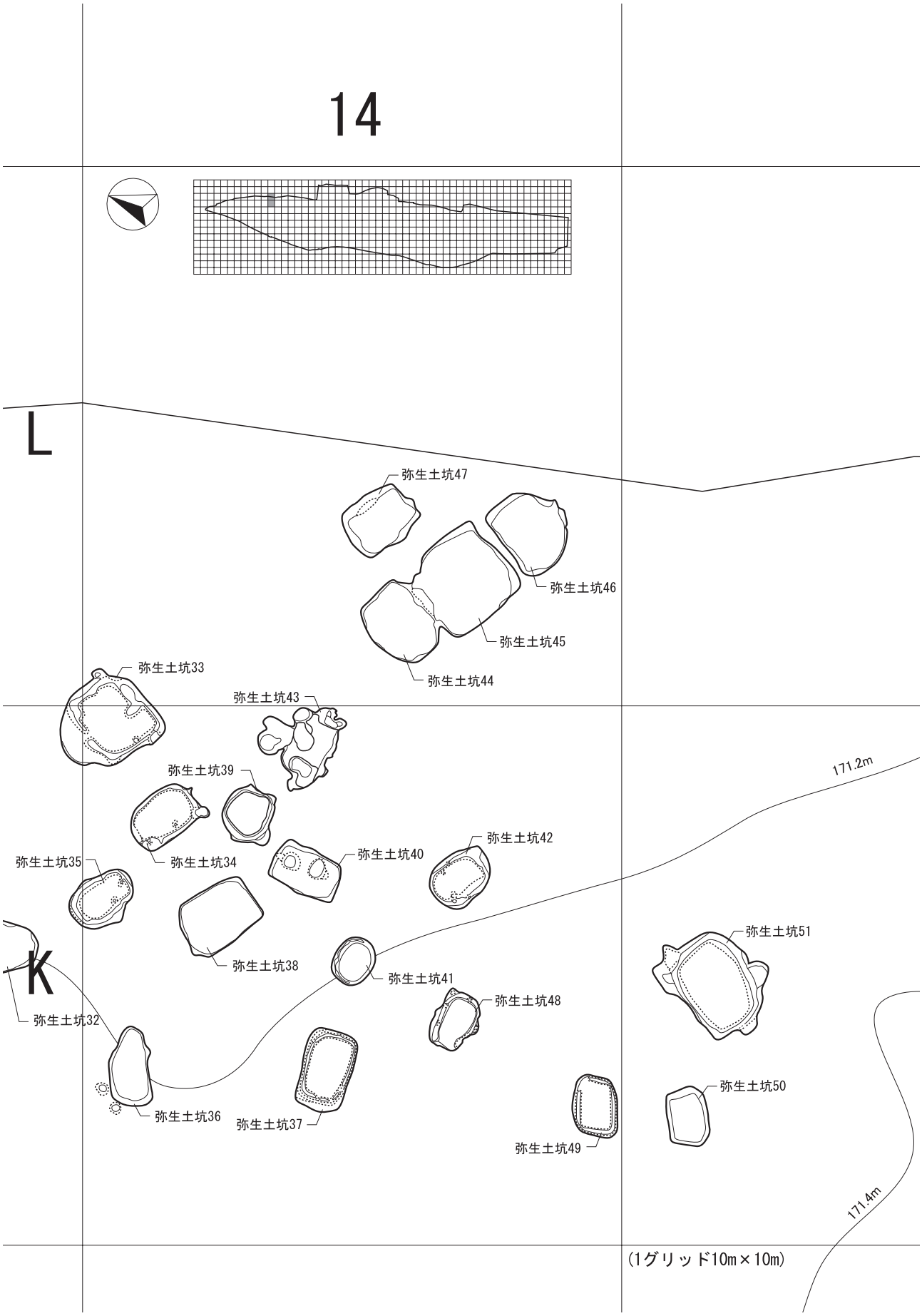
第125図　遺構配置図②



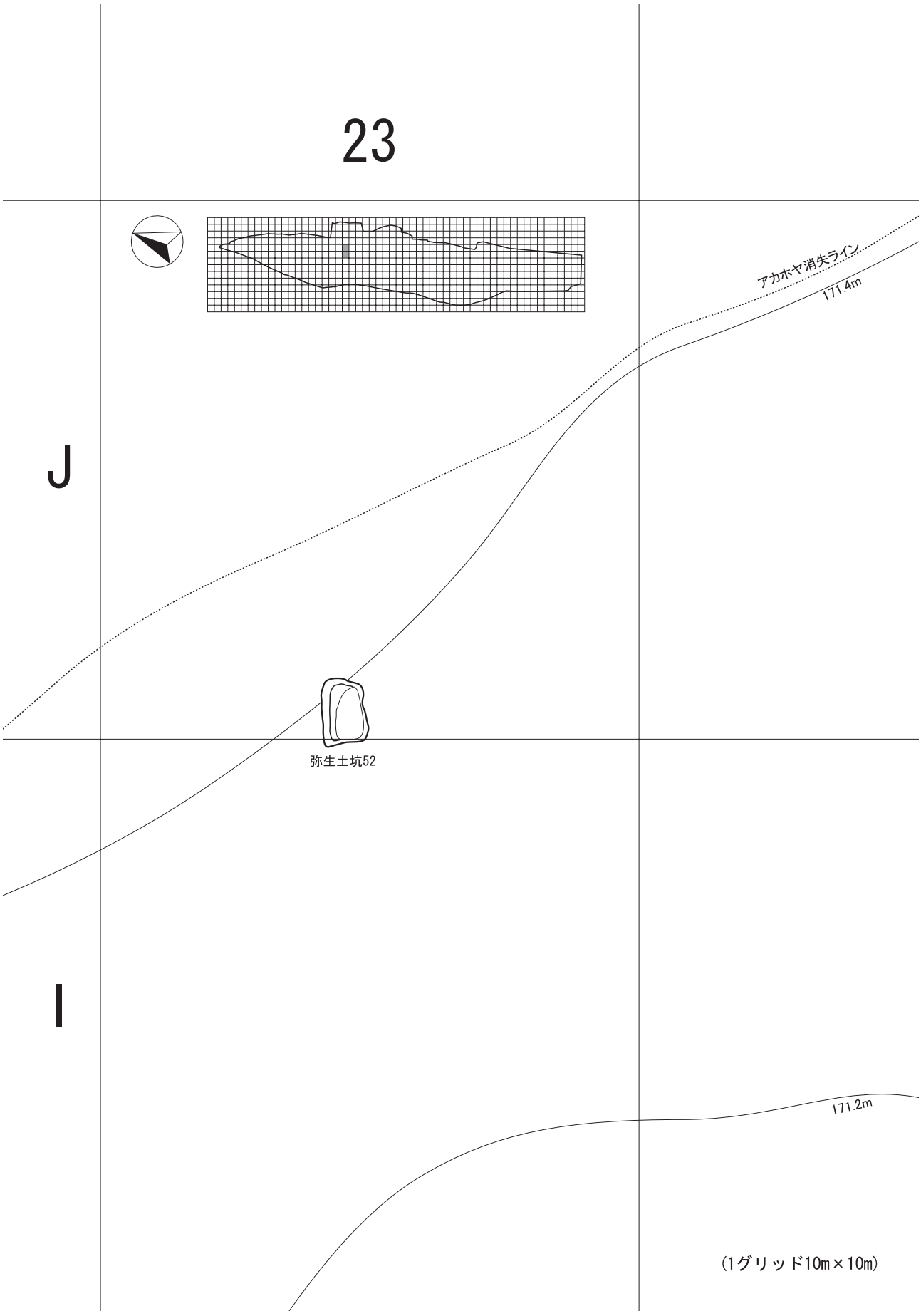
第126図　遺構配置図③



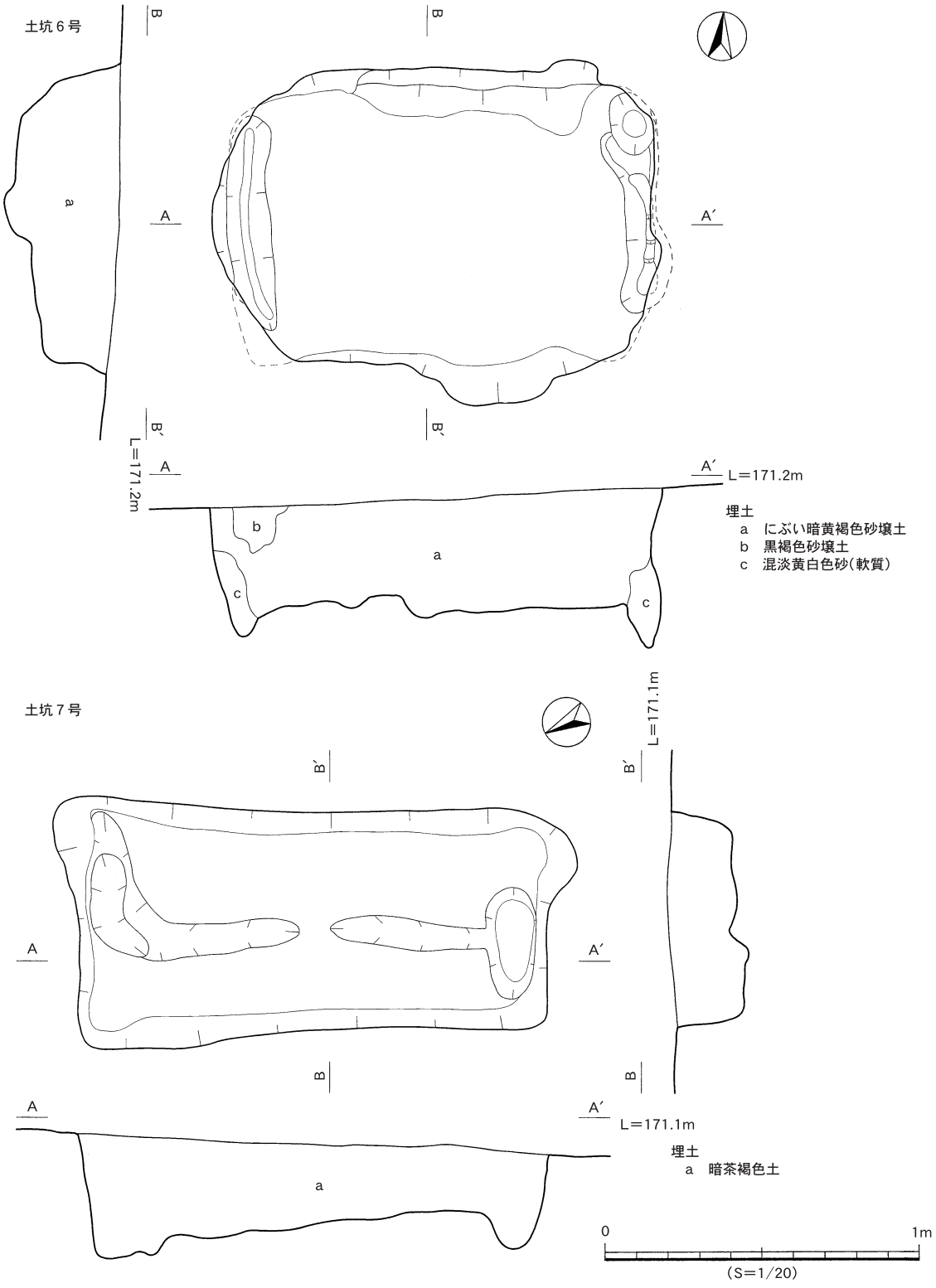
第127図　遺構配置図④



第128図　遺構配置図⑤



第129図　遺構配置図⑥

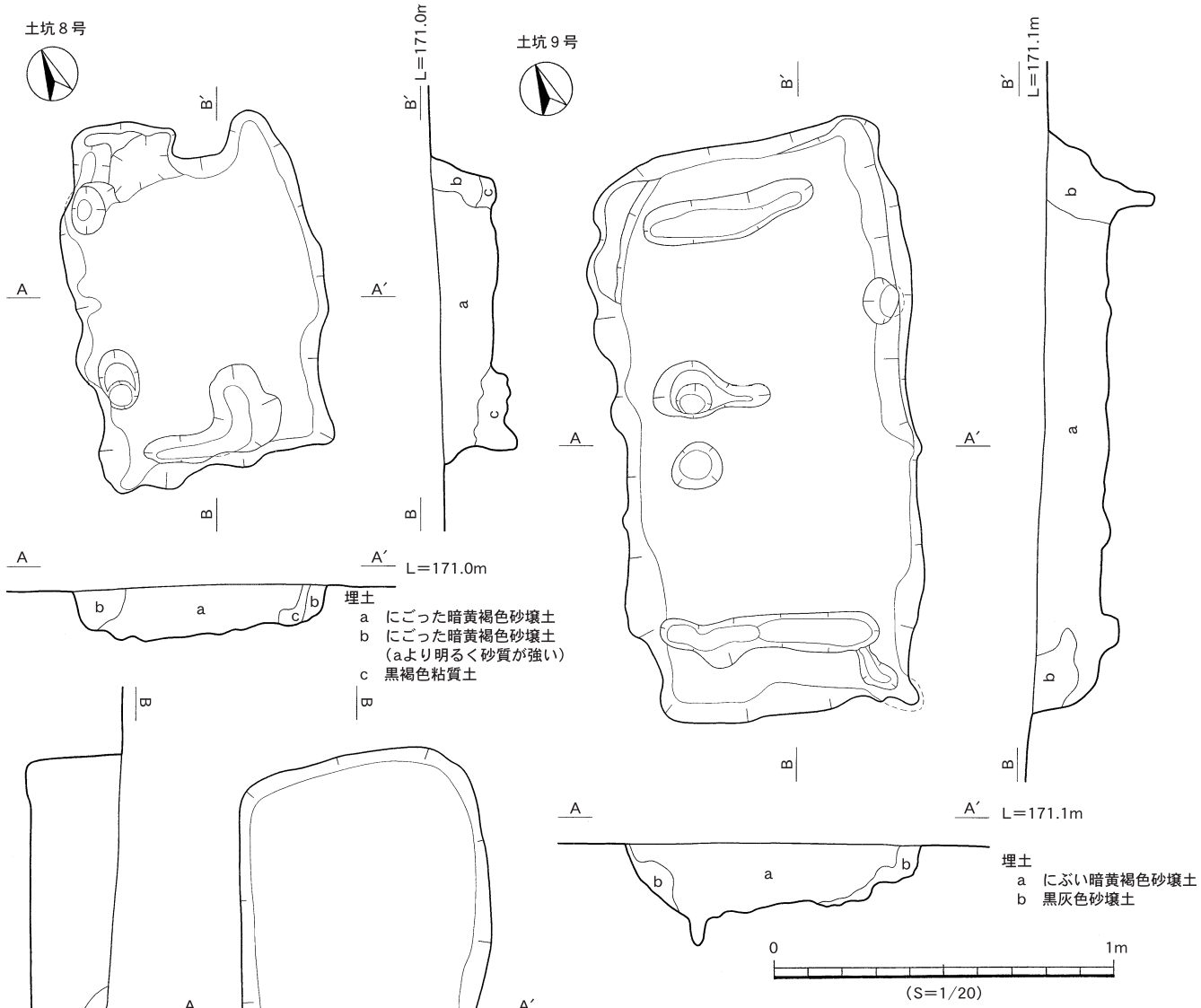


第130図　土坑６，７号

り込みが見られる。埋土は茶褐色土の単一である。長軸方向は東に４度振れる。遺物が７点出土したが図化には至らなかった。

土坑27号（第132図）

Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸110㎝×短軸71㎝の長方形を呈する。床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はにぶい暗黄褐色砂



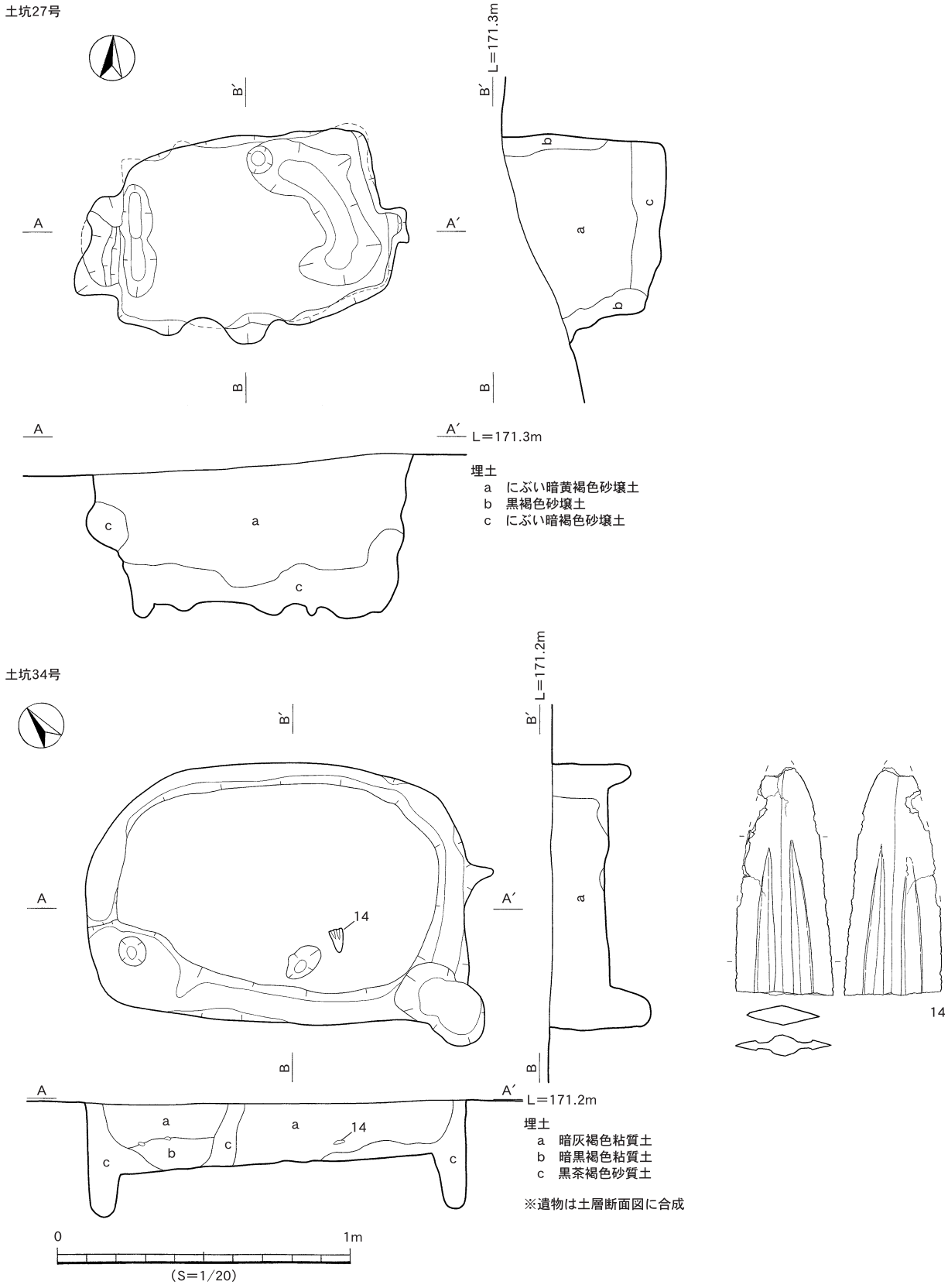
第131図　土坑８，９，17号

壌土を主体とし長軸側壁よりに黒褐色砂壌土が堆積する。検出面からの深さ50㎝である。床面東よりには不定形の浅い落ち込み，西側側壁下部には壁に沿って深さ５㎝程の溝状の掘り込みが見られる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に80度振れる。遺物は出土しなかった。

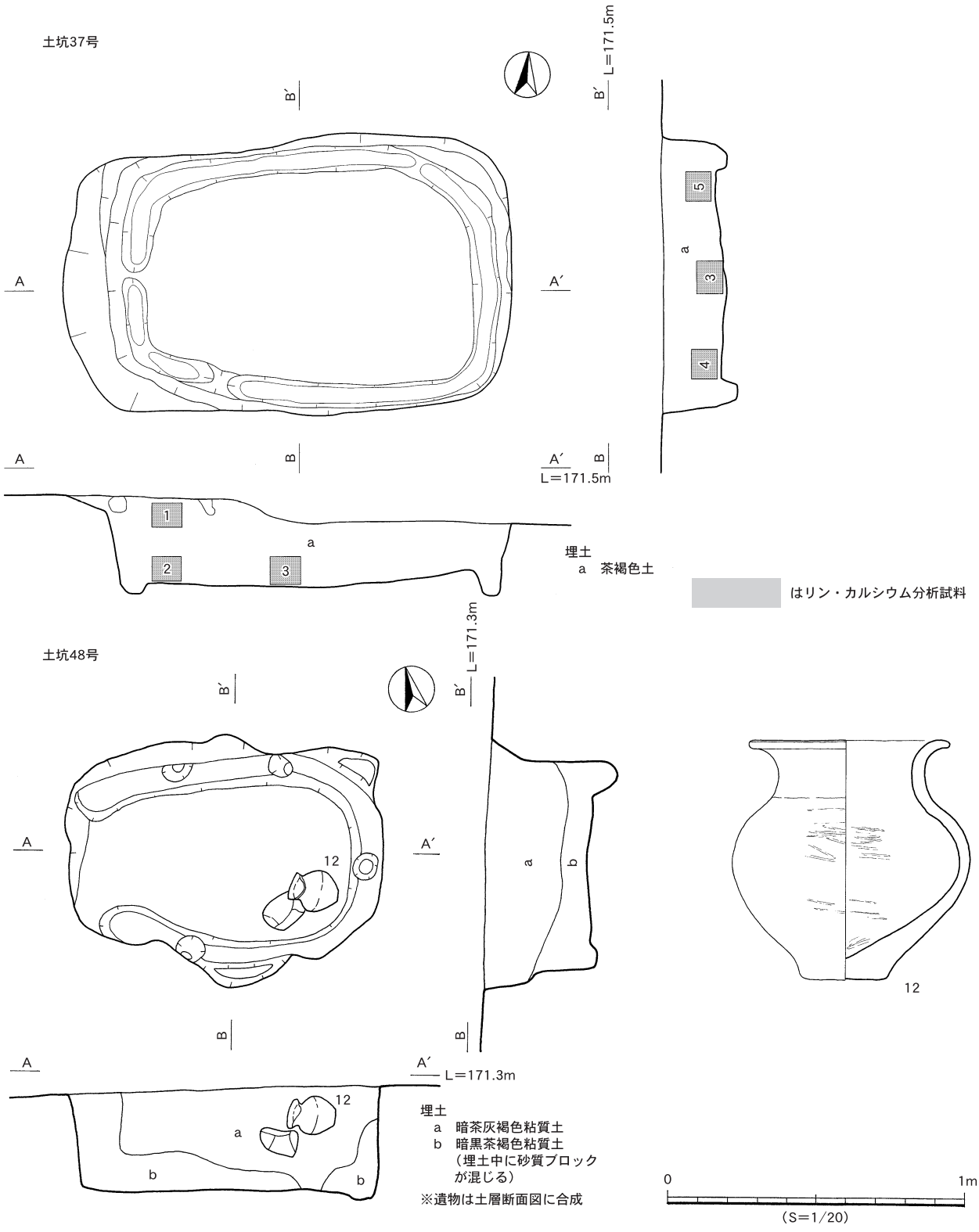
土坑34号（第132図）

Ｋ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸130㎝×短軸89㎝の略長方形を呈する。床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は暗灰褐色から暗黒褐色の粘質土を主体とし，壁面寄りに同色の砂質土が堆積する。検出面からの深さ20㎝で床面はほぼフラット，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には側壁に沿って幅10㎝，深さ10～15㎝程度の溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は西に51.5度振れる。遺物が銅戈を含み５点出土したが土器については図化には至らなかった。

銅戈は，床面から６㎝ほど浮いた位置から，切っ先を南に向けた状態で出土した。



第132図　土坑27，34・34号遺物出土状況



第133図　土坑37，48・48号遺物出土状況

土坑37号（第133図）

K－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸152㎝×短軸93㎝の長方形を呈する。床面での長軸は128㎝，短軸は87㎝を測る。埋土は茶褐色土の単一である。検出面からの深さ30㎝，床面はほぼフラットで壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には側壁に沿って幅10㎝，深さ３～８㎝の溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は東に87度振れる。遺物は出土しなかった。また本土坑については図中１～５において埋土のサンプリングを行いリン・カル分析を行った。詳細は後述する。

土坑48号（第133図）

K－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸107㎝×短軸86㎝の長方形を呈する。床面での長軸は100㎝，短軸69㎝を測る。埋土は暗灰茶褐色粘質土を主体とする。検出面からの深さ34㎝で床面はほぼフラット，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には西側を除く側壁下部に，幅10㎝ほどの浅い溝状の掘り込みが見られる。また溝状掘り込み内に径８㎝程度のピット状の小さな掘り込みが４カ所見られる。長軸方向は西に81.5度振れる。遺物は遺構埋土内中位付近に完形に復元できる小ぶりの壺形土器が出土した。

土坑49号（第134図）

K－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸110㎝×短軸83㎝の長方形を呈する。床面での長軸は104㎝，短軸は74㎝を測る。埋土は暗黄褐色砂質土の単一である。検出面からの深さ27㎝で床面はほぼフラット，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には北東側コーナーを除き，側壁下部に幅10㎝，深さ５㎝程度の溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は東に72度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑51号（第134図）

K－15区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸205㎝×短軸139㎝の長方形を呈する。床面での長軸は175㎝，短軸は118㎝を測る。埋土は暗褐色砂質土の単一である。検出面からの深さ12㎝で床面はほぼフラットで，壁面はやや緩やかに立ち上がる。床面には側壁下部に幅15㎝～20㎝，深さ５㎝程度の溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は東に38.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑33号（第135図）

L－13／14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸179㎝×短軸152㎝の方形から略方形を呈する。床面での長軸は160㎝，短軸は135㎝を測る。埋土は暗灰褐色から暗黒褐色の粘質土を主体とし，壁面寄りに同色の砂質土が堆積する。西側を除く側壁下部には深さ10㎝ほどの溝状の掘り込みが巡る，西側は側壁から30㎝ほど内側に溝状の掘り込みが見られる。検出面からの深さ23㎝で床面はほぼフラットで，壁面の立ち上がりははっきりしている。長軸方向は東に38度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑39号（第135図）

K－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸106㎝×短軸95㎝の略方形を呈する。床面での長軸，短軸はともに95㎝を測る。埋土は暗茶灰褐色から暗黒茶褐色の粘質土である。検出面からの深さ35㎝で，床面はほぼフラット，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には側壁に沿って幅10㎝，深さ７～10㎝ほどの溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は西に63.5度振れる。遺物が４点出土したが図化には至らなかった。

土坑13号（第136図）

K－12区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸138㎝×短軸92㎝の楕円形を呈する。床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土を主体とし，短軸側壁よりに灰黒褐色砂壌土が堆積する。検出面からの深さ25㎝である。北側短軸側壁近くと，西側，南側側壁下部に沿って溝状の浅い掘り込みが見られる。長軸方向は東に４度振れる。遺物が１点出土したが図化には至らなかった。

土坑35号（第136図）

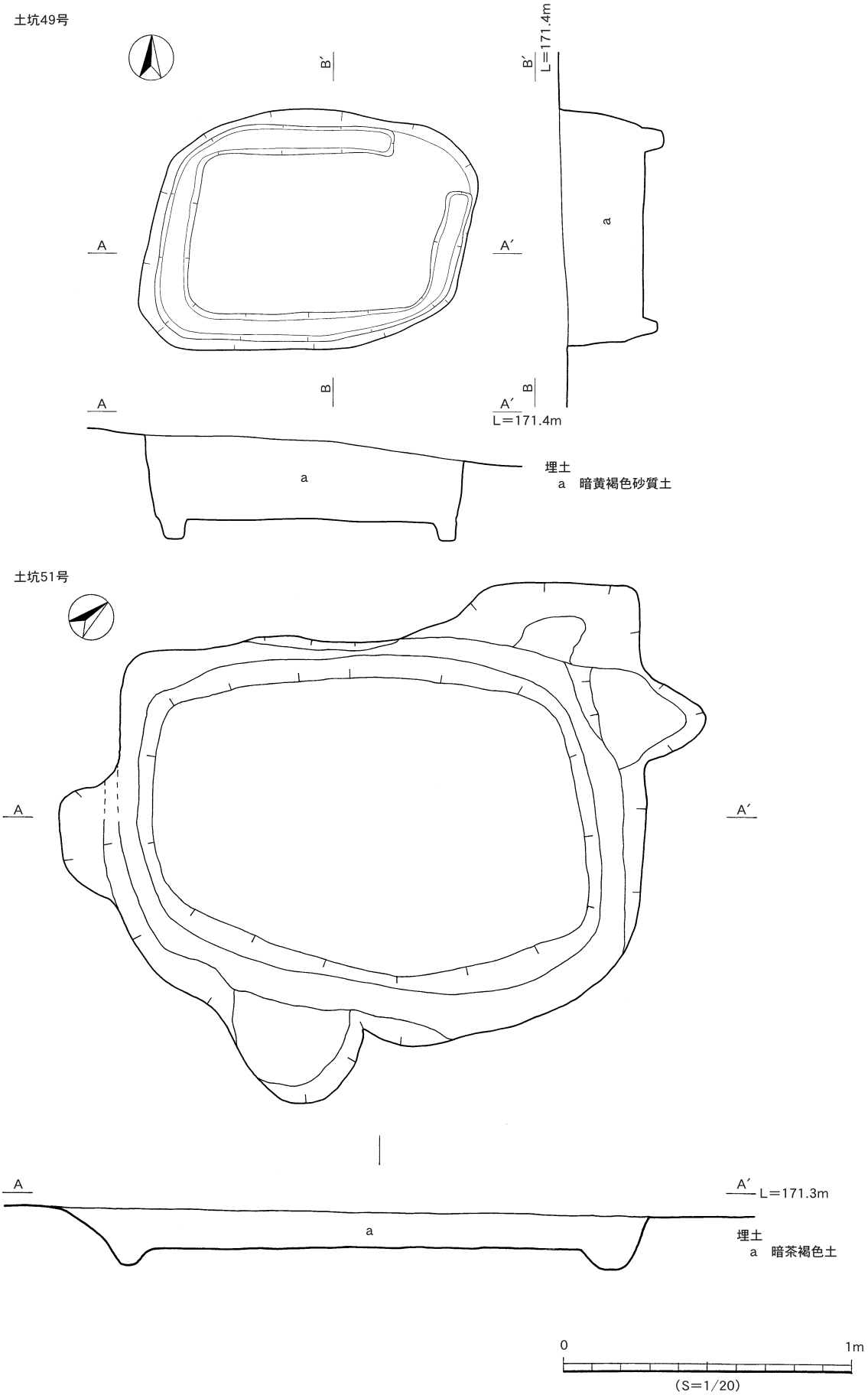
K－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸128㎝×短軸98㎝の楕円形を呈する。床面での長軸は114㎝，短軸は77㎝を測る。埋土は暗茶灰褐色から暗黒茶褐色の粘質土を主体とし，壁面寄りに暗黒褐色砂質土が堆積する。検出面からの深さ32㎝で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼフラットで，側壁に沿って幅10～15㎝，深さ５～10㎝の溝状の掘り込みが巡る。長軸方向は西に52度振れる。遺物は２点出土したが図化には至らなかった。

土坑41号（第136図）

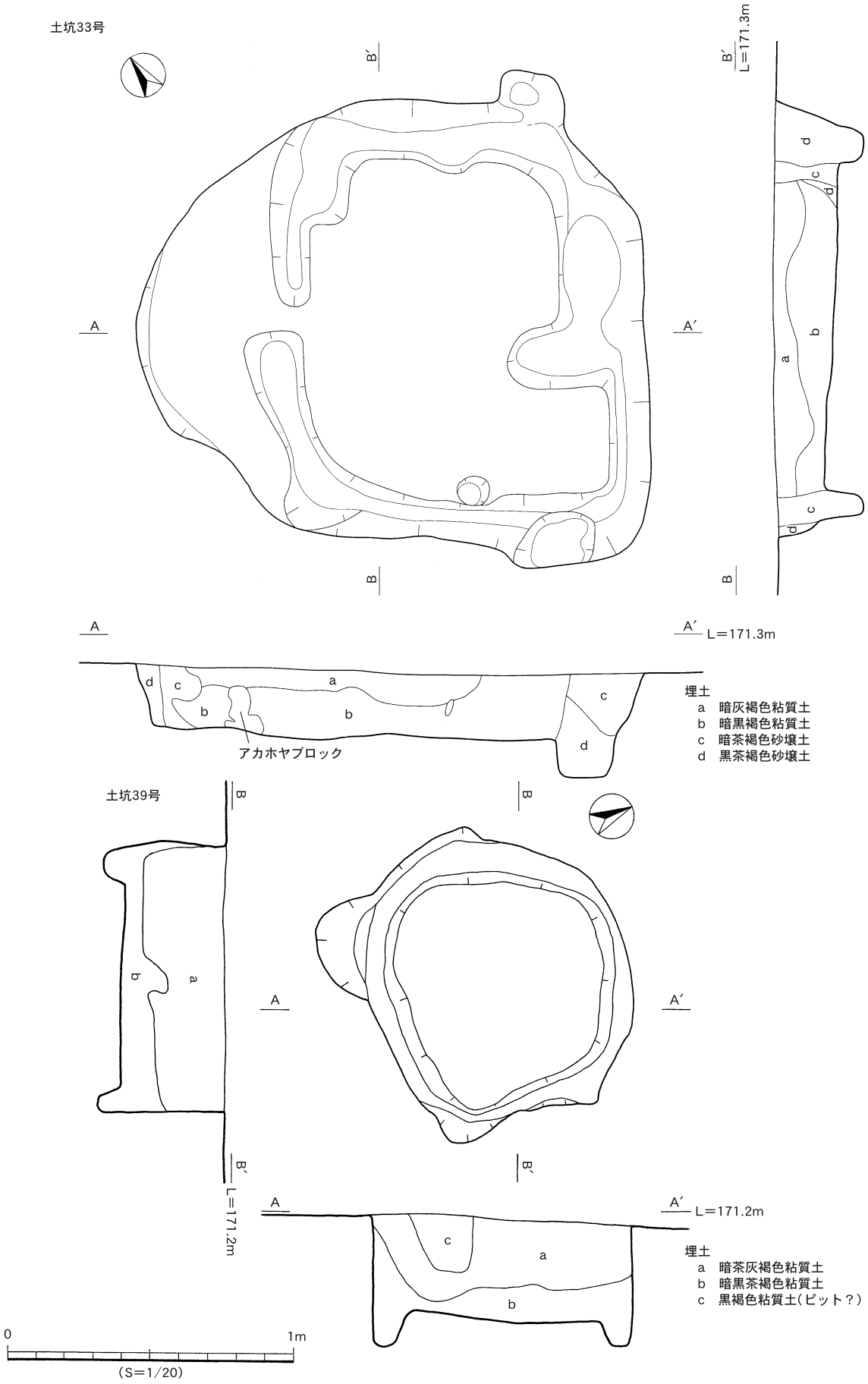
K－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸90㎝×短軸73㎝の楕円形を呈する。床面での長軸は75㎝，短軸は63㎝を測る。埋土は黄褐色粘土ブロックが少し混じる茶褐色土の単一である。検出面からの深さ８㎝で，床面はほぼフラット，壁面は緩やかに立ち上がる。側壁北側半分に沿って，幅５㎝程のごく浅い溝状の掘り込みが見られる。長軸方向は西に85度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑42号（第136図）

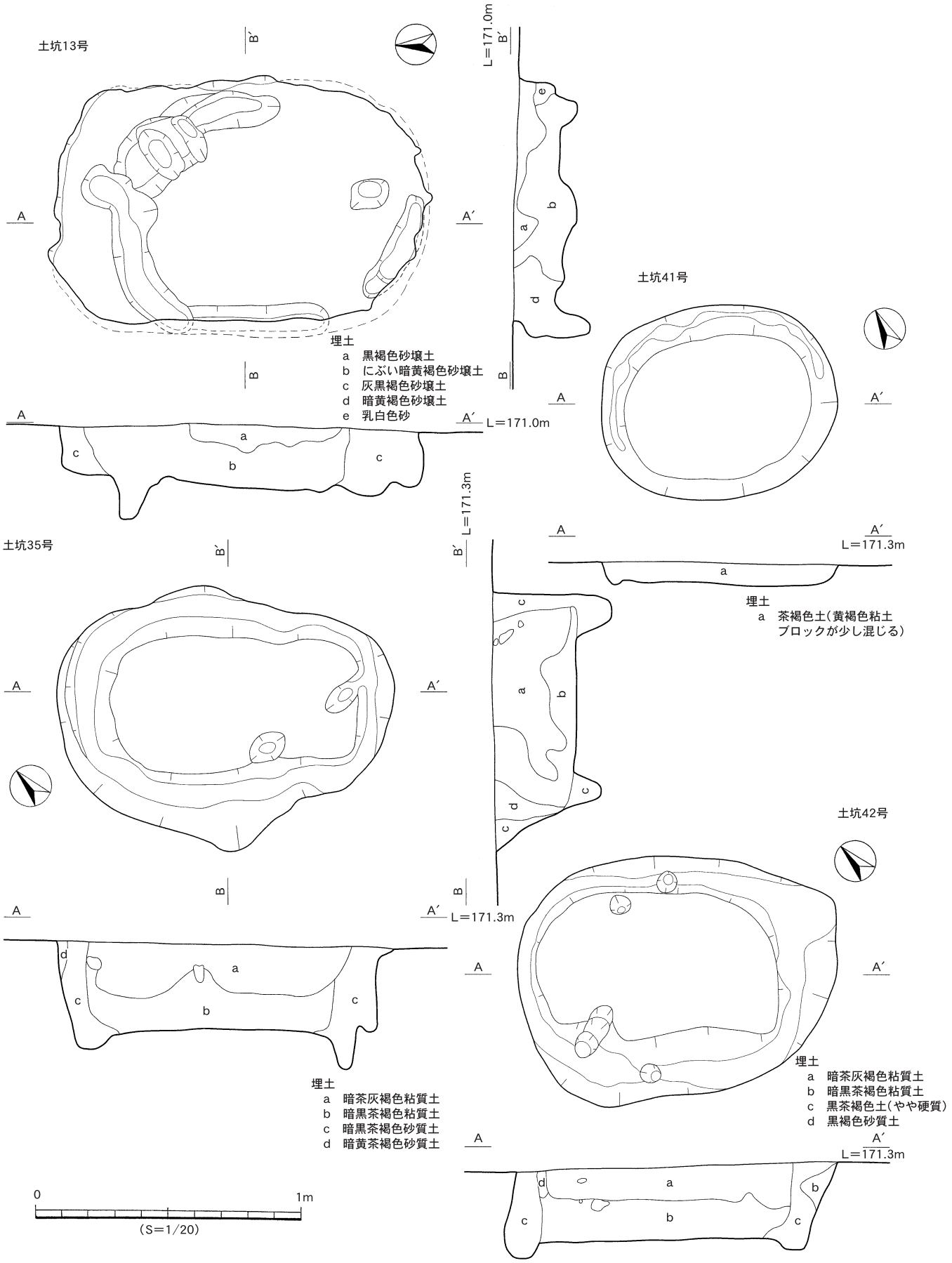
K－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸122㎝×短軸91㎝の楕円形を呈する。床面での長軸は110㎝，短軸は77㎝を測る。埋土は暗茶灰褐色から暗黒茶褐色の粘質土が主体となり，側壁寄りにやや硬質な黒茶褐色土が堆積する。検出面からの深さ27㎝で，床面はほぼフラット，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面には壁面に沿って幅10㎝ほどのごく浅い溝状の掘り込みが巡る。また長軸方向中央付近の溝内部に径５㎝，深さ10～15㎝ほどのピット状の掘り込みも見られる。長軸方向は



第134図　土坑49，51号



第135図　土坑33，39号



第136図　土坑13，35，41，42号

西に56度振れる。遺物が６点出土し，内１点を図化した。

土坑１号（第137図）

Ｌ－11区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸175㎝×短軸110㎝の長方形を呈する。床面での長軸は147㎝，短軸は75㎝を測る。埋土は暗茶褐色土の単一である。検出面からの深さ35㎝である。長軸方向は東に28度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑３号（第137図）

Ｌ－12区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸146㎝×短軸92㎝の長方形を呈する。床面での長軸は87㎝，短軸は60㎝を測る。埋土は暗褐色砂質土の単一である。検出面からの深さは18㎝で，床面はフラットで中央に径40㎝深さ50㎝のピットが見られる。長軸方向は西に44.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑10号（第138図）

Ｌ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸106㎝×短軸80㎝の長方形を呈する。床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は黒褐色土の単一である。検出面からの深さは45㎝で，側壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面南側に深さ８㎝～15㎝のピットが３カ所短軸方向に並ぶようにみられる。長軸方向は東に14度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑11号（第138図）

Ｌ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸153㎝×短軸100㎝の長方形を呈する。床面での長軸は138㎝，短軸は72㎝を測る。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土の単一である。検出面からの深さ38㎝で壁面の立ち上がりははっきりしている。床面中央付近と北側短軸側壁付近に若干，埋土の落ち込みが見られる。長軸方向は東に20.5度振れる。遺物が１点出土したが図化には至らなかった。

土坑12号（第139図）

Ｋ－12区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸160㎝×短軸86㎝の長方形を呈する。検出面がかなり低いと考えられ，床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は茶褐色土の単一である。検出面からの深さは８㎝である。長軸方向は東に4.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑19号（第139図）

Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸140㎝×短軸98㎝の長方形を呈する。床面は長軸で132㎝，短軸で89㎝を測る。埋土は茶褐色土の単一である。検出面の最も高いところからの深さは48㎝である。床面はほぼフラットで，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に8.5度振れる。遺物は甕形土器底部，壺形土器胴部片，口縁部片が出土した。また本土坑については図中１～７において埋土のサンプリングを行いリン・カル分析を行った。詳細については後述する。

土坑21号（第140図）

Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸130㎝×短軸66㎝の長方形を呈する。床面は長軸で122㎝，短軸で53㎝を測る。埋土は暗褐色砂質土の単一である。検出面からの深さは34㎝である。床面中央付近には径20㎝深さ５㎝ほどの円形の掘り込みが見られる。壁面の立ち上がりはほぼ垂直であるが南側壁面だけは緩やかな傾斜をなす。長軸方向は東に9.5度振れる。遺物が２点出土したが図化には至らなかった。

土坑22号（第140図）

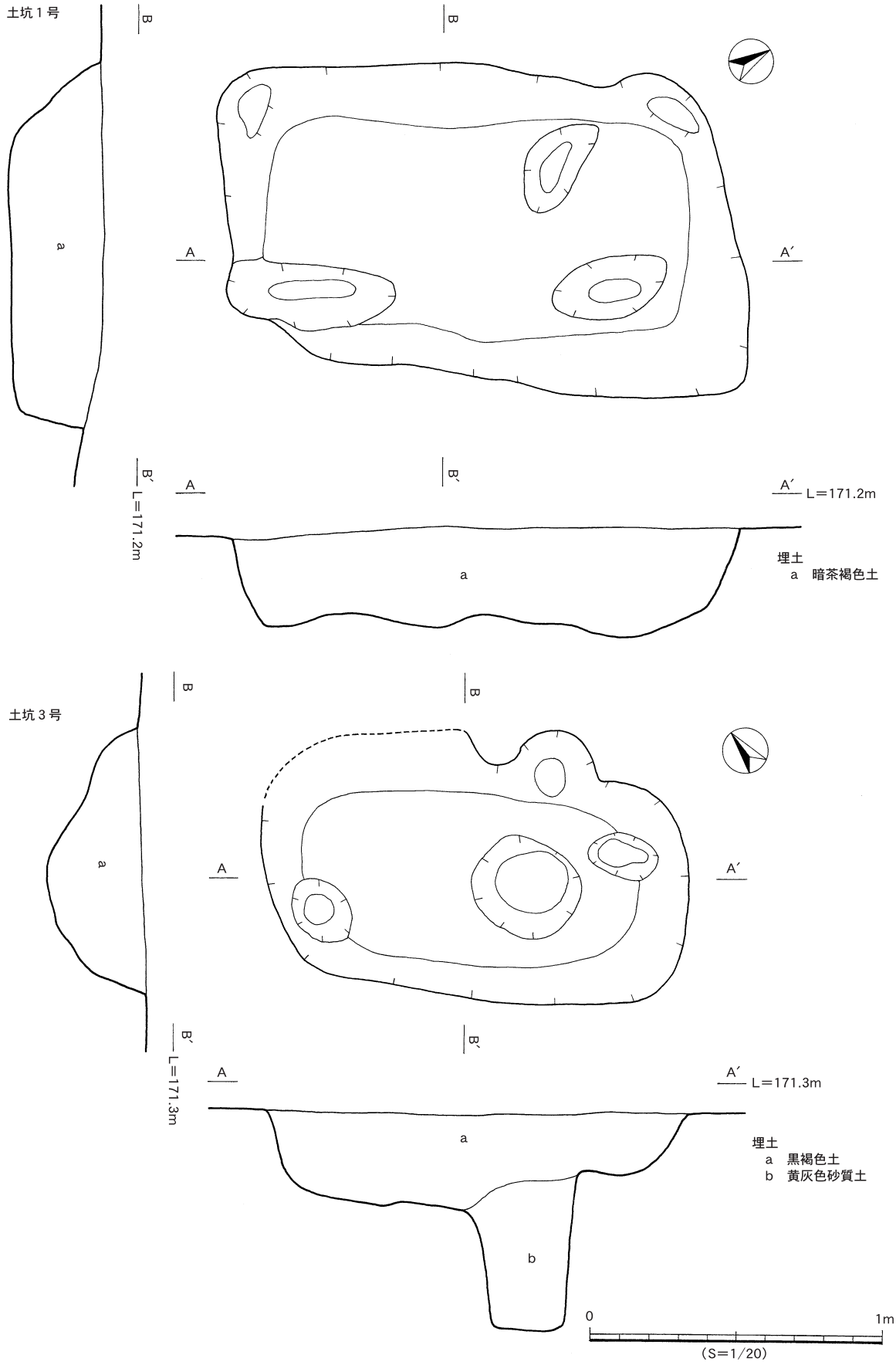
Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸141㎝×短軸82㎝の長方形を呈する。床面は長軸で106㎝，短軸で66㎝を測る。埋土は小礫を多く含む暗黄褐色砂質土の単一である。検出面からの深さ50㎝で床面はほぼフラット，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に23度振れる。遺物が１点出土したが図化には至らなかった。

土坑24号（第141図）

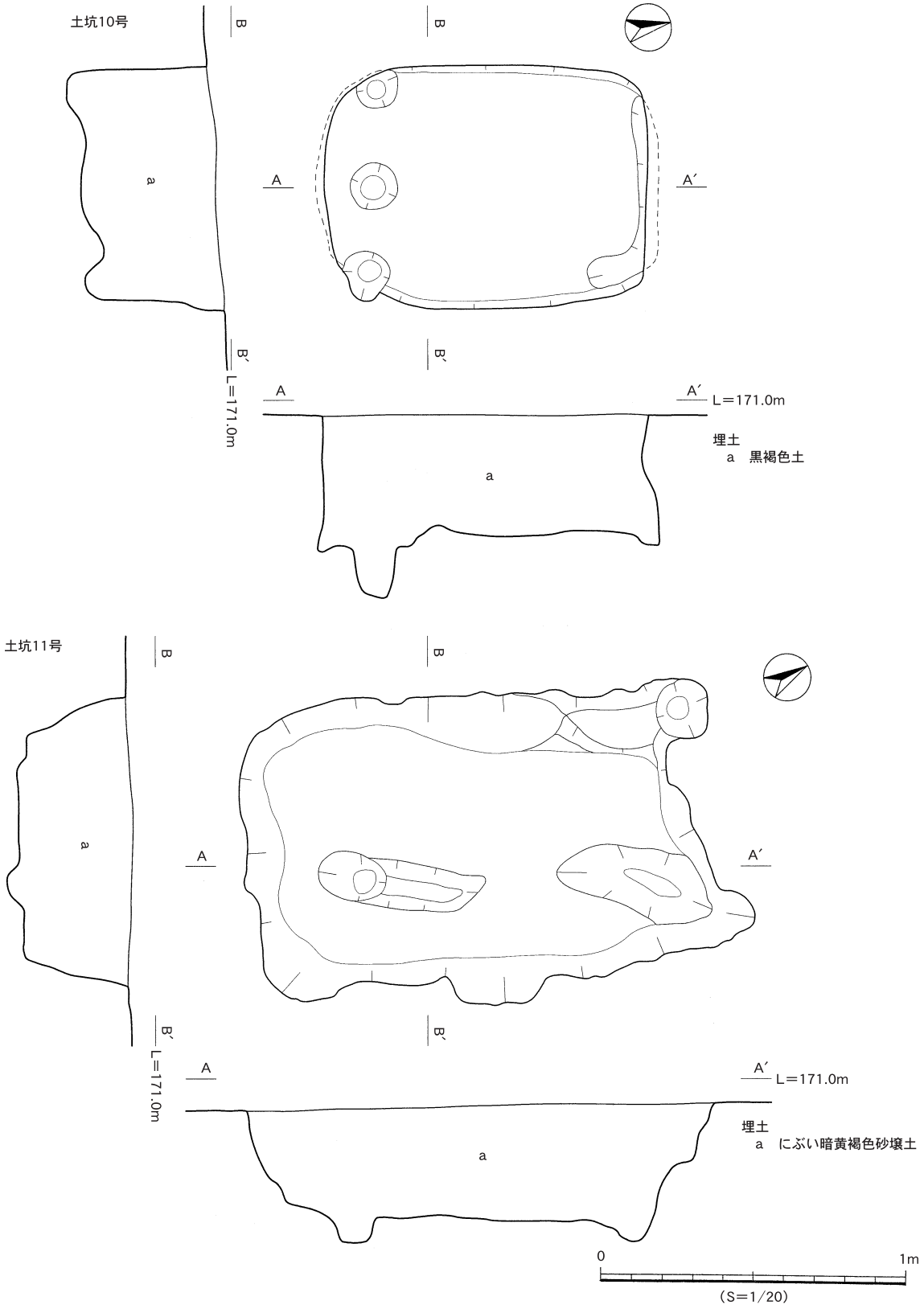
Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸78㎝×短軸60㎝の長方形を呈する。床面は長軸で69㎝，短軸で55㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色砂壌土を主体とし，側壁よりに同色のやや暗い埋土が堆積する。検出面からの深さ48㎝で床面はほぼフラット，壁面もほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は西に7.5度振れる。遺物が５点出土し，内１点を図化した。

土坑25号（第141図）

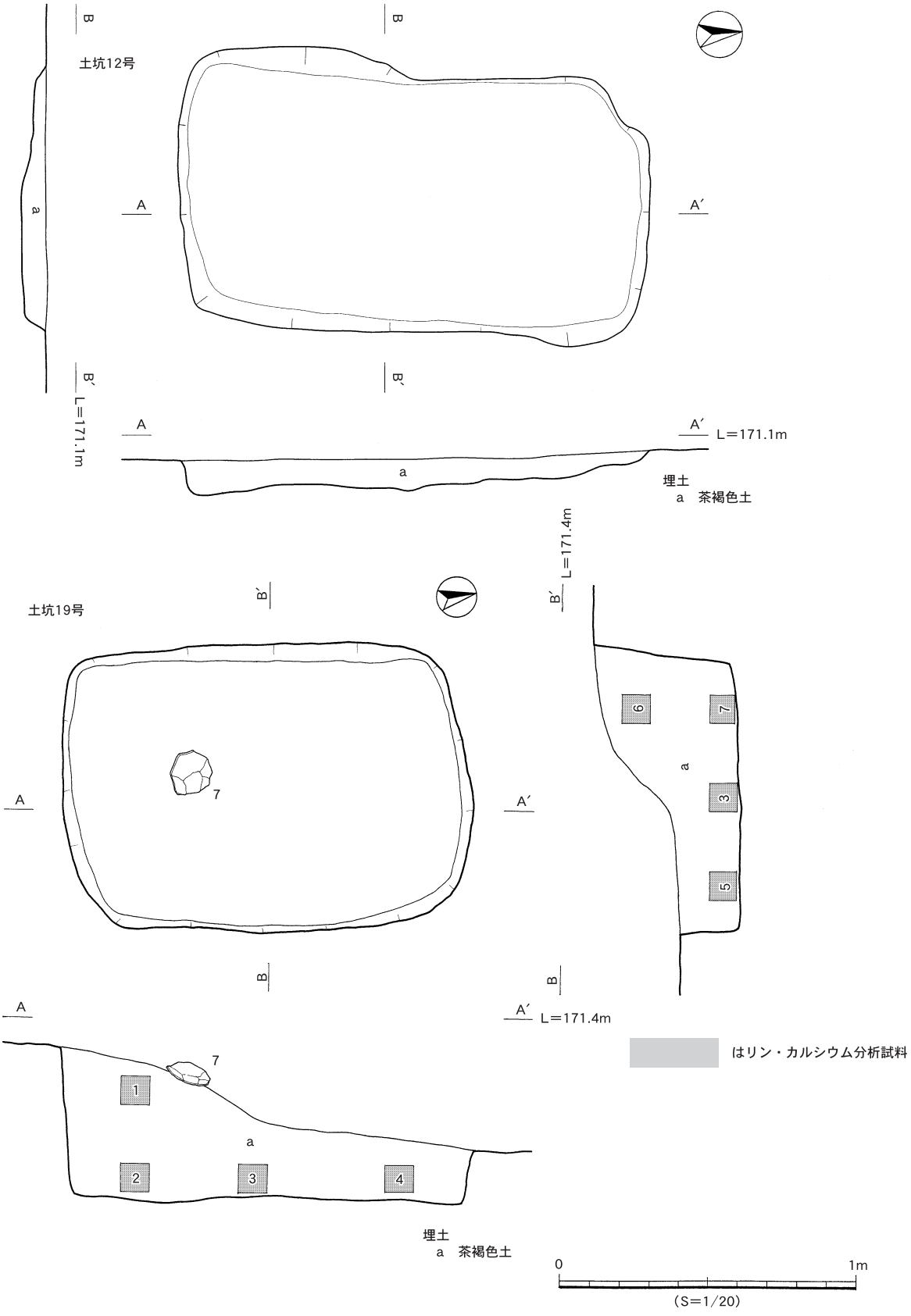
Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。遺構北側がやや削平を受けている。平面形態は長軸93㎝×短軸71㎝の長方形を呈する。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土を主体とし，側壁よりに同色の砂質の強い埋土が堆積する。検出面の最も高いところからの深さは37㎝である。床面には径20㎝深さ10㎝ほどの円形の掘り込みが見られ床面周縁がわずかに凹むが溝状とまではいえない。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は西に３度振れる。遺物が２点出土したが図化には至らなかった。


土坑１号
B
B
A
A′
B′
L=171.2m
A
B′
A′
L=171.2m
埋土
a　暗茶褐色土
a
土坑３号
B
B
A
A′
B′
L=171.3m
A
A′
L=171.3m
埋土
a　黒褐色土
b　黄灰色砂質土
a
b
0
1m
(S=1/20)

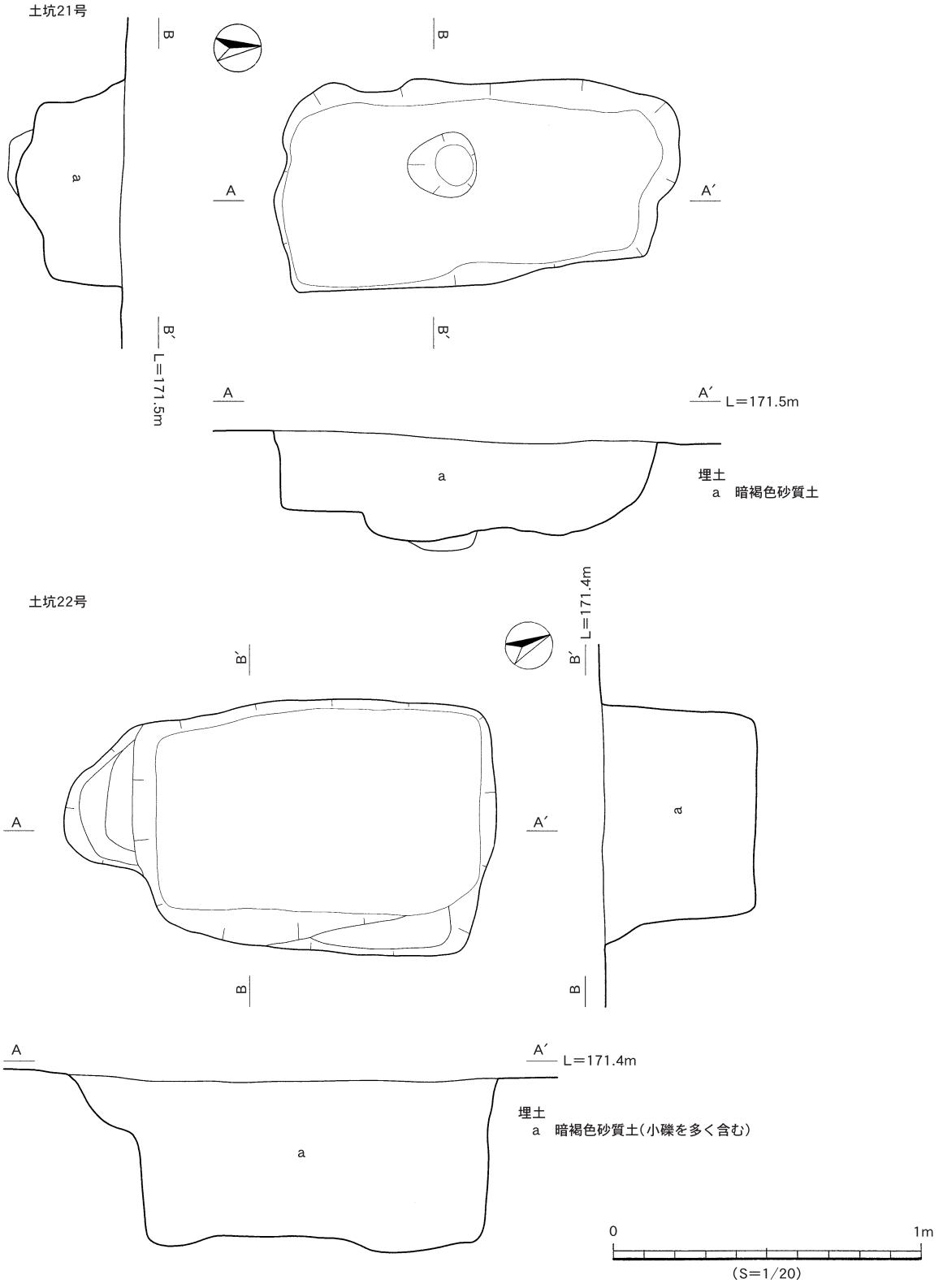
第137図　土坑１，３号



第138図　土坑10，11号



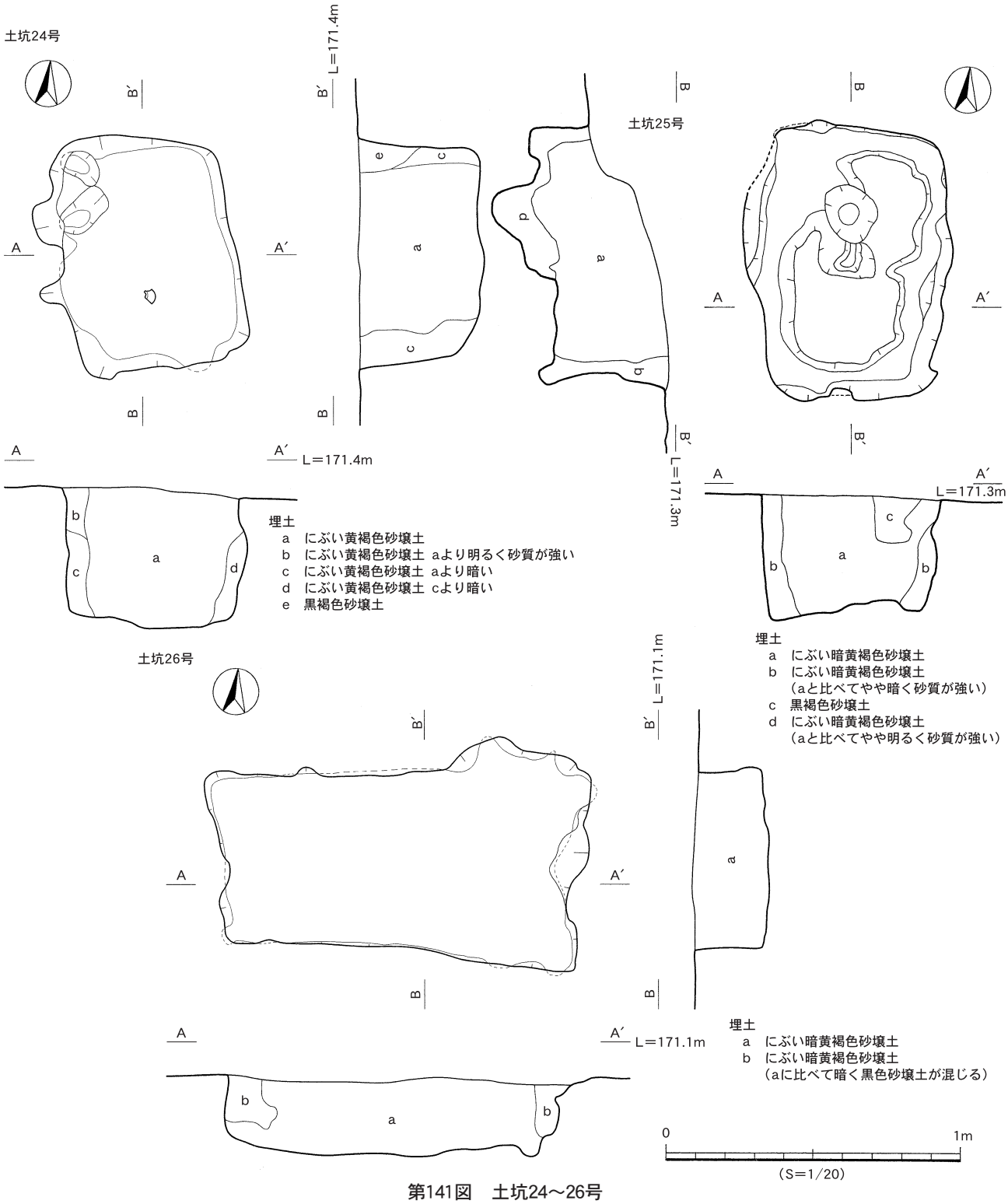
第139図　土坑12，19号・19号遺物出土状況



第140図　土坑21，22号

土坑26号（第141図）

K－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸120㎝×短軸60㎝の長方形を呈する。床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土を主体とし短軸側壁よりに同色のやや暗い埋土が堆積する。検出面からの深さ25㎝で床面はほぼフラット，側壁もほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に80.5度振れる。遺物が11点出土し，内３点を図化した。



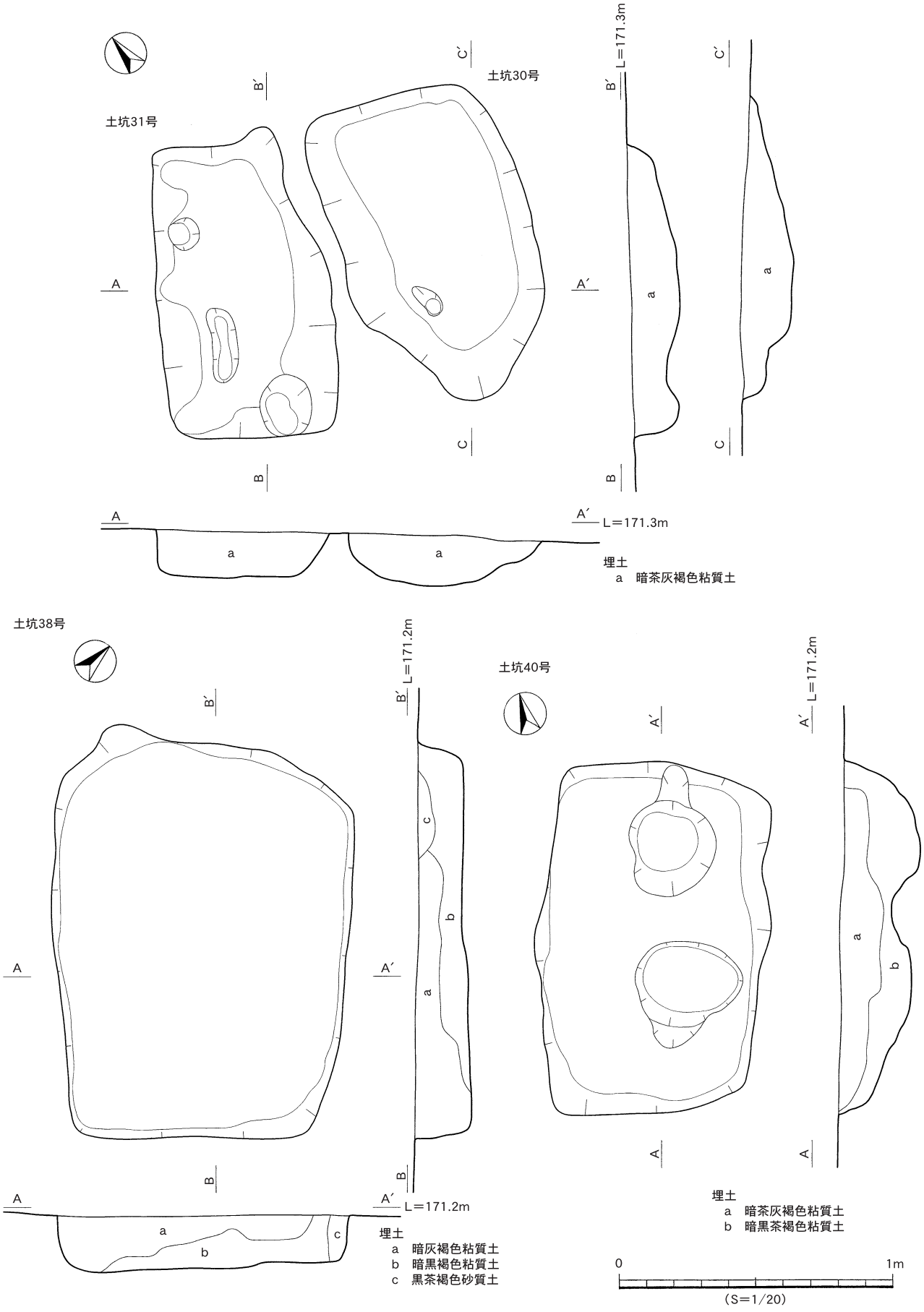
第141図　土坑24～26号

土坑30号（第142図）

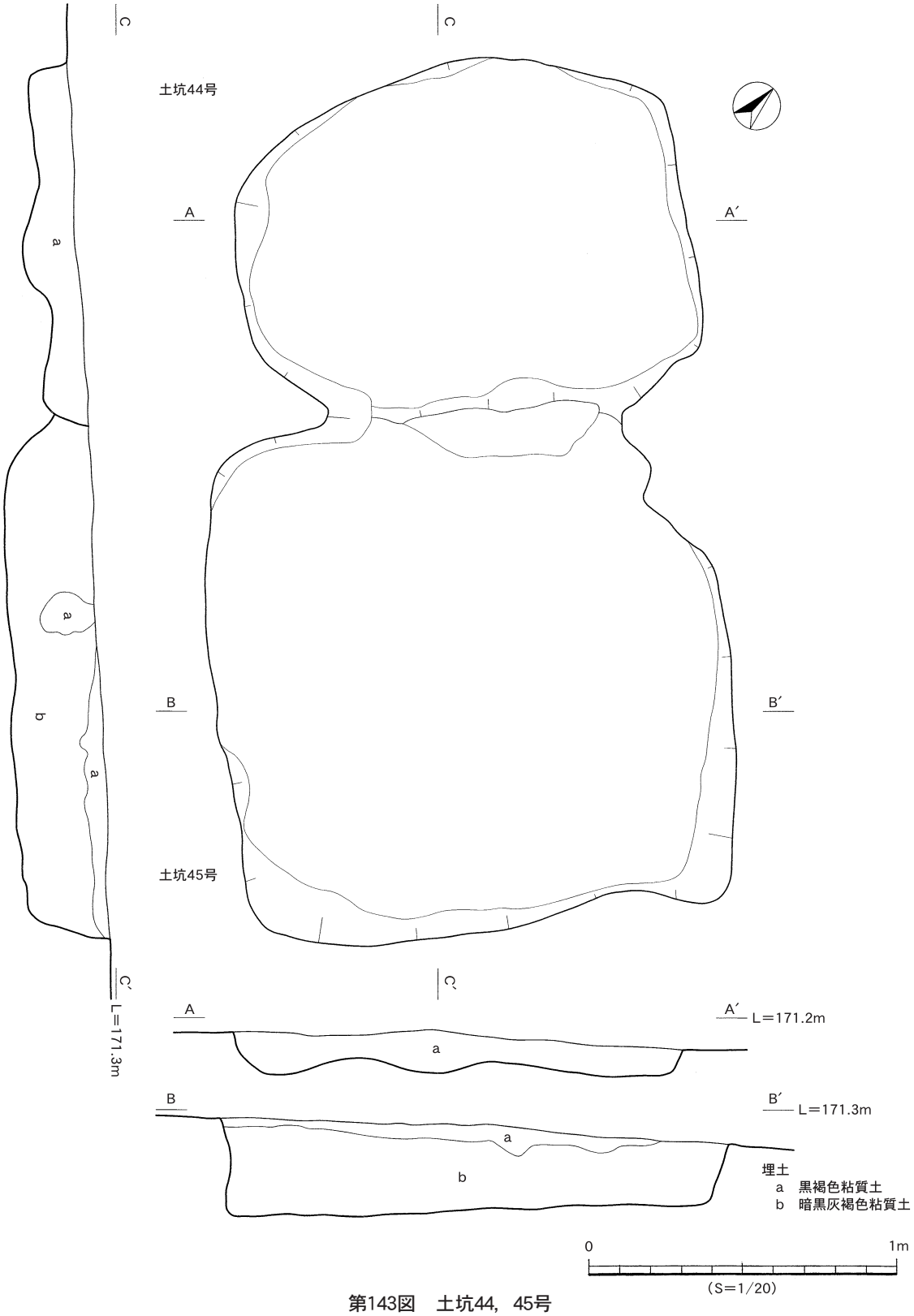
K－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸115㎝×短軸71㎝の略長方形を呈する。床面での長軸は90㎝，短軸は46㎝を測る。埋土は暗茶灰褐色粘質土の単一である。検出面からの深さ18㎝で床面は皿状を呈する。壁面の立ち上がりも緩やかである。長軸方向は東に20.5度振れる。遺物が7点出土したが図化には至らなかった。

土坑31号（第142図）

K－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸107㎝×短軸65㎝の長方形である。床面での長軸は90㎝，短軸は50㎝を測る。埋土は暗茶灰褐色粘質土の単一である。検出面からの深さ16㎝で床面はほぼフラットである。



第142図　土坑30，31，38，40号

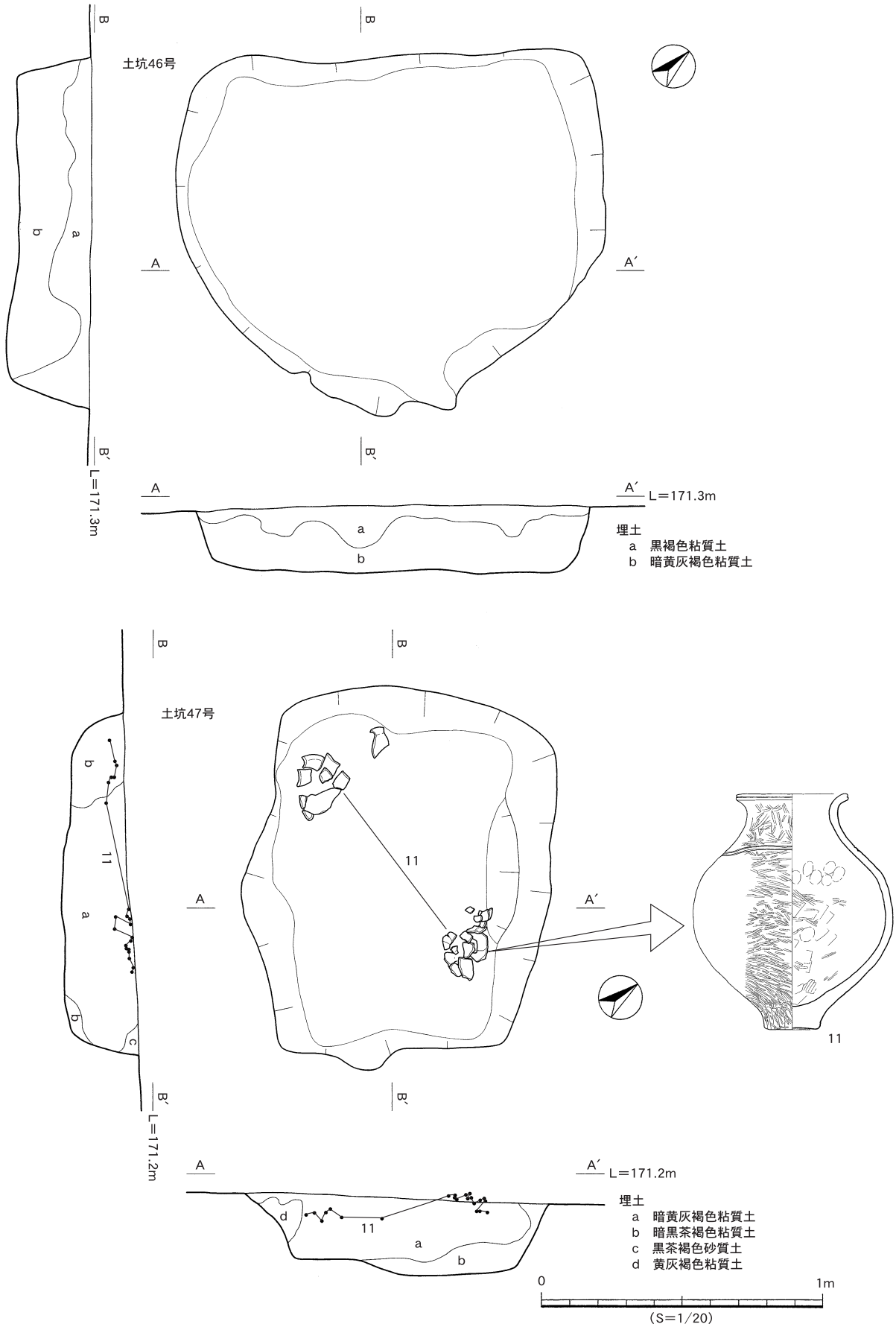


第143図　土坑44，45号

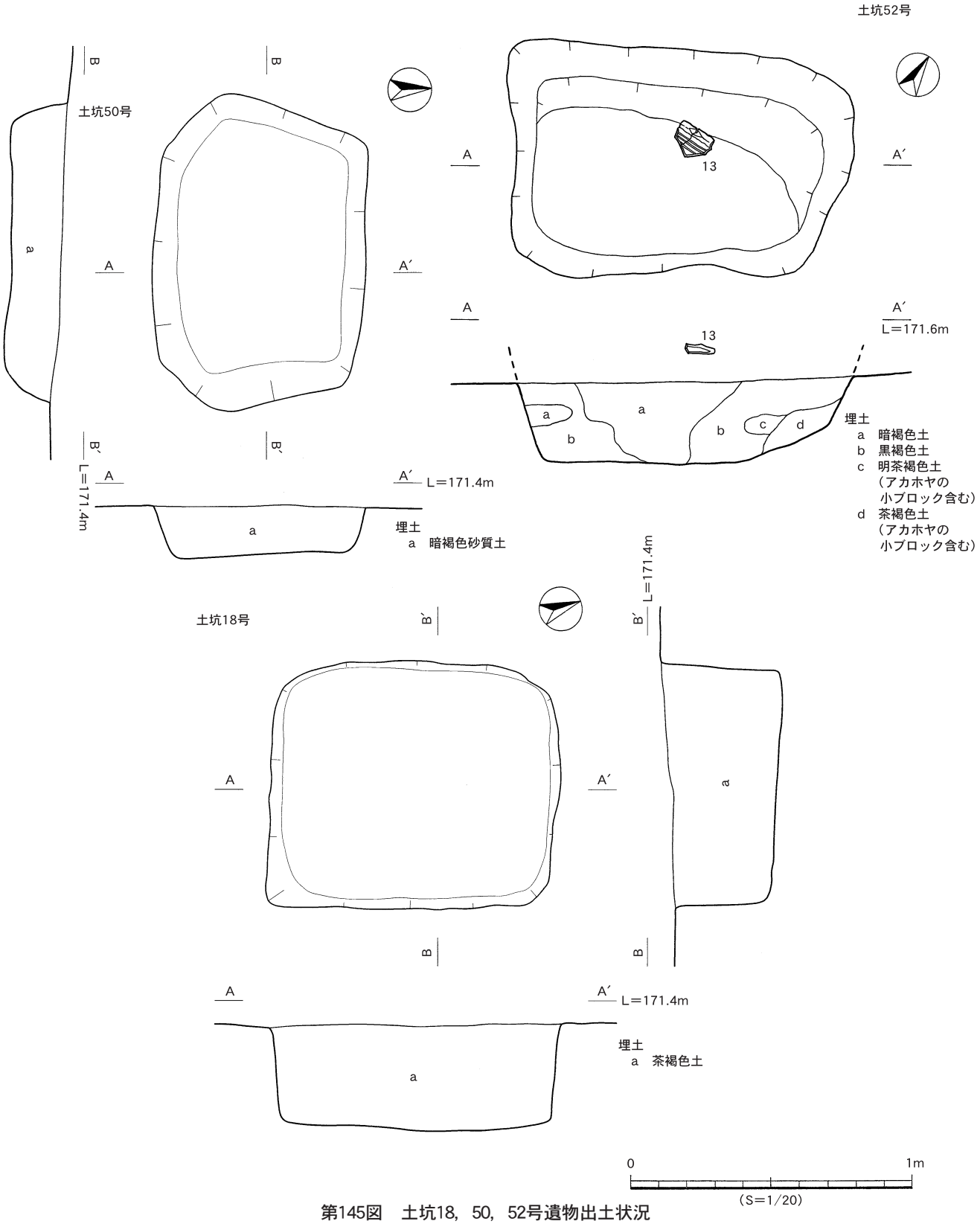
壁面の立ち上がりははっきりしている。長軸方向は東に29度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑38号（第142図）

K－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸145㎝×短軸107㎝の長方形を呈する。床面での長軸は137㎝，短軸は102㎝を測る。埋土は暗灰褐色から暗黒褐色の粘質土を主体とする。検出面からの深さ20㎝で，床面はほぼフラットである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。



第144図　土坑46，47号・47号遺物出土状況



第145図　土坑18，50，52号遺物出土状況

長軸方向は西に51.5度振れる。遺物が５点出土したが図化には至らなかった。

土坑40号（第142図）

Ｋ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸130㎝×短軸87㎝の長方形を呈する。床面での長軸は118㎝，短軸は75㎝を測る。埋土は暗茶灰褐色から暗黒茶褐色の粘質土である。検出面からの深さ20㎝で，床面には径30㎝前後の円形の浅い落ち込みが２カ所見られる。壁面は緩やかに立ち上がる。長軸方向は東に2.5度振れる。

遺物が１点出土したが図化には至らなかった。

土坑44号（第143図）

Ｌ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸147㎝×短軸114㎝の長方形を呈し土坑45号と接する。床面での長軸は132㎝，短軸は105㎝を測る。埋土は黒褐色粘質土の単一である。検出面からの深さ13㎝で，床面は多少起伏がある程度でほぼフラットである。壁面の立ち上がりははっきりしている。長軸方向は東に34.5度振れる。遺物が３点出土したが図化には至らなかった。

土坑45号（第143図）

Ｌ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸170㎝×短軸170㎝の略長方形を呈する。床面での長軸は162㎝，短軸は150㎝を測る。埋土は暗黄灰褐色粘質土を主体とする。検出面からの深さ30㎝で床面はほぼフラット，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に34.5度振れる。遺物が３点出土したが図化には至らなかった。

土坑46号（第144図）

Ｌ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸152㎝×短軸127㎝の略長方形を呈する。床面での長軸は137㎝，短軸は106㎝を測る。埋土は暗黄灰褐色粘質土を主体とする。検出面からの深さ24㎝で床面はほぼフラット,立ち上がりははっきりしている。長軸方向は東に33.5度振れる。遺物が12点出土したが図化には至らなかった。

土坑47号（第144図）

Ｌ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸130㎝×110㎝の長方形を呈する。床面での長軸は105㎝，短軸は75㎝を測る。埋土は暗黄灰褐色粘質土を主体とする。検出面からの深さ25㎝で床面はほぼフラット，壁面はやや緩やかに立ち上がる。長軸方向は西に57度振れる。遺物は遺構埋土上位に出土し，口縁部付近集中部と底部付近集中部の２カ所に分かれたものが接合し１個体の壺形土器となった。

土坑50号（第145図）

Ｋ－15区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸106㎝×短軸76㎝の長方形を呈する。床面での長軸は85㎝，短軸は60㎝を測る。埋土は暗褐色砂質土の単一である。検出面からの深さ18㎝で床面はほぼフラット，壁面はやや緩やかに立ち上がる。長軸方向は東に61.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑52号（第145図）

Ｊ－23区Ⅵ層上面で検出された。平面形態は長軸120㎝×短軸80㎝の略長方形を呈する。床面での長軸は90㎝，短軸は50㎝を測る。埋土は暗褐色から黒褐色土の埋土を主体とする。検出面からの深さ28㎝で床面はほぼフラットで，壁面はやや緩やかに立ち上がり，北側は特に緩やかな立ちあがりを示す。長軸方向は東に71度振れる。遺物が14点出土し，内１点を図化した。

土坑18号（第145図）

Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸105㎝×短軸88㎝の方形を呈する。床面は長軸で96㎝，短軸で80㎝を測る。埋土は茶褐色土の単一である。検出面からの深さ36㎝で床面はフラットで壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に14.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑23号（第146図）

Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。検出当初，遺構平面形態は確認されていたが，北側は削平のため失われ，一部のみの記録となった。平面プランは160㎝×120㎝の長方形であったことが確認されている。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土の単一である。検出面からの深さは42㎝で，床面に深さ15㎝程の掘り込みが見られる。壁面の立ち上がりははっきりしている。長軸方向は東に１度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑28号（第146図）

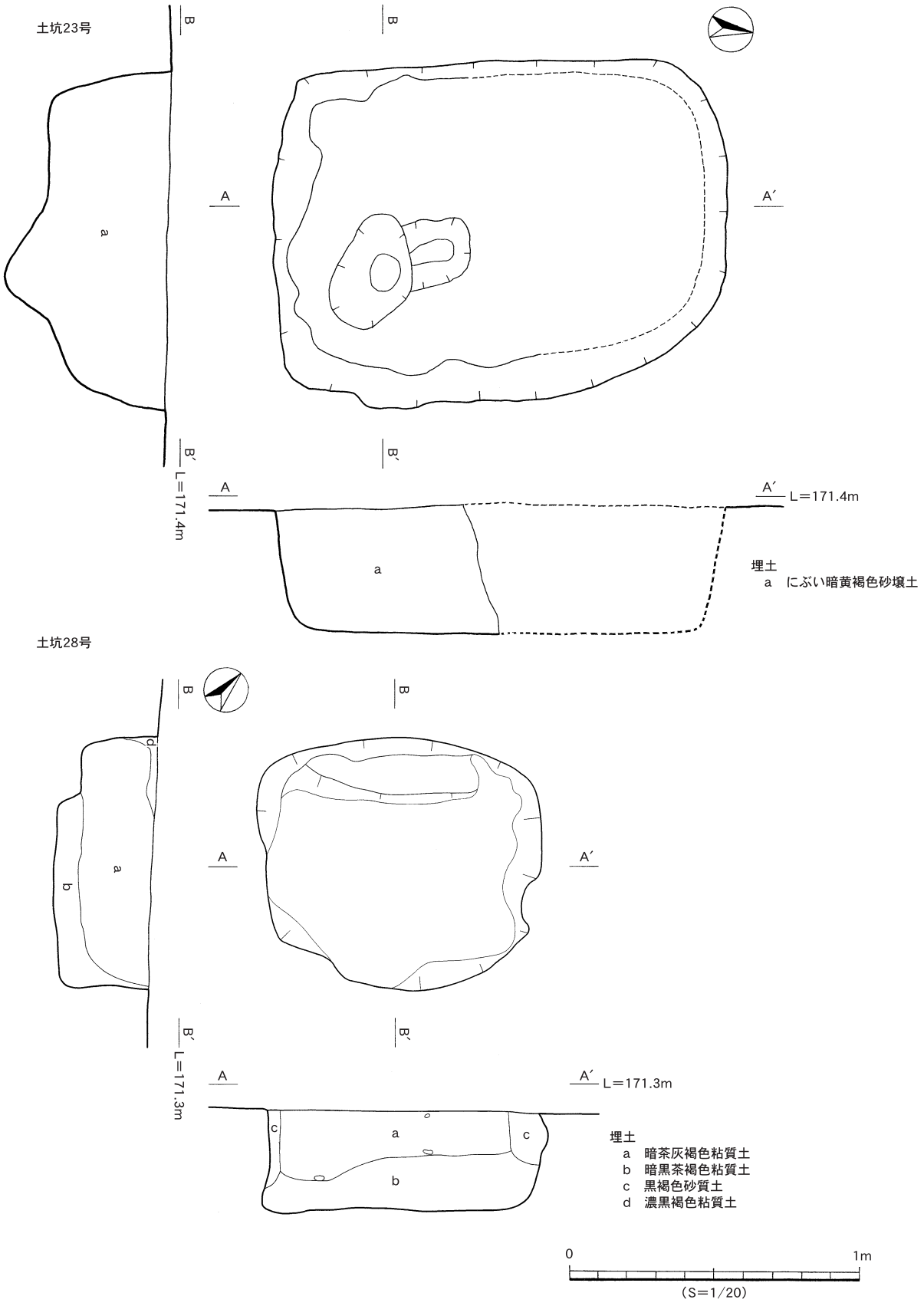
Ｋ－13区，Ⅷ層上面検出された。平面形態は長軸95㎝×短軸87㎝の略方形を呈する。床面での長軸は85㎝，短軸は80㎝を測る埋土は暗茶灰褐色粘質土を主体とし，下位に暗黒茶褐色粘質土が堆積する，また東西側壁よりに茶褐色砂質土の堆積が見られる。検出面からの深さ34㎝である。床面はほぼフラットで，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に56度振れる。遺物が１点出土したが図化には至らなかった。

土坑２号（第147図）

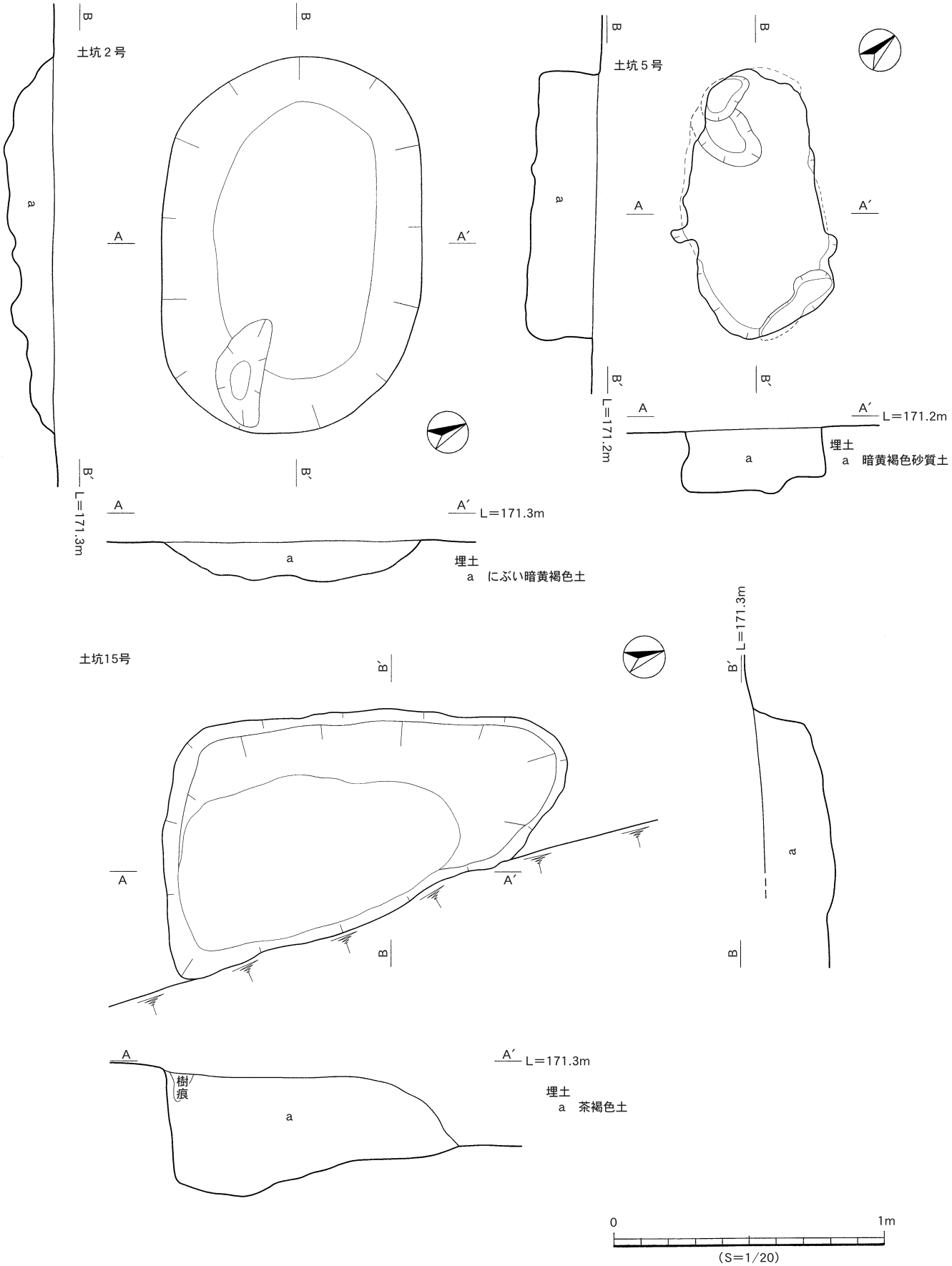
Ｌ－11／12区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸140㎝×短軸95㎝の楕円形を呈する。床面での長軸は105㎝，短軸は60㎝を測る。埋土はにぶい暗黄褐色砂質土の単一である。検出面からの深さ18㎝である。長軸方向は西に68度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑５号（第147図）

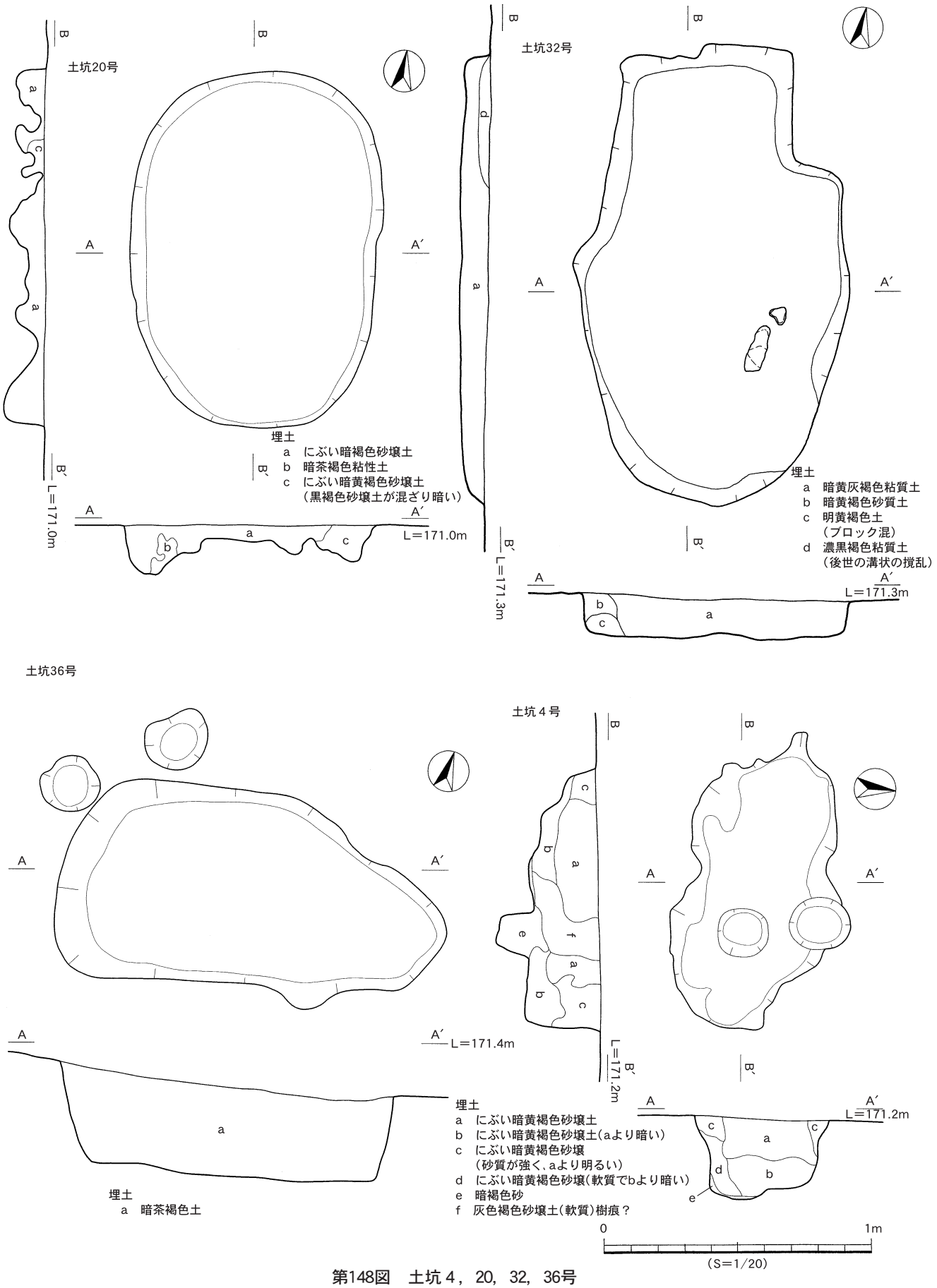
Ｌ－12区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸100㎝×短軸50㎝の楕円形を呈する。床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は暗黄褐色砂質土の単一である。検出面からの深さは24㎝で床面はほぼフ



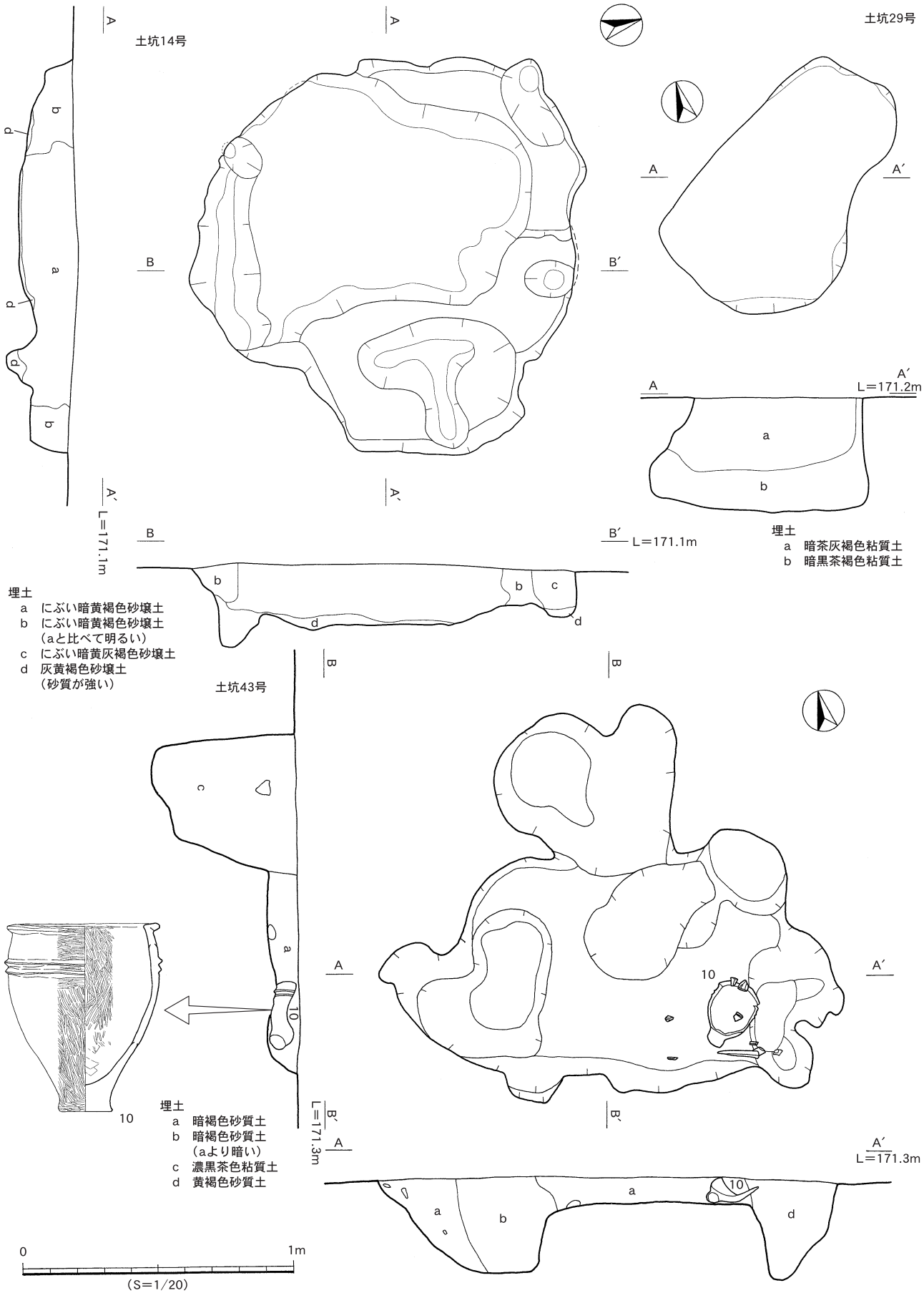
第146図　土坑23，28号



第147図　土坑２，５号，15号



第148図　土坑４，20，32，36号



第149図　土坑14，29，43号・43号遺物出土状況

ラットで，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は西に33度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑15号（第147図）

Ｋ－12／13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸155㎝×短軸77㎝の略楕円形から長方形を呈する。遺構東側が削平を受けているため，本来は長方形プランだったと考えられる。現存する範囲で床面は長軸140㎝，短軸は77㎝を測る。埋土は茶褐色土の単一である。検出面からの深さは40㎝で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は西に１度振れる。遺物が３点出土したが図化には至らなかった。

土坑４号（第148図）

Ｌ－12区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸100㎝×短軸50㎝の不定形を呈する。床面での長軸は95㎝，短軸は38㎝を測る。埋土は，にぶい暗黄褐色砂壌土を主体とする。検出面からの深さは25㎝で，床面中央付近に深さ10㎝程度のピットがみられる。長軸方向は西に85度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑20号（第148図）

Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸138㎝×短軸92㎝の楕円形を呈する。床面は長軸で128㎝，短軸で81㎝を測る。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土を主体とする。検出面からの深さは６㎝程度であるが床面の凹凸が激しい。ほぼ床面直上での検出となった。長軸方向は東に21度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑32号（第148図）

Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸166㎝×短軸100㎝の略楕円形である。床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は暗黄灰褐色粘質土を主体とする。検出面からの深さ10～17㎝で，床面はフラットである。壁面の立ち上がりははっきりしている。長軸方向は西に19.5度振れる。遺物が16点出土したが図化には至らなかった。

土坑36号（第148図）

Ｋ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸147㎝×短軸73㎝の略楕円形を呈する。床面での長軸は130㎝，短軸は64㎝を測る。埋土は暗茶褐色土の単一である。検出面からの深さ34㎝で，床面はほぼフラットである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は東に72.5度振れる。遺物が１点出土したが図化には至らなかった。

土坑14号（第149図）

Ｋ－12／13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸145㎝×短軸145㎝の略方形から不定形を呈する。床面は長軸で132㎝，短軸で136㎝で凹凸が激しい。埋土はにぶい暗黄褐色砂壌土が主体であり，壁面付近に同色のやや明るめの埋土が堆積する。検出面からの深さは23㎝で壁面の立ち上がりははっきりしている。南側側壁下部に沿って溝状の浅い落ち込みが見られる。長軸方向は東に13.5度振れる。遺物は出土しなかった。

土坑29号（第149図）

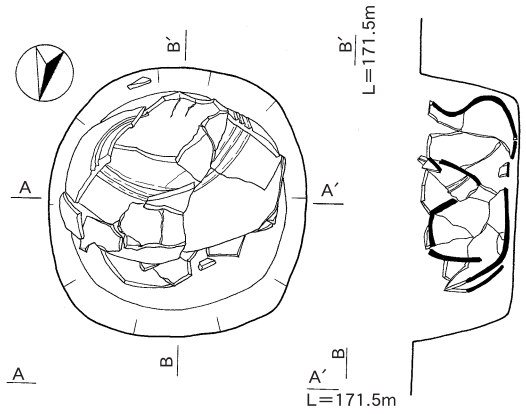
Ｋ－13区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸100㎝×短軸55㎝の略長方形から不定形を呈する。床面での長軸，短軸も検出面とほぼ同規模である。埋土は暗灰褐色粘質土を主体とする。掘り込みはやや袋状を呈する検出面からの深さ43㎝である。長軸方向は東に56度振れる。遺物は出土しなかった。

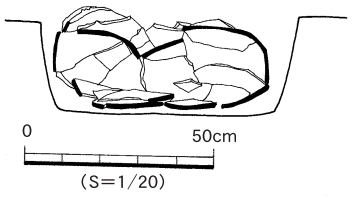
土坑43号（第149図）

Ｋ－14区，Ⅷ層上面で検出された。平面形態は長軸195㎝×短軸143㎝の不定形を呈する。樹痕，ピットなどで壊されているが本来，長方形プランを呈していたと思われる。埋土は暗褐色砂質土である。検出面からの深さ11㎝で床面はほぼフラットと思われる，立ち上がりもはっきりしている。長軸方向は西に82.5度振れる。遺物は土坑内南西隅に床面に横倒しになった状態で充実脚台の甕形土器が出土した。

壺棺（土坑16号）（第150図）

壺棺はＫ－12区Ⅷ層上面において検出されたもので，平面形態が72㎝×69㎝の円形の土坑内に納められていたものである。土坑の深さは検出面から26㎝である。壺棺は土坑の中央よりやや北側の底部に置かれ，南側にわずかに傾斜した状態で置かれたものと想定される。土圧などにより破砕しているが，ほぼ現況に近いものと思われる。





⑶遺物

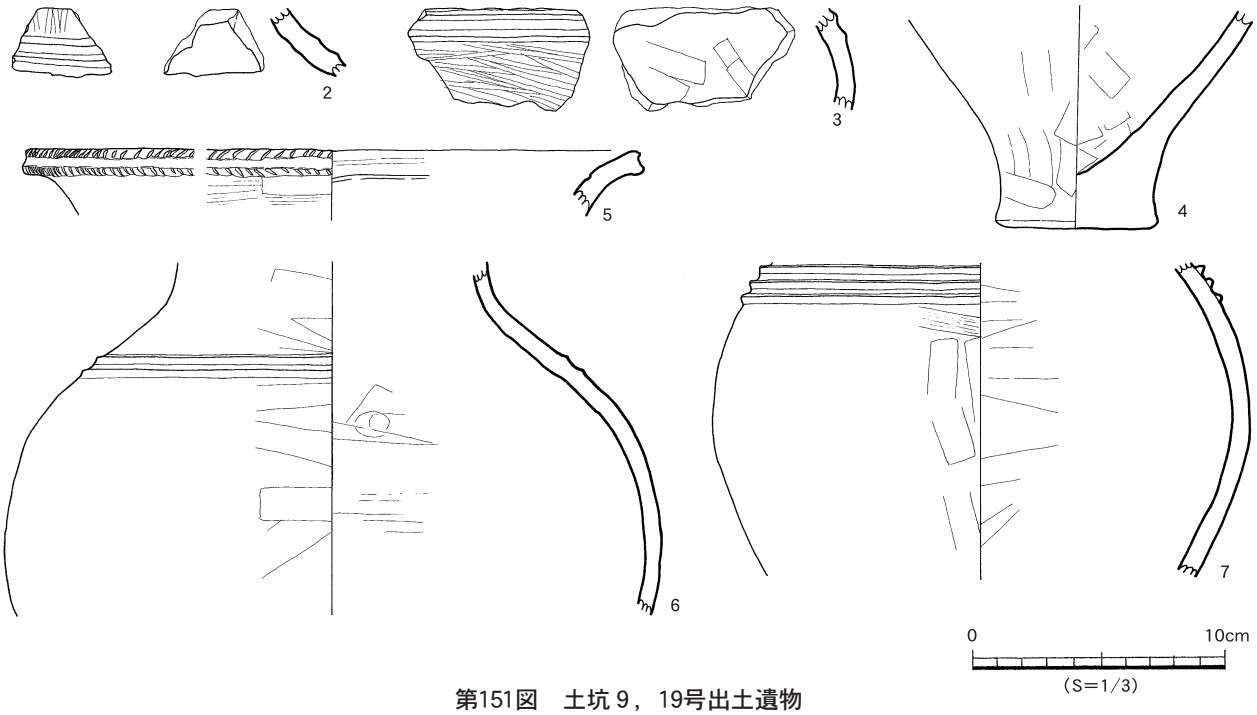
土坑内遺物

弥生時代相当の土坑は52基検出されており，遺物を伴っている土坑は24基で，ほとんどが小破片で図化できたのは，わずか８基，12点だけであった。

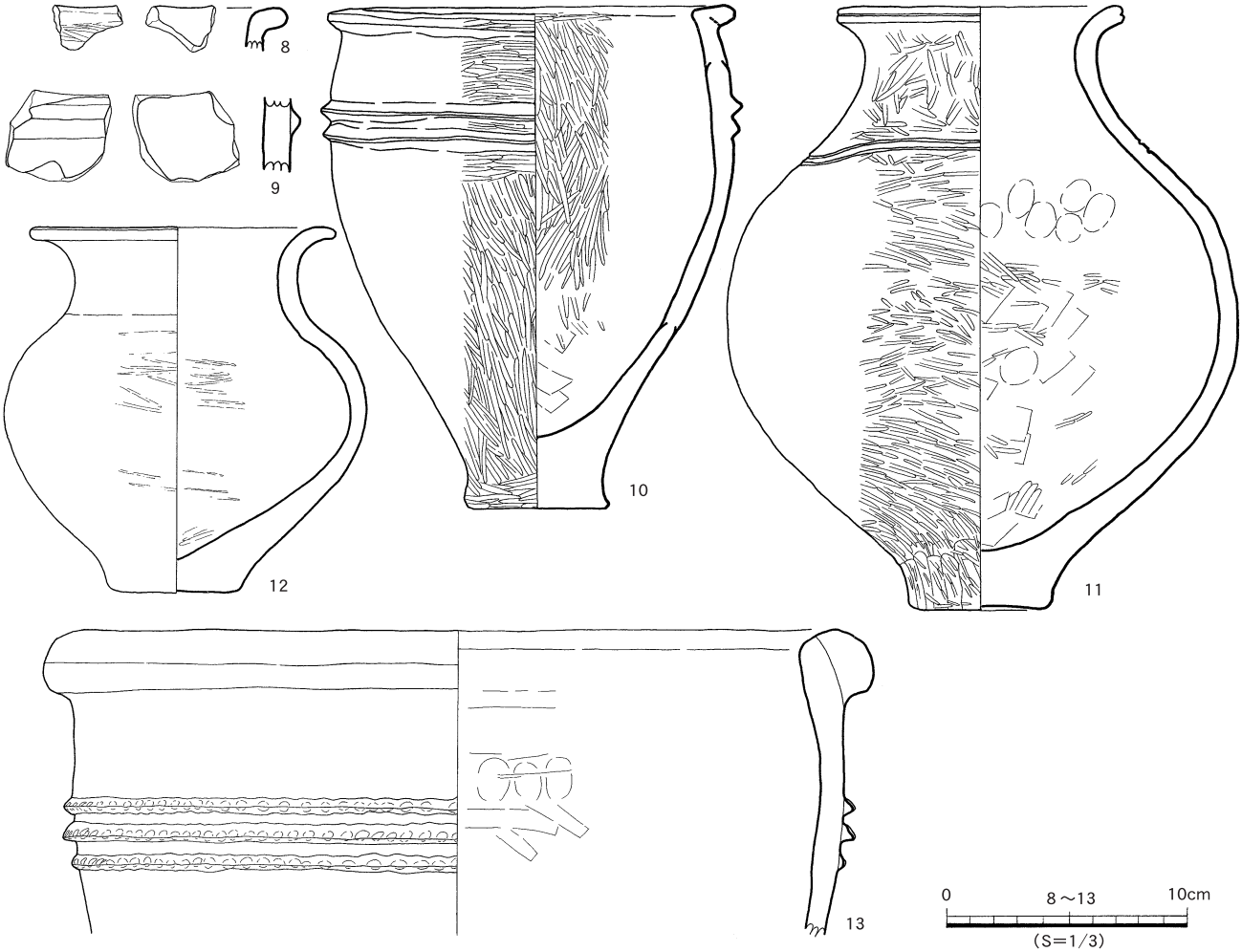
１は，壺棺と思われ，底部が径９㎝，厚さ3.5㎝の分厚い平底で，胴部は大きく球形に膨らみ49.7㎝と最大径をなす。肩部上位に３条の三角形貼付突帯を廻らし，頸部はやや反り気味に内傾し口縁部へ至るものである。しかしながら，口縁部は欠損しているため形状は明かではない。突帯下位の肩部に幅1.7㎝，長さ1.8㎝の焼成後穿孔が認められる。

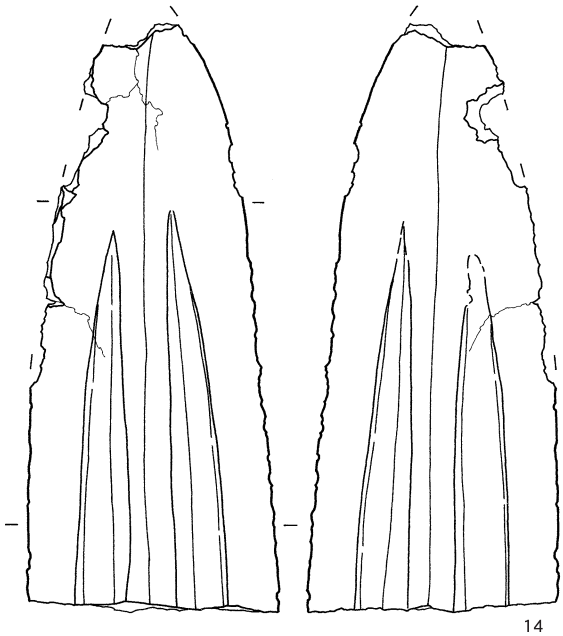
第150図　壺棺（土坑16号）・出土遺物

2・3は9号土坑内出土である。いずれも壺形土器である。2は肩部である。現存で2条の三角突帯が廻らされている。外面調整はヘラミガキである。3は胴部上位である。上位にやや小さめの三角突帯が現存で2突廻らされている。外面は丁寧なヘラミガキで内面は工具ナデである。小破片であり副葬及び供献の可能性は低い。4～7は19号土坑内出土である。4は甕形土器の底部。充実した脚台であるがあまり高くないものである。脚台からあまり開かずに立ち上がるもので，外面はヘラミガキ，内面は工具ナデである。5～7は壺形土器である。5は口縁径24.3㎝を測る。大きく外反するもので口唇部は凹み，二叉状口縁状を呈する。また，斜行する細かな刻み目が施される。6は胴部から頸部にかけての部分である。最大径は胴部中位にあり胴部は球形状に膨らむ。肩部に2条の細い三角突帯をめぐらし，頸部はゆるやかに立ち上がるものと思われる。7は胴部中位に最大径を有するもので胴部は球形状に膨らむものである。肩部に3条の三角突帯を廻らす。内外面共に工具ナデで，外面の一部にススが付着する。8・9は26号土坑内出土である。いずれも甕形土器である。8は口縁が逆L字状に外反するものである。9は三角突帯を廻らす胴部である。外面にススの付着が認められる。10は43号土坑内出土の甕形土器である。口縁径16.8㎝，底径5.9㎝，器高20.7㎝を測る。底部は充実した脚台であるが，やや低いものである。ふんばり気味の底部からややくびれて立ち上がるもので，胴部はあまり張らず，肩部は内傾して口縁部へ至る。口縁部は短く逆L字状に外反する。口縁端部は丸くおさめる。胴部上位に三角突帯を2条廻らす。外面下位は縦方向，上位は横方向のヘラミガキ，内面は縦方向のヘラミガキと工具ナデである。また，外面にはススの付着が認められる。11は47号土坑内出土の壺形土器である。口縁径11.8㎝，底径6㎝，器高24.9㎝を測る。厚めの底部より外方へ立ち上がり胴部中位に最大径を持ち胴部は球形状に膨らむ。肩部から頸部へはゆるやかに内傾して口縁部へ至る。口縁部もゆるやかに外反し，口唇部には沈線上の凹みが認められる。肩部に2条の浅い沈線が廻らされる。外面はヘラミガキ，内面は一部ヘラミガキで胴部は工具ナデ，肩部は指頭押圧の痕跡も認められる。12は48号土坑内出土の壺形土器である。口縁径12.7㎝，底径5.8㎝，器高15.1㎝とやや小振りのものである。安定した底部から大きく外方へ立ち上がり，胴部も大きく膨らむ。肩部はしまり，頸部は直行気味に口縁部へ至り，やや長めの口縁部はゆるやかに外反し，口唇部は丸くおさめる。内外面共に一部に工具ナデが観察される。13は52号土坑内出土の甕形土器で，口縁径34.4㎝を測る。あまり張らない胴部から頸部はわずかに内傾し，口縁部は外反する。丸く大きな口縁部でいわゆる「ボテ口縁」と呼称されるものである。胴部上位に指つまみ状の三角突帯3条を廻らす。14は土坑34号内からの出土である。土坑床面から10㎝程度のところから出土しており，副葬品と考えられる。銅戈片で，残存最大長7.85㎝，最大幅3.35㎝，最大厚7㎜で切っ先先端部を欠損している。切っ先が丸みを帯び，匙状の樋を有し，脊が細く薄いことから，細型銅戈と考えられる。このタイプの銅戈は，樋の上端が整うのが特徴とされるが，本例は樋の上端が一致しておらず，脊上に鎬を通す特徴が指摘できる。



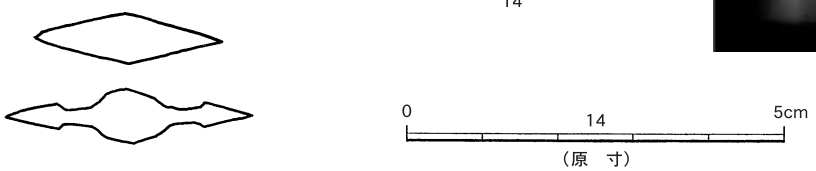
第151図　土坑9，19号出土遺物







X線写真



第152図　土坑26，34，43，47，48，52号出土遺物

包含層

弥生時代のものと思われる遺物は，他の時代と比べ点数は少ないものの，Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層を中心に弥生時代全般を通じたものが出土している。出土した遺物は甕形土器，壺形土器を中心とした土器が大部分を占めるが，土器以外にも磨製石鏃，石庖丁などの石器や石製品が認められた。これらは，古墳時代で詳細を扱う。また，鹿児島県内では約20例目となる抉入柱状片刃石斧や，破鏡が出土している。

土器に関しては，器種や口縁部の形態などからⅠ～ⅩⅡ類に分類した。Ⅰ類は弥生早期甕，Ⅱ類は弥生前期甕，Ⅲ類は弥生中期甕，Ⅳ類はボテ甕，Ⅴ類は黒髪式甕，Ⅵ類は甕全般底部，Ⅶ類は壺口縁部，Ⅷ類は壺胴部，Ⅸ類は壺底部，Ⅹ類は重弧文を施す免田式土器，ⅩⅠ類は鉢，ⅩⅡ類は器種不明とした。

1　土器

Ⅰ類（第154図15～34）

15は胎土に砂粒を多く含み，大きめの角閃石と石英の粒子を含む。16は口縁部が内傾する器形で，口縁部と胴部に突帯を施す。17は生地土に特徴があり，胴部は茶褐色，口縁部上端と突帯が白色である。突帯の刻みが深く，箱形を呈する。18は突帯に指で刻みを施している。19，20は突帯が貼り付けられ，口縁上端にほぼ接している。21は内面にミガキ痕を残し，突帯の貼り付けは口縁部下に施されている。22は外面にスス・炭化物の付着が著しい。25は口縁部にかけて屈曲しており，径は小型である。26と27は同一個体と思われ，口唇端部に深い刻みを施し，口唇部に平坦面を残す。28の突帯は竹管状工具による刻みが施されている。29は口縁部とその下に突帯を施す。31は口唇端部に浅い刻みを施す。33は細沈線により突帯間をつなぐ。詳細は不明だが，鋸歯文の可能性が考えられる。34は口縁部上端を欠損するが，横位の突帯間を斜位の突帯でつなぐ。

Ⅱ類（第154図35～第155図47）

36は胴部にかけてすぼまるため，鉢の可能性も考えられる。39は三角突帯頂部に弱い刻みを施す。42は外面の突帯下に刺突文が見られる。45は亀の甲タイプで，胴部の器面調整はヘラみがきを縦方向に施す。口縁部に穿孔が見られ，内面の穿孔の周りは器壁の剥落が見られることから，焼成後の穿孔であると思われ，弥生期にはあまり見られない補修孔と判断した。46，47は如意状口縁を呈し，口唇端部に刻みを施す。47は，胴部が膨らみを持ち平底の底部に至る。外面にススが著しく付着している。全面に丁寧な工具ナデを施す。胎土に角閃石を多く含む特徴を持ち，後述するボテ甕と類似している。

Ⅲ類（第155図48～56）

48は口縁部の突帯はややふくらみ，下に垂れている。年代測定の結果，弥生中期のものと判明している（科学分析第４節参照）。49は小型の甕で,ふくらむ胴部に２条の突帯を施す。50は口縁突帯が垂れ下がり，端部が尖る。55は口縁が台形状で胴部はややふくらみを持ち，内面・外面とも入念なミガキを施す。56は口縁に刻み目があり，口縁部下から粘土の貼り付けが垂下する。

Ⅳ類（第156図57～63）

口縁部が丸く器壁が分厚い一群を分類した。弥生前期の後半から中期前半に位置づけられる。59は丸い口縁部内面に段を有するのに対し，57，58，60は段を有さない。61は口縁部を欠損するが，胴部突帯を一条残す。突帯の断面観は三角形を呈し，上下を指でつまむように調整していることから，絡縄突帯と思われる。62は胴部で，３条の突帯を持つが，作り付けは雑である。突帯間はナデにより調整が施される。内面に粘土の接合痕がある。63は分厚い底部である。充実した底部で外面にヘラけずりを入念に施している

Ⅴ類（第156図64～73）

黒髪式と思われるものを時代順に掲載した。64，65はＴ字状の口縁で，64は凹み，胎土は細い角閃石が含まれる。65の胎土は肥後系の色調で白～黄色をしている。66はＬ字状の口縁を呈する。68は胴部との接合面での剥落が見られる。67も肥後系の色調を呈し，粘土接合面を残している。口縁部上面にススが弧状に付着していることから，ふた等の痕跡の可能性がある。70はＬ字状に外傾する口縁で，外傾がやや立ち上がる特徴が見られる。口縁部上面に幅広のハケ目痕が見られる。71は胎土に特徴があり，小礫の他に雲母片を多く含む。73は70と類似しており，幅広のハケ目痕が見られる。

Ⅵ類（第157図74～77）

75は上げ底状の底部で，器壁が中心部に向かって細くなる。76は充実高台で，外端に粘土を貼り付け，指で押さえ張り出しを作っている。77は底面に細沈線が見られる。

Ⅶ類（第157図78，88）

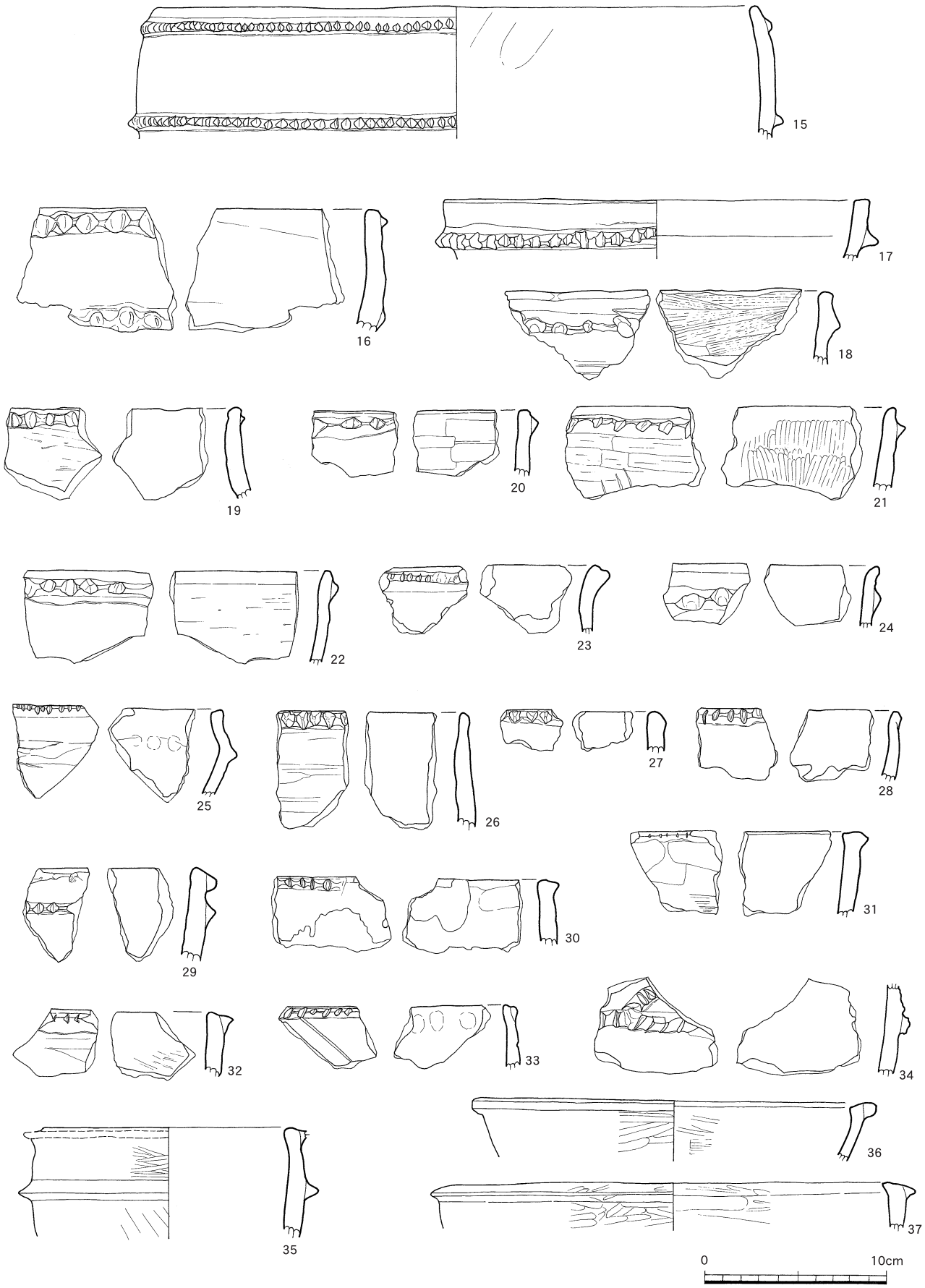
78は頸部に１条突帯を施し，口縁部に工具痕が見られる。88は内外面とも赤色顔料を施し，口縁内面に暗紋が見られる。

Ⅷ類（第157図79～87，89，90）

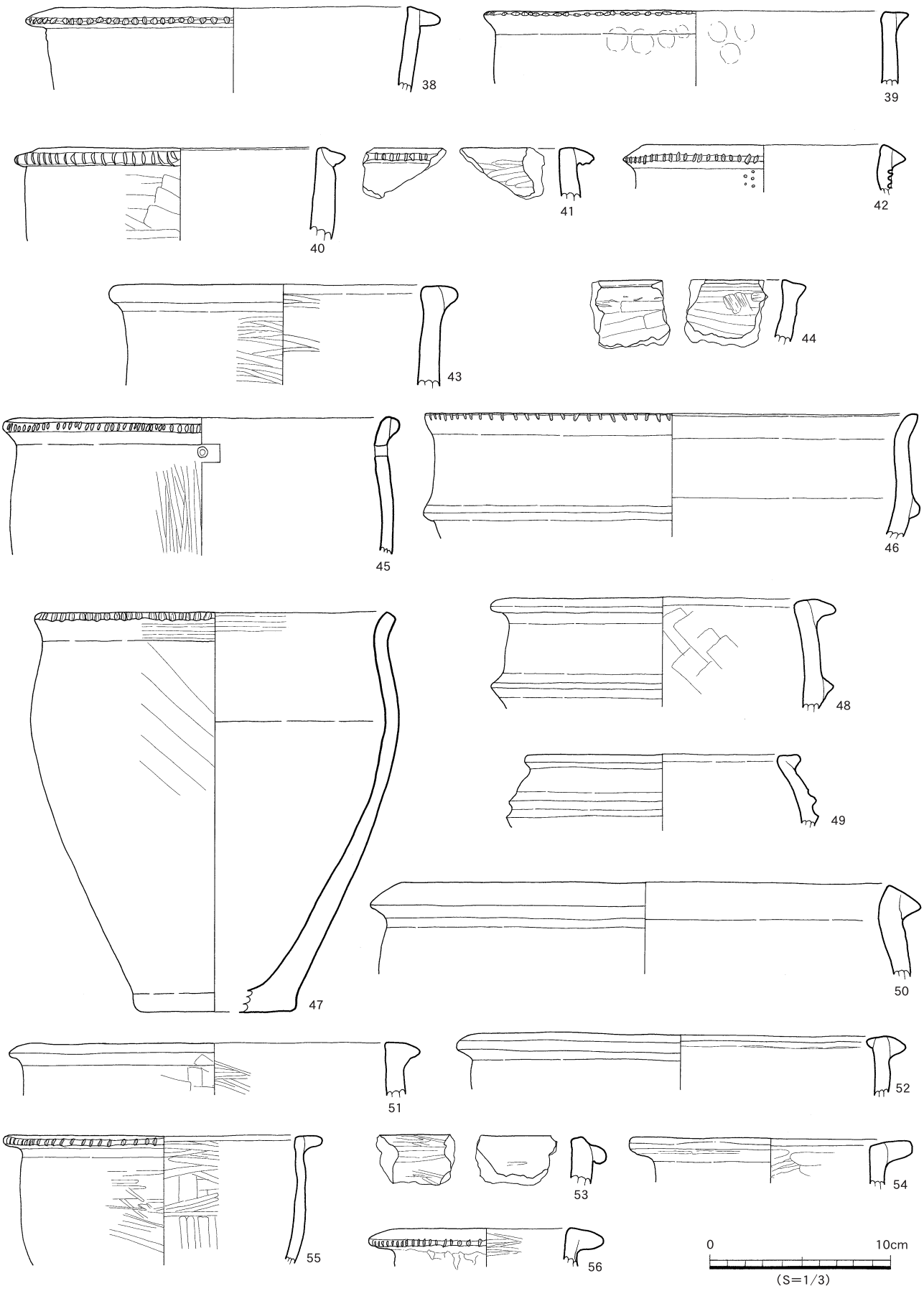
79，80は壺頸部である。80は丹塗りの壺頸部であり，胎土に長くて大きい角閃石が含まれる。81は壺の肩から胴部上半にかけての破片で，ヘラみがきを施し，肩と胴部に沈線を施す。82は胴部片で，横に４条，その上に４条の沈線を鋸歯状に施す。81と82は同一個体と思われる。83，84は胴部突帯を施し，84は内外面とも丁寧なミガキ



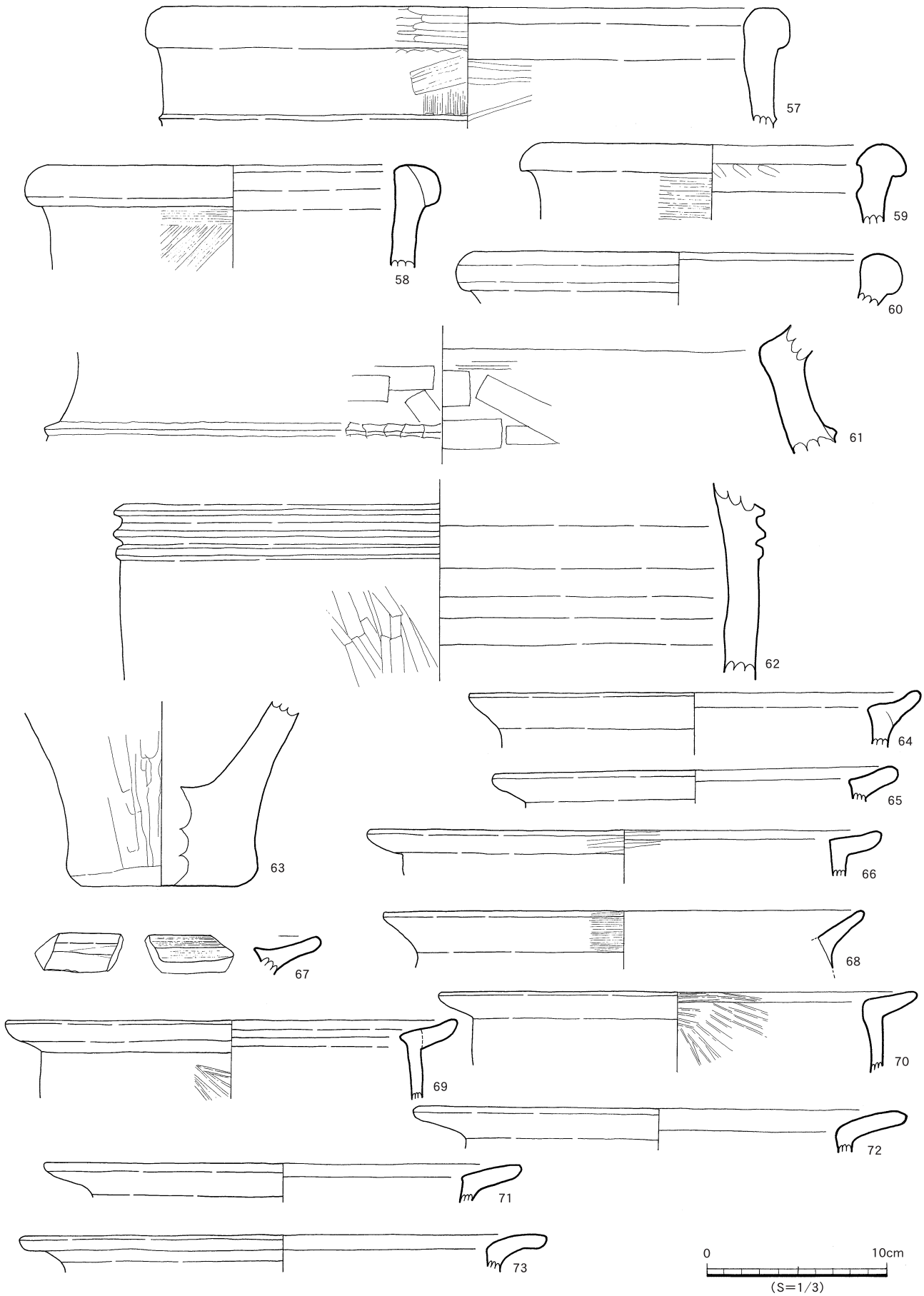
第153図　遺物出土状況



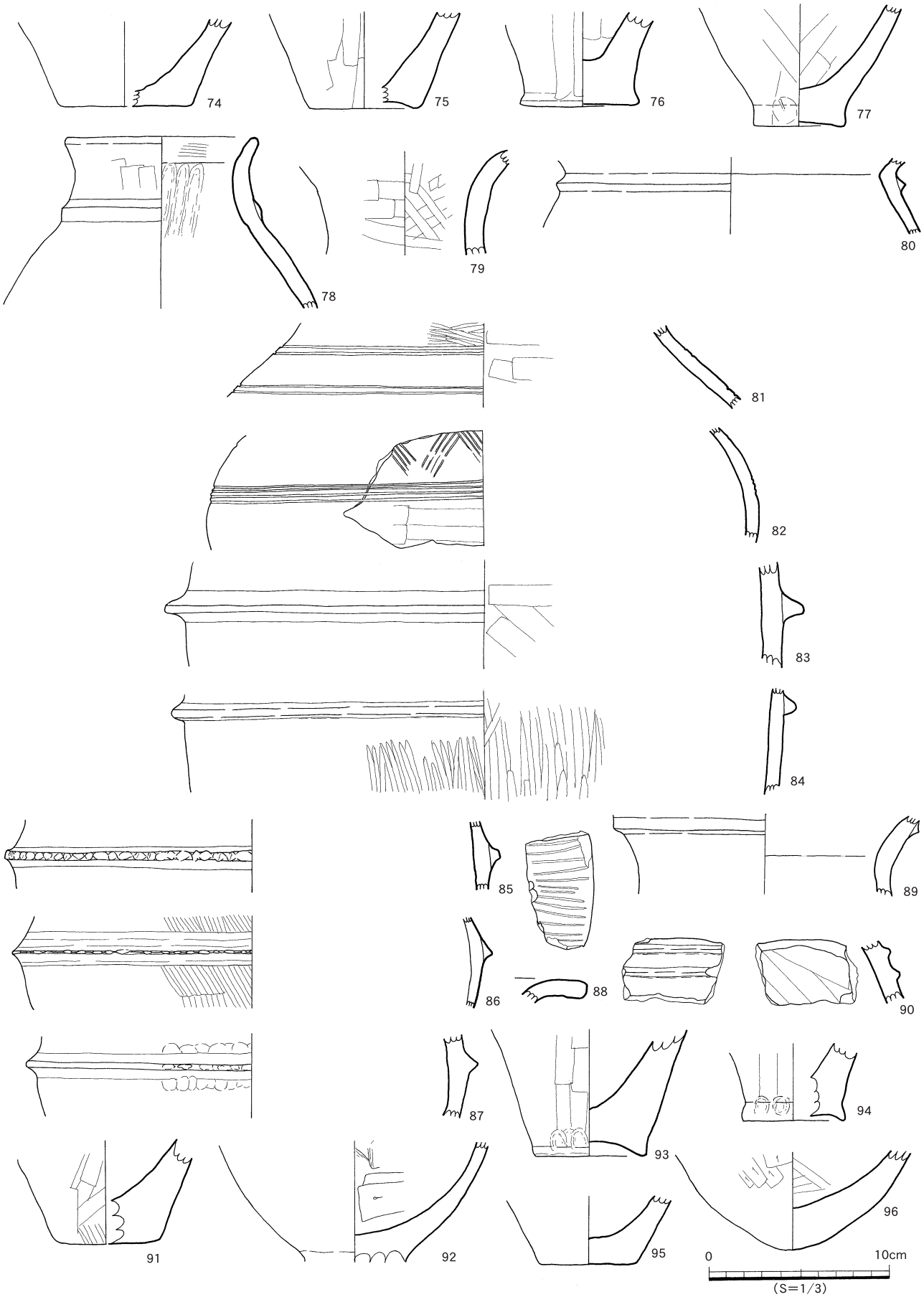
第154図　包含層出土遺物①



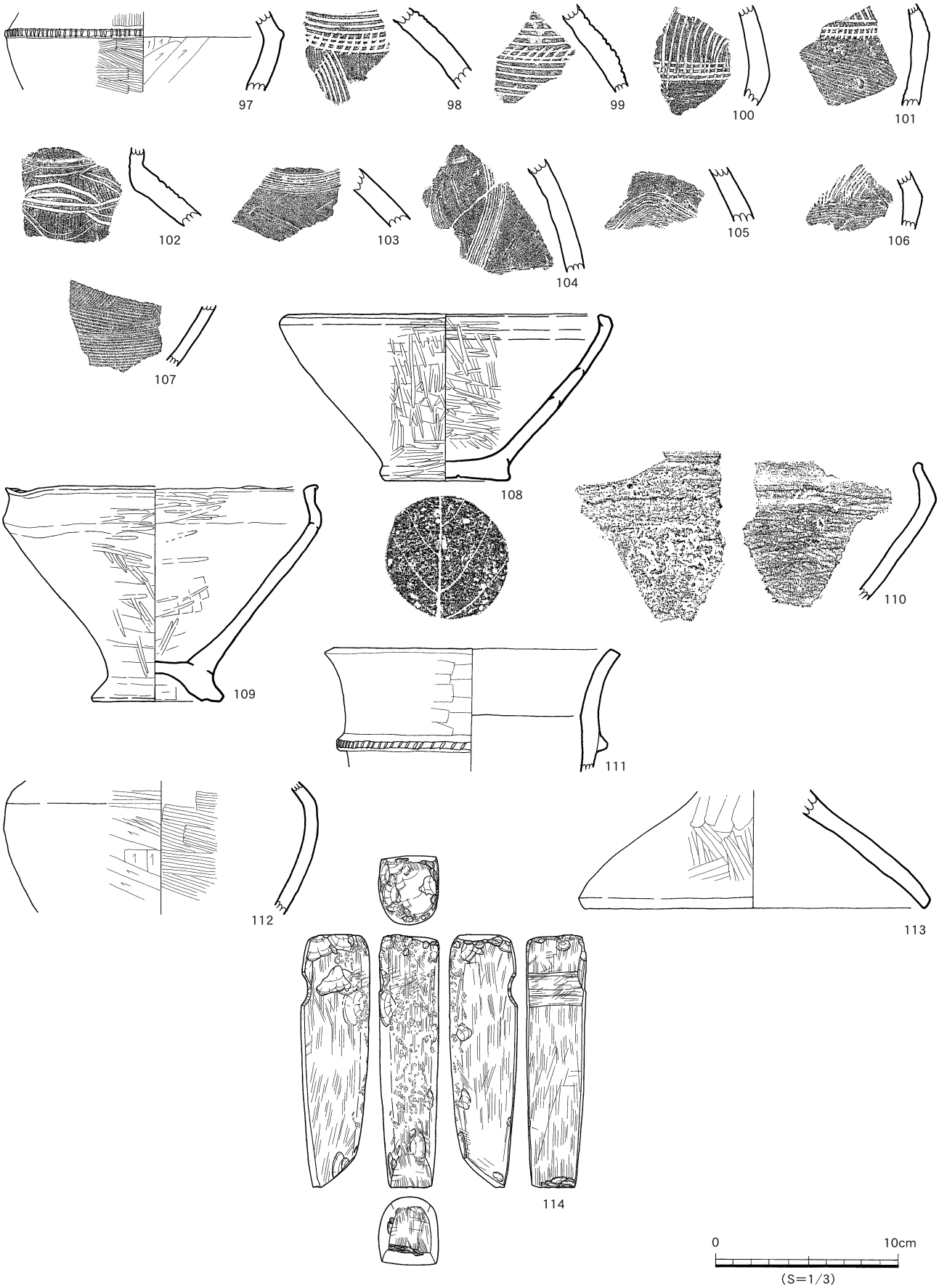
第155図　包含層出土遺物②



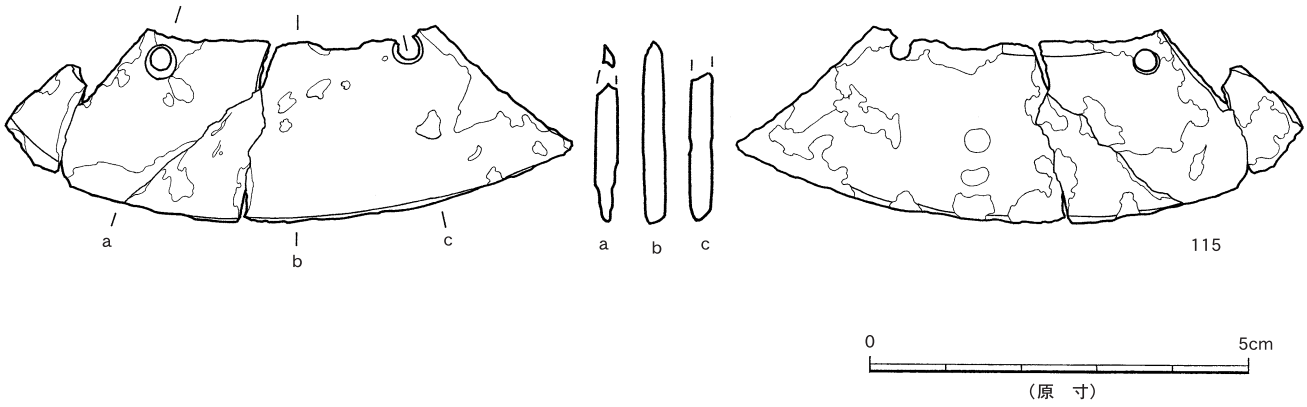
第156図　包含層出土遺物③



第157図　包含層出土遺物④



第158図　包含層出土遺物⑤



第159図　包含層出土遺物⑥

を施す。85，86は黒髪式の壺であり，86は内面の剥落が激しい。89は二叉状口縁と思われる。90は胴部突帯が２条残っている。

Ⅸ類（第157図91～96）

91は壺底部からの立ち上がりは直線的であり，ハケ目のあとナデが見られる。92は生地土に特徴があり，白色と茶褐色の粘土がマーブル状に混ざり合う。接地面にわずかな削り痕が見られる。93，94は上げ底になる底部で，脚を意識した作りであり，作り出しは指によるつまみ上げとなっている。95は生地土が多孔質である。96は丸底で底面が分厚い作りである。

Ｘ類（第158図97～107）

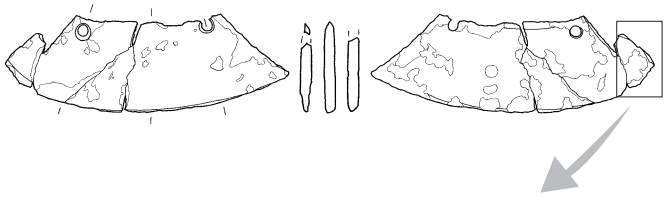
算盤珠状の胴部に重弧文を施した長頸壺を特徴とする免田式土器と思われるものを分類した。97は屈曲する胴部の胴に，刻目突帯を施す。98は横位の沈線ののちに，縦位の刻目を施す。100は横位の沈線ののち，縦位の沈線を施す。縦位は弧状になると思われる。102は口縁部への立ち上がりが残る。相対する弧状の沈線ののち，横位の沈線が施される。104は胎土に金色の雲母を含んでいる。

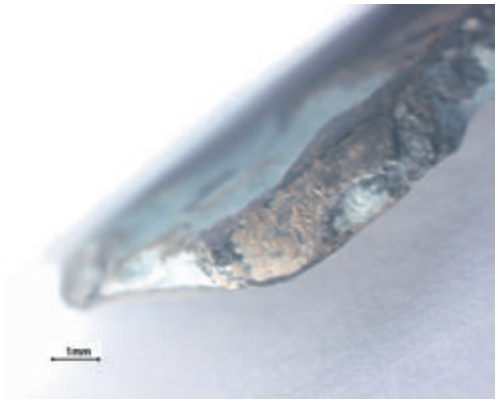
ＸⅠ類（第158図108～110）

108は内外面ともに丁寧なミガキを施し，底部には葉脈痕を残す。また口縁部は面取りをしているように思われる。109は口縁部が内傾し，端部をつまみ出している。底部が上げ底状になっており，内外面にミガキを施す。110も109と類似しており，口縁部を残す。

ⅩⅡ類（第158図111～113）

111は二重口縁壺の痕跡を残すが明確ではない。口縁部は外反し，突帯を有して頸部へ至る。内面は突帯のやや上位で段を有し，内弯ぎみに頸部へいたる。非常に丁寧な作りになっており，時期や胎土においても再検討する必要性がある。112は肩部が張る器形で，胴部は袋状を呈しているが，ススの付着が著しい。再検討を要する。113は高坏の脚と思われるが検討を要する。内外面の調整





側面拡大写真

から脚と判断し掲載した。外面に種子圧痕と思われる凹みがある。

２　抉入柱状片刃石斧（第158図114）

断面はほぼ方形で，全面を丁寧な研磨で仕上げている。最大長が13.6㎝，幅3.2㎝，厚さ3.7㎝で石材は頁岩と推定される。基部に近いところに紐を掛けていたと思われる抉りを有し，抉り部には段差が見られる。

３　破鏡（第159図115）

残存する大きさは，長さ2.6㎝，幅7.5㎝，厚さ0.3㎝である。推定復元径は約16㎝であり，完形の1／6～1／7程度残存している状態である。色調は緑がかった黒色で，緑錆が確認でき，崩れやすい。穿孔が２つあるが，右側の穿孔が際で欠けている。左側面に面取りが確認できるが（顕微鏡写真参照），右側面や穿孔のある方は研磨している部分があるかははっきりわからない。

3　古墳時代の調査

⑴　調査の概要

古墳時代の調査は，主に表土下のⅡ層で行った。ただし，遺跡北側と南側とでは層の堆積等が異なっていることから，遺構検出面は北側では黄褐色砂礫層（Ⅷ層）上面，南側ではアカホヤ火山灰層（Ⅵ層）上面であった。このため，遺物包含層すなわち生活面から数十㎝下層で遺構を捉えていることとなる。遺物包含層が残存している部分では，調査対象範囲のほぼ全域で当該期の土器が出土している。また，遺物包含層が削平等で消失していても，遺構の床面が残存している部分もあった。これらのことを勘案すると，本来はほぼ全域に遺構・遺物が存在していたと推察される。

包含層の調査は，大型の破片等はトータルステーションで出土地点の記録を行い，小破片はグリッド毎に一括取り上げを行った。

遺構は，各々遺構の輪郭を捉えた時点で，検出状況の記録写真を撮影した後，２本の直行するベルトを設定して掘り下げを実施していった。床面の判断は，焼土炭化物の堆積や硬化面等の把握に依ったが，不明なものも含まれている。これらの個々の遺構の詳細については各遺構の中で述べている。

遺構の調査で特に留意した点は，柱穴の時期判断である。埋土の特徴から，多くは古墳時代から古代の時間幅が想定できたが，遺構内から出土する遺物が極端に少ない点や，掘立柱建物跡の復元が困難であった点などから，時期判断が困難であった。このため，柱穴に関しては古墳時代の遺構配置図の中で一括して取り扱った。

なお，竪穴住居跡の埋土の一部はふるいがけを実施すると共に，磁石による微細な鉄片等の抽出に努めた。

遺構内遺物は，包含層の遺物分類に準じて報告を行っていくが，各遺構内の遺物は小破片が多い。このため，必ずしも厳密ではなく，器種構成が充実しているものは極めて少ない。各器種ごとの細分の概念については包含層遺物を参照されたい。

⑵　遺構

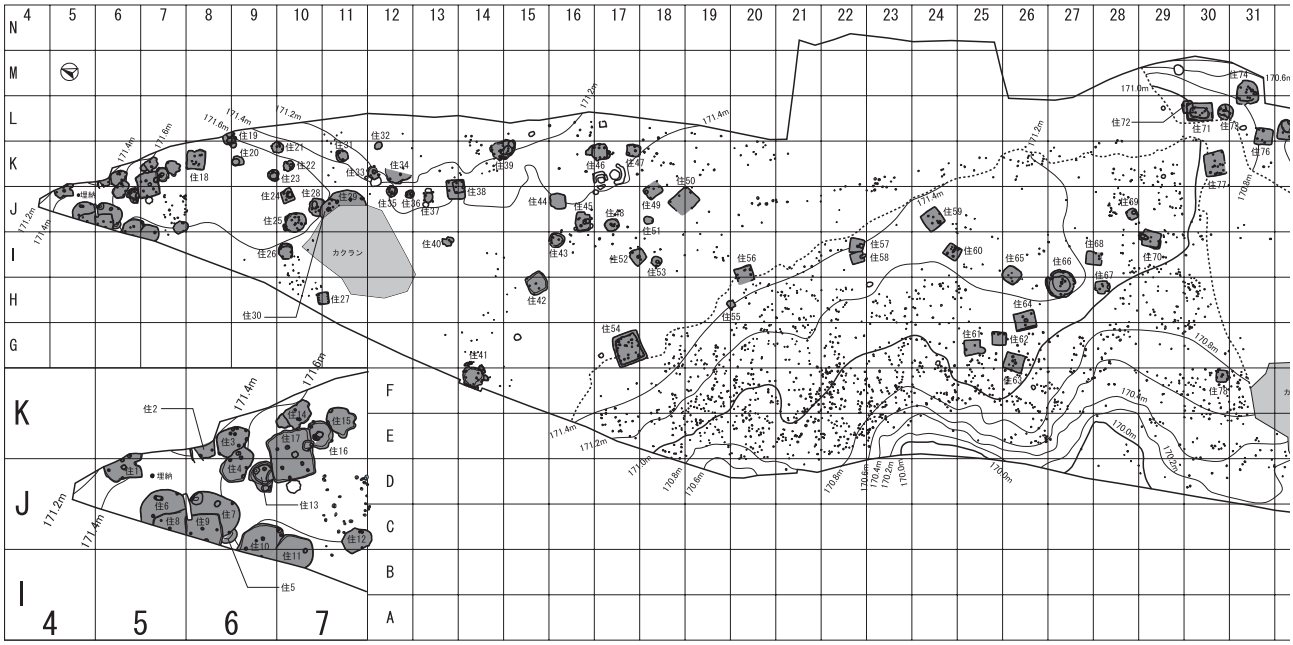
竪穴住居跡１号（第195・196図）

Ｊ・Ｋ－５区においてⅧ層上面で検出された。調査区中最も北側で検出された竪穴住居跡である。東側半分が羽月川への落ち込みによって消失している。検出時のプランは長辺4.3m，短辺2.2mで，本来は長辺４m程度の方形を基調としていたと思われ，南側に間仕切りが見られる。調査は，遺構中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層で床面は北側と東側へ傾斜していて不安定な部分も見られた。貼床や硬化面等の変化は見られず，柱穴などの付帯施設の確認は，床面を掘り下げながら確認し，結果４基の柱穴と中央に１基の土坑が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。遺物は，総点で512点が出土しこの内10点を図化した。１～４は甕である。１は，口縁部が外反し，かき上げ状の調整痕で外面に段を有する。口縁部内面は，調整痕に変化が見られ，段を意識したものかと思われるが，段を有するには至らない。５は，壺の口縁部片である。６は，壺の胴部片で，やや幅広の突帯を貼り付け，鋸歯状にキザミが施されている。７は，壺の頸部から胴部上半にかけての破片である。８は，坩と思われる。工具調整を意識的に深く施して外面に段を作り出している。

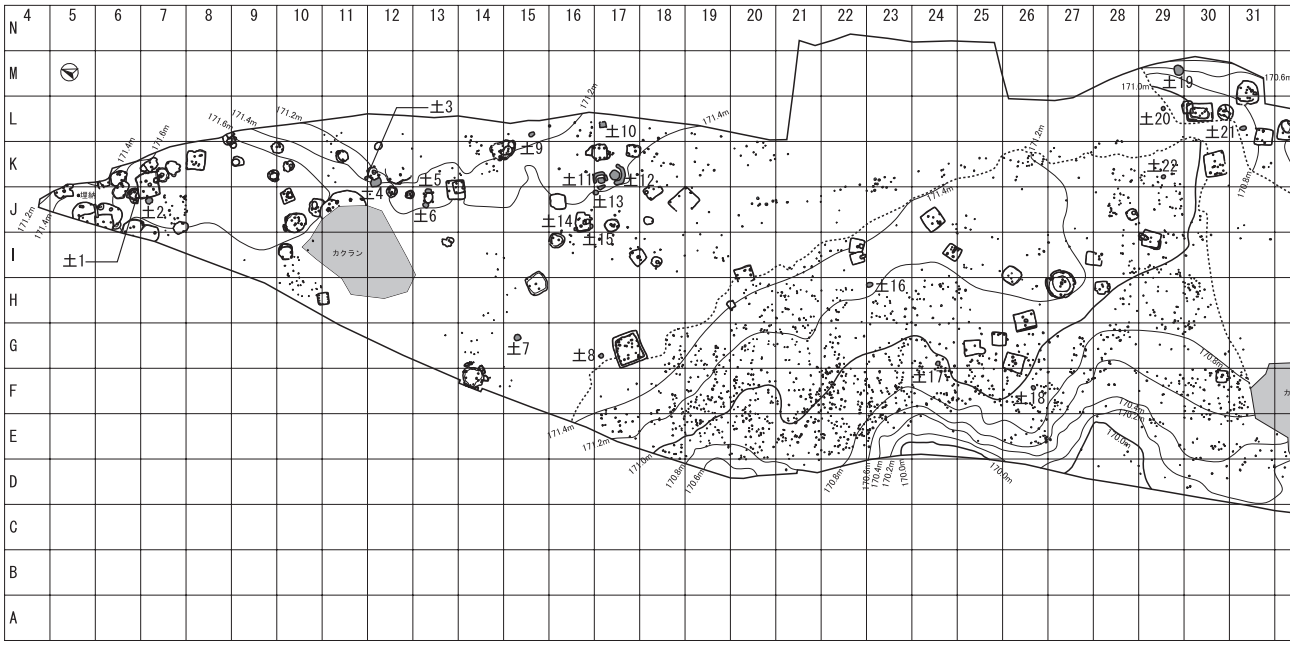


20～30区　周辺の状況

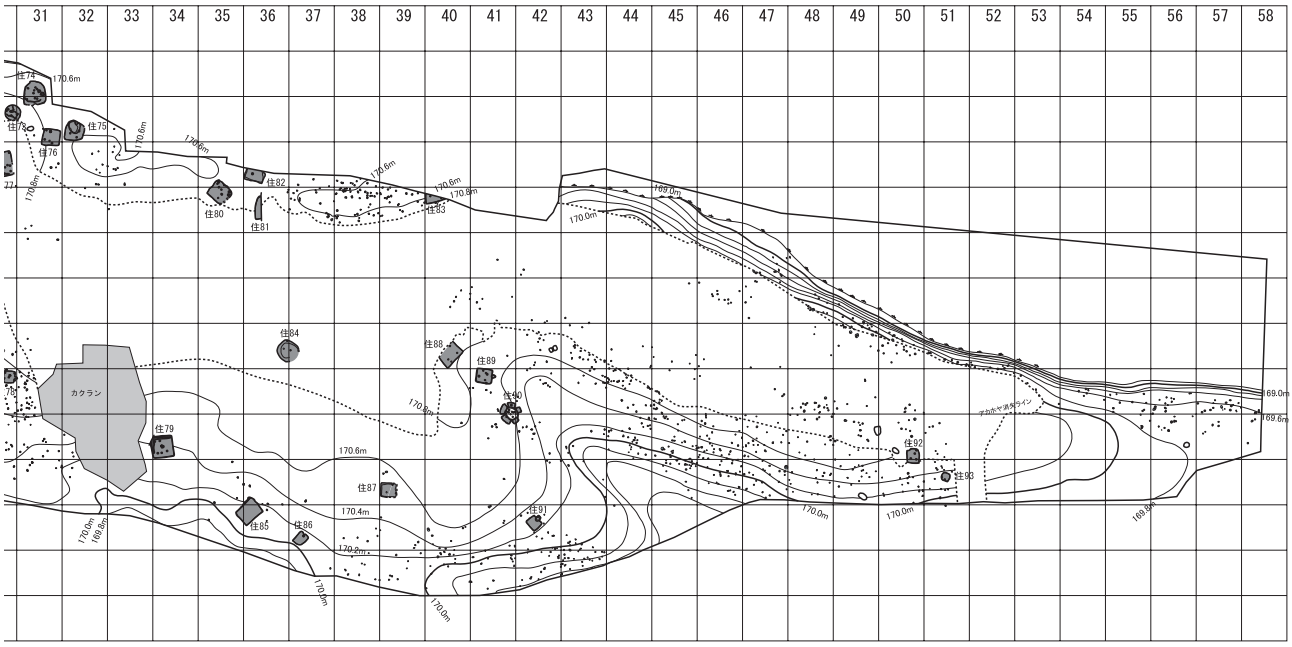
竪穴住居跡の配置

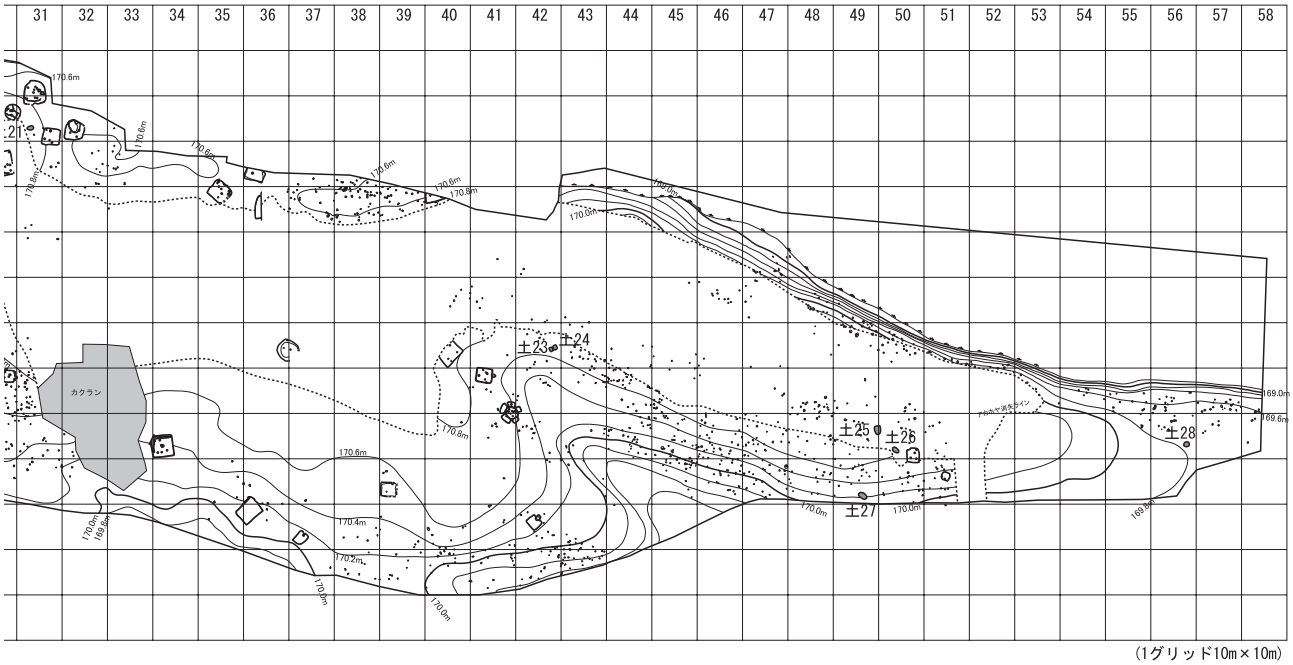


土坑の配置



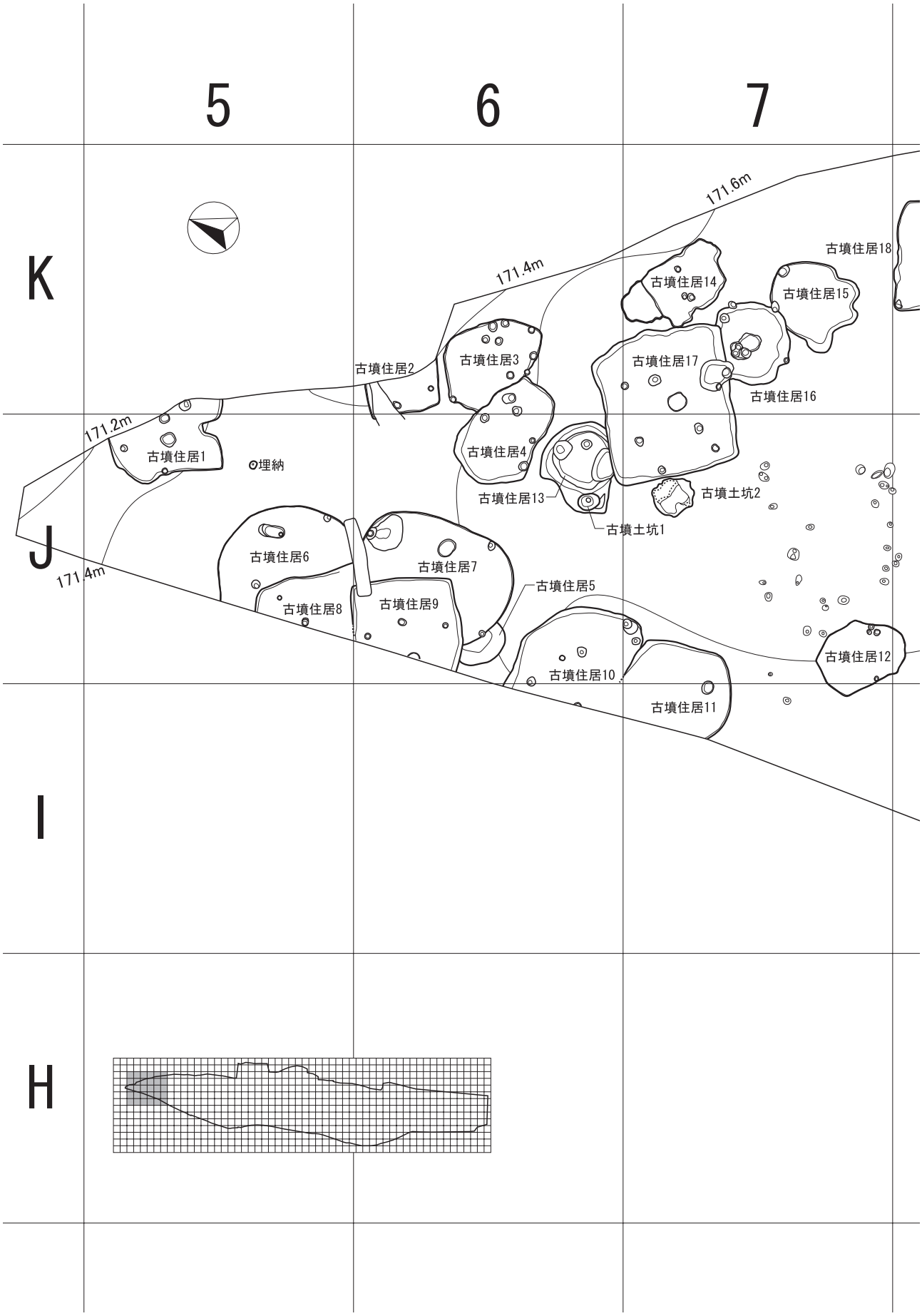
第160図　遺構配置図①





（1グリッド10m×10m）

第161図　遺構配置図②



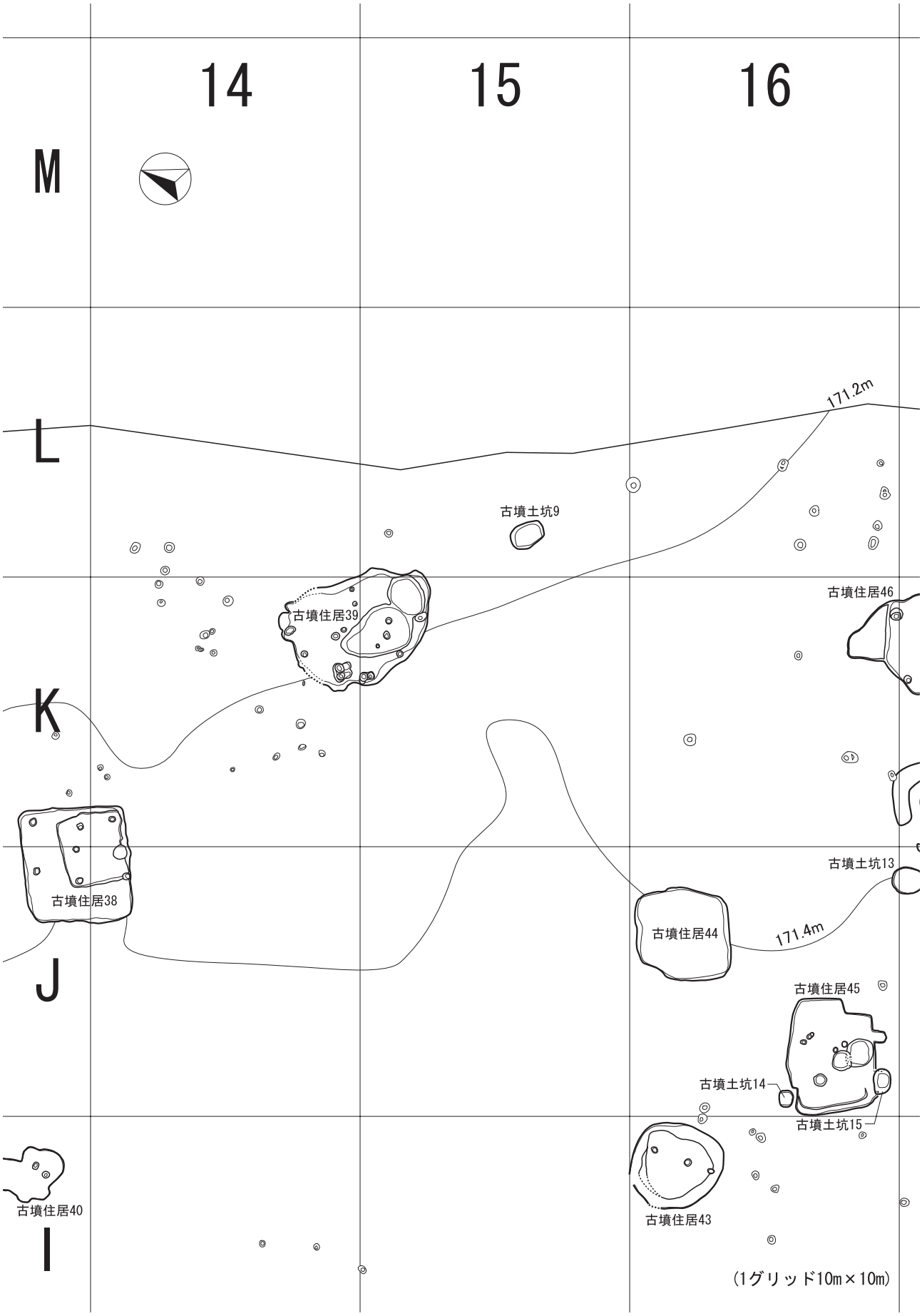
第162図　遺構配置図③



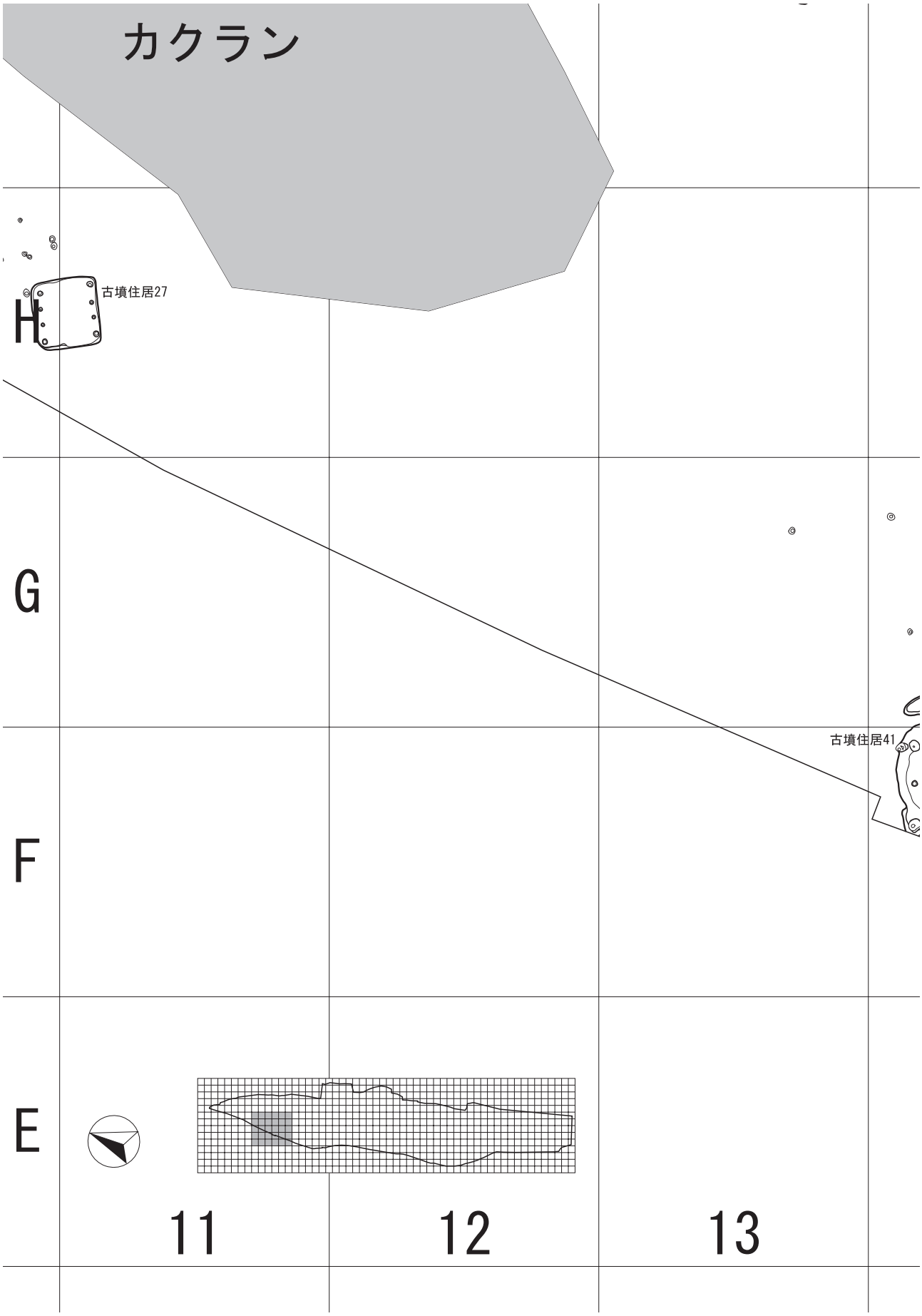
第163図　遺構配置図④



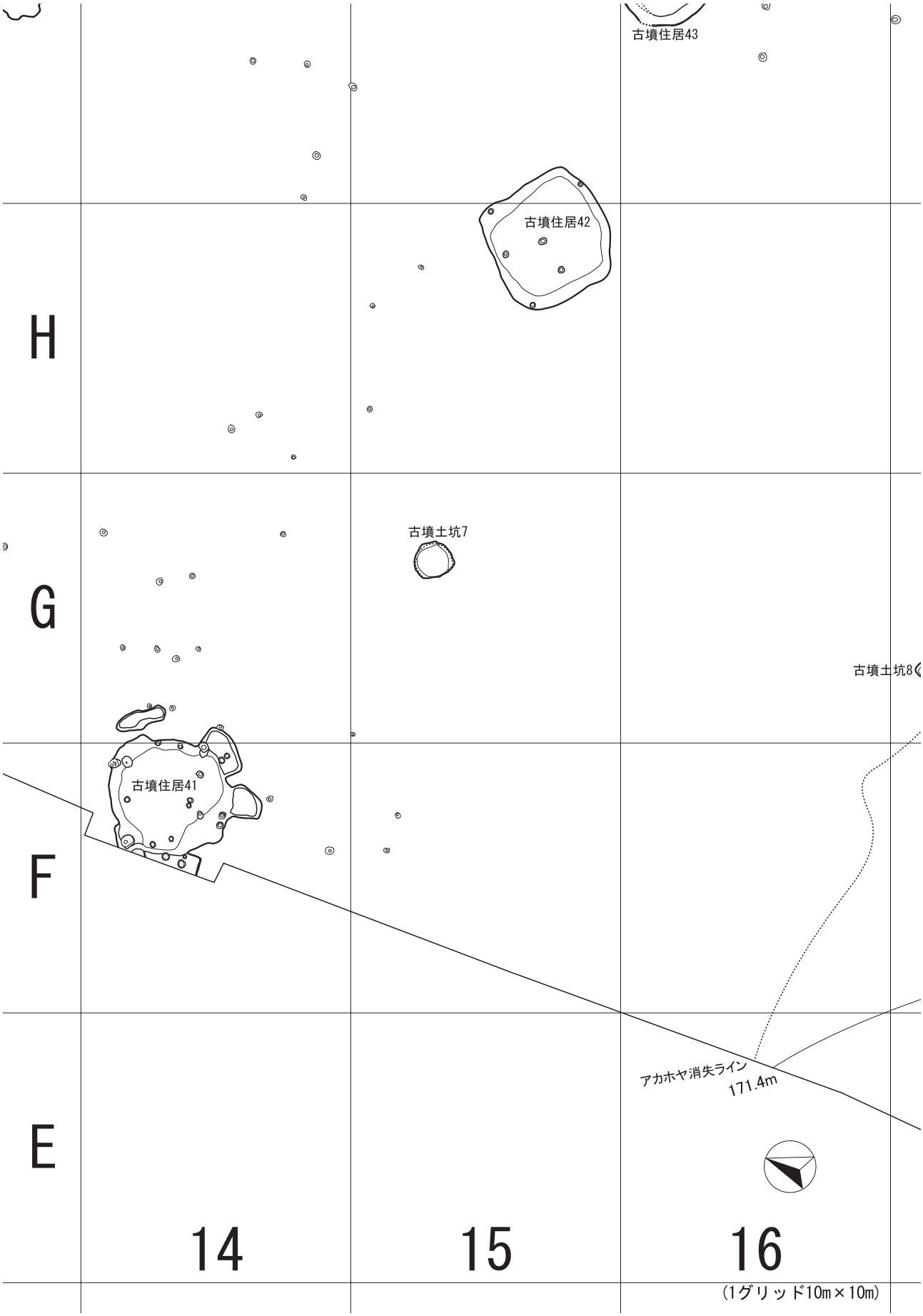
第164図　遺構配置図⑤



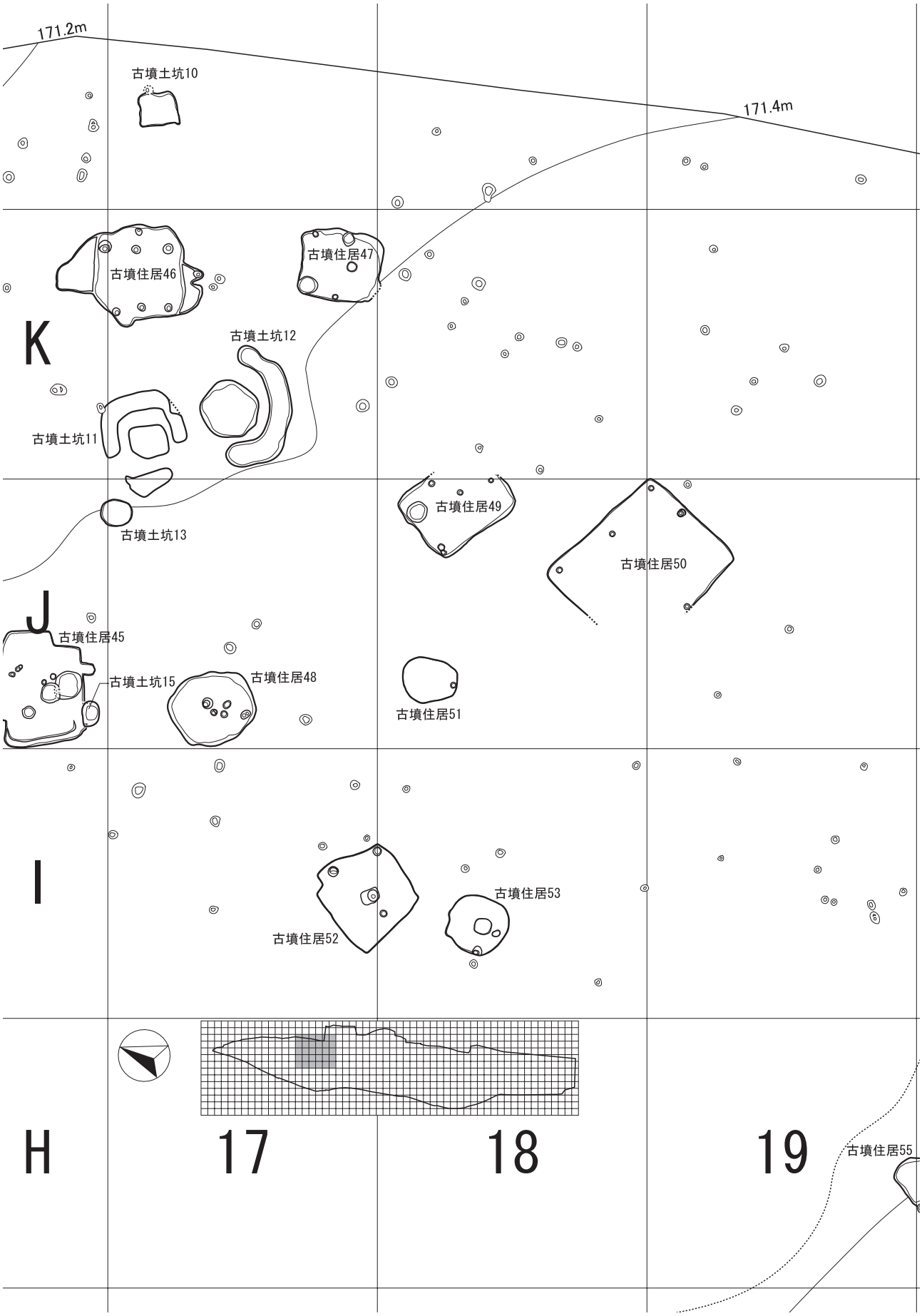
第165図　遺構配置図⑥



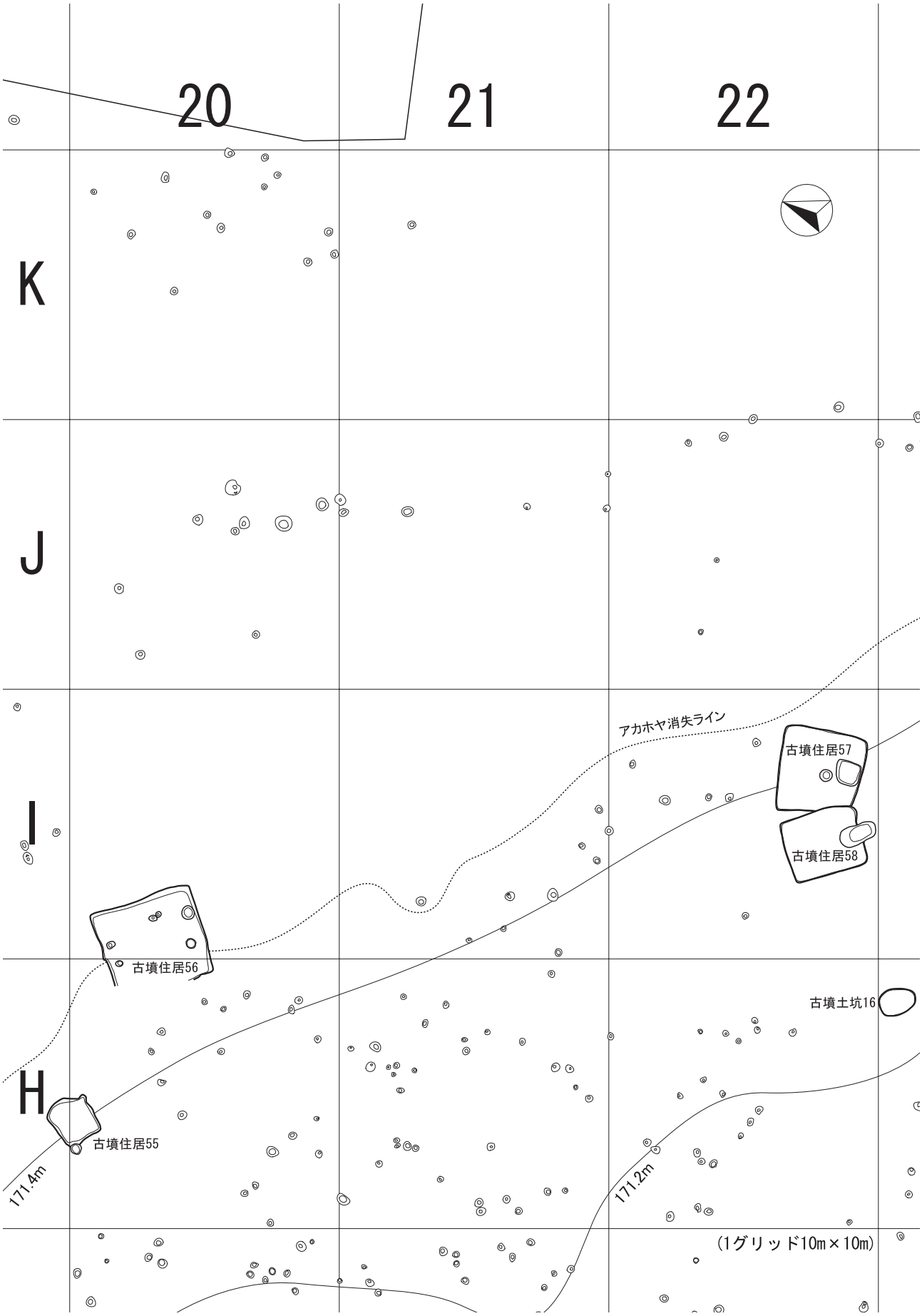
第166図　遺構配置図⑦



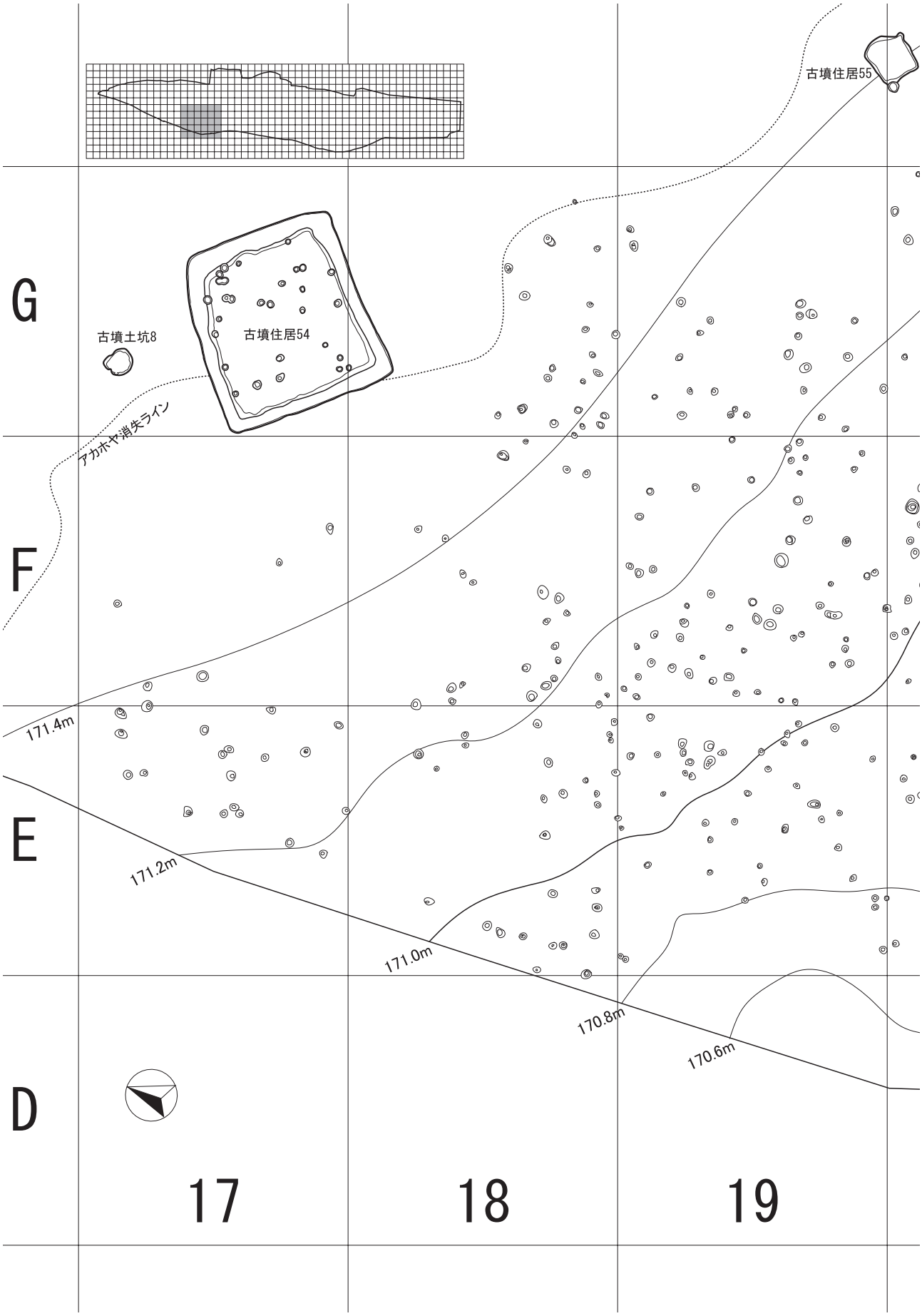
第167図　遺構配置図⑧



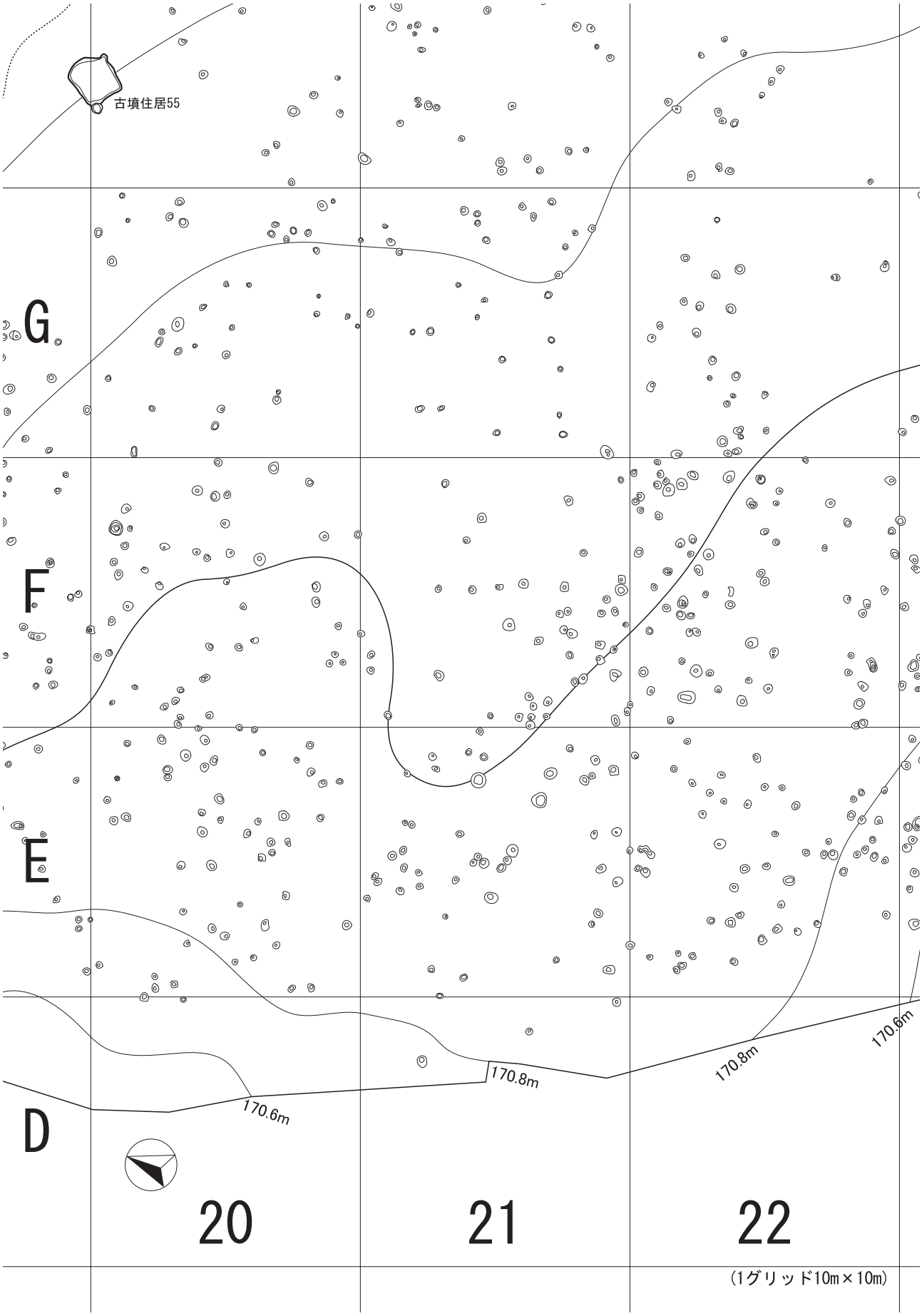
第168図　遺構配置図⑨



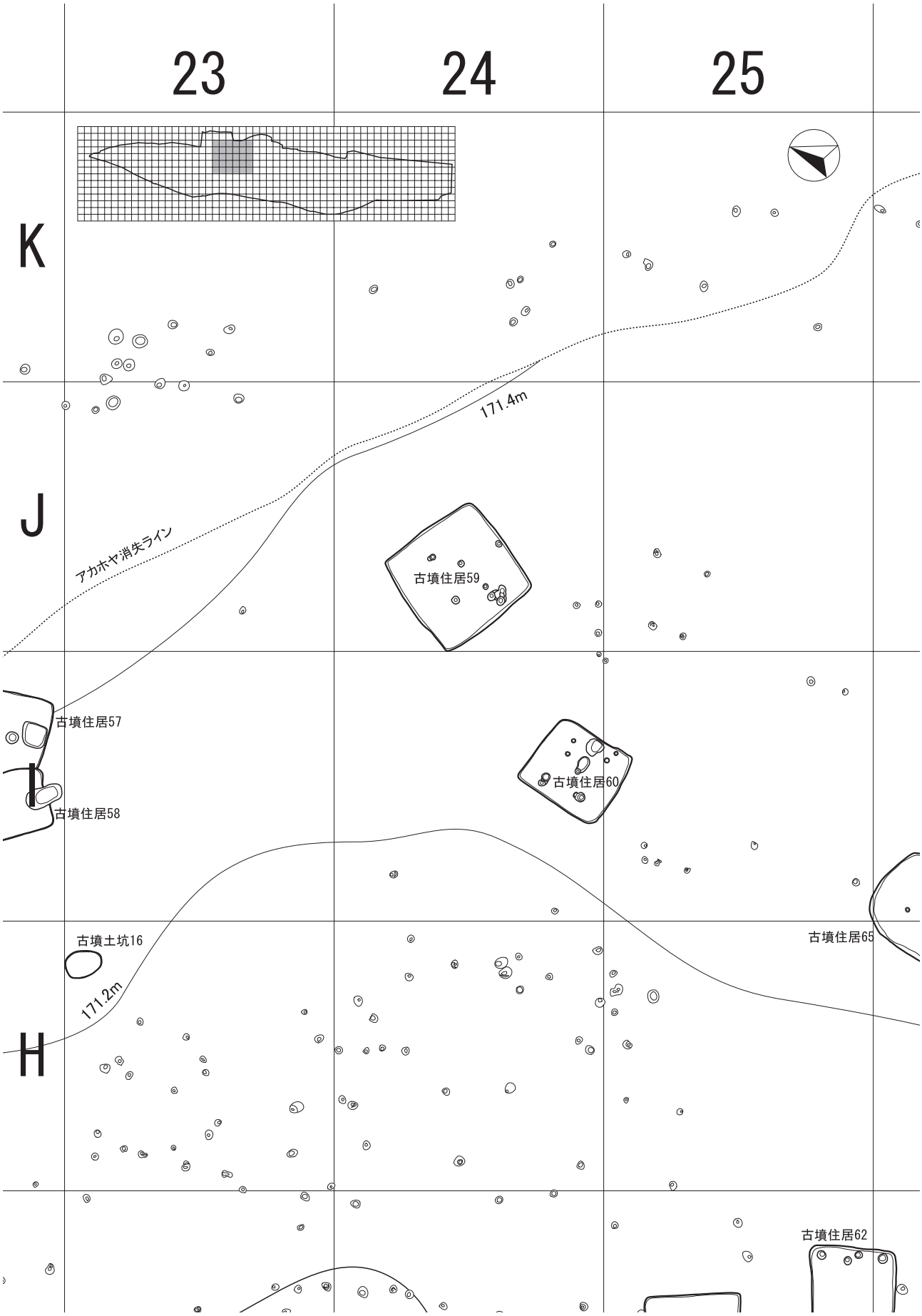
第169図　遺構配置図⑩



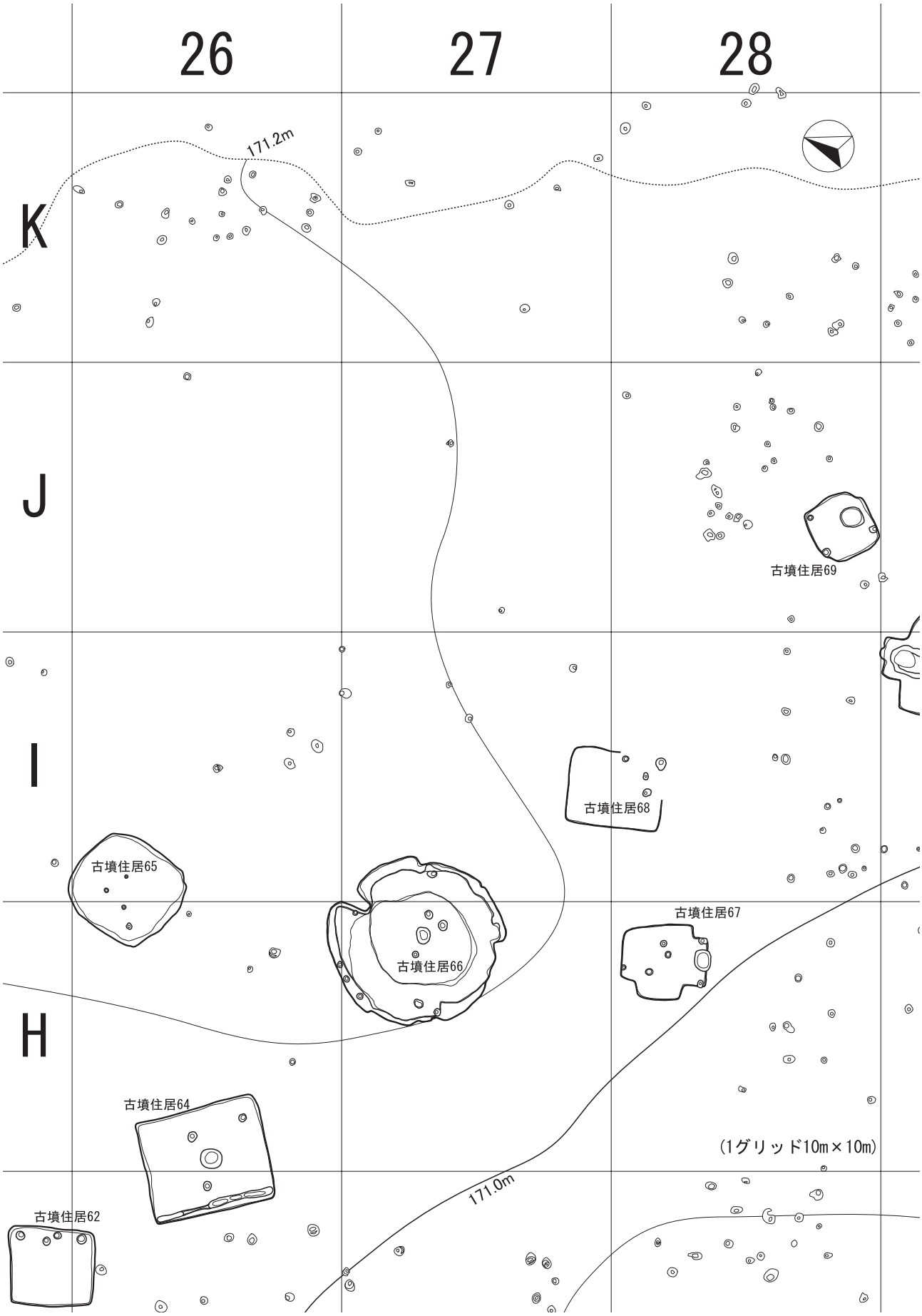
第170図　遺構配置図⑪



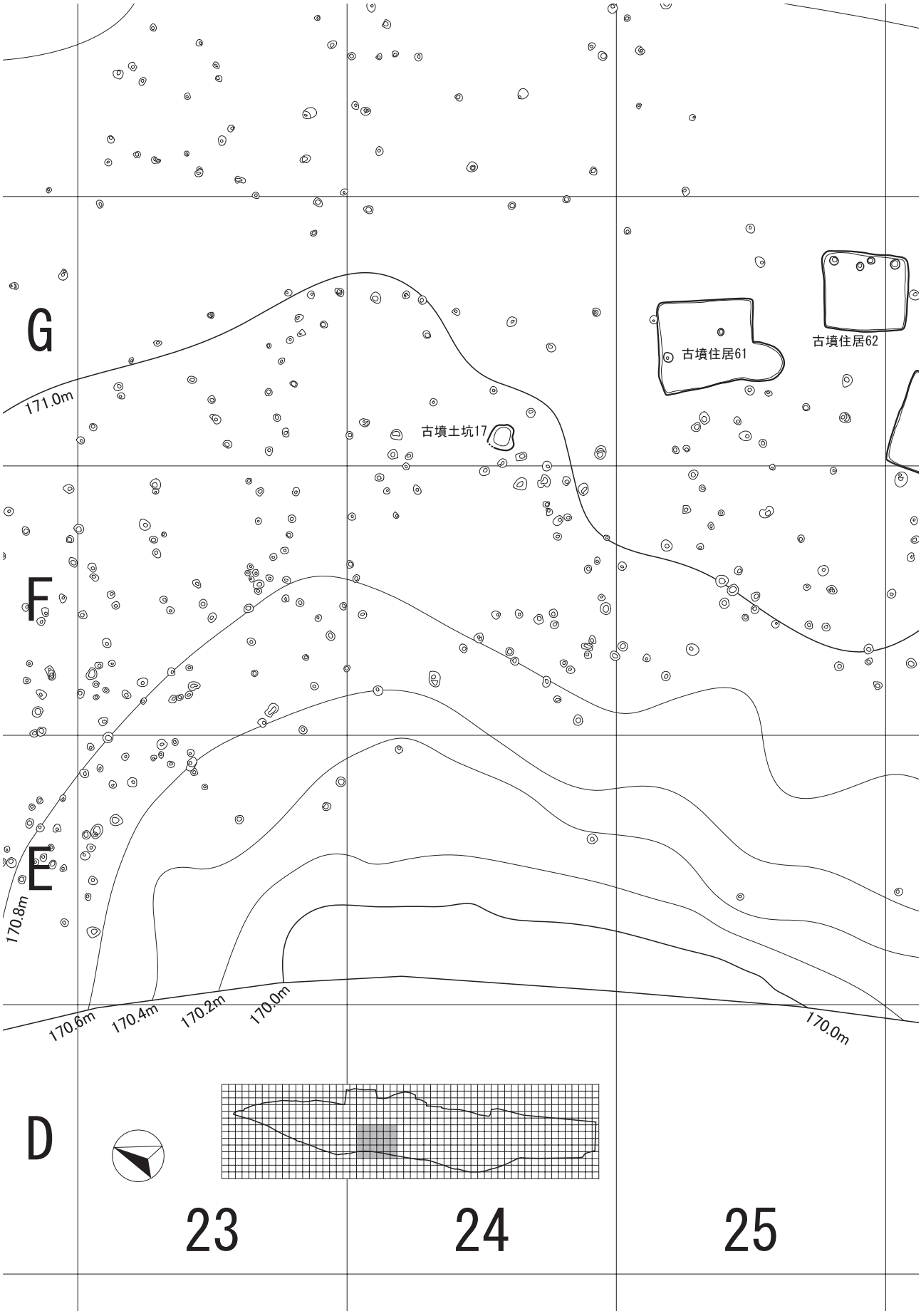
第171図　遺構配置図⑫



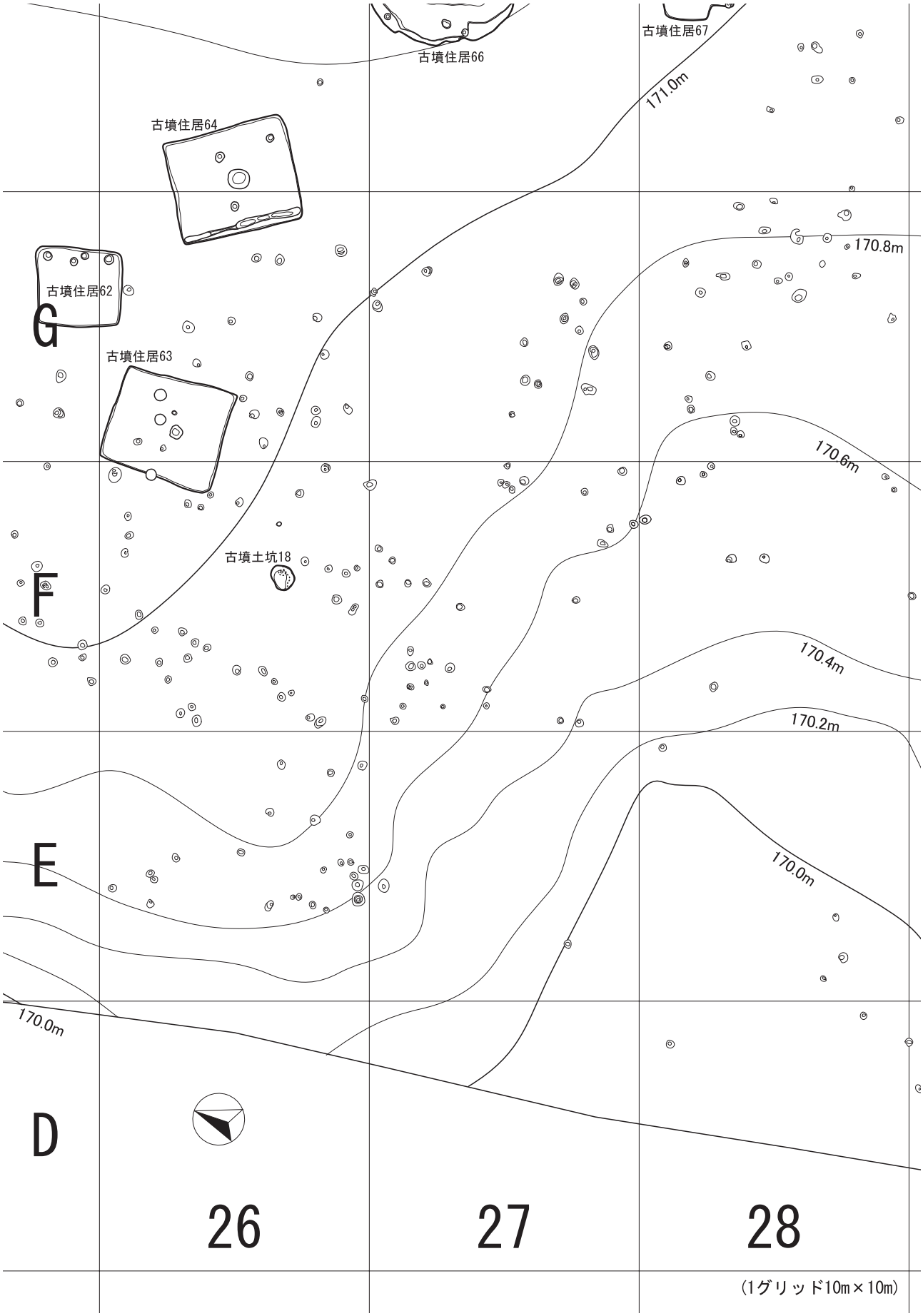
第172図　遺構配置図⑬



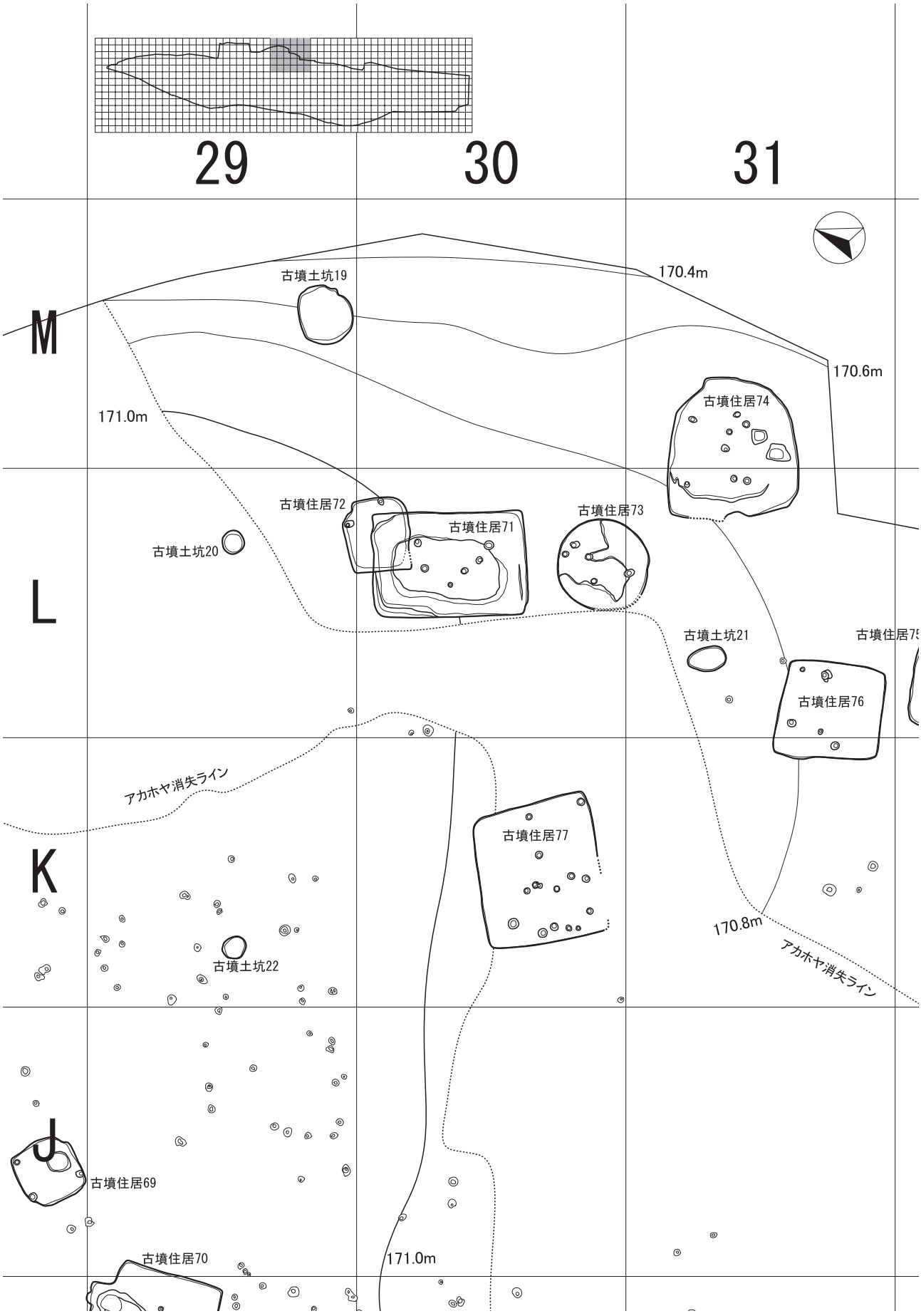
第173図　遺構配置図⑭



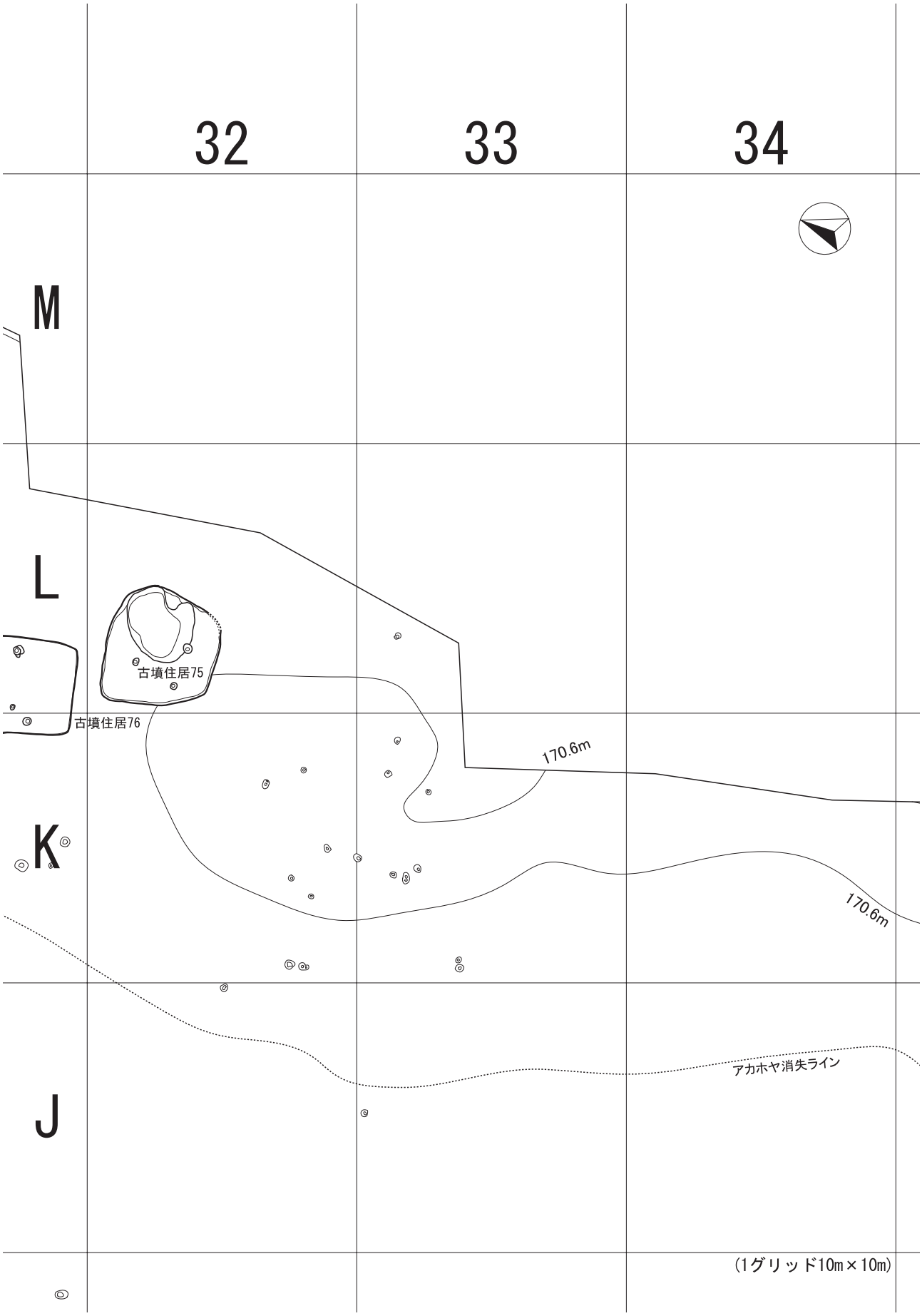
第174図　遺構配置図⑮



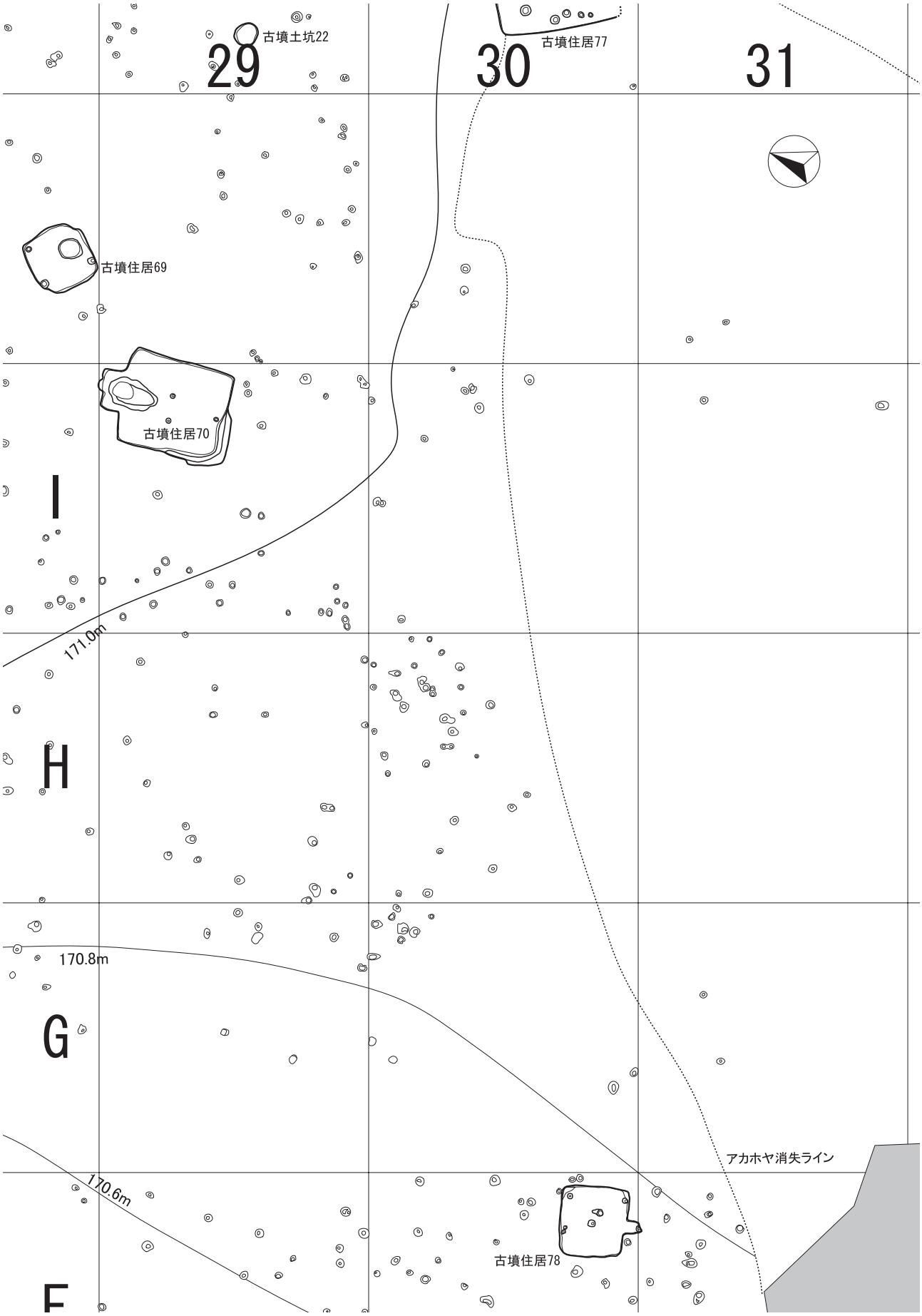
第175図　遺構配置図⑯



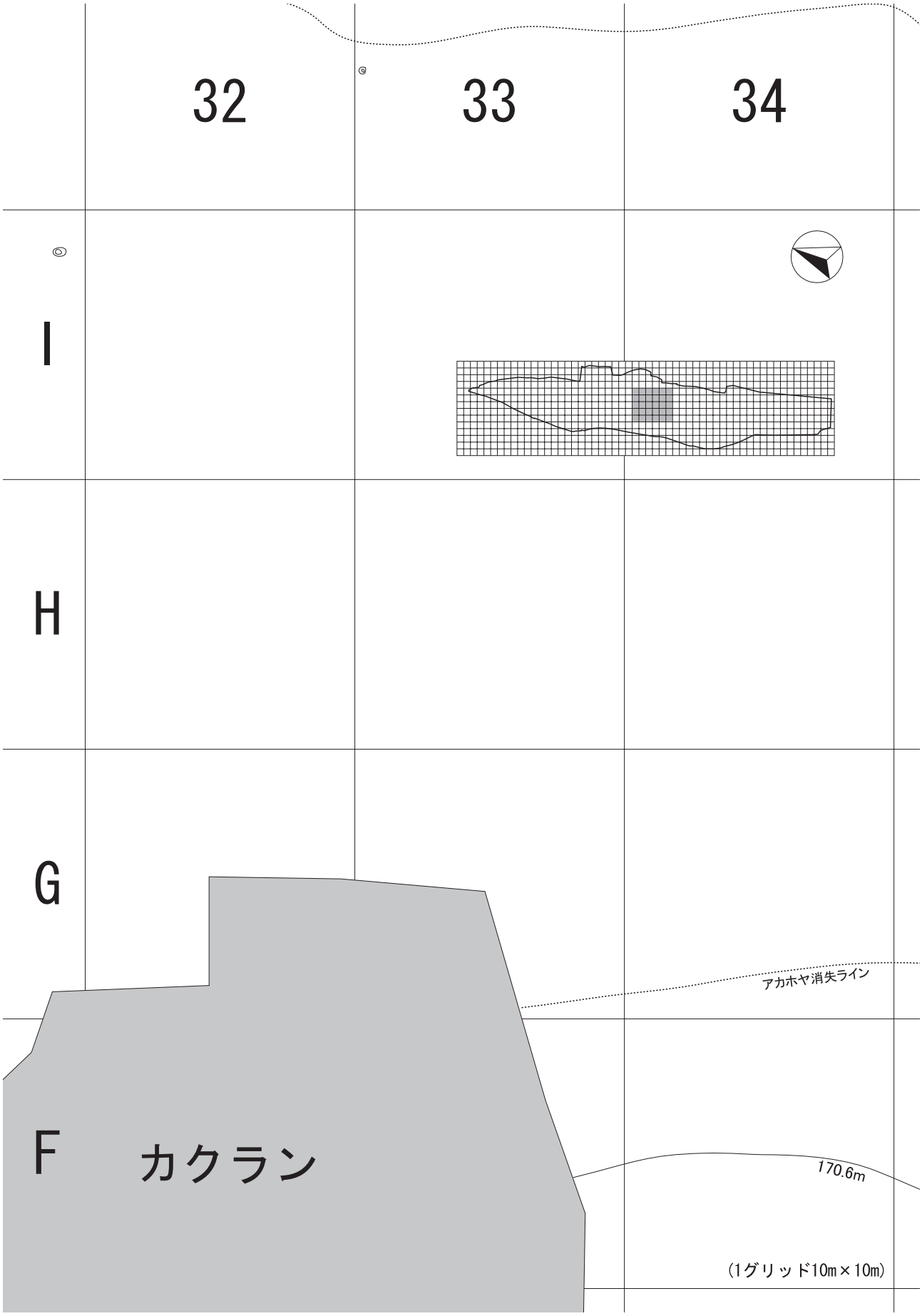
第176図　遺構配置図⑰



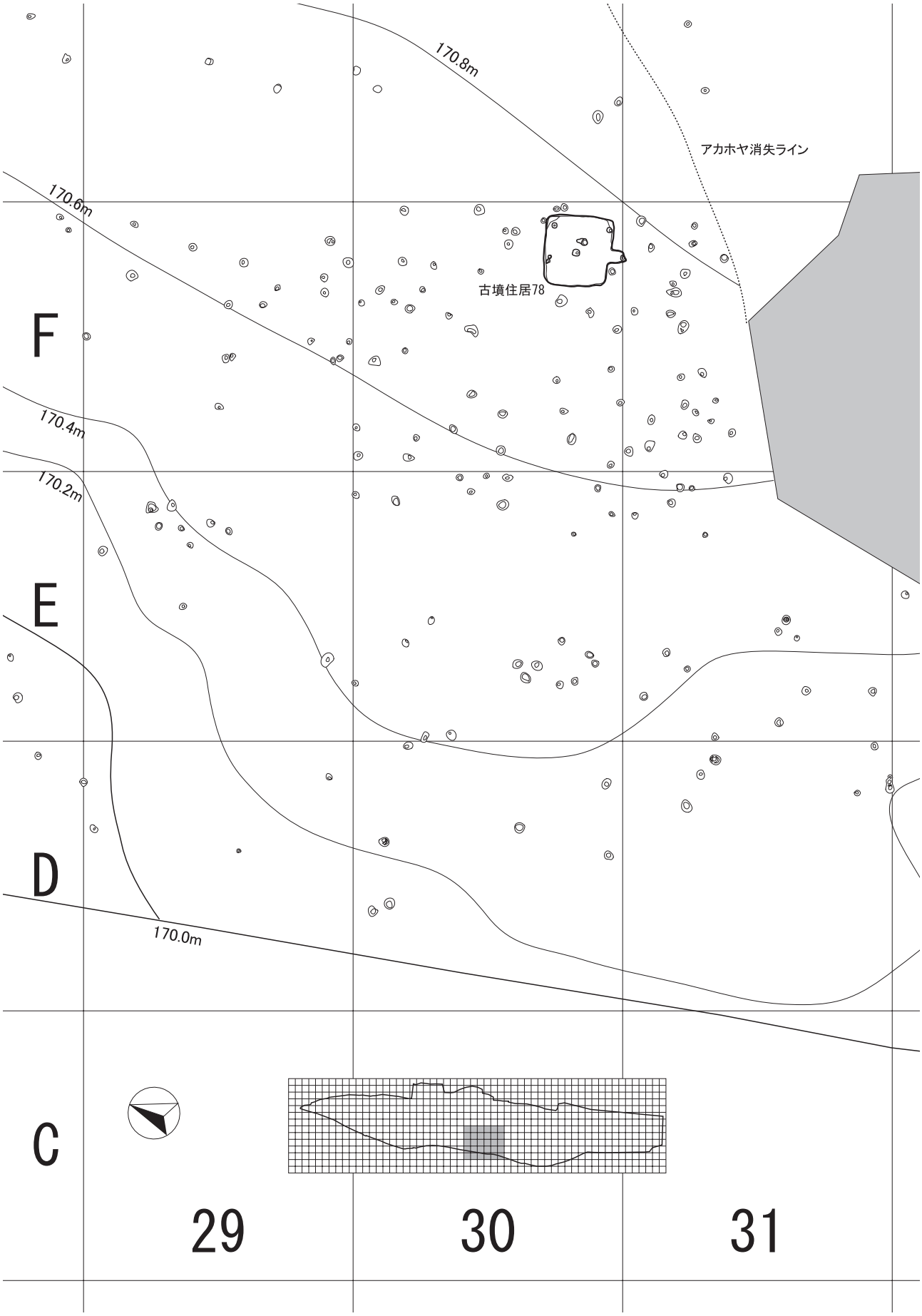
第177図　遺構配置図⑱



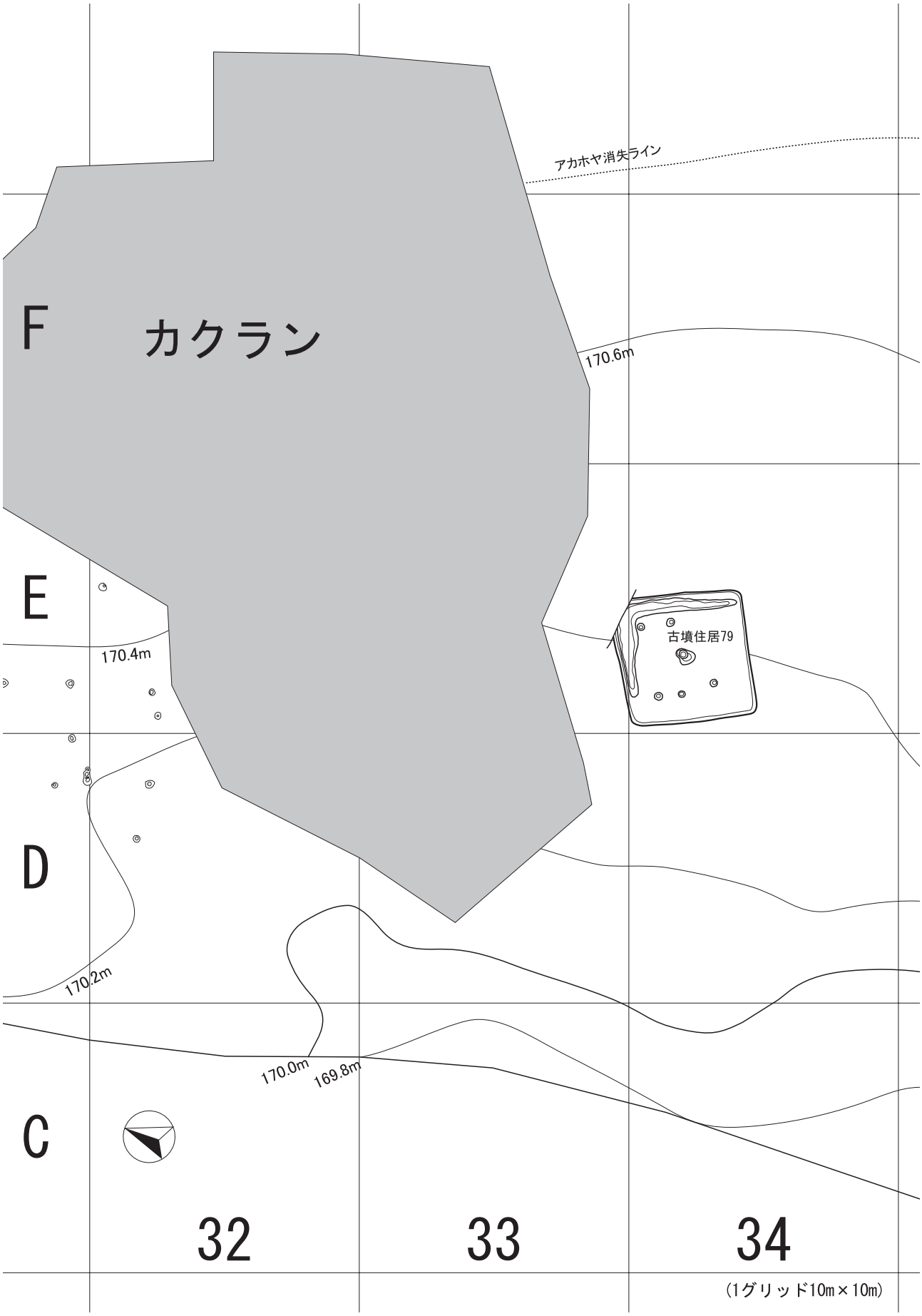
第178図　遺構配置図⑲



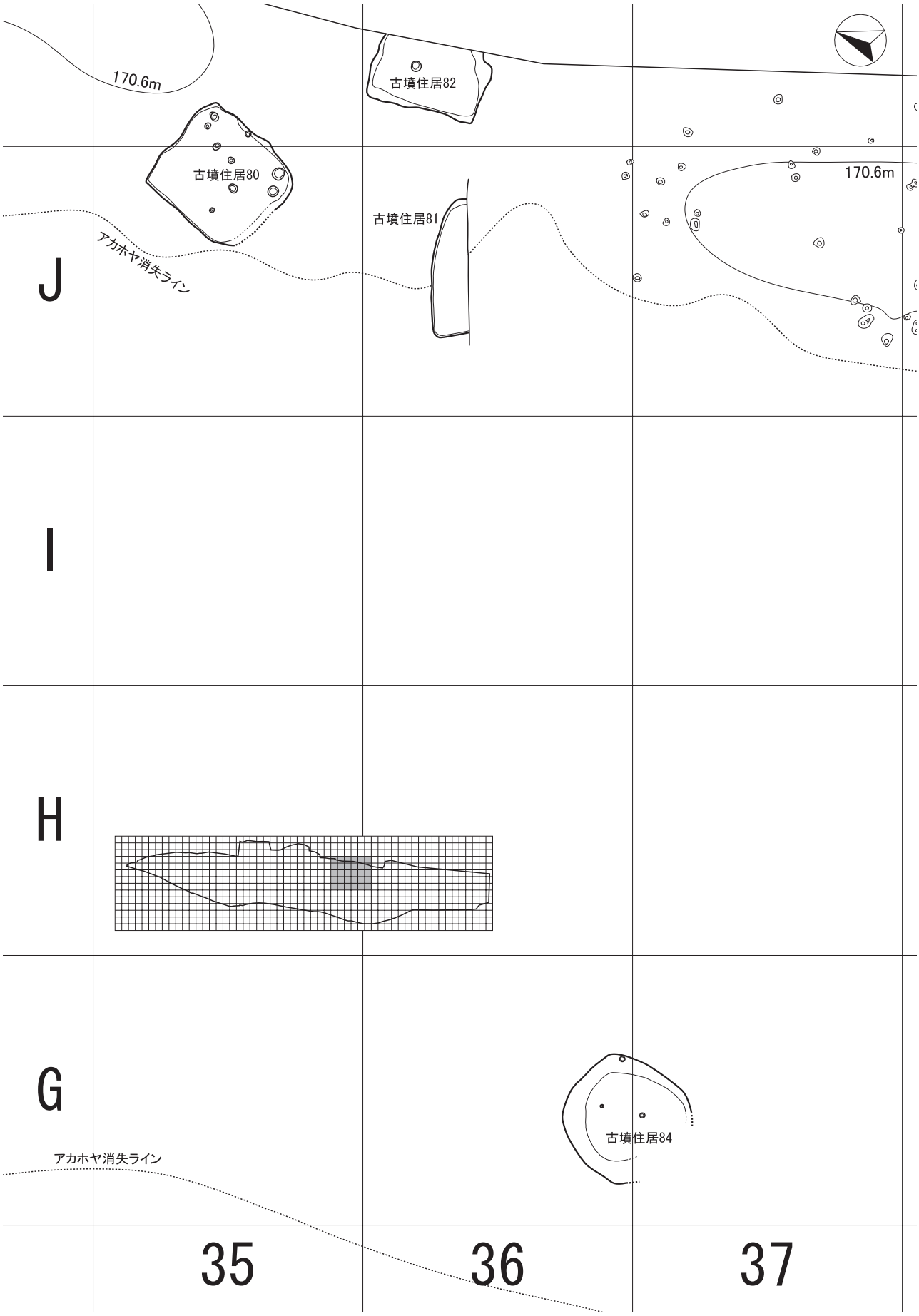
第179図　遺構配置図⑳



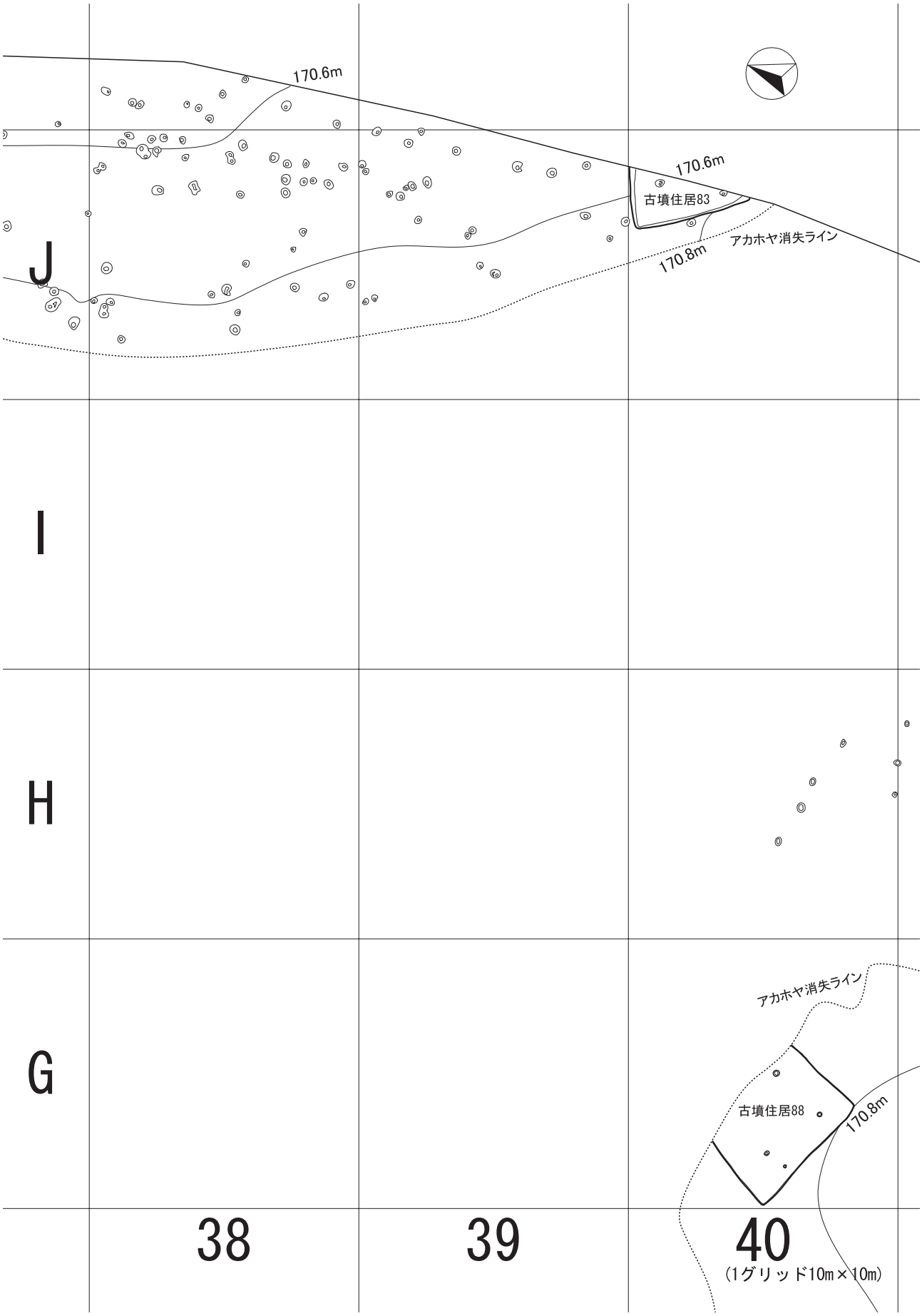
第180図　遺構配置図㉑



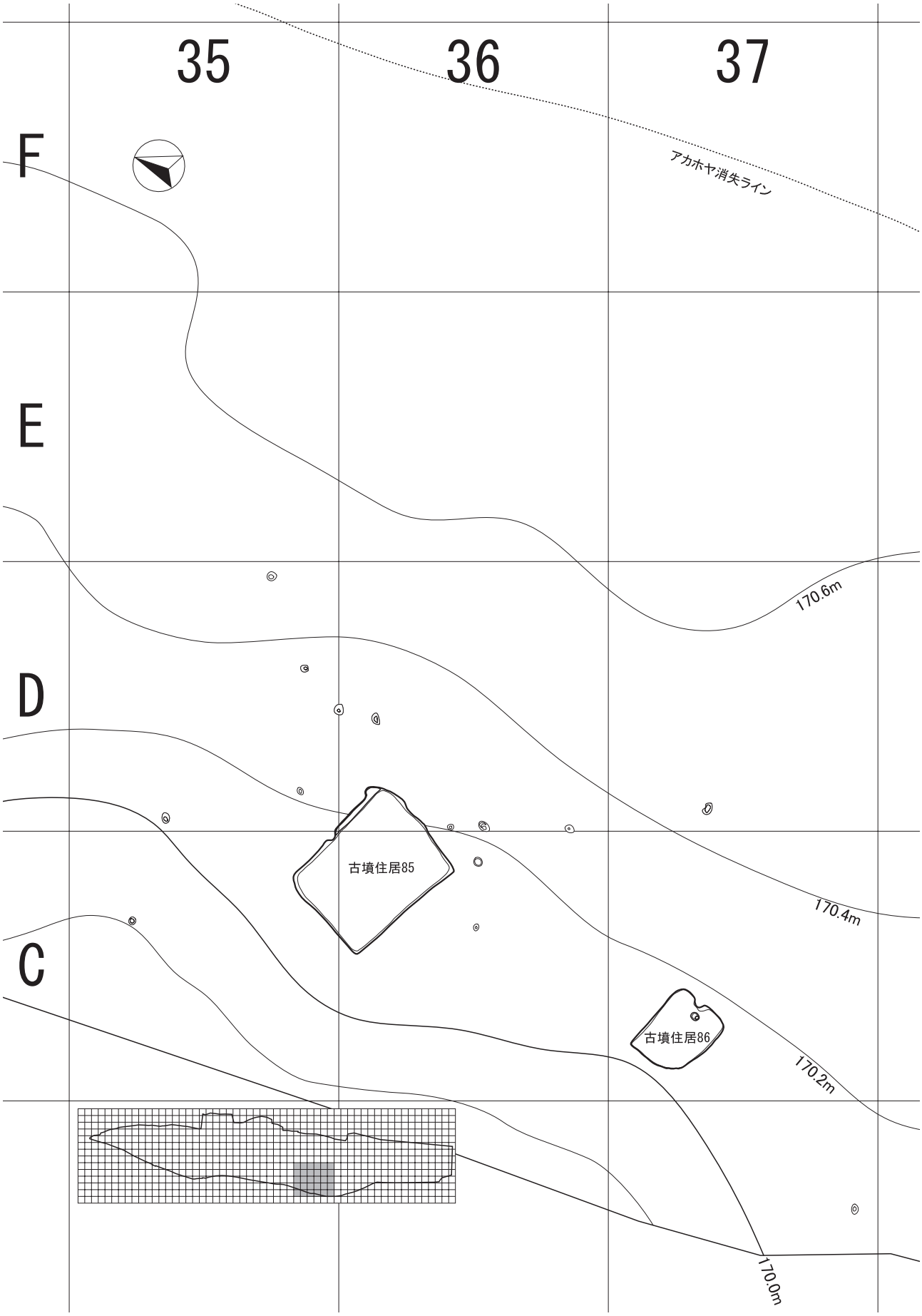
第181図　遺構配置図㉒



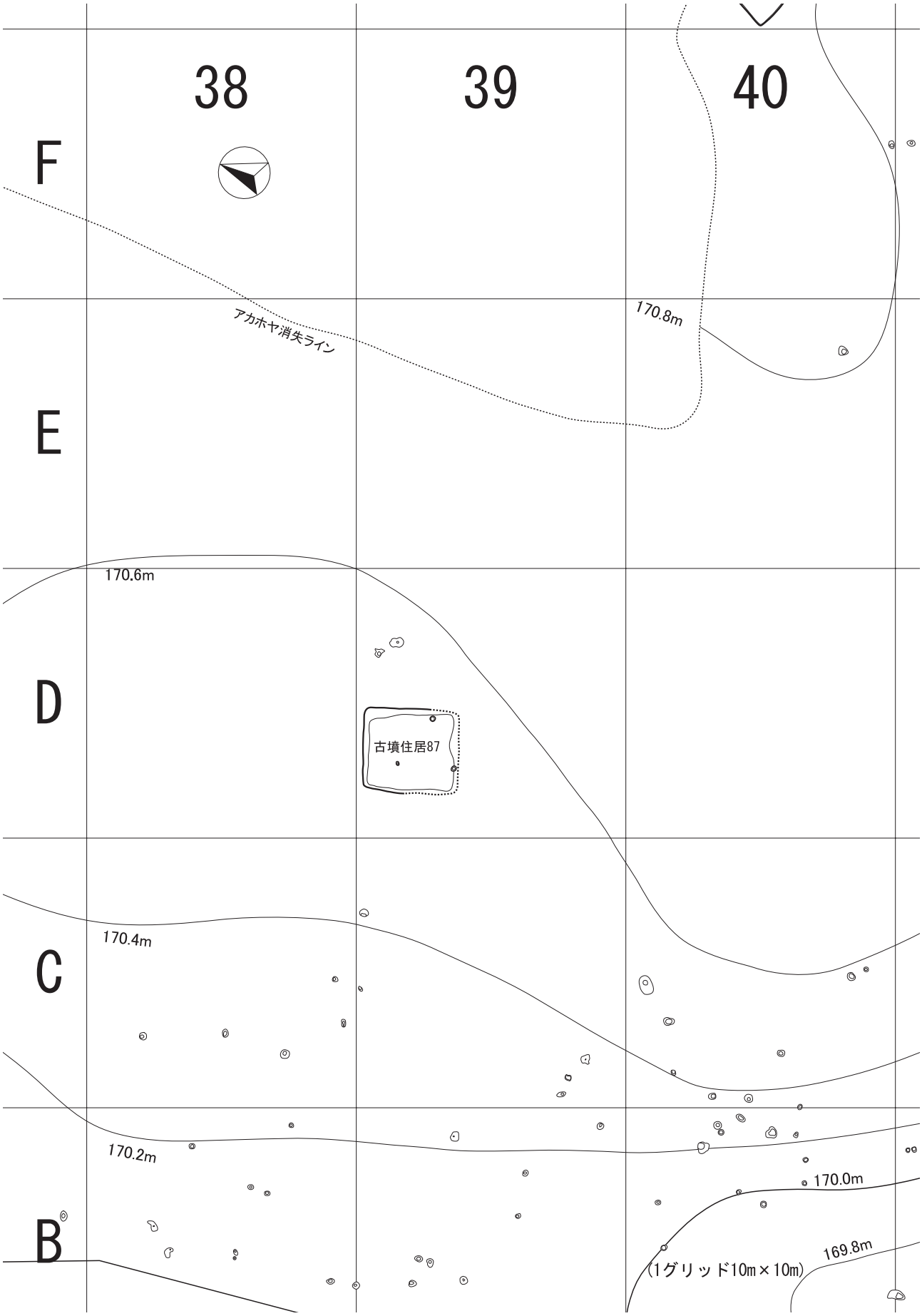
第182図　遺構配置図㉓



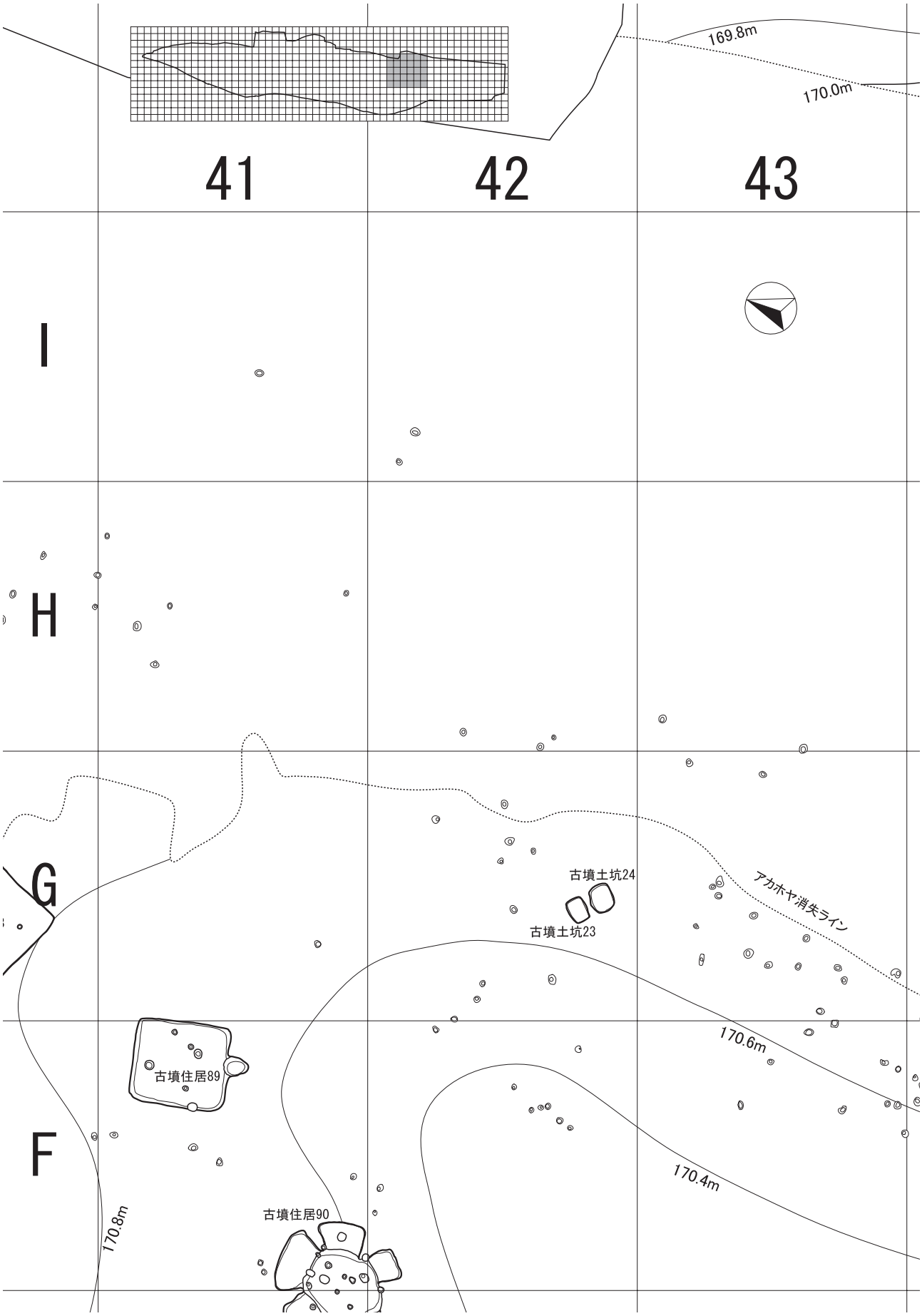
第183図　遺構配置図㉔



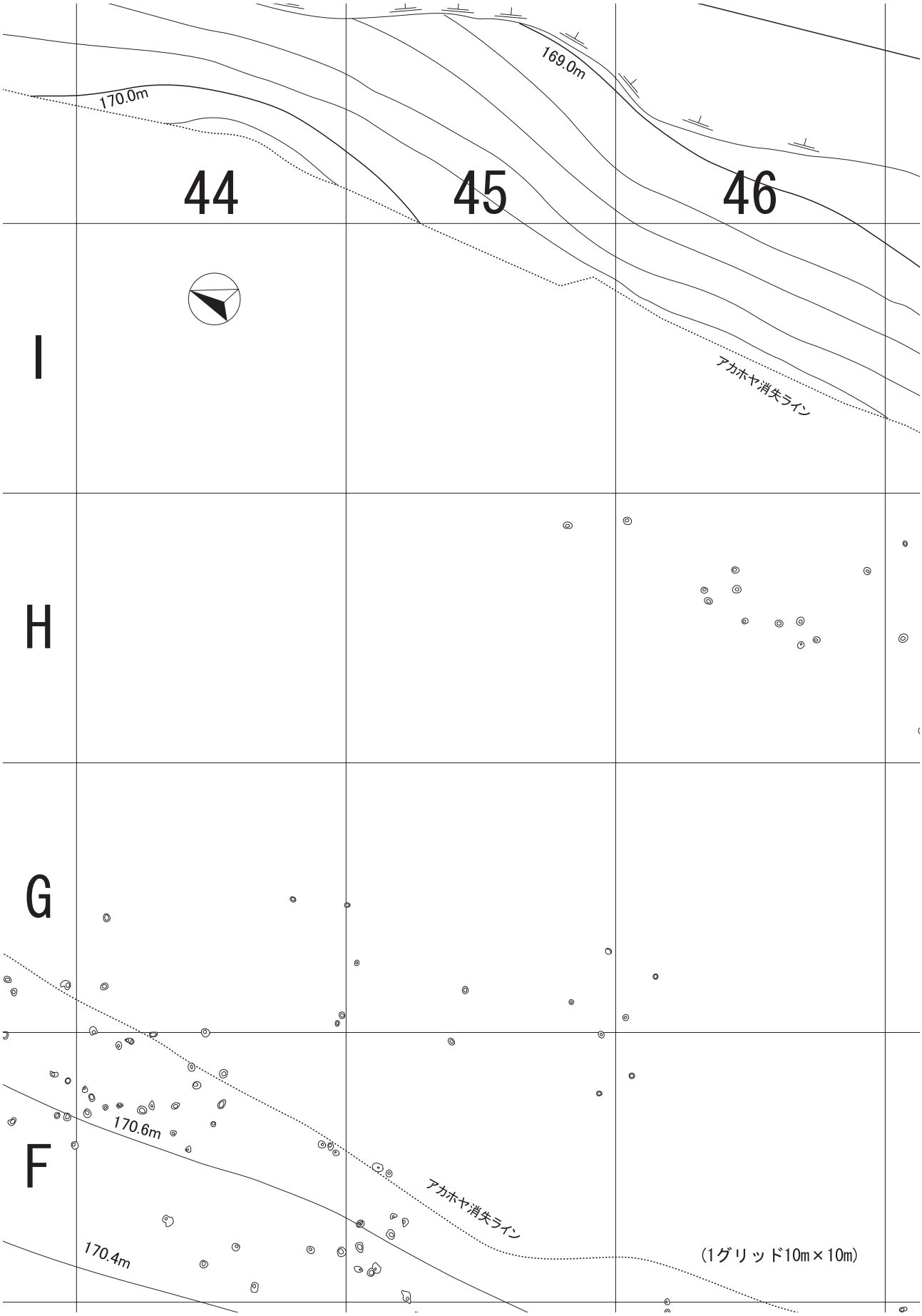
第184図　遺構配置図㉕



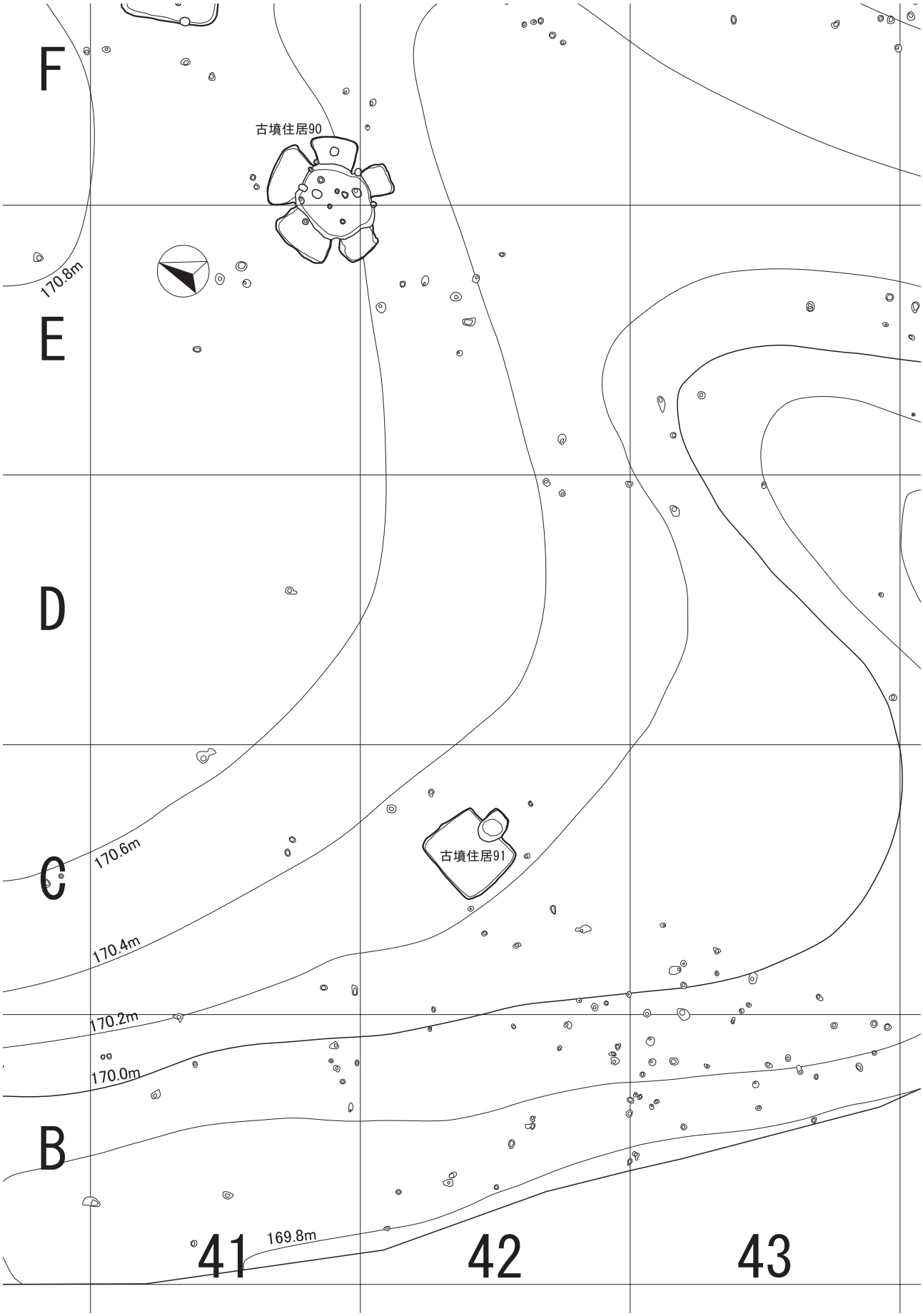
第185図　遺構配置図㉖



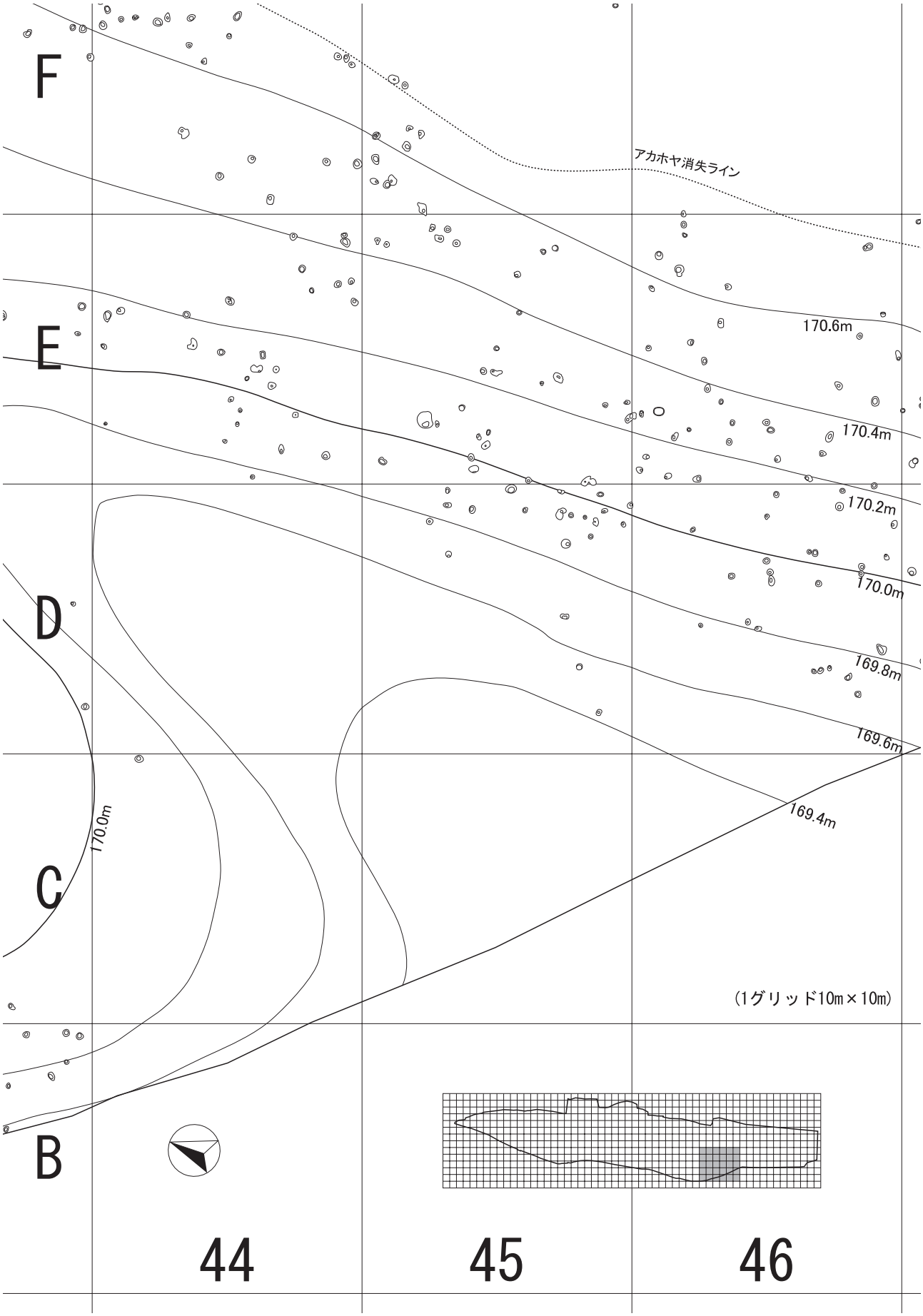
第186図　遺構配置図㉗



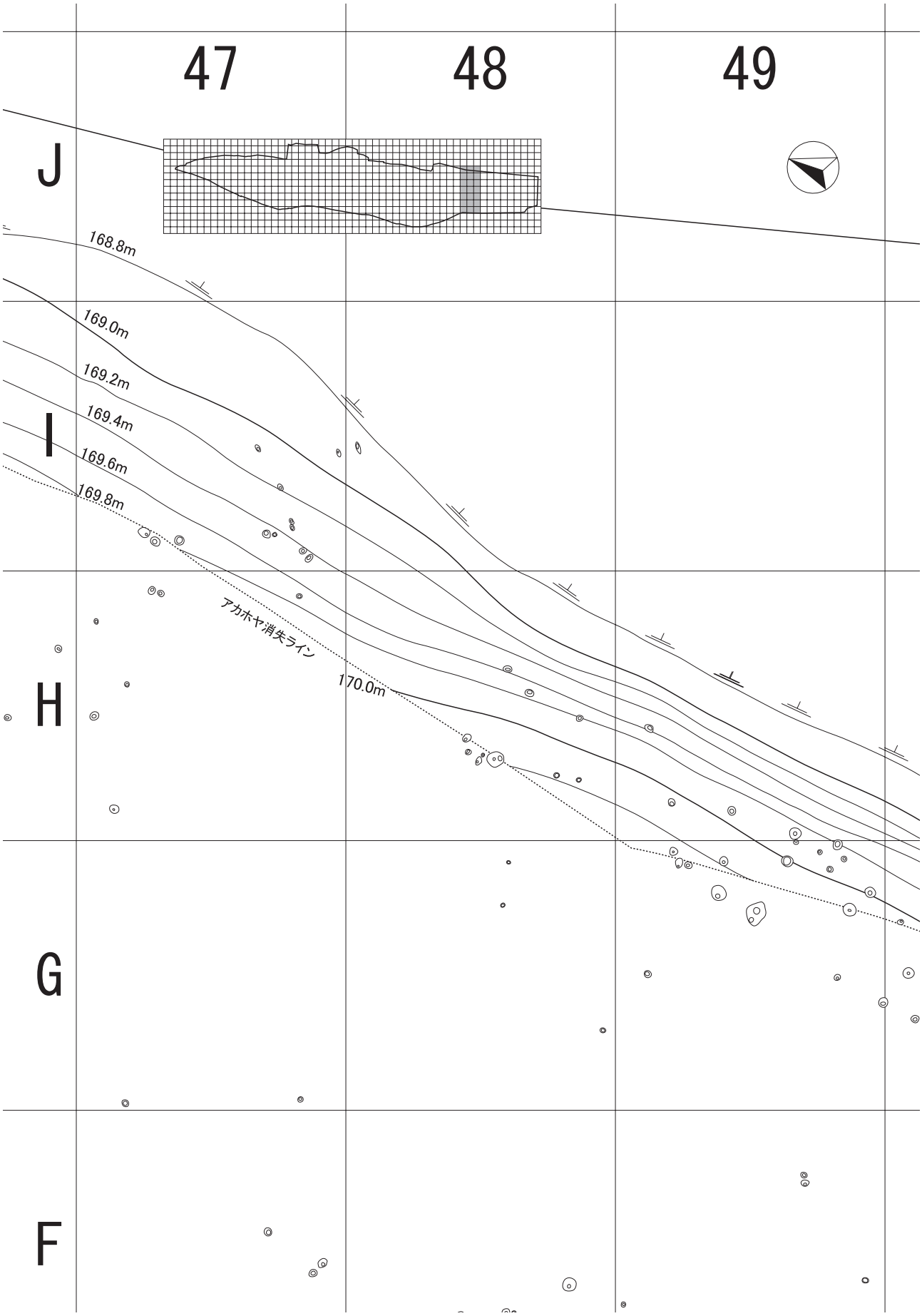
第187図　遺構配置図㉘



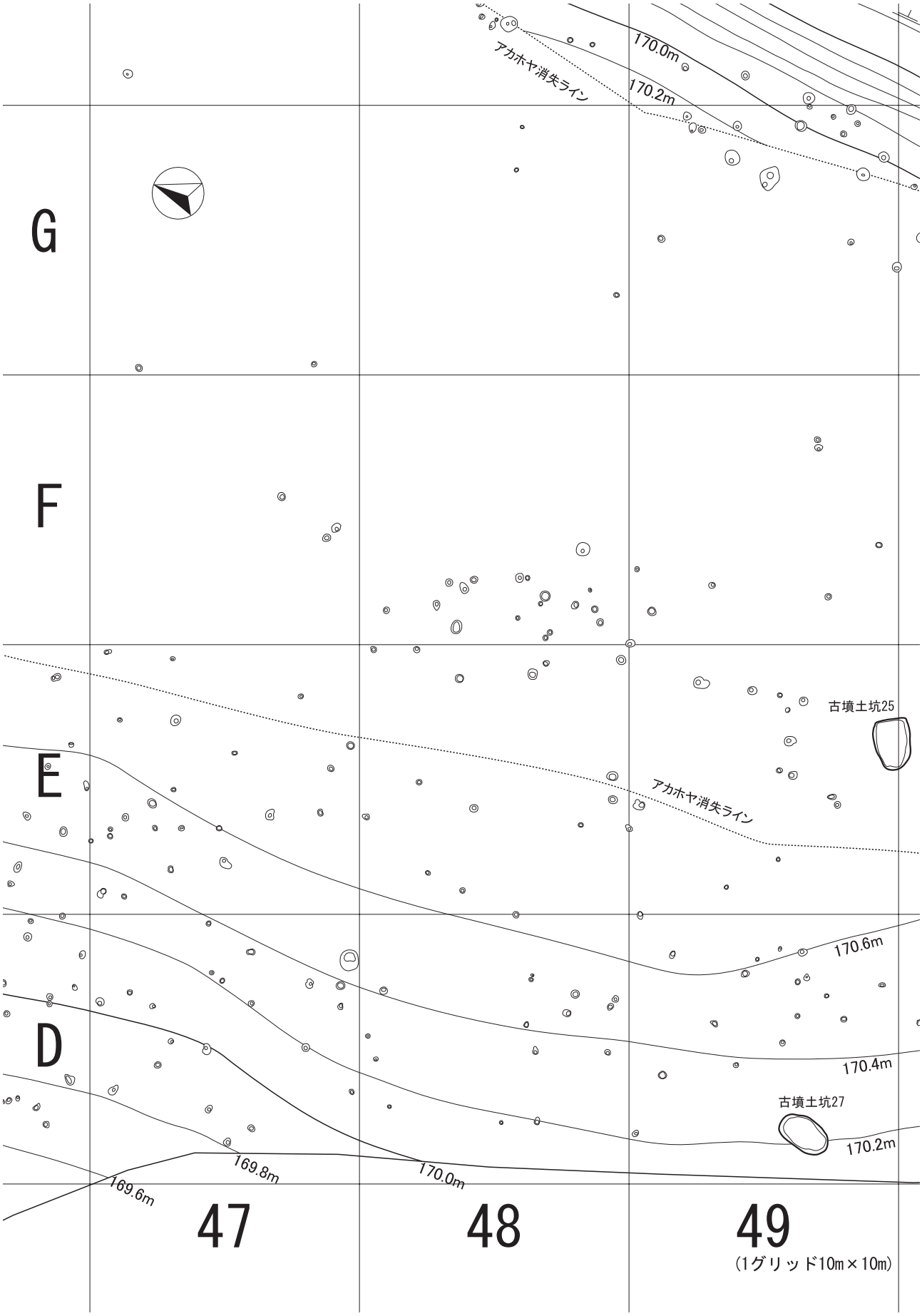
第188図　遺構配置図㉙



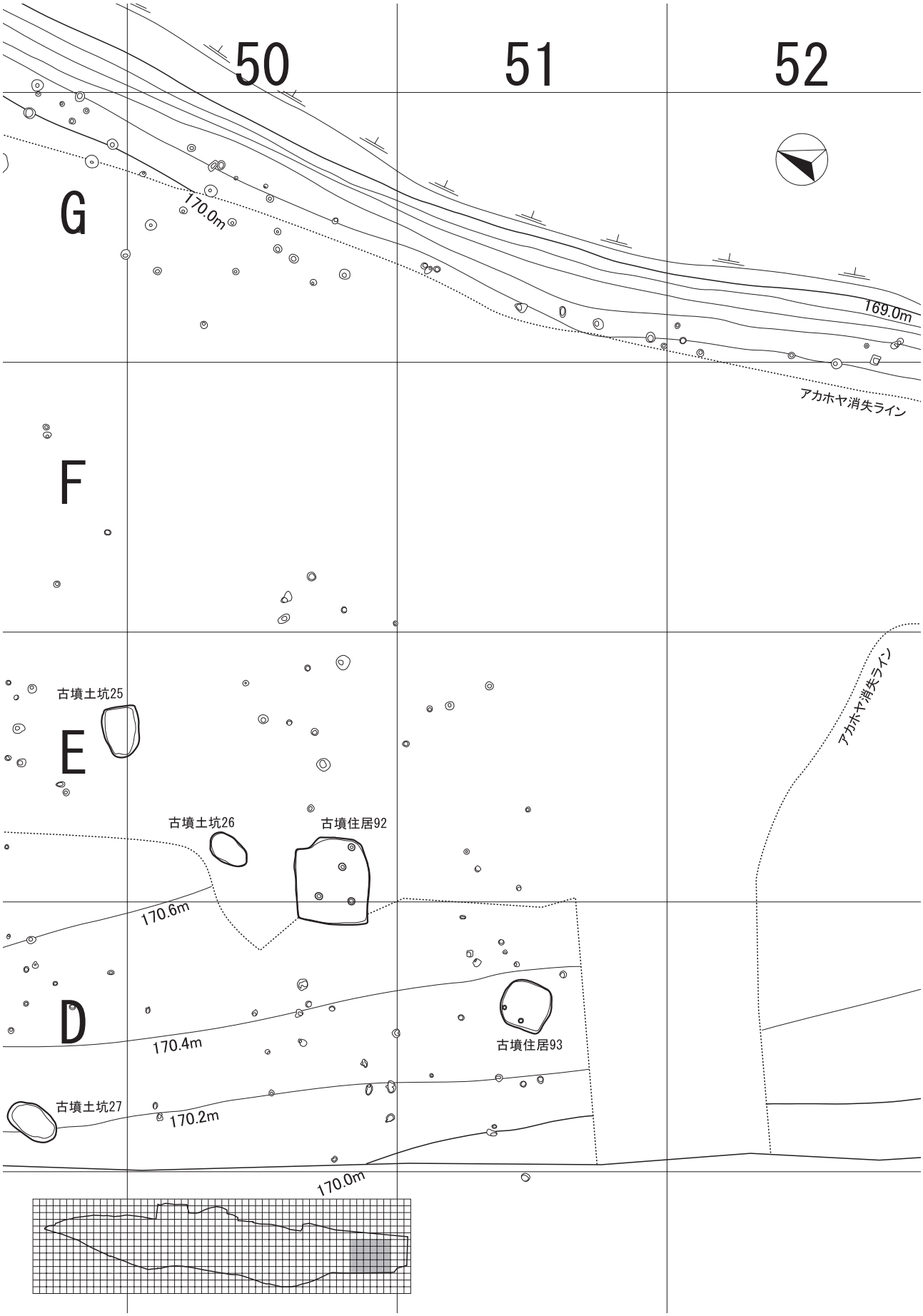
第189図　遺構配置図㉚



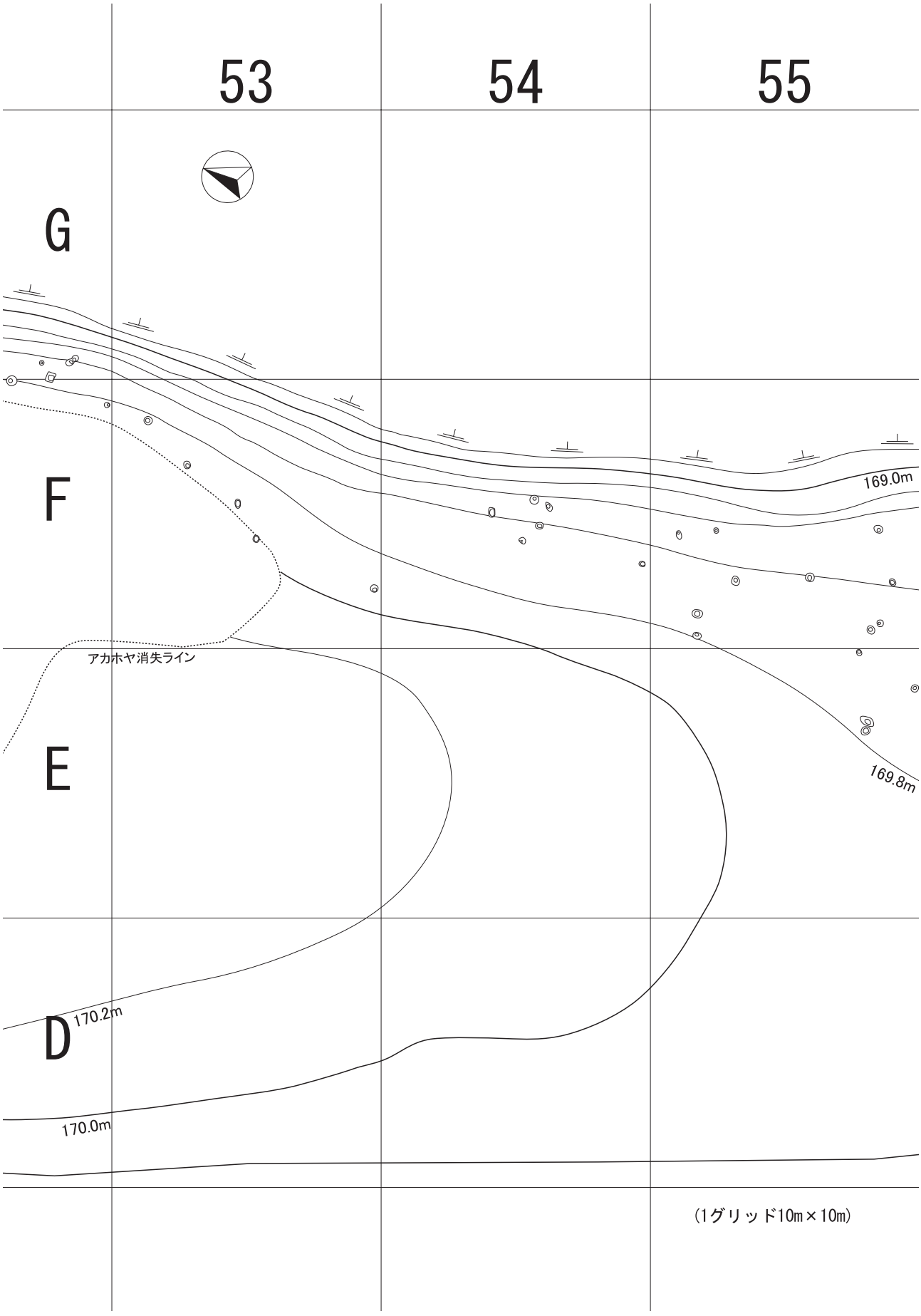
第190図　遺構配置図㉛



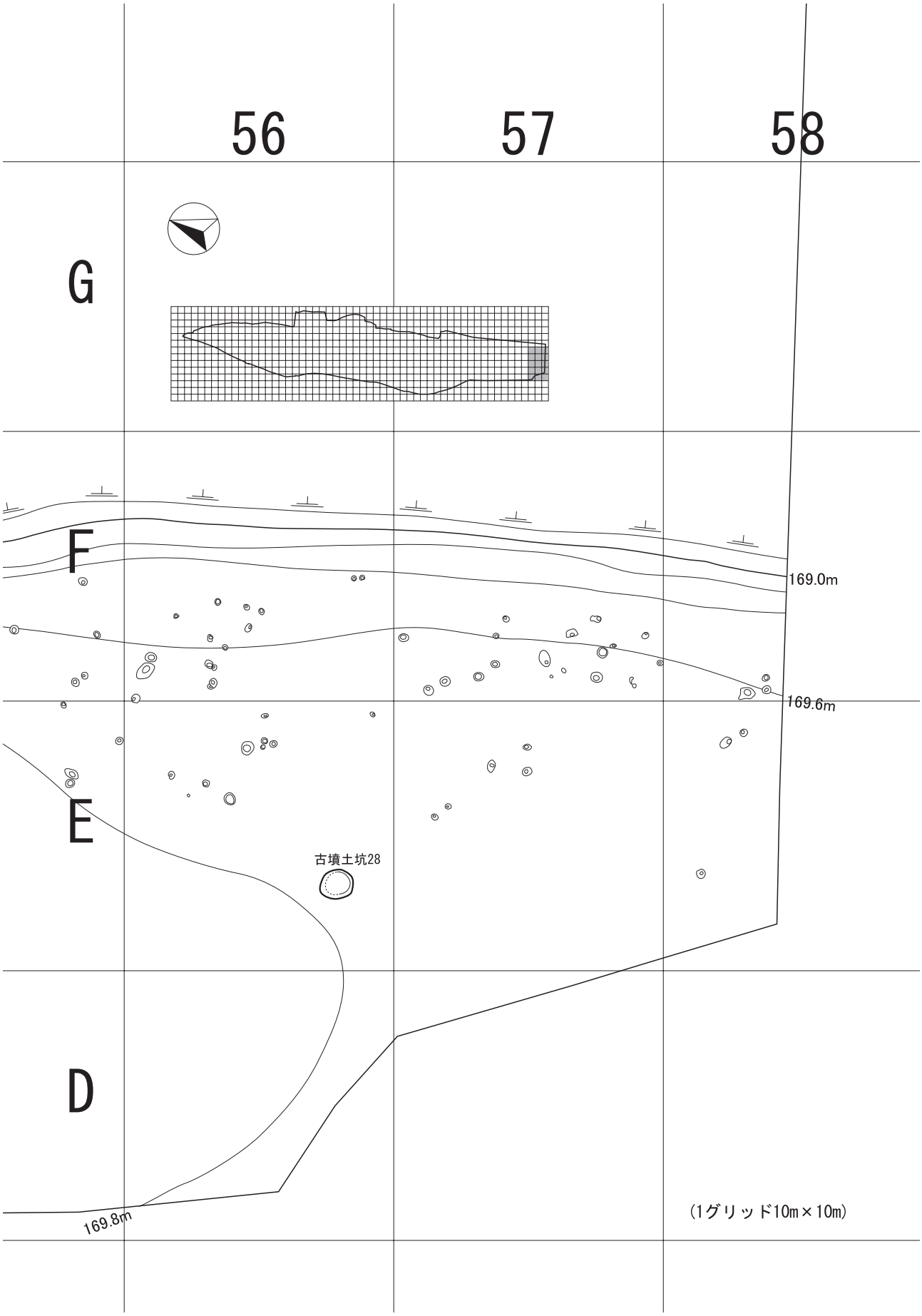
第191図　遺構配置図㉜



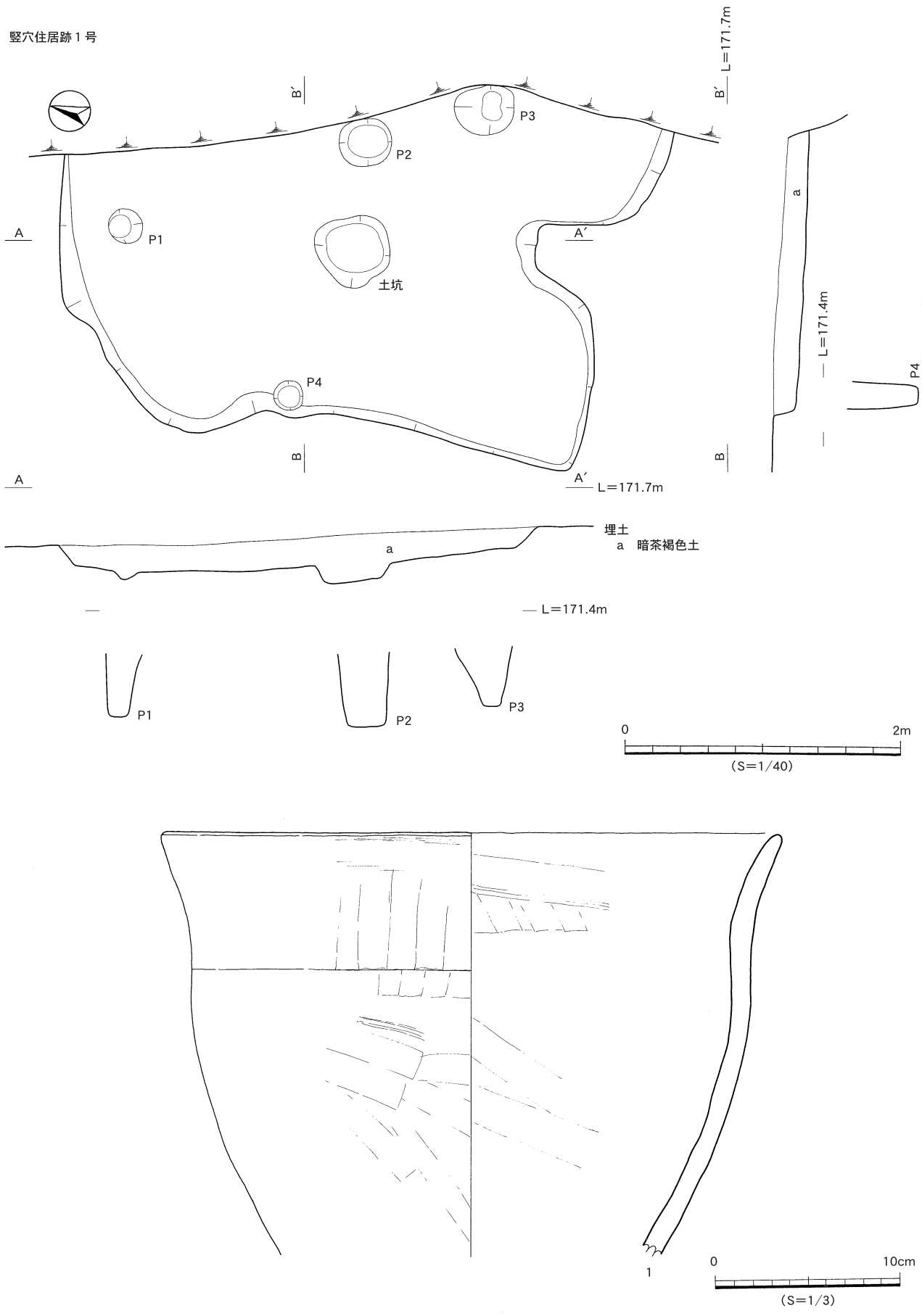
第192図　遺構配置図㉝



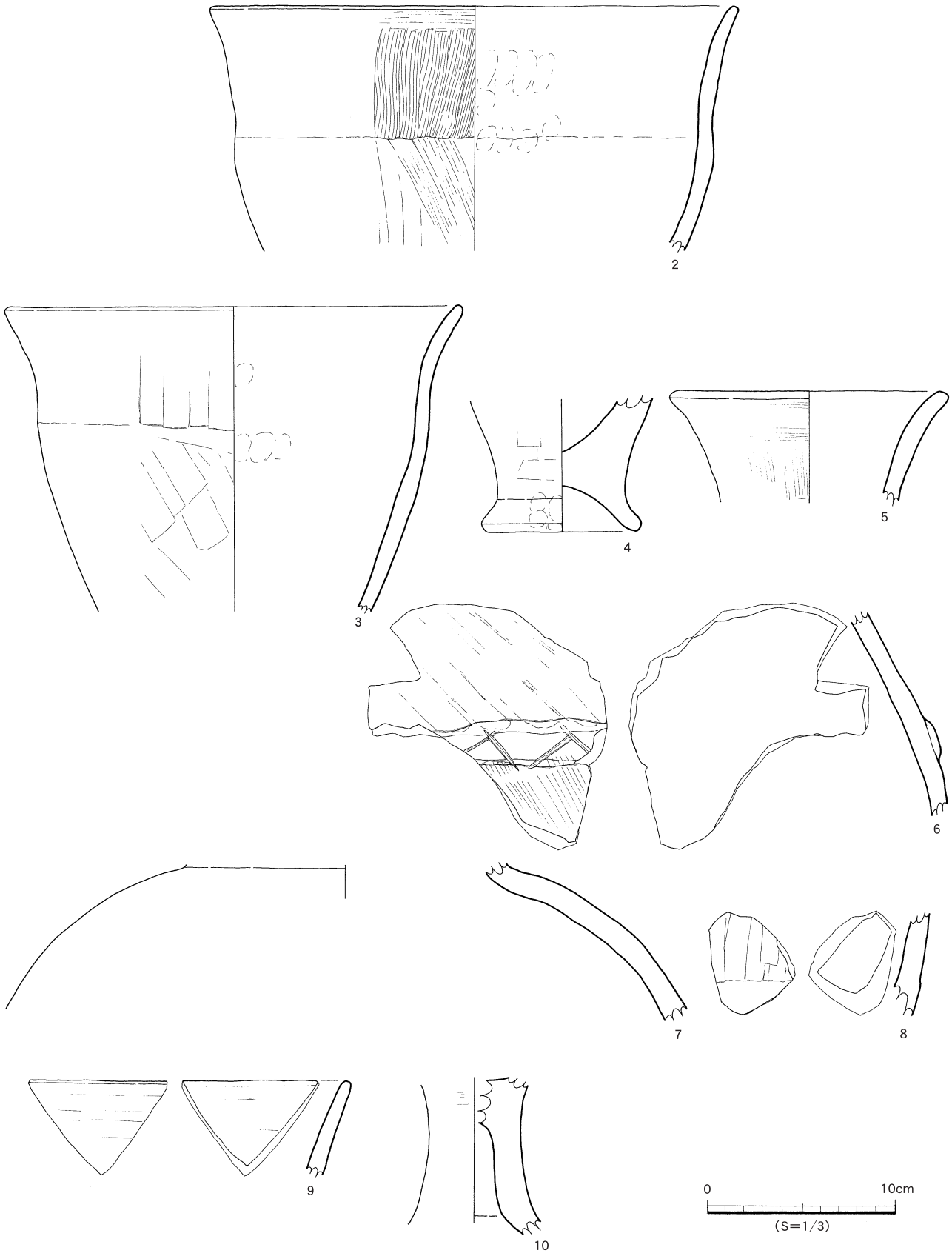
第193図　遺構配置図㉞



第194図　遺構配置図㉟



第195図　竪穴住居跡１号・出土遺物①



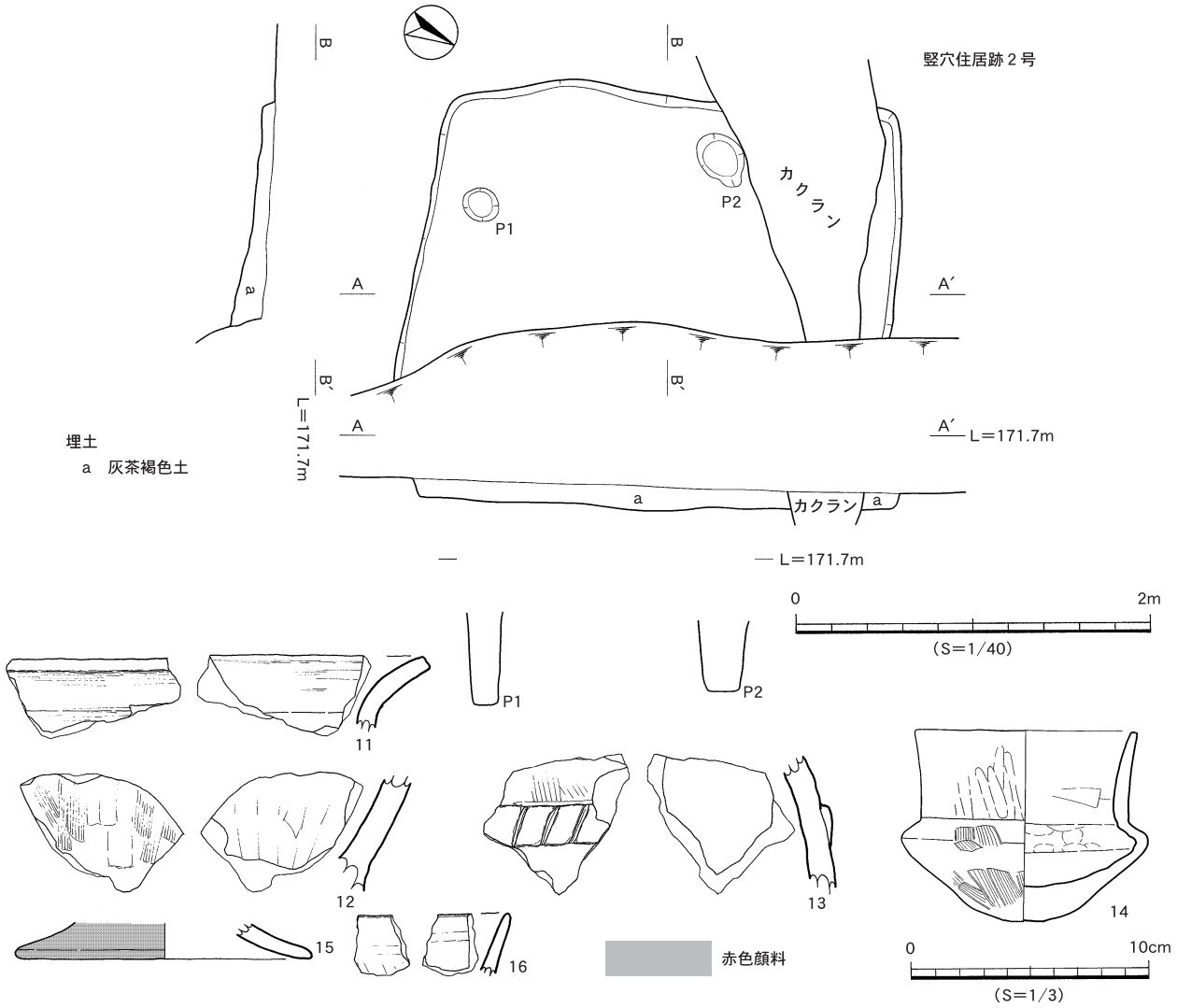
第196図　竪穴住居跡１号出土遺物②

竪穴住居跡２号（第197図）

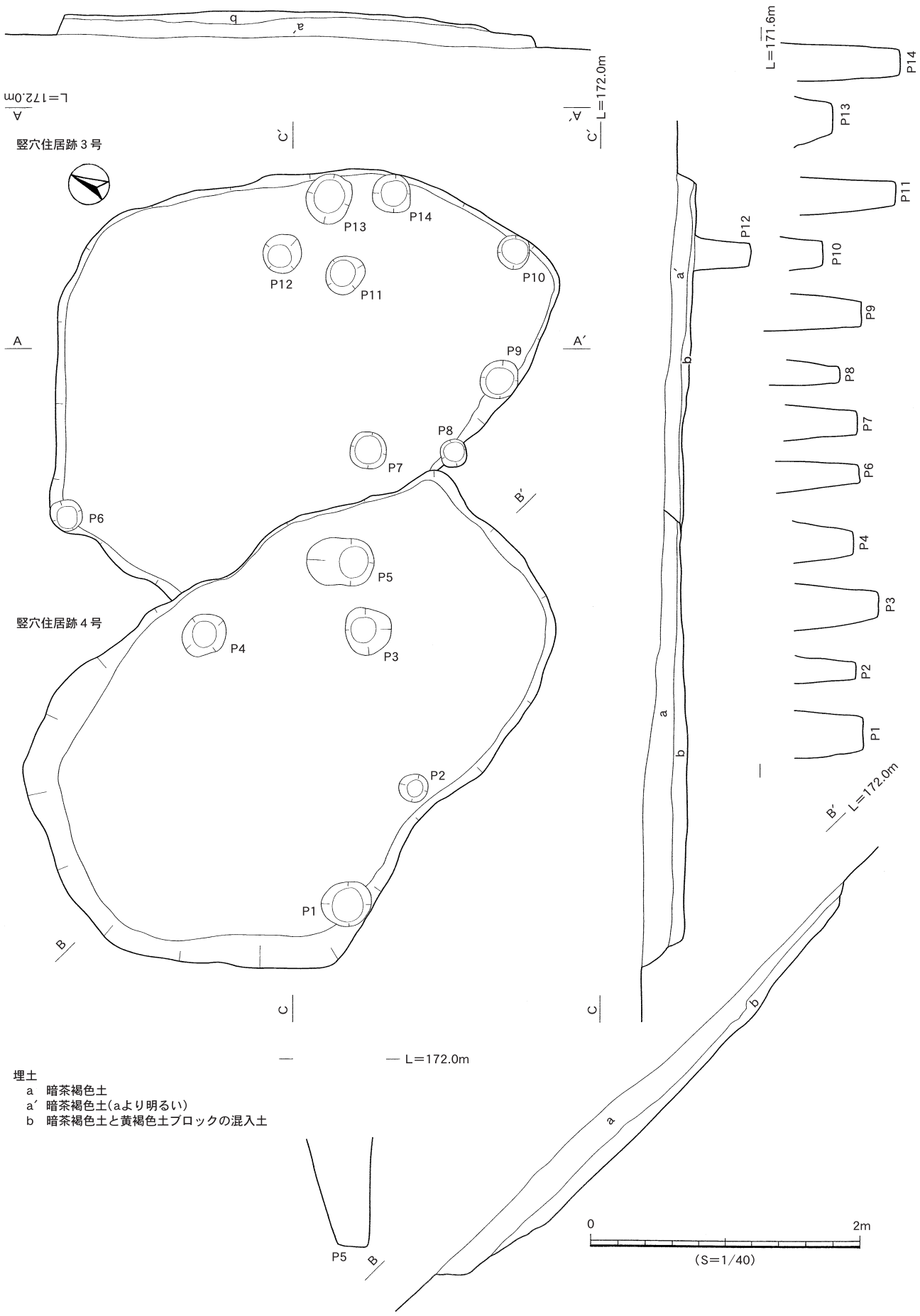
Ｋ－６区においてⅧ層上面で検出された。東側は，羽月川方向へ落ち込んでおり，住居跡の半分以上が消失していた。また，排水管の埋設により北側に攪乱を受ける。検出時のプランは，長辺2.8m，短辺1.3mで，残存している南北軸から本来の平面形状を想定すると，１辺が2.8mの隅丸長方形ないしは隅丸方形のプランが予想される。調査は，残存する部分の中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層であり，床面は東側の落ち込みに向かうように連動して緩やかに傾斜している。柱穴などの付帯施設は，ベルトを除去した後に，床面を精査した段階で確認，２基の柱穴が確認された。床面には硬化面は見られない。炉・焼土や炭化物の広がりも見られなかった。遺物は,総点167点でこの内６点図化した。11・12は甕の破片である。11は口縁部が外反し，口唇部は比較的平坦面を有する。13は，壺の胴部突帯片である。14は坩で，直線的な口縁部から胴部で強く屈曲し，丸底の底部へ至る器形である。

竪穴住居跡３・４号（第198～20図）

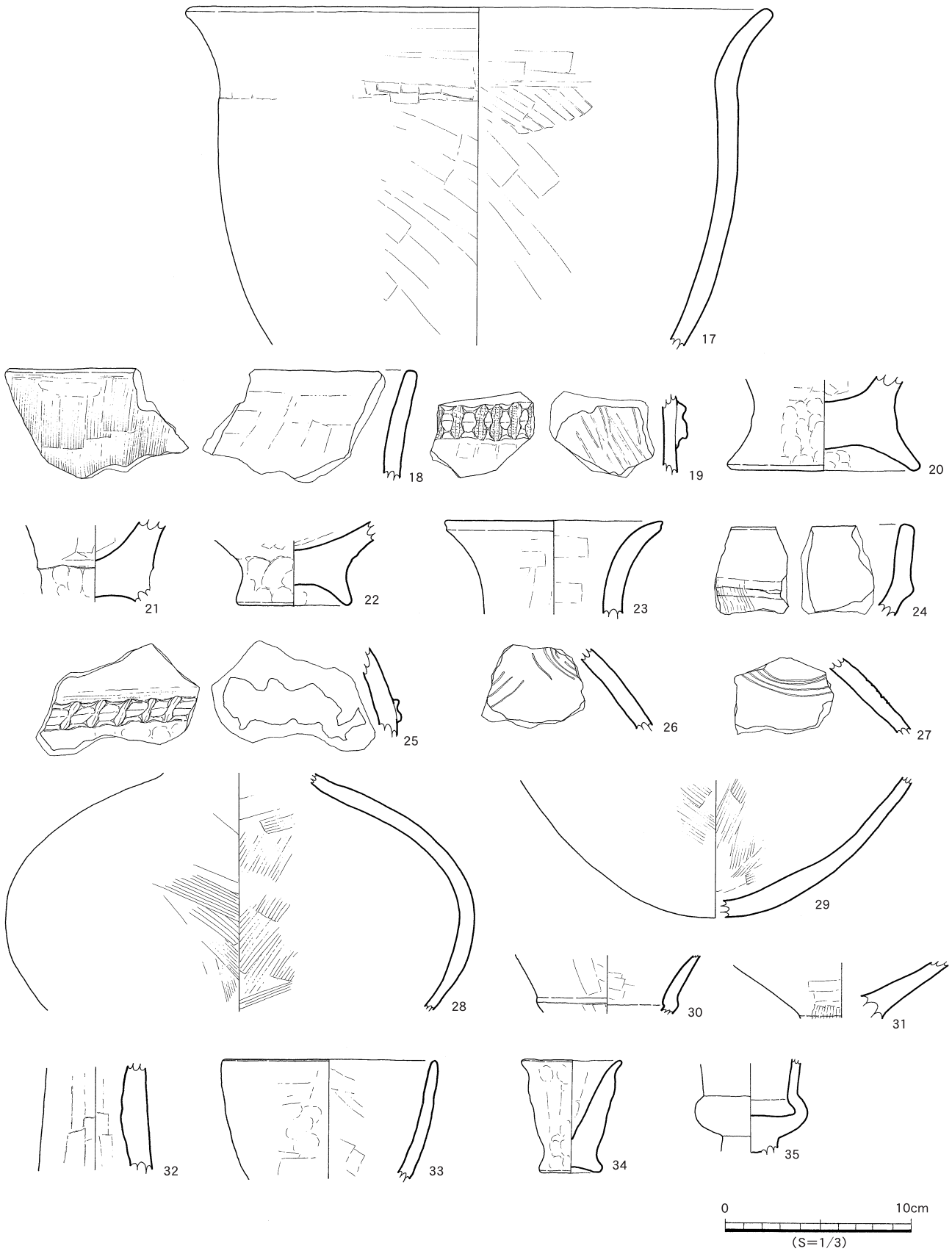
Ｊ・Ｋ－６区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺5.9m，短辺3.8mの不定形で，東側の色調が西側より明るく２軒の切り合い関係が想定された。このため，調査は，切り合いを検討するための長軸ベルトを基準に各々の中央を通るベルトを設定して掘り下げを開始した。最終的なプランは，３号が3.6×３mで，４号が4.2×2.9mであった。床面と思われる埋土の変化は，埋土ｂの上面がやや硬質であり，この埋土ｂが暗茶褐色と黄褐色ブロックの混入土で，他の住居で貼床に使用される土であったことなどからこれを床面と判断した。柱穴などの付帯施設は，埋土ｂを除去した段階で確認された。その結果，柱穴が14基確認された。また，埋土ｂは厚いところで10㎝近く見られ，両住居共にレベルに大差はない。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしない。４号の埋土中出土の炭化物については放射性炭素年代測



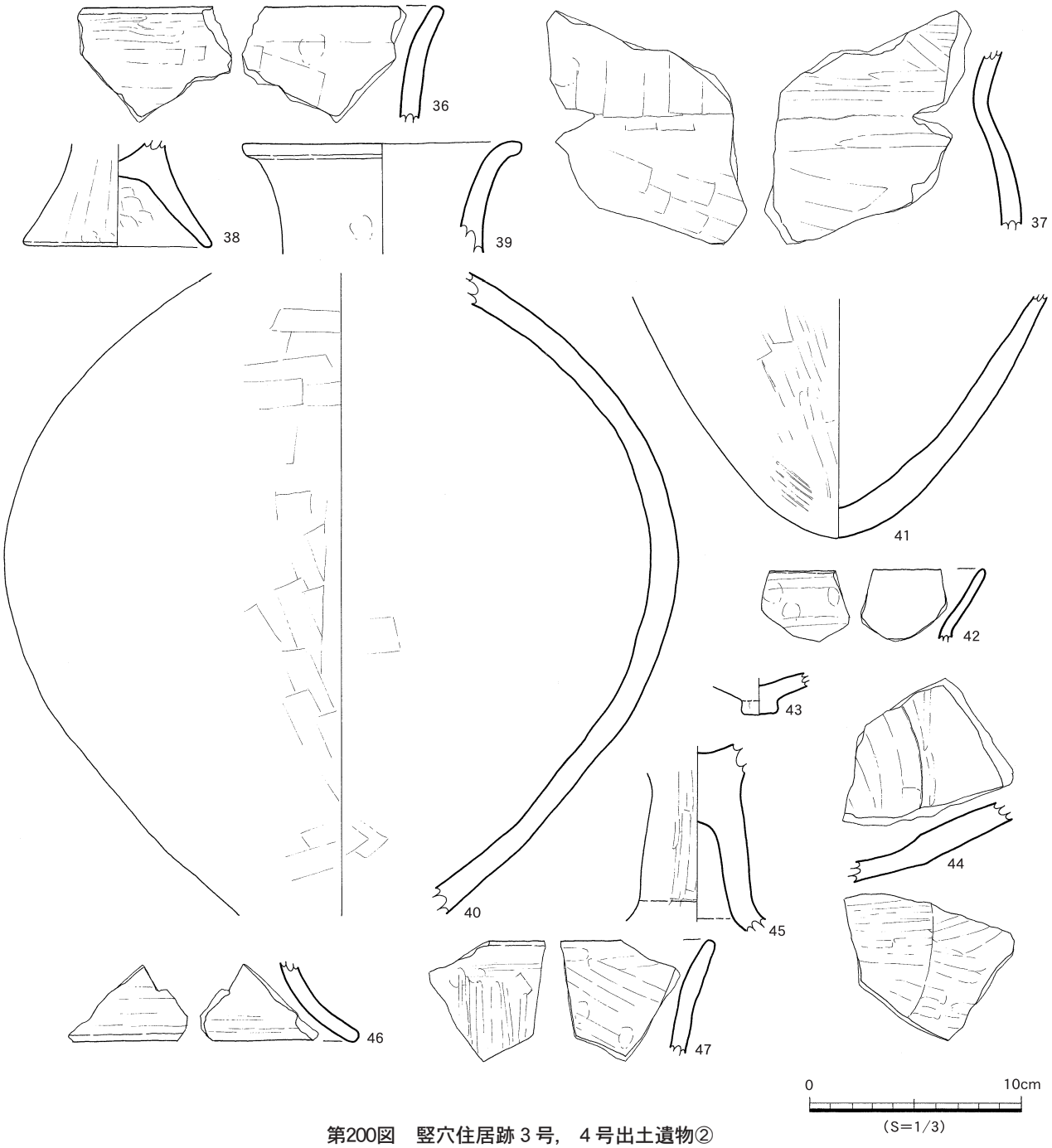
第197図　竪穴住居跡２号・出土遺物



第198図　竪穴住居跡３号，４号



第199図　竪穴住居跡３号，４号出土遺物①



第200図　竪穴住居跡３号，４号出土遺物②

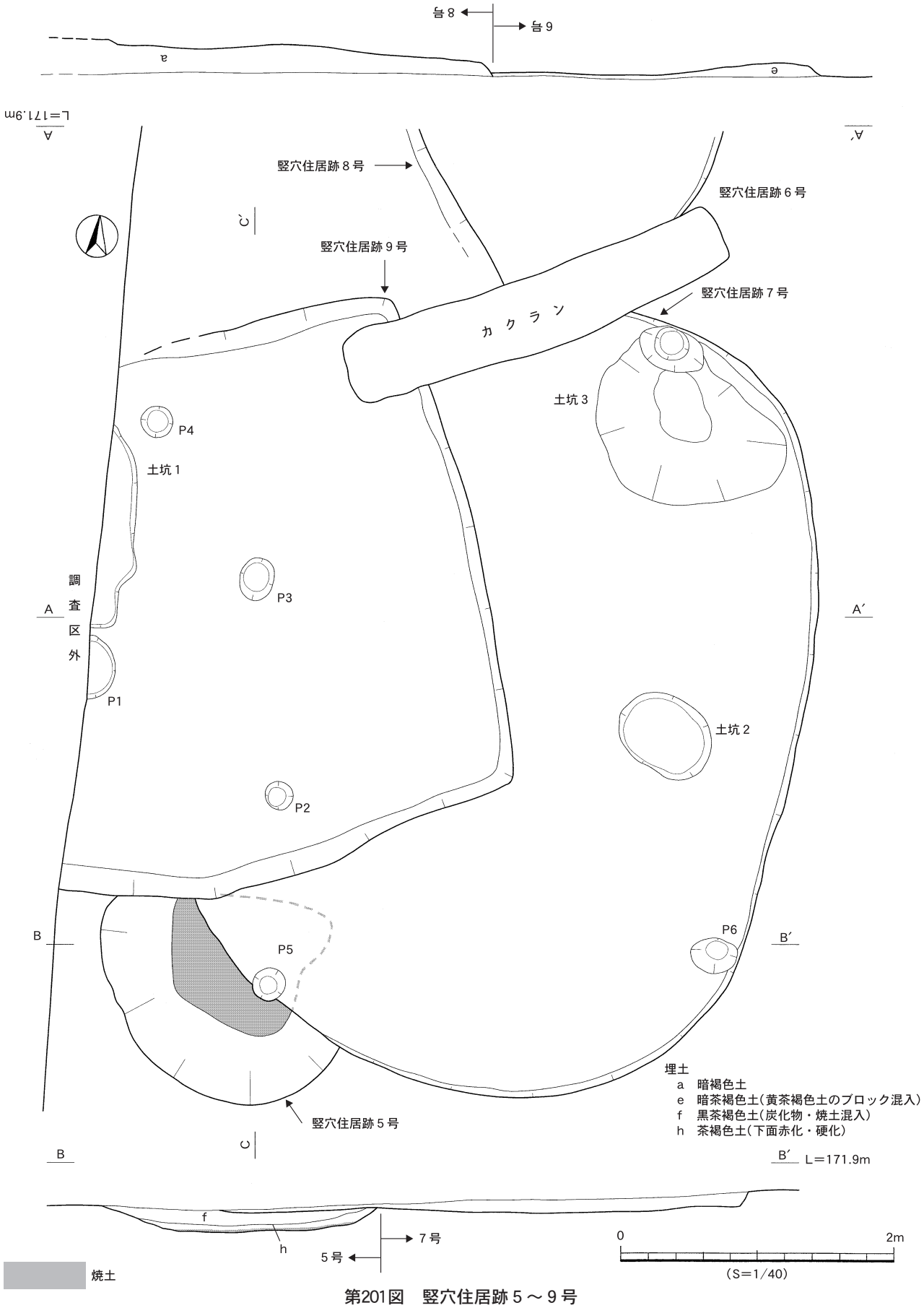
定を実施し，1,760±20yrBPという結果が示されている（第４章参照）。

遺物は，総点で３号が665点，４号が908点出土し，この内３号が18点，４号が12点図化した。17～35が３号出土遺物で，36～47が４号出土遺物である。17は口縁部が外反する器形で，内面はわずかに稜を有しない。19は，やや幅広の突帯で，中央を凹ませた後にキザミが施されている。26・27は細沈線により重弧文が施されている。28と29は胎土や色調などから同一個体の可能性がある。坩としては大型で，壺とするには胴張りが強くて器高が低い。30は坩の胴部片と思われる。34はミニチュアである。35は精錬された素地土であり，充実した筒状の脚がわずかに残存していることから脚を有する坩であると思われる。36は，鉢の脚の可能性もある。43はつまみ上の突起がある。44はやや大型の高坏の皿部片かと思われる。

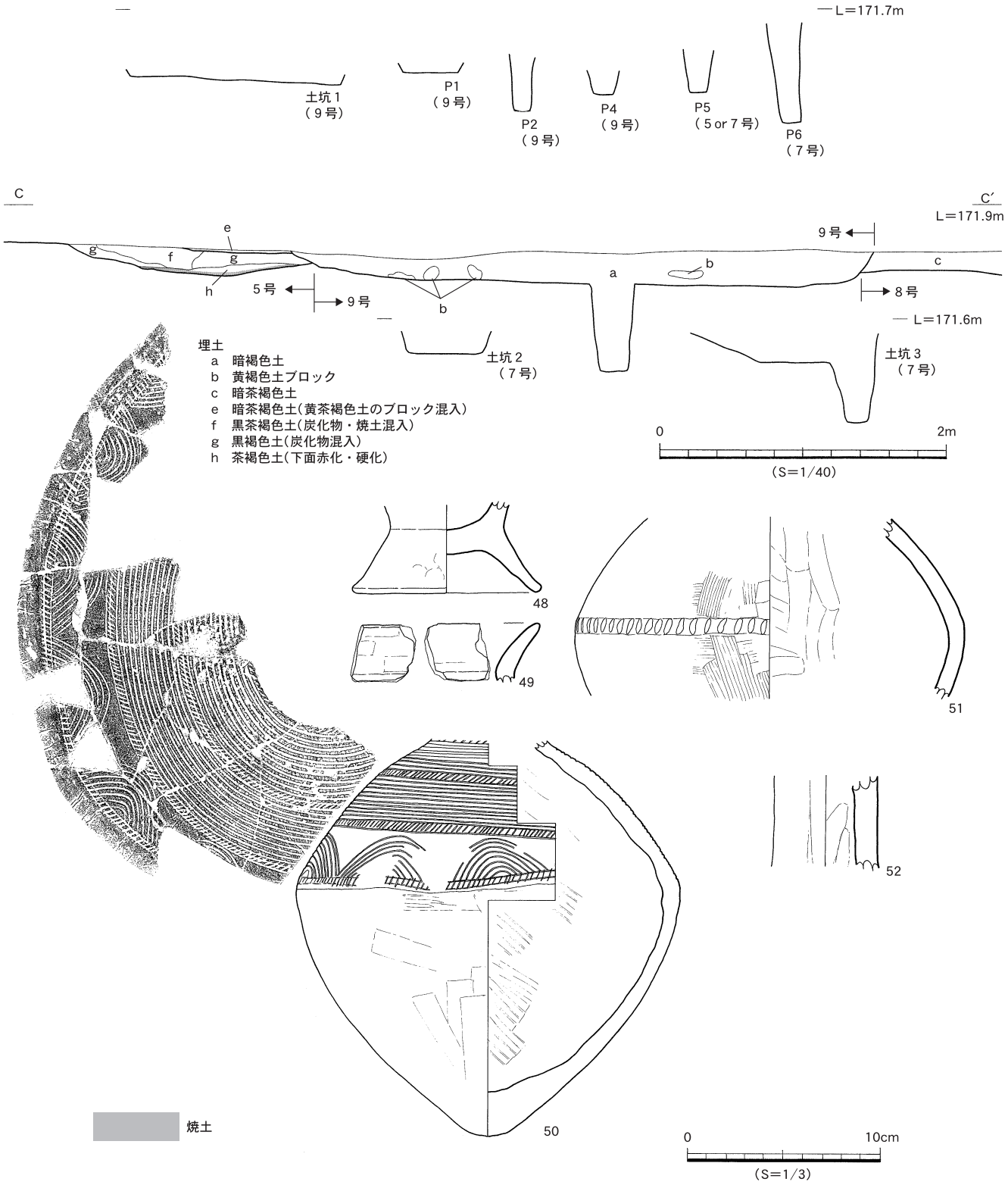
竪穴住居跡５～９号（第201～207図）

Ｊ－５・６区においてⅧ層上面で検出された。

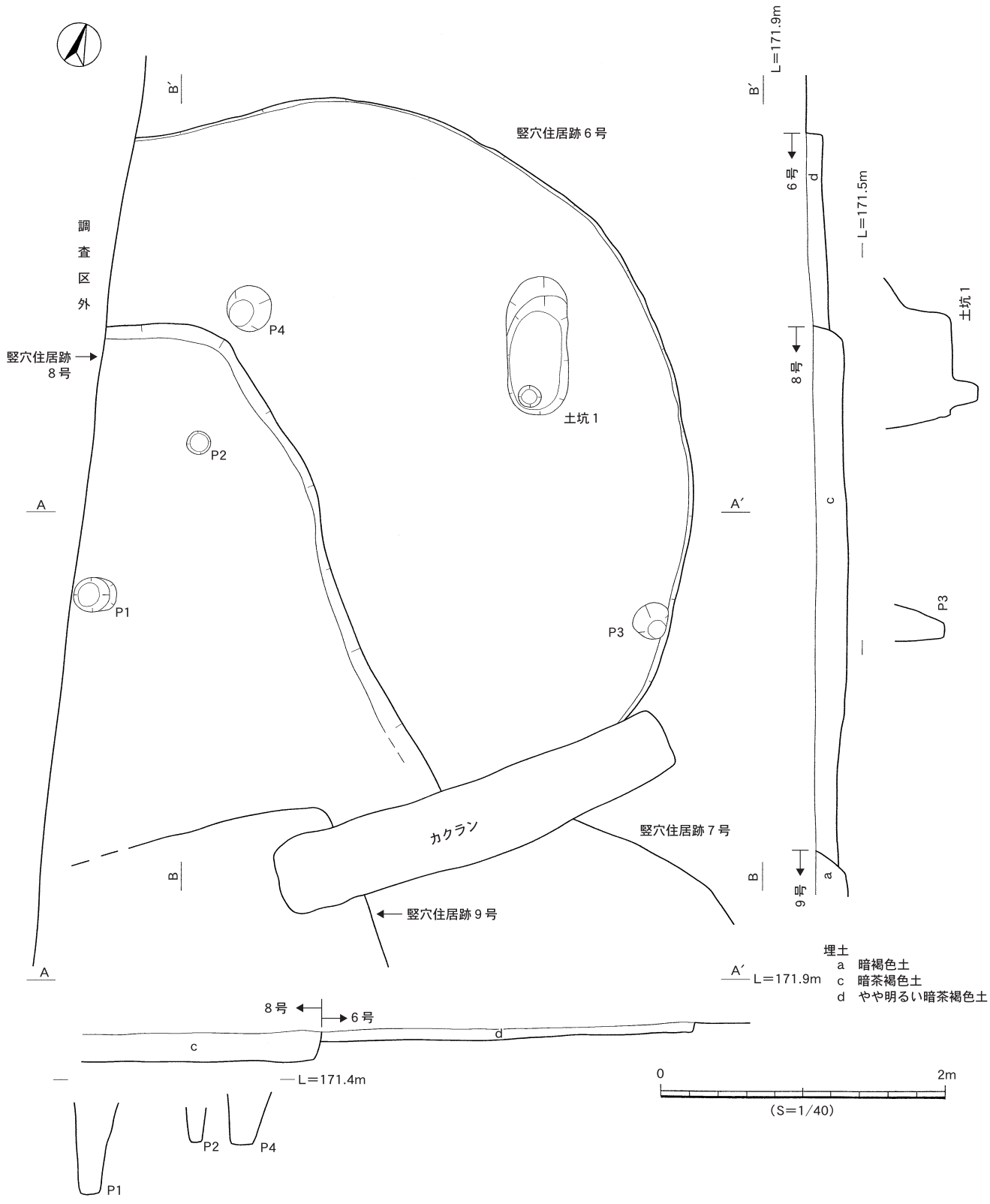
北側の壁際で多数の切り合いが考えられる不定形の大型プランで検出された。最大長12m，最大幅が5.5mある。当初，基数やそれぞれのプランが判断できず，南北通しのベルトを基準に，３本の直行するベルトを切り合いが予想される部分に設定して掘り下げを開始した。中央には，芋穴と思われる攪乱があり，これを掘り下げることで，中心部分から硬化面の変化を追いかけて壁面の



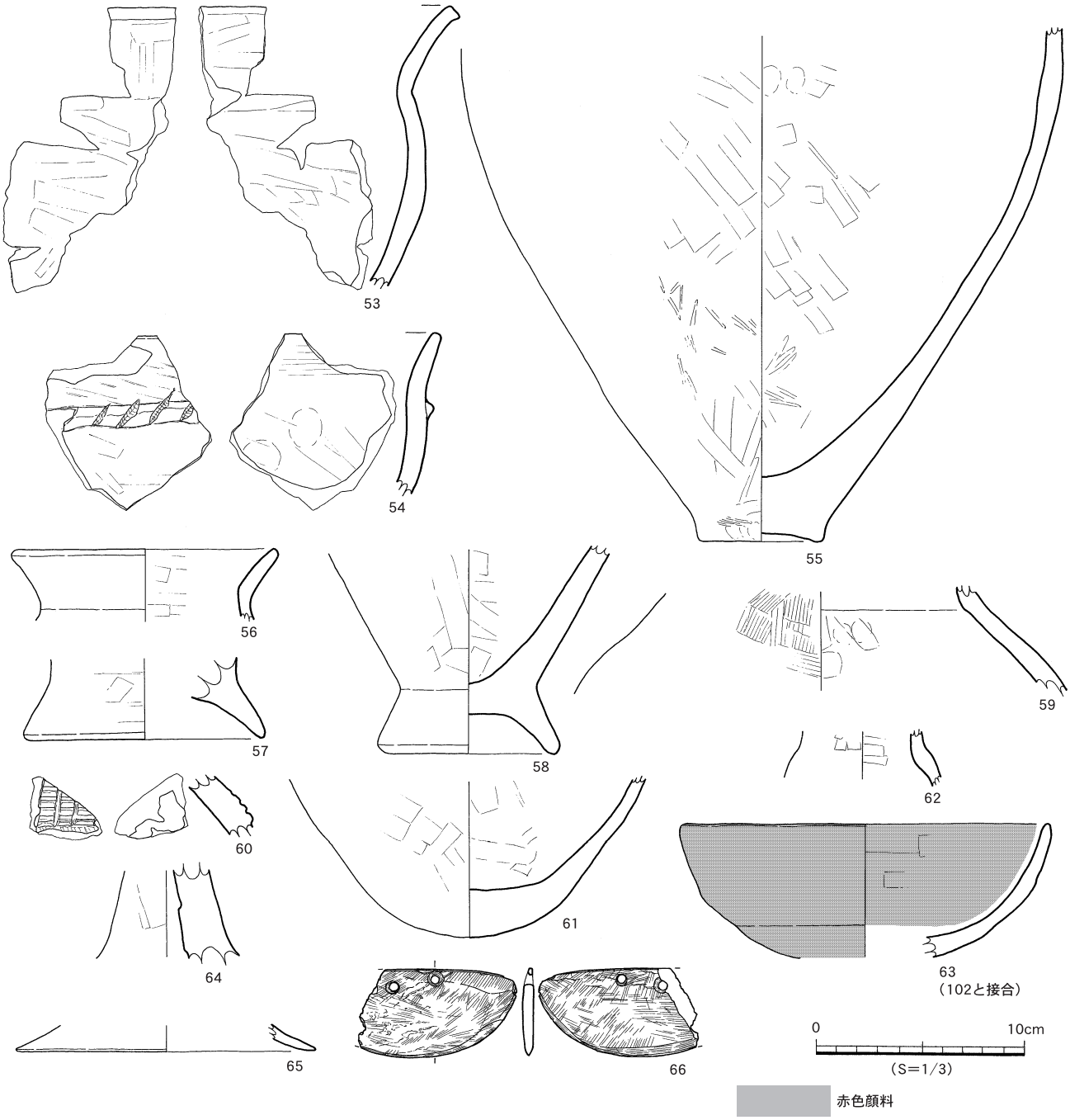
第201図　竪穴住居跡5～9号



第202図　竪穴住居跡５～９号・竪穴住居跡５号出土遺物



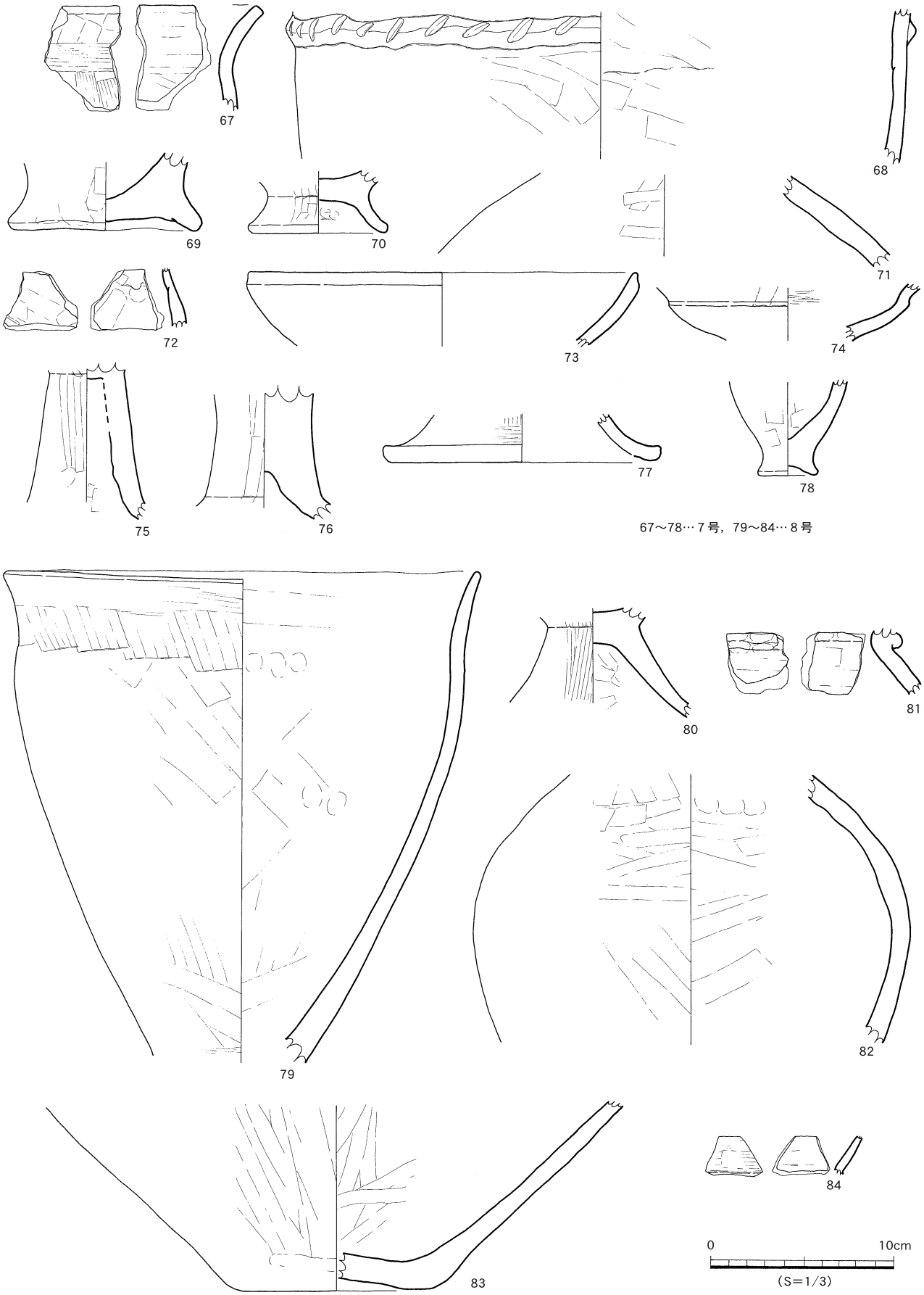
第203図　竪穴住居跡５～９号



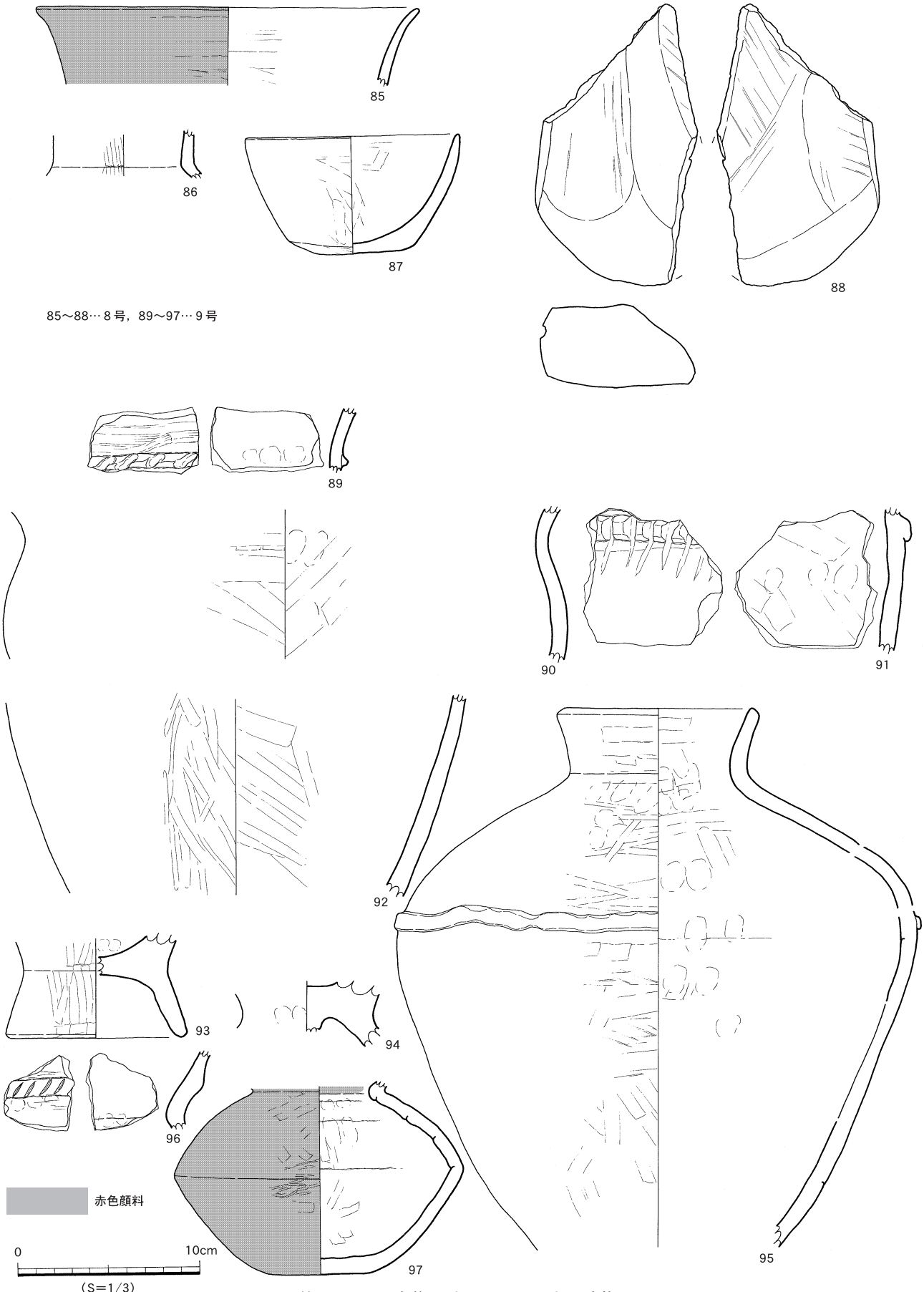
第204図　竪穴住居跡６号出土遺物

立ち上がりを捉える作業や，切り合い関係を掴む作業を実施し，その結果，５号が古く７号及び６号，その次に８号となり最も新しいものが９号という関係を捉えることができた。プランで見ると，円形が古く方形が新しいということになる。ただし，７号と６・８号との関係は，はっきりとしない。各竪穴住居跡内の炉・焼土や炭化物の広がりは把握できなかったが，５号の埋土中には炭化物を多く含む層の堆積が見られた。遺物は，５号が総点で204点出土し５点を図化，６号が総点で970点出土し14点を図化，７号が総点で314点出土し12点を図化，８号が総点で456点出土し10点を図化，９号が総点で854点出土し19点を図化した。

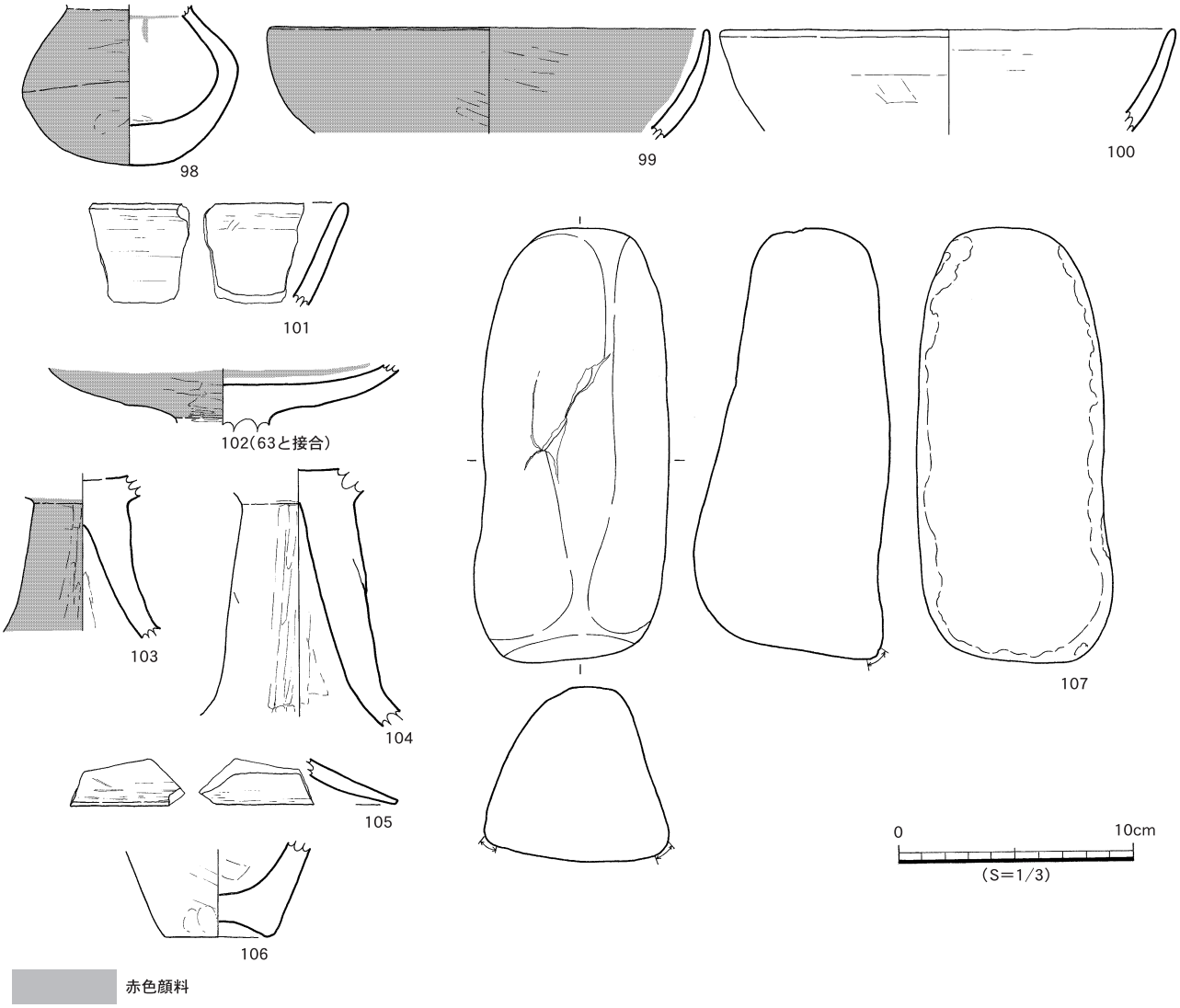
５号は直径２ｍの円形で，埋土中に炭化物を多量に含む。形状や規模的に竪穴住居跡とするには疑問も残る。遺構内遺物の中には，いわゆる重弧文土器が出土しており，この遺構が祭祀的な機能のあることも考えられる。時期的には他の竪穴住居跡よりわずかに古いと考えられるが，小破片での判断は困難であり，弥生時代終末から



第205図　竪穴住居跡7号，8号出土遺物



第206図　竪穴住居跡8号，9号出土遺物



第207図　竪穴住居跡９号出土遺物

古墳時代初頭という時間幅の中で考えここに掲載した。

６号は直径5.4mの円形である。東側に２段掘りで底面に小ピットを有する土坑が検出されている。55の底部は平底で，端部をつまみ出すようにした結果上げ底状を呈している。66は石庖丁片である。穿孔部分が端部に偏っており，再加工を施した結果であろうかと思われる。

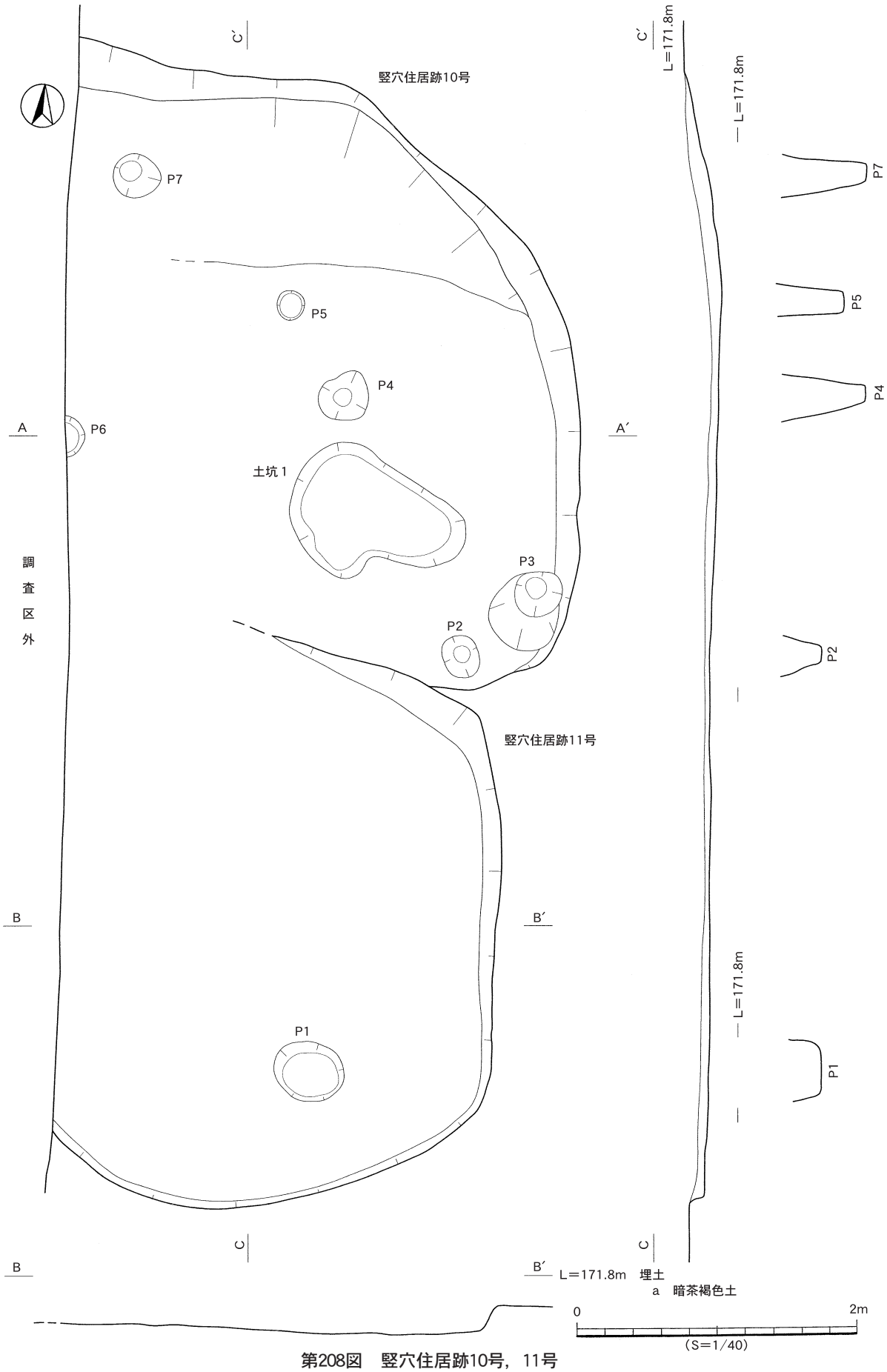
７号は，直径5.9mの円形である。北側に大型の土坑がありその底面にピットが１基検出された。69は甕の底部である。脚と呼ぶには短い張り出しが見られる。

８号は，方形と思われるが芋穴や未調査区があり，はっきりとしない。79は底部を欠くがほぼ全体の器形がわかる甕である。口縁部の外反はやや緩やかで，胴部はあまり張り出さない。口縁部外面には幅広の工具痕が見られる。

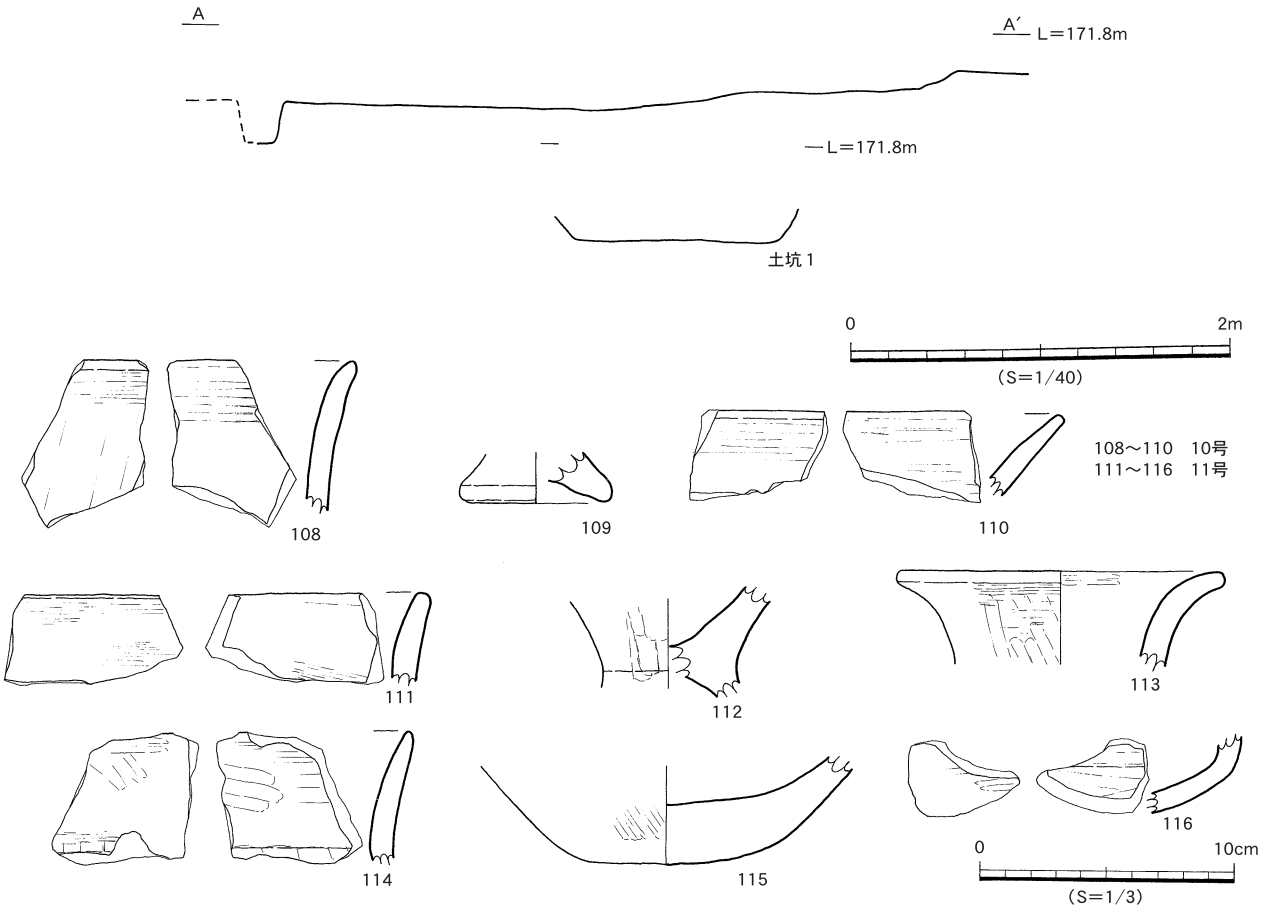
９号は，切り合い関係からこれらの中で最も新しいと思われる。95は頸部が短く胴部最大径がやや上方にある。突帯をめぐらせるがキザミ等は施されていない。97は坩で，胴部が強く屈曲する。

竪穴住居跡10・11号（第208・209図）

Ⅰ・Ｊ－６・７区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺８m，短辺3.8mの不定形で，平成21年度調査区の最北西壁付近に位置する。このために微地形との区別が困難で，検出されたときには上面プランを一部掘り下げてしまっていた。調査は，長辺の長さから２基の竪穴住居跡の切り合いを想定して長軸ベルトと各々に短軸ベルトを設定した。長軸方向の埋土においては，両者の埋土による切り合いはつかめず，ベルトを外した後に床面の高低差による判断した。不明瞭な部分が多い中，東側の床面が僅かに11号が深く，10号が浅かったため，ここで新旧関係を判断した。なお，床面は一様に平坦ではなく，東西方向に高低差が約10㎝ある。また，硬化面も明確に捉えることが出来なかった。この



第208図　竪穴住居跡10号，11号



第209図　竪穴住居跡10号，11号出土遺物

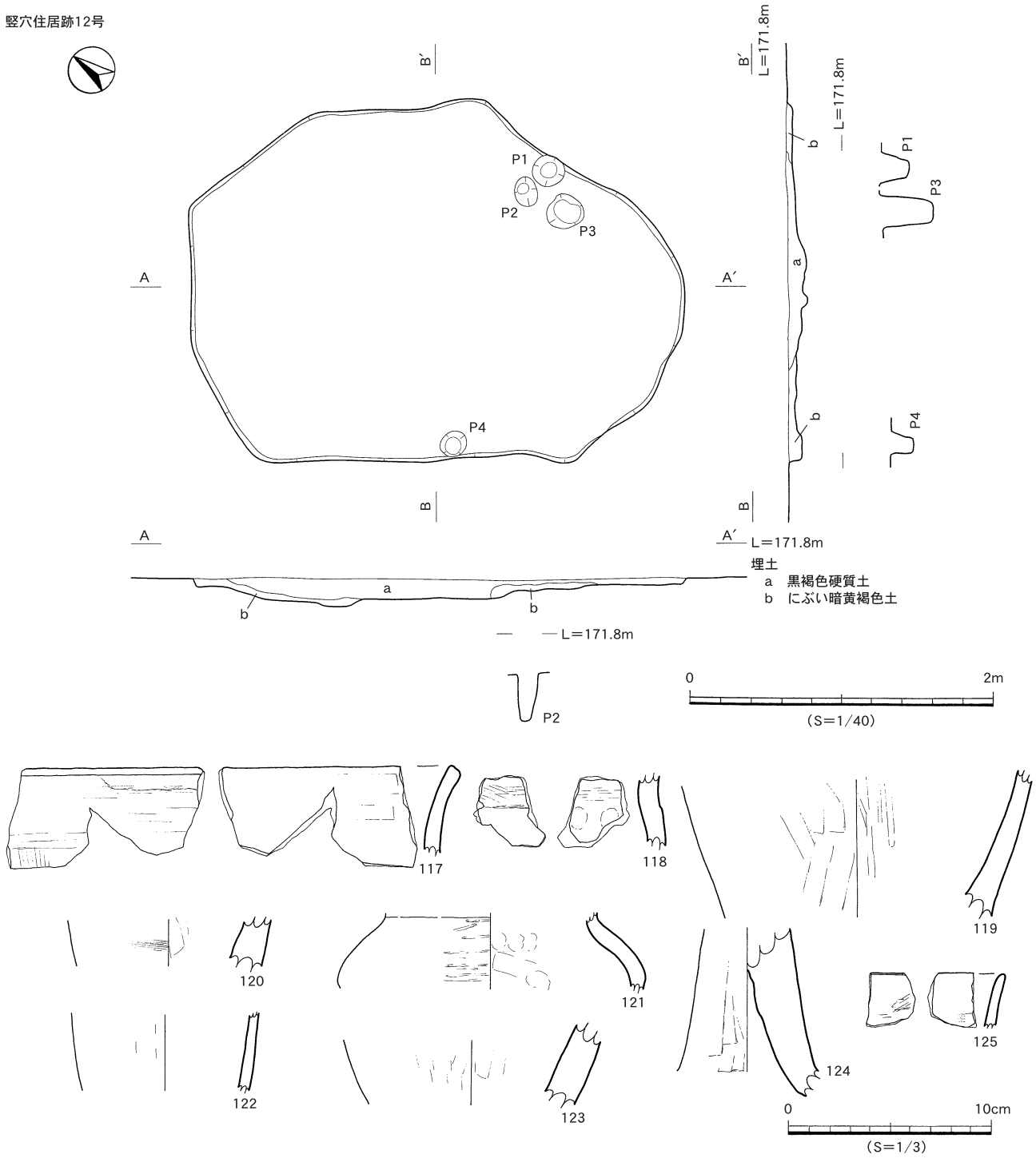
ため，柱穴などの付帯施設の確認は，床面の記録が終了した後に，床面を除去しながら検出作業を行った。この結果，10号では６基の柱穴と１基の土坑が，11号では１基の柱穴とがそれぞれ確認された。なお，炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。遺物は，10号が総点で226点出土し３点を図化，11号が総点で169点出土し６点を図化した。

10号は，不定形プランである。北東側のコーナーの状況から略円形であったとも考えられる。北側は緩やかに立ち上がり，なだらかなテラスを形成する。柱穴は50㎝から60㎝の深さがあるものが３基検出された。Ｐ２とＰ４とに挟まれた土坑１は，やや楕円形で検出面から約20㎝の深さがある。焼土や炭化物等は含まれておらず，性格を考察するに耐える遺物も出土していない。

11号は，約４ｍの隅丸方形ないしは略円形のプランになるものと思われる。柱穴は１基検出され，検出面からの深さは20㎝と浅い。108は甕の口縁部片である。全体的な形状は不明だが外反は緩やかである。113は口縁部が外反するタイプの壺である。

竪穴住居跡12号（第210図）

Ⅰ・Ｊ－７・８区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.3m，短辺2.4mの隅丸長方形に近い不定形で，検出時には北と西側の一部以外に既に硬化面が認められた。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定し，硬化面の記録を行った後に掘り下げを開始した。硬化面を除去しながら掘り方の面を検出していったところ，最終的な床面は中央に向かって不安定に落ち込んで検出された。この落ち込みは，方形土坑のような住居付随のプランも想定されたために，立ち上がりに関して留意して掘り下げていったが，明確なプランを捉えることは出来なかった。柱穴などの付帯施設は，この硬化面を除去した段階で４基の柱穴が確認された。Ｐ４を除く３基の柱穴は東側に偏って検出された。炉・焼土や炭化物の広がりは，検出面が既に竪穴住居跡の床面であったことなどから検出は困難で，はっきりとしなかった。遺物は，総点134点でこの内９点図化した。いずれも小破片が多い。117・118は甕の破片である。口縁部がわずかに外反し，工具によるかき上げ痕を残した結果，外面には段が残る。124は高坏の脚部片である。脚は比較的長い。

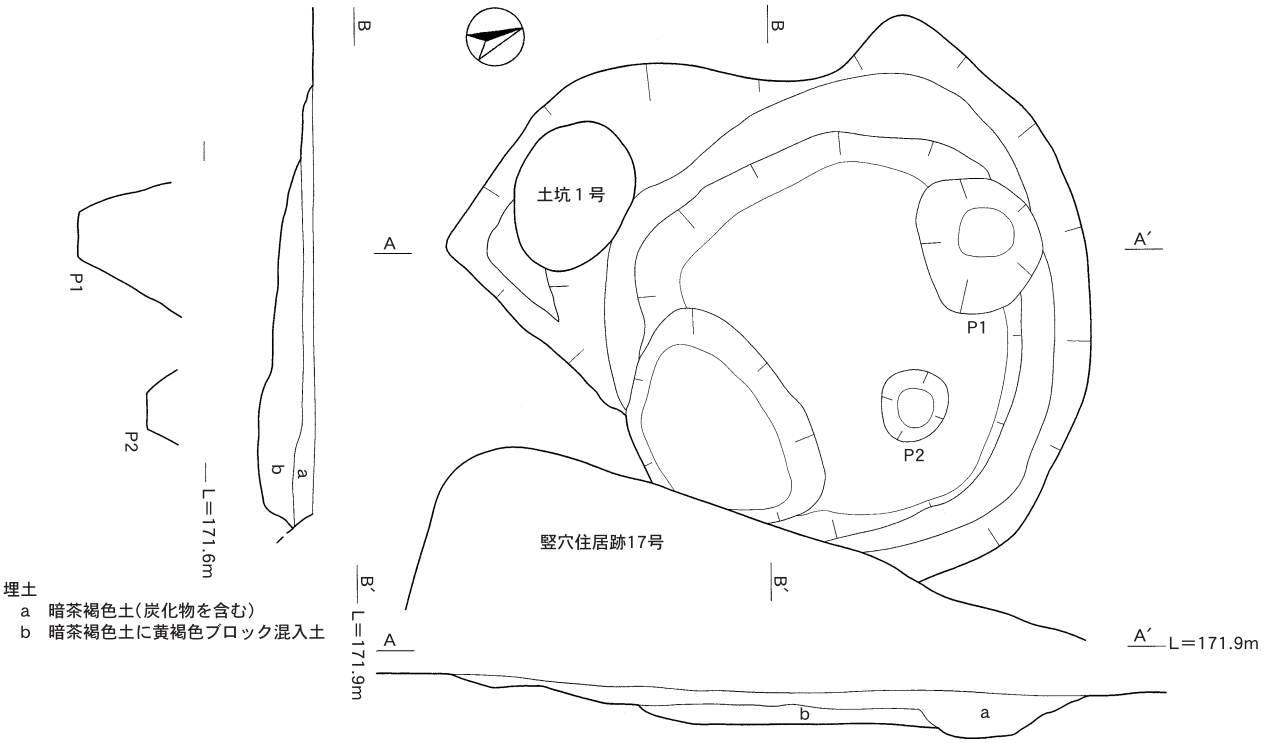


第210図　竪穴住居跡12号・出土遺物

竪穴住居跡13号（第211図）

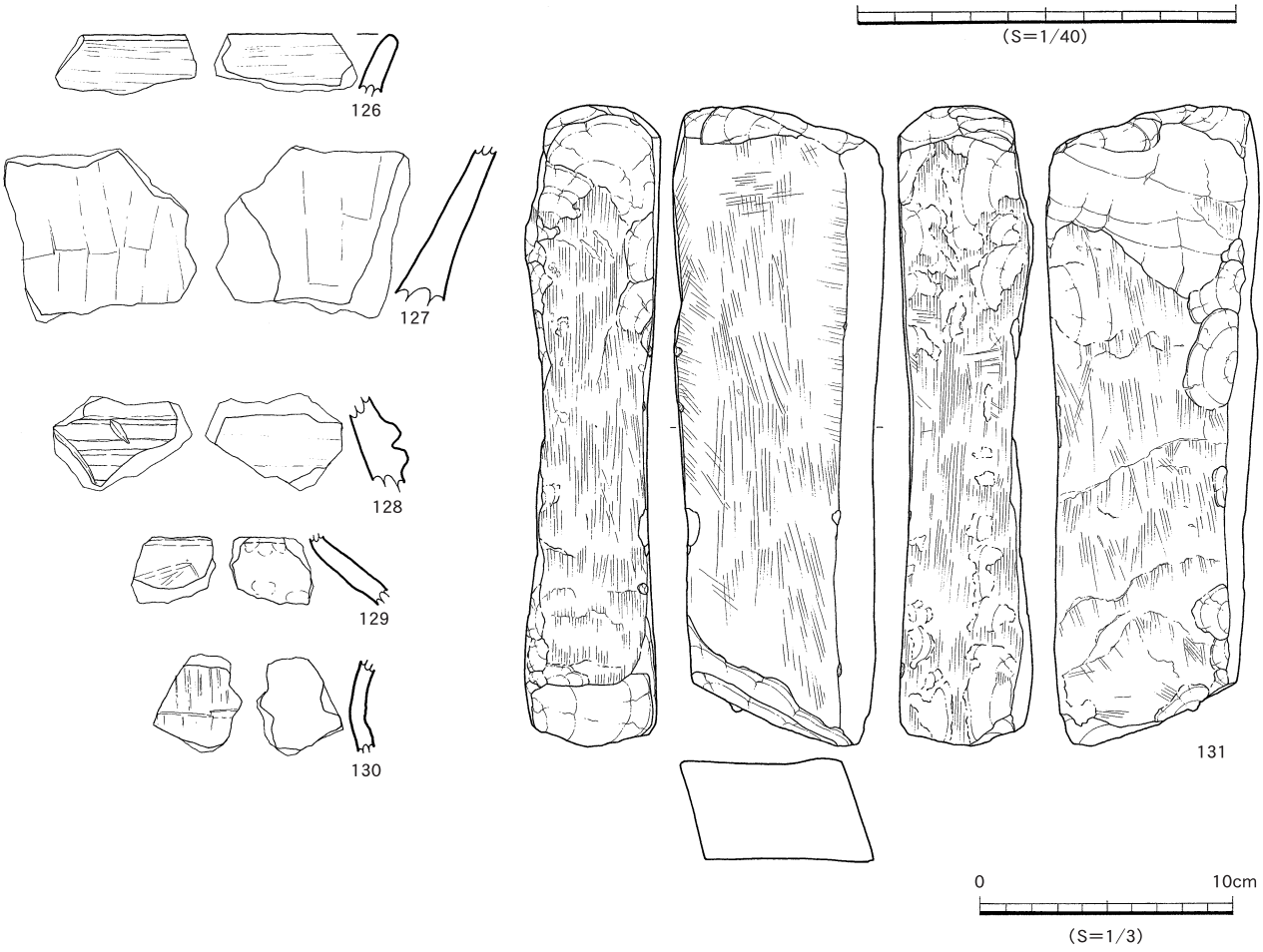
Ｊ－６区においてⅧ層上面で検出された。４号と17号との間に不定型なシミ状痕跡として検出された。検出時のプランは，長辺2.9m，短辺2.8mの楕円形に近く，調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層で床面には暗茶褐色と黄褐色ブロックとが混在しており，貼床と判断した。この貼床は，中央部分では厚いが壁面周辺には見られない。このため，完掘すると２段掘り状のプランとなる。この貼床プランの南側には楕円形の土坑が見られ，柱穴などの付帯施設の確認も，この段階で２基の柱穴が確認された。また，南側には楕円形土坑の他に土坑１が13号の床面を掘り込んで検出された。検出面での切り合いは確認されていなかったため，前後関係ははっきりとしない。炉・焼土や炭化物の広がりは埋土ａ層中に散在して見られたが，特に集中する箇所等は見られなかった。遺物は，総点279でこの内６点図化した。131は砥石である。各面に使用の痕跡が残されている。

竪穴住居跡13号



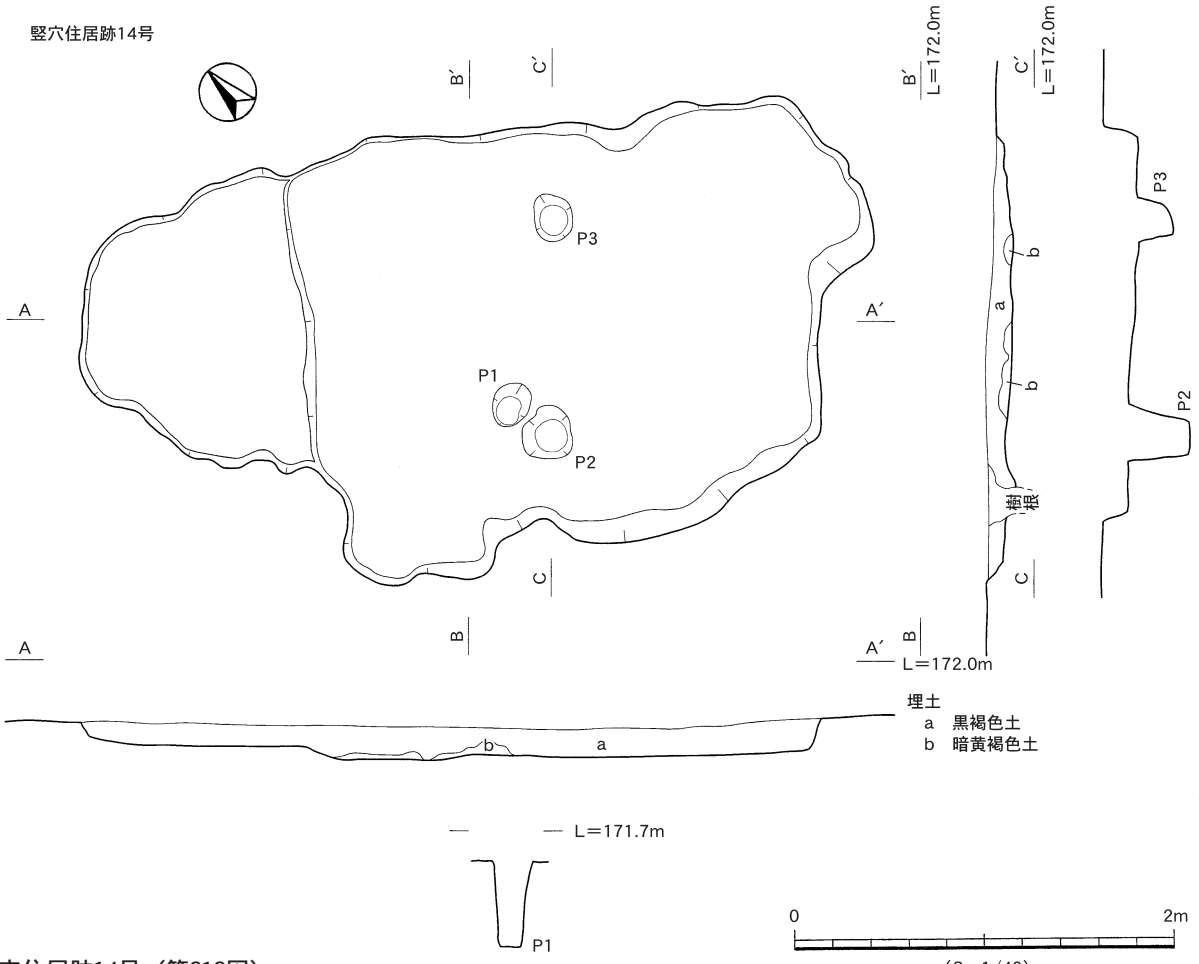
埋土
a　暗茶褐色土(炭化物を含む)
b　暗茶褐色土に黄褐色ブロック混入土

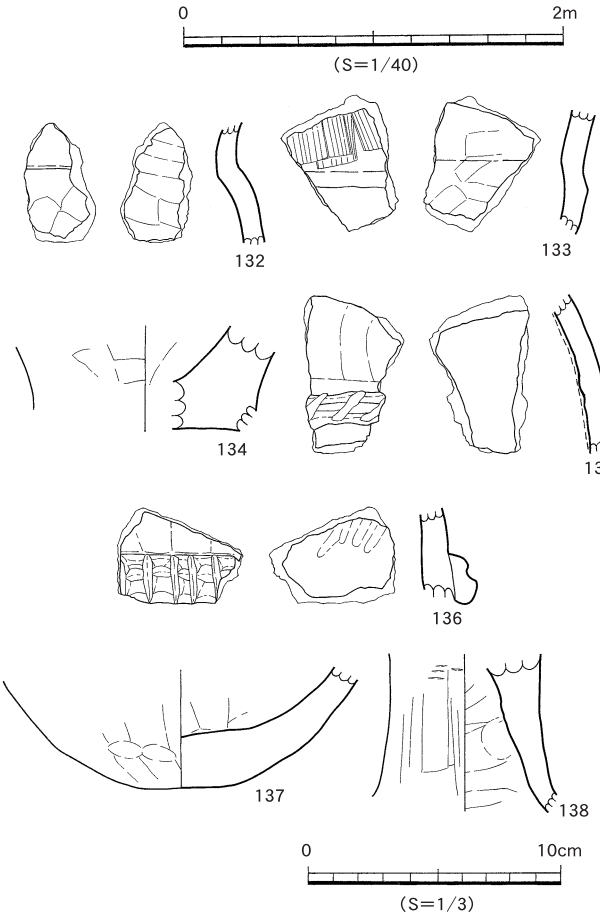
0　2m
(S=1/40)



0　10cm
(S=1/3)

第211図　竪穴住居跡13号・出土遺物





竪穴住居跡14号（第212図）

K－7区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.9m，短辺2.4mの隅丸長方形に近い不定形プランで，川への落ち際に近いこのような立地のためか，検出時に上面には多くの樹痕等があり，プランの確定の障害になった。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出していった。床面には硬化面等は認められなかった。北西側には，浅く張り出し中央がわずかに凹む部分が確認された。柱穴などの付帯施設は床面で3基の柱穴が確認された。P2・3が主柱穴になると思われるが，P3のほうが検出面からの深さは浅い。炉・焼土や炭化物の広がりは確認されなかった。遺物は，総点165点でこの内7点を図化した。132～134は甕の破片である。132・133共に口縁部下の破片である。外面に段を有している特徴が見られる。135～137は壺の破片である。特に136は，胴部突帯中央を凹ませた後にキザミを施す。137は壺の底部である。138は高坏の脚部であるが，脚部の径からやや大型である可能性も考えられる。

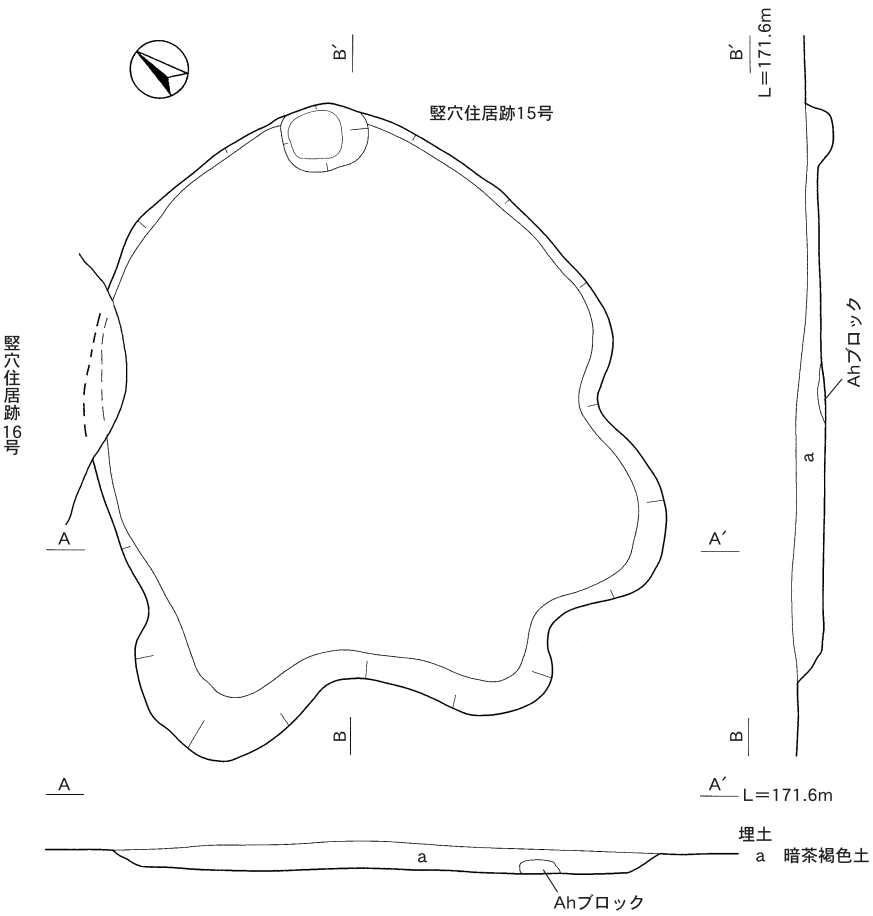
第212図　竪穴住居跡14号・出土遺物

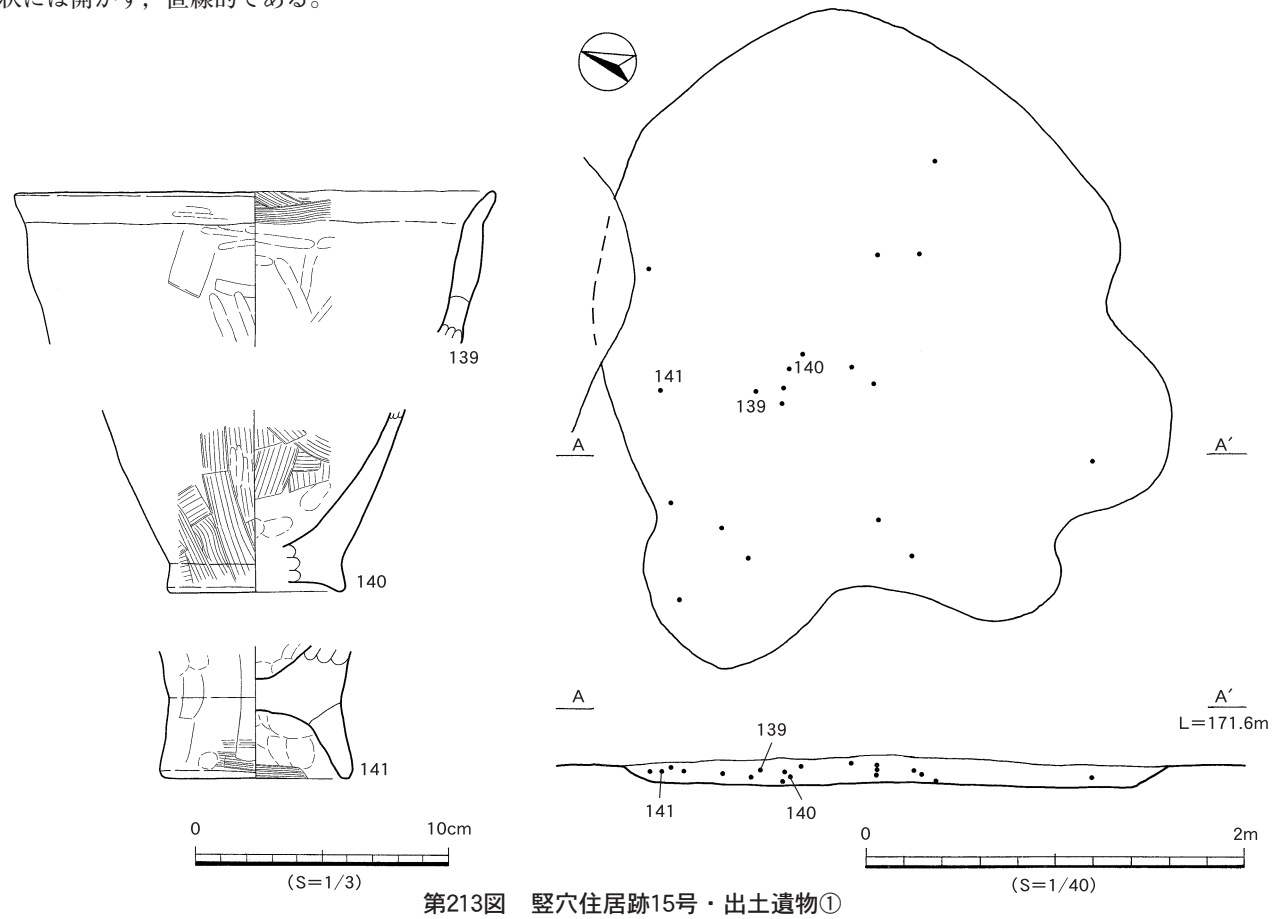
竪穴住居跡15号（第213・214図）

K－7区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.4m，短辺2.8mの不定形で，一部が16号と切り合い関係にある。

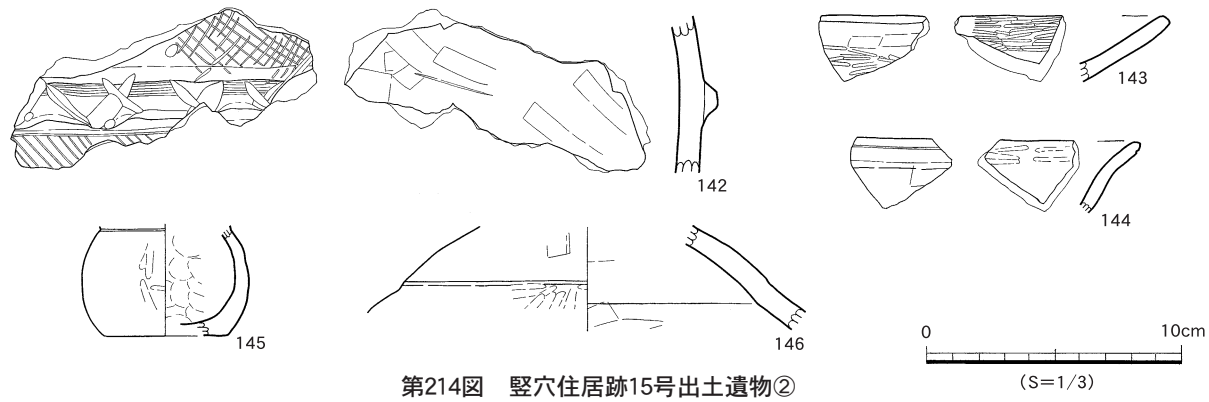
西側にやや張り出し状のプランが認められた。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始したが，床面と思われる埋土の変化は東側では約4㎝，西側の深いところでも20㎝と全体的に浅い。埋土に変化は認められず，単一層であった。床面には硬化面や焼土炭化物の広がりは認められず，柱穴などの付帯施設の確認は，この床面を掘り下げながら検出に努めた。結果1基の柱穴が確認されたが浅い。

遺物は，総点で474点出土し，この内8点を図化した。140は，甕の底部片であるが，脚部の形成ははっきりとせず，底部外端をつまみ出している。141の脚部はハ字状には開かず，直線的である。

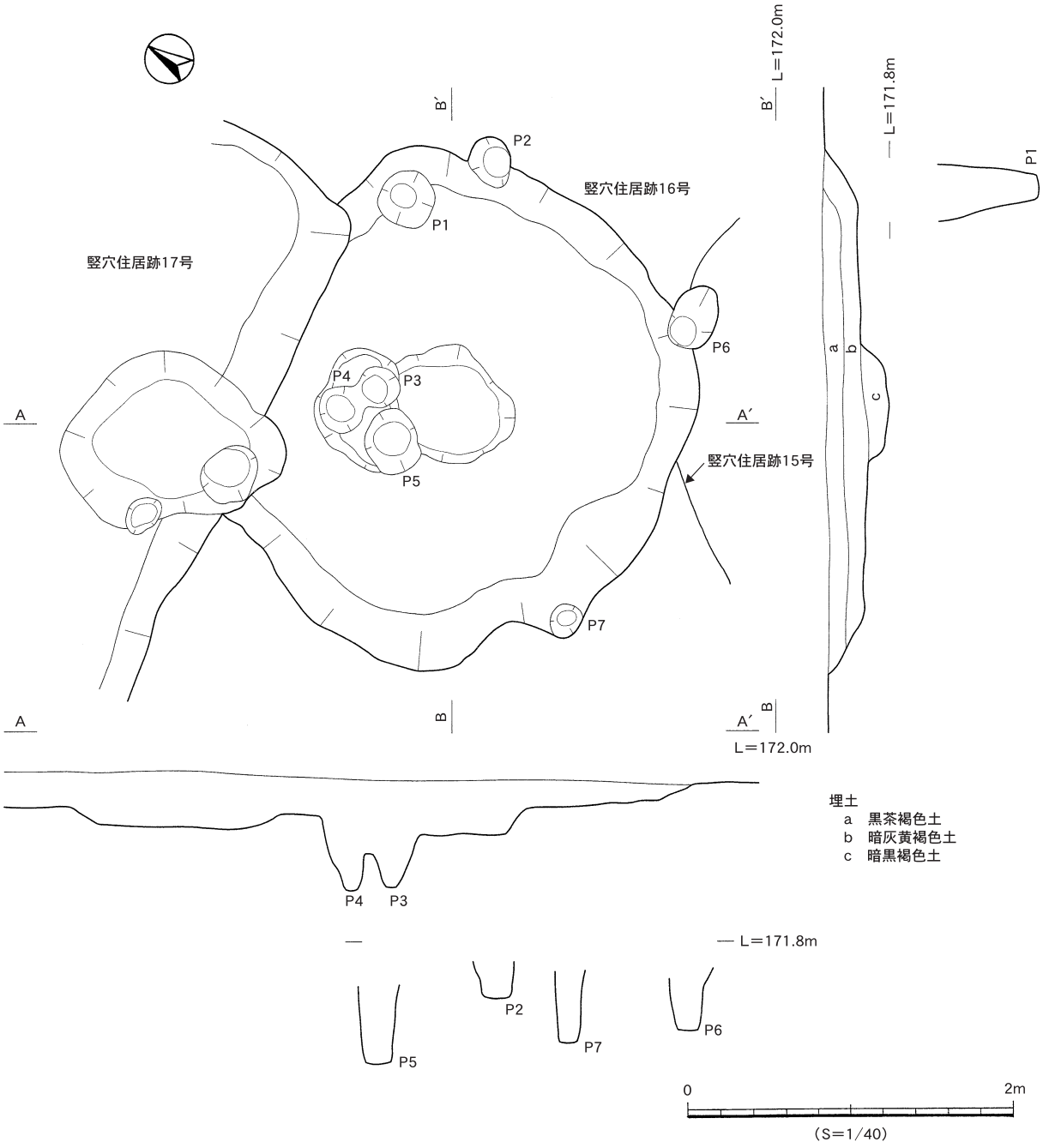




第213図　竪穴住居跡15号・出土遺物①



第214図　竪穴住居跡15号出土遺物②

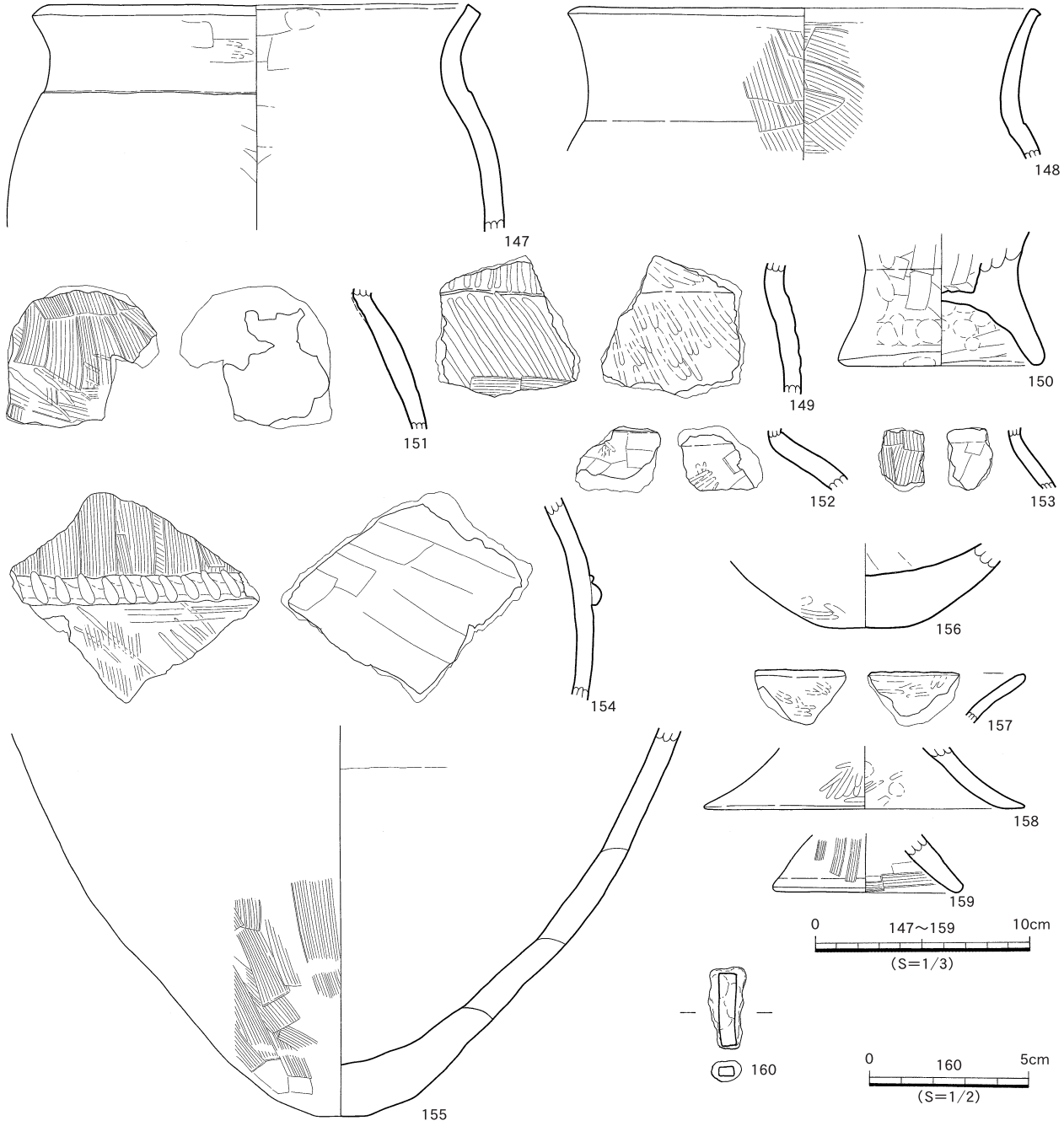


第215図　竪穴住居跡16号

竪穴住居跡16号（第215・216図）

K－7区においてⅧ層上面で検出された。北側を17号，南側を15号と重複して検出された。検出時のプランは，長辺3.1m，短辺2.6mの小型の隅丸長方形である。調査は，2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出していった。柱穴などの付帯施設の確認は，硬化面を除去した段階で確認され，結果7基の柱穴が確認された。P1は壁際にP2～4は壁面中に見られた。P2・6・7は他の時期の可能性も否定できない。P6は隣接する15号のものである可能性もある。中央には土坑があり，この中にP3～5がある。炉・焼土や炭化物の広がりは確認できなかった。なお，これら3軒の竪穴住居跡の関係は，切り合いなどから15号が最も古く，16号→17号という新旧関係になる。

遺物は，総点895でこの内14点図化した。147・148は口縁部が強く外反し，胴部との境に段を有する。口唇部は平坦に仕上げられている。150は，甕の底部である。しっかりとした脚部であるが，内面の調整により器壁の厚さにムラが生じている。154は壺の胴部片である。上半にかけて丁寧なハケメが残されている。160は鉄製品である。長方形の形状を呈しているが器種と部位の特定は出来なかった。



第216図　竪穴住居跡16号出土遺物

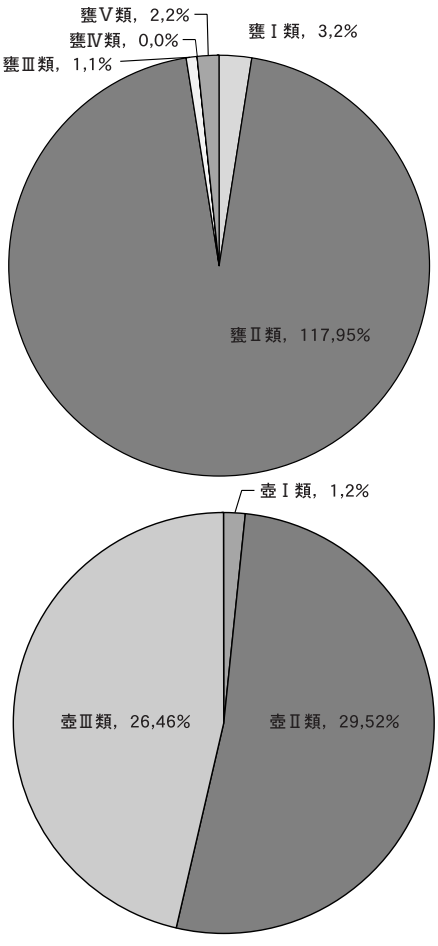
竪穴住居跡17号（第217～226図）

Ｊ・Ｋ－６・７区においてⅧ層上面で多量の土器が集中していたことで確認された。検出時のプランは，長辺5.5m，短辺4.7mの隅丸方形で，南側で竪穴住居跡16号と切り合う。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。はじめに，多量の土器片を実測して取り上げながら床面検出を行った。これらの土器片は，床面上まで堆積しており，特に住居中央部分に集中している。16号との切り合いは住居内土坑との関係も含めて検討できるベルトを設定した。この結果，16号の廃絶後に当住居が作られていることがわかった。柱穴などの付帯施設は，床面を除去した段階で８基の柱穴と２基の土坑が確認された。柱穴はその位置関係や深さなどからＰ１・２・５が主柱穴と思われ，東南にも同様の柱穴を想定して精査していったがわからなかった。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりせず，硬化面についても明確でない。

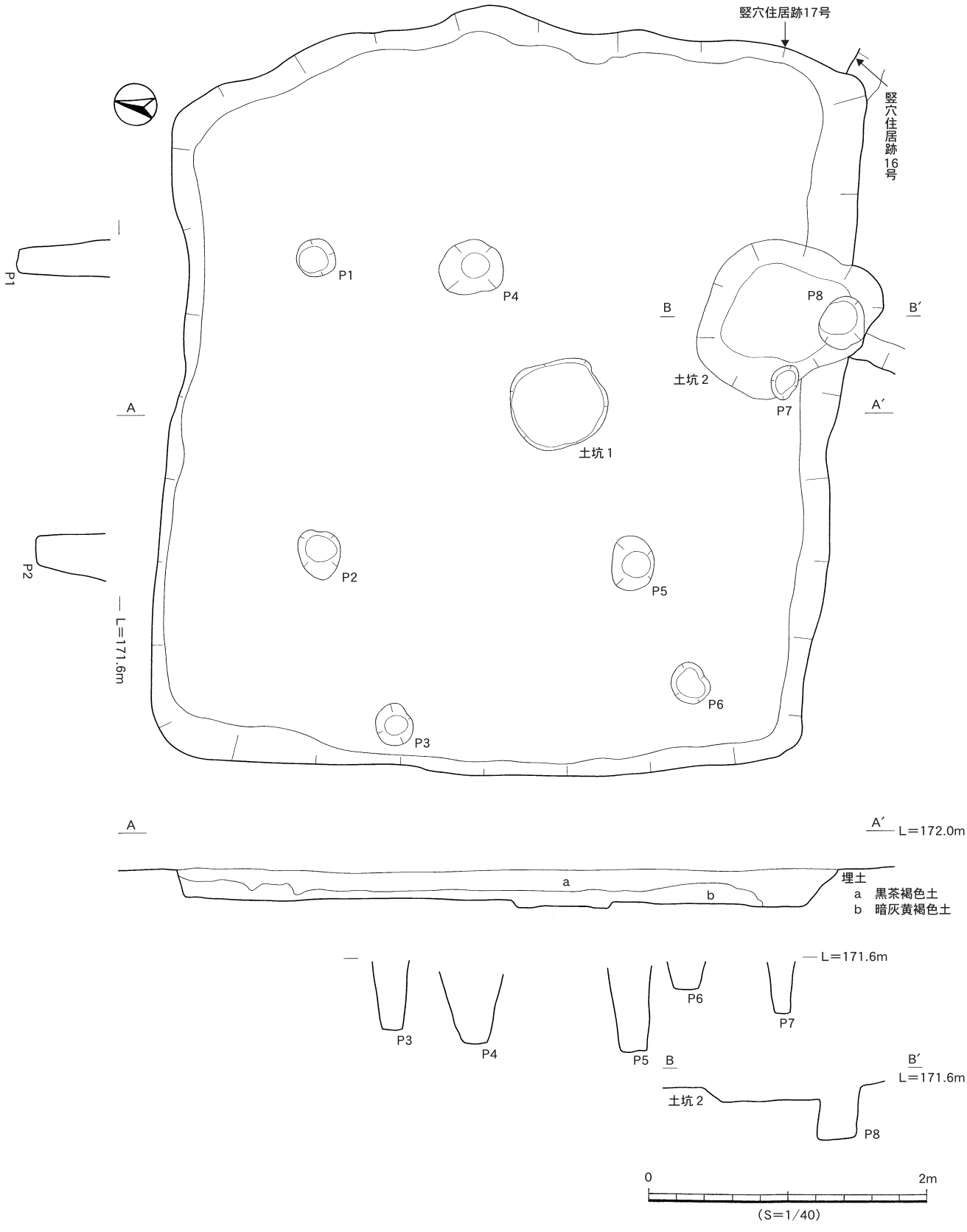
遺物は，総点10,416点が出土しこの内62点を図化した。出土遺物のバリエーションが豊富であったため，甕の口縁部および壺の口縁部に関して，細分類で可能であった資料を基に出土率を右のとおり作成した。

161・162は甕で口縁部から底部の形状に至るまでが明確な資料である。やや胴長な印象がある。口縁部が外反し，胴部はあまり膨らまずに直線的である。底部は，器高に対し比較的低い脚部を有する。また，161は底面中央がやや尖る。164～169は口縁部下に一条の貼付突帯をめぐらせるものである。167は薄く貼り付けた突帯に細いキザミを施す。168は，幅広の貼付突帯で，Ｖ字状にキザミを施している。突帯の形状やキザミの手法は，壺形土器によく見られる手法であり，この手法が甕に施されるのは珍しい。169も同様である。169は貼り付け突帯の前に掻き上げ状の調整が施されている。ここでくびれて外反していることから甕と判断した。170は，口縁部がわずかに内湾する。甕を想定したが，器形や器面調整などに違和感も感じる。171はやや小型の土器である。172～177は甕の底部である。177は底部からの立ち上がりが大きく外傾する。甕以外の器形も想定される資料である。178・179は甕の中でも胴部が球状を呈する資料である。外面にはススが付着している。178は，口縁部が直線的に外傾し，口縁部内外面に明確な稜を形成する。179は，口縁部が外反し，口唇端部もさらに外反する。口縁部内面には明瞭な稜は形成されずに，胴部は球状に膨らむ。底部は，胴部下半の形状から丸底に近いと思われる。180～198は壺である。180・181は包含層分類の壺Ⅱ類に属する。182も同様であるが，頸部が長い。183～191は壺Ⅲ類である。いわゆる２重口縁を呈する。183は口縁端部が外反する。頸部には貼り付け突帯が施されている。186は口縁部が湾曲する。1881も口縁部が湾曲する。明確な２重口縁にはならない。胴部には幅広の突帯が施され，鋸歯状にキザミが施される。189は口縁部から底部までが残存している。胴部の突帯の貼り付け位置は胴部最大径上にある。190は口縁部から頸部にかけてが直線的で，２重口縁の作出も直線的に肥厚させている。胴部は内面が剥落しているが，189等と比べるとやや薄手の印象を受ける。191は内湾する口縁部を貼り付け２重口縁を呈する。胴部の膨らみは他の資料ほど見られない。193は口縁部を欠く。胴部の膨らみは，肩部に近い位置で強く，胴部最大径が器高の上半に位置する。198は，底部に細沈線が見られる。199から206は坩である。199は胴部がそろばん玉状に屈曲する。素地土が赤褐色を呈しているが赤色顔料は塗布されていない。207～215は高坏である。207・208は口縁部が外反する。209・210は直線的な口縁部で，211は口縁部が内湾する。216は内外面共に赤色顔料が施される鉢である。217は小型の土器である。218・219は須恵器である。218は坏蓋で219は高坏と思われる。220は石庖丁である。右側片を欠損している。刃部には刃こぼれ状の剥離が見られる。221はやや扁平な砥石である。222は鉄製品である。先端部と思われる部分を上にして図化した。



甕と壺の出土率

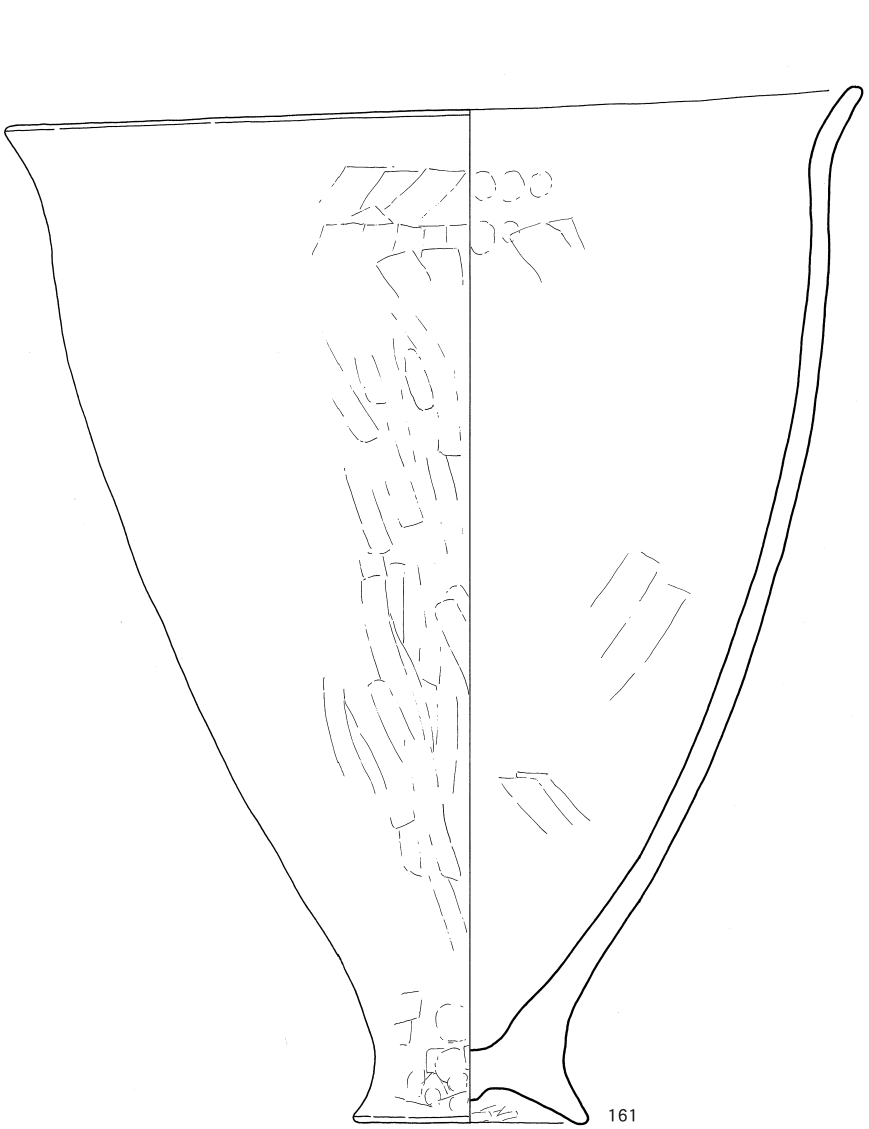
竪穴住居跡17号

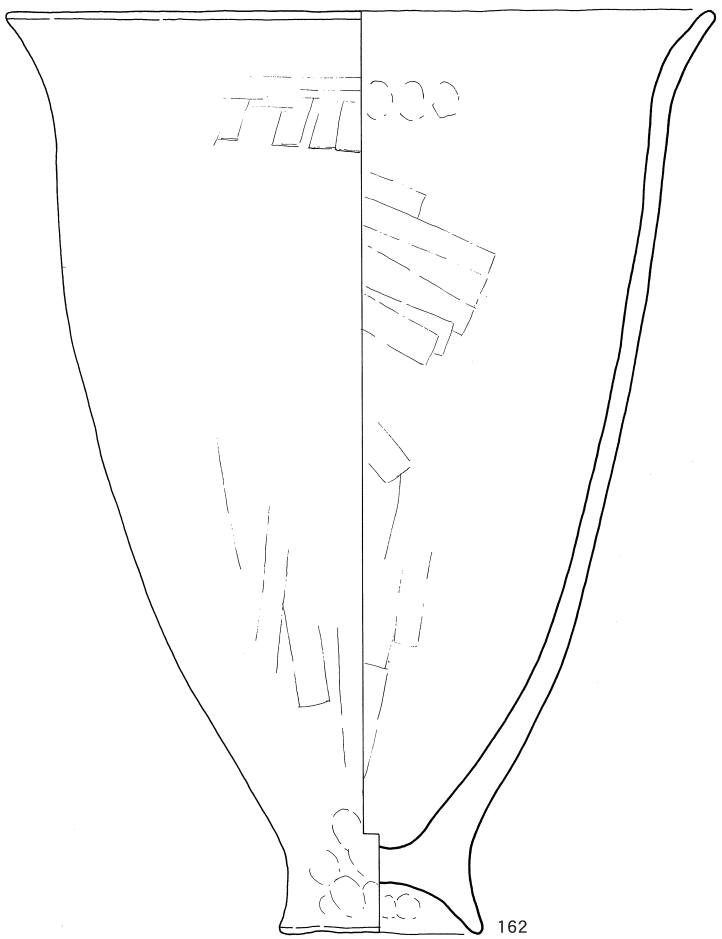


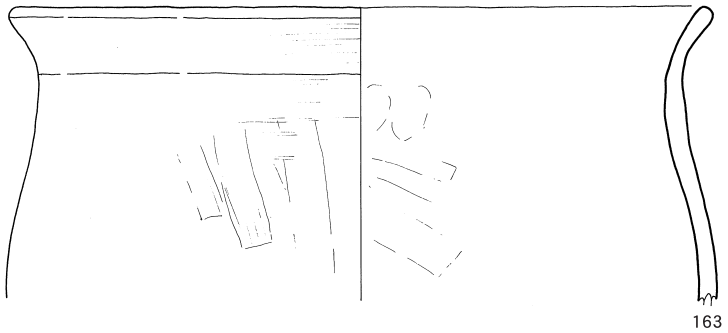
第217図　竪穴住居跡17号

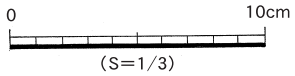


第218図　竪穴住居跡17号遺物出土状況

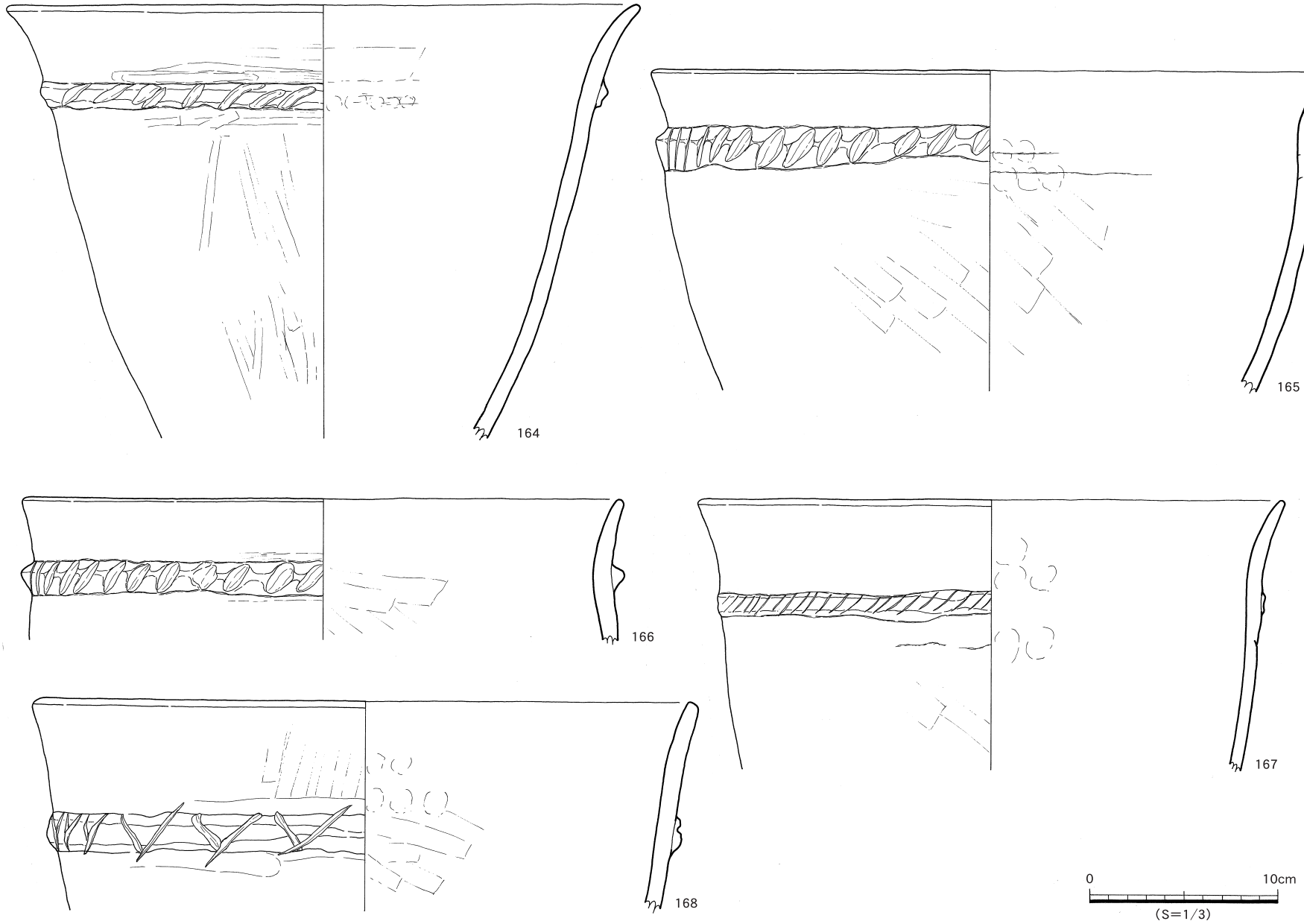




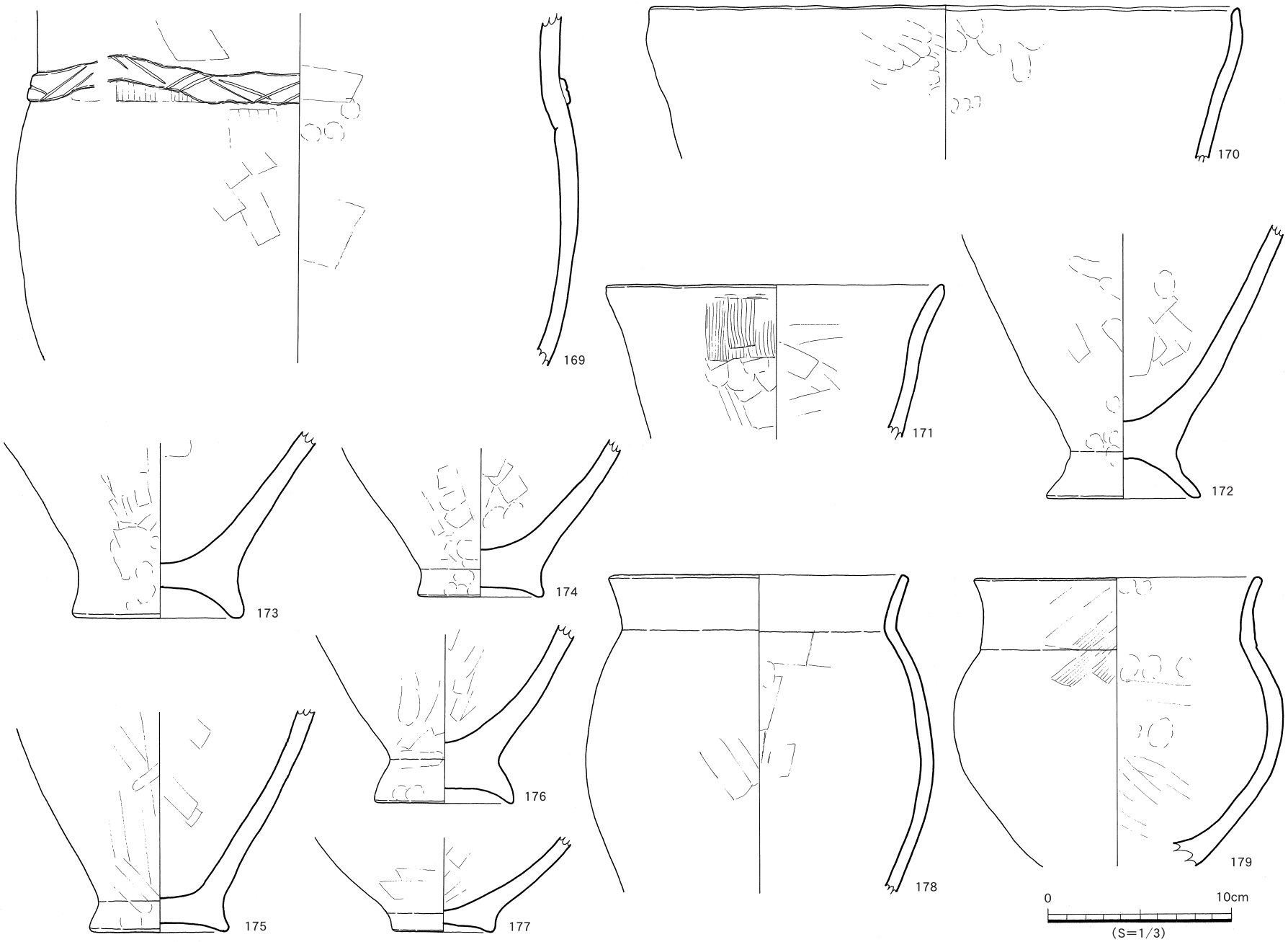




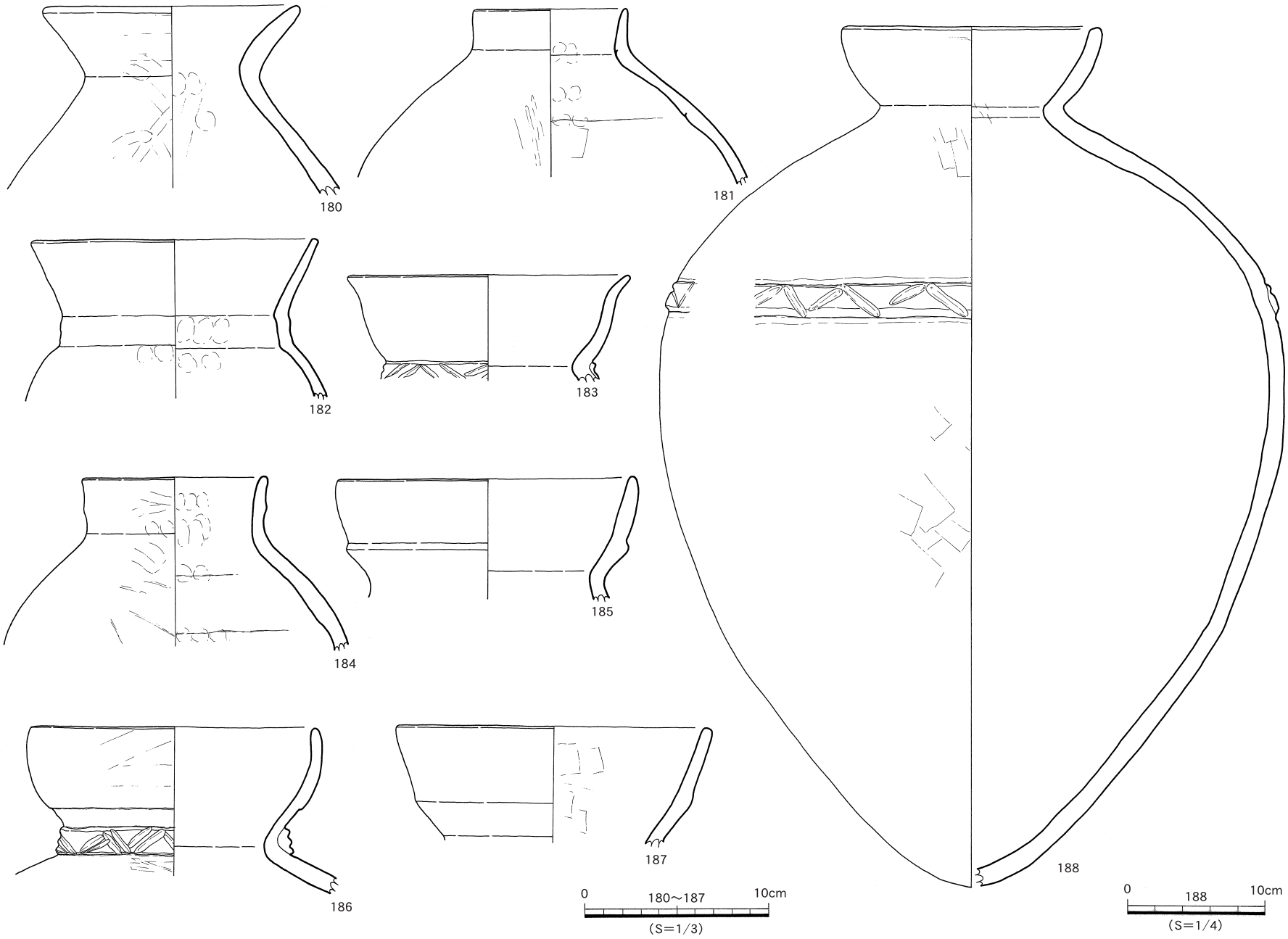
第219図　竪穴住居跡17号出土遺物①



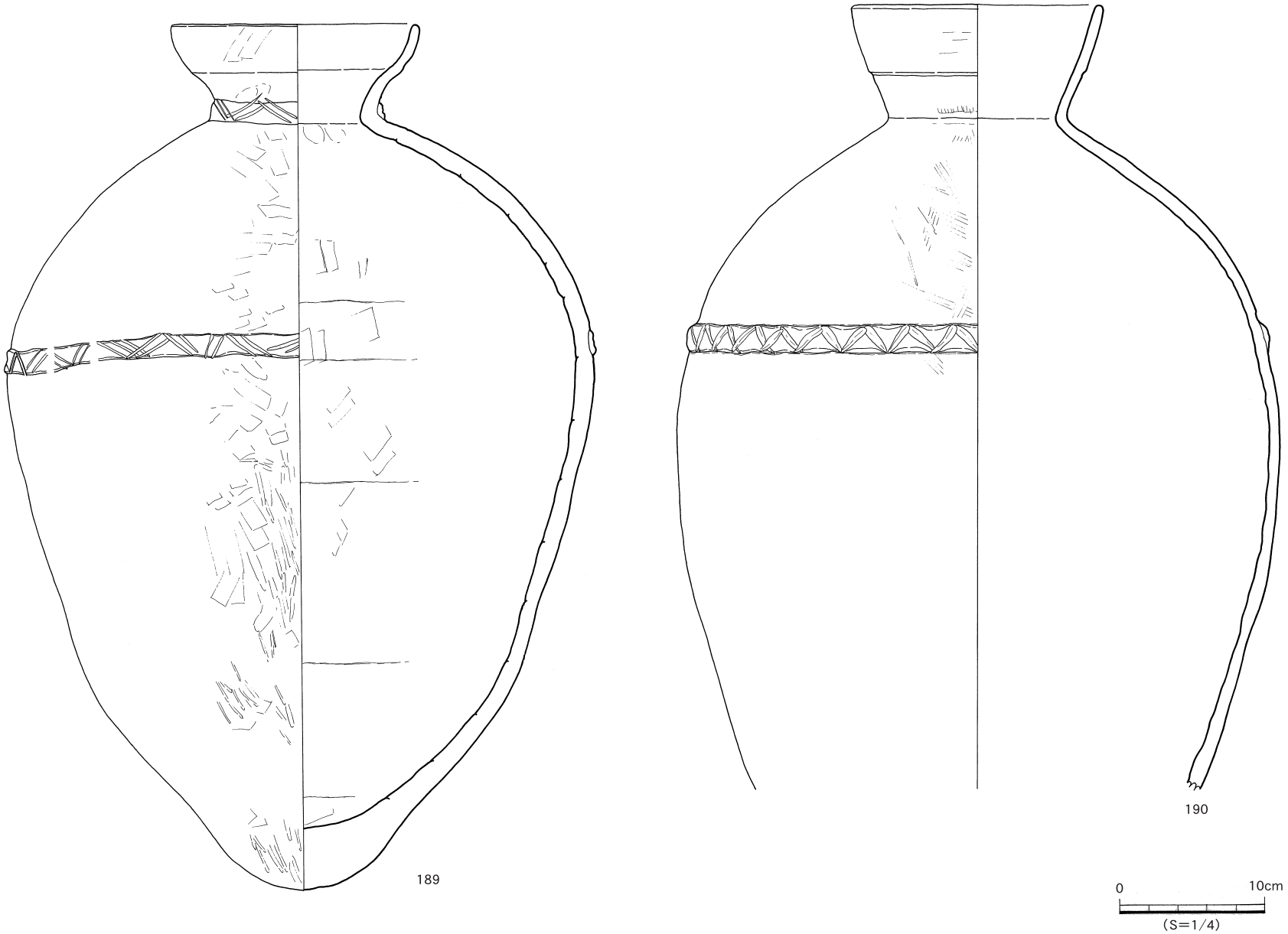
第220図　竪穴住居跡17号出土遺物②



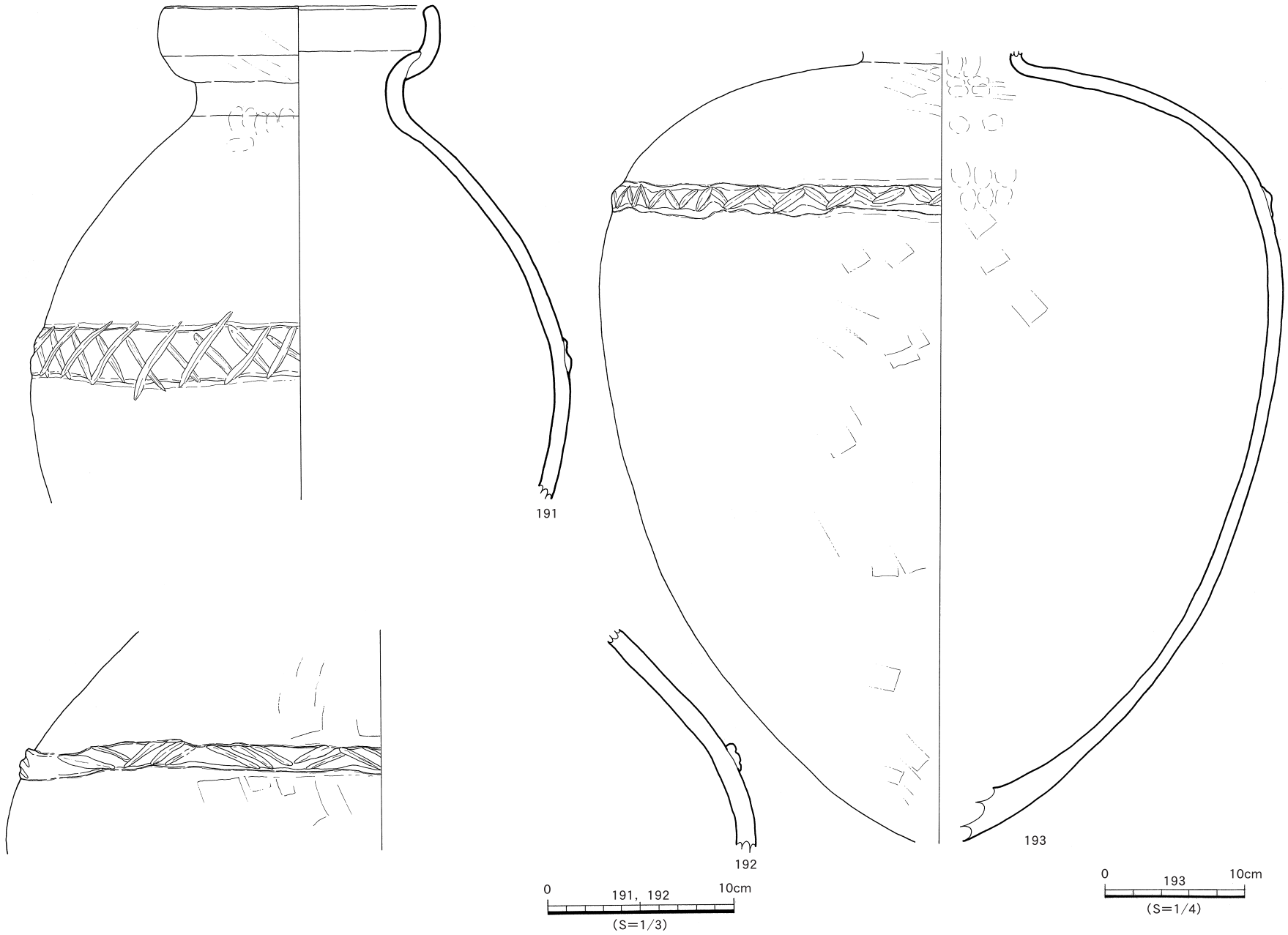
第221図　竪穴住居跡17号出土遺物③



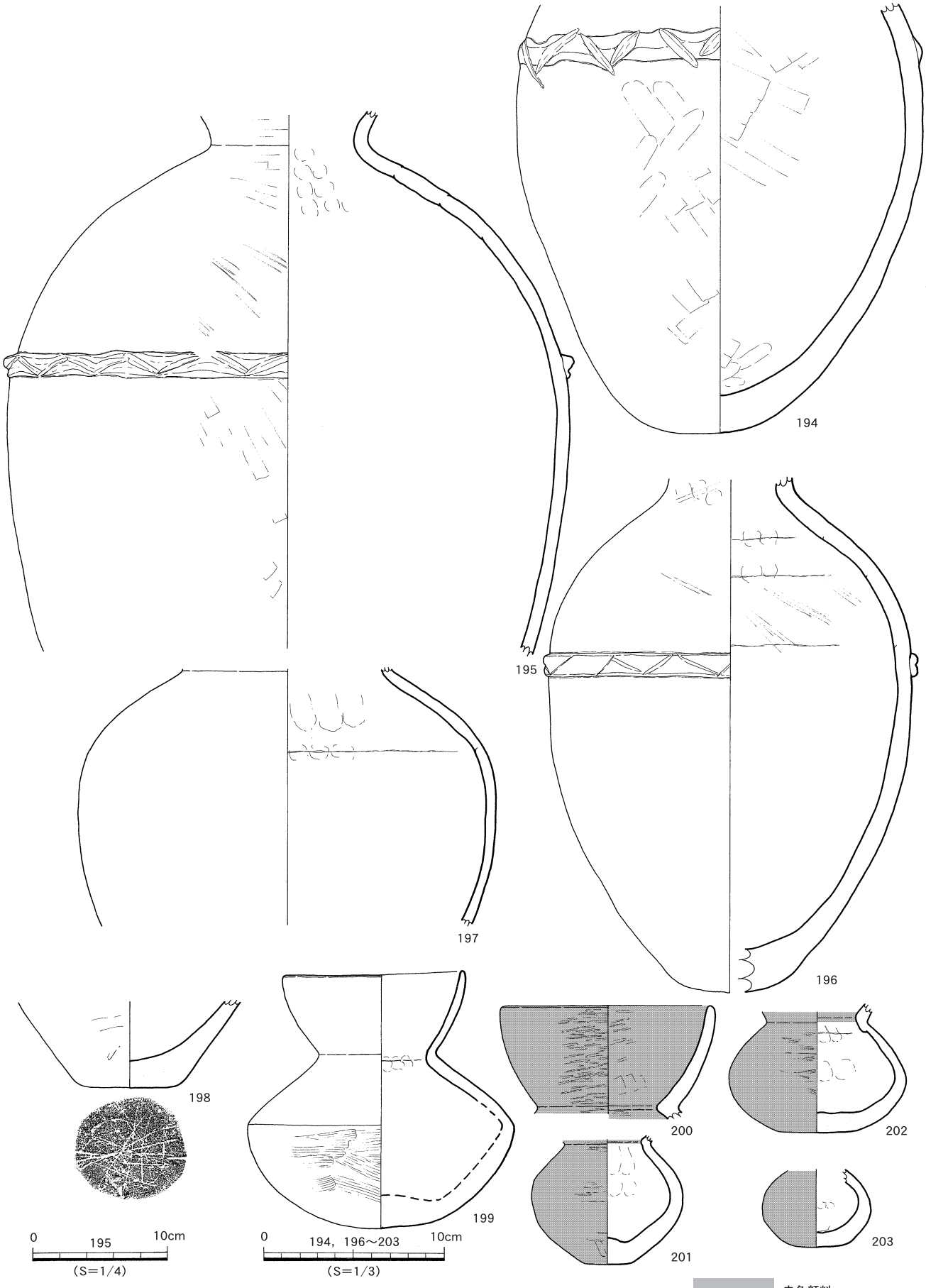
第222図　竪穴住居跡17号出土遺物④



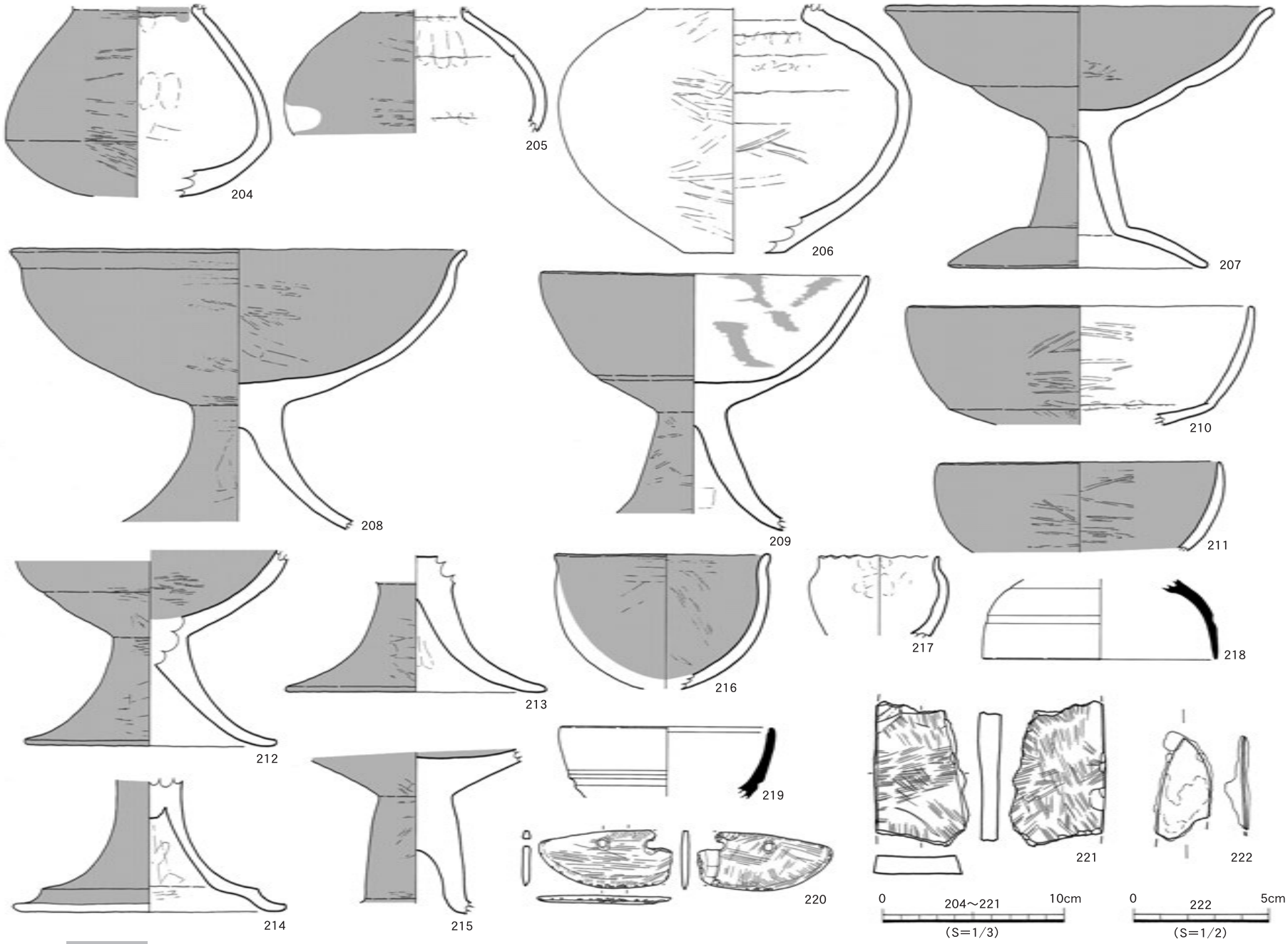
第223図　竪穴住居跡17号出土遺物⑤



第224図　竪穴住居跡17号出土遺物⑥



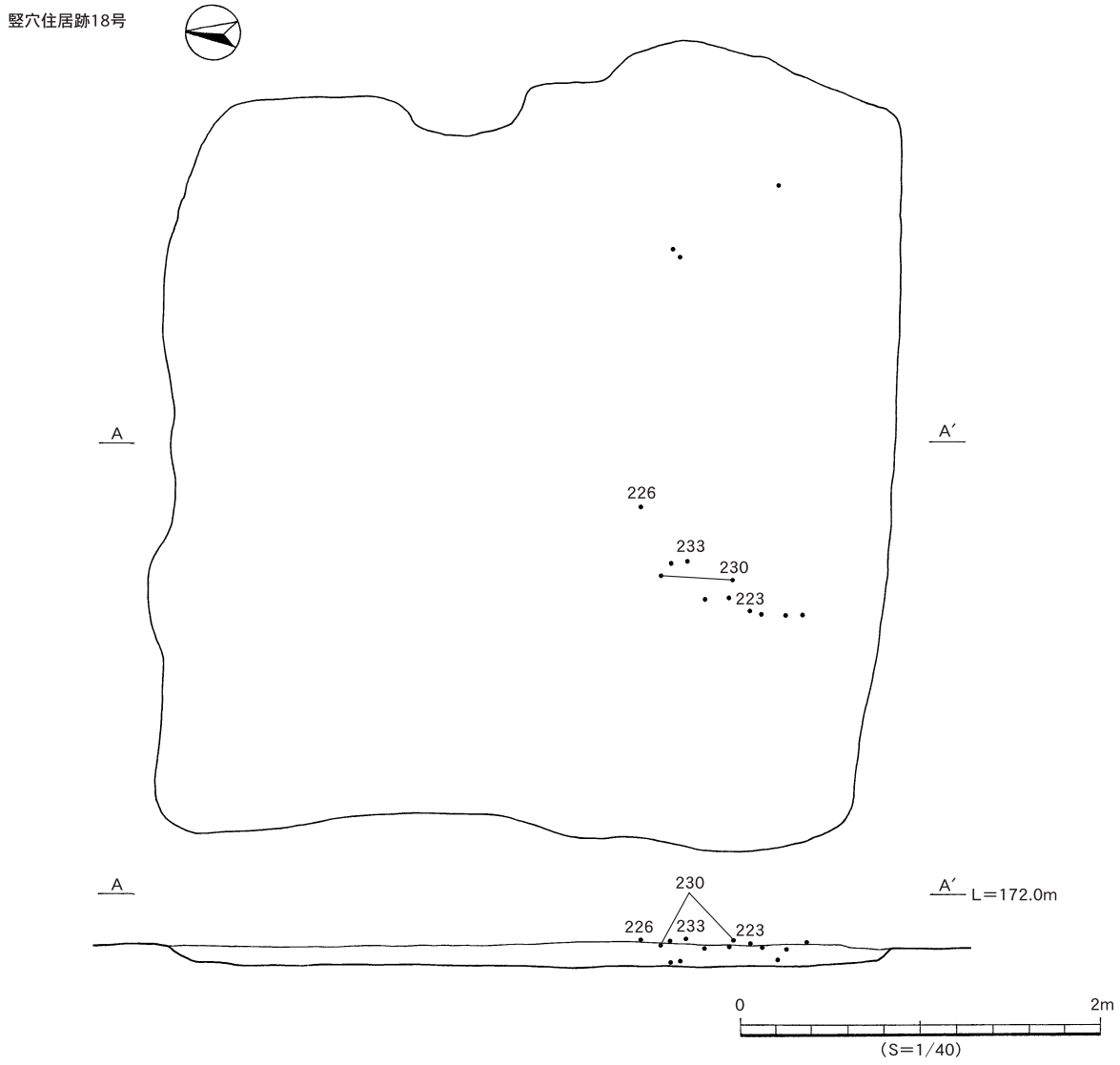
第225図　竪穴住居跡17号出土遺物⑦



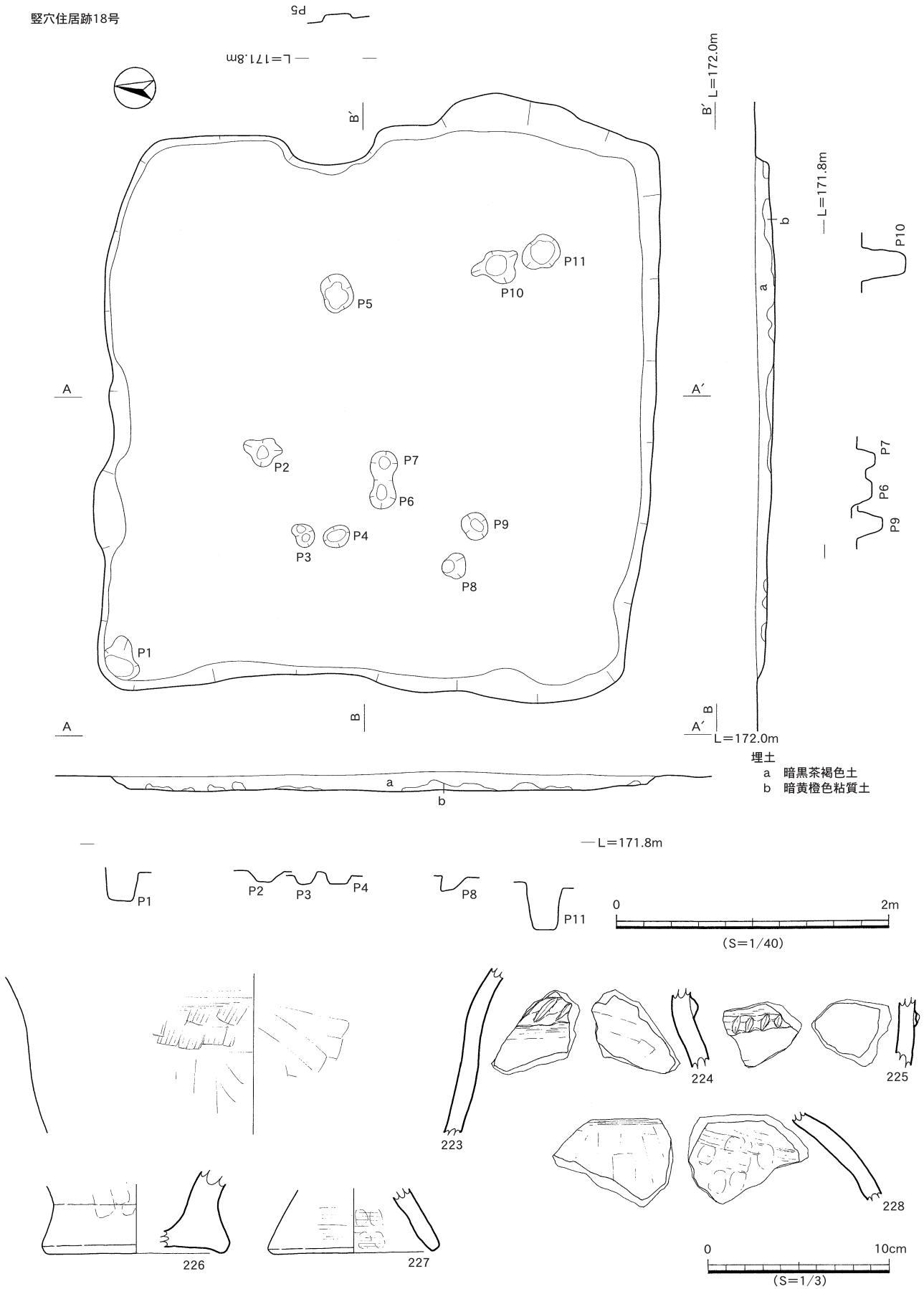
第226図　竪穴住居跡17号出土遺物⑧

竪穴住居跡18号（第227～229図）

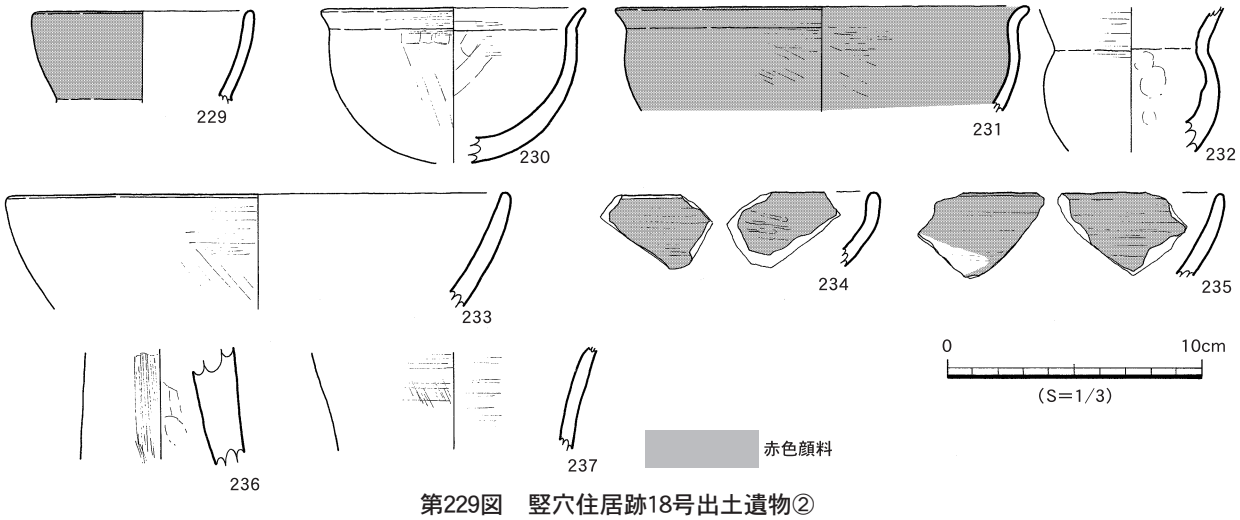
K－8区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.1m，短辺4.1mの隅丸方形で，東側にやや入り込むプランが認められた。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。硬化面等は見られず，埋土bがやや硬質土であったためにこの広がりを追いかけて床面を判断した。柱穴などの付帯施設の確認は，この層を掘り下げながら検出に努め，その結果，11基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりしなかった。遺物は，総点443点でこの内の15点を図化した。223は口縁端部を欠く甕である。口縁部は外反し，内外面には稜は見られない。胴部は僅かに膨らみを帯びている。224・225は甕の胴部突帯付近の破片である。226・227は甕の底部片である。226は平底に近い形状で，わずかに上げ底状を呈する。227は，断面形状から鉢の底部である可能性が考えられる。228は壺の頸部から胴部上半にかけての破片である。径を復元することは出来なかったが，比較的小型であり坩の可能性も考えられる。229は坩の口縁部片である。口縁部が内湾し，胴部との接合部付近で欠損している。230は小型の鉢である。口縁部が外反し内外面に稜を有する。胴部は丸みを帯びて丸底の底部へと至る。231も230の口縁部形状に類似するが，内面の稜は見られない。233～236は高坏の破片である。これらの遺物は，その大半を一括して取り上げたために図示することは出来なかったが，南側に比較的集中して出土し，北側からはほとんど出土しないという特徴が見られた。



第227図　竪穴住居跡18号遺物出土状況



第228図　竪穴住居跡18号・出土遺物①

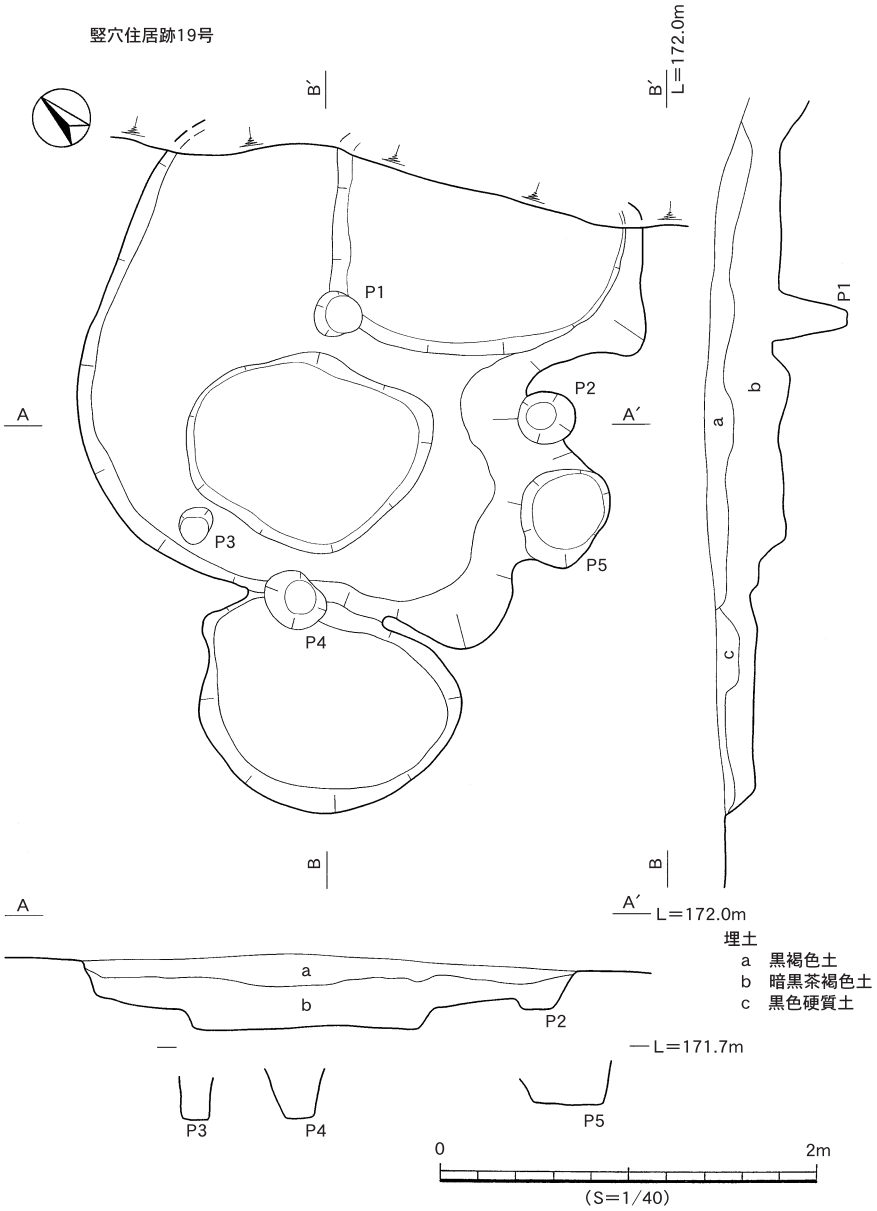


第229図　竪穴住居跡18号出土遺物②

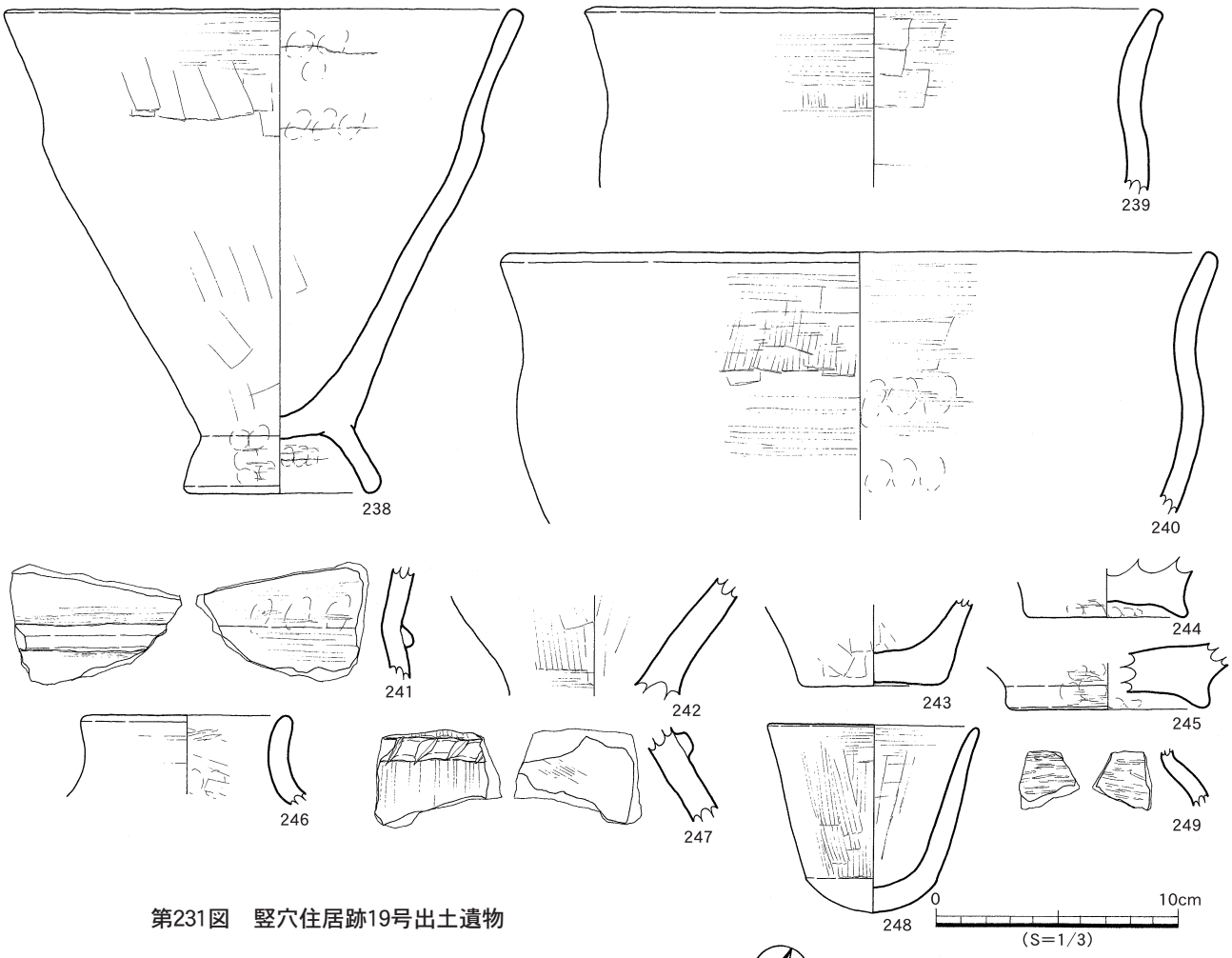
竪穴住居跡19号（第230・231図）

K・L－8・9区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.4m，短辺2.8mで，東側が削平されていた。検出当初は，略方形プランを基調として南側で楕円形の土坑と切り合っているように見えたため，土坑と住居との切り合い関係を想定した2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。土坑と住居は検出時の埋土こそわずかな色調の違いが見られたが，掘り下げを進めるにつれ両者は同一のものである可能性が高くなり，一連の遺構として記録を行った。床面には硬化面等は確認されず，住居内には先の土坑の他に2基の土坑状のプランが確認された。柱穴などの付帯施設は，床面を除去した段階で5基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは明確でないが，出土した炭化物は放射性炭素年代測定を実施し，1,710±20yrBPという結果が示されている。遺物は，総点451点でこの内の12点を図化した。

238は，小型の甕である。口縁部が外傾し，外面には掻き上げ状の調整によって段を有する。胴部は直線的で，底部はハ字状の脚を有している。239・240は口縁部が外反し胴部が膨らむ器形を有する。内外面には稜が見られない。



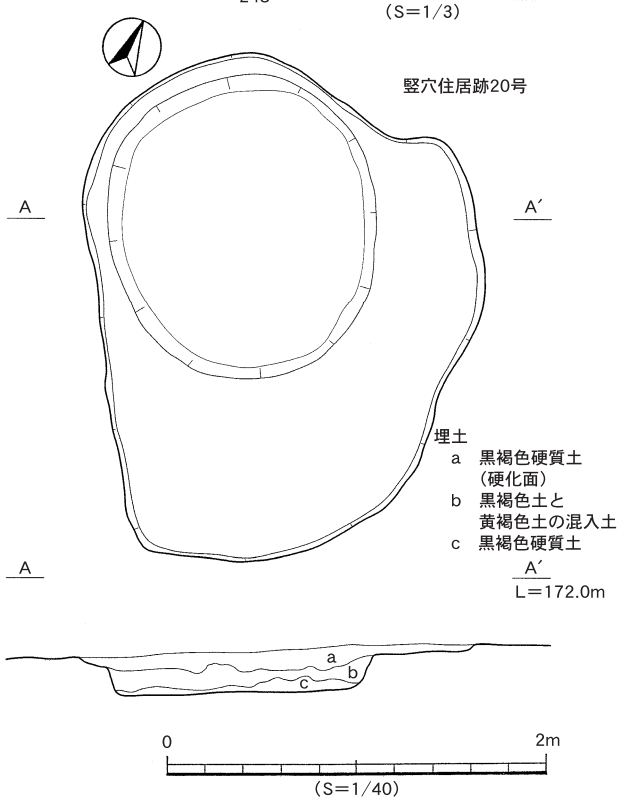
第230図　竪穴住居跡19号



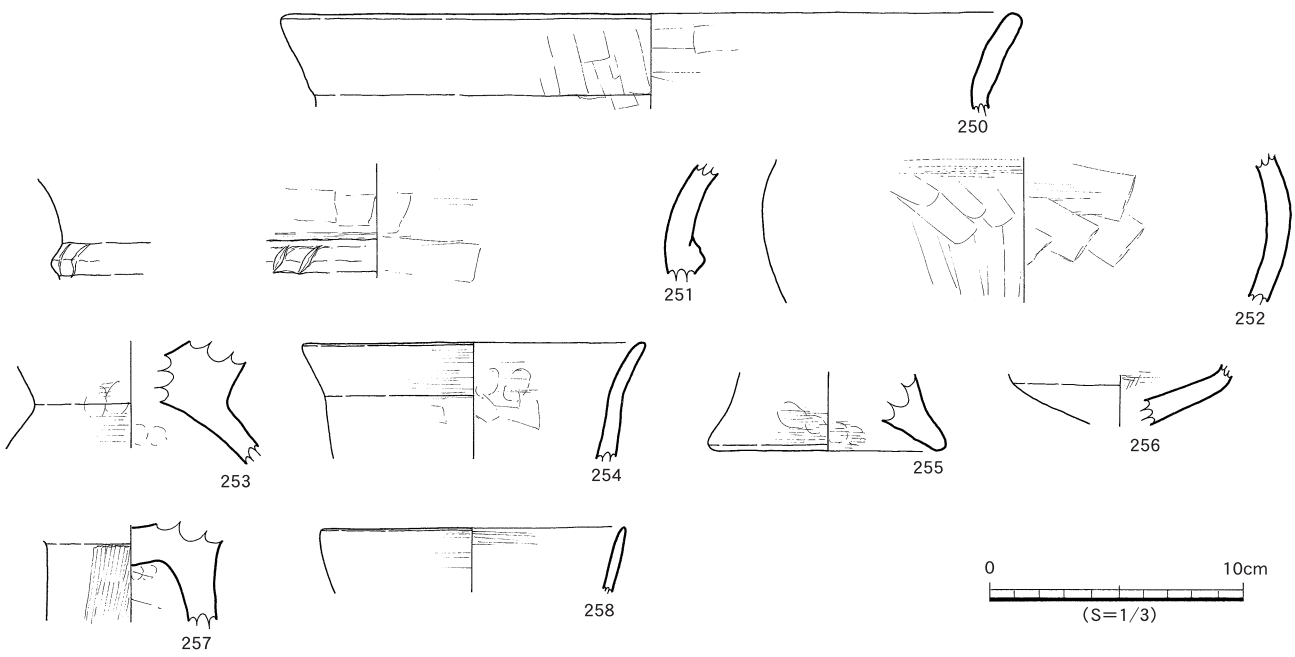
第231図　竪穴住居跡19号出土遺物

竪穴住居跡20号（第232・233図）

K－9区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.7m，短辺2.1mの楕円形に近い不定形で，検出時既に床面と思われる硬化面が広がっていた。また，北側に偏ってやや黒色の強い円形プランが見られたため，調査は，この強い黒色プランの中心を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，硬化面を除去しながら作業を進めた。北側は円形土坑になったが，硬化面はこの上面に連続している。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去しながら確認作業を進めていったが，土坑以外に検出されなかった。炉・焼土や炭化物の広がりもはっきりとしない。遺物は，総点177点が出土しこの内の9点を図化した。250は甕の口縁部である。外面に稜が見られる。251は，甕の口縁端部を欠くものである。252は壺の胴部片であるが，胴部の膨らみ具合などから大きめの坩の可能性も考えられる。



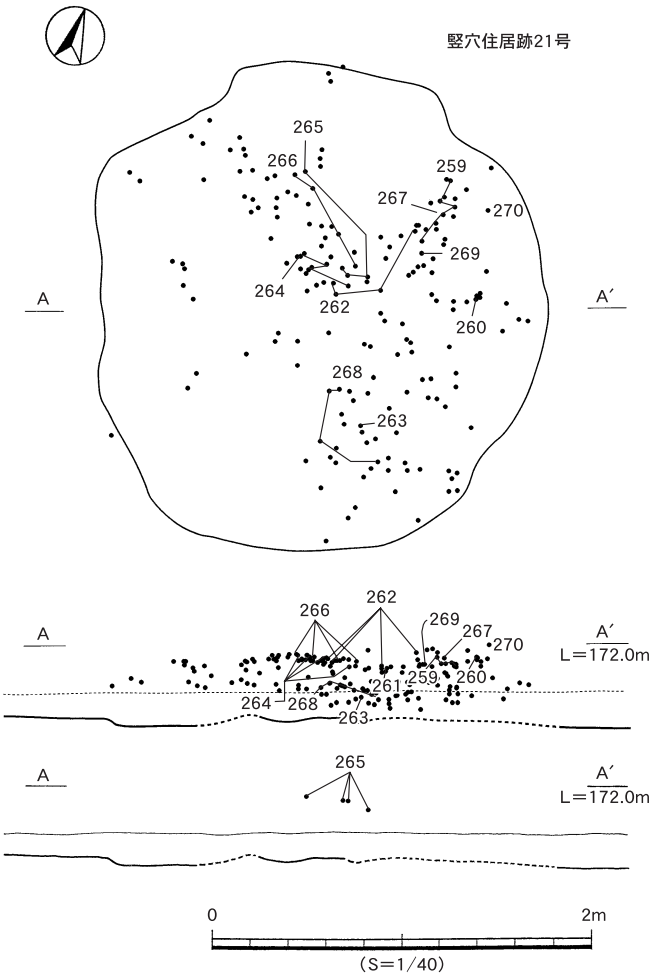
第232図　竪穴住居跡20号



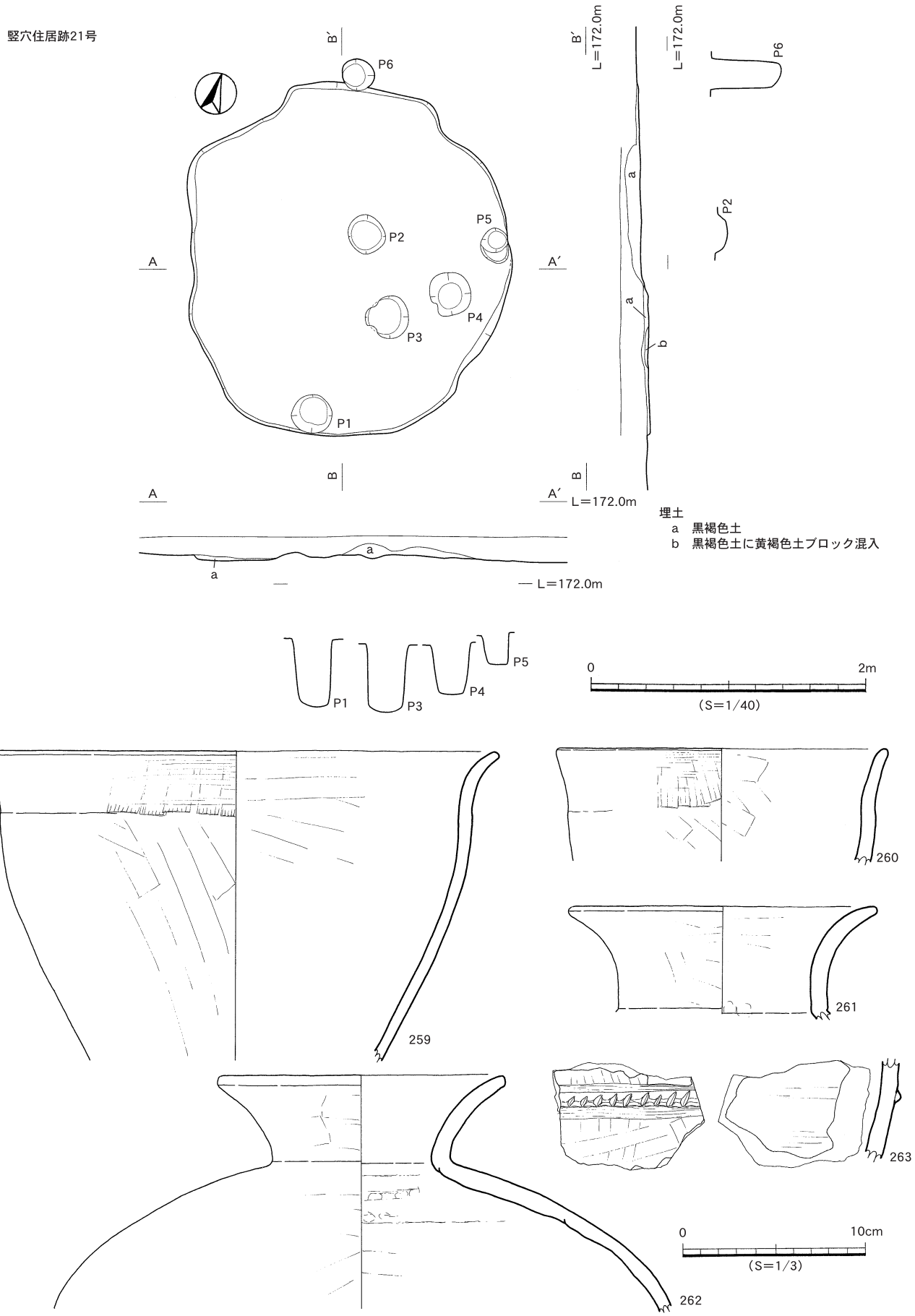
第233図　竪穴住居跡20号出土遺物

竪穴住居跡21号（第234～236図）

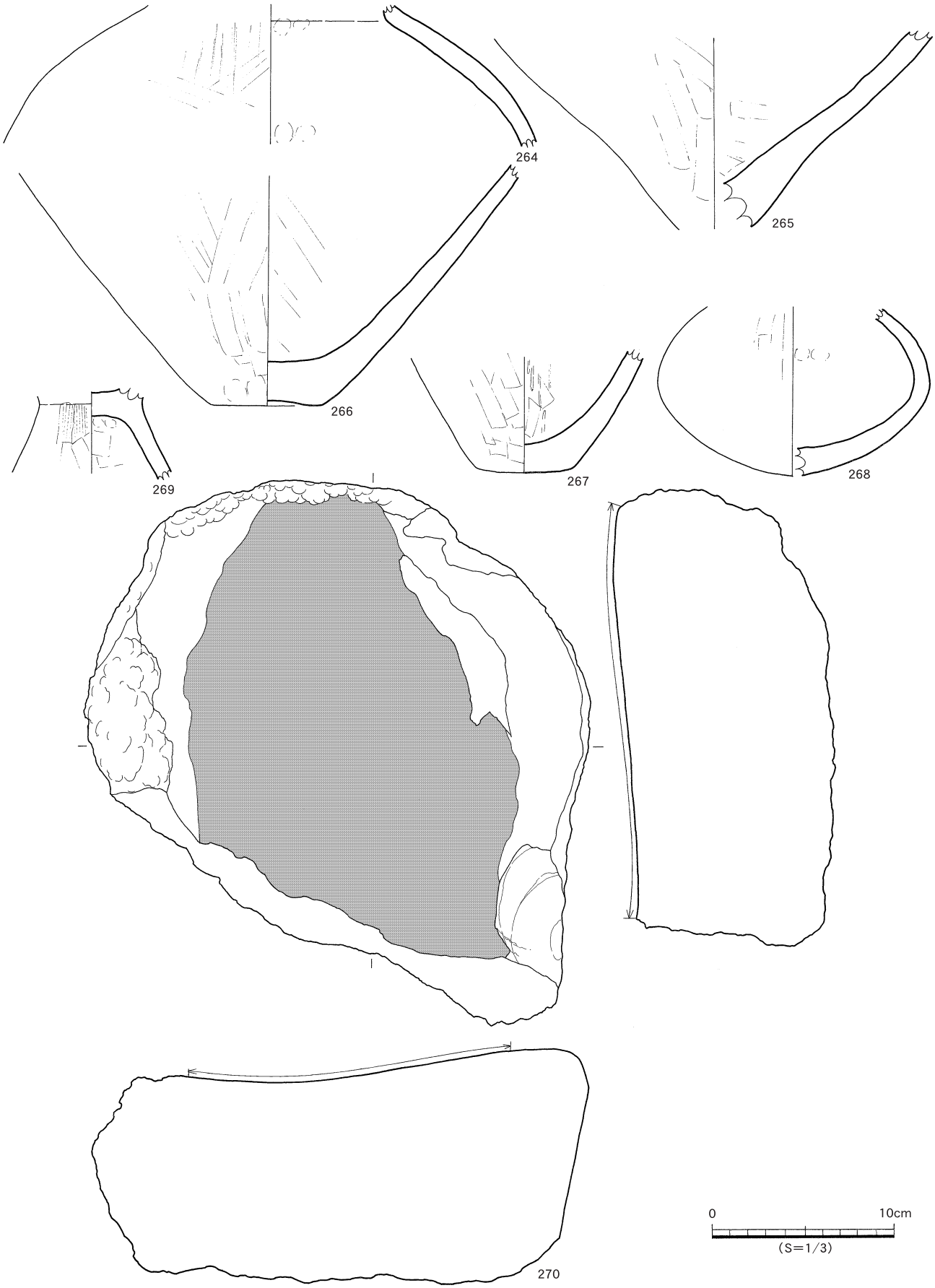
K－9・10区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.6m，短辺2.4mの隅丸長方形で，石皿等の遺物が集中したことでプランをつかむことができた。だが，周辺の掘り下げも同時に進めていたために，埋土の大半は包含層として掘り下げており，遺物周辺に埋土をわずかに残すのみとなってしまった。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始したが，既に遺物の柱断面に硬化面が見えており，この面を床面と判断して記録を行った。炉・焼土や炭化物の広がりは捉えることができなかった。柱穴などの確認は，硬化面を除去して行い，6基を確認することが出来た。ただし，P6に関しては残存する床面立ち上がりより外側で検出されたためにこの竪穴住居跡に伴うのかは不明である。遺物は，総点で376点が出土しこの内の12点を図化した。259は口縁部が外反し，外面には掻き上げ状の調整により稜が形成される。胴部は僅かに膨らんでいる。260は比較的径が小さい。外面には259と同様の稜が形成されるが,口縁部の外反度は小さい。261は口縁部が外反し，頸部に僅かではあるが直線的な部分が見られる壺である。262は頸部が短い。胴部内面には粘土の接合面を残している。265は壺の底部付近と思われる。厚みのある尖り気味の丸底を呈するものと思われる。268は坩である。胴部には屈曲部を持たず，胴部球状の器形を呈している。270は大型の石皿である。最大厚が12㎝ある。



第234図　竪穴住居跡21号遺物出土状況



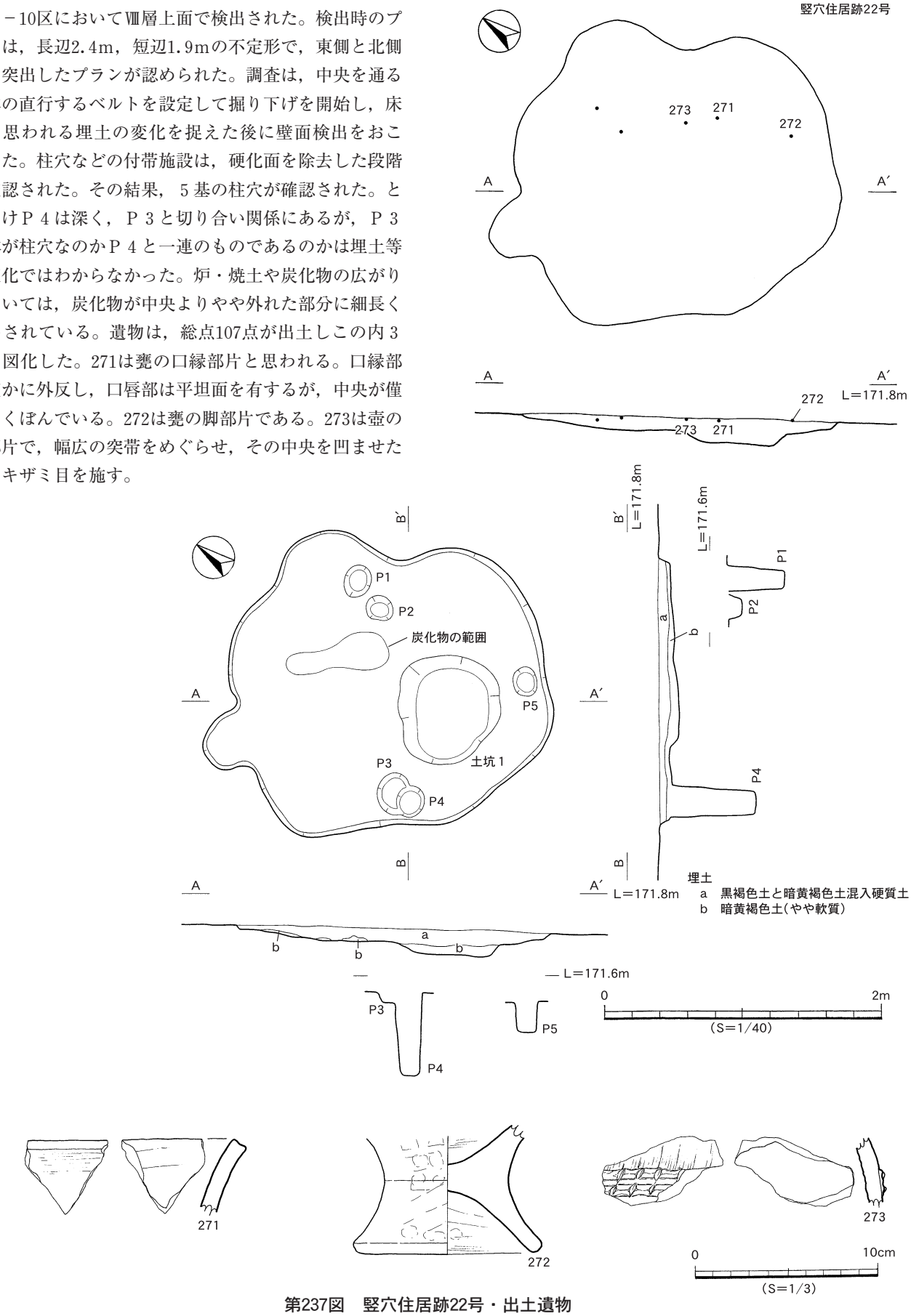
第235図　竪穴住居跡21号・出土遺物①



第236図　竪穴住居跡21号出土遺物②

竪穴住居跡22号（第237図）

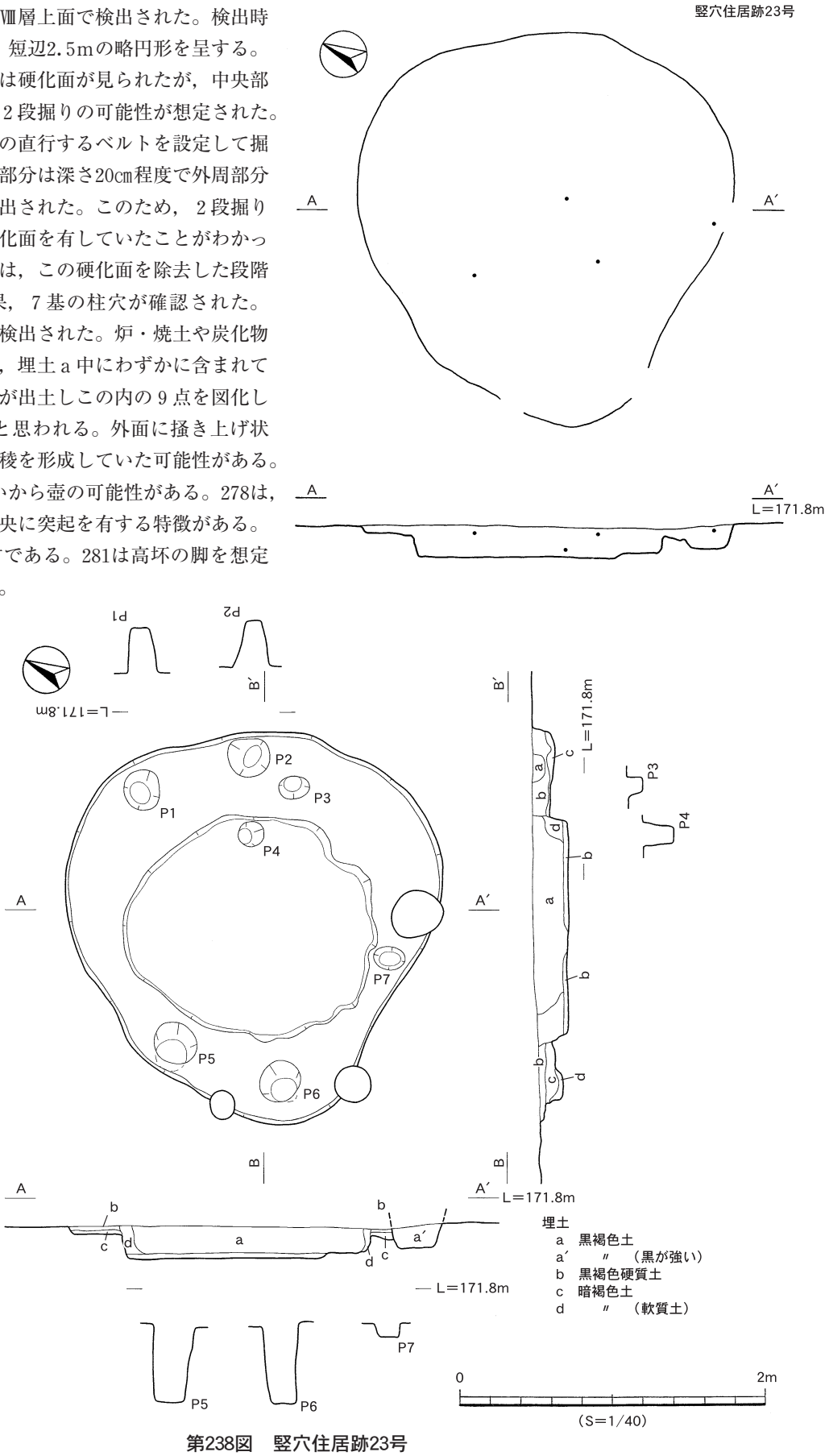
K－10区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.4m，短辺1.9mの不定形で，東側と北側とに突出したプランが認められた。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で確認された。その結果，５基の柱穴が確認された。とりわけＰ４は深く，Ｐ３と切り合い関係にあるが，Ｐ３自体が柱穴なのかＰ４と一連のものであるのかは埋土等の変化ではわからなかった。炉・焼土や炭化物の広がりについては，炭化物が中央よりやや外れた部分に細長く検出されている。遺物は，総点107点が出土しこの内３点を図化した。271は甕の口縁部片と思われる。口縁部が僅かに外反し，口唇部は平坦面を有するが，中央が僅かにくぼんでいる。272は甕の脚部片である。273は壺の胴部片で，幅広の突帯をめぐらせ，その中央を凹ませた後にキザミ目を施す。



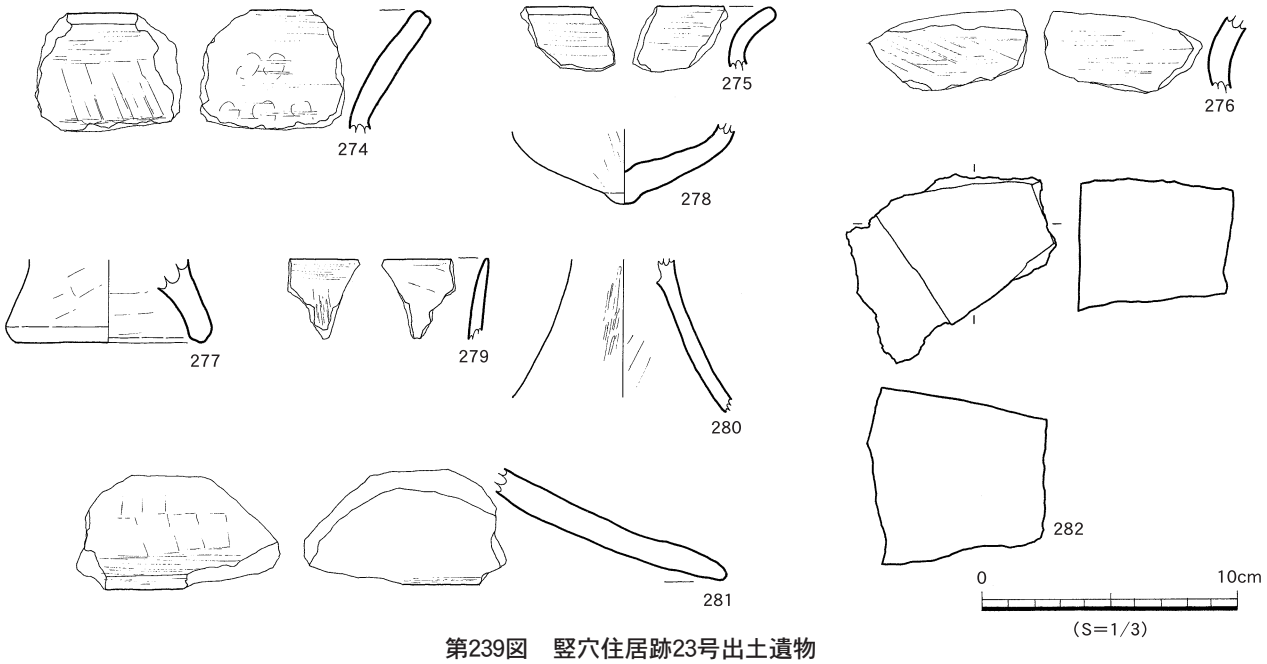
第237図　竪穴住居跡22号・出土遺物

竪穴住居跡23号（第238・239図）

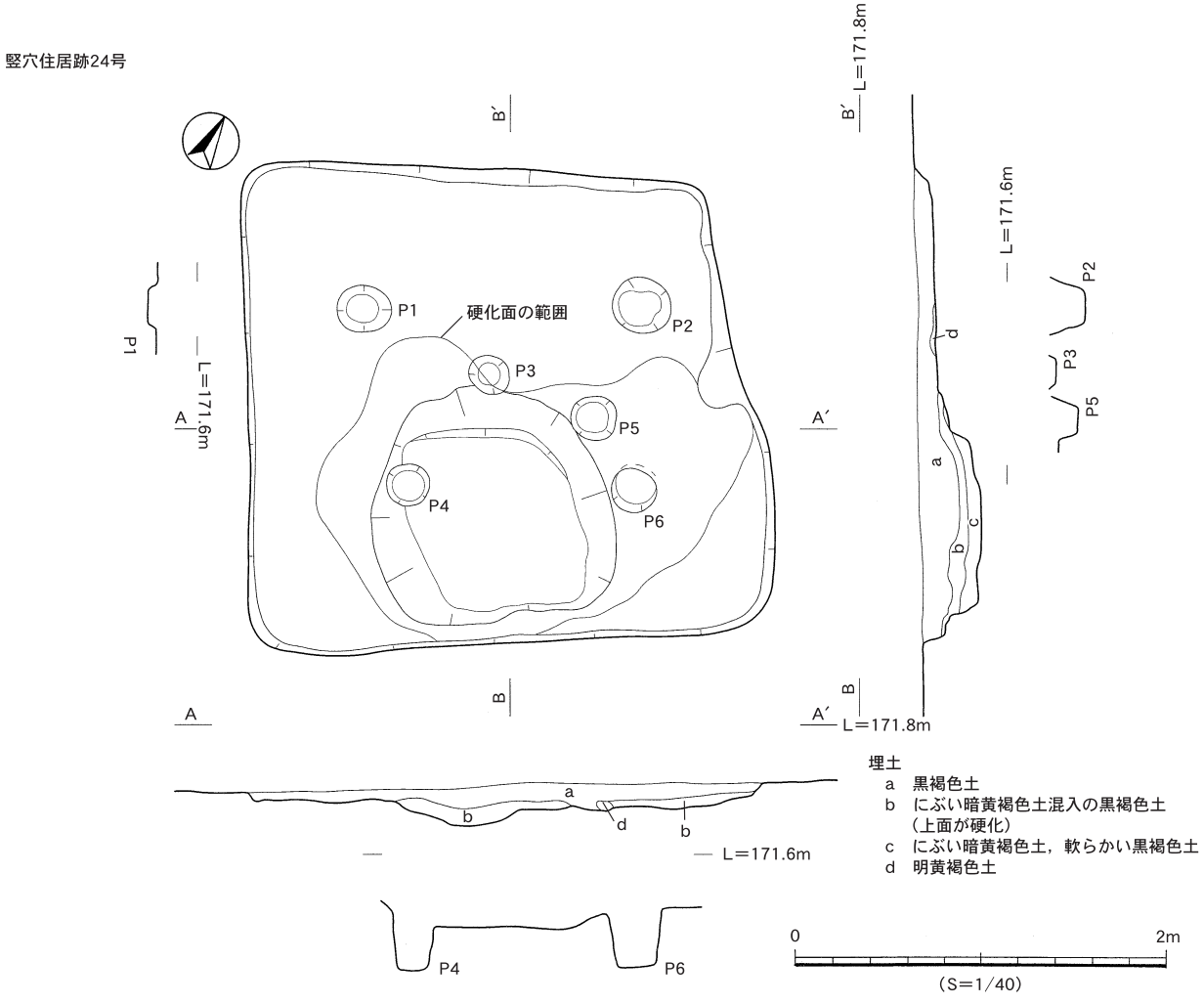
Ｋ－９・10区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.6m，短辺2.5mの略円形を呈する。検出時，既に外周部分には硬化面が見られたが，中央部分には硬化面は見られず２段掘りの可能性が想定された。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。中央部分は深さ20㎝程度で外周部分と同じように硬化面が検出された。このため，２段掘り状のプランで両面共に硬化面を有していたことがわかった。柱穴などの付帯施設は，この硬化面を除去した段階で確認された。その結果，７基の柱穴が確認された。Ｐ５・６は深く，斜位に検出された。炉・焼土や炭化物の広がりは明瞭でないが，埋土ａ中にわずかに含まれている。遺物は，総点89点が出土しこの内の９点を図化した。274は甕の口縁部片と思われる。外面に掻き上げ状の痕跡が残されており，稜を形成していた可能性がある。275は口縁部の外反度合いから壺の可能性がある。278は，坩の底部である。底部中央に突起を有する特徴がある。２は口縁部が直線的な坩である。281は高坏の脚を想定したが蓋の可能性もある。



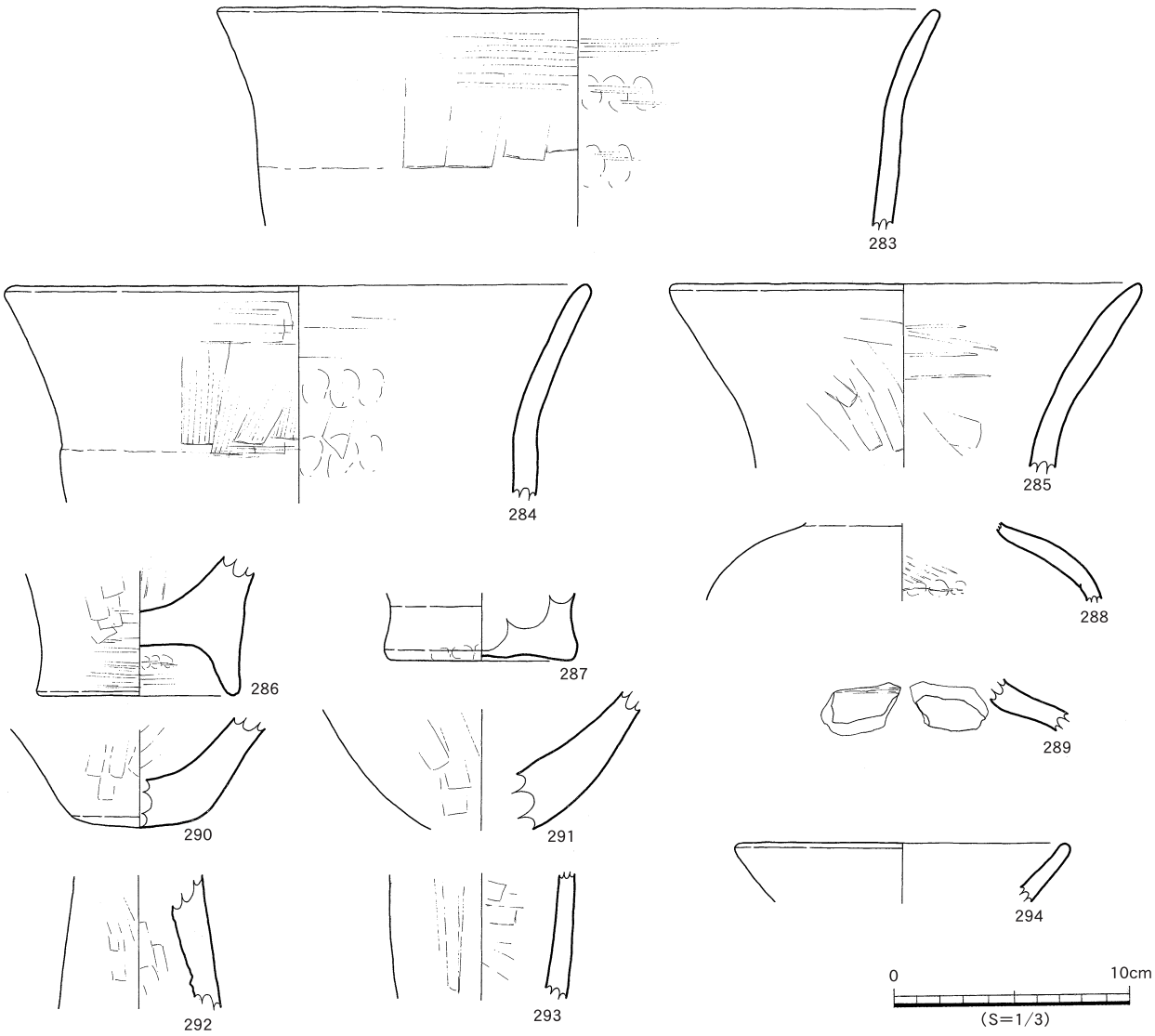
第238図　竪穴住居跡23号



第239図　竪穴住居跡23号出土遺物



第240図　竪穴住居跡24号

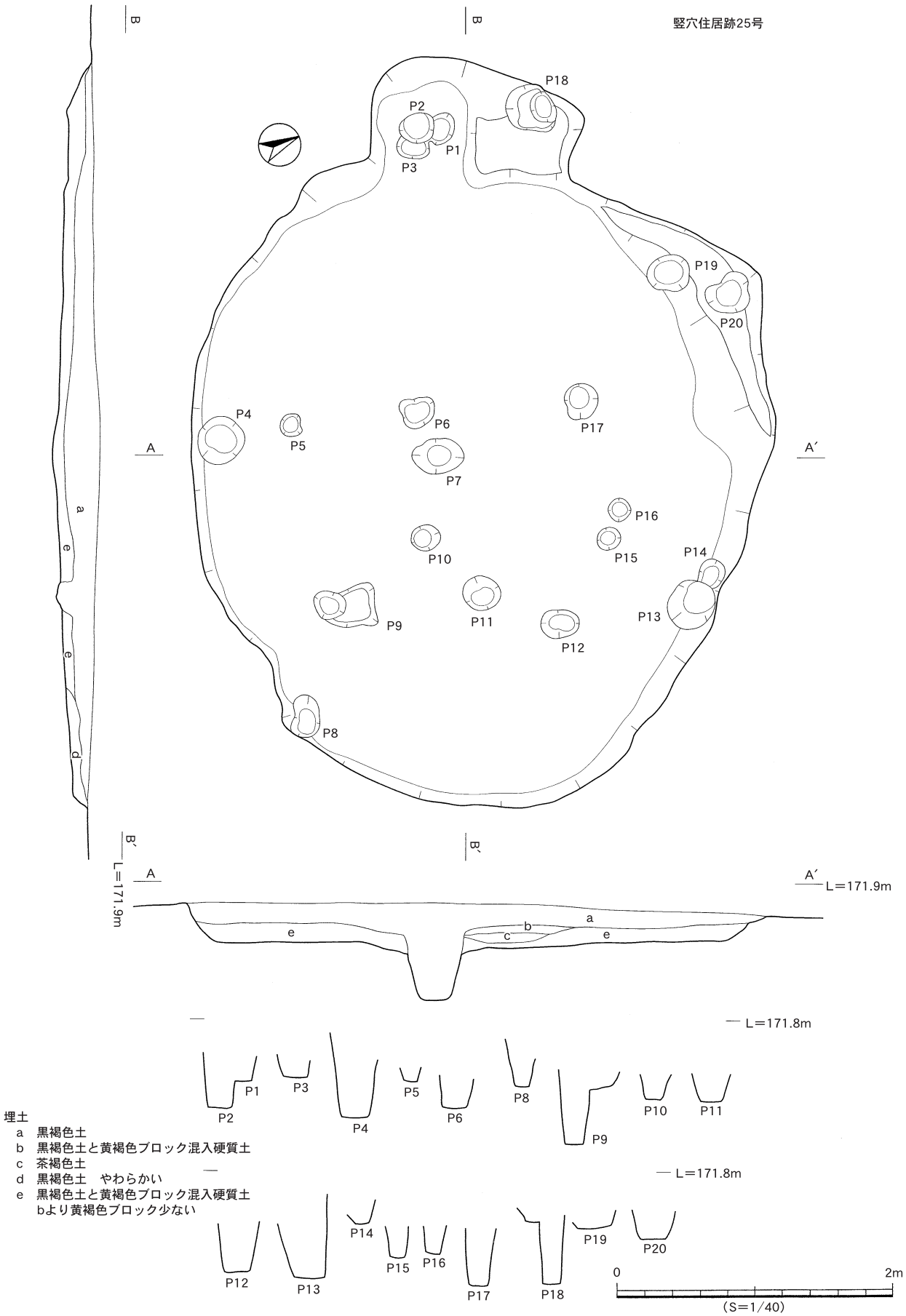


第241図　竪穴住居跡24号出土遺物

竪穴住居跡24号（第240・241図）

Ｊ－10区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.8m，短辺2.6mの隅丸長方形で，東側がやや膨らんでいた。周辺の竪穴住居跡より埋土の色調が濃く，プランもしっかりとしている印象を受けた。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。硬化面は，住居南側に集中して検出され，これを記録した後に床面を全面的に除去して下部構造の把握に努めた。この結果，南側に方形土坑が検出された。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で６基の柱穴が確認された。Ｐ１・３は浅く，柱穴であるとは必ずしも断定できないがＰ２・４・５・６は前者と比べると深くしっかりとしている。炉・焼土や炭化物の広がりは明瞭なまとまりを見せないが，硬化面下で検出された土坑の埋土中には他と比べると比較的多くの炭化物が出土していた。遺物は，総点で468点が出土しこの内の12点を図化した。283は甕の口縁部片である。口縁部はやや外反し，胴部はあまり膨らまない。口縁部外面には掻き上げ状の調整が施され，外面には僅かに稜が形成される。284も283と同様であるが，口縁部がやや長い印象を受ける。285は甕として図化したが，口縁部断面が一定せず，口縁部中位で厚みを増す。胴部への移行に違和感があり，甕以外の器形である可能性もある。286は脚部が反らずに直線的である。287は平底である。288は小型の壺である。290と291は壺の底部と思われる。290は底面が胴部よりも厚く，僅かに平坦面も有する。



埋土
- a　黒褐色土
- b　黒褐色土と黄褐色ブロック混入硬質土
- c　茶褐色土
- d　黒褐色土　やわらかい
- e　黒褐色土と黄褐色ブロック混入硬質土
  bより黄褐色ブロック少ない

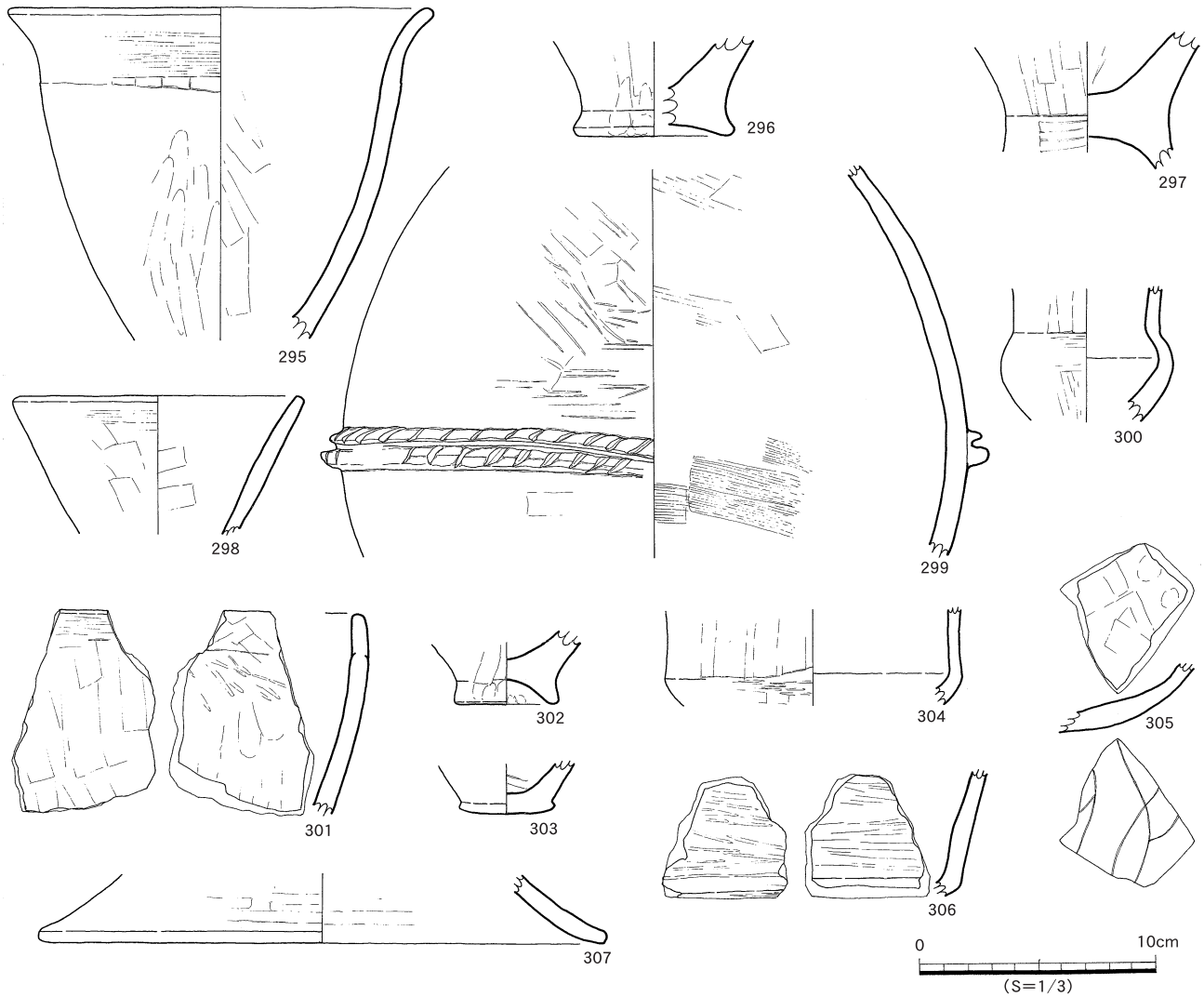
第242図　竪穴住居跡25号

竪穴住居跡25号（第242・243図）

Ｊ－10区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺5.1m，短辺4.2mの円形で，北西側にやや張り出し状の突出部が認められた。

調査は，張り出し部を通るベルトとこれに直交するベルトの２本を設定して掘り下げを開始した。床面と思われる埋土の変化は硬化面によって捉えることが出来た。この時点でＰ７が南北ベルトに接して検出されている。北側にはステップ状のプランが検出され，同時にＰ19・20が見られた。この部分は円形プランと思われたが，やや強い隅丸状になり他とはやや異なる。

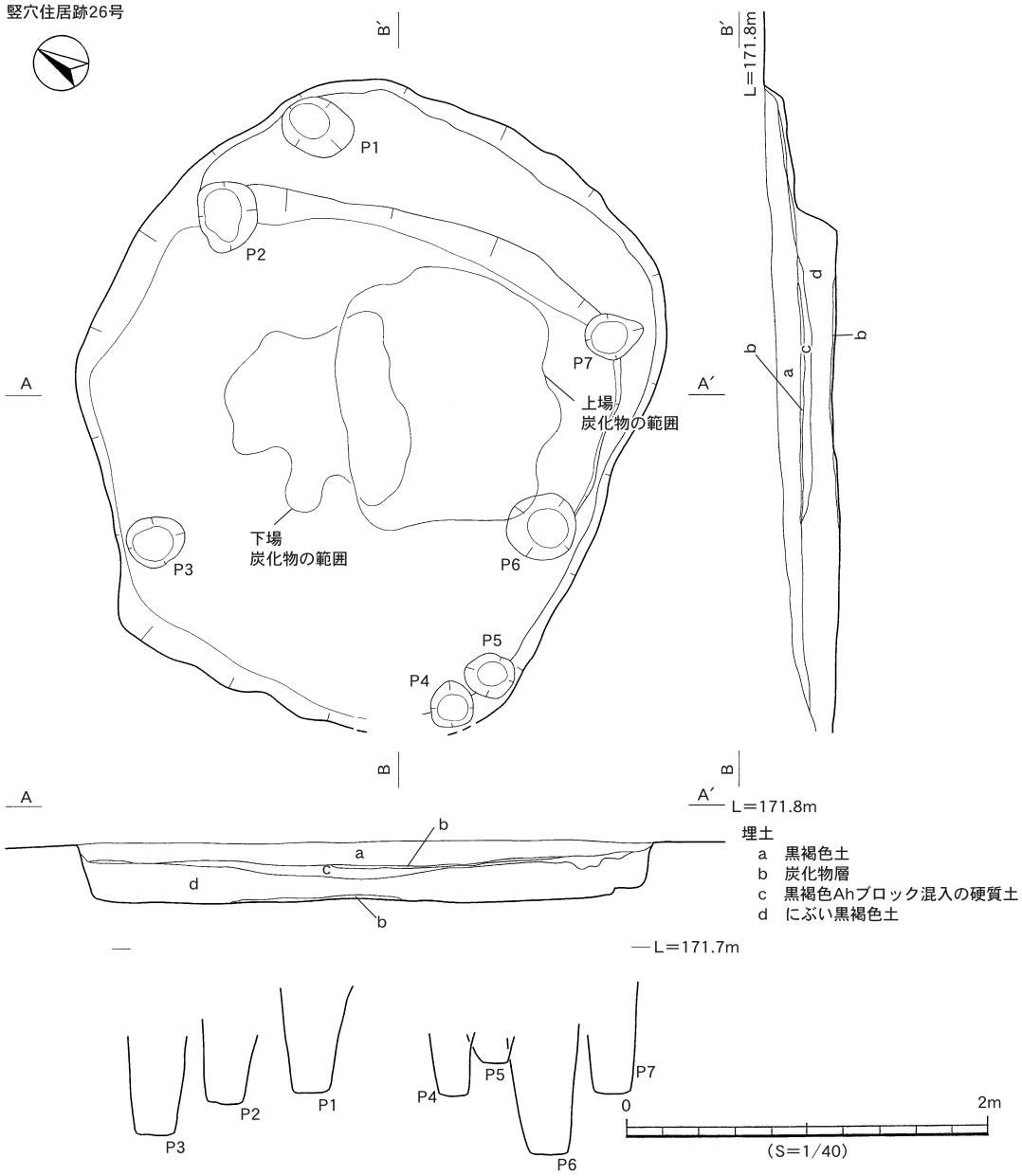
なお，柱穴などの付帯施設の確認は，硬化面を除去しながら確認作業を進めた。その結果，20基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしないがやや中央付近に炭の小片が僅かながらブロック状を呈していた。遺物は，総点で633点が出土しこの内の13点を図化した。295は比較的小型の甕である。口縁部が外反し，外面には掻き上げによる段を有する。胴部は僅かに膨らみ底部へ至る。296は甕の底部片である。脚は見られず，底部外端部を外へ張り出している。297はハ字状の脚を有する。299は壺の胴部片である。突帯に特徴があり，突帯貼り付け後に中央を大きく凹ませることであたかも２条突帯状を呈している。調整の方向などから図の通りの天地を想定したが，あるいは天地逆の可能性もある。300は坩である。301は，口縁部が内湾する器形を呈している。302・303は鉢の底部を想定した。303は平底に近く，外面端部が張り出す。304は坩の胴部片と思われるが，径が大きい感じがする。306・307は高坏である。306は直線的な胴部で，下半で強く屈曲する。307は高坏の脚部を想定した。305は坩ないしは壺の底部付近と思われる。外面に細沈線による螺旋状の施文が見られる。何らかの意匠であるのか，偶然のものなのかはっきりとしない。



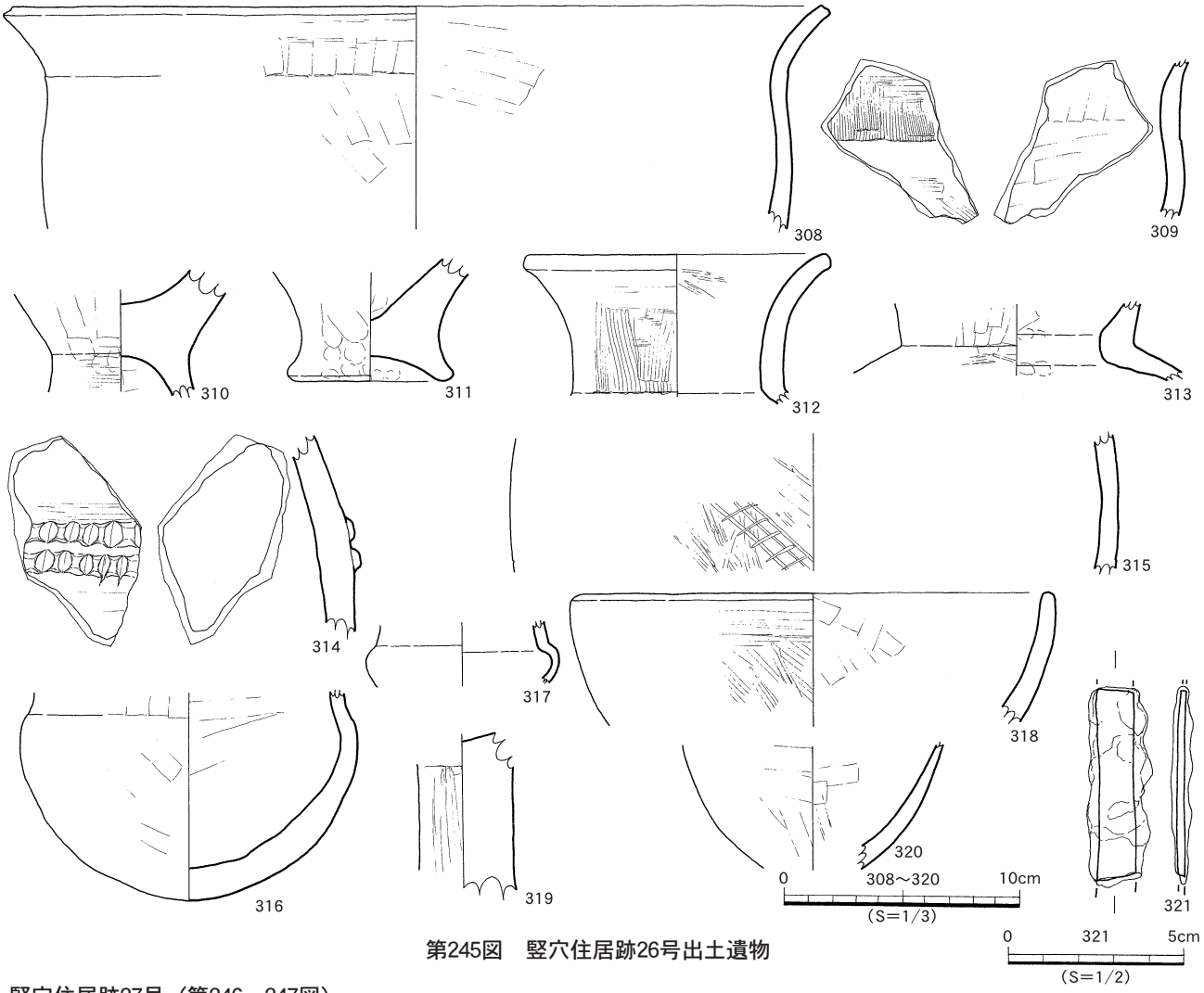
第243図　竪穴住居跡25号出土遺物

竪穴住居跡26号（第244・245図）

Ⅰ－10区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.5m，短辺3.1mのやや楕円形に近い隅丸方形であった。調査は，２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面と思われる埋土の変化は硬化面により捉えることが出来た。炭化物の集中も同時に住居のやや南側で検出できた。この時点で埋土等の記録を行い，硬化面を掘り下げたところ，北東部では黄褐色砂礫層が検出されたのに対して，他は埋土ｄが段落ちするように堆積していた。このことから，再度ベルトを設定して掘り下げたところ，下層から再度硬化面を検出することが出来た。さらに，Ｐ２～５・７がこの時点で確認され，先に検出されていたＰ１と併せて７基の柱穴を確認することが出来た。また，２段目のほぼ中央には炭化物の集中も見られた。この結果，段掘りや張り出し状のプランと言うより，内側の３ｍ×３ｍの隅丸方形プランが埋没ないし埋め戻された後に3.5m×3.1mの隅丸長方形プランが形成されたものと判断した。だが，Ｐ１を除く６基のピットがどちらの段階のものであるか明確に捉えることが出来なかった。遺物は，総点で1,278点が出土しこの内の14点を図化した。308は口縁部が外反し外面には掻き上げ状の調整により段が形成される。胴部は，僅かに膨らんでいる。口唇部には平坦面を有する。315は壺の可能性があるが，胴部が膨らまない。細沈線により施文が施されている。あるいはこれが貼付突帯を意味するもので，これを水平に図化すべきであったかもしれない。321は薄い長方形の鉄製品である。刃部を特定することが出来なかった。



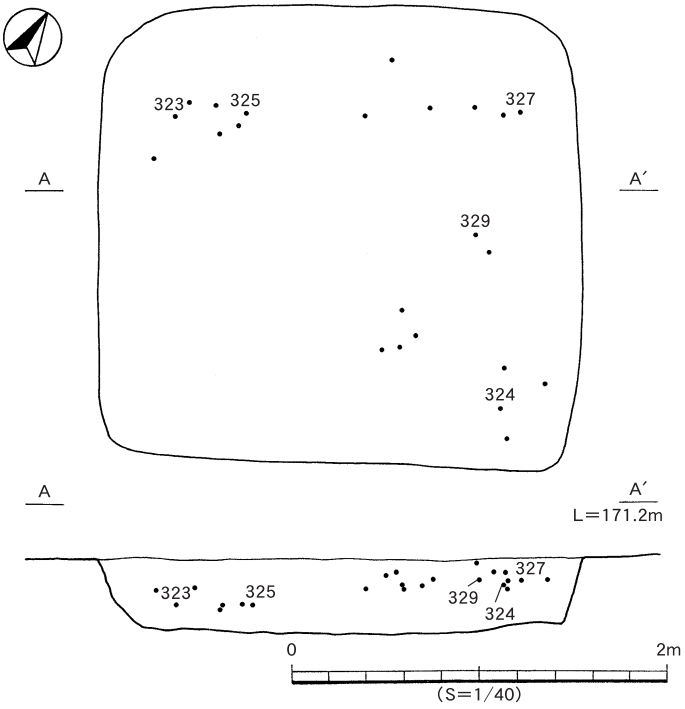
第244図　竪穴住居跡26号



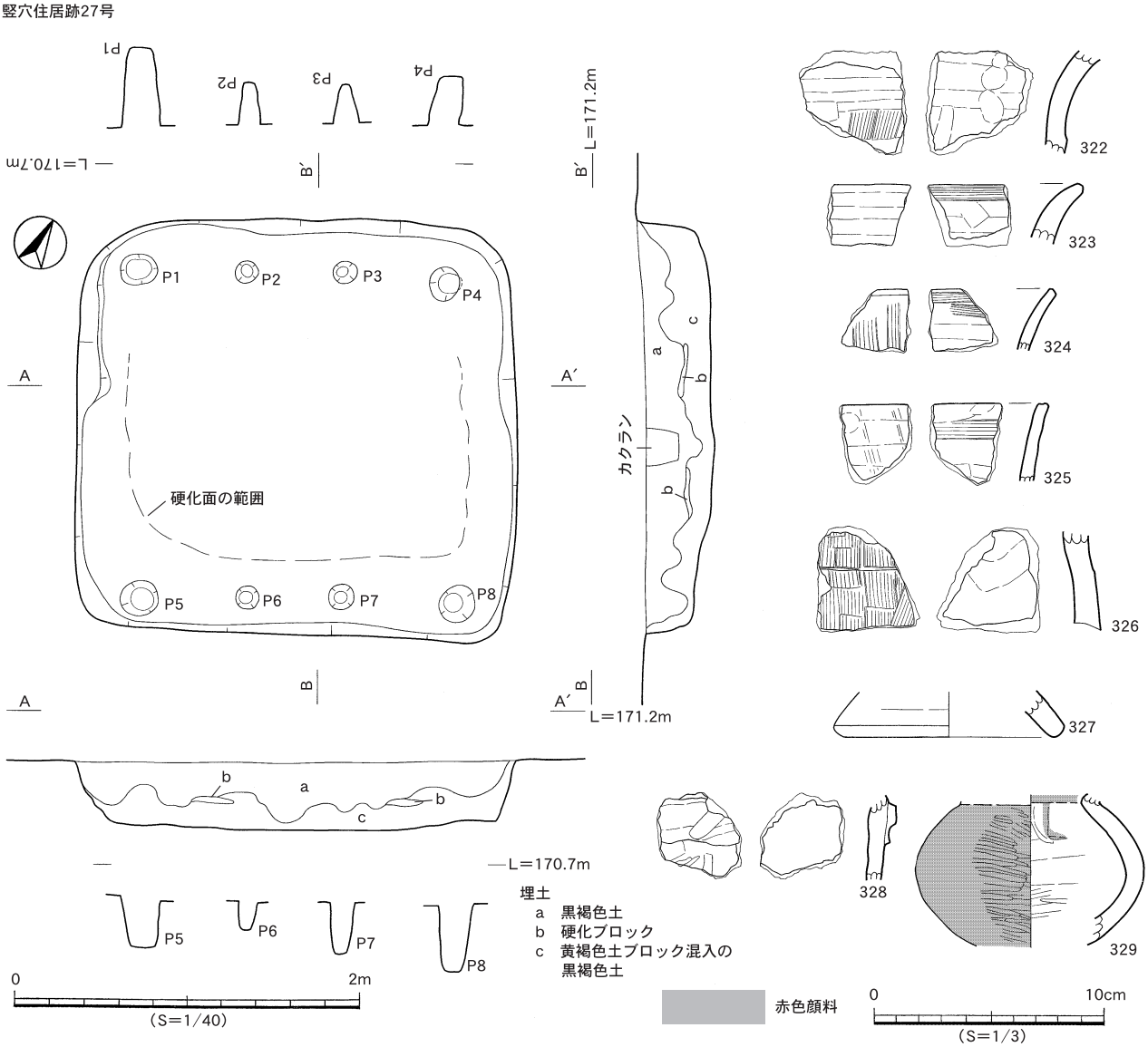
第245図　竪穴住居跡26号出土遺物

竪穴住居跡27号（第246・247図）

H－10・11区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.6m，短辺2.4mの隅丸長方形であるが上面において部分的な攪乱を受けていた。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土aとした黒褐色土はやや砂質が強く炭化物を含んでいた。この層の下に部分的に硬化した土のブロックが見られたためにここを床面と判断したが，一部にはこの範囲を掘むことができずに埋土cまで掘り下げた部分もある。埋土cを掘り下げると平坦になり，北・南側に4本ずつ柱穴が8基の柱穴が確認された。中心に近いP2・3・6・7が比較的径が小さく四隅に近いP1・4・5・8は径が大きくしっかりとしていた。遺物は，総点で190点が出土しこの内の8点を図化した。なお，埋土中の炭化物により年代測定を実施している。詳細は第4章に譲るが，395±15yrBPという遺物の時期よりも新しい分析結果が示されている。



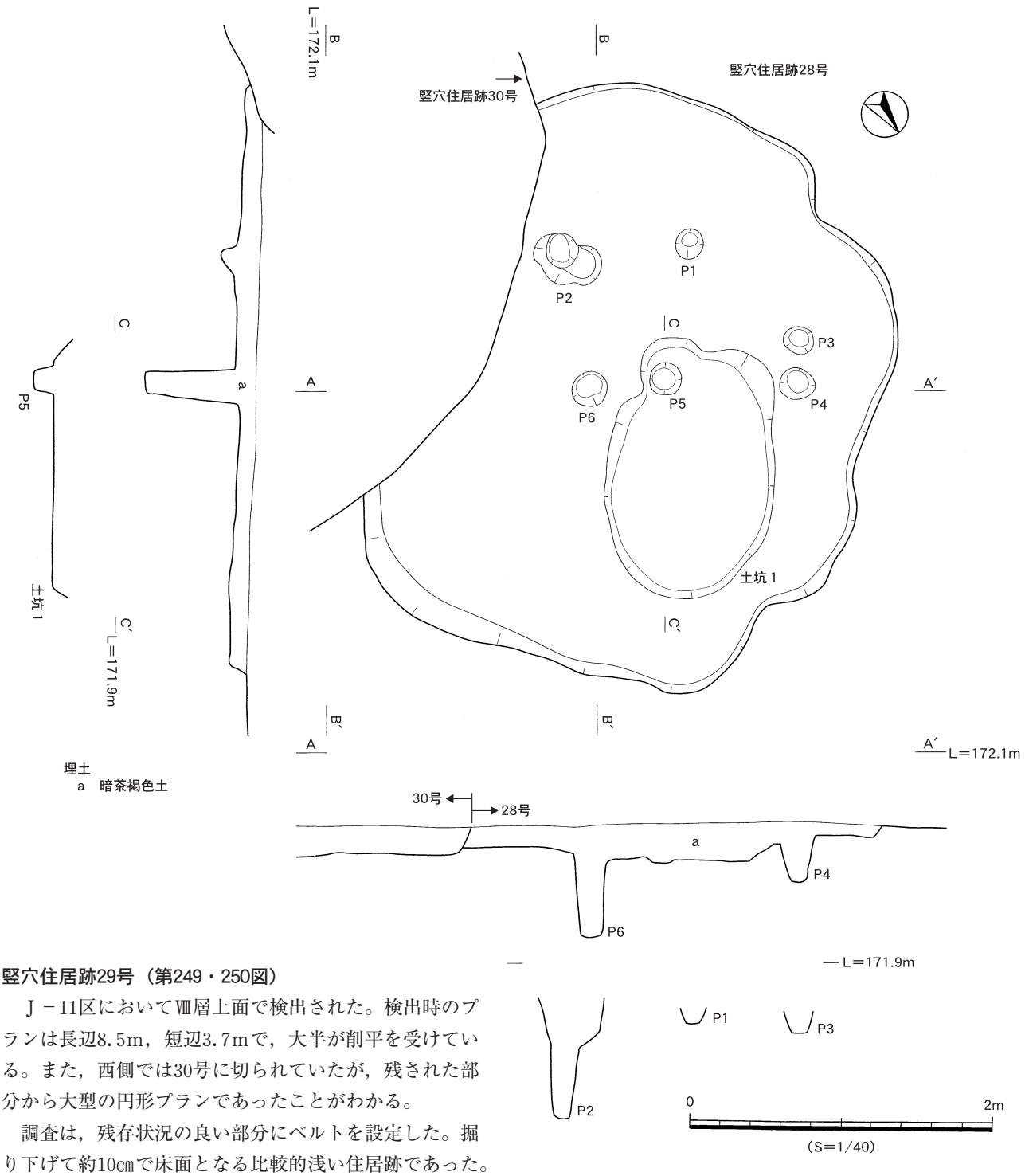
第246図　竪穴住居跡27号遺物出土状況



第247図　竪穴住居跡27号・出土遺物

竪穴住居跡28号（第248・250図）

Ｊ－10・11区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.8m，短辺2.7mの隅丸長方形で，南側は30号に切られている。28号から30号の３軒は，攪乱部分に隣接していることもありプランの検出は難しかった。当初は28号と29号の２軒を想定したベルト設定であった。検出の段階で平面的に前後関係を捉えることが出来ず，３軒の新旧関係は床面の判断によるところが大きい。埋土は単一層で，貼床や硬化面ははっきりとしない。北側よりに深さ10㎝の浅い土坑が検出された。柱穴などの付帯施設は，床面を除去しながら６基の柱穴が確認された。特にＰ６は中央に位置して深いＰ２は２段掘り状を呈する。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしないが北側床面検出の土坑底面にやや多く堆積していた。遺物は，総点で633点が出土し，この内の13点を図化した。330は甕の口縁部片である。口縁部が外反し，外面には掻き上げ状の調整によって段を有する。332は甕の底部片である。厚みのある底部で，上げ底状を呈する。333は甕の脚部片と思われる。指押さえの痕跡が明瞭に見られる。334は口縁部が外反して屈曲するいわゆる２重口縁の器形を呈する。この屈曲部にはキザミが施されている。335は壺の底部片である。336は小破片であるが，坩の可能性がある。337・338は高坏である。いずれも小型である。338は粘土接合面で欠損している。339は脚部片であるが，先端部が大きく外反する。341・342はミニチュア土器である。

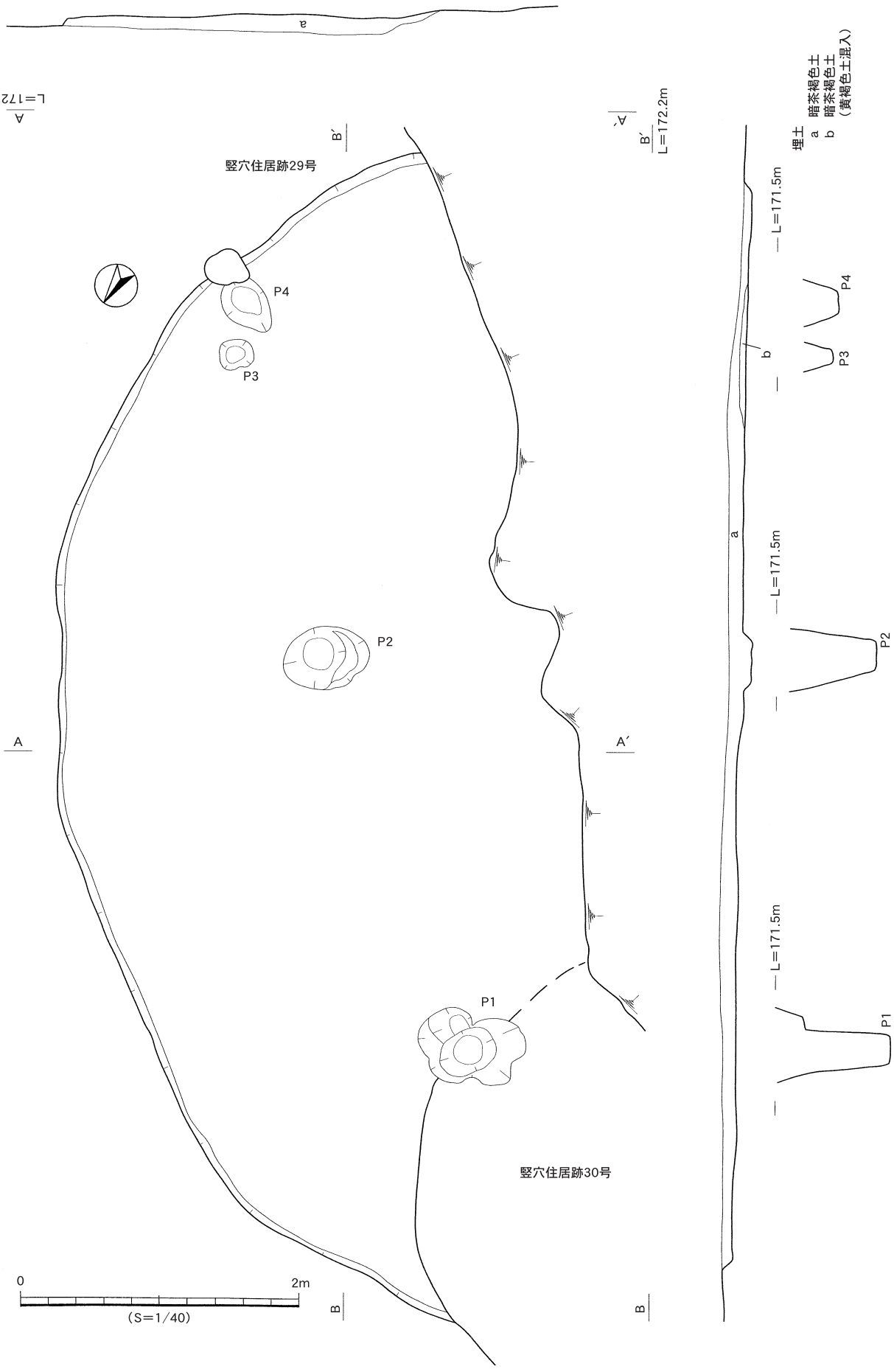


第248図　竪穴住居跡28号

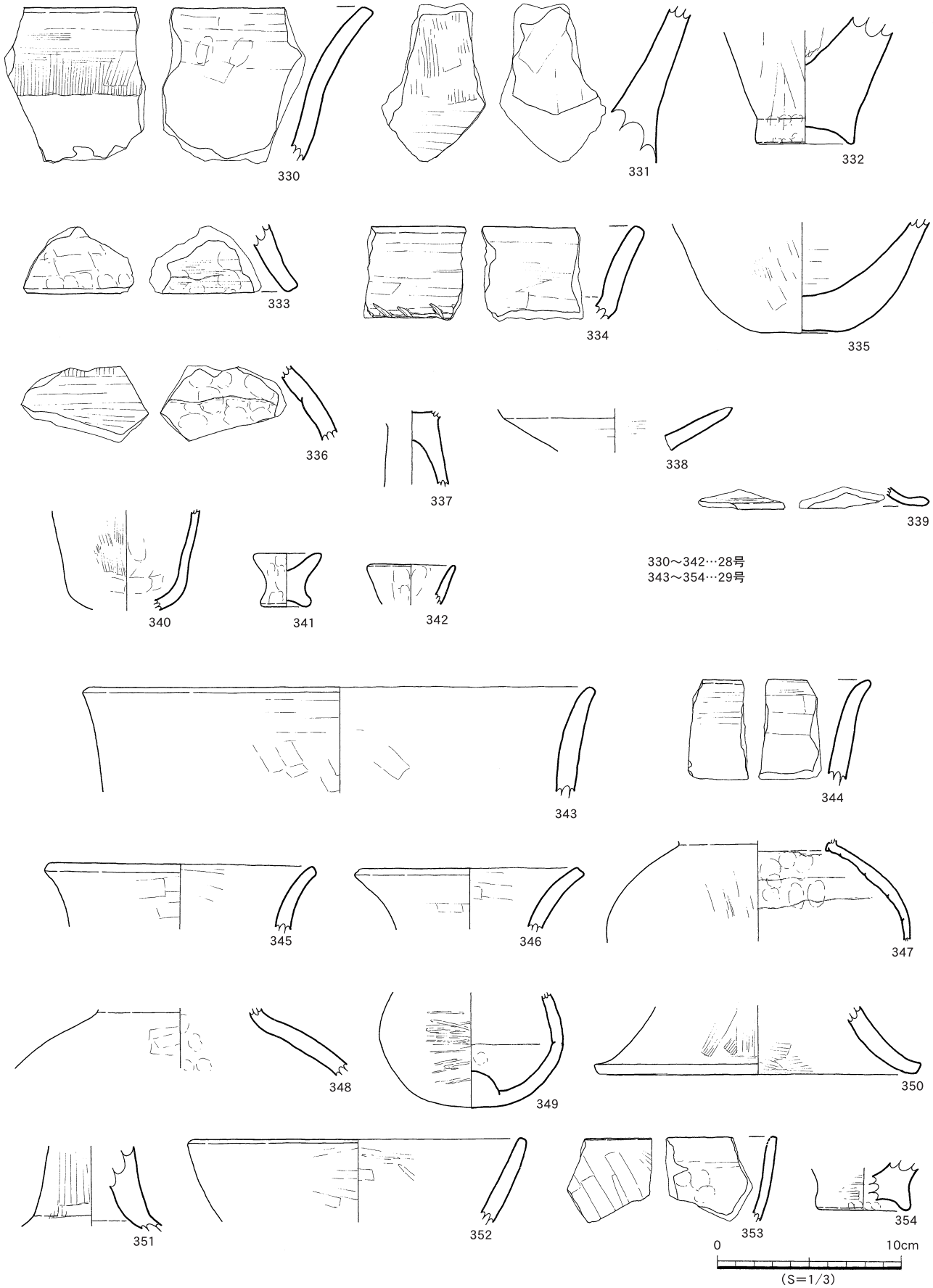
竪穴住居跡29号（第249・250図）

Ｊ－11区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは長辺8.5m，短辺3.7mで，大半が削平を受けている。また，西側では30号に切られていたが，残された部分から大型の円形プランであったことがわかる。

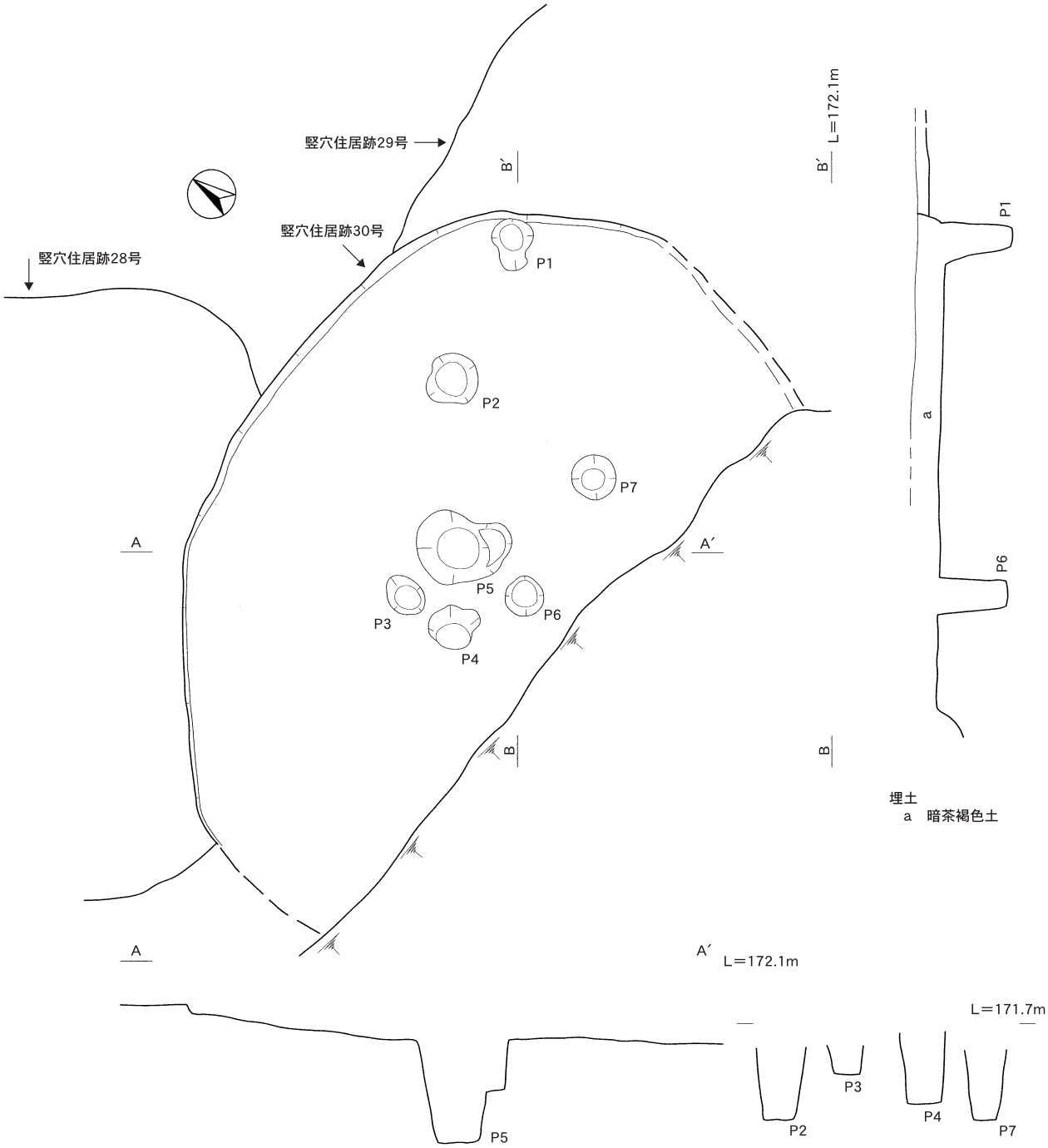
調査は，残存状況の良い部分にベルトを設定した。掘り下げて約10㎝で床面となる比較的浅い住居跡であった。これも上面が深く削平を受けた結果であろう。柱穴などの付帯施設の確認は，床面を除去した段階で４基の柱穴が確認された。Ｐ１は30号に接しており，厳密には29号に伴うとは言い難い。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしないが，埋土中の炭化物について放射性炭素年代測定を実施し，1,740±20yrBPという結果が示されている。遺物は，総点で611点が出土しこの内12点を図化した。343は甕の口縁部である。口縁部が僅かに外反する。胴部に膨らみは見られない。344は口唇端部が強く外傾する。345・346は壺の口縁部片である。347～349は坩である。347は胴部内面に粘土接合痕を明瞭に残す。これで見ると幅1.6㎝から２㎝程度の粘土紐を積み上げている様子が窺える。349は底部内面に円形の瘤状突起が見られる。



第249図　竪穴住居跡29号



第250図　竪穴住居跡28号，29号出土遺物

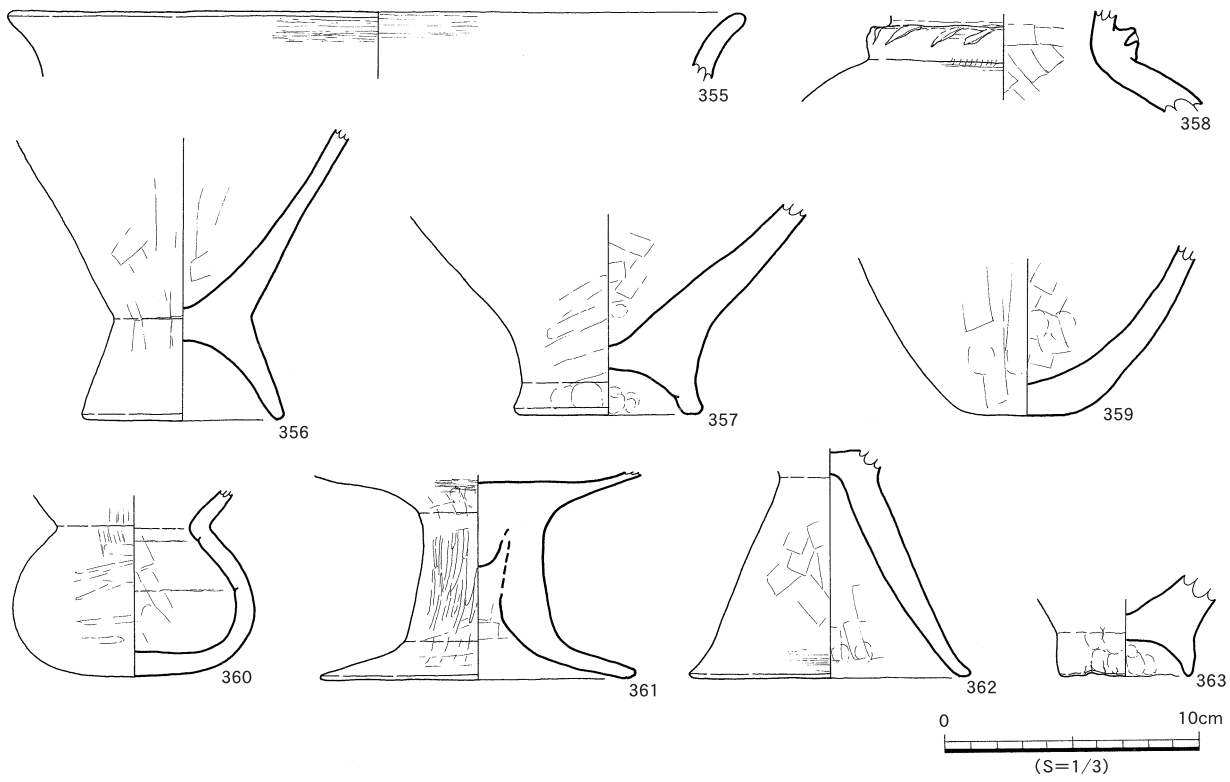


第251図　竪穴住居跡30号

竪穴住居跡30号（第251・252図）

Ｊ－10・11区においてⅧ層上面で検出された。北側が28号，東側が29号と切り合って検出された。南側半分は後世の攪乱により消失している。また，一部29号との境が不明瞭であった。検出時のプランは長辺4.7m，短辺2.5mの略円形であった。

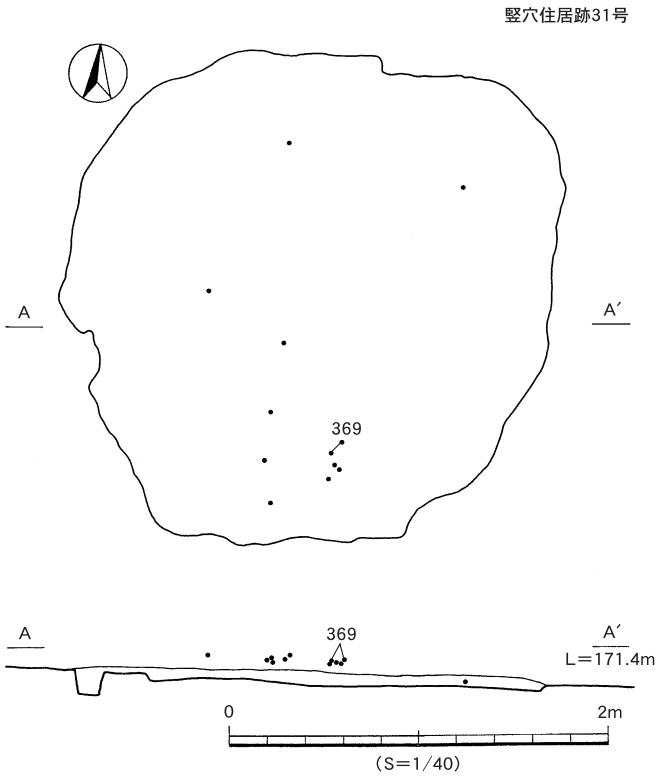
調査は，当初２軒の住居の切り合いを想定していたために一部を掘り下げた後に急遽切り合いがわかるように，２本のベルトを設定し直して調査を行った。埋土や床面等から，３軒の住居跡の中では当住居が一番新しい。貼床や硬化面等は見られず，柱穴などの付帯施設は，床面で７基の柱穴が確認された。Ｐ３は深さ20㎝と浅めであるが，他の柱穴は比較的深い。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしなかった。遺物は，総点で187点が出土しこの内の９点を図化した。355は甕の口縁部片である。口縁部が外反している。356・357は甕の底部である。356はハ字状の脚部を有し，357は低い脚を有する。358は壺の頸部片かと思われる。360は坩である。胴部は球状を呈し，最大径がやや胴部下方にある。361は高坏である。坏部と脚部との間には円塊を落とし込んでいる。



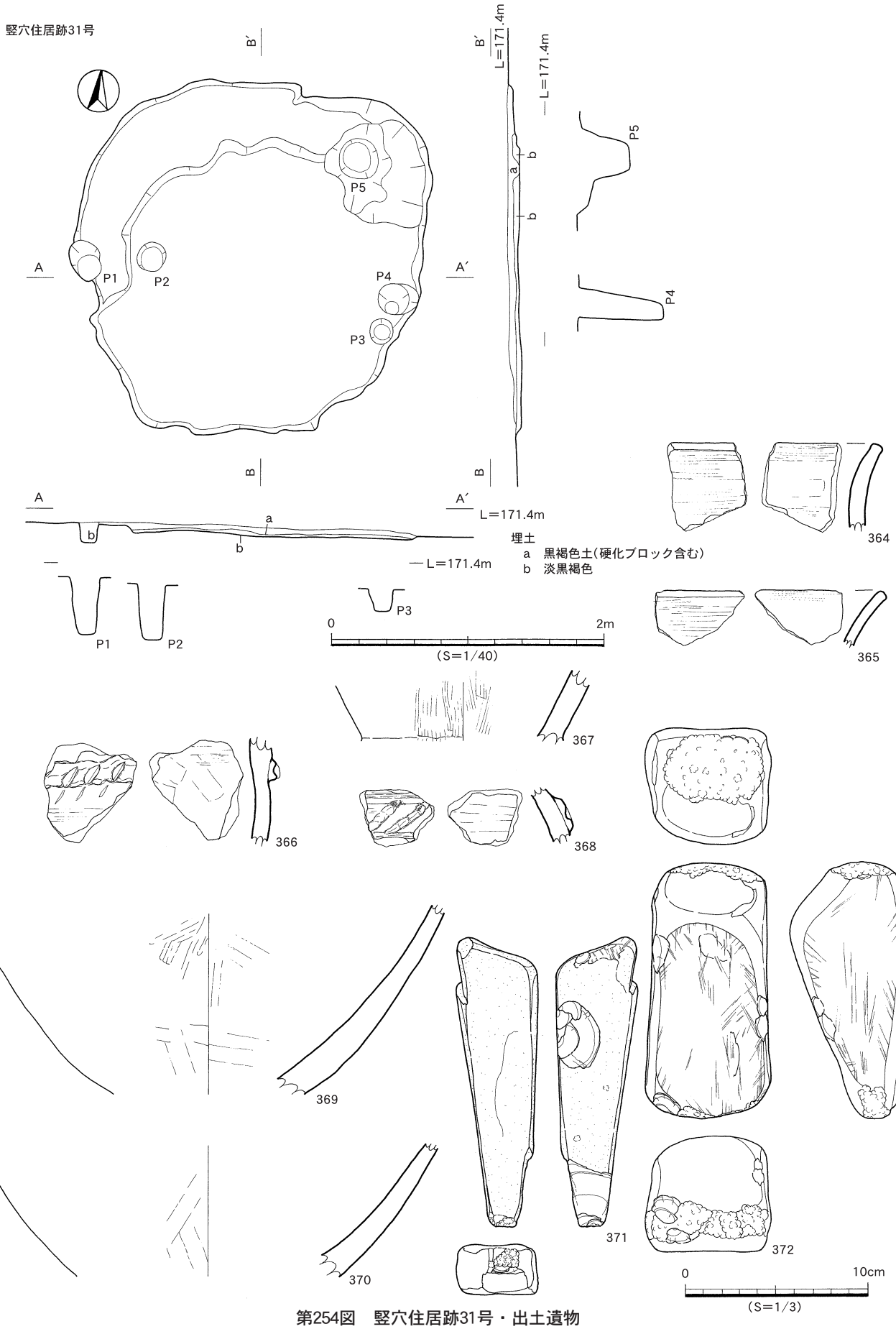
第252図　竪穴住居跡30号出土遺物

竪穴住居跡31号（第253・254図）

K－11区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.6m，短辺2.5mの略円形に近い。検出時，既に硬化面が広がっている状況であった。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。北側に図化したベット状のプランは硬化面を除去した後に検出されたものである。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で5基の柱穴が確認された。検出プランの東西端に確認されたＰ１・４はやや斜位に入り込んでいる。また，Ｐ５周辺には数段に掘り込みが確認されているが，これは，柱の抜き取り等が行われている可能性を想定したが，これを捉えることはできなかった。炉・焼土や炭化物の広がりは明瞭でない。遺物は，総点で135点出土しこの内の9点を図化した。364～367は甕の破片である。364・365は口縁部が外反する。365は口唇部に平坦面を有する。366は胴部突帯の破片である。残存している部分から，口縁部は外反していたものと思われる。突帯頂部にはキザミが施されるが，工具痕は突帯下の胴部にも残される。368～370は壺の破片である。368は胴部片で，幅広突帯が貼付されている。369・370は底部付近の破片である。371・372は敲石である。371は棒状の礫を素材とし，372は厚手の礫を素材とする。372は短軸両端に敲打痕が残る。



第253図　竪穴住居跡31号遺物出土状況

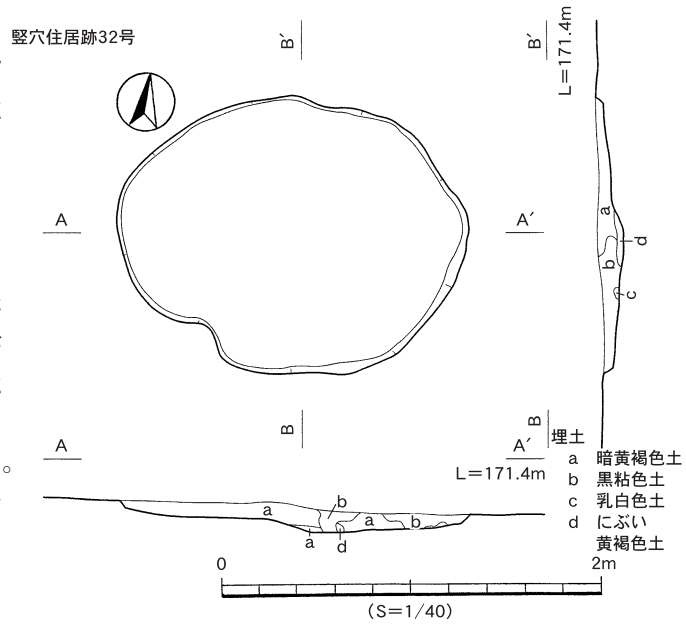


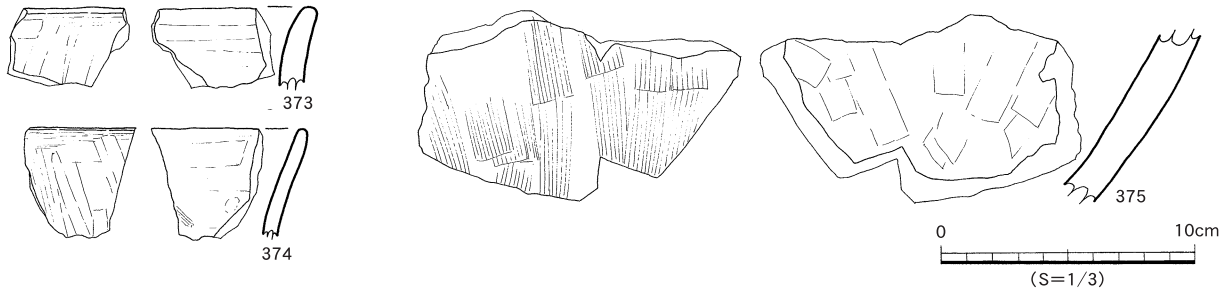
第254図　竪穴住居跡31号・出土遺物

竪穴住居跡32号（第255図）

K－12区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺1.9m，短辺1.5mの楕円形で，調査は土坑を想定して開始した。ただ，土坑とするには大型であったために，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。当初は土坑を想定していたが，周辺の土坑の状況などから最終的には竪穴住居跡と判断した。柱穴などの付帯施設は，床面を除去しながら調査を進めたが，検出できなかった。炉・焼土や炭化物の広がりも確認できなかった。

遺物は，総点で59点が出土しこの内の３点を図化した。373は甕の口縁部片である。375は壺の胴部下半の破片である。374は坩の口縁部と思われる。





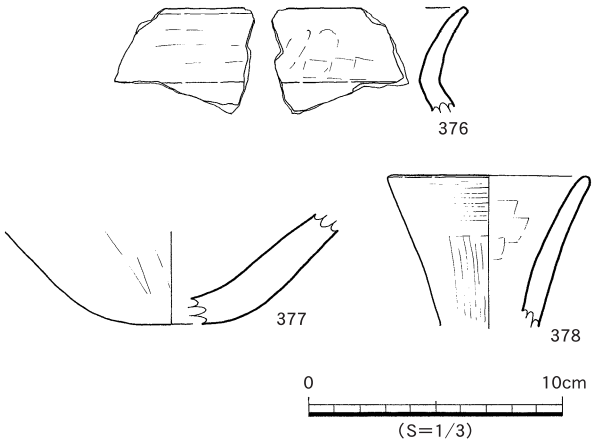
第255図　竪穴住居跡32号・出土遺物

竪穴住居跡33号（第256・257図）

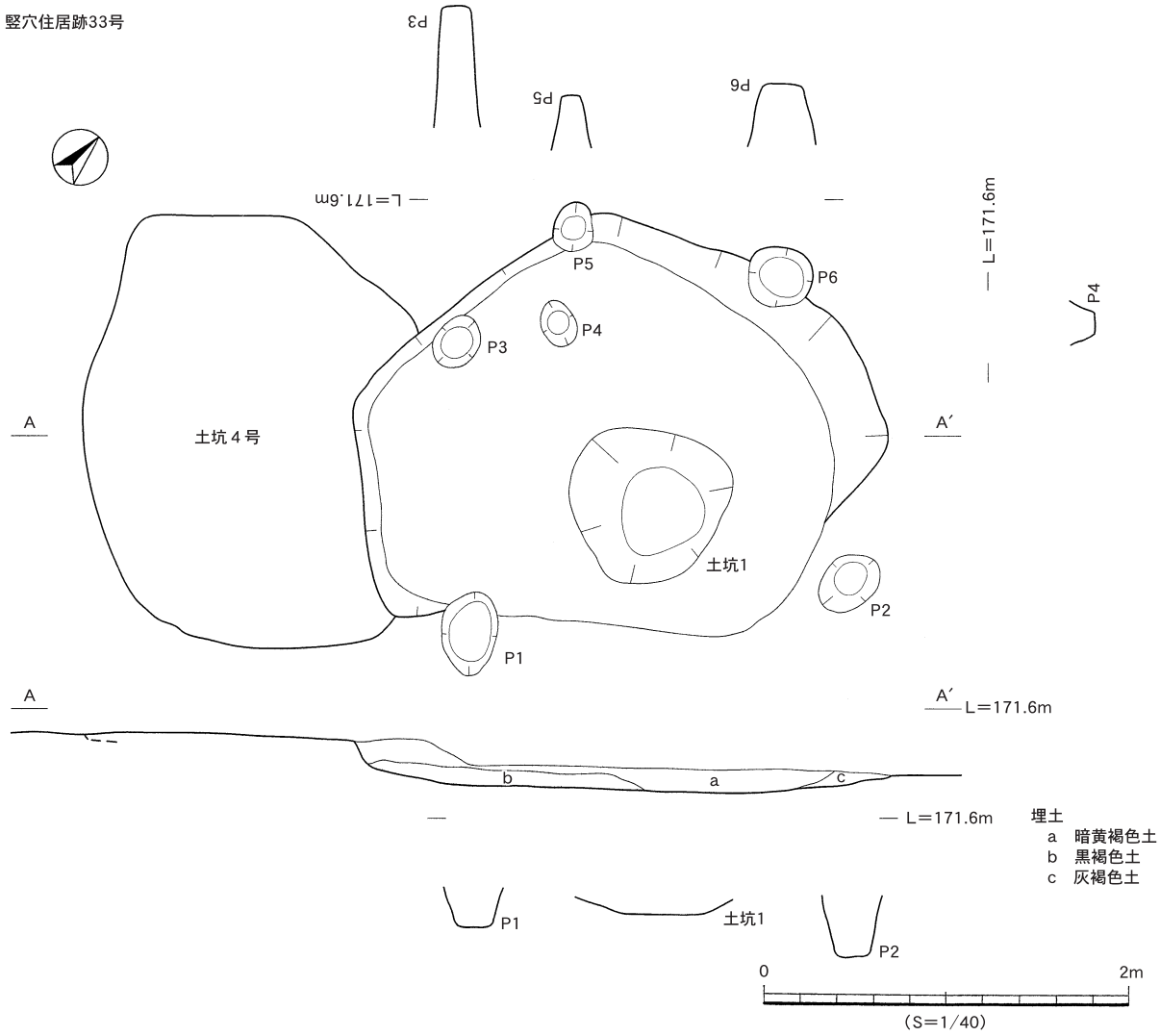
K－12区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.5m，短辺2.2mの楕円形に近い。調査の結果，竪穴住居跡と土坑との切り合い関係があったことから，33号は３m×2.2mの略円形プランとなっている。切り合い関係を見てみると，西側は土坑４となり，当住居が土坑４を切る。床面で見ると，土坑４より33号の方が10㎝程度深い。

調査は，当初１軒の竪穴住居跡を想定したベルトを設定して掘り下げを開始した。比較的容易に検出された東側の壁面からプランを検出していったところ，貼床や硬化面等は見られず，黄褐色砂礫層に達したためにこれを床面と判断した。東南部分については立ち上がりは見られず，検出段階で床面が露出していたことがわかった。柱穴などの付帯施設の確認は，床面で行った。その結果，33号のプラン中に２基，立ち上がり及びその周辺に４基の柱穴が確認された。東南側のプランが検出時に消失していたことを考えると，Ｐ１・２は当住居に伴う可能性があったためにここに掲載している。中央付近には円形プランの土坑が１基検出されている。炉・焼土や炭化物の広がりは集中か所こそ見られないが，埋土ｂ中に比較的多く堆積していた。

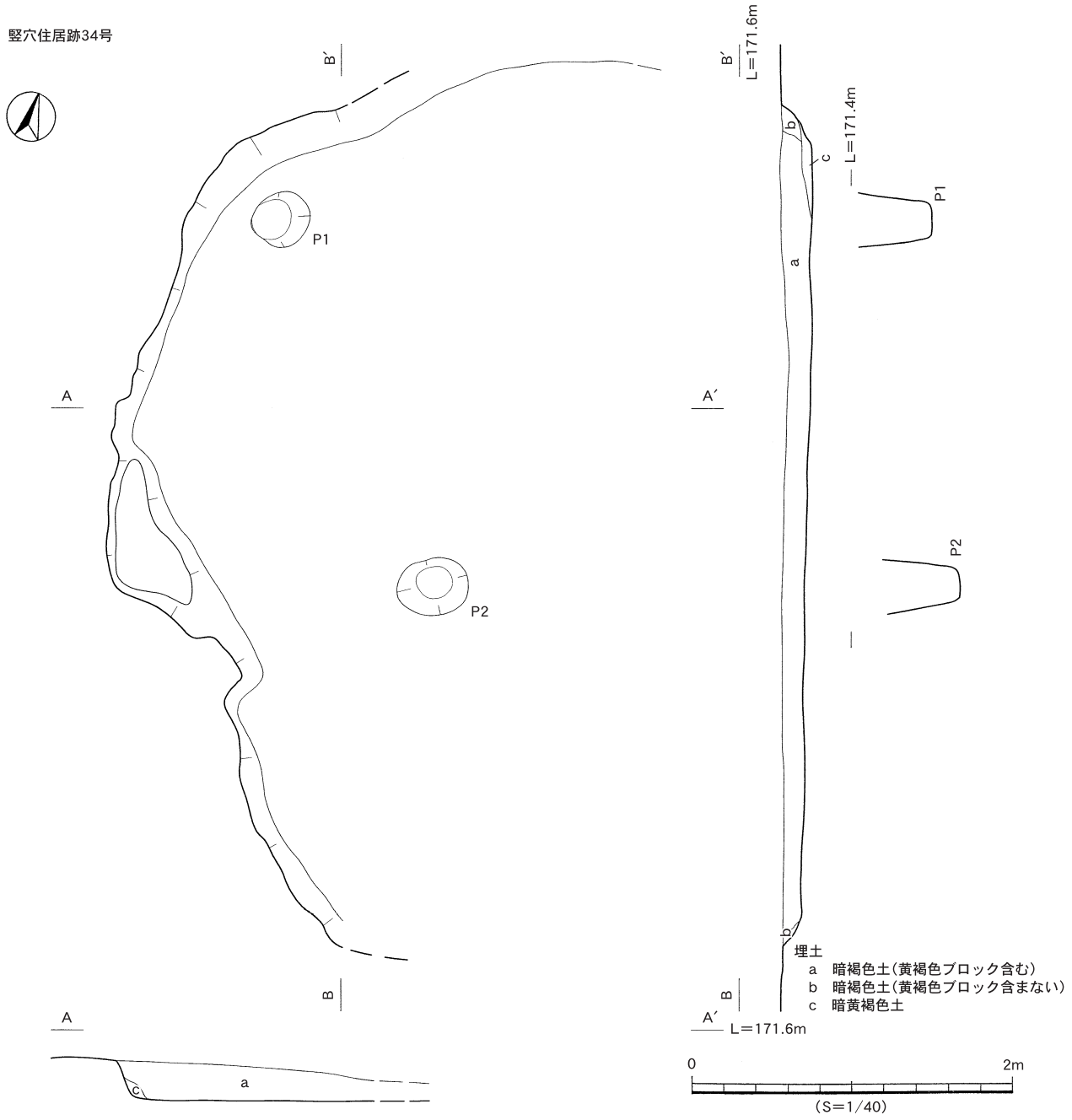
遺物は，総点で112点が出土しこの内の３点を図化した。376は口縁部がくの字状に強く屈曲する。内外面には稜線が明瞭に見られ，胴部は膨らむ。377は壺の底部片である。378は坩の口縁部片である。



第256図　竪穴住居跡33号出土遺物



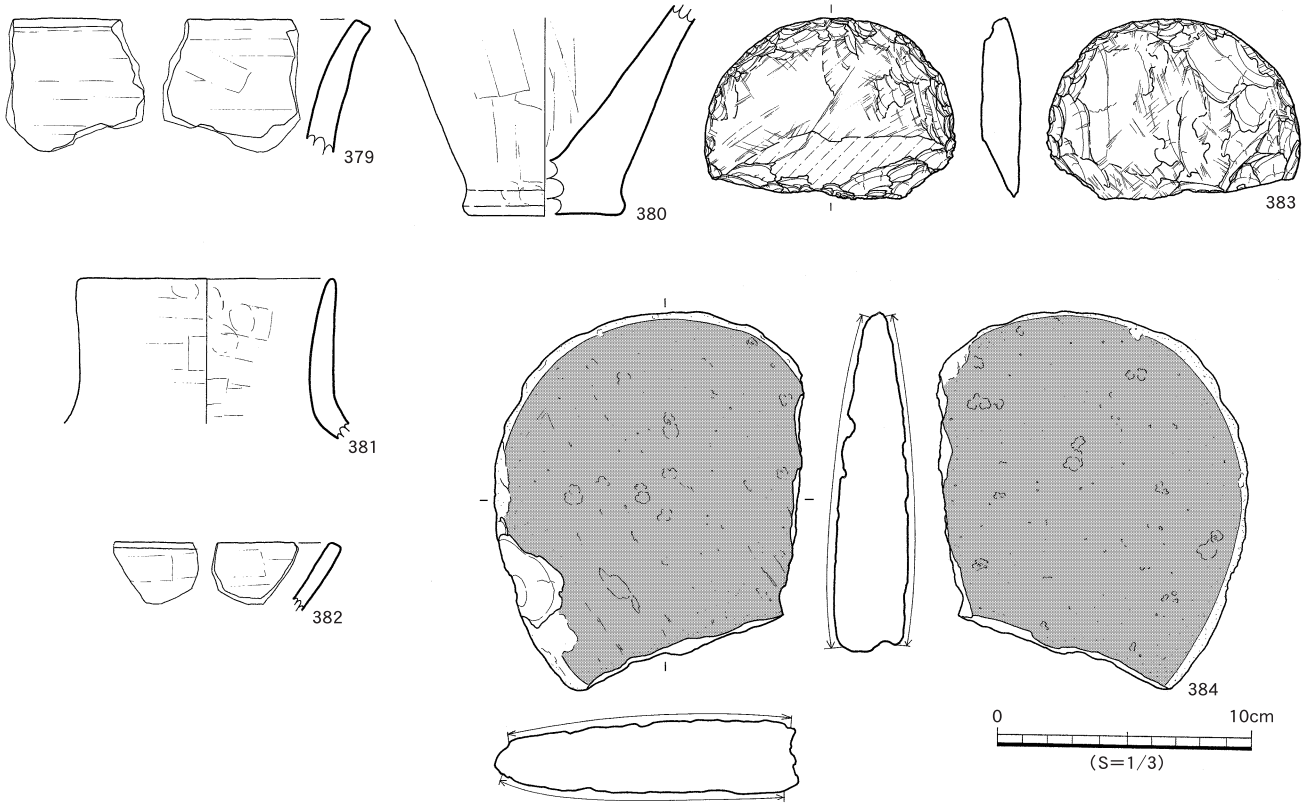
第257図　竪穴住居跡33号



第258図　竪穴住居跡34号

竪穴住居跡34号（第258・259図）

K－12区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは長辺5.2m，短辺３mの不定形で，東側はプランを捉えられなかった。調査は，残存している最大長とこれに直行する２本のベルトを設定して掘り下げを開始した。西側にはわずかなテラス状の張り出しがある。床面には貼床や硬化面は見られなかった。柱穴などの付帯施設は，床面で２基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られない。遺物は，総点で395点が出土し，この内の６点を図化した。379・380は甕である。379は口縁部が外反し，口唇部には平坦面を有する。380は平底の底部で端部が外へ張り出す。４は壺の口縁部で，口縁部が直線的で頸部はあまり屈曲せずに稜線は見られない。383は頁岩製で，扁平な礫を素材に半月状に周辺を加工する。384は安山岩製である。扁平であるが明瞭な磨り等は観察されない。

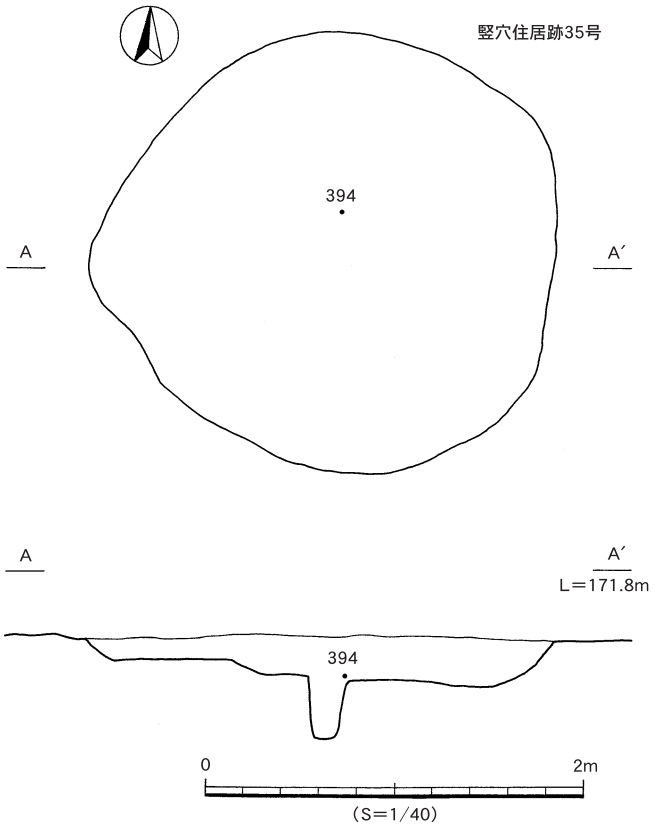


第259図　竪穴住居跡34号出土遺物

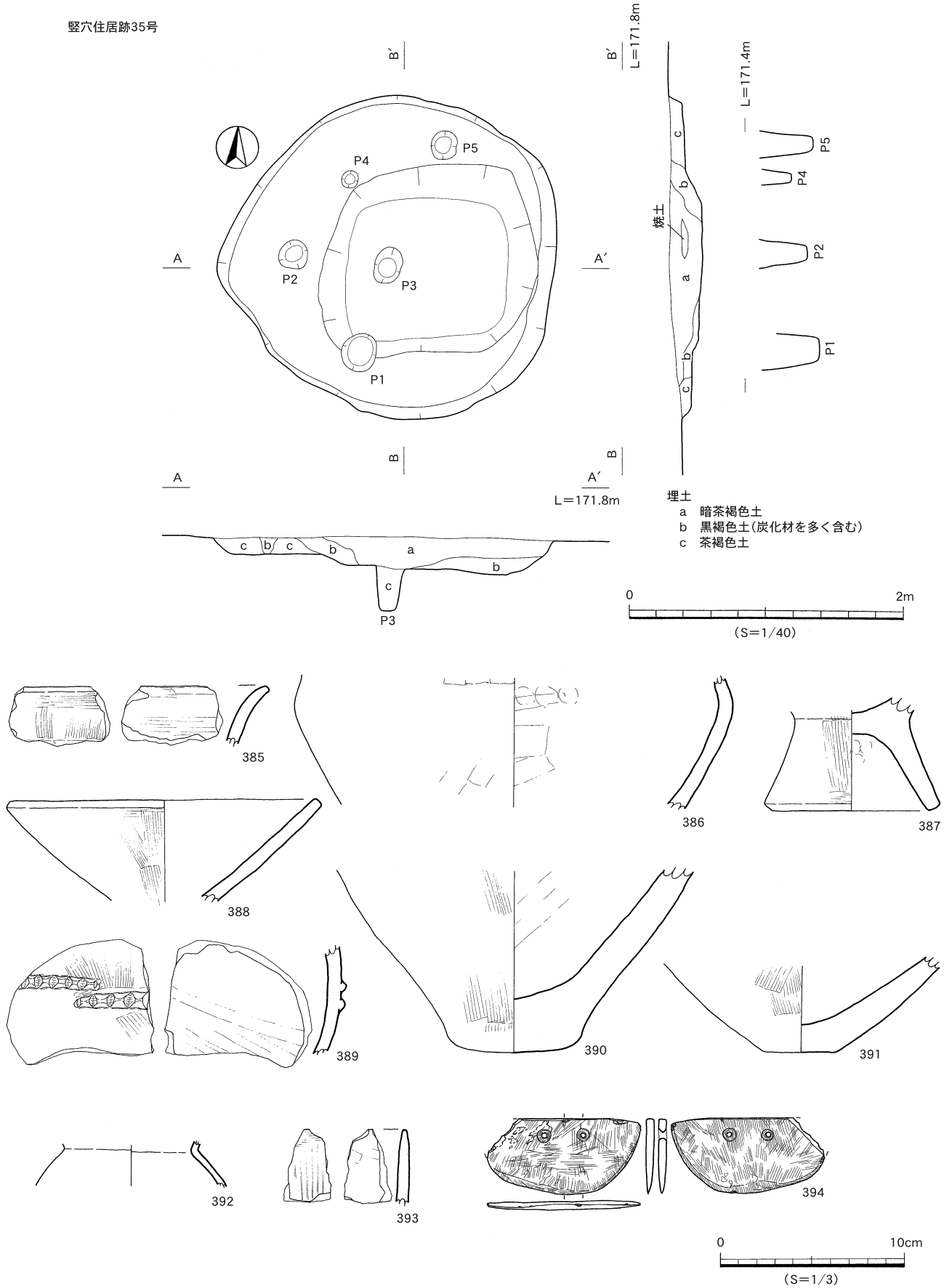
竪穴住居跡35号（第260・261図）

Ｊ－12区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.5m，短辺2.4mの円形を呈する。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。検出時に大きめの炭化物を多く含む層が部分的に見られたが，東側床面に厚く堆積しており，これを掘り下げていったところ1.6m×1.4mの隅丸長方形プランの土坑になった。埋土中には面的には見られなかったが焼土が散在している。柱穴などの付帯施設の確認は，床面を除去しながら確認し，結果５基の柱穴が確認された。中央にはＰ３があり主柱穴かと思われる。

遺物は，総点で80点出土し，この内の10点を図化した。385～387は甕である。385は口縁部が外反し，外面には縦方向の工具痕が見られる。386は，甕の胴部上半の破片と思われ，外面にはわずかに縦方向の工具痕が見られる。387は甕の脚部でハの字状に開く。388は，壺の口縁部片として図化したが，天地逆で脚部の可能性も考えられる。389は壺の胴部片で，貼付突帯は上下にズレて貼付されている。390・391は壺の底部片である。394は石庖丁である。竪穴住居跡中央の床面で出土した。左側面を欠損している。



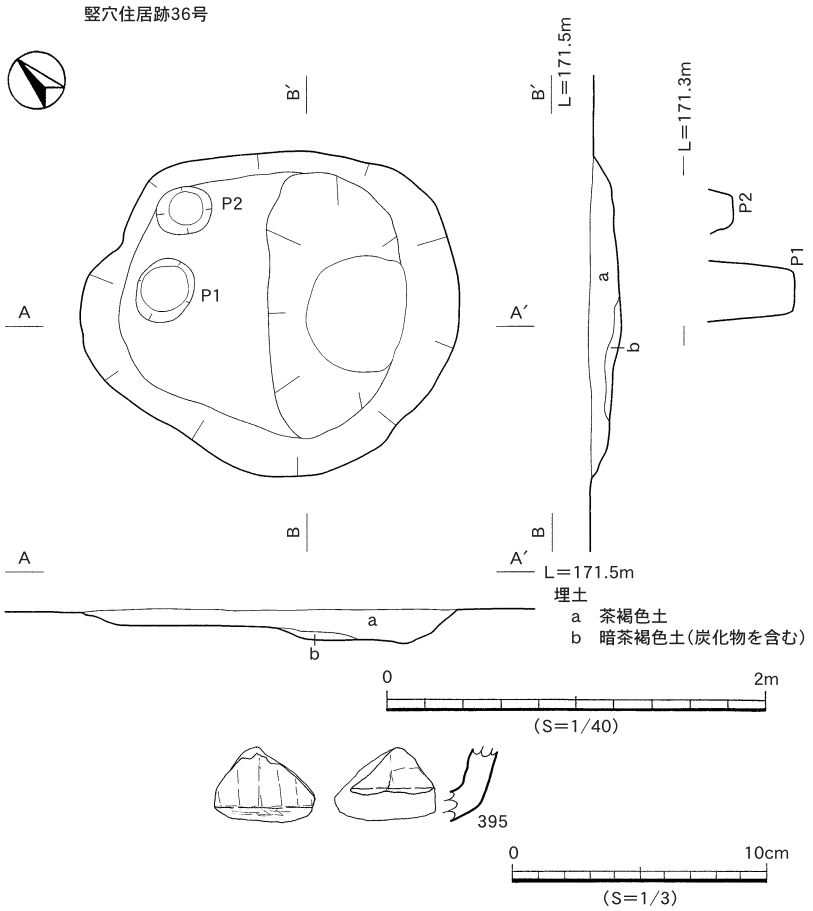
第260図　竪穴住居跡35号遺物出土状況



第261図　竪穴住居跡35号・出土遺物

竪穴住居跡36号（第262図）

Ｊ－12・13区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺２ｍ，短辺1.7ｍの卵形に近い楕円形を呈する。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面は北側では検出面から約10㎝程度の深さで検出できたが，南側は緩やかに傾斜し，住居短軸方向に長い楕円形プランの土坑となった。この土坑の床面には，面的な広がりは少ないながらも炭化物を含む層の堆積が見られる。柱穴などの付帯施設は，床面で２基確認された。遺物は，総点で32点が出土し，この内の１点を図化した。



第262図　竪穴住居跡36号・出土遺物

竪穴住居跡37号（第263図）

Ｊ－13区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.3m，短辺1.9ｍの略円形で，土坑５を切っている。また，土坑６とも隣接する。

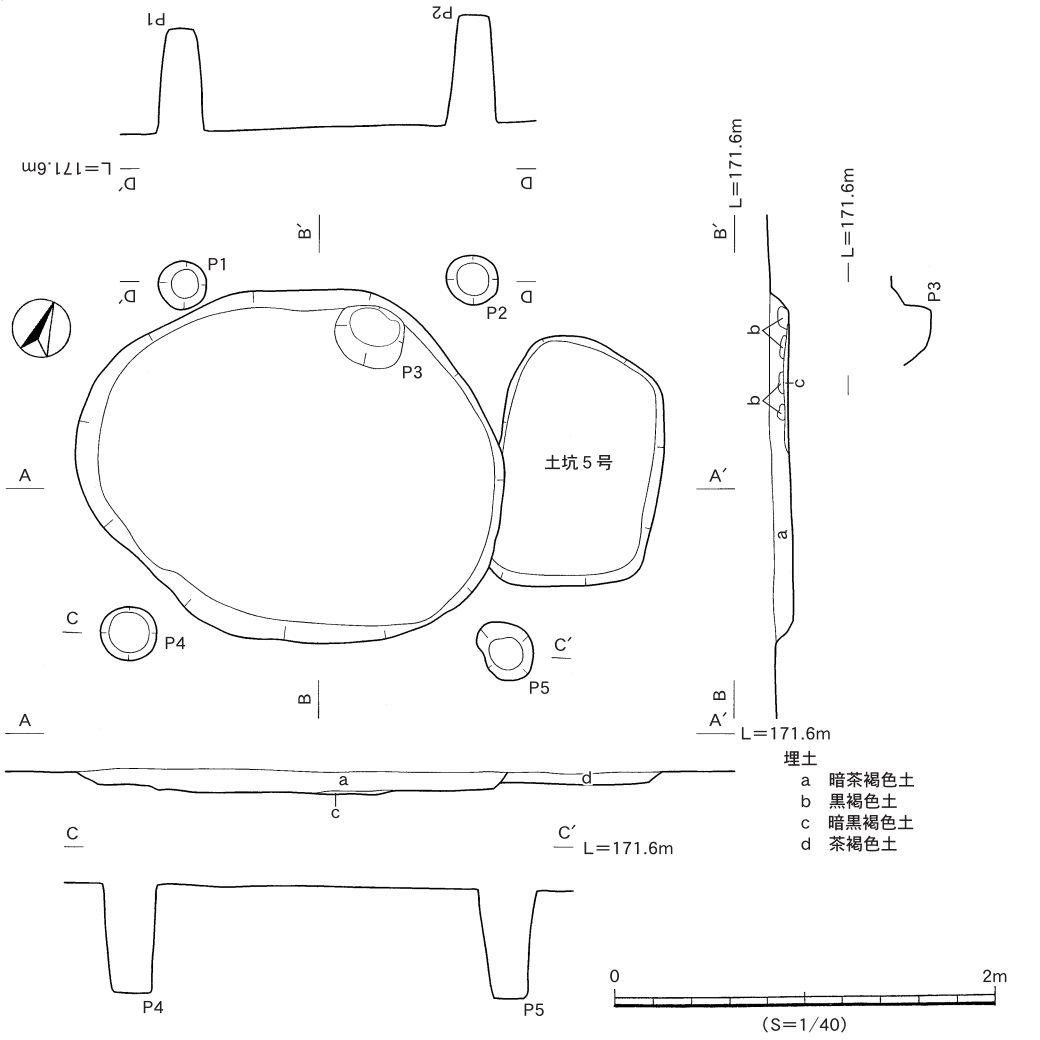
調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。柱穴などの付帯施設は，床面で１基確認されが，竪穴部に近接して４基の形状の類似した柱穴が検出された。４基の柱穴の埋土は，竪穴住居跡の埋土ａに該当し，住居プラン検出時に柱穴も同時に検出されていた。周辺には，他の時期も含めて柱穴が見られるため，厳密に共伴するかは不明だが，１つの可能性として竪穴住居跡に伴うと判断してここに掲載した。

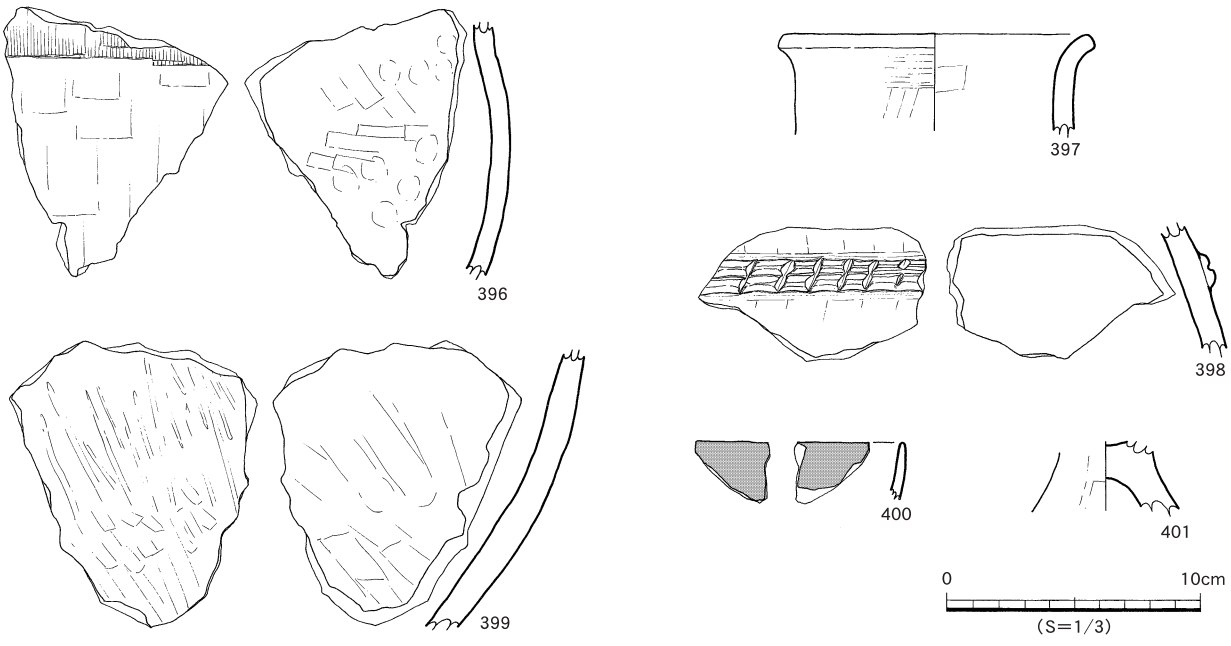
遺物は，総点で207点出土しこの内の６点を図化した。396は甕の胴部片である。残存部から，口縁部は外反すると思われ外面には縦方向の工具痕が見られる。胴部はわずかに膨らむ。397～399は壺の破片である。398はやや幅広の突帯で中央部分を凹ませてキザミを施している。

竪穴住居跡38号（第264図）

Ｊ・Ｋ－13・14区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.2m，短辺４ｍの隅丸方形で，北側の上面プランの一部が配管により削平を受けていた。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。床面検出時に南東側に一回り小さな，埋土ｂを主体とする方形の竪穴部が検出された。これを切り込んでＰ３・４は検出されている。このプランも中央ベルトにそって掘り下げたところ床面に炭化物が集中する範囲が確認された。柱穴などの付帯施設は，床面を除去しながら７基の柱穴が確認された。遺物は，総点で560点が出土し，この内の８点を図化した。402～404は甕の破片である。402は口縁部がほぼ直行する。口縁部下には貼付突帯を施すが，上下につまみ上げる特徴が見られる。403・404は甕の脚部である。405は壺の口縁部である。406は坩の胴部片で底部は丸底状を呈すると思われる。408は高坏の脚部で，外面に段を有している。409は砥石である。

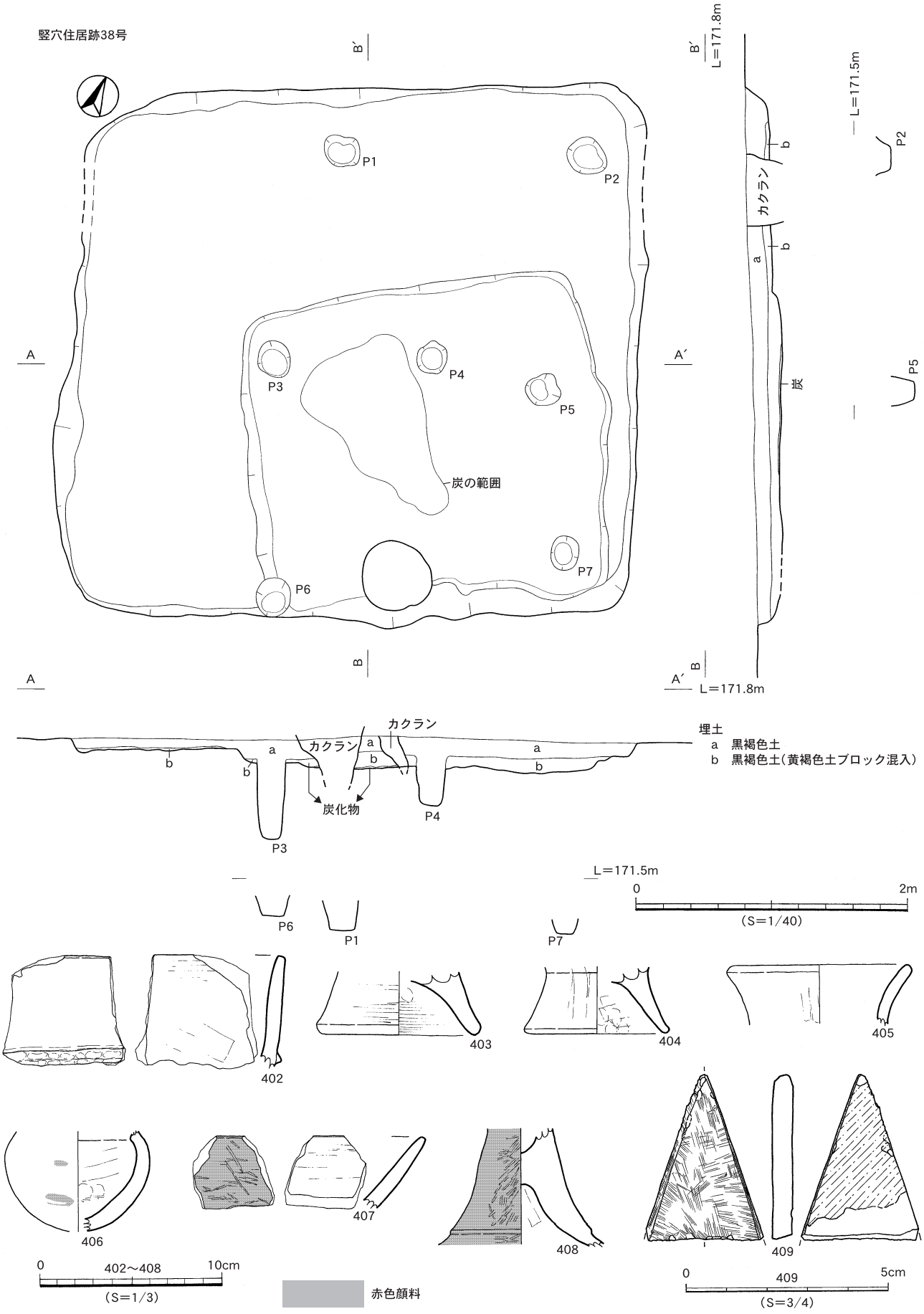
竪穴住居跡37号





赤色顔料

第263図　竪穴住居跡37号・出土遺物



第264図　竪穴住居跡38号・出土遺物

竪穴住居跡39号（第265～267図）

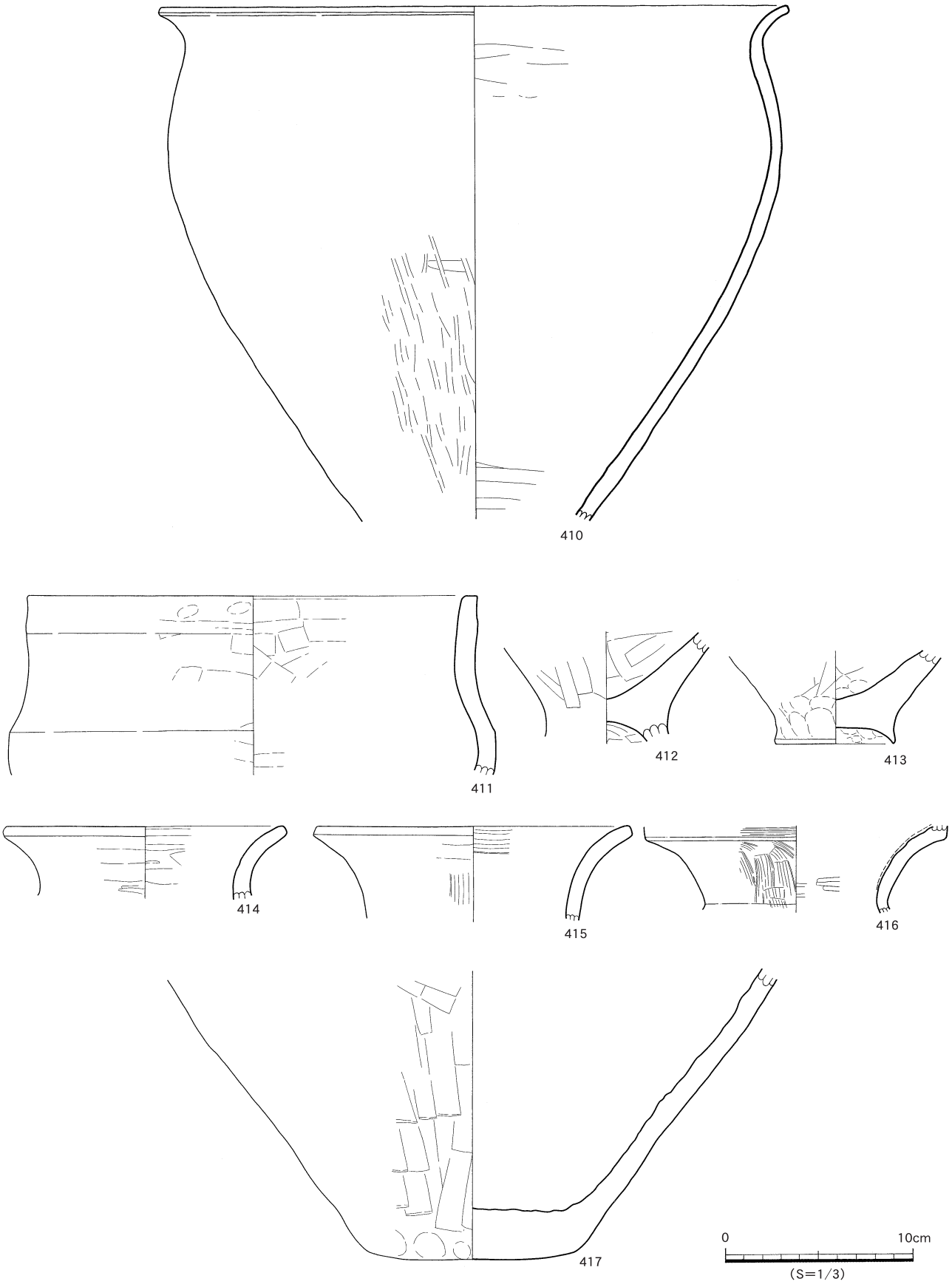
K・L－14・15区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺5.1m，短辺4mの不定形である。

調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土の変化はほとんど見られず，黄褐色砂礫層が検出された。これを床面として捉え，南側に2カ所の土坑状に埋土aが残るプランを掘り下げた。これらの中からはわずかに炭化物が出土したが，焼土や炭化物の集中などは検出されなかった。

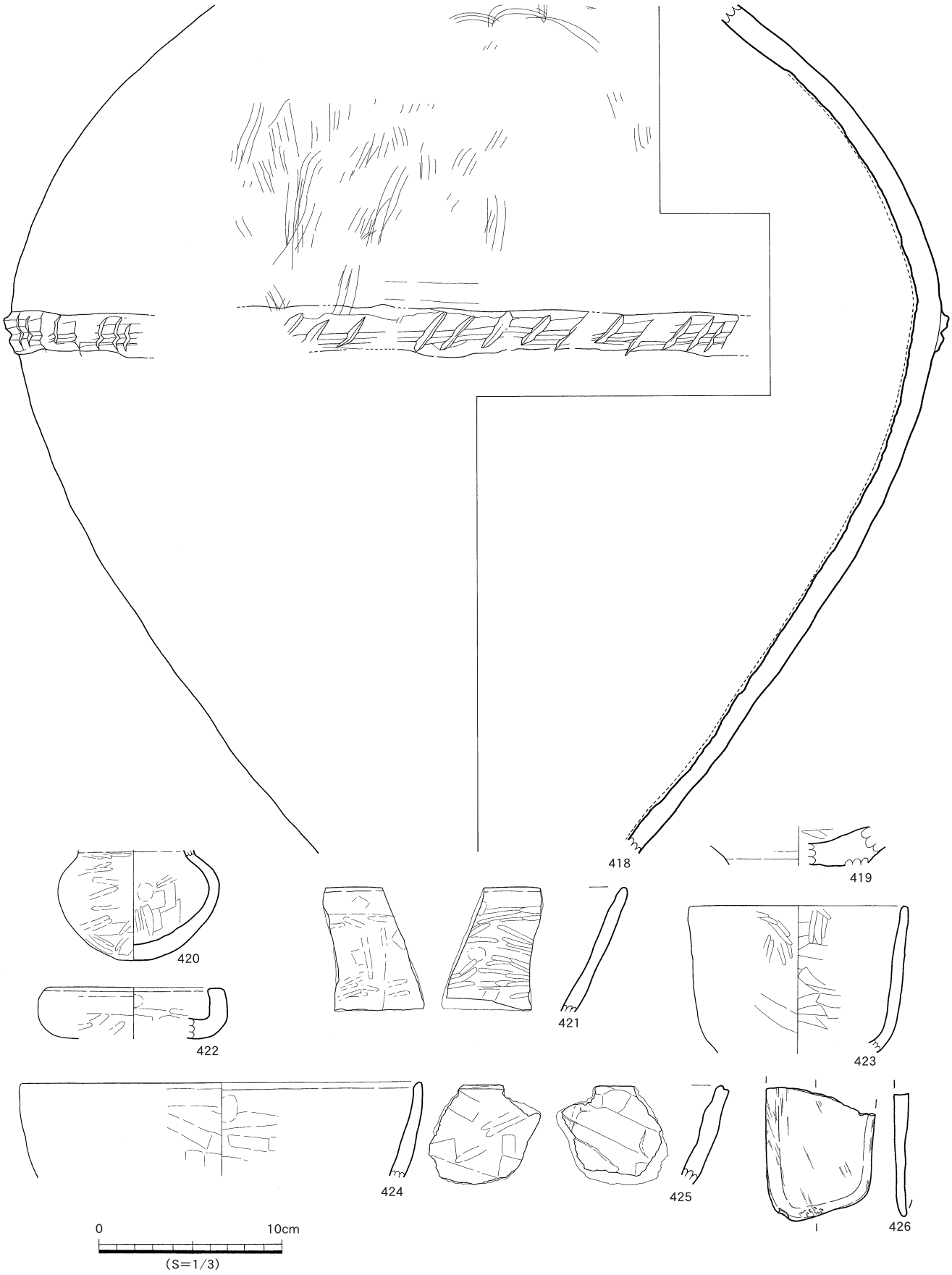
柱穴などの付帯施設は，中央ベルトを除去した段階で



第265図　竪穴住居跡39号



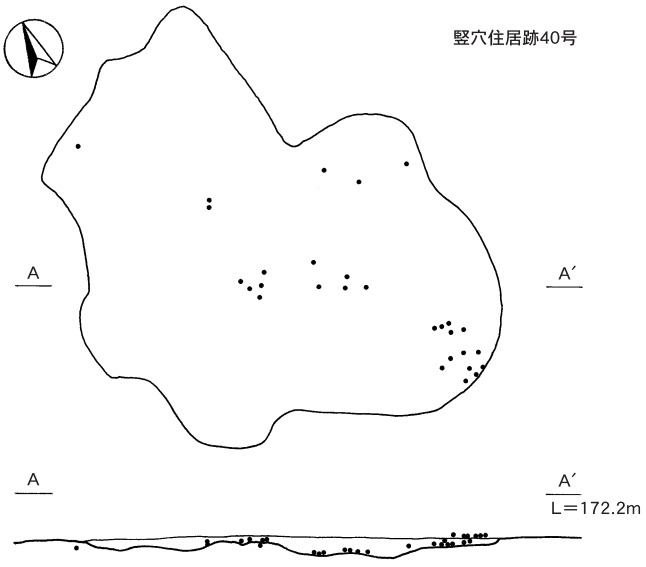
第266図　竪穴住居跡39号出土遺物①



第267図　竪穴住居跡39号出土遺物②

13基の柱穴が確認された。住居とするには形状や内部構造など不明な点もあるが，規模から住居跡あるいはこれに類する遺構としてここに分類した。

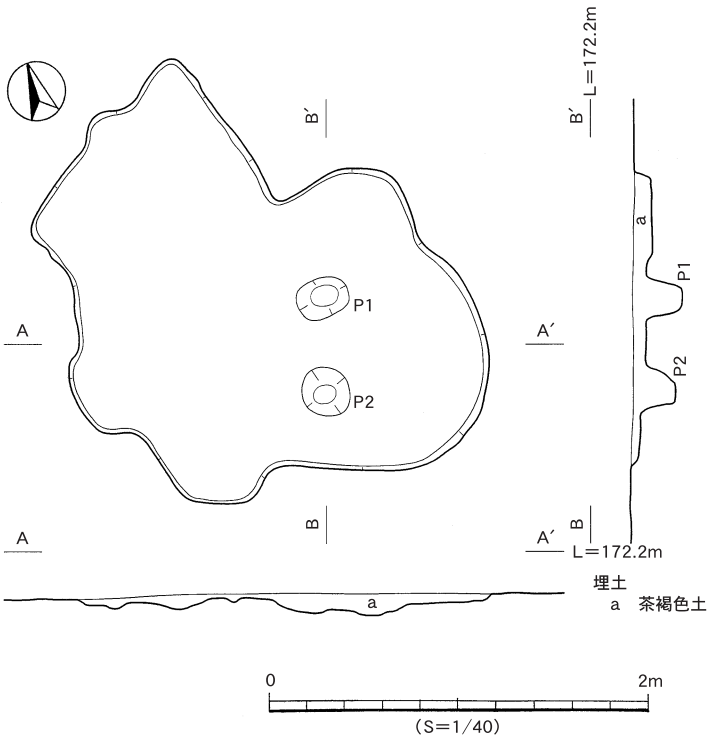
遺物は，総点で653点が出土し，この内の17点を図化した。410～413は甕である。410は底部を欠く。口縁部は強く外反し胴部で膨らむ。411は口縁部より胴部に最大径がくる。413はわずかに上げ底状を呈する。414～418は壺である。416は内面の剥落が激しい。口縁部に屈曲が見られることから２重口縁の可能性もある。418は胴部片である。幅広の貼付突帯は中央を凹ませてキザミを施す。突帯上から頸部にかけては細い沈線が短く不規則に見られ，工具調整痕とは異なっており，何らかの意図があったことも考えられる。

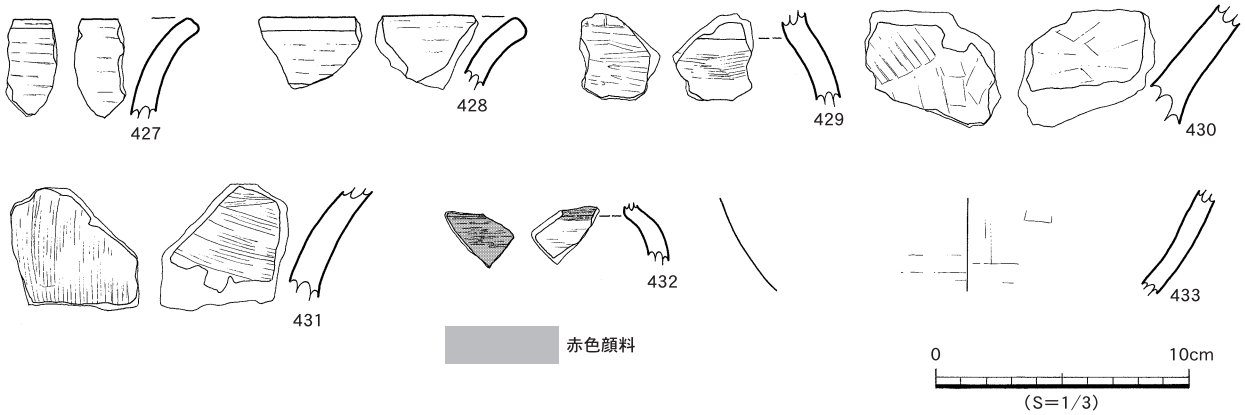


竪穴住居跡40号（第268図）

Ⅰ－13区においてⅦ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.5m，短辺1.9mの不定形を呈する。調査は，ほぼ中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。

埋土は単一で，浅く不安定である。ベルトを除去し床面を検出していったが，硬化面等は見られなかった。柱穴などの付帯施設は２基が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりもはっきりとしない。遺物は，総点で102点が出土し，この内の７点を図化した。





第268図　竪穴住居跡40号・出土遺物

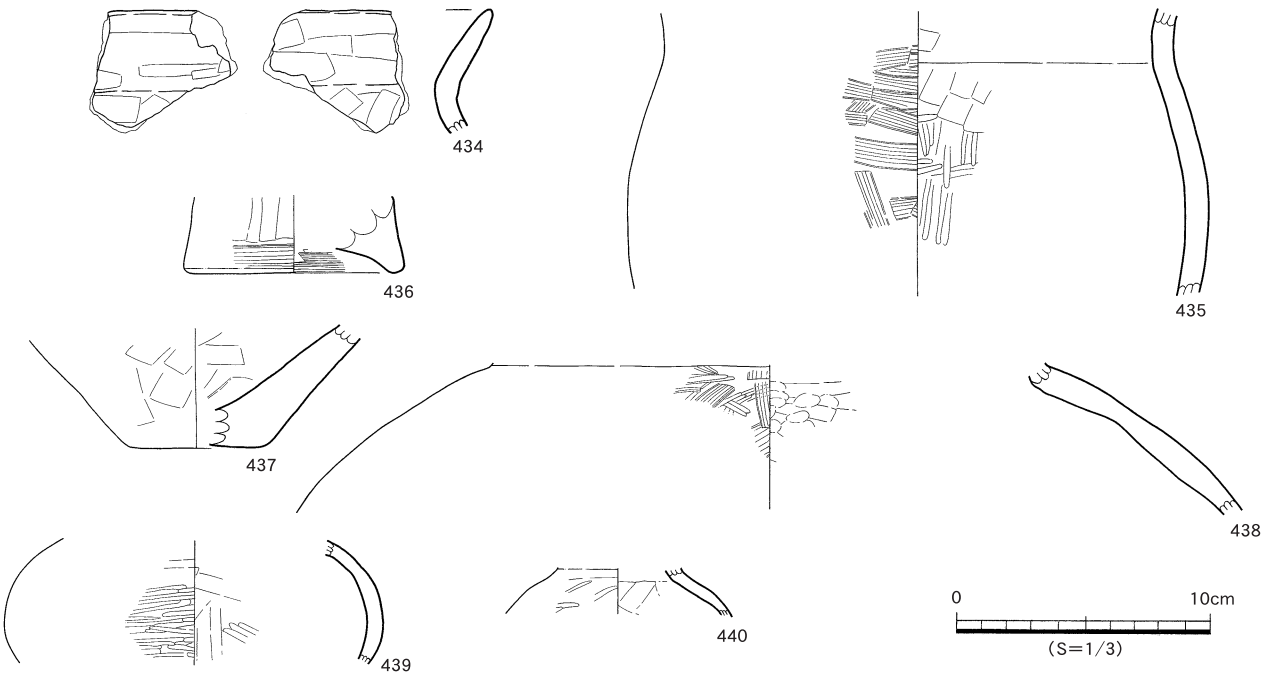
竪穴住居跡41号（第269・270図）

Ｆ・Ｇ－14区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺6.3m，短辺５mの不定形を呈する。この時点で既に硬化面が検出されており，上面が大きく削平されていた。また，周辺には方形や楕円形状の土坑が見られ，竪穴部と近接していることから，竪穴に伴う一連の花弁形プランを想定した。そこで，花弁状部分を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。掘り下げは，花弁状のプランでは既に硬化面を幾らか掘り下げており，竪穴の中央付近では比較的良好に検出できた。なお，住居プランの一部は用地外に延びている。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で確認していった。Ｐ１・６・12・18と中央の深いプランに近い柱穴４基はいずれも深く，これらが主柱穴であったと思われる。遺物は，総点で1031点が出土したが，いずれも小破片が多く図化できたものはこの内の７点に留まった。434は口縁部が外反する甕である。435は口縁部下半から胴部にかけての破片である。436は甕の底部で，弱い脚部を形成する。438は壺の頸部から胴部にかけての破片である。439・440は坩である。

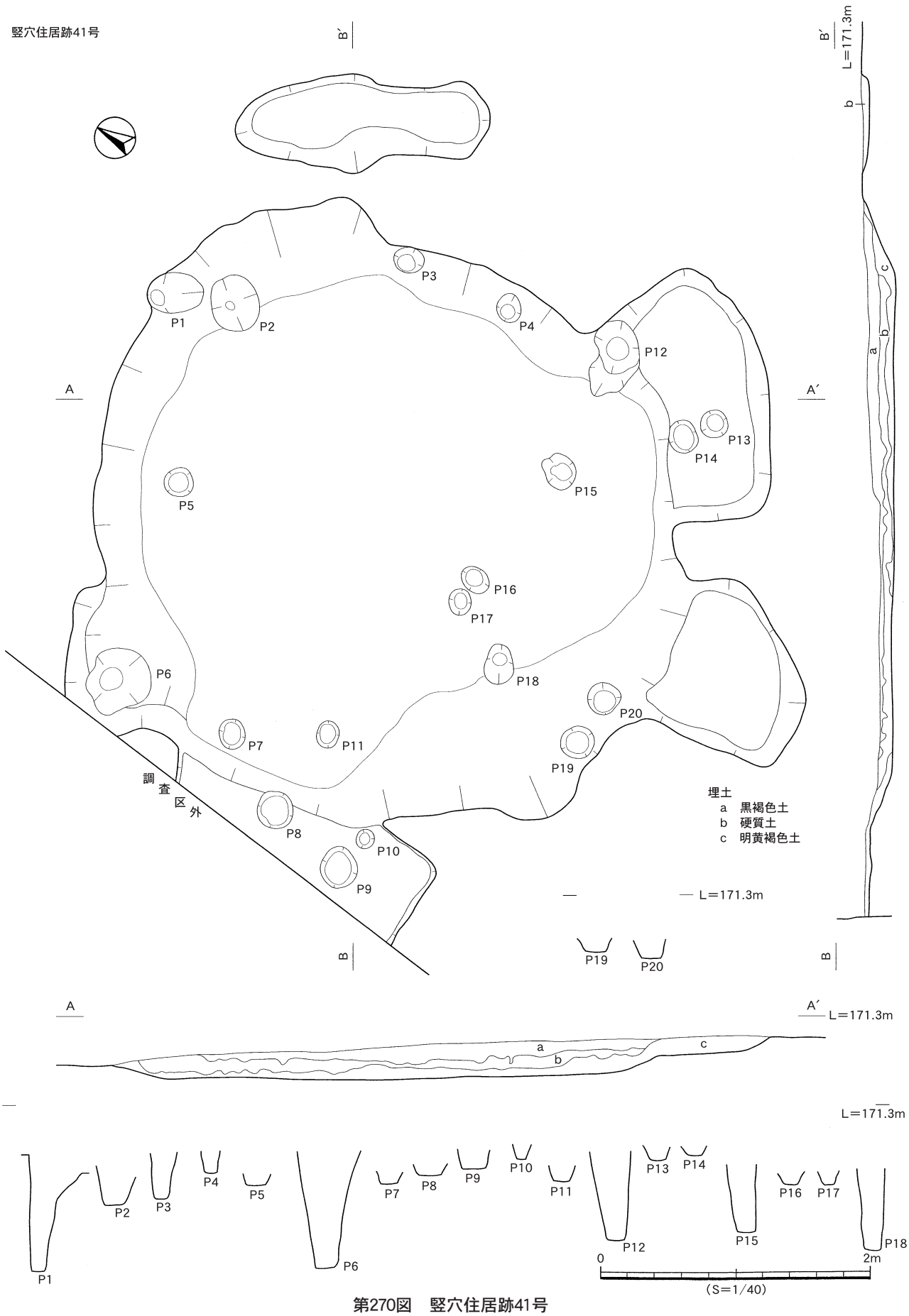
竪穴住居跡42号（第271・272図）

Ｈ・Ｉ－15区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.6m，短辺4.4mの隅丸長方形を呈する。上面は削平を受け，耕作土を除去すると遺構検出面となった。この42号は，畑境上に位置しており上面が硬質であった。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出していった。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で６基の柱穴が確認された。Ｐ４・５は深さが検出面から60㎝あるが他の柱穴は浅い。また，Ｐ１・３・６はその深さや，住居壁面から垂直に掘り込まれているといった共通する特徴が見られる。また，全体的に柱穴の径は小振りな印象を受ける。炉・焼土や炭化物の広がりは，硬化面（埋土ｄ）を除去した後に中央付近で検出された。土坑状にはならずに厚さ４㎝弱の集中であった。他の竪穴住居跡の事例などから，この炭化物集中下に硬化面等が想定されたために，再度確認作業を行ったが，検出できなかった。焼土面で１時期，硬化面で１時期の２時期に渡る使用の結果を想定したがはっきりしない。遺物は，総点で3,056点が出土したが，いずれも小破片であり，図化できたものはこの内の13点に留まった。

441～443は甕である。441・442は口縁部が外反し，口唇部はわずかに平坦面を有する。444～447は壺である。445は頸部に幅広突帯をめぐらせ，キザミが施されてい



第269図　竪穴住居跡41号出土遺物

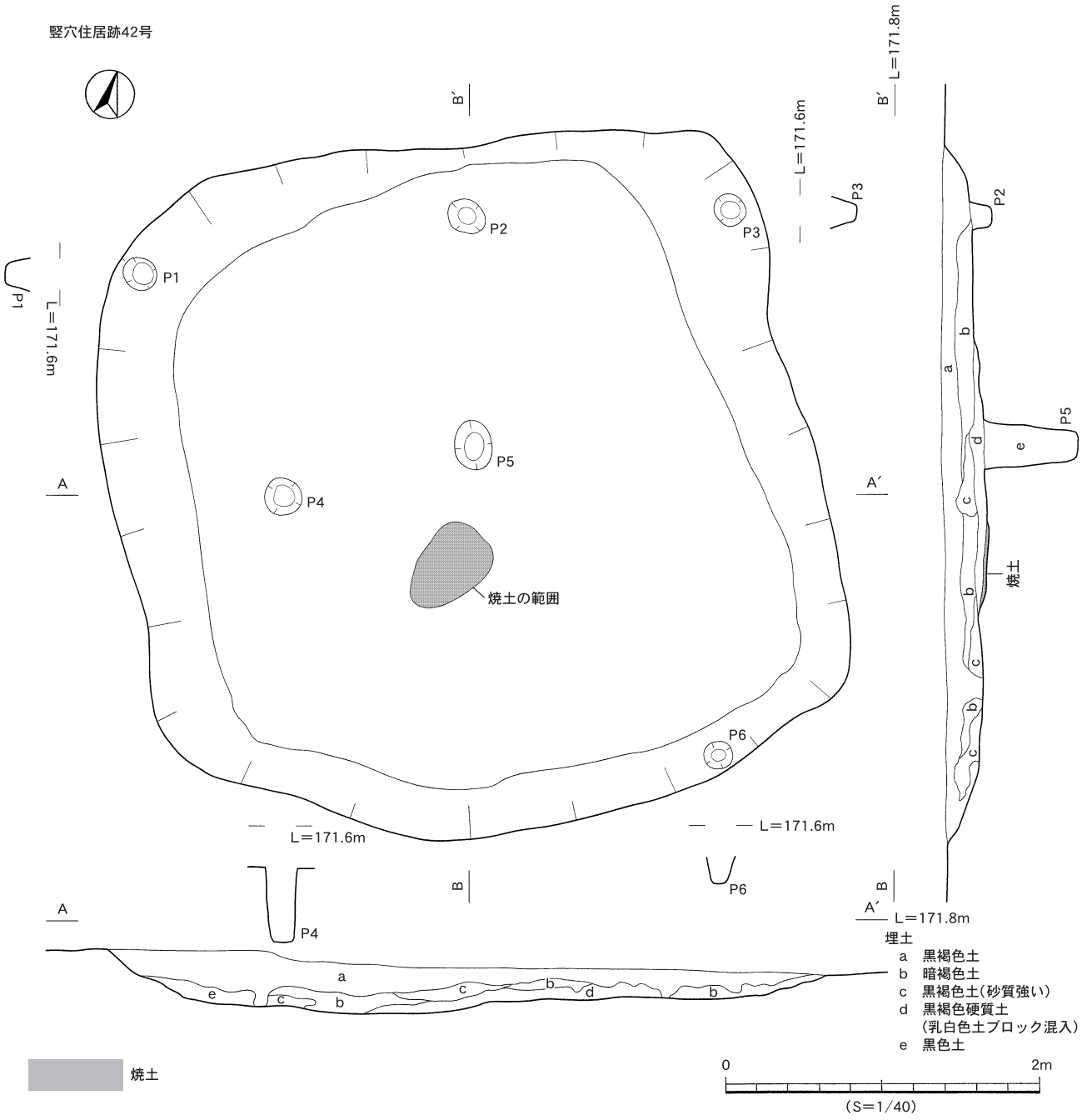


第270図　竪穴住居跡41号

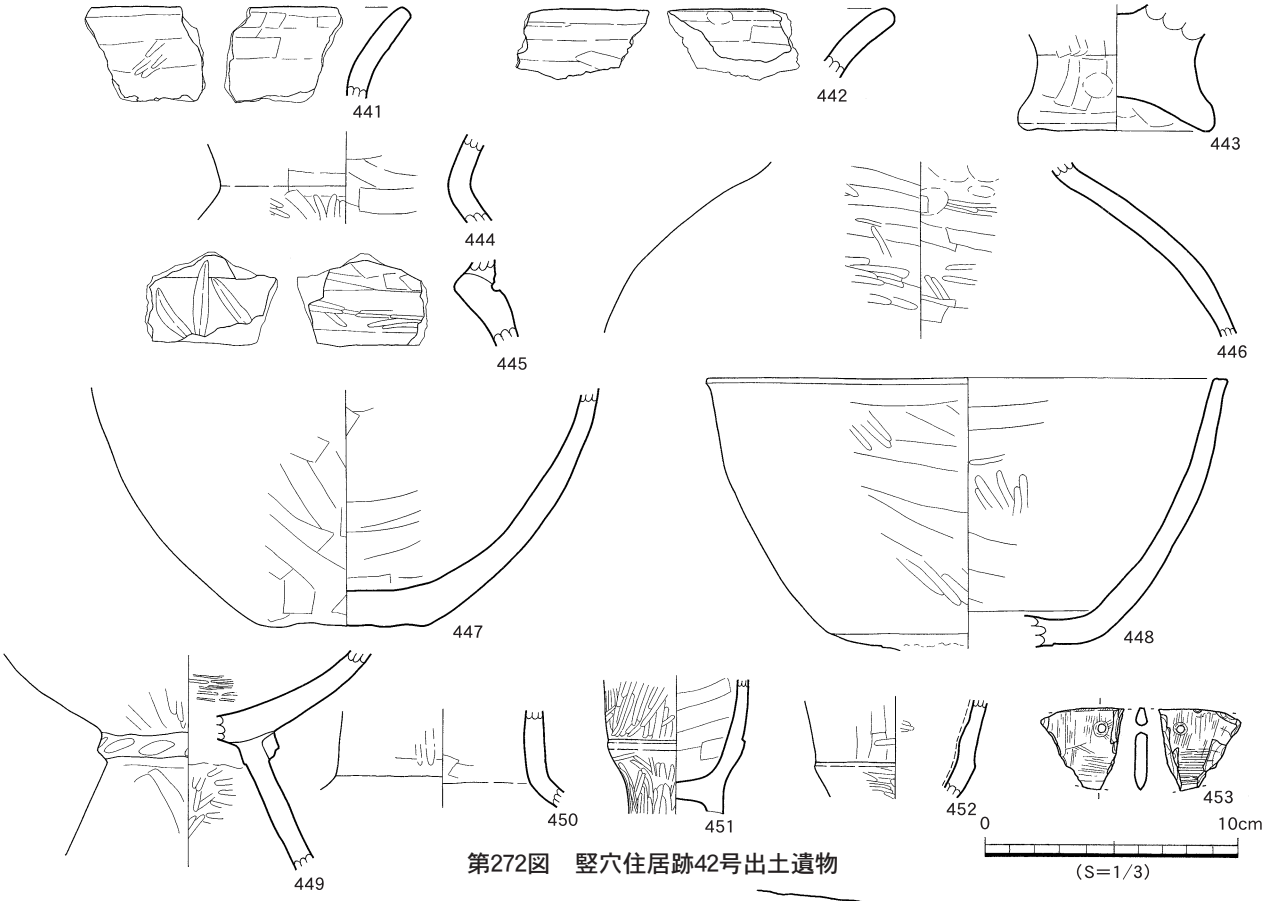
る。448は高坏である。口縁部がわずかに外反し，直線的な胴部で脚部からの立ち上がりは水平に移行する。449は高坏もしくは脚付きの鉢である可能性が考えられ，胴部と脚部との接合面には貼付突帯がめぐりキザミが施されている。453は石庖丁の破片である。

竪穴住居跡43号（第273・274図）

Ⅰ－16区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.4m，短辺3.1mの略円形で，イモ穴等による攪乱を随所に受けている。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。硬化面がほぼ全面に認められ，これを除去したところ中央にかけて掘り方は緩やかに傾斜していた。柱穴などの付帯施設の確認はこの時点で行い，2基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られない。遺物は，総点で227点が出土しこの内の5点を図化した。454・455は薄手の甕である。口縁部が強く外反し頸部には内外面共

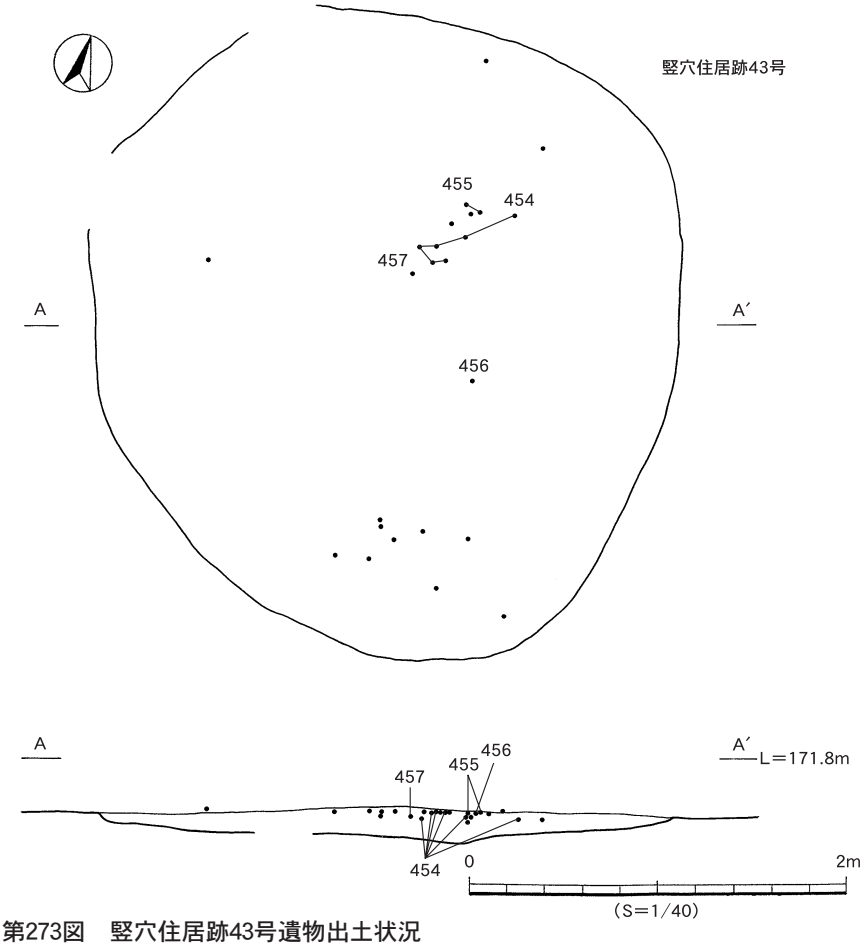


第271図　竪穴住居跡42号

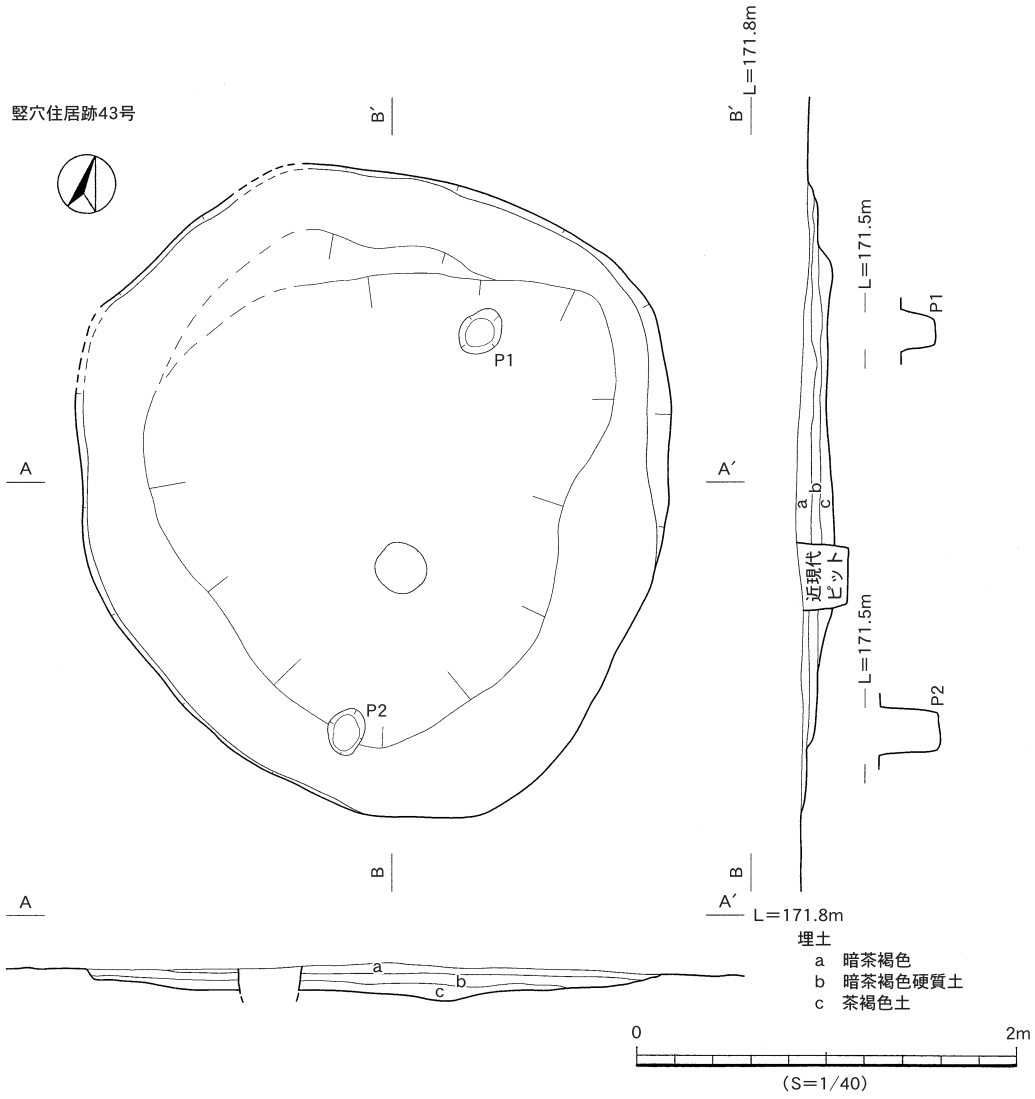


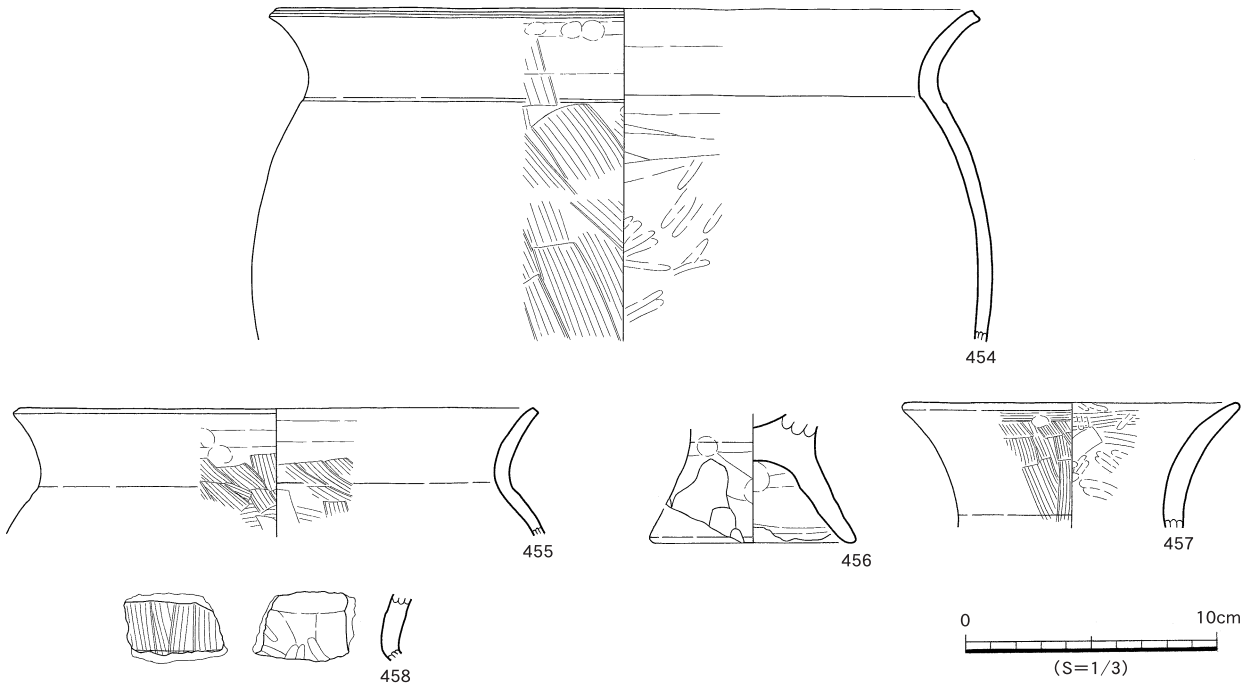
第272図　竪穴住居跡42号出土遺物

に稜が伴う。胴部は球状に膨らんでいる。456は甕の脚部である。端部に欠損が見られるが，意図的な打ち欠きの可能性も考えられるためにこれを図示した。457・458は壺の破片である。



第273図　竪穴住居跡43号遺物出土状況





第274図　竪穴住居跡43号・出土遺物

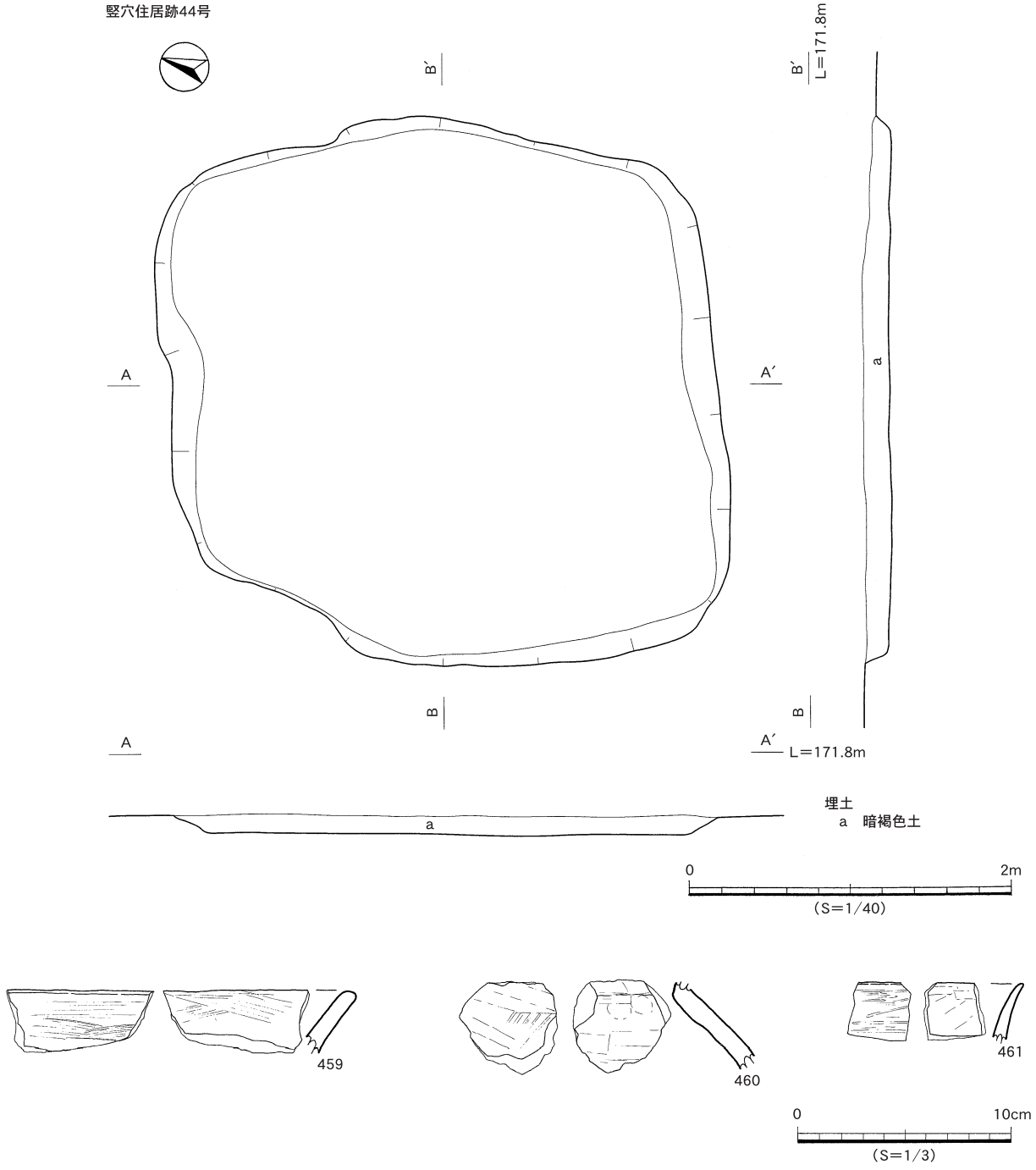
竪穴住居跡44号（第275図）

Ｊ－16区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.4m，短辺3.4mの隅丸方形プランを呈する。北側がわずかにすぼまる。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一で，硬化面や貼床等は確認されなかった。柱穴などの付帯施設は，床面を除去しながら調査を行ったが確認できなかった。炉・焼土や炭化物の広がりも見られない。遺物は，総点で232点が出土し，この内３点を図化した。459は口縁部片である。

竪穴住居跡45号（第276～278図）

Ｊ－16区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.2m，短辺3.3mの隅丸長方形で，東と北側にやや張り出し状のプランが認められた。

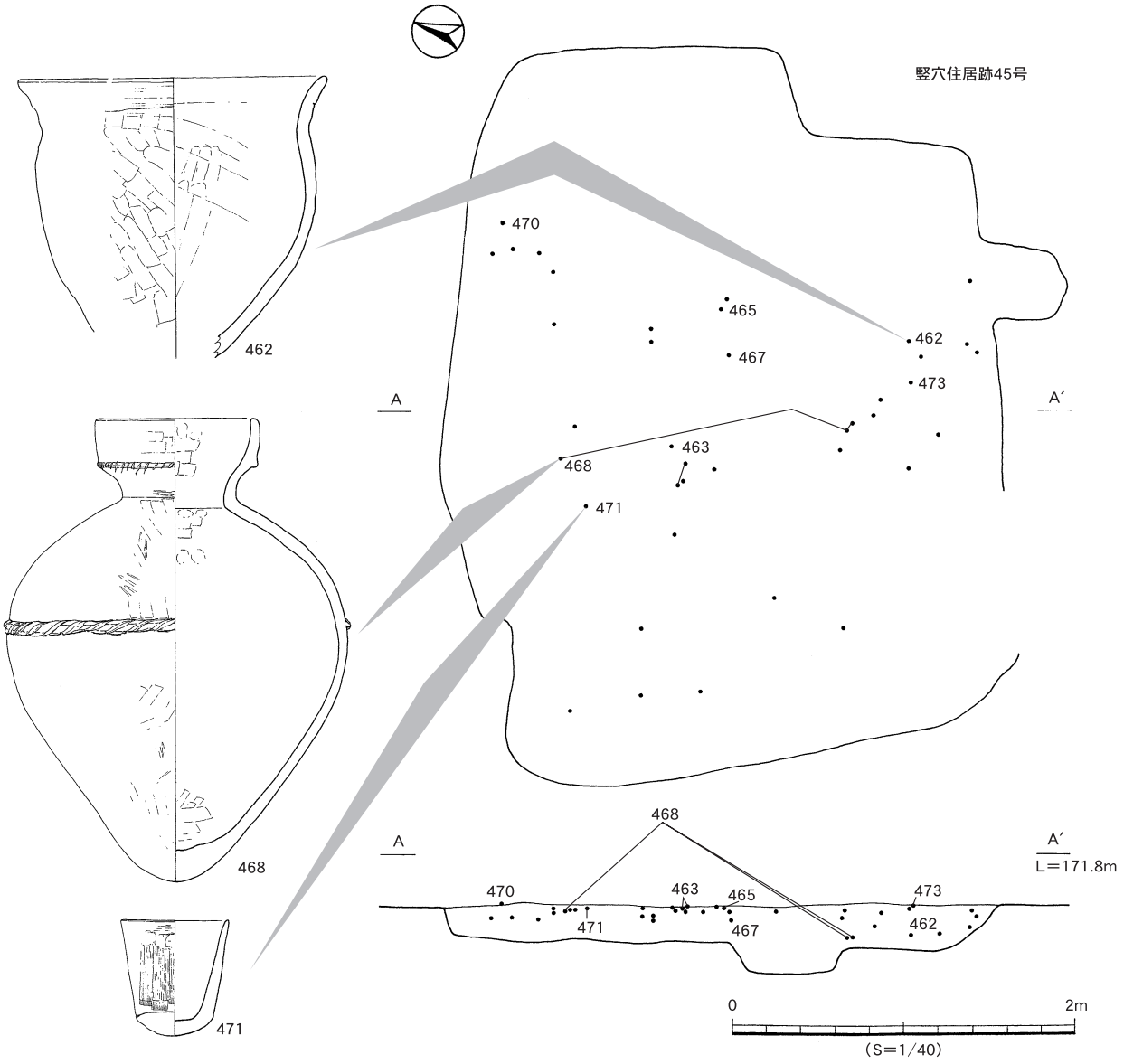
調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一であったが，南側に甕が底部を欠いた状態で伏せられて検出され，周辺のわずかな軟質土を掘り下げていくと土坑状のプランになり，その床面に甕の口縁部は接していた。埋土ａ層下はわずかに硬化しており，これを除去すると中央に土坑が検出



第275図　竪穴住居跡44号・出土遺物

された。その結果，遺構内に２基の土坑が検出され，一部のプランが重複している。両者の新旧関係については中央部分検出のものが古く，南側検出のものが新しいと思われる。西側に見られる細長いテラス状のプランは硬化面を除去した後に見られたもので，その１段下は浅く凹んでいる。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で５基の柱穴が確認された。Ｐ２・５は約50㎝と深い。炉・焼土や炭化物の広がりは，南側土坑の一角にまとまっていたが，床面での広がりは掴めなかった。

遺物は，総点で305点が出土し，この内の12点を図化した。462は土坑内に口縁部を下にして出土した土器である。口縁部は外反し，頸部でくびれる。胴部は膨らむが，底部は欠損しているために不明である。外面には短いケズリが多く残されており器面は均一でない。464は甕の胴部片である。465・466は底部片である。465はしっかりとした脚部を作出している。466は底径が広く，外端が張り出している。467は，頸部のやや短い小型の壺である。470は幅広突帯が貼付されキザミが施される。468は完形に復元できた２重口縁の壺である。口縁部は直行するが端部でわずかに内湾している。屈曲する口縁部にはキザミが施され，頸部はややしまっている。胴部は膨らみ最大径付近に貼付突帯をめぐらせてキザミが施される。底部は，胴部と比べて厚みがあり丸底状を呈する。471は竪穴住居跡のプランが検出されると同時に出土した坩である。口縁部から底部に至るまで直線的であり，胴部下半に段を設けて強く屈曲する。底部は丸底である。外面の段は，内面の胴部への立ち上がりと連動する。外面には縦方向の調整痕が顕著に残る。



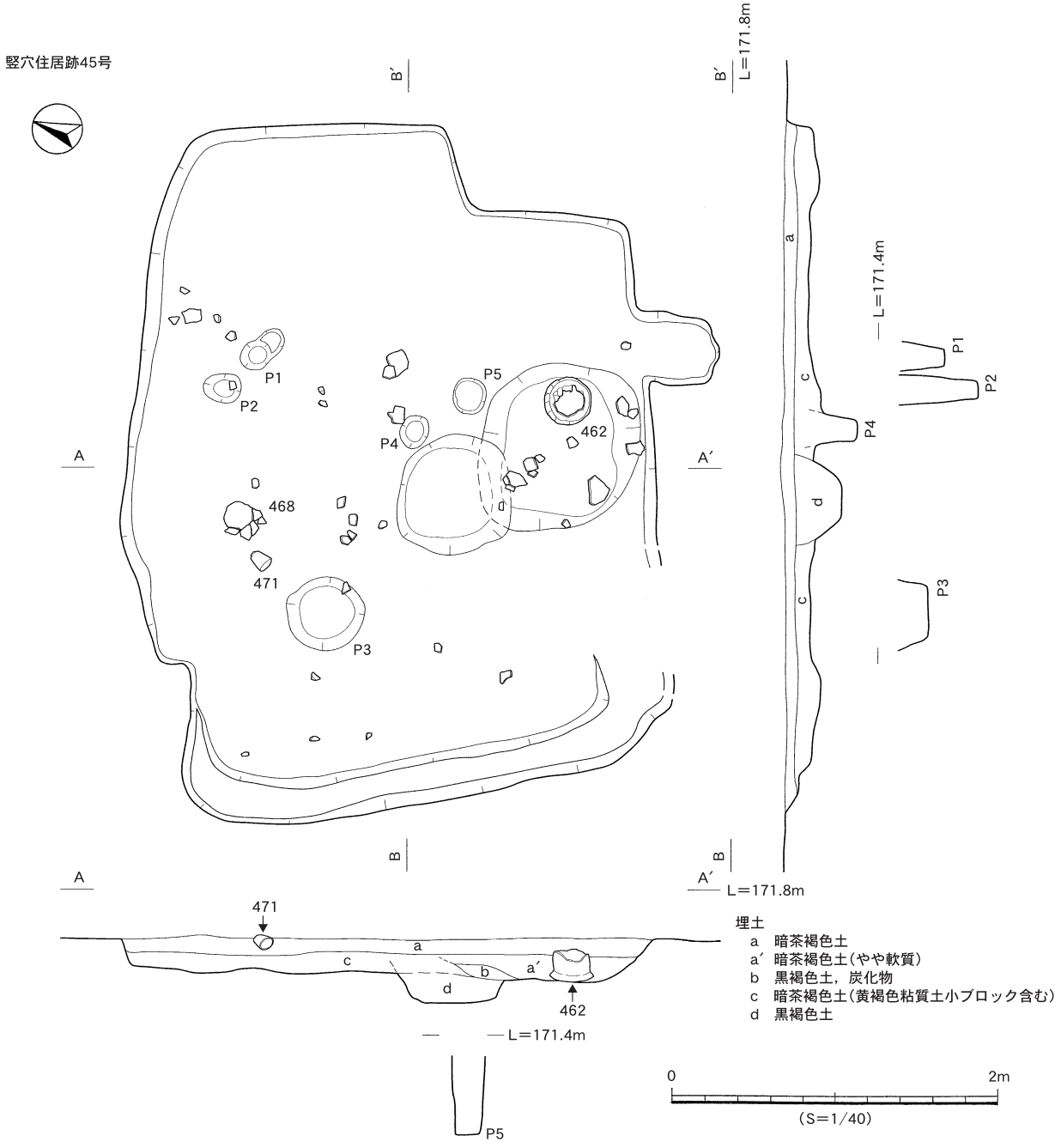
第276図　竪穴住居跡45号遺物出土状況



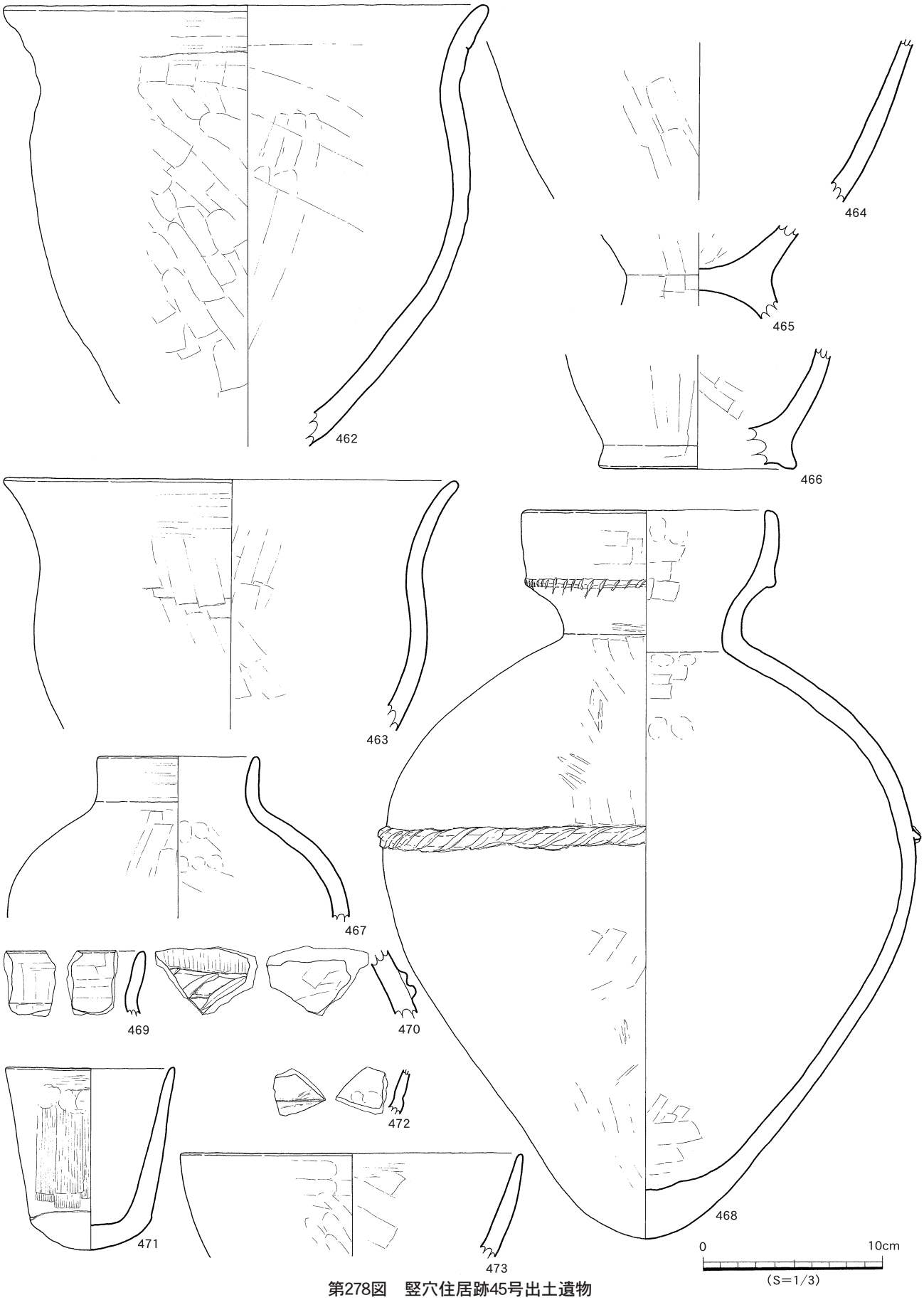
遺物出土状況①



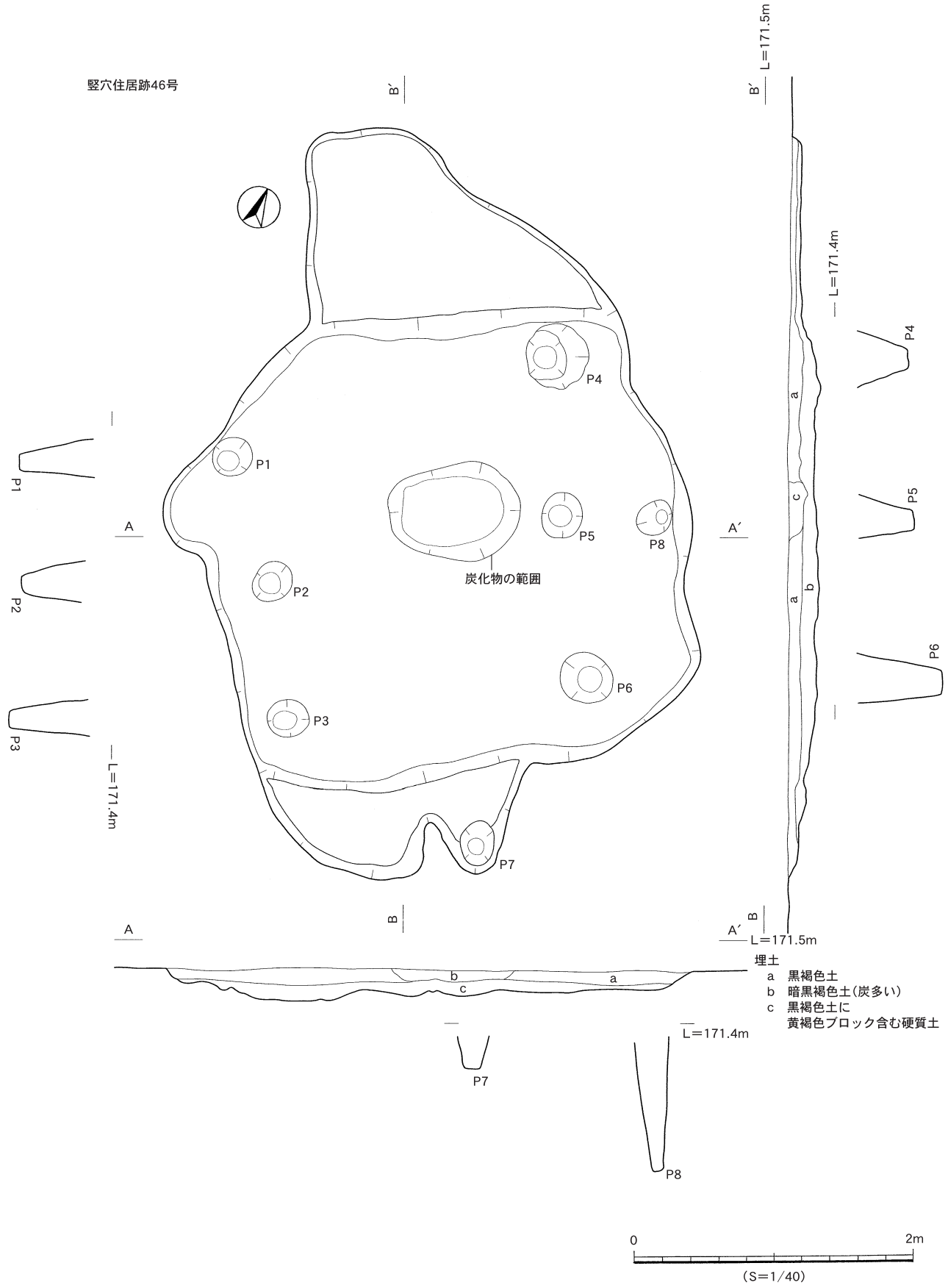
遺物出土状況②



第277図　竪穴住居跡45号



第278図　竪穴住居跡45号出土遺物



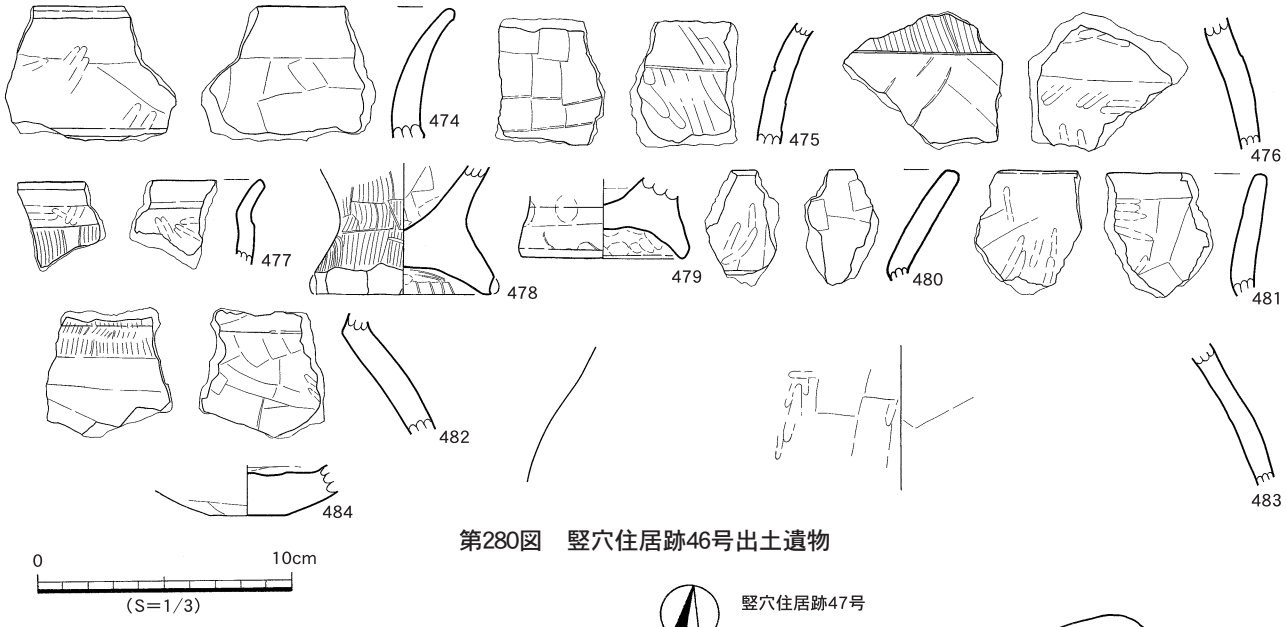
第279図　竪穴住居跡46号

竪穴住居跡46号（第279・280図）

K－16・17区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.5m，短辺3.5mの方形を基本に，北・南側に不定形の張り出しを有し，最長で5.4mであった。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。検出時には既に中央に炭化物の集中が見られ，埋土aに切り込むように略方形の土坑が設けられる。埋土aの下部で硬化面を確認したため，これを床面と判断した。北側の張り出しは，貼床も連続して段を有するが，南側の段は，埋土cを掘り下げた状態で確認された。

柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で8基の柱穴が確認された。特に，中央の方形プラン内では東西に各3基ずつがほぼ一直線上に列をなす。深さも同じであるが，その東側にあるP8は，検出面から深さ90㎝以上ある。

遺物は，総点で183点が出土しこの内の11点を図化した。474～479は甕，480～484は壺である。

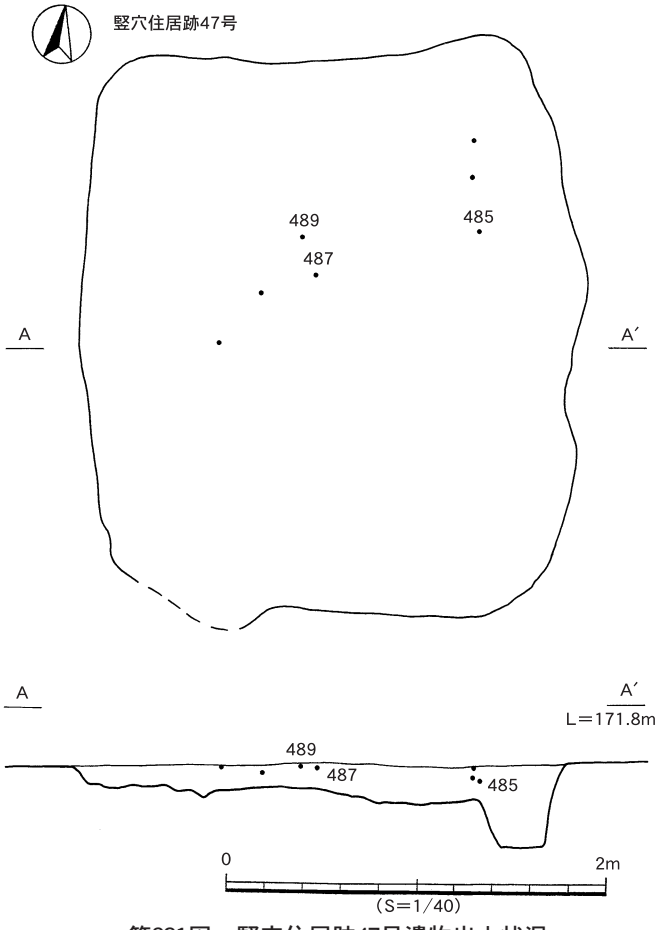


第280図　竪穴住居跡46号出土遺物

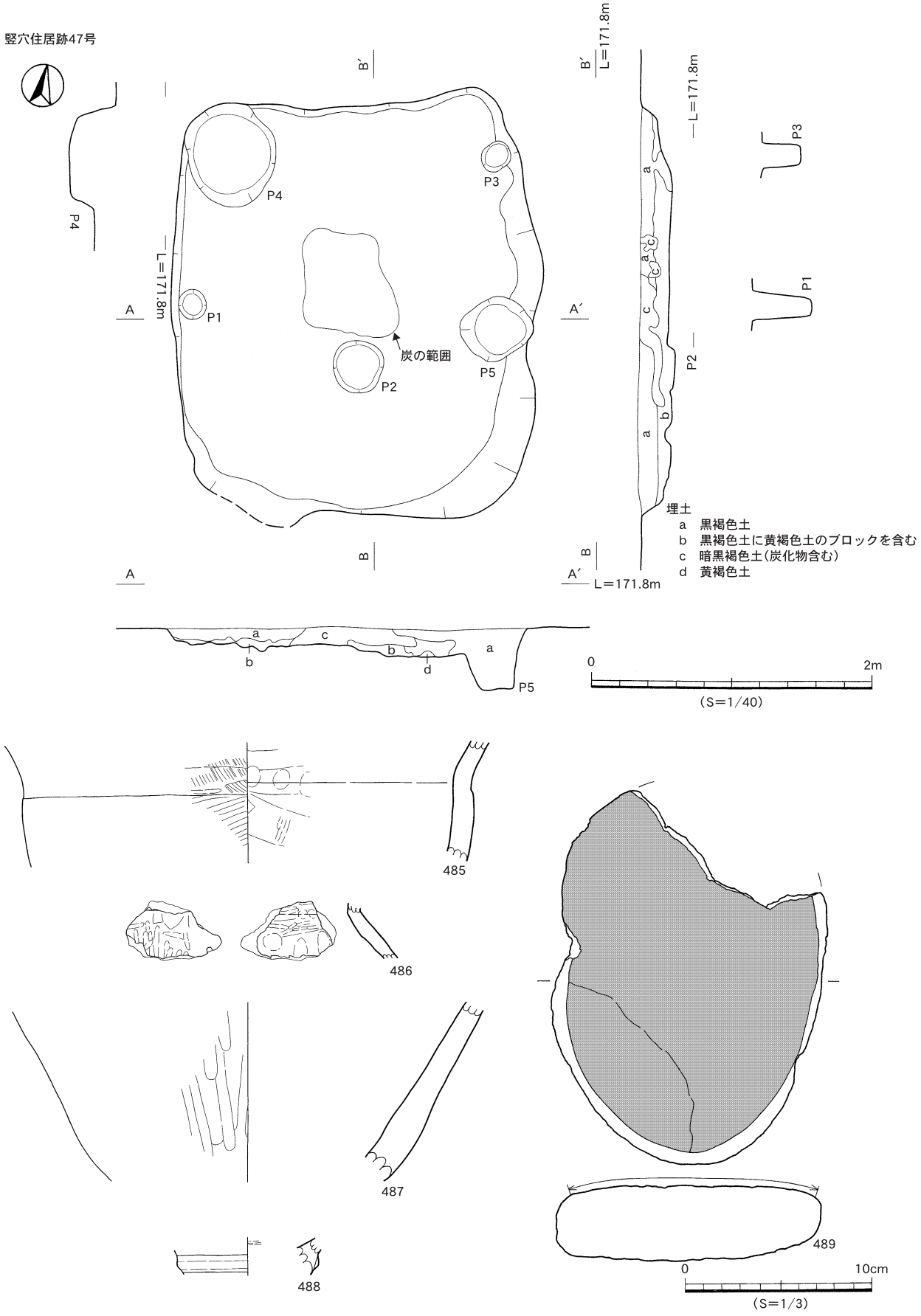
竪穴住居跡47号（第281・282図）

K－17・18区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.9m，短辺2.6mの隅丸長方形を呈する。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時，上面で検出当初から見られていた中央部分の炭化物集中は，床面に達するまで連続していることを確認した。なお，炭化物集中を断面観察すると，検出面よりも下層に行くに従って広がっている。

柱穴などの付帯施設の確認は，埋土b層を除去しながら進めて行き，5基の柱穴あるいは土坑を確認した。中央よりやや南側検出のP2は浅いが，P1・3・5は安定しているようにも思える。P4に関しては住居北西の壁面にあり，長軸は60㎝ある。柱穴以外の機能も考えられる形状である。遺物は，総点で194点が出土し，この内5点を図化した。485は甕の口縁部下の破片である。口縁部は外反し，内外面に稜を有する。胴部はわずかに膨らんでいる。486・487は壺の破片である。486は頸部付近，487は底部付近である。488は器種を特定することが出来なかった。489は石皿片である。楕円形で外面に磨り面が形成されている。なお，出土状況は，検出時に炭化物の広がりと接して出土している。



第281図　竪穴住居跡47号遺物出土状況



第282図　竪穴住居跡47号・出土遺物

竪穴住居跡48号（第283図）

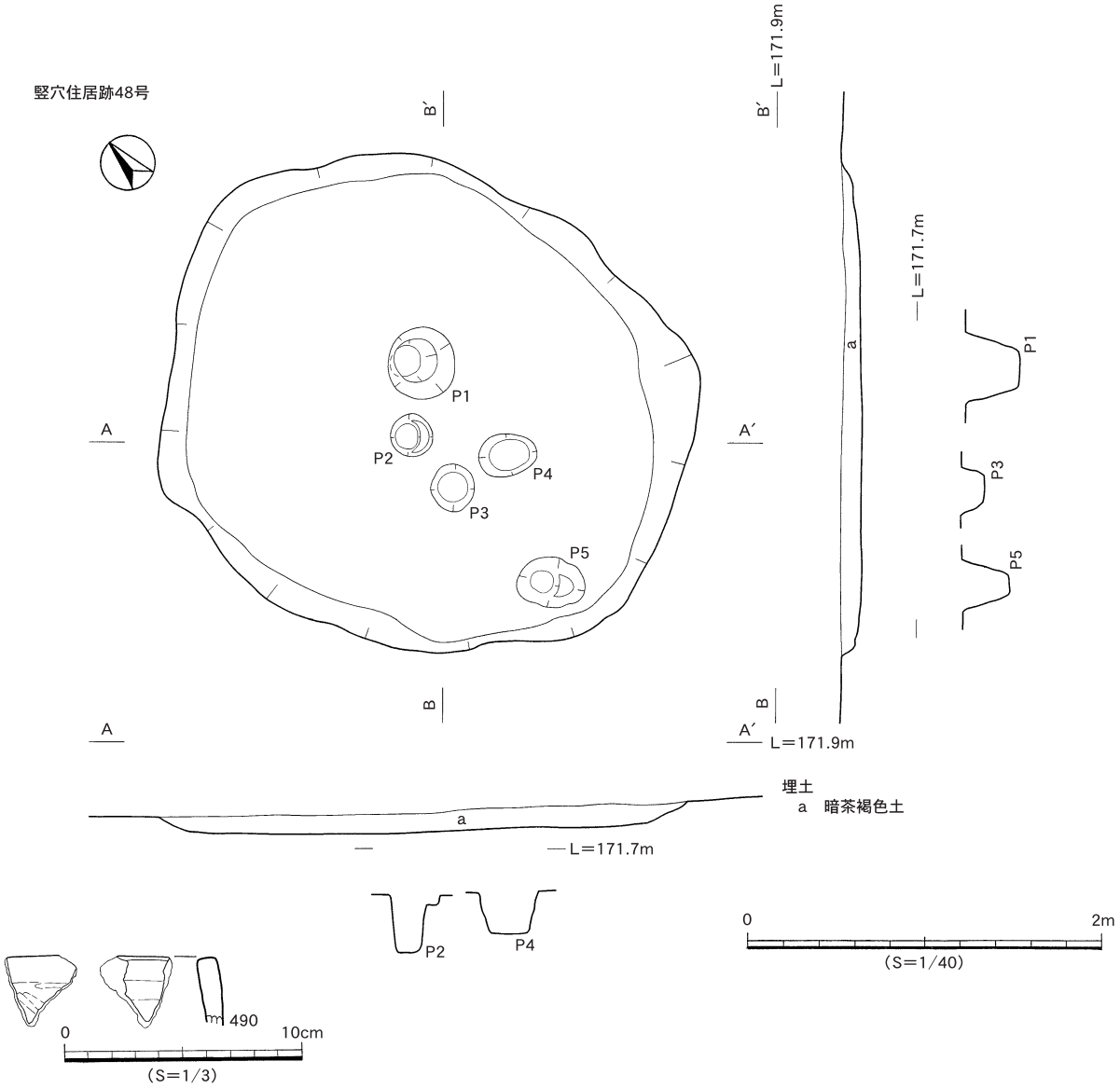
Ｊ－17区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.1m，短辺2.8mの楕円形を呈する。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層で，アカホヤ火山灰や黄褐色土のブロックを含まないことから，貼床はなかったものと思われる。この埋土の記録を行い，ベルトを除去して床面を検出していったところ，中央に４基，南側に１基の柱穴が検出された。Ｐ３は浅いが，Ｐ１・２・４・５は約40㎝と深い。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしたプランでは確認されなかったが，中央部分がわずかに炭化物が多かった。

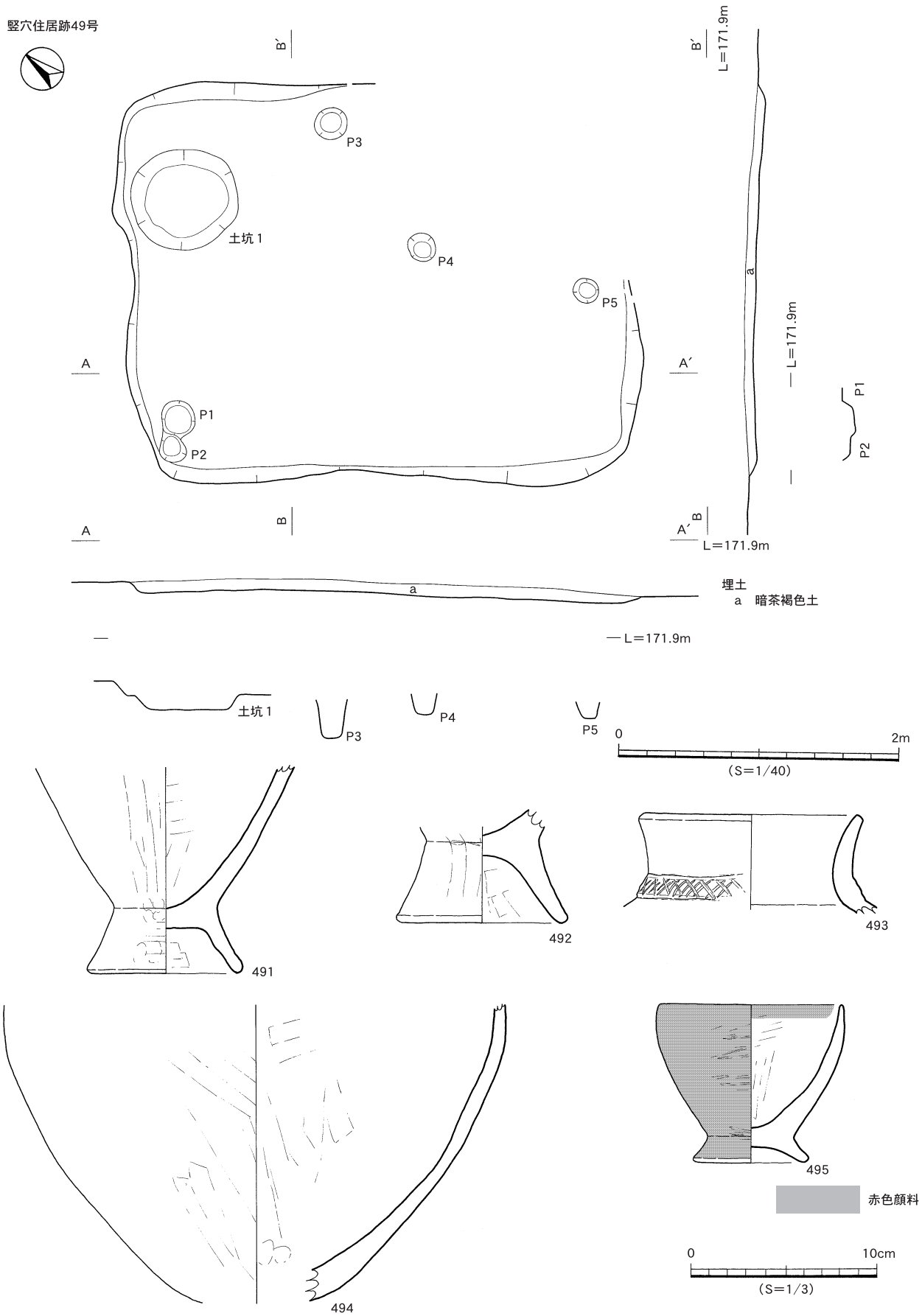
遺物は，総点で27点が出土し，この内の１点を図化した。490は口縁部がやや内傾し，口唇部がわずかに厚い。

竪穴住居跡49号（第284図）

Ｊ・Ｋ－18区においてⅧ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.6m，短辺2.8mの隅丸長方形で，東側の一部が削平を受ける。調査は，残存状況の良い部分で２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。検出面から浅く，床面には硬化面等の変化は見られない。柱穴などの付帯施設は，床面で５基の柱穴と１基の土坑が確認された。土坑は約70㎝で深さは約10㎝であった。炉・焼土や炭化物の広がりは，これらの土坑や柱穴も含めて見られなかった。遺物は，小破片が多く総点で98点が出土し，この内図化できたものは５点である。491・492は甕の脚部で，いずれも比較的しっかりとした作りで，491は脚部内面が平坦に推移する。493は口縁部が外反し，頸部に突帯を貼り付け，格子状のキザミを施している。495は，小型の鉢である。



第283図　竪穴住居跡48号・出土遺物



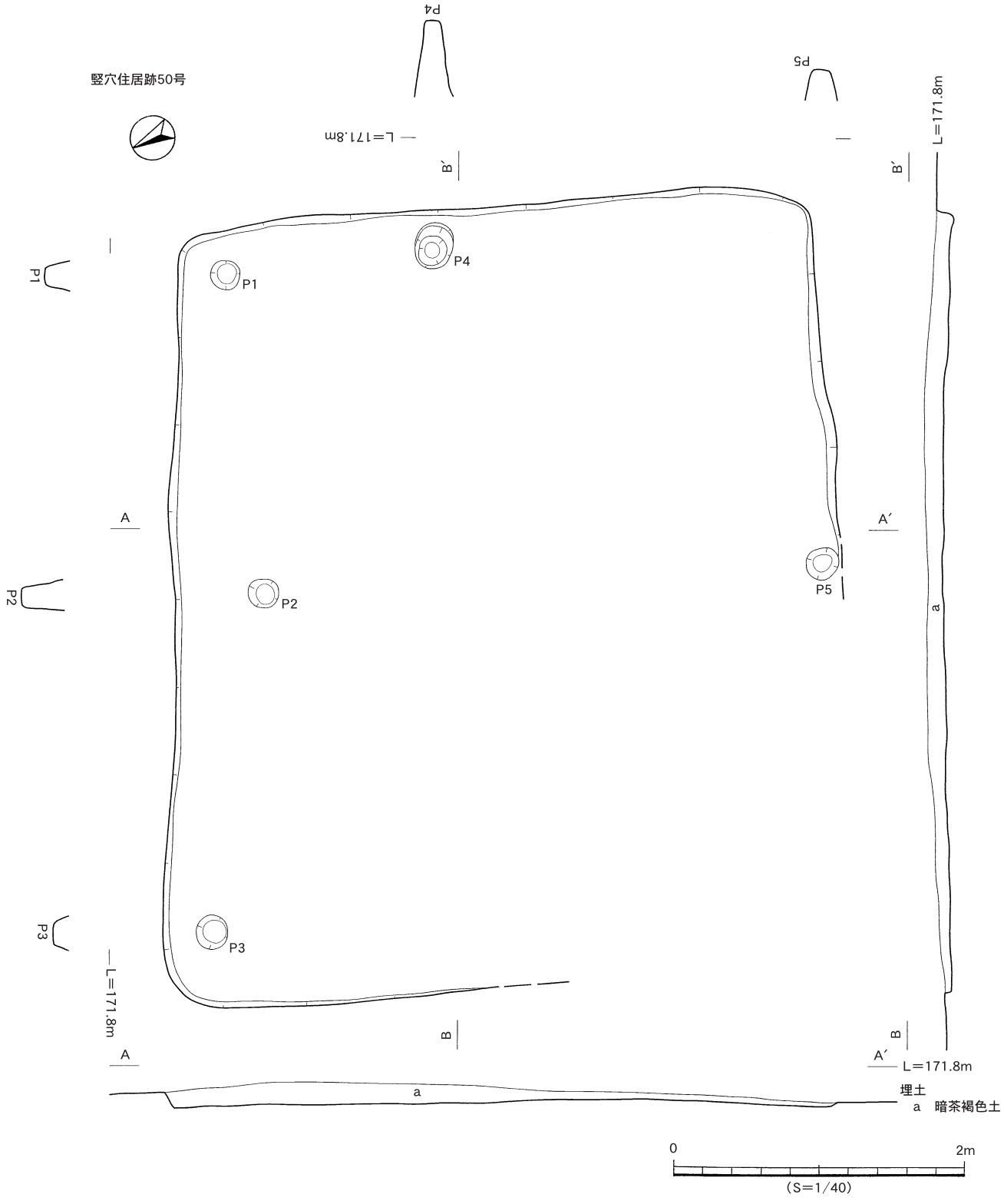
第284図　竪穴住居跡49号・出土遺物

竪穴住居跡50号（第285・286図）

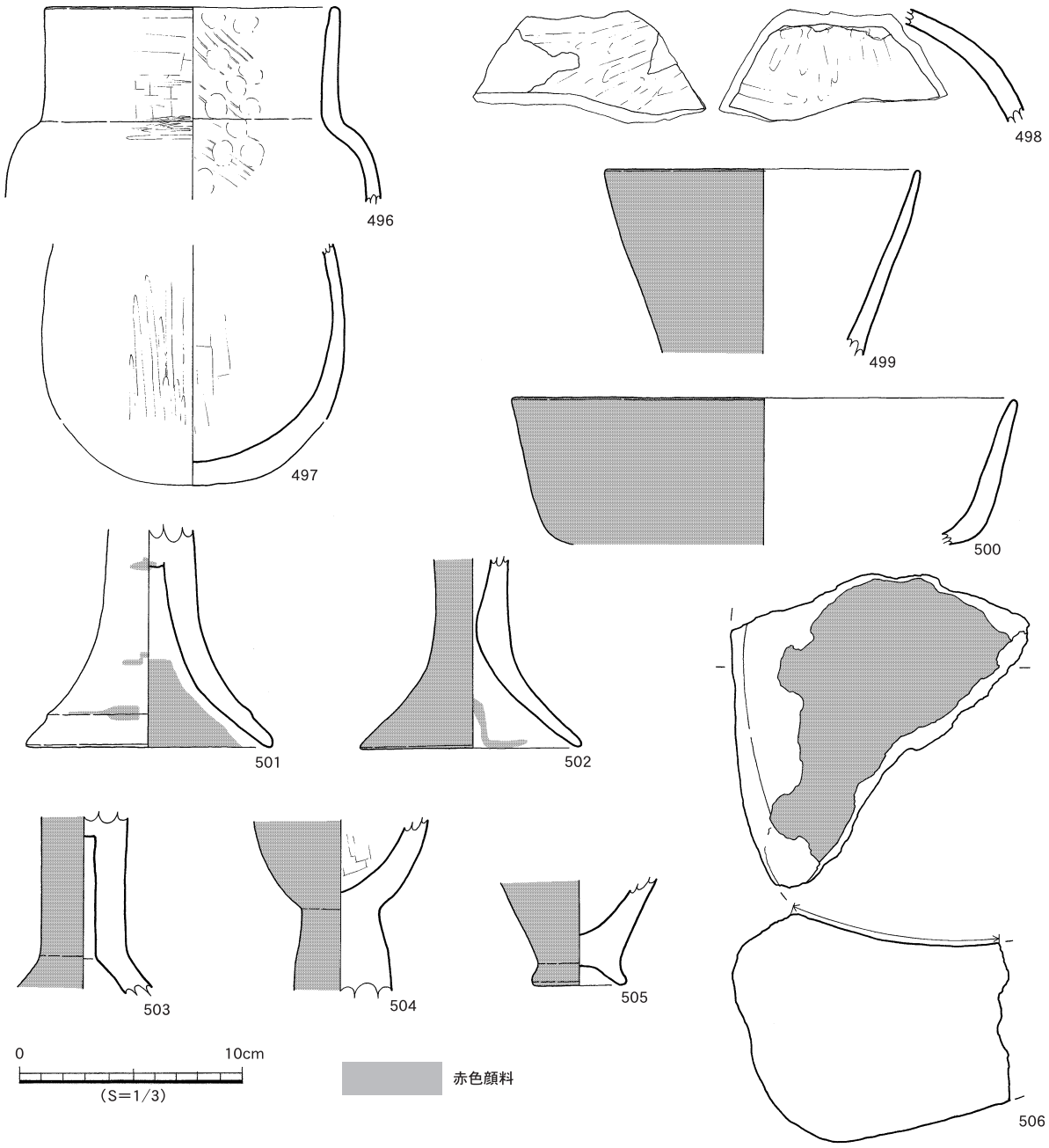
Ｊ－18・19区においてⅥ層上面で検出された。

検出時のプランは，長辺5.5m，短辺4.6mの隅丸長方形で，西側のコーナーは精査を繰り返し行っていったがわからなかった。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定したが，約10㎝掘り下げたところでアカホヤ火山灰層の下位のⅦ層が見られた。このⅦ層は埋土ａと類似しており，Ⅶ層が粘性が強く，この粘質の差を頼りに床面を精査して床面検出に努めていった。



第285図　竪穴住居跡50号



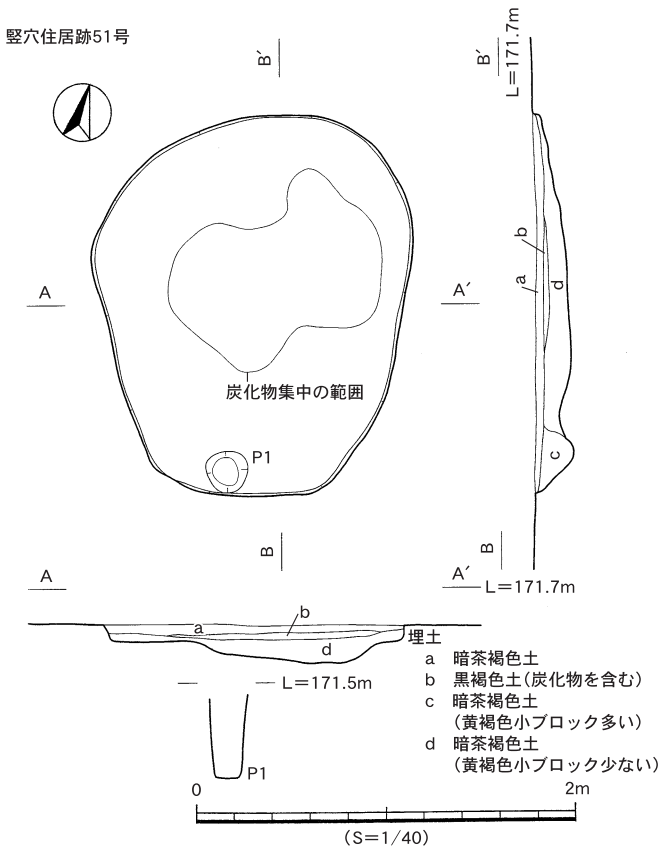
第286図　竪穴住居跡50号出土遺物

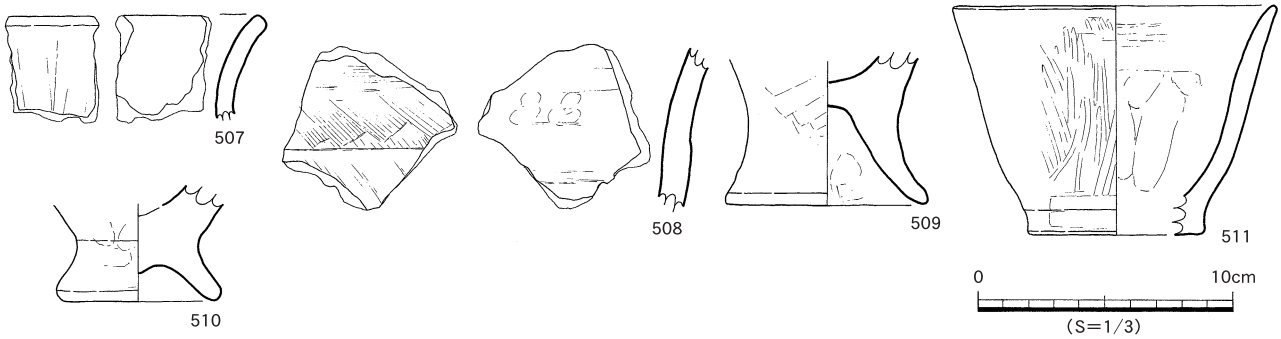
この時点で埋土の記録を行い，ベルトを除去し再度床面を検出していったが，貼床や硬化面等は確認できなかった。柱穴などの付帯施設は，床面を除去した段階で５基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしない。遺物は，総点で205点が出土し，この内の11点を図化した。496・497は同一個体の可能性もある。496は，口縁部が直立し，胴部で球状に膨らむ。底部外面は剥落が激しいが，内面の状況などから丸底を呈していることがわかる。500は高坏である。口縁部は直線的に外傾し，胴部で丸みを帯びながら屈曲する。501は高坏の脚部で，外面に段を有するタイプである。503は直線的な中空の脚で，稜を有して屈曲する。504は高坏状の充実した脚部を有する。506は石皿で，中央の作業面は明瞭に凹んでいる。

竪穴住居跡51号（第287図）

Ｊ－18区においてⅦ層下面で検出された。検出時のプランは，長辺２ｍ，短辺1.7ｍの楕円形で，当初は土坑の可能性も想定していた。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。掘り下げてすぐ，中央に炭化物の集中が認められ，この面が床面と認定した。床面を構成する埋土ｄは，周辺の住居などで貼床に用いられているものであり，再度ベルトを設定して掘り下げていった。その結果，東南方向に貼床は傾斜し，深いところで最大10㎝程敷き詰められているとこが判明し，竪穴住居跡と判断した。

柱穴などの付帯施設は，この面を除去しながら作業を進め，１基の柱穴が確認された。遺物は，総点で136点が出土し，この内の５点を図化した。507は甕の口縁部片で，口縁部は外反している。508は口縁部外面に縦位後に斜位の工具痕が見られる。509は甕の脚部であるが，胴部から脚部へは緩やかに移行している。510は外面に丁寧なミガキを施す。口縁部は外反し，胴部下半でやや膨らんで平底の底部へと至る。





第287図　竪穴住居跡51号・出土遺物

竪穴住居跡52号（第288図）

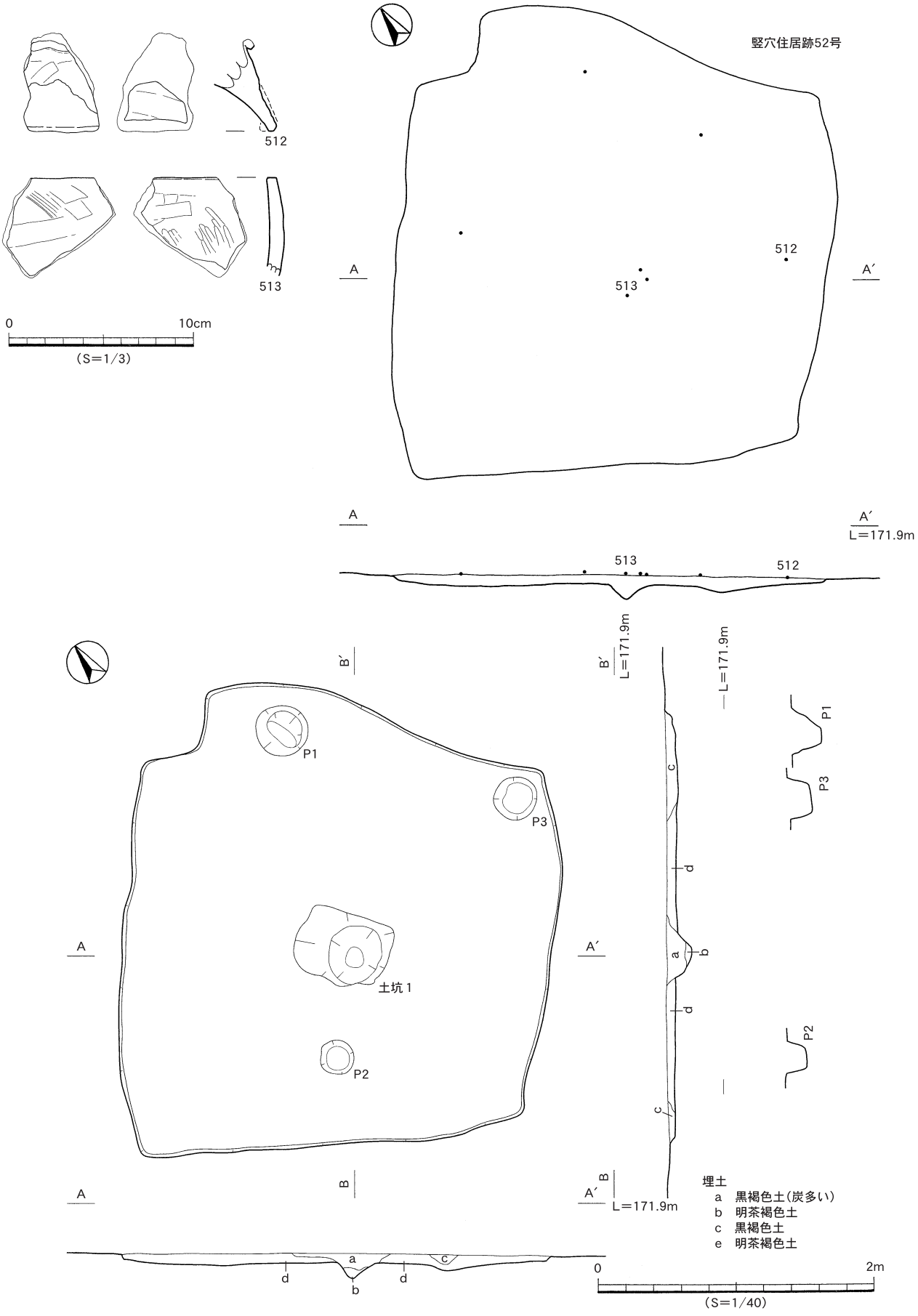
Ｉ－17・18区においてⅦ層下面で検出された。検出時のプランは，長辺3.2m，短辺3.2ｍの隅丸方形で，北東側にやや張り出し状のプランが認められた。検出時に既に中央に炭化物の集中が見られ，床面のみが残存しているものと思われた。この炭化物は放射性炭素年代測定を実施し，1,610±20yrBPと結果が示されている。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。中央の炭化物集中は，埋土ｄを断ち切るように設けられた土坑内で確認されている。柱穴などの付帯施設は，３基が確認された。検出面から約20㎝程度といずれも浅い。遺物は，総点で51点が出土し，この内の２点を図化した。全ての遺物が検出面での出土である。

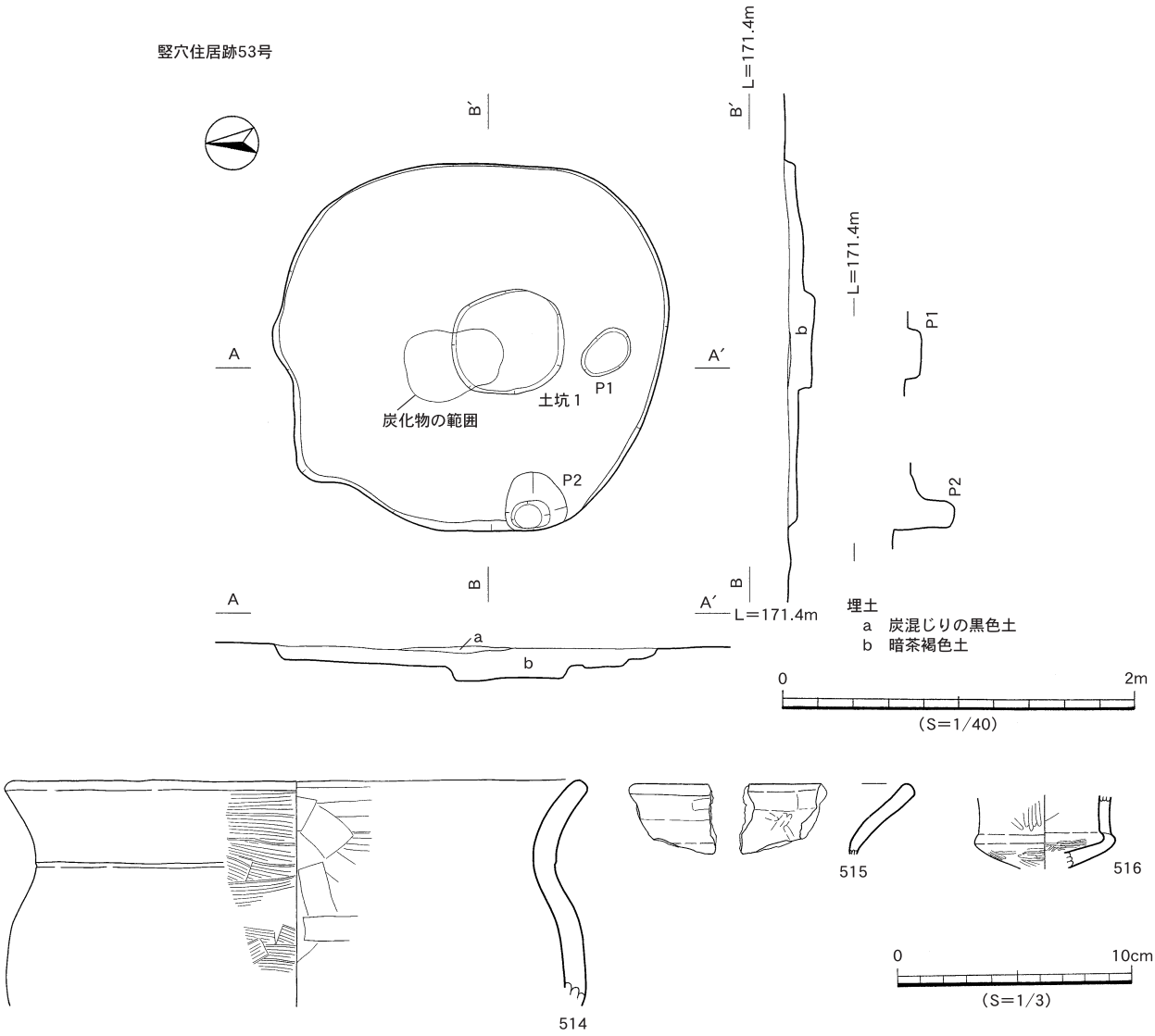
竪穴住居跡53号（第289図）

Ｉ－18区においてⅦ層下面で検出された。検出時のプランは，長辺2.2m，短辺2.1ｍの円形に近い。検出時既に炭化物集中が中央に見られ，床面のみ残存しているものと思われた。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して貼床と思われるｂ層を掘り下げていった。柱穴などの付帯施設は，柱穴が２基，中央に土坑状の浅い掘り込みが確認された。遺物は，総点で33点が出土し，この内の３点を図化した。

514は口縁部が外反し胴部が膨らむ。外面には稜が見られるが，内面ははっきりとしない。515は鉢である。516は坩である。口縁部上端を欠損するが，竪穴住居跡２号出土の14に器形は類似する。



第288図　竪穴住居跡52号・出土遺物



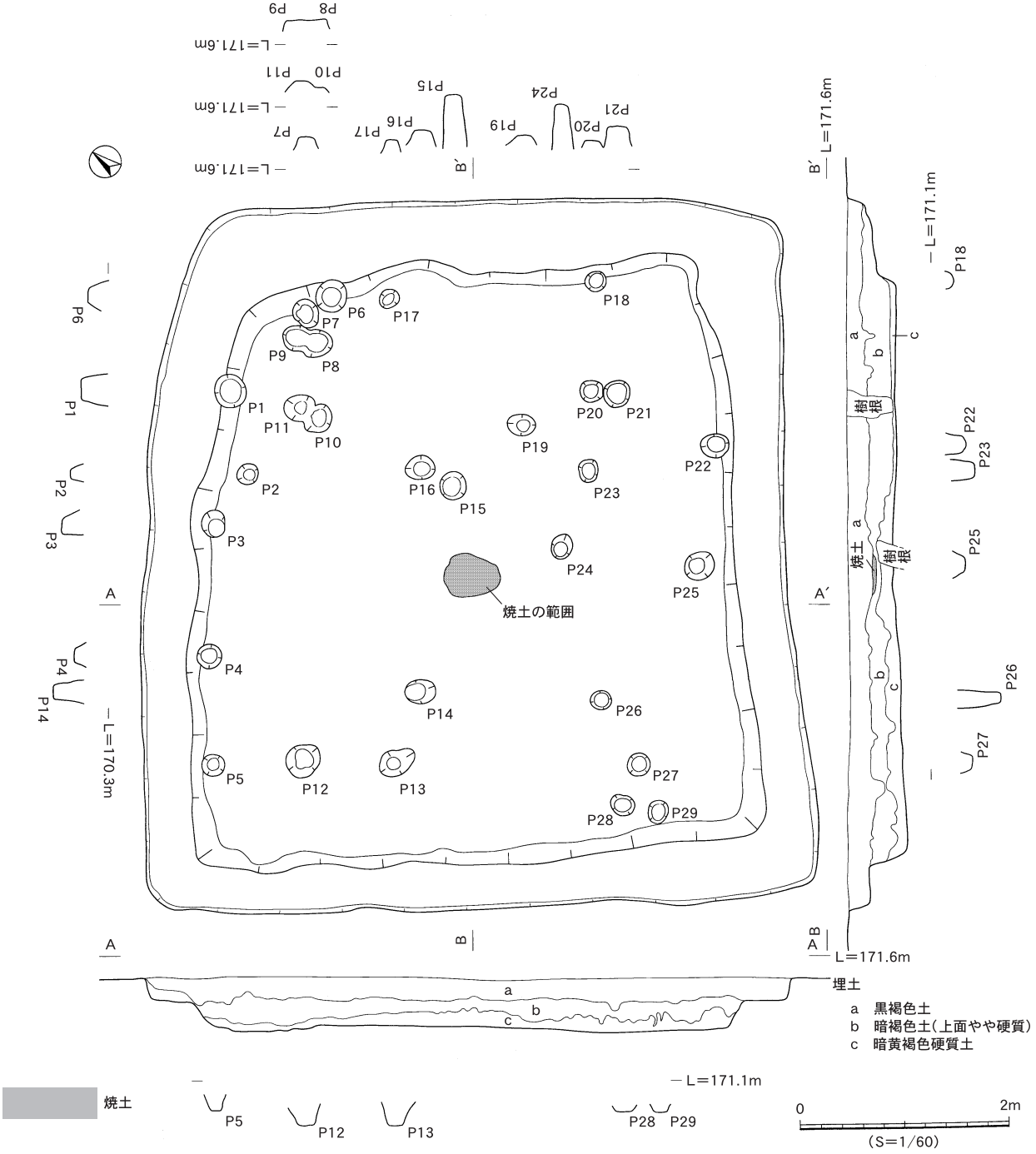
第289図　竪穴住居跡53号・出土遺物

竪穴住居跡54号（第290～292図）

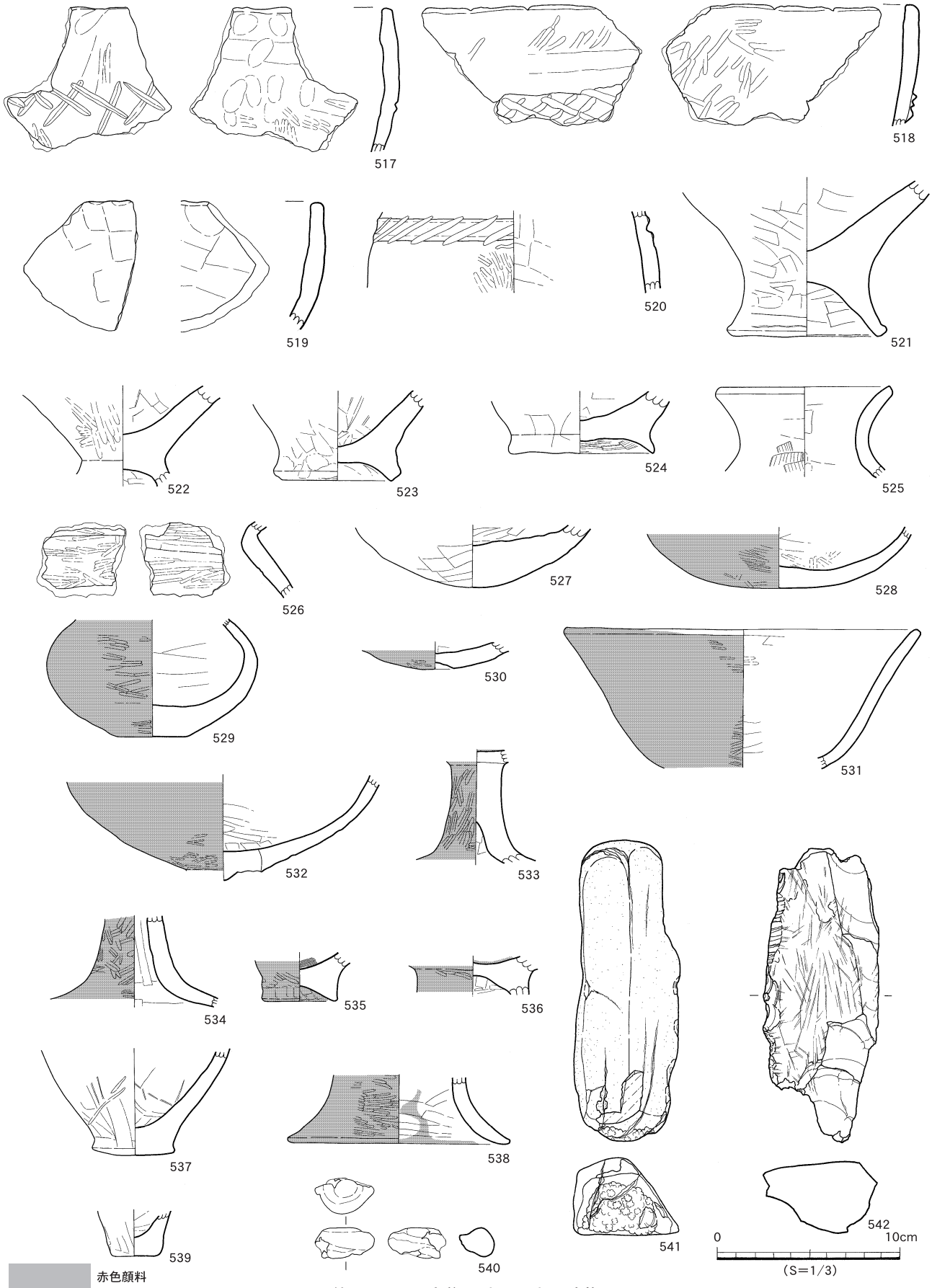
G－17・18区においてⅦ層下面で検出された。

検出時のプランは，長辺6.9m，短辺5.6mの隅丸長方形を呈する大型の竪穴住居跡である。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。20㎝程度掘り下げたところで，やや硬質の埋土の変化や中央に焼土・炭化物等が広がっていたことから，これを床面と想定して硬化面の検出に努めた。しかし，部分的に不安定であった点や，遺物の出土が連続して認められたため，中央ベルトに沿ってミニトレンチを設定して下層の確認を行った。その結果，さらに下層から硬化面が検出されたために，2枚の床面が想定された。このため，上面の記録を行った後にさらに下層の硬化面検出を行った，この結果，上面プランの内側に段掘り状の方形プランが検出され，29基の柱穴が確認された。これらのことから，床面レベルの異なる複数時期の使用が想定される。遺物は，総点で6,612点が出土したが，これらの多くは小破片であった。この内図化できた資料は32点である。

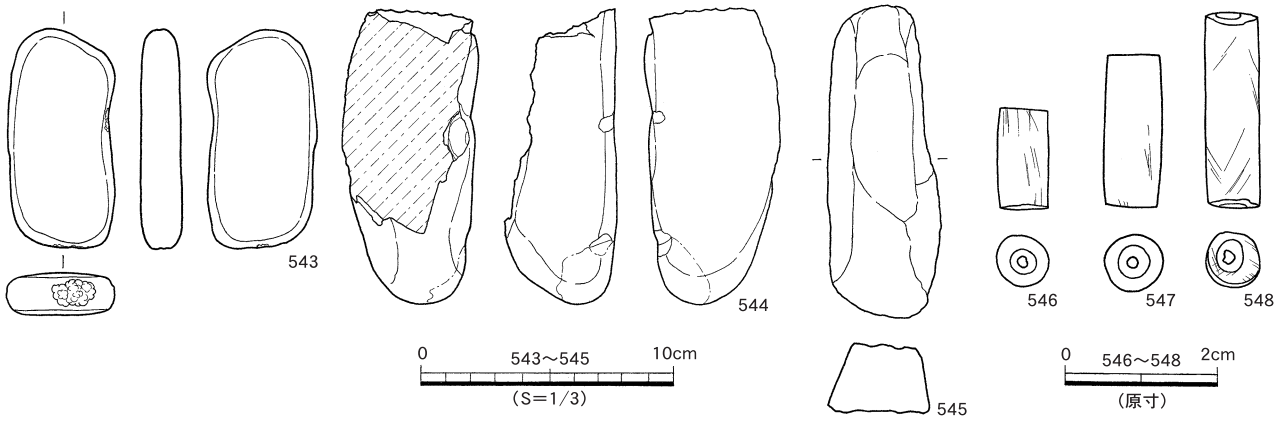
517は口縁部が内湾する。口縁部下には格子状にキザミ目が施される。518も類似するが，キザミは貼付突帯上に施文されている。525～527は壺である。531は高坏の坏部である。口縁部が外反し，胴部下半は丸みを帯びて脚部へ至る。540は粘土塊である。541は棒状礫の端部に敲打痕が見られる。542は粗い打ち欠きが見られるが，光沢を持つ磨り面が見られる。546～548は緑色の石材を用いた管玉である。埋土中からの出土である。



第290図　竪穴住居跡54号



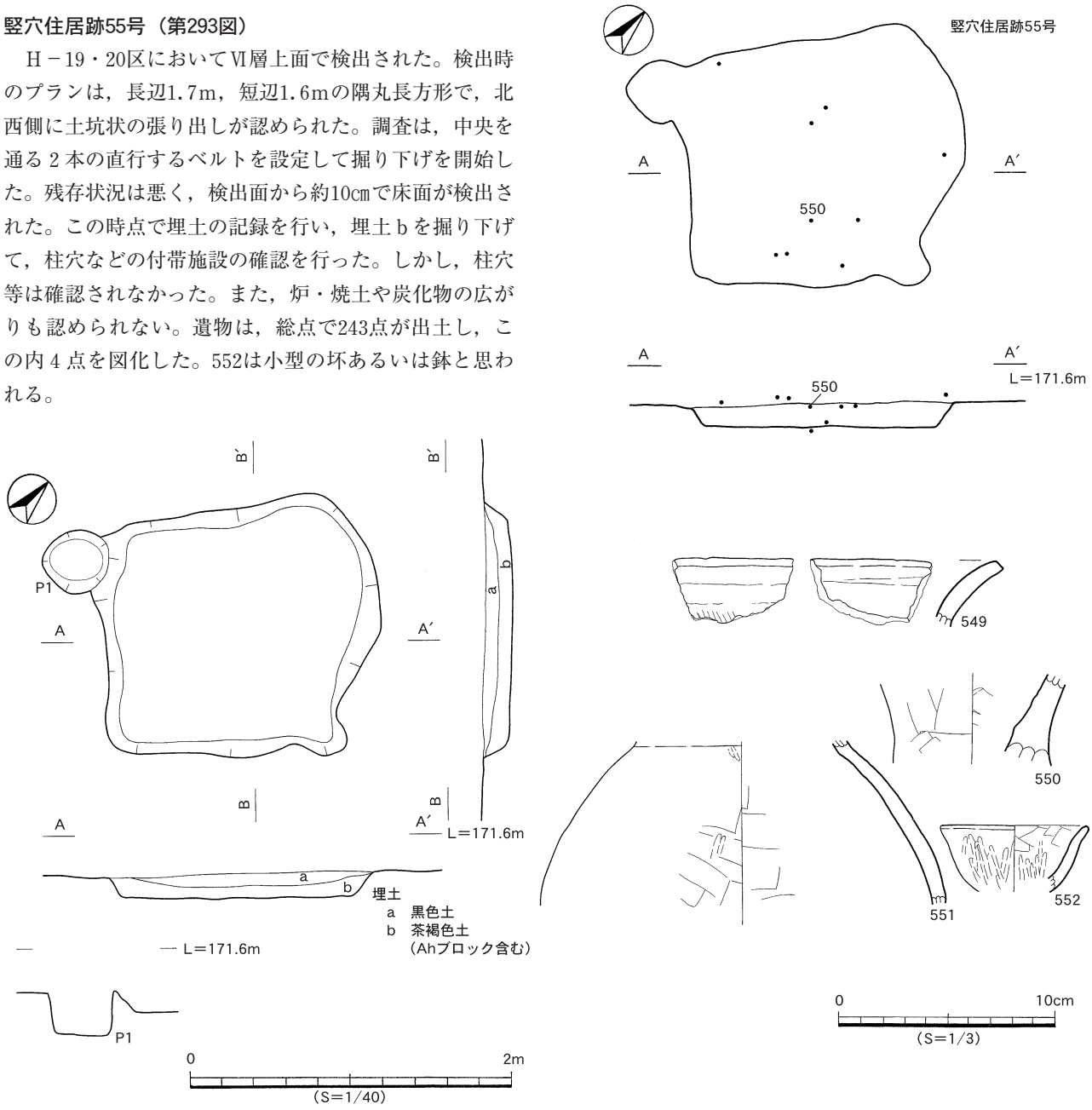
第291図　竪穴住居跡54号出土遺物



第292図　竪穴住居跡54号出土遺物

竪穴住居跡55号（第293図）

H－19・20区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺1.7m，短辺1.6mの隅丸長方形で，北西側に土坑状の張り出しが認められた。調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。残存状況は悪く，検出面から約10㎝で床面が検出された。この時点で埋土の記録を行い，埋土bを掘り下げて，柱穴などの付帯施設の確認を行った。しかし，柱穴等は確認されなかった。また，炉・焼土や炭化物の広がりも認められない。遺物は，総点で243点が出土し，この内4点を図化した。552は小型の坏あるいは鉢と思われる。



第293図　竪穴住居跡55号・出土遺物

竪穴住居跡56号（第294～296図）

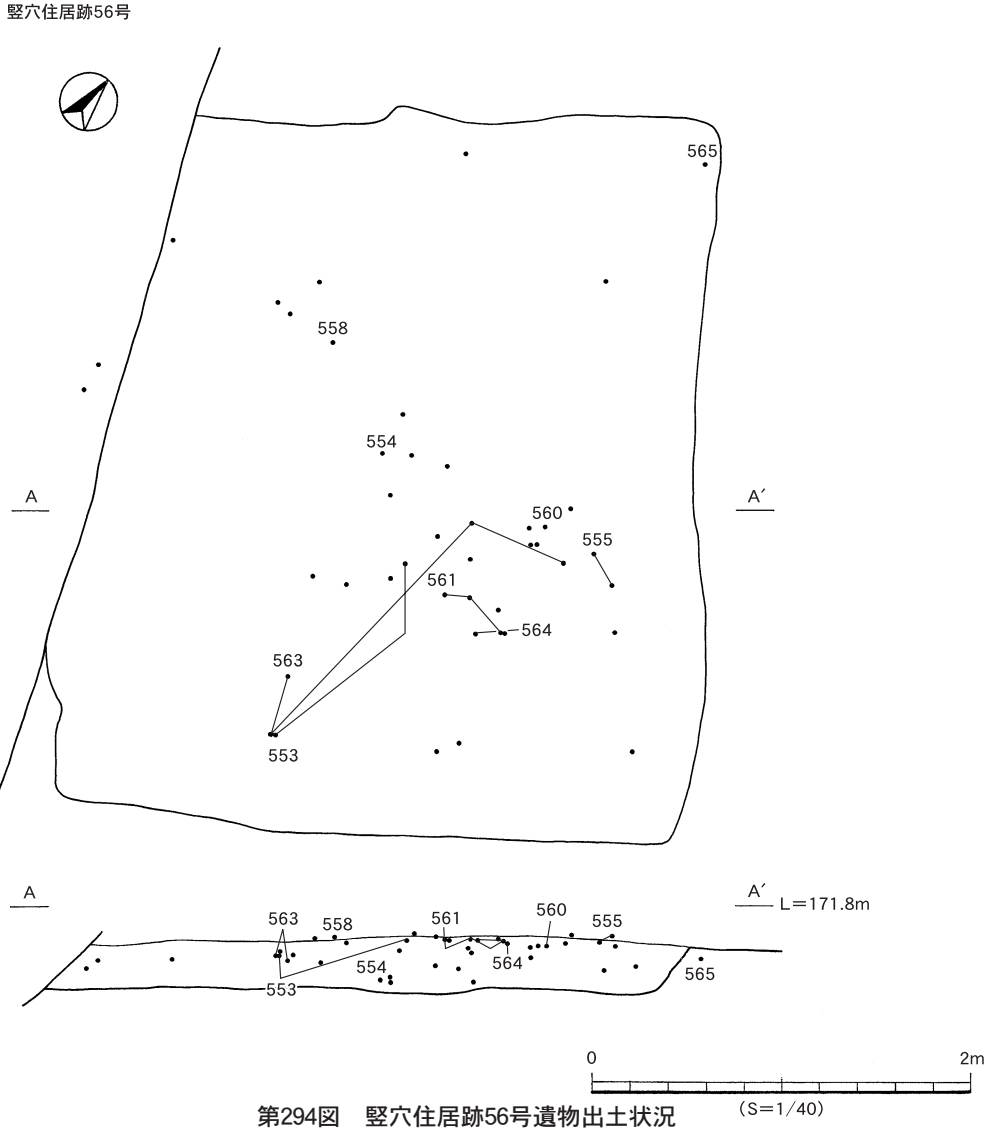
Ｈ・Ｉ－20区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.8m，短辺3.5mの隅丸長方形で，北西側が調査の工程上分断されてしまい，プランを掴むに至らなかった。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出していった。硬化面の広がりなどははっきりとせず，中央や南側には炭化物の集中が見られた。

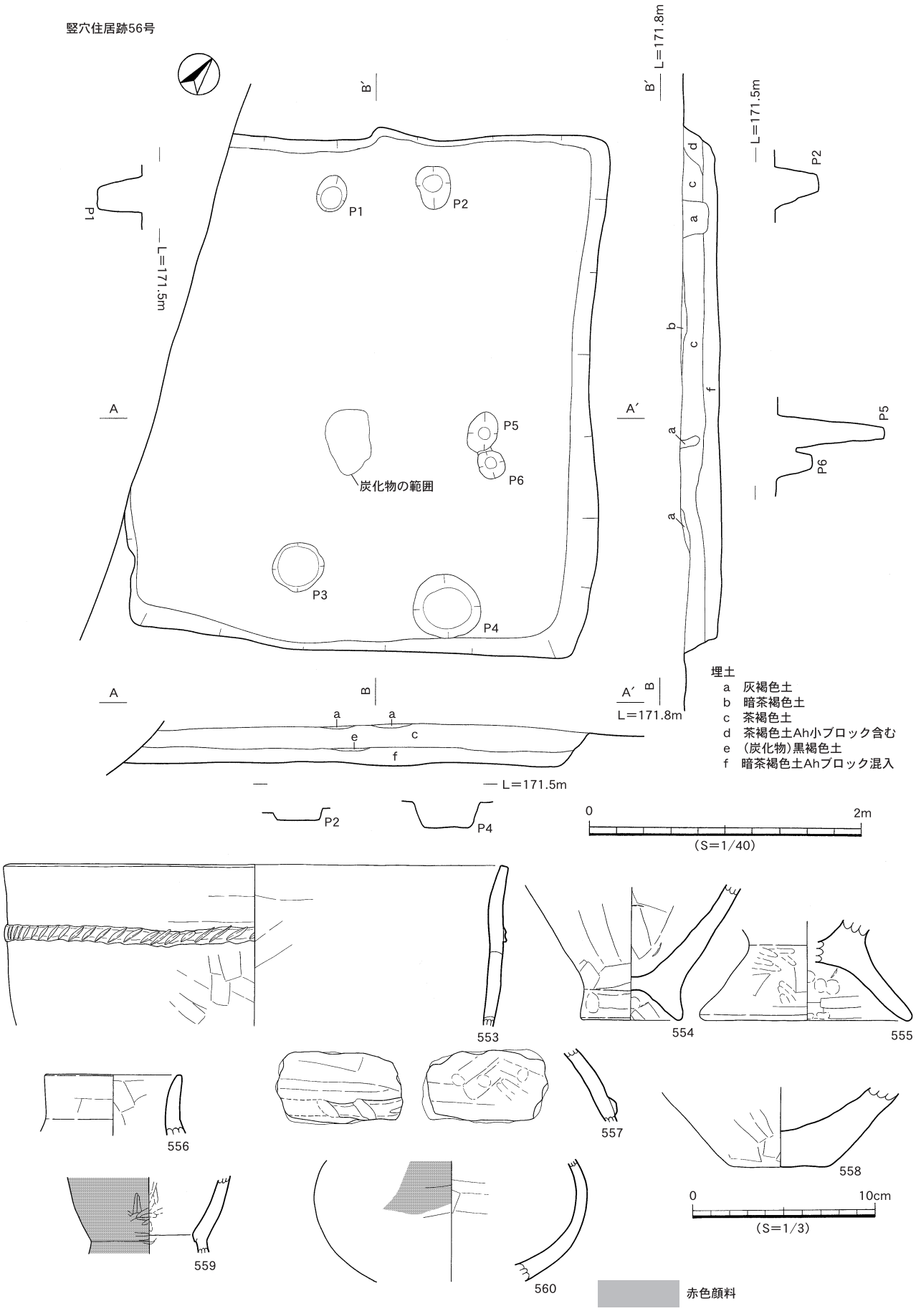
柱穴などの付帯施設は，床面及びこれを除去した段階で６基の柱穴が確認された。Ｐ３・４はやや大きめであるが10～20㎝と浅い。Ｐ１・２は約40㎝と共に深いがＰ５は約80㎝とさらに深い。

なお，貼床と思われる埋土ｆは住居床面のほぼ全域に認められ，10㎝以上の厚さで貼られていた。

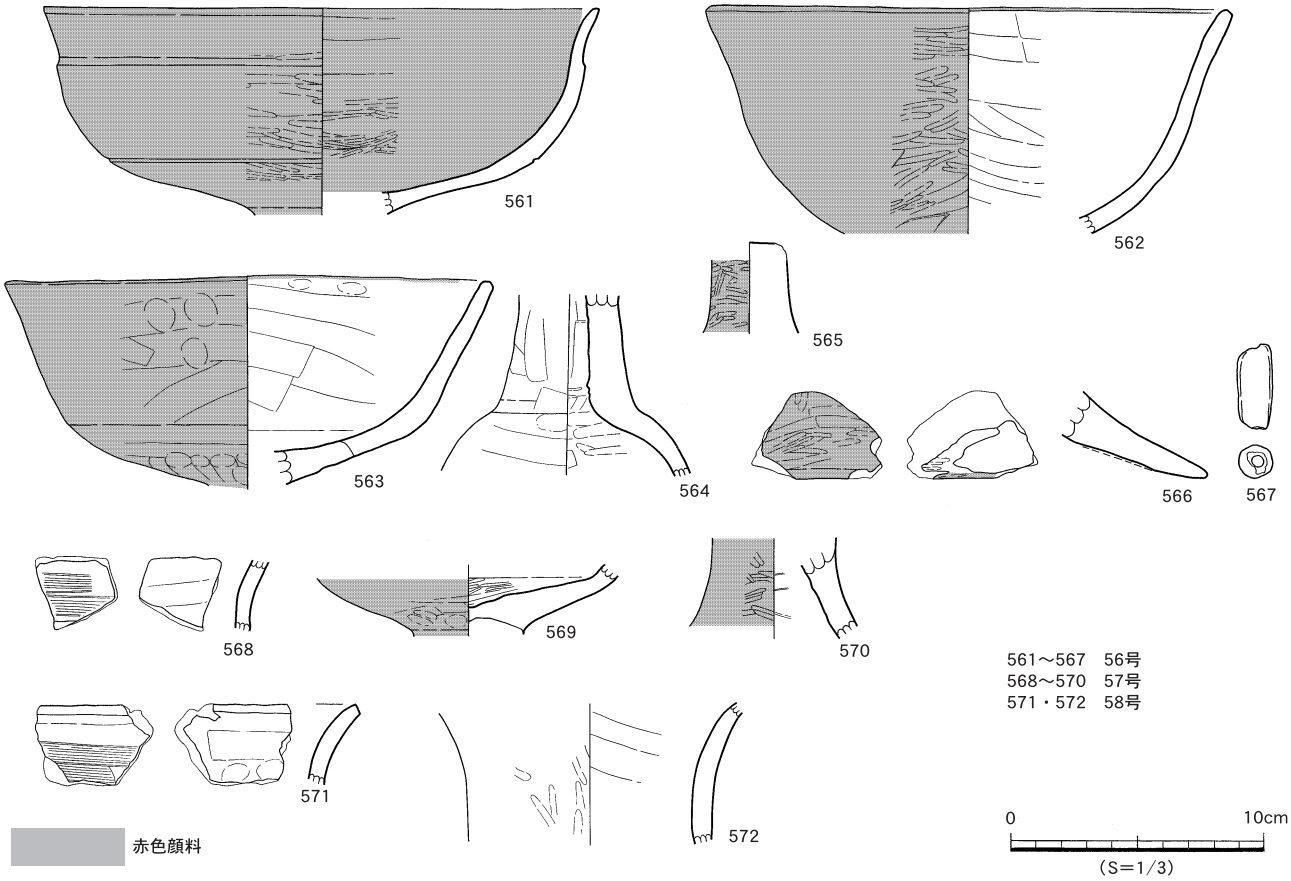
遺物は，総点で546点が出土し，この内の15点を図化した。553～555は甕の破片である。553は，口縁部がほぼ直行するが端部でわずかに外反する。口縁部から胴部に至るまでは直線的で，貼付突帯は薄く貼付され，斜位のキザミが施されている。554は脚の器高が低い。556～558は壺である。556は口縁部がほぼ直行して比較的径が小さく，頸部が短い。557は，胴部貼付突帯付近の破片である。突帯は部分的に剥落している。559は坩で口縁端部を欠き，口縁部と胴部との境に接合痕を残す。561～563は高坏の坏部である。いずれも特徴的な器形を有している。561は，口縁部が外反し，口縁部下に段を有する。胴部中位にも段を有して脚部へと至る。内外面共に赤色顔料が施されている。562は口縁部が外反し，胴部でやや膨らんで脚部へと至る。赤色顔料は外面にのみ施されている。563は口縁部ほぼ直行し，胴部下半で弱く屈曲して脚部へ至る。564は筒状の脚部から湾曲した先端部に至る。565は脚部片であるが坏部との接合面を面取りしている。567は土錘である。



第294図　竪穴住居跡56号遺物出土状況



第295図　竪穴住居跡56号・出土遺物①



第296図　竪穴住居跡56号出土遺物②，57号・58号出土遺物

竪穴住居跡57・58号（第297図）

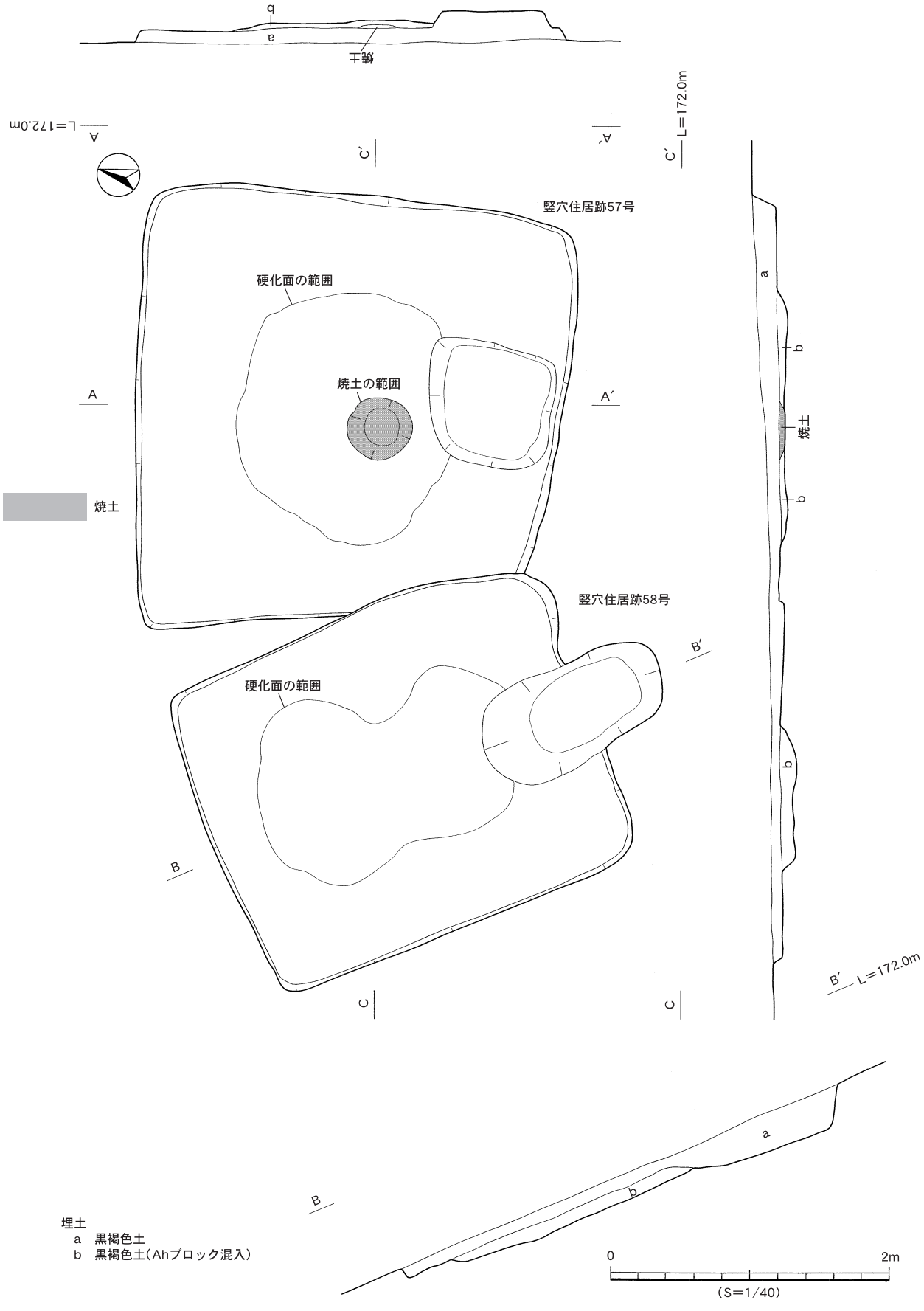
Ⅰ－22区においてⅥ層上面で検出された。検出時に異なる2方向の軸が見られたために，2軒の切り合いが想定できた。この2軒の切り合い関係を掴むために，2軒を通る長軸を東西方向に設定し，各住居跡の中央を通るベルトをそれぞれに設定した。埋土は単一層で，埋土による切り合い関係はつかめなかった。床面におけるレベル差に関しては58号がわずかに深く，57号を断ち切る58号の壁面が確認できたことなどから，57号が先行すると判断した。両住居跡共に中央には硬化面が広がり，これがそのまま床面を形成していた。床面は，アカホヤと黒褐色土の混在する土で貼床である。この面を切るように両住居共に土坑が南側に検出されているが，明確ではない。これまでの事例から，住居跡に伴うと判断した。

なお，検出当初は57号の北側に突出する細長いプランが見られ，竪穴住居内の炉を想定して周辺部の調査を慎重に進めていったが，シミ状の痕跡であった。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去しながら確認していったが見られなかった。炉・焼土や炭化物の広がりは，57号のほぼ中央に深さ4㎝程度の焼土が広がるにとどまった。土坑内の埋土に関してはふるいがけを行い，微細遺物の検出に努めた。その結果，炭化物がわずかに採取できた。

なお，ふるいがけが終了した埋土は磁石により小鉄片の検出作業も実施したが，成果は出なかった。

遺物は，57号が総点で26点出土し，この内の3点を図化し，58号が総点で35点出土し，この内の2点を図化した。564～566が57号出土遺物で，571・572が58号出土遺物である。568は甕の口縁部下の破片である。これで見ると，口縁部はわずかに外反しているものと思われる。

569は高坏の坏部下で，脚部との接合面で欠損している。570は高坏の脚部片である。571は甕の口縁部片である。小破片ではあるが，甕だけで見ると両住居共に型式変化はほとんど見られない。時期的には近いことが予想される。572は壺である。口縁端部をわずかに欠く。頸部はやや長い。



埋土
a　黒褐色土
b　黒褐色土(Ahブロック混入)

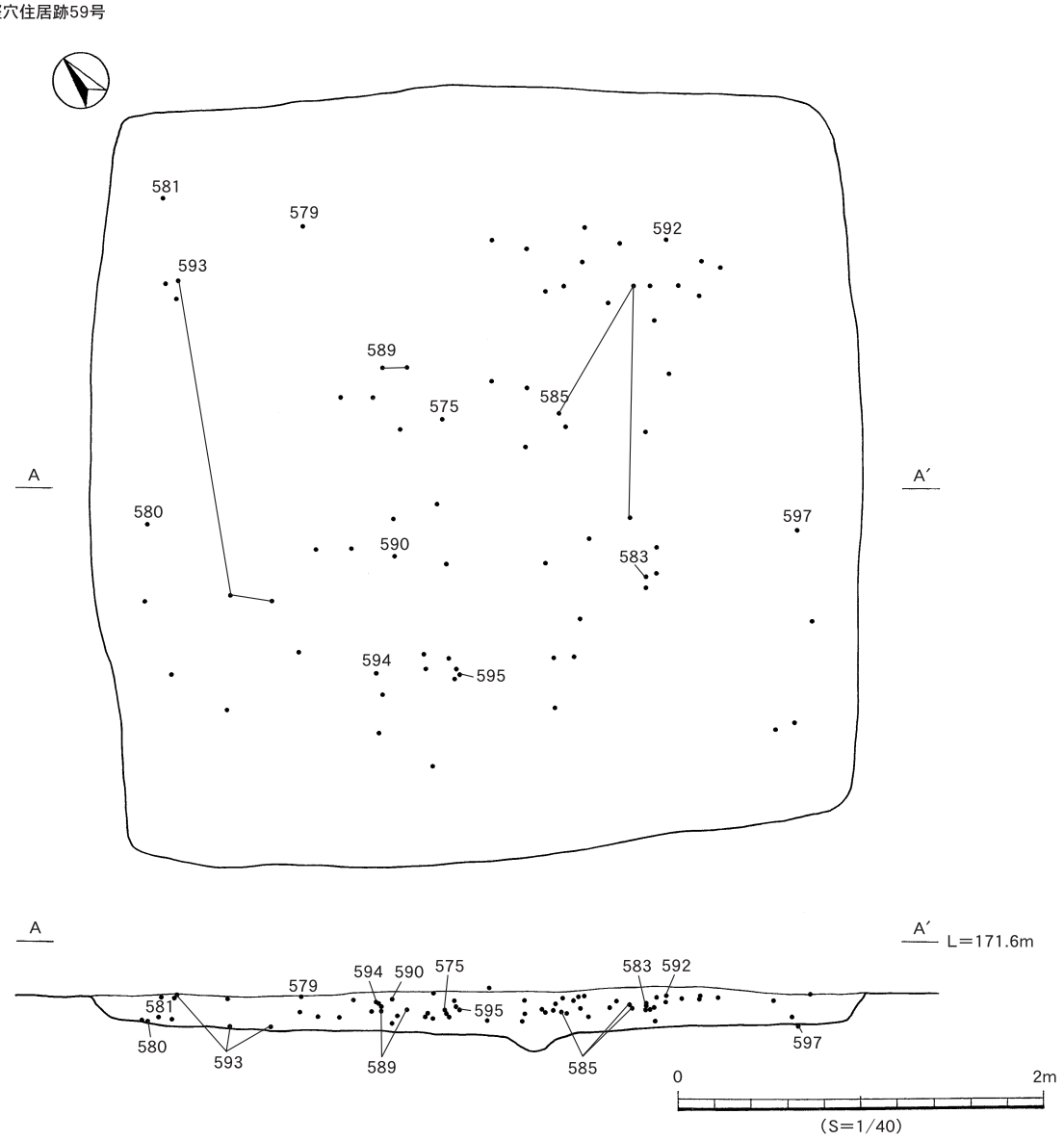
第297図　竪穴住居跡57号・58号

竪穴住居跡59号（第298～300図）

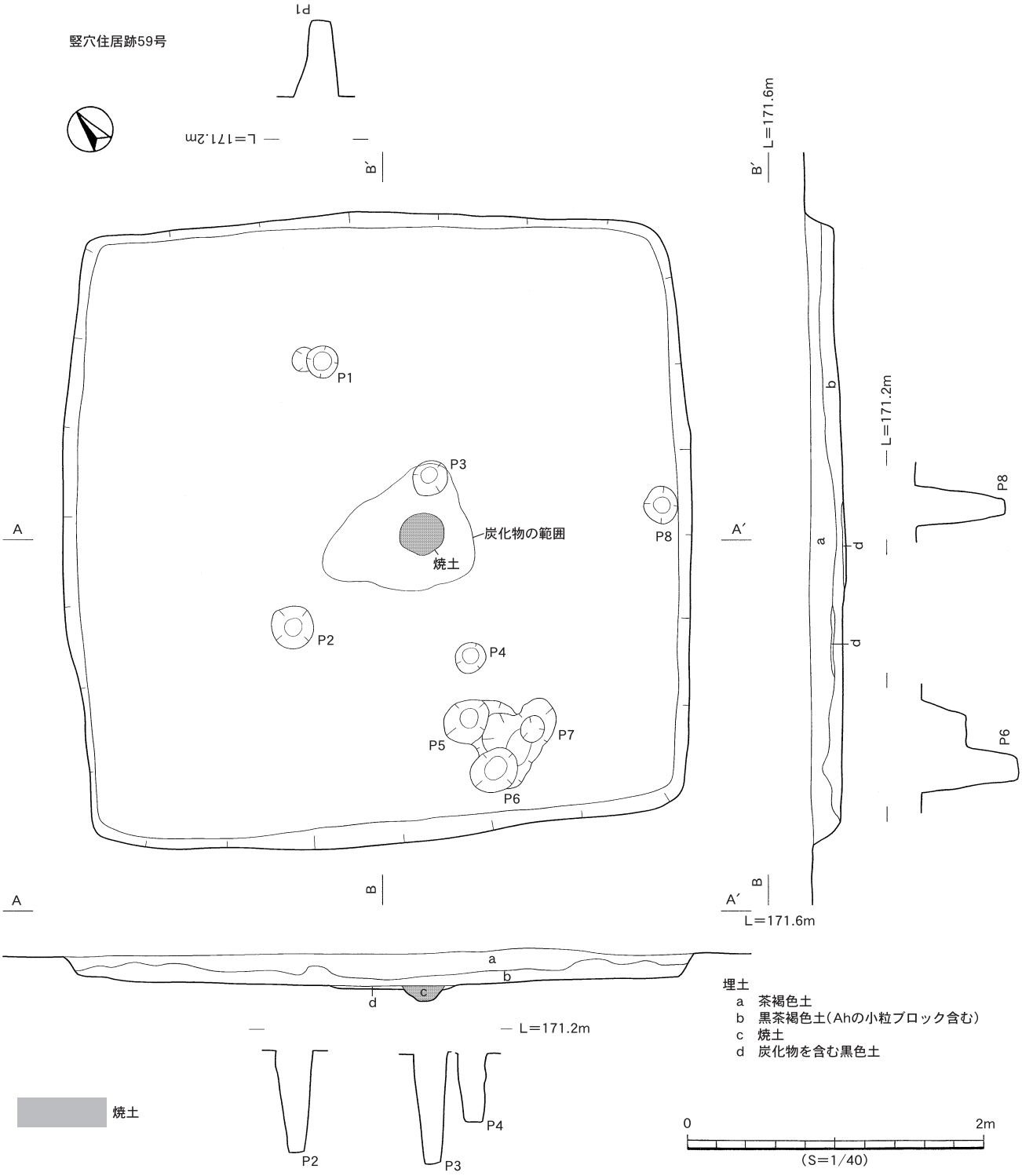
Ｊ－24区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.3m，短辺4.3mの隅丸方形を呈する。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。ａ層を掘り下げる過程で，中央よりやや西側において炭化物層の広がりと，わずかな硬化ブロックが確認できた。当初は，これを床面と考えたが，面としてとらえることが出来ず，このため，中央部分を先行して掘り下げ，下層を確認していった。その結果，下層の中央部分で炭化物集中が確認され，これを床面と判断した。

なお，この周辺にはわずかに硬化面を有しているが，住居床面に広範囲には広がらない。中央には，炭化物集中があり円形に近い土坑を想定して掘り下げていったが，掘り込み等は確認できていない。その中央部分には，焼土が小さな柱穴状に見られた。柱穴などの付帯施設は，床面を除去した段階で８基の柱穴が確認された。Ｐ１・２・３・４・８はほぼ単独で検出され，床面より40～60㎝と深い。Ｐ７～９は当初土坑状に検出されたが，掘り下げていったところ，３基の柱穴の切り合いであった。

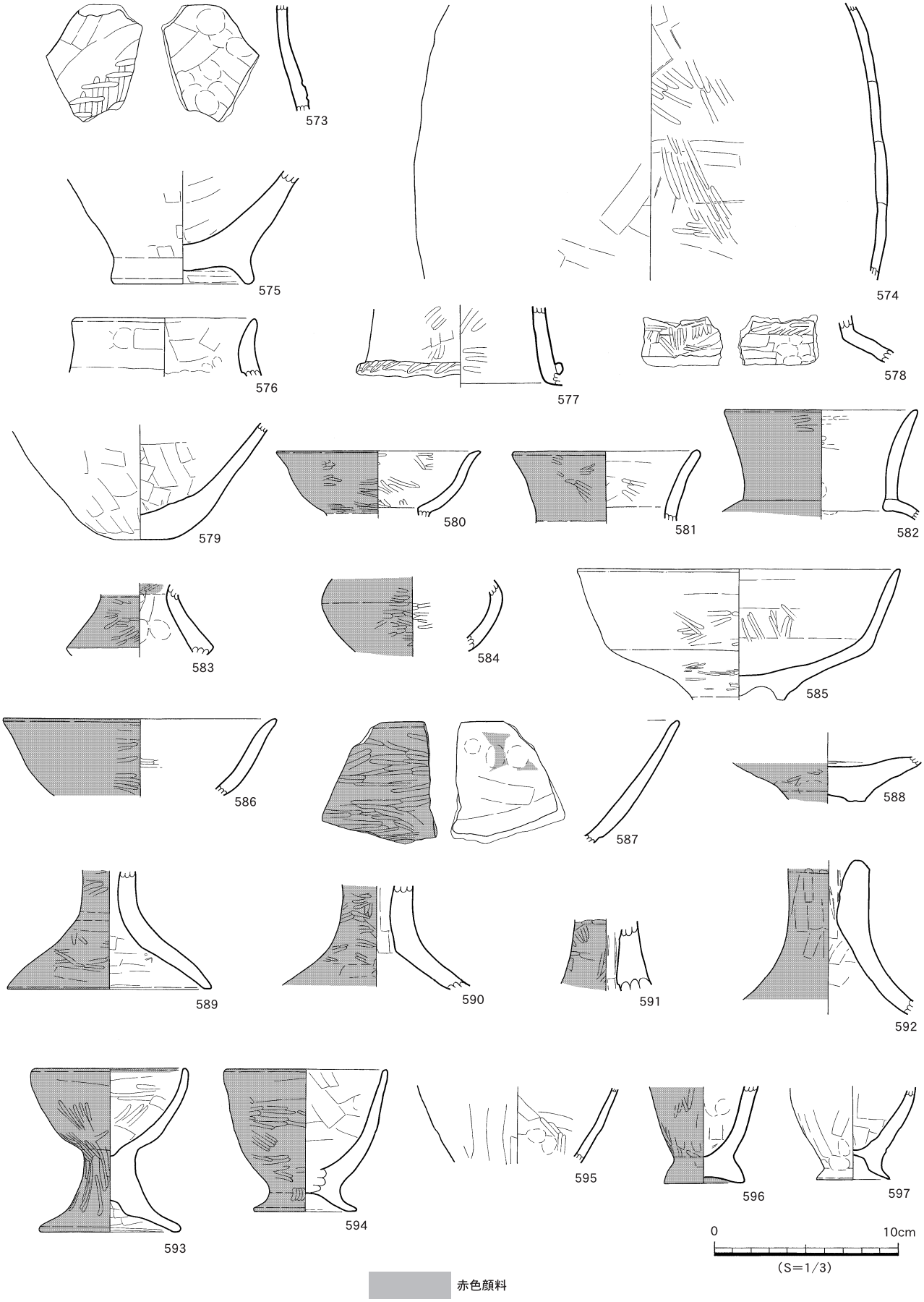
遺物は，総点で613点が出土し，この内の25点を図化した。573は甕の口縁部であるが，注ぎ口状の形状が見られる。あるいは波状口縁を呈するものかとも思われたが，前者を想定して図化した。このため，格子状のキザミが斜位になってしまっている。574は甕の頸部から胴部にかけての破片である。やや薄手の印象を受ける。585は高坏の坏部である。口縁部が外傾し胴部で屈曲する。内面には黒色している部分が見られ，二次焼成を受けた可能性が考えられる。593は赤色顔料が施された脚を有する小型の鉢である。594は脚が低い。



第298図　竪穴住居跡59号遺物出土状況



第299図　竪穴住居跡59号

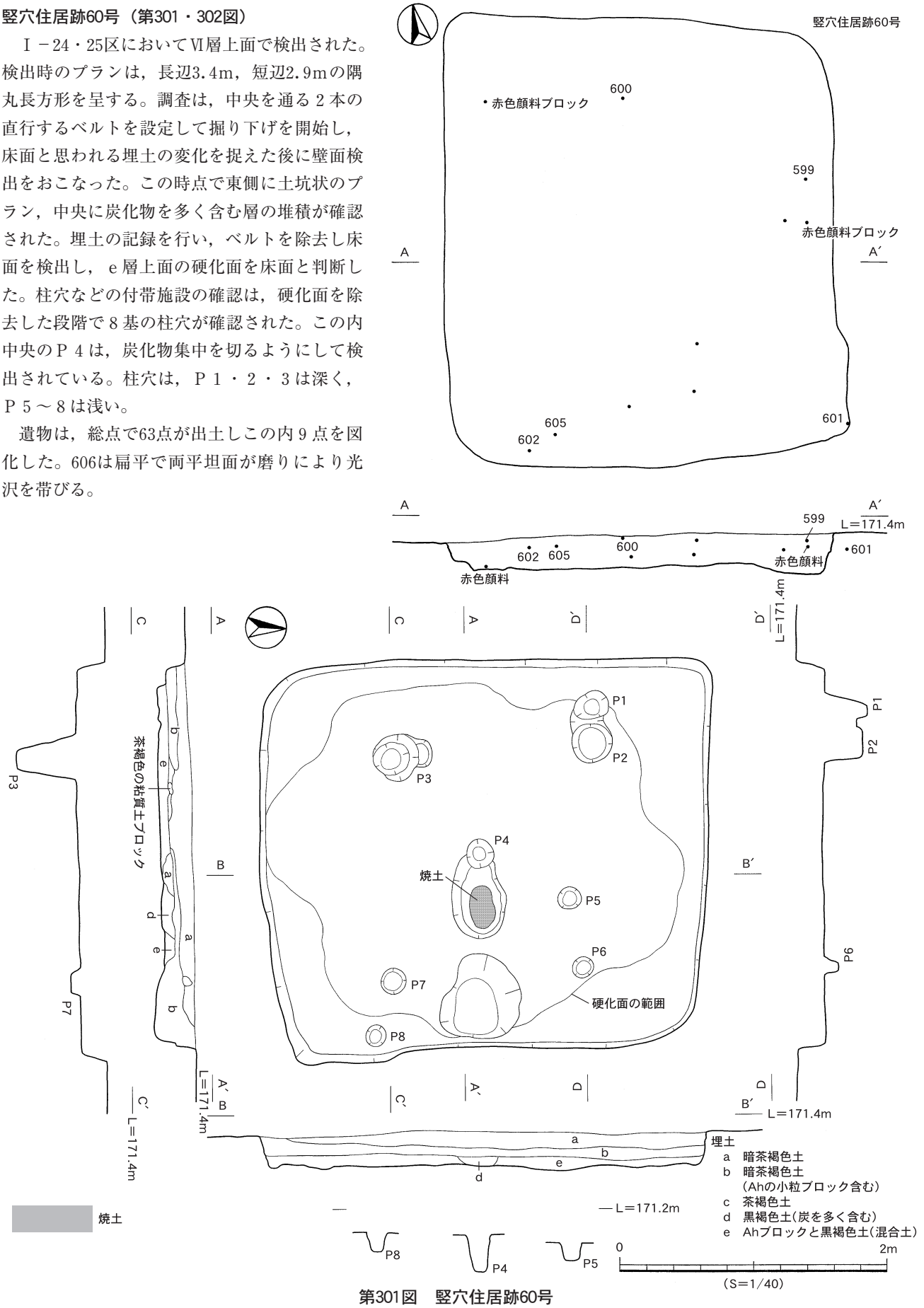


第300図　竪穴住居跡59号出土遺物

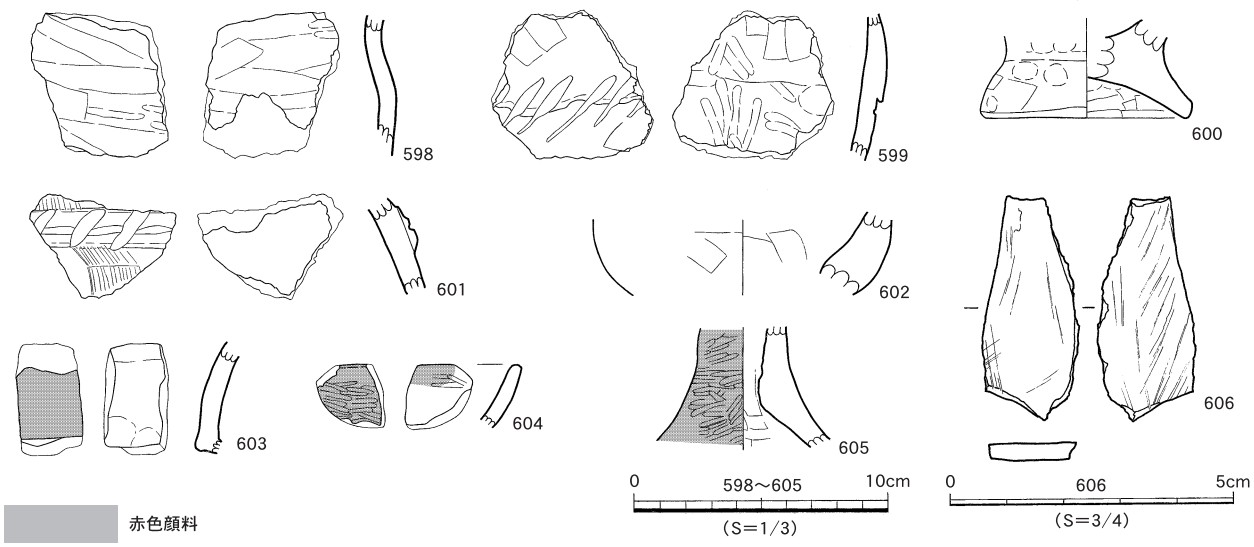
竪穴住居跡60号（第301・302図）

Ⅰ－24・25区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.4m，短辺2.9mの隅丸長方形を呈する。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で東側に土坑状のプラン，中央に炭化物を多く含む層の堆積が確認された。埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出し，ｅ層上面の硬化面を床面と判断した。柱穴などの付帯施設の確認は，硬化面を除去した段階で８基の柱穴が確認された。この内中央のＰ４は，炭化物集中を切るようにして検出されている。柱穴は，Ｐ１・２・３は深く，Ｐ５～８は浅い。

遺物は，総点で63点が出土しこの内９点を図化した。606は扁平で両平坦面が磨りにより光沢を帯びる。



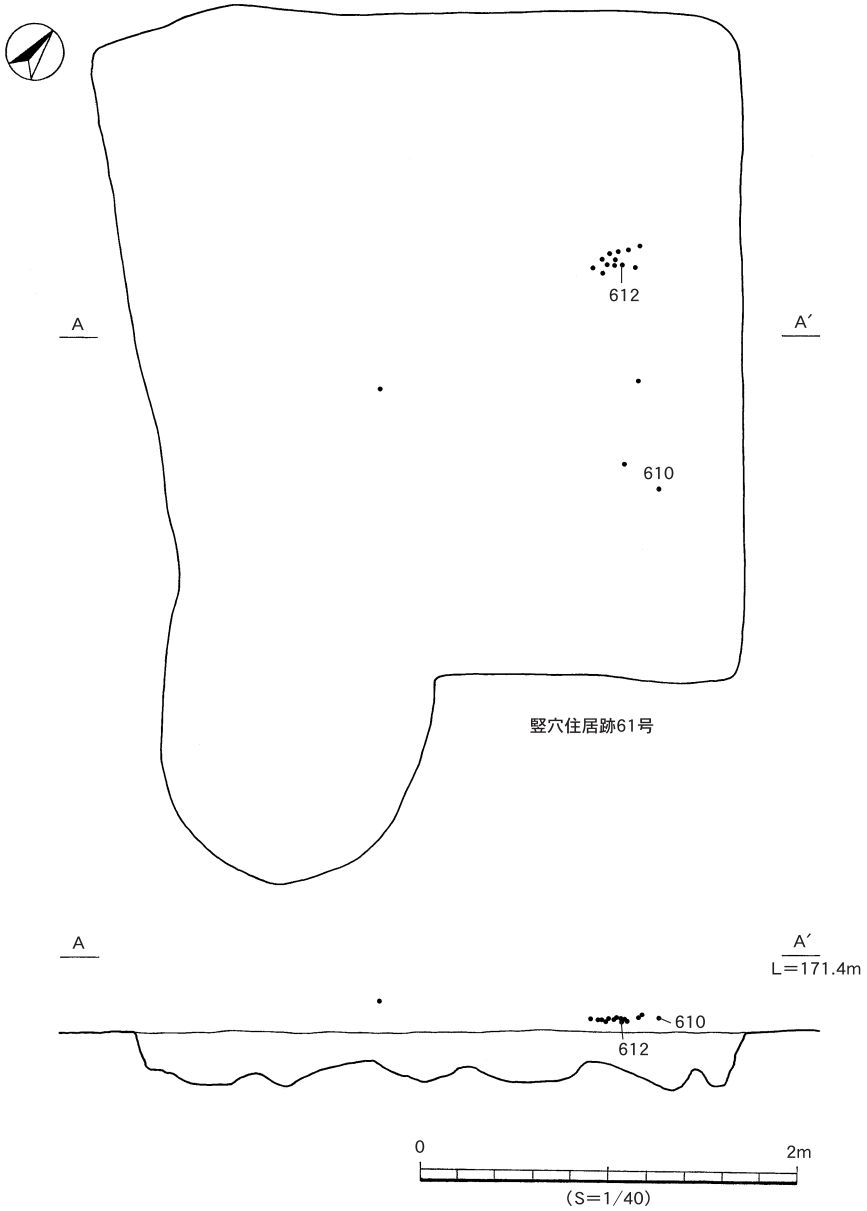
第301図　竪穴住居跡60号



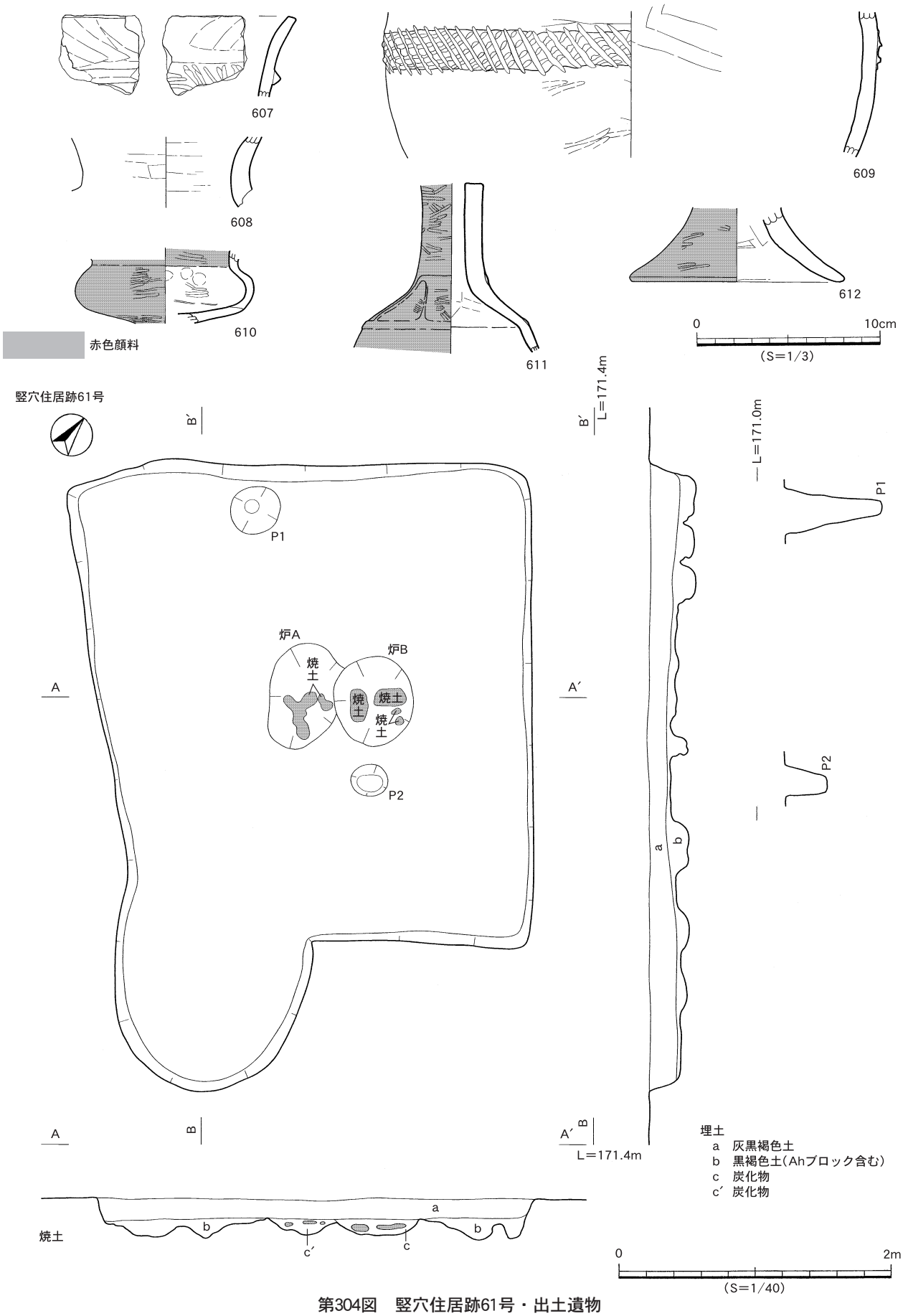
第302図　竪穴住居跡60号・遺物出土状況

竪穴住居跡61号（第303・304図）

G－25区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.5m，短辺3.3mの隅丸長方形で，南側に円形の土坑状のプランが認められた。当初，この2基の切り合い関係を想定したベルトを設定し，住居単独のベルトをこれに直行する形で設定した。埋土は，やや灰色がかった黒褐色土の単一層であったが，黒褐色土とアカホヤブロックの上面が硬化していたためにこれを床面と判断した。土坑と住居との関係は，埋土の変化や床面のレベル差等の検証を行ったが明確に出来なかった。埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出していったところ，中央に切り合う2基の焼土集中箇所が見られ，図上左をA，右をBとし，AがBに先行することを確認した。A・Bいずれも，焼土炭化物を多量に含んでいる。埋土aを除去するとb層が検出されるが，全体的に不安定であり，隣接する63号等と比べて雑然としている。遺物は，総点で116点が出土し，この内6点を図化した。



第303図　竪穴住居跡61号遺物出土状況

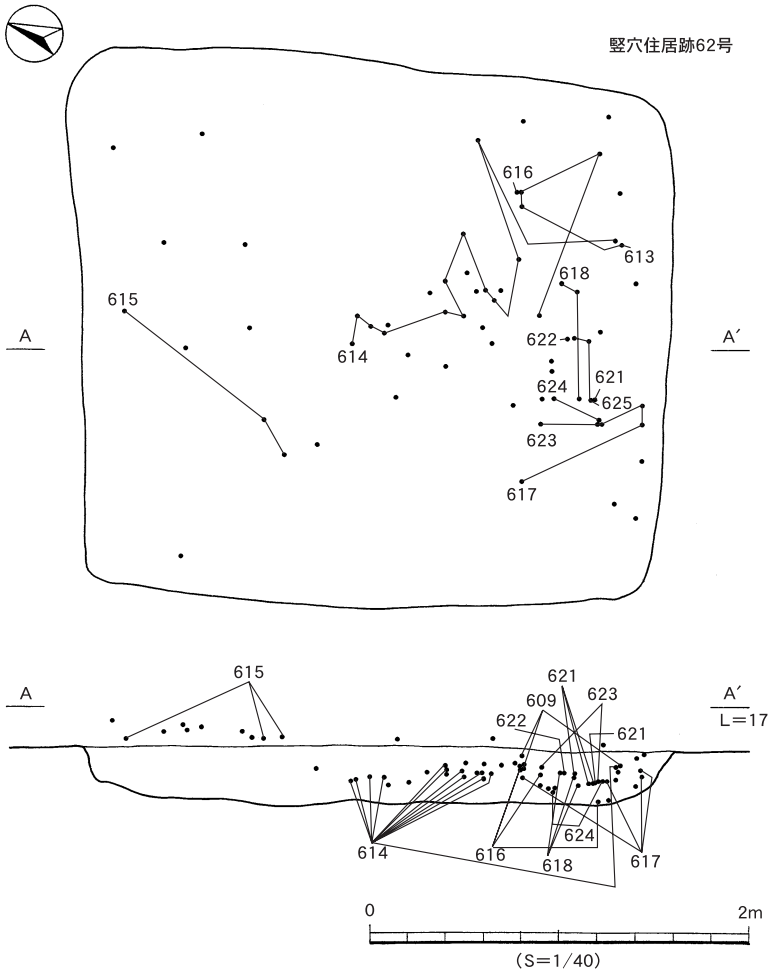


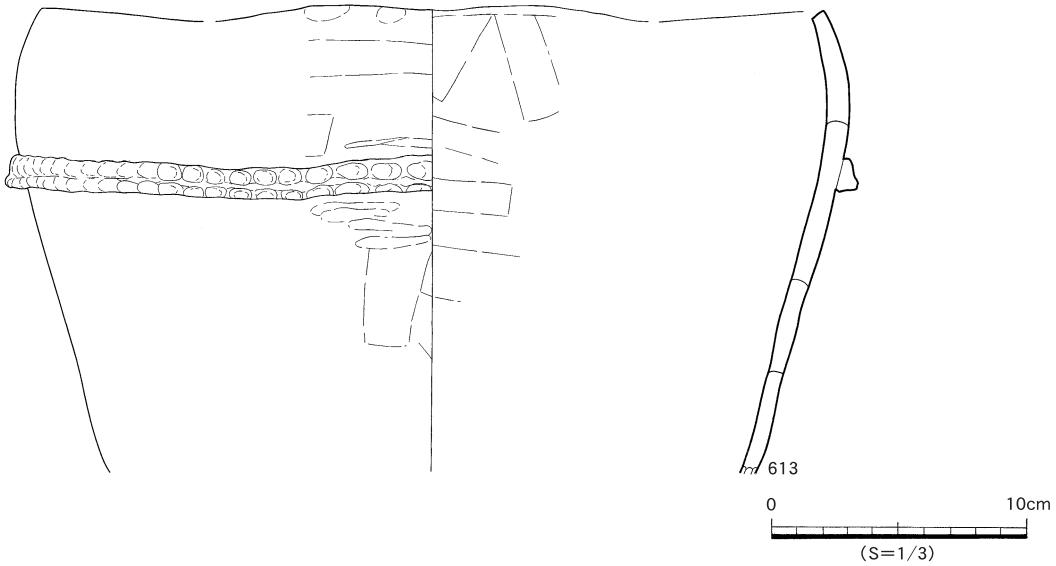
第304図　竪穴住居跡61号・出土遺物

竪穴住居跡62号（第305～307図）

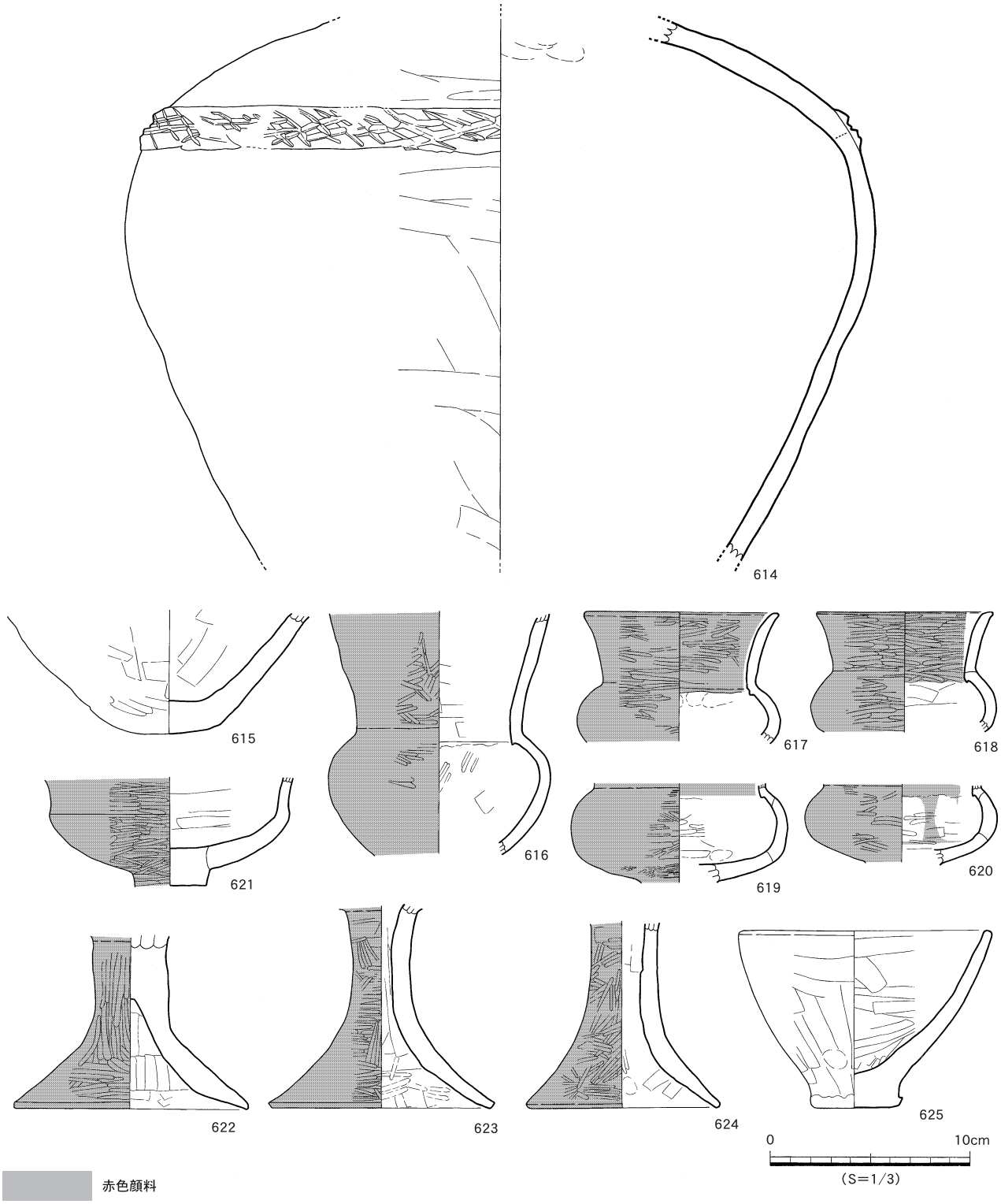
G－25・26区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.1m，短辺３ｍの隅丸長方形を呈する。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は黒色土の単一層で，黒褐色土と茶褐色土のブロックにアカホヤブロックが混在する層の上面が硬化しており，これを床面と判断した。この時点で埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出していったところ，中央に炭化物や焼土を多く含む土坑状のプランが検出された。床面の掘り下げは，当初のベルトを再度床面に設定して埋土ｃを掘り下げ，図上で合成した後に全面的に埋土ｃを除去していった。その結果，東壁に偏って４基の柱穴が確認された。

遺物は，総点で174点が出土しこの内13点を図化した。613は口縁部が内湾する。胴部の貼付突帯は指頭により上下方向に押さえられ貼付されている。614・615は壺である。614は頸部から胴部下半にかけての破片である。胴部の最大径よりやや



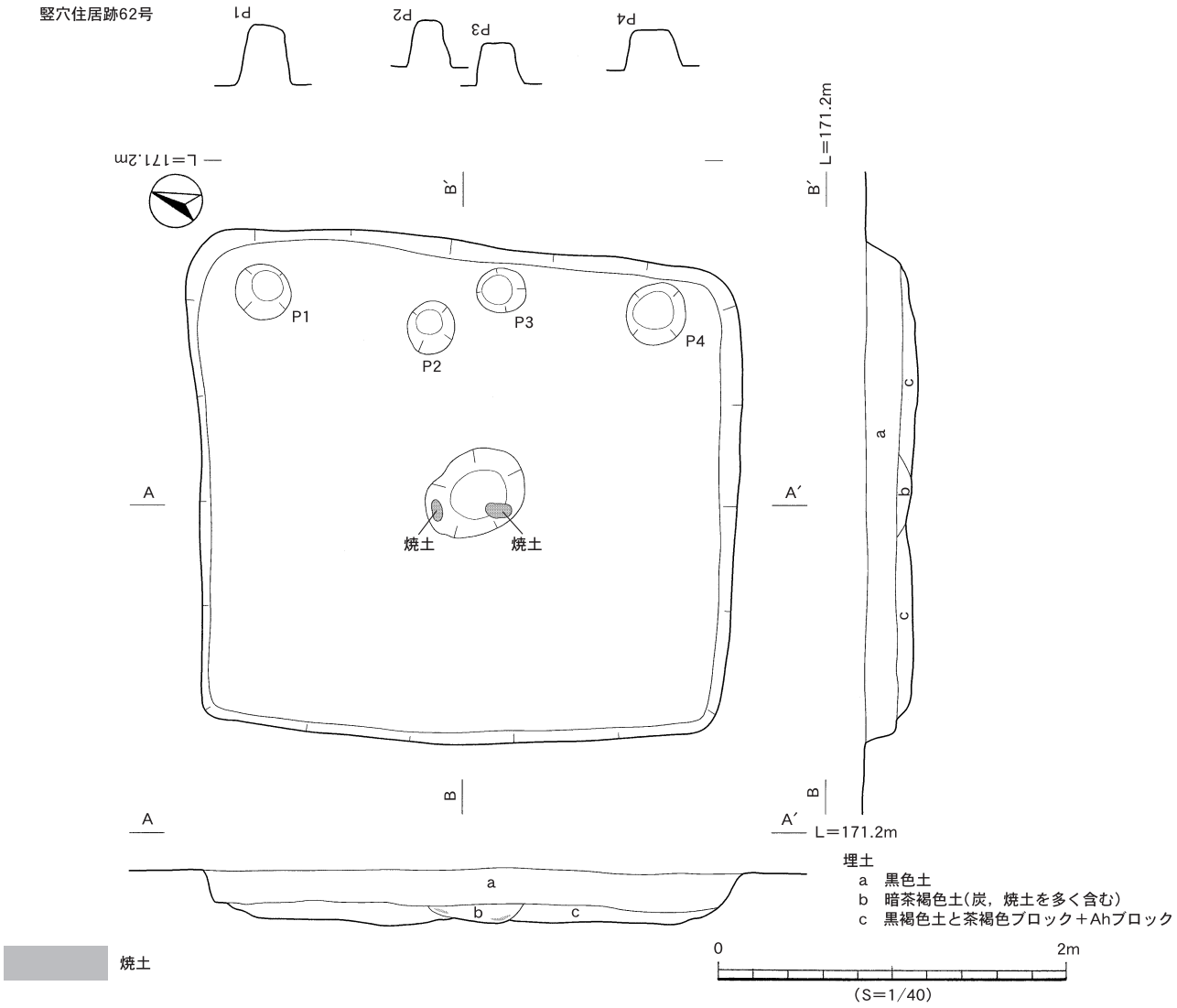


第305図　竪穴住居跡62号・出土遺物



第306図　竪穴住居跡62号出土遺物

上位に突帯をめぐらせ，格子状にキザミを施している。616は坩であるが口縁部が長い。621は，脚部欠損部分に面取りが施され，平坦に再加工されている。617～620・622～624は高坏である。口縁部から胴部にかけては617や618のような坩形を呈するが，619のように脚部の痕跡を残しているものが見られることから，623や624のような脚部が想定された。これらの中には，胎土や色調など同一個体の可能性のあるものが含まれているが，接合面の磨滅などから接点を見いだせなかった。これらの遺物は，竪穴住居跡の南側に比較的集中して出土しており，祭祀的な様相もうかがえる。



第307図　竪穴住居跡62号

竪穴住居跡63号（第309～310図）

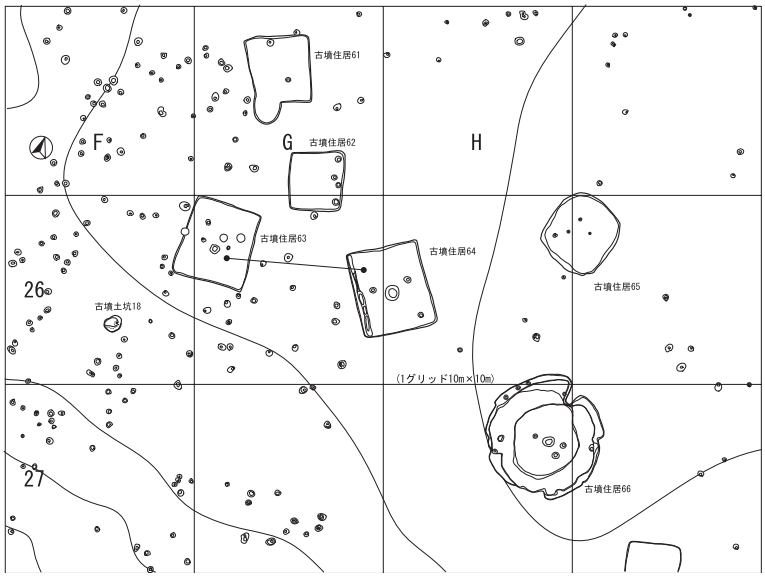
Ｆ・Ｇ－26区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.2m，短辺3.7mの隅丸長方形で，部分的に灰褐色埋土（中世から近世該当）の柱穴に切られている。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土はほぼ単一層で，アカホヤブロックと黒褐色土の混入土上面で硬質土を面的に検出でき，これを床面と判断してその広がりを検出していった。埋土の記録を行い，ベルトを除去し再度床面を検出したのちに，柱穴などの付帯施設を確認した。硬化面を切り込んでいる柱穴は中央のＰ１とＰ２の２基が確認され，主柱穴と判断できる。その中央部からは土坑が１基検出された。土坑内の炭化物を掘り下げていくと，土坑床面は火を受けて激しく赤化していた。この厚みを計測するために立ち割り，記録を行った。この３基以外にもいくつか柱穴の可能性が考えられる箇所が見られたが，これらの確認は硬化面を除去した後に実施することとした。

硬化している混入土の掘り下げは，中央のベルトを再度設定して埋土ｃの堆積状況及び面的な広がりを図化していき，先に記録した断面図に合成した。この埋土ｃを除去すると，西壁から時計回りに南壁の半分まで溝状の不安定な掘り方が確認された。この部分以外に関しては，硬化面とほぼ水平に貼り床が施されており，何らかの目的が想定されよう。

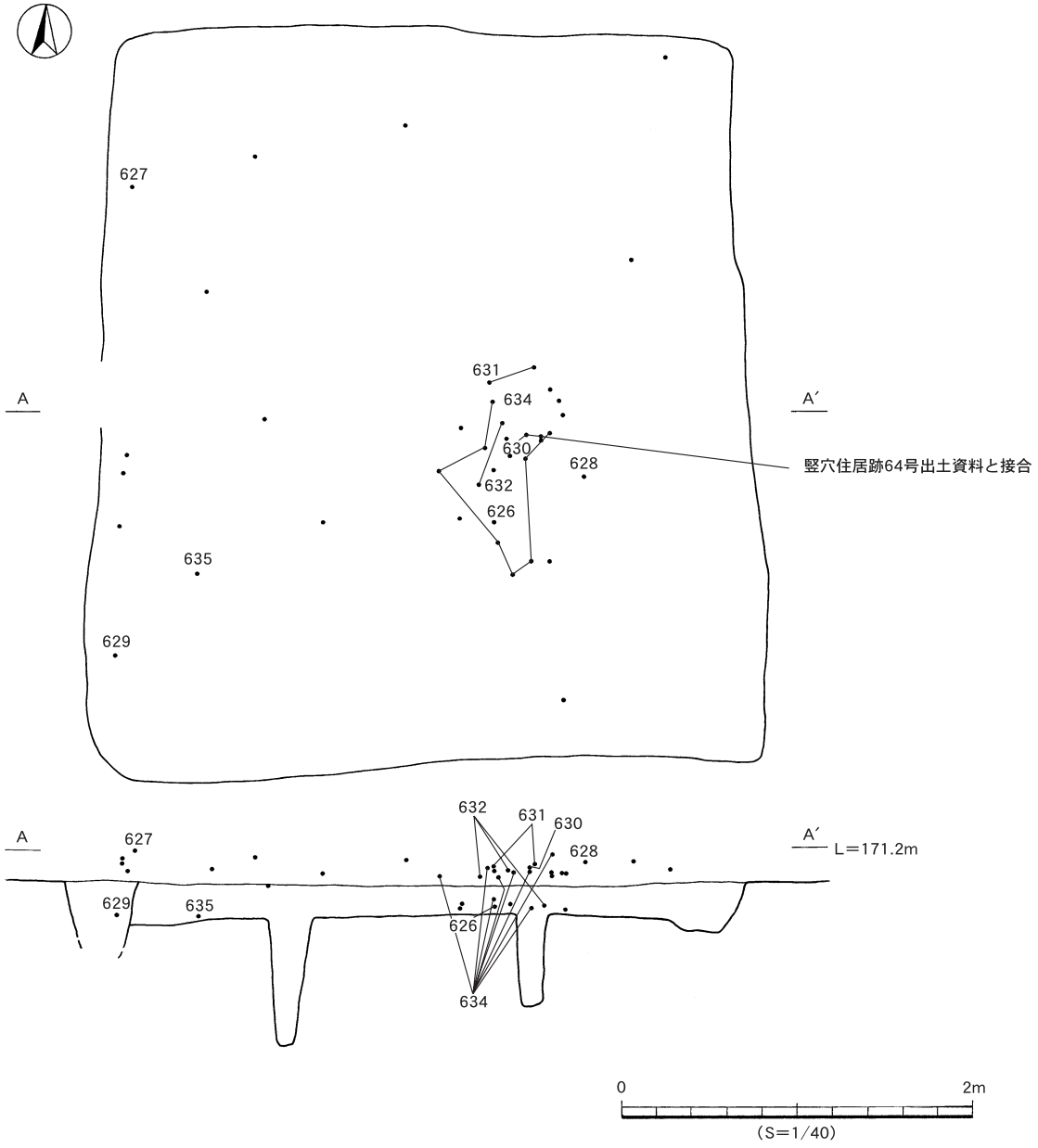
なお，柱穴などの付帯施設は，先述した２基の柱穴と中央に炭化物の集中する土坑が確認された。Ｐ１・２は非常に深く住居内の位置関係から主柱穴の可能性が高い。この他に，硬化面を除去した後に認定できた柱穴はＰ３の１基のみであった。

遺物は，総点で139点が出土し，この内の10点を図化した。636は甕の脚部である。ハの字状を呈するが器高



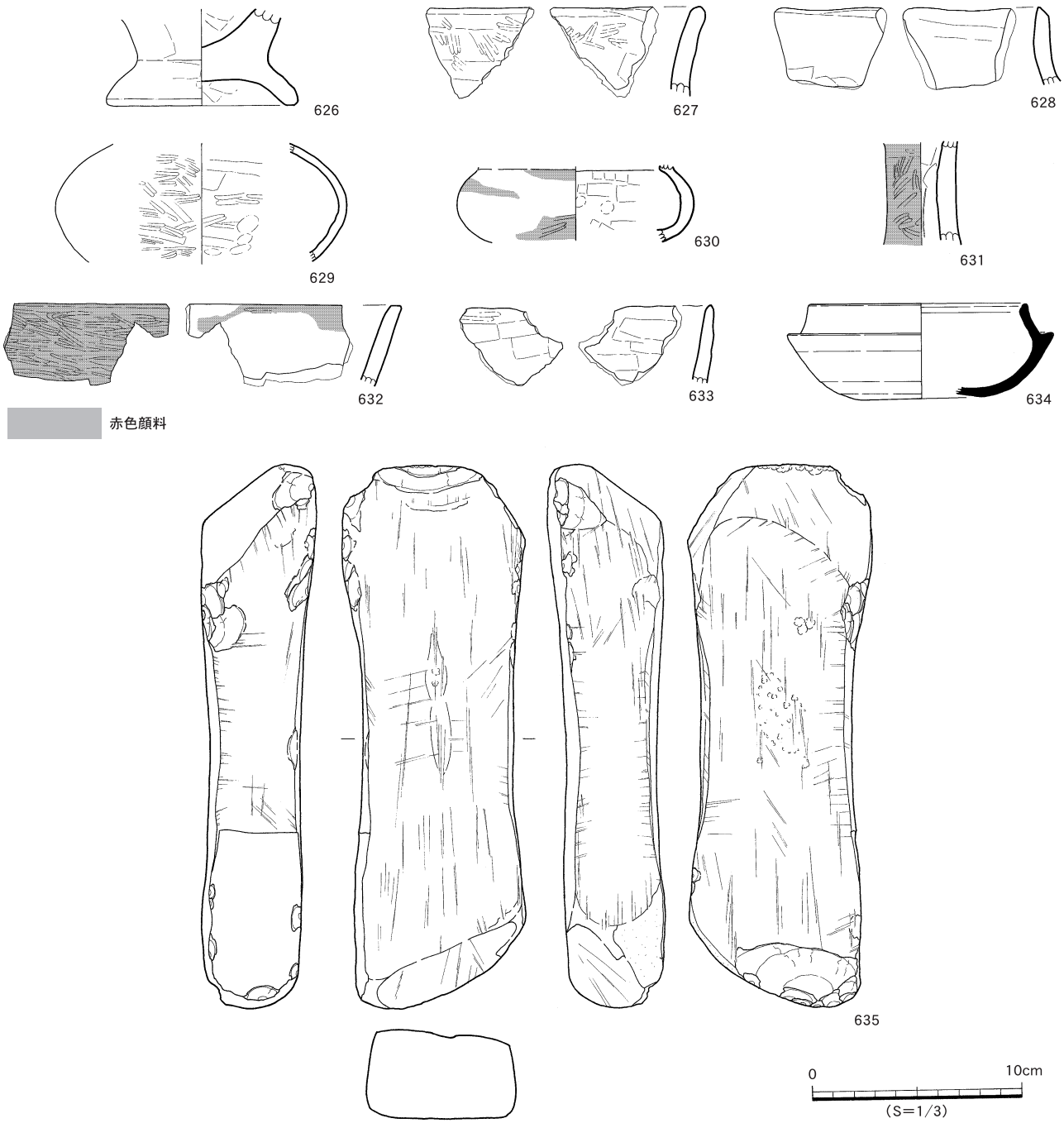
竪穴住居跡63号

第308図　竪穴住居跡間接合状況図



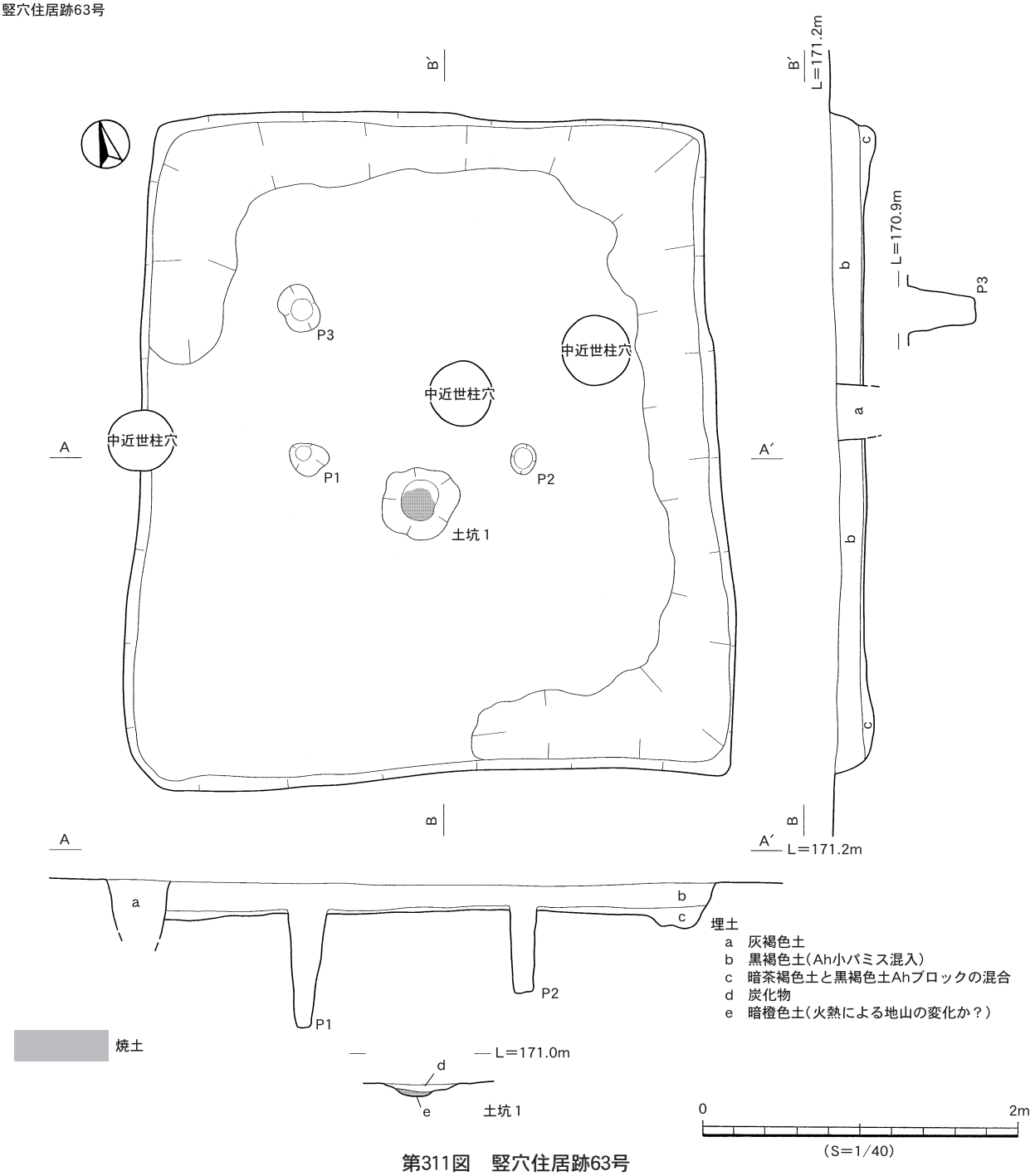
第309図　竪穴住居跡63号遺物出土状況

は低い。627・628は壺の口縁部片である。628は口唇部が平坦でやや尖りぎみである。629は坩の胴部片であるが，非常に薄手である。634は竪穴住居跡のプランが検出された時点で既に出土していた須恵器の坏身である。第308図に示したように６ｍ離れて隣接する64号内出土遺物と接合関係にある。635は竪穴住居跡の南西付近の床面から出土した砥石である。各面共にＵ字状に凹んでおり使用頻度の高さがうかがえる。



第310図　竪穴住居跡63号出土遺物

竪穴住居跡63号



第311図　竪穴住居跡63号



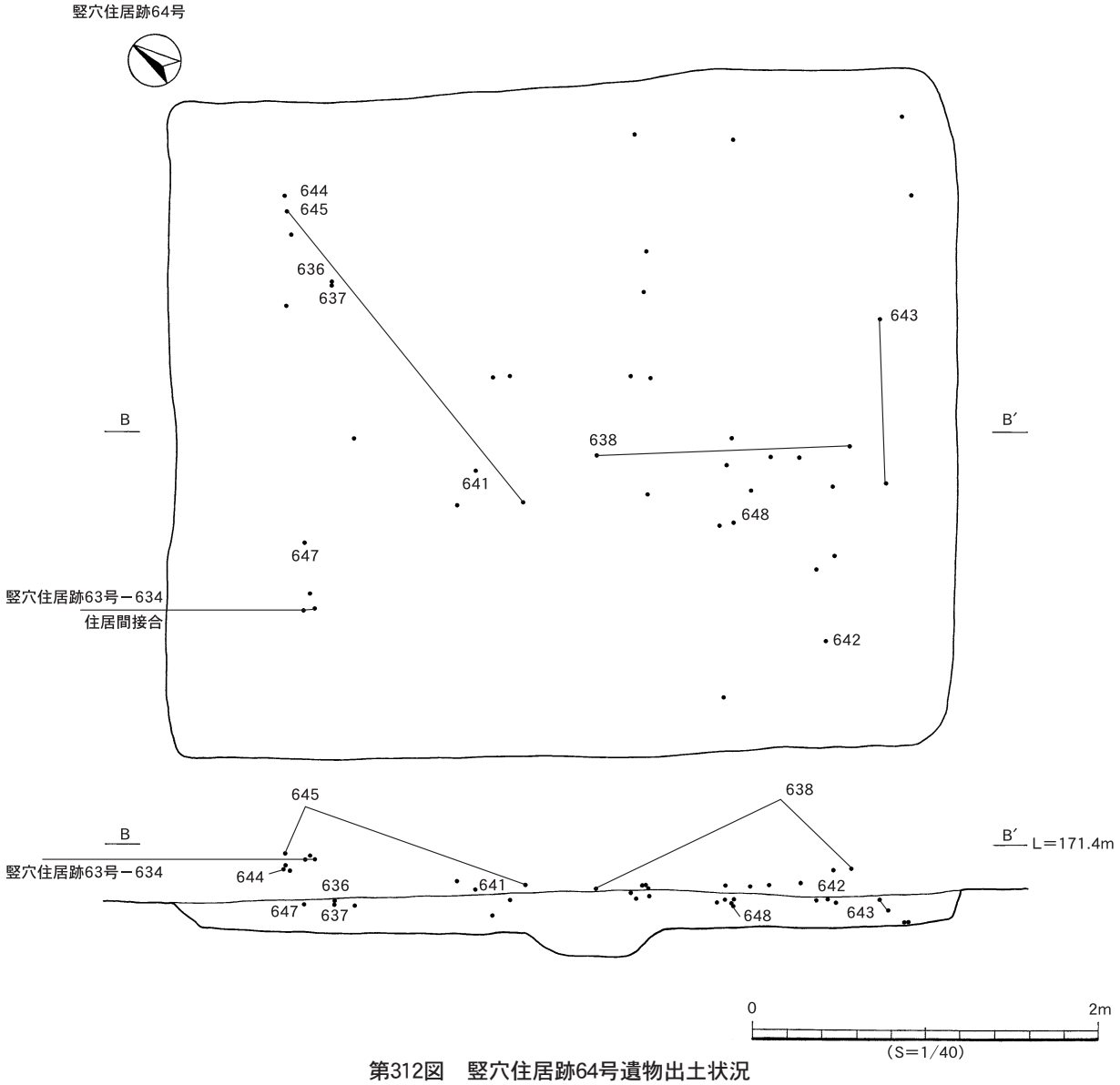
土坑1検出の焼土半裁状況



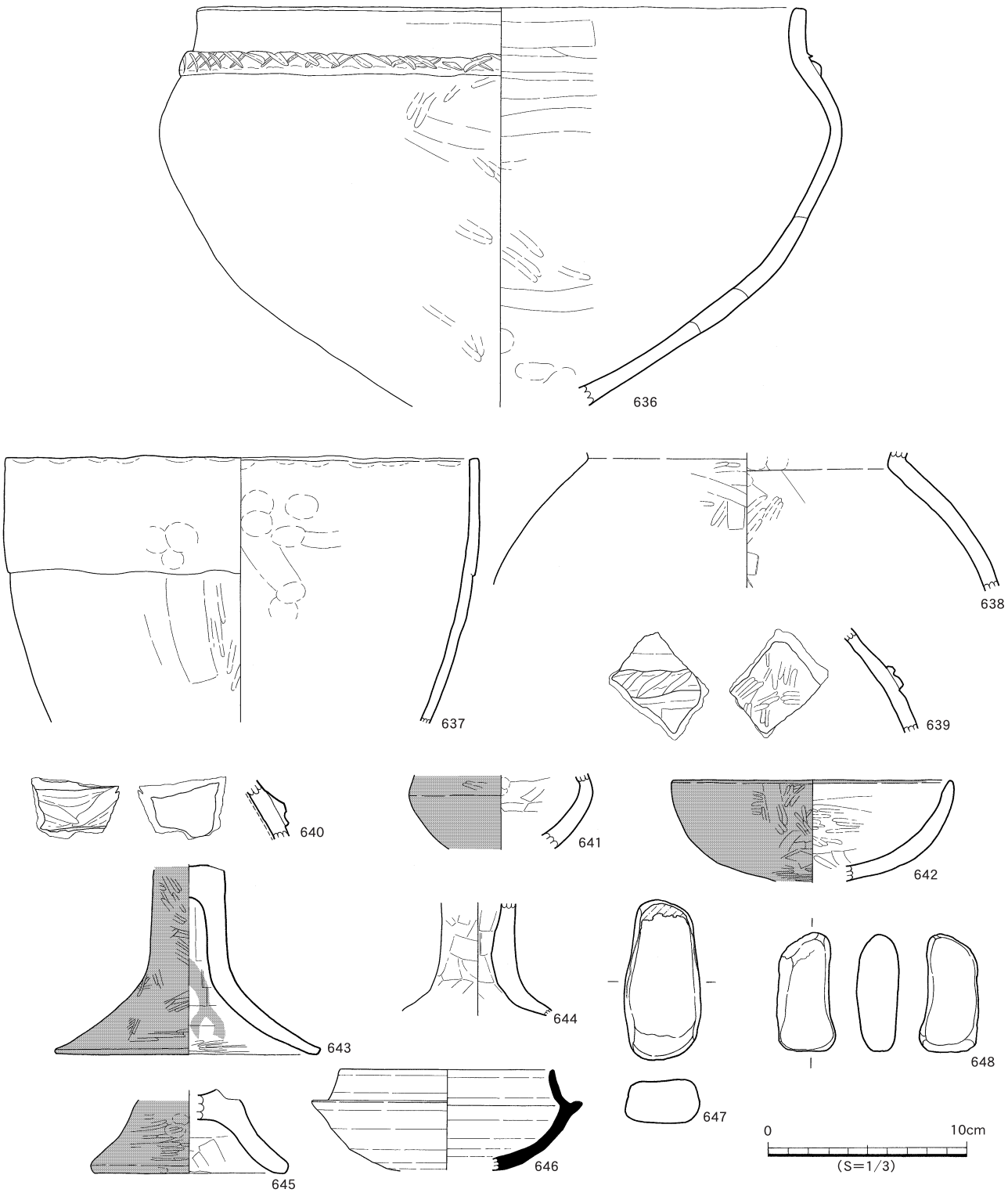
土坑1検出の焼土完掘状況

竪穴住居跡64号（第312～314図）

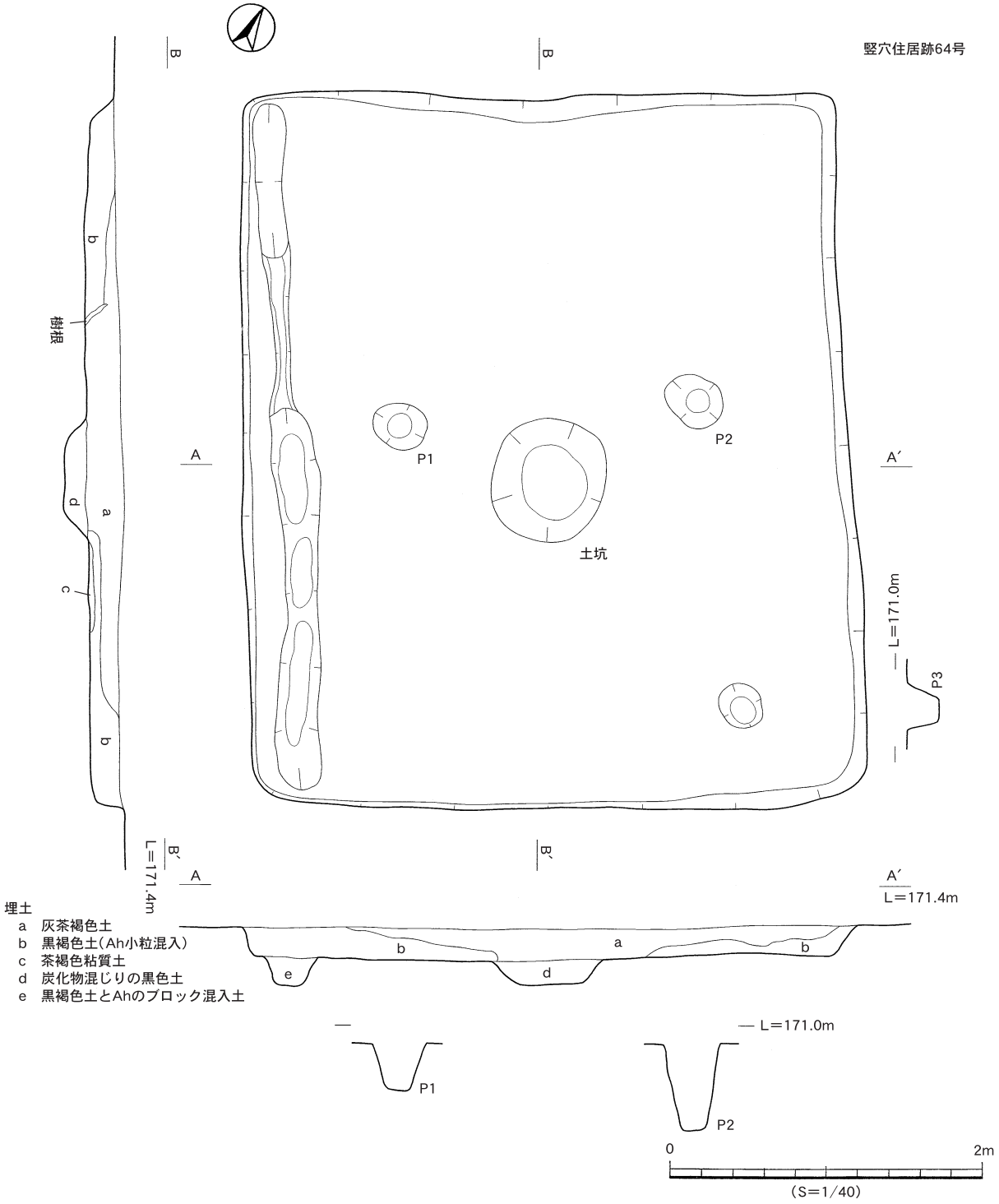
G・H－26区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.6m，短辺４mの隅丸長方形を呈する。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で床面に硬化面等は認められず，埋土の記録を行い，ベルトを除去した後に再度床面を検出していった。硬化面の確認は出来なかっが，西壁付近では埋土ｅが溝状に確認された。この埋土ｅは，他の住居跡では貼床に用いられるが，当住居跡では溝状に検出された。加えて，柱穴などの付帯施設も確認され，中央には炭化物を含んだ黒色土が土坑状に，その両側に２基の柱穴が存在する。溝状の掘り込みは，一辺にのみ認められ，幅は10～30㎝で深さは均一ではなく不安定であった。この中からは遺物は出土していない。遺物は，総点で199点が出土し，この内の13点を図化した。636は，口縁部が直行し頸部に１条の貼付突帯をめぐらせる。突帯には格子状のキザミが施され，胴部は膨らむ。胴部から底部には急激にすぼまるため，口径の割に器高が低い。焼成は非常に良い。637は口縁部が内湾する器形を呈する。胴部との境には粘土接合面があり，外面にこれを残すことで段を有している。638～640は壺の破片である。640は幅広の貼付突帯で，キザミが鋸歯状を呈している。642は高坏の坏部である。口縁部が内湾気味に立ち上がり器壁がやや厚手の印象を受ける。645は赤色顔料が施される脚部である。鉢の可能性がある。646は，須恵器の坏身である。やや紫ががった色調を呈する。類似した資料が出土しており，これは先述した竪穴住居跡63号と接合している。647・648は寸詰まりの棒状礫である。



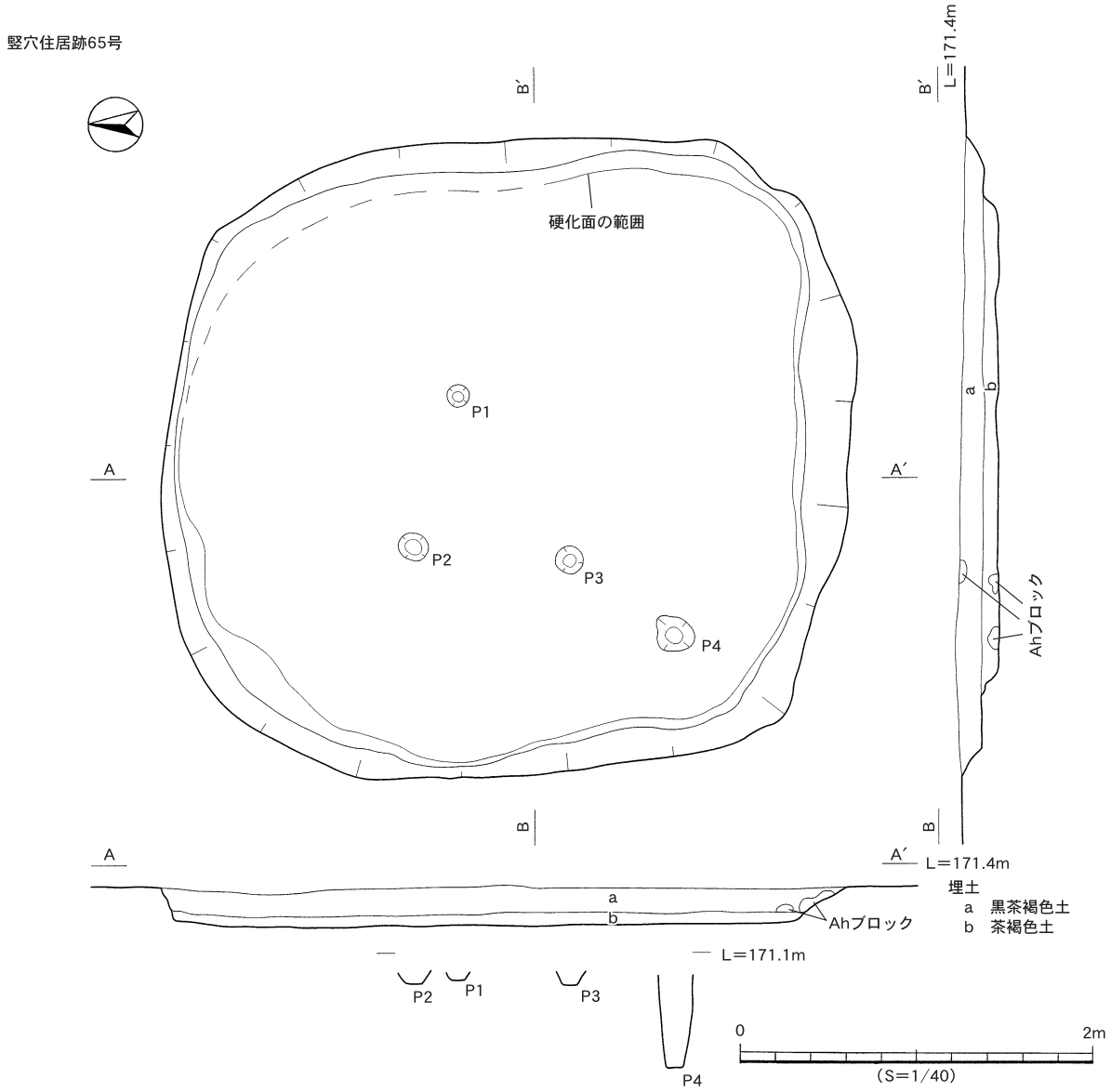
第312図　竪穴住居跡64号遺物出土状況



第313図　竪穴住居跡64号出土遺物



第314図　竪穴住居跡64号



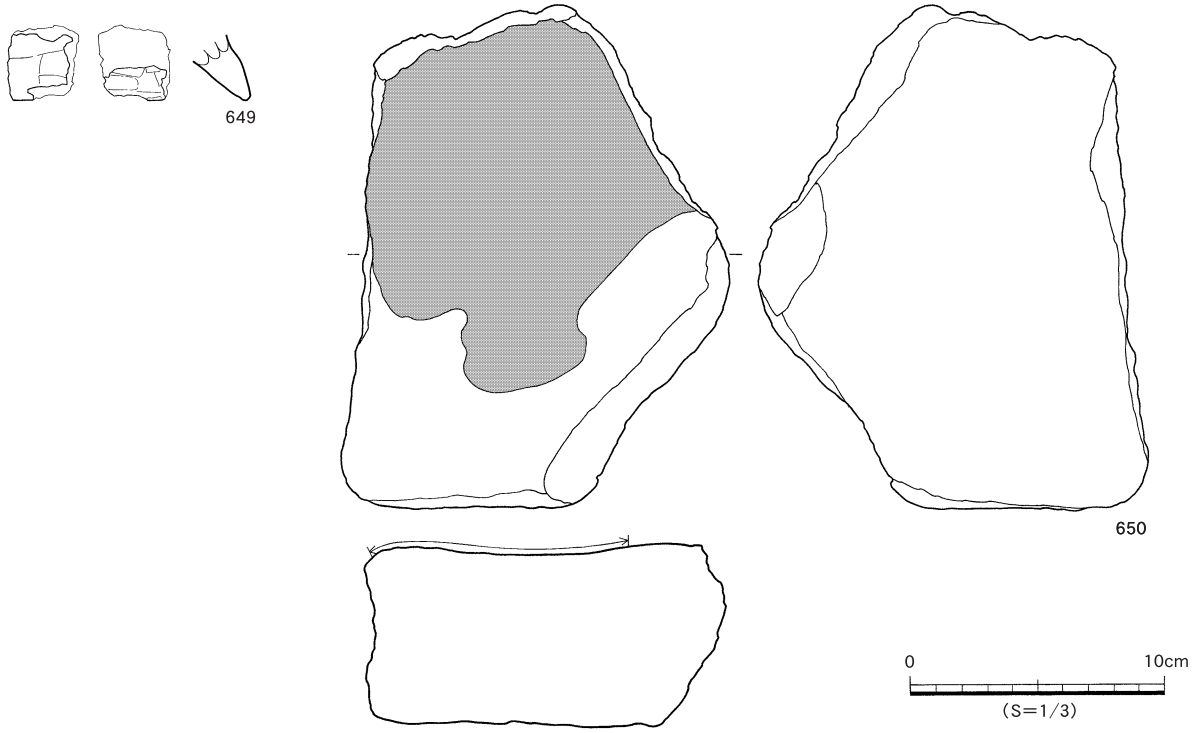
第315図　竪穴住居跡65号

竪穴住居跡65号（第315・316図）

Ｈ・Ｉ－26区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺４ｍ，短辺3.6ｍの隅丸長方形を呈する。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土ａを掘り下げると，アカホヤと茶褐色土の混在土が見られ，この上面が硬化していたためにここを床面と判断した。

柱穴などの付帯施設は，床面では捉えることが出来ず，硬化面を除去した段階で４基の柱穴が確認された。Ｐ１～３は浅く柱穴としては不安も残るが，Ｐ４は深くしっかりとしている。全体的に柱穴の径が小さい印象を受ける。

遺物は，総点で70点が出土したが多くは小破片であり図化できたものはこの内の２点に留まった。649は甕の脚部の破片である。650は大型の石皿片で中央部分が使用により凹んでいる。



第316図　竪穴住居跡65号出土遺物

竪穴住居跡66号（第317・318図）

Ｈ・Ｉ－26・27区においてⅥ層上面で検出された。

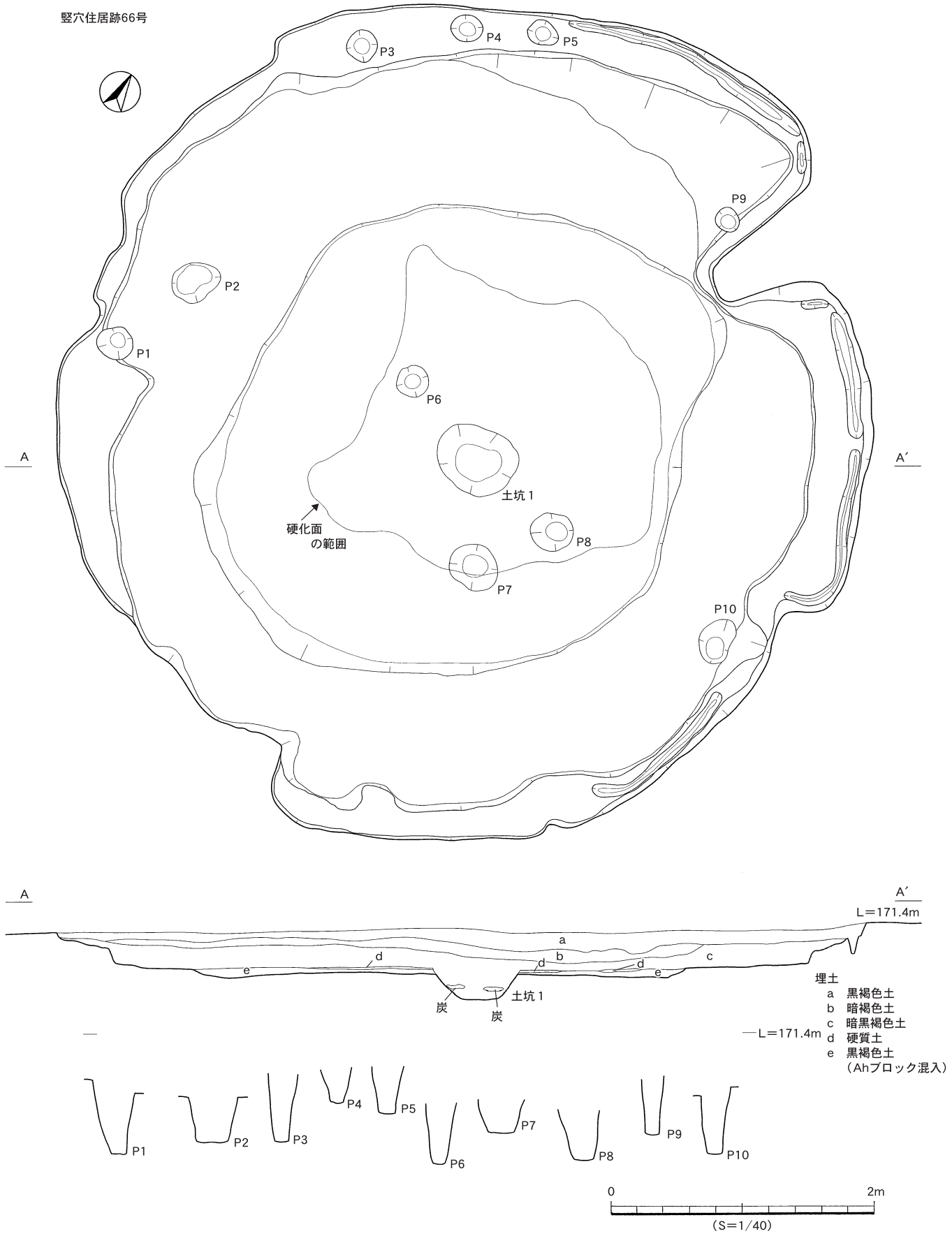
検出時のプランは，長辺6.3m，短辺6.2mの円形を基本とする。部分的にⅥ層のアカホヤ火山灰層が入り込んでおり花弁状を呈していた。このため，検出当初から花弁形住居を想定して調査を進めていった。

調査は，検出時にプランをつかむことのできた花弁の中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。花弁状のプランであることから，２段掘りを想定しながら調査を進めていったが，張り出しの付け根部分より外側で段落ちが見られ，北側の花弁ではなだらかな傾斜で中央に移る。中央部分には貼床と思われる埋土の変化に加えて，より中央部分では硬化面が確認された。このことから，この面を床面と判断し，埋土の記録を行いベルトを除去していった。この時中央に炭化物を多く含む土坑が検出された。この炭化物は放射性炭素年代測定を実施し，2,045±20yrBPという結果が示されている。柱穴などの付帯施設の確認は，中央では硬化面を除去した段階で３基が確認され，貼床より外側では床面検出の際に７基の柱穴が確認された。また，花弁の壁際には壁帯溝が部分的に見られた。この壁帯溝は，連続はせず途切れ途切れに検出された。

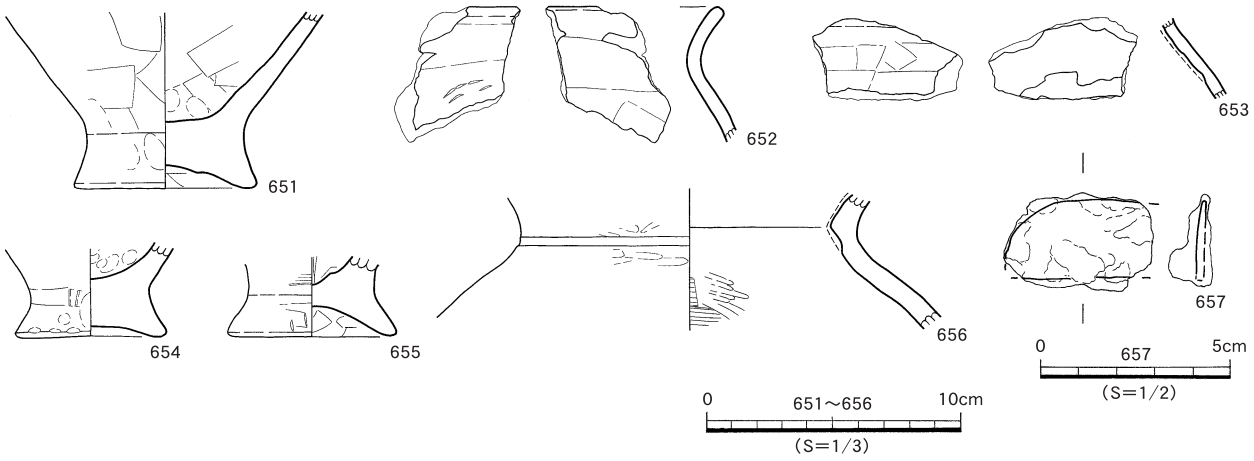
遺物は，面積の割にほとんど出土せず，小破片が大半を占め，総点で137点が出土し，この内の７点を図化した。657は鉄製品であるが，器種や刃部を特定できなかった。



壁帯溝検出状況



第317図　竪穴住居跡66号

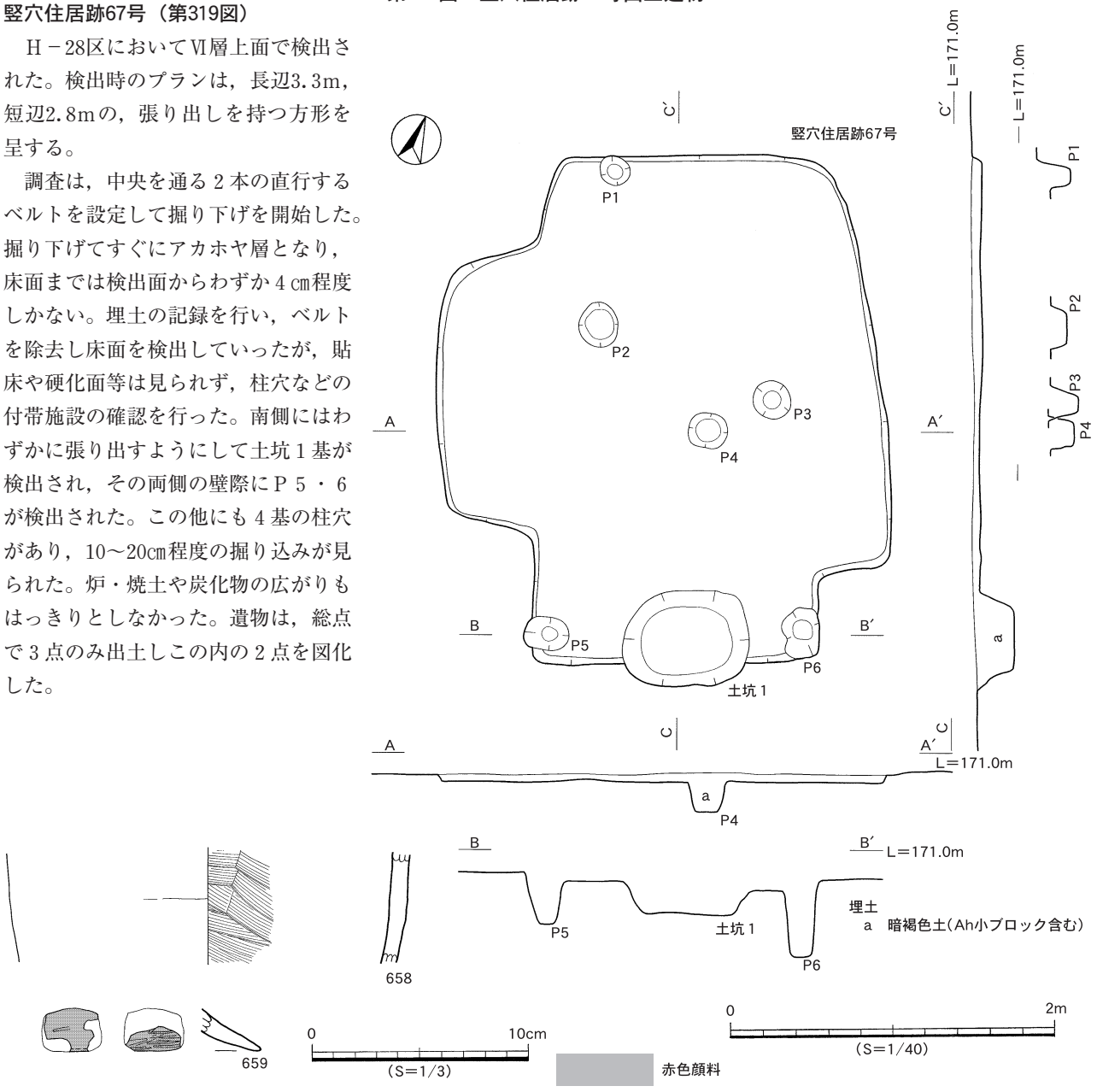


第318図　竪穴住居跡66号出土遺物

竪穴住居跡67号（第319図）

H－28区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.3m，短辺2.8mの，張り出しを持つ方形を呈する。

調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。掘り下げてすぐにアカホヤ層となり，床面までは検出面からわずか4㎝程度しかない。埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出していったが，貼床や硬化面等は見られず，柱穴などの付帯施設の確認を行った。南側にはわずかに張り出すようにして土坑1基が検出され，その両側の壁際にＰ５・６が検出された。この他にも4基の柱穴があり，10～20㎝程度の掘り込みが見られた。炉・焼土や炭化物の広がりもはっきりとしなかった。遺物は，総点で3点のみ出土しこの内の2点を図化した。

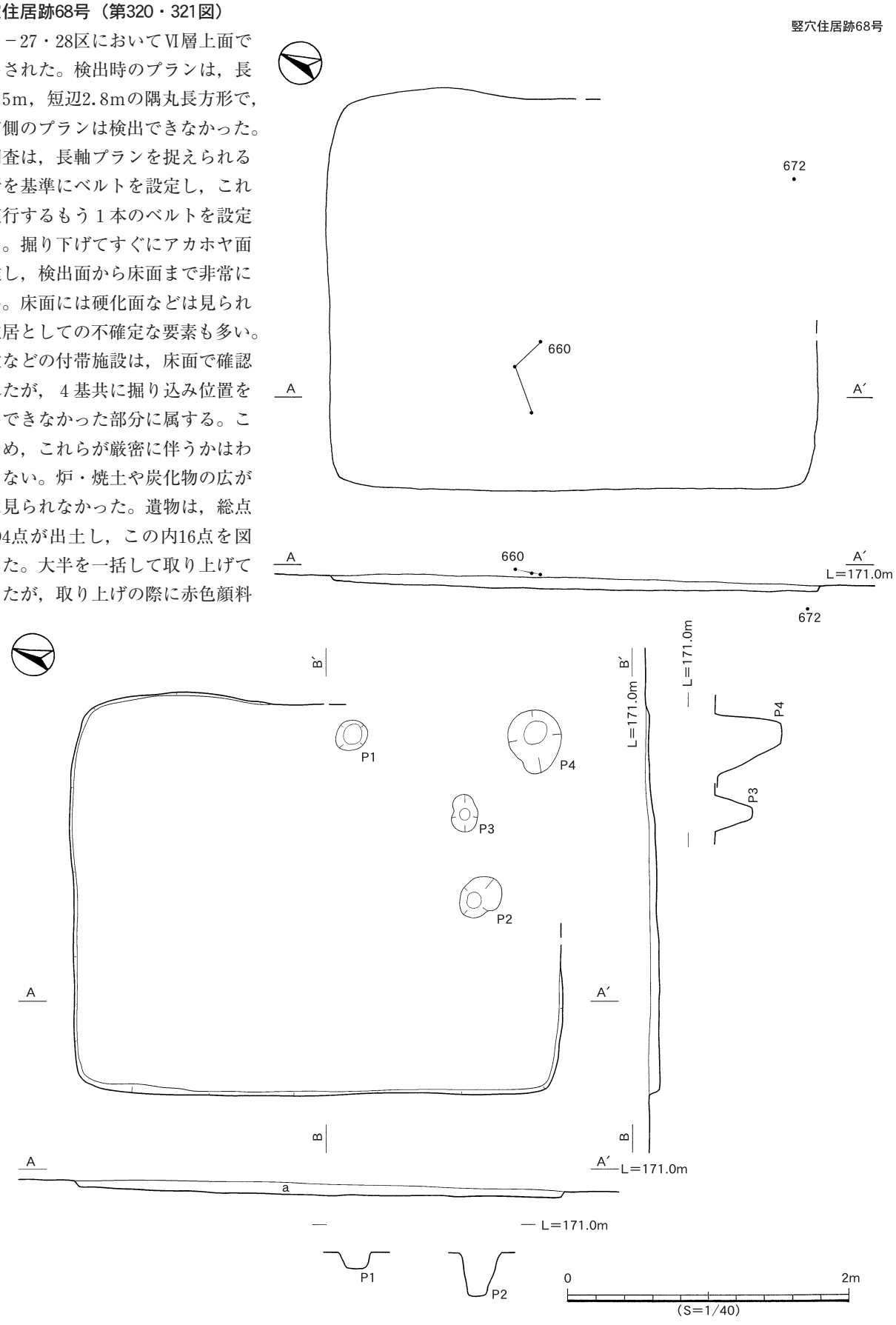


第319図　竪穴住居跡67号・出土遺物

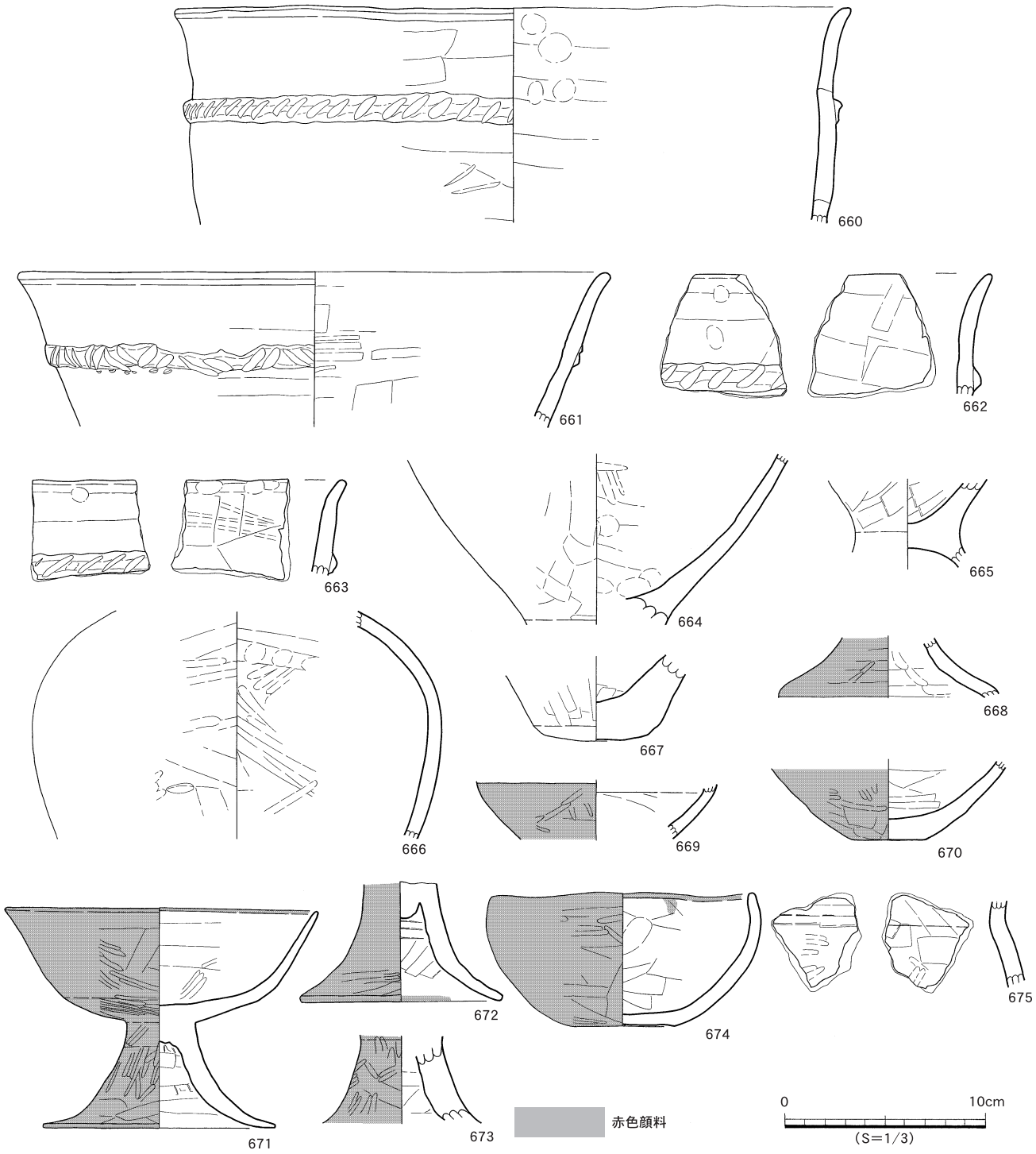
竪穴住居跡68号（第320・321図）

Ⅰ－27・28区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.5m，短辺2.8mの隅丸長方形で，東南側のプランは検出できなかった。

調査は，長軸プランを捉えられる箇所を基準にベルトを設定し，これに直行するもう１本のベルトを設定した。掘り下げてすぐにアカホヤ面に達し，検出面から床面まで非常に浅い。床面には硬化面などは見られず住居としての不確定な要素も多い。柱穴などの付帯施設は，床面で確認されたが，４基共に掘り込み位置を検出できなかった部分に属する。このため，これらが厳密に伴うかはわからない。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。遺物は，総点で194点が出土し，この内16点を図化した。大半を一括して取り上げていったが，取り上げの際に赤色顔料

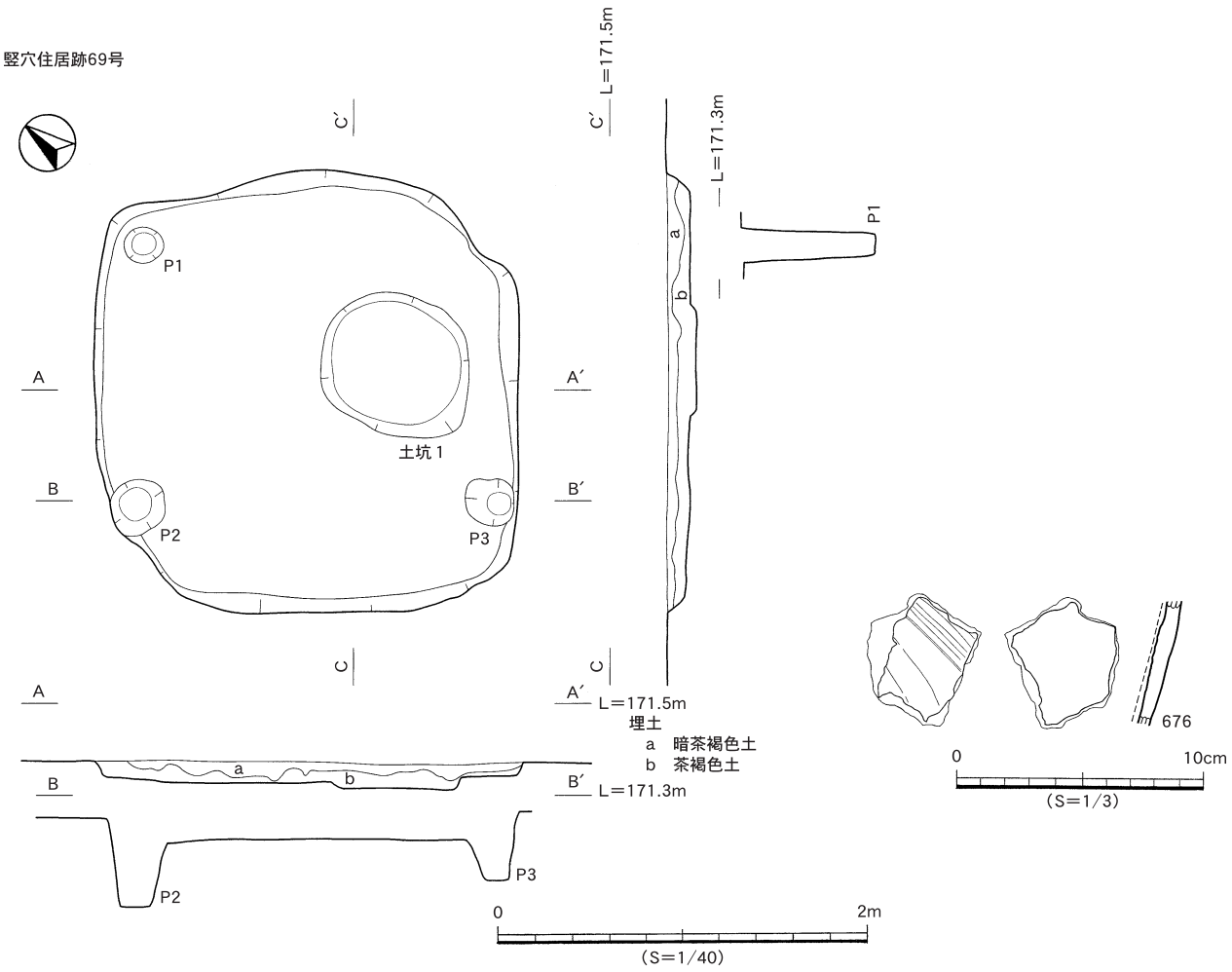


第320図　竪穴住居跡68号



第321図　竪穴住居跡68号出土遺物

が塗布されている資料が多い印象を受けた。660～663は甕の口縁部である。口縁部がわずかに外反し，特に口縁端部を外へ折り曲げるような特徴が見られる。668・669は坩である。668が胴部屈曲部下まで，669が胴部屈曲部から底部上端まで残存している。671は高坏で，直線的な坏部は脚部付近で弱い稜を有して屈曲する。672は，坏部と脚部との接合に粘土円塊が用いられている。674は口縁部が内湾する鉢ないしは坏である。



第322図　竪穴住居跡69号・出土遺物

竪穴住居跡69号（第322図）

Ｊ－28区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.4m，短辺2.4mの隅丸方形を呈する。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げていった。埋土は，２種類の堆積が見られたが，硬化面等は見られない。ベルトを除去したのちに床面を精査したところ，中央よりやや南側の所に浅い土坑が検出され，さらに，住居の四隅のうち３箇所から柱穴が検出された。この特徴から，残る一角にも柱穴があることが予想されたために検出に努めたが確認できなかった。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。遺物は，総点で９点が出土し，この内の１点を図化した。676は甕の胴部片と思われる。内面の剥落が激しい。

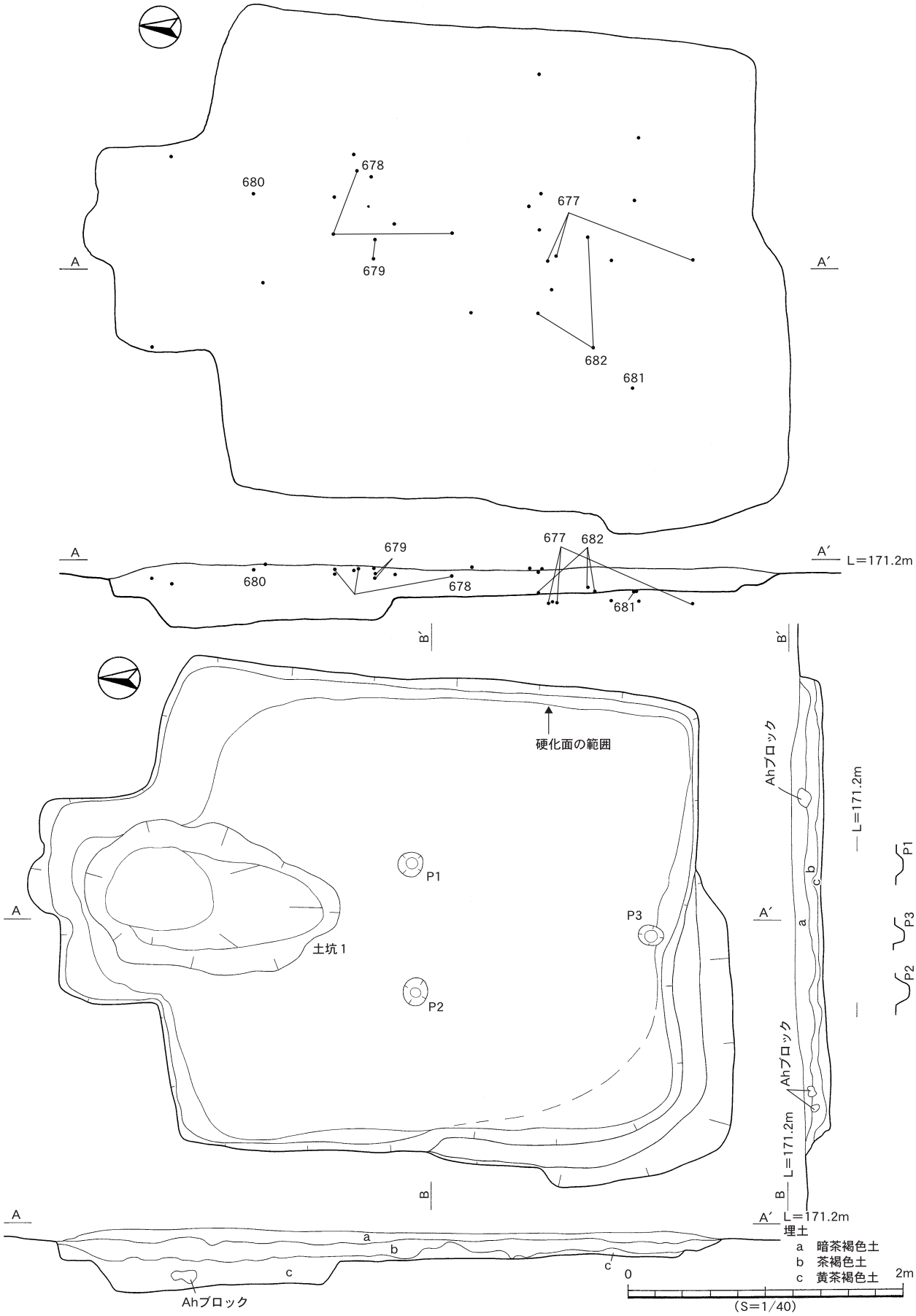
竪穴住居跡70号（第323・324図）

Ｉ・Ｊ－29区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.9m，短辺3.5mの隅丸長方形を呈する。北側中央と南西側にやや張り出し状の突出部が認められた。

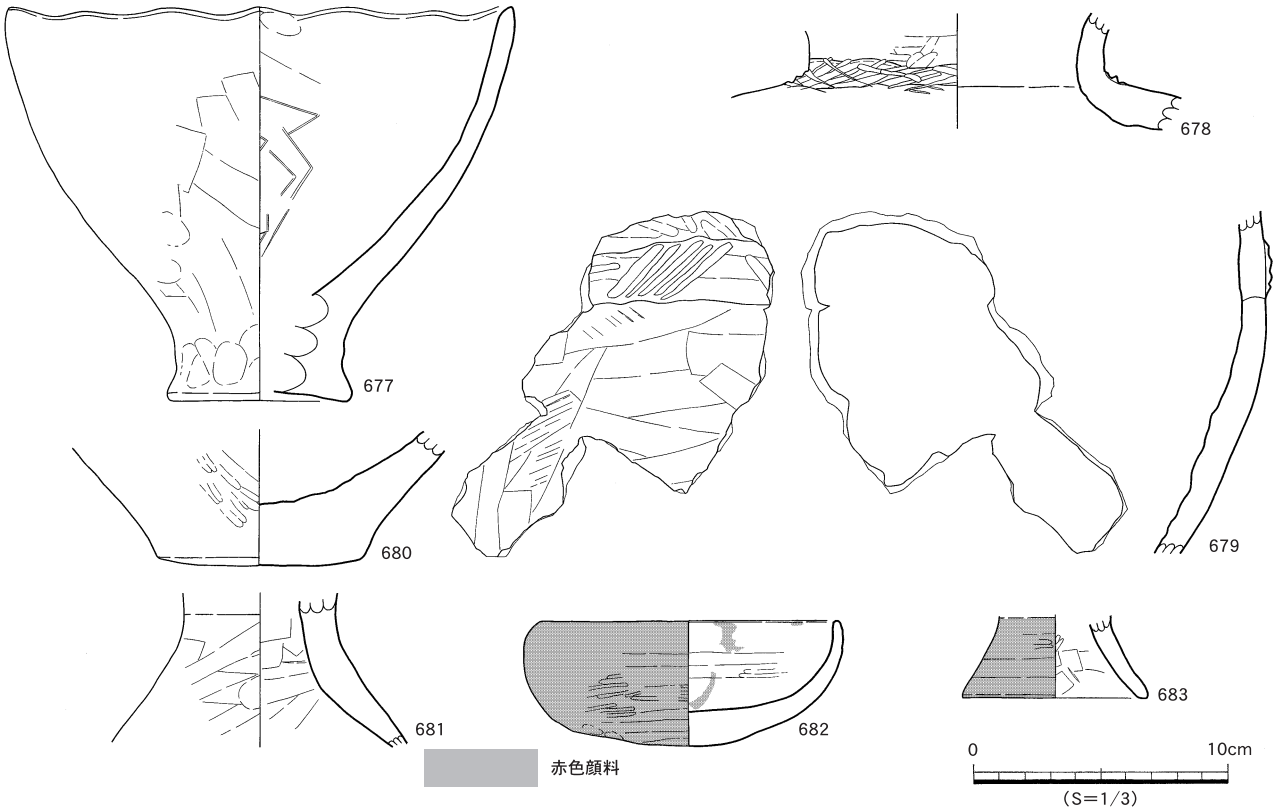
調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土ｂ層下が硬化しており，中央部分が不安定ではあるがこれを床面と判断した。南西側の張り出しは，緩やかなスロープ状で平坦面は幅20㎝程度ある。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で３基の柱穴が確認された。３基共に検出面からの深さは浅い。Ｐ１とＰ２が住居跡のほぼ中央部に位置していることから，深さに若干の疑問も残るが両者は主柱穴であったとも考えられる。

また，北側の張り出しに合うように土坑が検出された。土坑床面北側にかけて緩やかな傾斜を有している。炉・焼土や炭化物の広がりははっきりとしない。遺物は，総点で228点が出土し，この内の７点を図化した。

竪穴住居跡70号



第323図　竪穴住居跡70号



第324図　竪穴住居跡70号出土遺物

竪穴住居跡71号（第325・326図）

Ｌ－30区においてⅥ層下面で検出された。

検出時のプランは，長辺5.7m，短辺3.9mの隅丸長方形で，72号に切られている。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。検出時には中央付近に焼土・炭が集中する部分があり，検出時には床面が見えていた。埋土ａは周辺の住居跡の状況などから貼床を含んだ硬化面下位に見られる土であり，この層を掘り下げると四隅が深く，中央が浅い状況になった。

柱穴などの付帯施設は，この埋土ａ層を掘り下げた段階で６基の柱穴が確認された。

遺物は，総点で93点が出土し，この内の８点を図化した。684・685は甕の破片である。690は高坏と判断した。このような器形は一見すると坩と捉えられなくもない。だが，口縁部が短く直線的に外傾する特徴と，胴部の球形が低く収まる点などから，竪穴住居跡62号で出土している資料との類似性を考え坩に分類した。691は棒状礫である。

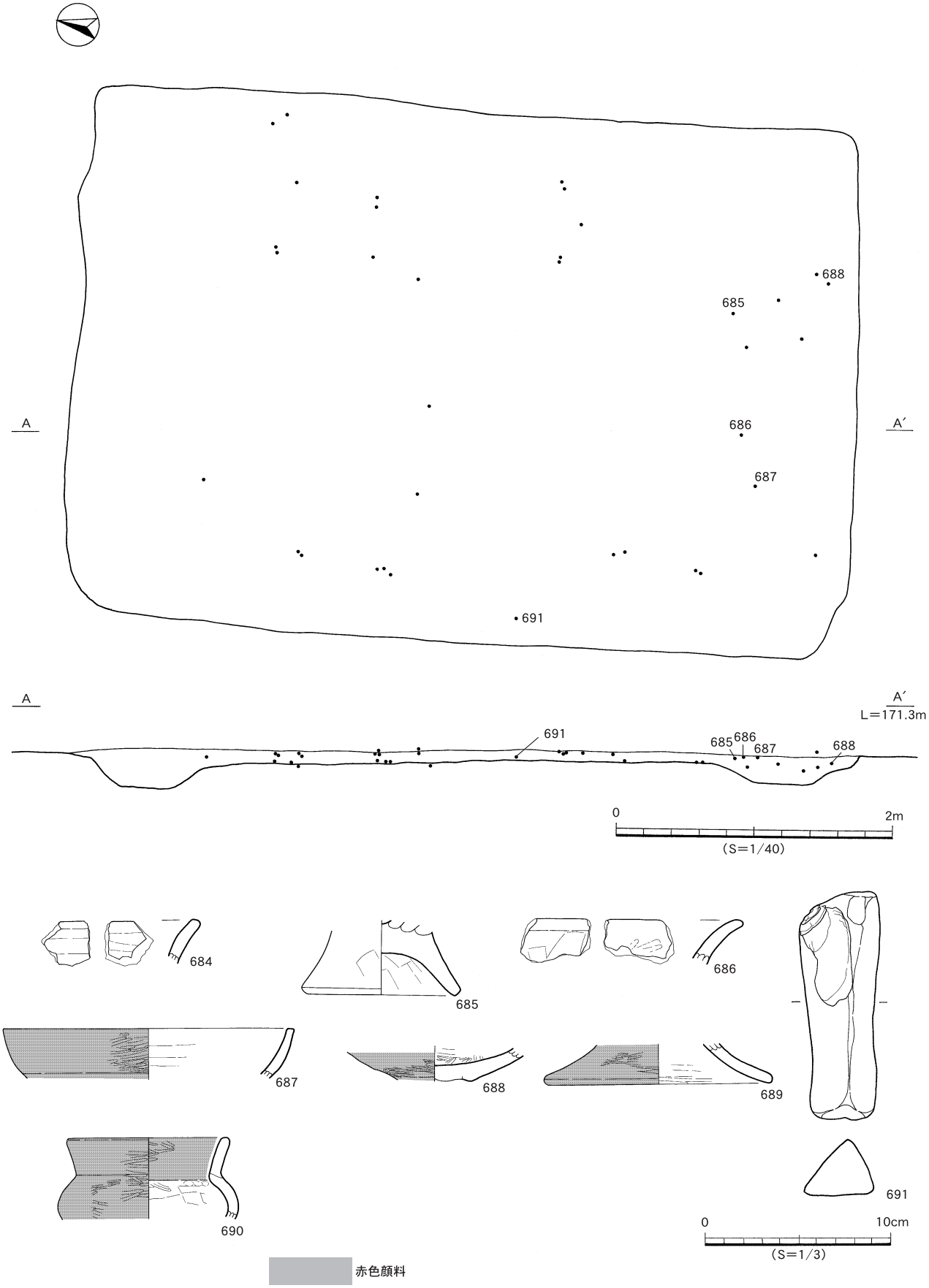
竪穴住居跡72号（第327図）

Ｌ－29・30区においてⅥ層下面で検出された。検出時のプランは，長辺2.7m，短辺2.4mの隅丸長方形を呈する。検出時点で既に硬化面が広がっていた。南西に芋穴による攪乱があり，71号と切り合い関係にもある。この関係は，検出時に既に71号を切ったプランが確認されている。

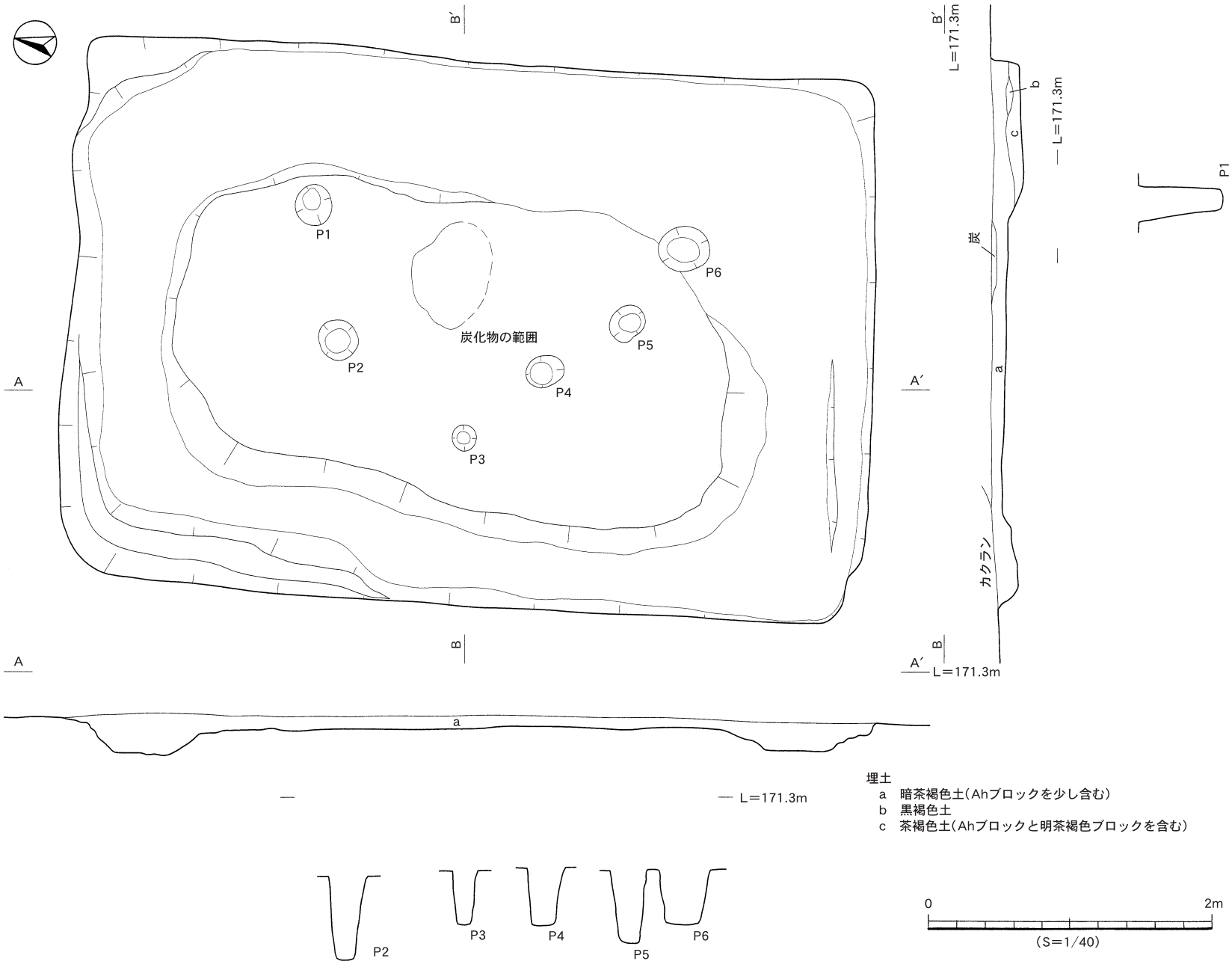
調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，硬化面を記録した後にこれを除去しながら作業を進めていった。床面は不安定で，２基の柱穴が確認できた。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。

遺物は，総点で56点が出土しこの内の２点図化した。692・693共に甕の破片である。692は口縁部付近の破片で，口縁部が外反し，外面には縦方向の工具痕が見られる。

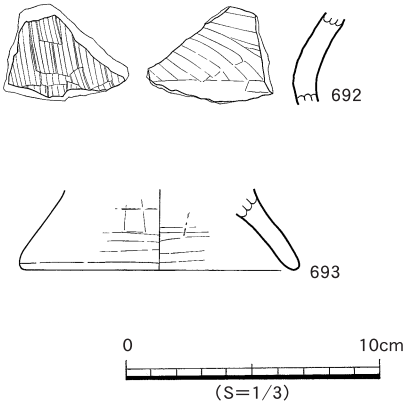
竪穴住居跡71号

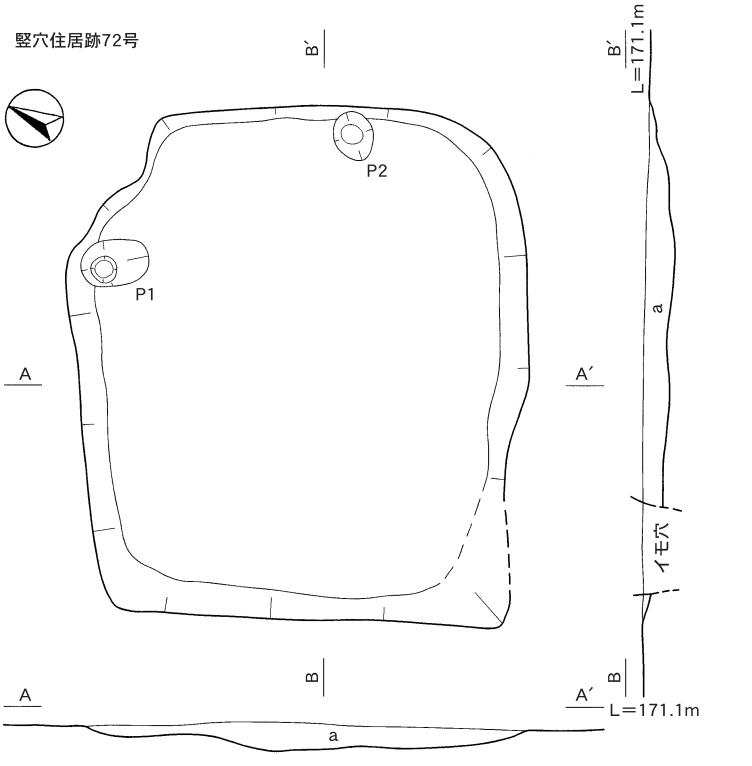


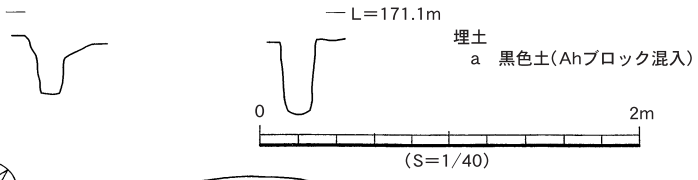
第325図　竪穴住居跡71号・出土遺物



第326図　竪穴住居跡71号



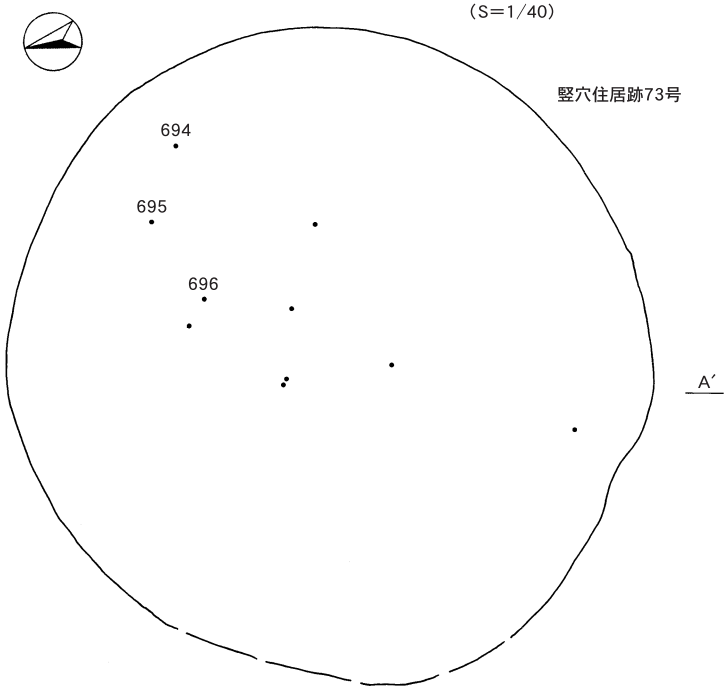


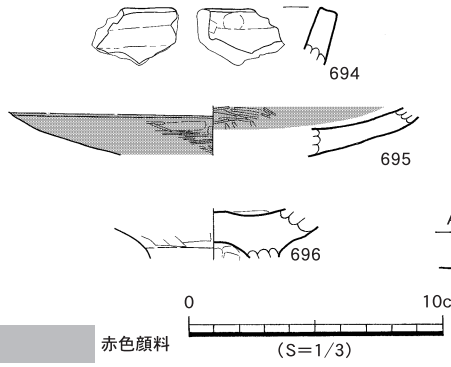


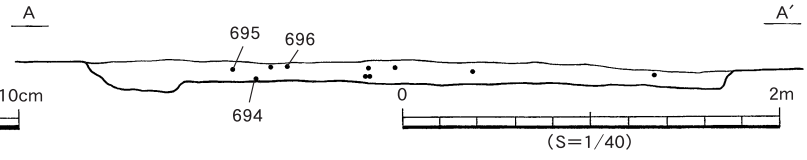
竪穴住居跡73号（第327・328図）

Ｌ－30・31区においてⅥ層下面で検出された。検出時のプランは，長辺3.5m，短辺3.5mの円形で，調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。検出面から床面までは浅く，アカホヤブロック混入の黒褐色土が見られたためにこれを床面と判断した。床の硬化面を掘り下げていくと住居の西側から南側にかけてやや深くなっていた。柱穴などの付帯施設は，これらの埋土を除去している段階で確認され，結果５基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。

遺物は，総点で33点が出土し，この内の３点を図化した。694は口縁部がわずかに外傾する甕の破片である。695は高坏の坏部下半の資料である。

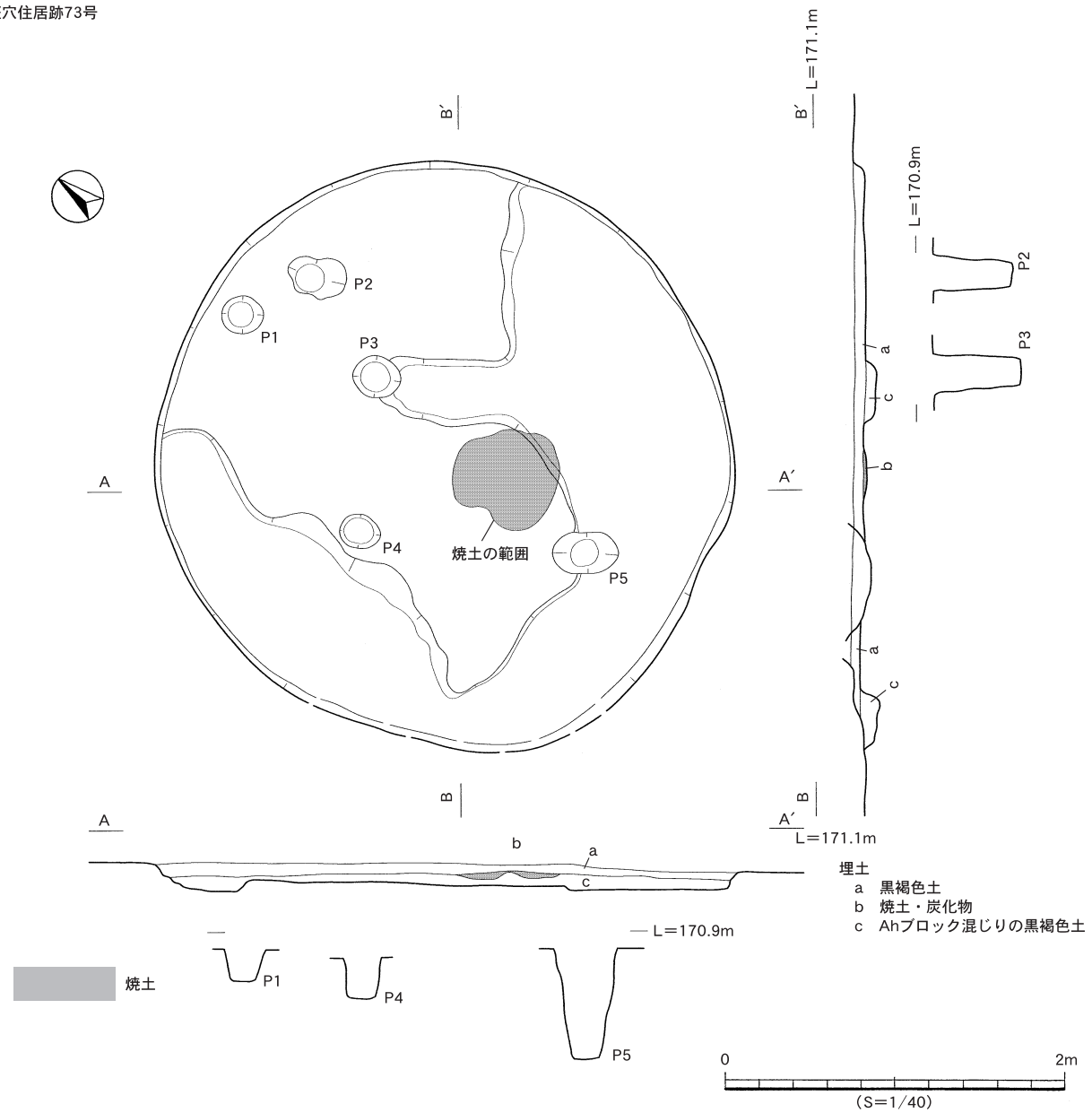






赤色顔料

第327図　竪穴住居跡72号，73号・出土遺物



第328図　竪穴住居跡73号

竪穴住居跡74号（第329～332図）

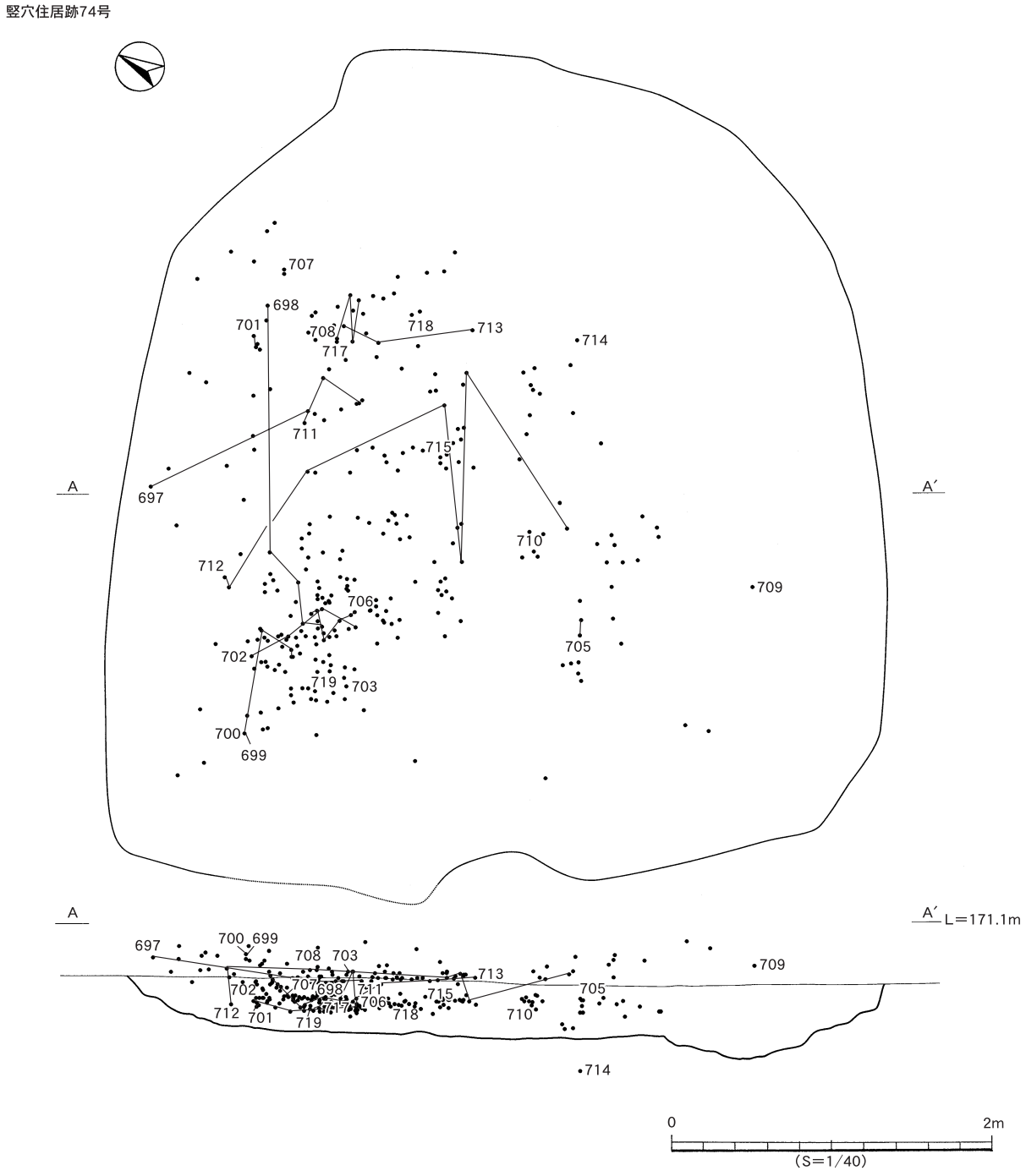
Ｌ・Ｍ－31区においてⅥ層下面で検出された。検出時のプランは，長辺5.1m，短辺4.7mの隅丸長方形のプランを基調としながらも，いくつかの張り出しプランが認められた。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。その結果，西側は２段掘り状にテラス部分が検出されたが，南側へ行くに従い段は浅くなり，プランは見られなくなった。

柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で９基の柱穴が確認された。Ｐ２とＰ５は検出面からの深さが約20㎝と浅いが，２基以外のピットは深くしっかりとしている。この他に，中央が土坑状に深くなっているが，住居中央の凹みと連続するのかは両者間に攪乱が入り込んでいるためにはっきりとしない部分もある。床面から出土した炭化物は，放射性炭素年代測定で1,680±20yrBPと結果が示されている。

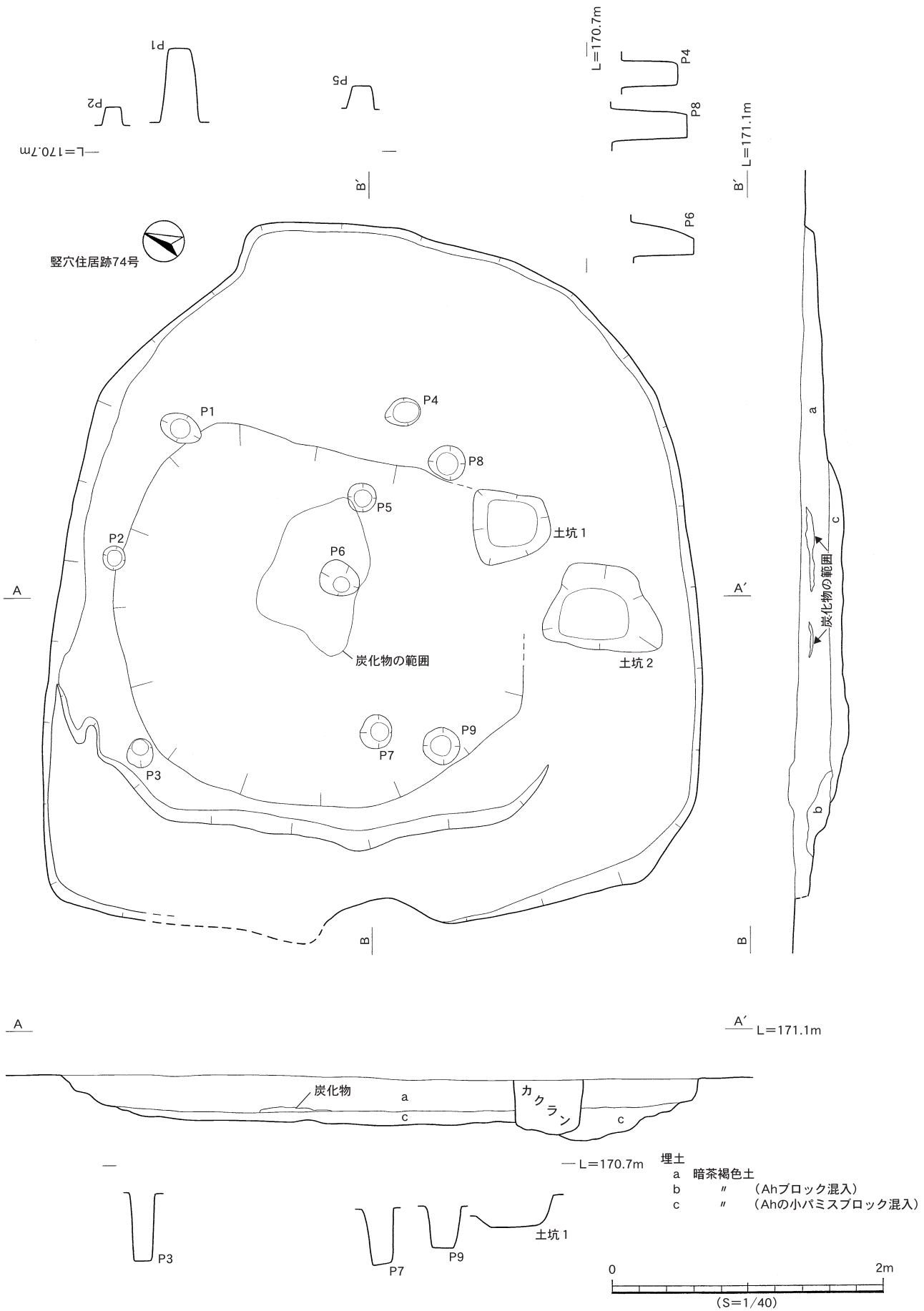
遺物は，総点で925点が出土し，この内の27点を図化した。697は口縁部が外反し胴部に貼付突帯をめぐらせる。突帯頂部にはキザミが施され，胴部は膨らむ。698は口縁部が外反する。胴部突帯はやや下方に貼付され，上下に交差する。胴部はわずかに膨らんで，口径や器高に比べると径の小さな底部へ至る。底部はわずかに脚が作出されている。700・701は口縁部が直行する甕である。701は胴部に浅い貼付突帯をめぐらせ，701には見られない。

706は口縁部が短く，直行する壺である。口縁部は平坦ではなく，一見すると波状口縁を呈して見える。711は高坏の坏部である。口縁部は外反しやや大振りである。

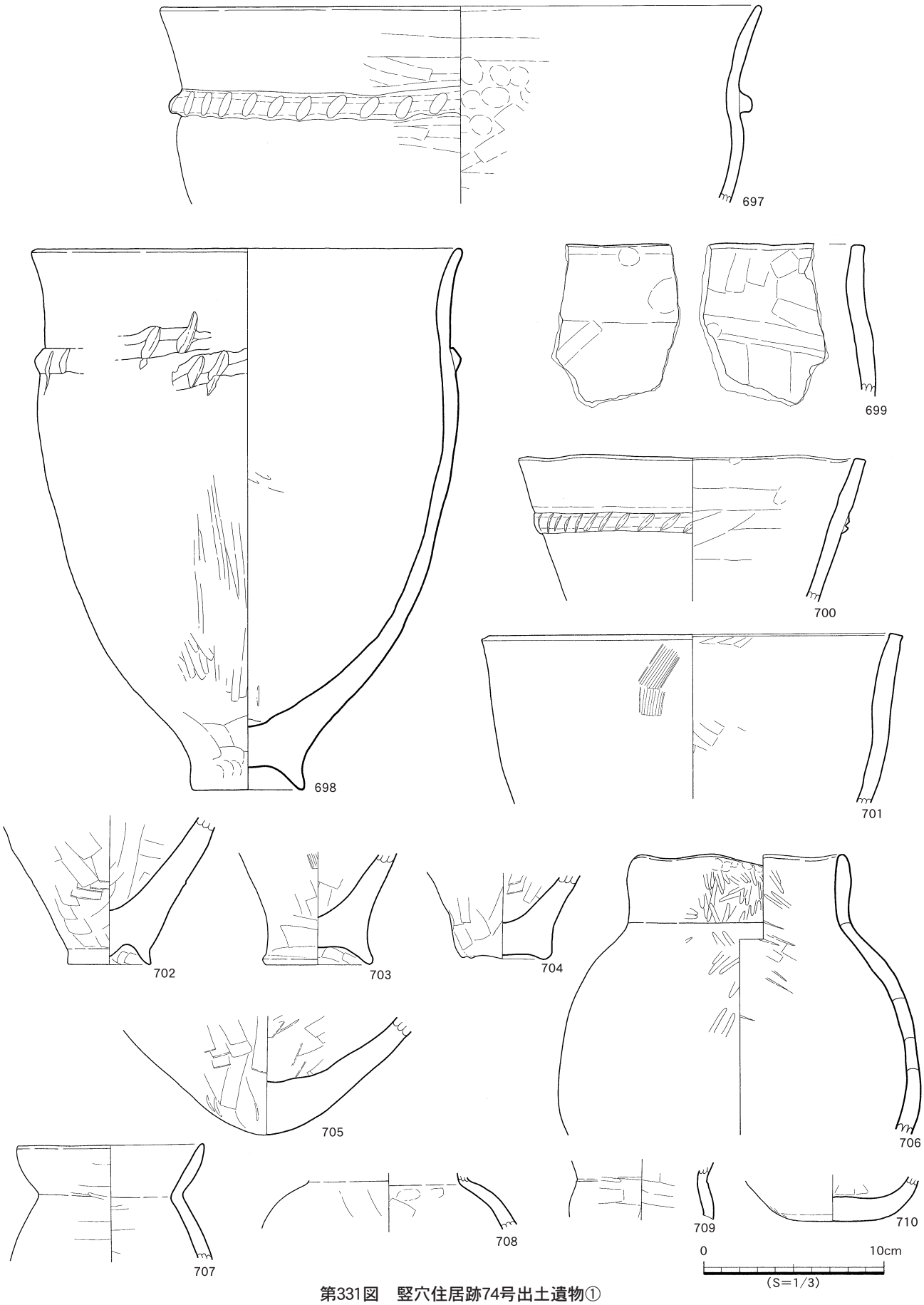


第329図　竪穴住居跡74号遺物出土状況

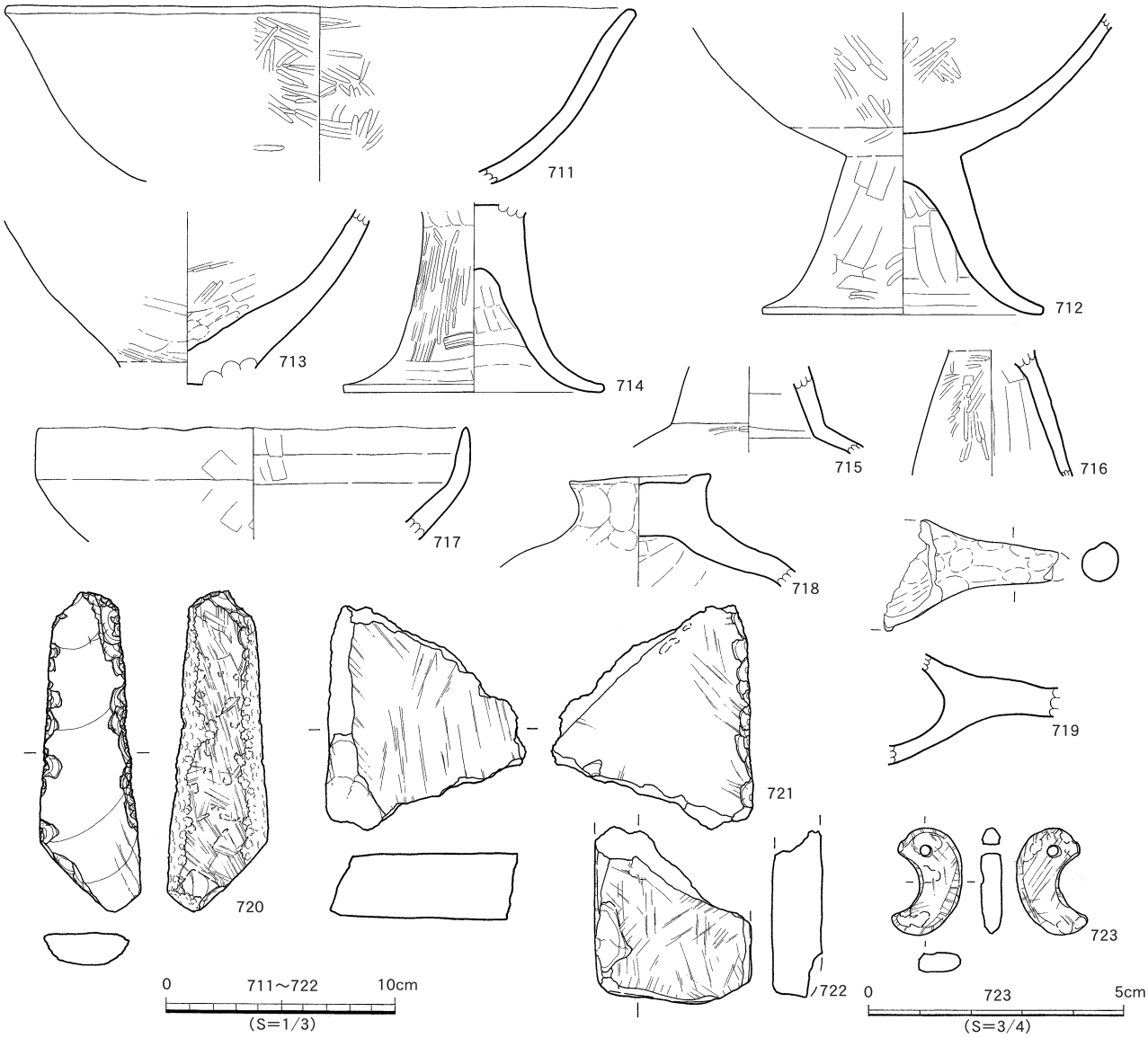
胴部は緩やかに丸みを帯びて脚部へと至る。712は坏部中位から脚部にかけての資料である。717は口縁部が直行してやや直線的に胴部で屈曲する。718は蓋を想定して図化した。脚部とも思える外面には指頭痕が残り，胴部は大きく外に開く。719は匙形の土製品と思われる。720は，竪穴住居跡のプラン検出時に出土したもので，磨製石斧片を転用したものかと思われる。敲打が施されている面から，両側辺に剥離が施されている。721・722は砥石である。723は頁岩製の勾玉である。



第330図　竪穴住居跡74号



第331図　竪穴住居跡74号出土遺物①



第332図　竪穴住居跡74号出土遺物②

竪穴住居跡75号（第333・334図）

Ｌ－32区においてⅥ層下面で検出された。

検出時のプランは，長辺4.2m，短辺4.2mの隅丸方形で，一見円形にも見える。

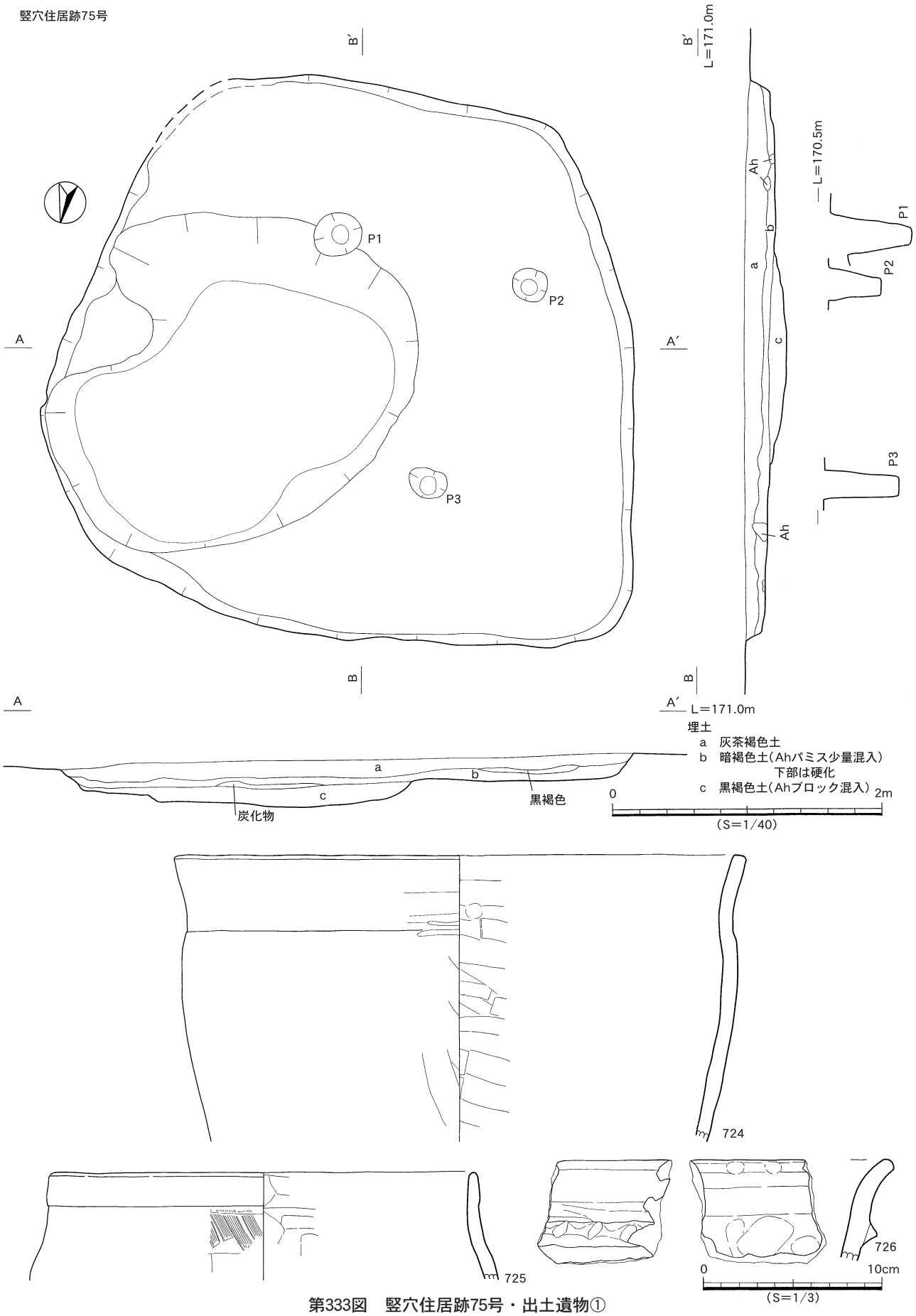
調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，埋土ｂ層の下が硬化しており，これを床面と考え壁面検出をおこなった。埋土の記録を行った後に，ベルトを除去し床面を検出していったところ，東側には埋土ｃが土坑状に見られた。この埋土ｃは，周辺の竪穴住居跡でも貼床に用いられており，これをさらに掘り下げていったところ土坑であることが判明した。東側の一部は凹字状になる。柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で順次確認され，結果３基の柱穴が確認された。いずれも深い。炉・焼土は見られなかったが，炭化物は埋土ｃの土坑上面にわずかに広がっていた。遺物は，総点で241点が出土し，この内の12点を図化した。

竪穴住居跡76号（第335図）

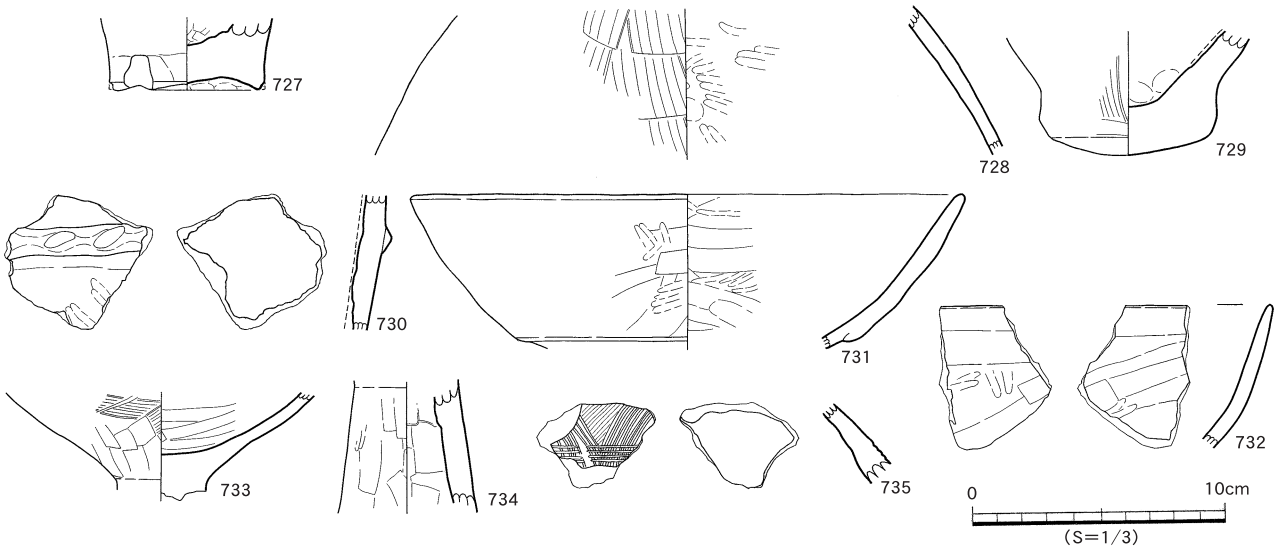
Ｋ・Ｌ－31区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.8m，短辺3.6mの隅丸方形で，上面は近現代の攪乱により大きく消失していた。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出した。床面は，東側にかけてわずかに傾斜しており，中央よりやや南側には粘土の層が薄く楕円形プランで検出された。当初，焼土等の一部の可能性を考えて精査したが，大きな変化は見られなかった。

柱穴などの付帯施設は，床面を除去した段階で５基が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られない。遺物は出土していない。

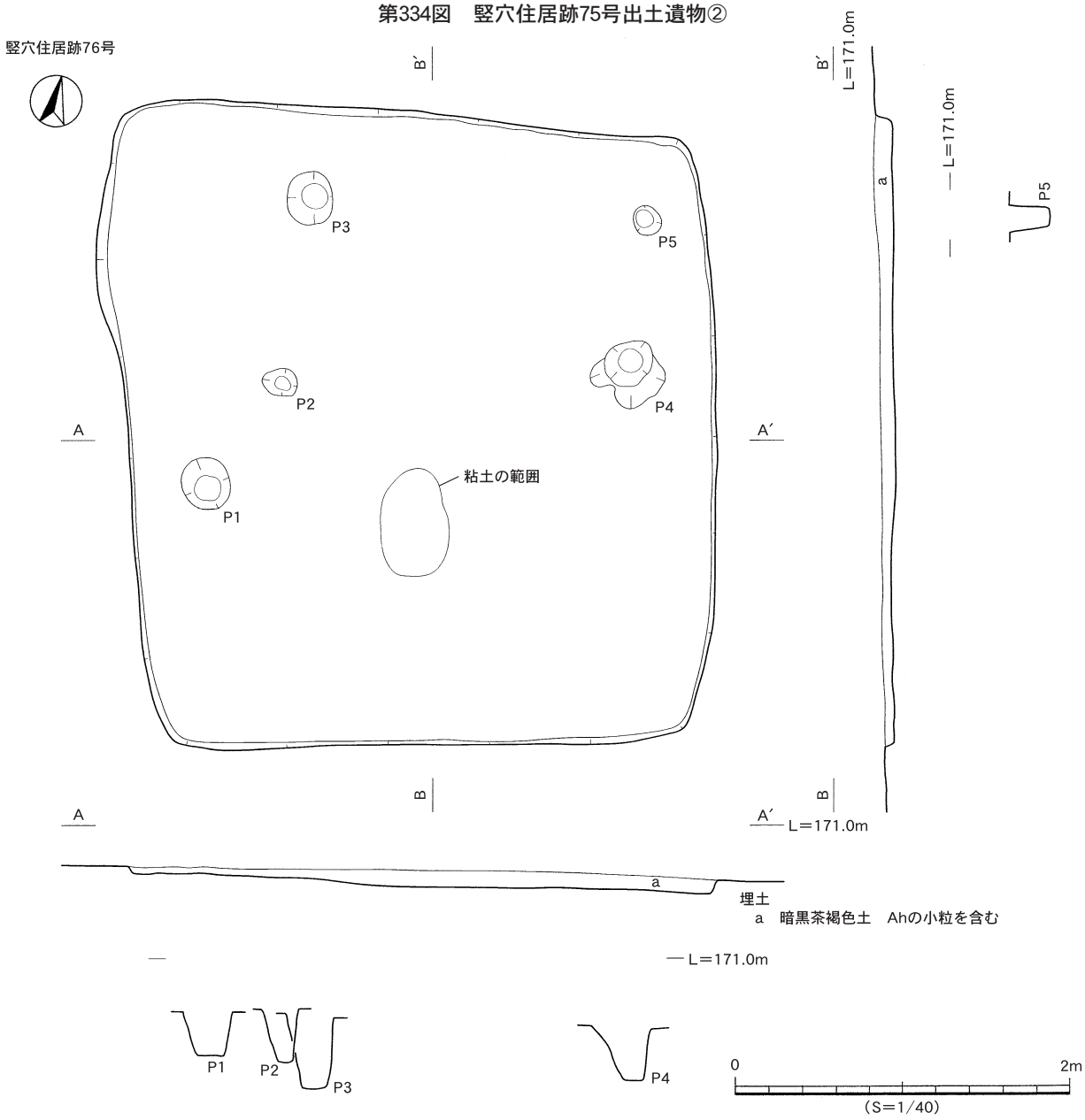
竪穴住居跡75号



第333図　竪穴住居跡75号・出土遺物①



第334図　竪穴住居跡75号出土遺物②

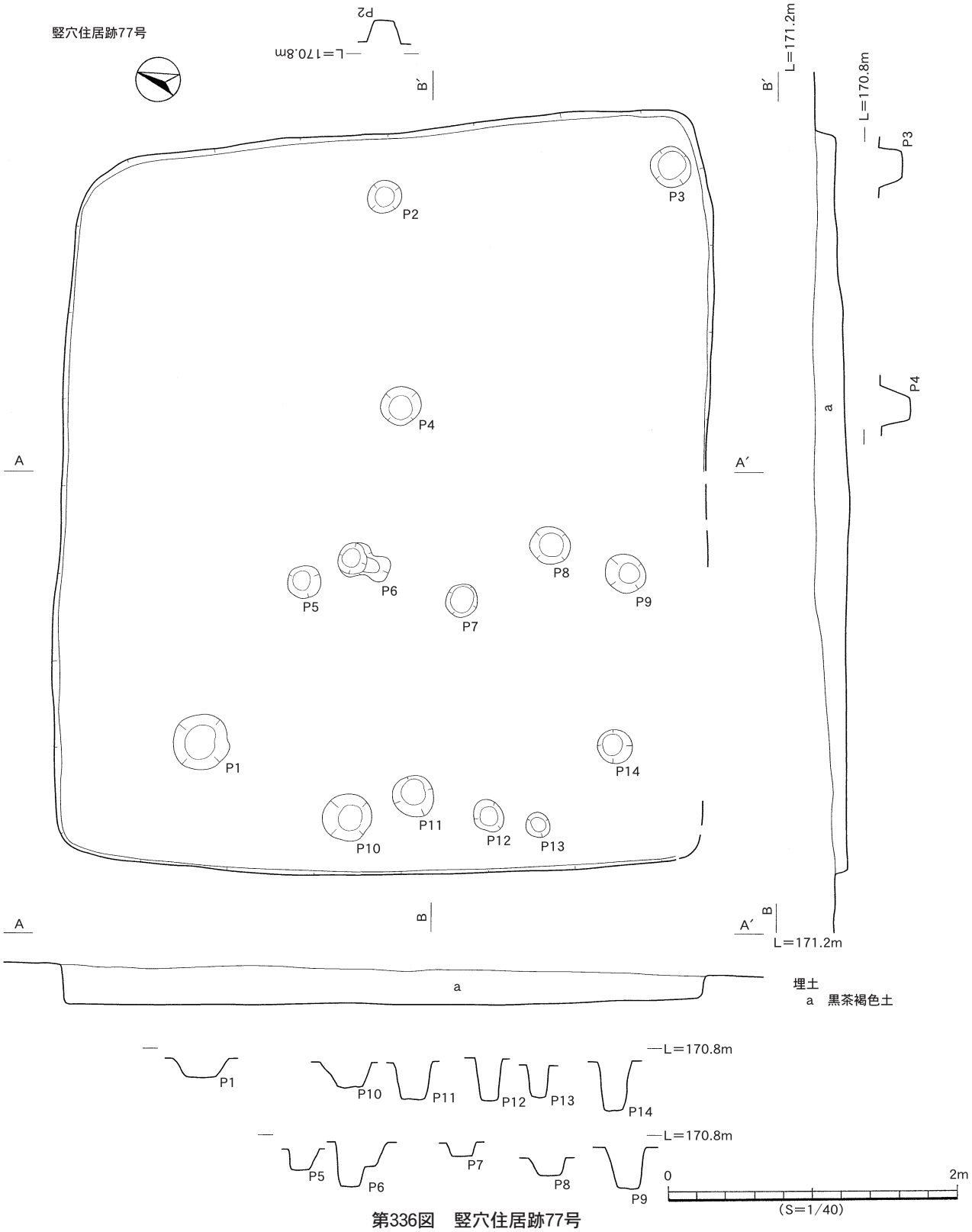


第335図　竪穴住居跡76号

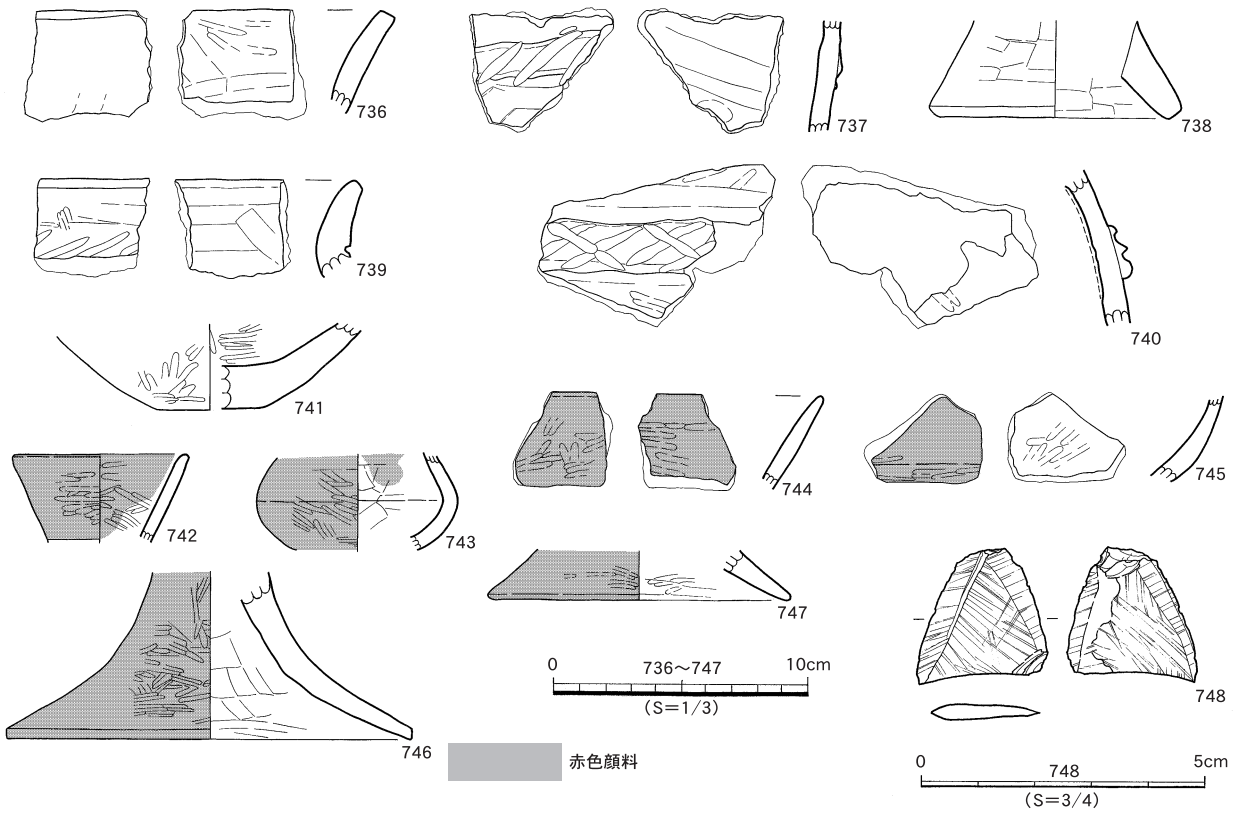
竪穴住居跡77号（第336・337図）

K－30区においてⅥ層下面からⅦ層上面で検出された。

検出時のプランは，長辺5.2m，短辺4.5mの隅丸長方形で，南側がはっきりしない。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層でアカホヤ下位の茶褐色土を床面とし，硬化面等は確認できなかった。柱穴などの付帯施設の確認は，床面をやや掘り下げた段階で確認され，結果14基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。遺物は，総点で632点が出土し，この内の13点を図化した。748は正三角形を基調とする磨製石鏃である。



第336図　竪穴住居跡77号



第337図　竪穴住居跡77号出土遺物

竪穴住居跡78号（第338・339図）

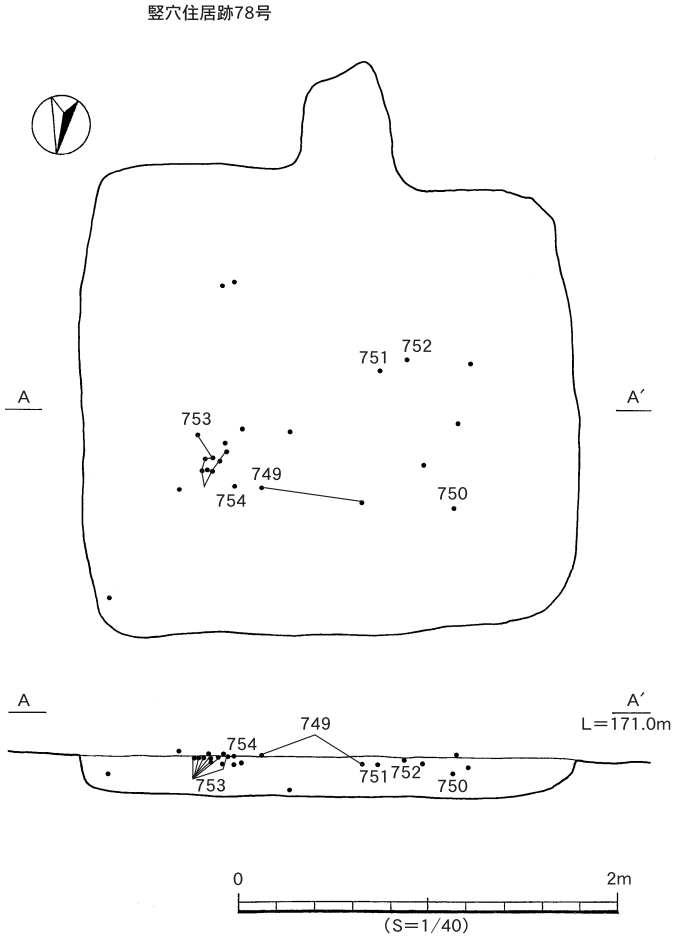
Ｆ－30区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.6m，短辺2.5mの隅丸方形で，南側に土坑状の張り出し部が認められた。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。

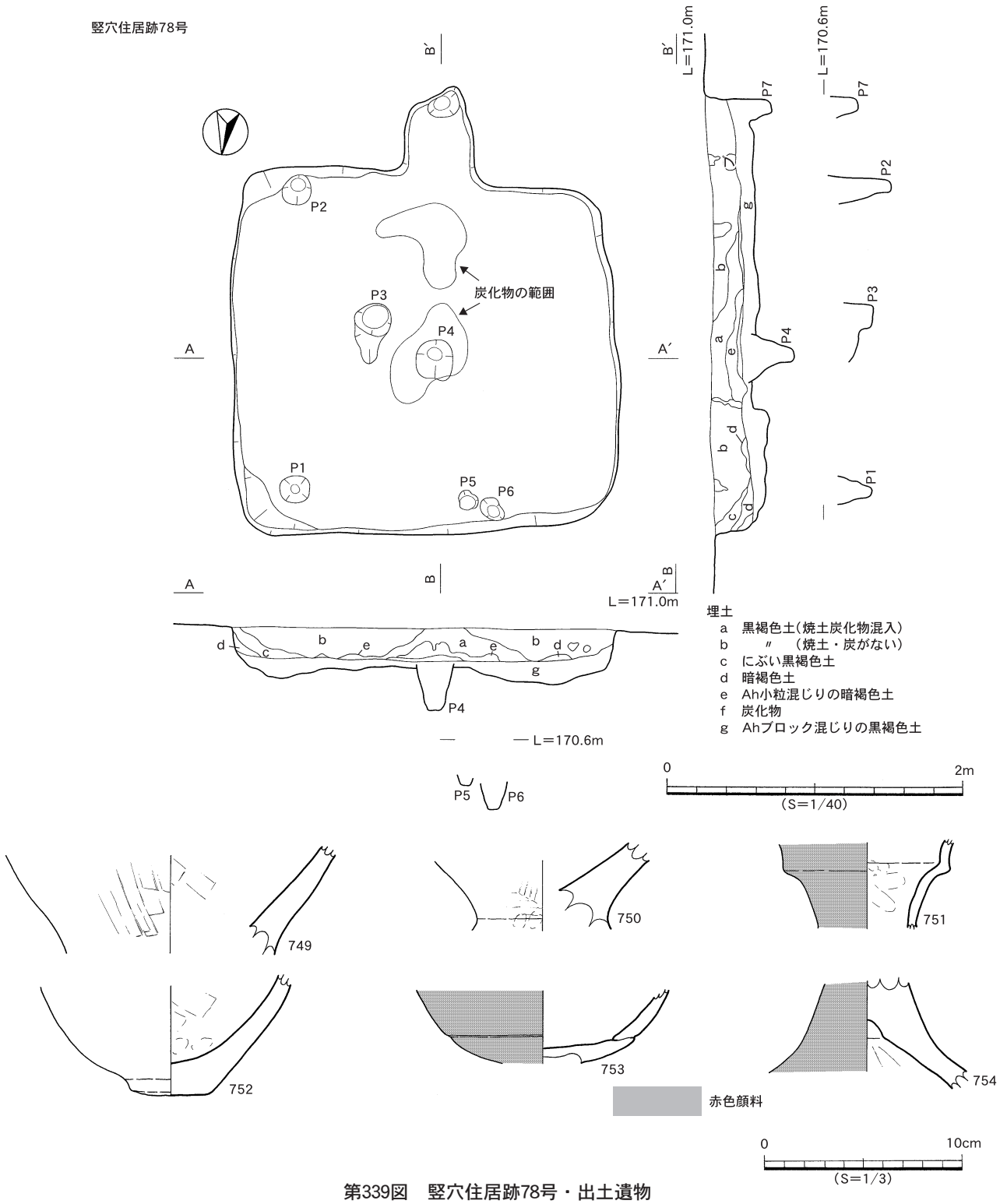
床面の判断は，アカホヤと黒褐色土の混入土上面が硬化していたことから，これを床面と判断した。この面で床を精査したところ，中央及びやや南側で２箇所の炭化物の集中が認められた。これらを除去したところ，中央の炭化物層の下位をはじめ７箇所で柱穴が確認された。この炭化物は放射性炭素年代測定を実施し，2,000±20yrBPという結果が示されている。

なお，竪穴住居跡検出した当初から見られていた南側の張り出しは，竪穴住居跡の床面とレベル的にもほぼ連続しており，断面観察においても両者の切り合いを見いだすには至らなかった。このため，両者は同一時期のものである可能性が高いと判断した。

遺物は，総点で24点が出土しこの内の６点を図化した。これらの多くは検出面から10㎝程度の部分で出土している。床面付近では，縄文土器片などが出土しているが，混在のためにここでは図化していない。



第338図　竪穴住居跡78号遺物出土状況



第339図　竪穴住居跡78号・出土遺物

竪穴住居跡79号（第340～342図）

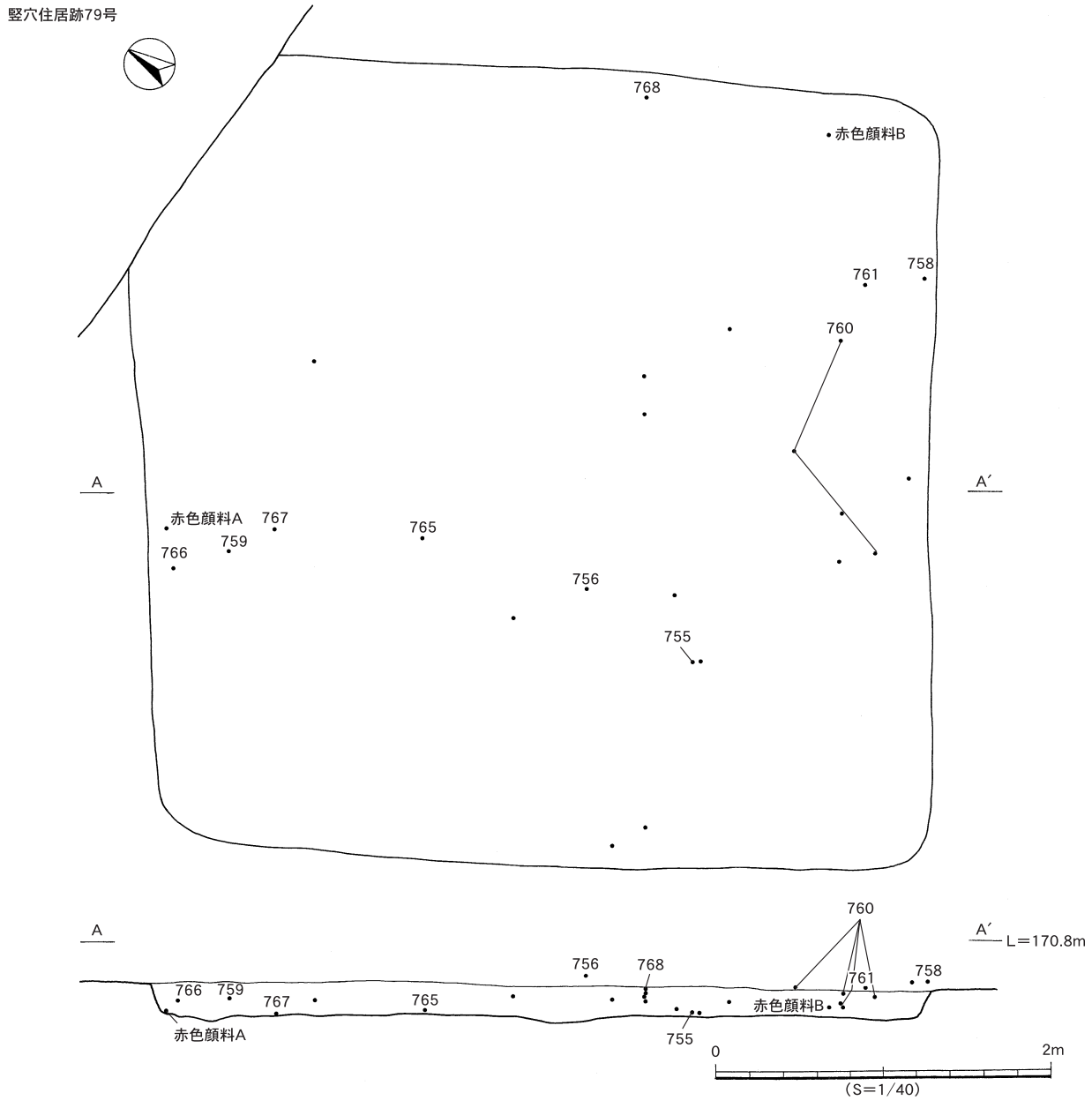
Ｅ－33・34区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.8m，短辺4.8mの隅丸方形で，北側は溝状遺構に切られて検出された。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトと溝状遺構の短軸方向から住居中央へ向かうベルトの３本を設定して掘り下げを開始した。調査の過程で，須恵器坏蓋の完形品や坩形土器の完形品などが出土している。床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった際には，第181図Ａ・Ｂに示したように２箇所で赤色顔料の粒子がまとまって出土した。これらは，周辺の土壌と共に取り上げ，電子顕微鏡観察及び蛍光Ｘ線分析を行っている。分析の結果，鉱物由来のベンガラで，詳細は第４章に掲載してある。

床面は，黒褐色土を掘り下げると全体的に硬質土が見られ，これを床面と判断した。

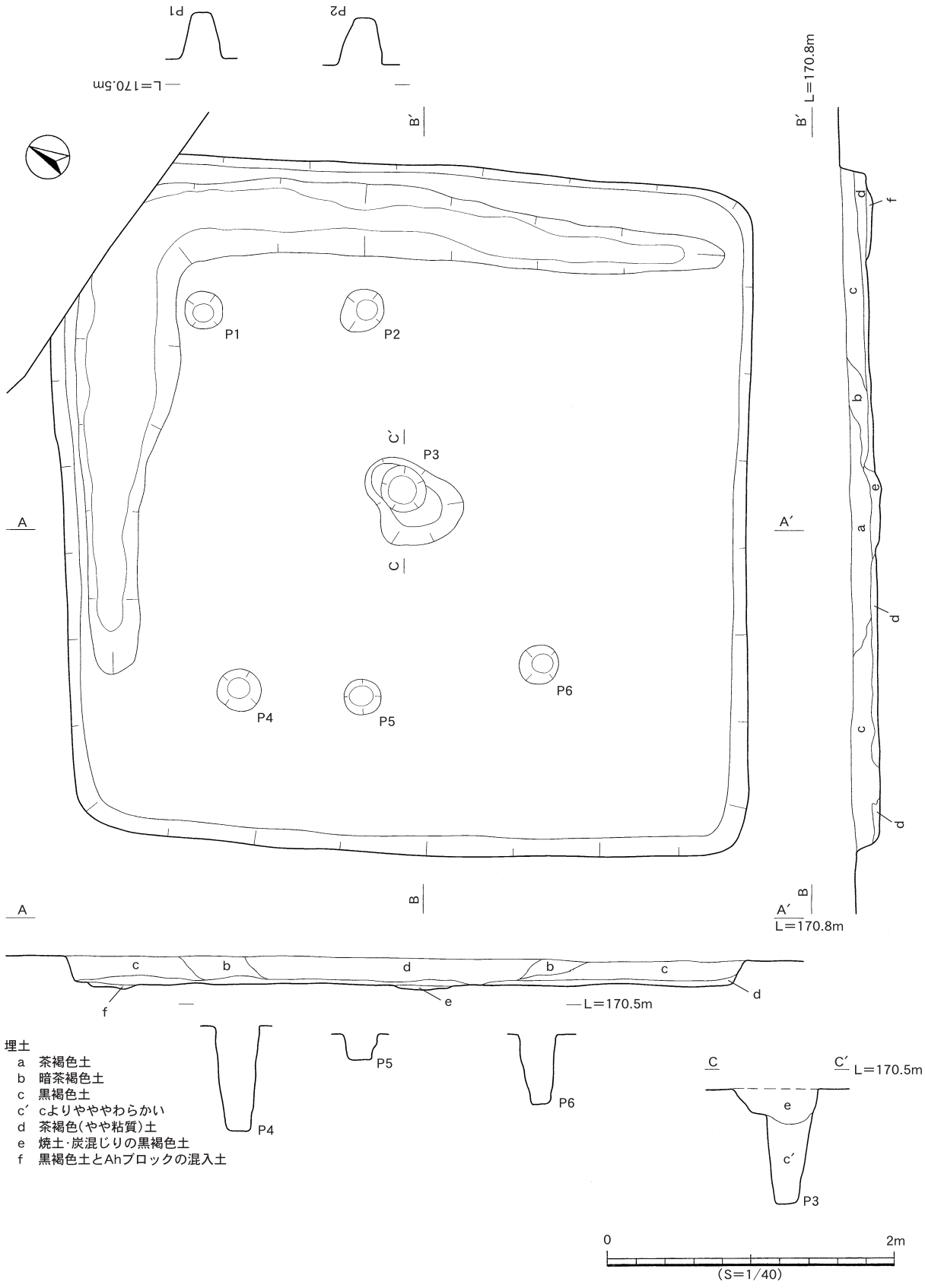
柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去した段階で確認され，結果５基の柱穴が確認された。また，中央には焼土・炭化物が集中する箇所があり，これを掘り下げると柱穴状のプランが検出された。加えて，東と北側の壁沿いに溝状の掘り込みも確認され，これらはＬ字状にめぐっている。この中の埋土は，アカホヤと黒褐色土の混入土で，周辺の竪穴住居跡の貼床に用いられている土でもある。

遺物は，総点で112点が出土しこの内の14点を図化した。755は口縁部が内湾する甕である。760は口縁部が外反し，長い頸部の後に胴部が球状を呈して平底の底部へ至る。赤色顔料が塗布されている資料である。761は口唇端部をわずかに欠損しているがほぼ完全な形で出土した資料である。口縁部はわずかに内湾気味を呈し，頸部で強く屈曲して胴部はソロバン玉状に屈曲する。外面は丁寧に磨かれており赤色顔料が塗布されている。765・766は高坏の脚部である。765は中空の脚から浅く広がるが，766のそれは大きく広がっている。767は完形で出土した須恵器の坏蓋である。天地が逆転した状態で床面から数㎝程度上のレベルで出土した。

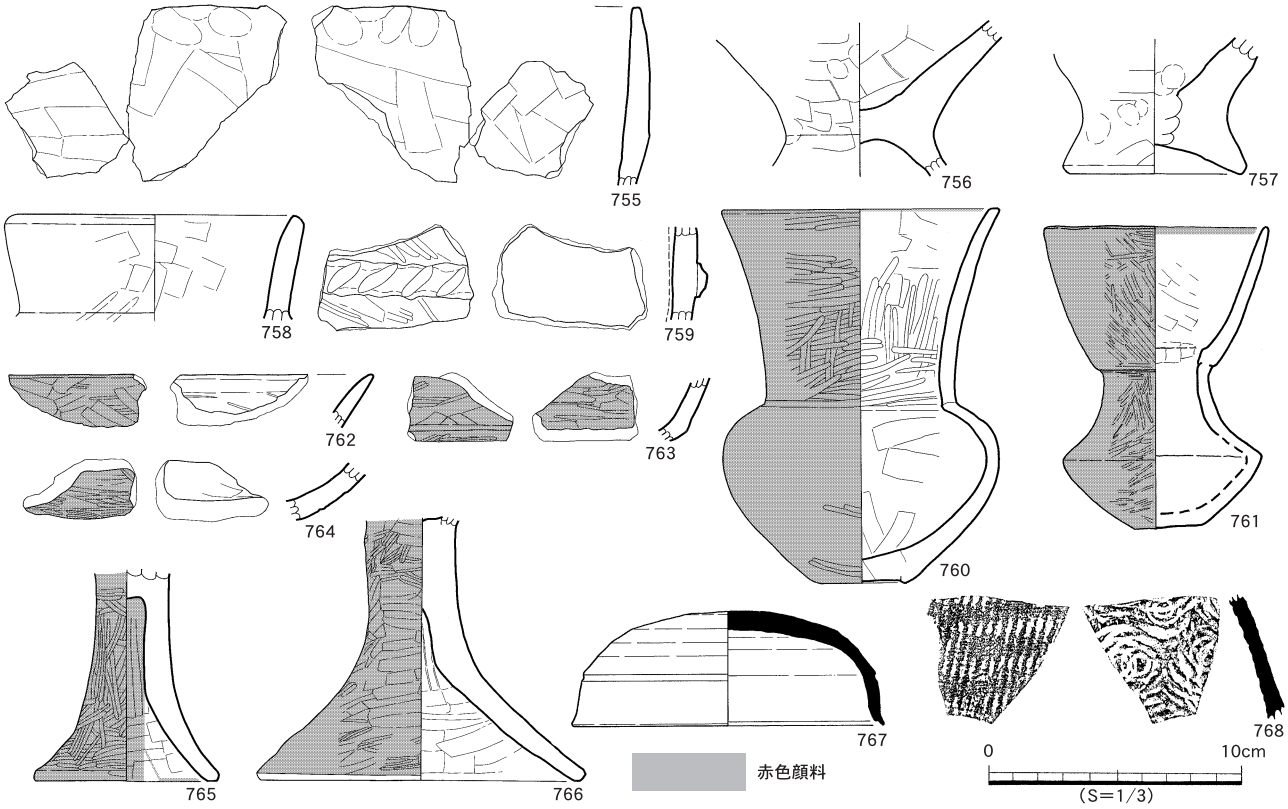


第340図　竪穴住居跡79号遺物出土状況

竪穴住居跡79号



第341図　竪穴住居跡79号



第342図　竪穴住居跡79号出土遺物

竪穴住居跡80号（第343・344図）

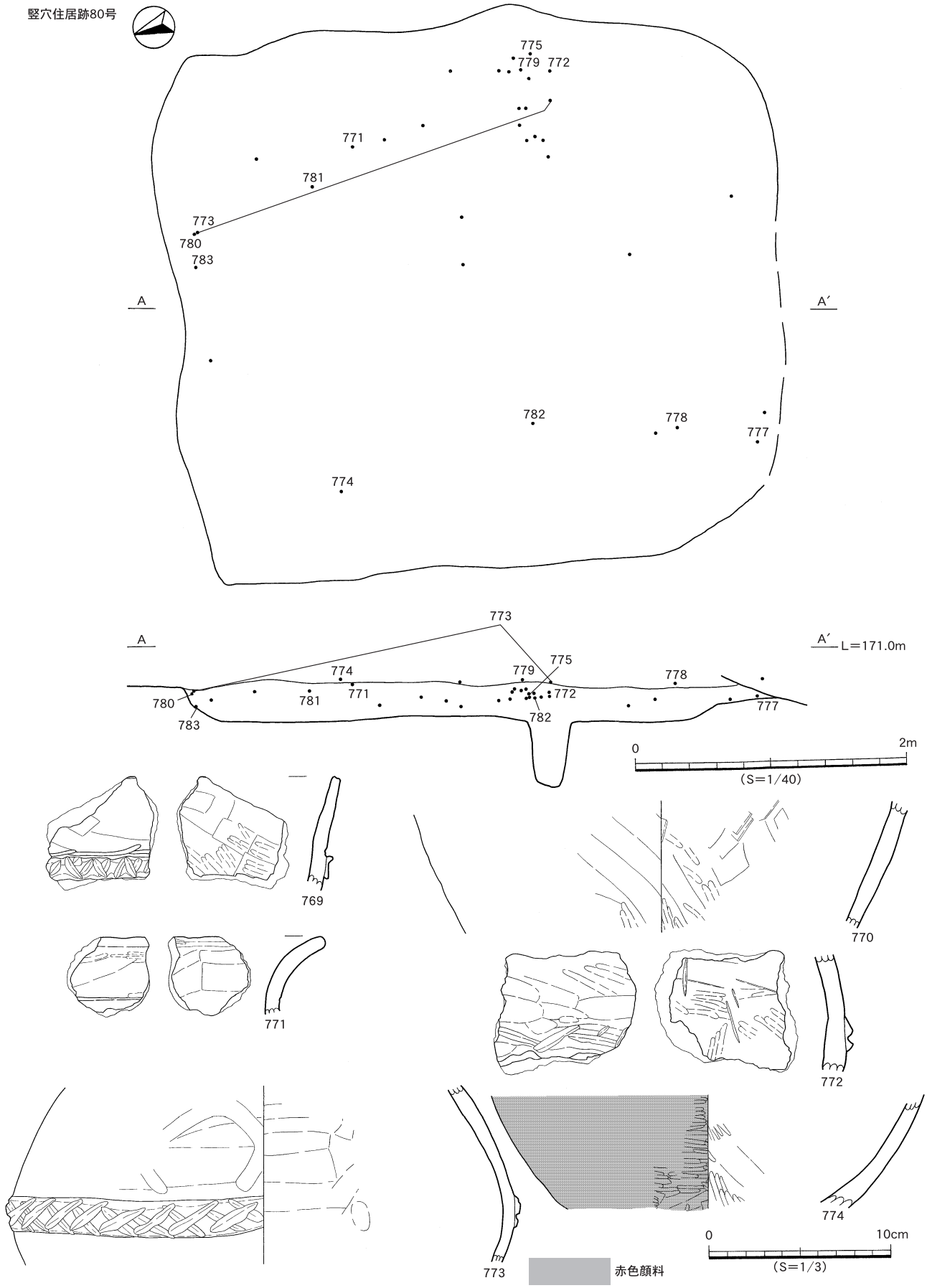
Ｊ・Ｋ－35区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺4.6m，短辺4.1mの隅丸長方形で，南側は近世土坑と切り合い関係にある。

調査は，ほぼ中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，埋土ａ層下部で床面と思われる硬化面を捉えた。

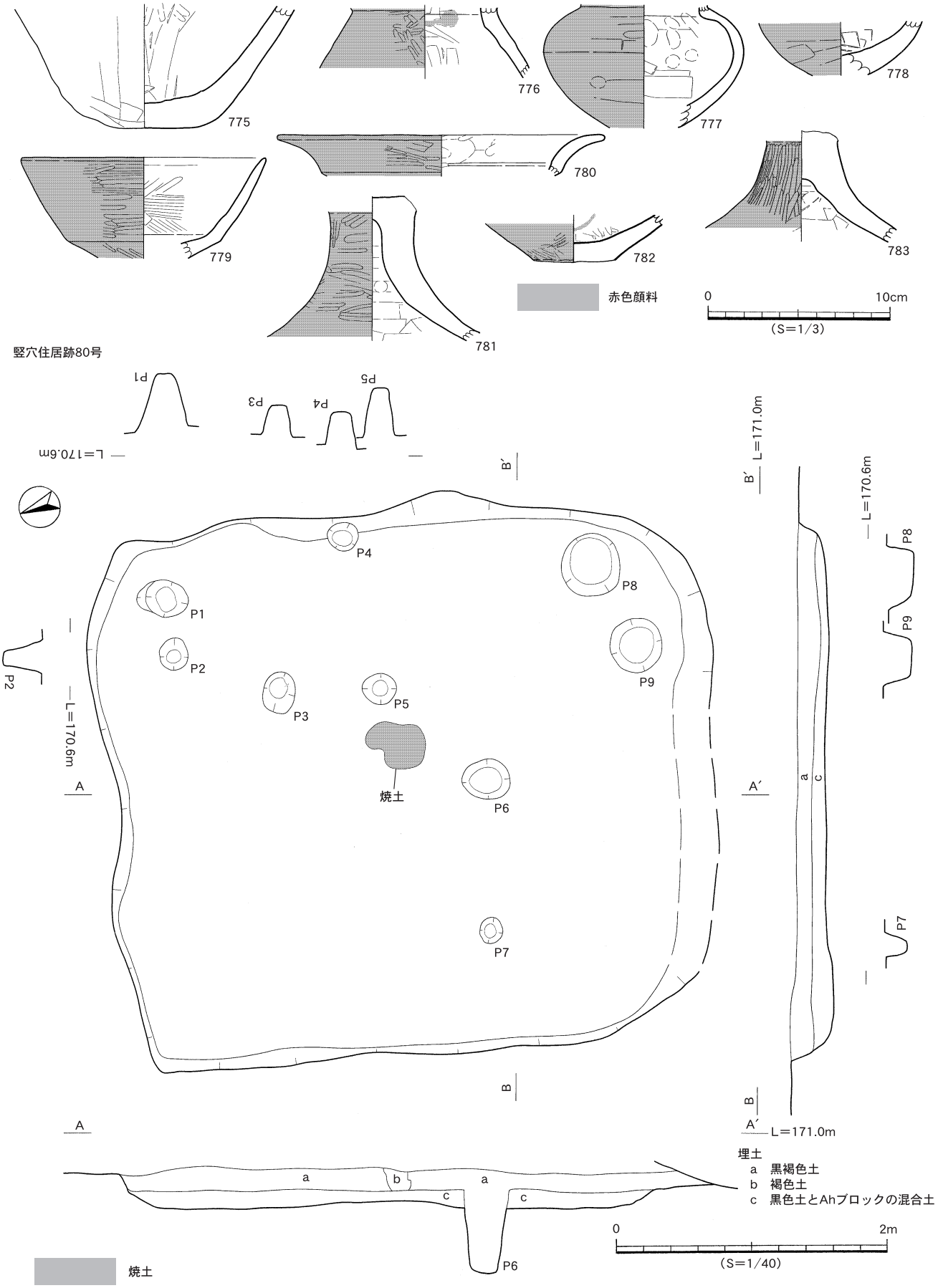
床面中央には焼土の広がりが見られたが掘り込み等は見られなかった。この時，Ｐ６は硬化面を切って検出されており，これ以外の柱穴は等の付帯施設の確認は，硬化面を除去した段階で確認され，Ｐ６の他に８基の柱穴が確認された。遺物は，総点で423点が出土しこの内の15点を図化した。

769は口縁部がわずかに外傾する甕である。胴部には貼付突帯が見られ，格子状にキザミが施される。771は壺の口縁部片である。口縁部が強く外反し，口唇部は丸みを帯びている。772は壺の胴部貼付突帯付近の破片である。773も壺の胴部片である。胴部最大径に貼付突帯が施され，キザミが格子状に施される。この貼付突帯から頸部にかけて，焼成時あるいはそれ以外の要因も考えられるが，格子状に淡く色調の変化が見られる。右の写真がその部分の写真であるが，これ以外にも同一個体と思われる破片に同様の色調の変化が見られた。775は壺の底部である。776～778は坩の破片である。779は口縁部が直線的に外傾し，胴部下半で強く屈曲する。780は口縁部が強く外反し，胴部で屈曲する高坏である。高坏の脚部の可能性も考えられたが，内面の調整が丁寧であることなどから，口縁部を想定して図化した。781・783は高坏の脚部である。両者とも坏部との接合面が面取りされている。782は脚との接合面を擦るなどして面を形成し，あたかも平底であるかのように再加工を施している。





第343図　竪穴住居跡80号・出土遺物①



第344図　竪穴住居跡80号・出土遺物②

竪穴住居跡81号（第345図）

Ｋ－36区においてⅥ層上面で検出された。

検出時のプランは，長辺５ｍ，短辺1.4ｍで，近世の溝状遺構で大きく削平されているが残された一辺より５ｍ程度の方形であったと思われる。

調査は，溝に直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面までは単一層で約20㎝に満たない。床面には硬化面や貼床等は見られず，柱穴等の付帯施設の確認は，床面を除去しながら確認していったが，柱穴は確認されなかった。炉・焼土や，炭化物の広がりも見られない。遺物は，総点で59点が出土しこの内４点を図化した。784は天地に不安が残るが甕の脚と思われる。

竪穴住居跡82号（第346・347図）

Ｊ－36区においてⅥ層下面からⅦ層上面で検出された。

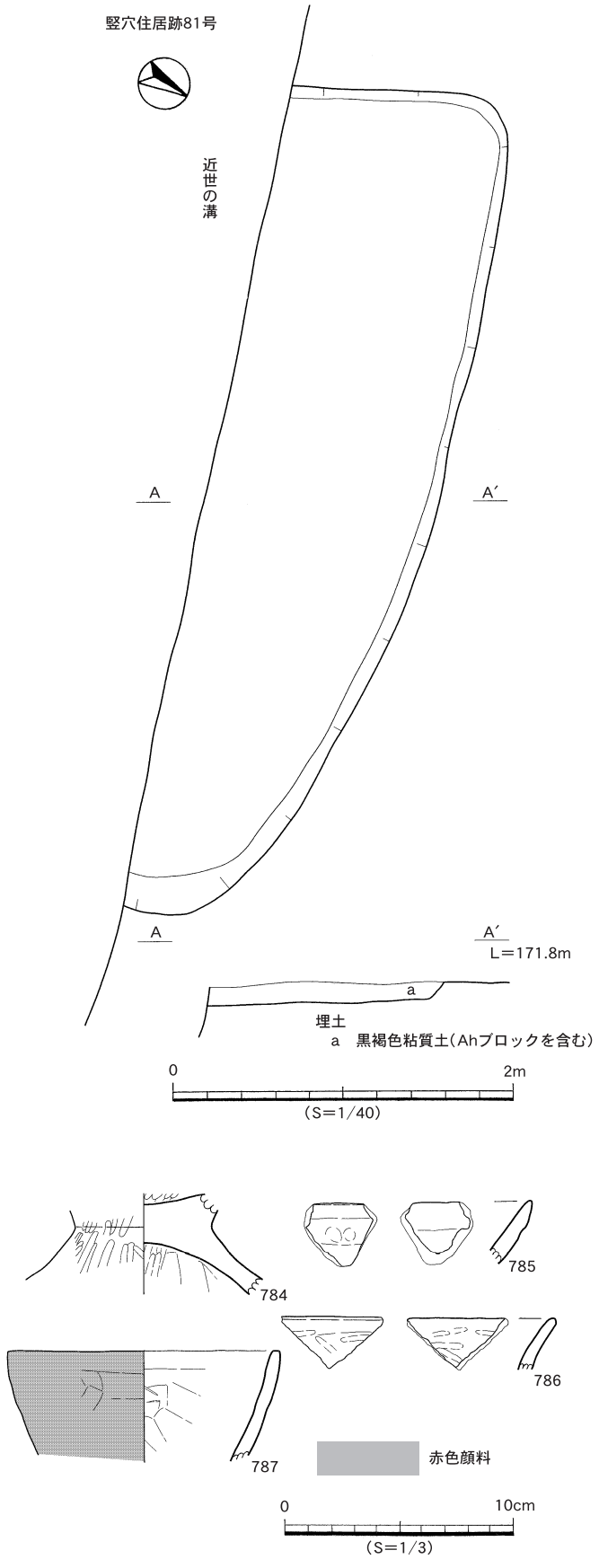
検出時のプランは，長辺4.5m，短辺2.5mの隅丸長方形で，東側は道路により削平を受ける。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。中央付近には硬化面が見られ，柱穴は床面を20㎝近く掘り下げたところ１基が検出された。遺物は，総点で381点が出土しこの内の14点を図化した。788は口縁部がわずかに内湾する甕である。793は高坏の坏部である。口縁部は直線的だが下位でわずかに膨らんで段を有する。794は口縁部が外反し，碗状にすぼまって脚部へと至る。801は土製品である。

竪穴住居跡83号（第348・349図）

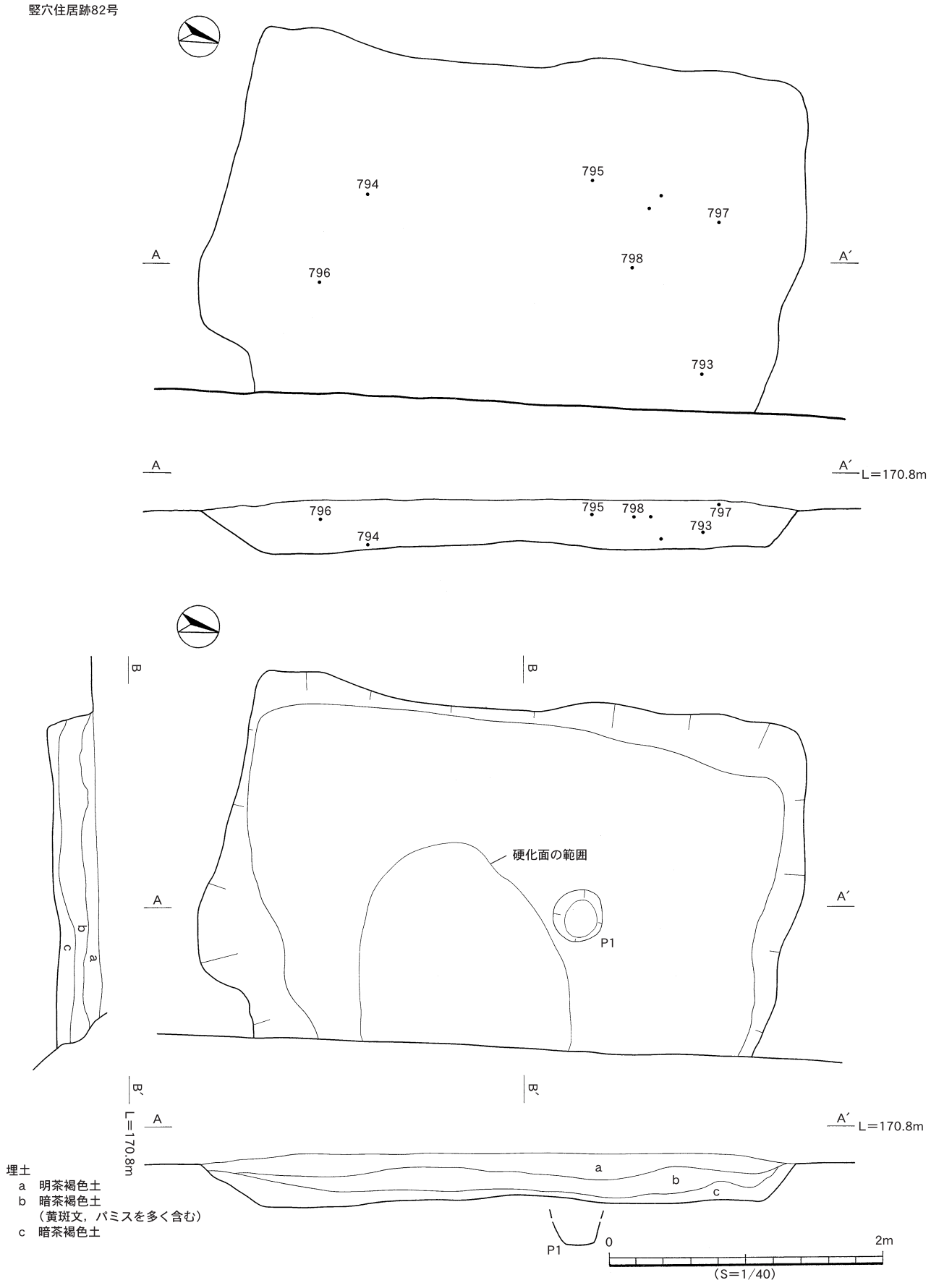
羽月川横の農道により，プランの半分以上が削平を受けていた。残されたプランは北西のコーナー部分を中心とした三角形状である。

Ｊ－40区においてⅥ層上面で検出された。調査は，農道との境をベルトと見なし，これに直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。埋土は単一層で，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。柱穴などの付帯施設の確認は，床面を除去しながら確認したが，柱穴等はが確認されなかった。遺物は，総点で164点が出土しこの内の８点を図化した。802は口縁部が内湾する甕である。胴部には薄く貼付突帯が貼付され，キザミが施される。804は，直線的な坩の口縁部である。805は高坏の脚部であるが，坏部との接合面を面取りしている。



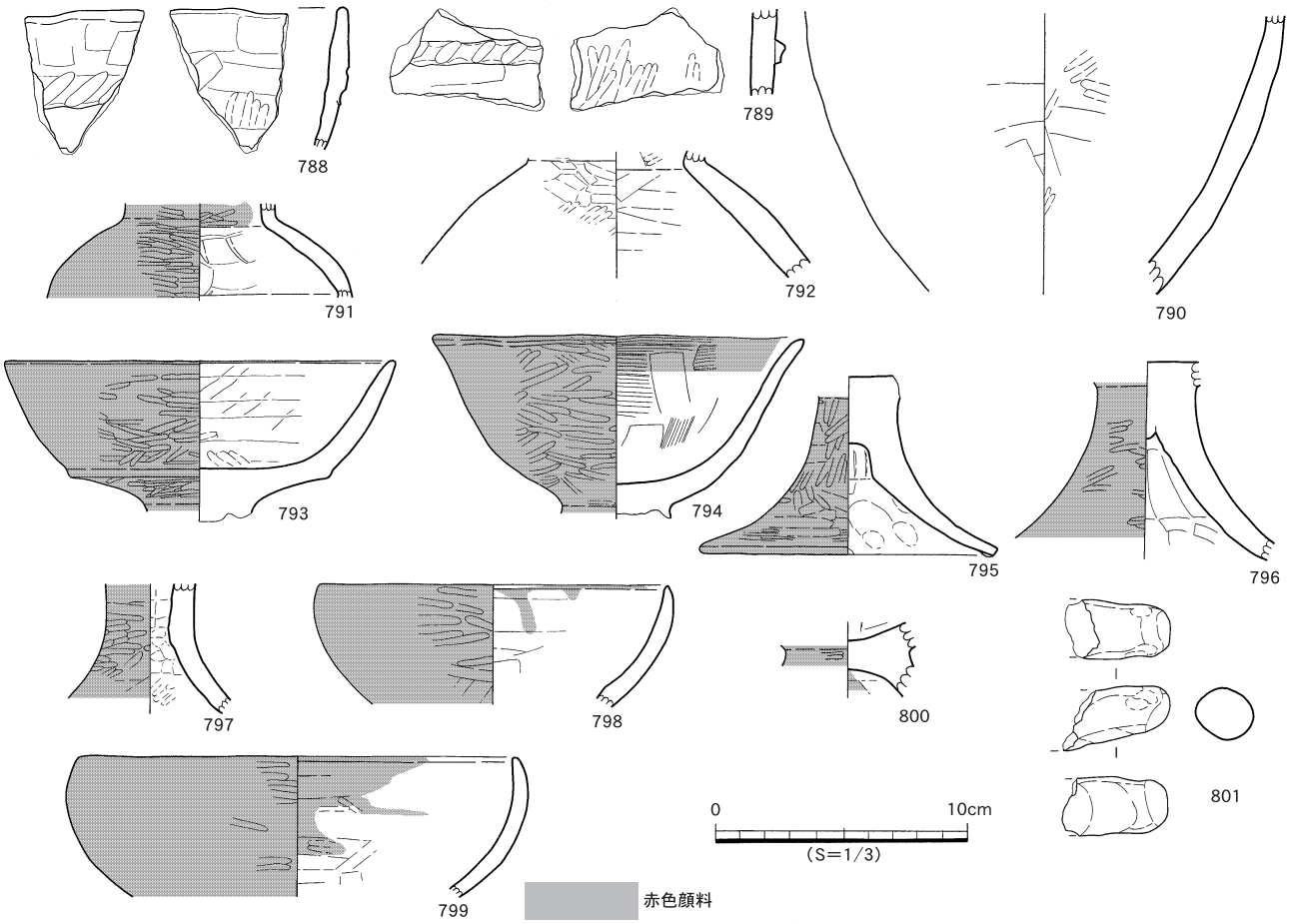
第345図　竪穴住居跡81号・出土遺物

竪穴住居跡82号

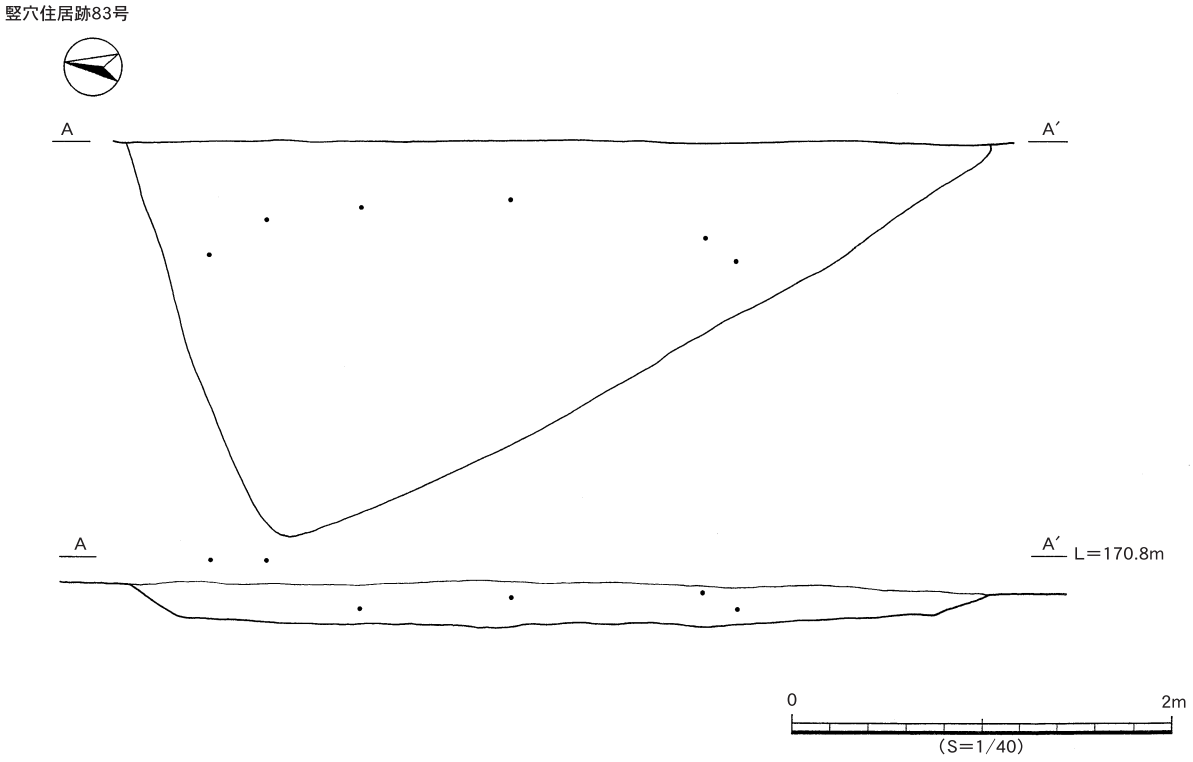


埋土
a　明茶褐色土
b　暗茶褐色土
（黄斑文，パミスを多く含む）
c　暗茶褐色土

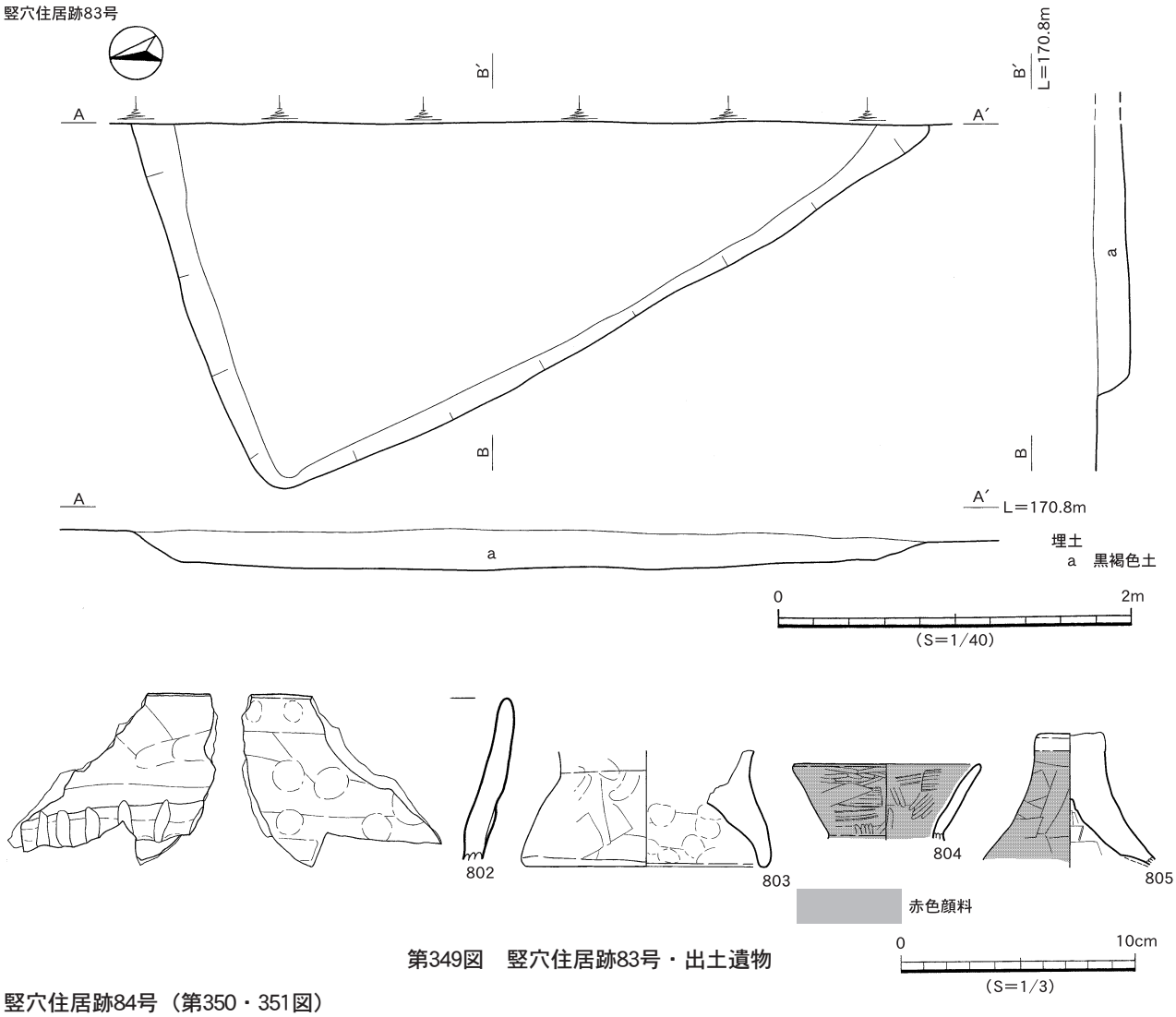
第346図　竪穴住居跡82号



第347図　竪穴住居跡82号出土遺物



第348図　竪穴住居跡83号遺物出土状況



第349図　竪穴住居跡83号・出土遺物

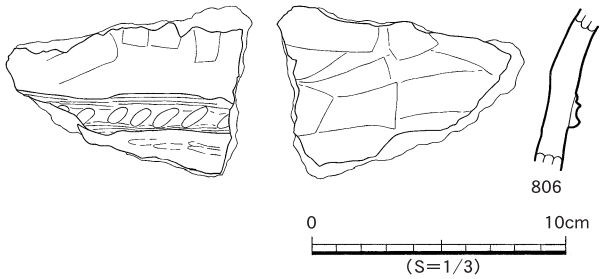
竪穴住居跡84号（第350・351図）

G－36・37区においてⅦ層で検出された。周辺は近世による削平を受けており，検出時のプランは，長辺4.4m，短辺4.2mの隅丸方形に近い円形であるが，南側は近世土坑により大きく削平される。

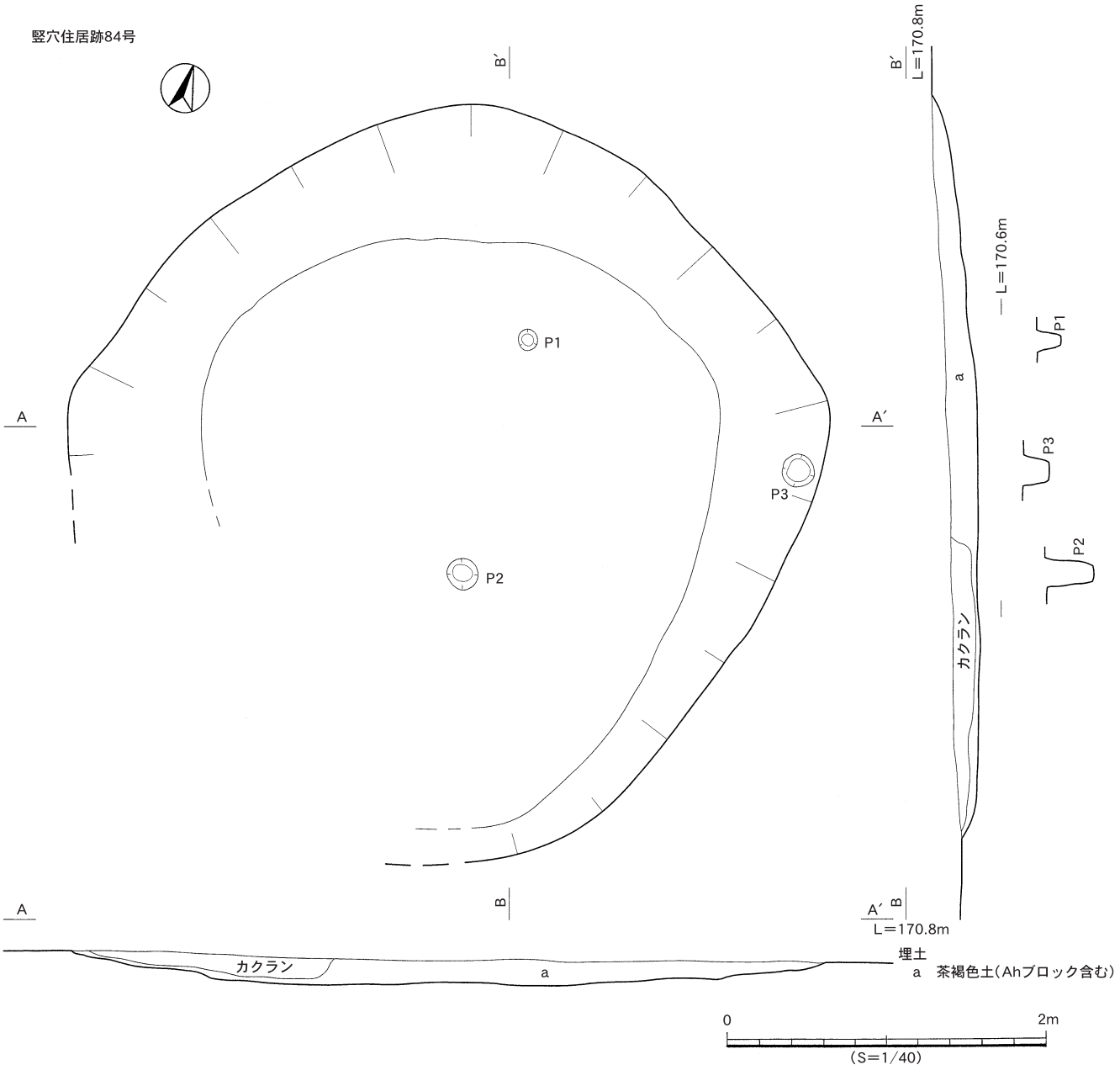
調査は，中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。

壁面の立ち上がりは緩やかで，床面と壁面との境ははっきりとしない部分も多い。この時点で埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出していった。床面には，硬化面や硬質土等の確認は出来なかった。柱穴などの付帯施設は，床面を除去した段階で3基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは掴めなかった。

遺物は，総点で1点が出土しこれを図化した。



第350図　竪穴住居跡84号出土遺物



第351図　竪穴住居跡84号

竪穴住居跡85号（第352～355図）

C・D－35・36区においてⅥ層上面で検出された。

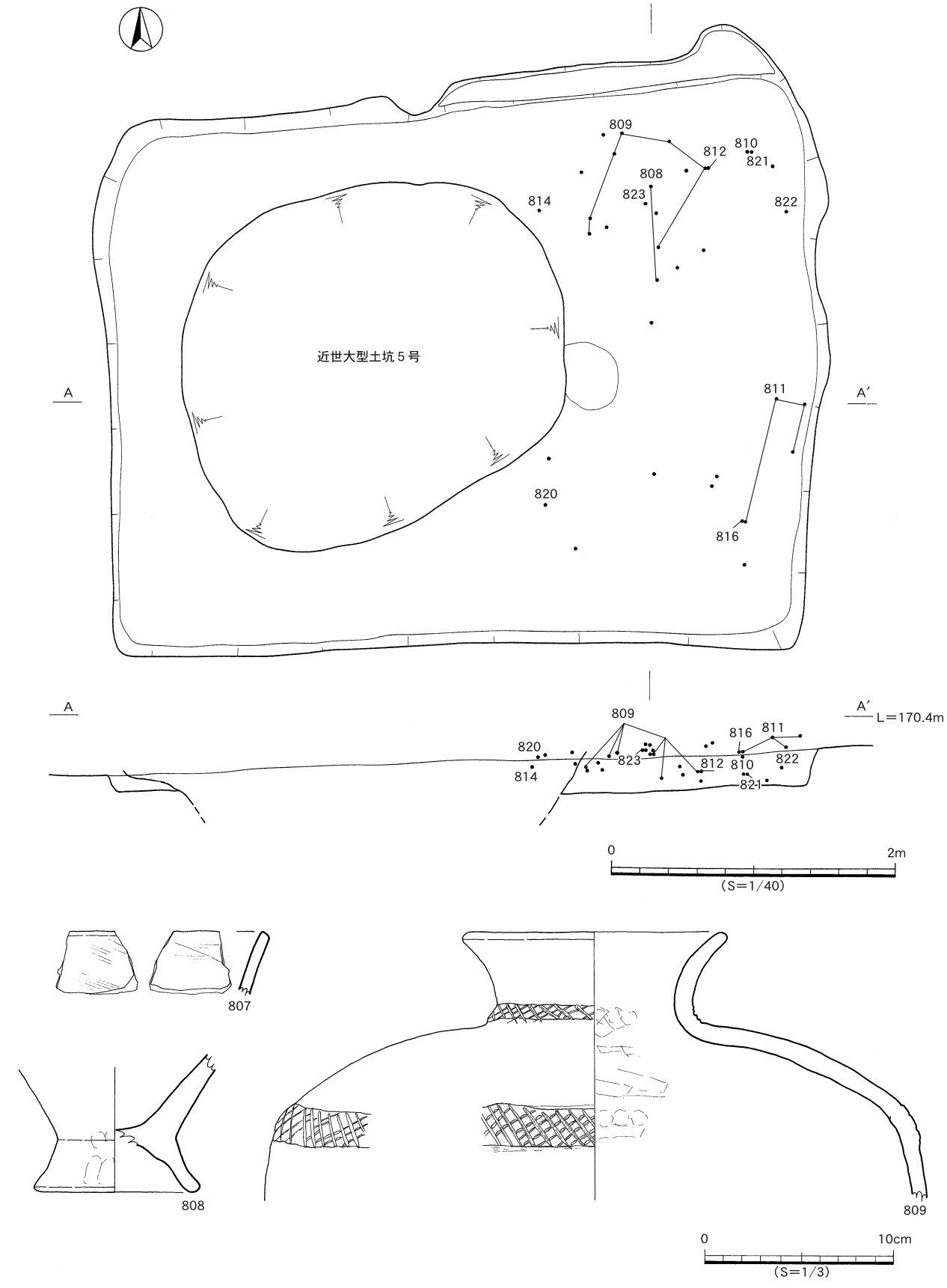
検出時のプランは，長辺5.1m，短辺４mの隅丸長方形で，中央に近世の大型土坑による攪乱が入る。このため，調査は，長軸中央と近世土坑とを通るベルトとこれに直交する２本のベルトの３本を設定して掘り下げを開始した。北東部分には，検出当初から大型の壺形土器が出土しており，この周辺では，この輪郭を検出しながら床面検出を行った。埋土は大きな変化はなく，アカホヤ下のⅦ層が床面であった。

なお，床面には，中央付近に焼土混じりの炭化物集中が見られた。柱穴などの付帯施設の確認は，この床面を除去しながら確認を進めたが，検出できなかった。

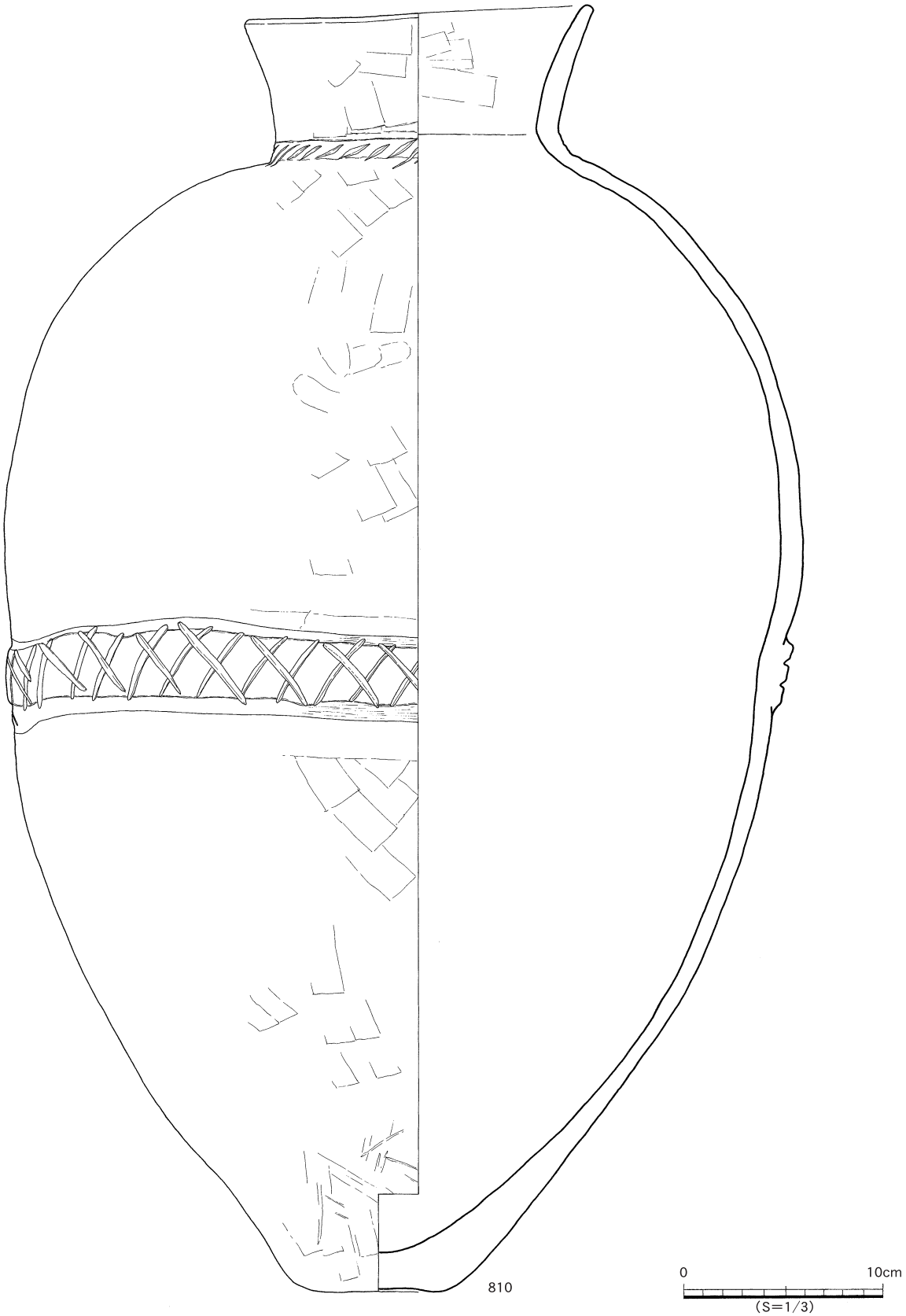
遺物は，総点で282点が出土しこの内の17点を図化した。807は甕の口縁部片である。809は口縁部がわずかに外反し，頸部には薄く突帯を貼り付けて格子状にキザミを施す。頸部から胴部へは急激に膨らみ，ここにも薄い貼付突帯を貼付して格子状のキザミを施す。810は検出当初から確認されていた大型の壺である。口縁部は短く直線的に外傾し，頸部には薄く突帯が貼り付きキザミが入る。胴部は大きく膨らむが長胴で，最大径より下方に幅広の突帯が貼付される。突帯には格子状にキザミが入る。底部はやや不安定ながらも平坦面を有する。復元高は64.5㎝あり，当遺跡の復元された資料の中で，最も大型の部類に属する。

813は，口縁部が外傾し，頸部に突帯がめぐる。胴部

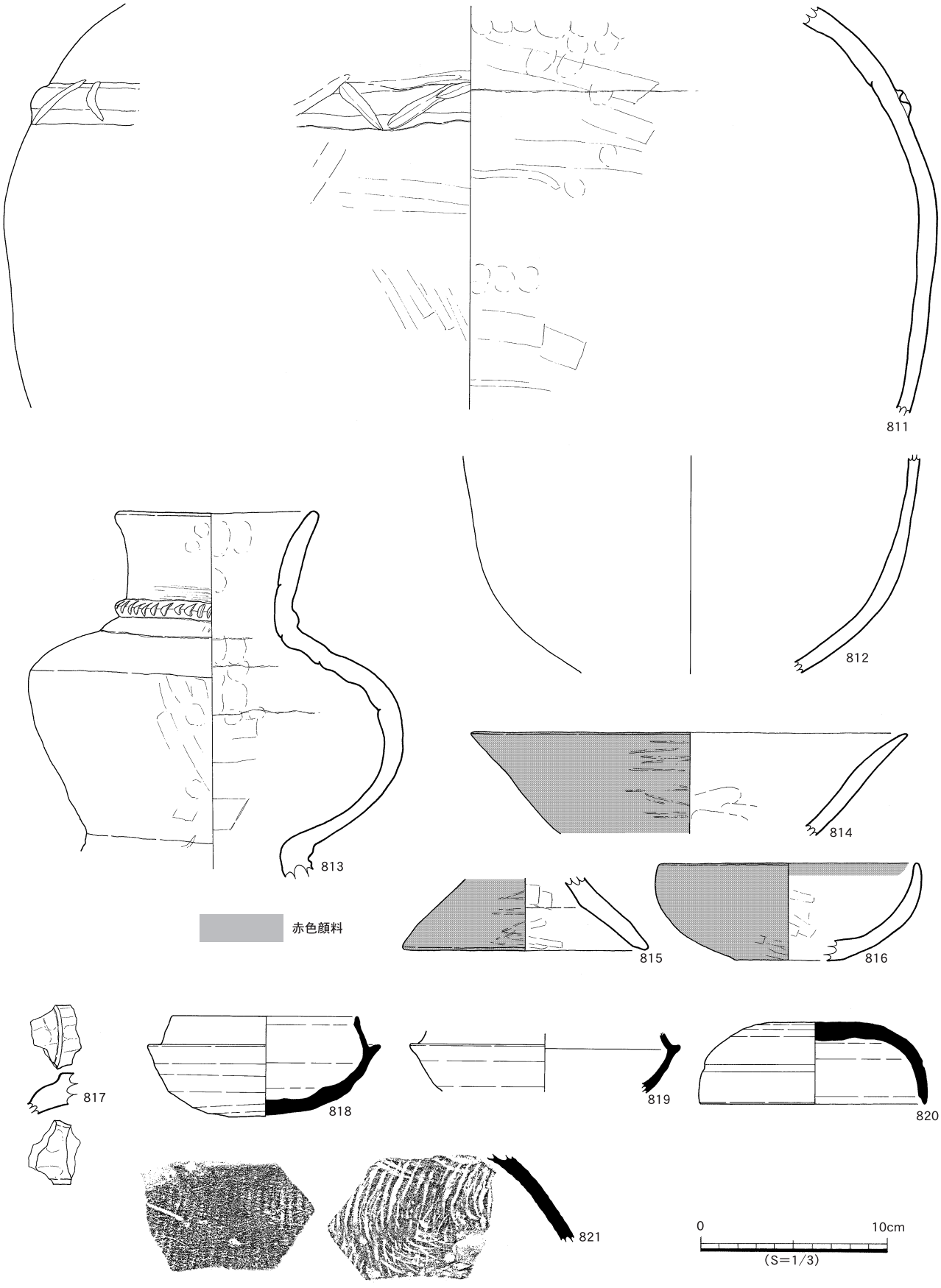
竪穴住居跡85号



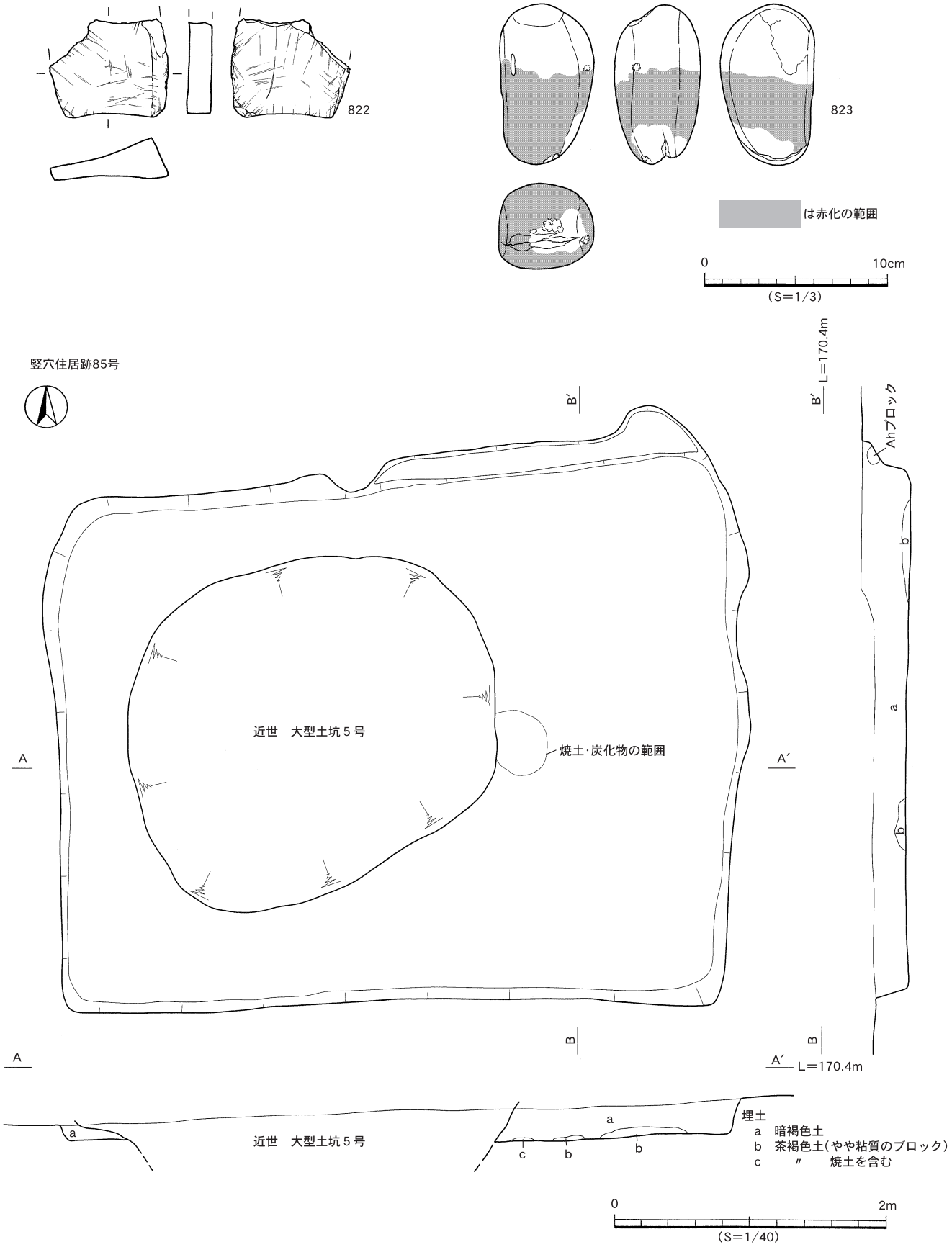
第352図　竪穴住居跡85号・出土遺物①



第353図　竪穴住居跡85号出土遺物②



第354図　竪穴住居跡85号出土遺物③



第355図　竪穴住居跡85号・出土遺物④

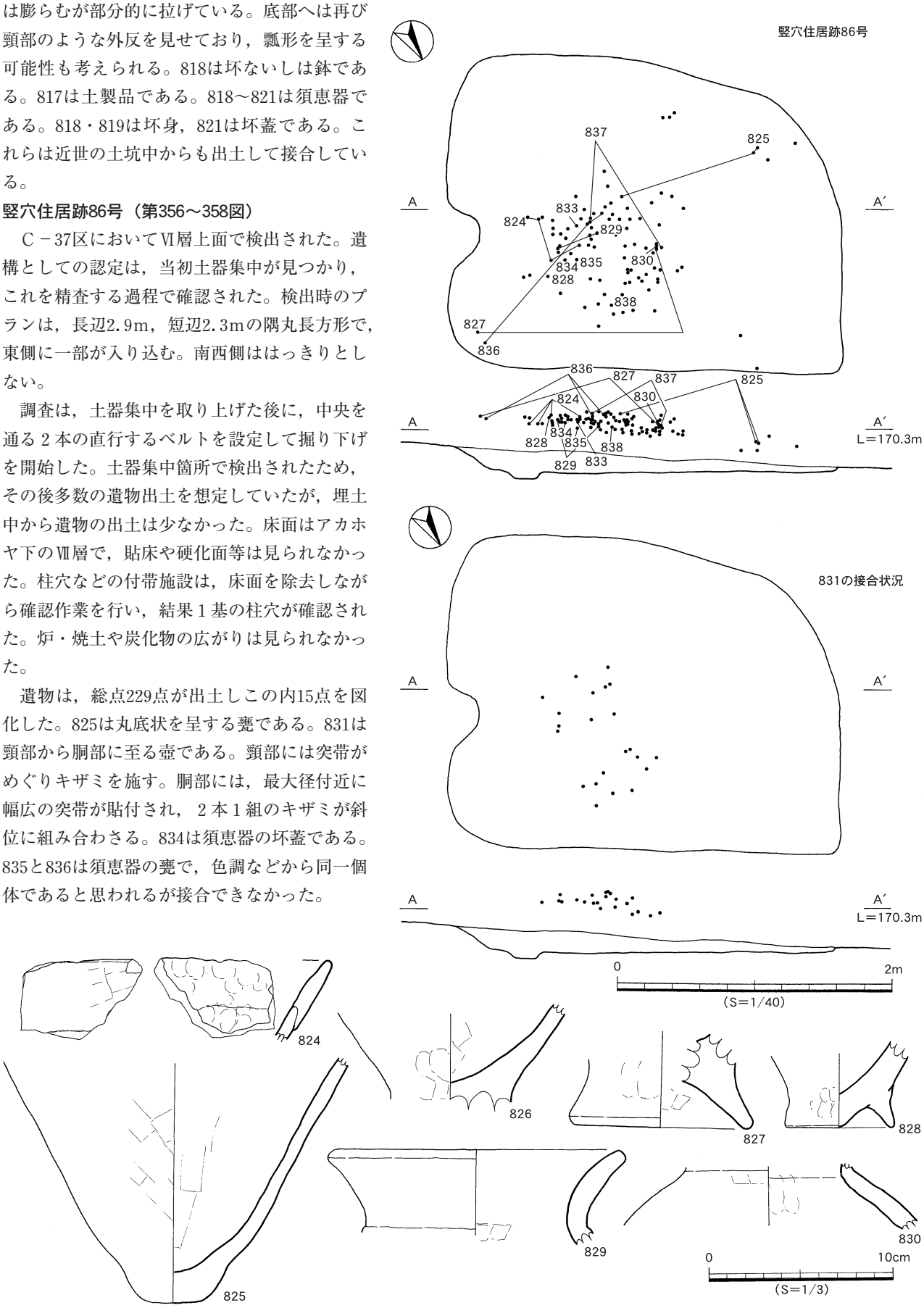
は膨らむが部分的に拉げている。底部へは再び頸部のような外反を見せており，瓢形を呈する可能性も考えられる。818は坏ないしは鉢である。817は土製品である。818～821は須恵器である。818・819は坏身，821は坏蓋である。これらは近世の土坑中からも出土して接合している。

竪穴住居跡86号（第356～358図）

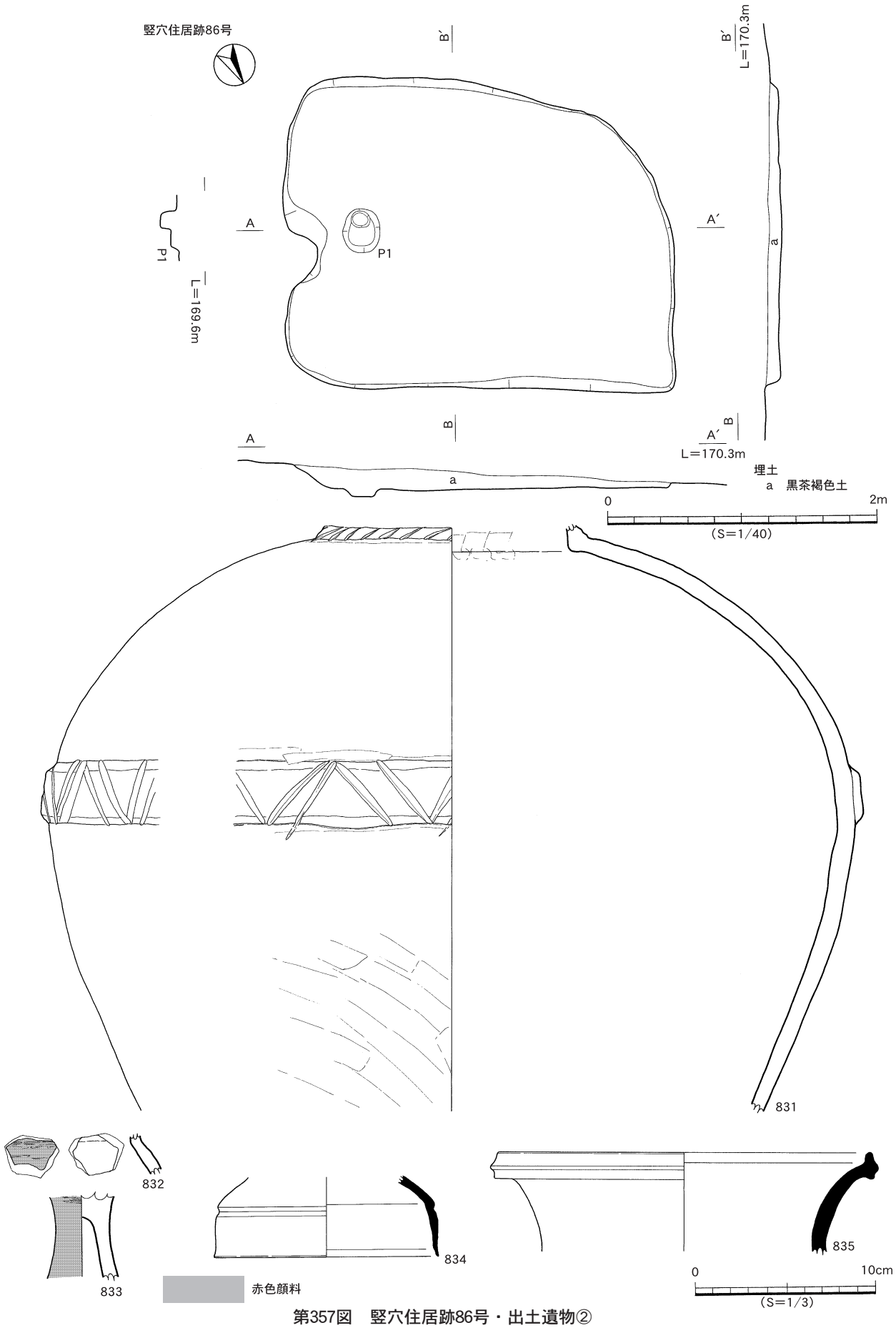
Ｃ－37区においてⅥ層上面で検出された。遺構としての認定は，当初土器集中が見つかり，これを精査する過程で確認された。検出時のプランは，長辺2.9m，短辺2.3mの隅丸長方形で，東側に一部が入り込む。南西側ははっきりとしない。

調査は，土器集中を取り上げた後に，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。土器集中箇所で検出されたため，その後多数の遺物出土を想定していたが，埋土中から遺物の出土は少なかった。床面はアカホヤ下のⅦ層で，貼床や硬化面等は見られなかった。柱穴などの付帯施設は，床面を除去しながら確認作業を行い，結果１基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られなかった。

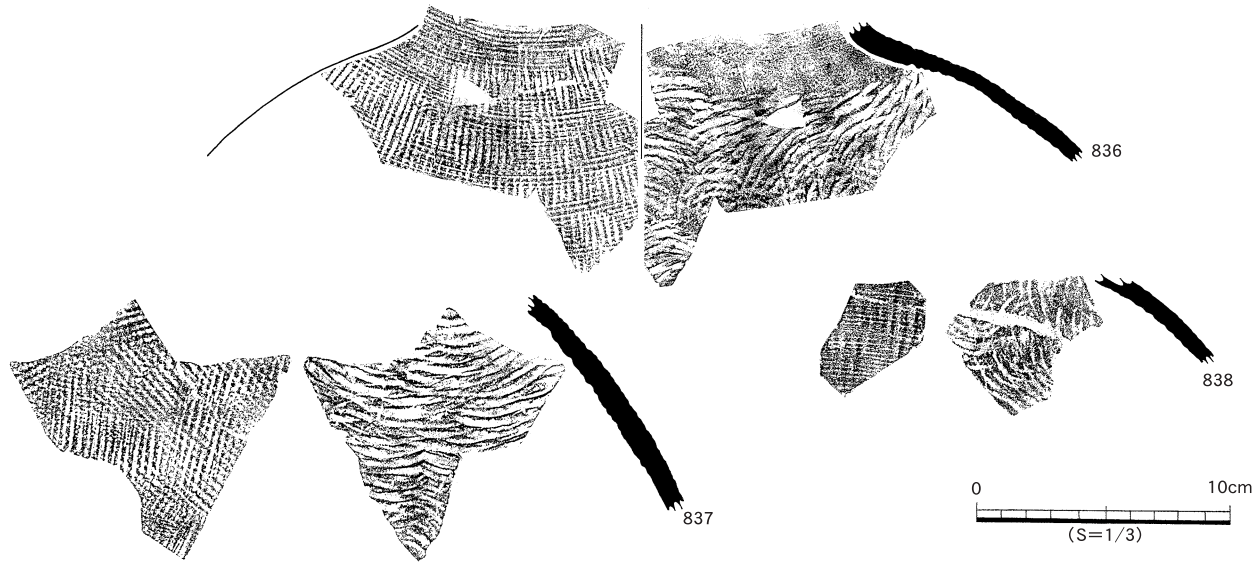
遺物は，総点229点が出土しこの内15点を図化した。825は丸底状を呈する甕である。831は頸部から胴部に至る壺である。頸部には突帯がめぐりキザミを施す。胴部には，最大径付近に幅広の突帯が貼付され，２本１組のキザミが斜位に組み合わさる。834は須恵器の坏蓋である。835と836は須恵器の甕で，色調などから同一個体であると思われるが接合できなかった。



第356図　竪穴住居跡86号・出土遺物①



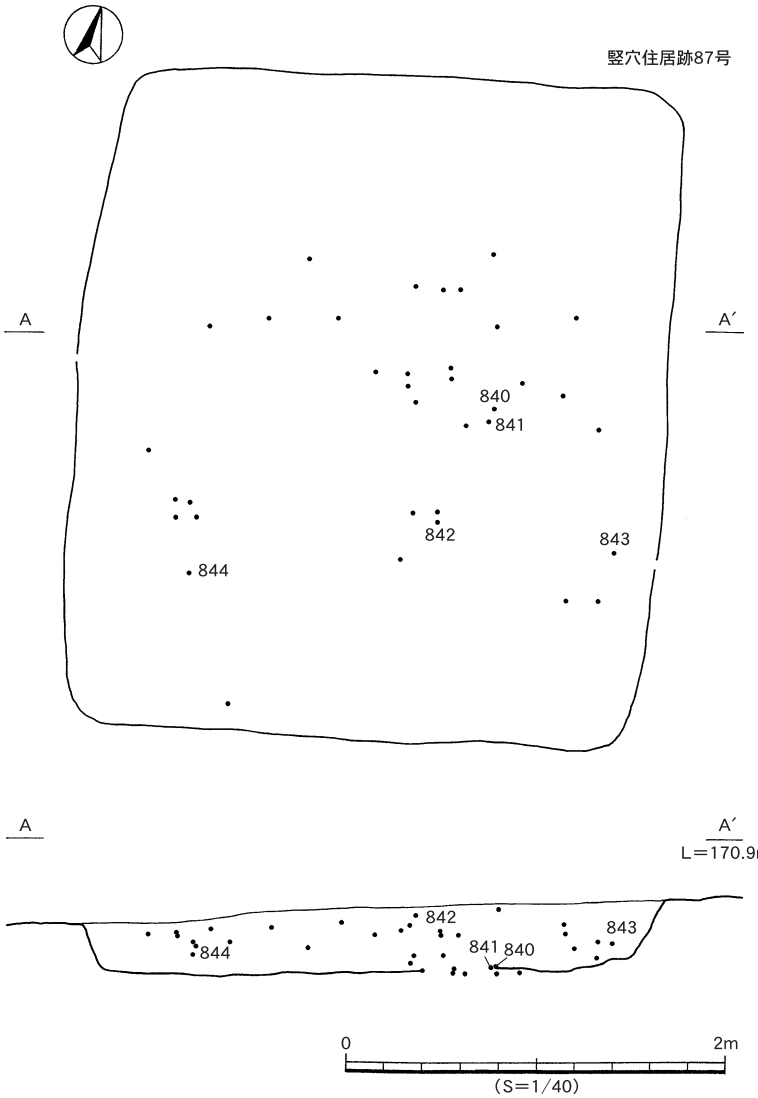
第357図　竪穴住居跡86号・出土遺物②



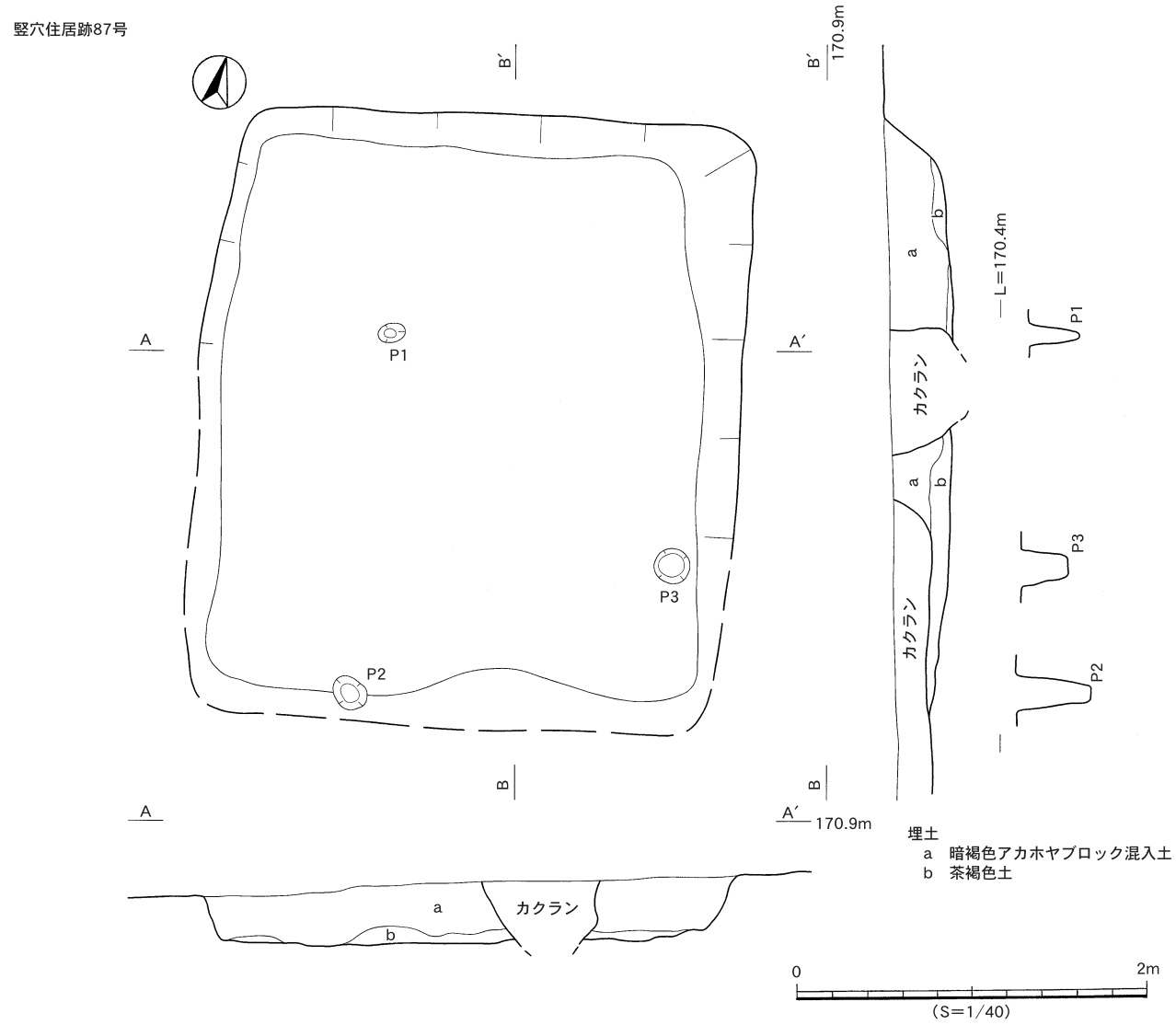
第358図　竪穴住居跡86号出土遺物③

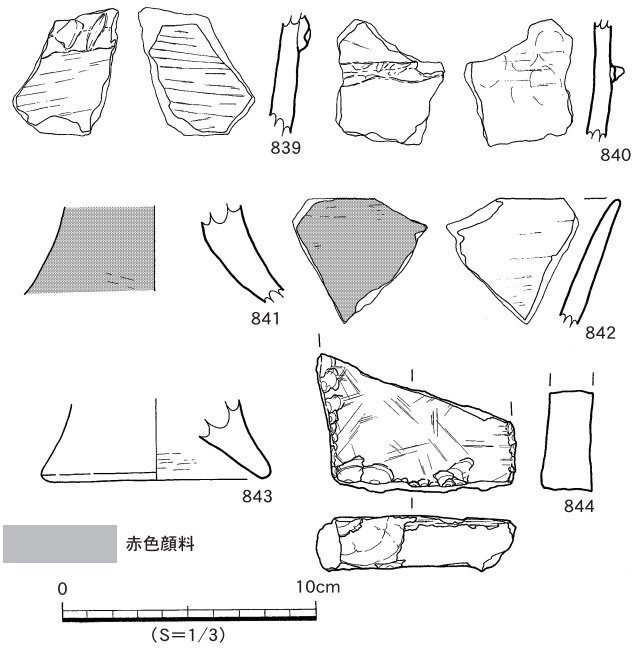
竪穴住居跡87号（第359・360図）

D－39区においてⅥ層上面で検出された。南半分の上面が近世の攪乱で削平されているなど正確なプランは掴めなかったが，長辺3.6m，短辺3.2mの概ね隅丸長方形のプランが想定された。調査は，攪乱を受けていない部分で残存状況の良い部分で2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。柱穴などの付帯施設は，床面を除去した段階で確認され，結果3基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは確認できなかった。遺物は，総点で61点が出土しこの内の6点を図化した。840は甕の突帯部分の破片である。突帯を上下方向からつまむ手法は，甕Ⅲ類やⅣ類など口縁部が直行ないしはやや内湾するタイプに見られるものである。



第359図　竪穴住居跡87号遺物出土状況



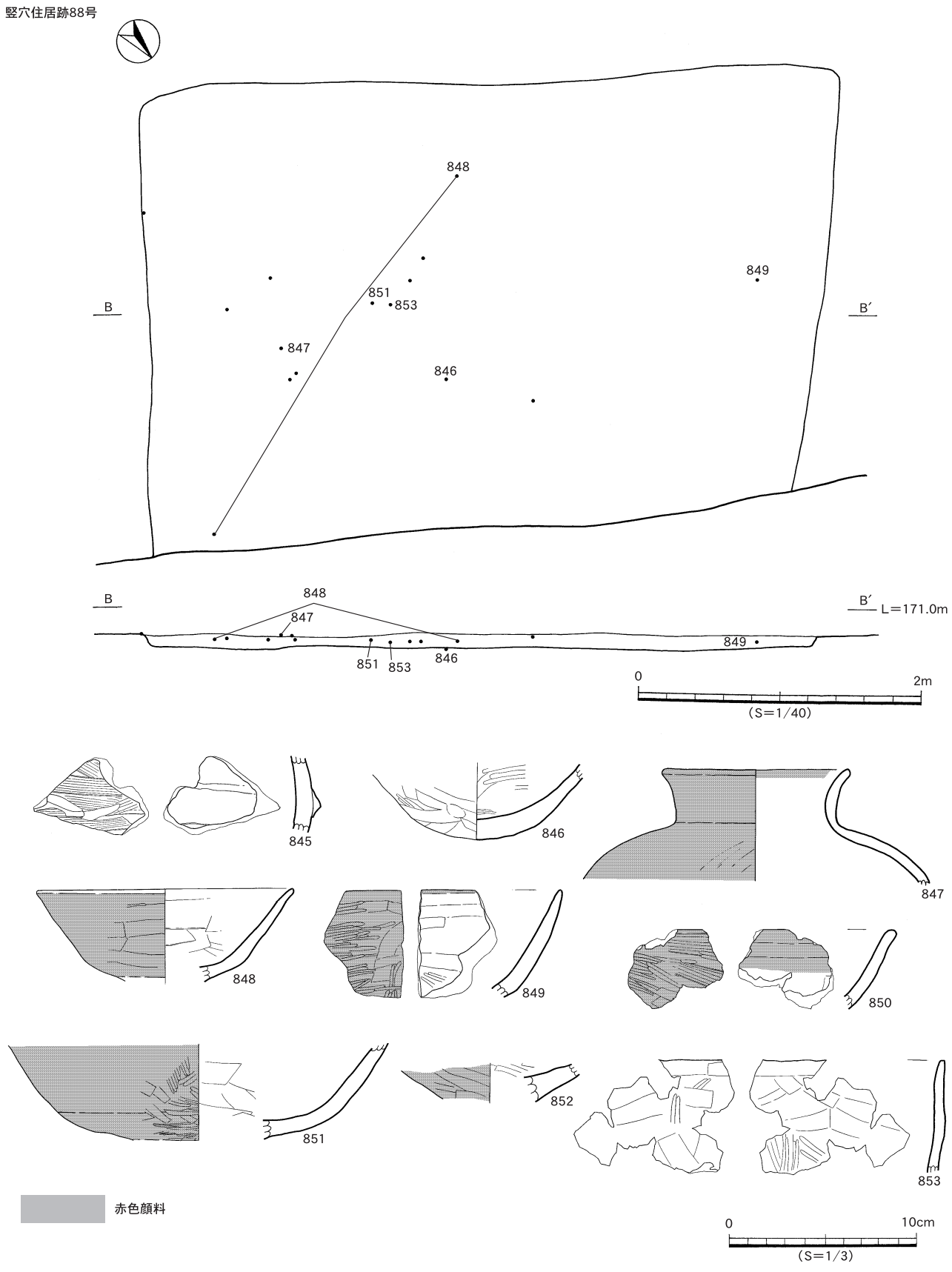


竪穴住居跡88号（第361・362図）

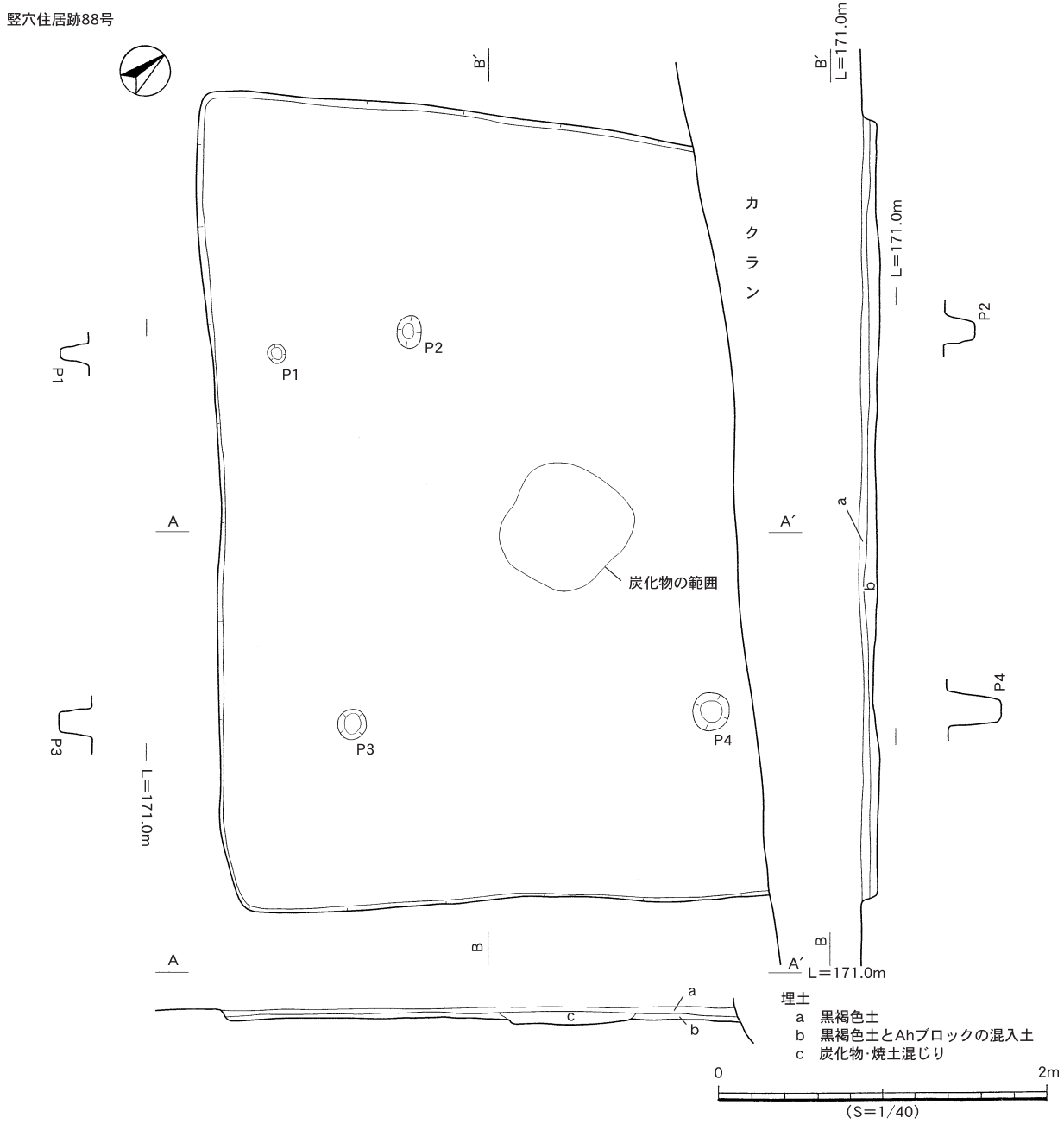
G－40区においてⅥ層上面で検出された。周辺は近世の削平や攪乱等を激しく受け，北側のプランは消失していた。検出時のプランは，長辺4.8m，短辺3.2mの隅丸長方形。調査は，残存する部分での中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。上面が削平されていることもあり，検出面から床面までは10㎝に満たない。中央に焼土と炭化物が集中する範囲が見られ，これが浅い土坑状を呈している。

柱穴などの付帯施設は，床面を除去しながら確認作業を進め，結果4基の柱穴が確認された。遺物は，総点で137点が出土しこの内の9点を図化した。

第360図　竪穴住居跡87号・出土遺物



第361図　竪穴住居跡88号・出土遺物



第362図　竪穴住居跡88号

竪穴住居跡89号（第363図）

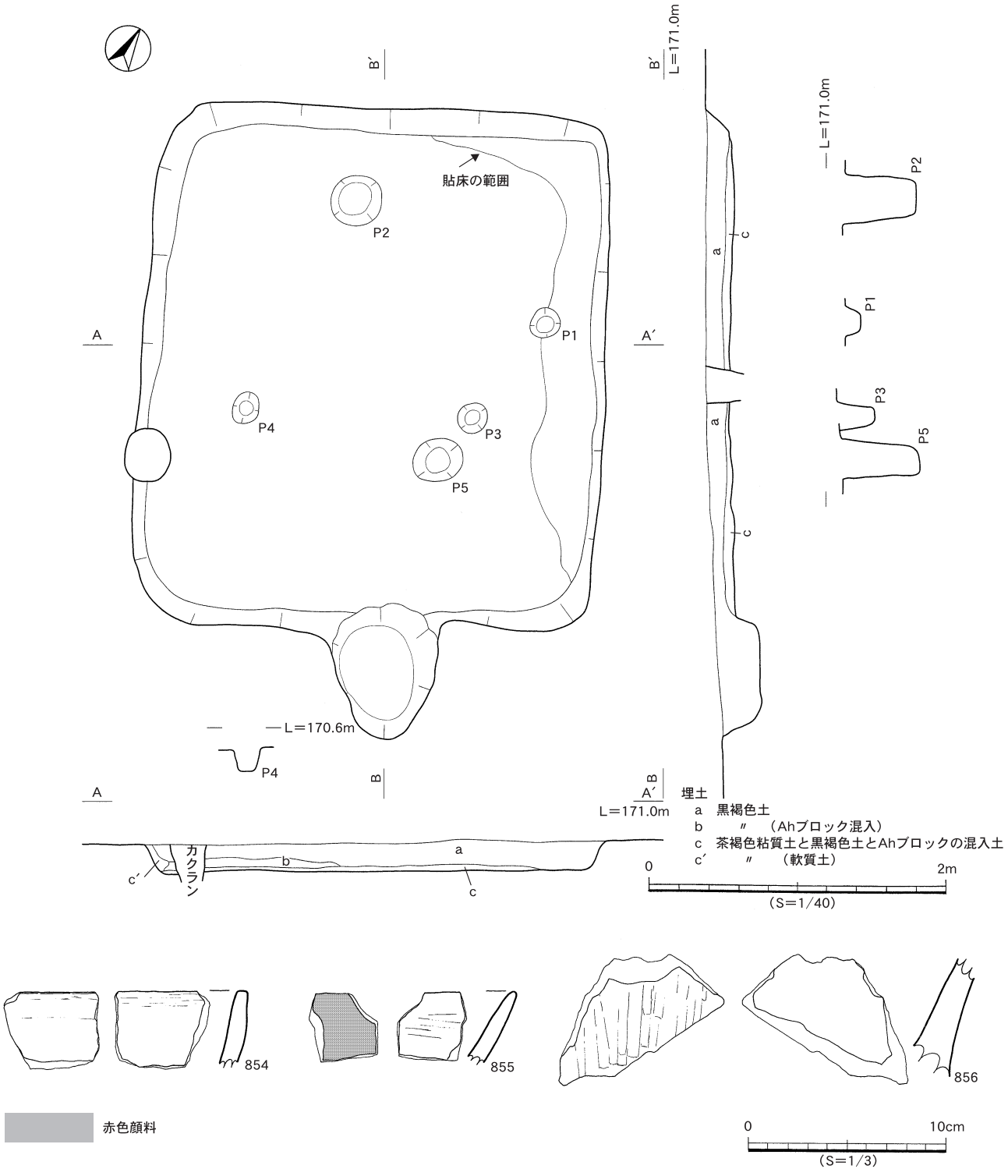
Ｆ－41区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺3.6m，短辺3.2mの隅丸長方形で，南側に土坑状の張り出し部を持つ。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。住居中央には塩化ビニールの管が東西方向に入っており，これを除去しながら全体的なプラン検出に努めた。

床面は，アカホヤと黒褐色土の混入土上面にわずかではあるが，硬化が確認されたため，これを床面と判断した。柱穴などの付帯施設は，硬質土を除去した段階で５基の柱穴が確認された。

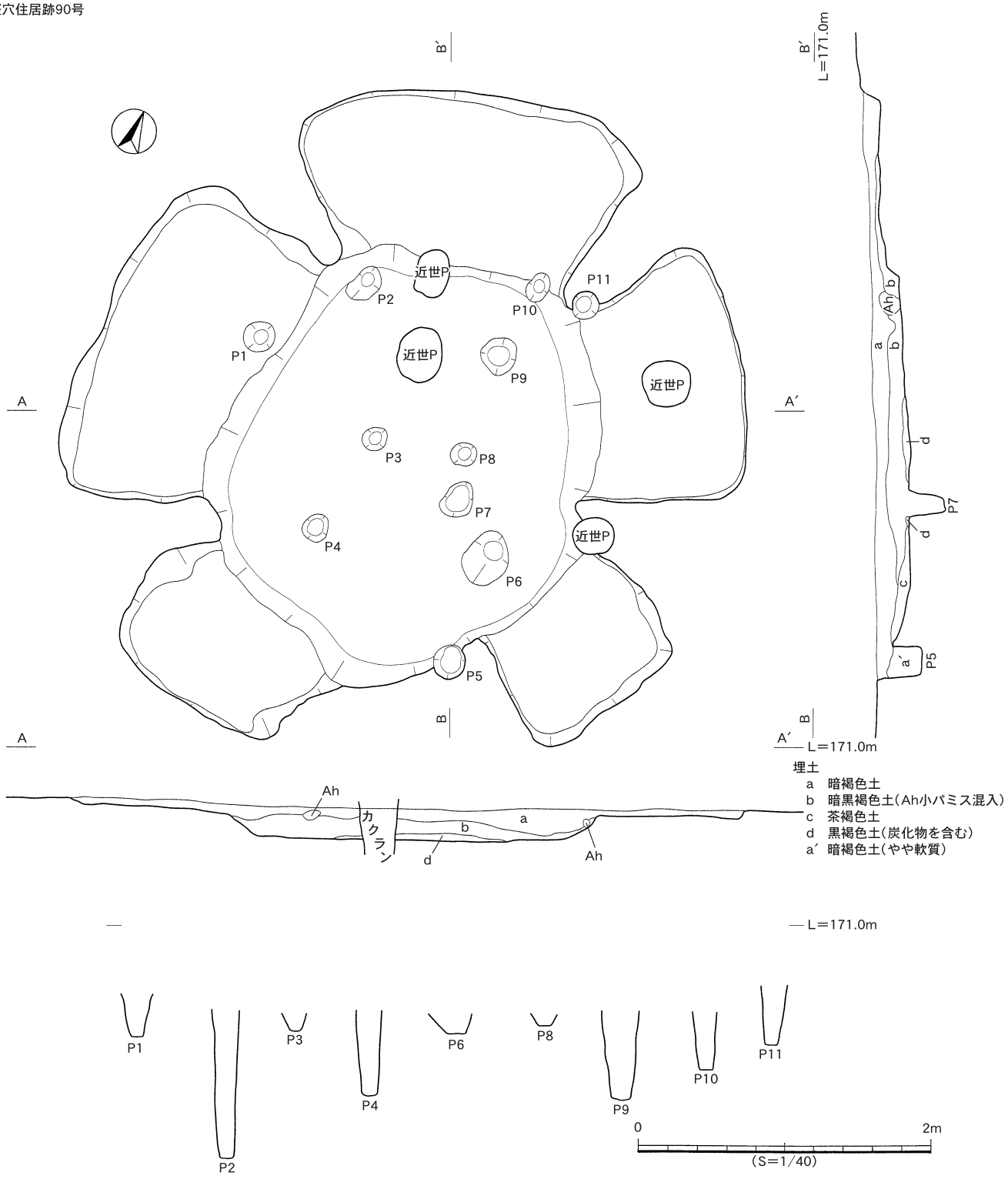
住居南側の土坑状の張り出し部は，住居と同質の埋土が堆積していた。住居床面検出段階では，住居に見られる硬質土は土坑内には堆積しておらず，切り合い関係とも考えられたが，住居短軸中央に位置している点などから，住居に伴う施設の一部であると判断した。

なお，土坑内からは炭化物等はほとんど出土していない。加えて，炉・焼土や炭化物の広がりもつかめなかった。遺物は，総点で37点が出土しこの内３点を図化した。



第363図　竪穴住居跡89号・出土遺物

竪穴住居跡90号



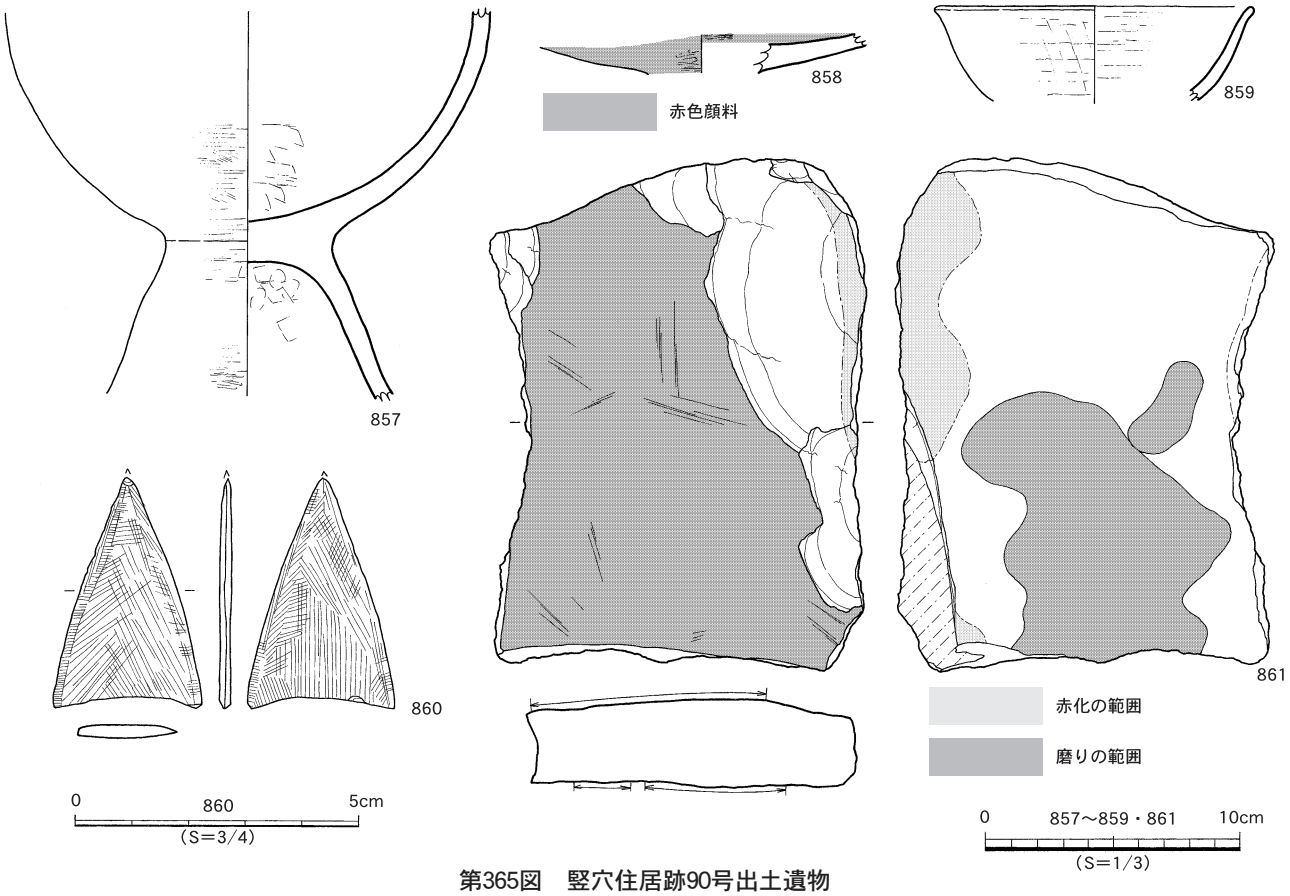
第364図　竪穴住居跡90号

竪穴住居跡90号（第364・365図）

Ｅ・Ｆ－41・42区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺４ｂ６ｍ，短辺４ｍの花弁形で，５カ所に張り出し状のプランが認められた。この内，北側と東西側の３カ所についてはやや大きめで，残りはやや小さいという特徴が見られた。また，部分的に後世の灰褐色埋土（Ｉｂ層に該当）の柱穴と切り合う。

調査は，竪穴部及び平面形が確認できた張り出し部を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。中央部分は多角形状に深くなり，床面は全体的にアカホヤブロックと黒色土とが混在した状態で硬質であったが，硬化面とまでは呼べない。

中央よりやや南側の位置には炭化物が広がっていた。



第365図　竪穴住居跡90号出土遺物

放射性炭素年代測定で，1,725±20yrBPと結果が示されている。

柱穴などの付帯施設は，床面を除去しながら確認していった。その結果，11基の柱穴が確認された。特に，Ｐ２は検出面から１ｍと深い。なお，やや硬質の床面を除去していくと，花弁の中心部分が浅いすり鉢状に凹んでいることがわかった。造成時の掘り方であろうか。

遺物は，総点で72点が出土しこの内の５点を図化した。857は長い脚部を有する。胴部は球状を呈しており，壺状の器形が想定されるが，内面の状態や器壁の薄さなどから決め手を欠く。589は口縁部が丸みを帯びて外反する。内外面共に入念な調整が施されている。860は，二等辺三角形状の磨製石鏃である。床面ではなく，埋土中からの出土である。

竪穴住居跡91号（第366図）

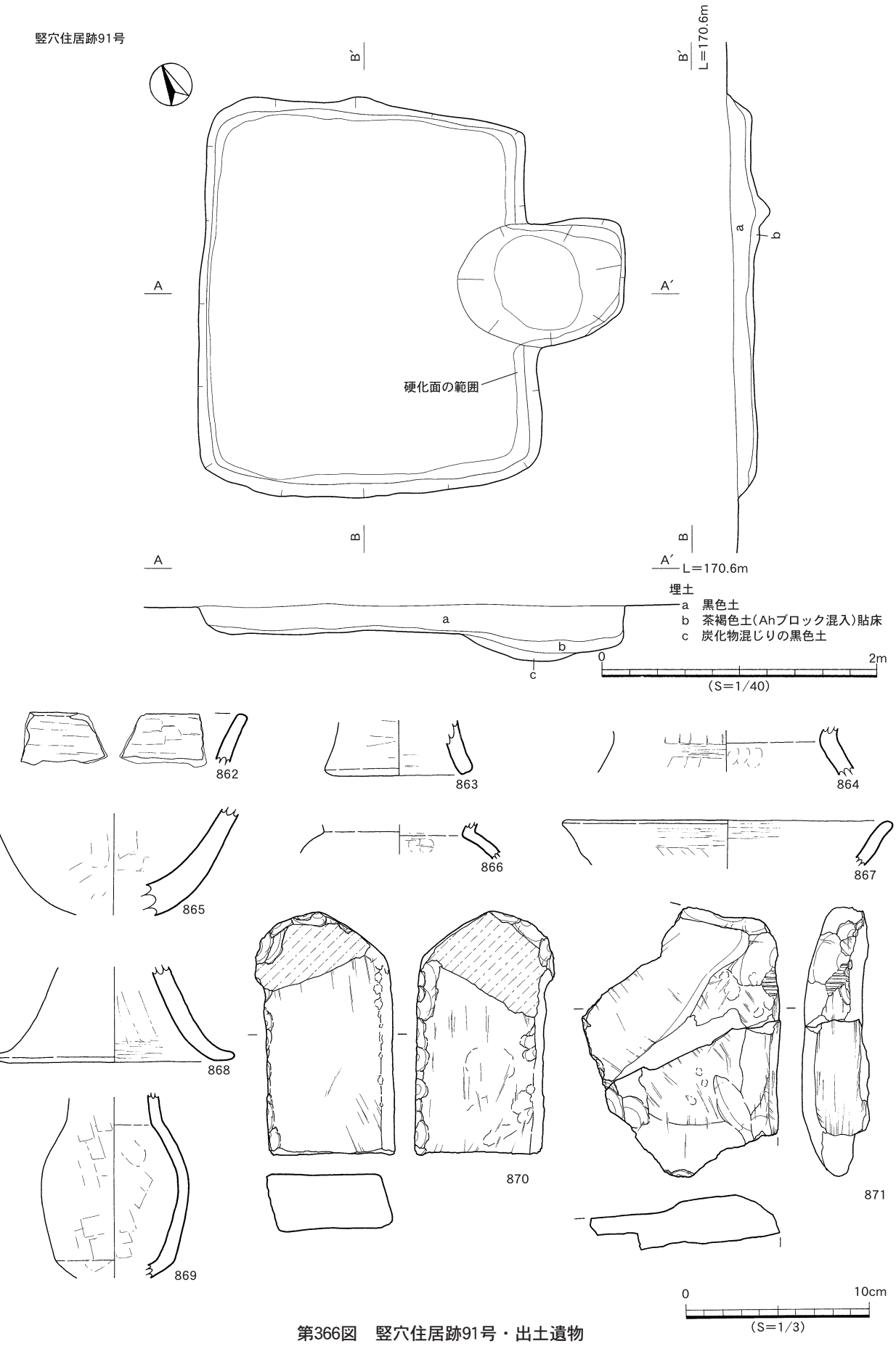
Ｃ－42区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺2.9m，短辺2.5mの隅丸方形で，南側に楕円形の張り出し部が認められた。

調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始した。床面には硬化面が確認され，これは住居から南側の楕円形土坑上面に至るまでほぼ全面に見られた。

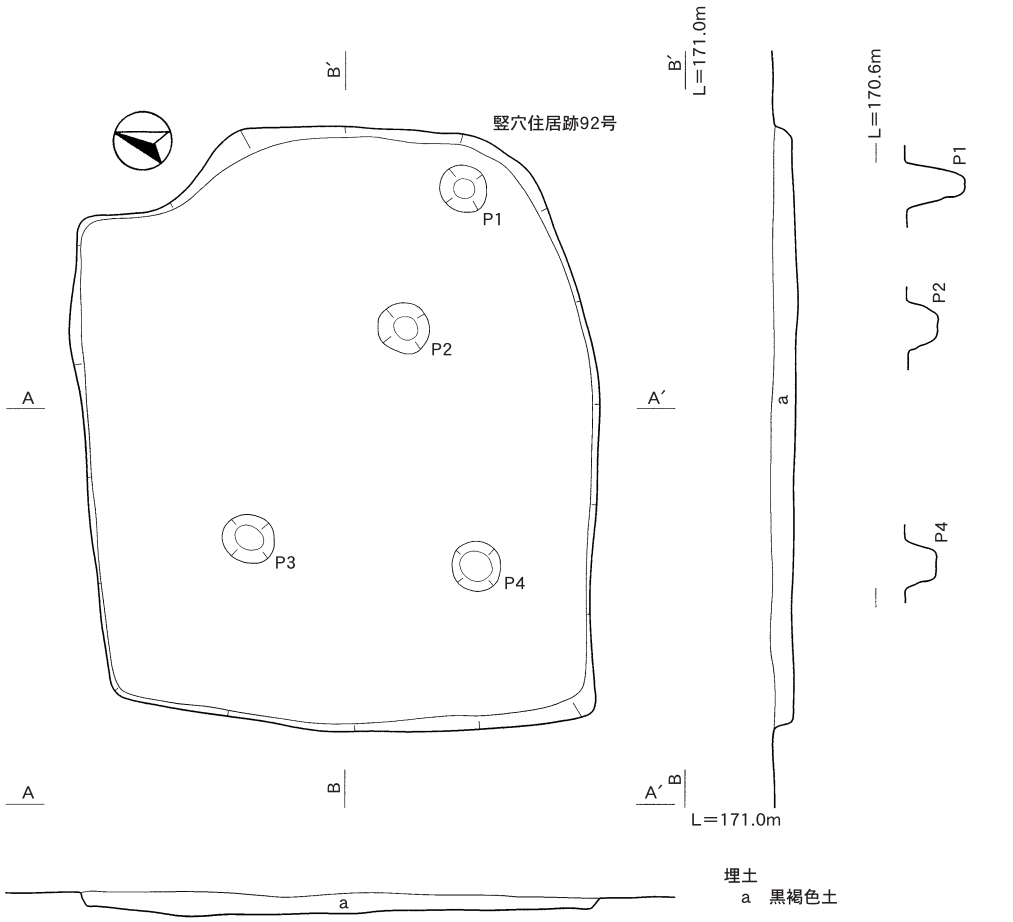
なお，土坑上面に位置する硬化面は，住居床面と比べてやや落ち込んでいる，これは，硬化面下の埋土ｃが比較的軟質であるために，硬化面が落ち込んだのではないかと思われる。

柱穴などの付帯施設は，硬化面を除去しながら確認を進めていったがはっきりと検出できなかった。炉・焼土や炭化物の広がりも捉えられなかったが，南側土坑埋土中には炭化物が比較的多く見られた。放射性炭素年代測定で，1,675±20yrBPと結果が示されている。

遺物は，総点で136点が出土しこの内の10点を図化した。いずれも小破片が多く，図化は困難なものが多い。862・863は甕の破片である。864・865は壺の破片と思われる。866は坩の頸部である。868は高坏の脚部である。これは南側の土坑を調査中に硬化面下から出土したものである。869は，小型の壺状を想定して図化したが，詳細は不明である。870・871は砥石と思われる。



第366図　竪穴住居跡91号・出土遺物



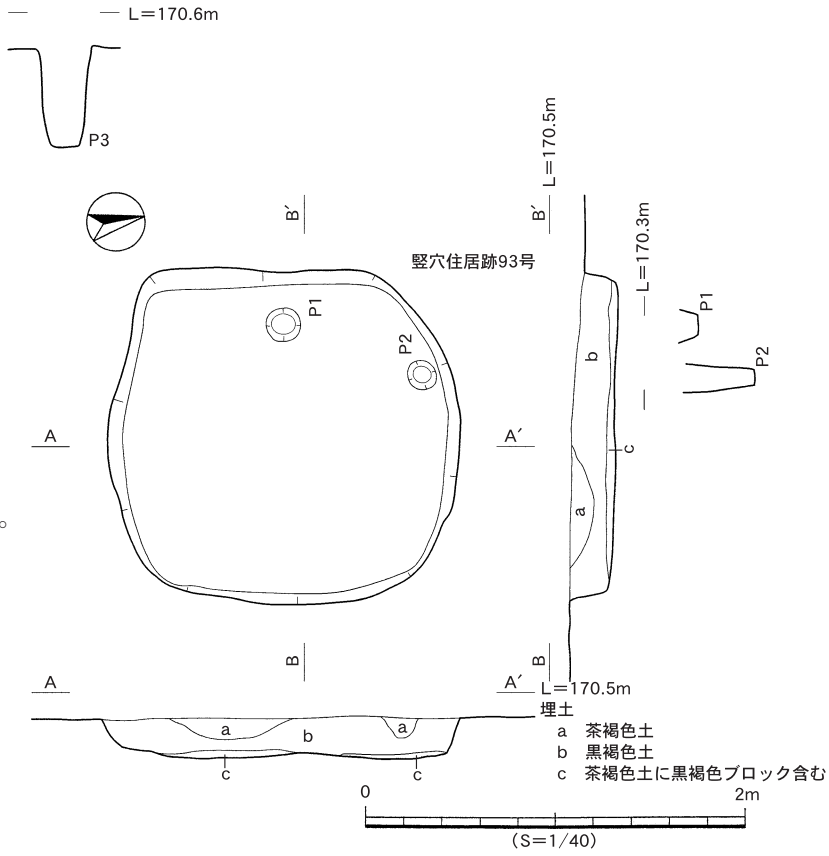
竪穴住居跡92号（第367図）

D・E－50区においてⅥ層上面からⅦ層にかけて検出された。包含層も含めて，上面がかなり削平を受けての検出であった。検出時のプランは，長辺3.2m，短辺2.6mの隅丸長方形を基調とするが，東側にやや張り出し部が認められた。

調査は，竪穴部と張り出し部との中央を通る２本の直行するベルトを設定して埋土の掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出を行った。検出面から床面までの深さは10㎝と全体的に浅く，張り出し部はさらに浅く，はっきりとしたプランを捉えることができなかった。床面には，硬化面や焼土等は認められず，アカホヤ火山灰層の面がそのまま床面として利用されていたようである。

柱穴などの付帯施設は，床面の検出状況を記録した後に，床面を除去しながら確認作業を行った。その結果４基の柱穴が確認された。検出面からの深さは，Ｐ１・３は深く，Ｐ２・４が浅い。

遺物は，遺構検出面から浅いこともあり，



第367図　竪穴住居跡92号，93号

総点で２点出土し，全て一括して取り上げた。いずれも小破片であり，図化するに至る資料ではないことから時期判断は困難であった。また，周辺も後世の削平を受けているため，正確な時期判断を示すことはできないが，埋土等から概ね古墳時代と考えここに掲載した。

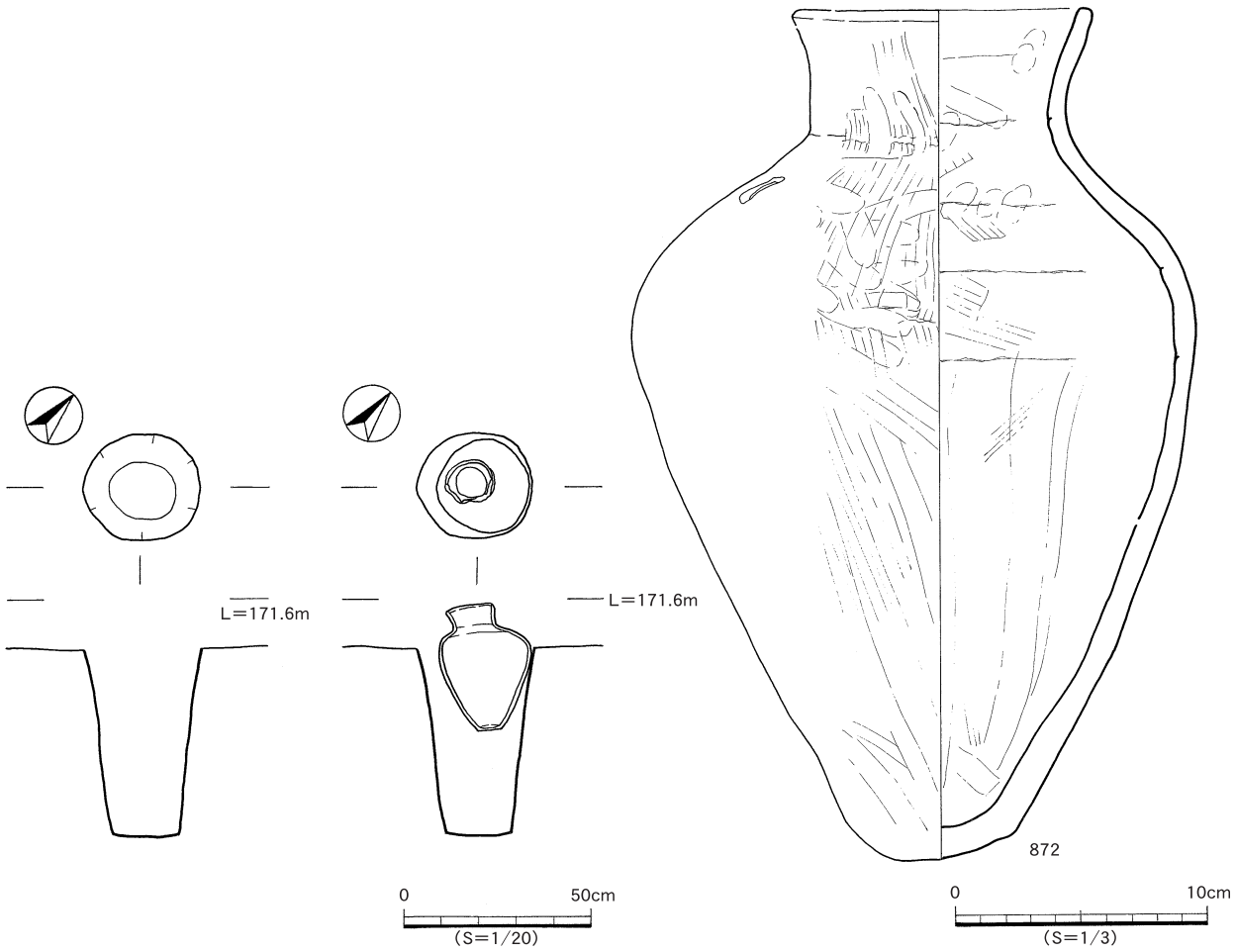
竪穴住居跡93号（第367図）

Ｄ－51区においてⅥ層上面で検出された。検出時のプランは，長辺1.9m，短辺1.8mの隅丸長方形で，検出時には一辺の長さから土坑を想定した。調査は，中央を通る２本の直行するベルトを設定して掘り下げを開始し，床面と思われる埋土の変化を捉えた後に壁面検出をおこなった。この時点で埋土の記録を行い，ベルトを除去し床面を検出していった。硬化面や貼床等は見られず，柱穴などの付帯施設の確認は，床面を除去した段階で１基の柱穴が確認された。炉・焼土や炭化物の広がりは見られない。

住居としての判断材料は乏しいが，周辺の土坑とは様相が異なっており，住居としてここに掲載した。遺物は，２点出土したが図化困難であった。

埋設土器（第368図）

Ｊ－５区で，柱穴内に壺形土器がほぼ関係の状態で検出された。口縁部を上にしている点や埋土中に浮いている点，肩部に焼成後の打ち欠きによる穿孔が見られる点などから意図的に埋設したものと判断した。872は，器高34㎝，胴部最大径が22㎝ある壺形で，口縁部から頸部にかけては短く，わずかに外傾する。壺内の土は，リン・カルシウム分析を実施した。包含層土壌との特異差は明確ではない（第４章参照）。



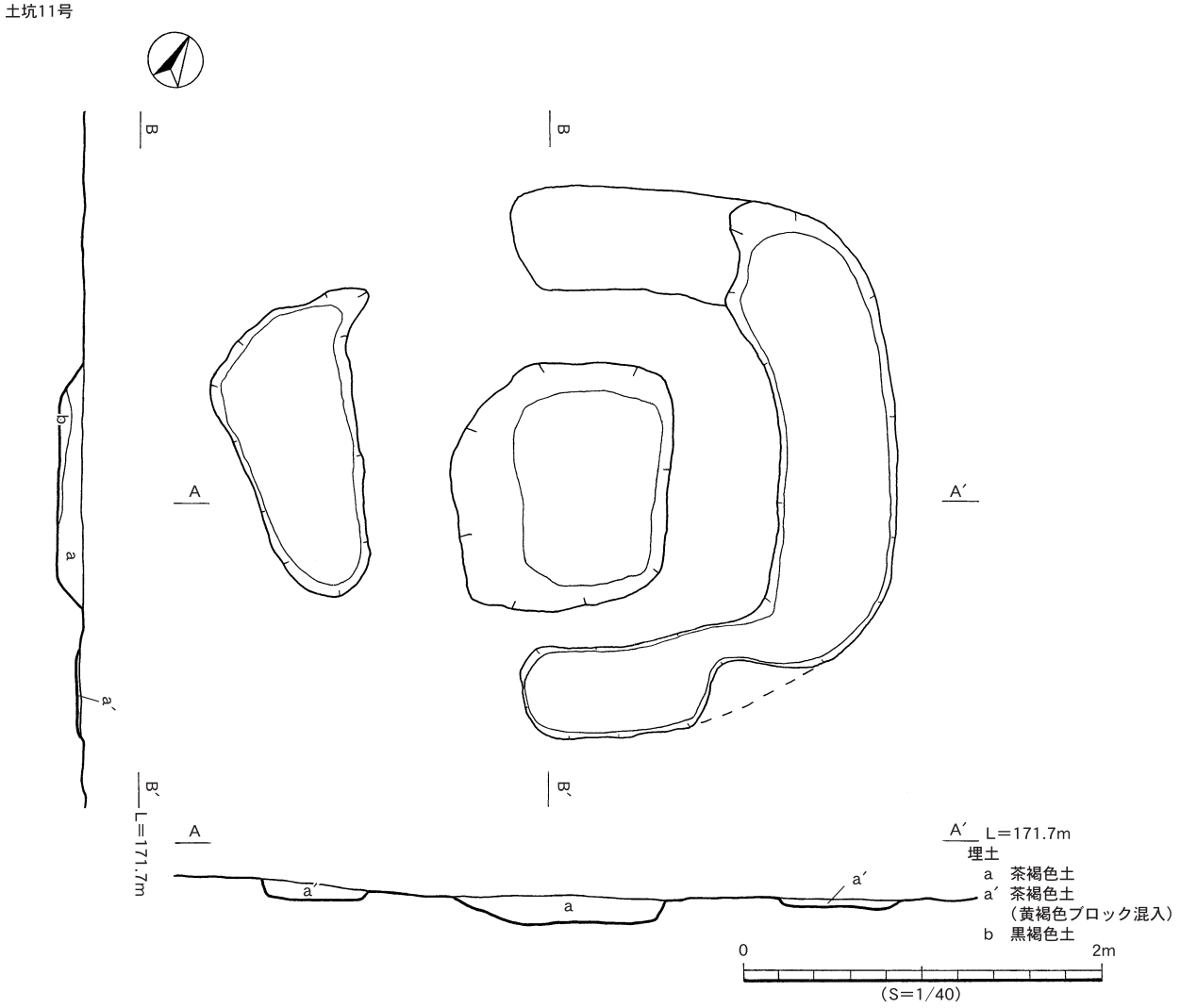
第368図　埋設土器出土状況・出土遺物

土坑（第369図～第377図）

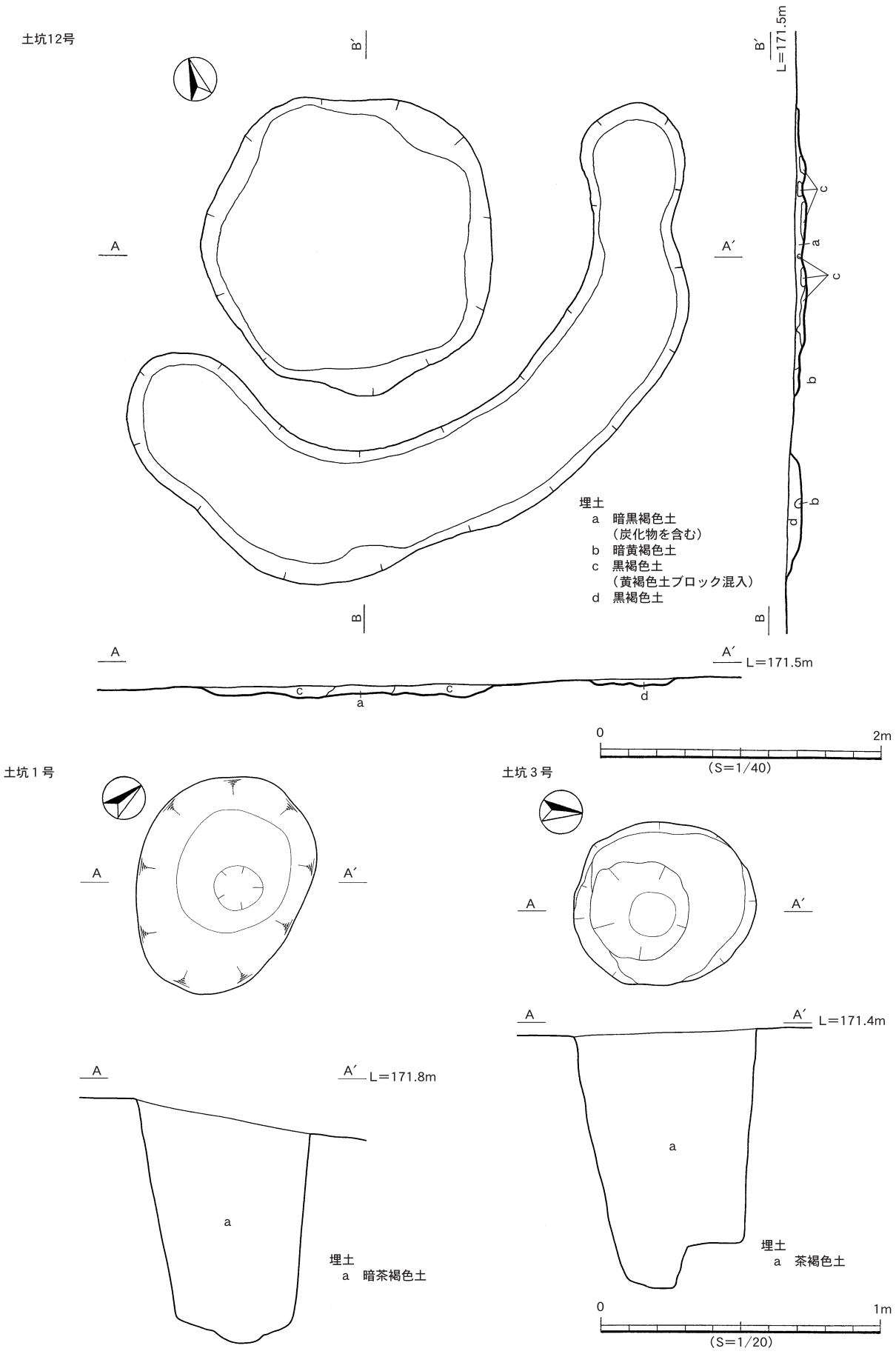
土坑は，28基が検出された。形態では周溝が隣接するもの（11・12号），円形で深いもの（１・３号），隅丸方形ないしは隅丸長方形（４・５・９・14・15・23・24号），円形（６・７・13・19・20・22号），楕円形（16・21・26・25・27号），不定形（２・８・17・18号）の６種類に大別できる。土坑11号は北西と南西の２方向の周溝を欠く。北側も検出時既に痕跡のもの部分もあり，残存部は全体的に浅い。中央にある隅丸長方形の土坑はやや深く，この中から877～879などの遺物が出土している。土坑12号は南側半分の周溝が残存していた。中央土坑とほぼ同じ深さを呈するが，東側はやや浅い。遺物は出土していない。隣接する11号内の遺物と埋土状況から時期判断を行った。１号土坑は，竪穴住居跡13号の床面において確認された。23・24号は隣接して検出された（図版54参照）。７号土坑は，大型の礫や石皿，土器片を他の土坑よりは多く含んでいる。小破片が多いが，２点を図化することができた。21号土坑からは北側に885と886の破片がまとまって出土していた。28号は調査区南端に近い位置で検出されている。埋土の状況から時期判断を行った。

柱穴（第162図～第194図）

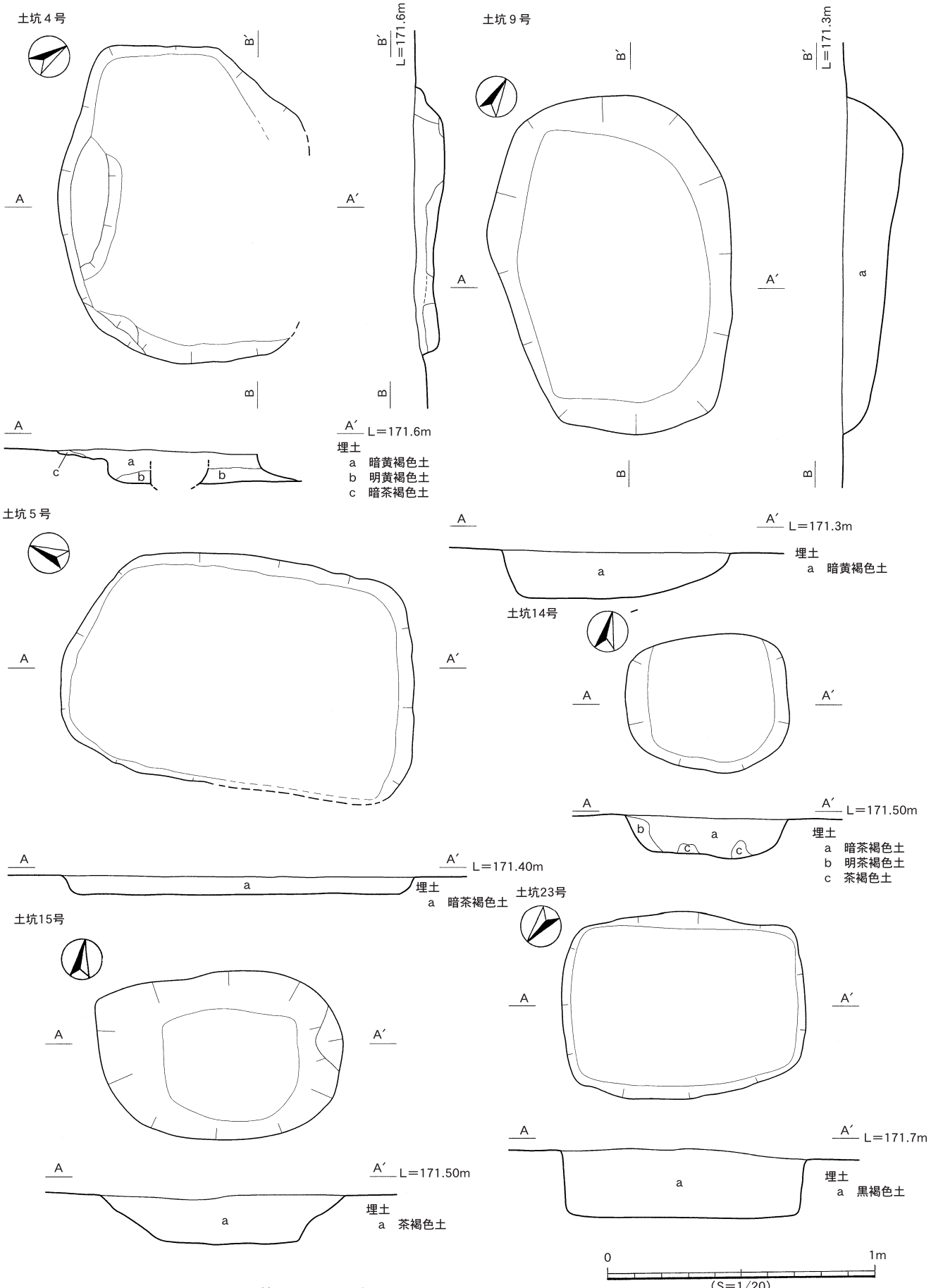
調査区のほぼ全域にわたって検出されている。調査中並びに報告書作成中において掘立柱建物跡等を想定して復元を試みたが，復元するに至らなかった。そのため，遺構配置図上に平面プランのみを掲載している。これで見ると，竪穴住居跡が密集している北側において，柱穴のあまり見られないエリアが浮かび上がったり，逆に，密集してしるエリアが浮かび上がったりする。柱穴内からは当該期の遺物も若干出土しているが，これらの多くは小破片であり，これらから意図的な行為等は想定できなかった。唯一，壺形土器が出土した柱穴があるが，これは，埋設土器として先述の通りである。



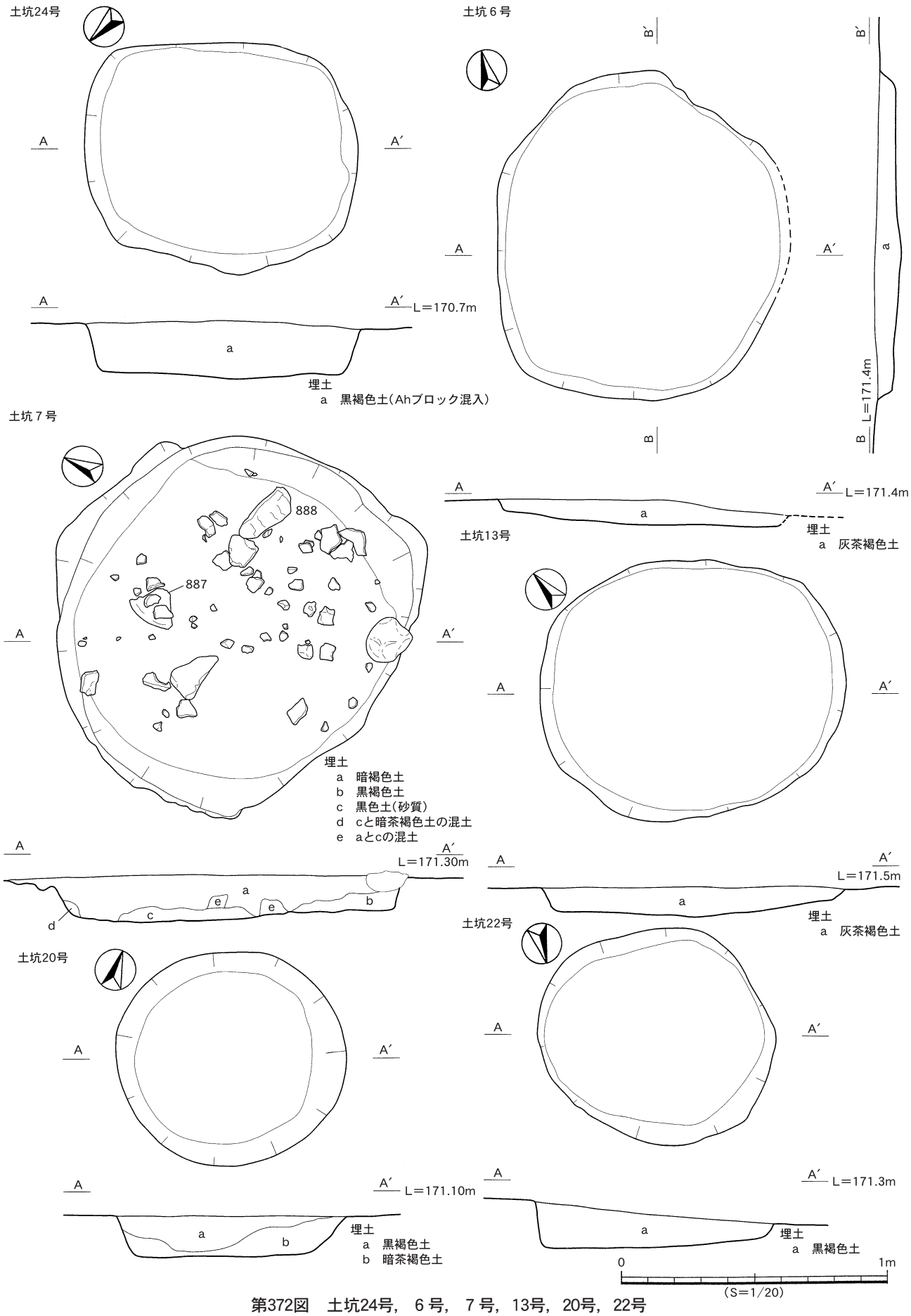
第369図　土坑11号



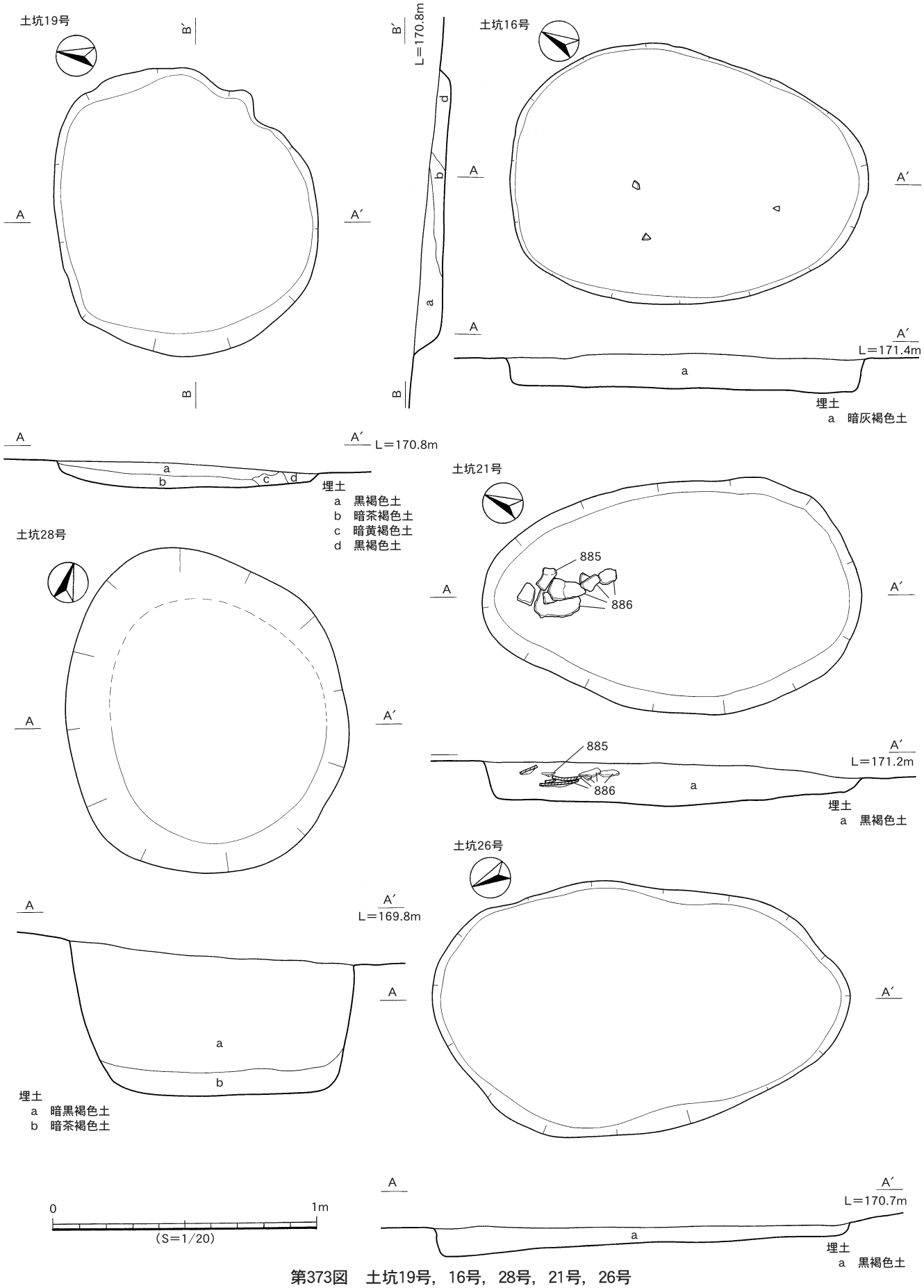
第370図　土坑12号，１号，３号



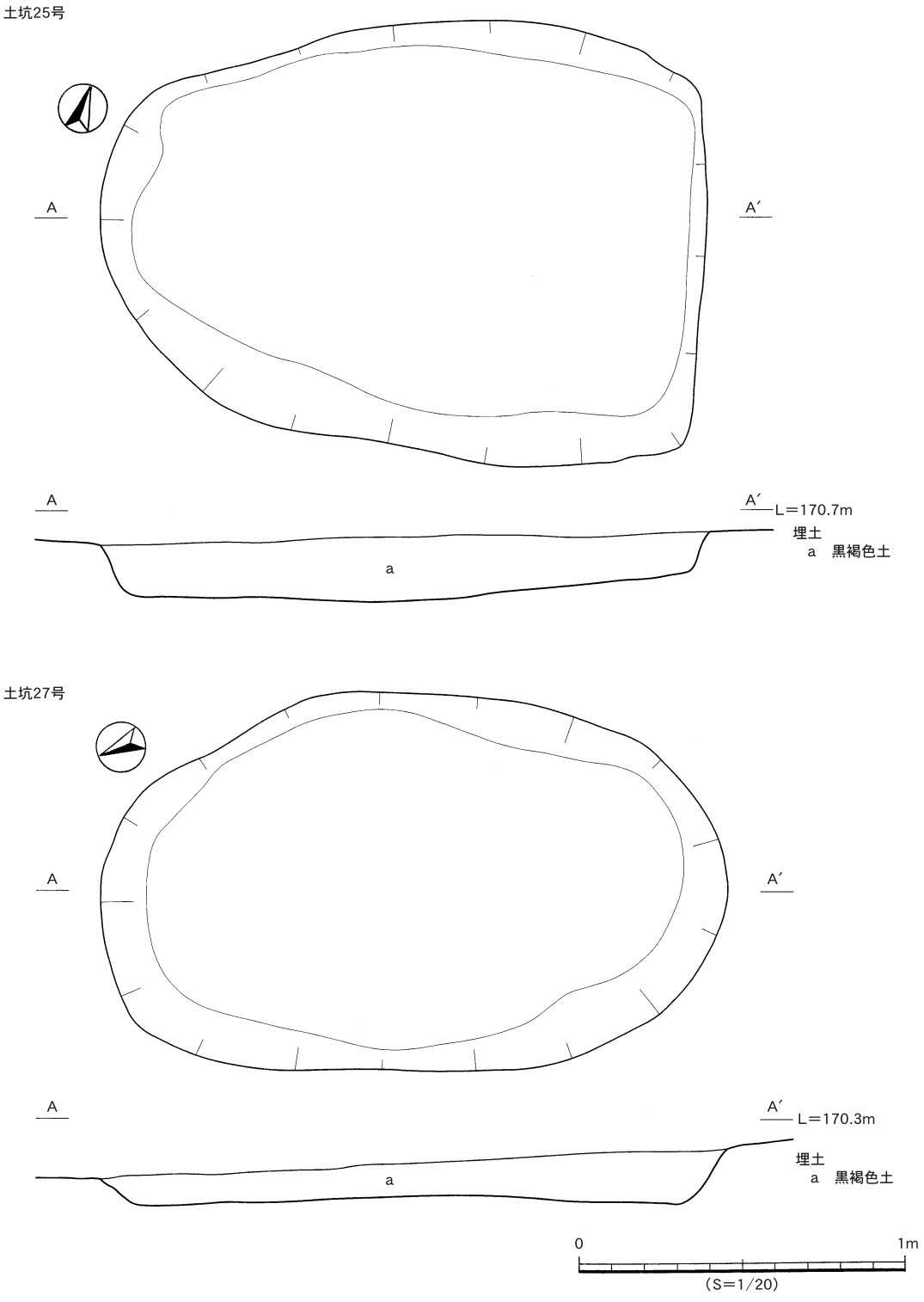
第371図　土坑４号，９号，５号，14号，15号，23号



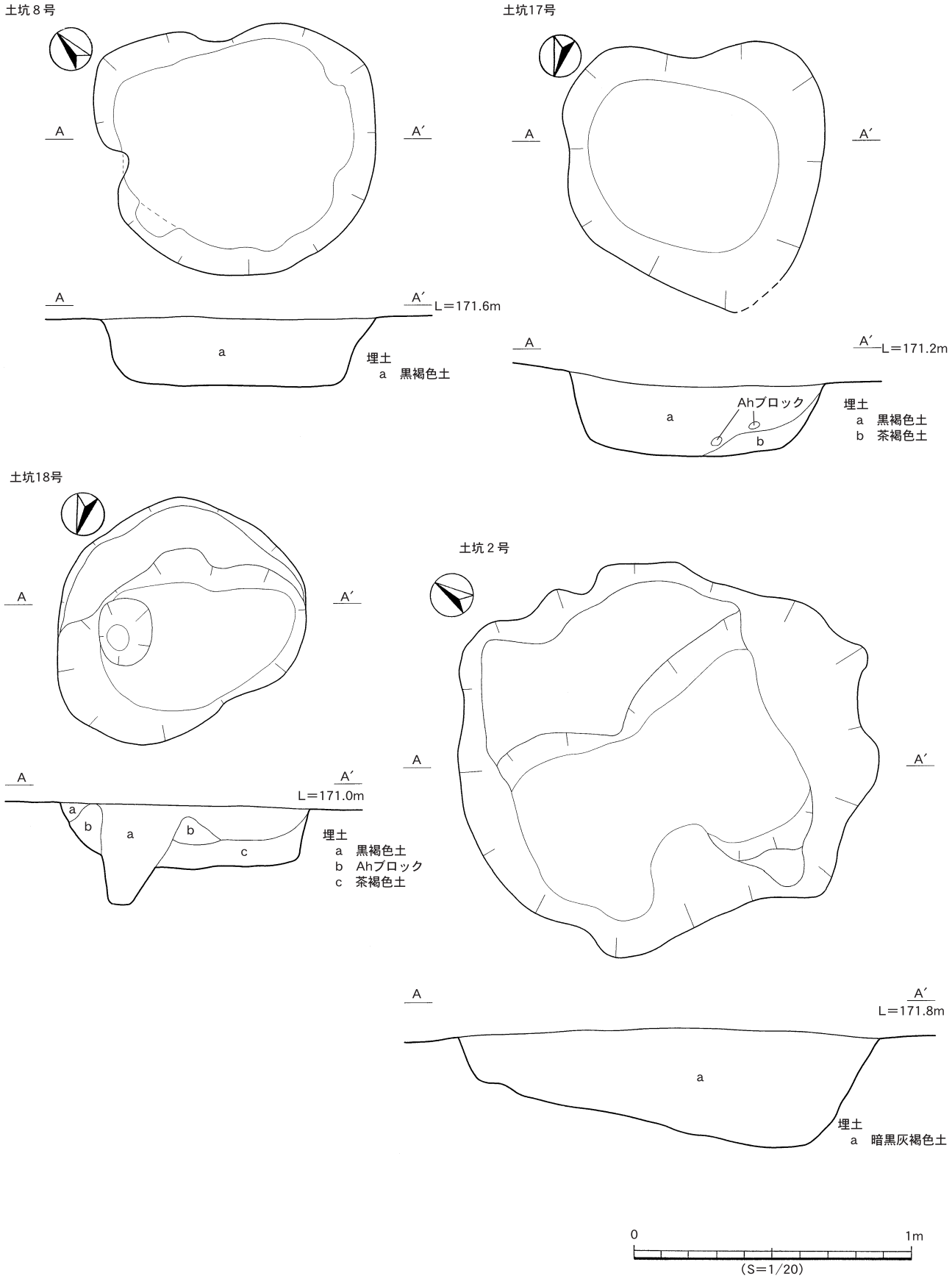
第372図　土坑24号，6号，7号，13号，20号，22号



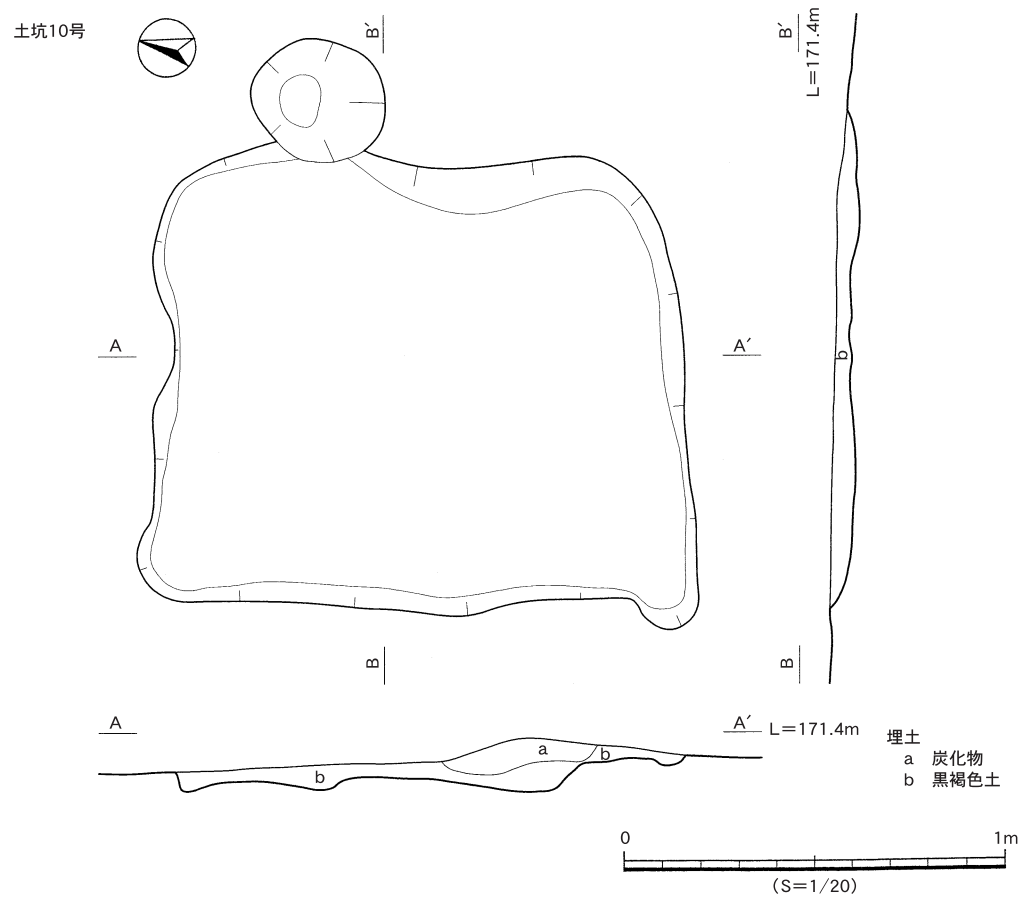
第373図　土坑19号，16号，28号，21号，26号

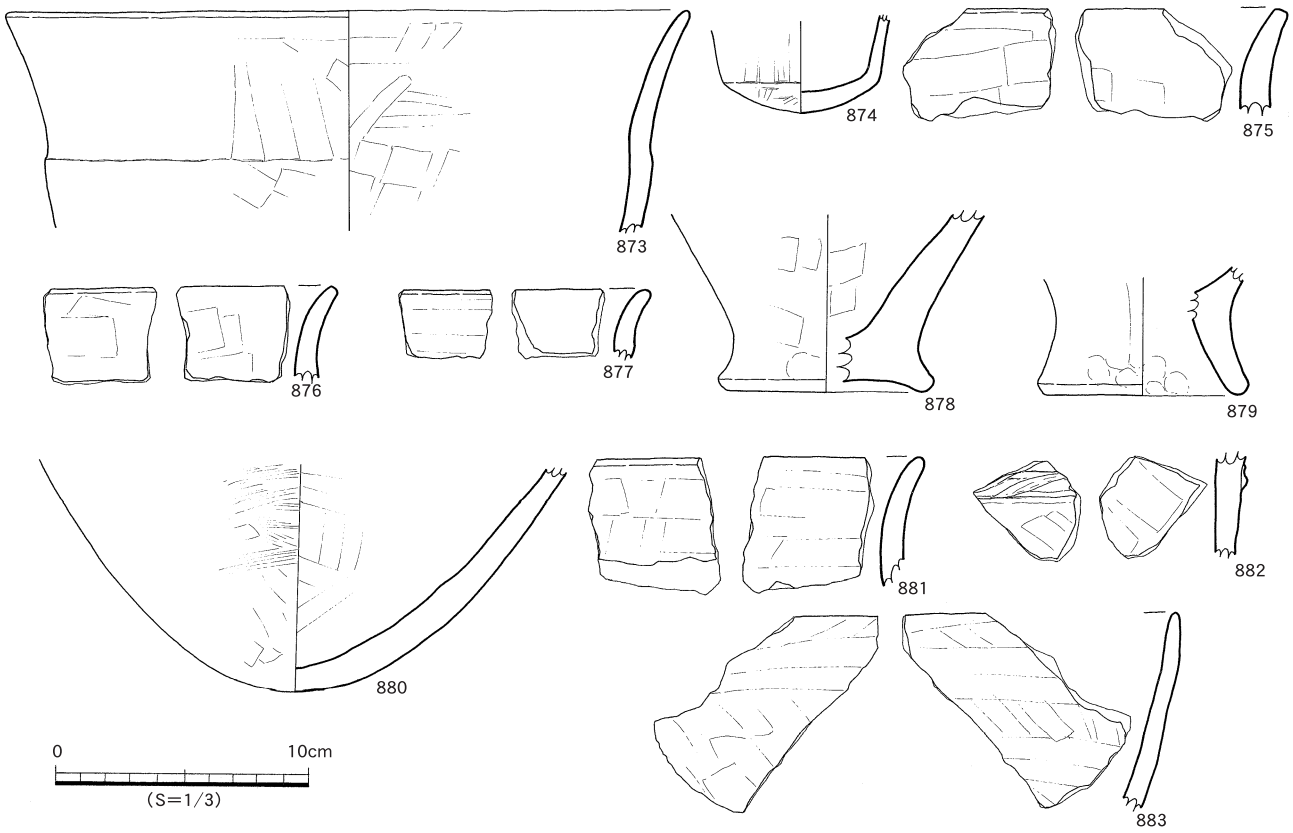


第374図　土坑25号，27号

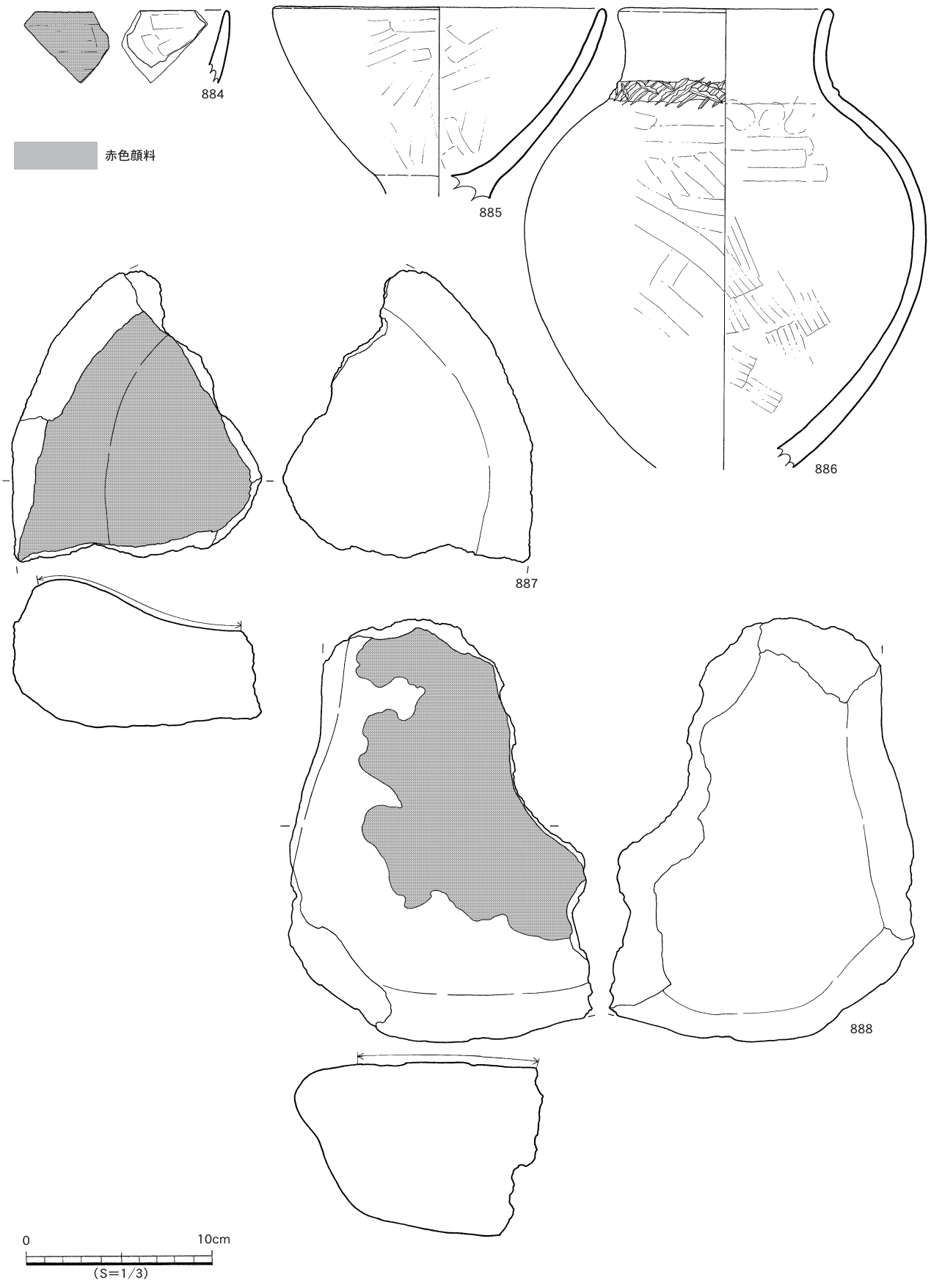


第375図　土坑８号，17号，18号，２号





第376図　土坑10号・土坑出土遺物①



第377図　土坑出土遺物②

⑶遺物

包含層からは，多くの土器や石器が混在して出土している。これらの多くは小破片が中心であり，特徴的な破片に関しては器種ごとに分類を行っていったが，多くの胴部片では不明瞭な点も多い。このため，類別は口縁部や底部といった特徴のある部位を中心に作業を進め，これらの破片から様相のうかがい知れる胴部片については各類に分類した。この結果，当該期資料中で類別が出来たものは2,448点に留まった。

甕（第380図889～第383図917）

口縁部の形状及び外反度合いで，Ⅰ～Ⅳ類に細分している。Ⅰ類は，口縁部が外反し，胴部はやや膨らむ。口縁部内面には稜が見られ，対応する外面にも稜が形成されるものもある。総点で19点が出土している。Ⅱ類は，口縁部が外反する点ではⅠ類に類似するが，内外面に稜が見られない。外面には，かき上げ状の調整痕を残すものが多い。胴部は，突帯があるものと無いものとがあり，突帯があるものはキザミが施される。キザミは棒状工具に布を巻き付けているものも見られ，キザミ内に布目圧痕が見られる。胴部は，膨らむものとやや直線的なものとがある。総点で480点が出土している。Ⅲ類は，口縁部が直行するもので，資料によっては口唇端部のみ外側へ折り返して外反を意識しているものもある。総点で130点が出土している。Ⅳ類は，口縁部が内湾気味を呈するものである。胴部の突帯には，指頭つまみにより貼り付けているものも見られる。総点で97点が出土している。

889～891はⅠ類に属する。889は口縁部が外反し，胴部はやや膨らむ。890は胴部の膨らみが強い。892～902はⅡ類に属する。892は口縁部が外反し，胴部の膨らみはやや上方にある。895は口縁部下位に沈線が２条めぐる。900～902はⅡ類の中でも胴部に突帯をめぐらせるものである。900は口縁部がわずかに外反しているが，特に口唇端部が外側へ折り曲がるように開いている。903・904はⅢ類に属する。903は口縁部はほぼ直行している。胴部の貼り付け突帯は一部で下方に垂下している。904～906はⅣ類に属する。905は口縁部がはっきりと内弯する。突帯がやや不規則にめぐっている。906の突帯は摘むような指頭圧痕が観察される。907～913は当初竪穴住居跡を想定していた部分からの出土である。

壺（第383図918～第384図933）

口縁部の形状でⅠ～Ⅲ類に細分している。Ⅰ類は口縁部が外反してやや長めに垂下する頸部を有し，胴部との境にははっきりとした稜が見られる。総点で20点が出土している。Ⅱ類は，口縁部が直行ないしやや外反して頸部は短い。胴部は球状に膨らむ。総点で58点が出土している。Ⅲ類は，口縁部が外反して頸部で更に屈曲するいわゆる２重口縁の器形を呈する。この屈曲部分にキザミが施されるものや，頸部に突帯がめぐるものなど，バリエーションも豊富である。総点で29点が出土している。

918はⅠ類に属する。口縁部が外反し，頸部は緩やかに長い。919～921はⅡ類に属する。921は口縁部がわずかに外反し，頸部に格子状のキザミが施される。この部分は，断面観察では明確に出来なかったが，粘土を貼り付けて突帯を意識していると思われる。922～926はⅢ類に属する。922は口縁部が外反し，頸部で屈曲をする。924は屈曲部に薄く突帯がめぐりキザミが施されている。926～933はⅠ類からⅢ類に分類できなかったものである。933は細沈線が施されている。

坩（第384図934～946）

底部形態や屈曲部の位置など多くのバリエーションが存在する。特徴的な資料を中心に図化したが，大別すると赤色顔料を施さないものと赤色顔料を施すものに分けられる。前者が190点，後者が255点出土している。出土状況図は，この赤色顔料の塗布の有無により作成した。935は口縁部が直線的に外反し，胴部で屈曲する。底部へは丸みを持つが，器壁は均一である。936は口縁部が長い。底部は厚いが尖底ぎみである。945は，外面に赤色顔料が塗布されている。底部中央が厚く膨らむ。946はわずかに平底状を呈している。

高坏（第384図947～第385図957）

口縁部の形態や，坏部にある屈曲部，脚部の形態などバリエーションが豊富である。坩同様，赤色顔料を施すものと施さないものとに大別でき，この観点で出土状況も作成している。前者が967点，後者が184点出土している。947は口縁部が外反し頸部で屈曲する。他の資料と比べて坏部が浅い。952～954は脚部片である。954・956は穿孔が施されている。

鉢（第385図958～967）

深い坏状を呈するものや，脚を有して赤色顔料を施すものなど様々なバリエーションが見られる。ここでは一括した。

甑（第385図968・969）

甑の可能性がある２点を図化した。同一個体と思われる胴部片が他に１点ある。968は口縁部片である。969は968と胎土や色調が類似しており，同一個体の可能性がある。

ミニチュア（第385図970）

１点を図化した。970はやや不安定な底部である。

須恵器（第385図971～973）

18点が出土し，この内３点を図化した。

石器（第386図974～984）

石器に関しては，時期特定が困難であり形態的特徴や出土状況から判断していった。ただし，器種によっては弥生時代との区別が困難であったため，ここに一括して掲載したものもある。

974～979は磨製石鏃である。５点が出土し，この内５点を図化した。974は正三角形に近い。977は先端部で角度の変化が見られる。978は未製品の可能性もある。979は先端部片である。

980～983は石庖丁である。４点が出土し，この内４点を図化した。980は穿孔が貫通していない。981はわずかに穿孔部分が観察されるが，刃部等を打ち欠いており，再加工あるいは転用品かと思われる。982～984は欠損品である。

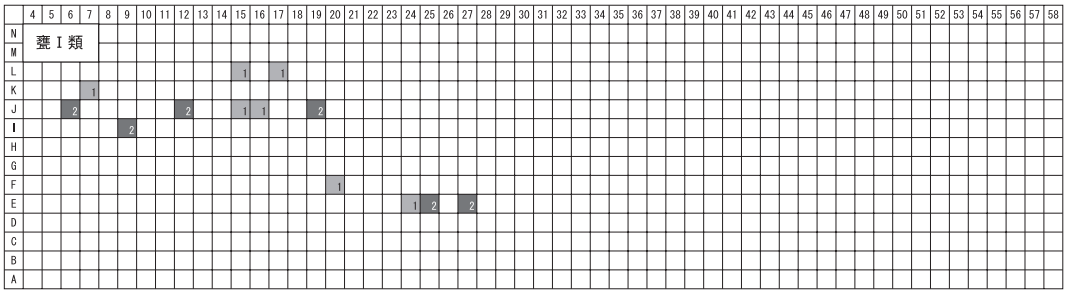
砥石（第386図984）

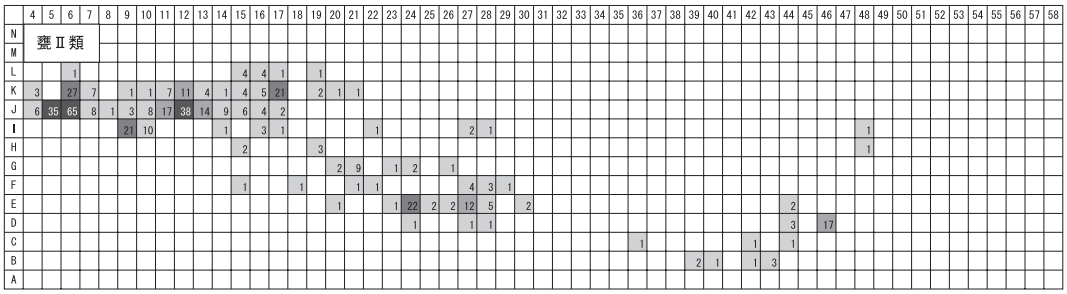
１点を図化した。984は扁平で両面に使用痕が見られる。

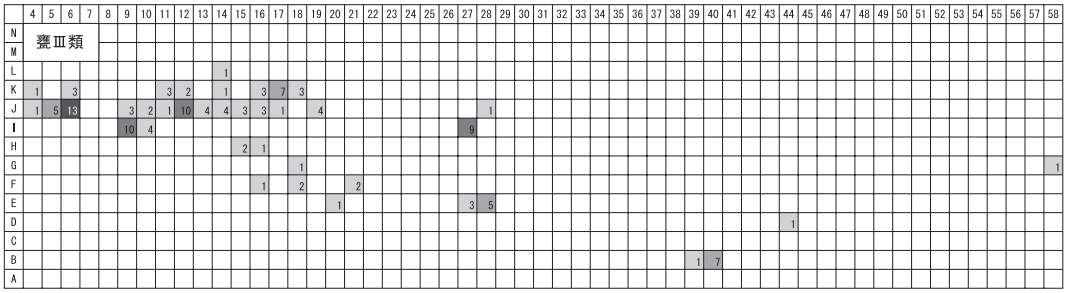
玉類（第386図985～989）

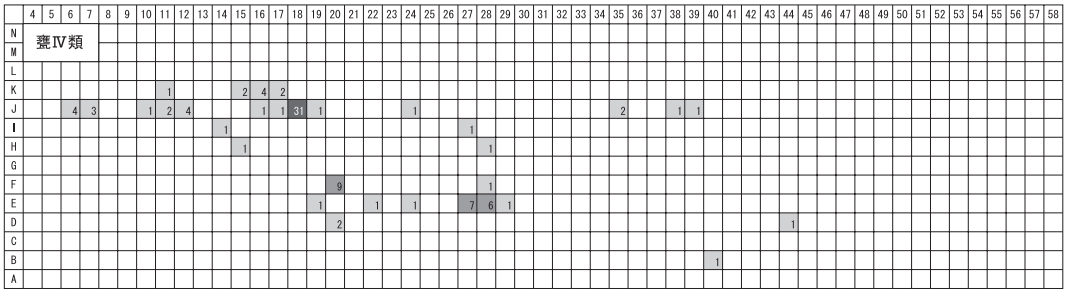
勾玉と小玉が出土している。勾玉は２点出土し，小玉は３点出土している。985は頁岩製である。先端部を欠損する。986は緑色の石材を用いている。近世遺構内から出土していたが，ここに掲載した。

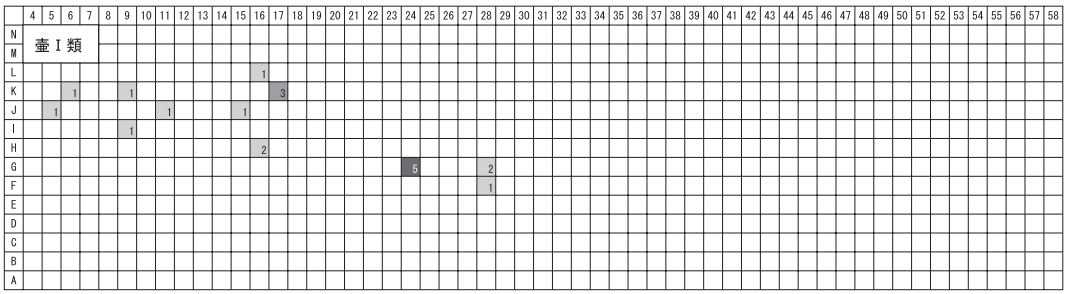
小玉は，いずれも径が５㎜前後と小さい。蛍光Ｘ線分析の結果987・988が鉛ガラス，989がカリ石灰ガラスであった。

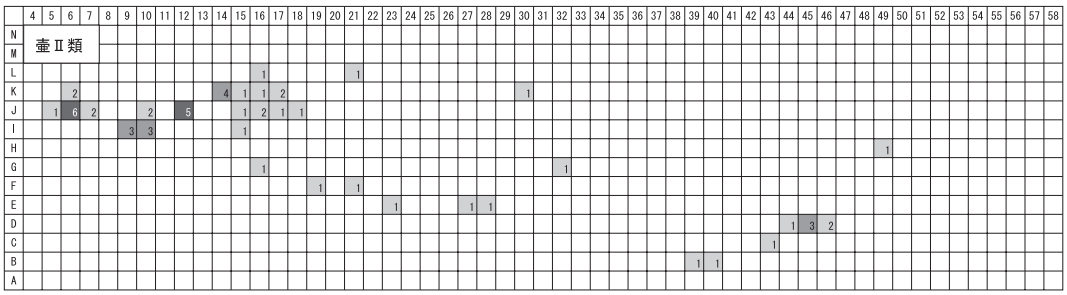




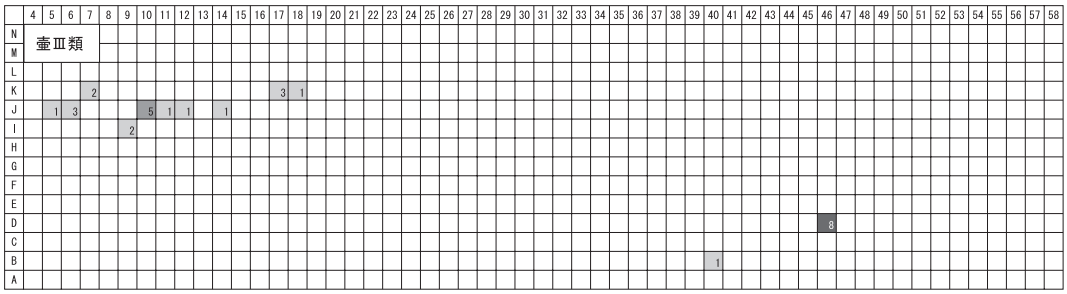


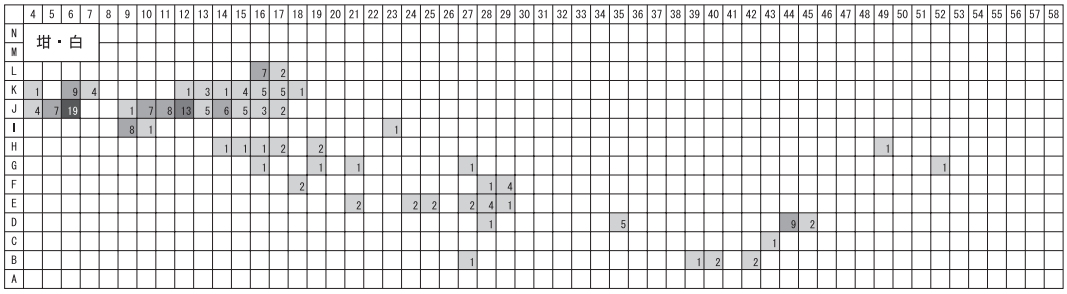


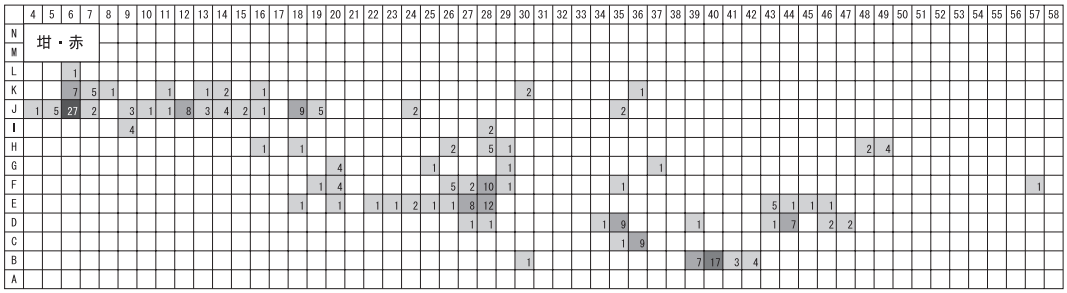


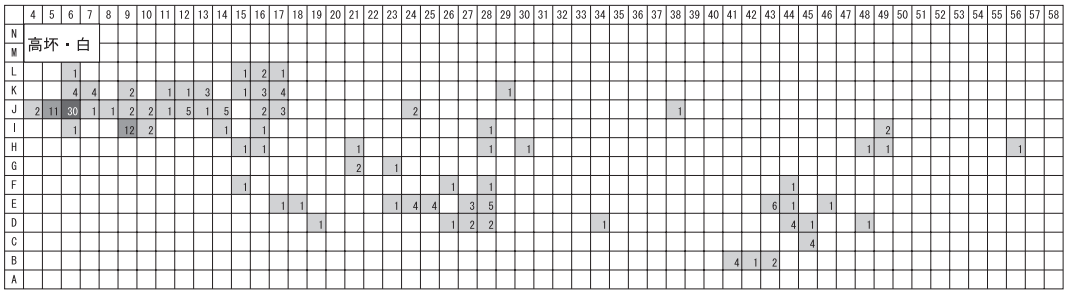


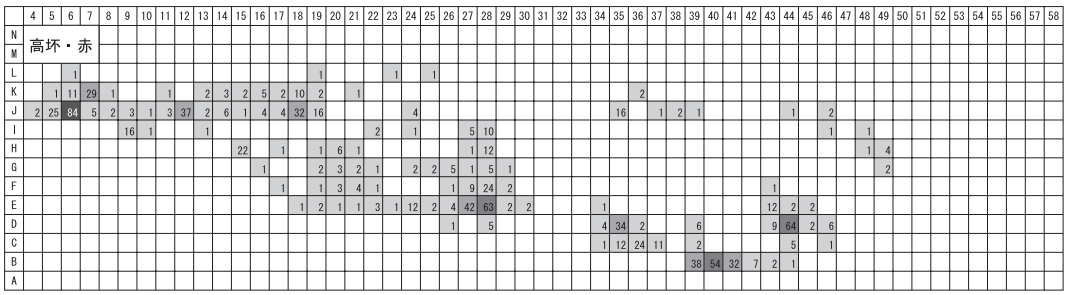
第378図　包含層遺物出土状況①

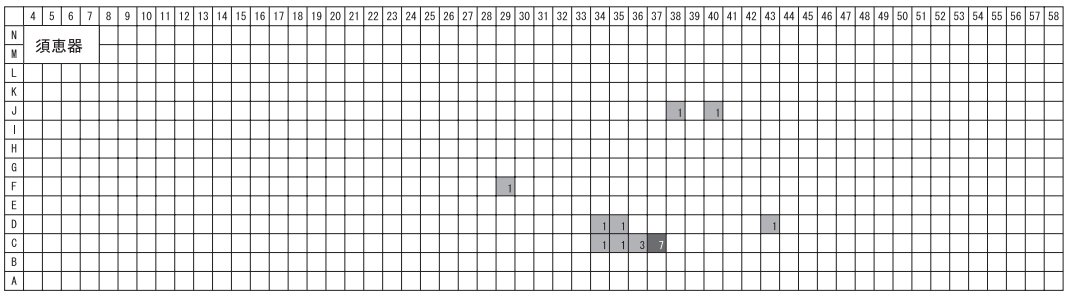




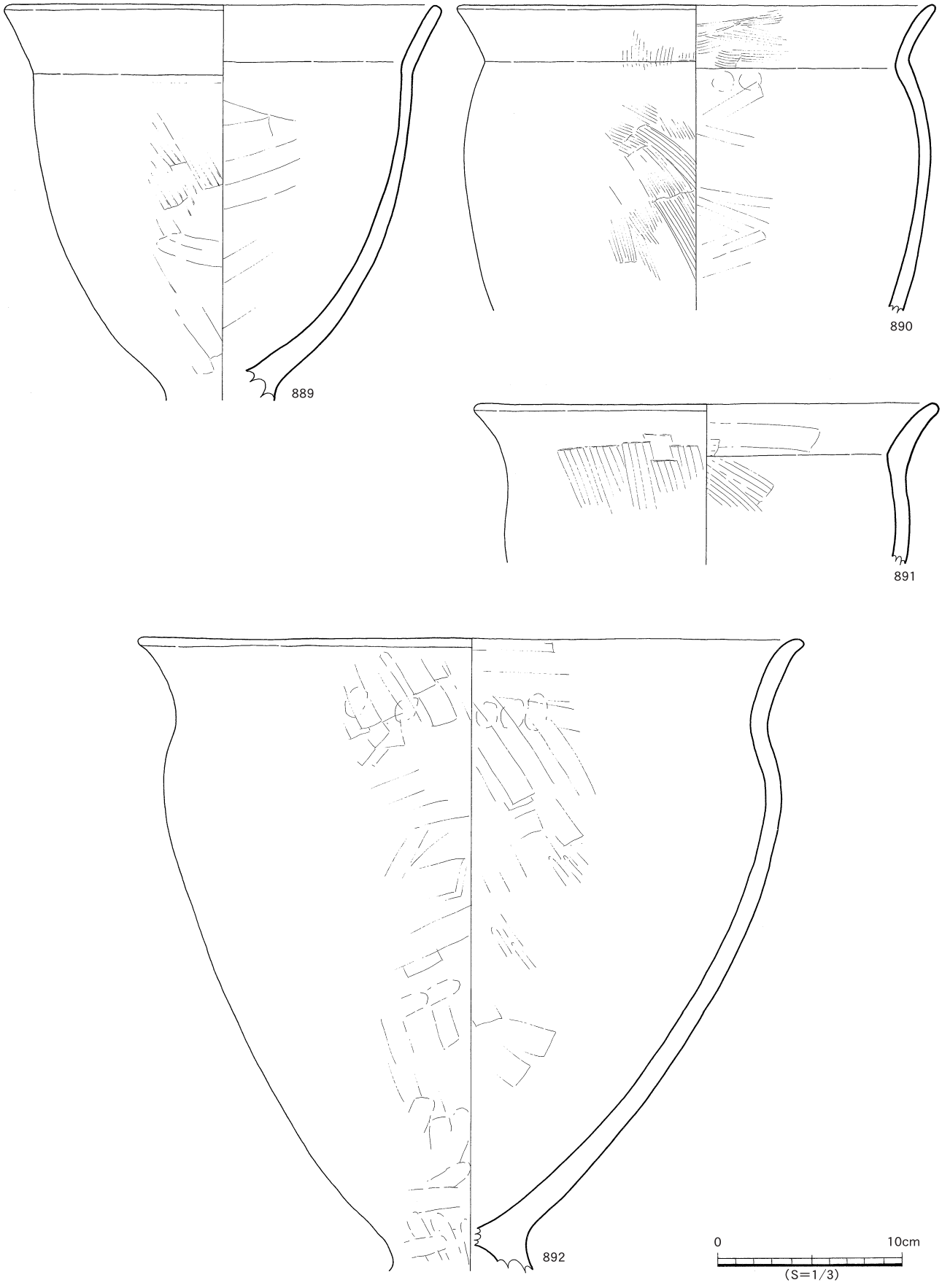




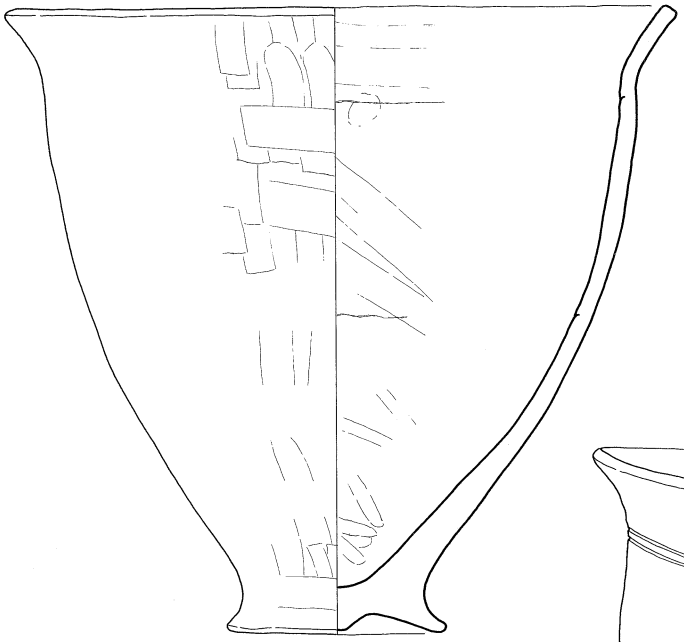


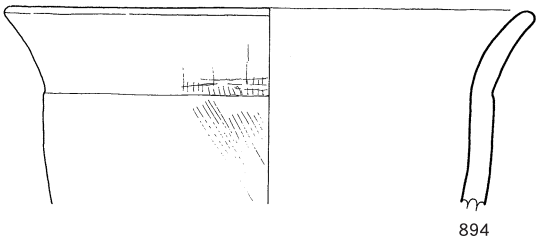


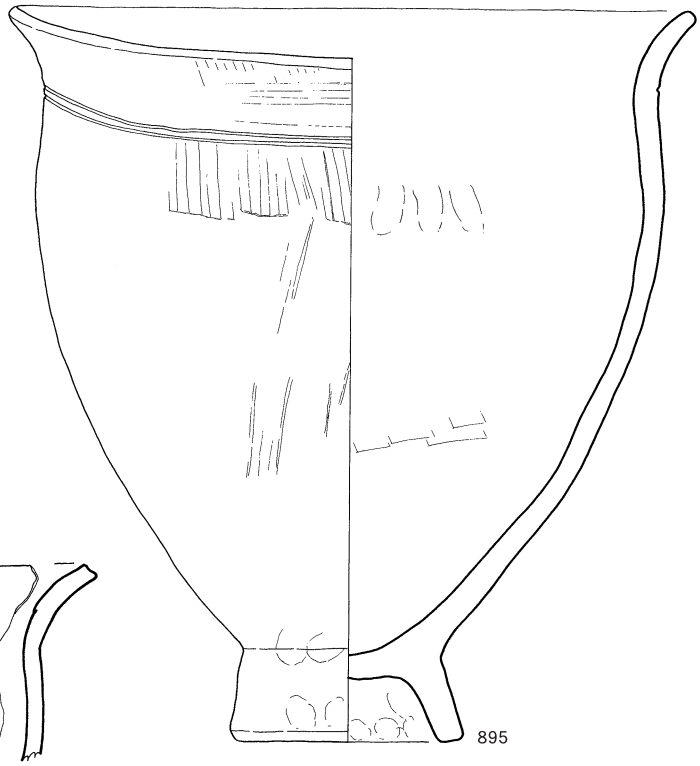
第379図　包含層遺物出土状況②

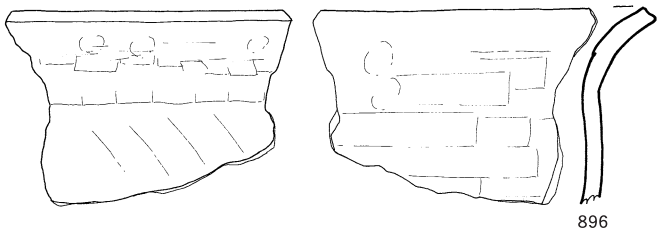


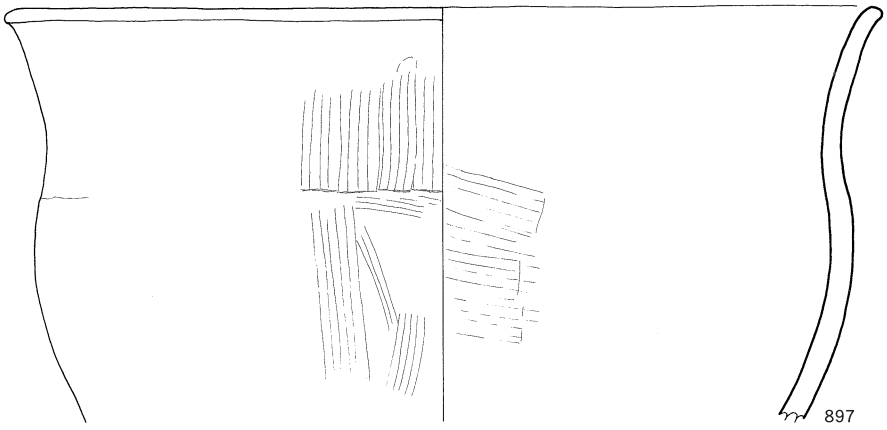
第380図　包含層出土遺物①

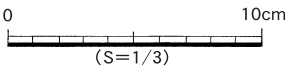




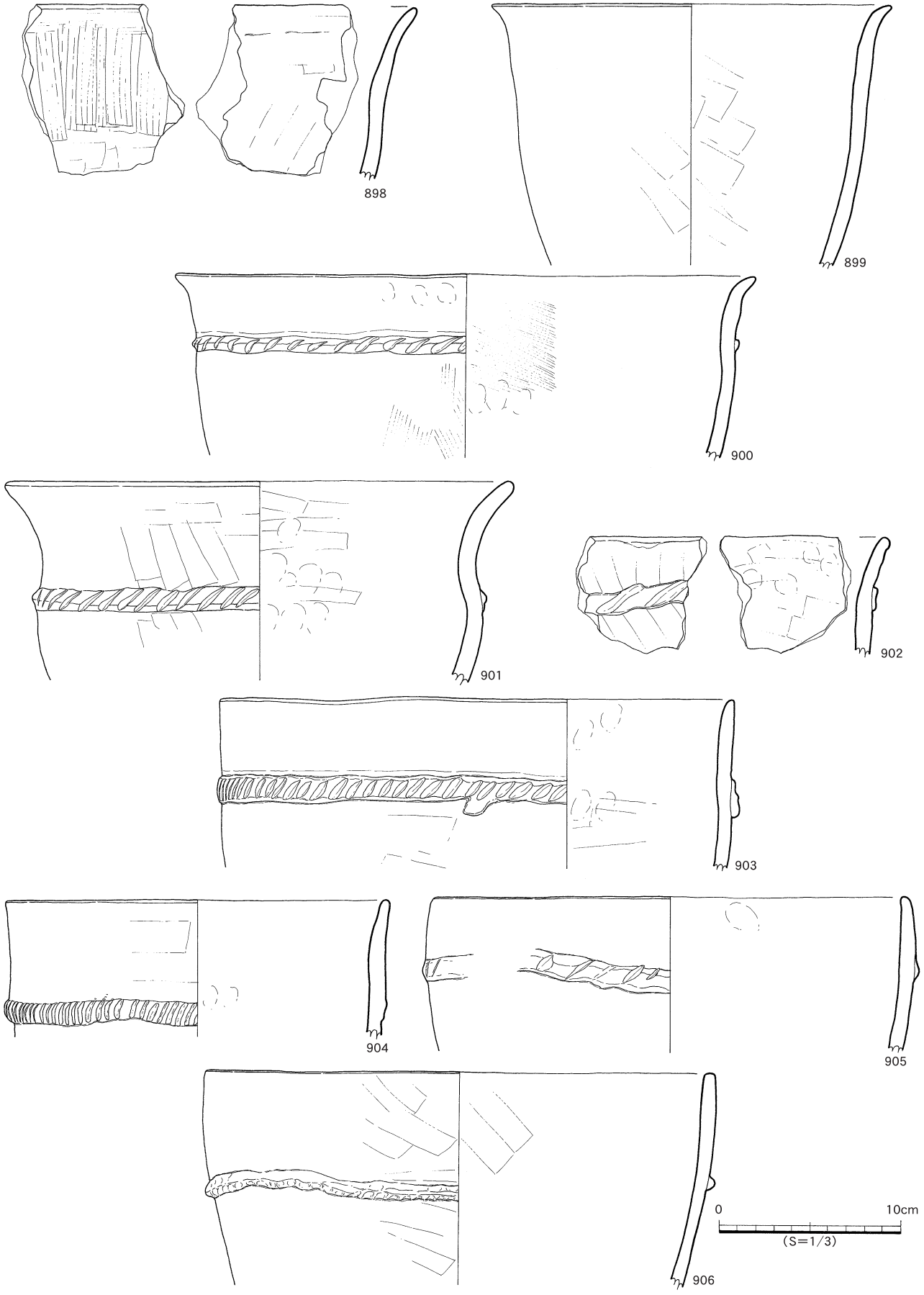




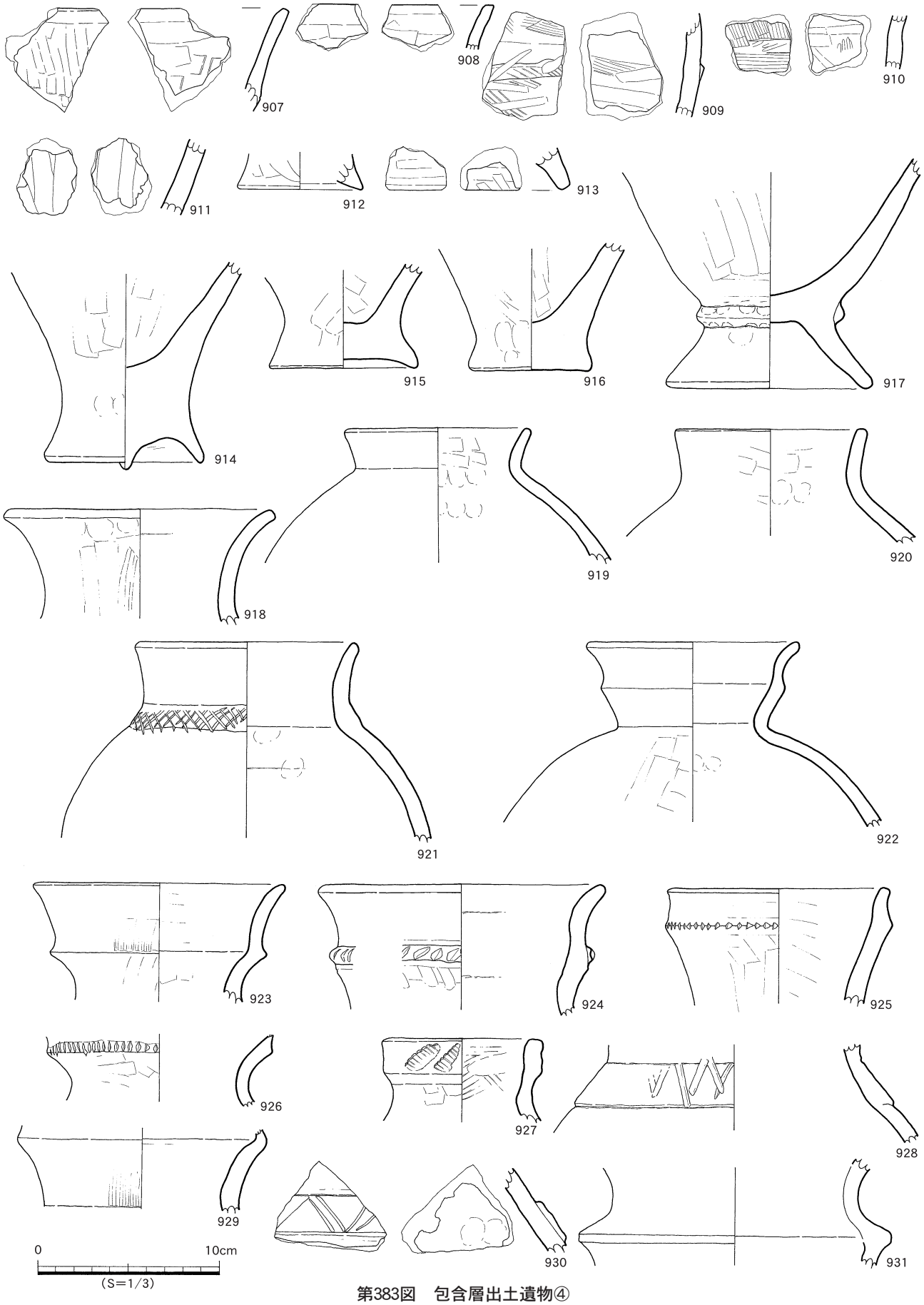




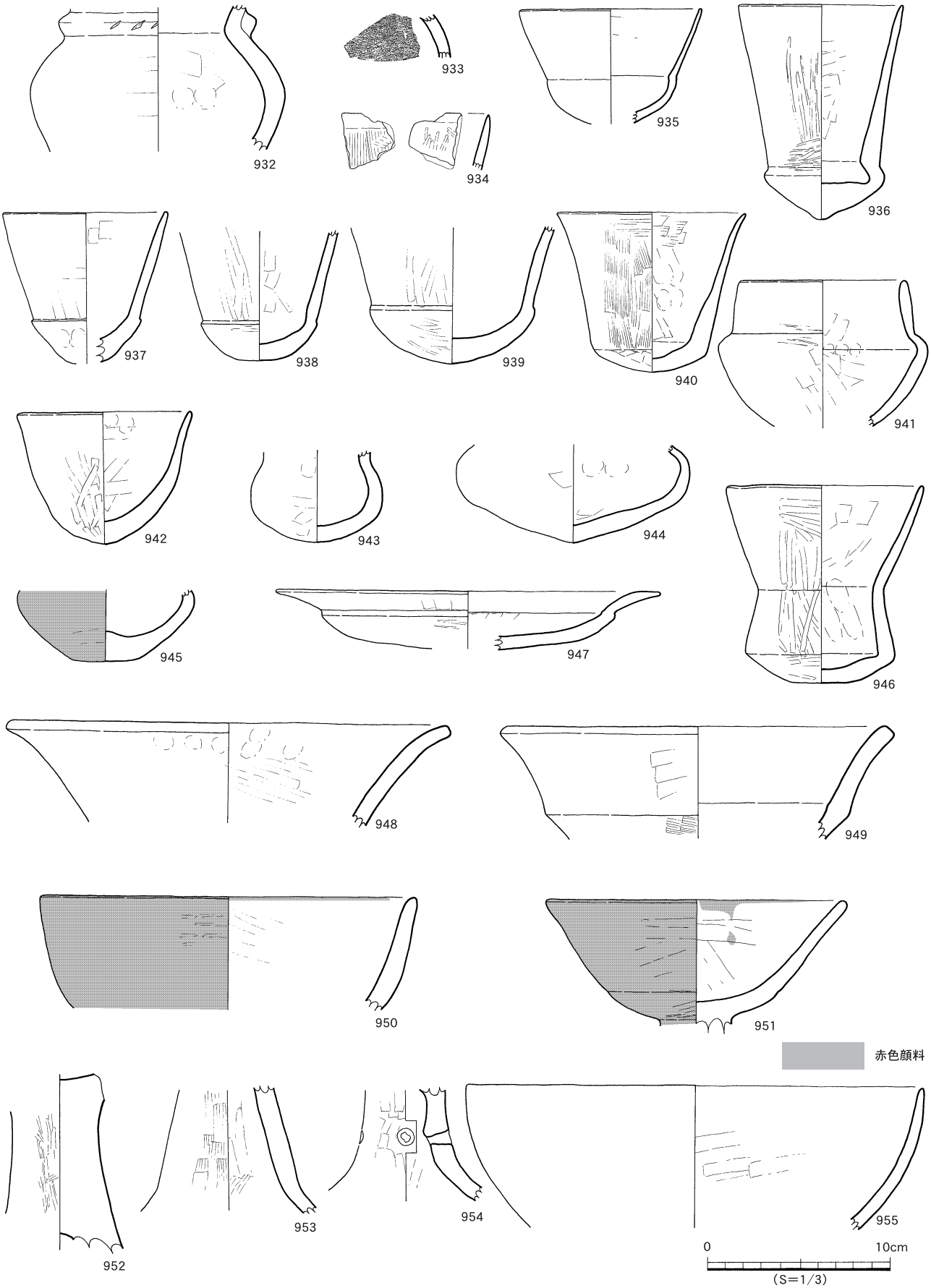
第381図　包含層出土遺物②



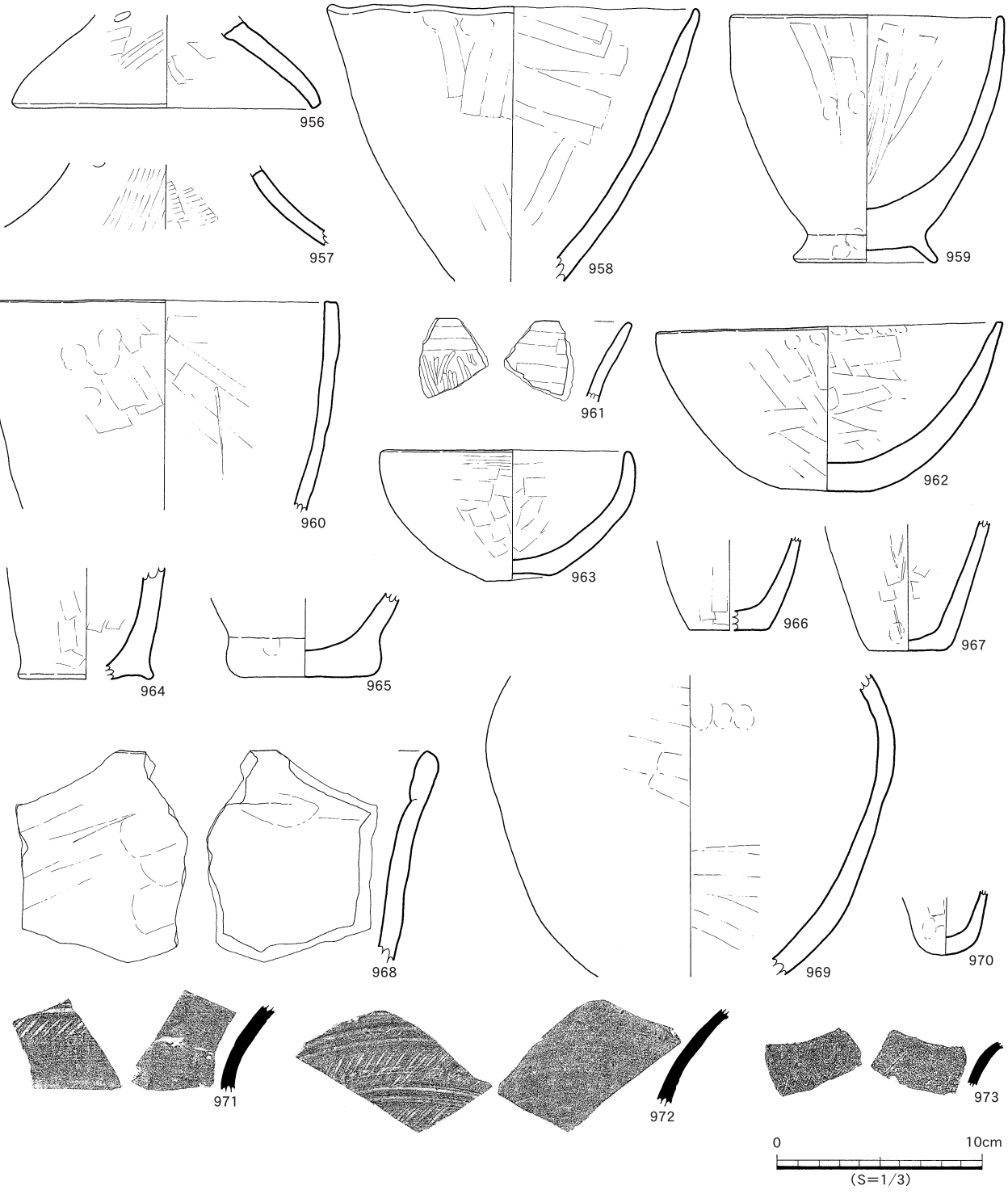
第382図　包含層出土遺物③



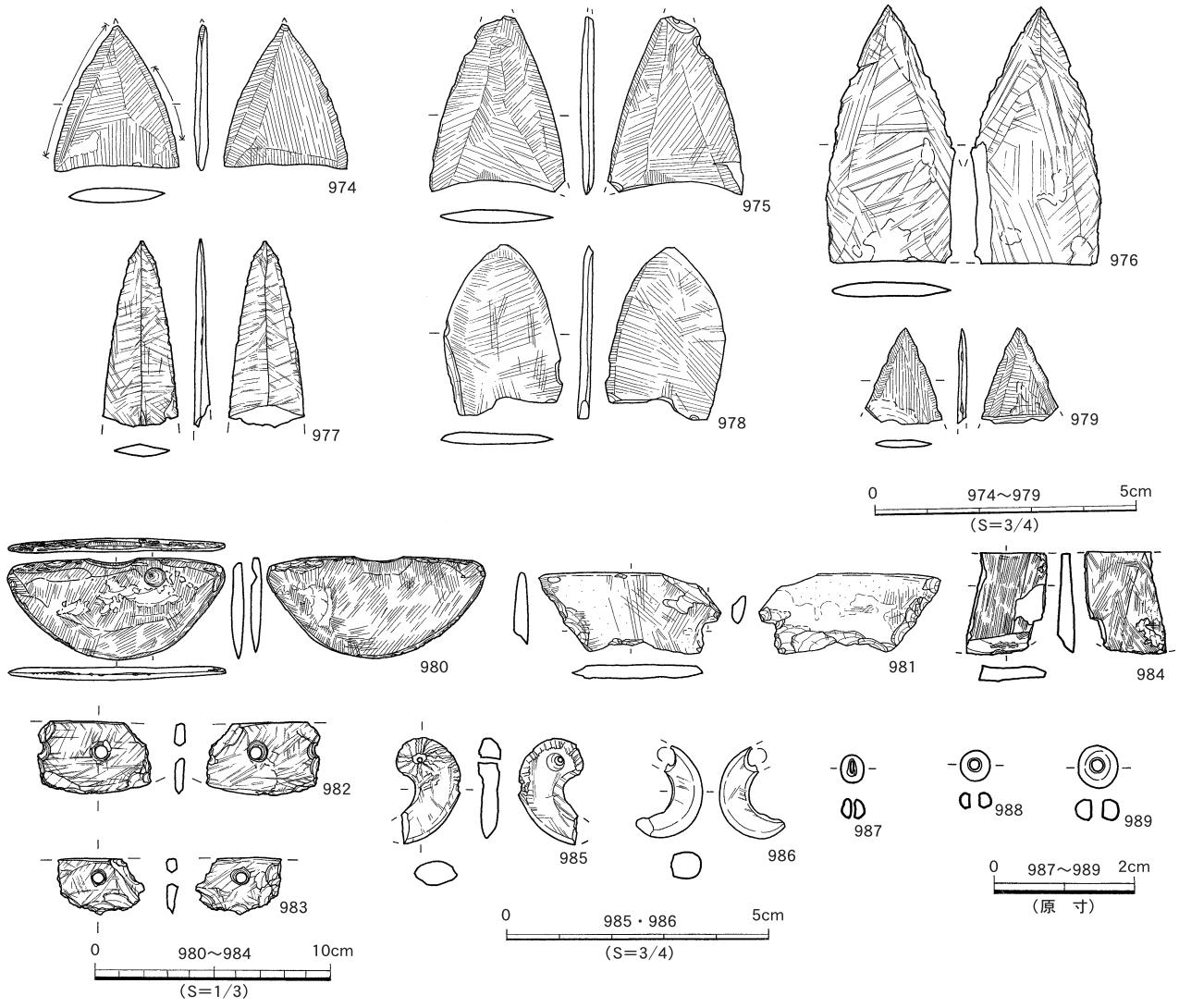
第383図　包含層出土遺物④



第384図　包含層出土遺物⑤



第385図　包含層出土遺物⑥



第386図　包含層出土遺物⑦

4　古代の調査

⑴　調査の概要

古代の調査は，主にⅡ層で行ったが，遺物包含層の残存状況は悪く，遺構検出はⅥ層のアカホヤ火山灰層上面で行った。遺物包含層が残存している場合，大型の破片についてはトータルステーションで取り上げを行い，小破片はグリッドごとに一括取り上げを行った。

遺構は，掘立柱建物跡が１棟，土坑が３基検出されている。遺物は，下流側調査区（46区～57区）に集中している。主な遺物としては，土師器（坏，埦，皿，小皿，甕，鉢，甑，移動式竈，土錘，焼成粘土塊），黒色土器Ａ類，黒色土器Ｂ類，須恵器（坏，甕，壺），緑釉陶器，越州窯系青磁，砥石，軽石などがある。なお，遺物包含層から出土した遺物総数は5,736点に及び，第392・393図に出土状況を示した。

⑵　遺構

掘立柱建物跡（第389図）

Ｇ・Ｈ－21区で検出された。規格は２間×３間で，大きさは4.0m×6.0mである。柱穴の深さは，最も浅いもので32㎝，最も深いものでは66㎝となるが，残存値で55～60㎝程度の深さのものが多い。柱穴内からは４点の遺物が出土し，このうち３点を図化した。

１はピット３より出土した土師器で坏の口縁部から底部で，胴部～底部間にふくらみがあり，口縁部外面，胴部～底部間内面にススが付着する。

２，３はピット６より出土した土師器である。２は，坏の口縁部から底部で口径12.8㎝，器高4.5㎝を測り，外面胴部から底部にかけてススが付着する。３は埦の底部で底径5.8㎝を測り，内外面にススが付着する。

古代土坑１号（第389・第390図）

Ｉ－22区で検出され，前述の掘立柱建物跡と位置的に近い。径70㎝×70㎝のほぼ円形を呈する。検出面からの深さは５㎝とかなり浅い。埋土の大部分はⅡ層の黒褐色土で，土師器の埦が出土したことにより，古代の遺構と認定することができた。土師器埦が１点と礫１点が出土し，このうち土師器埦を図化した。

４は土師器埦の胴部から底部で，充実高台をもつ。底径は5.4㎝。内外面ともヨコナデ調整を施し，底部にヘラケズリの痕跡がある。

古代土坑２号（第389・第390図）

Ｅ－45区で検出され，径140㎝×150㎝の円形を呈する。検出面からの深さは30㎝とかなり深い。埋土はⅡ層の黒褐色で，アカホヤ小ブロックが混在する。土坑北側に石皿片の集中が見られ，その中から土師器の甕が出土した。遺物は29点出土し，５点を図化した。

５は土師器埦の口縁部で，先端は直線的である。６は土師器甕の口縁部から胴部である。外面にふきこぼれが見られ，内外面ともにハケ，ナデの調整が施される。７は黒色土器Ａ類の埦で，口縁部は外反する。外面にススの付着が見られる。８は砥石で天草石を用いている。９は石皿で，破片４点が接合した。

古代土坑３号（第389・第391図）

Ｅ－45区で検出され，径70㎝×70㎝の円形を呈する。検出面からの深さは20㎝である。埋土はⅡ層の黒褐色で，アカホヤ小ブロックが混在する。

遺物は50点出土し，12点を図化した。

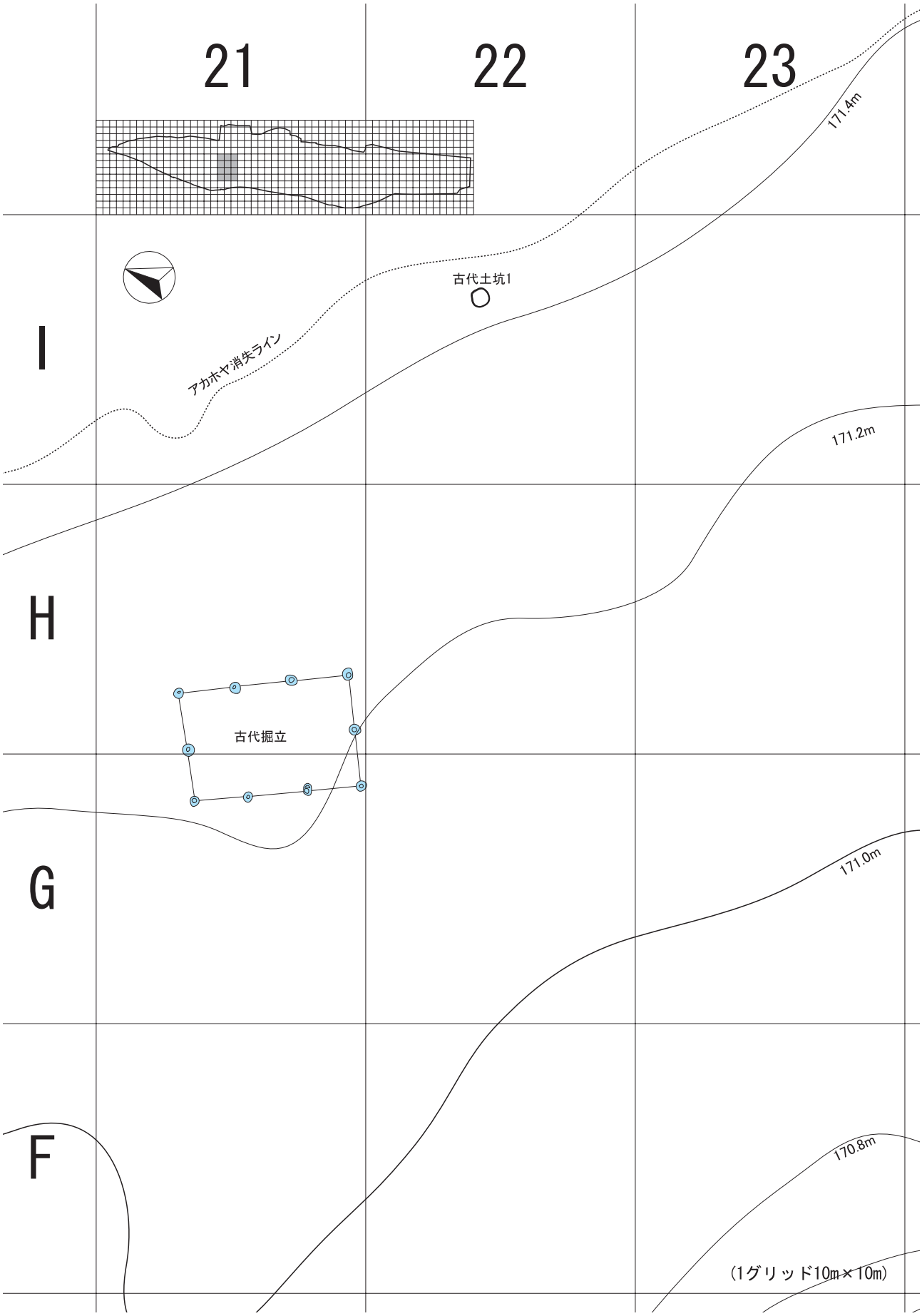
10，11は土師器埦の口縁部から底部である。10は充実高台を持ち，底部はヘラ切りを施し，口縁部先端は直線である。11は残存状態も良好で，口縁部先端がやや外反する。12は土師器埦の口縁部から胴部で外面をナデ調整する。口縁部の先端は直線になる。13，14は土師器埦の胴部から底部で，13はハの字状の高台をもつ。14は高台が欠損し，内外面ともに胴部下位にススが付着する。15，16は黒色土器Ａ類埦で，15は内面をミガキ，外面をヨコナデで器面調整する。16は高台が欠損する。底部を含む外面にススが付着し，内面にはヨコナデ，ミガキの調整を施す。17は黒色土器Ａ類埦の胴部である。18は土師器甕の口縁部から胴部で，内面にススの付着と同時に，ケズリと指頭圧痕が見られる。19は土師器甕の胴部で，内外面ともハケメを施し，ススが外面に付着する。20は

古代掘立柱建物跡　柱穴計測表

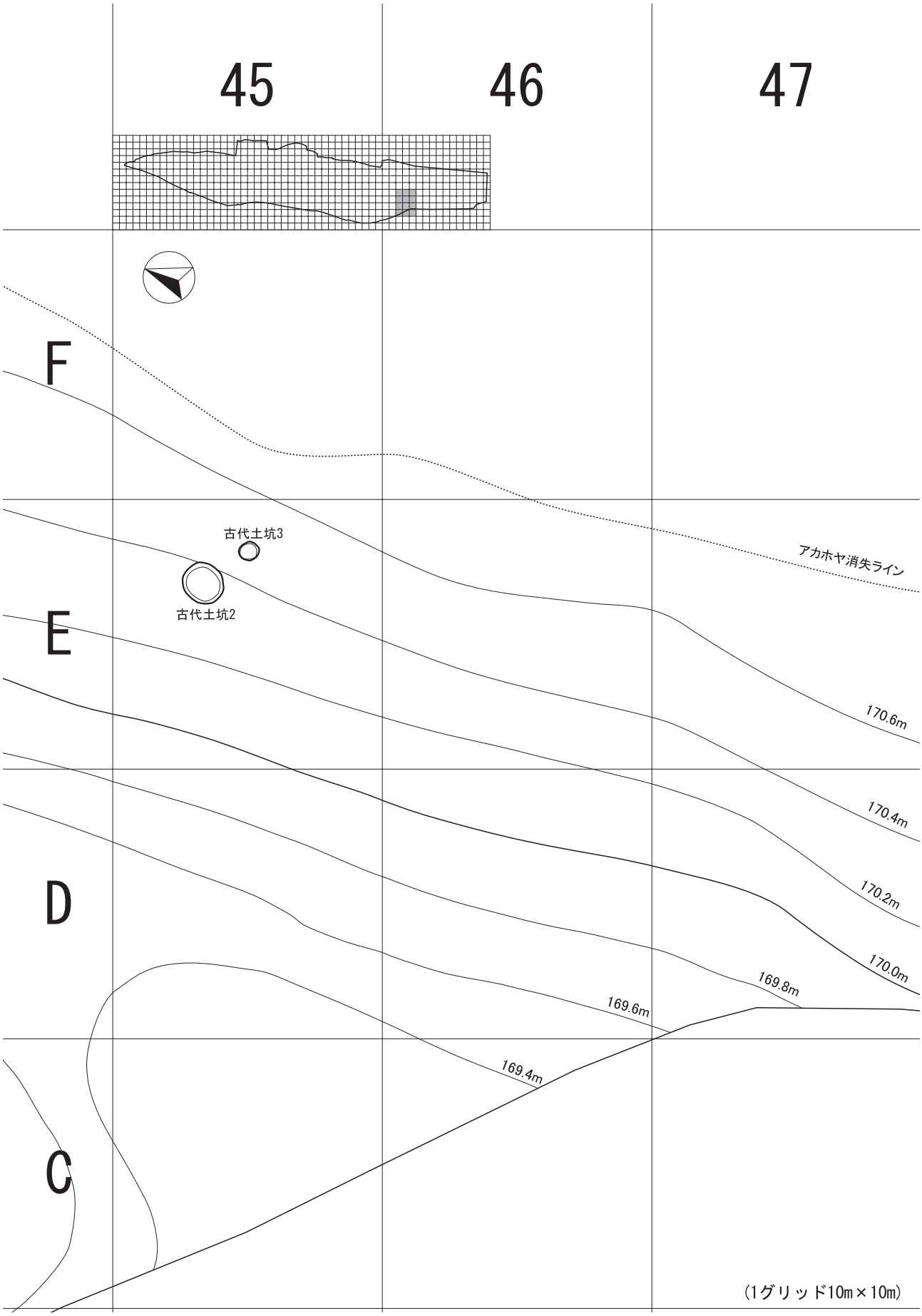
柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	38	35	63
2	43	38	32
3	46	36	45
4	45	38	62
5	44	39	59
6	40	36	66
7	45	30	59
8	38	34	50
9	38	33	55
10	46	44	47

古代掘立柱建物跡　規模表

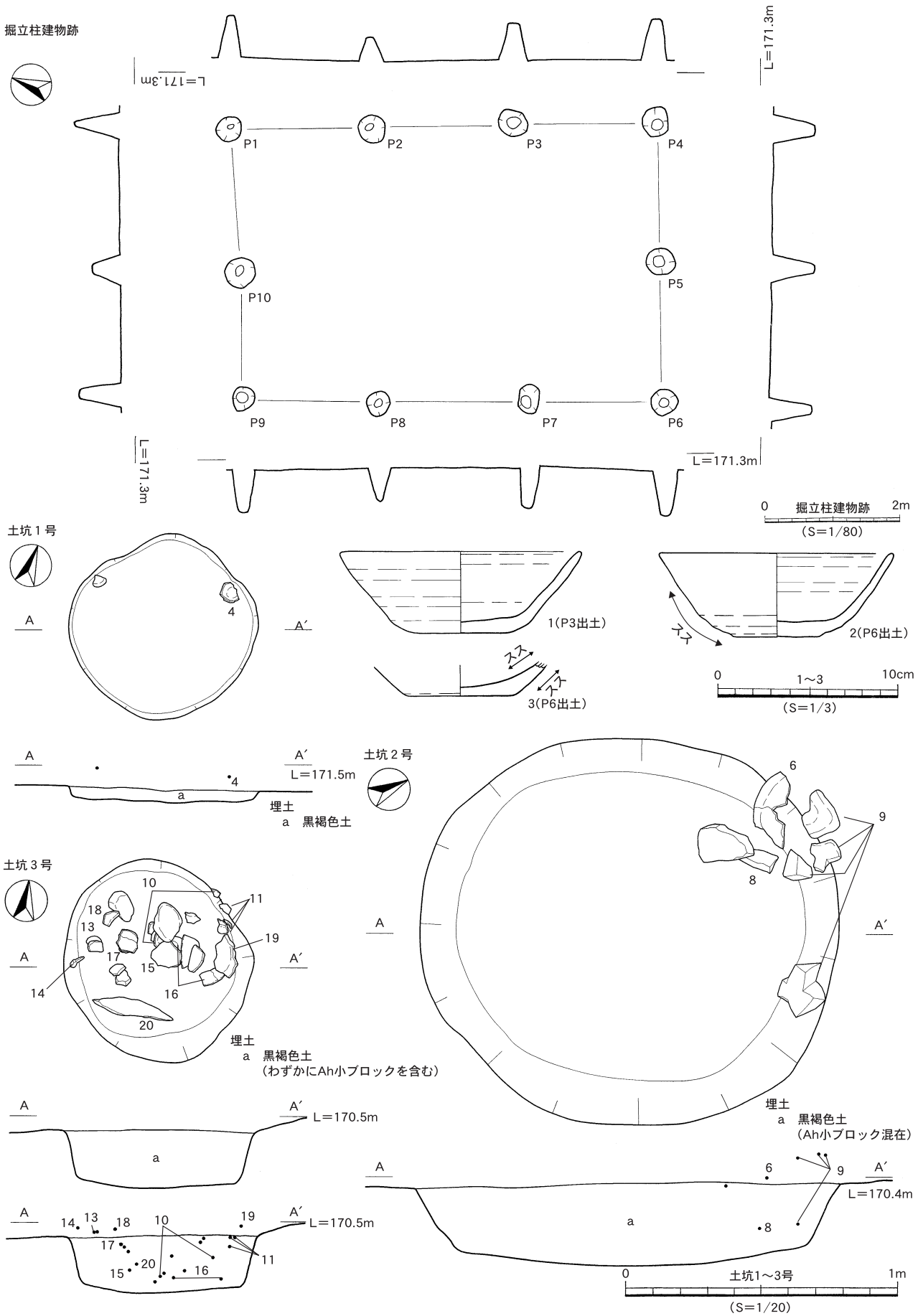
梁方向＜タテ＞		桁方向＜ヨコ＞	
柱穴間	距離(m)	柱穴間	距離(m)
1～9	4.06	1～4	6.33
1～10	2.1	1～2	2.07
10～9	1.96	2～3	2.13
2～8	4.05	3～4	2.13
3～7	4.1	10～5	6.25
4～6	4.1	9～6	6.22
4～5	2.06	9～8	2
5～6	2.04	8～7	2.18
		7～6	2.04



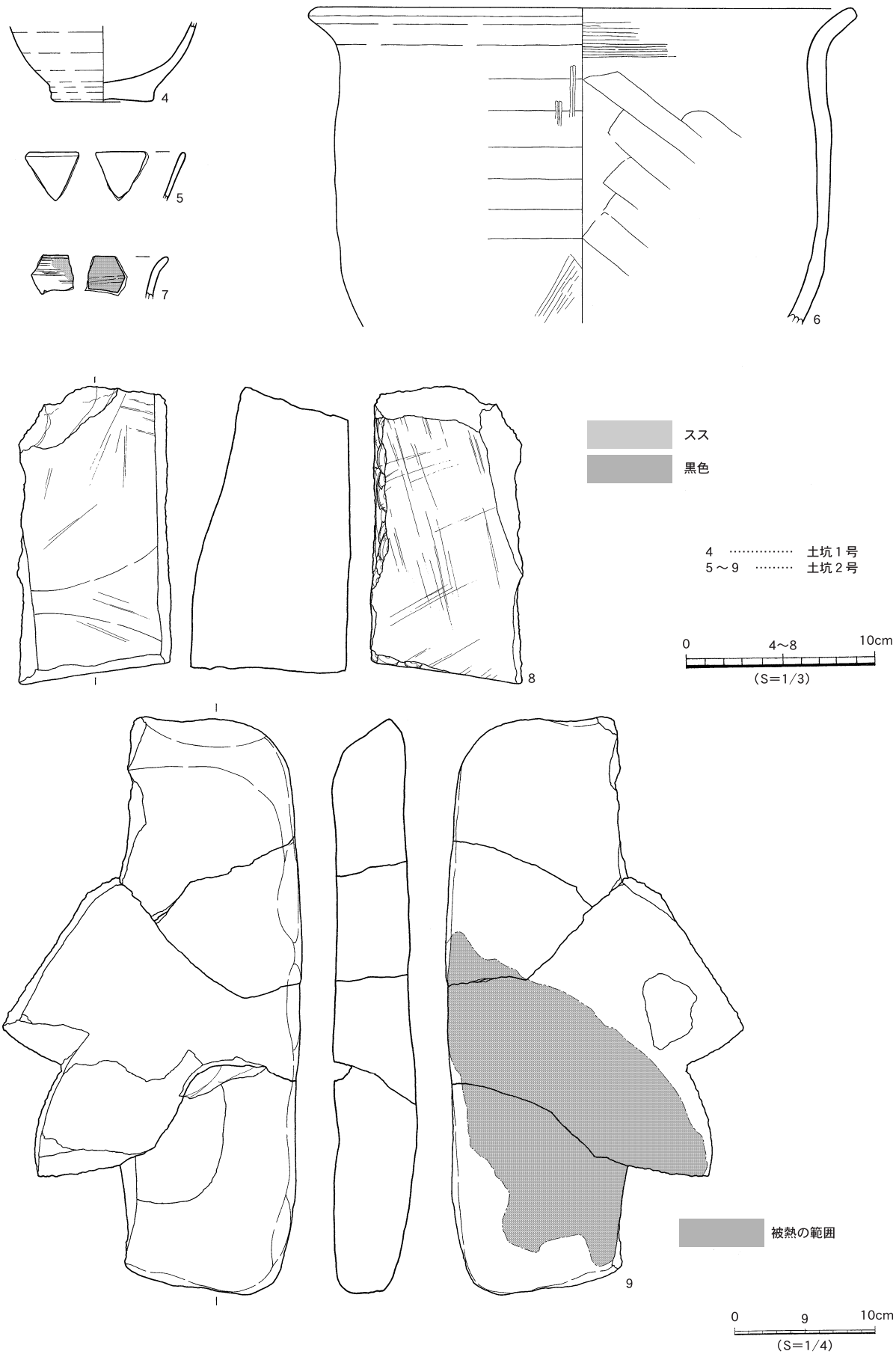
第387図　遺構配置図①



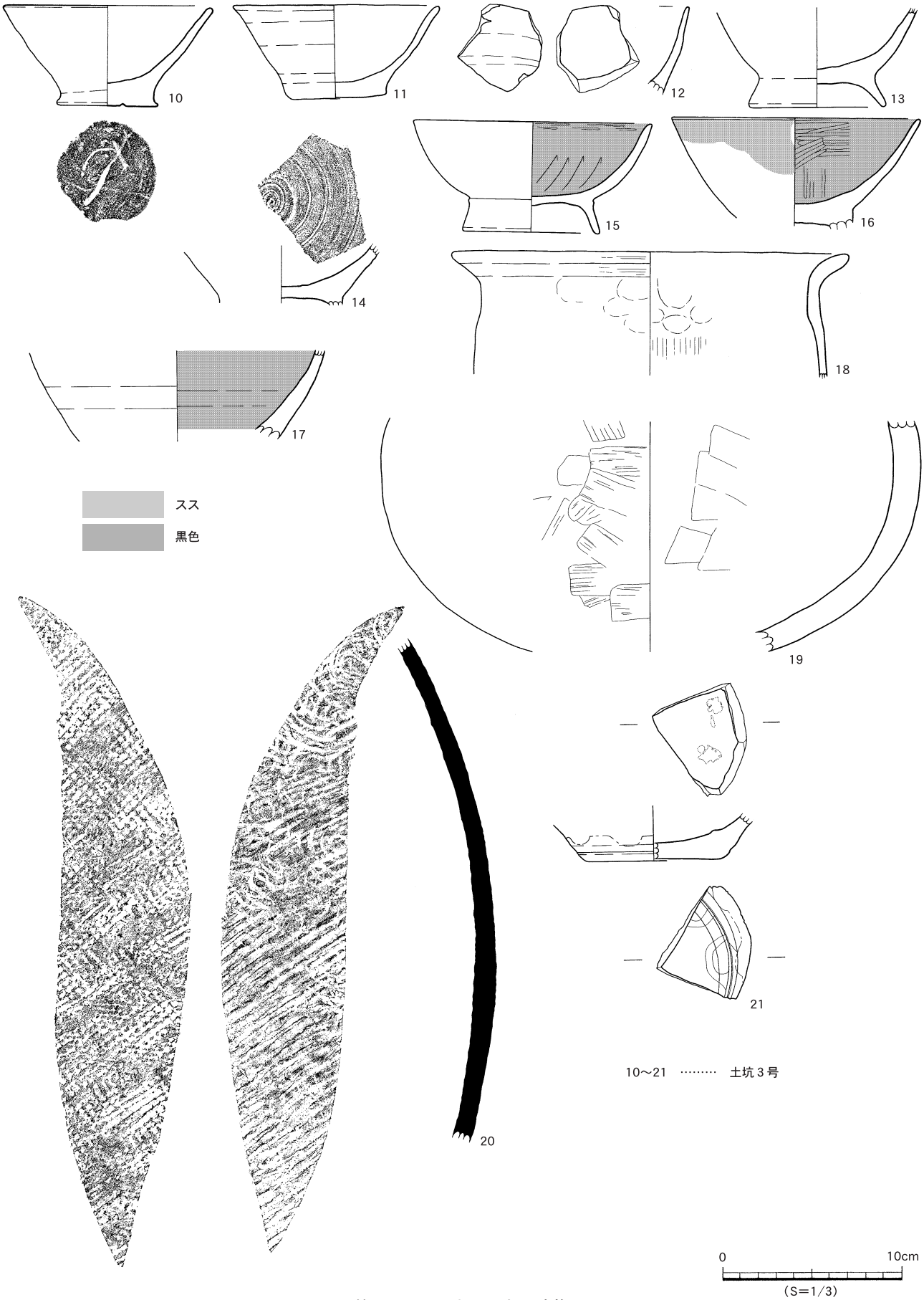
第388図　遺構配置図②



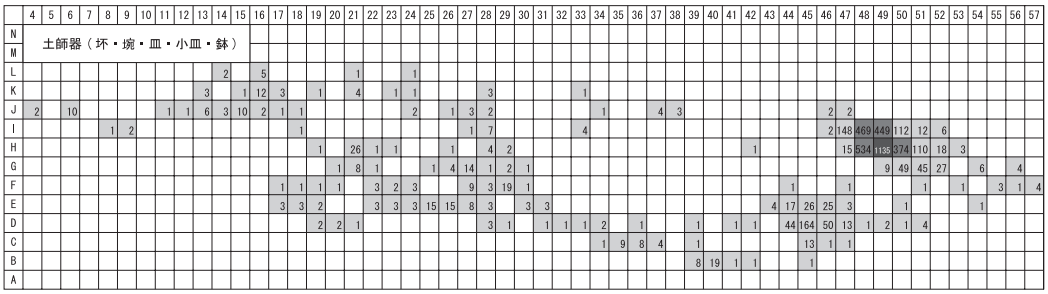
第389図　掘立柱建物跡・出土遺物，土坑１～３号

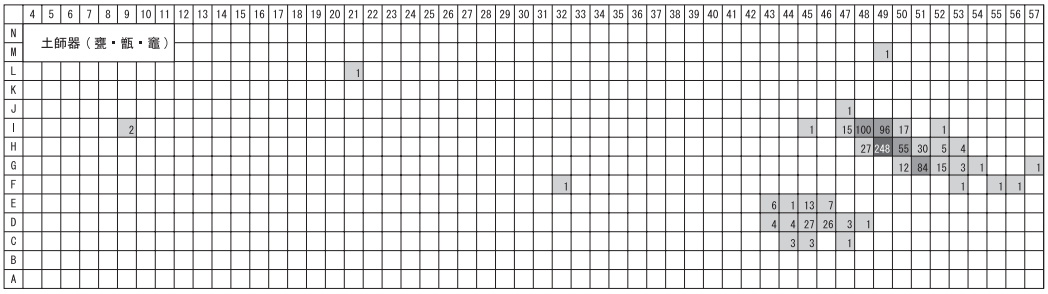


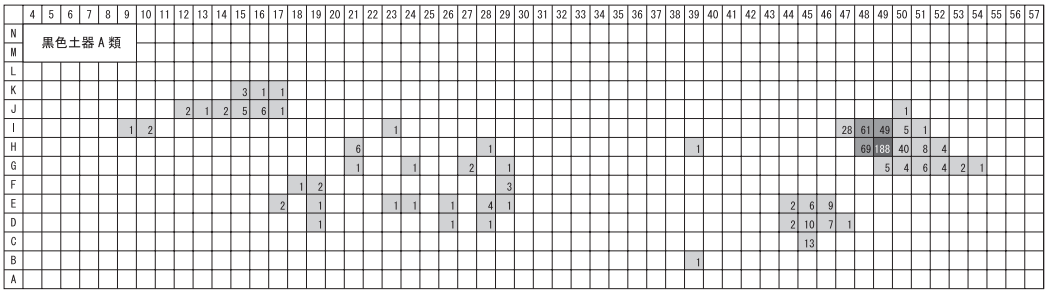
第390図　土坑１号，２号出土遺物

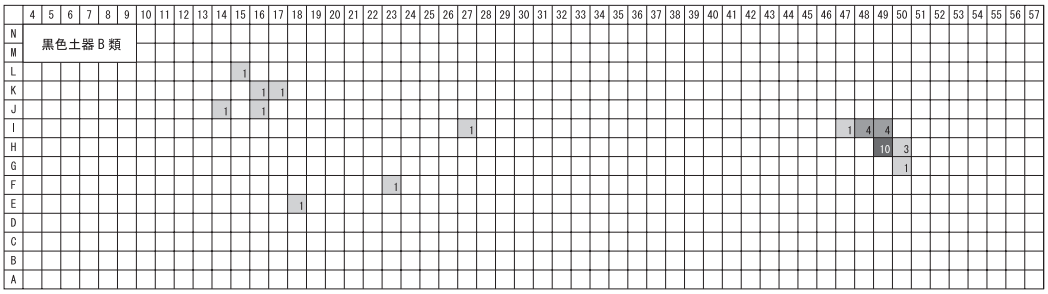


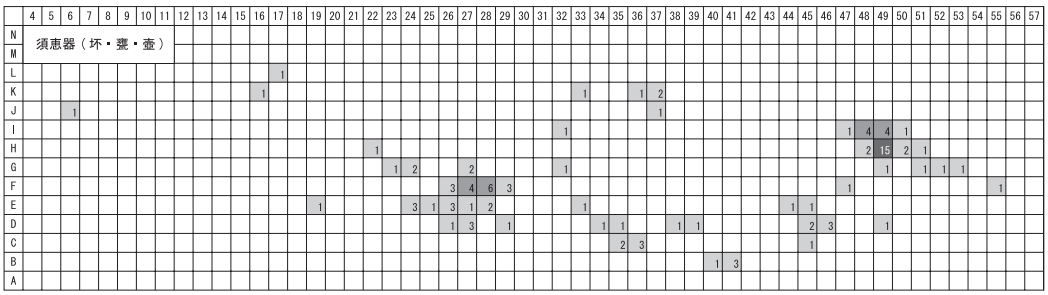
第391図　土坑３号出土遺物

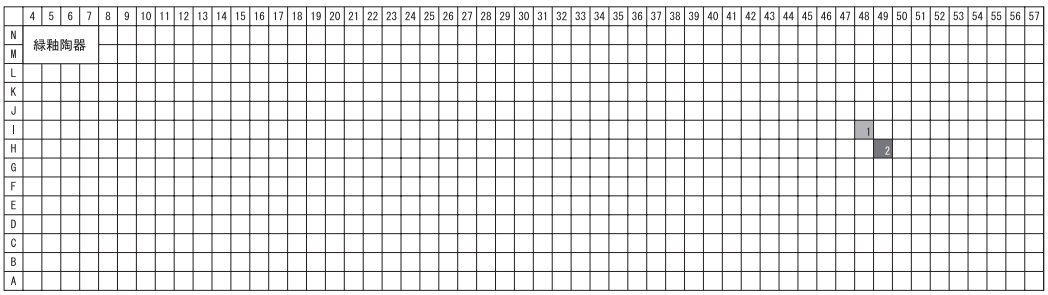




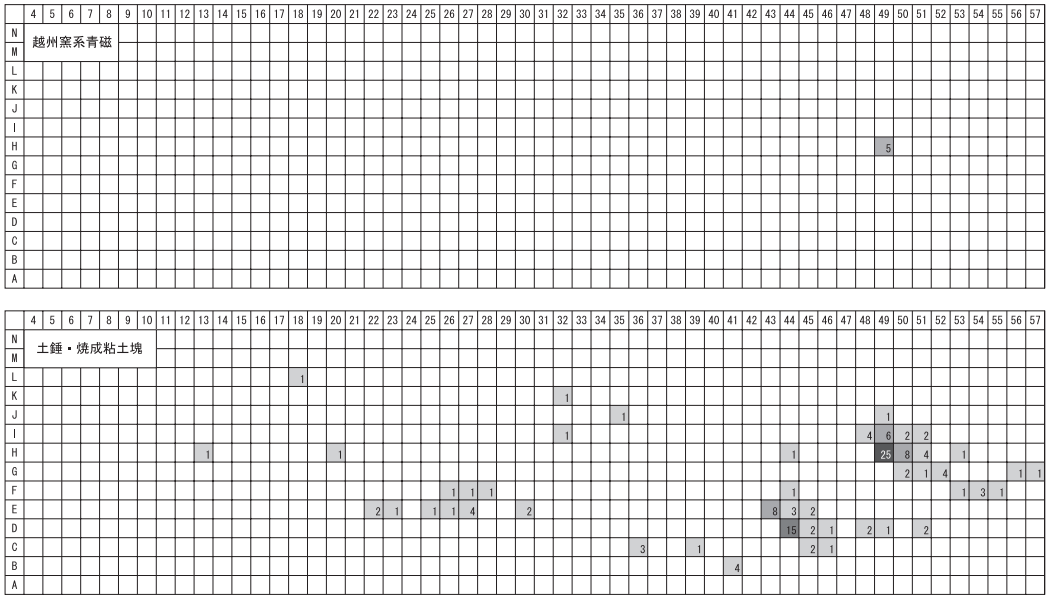








第392図　包含層遺物出土状況①



第393図　包含層遺物出土状況②

須恵器甕の胴部で，外面を格子目タタキ，内面を平行文タタキ，同心円当て具痕で器面を調整する。21は越州窯系青磁の底部である。

⑶　包含層

土師器

坏，埦，皿，小皿などの供膳具や，甕，鉢，甑などの煮炊具，黒色土器Ａ類，黒色土器Ｂ類が確認できた。また，土製品で，移動式竈，土錘，焼成粘土塊なども出土した。総点で5,627点出土し，122点を図化した。

坏（第395図22～30）

９点を図化した。22～24は口縁部から底部で，口縁部先端が直線になる。22は立ち上がりに沈線を施す。内面にスス付着が見られるのと同時にヘラケズリの痕跡がある。23の底部付近には，削り取られた痕跡があり，内外面にナデを施す。24は底部から胴部までは平坦で，胴部付近で多少のふくらみを呈する。底部にはヘラケズリの痕跡があり，胴部との境目はほとんどない。

25～29は口縁部から胴部で，内外面ともナデを呈する。29以外は口縁部先端が直線となり，25は立ち上がりで薄くなったのち口縁部付近で厚みを増す。26～29の立ち上がりは厚く膨らみをもち口縁部へと続く。

30は胴部で，胴部下位または底部上位に位置する。器面調整は内面ヘラミガキを呈する。

埦（第395図31～60，第396図61～78）

48点を図化した。31～34は口縁部から胴部を残す。Ｈ－49区Ⅱ層より出土し，口縁部は直線に近い。31は立ち上がりがやや内弯する。32は立ち上がりが直線的である。33の立ち上がりは胴部付近でややふくらみをもつ。34は底部付近の胴部になり，口縁部先端にやや厚みがある。

35～39は口縁部から胴部を残し，口縁部先端が外反する。38以外Ｈ－49区Ⅱ層より出土し，38はＦ－28区Ⅱ層で出土，立ち上がりに厚みを伴う。35はふくらみ後直線の立ち上がりを備え，大きめの埦となり，内外面ともナデを施す。36，37はふくらみ後立ち上がる。39は胴部付近で厚みがあり，ふくらみのち直線になる。

40～44は口縁部から底部で，充実高台を持ち，底部にヘラ切りの痕跡がある。40はほぼ完形で出土した。口縁部にわずかなススの付着があり，内外面に工具ナデが施される。41，43は底部と胴部の境目が区別でき，くの字状で屈曲し，胴部で外反し口縁部へと続く。ススが外面で口縁部全体に，内面で口縁部の一部に付着する。42は高台左側に小さな突出部があり，内弯後立ち上がり胴部へ続き，口縁部先端は直線に近い。外面では胴部表面に線刻，内面に指頭圧痕が見られる。43は胴部がふくらみを持ち，口縁部が直線となり，内面にケズリを残す。44は口縁部手前でややくぼみ後直線になる。

45～63ともに充実高台を含む平底を底部とする。底部にヘラ切りの痕跡があり，底部と胴部の境目が明瞭である。47，48，52，53，56，57，58，59，60，62はＨ－49区Ⅱ層から出土した。45はくの字状から胴部へと続く。内外面に赤茶色の斑点が点在する。46は，外面で胴部表面から底部に赤褐色の斑点が点在，内面にも赤褐色の斑点が点在し，充実高台上面から底部に同心円状のケズリが確認できる。小さな突出部が胴部まで続き，口縁部手前で外反し，厚みが薄くなる。47には稜線が入る。外面に２か所のスス付着と内面にナデを形成する。48は，底部から胴部はなだらかに立ち上がり，内面にケズリらしきものが見られる。50は，底部付近胴部で屈曲し胴部へ続き，外面にはスス付着の痕跡がある。51は胴部はじめの部分で微妙なふくらみの後口縁部へ続く。49，51，

53，54，55，56は，底部の接地面にわずかな突帯らしきものが見られる。52の立ち上がりは底部から胴部にくの字状に屈曲後，口縁部へと続き，内面に渦巻き状のケズリを呈する。53は内面にススが付着し，十字を模したヘラ線刻が確認できる。55の底部には平行文の跡らしきものが確認できる。57の底部外面に反時計回りの渦巻きがある。58は外面にススの付着と指頭圧痕がある。59の立ち上がりはなだらかに口縁部へと続く。60～62は内外面ともに茶色の斑点を呈する。63は高台の接地面にわずかな凹凸が見られ，底部外面に５本の線が確認できる。

64～71はハの字状高台で底部を残し，64は残存状況がよく，底部裏面に圧痕がある。65は内外面ともにナデを呈する。66は内面に反時計回りの渦巻きをもつ。67は立ち上がりがくの字状で，内面を木の葉模様で呈する。68は高台部分が欠損し，内面に木の葉模様が付着している。69は内面にススの付着と，十字のヘラ記号が２か所確認できる。70は短い高台を維持する。71は他と比べて，底部裏面がやや直線に近い。

72～78は，高台が欠損しているものである。72は内面に布目が圧痕されている。外面にスス付着が濃い部分，薄い部分各１か所ある。73は底面ヘラケズリに伴う立ち上がりと，内面にヘラミガキとススが付着する。74は外面にヘラ記号，内面にタタキ痕を施す。75は内面を十字ヘラ記号で調整する。76は高台をヘラで削られ，摩滅する。内面に指頭圧痕が確認できる。77はゆるやかに立ち上がり，内面にタタキが見られる。78は内面にヘラミガキを施す。

皿および小皿（第396図79～81）

３点を図化した。79は皿の口縁部から胴部で，ススが外面に少し胴部付近に付着する。80は皿の底部で，内面に凹凸がある。81は完形品としての小皿で，口縁部の先端がほぼ直線になる。底部はヘラ切りで，内外面ともススが付着する。

甕（第396図82～86・第397図・第398図97・98）

17点を図化した。82～86は口縁部が外反し，口縁部と体部（頸，肩，胴）の間に稜線がない。82は内外面にス付着，内面にヘラケズリを施す。83は内外面にナデ，ヘラケズリを呈し，外面にハケメがある。84は内面にヘラケズリ，指頭圧痕を確認できる。85，86は内外面ともスス付着，ハケメを呈する。86は口唇部手前に凹みが見られる。

87～96は口縁部が外反し，口縁部と体部（頸，肩，胴）の間に稜線がある。87～91は，くの字状に外反する。87は外面にスス付着と指頭圧痕があり，内面はヘラケズリを呈する。88は外面をヘラナデで表面全体にススが付着し，内面に指頭圧痕を施す。89は内面にヘラケズリ，外面に指頭圧痕が見られる。90は内外面ともにケズリがあり，91は外面にススが付着する。92はくの字状に外反するも窄んだ様相を呈し，内外面ともにススを付着する。93～96は口縁部がより外反する。93は内面にヘラケズリ，外面にハケメを呈する。94，95は外面にススを付着し，95の内面に指頭圧痕がある。

97，98は胴部で，外面に格子目タタキを呈し，97の内面にはケズリが確認できる。

鉢（第398図99～101）

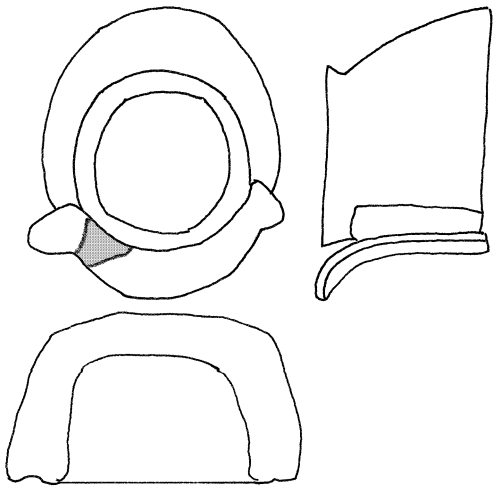
３点を図化した。99は，外面にススが付着する。胴部から口縁部までの立ち上がりは，口縁部手前で厚みがうすくなる。100の胴部から口縁部にかけての立ち上がりは，数回の凹凸を経て口縁部へと続く。101は99と対照的に内外面ともススの付着が見られなかった。また，脚の外面に指頭圧痕，内面に稜線らしきものが確認できた。

甑（第398図102・103）

２点を図化した。102は内面にヘラケズリ，外面にケズリを施す。103は把手と推定される。

移動式竈（第398図104）

104は移動式竈の一部と思われる。小破片だが，焚き口の上部で庇状を呈するものと推定される。また，中央部の方が幅広になる状況が観察される。下面は全面にススが付着し，復元図のアミ伏せ部分の位置に相当すると思われる。

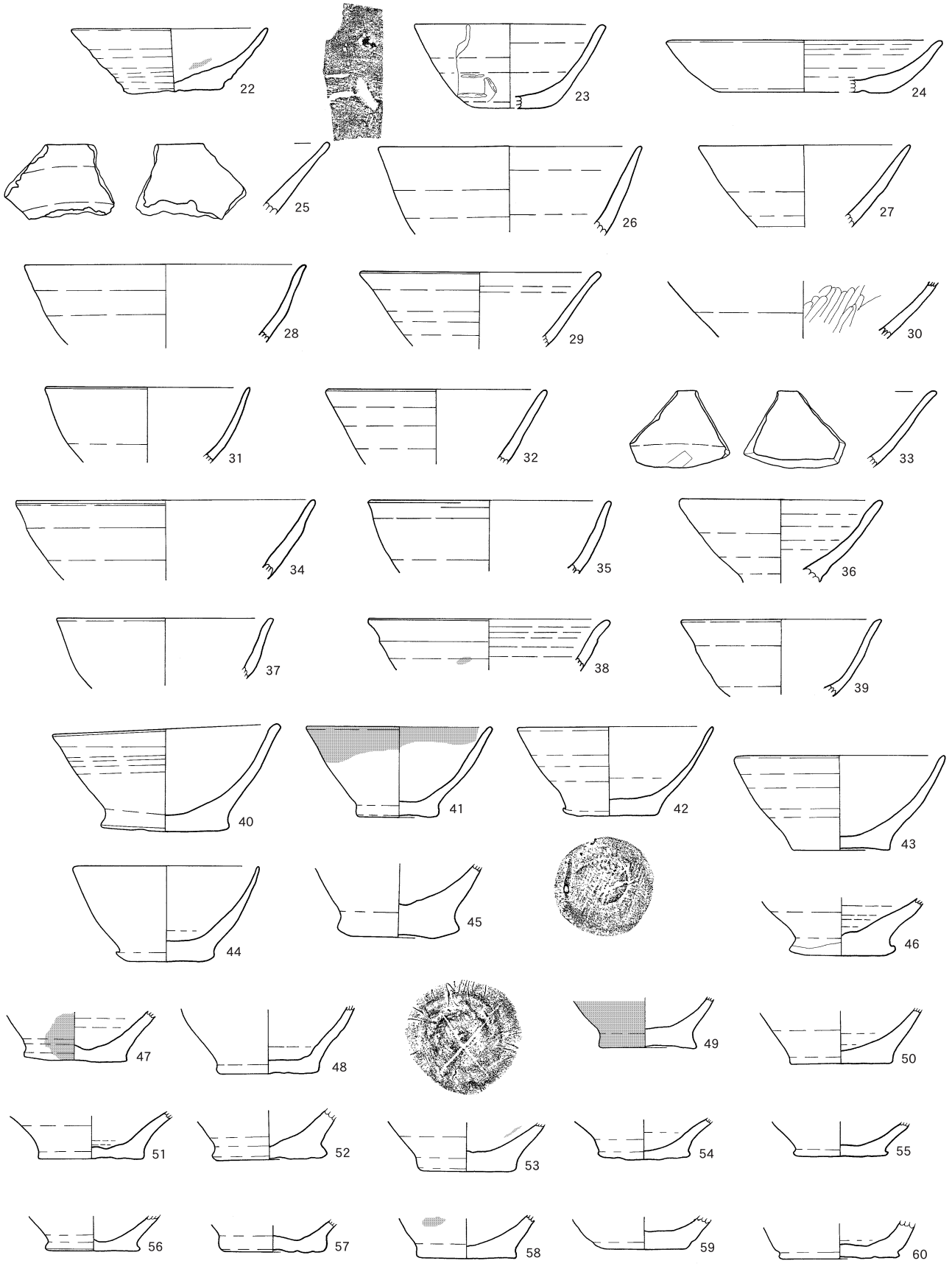


第394図　移動式竈の復元図

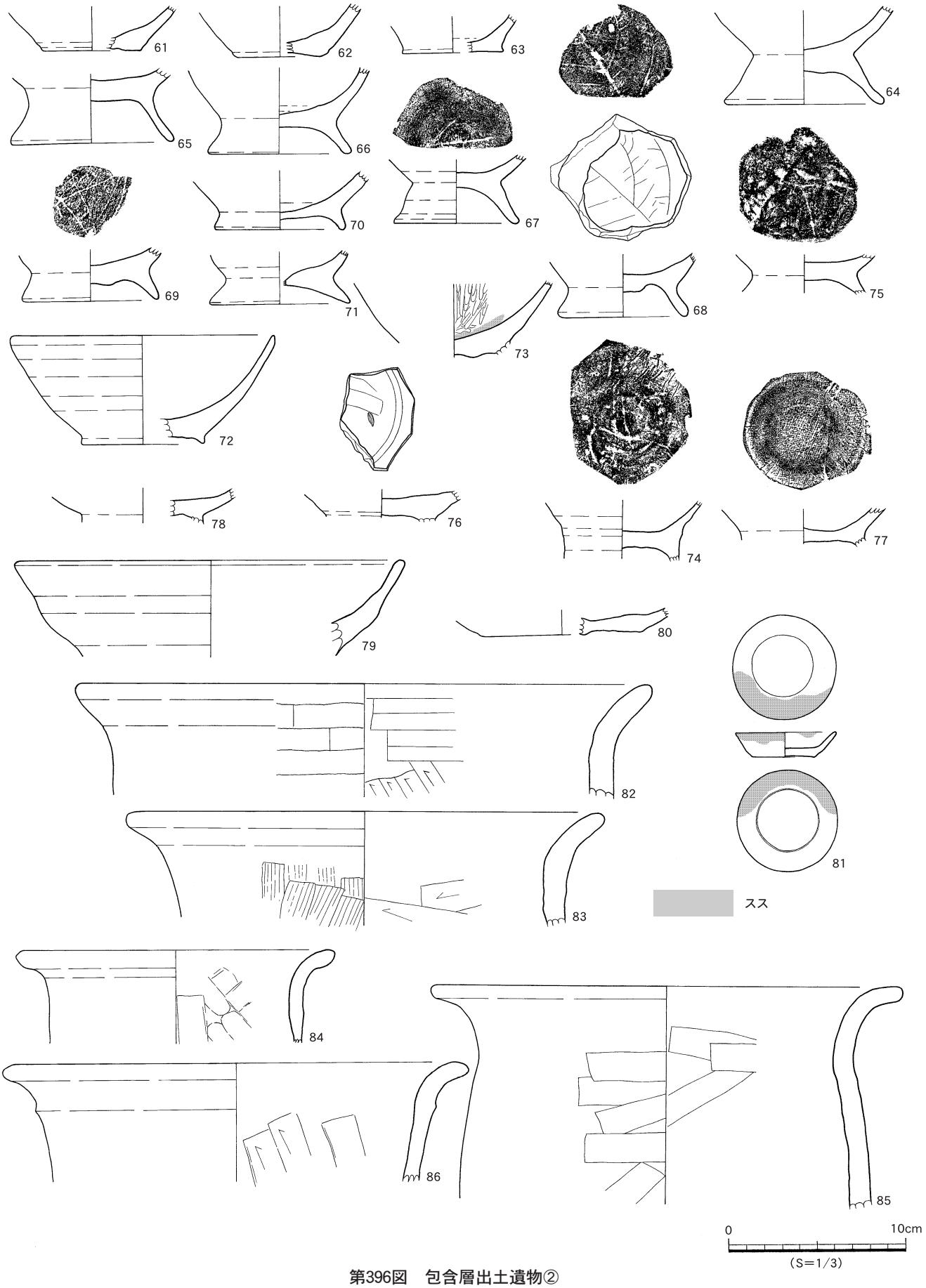
黒色土器Ａ類（第398図105～121・第399図122～126）

22点を図化した。105の底部はハの字状高台をもつ。底部よりくの字に反り，胴部付近でふくらみをもち，口縁部がわずかに外反する。底部内面にはミガキが施され，外面にはススが付着する。106は口縁部が外反する。底部には切り離しの痕跡があり，外面にススが付着する。

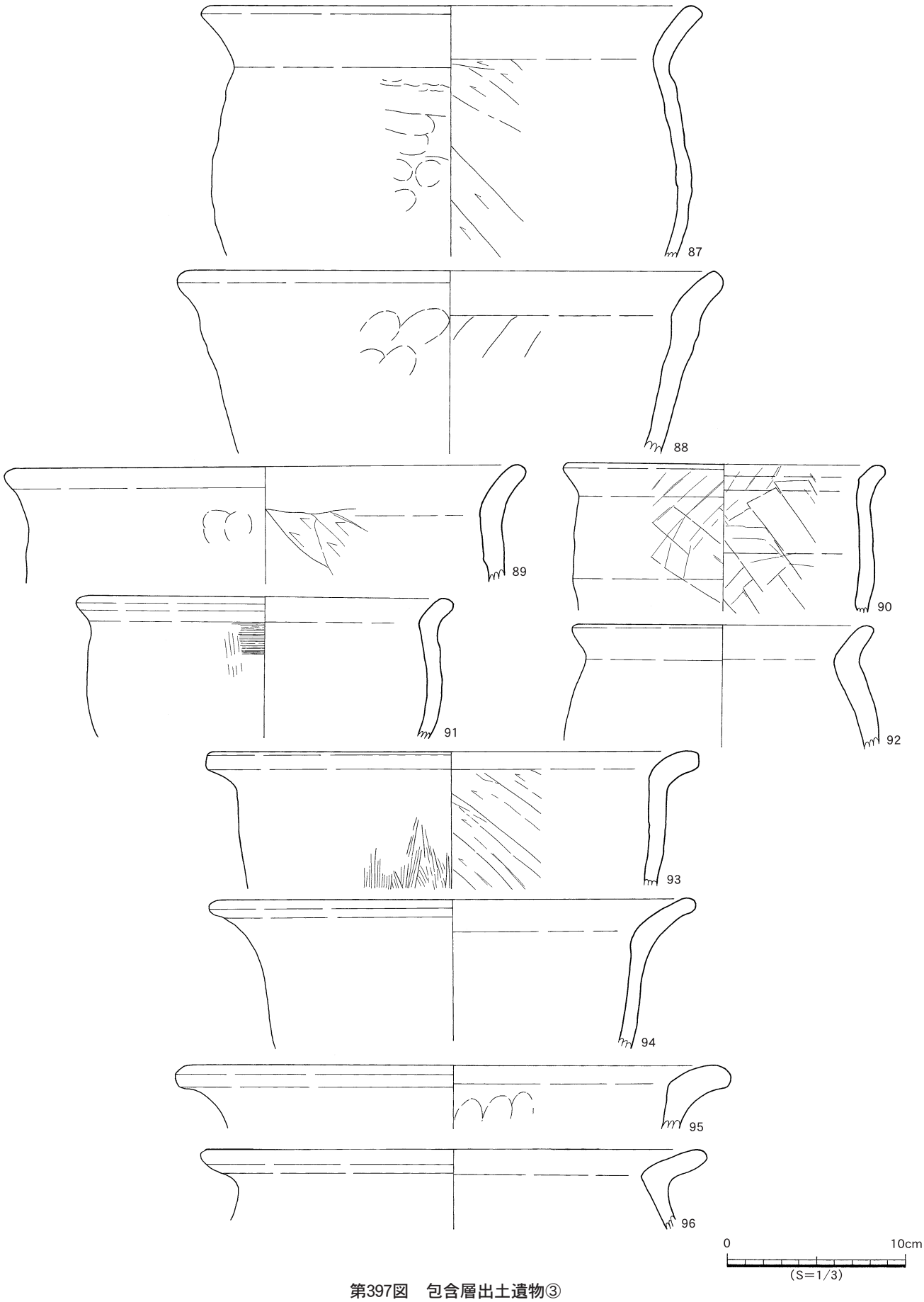
立ち上がりは胴部でわずかなふくらみの後107，109，111，112，114は口縁部が外反するのに対し，108，110，113は直線となる。107，108の内面にはヘラミガキが施される。108は黒色化が弱い。ススが付着している



第395図　包含層出土遺物①



第396図　包含層出土遺物②



第397図　包含層出土遺物③

ものもあり，111にも内面に，112，113は外面で確認できる。114は口縁部と胴部の境目に稜が見える。115は底部の高台と口縁部は欠損するが，底部から胴部下半分まで平坦，胴部上半分よりふくらみをもち口縁部へと続く。底部外面にケズリとヨコナデの痕跡，内面にヘラミガキの様相を呈する。H－49区Ⅱ層より出土した116は充実高台をもつ。底部と胴部をくの字形で屈曲のあと立ち上がる。

117～120はハの字状の高台をもち，立ち上がりは，底部からくの字状で胴部へと移る。117，118，121は底部外面にススの付着，内面にヘラミガキを施す。119，120は高台裏面右側に斑点状の塊が見られる。121，122，124，126は底部からＬ字状に屈曲し胴部へ移る。121は断面四角形の高台と内面にミガキを，122，126は断面三角形の高台をもち，外面底部にススを付着する。122は外面に黄斑点を施す。

123はH－49区Ⅱ層より出土し，丸底に近い平底の様相を呈する。底部と胴部の境界が不明瞭で，なだらかな立ち上がりと考えられる。内面にミガキがあり，外面にススの付着と底部に渦巻き状の線が施される。124，125とも断面三角形の高台をもち，底部と胴部の境目が明瞭で,高台から胴部で凹んだのち緩やかにのびる。125は底部外面に十の線刻がある。126には内外面とも明瞭なヘラミガキが見られ，高台部分にケズリ痕を呈する。

黒色土器Ｂ類（第399図127～130）

４点を図化した。内外面とも黒く燻した土器である。出土数は量的に見ても極めて少ない。埦のみ掲載した。

127はⅣ層からの出土で，胴部でふくらみをもち，口縁部手前で一旦凹み，先端に向かって外反する。内外面ともにミガキがかかる。

128～130は底部に高台を持つ。128は充実高台を呈し，高台部分を突出したあと胴部へと続く。129，130は輪高台（断面三角形）を残す。129は高台部分からすぐに胴部へ移り，内面にヘラケズリが推定される。130は内面にヘラミガキ，ヘラケズリ，外面にヘラケズリの痕跡を残す。

須恵器

坏，蓋，甕，壺などの器種が見られる。総点で107点出土し，18点を図化した。

坏（第399図131～133）

３点を図化した。H－49区Ⅱ層より出土の131は坏の蓋であり，133と同一個体の可能性がある。132は口縁部が外反し，内外面ともにヨコナデを推定できる。133の底部には小さい高台が堅固に残る。内面にナデ調整が推定される。

甕（第399図134～143・第400図144・145）

12点を図化した。134，136は外面に平行文タタキ，内面にタタキを呈する。135は外面を平行文タタキ，内面を当て具痕で施す。137は外面を平行文タタキ，内面をタタキで施す。138，139，141の内面はタタキまたは同心円当て具痕となる。138，139は胴部の最大径である。140は内外面ともに格子目タタキを施す。142，143は内外面とも平行文タタキで仕上げる。144の外面は格子目タタキと平行文タタキを組み合わせる。145は色調が赤みを帯びる。

壺（第400図146～148）

３点を図化した。146は頸部から肩部で，外面を平行文タタキで施す。147は外面を格子目タタキで覆う。148は内外面ともヨコナデを施す。

緑釉陶器（第400図149）

調査区全体から合計３点で出土し，１点を図化した。

149は口縁部から底部まで残る。復元に伴い完形になる。口径18㎝，底径８㎝，器高6.4㎝，高台高0.5㎜。口縁部手前で凹んだのち，端反り風になる。線描きの沈線が胴部上半分に呈し，部分的には２条確認できる。高台端は貼り付け高台を有し，断面は四角形になる。高台の畳付部分は露胎を施す。胎土は軟質の精製粘土で白色風を呈し，黄味を帯びたうすい緑をもつ。

越州窯系青磁

調査区全体から合計で５点出土し，うち３点を図化した。

碗（第400図150～153）

150は，碗の口縁部から胴部である。復元で完全な形となった。151は碗の底部で，底部の高台にはケズリが見られる。何らかの目的で再加工が施されている。152は碗の口縁部である。胎土が悪く，黒色粒子の斑点が入り，部分施釉で全色が悪くむらが多い。153は碗の底部で，Ｇ～Ｈ－49区Ⅰ層からの出土より，152と同一個体の可能性がある。

土錘（第400図154～161）

土錘では円筒状を呈する粘土の長軸方向に孔を穿った管状土錘が出土している。14点が出土し，８点を図化した。

焼成粘土塊（第400図162～164）

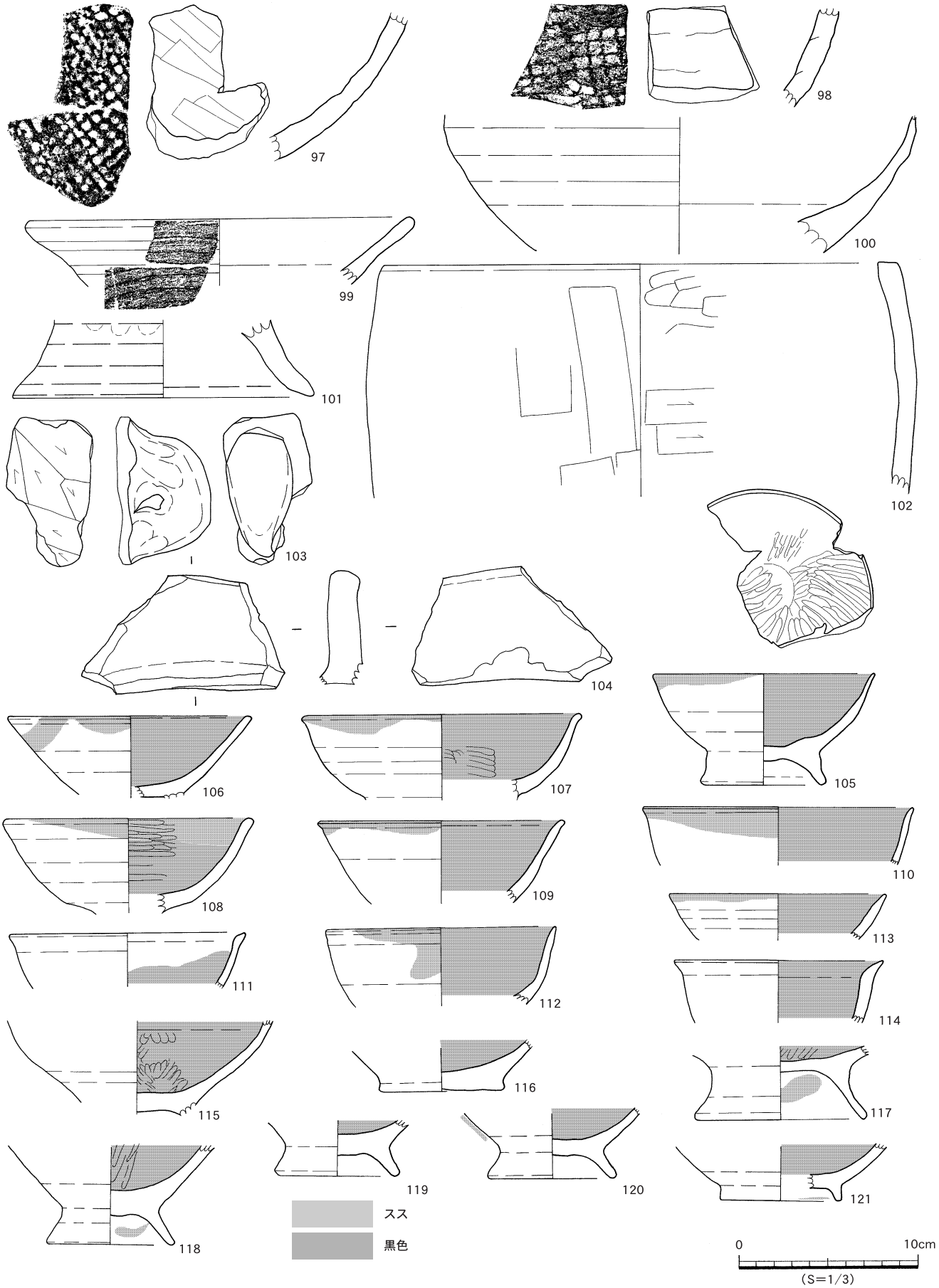
焼成粘土塊は，様々な要因で焼かれた土が粘土のような塊になる状態をいう。122点が出土し，うち３点を図化した。

砥石（第400図165）

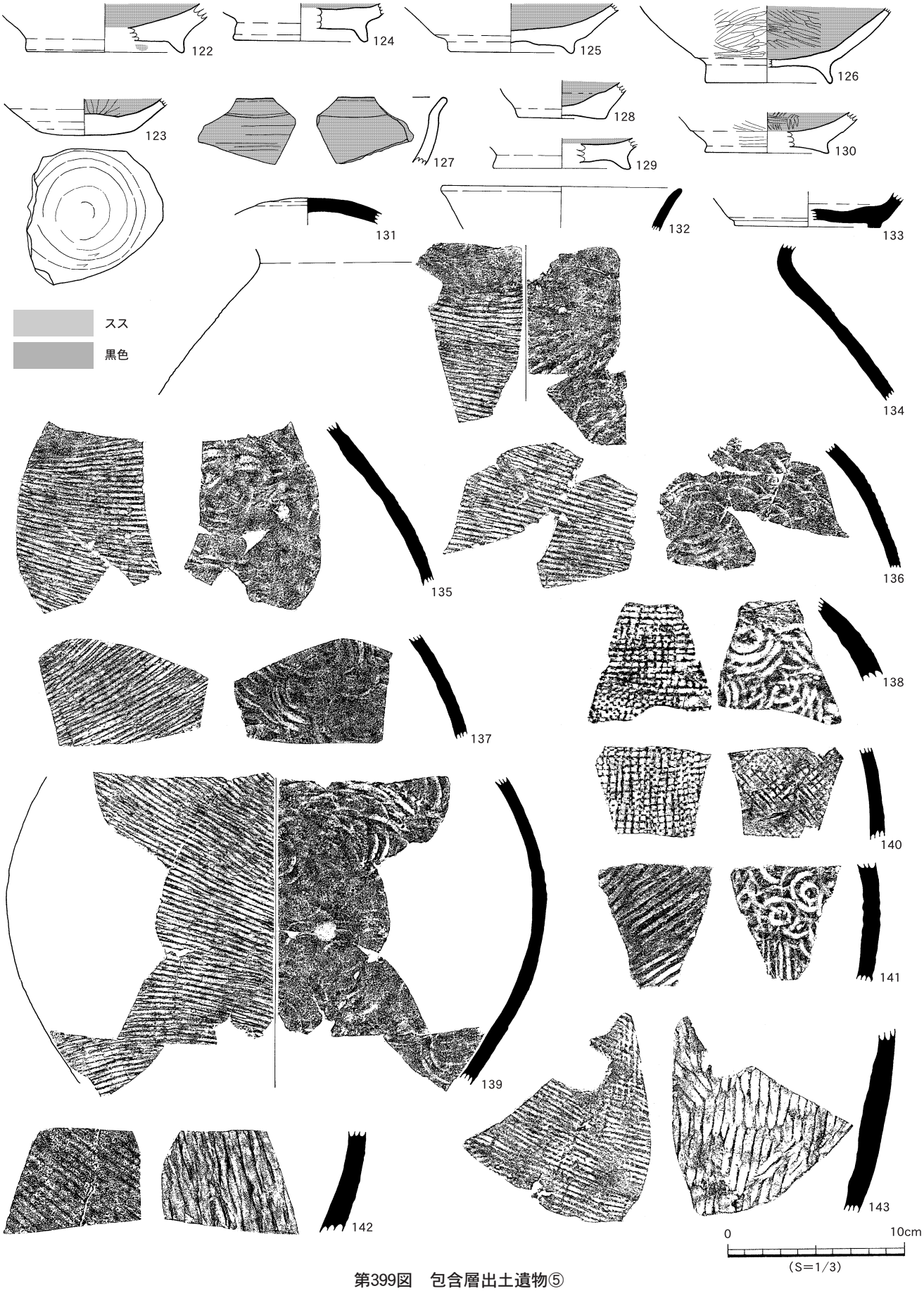
砂岩製の砥石で，４面使用の擦痕がある。上面に針描状の細い沈線が確認できる。

軽石（第400図166）

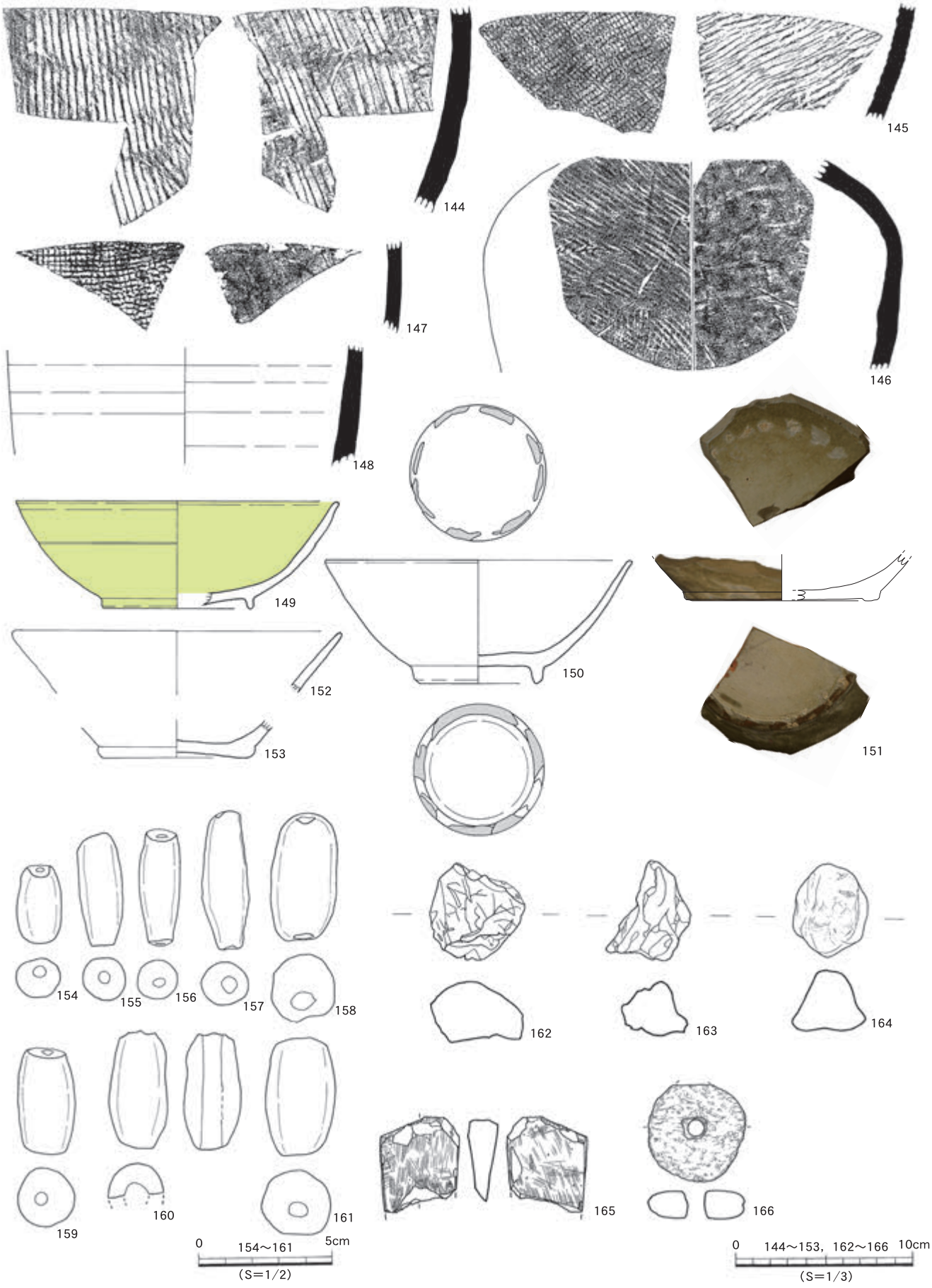
隅丸方形（略円形）を呈する軽石で,大きさ5.5㎝×５㎝,中央に径1.2㎝の穿孔がある。全面に整形が見られる。



第398図　包含層出土遺物④



第399図　包含層出土遺物⑤



第400図　包含層出土遺物⑥

5　中世・近世の調査

⑴調査の概要

中世・近世の遺構は，掘立柱建物跡14棟，竪穴建物跡13軒，建物状遺構３軒，土坑29基，大型土坑８基，炉状遺構19基，溝状遺構３条と多数のピット群が検出されている。遺構検出は，Ⅵ層のアカホヤ上面で行った。埋土は，Ⅰｂ層，Ⅱ層を主体とする。ほとんどの遺物は一括で取り上げた。また，多くの遺構は中世と近世の帰属時期を区分出来なかったので，中世・近世としてまとめた。遺物の分類方法については，土師器，輸入陶磁器，国産陶磁器，その他（瓦質土器・土師質土器・鉄製品・滑石製品・軽石製品等）に大分類し，さらに種別，器種に細分化した。碗・皿の器種については，口径の大きさによって分類してある。また，産地や年代についても考慮した。（以下参照）

土器
　土師器　　皿　坏　燈器
輸入磁器
　青磁　　椀　皿
　白磁　　椀　皿
　青花　　碗　皿
　色絵　　皿
　ベトナム青花　碗
輸入陶器
　中国系陶器　壺
　朝鮮系陶器　碗　皿
国産磁器（青磁・白磁・色絵を含む）
　肥前産磁器　碗　皿　鉢　蓋　徳利
　薩摩産磁器　碗
国産陶器
　瀬戸・美濃産　碗　瓶子　徳利
　備前産　　甕　擂鉢
　肥前産　　碗　皿　徳利　蓋　擂鉢　壺
　　仏具
　薩摩産　　碗　皿　徳利　擂鉢　片口
　　蓋　甕　壺　灯明具　仏具
　琉球産　　甕
その他
　土製品　　鞴の羽口
　瓦質土器　　擂鉢　火鉢
　土師質土器　　茶釜　焙烙
　鉄製品　　刀子　釘
　滑石製品　　滑石製石鍋　二次加工品
　金床石
　砥石
　軽石製品
　櫛　銭貨　鉛玉　など

器種分類

碗（椀）	小碗	口径５cm ～9.1cm のもの
	中椀	口径9.1cm ～12cm のもの
	大碗	口径12cm 以上のもの
皿	小皿	口径7.6cm ～13.6cm のもの
	中皿	口径13.6cm ～25.8cm のもの
	大皿	口径25.8cm 以上のもの
鉢	小鉢（向付・猪口を含む）13.6cm 以下	

陶磁器についての基本的な名称，及び表現方法は次の通りである。

名称	A	口唇部
	B	口縁部
	C	体部
	D	腰部
	E	高台脇
	F	畳付
	G	高台内面
表現	a	見込み蛇ノ目釉剥ぎ部
	b	施釉ライン

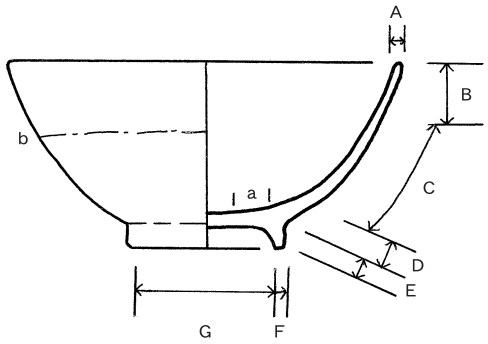
炉状遺構などの表現は次の通りである。

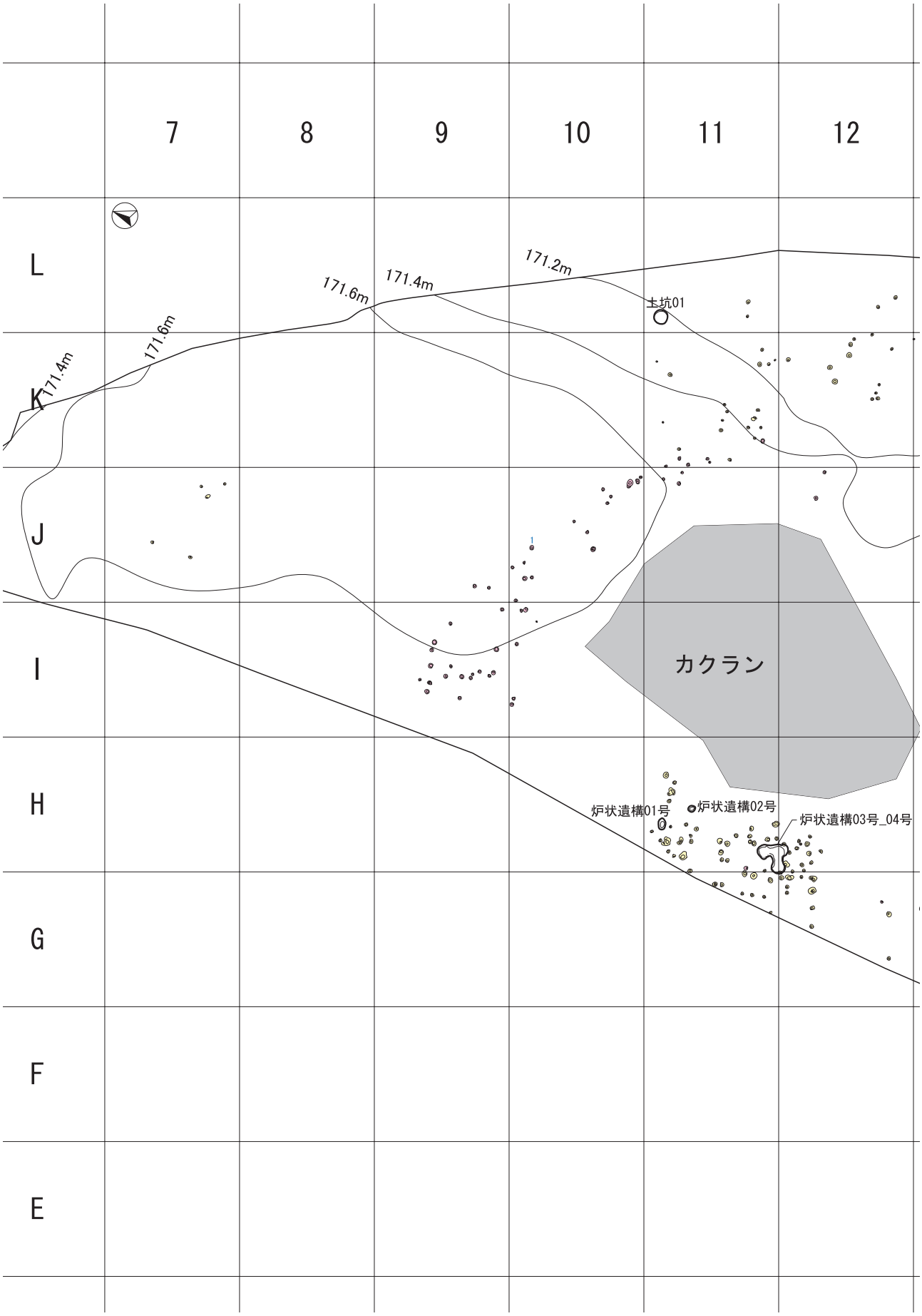
炉壁・焼土

炭化物

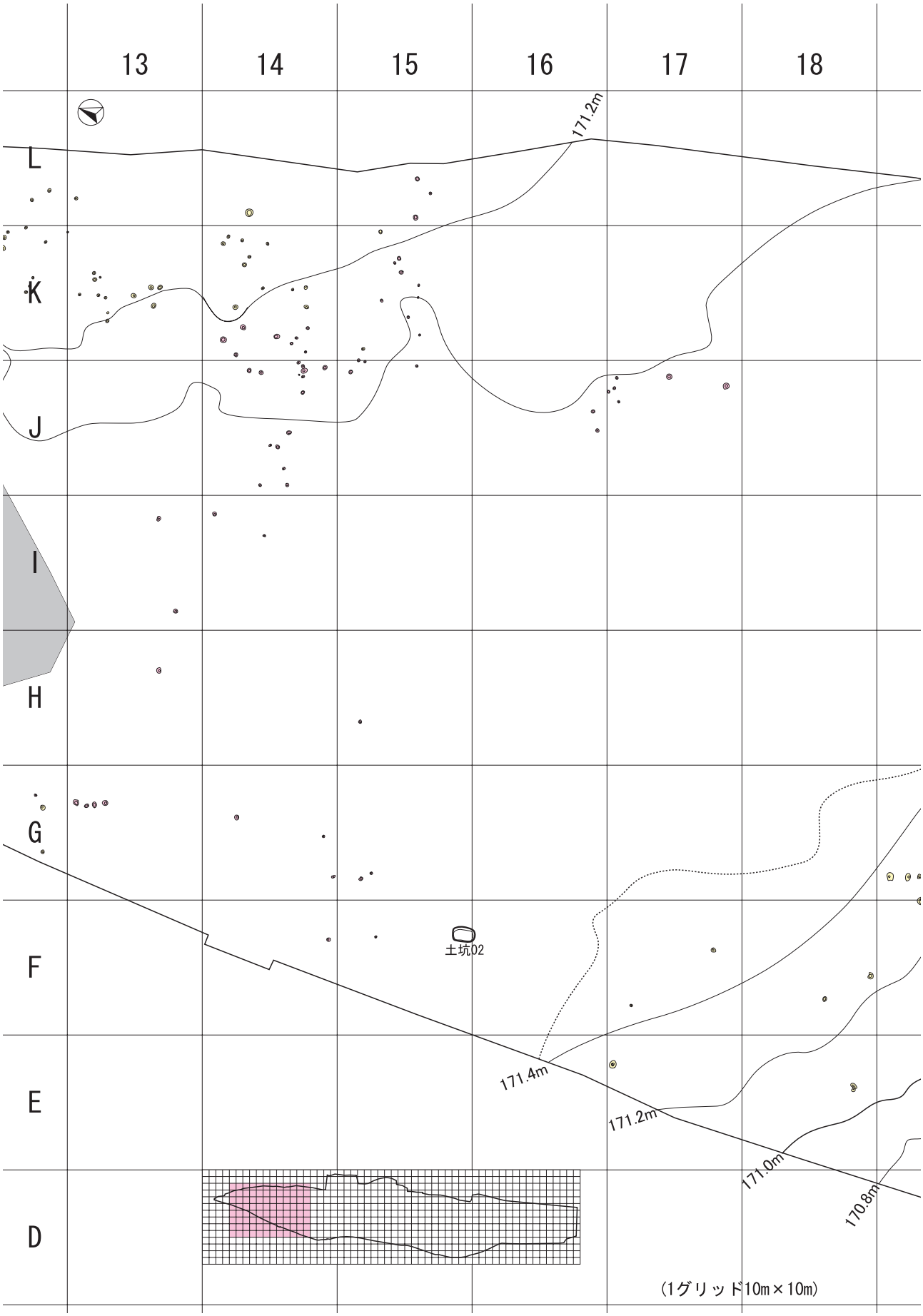
鞴の羽口に付着した鉄滓については網フセで表現してある。

なお，埋土の状況や遺物の出土状況等から，中世と近世が判別しているものについては，文章の中で報告する。

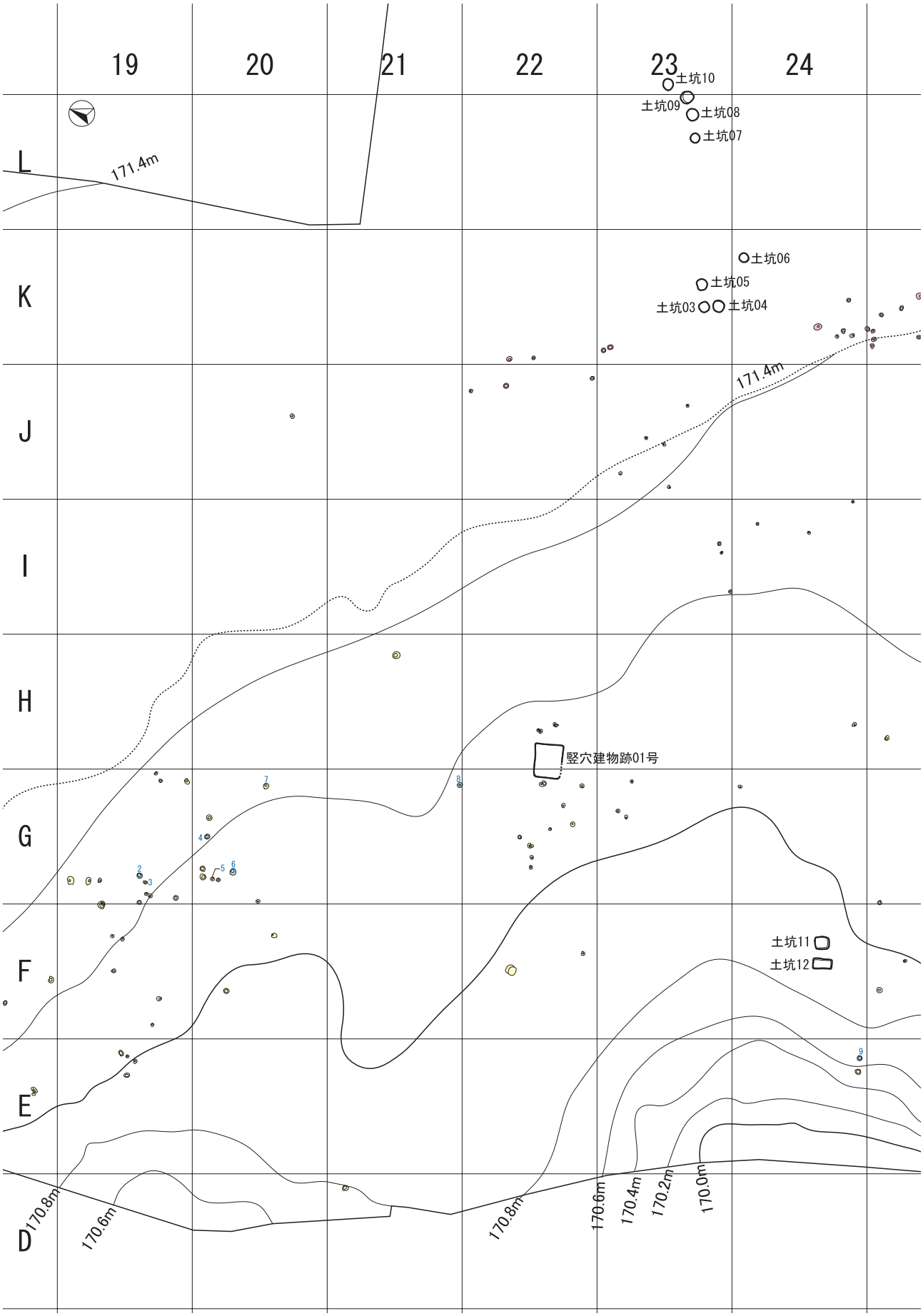




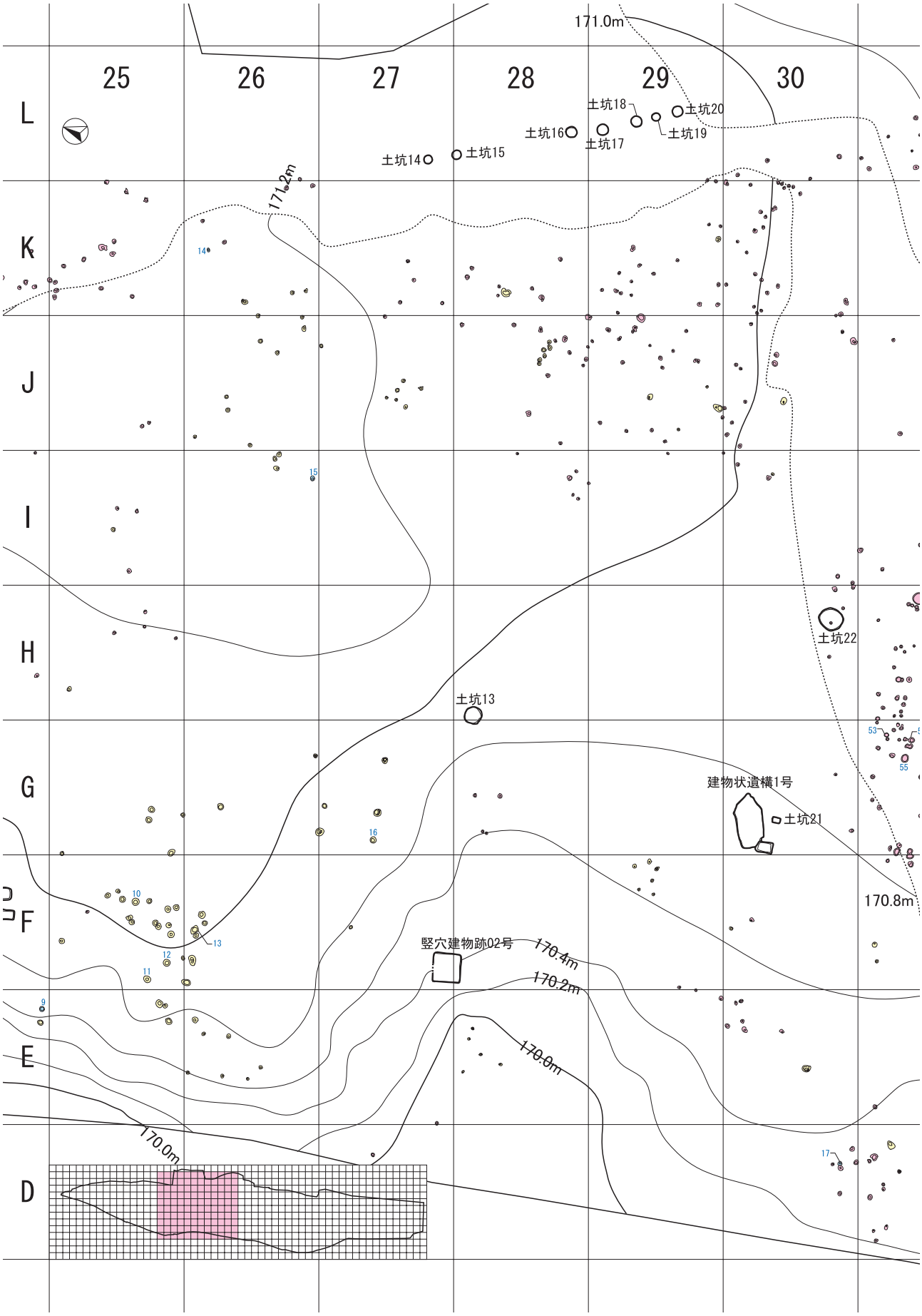
第401図　中世・近世遺構配置図(1)



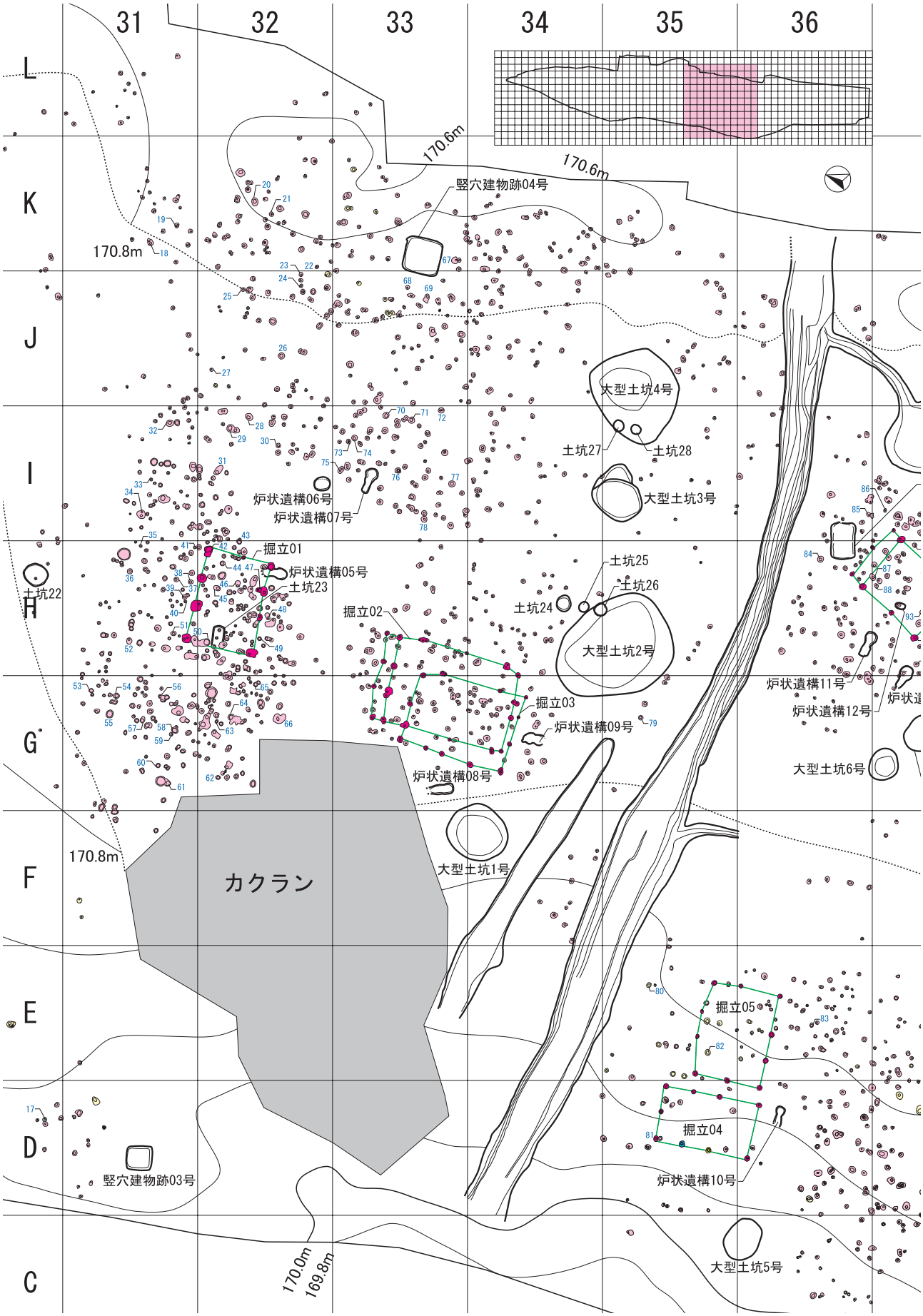
第402図　中世・近世遺構配置図(2)



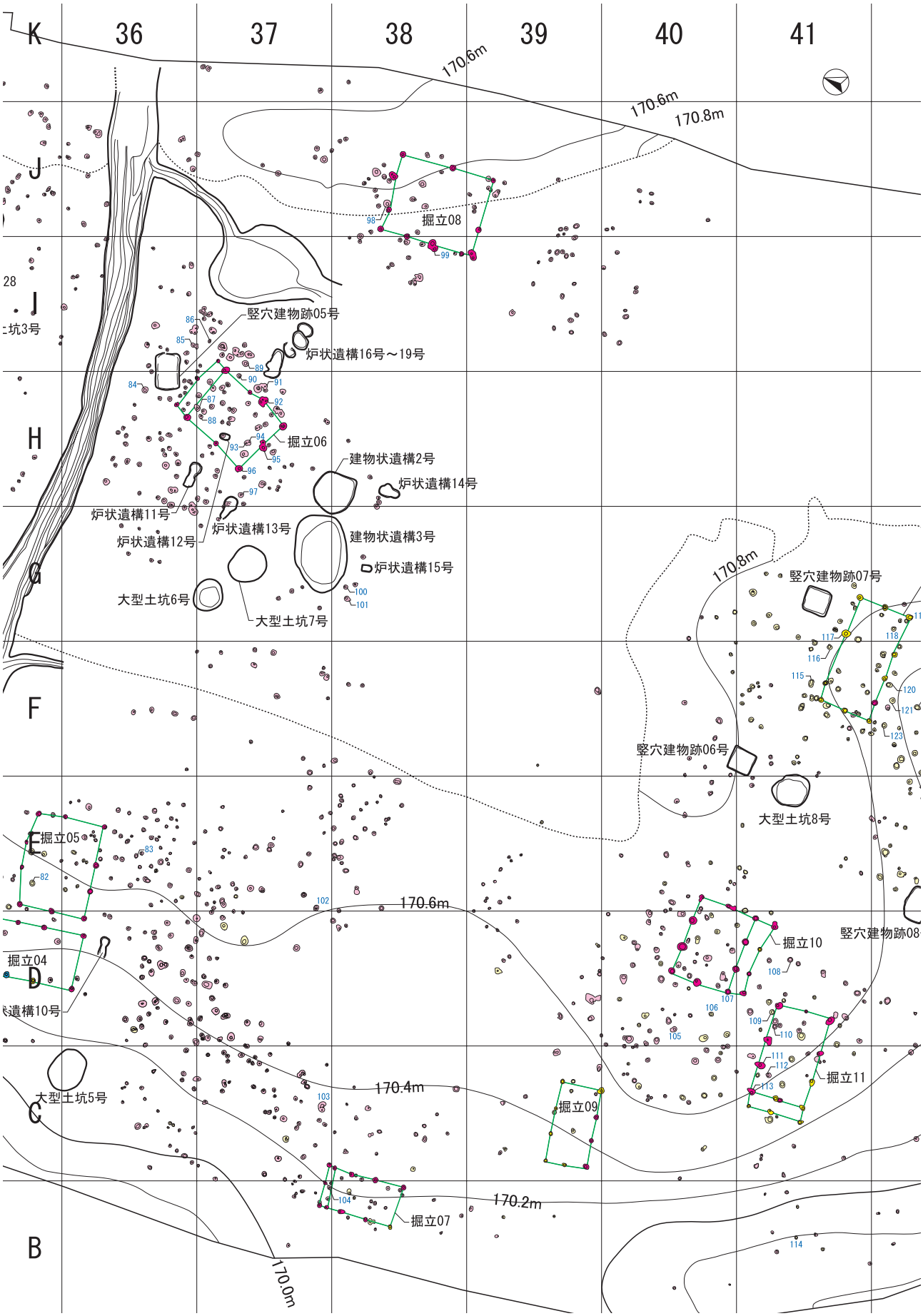
第403図　中世・近世遺構配置図(3)



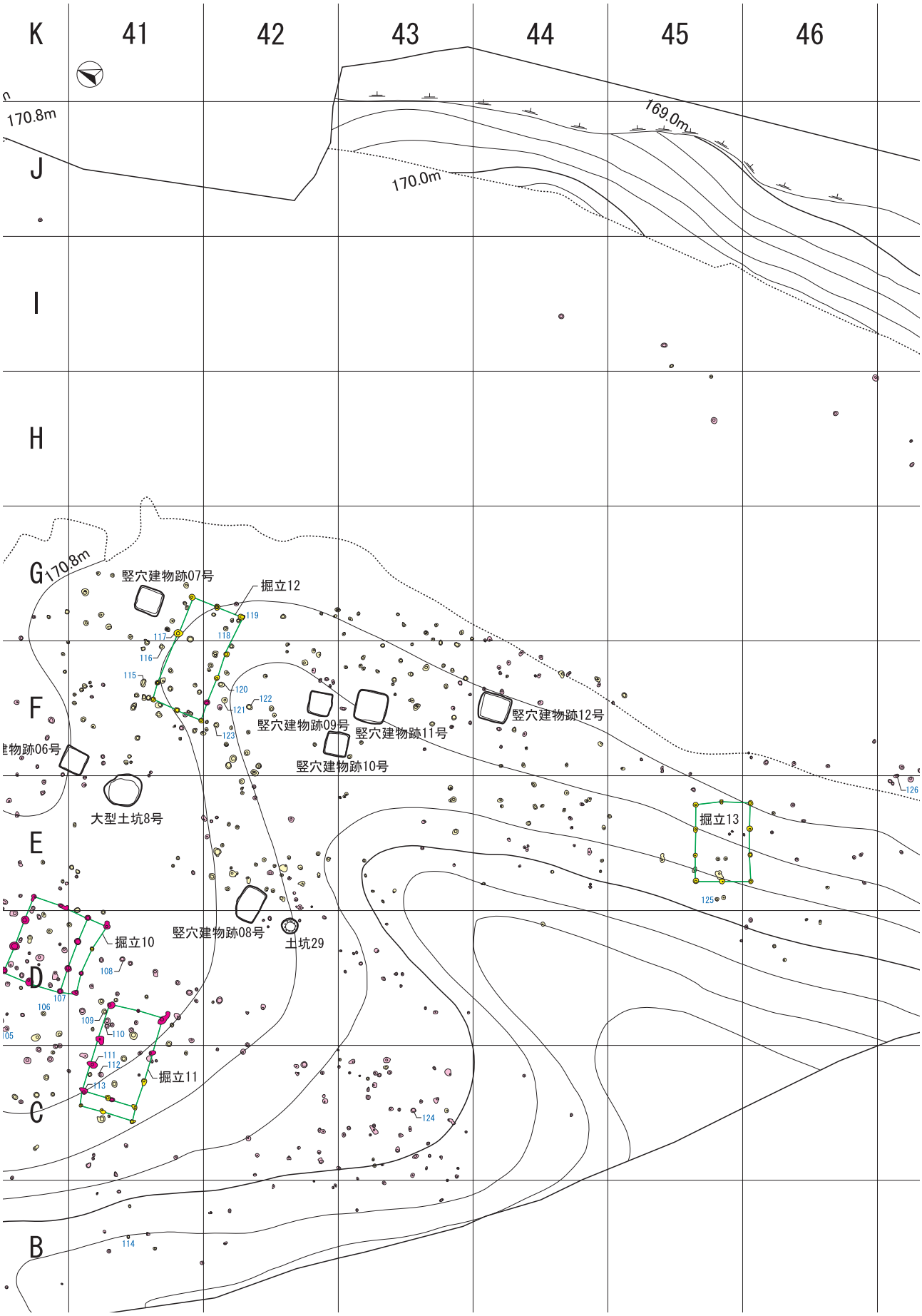
第404図　中世・近世遺構配置図(4)



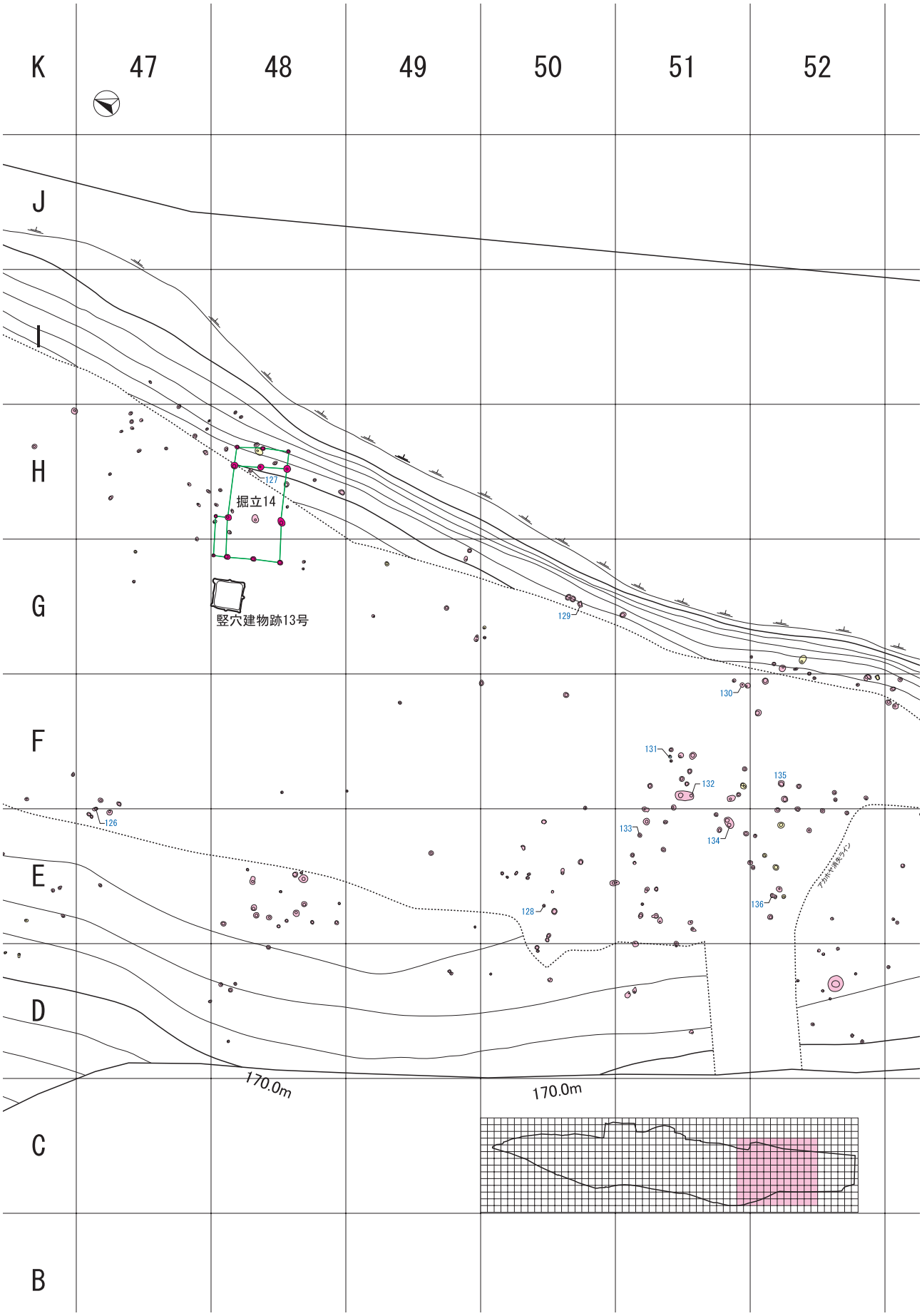
第405図　中世・近世遺構配置図(5)



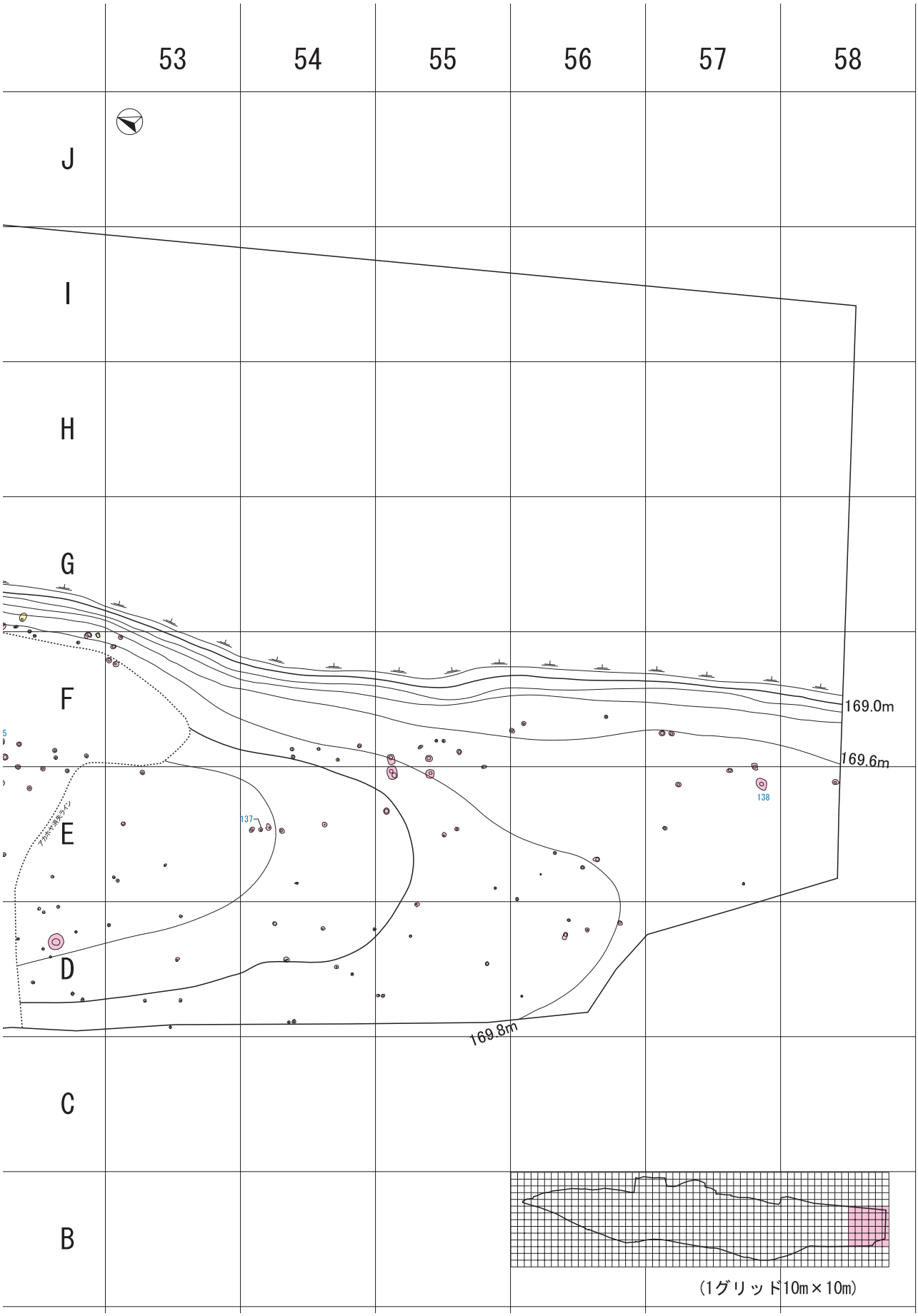
第406図　中世・近世遺構配置図(6)



第407図　中世・近世遺構配置図(7)



第408図　中世・近世遺構配置図(8)



第409図　中世・近世遺構配置図(9)

⑵ 遺構

① 掘立柱建物跡（第410図～第418図）

掘立柱建物跡は，3間×４間の建物が２棟，3間×３間の建物が１棟，2間×４間の建物が１棟，2間×３間の建物が７棟，２間×２間の建物が２棟，１間×３間の建物が１棟の合計14棟が検出された。調査時に検出できたものもあったが，整理作業中に組み立てたものがほとんどである。また，出土した柱穴内遺物は，ほとんどが小片であった。それぞれの遺構内で報告する。

掘立柱建物跡１号（第410図）

Ｈ－31・32区で検出された。規格は２間×３間の建物である。大きさは4.8m×6.8mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので32㎝，最も深いもので100㎝となるが，残存値で90～100㎝程度の深さのものが多い。土坑23号と炉状遺構５号を切る形で柱穴が検出されているので，建物の時期は近世のものと思われる。柱穴内遺物は，景徳鎮窯系の青花と17世紀中期以降の肥前産染付の徳利が出土している。

掘立柱建物跡２号（第411図）

Ｇ・Ｈ－33・34区で検出された。掘立柱建物跡３号と切り合う建物である。規格は３間×４間の建物である。北側に庇を持つ。大きさは6.3m×10.2mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので10㎝，最も深いもので80㎝となるが，残存値で20～50㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡３号（第412図）

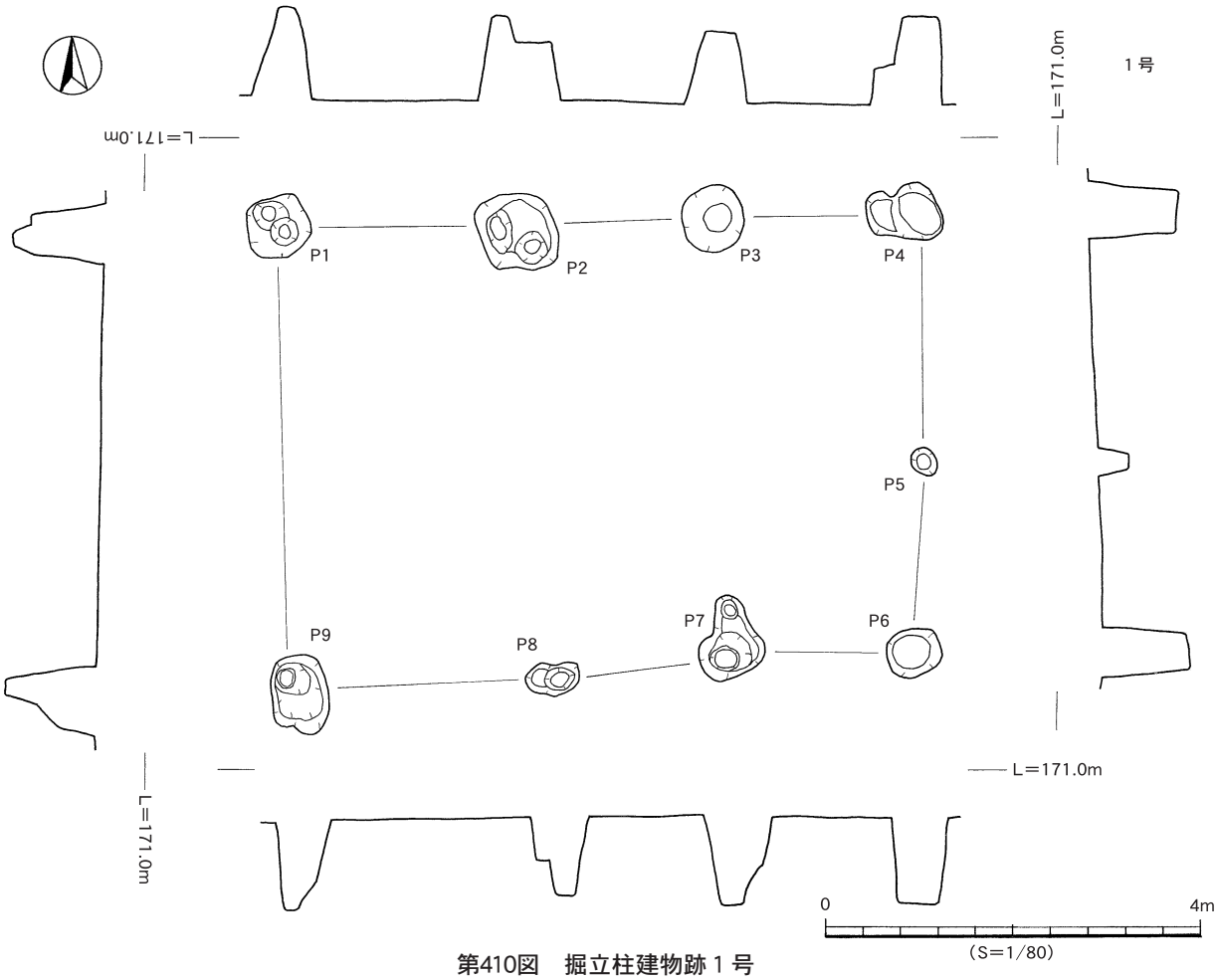
Ｇ・Ｈ－33・34区で検出された。規格は３間×４間の建物である。大きさは5.9m×7.8mである。柱穴の検出面からの深さは30～40㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡４号（第412図）

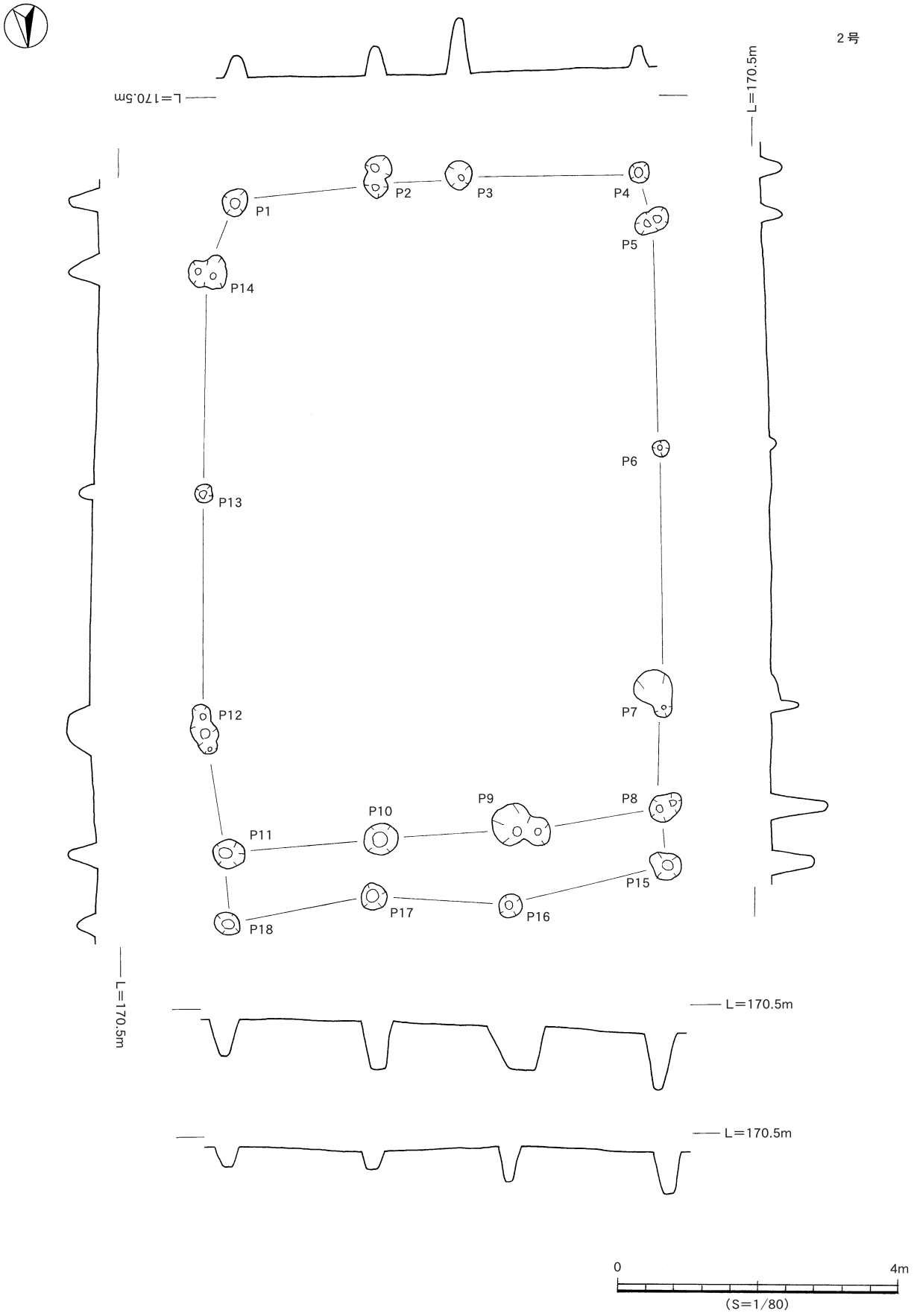
Ｄ－35・36区で検出された。規格は２間×３間の建物である。大きさは4.0m×7.0mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので30㎝，最も深いもので58㎝となるが，残存値で30～40㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡５号（第413図）

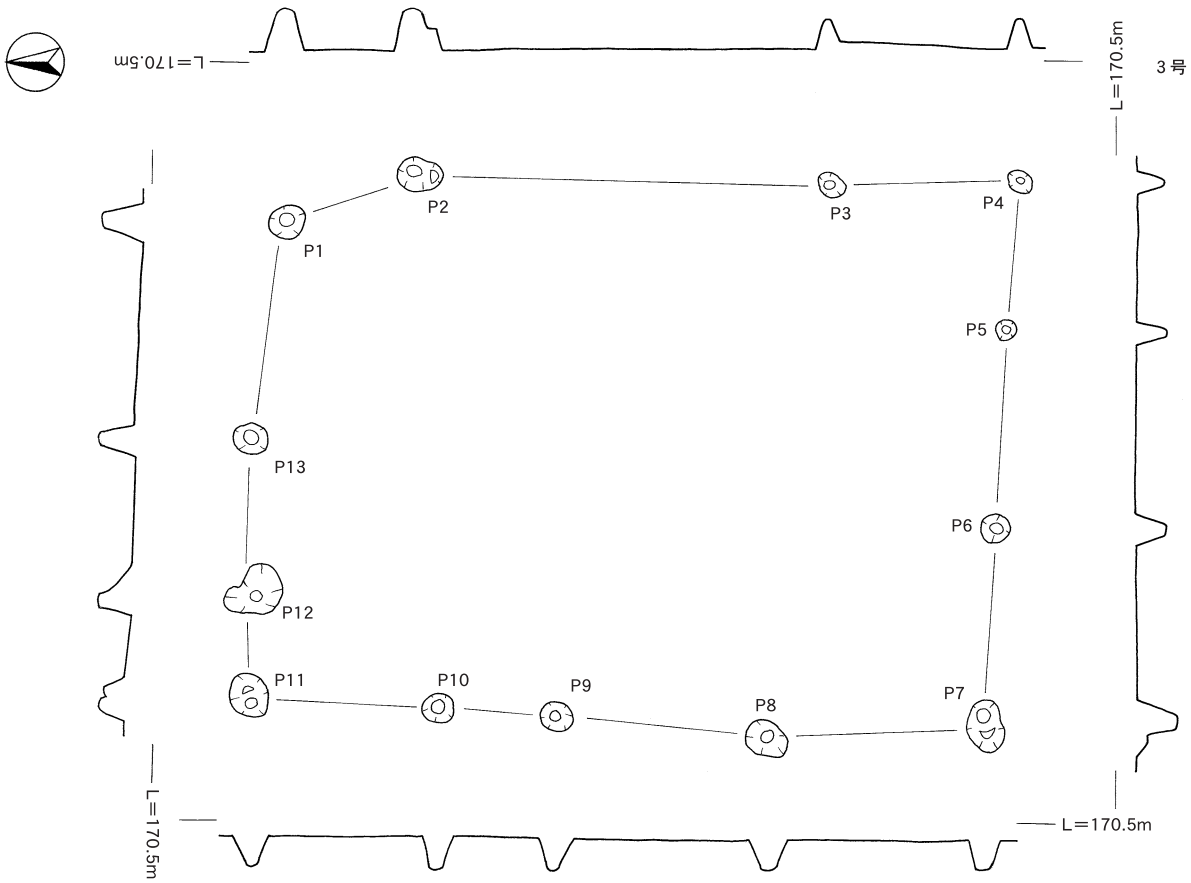
Ｅ－35・36区で検出された。規格は２間×３間の建物である。大きさは5.0m×6.9mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので30㎝，最も深いもので70㎝となるが残存値で30～60㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

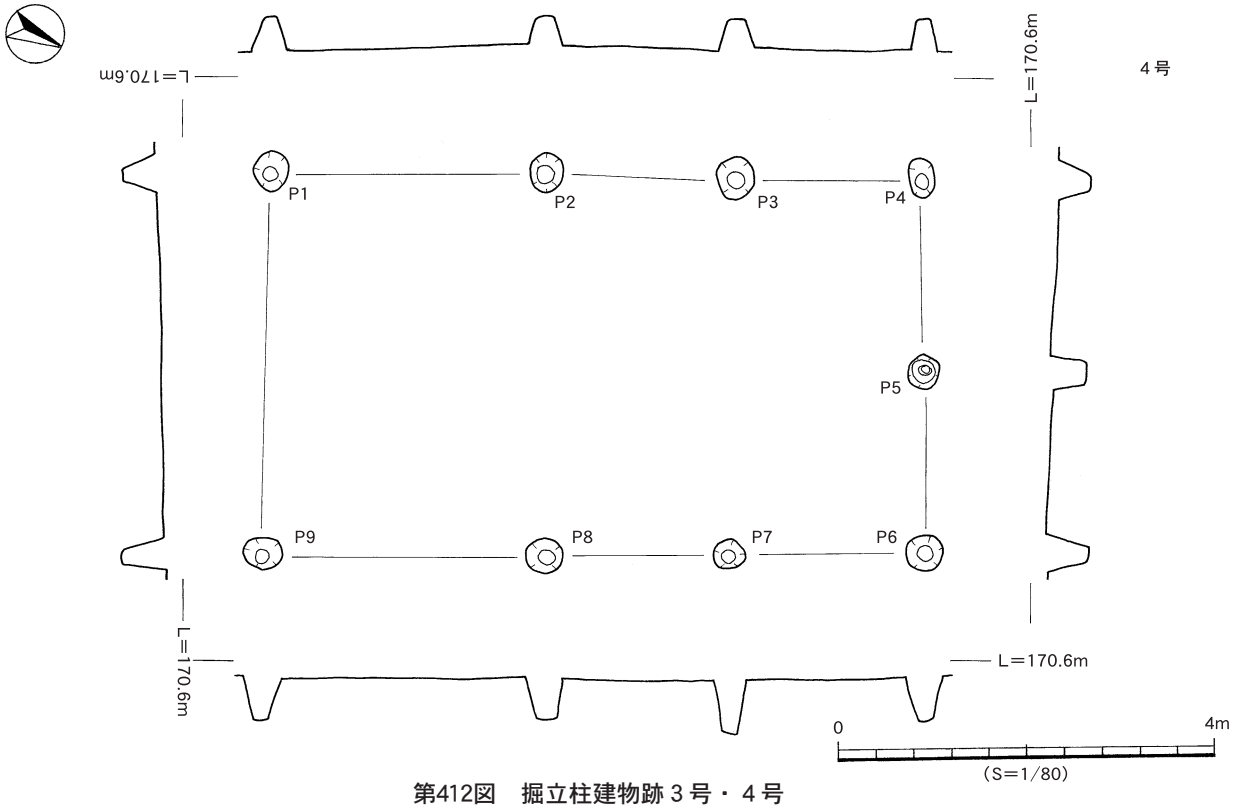


第410図　掘立柱建物跡１号

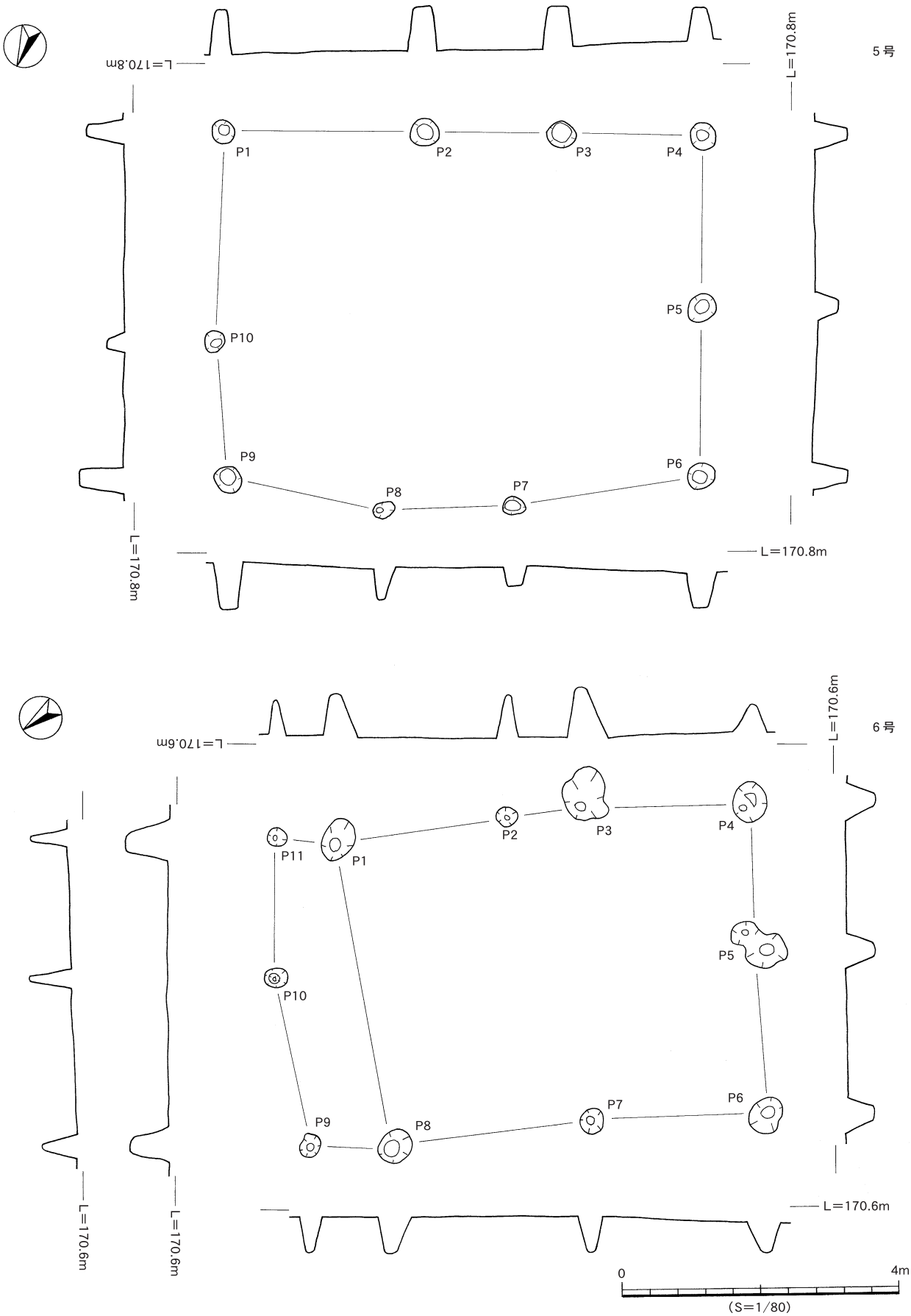


第411図　掘立柱建物跡２号

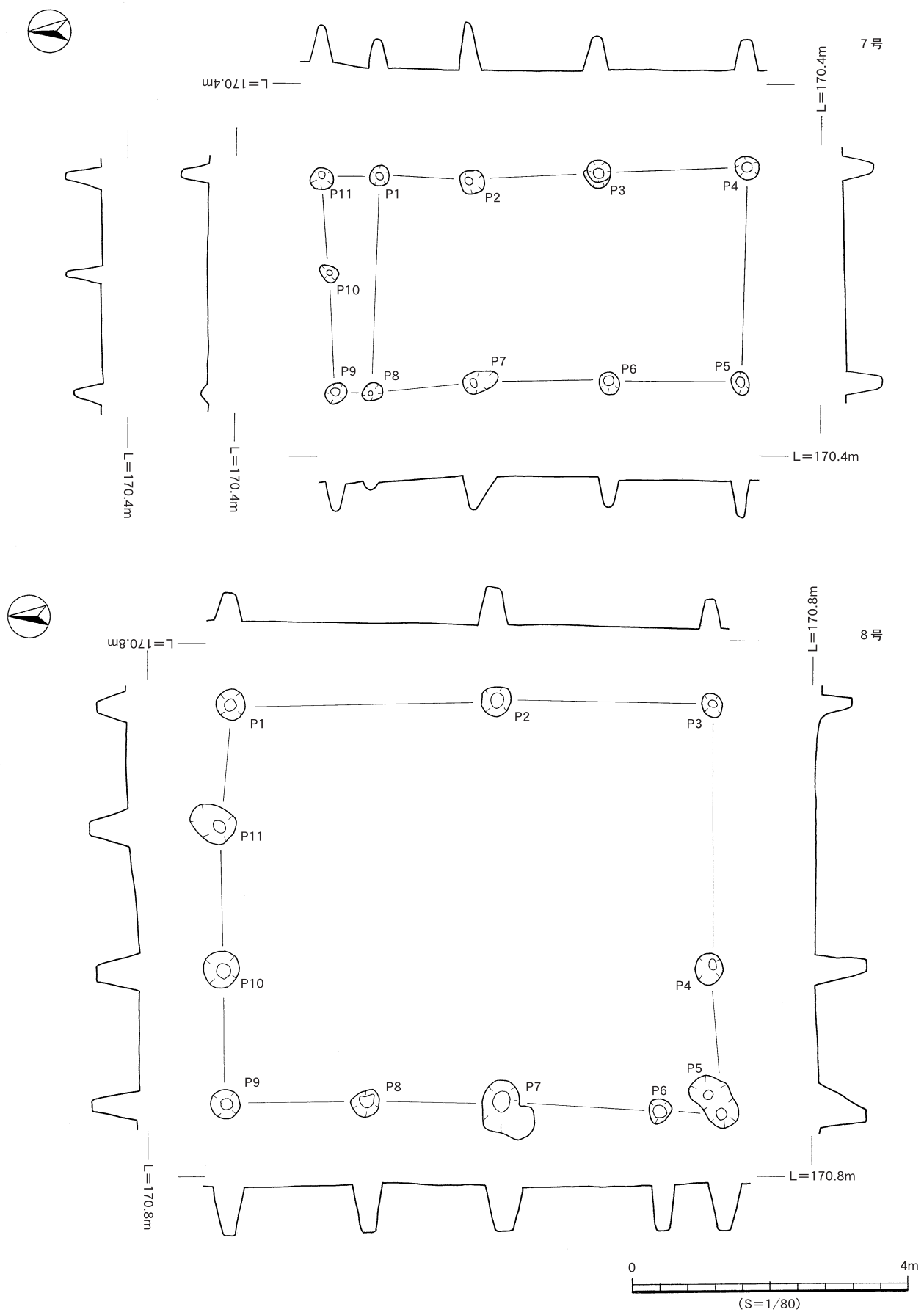




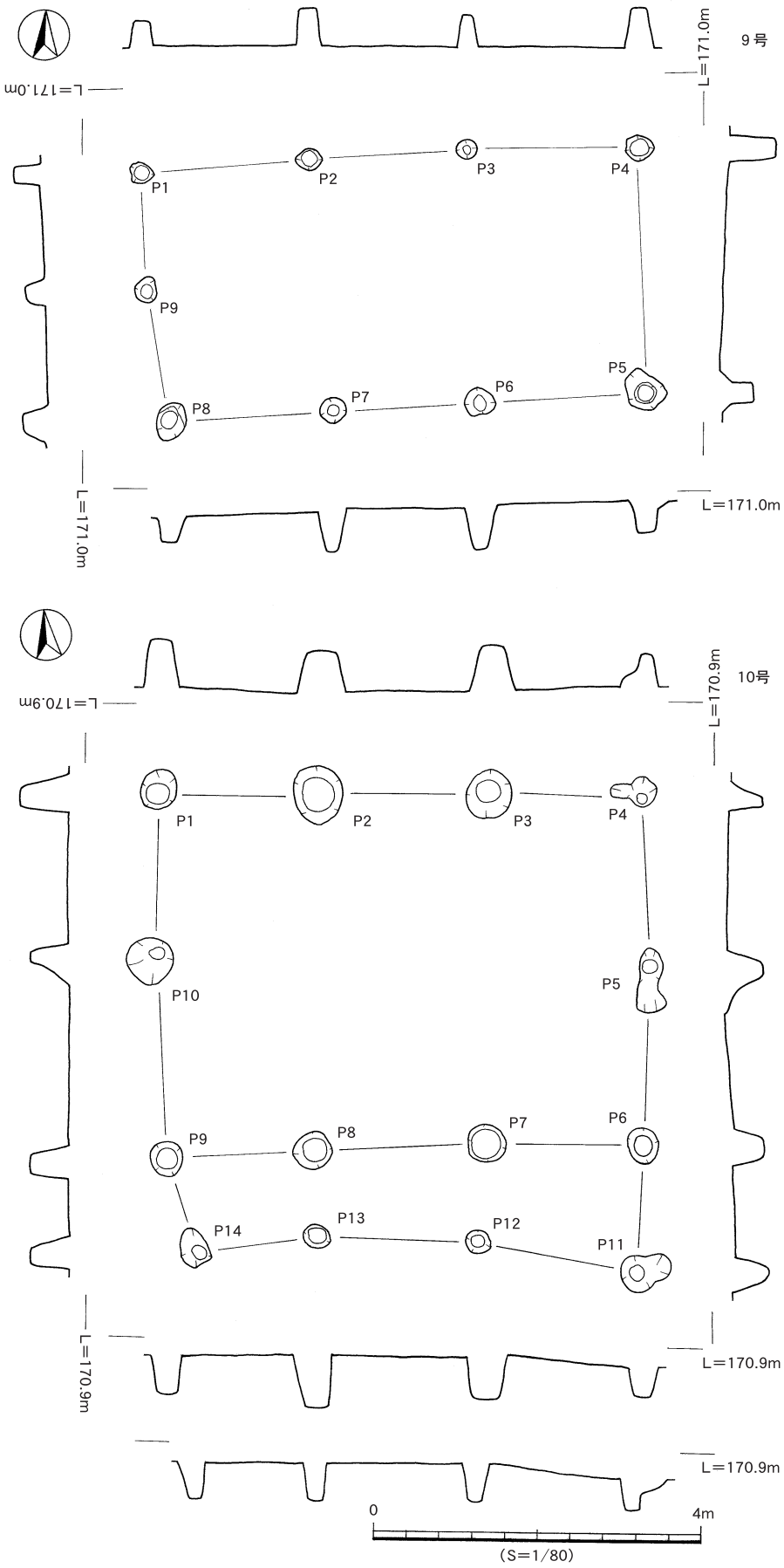
第412図　掘立柱建物跡３号・４号



第413図　掘立柱建物跡５号・６号



第414図　掘立柱建物跡７号・８号



第415図　掘立柱建物跡９号・10号

掘立柱建物跡６号（第413図）

Ｈ－36・37区，Ｉ－37区で検出された。規格は２間×２間の建物である。北側に庇を持つ。大きさは4.5m×6.9mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので40㎝，最も深いもので74㎝となるが，残存値で40～50㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は，肥前産の染付碗，溝縁皿，擂鉢，瓦質土器の擂鉢が出土した。

掘立柱建物跡７号（第414図）

Ｂ・Ｃ－37・38区で検出された。規格は１間×３間の建物である。北側に庇を持つ。大きさは3.1m×6.1mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので10㎝，最も深いもので70㎝となるが，残存値で40～50㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡８号（第414図）

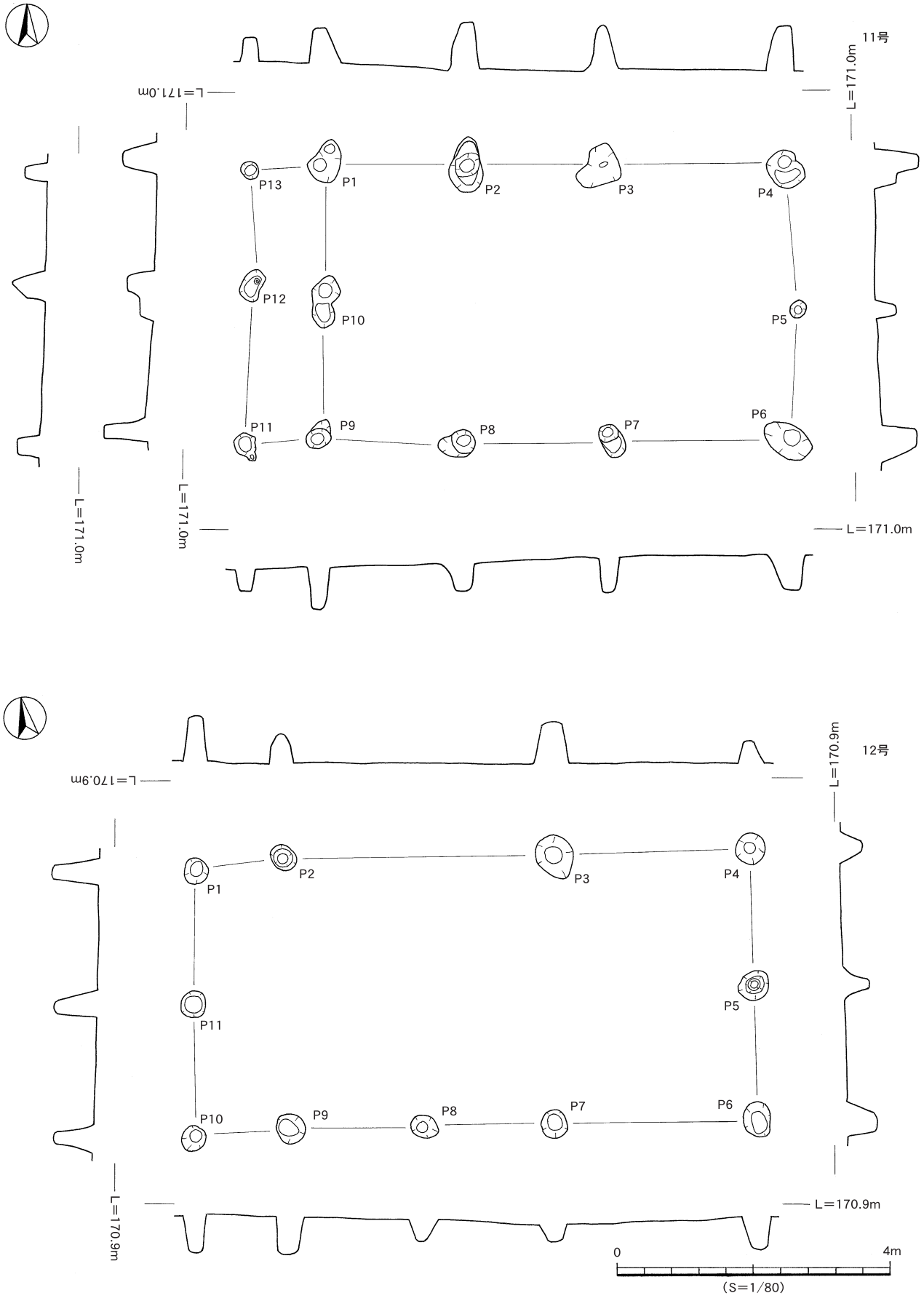
Ｉ・Ｊ－38・39区で検出された。規格は３間×３間の建物である。大きさは6.0m×7.1mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので40㎝，最も深いもので75㎝となるが，残存値で60～70㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は肥前産の陶器碗，薩摩産の龍門司窯の皿が出土した。

掘立柱建物跡９号（第415図）

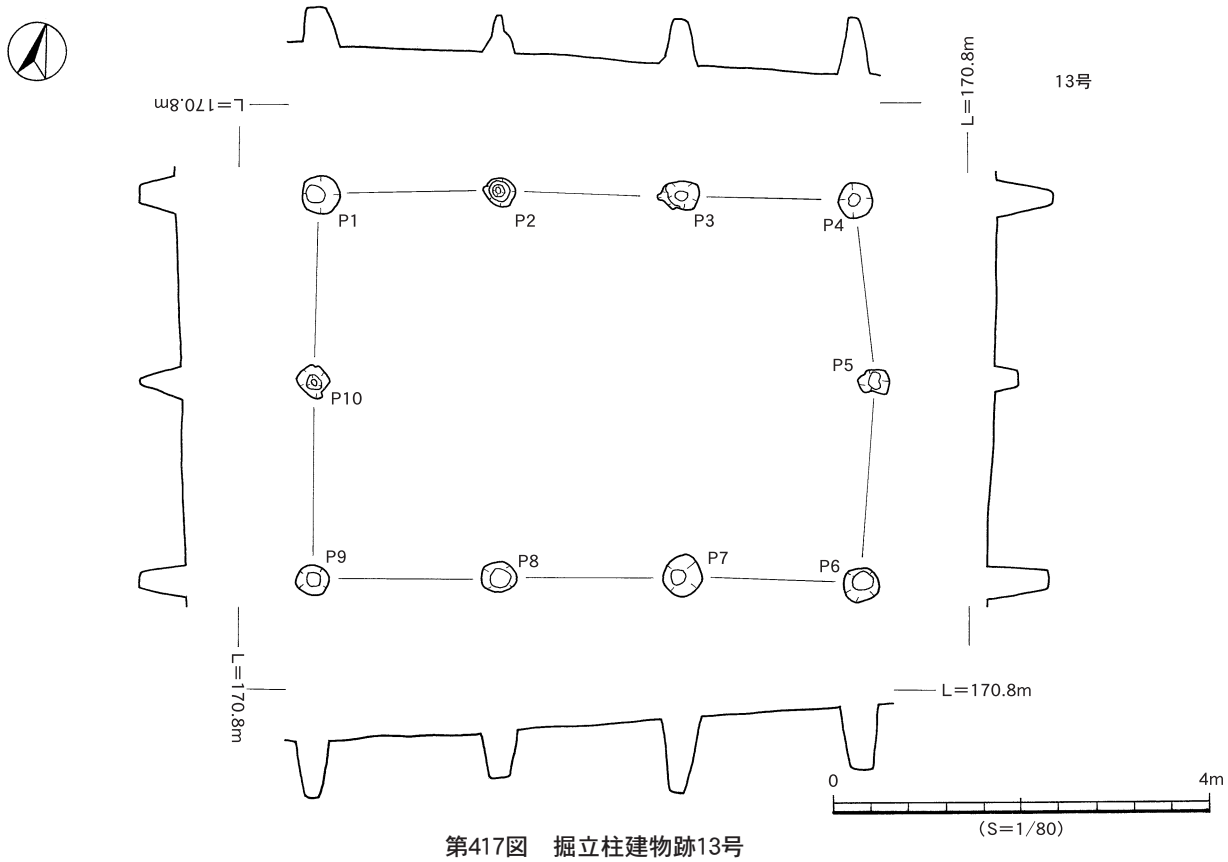
Ｃ－39区で検出された。規格は２間×３間の建物である。大きさは3.0m×6.1mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので28㎝，最も深いもので50㎝となるが，残存値で40～50㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡10号（第415図）

Ｄ・Ｅ－40・41区で検出された。規格は２間×３間の建物である。南側に庇を持つ。大きさは5.8m×5.9mである。柱穴の深さは，最も浅いもので40㎝，最も深いもので62㎝となるが，残存値で40～50㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は肥前産の銅緑釉碗が出土した。



第416図　掘立柱建物跡11号・12号



第417図　掘立柱建物跡13号

掘立柱建物跡11号（第416図）

C・D－41区で検出された。規格は２間×３間の建物である。西側に庇をもつ。大きさは4.0m×8.0mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので30㎝，最も深いもので70㎝となるが，残存値で30～50㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は肥前産の溝縁皿が出土した。

掘立柱建物跡12号（第416図）

F・G－41・42区で検出された。規格は２間×４間の建物である。大きさは4.0×8.2mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので28㎝，最も深いもので68㎝となるが，残存値で30～60㎝程度の深さのものが多い。柱穴内遺物は肥前産の染付碗と薩摩産堂平窯の甕の胴部が出土した。

掘立柱建物跡13号（第417図）

E－45・46区で検出された。規格は２間×３間の建物である。大きさは4.1m×5.8mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので25㎝，最も深いもので80㎝となるが，残存値で40～60㎝程度の深さのものが多い。

掘立柱建物跡14号（第418図）

G・H－48区で検出された。規格は２間×２間の総柱の建物である。東側に庇と，北側に部分的に張り出しを持つ。大きさは5.0m×8.3mである。柱穴の検出面からの深さは，最も浅いもので30㎝，最も深いもので80㎝となるが，残存値で50～70㎝程度の深さのものが多い。

掘立柱建物跡計測表①

掘立柱建物跡１号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	70	67	100
2	100	80	100
3	72	70	80
4	80	40	100
5	32	26	32
6	60	50	92
7	92	40	94
8	60	38	80
9	88	60	90

掘立柱建物跡１号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 － 4	680	1 － 9	480
1 － 2	240	2 － 8	480
2 － 3	210	3 － 7	470
3 － 4	220	4 － 6	470
9 － 6	670	4 － 5	270
9 － 8	290	5 － 6	200
8 － 7	180		
7 － 6	200		

掘立柱建物跡２号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	40	35	35
2	60	30	40
3	40	40	80
4	30	30	30
5	50	30	30
6	30	25	10
7	70	25	40
8	50	40	80
9	90	40	60
10	50	50	70
11	50	40	60
12	80	30	30
13	28	28	20
14	60	40	40
15	50	30	60
16	40	30	60
17	40	35	30
18	40	30	15

掘立柱建物跡２号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 －18	1020	1 － 4	570
1 －14	110	1 － 2	200
14－13	320	2 － 3	120
13－12	340	3 － 4	250
12－11	180	14－ 5	620
11－18	100	13－ 6	650
2 －17	1000	12－ 7	650
2 －10	930	11－ 8	620
10－17	80	11－10	220
3 －16	1030	10－ 9	200
3 － 9	930	9 － 8	210
9 －16	100	18－15	630
4 －15	980	18－17	210
4 － 5	70	17－16	200
5 － 6	330	16－15	230
6 － 7	370		
7 － 8	140		
8 －15	80		

掘立建物計測表②

掘立柱建物跡 3 号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	40	40	50
2	50	30	50
3	32	25	30
4	30	26	30
5	25	25	30
6	32	28	30
7	58	36	30
8	50	38	26
9	34	30	40
10	34	30	40
11	50	40	25
12	64	50	40
13	40	30	40

掘立柱建物跡 3 号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 － 4	780	1 －11	510
1 － 2	160	1 －13	230
2 － 3	420	13－12	170
3 － 4	200	12－11	120
13－ 5	810	2 －10	560
12－ 6	785	3 － 8	590
11－ 7	780	4 － 7	590
11－10	200	4 － 5	160
10－ 9	125	5 － 6	220
9 － 8	230	6 － 7	220
8 － 7	230		

掘立柱建物跡 5 号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	34	34	68
2	40	40	68
3	42	40	60
4	40	38	48
5	44	40	30
6	40	38	48
7	34	28	30
8	32	20	48
9	40	40	70
10	30	30	30

掘立柱建物跡 5 号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 － 4	690	1 － 9	500
1 － 2	290	1 －10	310
2 － 3	200	10－ 9	190
3 － 4	200	2 － 8	550
10－ 5	700	3 － 7	540
9 － 6	680	4 － 6	490
9 － 8	225	4 － 5	250
8 － 7	190	5 － 6	250
7 － 6	275		

掘立柱建物跡 7 号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	35	30	50
2	30	30	40
3	38	30	70
4	45	40	50
5	33	40	50
6	38	22	55
7	32	26	40
8	50	30	50
9	30	20	10
10	32	30	40
11	30	22	50

掘立柱建物跡 7 号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
11－ 4	610	11－ 9	310
11－ 2	80	11－10	140
1 － 2	130	10－ 9	170
2 － 3	190	1 － 8	310
3 － 4	220	2 － 7	290
9 － 5	580	3 － 6	300
9 － 8	50	4 － 5	310
8 － 7	150		
7 － 6	200		
6 － 5	190		

掘立柱建物跡 9 号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	30	25	32
2	36	30	50
3	26	26	40
4	38	30	50
5	54	46	40
6	40	32	50
7	30	30	50
8	50	40	30
9	40	20	28

掘立柱建物跡 9 号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 － 4	610	1 － 8	300
1 － 2	200	1 － 9	150
2 － 3	190	9 － 8	160
3 － 4	210	2 － 7	310
8 － 5	580	3 － 6	310
8 － 7	200	4 － 5	300
7 － 6	180		
6 － 5	200		

掘立柱建物跡11号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	65	40	50
2	80	45	70
3	65	45	60
4	60	40	65
5	30	25	30
6	75	50	50
7	50	30	50
8	50	40	40
9	45	35	60
10	80	28	40
11	40	30	30
12	50	28	48
13	28	28	32

掘立柱建物跡11号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
4 －13	780	13－11	400
13－ 1	100	13－12	160
1 － 2	220	12－11	240
2 － 3	200	1 － 9	400
3 － 4	265	1 －10	200
12－ 5	800	10－ 9	200
12－10	100	2 － 8	400
10－ 5	690	3 － 7	400
11－ 6	800	4 － 6	400
11－ 9	110	4 － 5	210
9 － 8	210	5 － 6	190
8 － 7	210		
7 － 6	265		

掘立柱建物跡13号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	40	40	40
2	40	30	40
3	50	30	50
4	40	38	60
5	34	20	25
6	40	36	66
7	40	40	80
8	40	30	50
9	40	30	60
10	40	30	50

掘立柱建物跡13号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 － 4	570	1 － 9	410
1 － 2	200	1 －10	200
2 － 3	200	10－ 9	210
3 － 4	180	2 － 8	410
10－ 5	600	3 － 7	400
9 － 6	580	4 － 6	400
9 － 8	200	4 － 5	190
8 － 7	190	5 － 6	210
7 － 6	200		

掘立柱建物跡 4 号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	44	36	40
2	44	34	30
3	48	30	30
4	42	28	35
5	40	34	40
6	40	40	50
7	34	30	58
8	40	40	48
9	40	30	50

掘立柱建物跡 4 号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 － 4	690	1 － 9	400
1 － 2	290	2 － 8	400
2 － 3	200	3 － 7	400
3 － 4	200	4 － 6	390
9 － 6	700	4 － 5	200
9 － 8	300	5 － 6	190
8 － 7	190		
7 － 6	210		

掘立柱建物跡 6 号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	64	48	60
2	30	30	65
3	80	52	74
4	60	50	42
5	90	30	40
6	52	40	50
7	40	32	50
8	50	40	52
9	34	28	50
10	35	30	60
11	30	26	50

掘立柱建物跡 6 号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
11－ 4	690	11－ 9	450
11－ 1	90	11－10	200
1 － 2	250	10－ 9	250
2 － 3	110	1 － 8	450
3 － 4	250	3 － 7	450
10－ 5	700	4 － 6	450
9 － 6	660	4 － 5	210
9 － 8	120	5 － 6	240
8 － 7	290		
7 － 6	260		

掘立柱建物跡 8 号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	45	40	40
2	48	40	55
3	40	30	60
4	45	35	75
5	80	45	70
6	38	30	68
7	90	54	60
8	40	35	70
9	40	40	70
10	52	50	60
11	68	50	60

掘立柱建物跡 8 号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 － 3	700	1 － 9	580
1 － 2	390	1 －11	180
2 － 3	310	11－10	210
10－ 4	700	10－ 9	200
9 － 5	710	2 － 7	580
9 － 8	200	3 － 5	600
8 － 7	200	3 － 4	375
7 － 6	230	4 － 5	215
6 － 5	90		

掘立柱建物跡10号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	50	44	60
2	70	60	55
3	60	52	60
4	55	18	40
5	80	25	48
6	45	40	40
7	45	45	50
8	50	45	62
9	40	40	45
10	55	50	50
11	60	30	40
12	30	30	50
13	35	28	50
14	48	30	50

掘立柱建物跡10号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 － 4	590	1 －14	560
1 － 2	200	1 －10	190
2 － 3	210	10－ 9	250
3 － 4	190	9 －14	120
10－ 5	600	2 －13	540
9 － 6	580	2 － 8	440
9 － 8	180	8 －13	100
8 － 7	210	3 －12	550
7 － 6	190	3 － 7	430
11－14	530	7 －12	120
11－12	200	4 －11	580
12－13	200	4 － 5	200
13－14	150	5 － 6	220
		6 －11	150

掘立柱建物跡12号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	40	35	68
2	42	30	42
3	68	55	60
4	46	40	34
5	50	42	38
6	50	40	40
7	40	40	28
8	40	30	38
9	45	40	55
10	40	32	55
11	40	36	60

掘立柱建物跡12号規模表

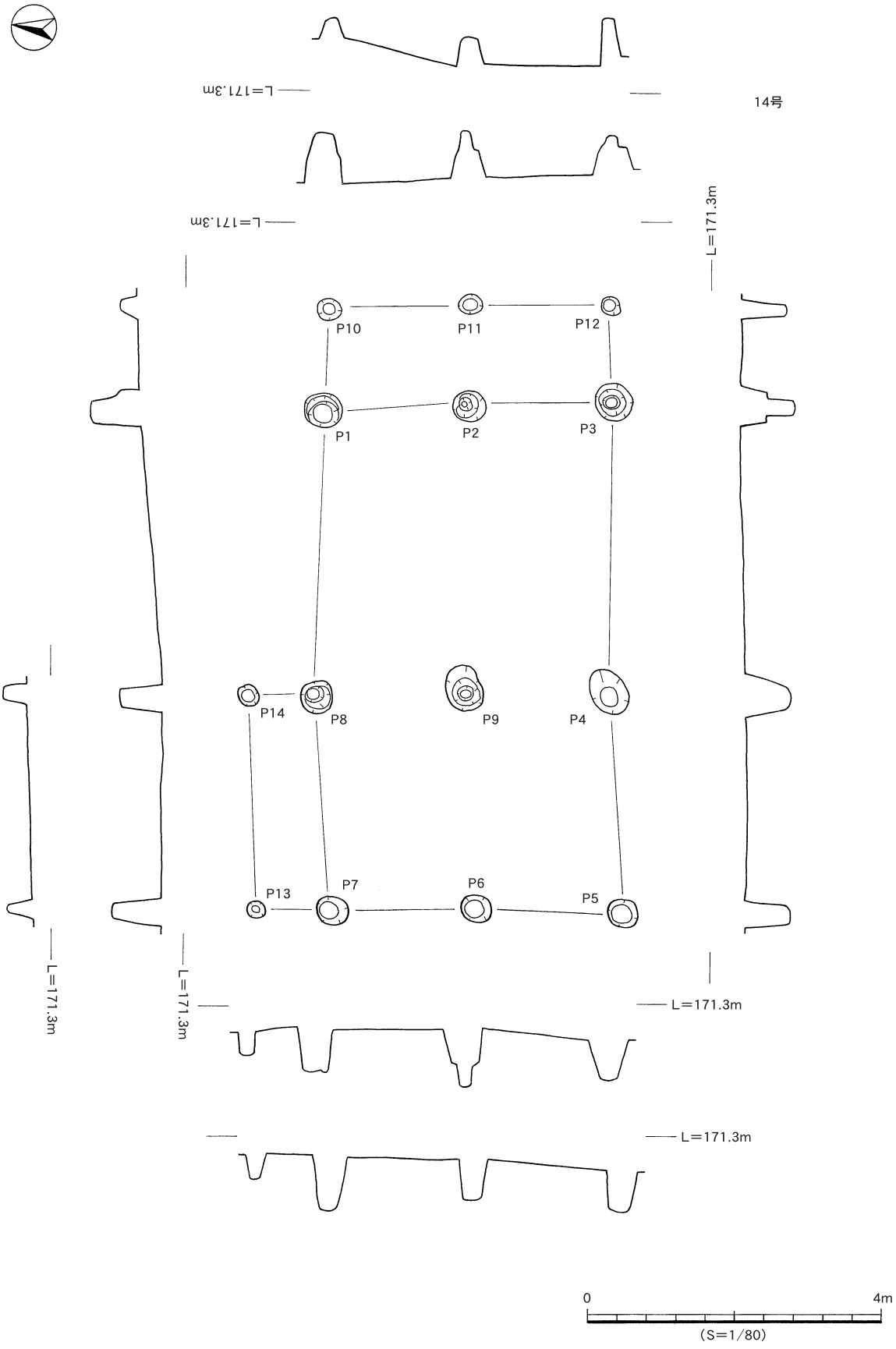
桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 － 4	800	1 －10	390
1 － 2	130	1 －11	200
2 － 3	390	11－10	190
3 － 4	290	2 － 9	390
11－ 5	820	3 － 7	390
10－ 6	820	4 － 6	400
10－ 9	140	4 － 5	200
9 － 8	200	5 － 6	200
8 － 7	200		
7 － 6	300		

掘立柱建物跡14号柱穴計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	50	50	70
2	50	40	70
3	55	50	70
4	70	50	60
5	40	40	60
6	40	35	55
7	45	40	75
8	45	40	60
9	62	45	80
10	32	30	30
11	34	28	40
12	30	25	50
13	25	25	35
14	30	30	30

掘立柱建物跡14号規模表

桁行方向		梁行き方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
10－ 7	820	10－12	380
1 －10	150	10－11	190
1 － 8	380	11－12	190
8 － 7	290	1 － 3	400
11－ 6	820	1 － 2	200
11－ 2	140	2 － 3	200
2 － 9	390	14－ 4	490
9 － 6	290	14－ 8	90
12－ 5	830	8 － 9	210
12－ 3	130	9 － 4	200
3 － 4	400	13－ 5	500
4 － 5	300	13－ 7	100
14－13	290	7 － 6	200
		6 － 5	200



第418図　掘立柱建物跡14号

② **竪穴建物跡（第419図～第428図）**

竪穴建物跡は，遺跡の中央部から羽月川の下流側にかけて13軒検出された。特に，D～G－40～44区に７軒が集中して検出されている。遺構内遺物は中世末から近世の初め頃のものが多く出土している。

竪穴建物跡１号（第419図）

G・H－22区で検出された。2.5m×2.0mの隅丸長方形である。検出面からの深さ約15㎝である。南側の一部が撹乱によって壊されている。直径10～20㎝，深さ約20～30㎝の柱穴が壁側にそって４基検出された。

遺構内遺物

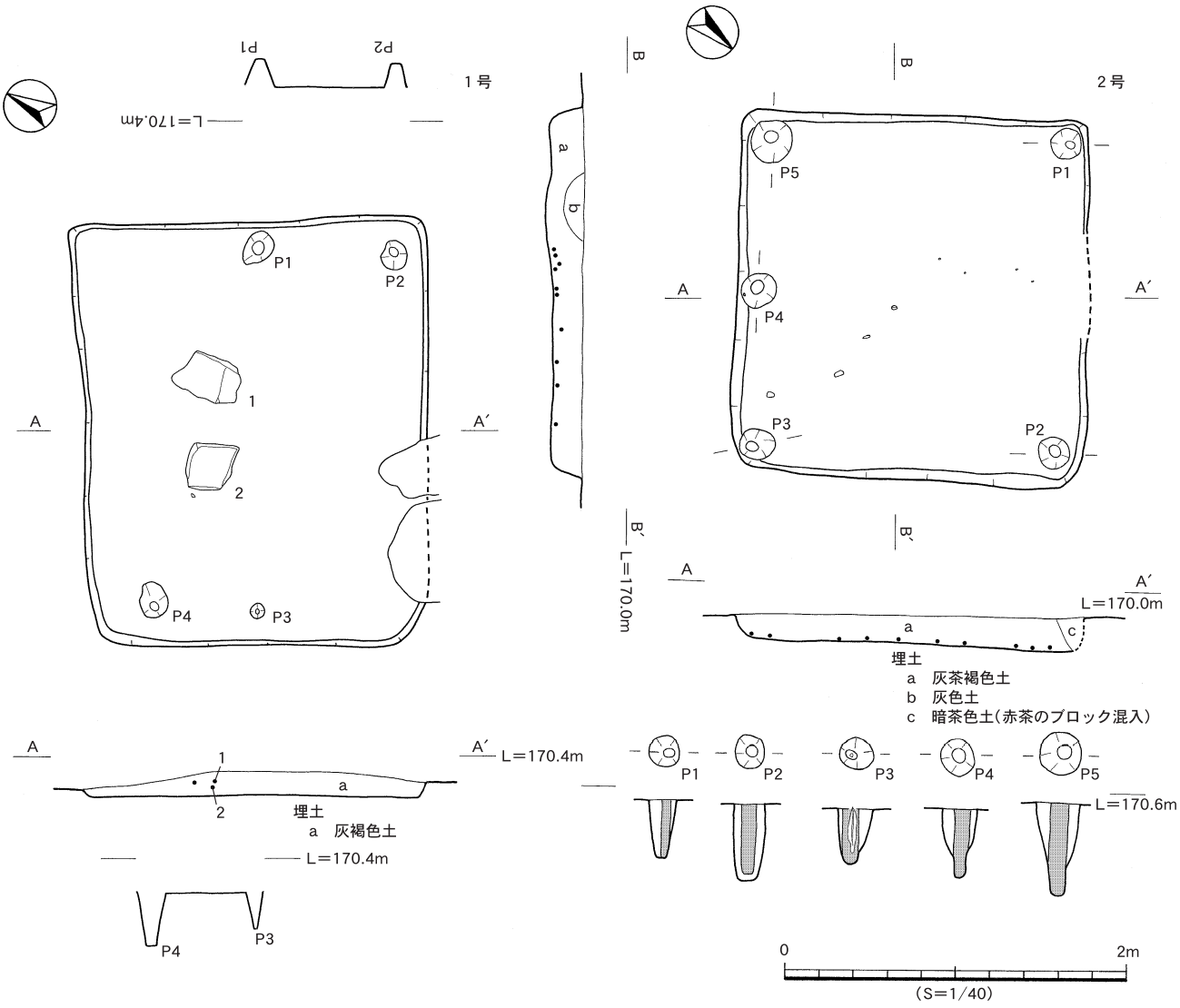
遺構内に台石と考えられる安山岩が２個出土した。１は長さ38.5㎝×25㎝で重さは12,000ｇ。２は長さ27㎝×26㎝で重さは11,000ｇであった。その他，小片であるが景徳鎮窯系の白磁皿が出土した。

竪穴建物跡２号（第419図）

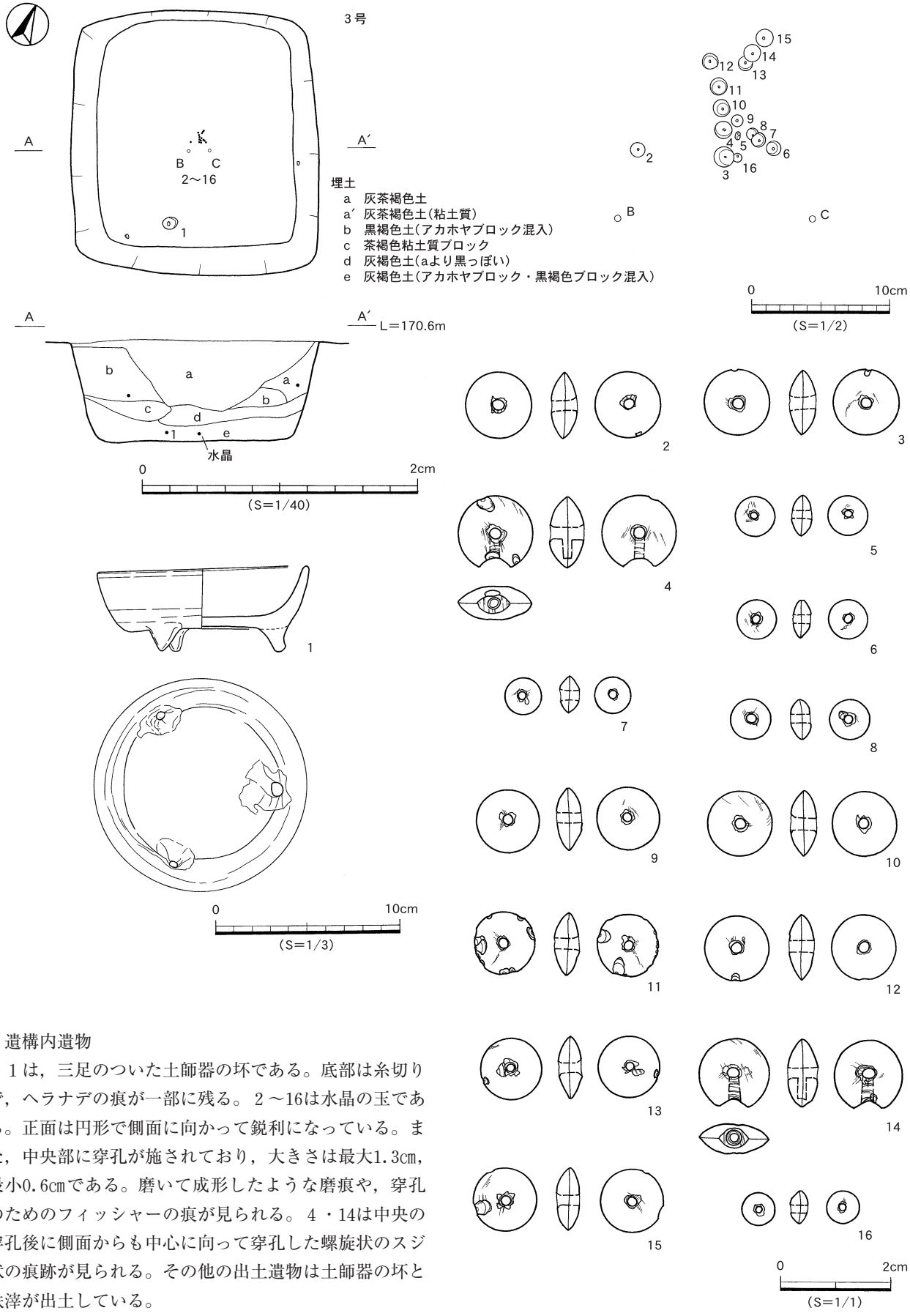
F－27・28区で検出された。2.2m×2.1mの隅丸長方形である。北側の一部は，現代の撹乱で壊されている。検出面からは深さ約20㎝である。壁側にそって柱穴が５基検出された。柱穴内には腐敗した木材の残存が確認された。残存状況の良かった柱穴３号の木材は長さ29㎝，幅４㎝，厚みが1.5㎝であった。その他，中・近世にあたる遺物は出土しなかった。

竪穴建物跡３号（第420図）

D－31区で検出された。1.9m×1.8mの隅丸長方形である。検出面からの深さは約70㎝である。柱穴は検出できなかった。遺構中央部に集中して穿孔のある水晶の玉が15個出土した（科学分析参照）。



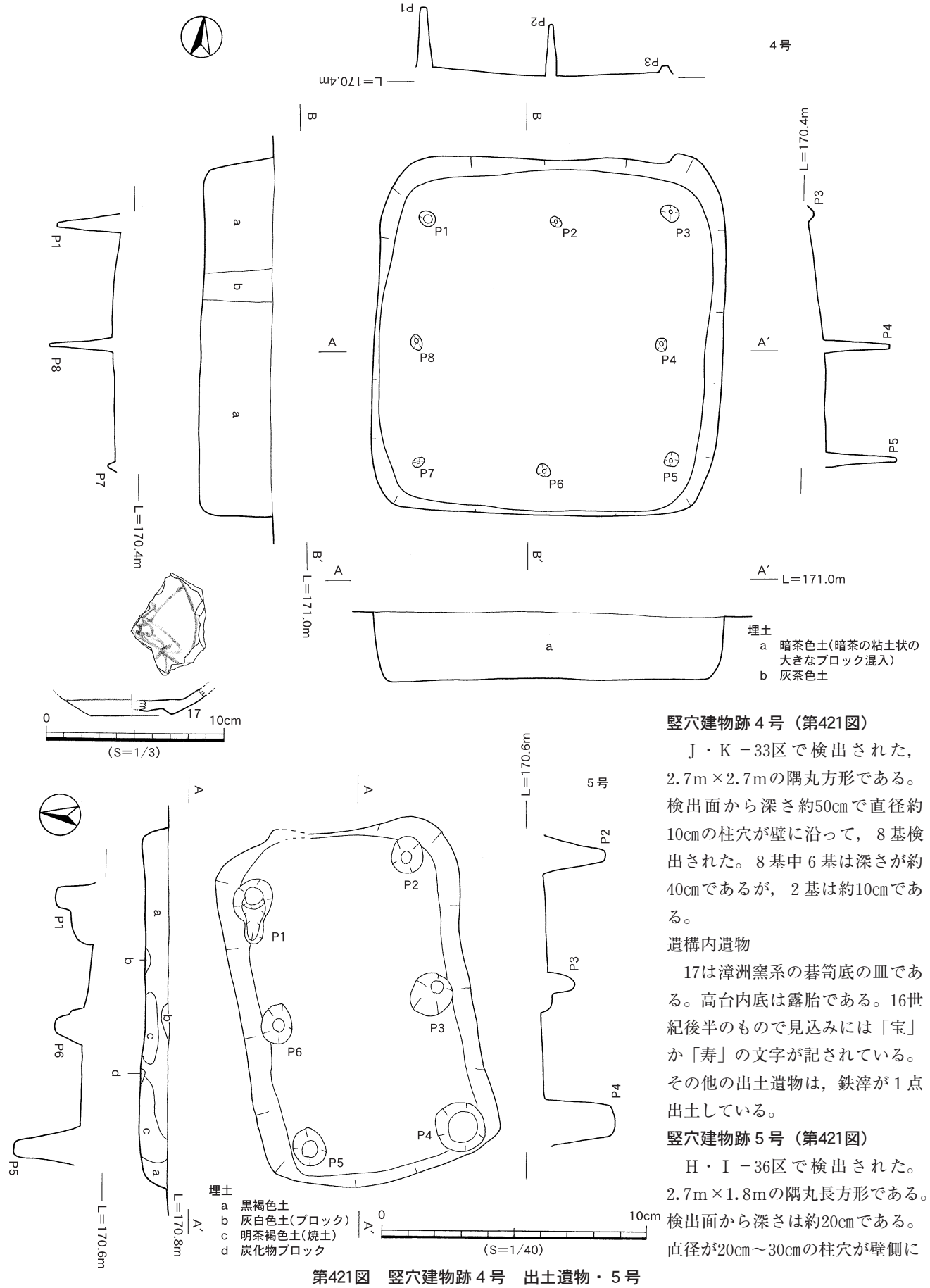
第419図　竪穴建物跡１号・２号



遺構内遺物

1は，三足のついた土師器の坏である。底部は糸切りで，ヘラナデの痕が一部に残る。2～16は水晶の玉である。正面は円形で側面に向かって鋭利になっている。また，中央部に穿孔が施されており，大きさは最大1.3㎝，最小0.6㎝である。磨いて成形したような磨痕や，穿孔のためのフィッシャーの痕が見られる。4・14は中央の穿孔後に側面からも中心に向って穿孔した螺旋状のスジ状の痕跡が見られる。その他の出土遺物は土師器の坏と鉄滓が出土している。

第420図　竪穴建物跡3号　出土遺物



第421図　竪穴建物跡４号　出土遺物・５号

竪穴建物跡４号（第421図）

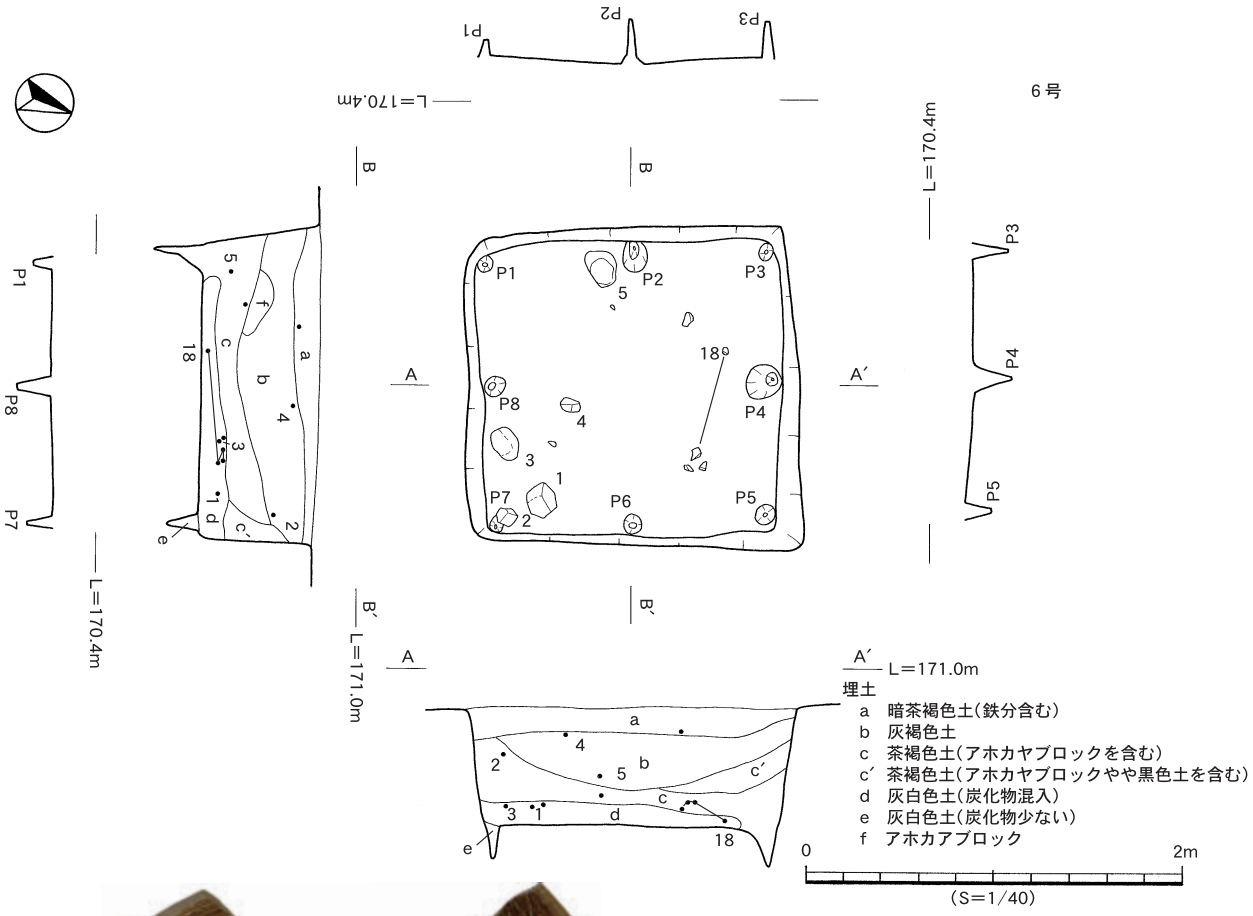
Ｊ・Ｋ－33区で検出された，2.7ｍ×2.7ｍの隅丸方形である。検出面から深さ約50㎝で直径約10㎝の柱穴が壁に沿って，８基検出された。８基中６基は深さが約40㎝であるが，２基は約10㎝である。

遺構内遺物

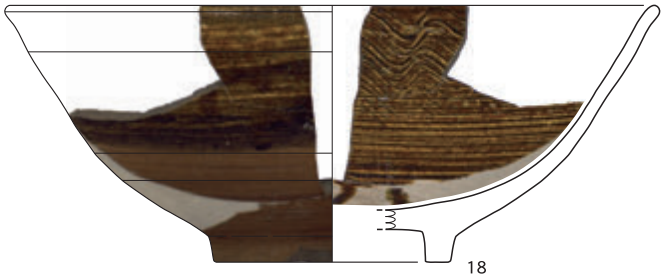
17は漳洲窯系の碁笥底の皿である。高台内底は露胎である。16世紀後半のもので見込みには「宝」か「寿」の文字が記されている。その他の出土遺物は，鉄滓が１点出土している。

竪穴建物跡５号（第421図）

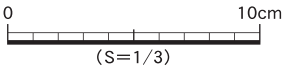
Ｈ・Ｉ－36区で検出された。2.7ｍ×1.8ｍの隅丸長方形である。検出面から深さは約20㎝である。直径が20㎝～30㎝の柱穴が壁側に











沿って6基検出された。埋土中からは灰がブロック化したものや，焼土が多量に検出されたことから，火を使用した竪穴建物跡と思われる。遺構内遺物は出土しなかった。

竪穴建物跡6号（第422図）

F－40・41区で検出された。1.8m×1.8mの隅丸方形である。検出面からの深さは約60㎝である。直径が約10～20㎝の柱穴が壁側に沿って，8基検出された。

遺構内遺物

遺構内からは，軽石製品が出土した。遺構平面図中1は大きさ25㎝×18.5㎝で重さは1,810ｇである。2は大きさ13㎝×11㎝で重さは385ｇである。3は24.6㎝×14.8㎝で重さは1100ｇである。4は11㎝×10㎝で重さは235ｇである。5は21.5㎝×18.5㎝で重さは1390ｇである。

18は肥前産の二彩手の鉢である。鉄釉と銅緑釉を掛流したものである。

第422図　竪穴建物跡6号　出土遺物

竪穴建物跡７号（第423図）

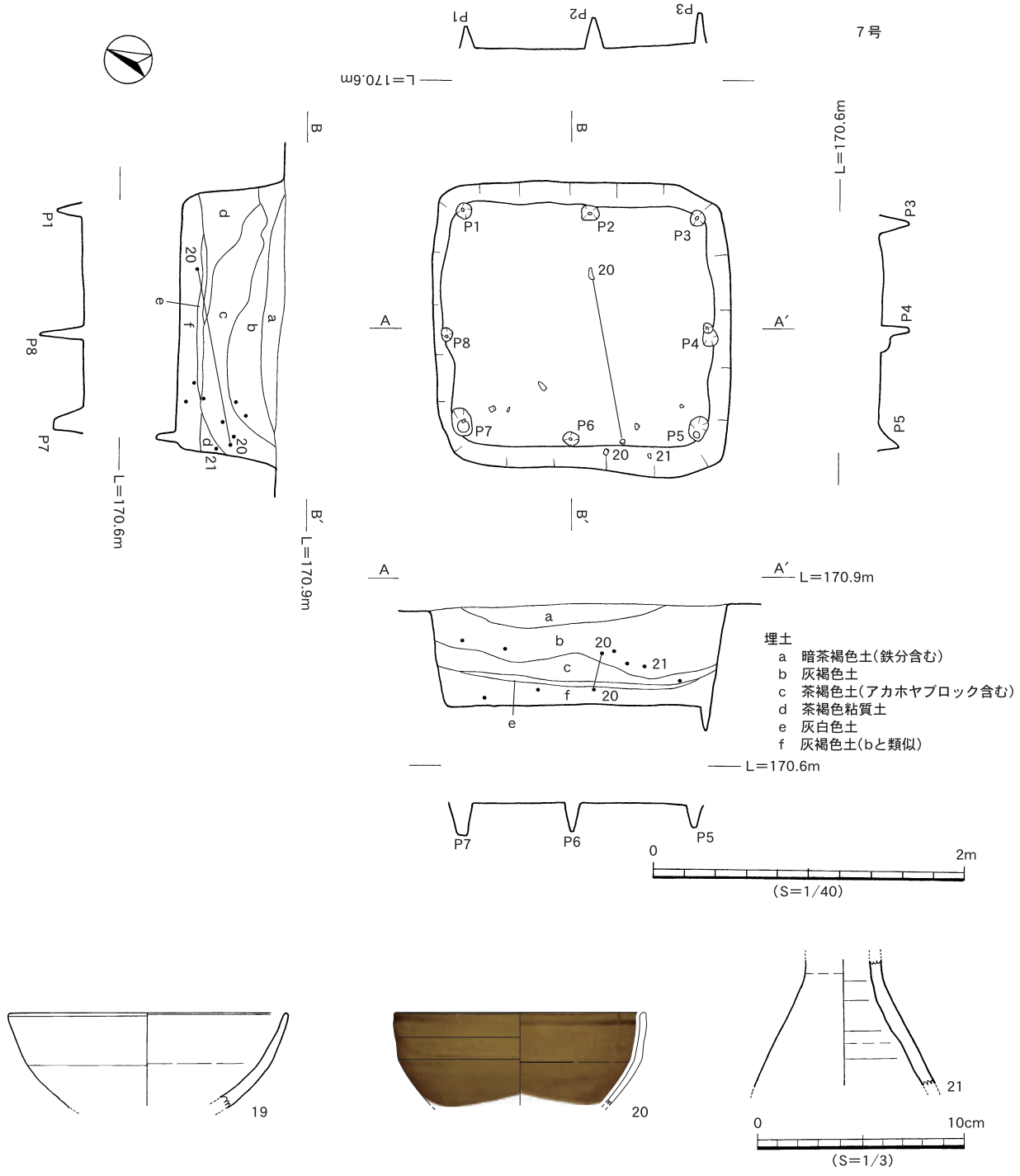
Ｇ－41区で検出された。1.9ｍ×1.9ｍの隅丸方形である。検出面から深さ約60㎝である。直径が約10～20㎝，深さ20～30㎝の柱穴が壁側に沿って８基検出された。

遺構内遺物

19・20は薩摩産の龍門司系の碗である。21は備前産の徳利の頸部である。その他の出土遺物は，17世紀後半の肥前産の磁器が出土している。

竪穴建物跡８号（第424図）

Ｄ・Ｅ－42区で検出された。2.6ｍ×1.8ｍの隅丸長方形である。検出面から深さは約20㎝である。直径が約20～30㎝，深さ約10～20㎝のピットが３基検出された。遺構内遺物は出土しなかった。



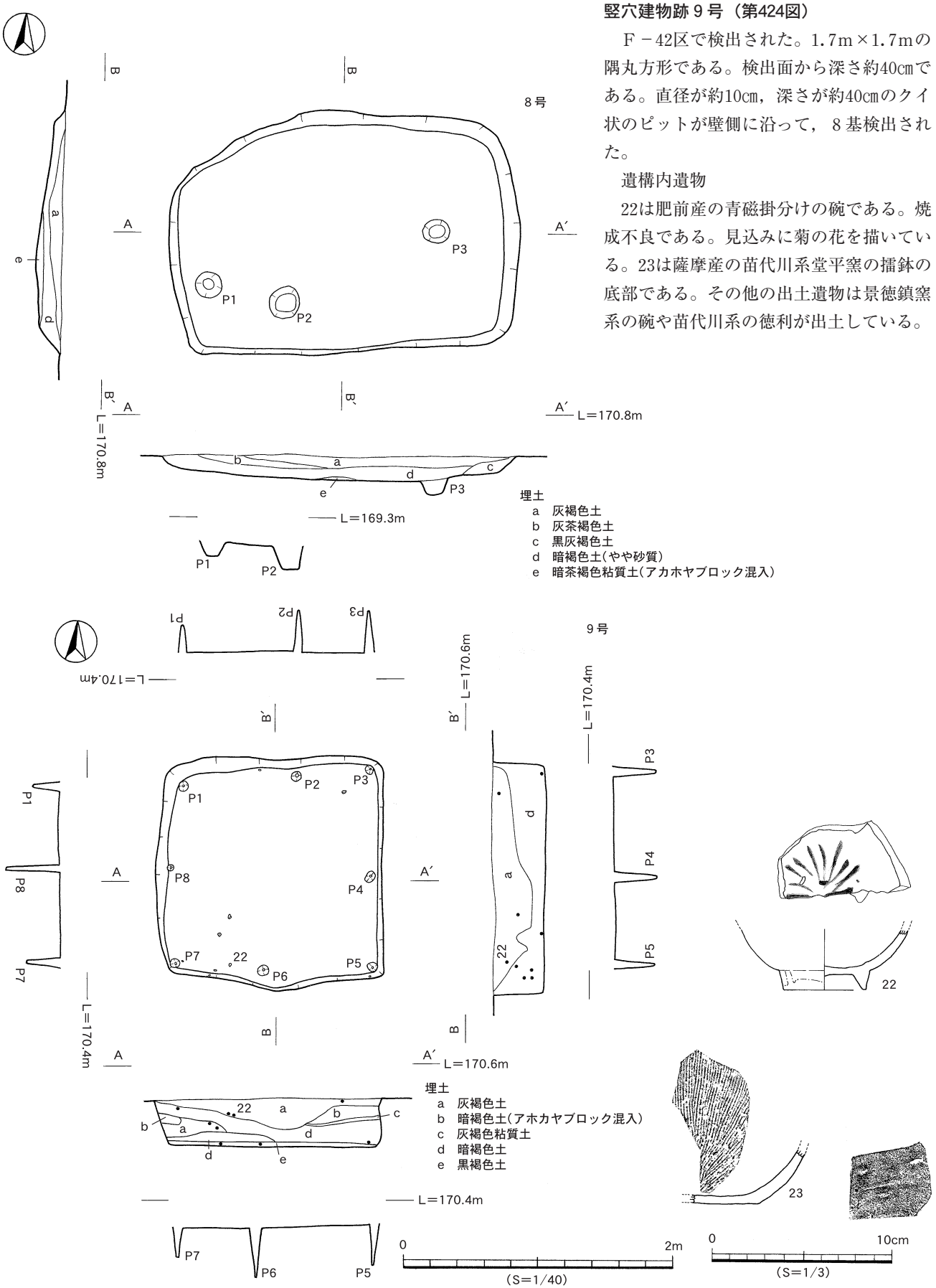
第423図　竪穴建物跡７号　出土遺物

竪穴建物跡９号（第424図）

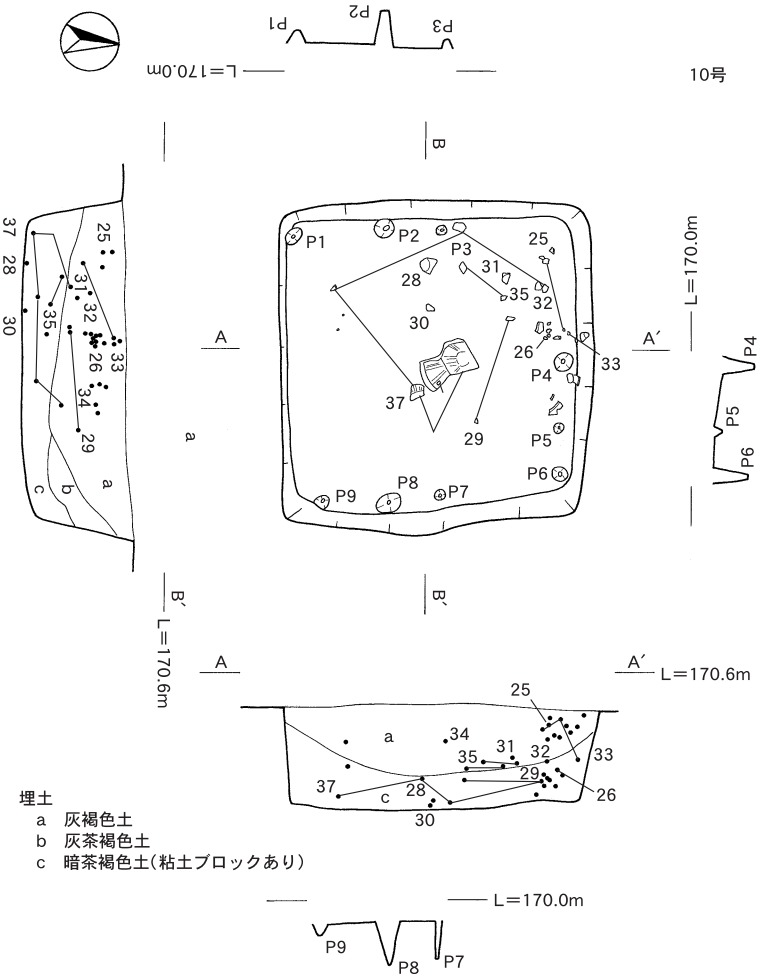
Ｆ－42区で検出された。1.7m×1.7mの隅丸方形である。検出面から深さ約40㎝である。直径が約10㎝，深さが約40㎝のクイ状のピットが壁側に沿って，８基検出された。

遺構内遺物

22は肥前産の青磁掛分けの碗である。焼成不良である。見込みに菊の花を描いている。23は薩摩産の苗代川系堂平窯の擂鉢の底部である。その他の出土遺物は景徳鎮窯系の碗や苗代川系の徳利が出土している。



第424図　竪穴建物跡８号・９号　出土遺物



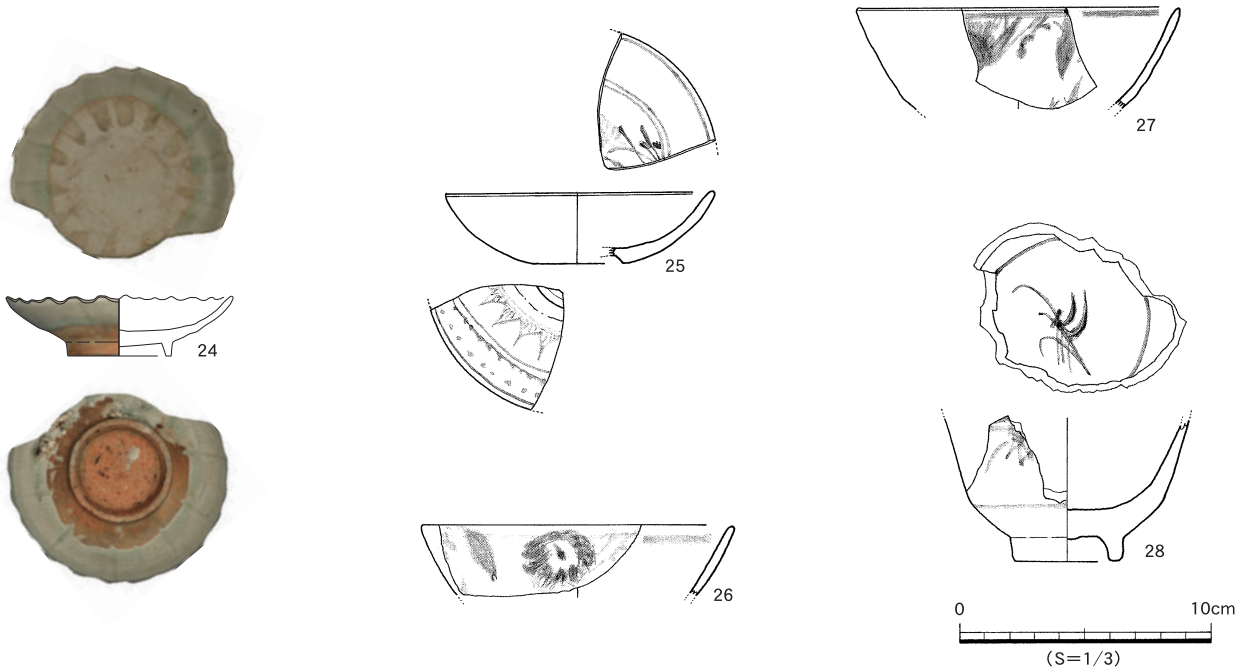
竪穴建物跡10号（第425・426図）

Ｆ－42・43区で検出された。1.8m×1.7mの隅丸方形である。検出面から深さ約55㎝である。直径が約10㎝，深さが約10～30㎝の柱穴が９基検出された。多量の遺構内遺物の帰属時期から近世の遺構であると思われる。

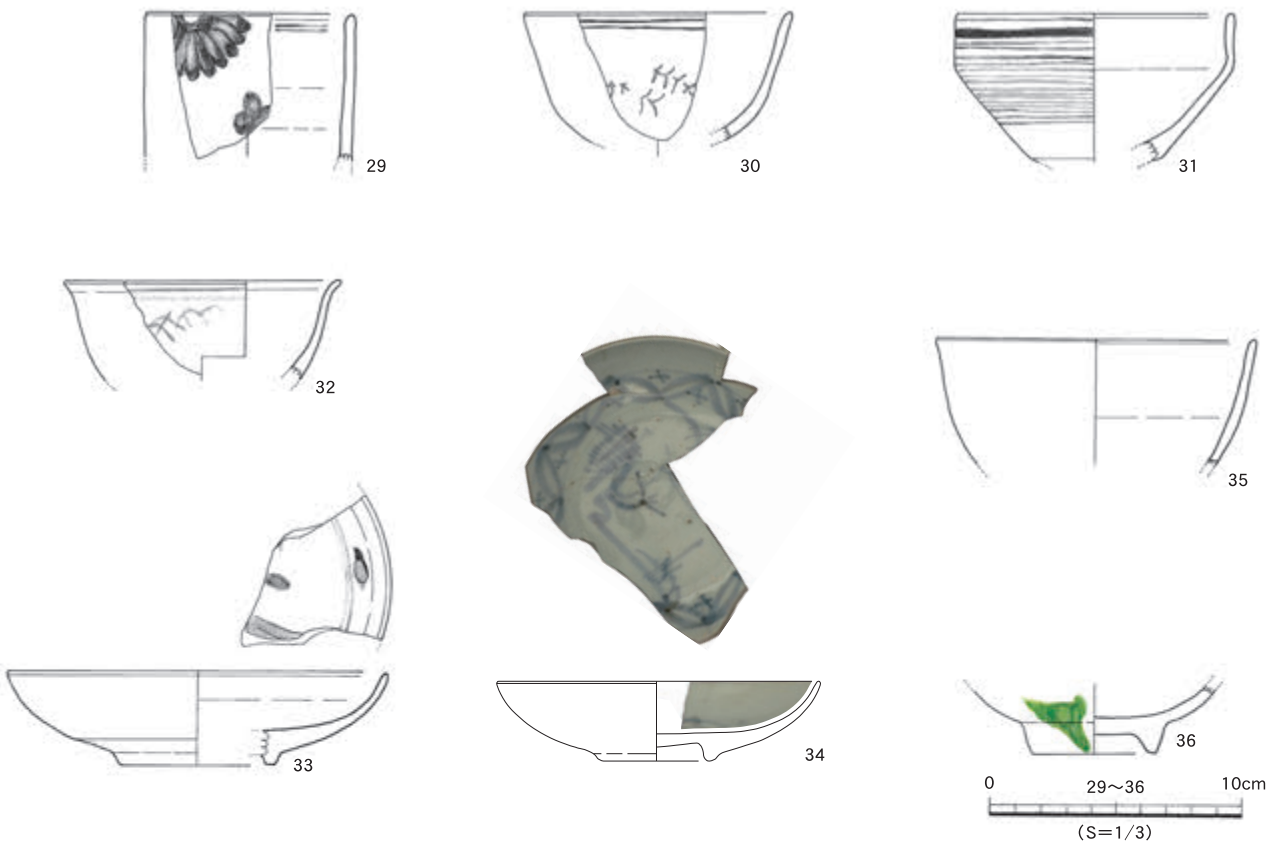
遺構内遺物

24は漳洲窯系の青磁の稜花皿である。25は景徳鎮窯系の碁笥底の皿である。26・27は漳洲窯系の青花の碗である。28～31は肥前の染付碗である。28は見込みに蝶が描かれている。畳付に砂粒が付着している。29は筒型碗である。30は雁が描かれている。31は天目型の碗である。32は笹文の描かれた浅めの小鉢である。33・34は肥前の染付皿である。35は肥前陶器の呉器手碗である。36は肥前陶器の銅緑釉掛流しの碗である。畳付には砂粒が付着している。37は17世紀前半の肥前の擂鉢である。底部は糸切り痕が見られる。

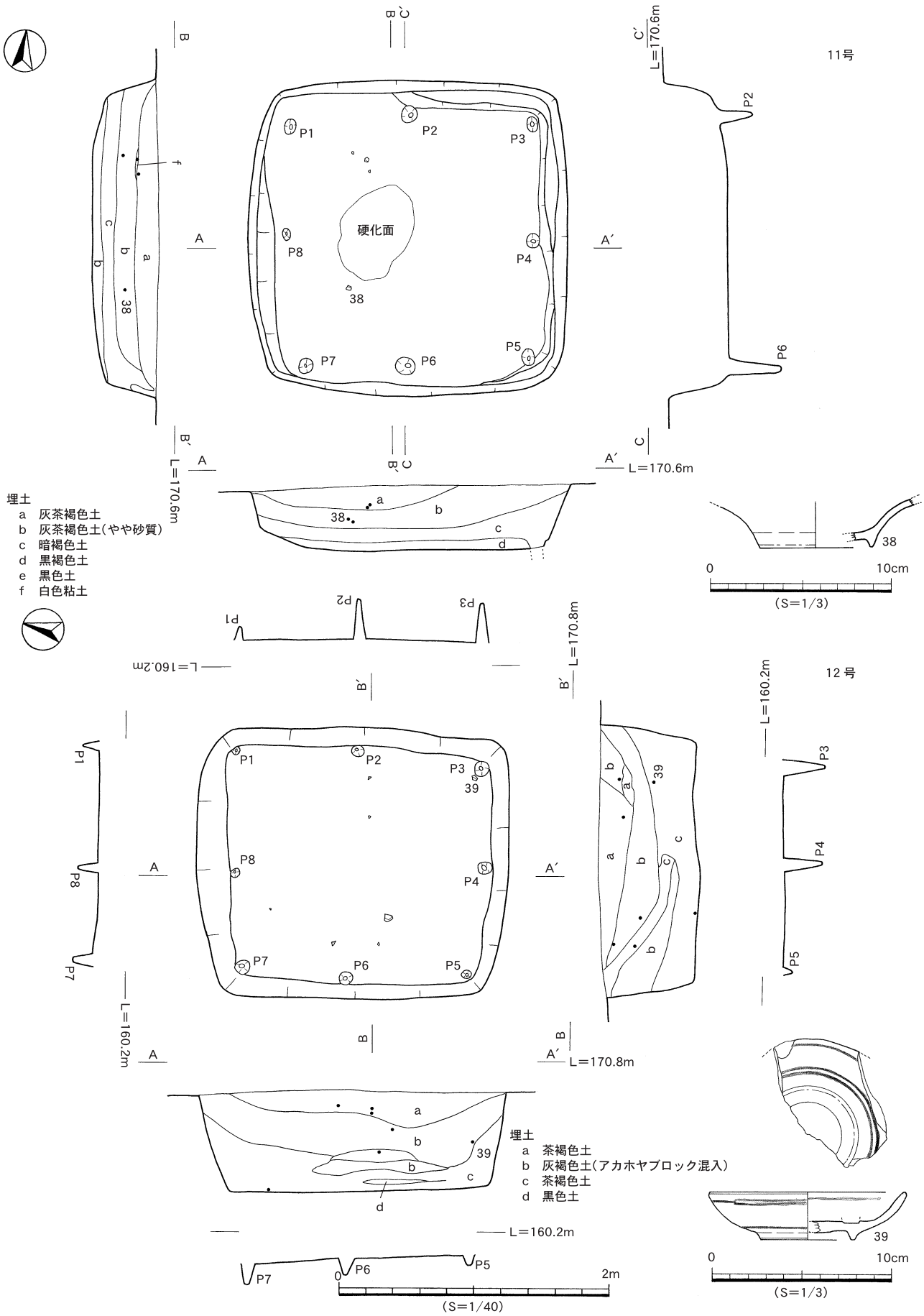
その他の出土遺物は，28と同一文様の碗が１点。32と同一文様の浅めの碗が３点。33と同一文様の皿が２点。34と同一文様の皿が１点出土している。さらに景徳鎮系の青花の碗が２点，肥前染付の碗が１点，肥前染付の皿が２点出土している。



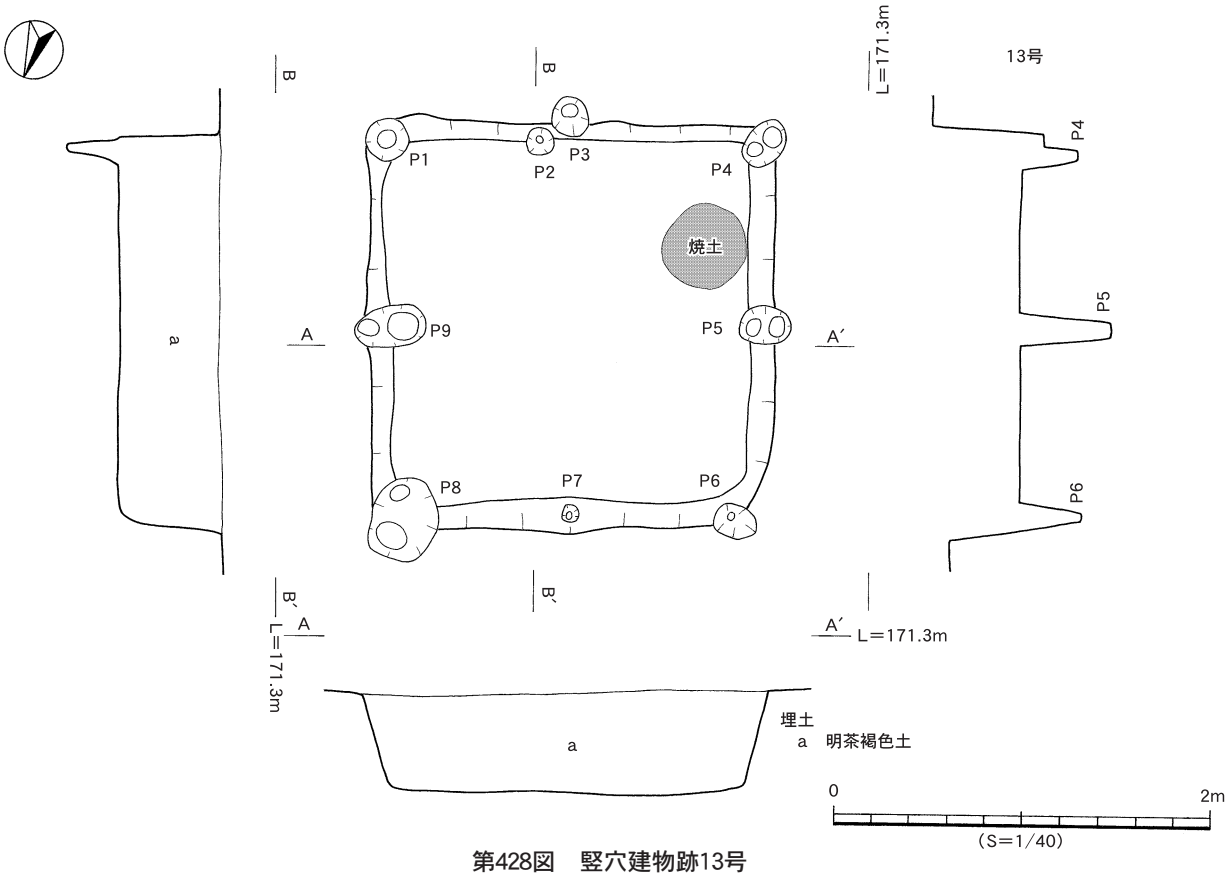
第425図　竪穴建物跡10号　出土遺物①



第426図　竪穴建物跡10号　出土遺物②



第427図　竪穴建物跡11号　出土遺物・12号　出土遺物



第428図　竪穴建物跡13号

竪穴建物跡11号（第427図）

Ｆ－43区で検出された。2.4m×2.4mの隅丸方形である。検出面からの深さは約35㎝である。直径が約10㎝，深さは約30㎝のクイ状の柱穴が壁側に沿って，８基検出された。竪穴部の床面はⅦ層のチョコ層であった。中央に硬化面が検出された。

遺構内遺物

38は景徳鎮窯系の端反りの白磁皿である。その他の出土遺物は肥前の溝縁皿や白磁である。

竪穴建物跡12号（第427図）

Ｆ－44区で検出された。2.3m×2.0mの隅丸長方形である。検出面からの深さは約80㎝である。直径が約10㎝，深さが約10～30㎝のクイ状の柱穴が壁側に沿って８基検出された。

遺構内遺物

39は漳洲窯系の青花の皿で，見込みには輪状の釉剥ぎが施され，高台内底は露胎である。その他の出土遺物は，薩摩産の苗代川系の胴部が数点出土している。

竪穴建物跡13号（第428図）

Ｇ－48区で検出された。2.2m×2.2mの隅丸方形である。竪穴部の壁極から直径約20～30㎝，深さ約10～30㎝の柱穴が13基検出された。竪穴部南側で焼土が検出された。遺構内遺物は鉄滓が出土している。

③　建物状遺構（第429図・第430図）

平面形状や埋土の堆積状況が竪穴建物跡等とは，異なる３軒を建物状遺構として掲載する。

建物状遺構１号（第429図）

Ｇ－30区で検出された。8.1m×3.2mの大型の建物跡である。検出面からの深さは約40～60㎝でる。遺構の南側部分に緩やかに下った土坑状のものがある。埋土状況から切り合いが認められず，建物の一部と判断したものの土坑21が近くにあるので，時期差のある土坑の可能性もある。直径が約20㎝，深さが約20～50㎝の柱穴と思われるピットが８基検出された。

遺構内遺物

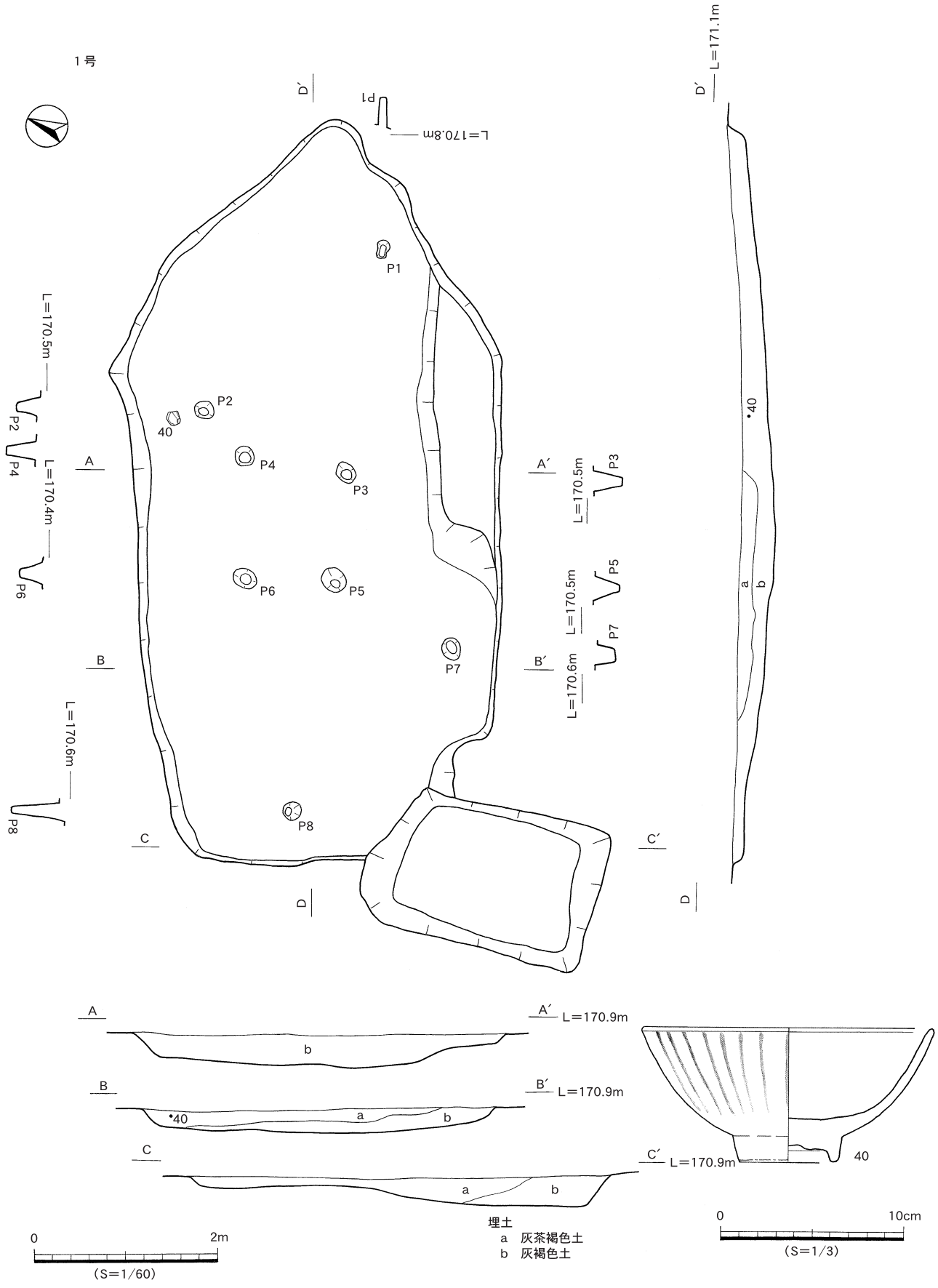
40は龍泉窯系の15世紀後半から16世紀前半の青磁椀である。その他の遺物は，古墳時代のものと思われるものが多かった。

建物状遺構２号（第430図）

Ｇ・Ｈ－37・38区で検出された，3.3m×3.0mの円形である。検出面からの深さは約20㎝である。直径約15～30㎝，深さが約50㎝の柱穴と思われるピットが４基検出された。

遺構内遺物

41は薩摩産の龍門司系山元窯から出土した，銅緑釉掛分け碗の１点のみである。



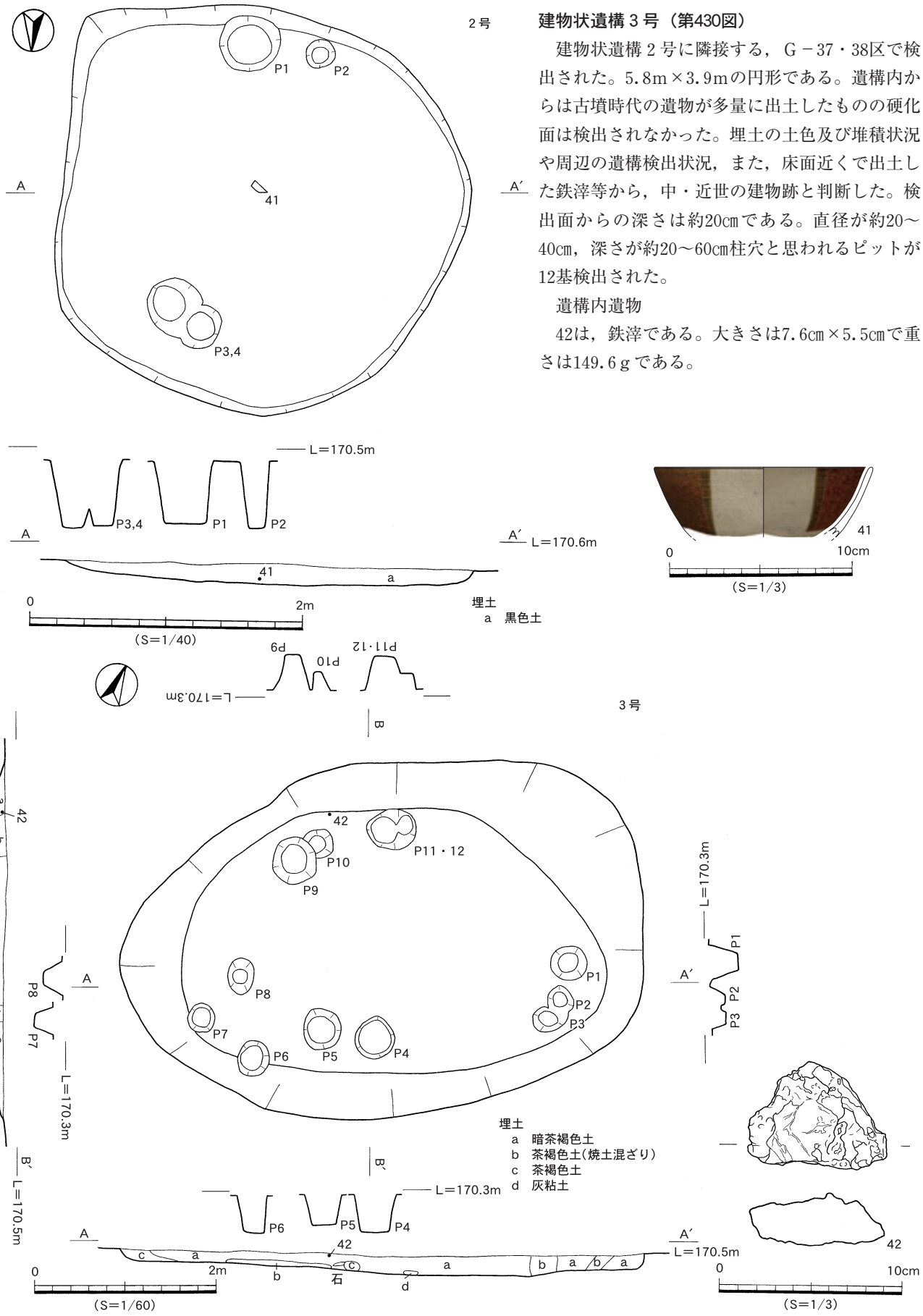
第429図　建物状遺構1号　出土遺物

建物状遺構３号（第430図）

建物状遺構２号に隣接する，Ｇ－37・38区で検出された。5.8m×3.9mの円形である。遺構内からは古墳時代の遺物が多量に出土したものの硬化面は検出されなかった。埋土の土色及び堆積状況や周辺の遺構検出状況，また，床面近くで出土した鉄滓等から，中・近世の建物跡と判断した。検出面からの深さは約20㎝である。直径が約20～40㎝，深さが約20～60㎝柱穴と思われるピットが12基検出された。

遺構内遺物

42は，鉄滓である。大きさは7.6㎝×5.5㎝で重さは149.6ｇである。



第430図　竪穴建物跡２号　出土遺物・３号　出土遺物

④　土坑（第431図～第438図）

中世・近世の時代と思われる土坑をまとめて掲載する。Ｌ－11区からＤ－42区までの広範囲で出土した。Ｋ－23区～Ｍ－23区と，Ｌ－27区～Ｌ－29区にまとまりが見られる。埋土の状況や出土遺物から多くは墓と思われる。また，Ｈ－34区やＩ－35区で，桶状の遺物が埋設された土坑も検出された。

土坑１号（第431図）

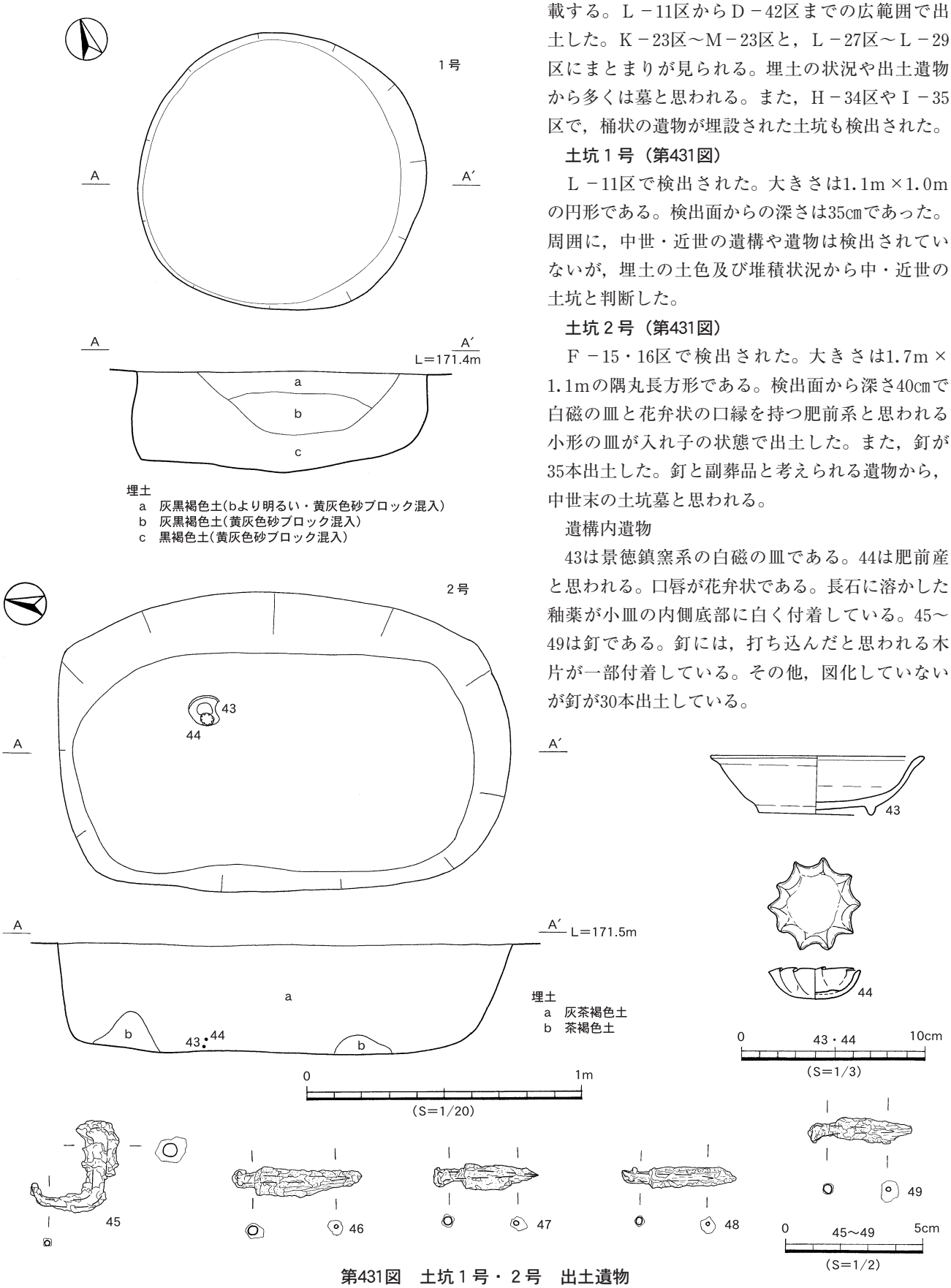
Ｌ－11区で検出された。大きさは1.1m×1.0mの円形である。検出面からの深さは35㎝であった。周囲に，中世・近世の遺構や遺物は検出されていないが，埋土の土色及び堆積状況から中・近世の土坑と判断した。

土坑２号（第431図）

Ｆ－15・16区で検出された。大きさは1.7m×1.1mの隅丸長方形である。検出面から深さ40㎝で白磁の皿と花弁状の口縁を持つ肥前系と思われる小形の皿が入れ子の状態で出土した。また，釘が35本出土した。釘と副葬品と考えられる遺物から，中世末の土坑墓と思われる。

遺構内遺物

43は景徳鎮窯系の白磁の皿である。44は肥前産と思われる。口唇が花弁状である。長石に溶かした釉薬が小皿の内側底部に白く付着している。45～49は釘である。釘には，打ち込んだと思われる木片が一部付着している。その他，図化していないが釘が30本出土している。



第431図　土坑１号・２号　出土遺物

土坑３号（第432図）

Ｋ－23区で検出された。大きさ0.8m×0.8mの円形である。検出面からの深さは，約５㎝である。遺物は出土していない。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑４号（第432図）

Ｋ－23区で検出された。大きさ0.9m×0.9mの円形である。検出面からの深さは約15㎝である。遺物は古墳時代の土器が出土していたが，形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑５号（第432図）

Ｋ－23区で検出された。大きさ0.8m×0.7mの円形である。検出面からの深さは約20㎝である。古墳時代の土器が出土したが，形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑６号（第432図）

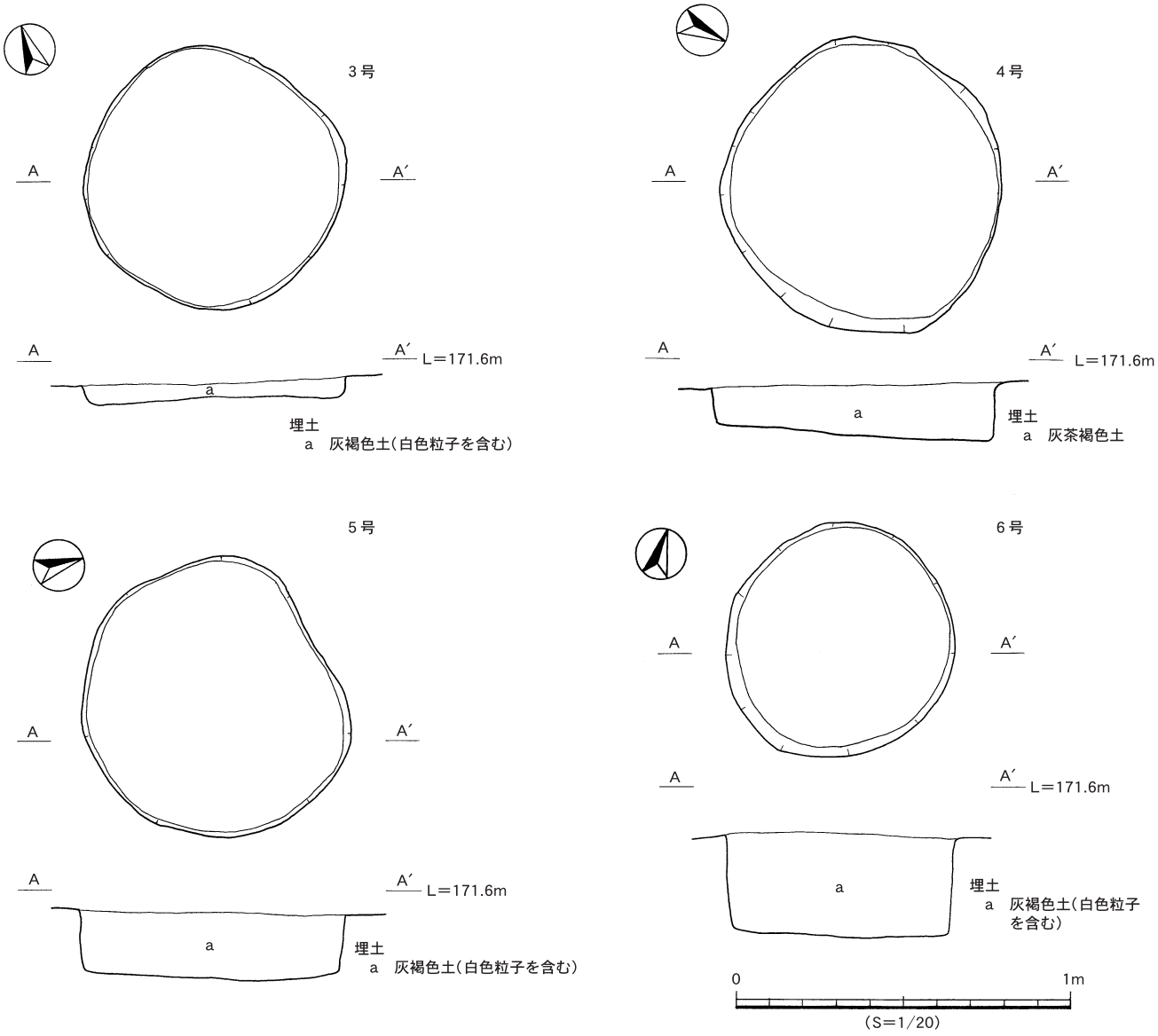
Ｋ－24区で検出された。大きさ0.7m×0.7mの円形である。検出面からの深さは約30㎝である。遺物は古墳時代の土器と薩摩焼の擂鉢の底部が出土したが，形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑７号（第433図）

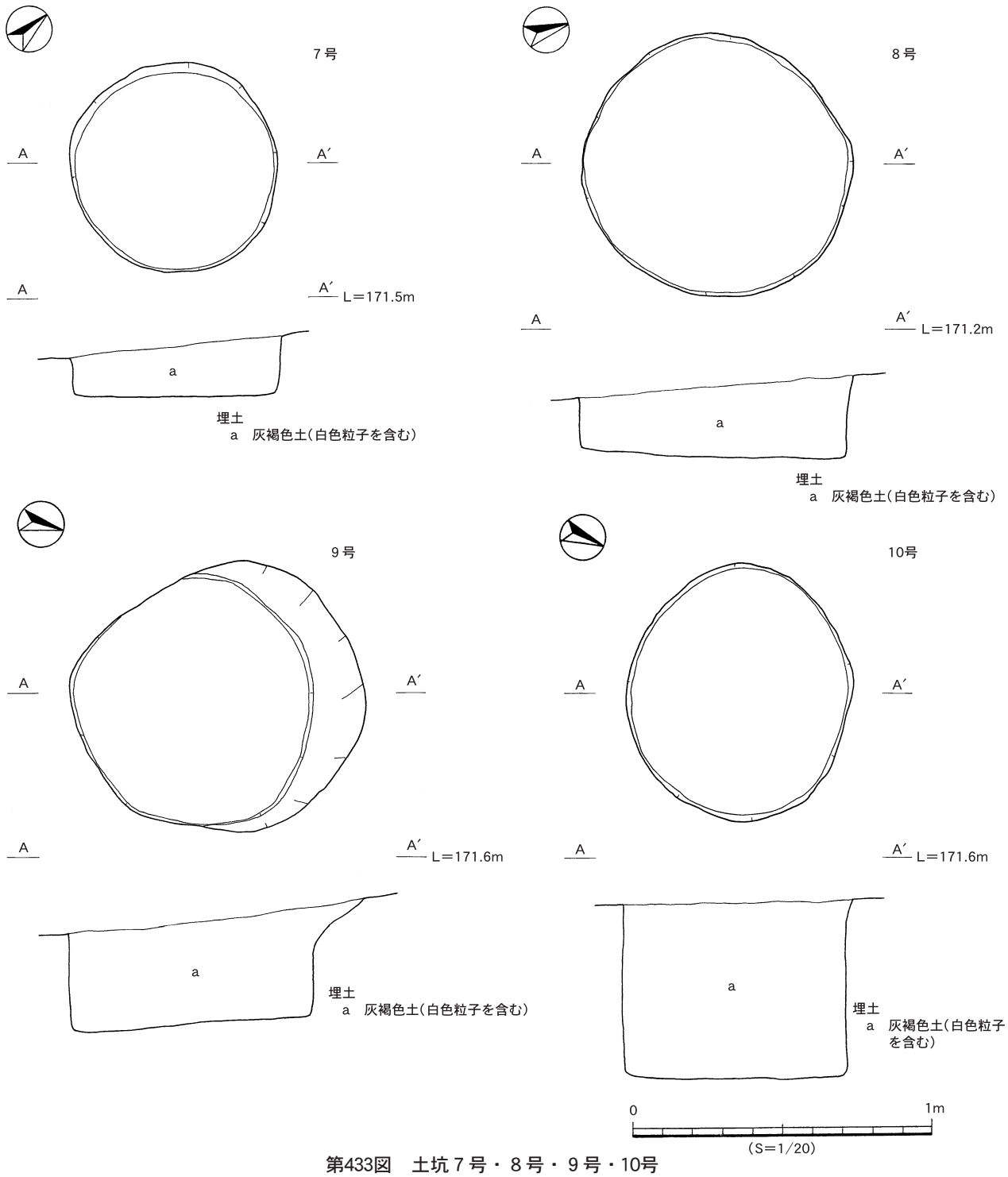
Ｌ－23区で検出された。大きさ0.7m×0.7mの円形である。検出面からの深さは約15㎝である。遺物は出土していないが，形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑８号（第433図）

Ｌ－23区で検出された。大きさ0.9m×0.9mの円形である。検出面からの深さは約25㎝である。遺物は釘が１点出土している。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。



第432図　土坑３号・４号・５号・６号



第433図　土坑７号・８号・９号・10号

土坑９号（第433図）

Ｌ・Ｍ－23区で検出された。大きさ1.0m×0.9mの円形である。検出面からの深さは約35㎝である。遺物は出土していないが，形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑10号（第433図）

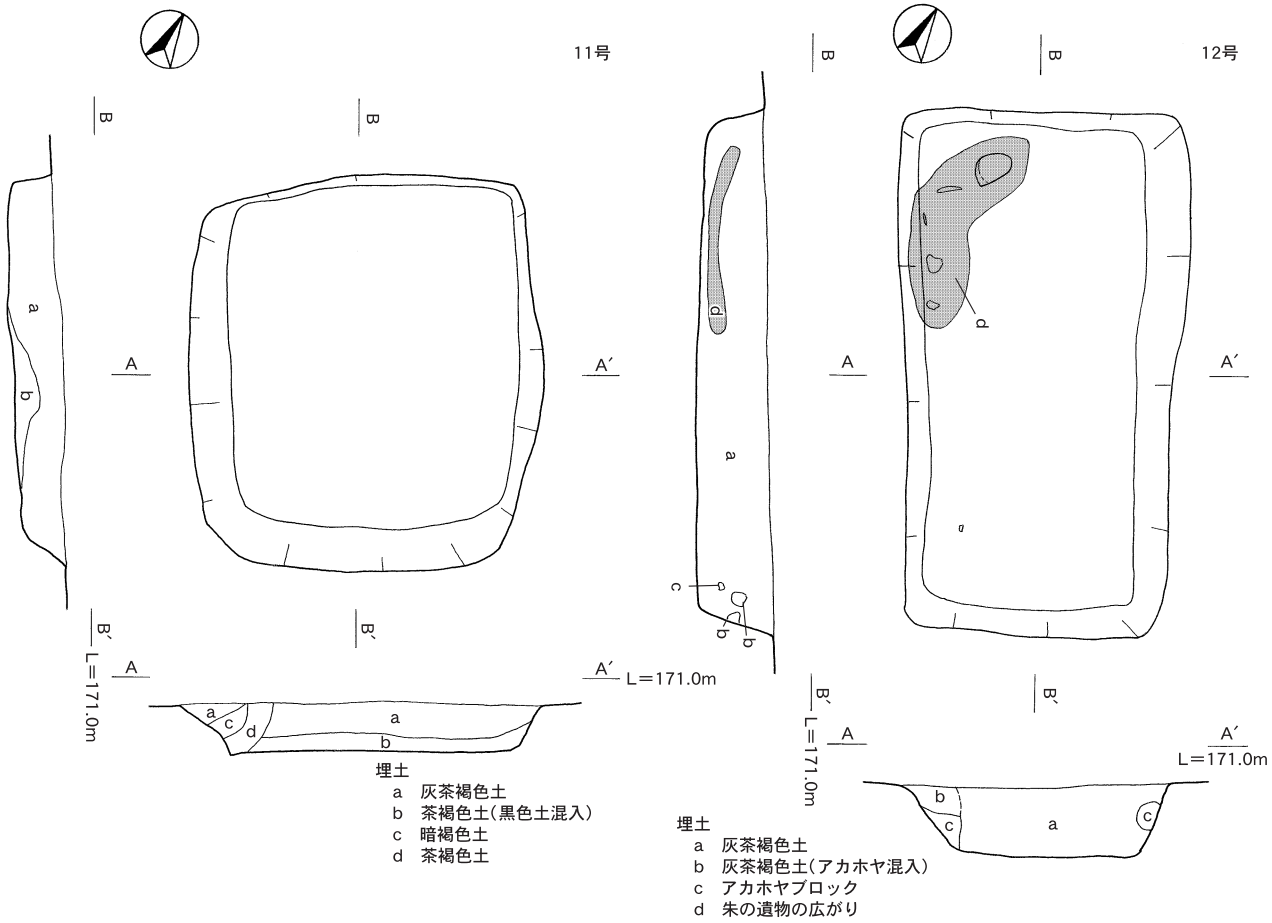
Ｍ－23区で検出された。大きさ0.9m×0.8mの円形である。検出面からの深さは約55㎝である。遺物は出土していないが，形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑11号（第434図）

Ｆ－24区で検出された。大きさ1.1m×1.0mの隅丸方形である。検出面からの深さは約15㎝である。遺物は出土していないが，土坑12号に隣接することや，形状と埋土の状況から中世墓と思われる。

土坑12号（第434図）

Ｆ－24区で検出された。大きさ1.4m×0.7mの隅丸方形である。検出面からの深さは約18㎝である。遺物は朱色の広がりが見られる土壌と薄型の木片が出土している



(詳細は科学分析参照)。形状と埋土の状況から中世墓と思われる。

土坑13号（第434図）

G・H－28区で検出された。大きさ1.4m×1.4mの円形である。検出面からの深さは約30㎝である。遺物は鉄滓が2点出土している。

土坑14号（第435図）

L－27区で検出された。大きさ0.7m×0.6mの円形である。検出面からの深さは約10㎝である。遺物は出土しなかった。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

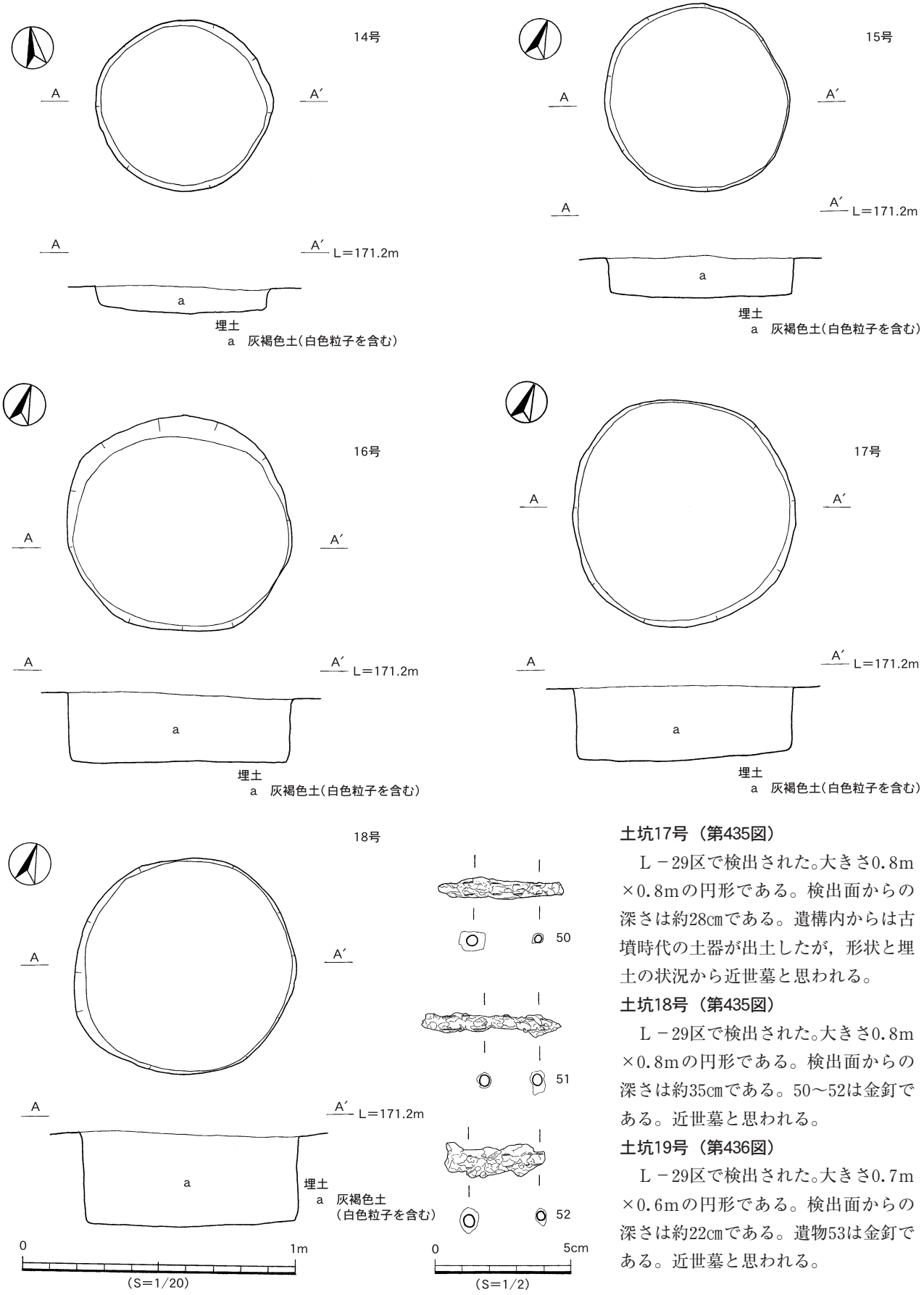
土坑15号（第435図）

L－27・28区で検出された。大きさ0.7m×0.7mの円形である。検出面からの深さは約15㎝である。遺物は出土しなかった。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

土坑16号（第435図）

L－28区で検出された。大きさ0.8m×0.8mの円形である。検出面からの深さは約25㎝である。遺物は出土しなかった。形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

第434図　土坑11号・12号・13号



土坑17号（第435図）

Ｌ－29区で検出された。大きさ0.8m×0.8mの円形である。検出面からの深さは約28㎝である。遺構内からは古墳時代の土器が出土したが，形状と埋土の状況から近世墓と思われる。

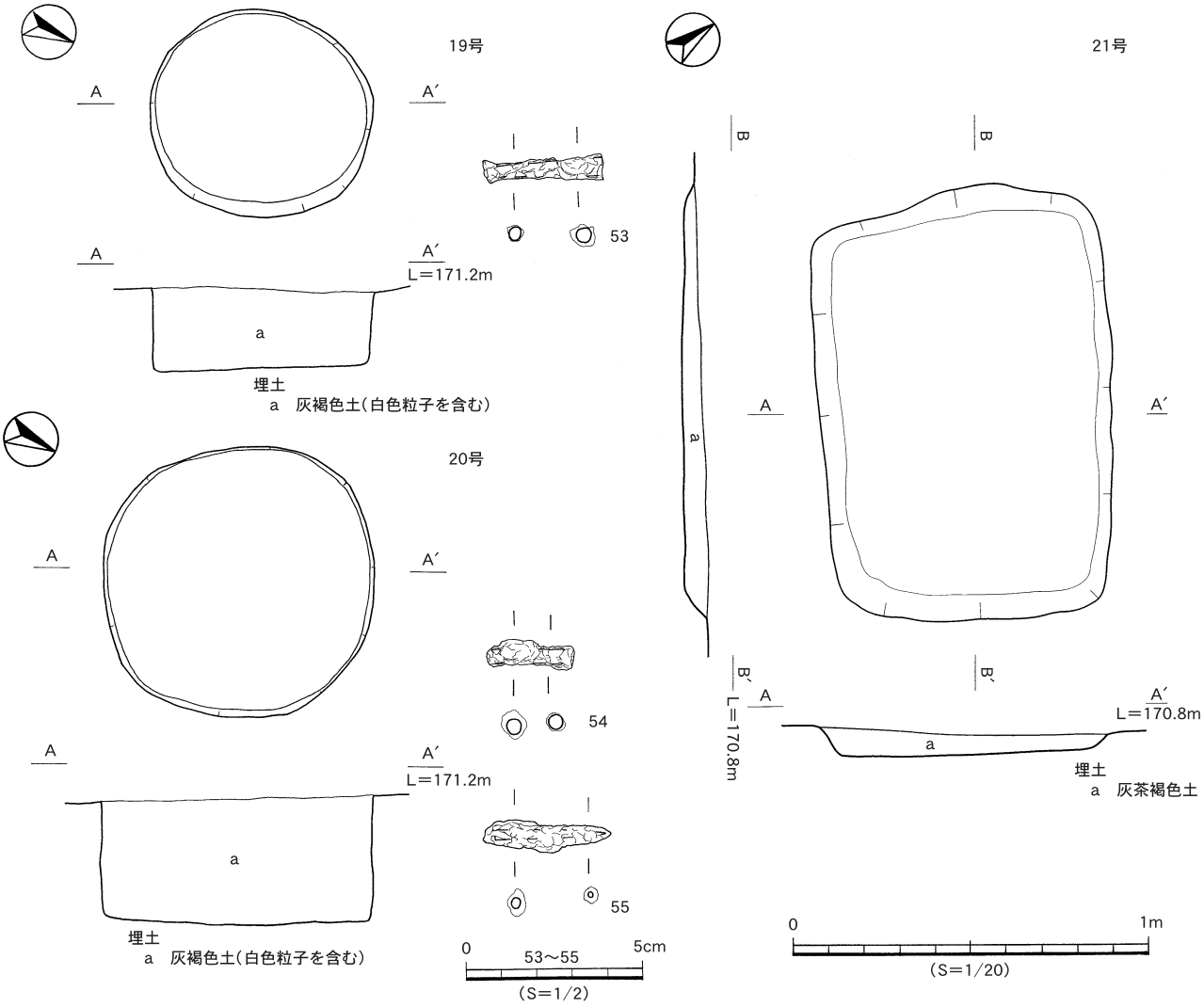
土坑18号（第435図）

Ｌ－29区で検出された。大きさ0.8m×0.8mの円形である。検出面からの深さは約35㎝である。50～52は金釘である。近世墓と思われる。

土坑19号（第436図）

Ｌ－29区で検出された。大きさ0.7m×0.6mの円形である。検出面からの深さは約22㎝である。遺物53は金釘である。近世墓と思われる。

第435図　土坑14号・15号・16号・17号・18号　出土遺物



第436図　土坑19号　出土遺物・20号　出土遺物・21号

土坑20号（第436図）

Ｌ－29区で検出された。大きさ0.8m×0.8mの円形である。検出面からの深さは約34㎝である。遺物は54・55の金釘が出土した。近世墓と思われる。

土坑21号（第436図）

Ｇ－30区で検出された。大きさ1.3m×0.8mの方形である。検出面からの深さは約10㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑22号（第437図）

Ｈ－30区で検出された。大きさ1.8m×1.6mの円形である。検出面からの深さは約17㎝である。遺物は出土しなかった。

土坑23号（第437図）

Ｈ－32区で検出された。大きさ1.5m×0.9mの円形である。検出面からの深さは約13㎝である。近世の掘立柱建物跡の柱穴に切られている。遺物は高台付きの土師器が出土しているので古代の可能性もある。

土坑24号（第438図）

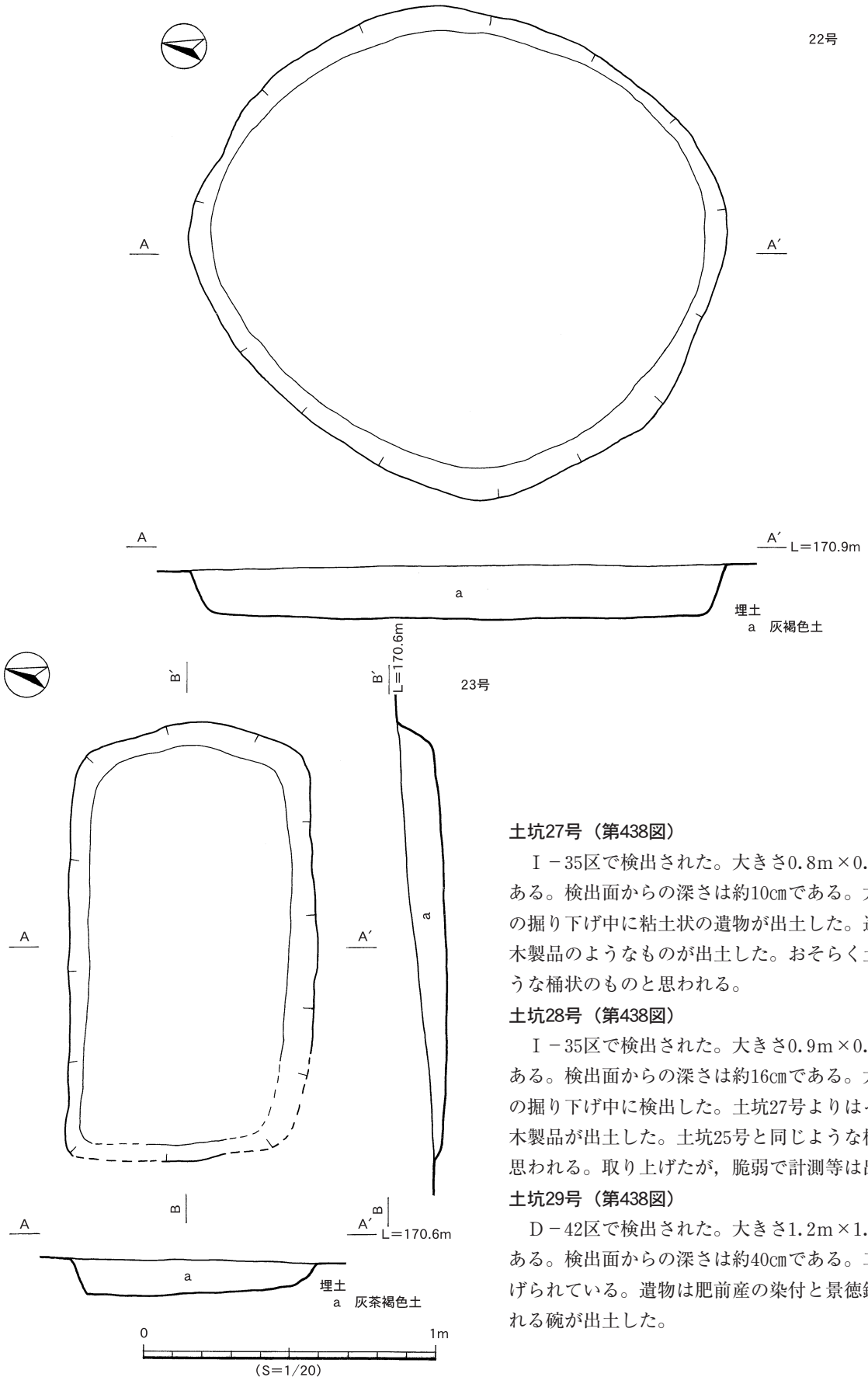
Ｈ－34区で検出された。大きさ1.2m×1.1mの円形である。検出面からの深さは約20㎝である。砂質状の埋土中に土器片が出土した。

土坑25号（第438図）

Ｈ－34区で検出された。大きさ0.8m×0.7mの円形である。検出面からの深さは約20㎝である。木製品が出土したものの，脆弱で取り上げはできなかった。板状の遺物の上にも板があり，間に石や陶器片が挟まっていた。おそらく桶が埋設されたと思われる。大型土坑２号に隣接し，また，土坑24号・26号に挟まれていることから関係性があるものと思われる。

土坑26号（第438図）

Ｈ－34・35区で検出された。大きさ1.0m×0.9mの円形である。検出面からの深さは約13㎝である。焼土や灰白色の粘土状のものが検出されたので炉状遺構の性格が強いが，土坑24号・25号と隣接して検出したので関係性から土坑と判断した。



土坑27号（第438図）

Ⅰ－35区で検出された。大きさ0.8m×0.7mの円形である。検出面からの深さは約10㎝である。大型土坑４号の掘り下げ中に粘土状の遺物が出土した。遺構内からは，木製品のようなものが出土した。おそらく土坑25号のような桶状のものと思われる。

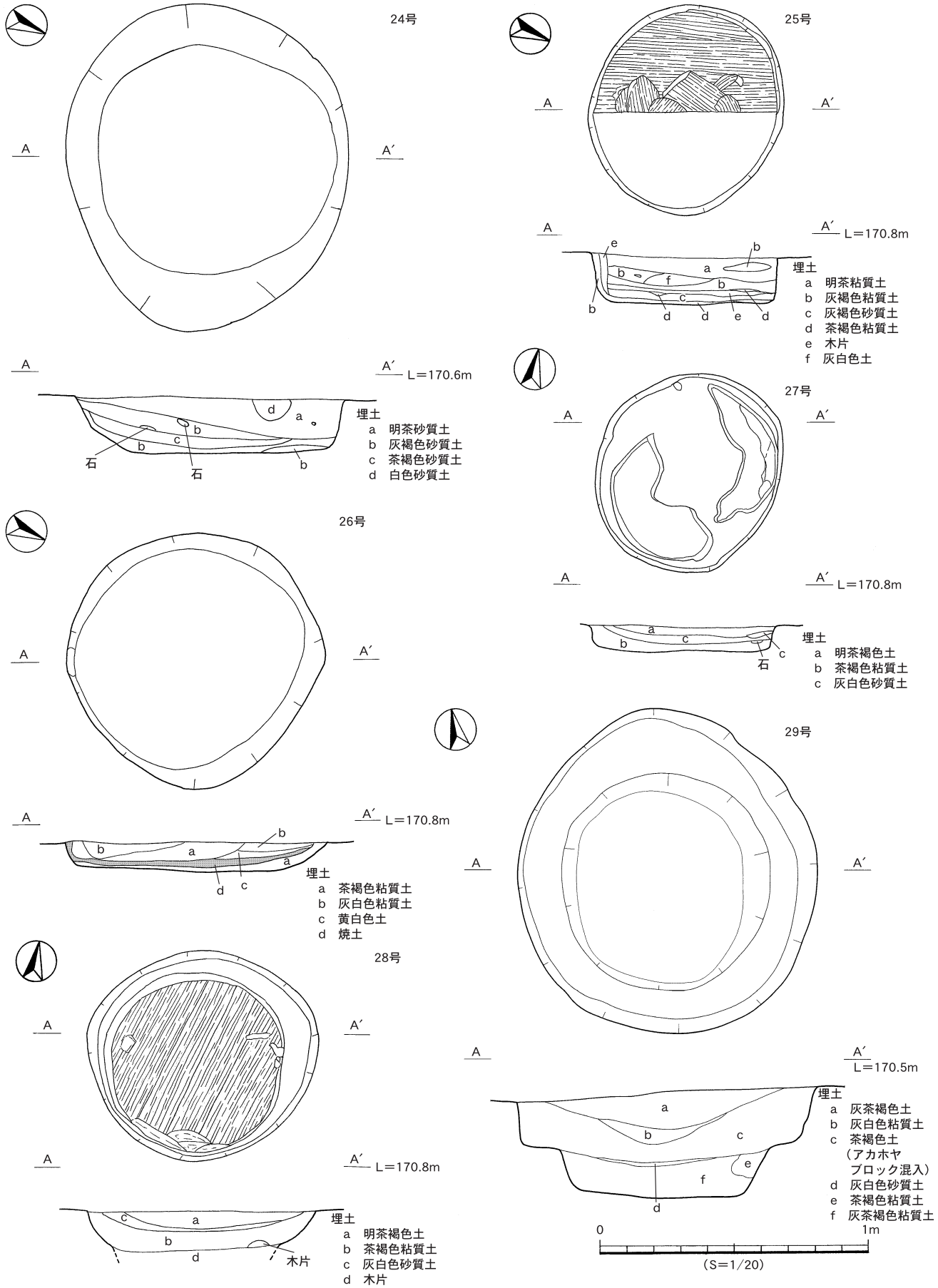
土坑28号（第438図）

Ⅰ－35区で検出された。大きさ0.9m×0.8mの円形である。検出面からの深さは約16㎝である。大型土坑４号の掘り下げ中に検出した。土坑27号よりはっきりとした木製品が出土した。土坑25号と同じような桶状のものと思われる。取り上げたが，脆弱で計測等は出来なかった。

土坑29号（第438図）

Ｄ－42区で検出された。大きさ1.2m×1.1mの円形である。検出面からの深さは約40㎝である。二段に掘り下げられている。遺物は肥前産の染付と景徳鎮窯系と思われる碗が出土した。

第437図　土坑22号・23号



第438図　土坑24号・25号・26号・27号・28号・29号

⑤　大型土坑（第439図～第453図）

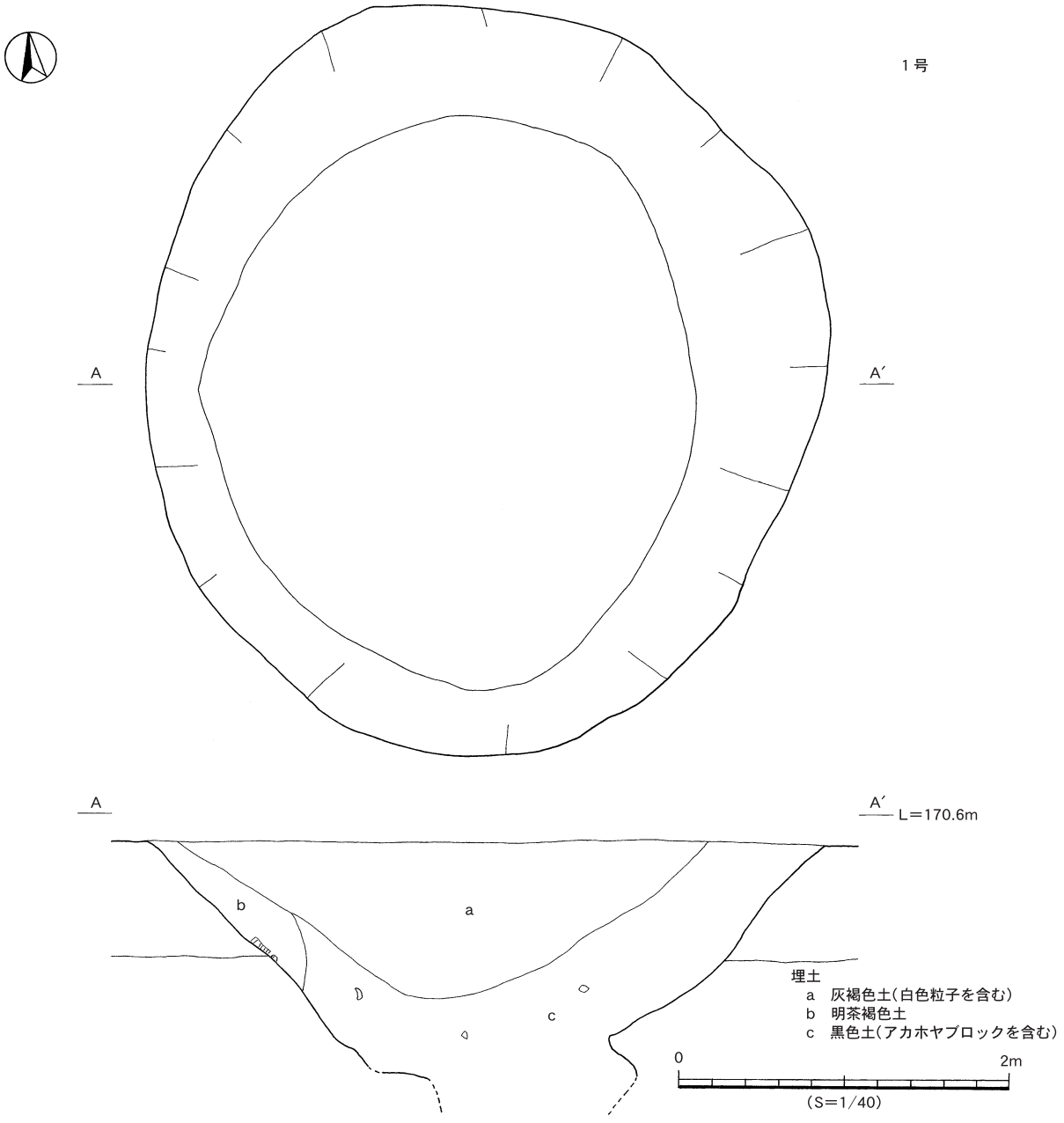
大型土坑は，Ｆ～Ｊ－33～37区を中心に検出された。掘り下げ時，湧水や崩落により，調査を打ち切った土坑もあった。周辺に溝状遺構や炉状遺構も多いことから鍛冶に関係するものかと思われたが，断定することは出来なかった。遺構内遺物の出土状況から中世末から近世初めの時期と思われるものが多い。

大型土坑　１号（第439図・第440図）

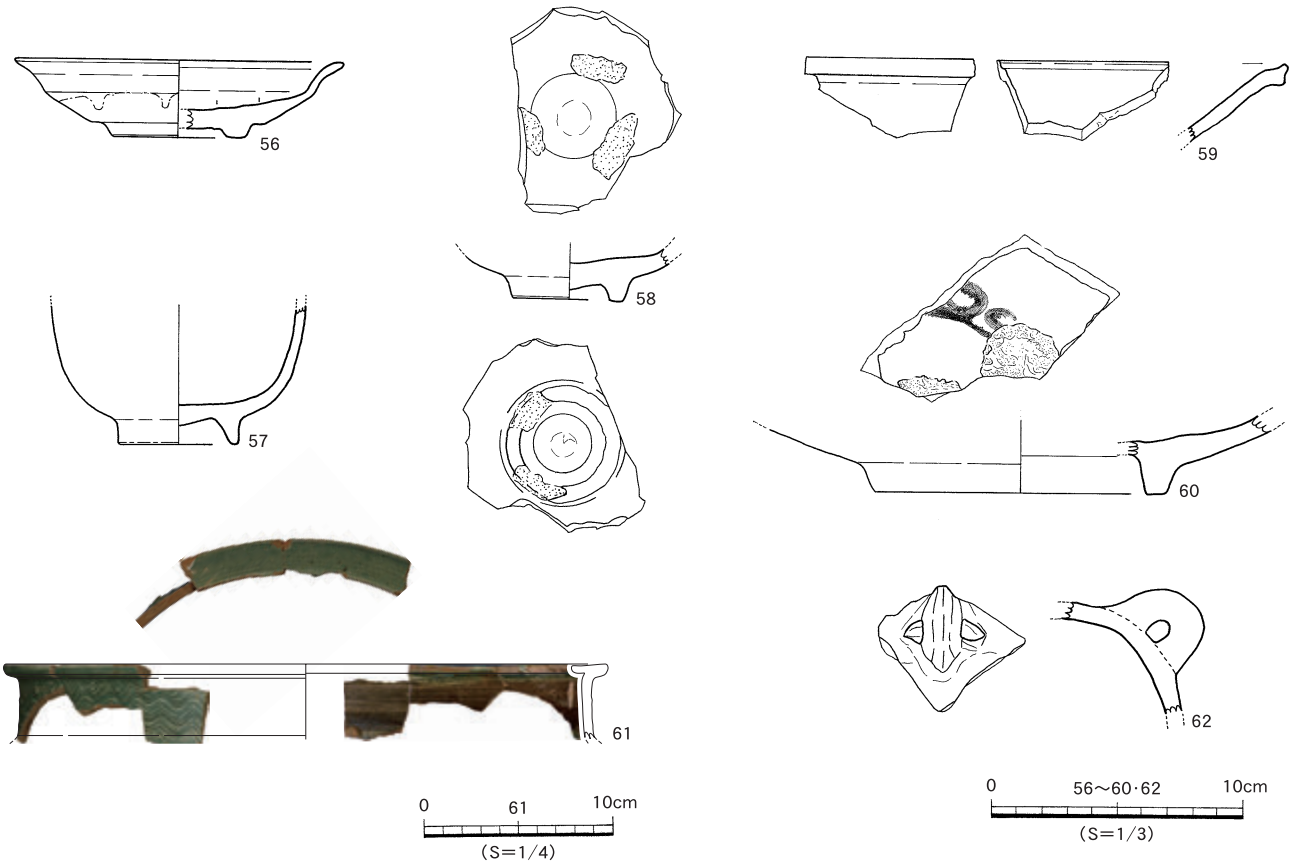
Ｆ・Ｇ－33・34区で検出された。大きさは4.5m×4.1mで約１m掘り下げたところで，湧水により，完掘は出来なかった。溝状遺構１に隣接する。遺物は17世紀のものが多く，近世の井戸の役割をした遺構と思われる。

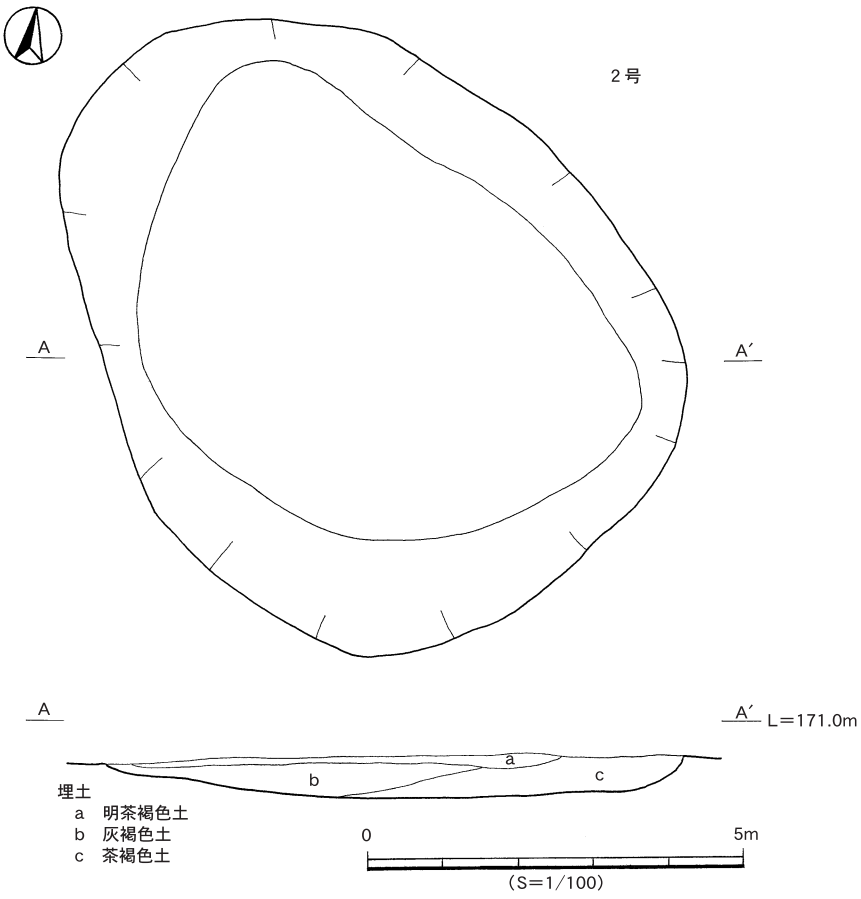
遺構内遺物

56は，漳洲窯系の白磁の皿である。輪状の釉剥ぎで高台腰部より露胎である。焼成による赤化が露胎部に見られる。57は，肥前の白磁の碗である。畳付には籾殻が付着している。58は肥前の砂目の碗である。砂目痕が見込みと畳付に３か所ずつある。59，60は肥前の陶器の皿である。60は二彩手の砂胎土目である。外面は露胎である。61は肥前の二彩手の甕である。外面は銅緑釉で内面は無釉の掛分けである。62は茶釜の耳の部分である。その他の出土遺物は漳洲窯系の青花碗が２点，肥前産の青磁碗が１点，染付の瓶が１点，薩摩産の甕の胴部が２点出土していた。また，鉄滓が３点，鞴の羽口が１点出土している。



第439図　大型土坑１号





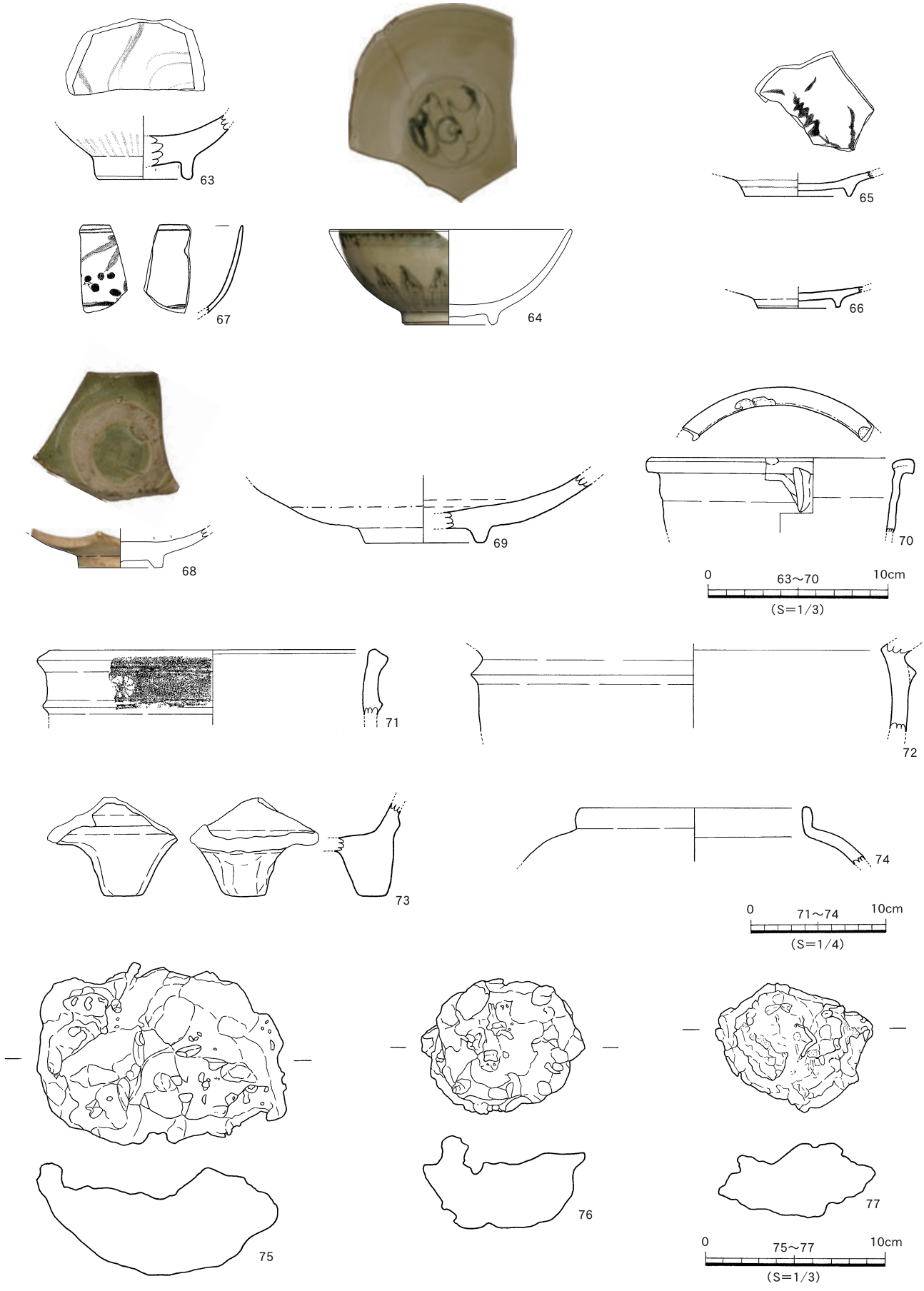
第440図　大型土坑１号出土遺物・２号

大型土坑２号（第440図・第441図）

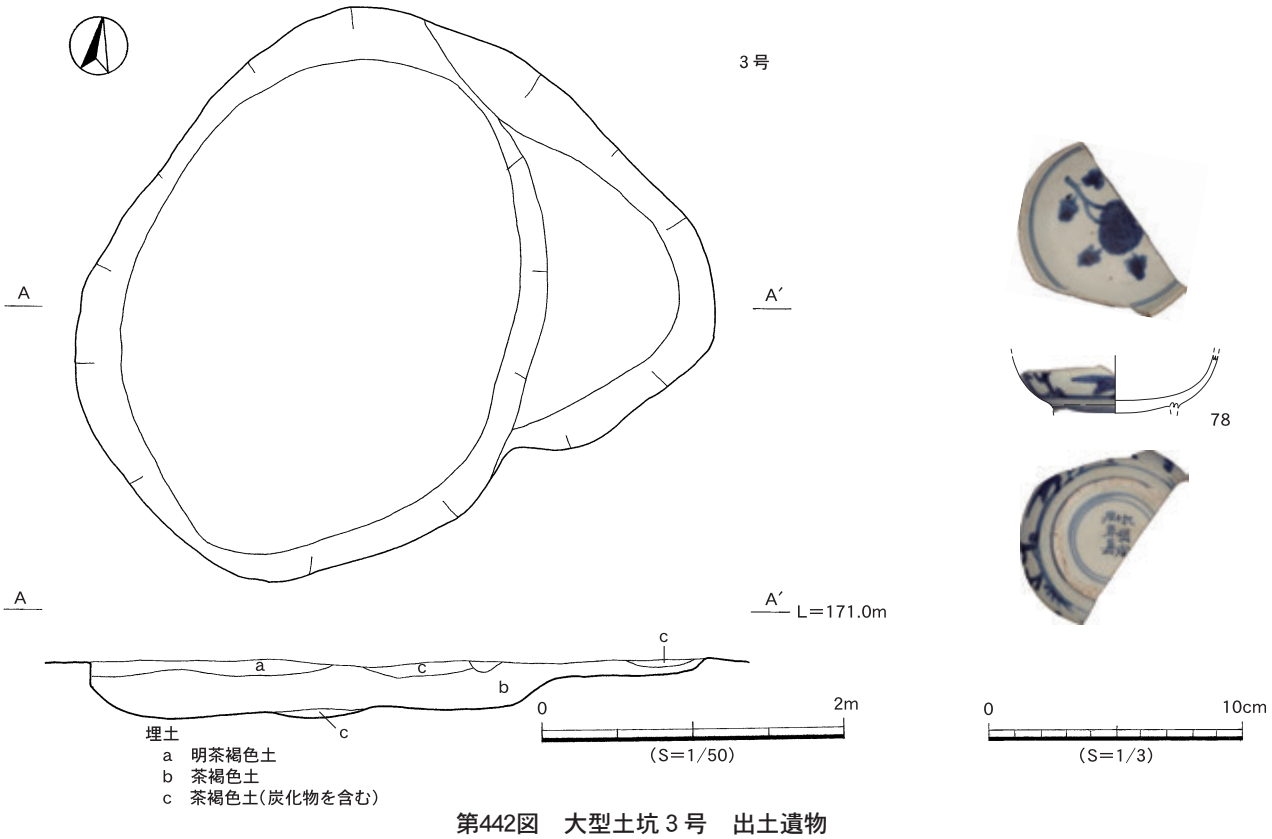
Ｇ・Ｈ－34・35区で検出された，大きさは９ｍ×７ｍで，検出面からの深さは，約50㎝である。鉄滓が18点と鞴の羽口が２点と出土しているので，周囲にある炉状遺構との関連が考えられる。遺物は16世紀から17世紀のものが多い。

遺構内遺物

63は龍泉窯系の連弁が描かれた青磁の椀で高台内面が露胎である。64は漳洲窯系の見込みに巻き貝が描かれた青花の碗である。高台内底は露胎である。65は漳洲窯系の皿である。見込みに砂目がついている。66は肥前産の菊花型型打ちの青磁の皿である。畳付に籾殻が付着している。67は肥前産の染付の碗である。68は銅緑釉を掛分けてある蛇ノ目釉剥ぎの皿である。69は肥前産の胎土目の大皿である。70は薩摩産の苗代川系の片口である。貝目の痕が見られる。薄型であることから串木野窯の可能性がある。71～73は瓦質の火鉢



第441図　大型土坑２号　出土遺物



第442図　大型土坑３号　出土遺物

である。74は茶窯の口縁部である。75～77は鉄滓である。碗型滓である。その他の出土遺物は，青磁椀が４点，皿が１点，景徳鎮窯系の青花皿が２点。中国産と思われる陶器の小壺が１点。薩摩産系の陶器の胴部が11点。茶釜が１点，鉄滓が18点（2,328ｇ）出土している。

大型土坑３号（第442図）

Ｉ－34・35区で検出された。大きさは4.0ｍ×3.6ｍで，検出面からの深さは約40㎝である。断面形状はステップ状になっている。隣接する大型土坑２号及び４号よりも大きさは小さく鉄滓等は出土していない。遺構内から出土した遺物の量が少なく時期判断は難しいが，図化した景徳鎮窯の碗やその他の遺物から中世末の土坑であると思われる。

遺構内遺物

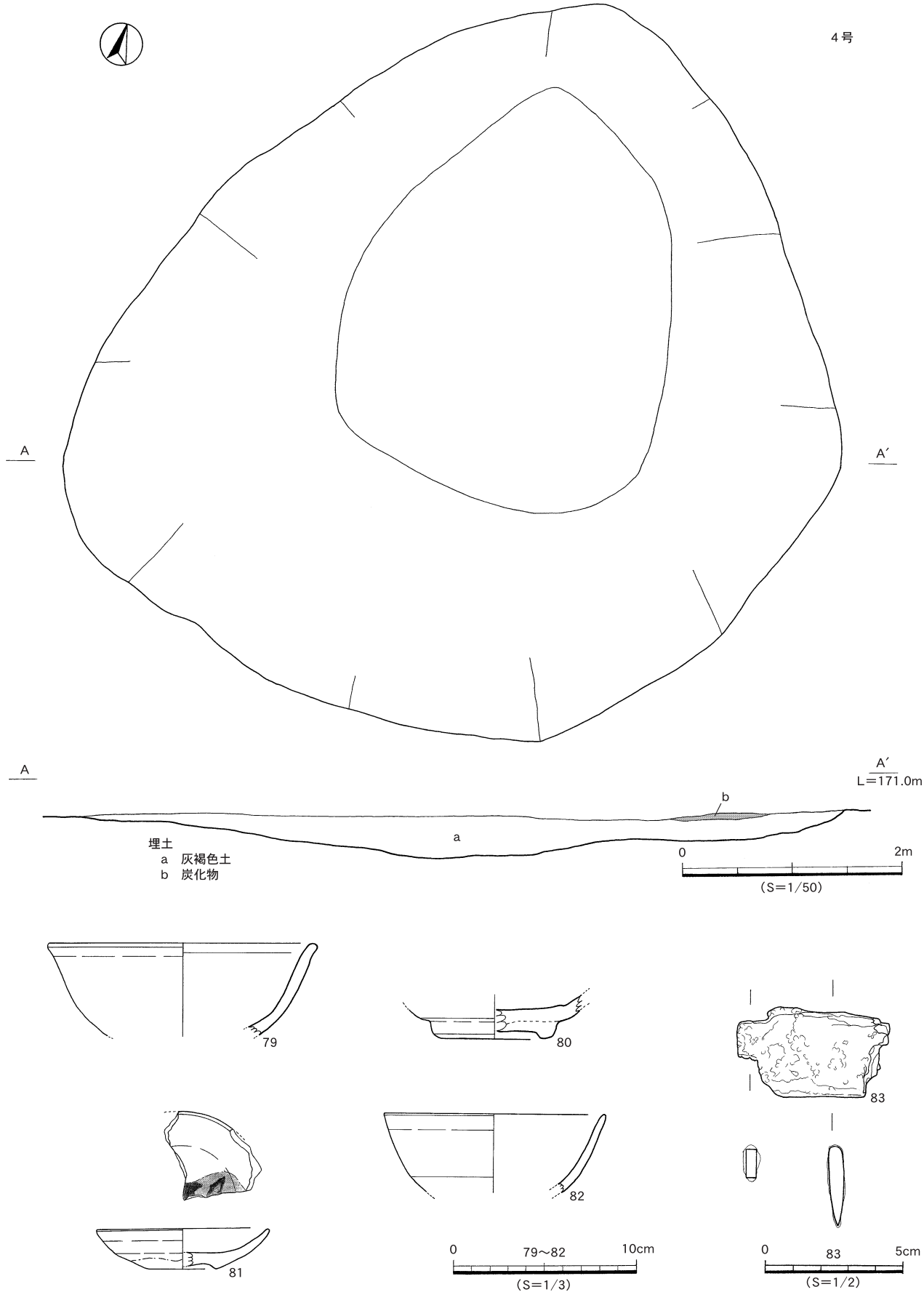
78は景徳鎮窯産の碗である。畳付内底には「大明成化年製」の文字が見られる。年代は1590～1630年である。その他の出土遺物は，景徳鎮窯産の青花碗が１点。漳洲窯系の青花皿が１点。肥前産の染付碗が１点，陶器の皿が１点出土している。

大型土坑４号（第443図）

Ｉ・Ｊ－34･35区で検出された。大きさは6.5ｍ×6.7ｍで，検出面からの深さは約40㎝である。上面には炭化物を含んだ層が見られたが，全体的に灰白色の埋土である。遺構内から出土した遺物から近世の土坑と思われるが遺物の時期差が大きい。土坑27・28号に切られて検出されているので，二つの土坑よりは，古い時期である。

遺構内遺物

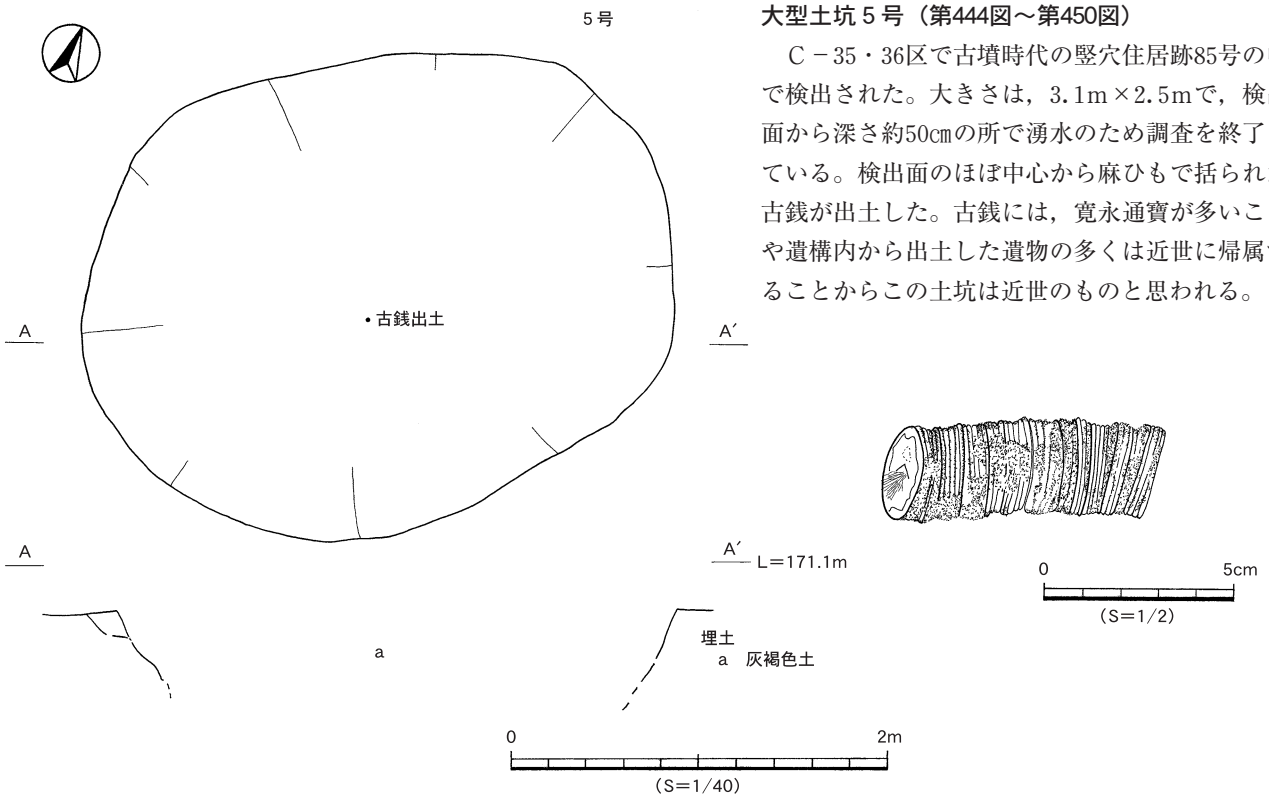
遺物は，全体的に少なかった。79は龍泉窯系の青磁の椀である。80は龍泉窯系の青磁の皿である。畳付につなぎ目が見られる。81は漳洲窯系の16世紀後半の皿である。焼成が不良である。82は九州産と思われる黒釉の碗である。83は鉄製品で刀子と思われる。また，その他の出土遺物は鞴の羽口が１点と鉄滓が５点出土している。

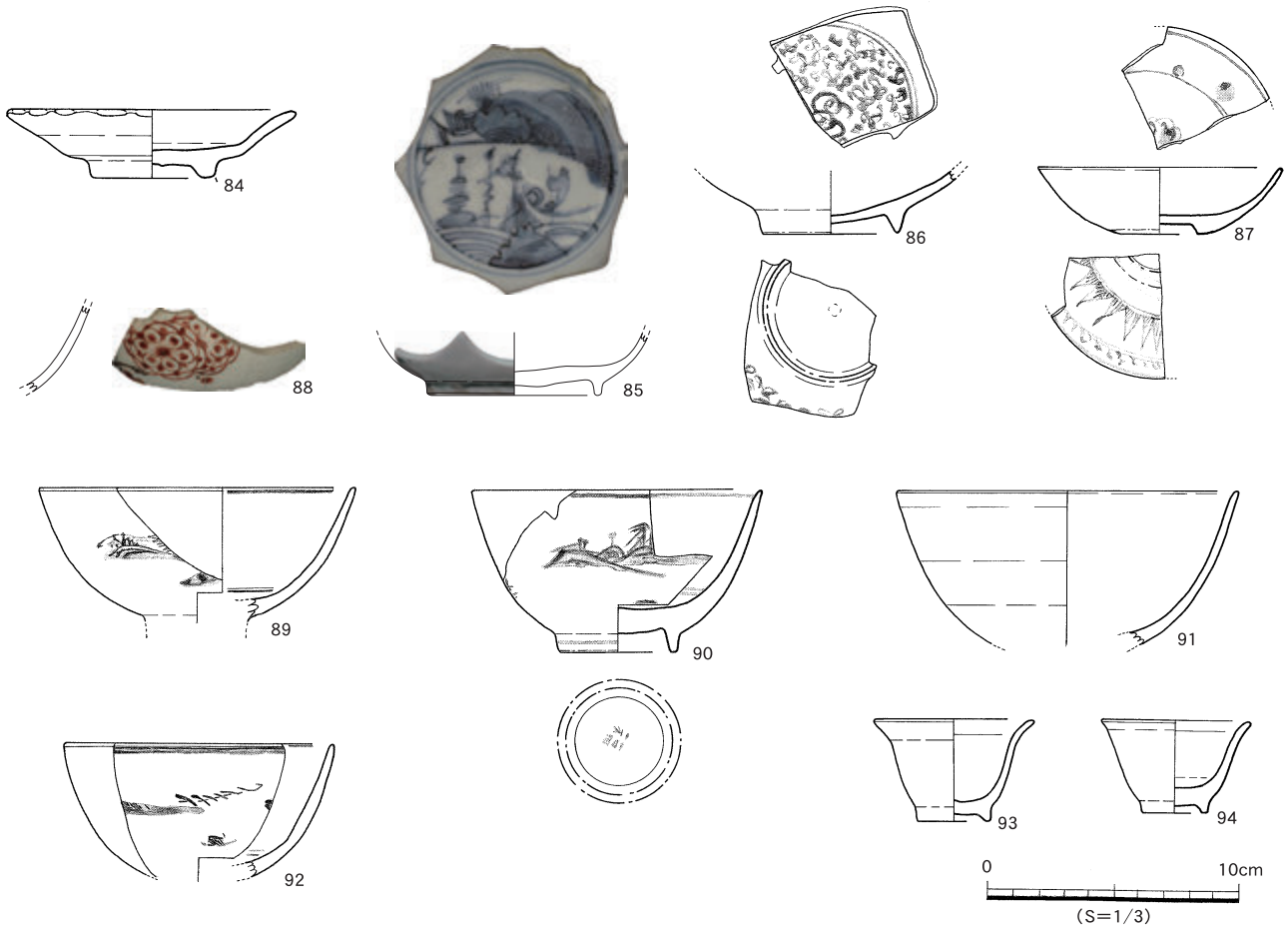


第443図　大型土坑４号　出土遺物

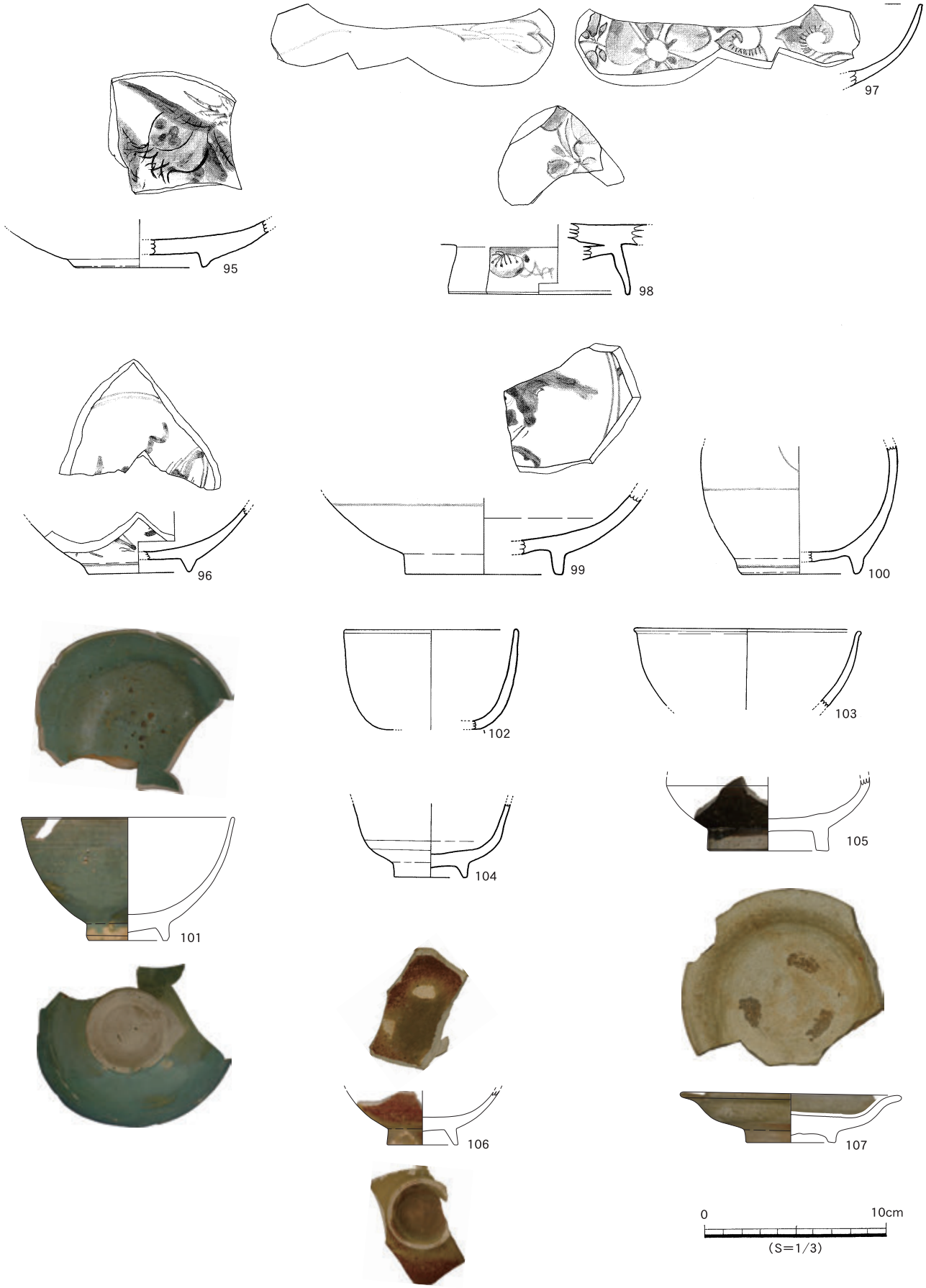
大型土坑５号（第444図～第450図）

Ｃ－35・36区で古墳時代の竪穴住居跡85号の中で検出された。大きさは，3.1m×2.5mで，検出面から深さ約50㎝の所で湧水のため調査を終了している。検出面のほぼ中心から麻ひもで括られた古銭が出土した。古銭には，寛永通寶が多いことや遺構内から出土した遺物の多くは近世に帰属することからこの土坑は近世のものと思われる。

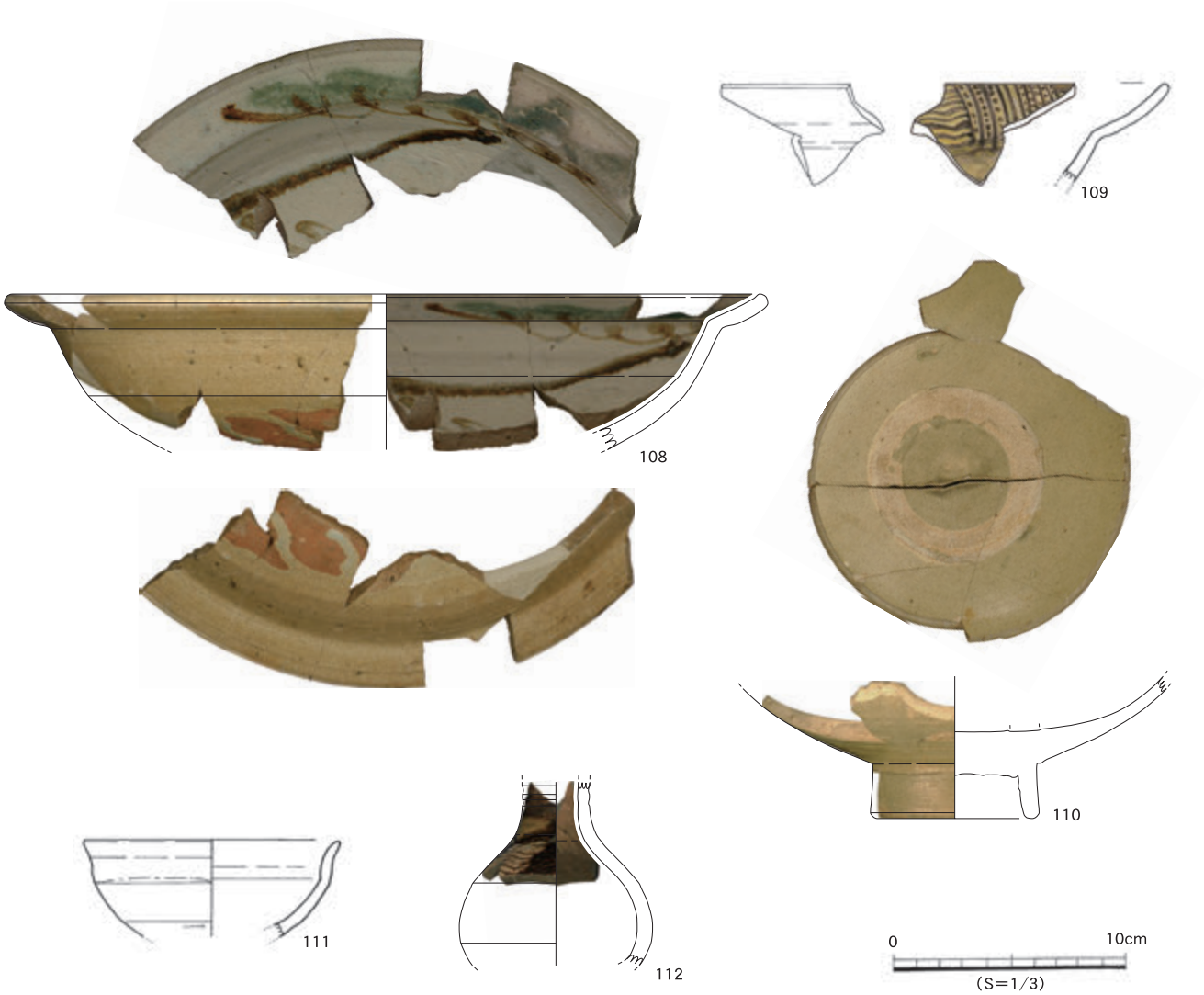




第444図　大型土坑５号　出土遺物①



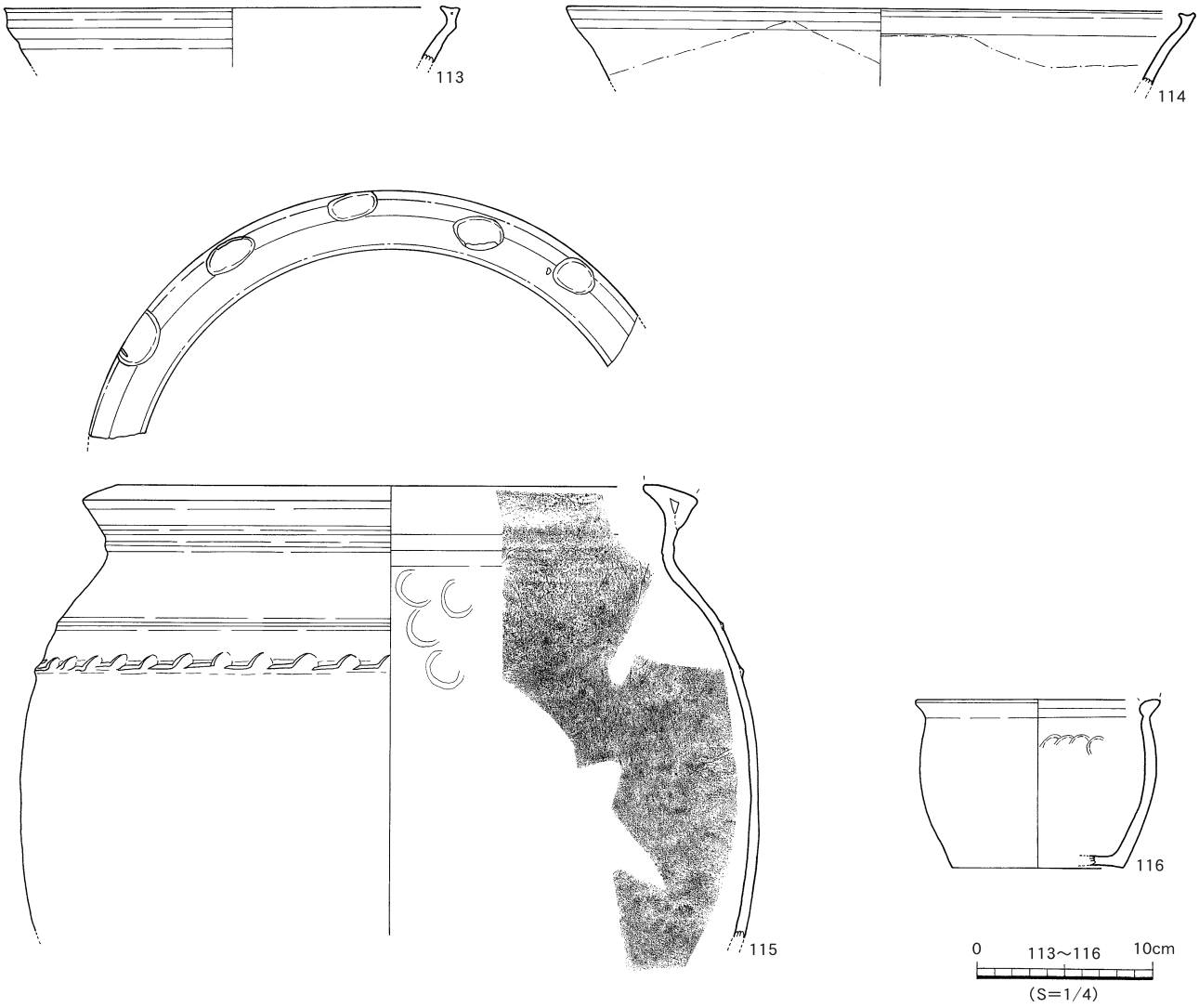
第445図　大型土坑５号　出土遺物②



第446図　大型土坑５号　出土遺物③

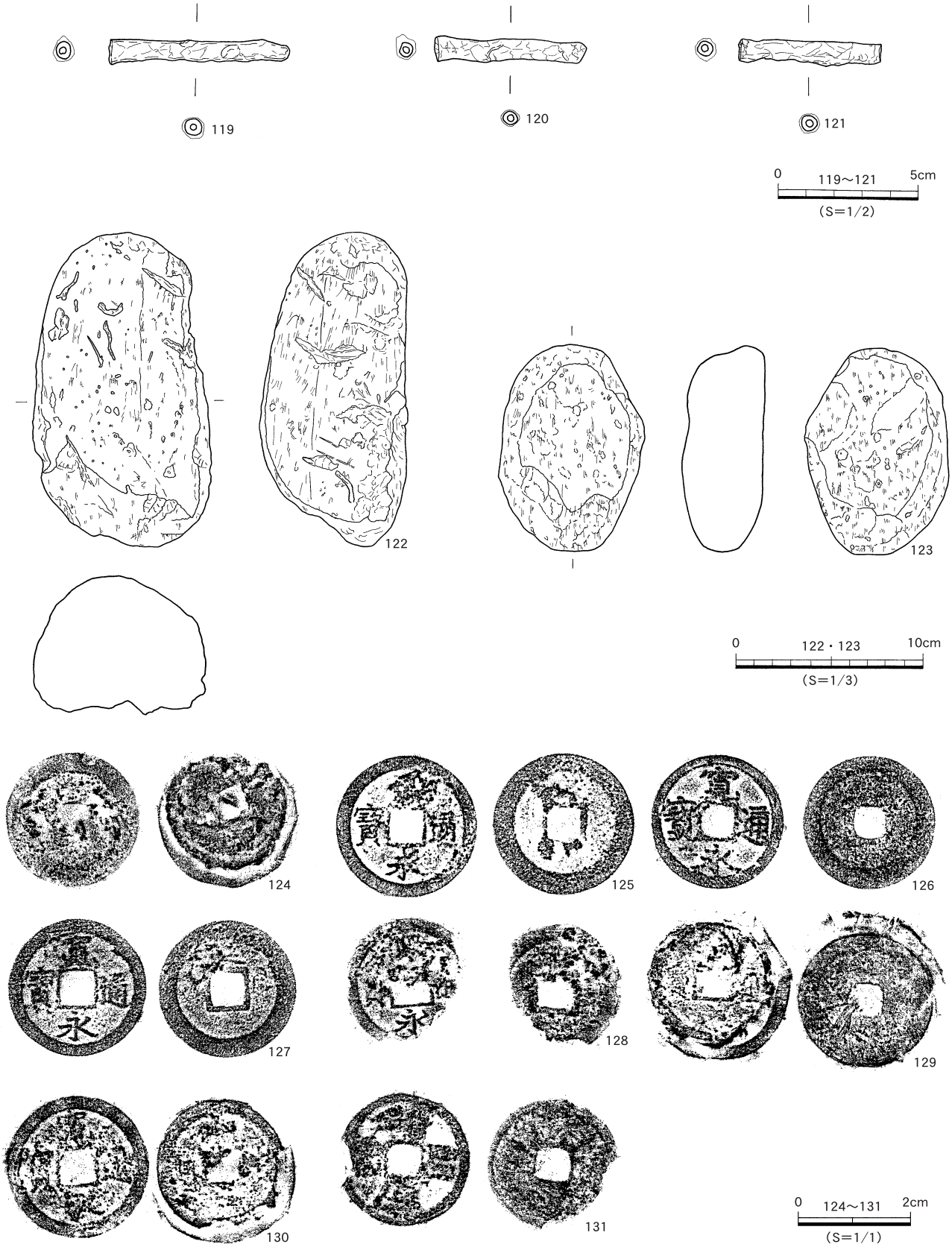
遺構内遺物

84は漳洲窯系の青磁の稜花皿である。見込みと高台内底は露胎である。85は漳洲窯系の青花皿である。畳付には籾殻が付着している。86は景徳鎮窯系の連子皿である。87は碁笥底の皿である。88は肥前産の赤絵碗である。梅文が描かれ，線は黒，紫を使用し，黄色も見られる。89～92は肥前産の碗である。90は高台内底に「福」の字が見られる。焼成不良である。91は肥前白磁の高麗茶碗である。93・94は肥前産の白磁の小杯である。95～98は肥前産の染付である。95はザクロが描かれている。96は龍が描かれた荒磁文の碗，又は鉢である。97は肥前産の染付で台付皿の皿部である。98は台の部分が２段に分かれている。また台部は，ブドウ状の蔓草が描かれている。97と98は同一個体である。99は肥前の鉢で高台内底が露胎である。100は肥前産徳利の底部である。底部には砂粒が付着し，被熱のため赤化している。101～104は肥前陶器の碗である。103は口唇部が外反する，銅緑釉の碗である。104は高台腰部がわずかに直行する。105は薩摩産と思われる。轆轤痕がわずかに残り，高台腰部から内湾する碗である。106は薩摩産の龍門司系山元窯の胎土目碗である。焼成不良である。107は肥前産の胎土目段階の砂目皿である。108は肥前産の二彩手の大皿である。内面に松が描かれている。109は肥前産の二彩手の大皿である。110は薩摩産の龍門司系と思われる台付皿である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。111は肥前産の陶器の鉢である。112は肥前の二彩手の徳利である。113と114は肥前の擂鉢で113が時期は古い。115は薩摩産の苗代川系堂平窯の甕である。口縁部は外折れで口唇部には貝目の痕が見られる。内面には同心円状の敲痕が見られる。116は小型の壺である。口唇部以外全釉であるが，内面には敲痕が見られる。117は薩摩産の龍門司系山元窯の灯明皿である。底部は轆轤回転による糸切りが見られる。また，見込み，外底面には胎止め痕が３箇所見られる。118は薩摩産の龍門司系窯の仏飯器である。皿部の見込みは蛇

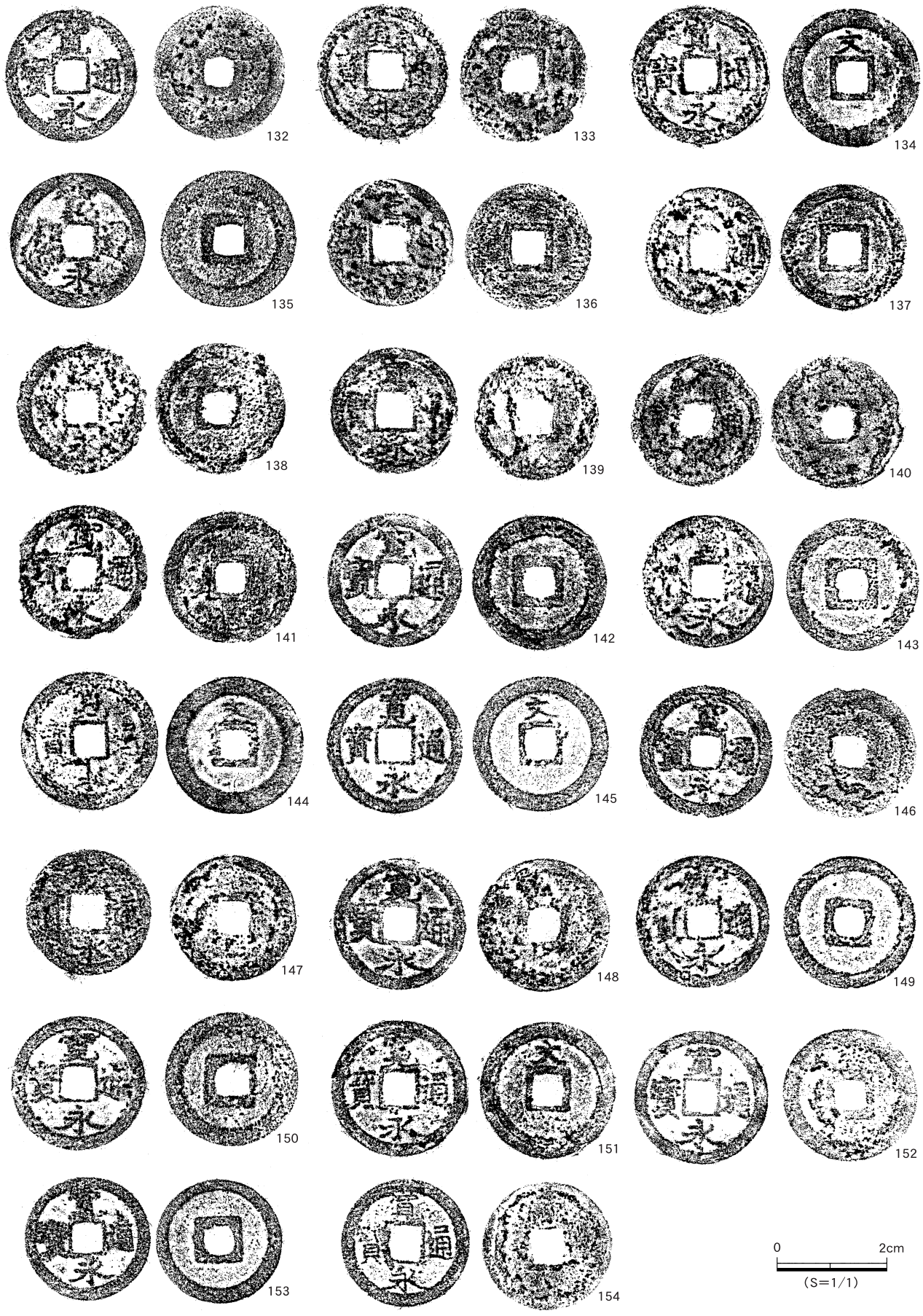


ノ目釉剥ぎで台部は内底まで無釉である。119～121は釘である。122と123は軽石製品である。122は切り込みが数カ所見られる。124～176までは古銭である。124～131は麻状のひもで括ってなかったもの，132～176は麻状のひもで括ってあったものである。一部，２枚に重なった状態のものもある。ほとんどが寛永通寶で「文」の文字の入ったものが134，144，145，151である。131の朝鮮通寶，164の嘉祐通寶が出土している。その他の出土遺物は，青磁の稜花皿１点，白磁小杯１点，漳洲窯系青花碗が２点，肥前産染付が６点，肥前産陶器皿が５点，薩摩産陶器が４点，鉄滓が14点（1,620ｇ）出土した。

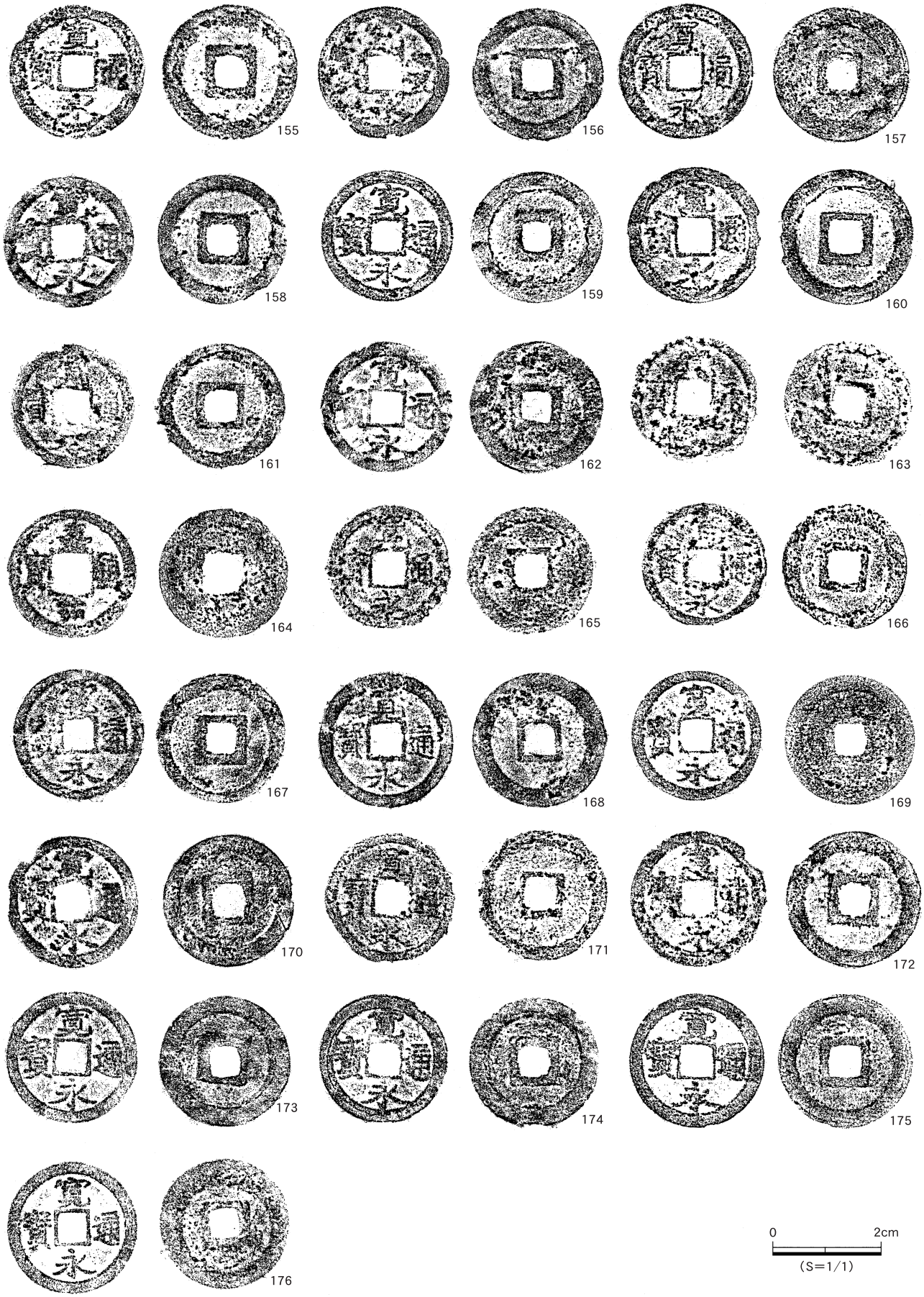
第447図　大型土坑５号　出土遺物④



第448図　大型土坑５号　出土遺物⑤



第449図　大型土坑５号　出土遺物⑥



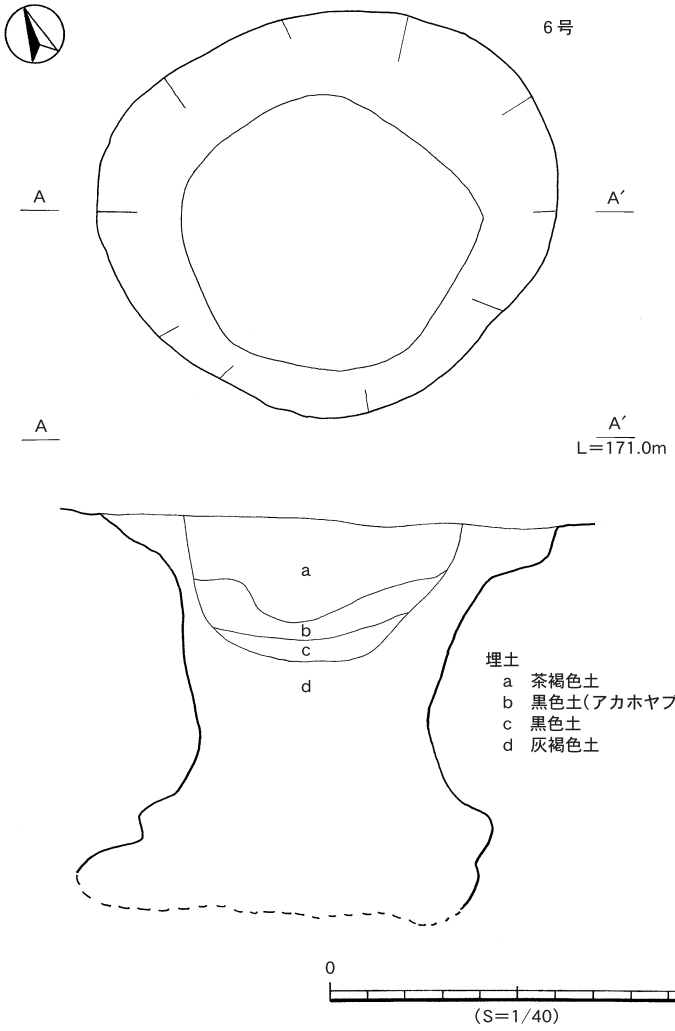
第450図　大型土坑５号　出土遺物⑦

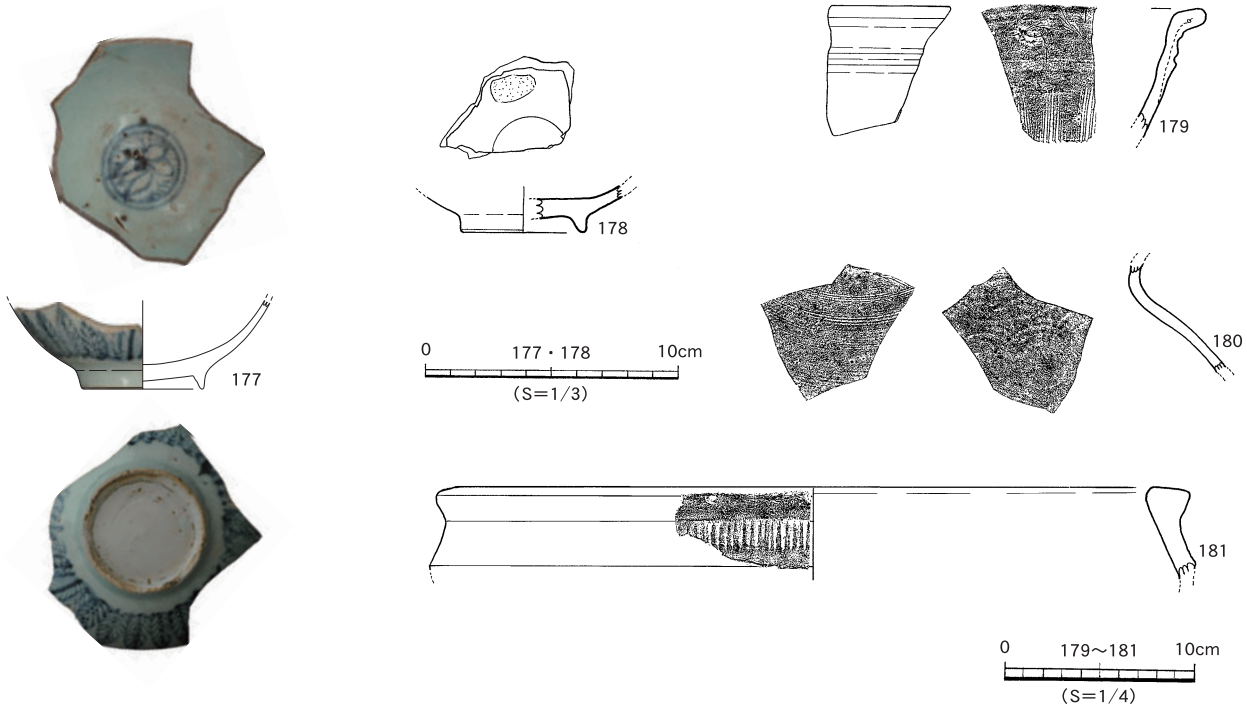
大型土坑６号（第451図）

G－36・37区で検出された，古墳時代の竪穴住居跡84号を切っている。大きさは2.4m×2.1m，検出面から深さ1.5mで湧水により調査を終了した。断面形状が下面に広がるフラスコ状を呈することから，素堀の井戸の可能性がある。

遺構内遺物

177は景徳鎮窯系の碗である。見込みには蓮の花が描かれている。178は薩摩産の龍門司系山元窯と思われる陶器の碗である。179は薩摩産の苗代川系の擂鉢である。口唇部にかけて外折れである。180は壺の頸部である。同心円状の敲痕が残る。181は瓦質土器の火鉢である。その他の出土遺物は，漳洲窯系の14世紀末から15世紀のものと思われる青磁の碗が１点，肥前白磁の小杯が１点，178と同一個体と思われる薩摩産の苗代川系壺の胴部５点，擂鉢５点，瓦質土器の擂鉢が４点，火鉢が１点出土している。





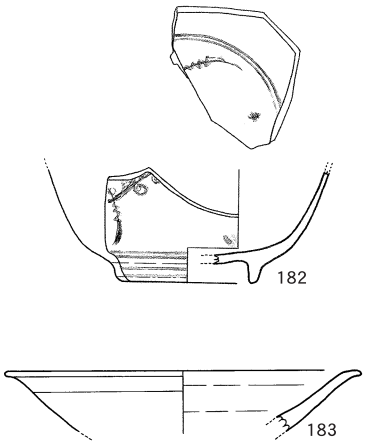
第451図　大型土坑６号　出土遺物

大型土坑７号

Ｇ－37区で検出された。大きさは，1.4m×1.4mであった。半裁し，掘り下げている途中，湧水のため崩落したので調査を終了した。下面がフラスコ状に広がるもので，素堀の井戸の可能性がある。近世の遺構と判断できる。

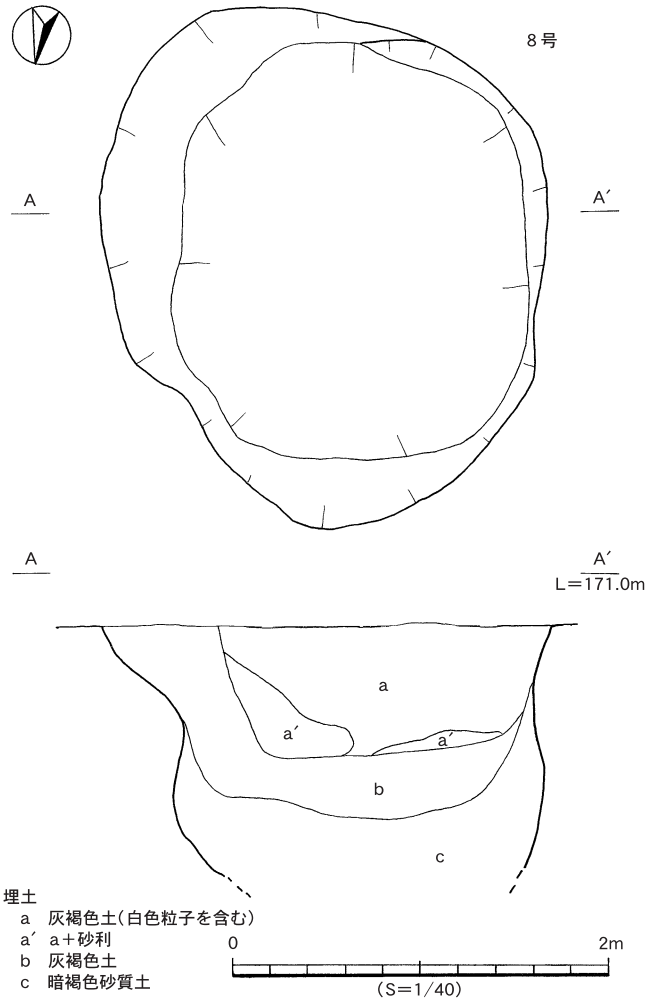
遺構内遺物（第452図）

182は景徳鎮窯系の青花碗である。183は17世紀前半の肥前産の皿である。184は肥前産の大型の壺である。敲き成形で作られ，内面に同心円状の当て具痕が残る。その他の遺物は，肥前産の染付碗が２点，薩摩産陶器の胴部が２点，瓦質土器の擂鉢が１点出土した。





0　10cm
（S＝1/3）



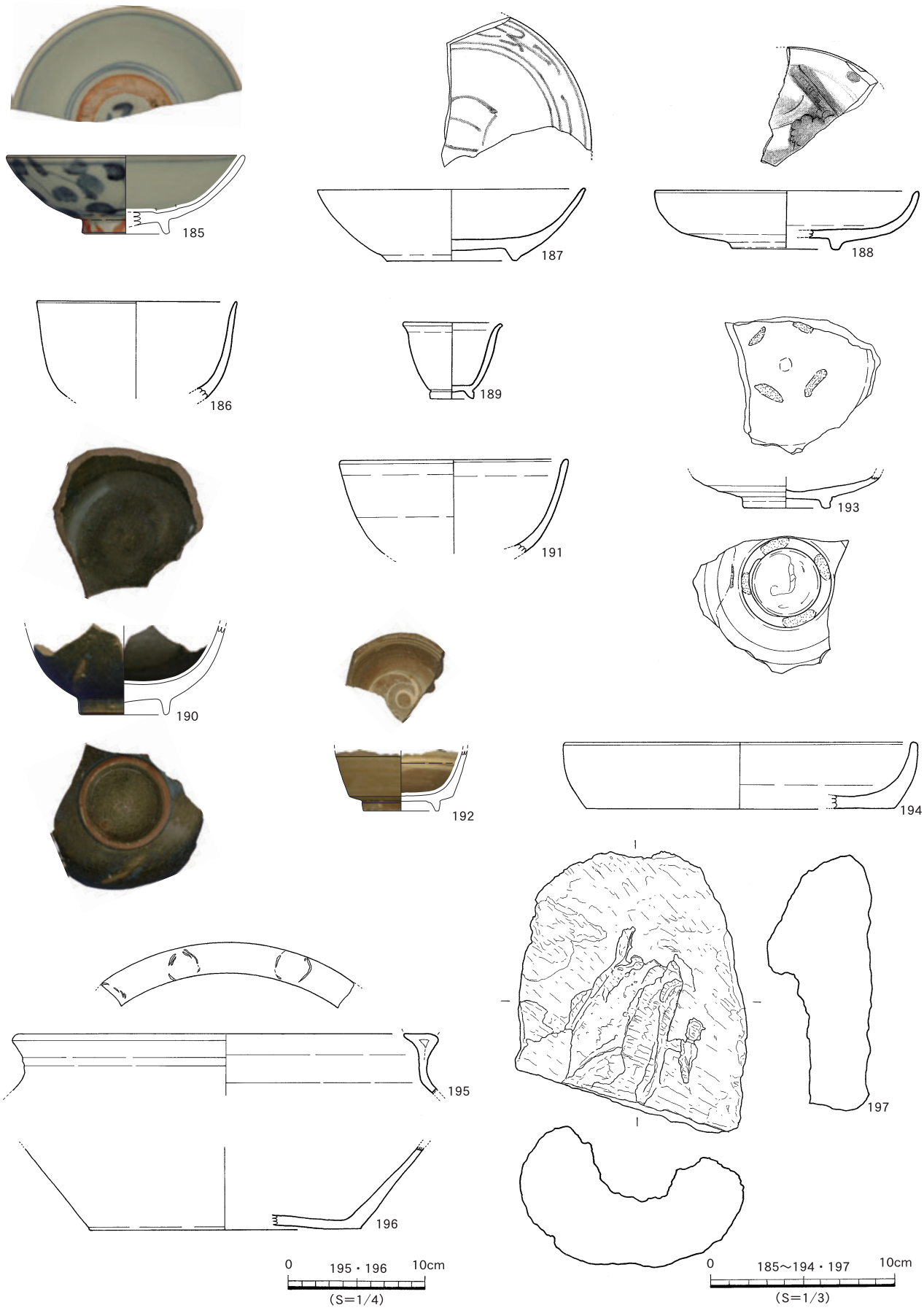
大型土坑８号（第452図・第453図）

Ｅ－41区で検出された，大きさは2.8m×2.4mである。検出面から，深さ約1.3mで湧水により調査を終了した。

遺構内遺物

185は漳洲窯系の青花の皿である輪状の釉剥ぎと高台内面は露胎で焼成により赤化している。見込みには「正」の字が書かれている。186は肥前産の白磁の碗である。187･188は肥前産の染付皿である。187は日ノ字鳳凰文の皿である。189は肥前産の白磁の小杯である。190は肥前産の銅緑釉陶器の碗である。191は焼成不良の薩摩焼と思われる碗である。192は肥前産の陶器の小碗で白化粧土による刷毛目がある。向付である。193は肥前産の砂目の溝縁皿である。高台腰部から内底は露胎である。194は土師質土器の焙烙である。195は薩摩産の苗代川系堂平窯の甕である。口唇部から外折れである。196は壺の底部である。197は軽石製品である。中央に凹みをもつ。凹みの端部に抉ったような痕跡が見られる。また下部は，鋭利なもので切断されている。鍛冶炉に関係するものの可能性はある。その他の遺物としては，青花の碗が２点，肥前産の染付碗が１点，肥前産の陶器が碗，皿それぞれ１点，薩摩産の擂鉢，甕の胴部が１点ずつ出土している。

第452図　大型土坑７号　出土遺物・８号



第453図　大型土坑８号　出土遺物

⑥　炉状遺構　（第454図～第457図）

炉状遺構は，Ｈ－11からＧ・Ｈ－38区まで広範囲で検出された。ほとんどのものが上部が削平され，基礎部が残るのみである。溝状遺構と大型土坑が多く検出された32～38区に検出されたものが，５号～19号である。周囲にあるピット群から屋内炉も考えられたのだが，掘立柱建物内で検出された炉状遺構12号以外は屋内炉であると判断することは出来なかった。また，埋土から粒状滓が検出され鍛冶炉と思われるもの，掻き出しのあるカマドと思われるもの，掻き出しの無いもの等数種類が検出された。まとめて報告する。

炉状遺構１号（第454図）

Ｈ－11区で検出された。大きさは長軸0.9m×短軸0.5mで，深さは0.12mである。上面がほとんど削平されている。埋土は炭化物を含む砂質土が上面にあり，下面に灰白色の灰状の塊が見られた。

炉状遺構２号（第454図）

Ｈ－11区で検出された。大きさは長軸0.6m×短軸0.5mで，検出面からの深さが５㎝と浅く上面は削平されている。１号と同じく掻き出し口は見られないが，焼土と灰白色粘質土が堆積していた。

炉状遺構３号・４号（第454図）

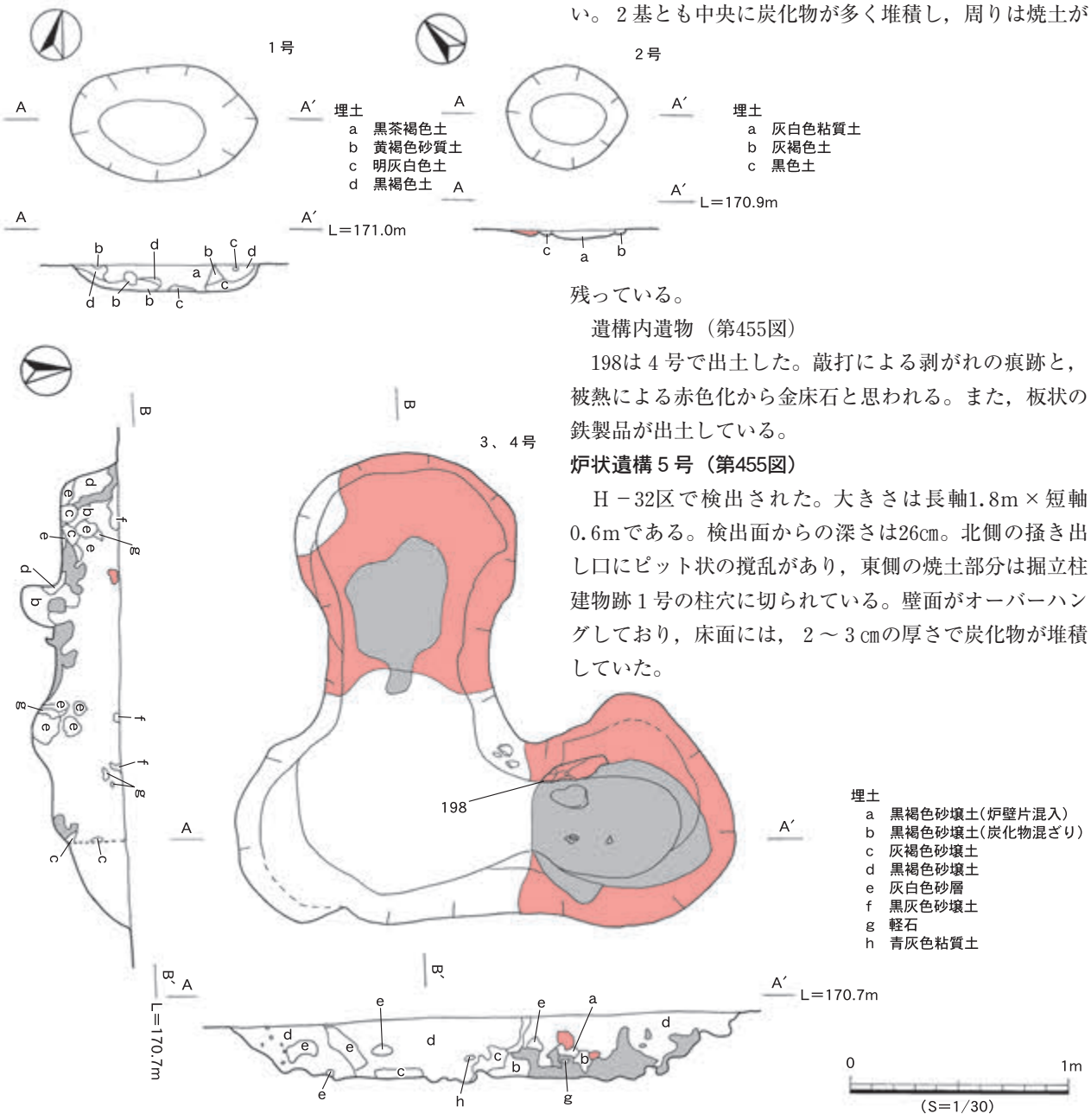
Ｈ－11･12区で検出された。大きさは長軸2.3m×短軸2.2mで深さは約30㎝である。４号の掻き出し口が３号を切って構築されていることから，３号の方が時期は古い。２基とも中央に炭化物が多く堆積し，周りは焼土が残っている。

遺構内遺物（第455図）

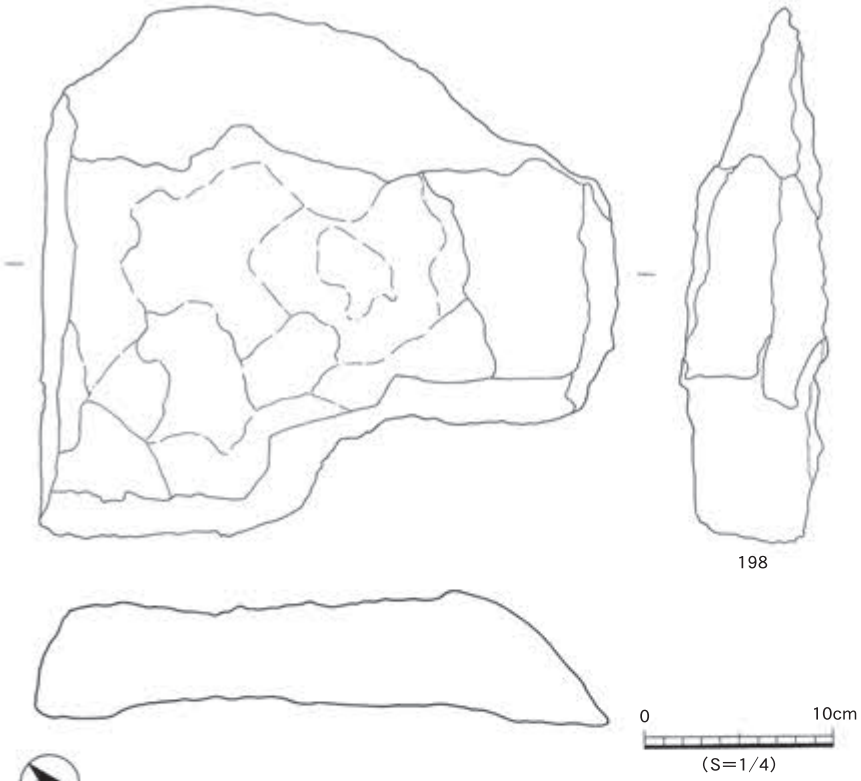
198は４号で出土した。敲打による剥がれの痕跡と，被熱による赤色化から金床石と思われる。また，板状の鉄製品が出土している。

炉状遺構５号（第455図）

Ｈ－32区で検出された。大きさは長軸1.8m×短軸0.6mである。検出面からの深さは26㎝。北側の掻き出し口にピット状の撹乱があり，東側の焼土部分は掘立柱建物跡１号の柱穴に切られている。壁面がオーバーハングしており，床面には，２～３㎝の厚さで炭化物が堆積していた。



第454図　炉状遺構１号・２号・３号・４号



炉状遺構６号（第455図）

Ⅰ－32区で検出された。大きさは長軸1.2m×短軸1.0mである。検出面からの深さは約７㎝。円形状のものである。焼土域が全体に広がっている。

炉状遺構７号（第455図）

Ⅰ－33区で検出された。大きさは長軸2.0m×短軸1.0mである。検出面からの深さ15㎝。炉壁の焼土部分が一部残っている。また，床面から炭化物が約４㎝堆積している。

炉状遺構８号（第456図）

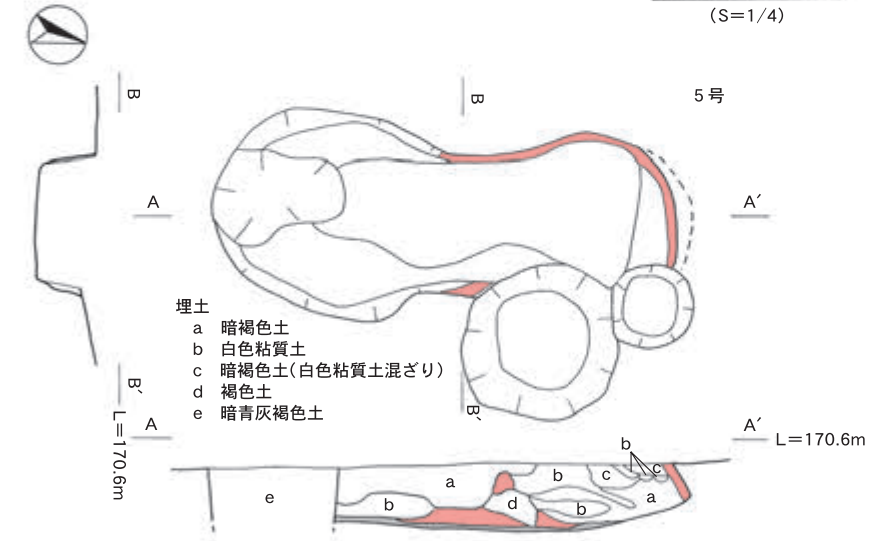
Ｇ－33区で検出された。大きさは長軸2.2m×短軸0.8mである。検出面からの深さは約15㎝。炉壁が石で囲まれており，周りの石は，被熱による赤化が著しい。炉壁の石と石の間は粘土により充填されている。炭化物を含んだ茶粘質土を掘り下げると床面から金床石が出土した。また，掻き出し口の床面から炭化物が約３㎝堆積している。

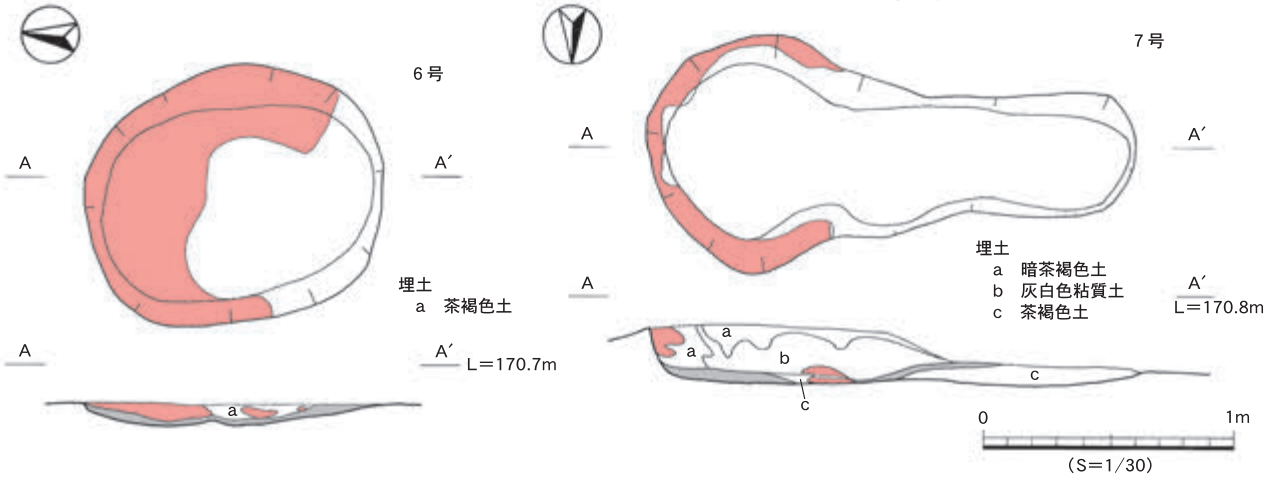
遺構内遺物

199は床面から出土した金床石である。敲打による剥がれが全体に見られる。

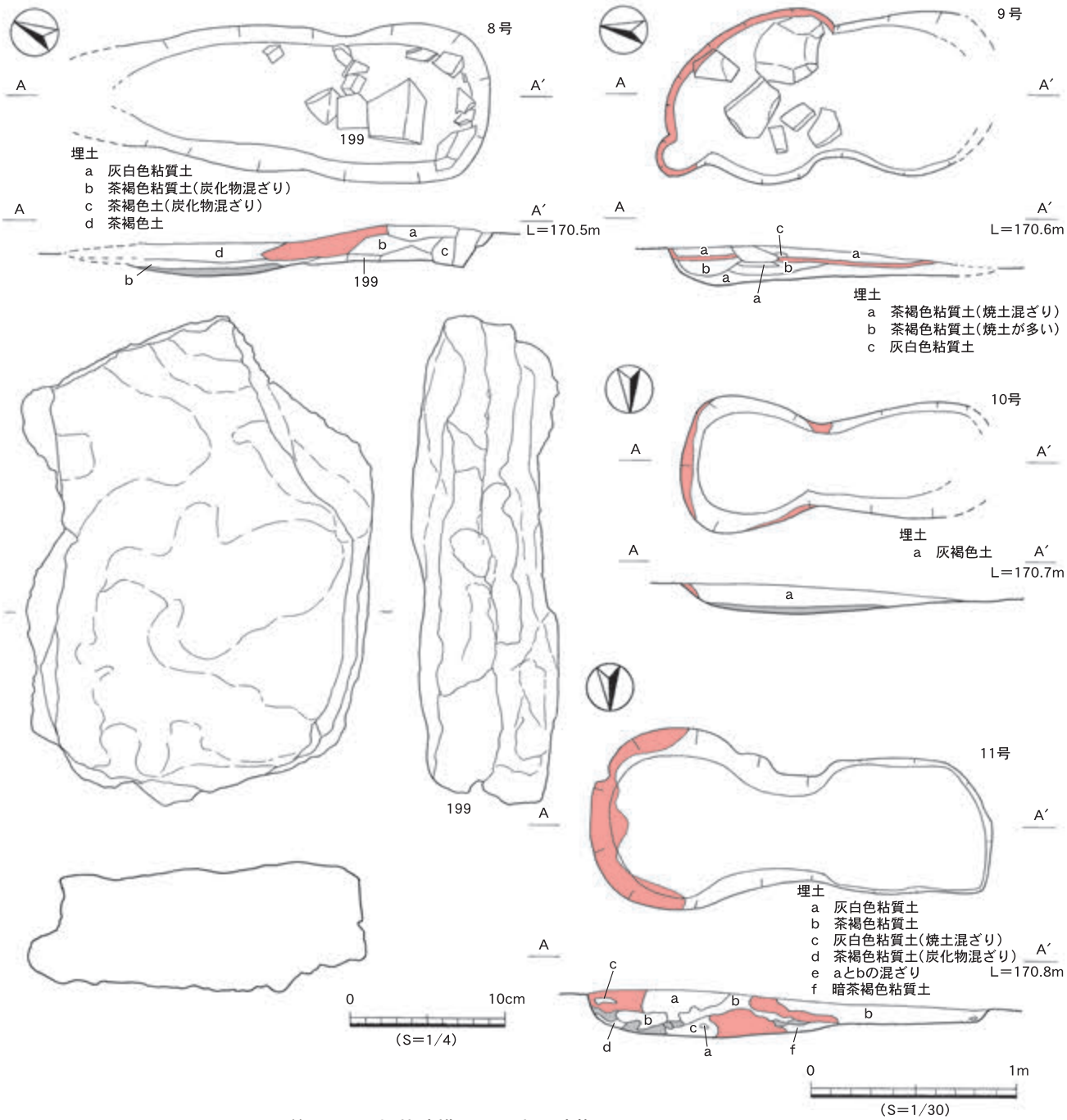
炉状遺構９号（第456図）

Ｇ－34区で検出された。大きさは，長軸1.6m×短軸0.8mである。検出面からの深さは約15㎝。被熱の見られない大型の礫６点が燃焼部から出土した。礫の上面には焼土や炭化物の混在した堆積が見られた。この状況は廃棄の際に投入された堆積を示すものと判断できた。





第455図　炉状遺構４号出土遺物・５号・６号・７号



第456図　炉状遺構８号　出土遺物　９号・10号・11号

炉状遺構10号（第456図）

D－36区で検出された。大きさは長軸1.5m×短軸0.6mである。検出面からの深さは約14㎝。燃焼部の赤化が著しく見られる。床面から２㎝は炭化物が堆積している。

炉状遺構11号（第456図）

H－36・37区で検出された。大きさは長軸2.0m×短軸0.9mである。検出面からの深さは約22㎝。燃焼部の炉壁が赤化している。

炉状遺構12号（第457図）

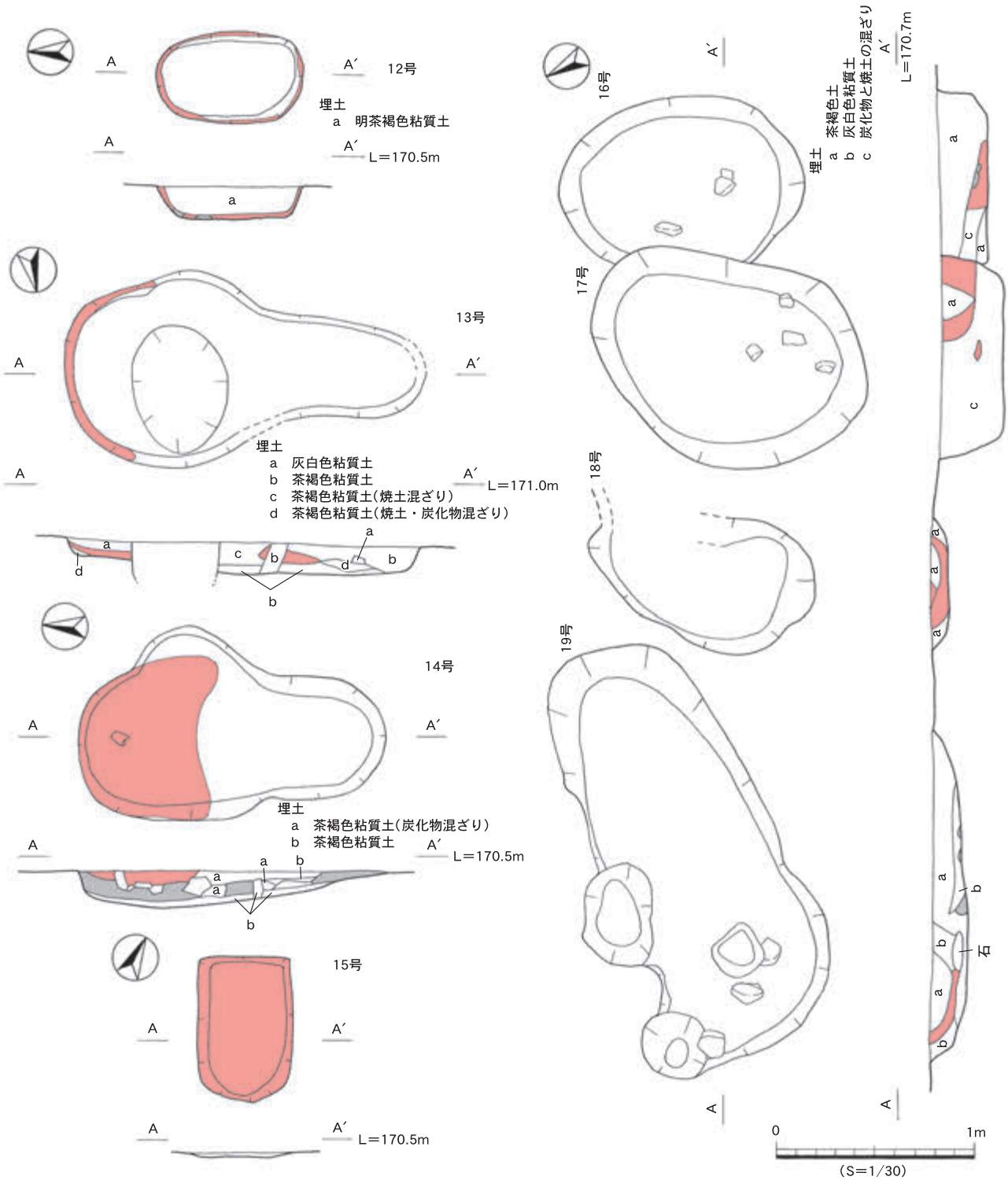
H－37区で検出された。大きさは長軸0.8m×短軸0.6mである。検出面からの深さは約16㎝。炉壁と床面から焼土域が検出された。掘立柱建物跡６号内で検出され，掻き出し口は見られないので，いろりの可能性がある。

炉状遺構13号（第457図）

G・H－37区で検出された。大きさは長軸1.9m×短軸1.0mである。検出面からの深さは約15㎝。燃焼部の炉壁と床面が焼土化しているが中央をピットに切られている。

炉状遺構14号（第457図）

H－38区で検出された。大きさは長軸1.6m×短軸1.0mである。検出面からの深さは約13㎝。検出面から３㎝掘り下げたところに石が入っていた。燃焼部が焼土



第457図　炉状遺構12号・13号・14号・15号・16号・17号・18号・19号

化している。床面から10㎝は炭化物が堆積している。

炉状遺構15号（第457図）

G－38区で検出された。大きさは長軸0.7m×短軸0.5mである。検出面からの深さは約２㎝。燃焼部である赤化した部分のみ残存しており，詳細は不明である。

炉状遺構16・17号（第457図）

Ⅰ－37区で検出された。16号は長軸1.2m×短軸0.9mで，17号は長軸1.4m×1.1mである。検出面からの深さは約30㎝。17号が16号を切った形で出土している。

炉状遺構18号（第457図）

Ⅰ－37区で検出された。大きさは長軸1.2m×短軸0.7mである。検出面からの深さは約５㎝。炭化物が多い。

炉状遺構19号（第457図）

H・Ⅰ－37区で検出された。大きさは長軸2.2m×短軸0.8mで検出面からの深さは約20㎝。燃焼部は赤化し，炭化物も多い。出土した礫とこの遺構との関係は不明である。

⑦　溝状遺構　（第458図～第465図）

Ｅ～Ｇ－33～35区で検出された溝状遺構１号とＤ～Ｋ－34～37区で検出された溝状遺構２号・３号をまとめて報告する。２・３号は途中で合流し，東西に延びているため東側にある羽月川への排水溝の可能性がある。

溝状遺構１号（第459図）

Ｅ～Ｇ－33～35区で検出された。検出面からの深さは約30㎝～約50㎝。だんだん浅くなり，Ｇ－35区で消滅した。

溝状遺構２・３号　（第459図）

Ｄ－34区で検出した時は，２号・３号とわかれていたが羽月川の方に向かっていくと２号と３号の２つが合流した。３号はＦ－35区とＪ－36区で南側にのびていた。Ｆ－35区では次第に消滅し，Ｊ－36から南側にわかれたものは，Ｉ－37で大型の土坑が検出された。深さは約10㎝～約60㎝である。中心となる溝は遺跡を東西に横断する形である。

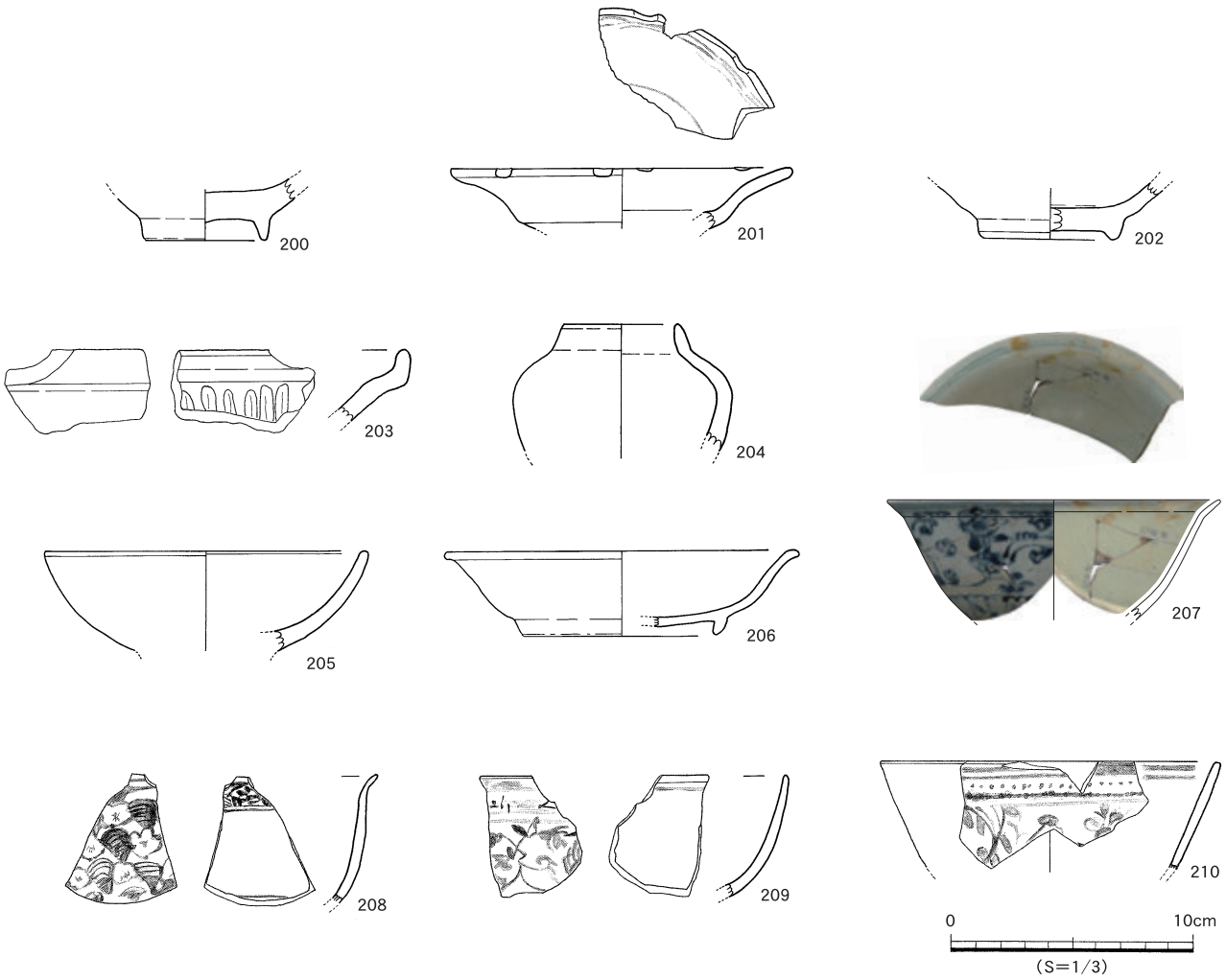
遺構内遺物

幅広い時代の遺物が出土したが，17世紀代の遺物が多かった。輔の羽口や鉄滓の出土も多かったので，近接する炉状遺構との関係も考えられる。すべて，一括で取り上げてあるので，まとめて掲載する。

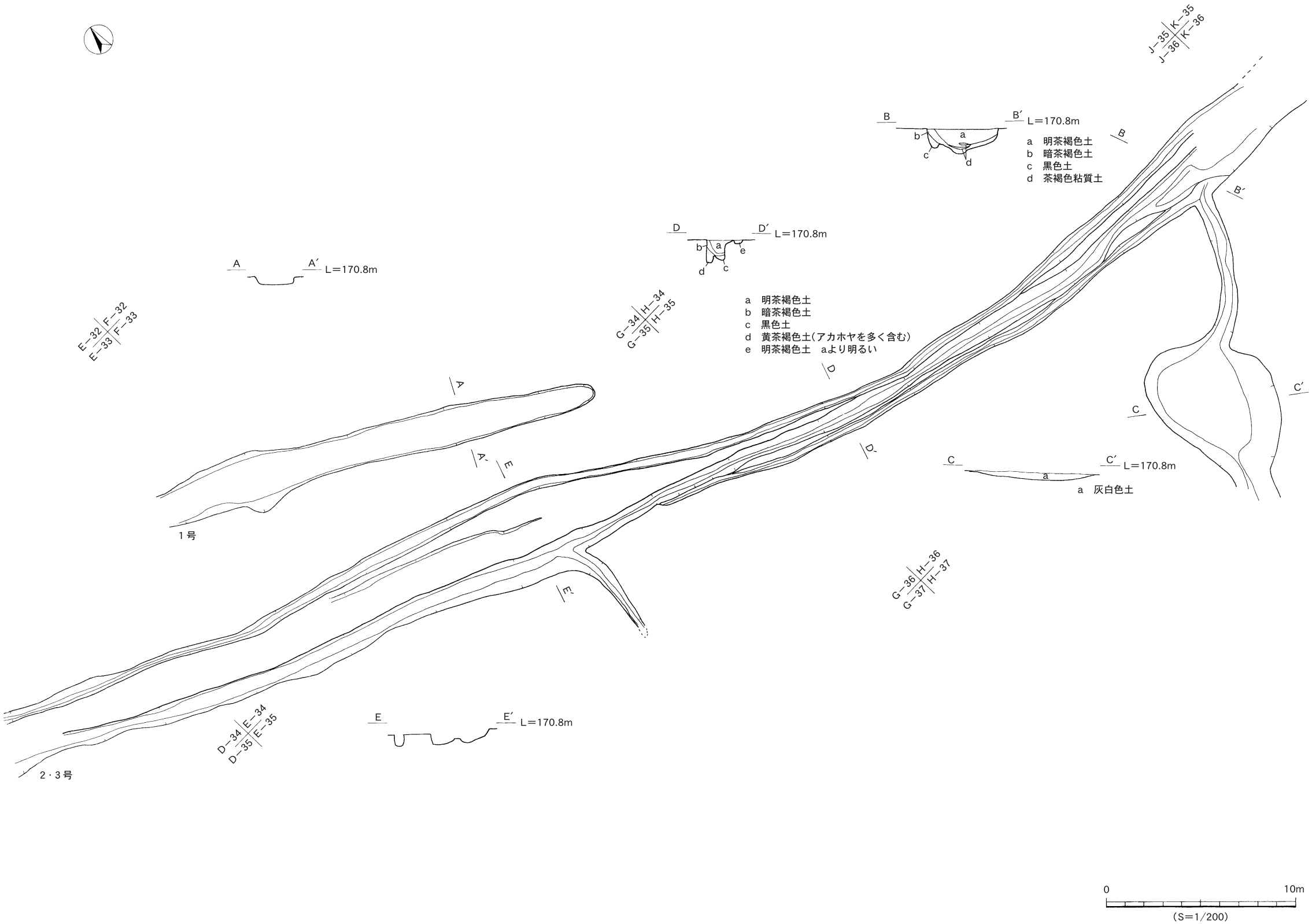
200～204は青磁である。200は龍泉窯系の椀の底部である。高台内底は露胎であるが畳付には一部釉薬が残っている。201～203は景徳鎮窯系のものである。201は稜花皿である。202は稜花皿の底部である。高台内底は露胎であるが畳付には一部釉薬が残っている。203は盤である。204は中国南部のものと思われる小形の壺である。

205・206は白磁である。205は漳洲窯系の白磁の椀である。206は景徳鎮窯系の皿である。

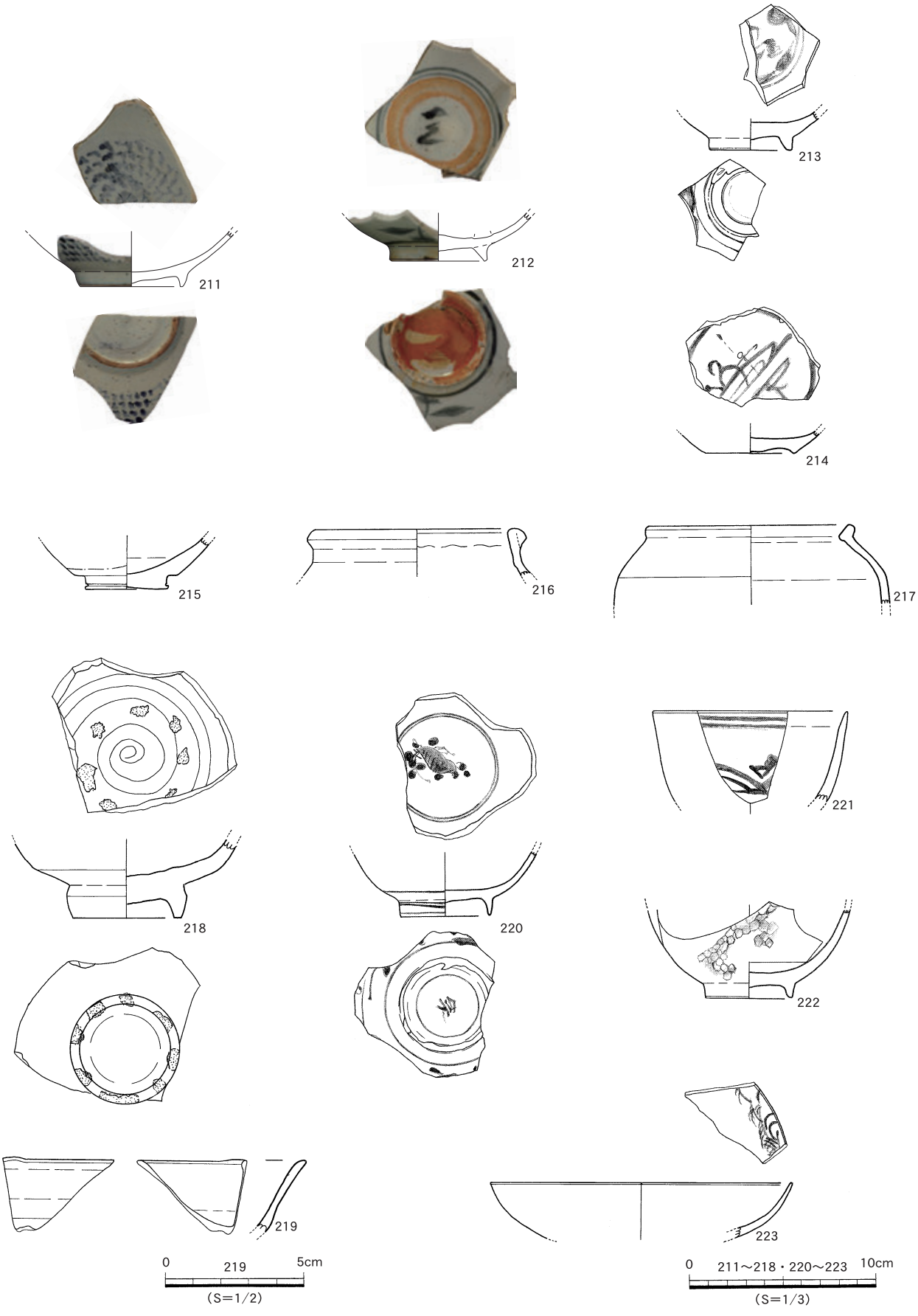
207～212は青花の碗である。207～211は景徳鎮窯系である。207・208は端反りである。211は小花文が描かれている焼成不良の連子碗である。212～214は漳洲窯系である。212は輪状に釉剥ぎが施され，畳付に籾殻が付着している。高台内底は露胎で焼成のため赤化している。213は，皿で高台内底は露胎である。214は碁笥底の皿である。高台内底は露胎である。見込みには「寿」の文字が描かれている。



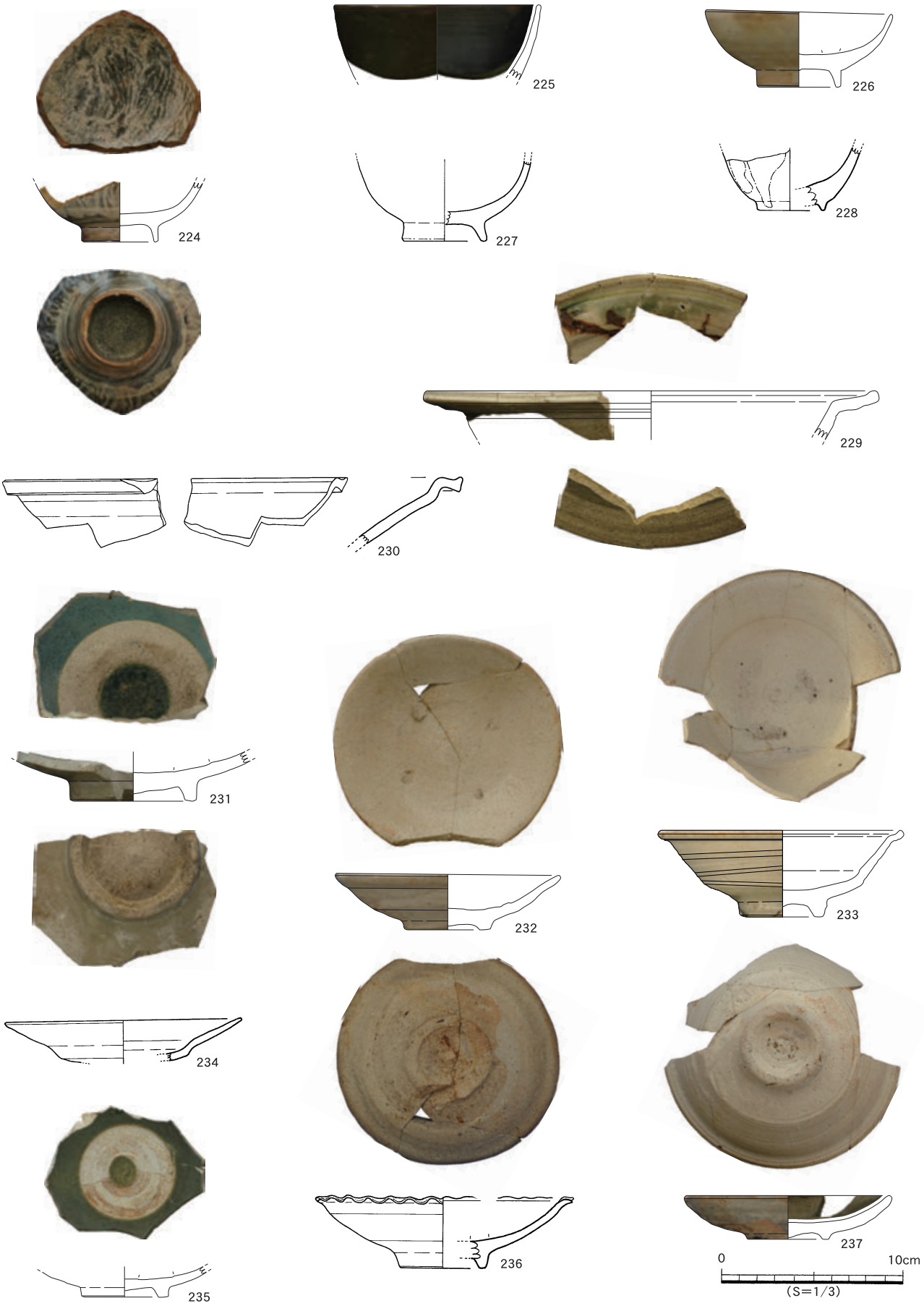
第458図　溝内出土遺物①



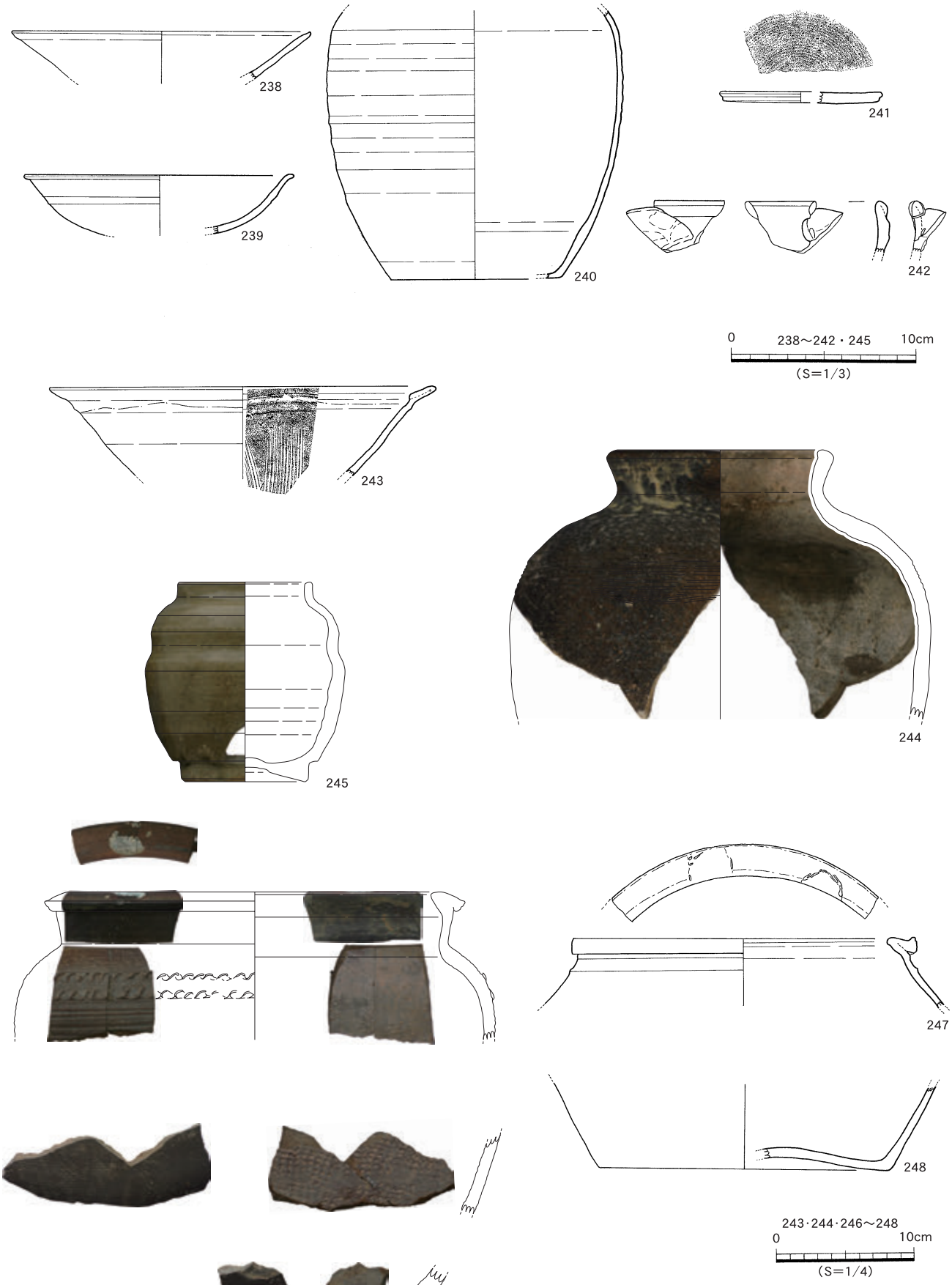
第459図　溝状遺構　1号・2号・3号



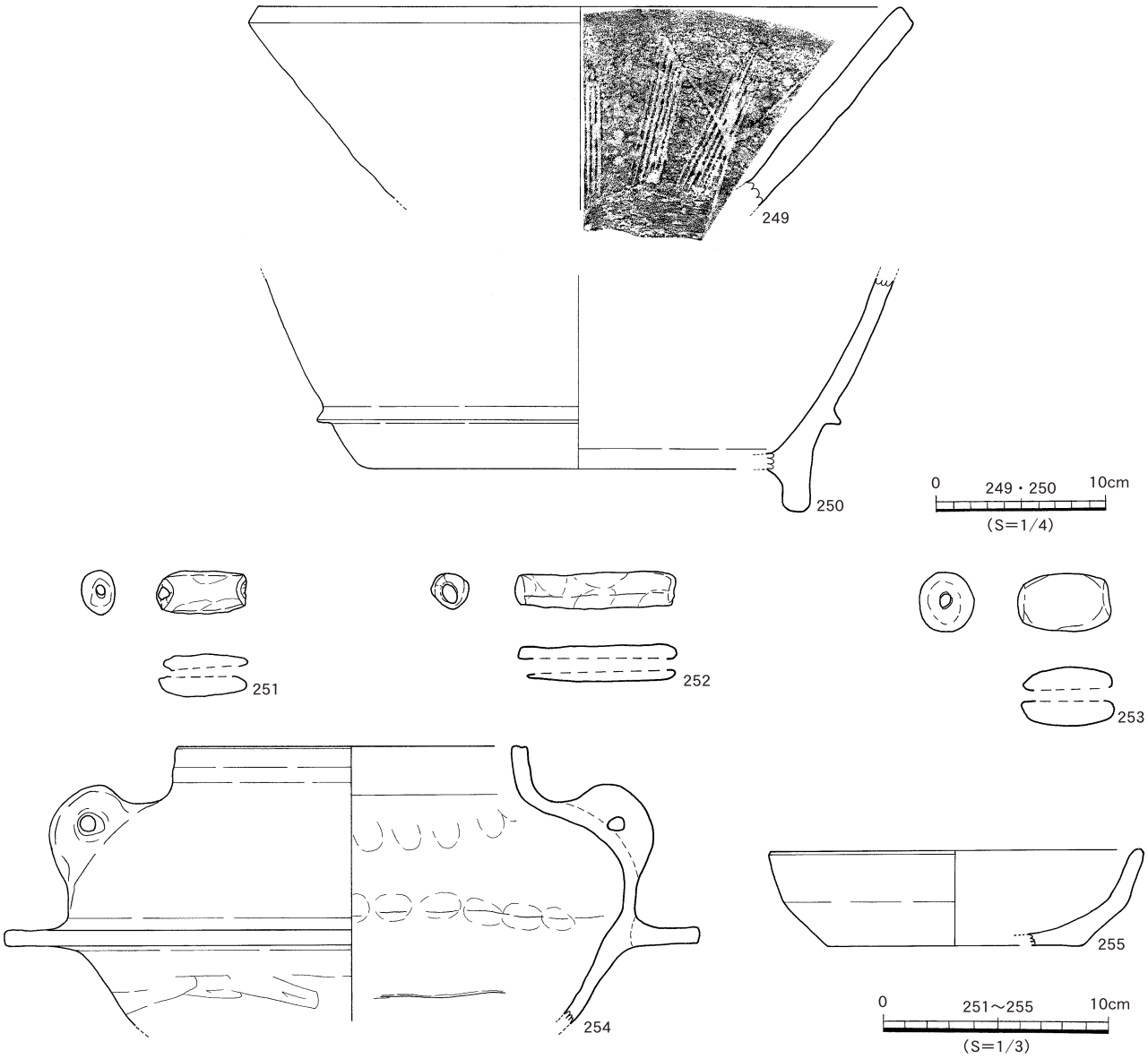
第460図　溝内出土遺物②



第461図　溝内出土遺物③



第462図　溝内出土遺物④



第463図　溝内出土遺物⑤

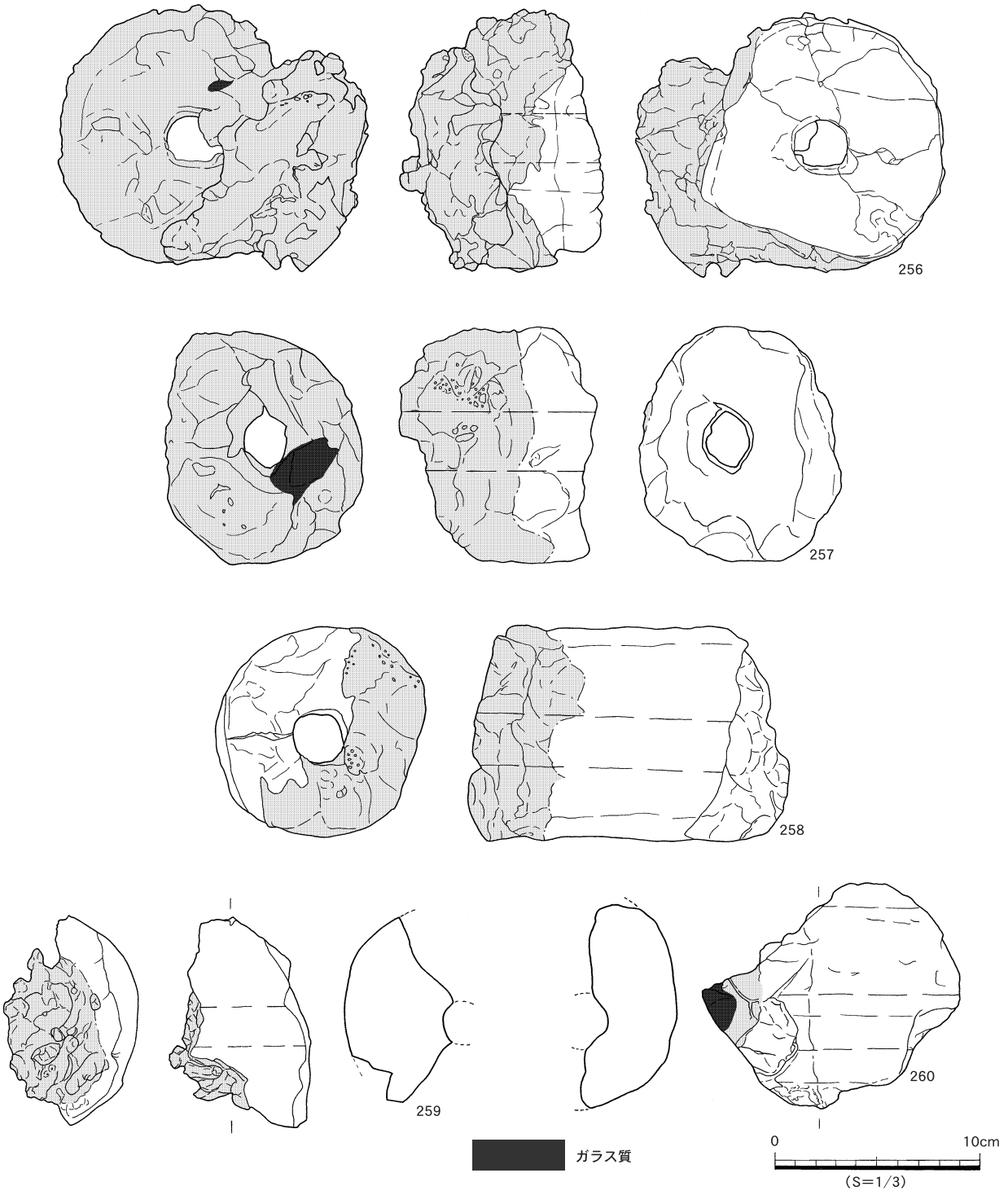
215～219は輸入陶器である。215は中国南部産と思われる天目型の碗の底部である。高台が平底で露胎である。216は中国産と思われる輸入陶器の壺である。焼成のため茶褐色に変色している。217は中国産の壺である。口唇をヘラで強く削られている。218は砂目の痕が畳付と見込みに残る朝鮮産の陶器の碗である。219は朝鮮産の皿である。

220～223は肥前産の磁器である。222はこんにゃく印判の碗である。223は胎土が黄白色であるが，染付の皿である。

224～228は肥前産又は薩摩産の陶器の碗である。224は肥前産の刷毛目の施された碗である。畳付の内面に砂が付着している。225は薩摩産の龍門司窯の碗である。226は赤色が塗られているが，発色がされていない。焼成不良の碗である。肥前産と思われるが薩摩産の可能性もある。227は肥前産の呉器手碗である。228は肥前産の褐釉の碗である。

229～239は肥前産の皿である。229は二彩手の中皿で松が描かれている。230は口縁が外反する中皿である。231は蛇ノ目釉剥ぎで高台内底露胎の中皿である。233は溝縁皿である。236は肥前内野山窯産の稜花皿である。蛇ノ目釉剥ぎで畳付から高台内底は露胎である。

240は薩摩産の徳利である。粘土ひもでつないだ後に敲きを施した痕が見られる。薄型であることから，苗代川系串木野窯の可能性もある。241は肥前産の水差しの蓋である。242は薩摩産の苗代川系堂平窯の片口の注ぎ口である。243は肥前産の擂鉢である。244は備前産の壺である。245は肥前産の灰釉の小壺である。246は肥前産



第464図　溝内出土遺物⑥

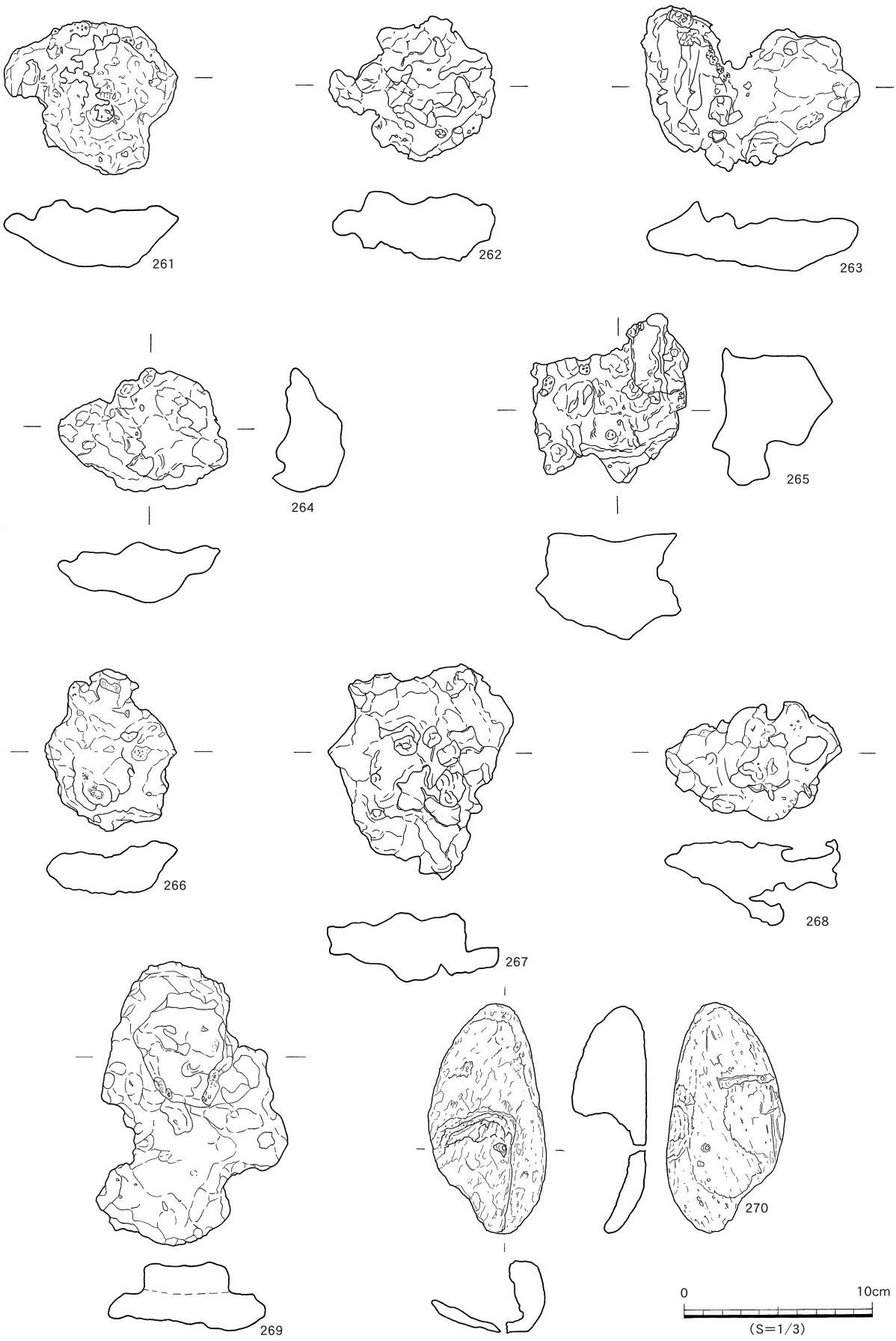
の大甕である。内面に格子状の敲目が見られる。247・248は薩摩産の苗代川系堂平窯産の壺の口縁部と甕の底部である。

249は瓦質土器の擂鉢である。250は火鉢である。

251～253は土錘である。古代の可能性がある。254は土師質土器の茶釜である。内面をつないだ指押さえの痕が見られる。255は焙烙である。

256～260は鞴の羽口である。鉄滓が端部についている。257・260は一部ガラス質の部分が見られる。261～269は鉄滓である。ほとんどのものが碗型滓である。270は軽石製品である，端部に抉りが見られ，中央に穿孔が施されている。

その他の出土遺物は，青磁の椀が５点，皿が４点，白磁の皿が４点，青花が13点，肥前産の染付が22点，陶器の碗が２点，皿が20点，擂鉢が12点，薩摩焼が21点，瓦質系土器の擂鉢が33点，鞴の羽口が105点，鉄滓が1651点（75,397ｇ）出土している。

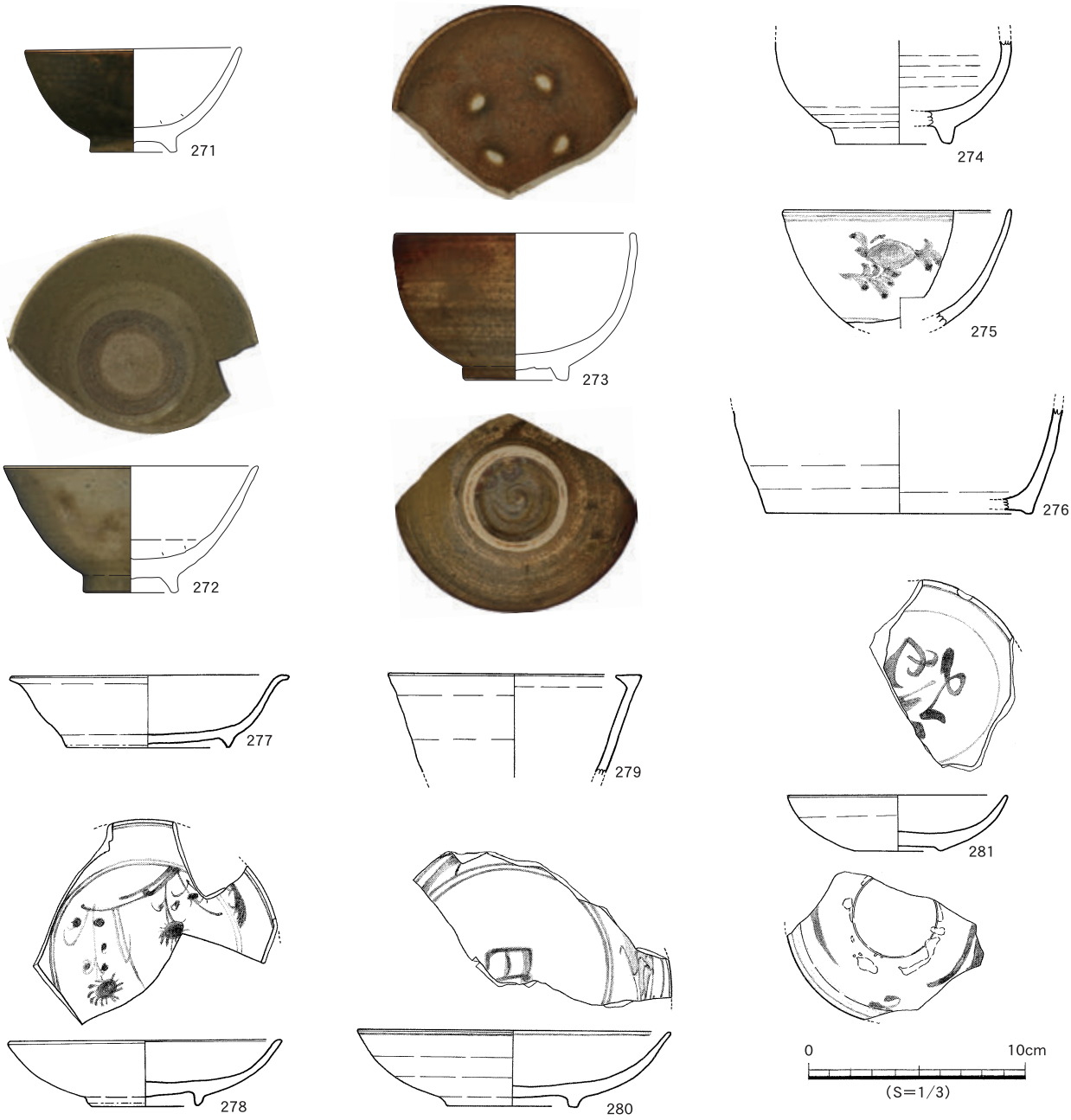


第465図　溝内出土遺物⑦

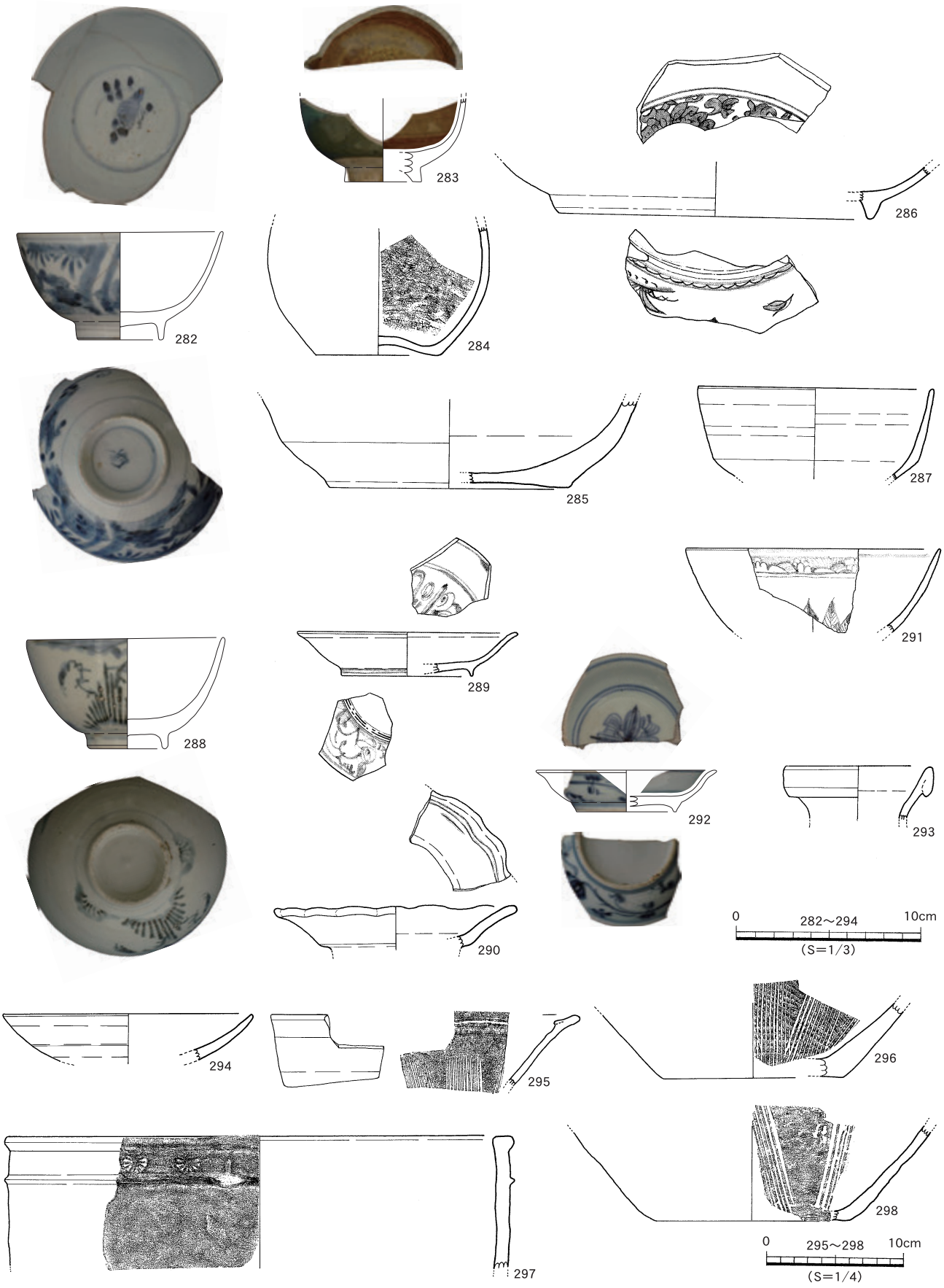
⑧　ピット内遺物　（第466図～第469図）

調査範囲内で多くの中世・近世のピットが検出された。調査時，ピットを埋土の色で，時代分けを行った。中世・近世に当たるピットは，赤茶色と灰白色の埋土であった。ピットの総数は4000基あまりで，その中から遺物が出土したピットは138基であった。古墳時代，古代と判断したピット内からも，中世・近世の遺物が出土したので，そのピットも中世・近世のピットとして取り扱って掲載している。遺物の多くが青花，肥前系陶磁器，薩摩産陶磁器であった。北側からつけたピット番号と縮尺を考慮して掲載しており，詳しい分類はされていない。ピット番号等の詳細については遺構配置図と観察表を参照されたい。

271・272は同一ピットから出土した。どちらも薩摩産の龍門司系の碗である。見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施されている。273・287・301・302は薩摩産の龍門司系山元窯の碗である。274は竪野系冷水窯の白薩摩の碗である。275・304は肥前産の染付碗である。276は薩摩産の苗代川系堂平窯の片口の底部である。277・305は景徳鎮窯の白磁の皿である。278・280は肥前の染付皿である。279は肥前の香炉である。281は見込みに「福」の字が書かれた碁笥皿である。底部には籾殻が付着している。282は薄手の高台をもつ碗である。283・299は肥前内野山窯の碗である。284は薩摩産の苗代川系の徳利である。串木野窯の可能性もある285は土師質土器の焙烙である。286は景徳鎮窯系の青花の皿である。高台内底は無釉で



第466図　ピット内遺物①

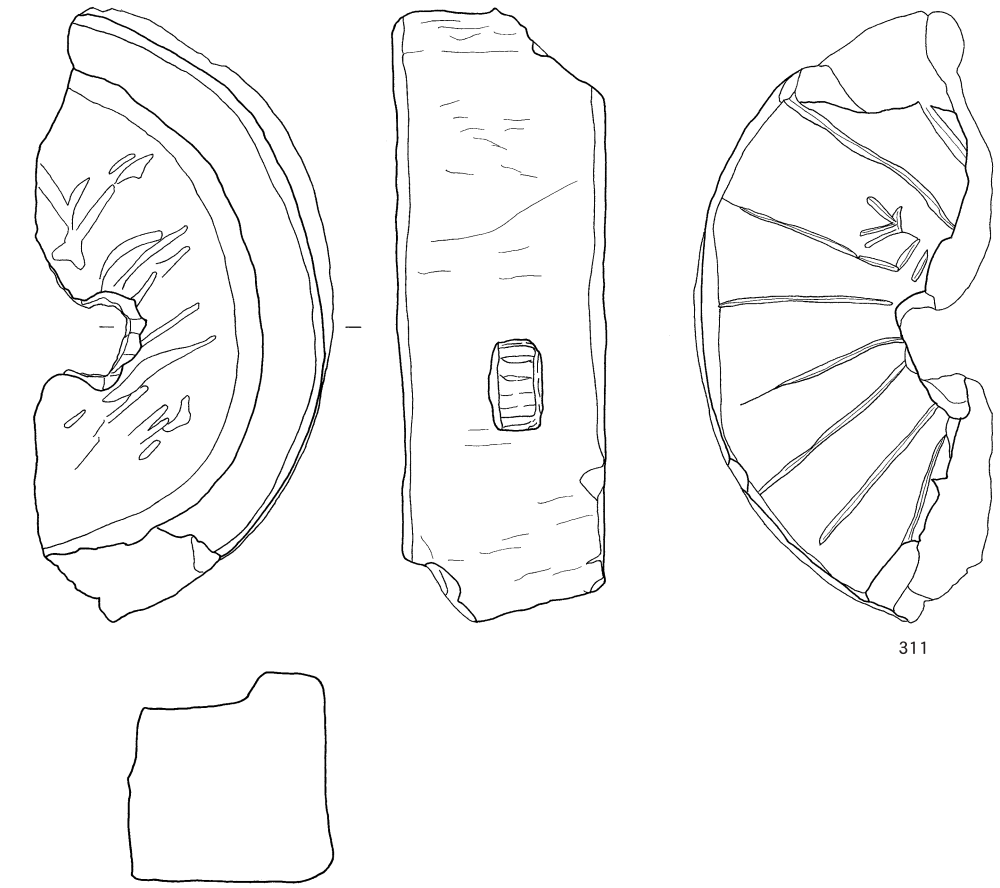


第467図　ピット内遺物②

ある。288は肥前の染付碗である。289・292は景徳鎮窯系の青花皿である。291は景徳鎮窯の青花碗である。芭蕉文が描かれている。292は見込みに十字花文が描かれている。290は景徳鎮窯系の稜花皿である。293は徳利の口縁部である。294，295は同一ピットから出土している。294は肥前内野山窯の皿で295は同じく肥前の擂鉢である。297はスタンプ文が施された火鉢である。296・298はともに備前の擂鉢である。300は肥前産の灰釉の皿である。303は肥前の色絵の碗である。丸文が描かれている。306は肥前の陶器の皿である。見込みに胎土目痕が3箇所見られる。307は産地不明の陶器の鈴である。308は二次加工の滑石製品である。筒状を呈している。309は鞆である。310は金床石である。敲打による剥がれ被熱の痕が見られる。311・312は石臼である。大きさから茶臼であると思われる。



第468図　ピット内遺物③



第469図　ピット内遺物④

⑶　包含層出土遺物

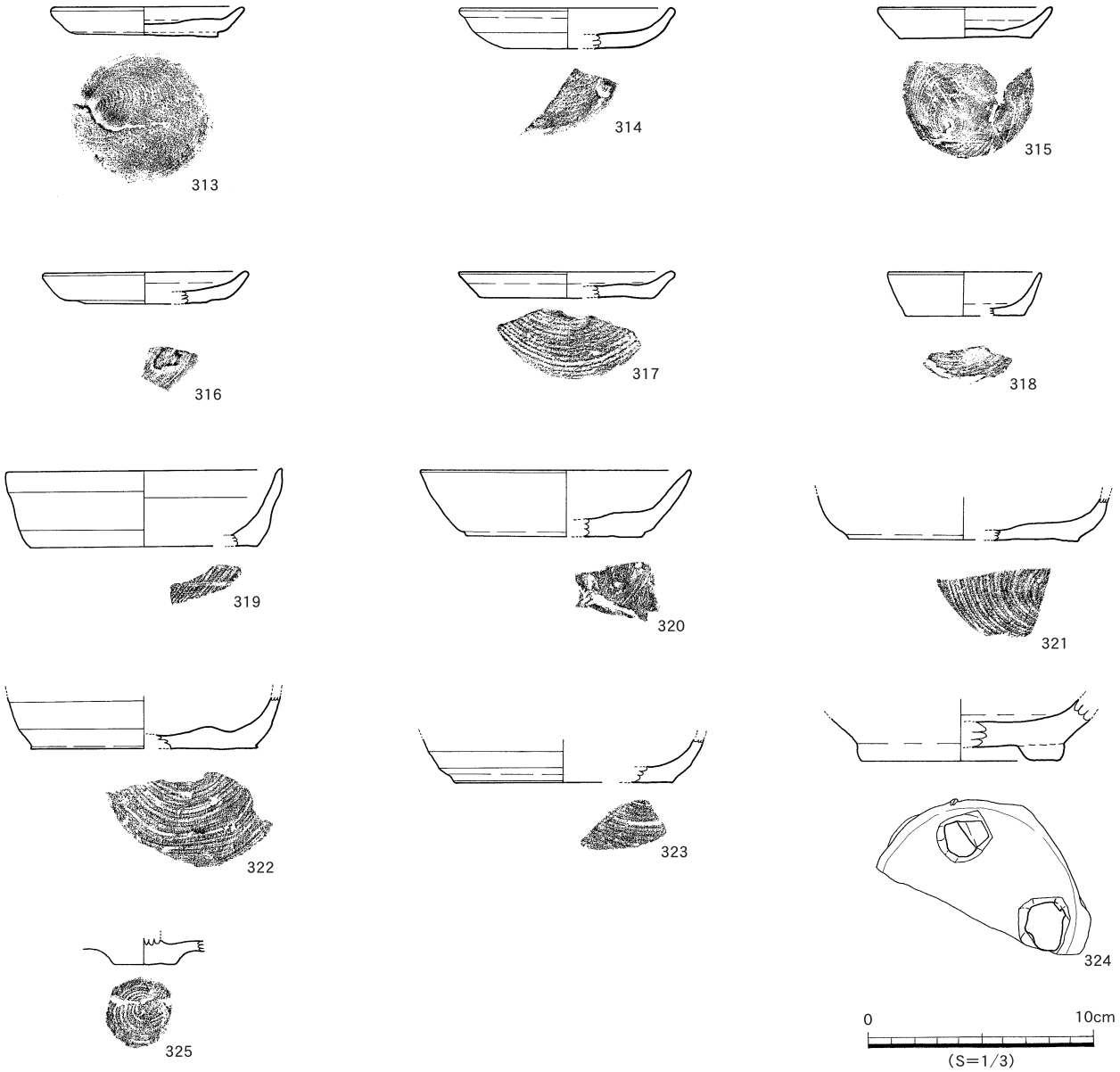
中世から近世の出土遺物は，全調査区において検出された。この時期に相当する層は，Ⅰb層からⅡ層であるが，どの層からも混在して出土する状況であり，中世と近世の時代区分は層位的に困難であった。遺構と同じように，中世と近世の遺物を一括して取り扱い報告する。

中世に相当する遺物は，土師器，輸入磁器である，青磁・白磁・青花や滑石製品などが出土している。また，古瀬戸が出土している。これらの出土量は571点で広範囲に出土している。

近世に相当する遺物は，瀬戸・美濃産陶器，備前産陶器，肥前産陶磁器，薩摩産陶磁器などが出土している。これらの出土量は1830点で広範囲に出土している。なお，遺物の分類については概要で述べてある通り，土師器，輸入陶磁器，国産陶磁器，その他の順に報告する。

①　土師器（第470図）

313～325は，土師器である。古代の土師器は大量に出土したが，中世のものと思われる底部の切り離しが糸切りのものは，62点と他の遺物量に比べると少数であった。口径が10㎝未満のものを皿とし，10㎝以上のものを坏とした。口径がわからないものについては，器高で判断している。313～318は皿である。内外面とも回転ナデによる調整が施されている。313はほぼ完形品である。319～324は坏である。321は外面が赤茶の発色を呈している。324は坏に脚の付いたものである。325は燈器である。底径が2.8㎝である。芯入れの部分が破損している。



第470図　中世遺物⑴　土師器

② **輸入磁器（第471図～第474図）**

輸入磁器は，中国産の青磁・白磁・青花・赤絵・ベトナム産の青花が出土している。器種は，椀・皿である。

326～332は青磁である。326は剣先連弁文である。327・328は外面に連弁文が施されるものである。329は鎬連弁が簡略されたものである。330・331は龍泉窯系の内面に割花文が施されるものである。332は稜花皿である。

333～337は白磁である。333は景徳鎮窯系の椀で高台より下部は露胎である。12～13世紀のものである。334・335は景徳鎮窯系の皿である。336は漳洲窯系の碁笥底の皿である。高台内底は露胎で，被熱のため赤化している。337は景徳鎮窯系の小杯である。

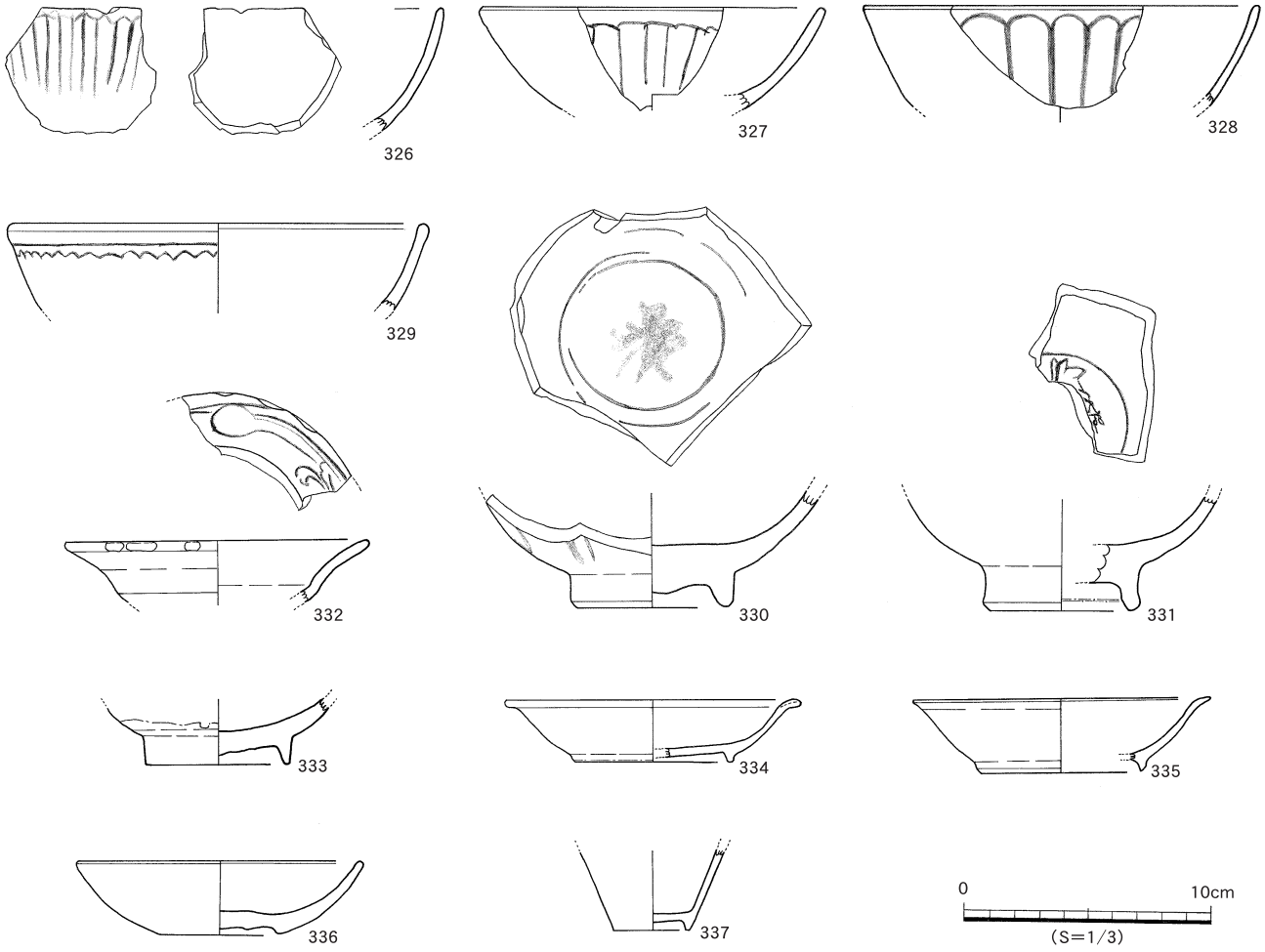
338～345は景徳鎮窯系の青花の碗である。341は，外面を松で表し，内面を蓮又は，巻き貝で表している。343は連子碗で外面は芭蕉文で内面は蓮又は巻き貝を表している。344・345は見込みが緩やかに盛り上がる饅頭心の碗である。346～350は漳洲窯系の青花の碗である。346・347は輪状の釉剥ぎで内面に「正」の字が描かれている。ともに高台内底は露胎である。346は皿の可能性もある。346～348は饅頭心型の碗である。351～356は景徳鎮窯系の青花の皿である。354・355は碁笥底の皿である。357～361は漳洲窯系の青花の皿である。358・359は碁笥底の皿で「寿」を人型に表したものである。360は輪状の釉剥ぎで高台内底は露胎である。

362は景徳鎮窯系の赤絵の色絵皿である。赤で輪郭を表現している。16世紀のものである。363はベトナム産の青花の碗である。胎土は乳白色で中国産の青花の胎土より光沢がない。輪状の釉剥ぎで見込みに文様が描かれている。また，高台内底は露胎である。17世紀のものである。

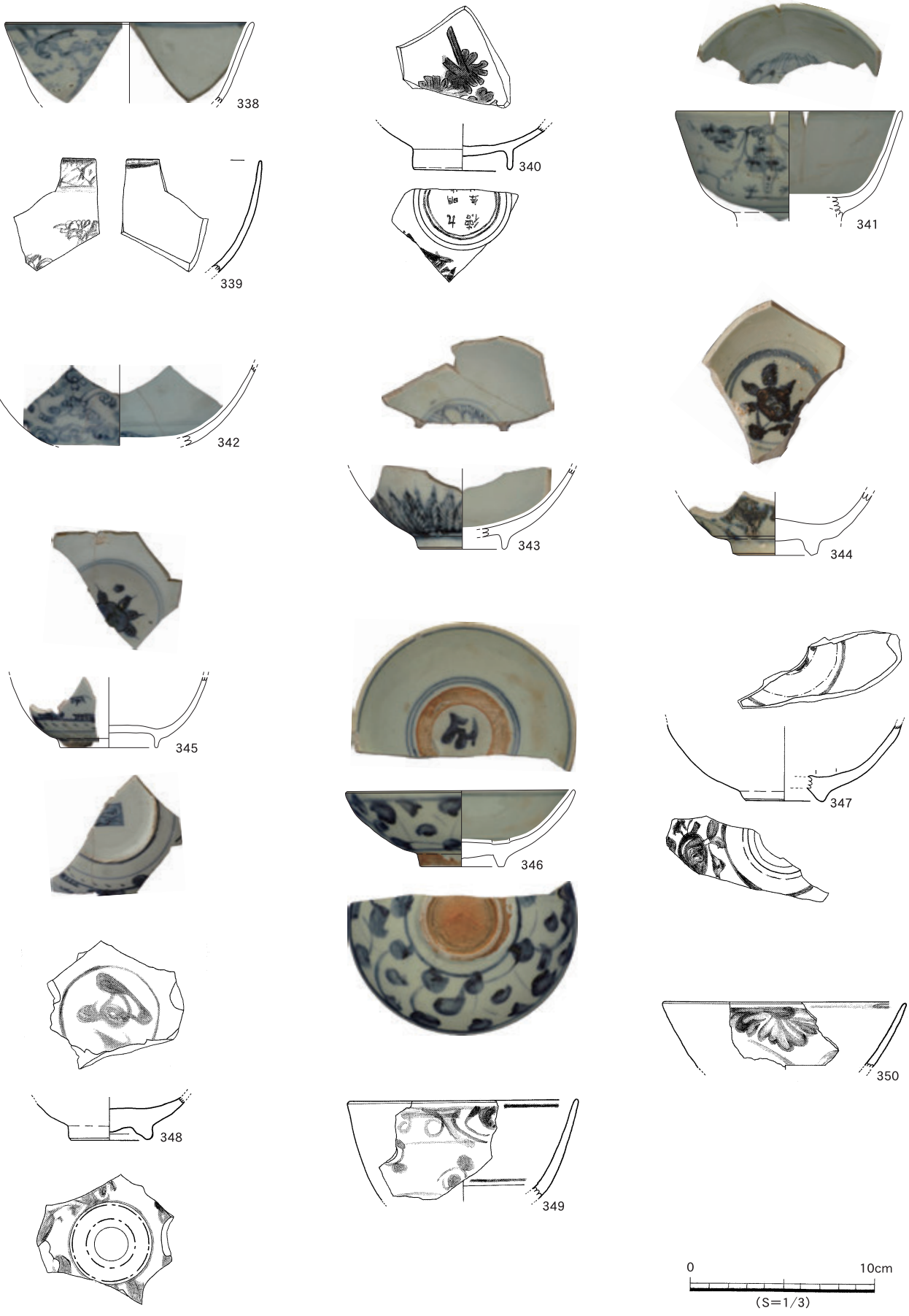
③ **国産磁器（第474図～第477図）**

国産磁器は，肥前・薩摩産が出土している。器種は，染付の碗・皿・蓋・徳利が出土している。また，肥前産の赤絵の色付き皿も出土している。

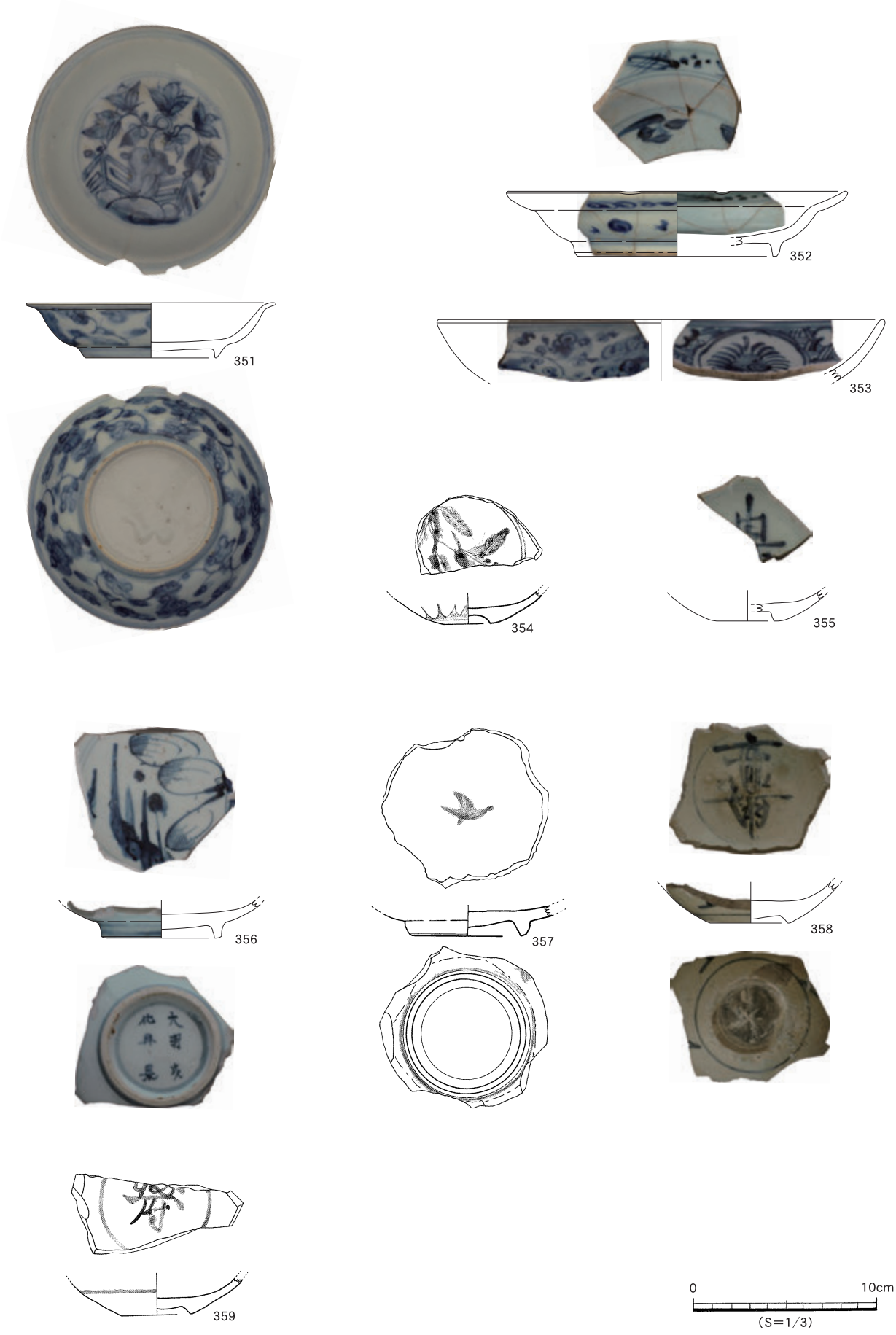
364～391は肥前の碗である364は青磁の碗である。焼成



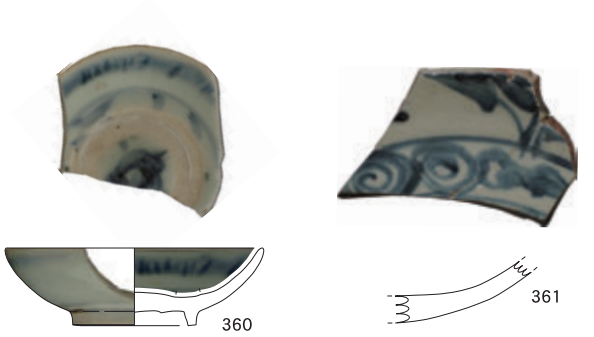
第471図　中世遺物(2)　青磁・白磁



第472図　中世遺物(3)　青花①



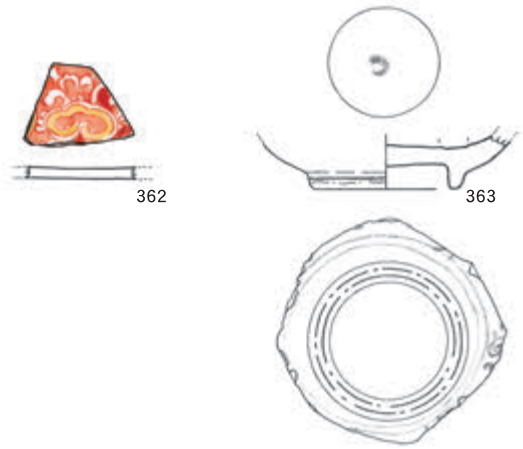
第473図　中世遺物⑷　青花②



不良である。365は白磁の碗である。367は天目型の染付碗である。369は鉄絵の碗で見込みに菊が描かれている。高台内底露胎である。370は見込みに菊の花を描いている青磁掛分けの天目碗である。高台内底は露胎である。374は饅頭心型の碗で見込みに葦の文様が描かれている。376は見込みに「宣徳年製」が書かれた碗である。377は高台内底に「大明年製」の文字が見られ，外面には雨降り文が描かれた17世紀後半の碗である。383は天目型の碗である。384は化粧道具の一つで口唇が鉄釉のうがい碗である。お歯黒を付けたときに使用するものである。17世紀末から18世紀初めのものである。385は丸文の描かれた，くらわんか碗である。386は折れ松葉が描かれた小杯である。389は白磁の小杯である。391はコンニャク印判で描かれた小杯である。392は茶飲み碗である。393は白磁の型紙刷りの向付の上手である。394は蓋付の小鉢である。

395・396は薩摩産の磁器碗である。395は19世紀の端反り碗である。396は広東碗である。

397～409は肥前磁器の皿である。398は椿が描かれた



皿。401は波佐見産で蛇ノ目釉剥ぎの粗製の皿である。高台内底は露胎で無釉の部分は赤化している。402は胎土の色が灰色の粗製品である。405は日ノ字鳳凰文の皿である。408・409は白磁の皿である。409は高台腰から下部が露胎である。

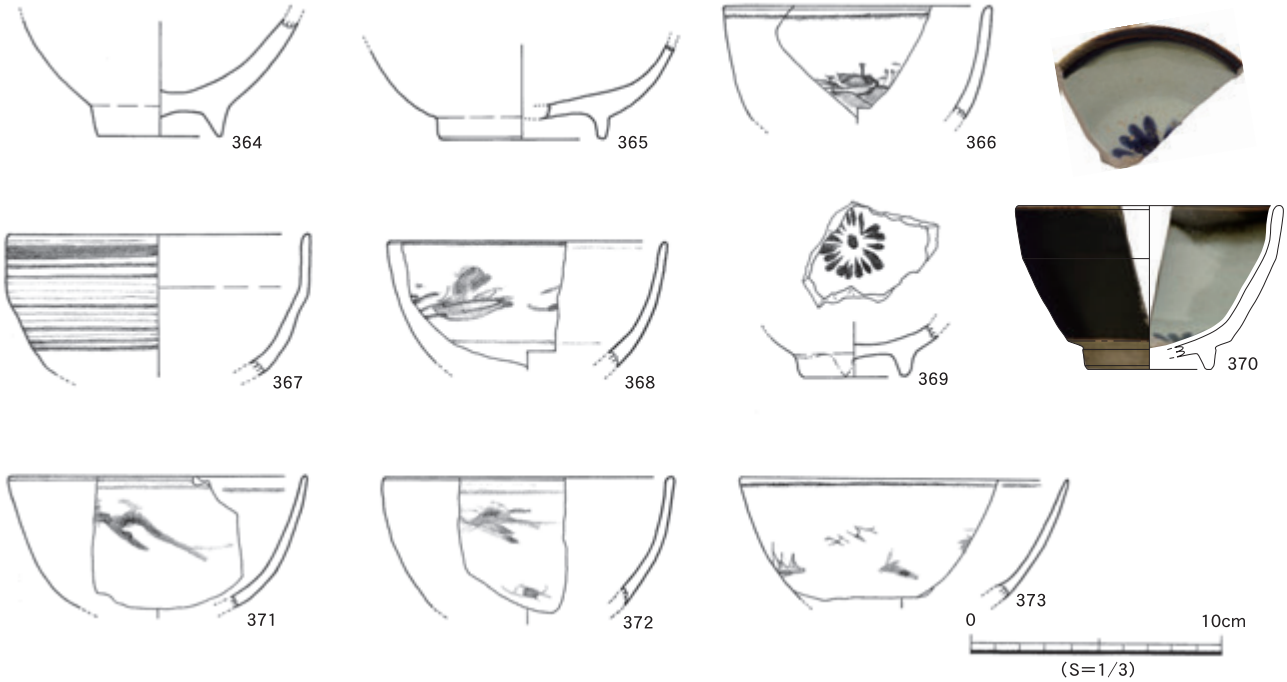
410・411は肥前産の蓋である。410は東南アジア向けの輸出用の蓋である。唐草文である。411は18世紀後半の輪宝文が描かれた蓋である。

412～415は肥前の徳利である。412は輸出向きに多い。415は○×文が描かれている。被熱している。

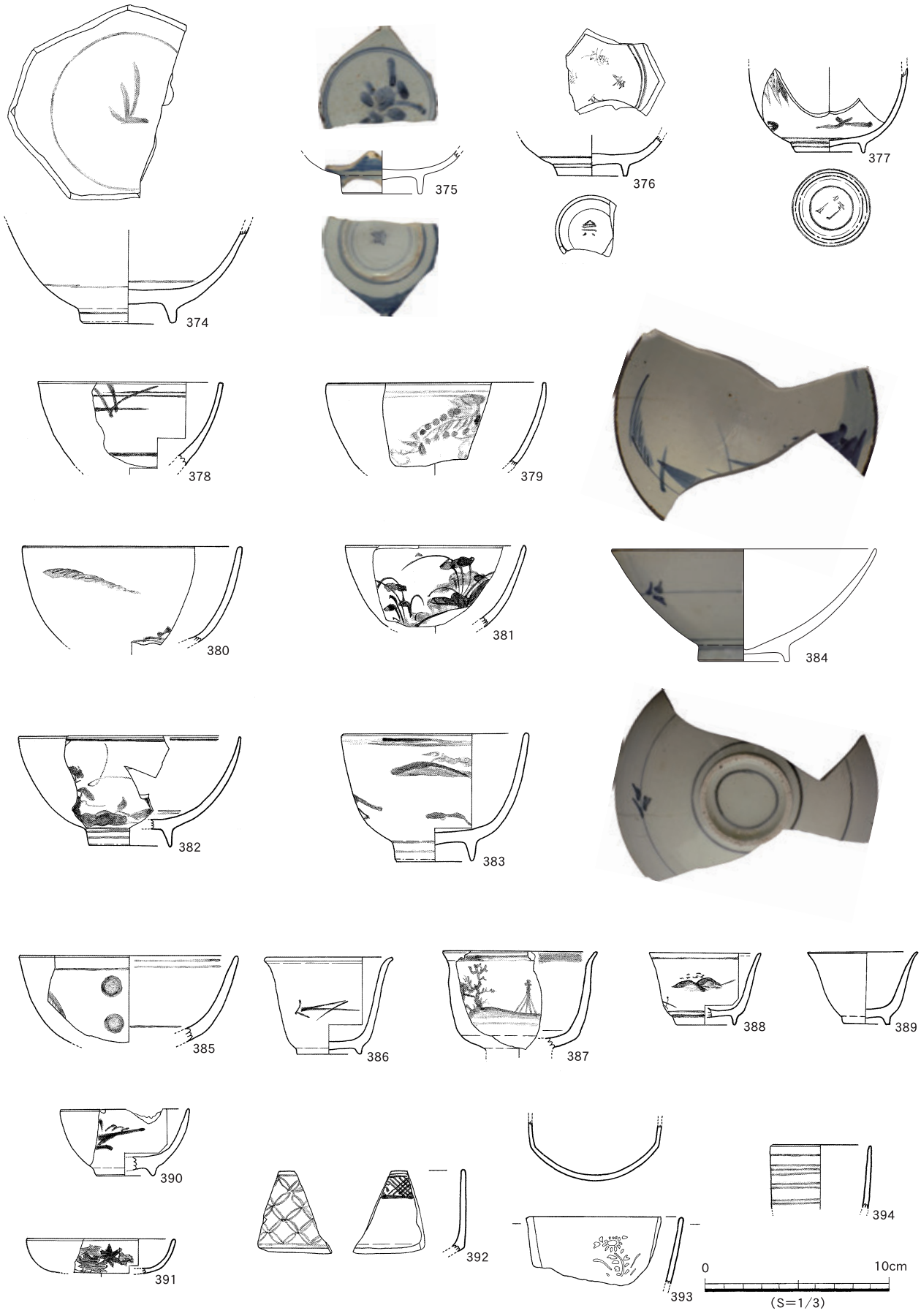
416・417は肥前産の赤絵染付皿である。漳洲窯の呉須赤絵をまねたもので釉薬が溶けて白濁している。416の口縁部は，扇を描いている。416・417は同一個体と思われる。

④　国産陶器　（第478図～第484図）

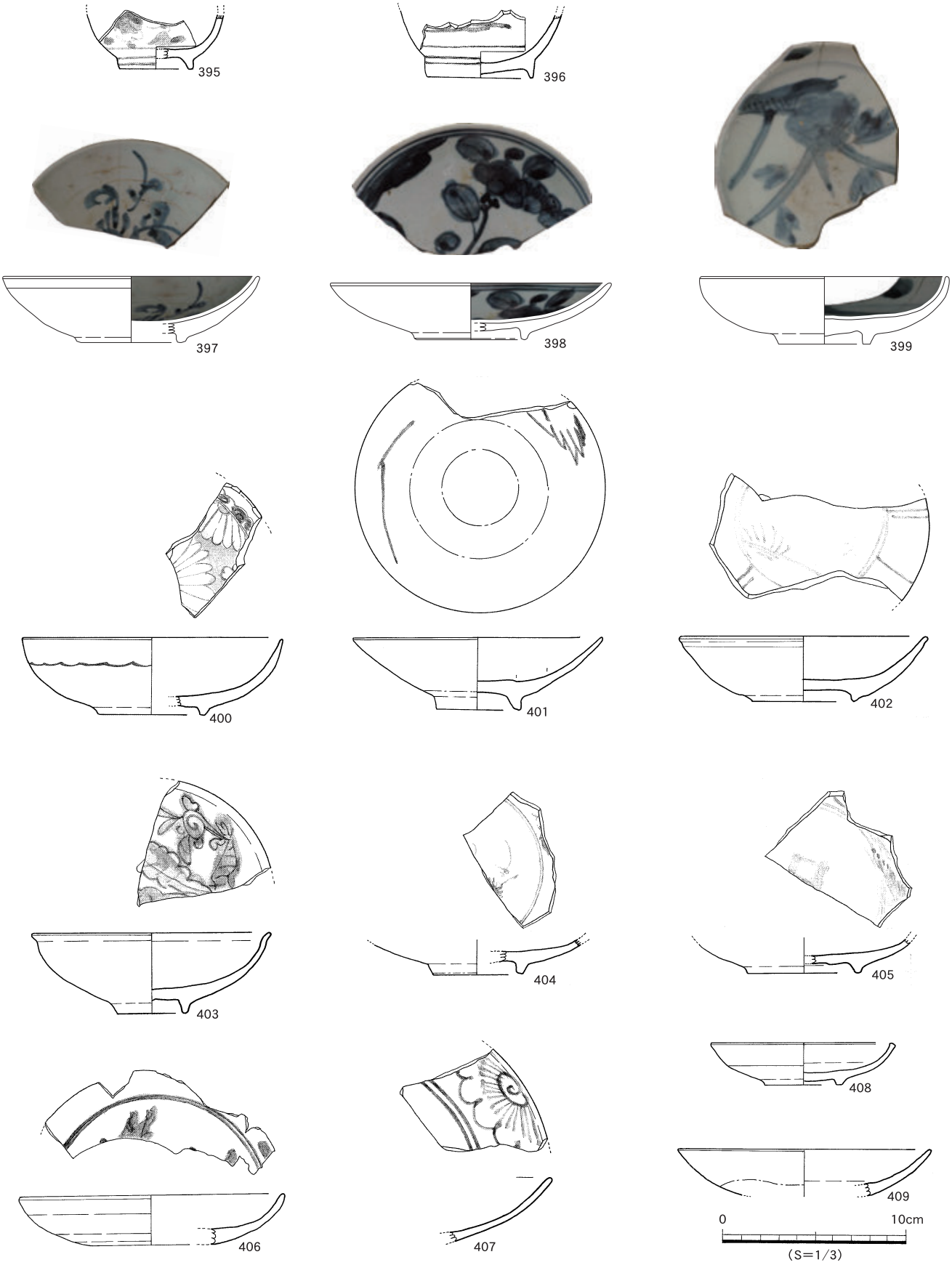
国産陶器は，瀬戸・美濃，肥前，薩摩，琉球産が出土



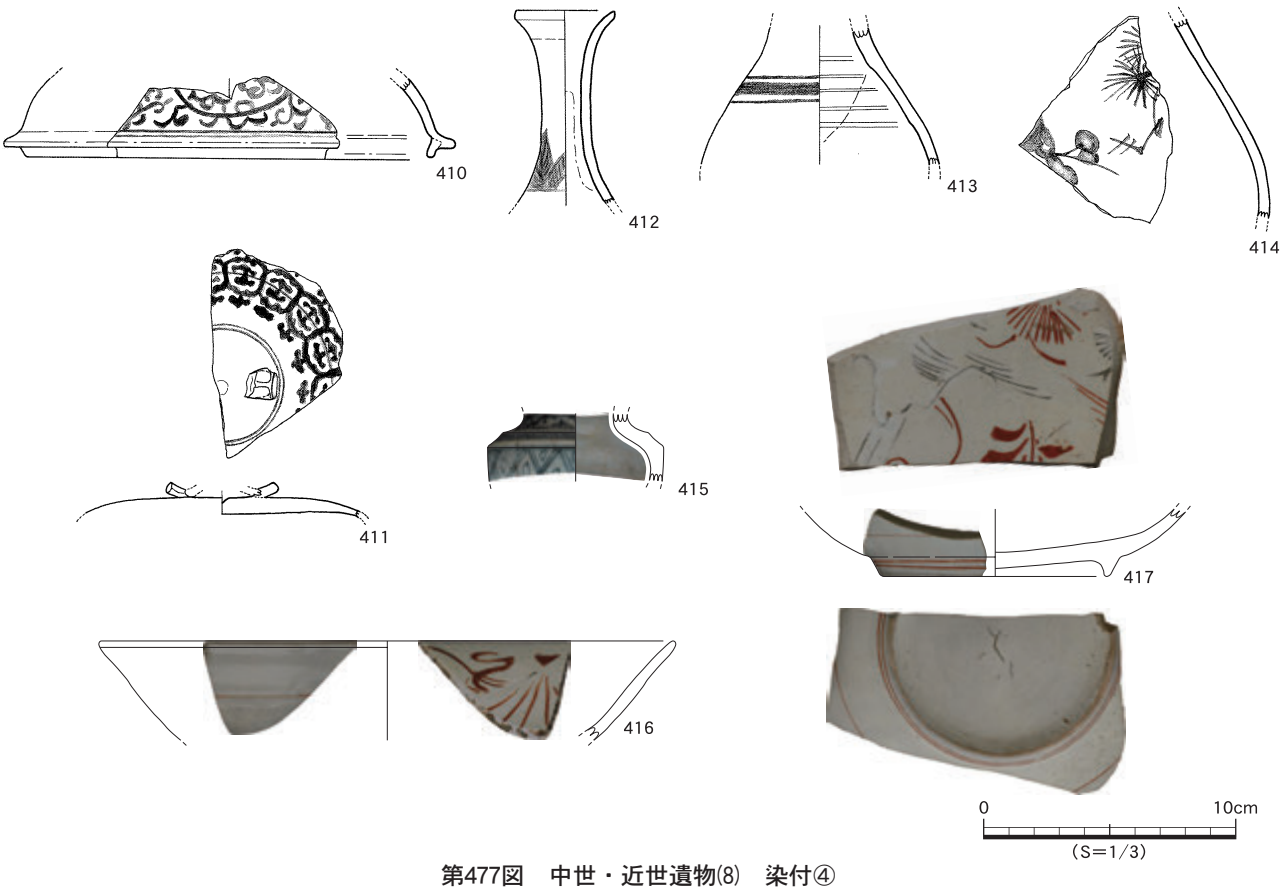
第474図　中世・近世遺物⑸　青花③・染付①



第475図　中世・近世遺物⑹　染付②



第476図　中世・近世遺物(7)　染付③



第477図　中世・近世遺物⑻　染付④

している。碗，皿，甕，壺，徳利などが出土している。

418・419は瀬戸・美濃産の天目碗である。高台腰部から下部は露胎である。16世紀後半から17世紀初めのものである。

420～433は肥前産の碗である。420は呉器手碗である。421は天目碗を意識した作りである。423は唐津の沓形碗である。424は白天目碗である。425は銅緑釉の碗である。漆を継いで割れたものを補修した痕がある。426は灰釉の碗である。高台内底は露胎である。429は銅緑釉の碗である。430は鉄さびを塗ったものである。432は肥前の蛇ノ目釉剥ぎの刷毛目の碗である。433は鉄絵で描かれた焼成不良の向付である。

434～438は肥前産または薩摩産と思われる陶器の碗である。436は焼成不良で，半磁器の可能性がある。

439～453は薩摩産陶器の碗である。439～441は17世紀の竪野系冷水窯の白薩摩である。443・444は龍門司系山元窯の碗である。445～450は龍門司窯産の蛇ノ目釉剥ぎの碗である。447・448は高台下部から露胎である。451・452も同じく龍門司窯系の可能性もあるが，他の産地も考えられる。

454～464は肥前産の陶器の皿である。454・455は畳付に籾殻が付着した灰釉の皿である。456は胎土目の稜花皿である。457・458は砂目の溝縁皿である。459は京焼風陶器の皿である。460は内野山窯の銅緑釉の蛇ノ目釉剥ぎの皿で高台内底は露胎である。461は肥前系あるいは他の九州産の可能性もある。高台腰から下部は露胎である。462～464は大皿または盤である。462・463は同一個体と思われる。

465・466は薩摩産の龍門司窯系の皿である。

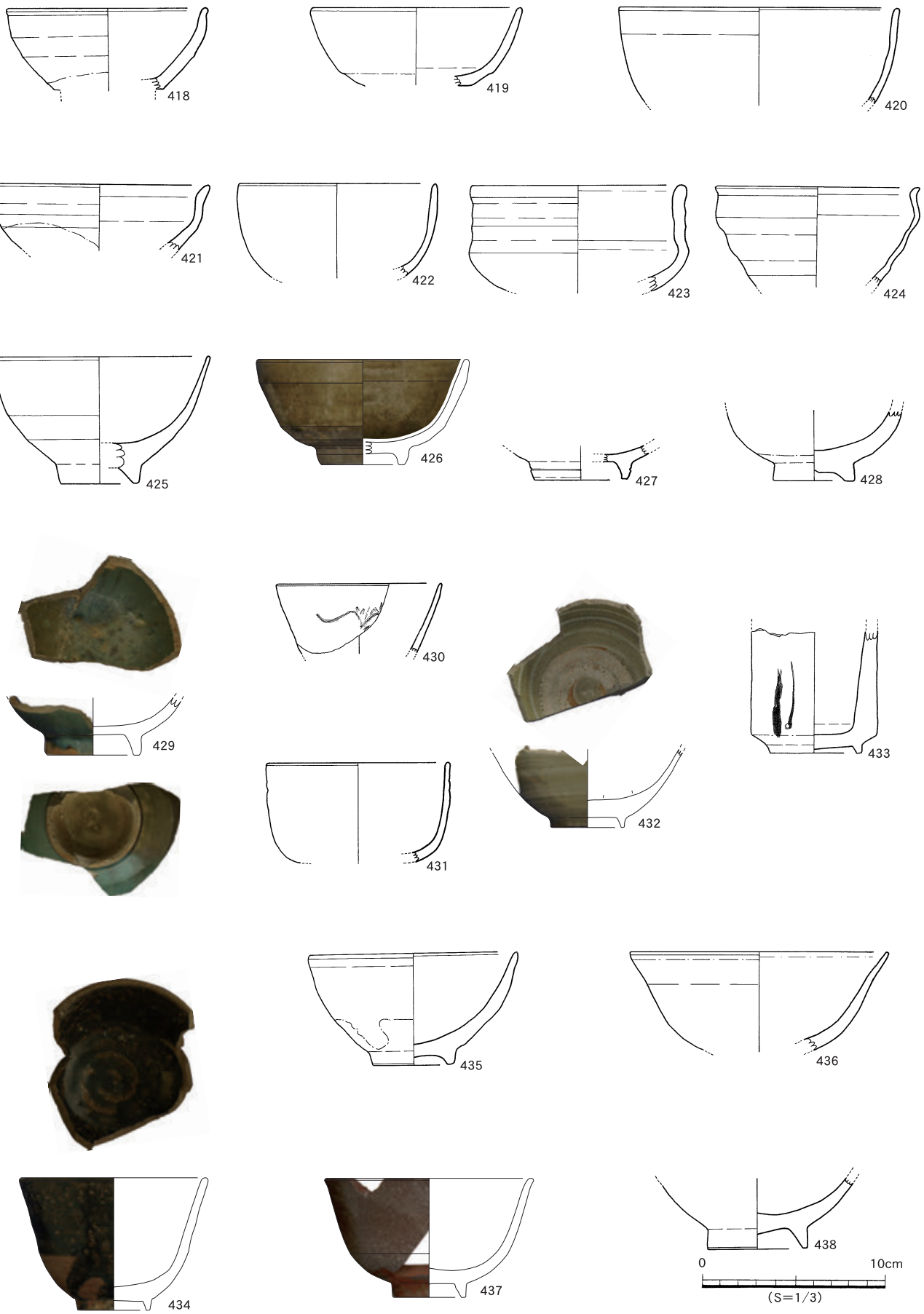
467・468は，古瀬戸の瓶子である。467は肩部で468は底部付近である。同一個体と思われる。中世のものである。

469は瀬戸・美濃産の徳利である。底部は無釉である。470～475は肥前産の徳利である。471は藁灰釉と鉄釉を掛分けた徳利の頸部である。473は二彩手の徳利である。鉄釉と銅緑釉の掛流しで白化粧が見られる。475は鉄釉のもので敲きの痕がある。

476と477は薩摩産の苗代川系堂平窯の徳利の口唇部と底部である。

478～481は薩摩産の苗代川系堂平窯の片口である。480は釉薬が口唇部には掛けられていない。串木野窯産の可能性もある。

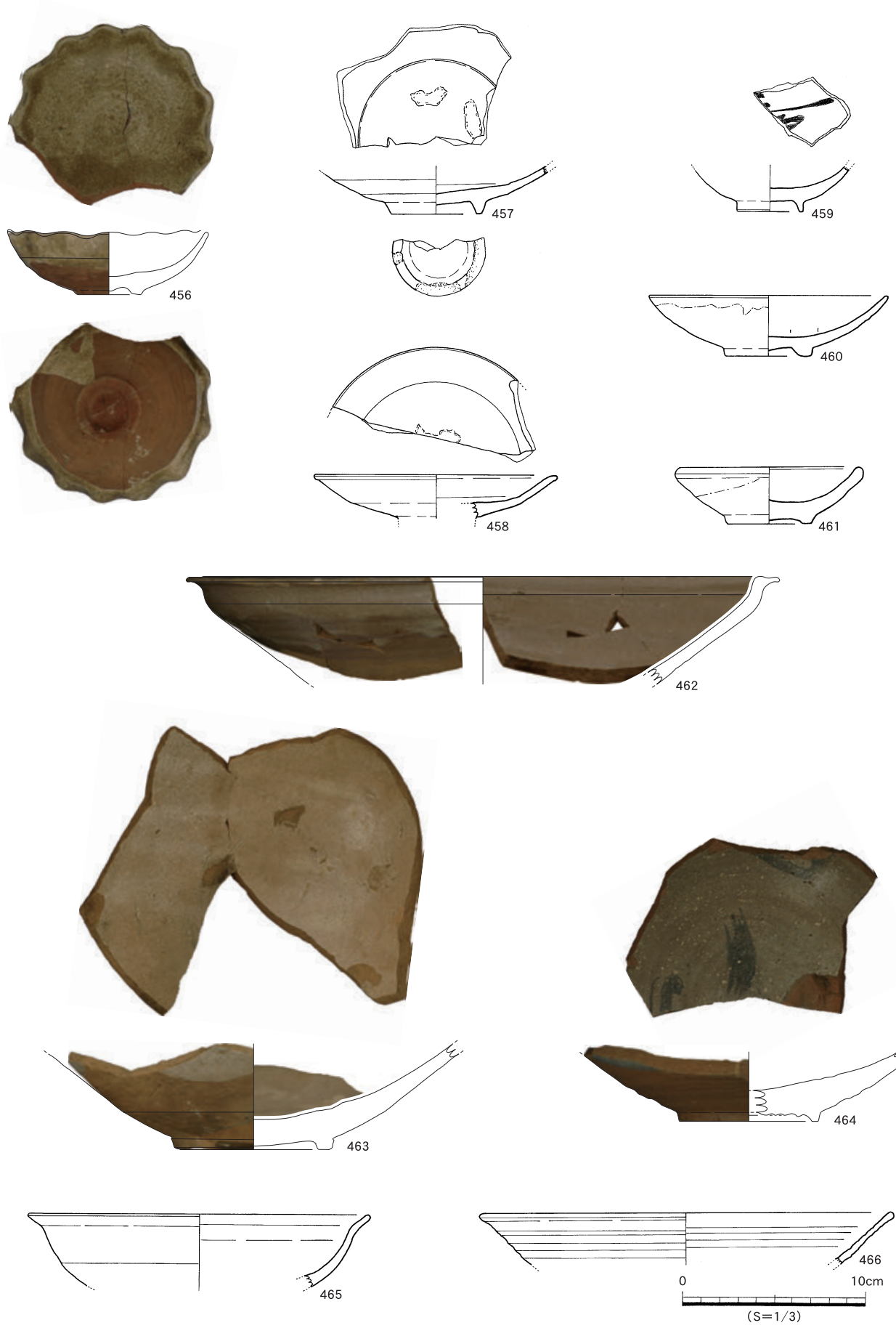
482～484は備前の擂鉢である。482は注ぎ口付近，483は擂目が僅かに見られる。485～487は肥前産の擂鉢である。488～496は薩摩産の擂鉢である。494は擂目が9本単位あるのだが，胎土から薩摩産の龍門司系山元窯の可能性が高い。497は肥前産の16世紀末から17世紀初の蓋である。水差しの蓋の可能性もある。



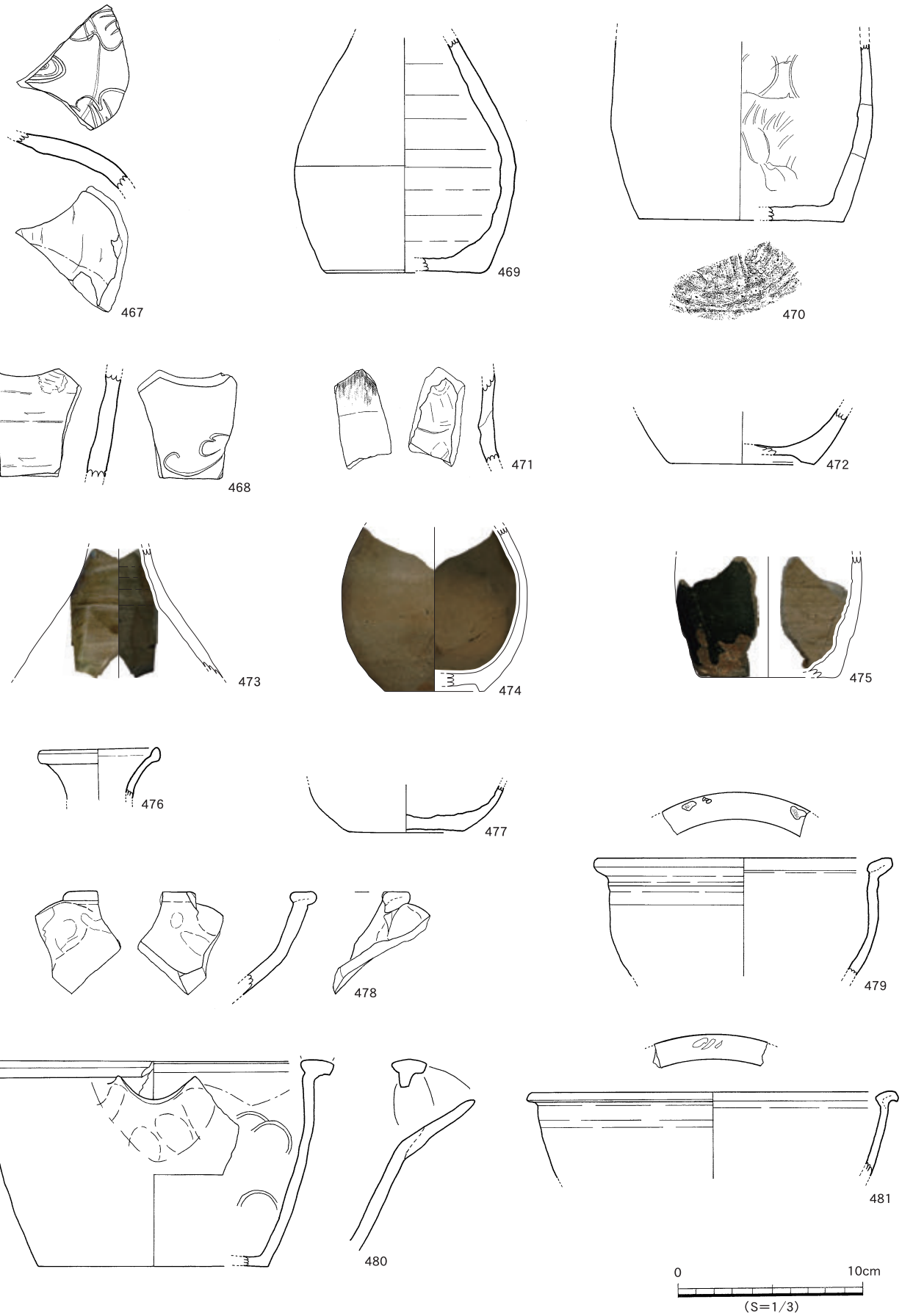
第478図　中世・近世遺物(9)　陶器①



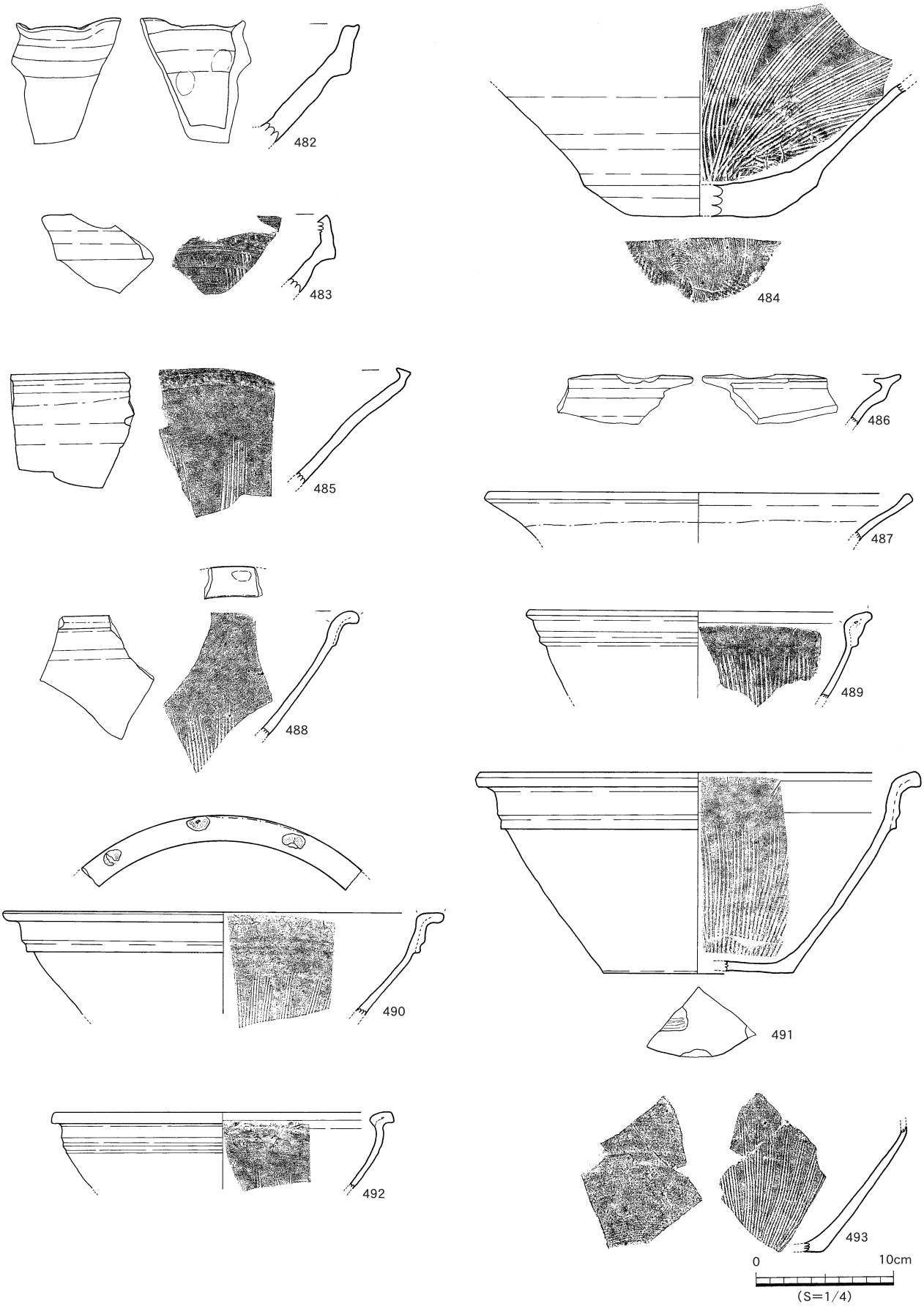
第479図　中世・近世遺物⑽　陶器②



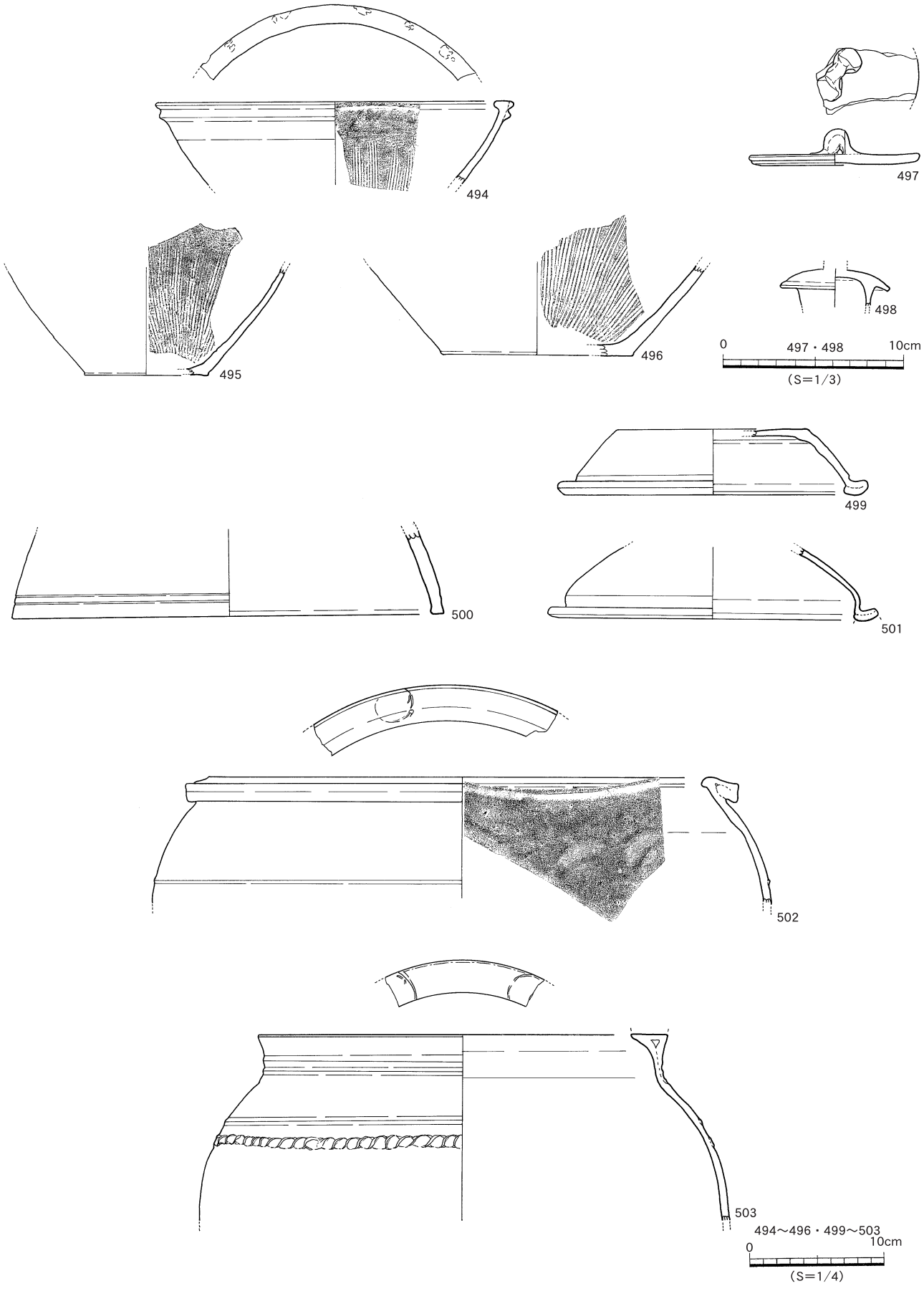
第480図　中世・近世遺物⑾　陶器③



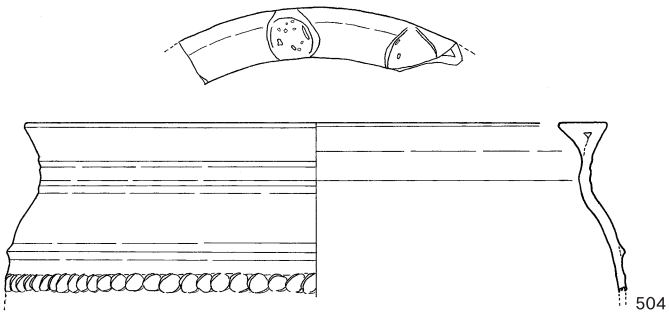
第481図　中世・近世遺物⑿　陶器④



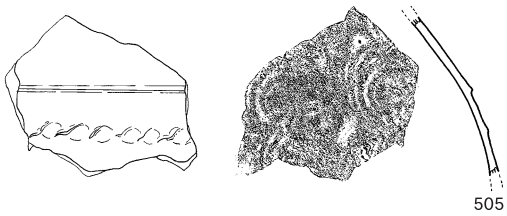
第482図　中世・近世遺物⑬　陶器⑤

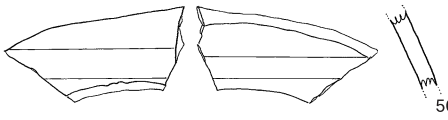


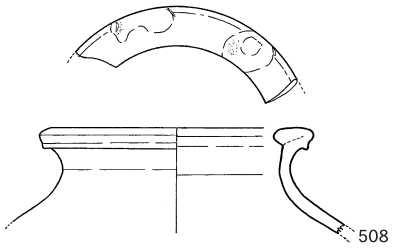
第483図　中世・近世遺物⑭　陶器⑥

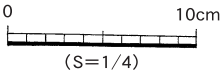












498は薩摩産の苗代川窯の土瓶の蓋である。

499～501は薩摩産の苗代川系堂平窯の蓋である。500は焼成不良である。

502～505は薩摩産の苗代川系堂平窯の甕である。502・505は内面に同心円状の敲き痕が見られる。

506は琉球産の甕の胴部である。胎土が赤褐色である。

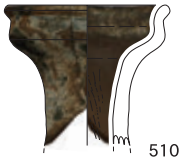
507は肥前の鉄絵の壺で蓋のつくタイプのものである。508は薩摩産の苗代川系堂平窯の壺である。口唇部が内側に折れている。

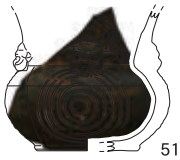
509～511は肥前産の大型の花生または仏花器である。取手がつくものである。510・511は同一個体と思われる。512は獅子頭付の肥前産と思われる無釉の香炉である。513は軟質施釉陶器である。白化粧の後，黄釉が掛けられている。18世紀以降のものである。514は肥前産で鉄釉が掛けられた焼成不良のものである。515は肥前産の大型の線香立てである。

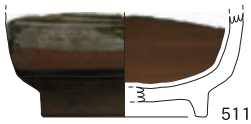
⑤　その他（第485図～第490図）

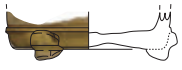
その他の遺物は，瓦質土器，土師質土器，鉄製品，滑石製品，金床石，砥石，軽石製品，古銭などに分類した。少数のものはレイアウトの都合上前後している。

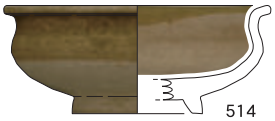


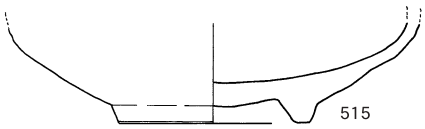


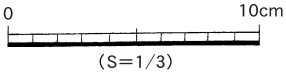












第484図　中世・近世遺物⑮　陶器⑦

516～522は瓦質土器である。516～521は擂鉢である。518は4条の擂目とその擂目の周りに文様のように刺突が施されている。また，底部には円状の文様と刺突が施されている。522は口径40㎝になる火鉢である。

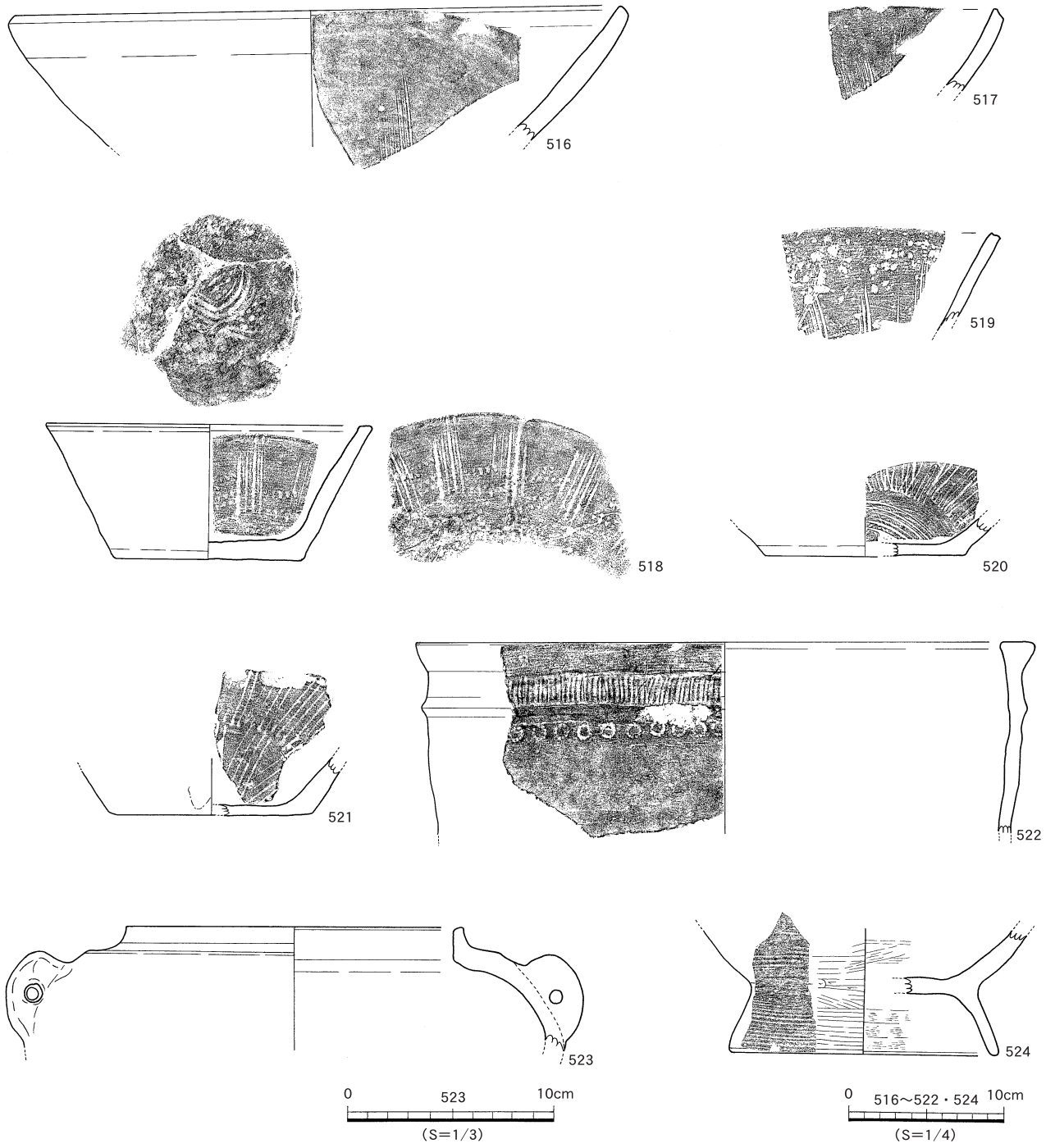
523は土師質土器の茶釜の耳部である。524は脚部の付いた土師質の鉢である。古代の遺物の可能性もある。

525・526は鞴の羽口である。525は端部に鉄滓が付着している。

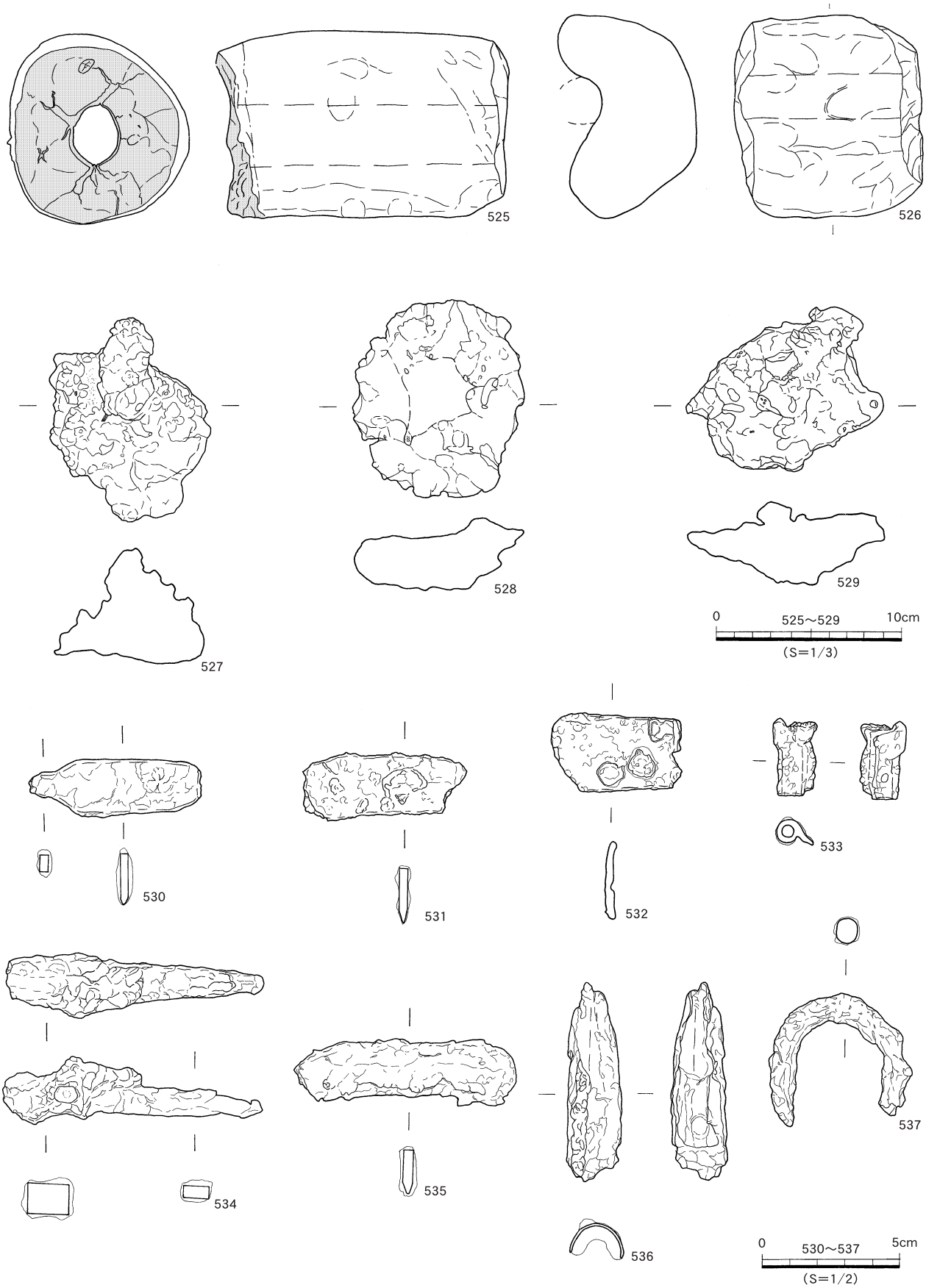
527～529は鉄滓である。ほとんどが碗型滓である。

530～537は鉄製品である。530・531は刀子の刃の部分である。532は板状の部分である。533はストロー状の中が空洞のものである。534は杭またはくさびと思われる。537は釘状のものがU字状に曲がったものと思われる。

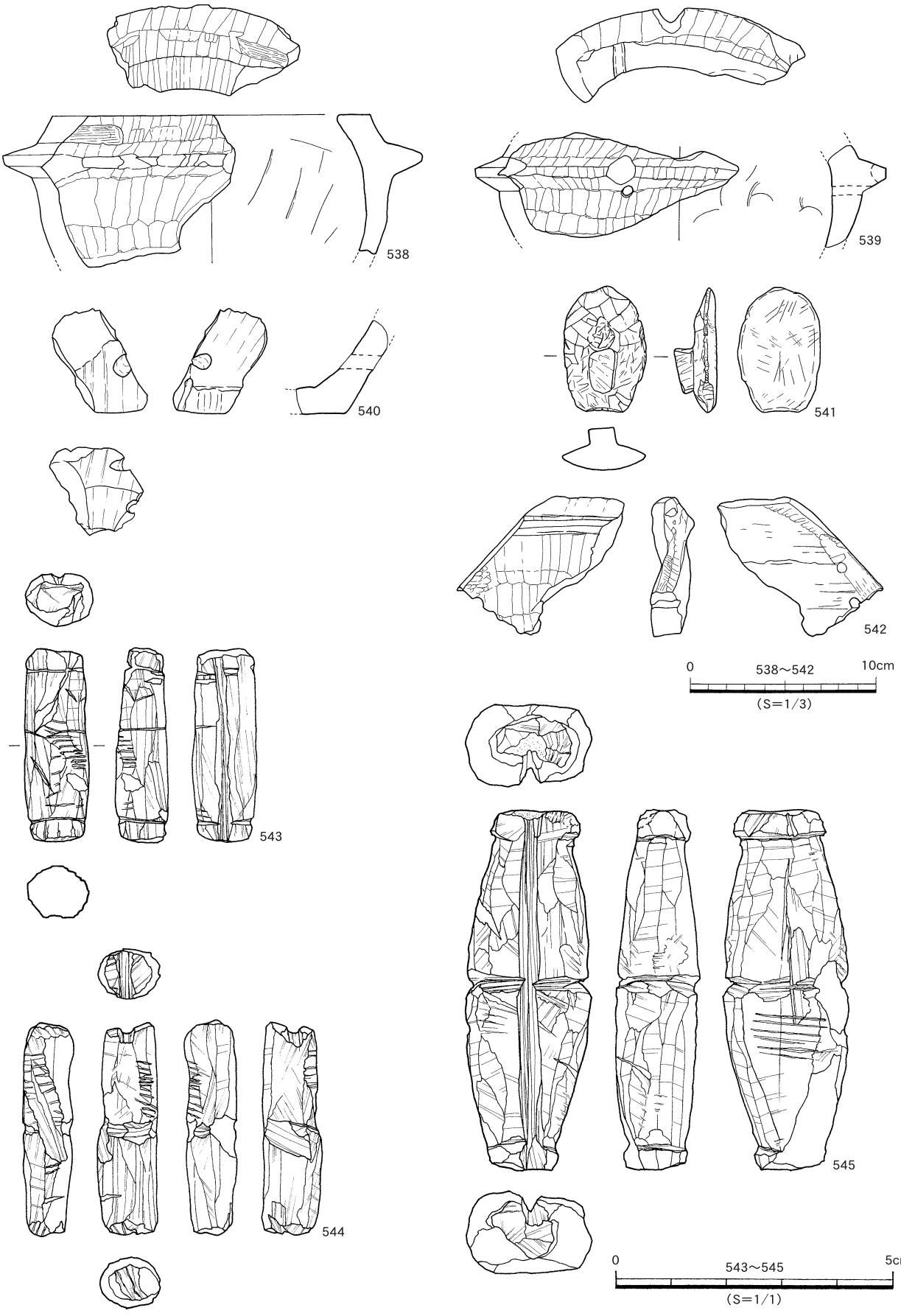
538～545は滑石製品である。538・539は滑石製石鍋である。鍔がめぐるものである。縦方向にノミ状の工具による痕跡を残し，器面調整が丁寧に行われている。540～545は滑石の二次加工品である。540・542は石鍋の部



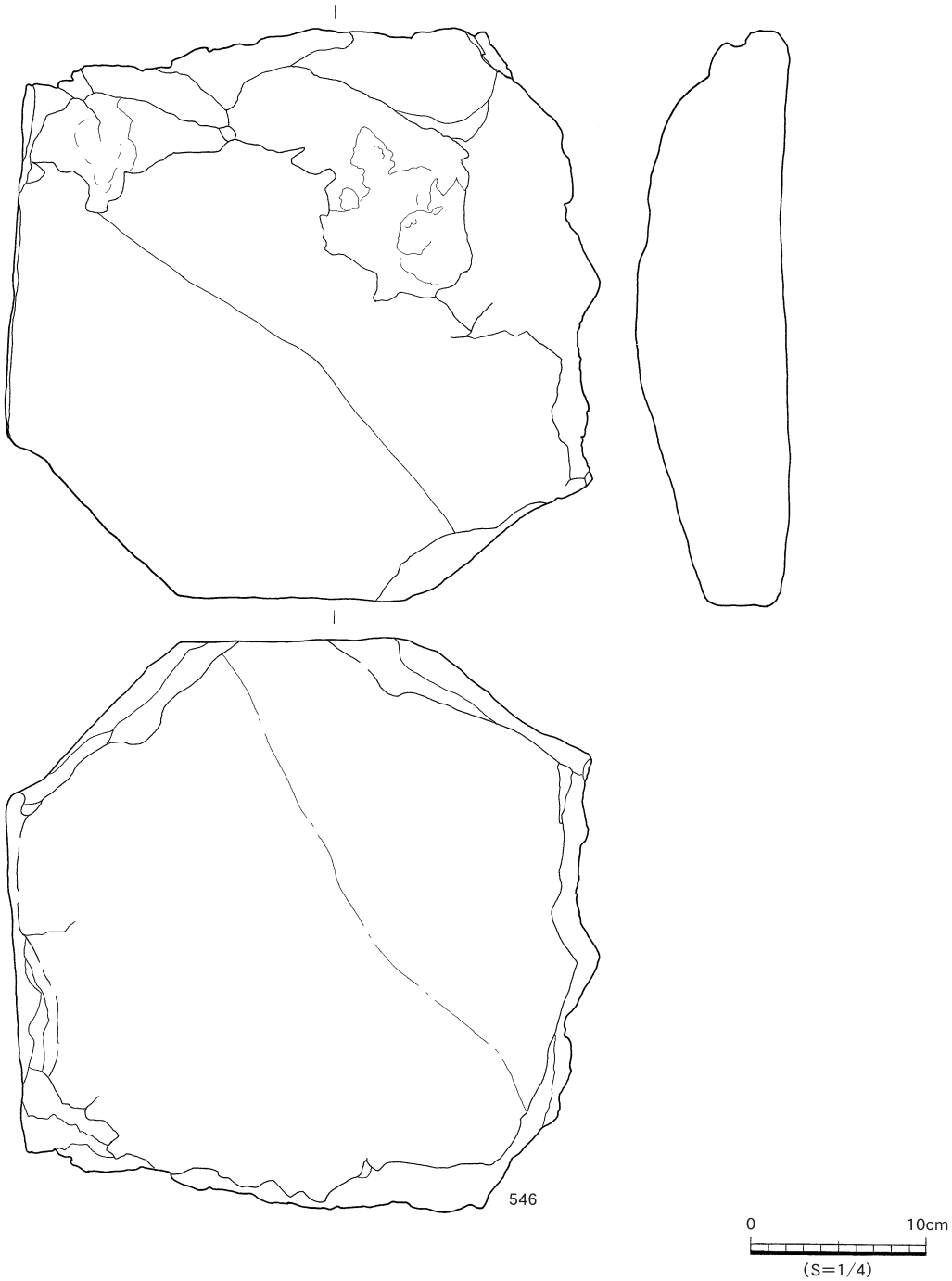
第485図　中世遺物⑯　瓦質土器・土師質土器



第486図　中世・近世遺物(17)　鞴の羽口・鉄滓・鉄製品



第487図　中世・近世遺物(18)　滑石製品



第488図　中世・近世遺物⑲　金床石

分に穿孔を施したものである。541は滑石の突起を持つバレン状の製品である。縁部に向かうにつれて薄くなり，端は鋭利である。543～545は両側面と中央に切り込みの入った滑石の錘である。545は長さ6.5㎝で他のものより大きい。

546は金床石である。敲打によるはがれの痕が見られる。被熱による赤化が著しい。

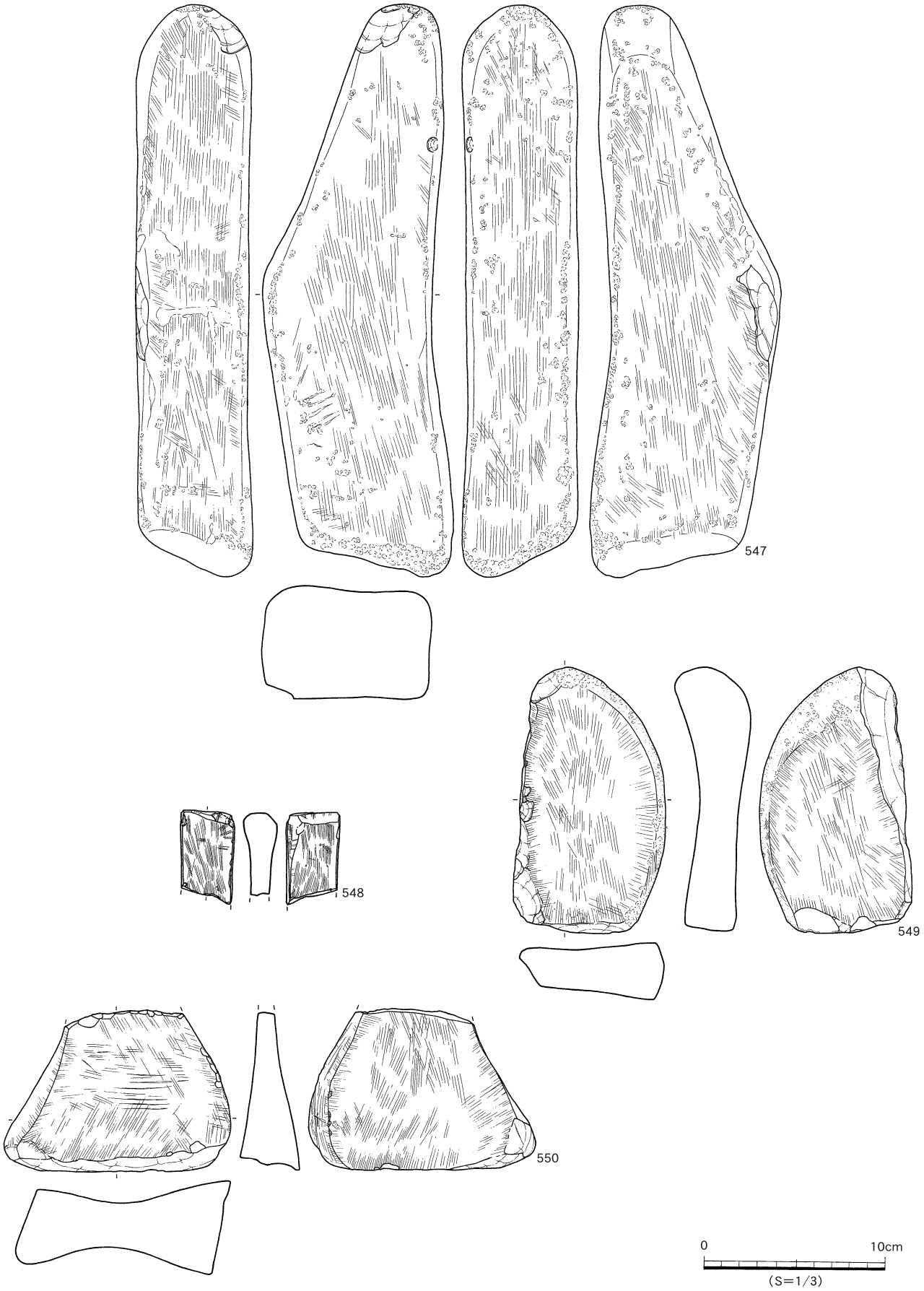
547～550は砥石である。547は砂岩製で，全面に磨痕が見られる。548は天草石である。

551～556は軽石製品である。551は円形に成形され，中央部の両面と上部に抉りが施されている。また，器面調整のための磨痕が見られる。552は穿孔と抉りが見られる。554は抉りが施されている。555は中央部に穿孔が施されている。556は円形に成形され，中央部がくりぬかれている。用途不明である。

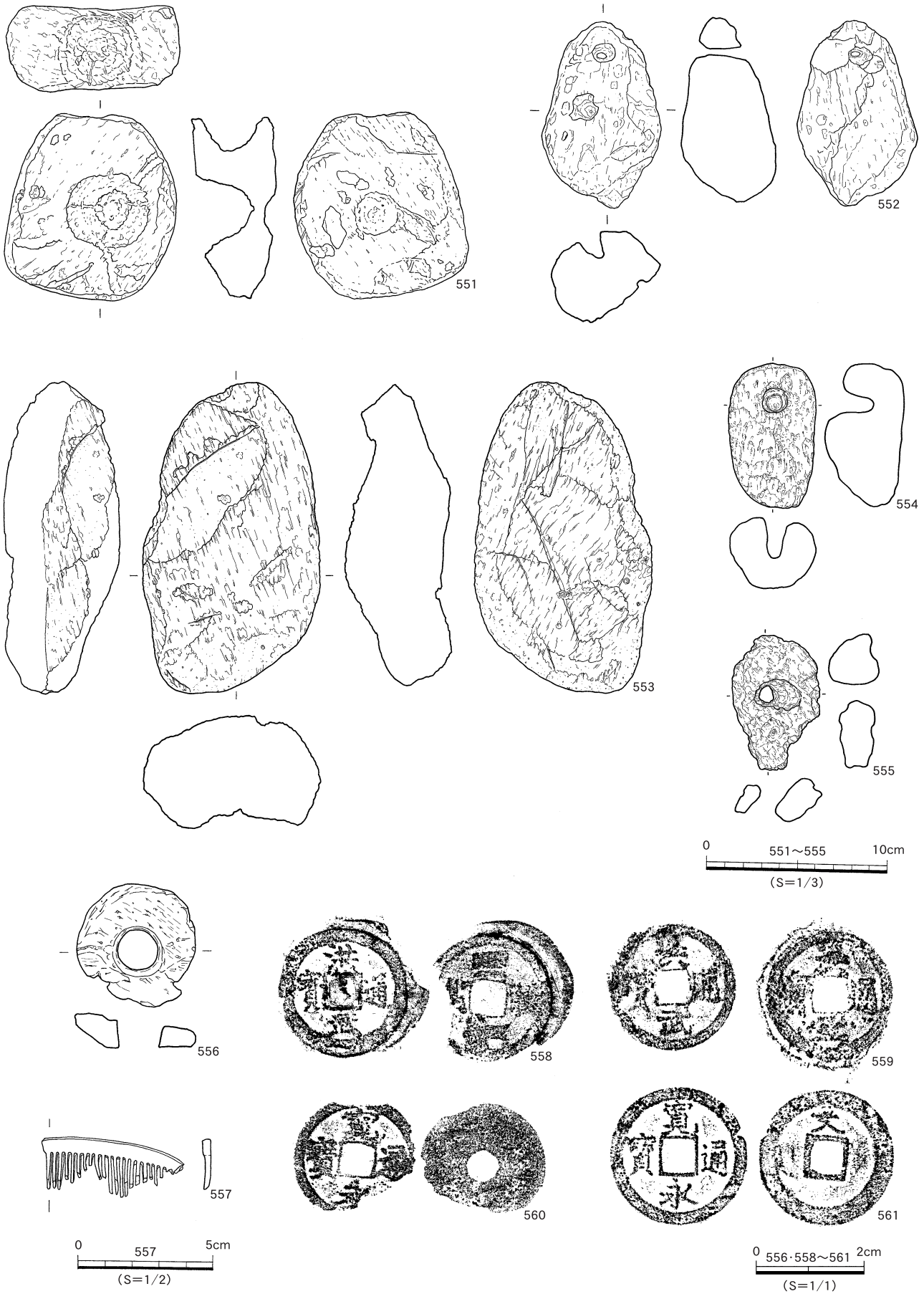
557はつげ製の櫛である。

558～561は銭貨である。558・559は洪武通寶である。２枚重なっている。560・561は寛永通寶である。561は裏面に「文」の字が見られる。

562は写真のみの掲載であるが，鉛玉である。時期は不明である。球体が変形していることから使用された後である。



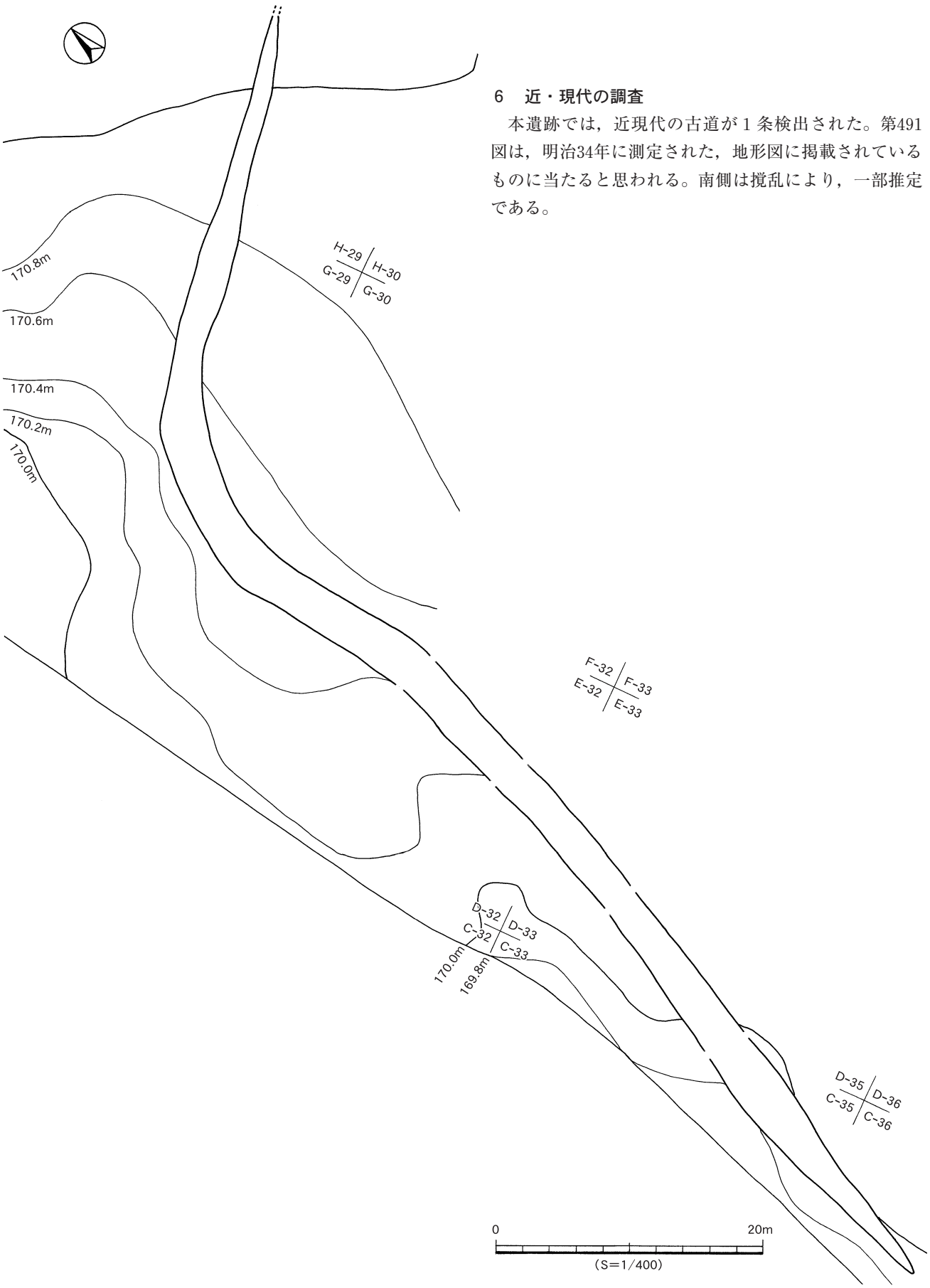
第489図　中世・近世遺物⑳　砥石



第490図　中世・近世遺物(21)　軽石製品・櫛・古銭

6　近・現代の調査

本遺跡では，近現代の古道が１条検出された。第491図は，明治34年に測定された，地形図に掲載されているものに当たると思われる。南側は撹乱により，一部推定である。



第491図　近代・現代　古道